神宮司廳藏版

古事類苑

神祇部二

古事類苑刊行會

古事類苑

神祇部第二册目錄

古事類苑

神祇部十九

大嘗祭二

古事類苑

神祇部十九

大嘗祭二

〔代始和抄〕大嘗會事

荒見河のはらへとて、紙屋河にて上卿以下參向して祓の事あり、其後悠紀主基の齋場所、偉鑒門をさりて、北八十二丈を點じてその所とす、○中略齋場所の額、御屏風の色紙形は、行成大納言の子孫相傳して書進す、

〔玉勝間十二〕大嘗會の齋場

中臣の壽詞の中に、大嘗會の齋場とある、○中略齋場は別に北野に於て其地を卜定めて構造らるゝことにて、大嘗宮とは別也、九月下旬悠紀主基二國より齋參れる諸の物も入も、まづ齋場に詣て、そこにてくさ〳〵の事有て、十一月祭の當日に至て、齋場より大嘗宮に運奉る、その行列なども儀式に委見えたり、

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

天皇即位之年、○中略應卜定齋場之狀、牒送山城國、至於其日、撿挍以下率神祇官、到北野卜定其地、其儀神祇官悠紀主基兩國司幷山城國郡司等、就荒見河陳置祓物、各五色薄絁各一尺、木綿二斤、米二升、酒一斗、薄鰒堅魚海藻各一連、食薦二枚、干柏六把、並國辨備、訖行事以下雜色人以上、共就祓場、悠紀在上、主基在下、大祓、悠紀先發祓詞、次主基、訖各就幄下、卜定齋場、悠紀在東、主基在西、行事以下先同行野中、執其塊將歸卜之、其料物各酒一斗、米四

升、木綿麻各一斤、鰒堅魚海藻各一連、腊一斤、卜訖立標四角、（立賢木着木綿）方四十八丈爲限、即令山城國葛野愛宕兩郡司守之、○中略 次卜定小忌院、訖宮主卜部率行事并小忌官人以下鎭小忌院、其料各五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、綿二屯、商布四段、鍬五口、米五升、酒一斗、薄鰒海藻各一斤、柏六把、卜部軾料調布二端、並以國物備之、次卜定御井所、（方一丈二尺、若當處舊井卜食者、即使修理用之、）次定所所屋、（若當所舊屋不足者、修作新屋、）次鎭調備供御并小忌食之院、其料各五色薄紗各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、綿二屯、商布四段、鍬五口、米五升、酒一斗、薄鰒海藻各一連、卜部軾料布二端、（並用國物）次卜定諸所、（請出納細工等所）○中略 次齋場預官人等、點定齋場內外院殿院并雜殿地、（外院方四十丈、內院十二丈、殿院十丈、其內院悠紀在外院西、主基在外院東、殿院在內院中閒、南去五許丈、）始構造齋場雜屋、其外院南門北卅許丈、橫七間廳一字、（西北戶、長五丈六尺、廣一丈六尺、南北二面有庇、）其北一許丈、橫七間酒屋一字、（西南戶、長五丈六尺、廣一丈六尺、南面有庇、）其東橫五間人給屋一字、（東三間爲室、四面戶、其庇亦隔壁四戶、其西二間爲堂、室長四丈、廣一丈六尺、）其南縱七間料理屋一字、（西戶、長五丈六尺、廣一丈六尺、西面有庇、與人給屋相當、）其南縱九間倉代屋一字、（長四丈七尺、廣一丈六尺、東西二面有庇、）其南縱九間倉代屋一字、（長廣庇並同上、）其東縱九間倉代屋一字、（長廣同上、）東門北掖北去十三許丈、縱五間官人宿屋一字、（長四丈、廣一丈六尺、東西有庇、）南掖南去十四許丈、橫五間屋一字、（西二間爲稻實公宿所、南戶、東三間爲物部男宿所、南戶、長三丈五尺、廣一丈四尺、）其南橫五間屋一字、（西二間爲造酒童女宿所、東三間爲物部女宿所、並南戶、長廣同上、）酒屋以西橫七間大炊屋一字、（南北有庇、長五丈六尺、廣一丈六尺、）其南四許丈少西、縱七間納雜物屋一字、（西東戶、東面有庇、長五丈六尺、廣一丈六尺、）其南縱七間造宮形并濱菜屋一字、（東西戶、東面有庇、）其南縱七間納拔穗御稻屋一字、（東西戶、東面有庇、長廣並同上、）西門北掖有大多米院、（東門、）院門北掖橫三間酒屋一字、（南戶、長二丈四尺、廣一丈六尺、南面有庇、）南掖橫三間麴室一字、（東側戶、長廣同酒屋、）南屋西頭縱三間大炊屋一字、（東戶、長廣同麴室、）西門南掖造標屋一字、（廣方四丈、高三丈八尺、四面有庇、）其南橫五間屋一字、（東三間爲驛使宿所、西二間爲禰宜卜部宿所、並南戶、長三丈五尺、廣一丈四尺、）其南橫五間屋一字、（東二間爲神服長宿所、西三間爲神服女宿所、並南戶、長廣同上、）御井在院外東北角荒見川東、童女井在其東、

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

神祇官卜定拔穗使、申官發遣、○中略 下旬〇九月 至京齋場、○中略 次鎭稻實殿地、其料各五色薄絁各一尺、

倭文一尺、木綿麻各一斤、綿二屯、商布四段、鍬二口、米四升、酒一斗、薄鰒海藻各一連、雜菓子四升、凡料布二端、〈並用國物〉鎭畢、造酒童女先執齋鉏掃地、幷掘院垣四角柱穴、〈先艮、次巽、次乾、役夫終之、〉次稻實卜部率造酒童女國郡司各一人、物部男六人、子弟五人、工十人、夫等、爲採內院料材、向卜食山、〈前二日預申行事所〉即祭山神、其料各五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、鍬二口、米五斗、酒一缶、鰒堅魚各二連、雜魚腊一籠、海藻二連、鹽一升、雜菓子一斗、稻二束、軾料絁一匹、布一端、綿二屯、祭畢造酒童女先執齋斧伐樹、工匠次之、役夫次之、訖歸來、自後遣工幷夫等伐運、次始掘備小忌食院、凡酒甕穴、幷始釀酒、次於同院大祓、其料各五色薄絁各二尺、木綿麻各二斤、酒米各一斗、薄鰒堅魚各一連、海藻二連、鍬二口、軾料布二端、〈並用國物〉次始作內院雜殿、造酒童女執齋鉏、掘稻實殿四角柱穴、物部次之、役夫終之、其東門南掖、縱八間神座殿一宇、〈長二丈四尺、廣七尺八寸、柱高七尺、四面有庇、〉北掖高萱片葺御倉一宇、〈徑八尺、高九尺、〉其西橫三間稻實殿一宇、〈南戸、長二丈四尺、廣一丈二尺、柱高八尺、〉其南縱三間倉代殿一宇、其南縱三間御贄殿一宇、〈並西戸、長二丈四尺、廣一丈二尺、柱高七尺、〉其南橫三間鋪設殿一宇、〈西側戸、與稻實殿相對、長廣亦同、〉稻實殿西、橫三間黑酒殿一宇、其西橫三間白酒殿一宇、〈並南戸、〉其南縱三間麴室屋一宇、其南縱三間大炊屋一宇、〈並東戸、〉其南橫三間臼殿一宇、〈東側戸、長廣同稻實殿、〉其制也、神坐殿者構以黑木、用萱倒葺、內構椙棚、敷席、其上更亦敷絁、高萱御倉者、以四枝黑木爲柱、用萱片葺、薦爲壁代、內構椙棚、〈高四尺〉御稻四束盛韓櫃、承塵席布五端、白櫃四合、安於棚上、御贄殿者、構以黑木、用萱葺之、以柴蔀之、編板爲扉、稻實殿亦如之、黑酒殿者、構以黑木、葺蔀用萱、薦爲壁代、白酒殿者、構以白木、自餘同黑酒殿、其倉代大炊麴室臼鋪設等殿並同御贄殿、次國司率禰宜、造酒童女、及當郡司、役夫等、向卜食野、即祭野神、其料各五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿一斤、米酒各一斗、鍬一口、堅魚海藻各一連、祭畢造酒童女先執齋鎌刈之、役夫等終之、訖歸來、自後令役夫刈運、

〔延喜式〕〈七踐祚大嘗祭〉凡在京齋場者、預分設兩處、悠紀在左、主基在右、兩國所送拔穗稻到京、即先鎭祭其地、訖造酒兒先執齋鍬始掃地、幷掘院四角柱坮、卜部率國郡司以下及役夫等、入卜食山採材、即祭、

山神、訖、造酒兒先取齋斧始伐木、然後諸工下手、（採大嘗宮材准此）又卜部率郡司以下雜色人等、入卜食野苅草、即祭野神、訖造酒兒先苅、次諸人下手、（苅大嘗宮草准此）其齋場者、分爲内外兩院、以柴爲籬、編木爲門、内院所造八神殿一字、稻實屋一字、黑酒白酒屋各一字、倉代屋一字、贄屋一字、臼屋一字、大炊屋一字、麴室一字、外院所造多明酒屋一字、倉代屋一字、供御料理屋一字、多明料理屋三字、麴室一字、（已上舍屋長廣稱宜）皆以黑木及草構葺、以草爲蔀、（但麴室塗壁）裏以長薦、其酒屋麴室席爲承塵、以布爲裏、其井二處、卜訖御井者、造酒兒始掘、造酒兒井者、稻實卜部始掘、其二院營造既訖、收御稻於稻實屋、但御飯稻造棚別置、祭御膳八神於内院、（其儀准上）

凡北野齋場雜舍、事畢壞却、

〔儀式　四〕踐祚大嘗祭儀

須下諸司諸國官符宣旨例

其所牒山城國司

　應卜定齋場事

　其月其日刻解除、其刻卜、

牒、爲卜定件地、撿挍納言以下雜色人以上、率卜部等可向宮城北野國也察狀、差祇承國司百姓等候荒見河邊勿違闕、故牒、

大嘗會其所牒京職

　應雇夫等事

　功錢若干文

牒、爲掃齋場應雇進如件、職察之狀、早雇進不得違闕、

〔小右記〕寬弘八年九月十日庚辰、今日卯刻始齋場所、參内、左大臣、内大臣、大納言齊信、中納言俊賢、隆

家、行成、時光、參議經房、實成參入、〇中略悠紀主基所行事辨等云、齋場所時刻始了、無停滯者、又申刻可立小忌屋者、　十九日己丑、兼隆朝臣來云、今日返給怠狀、是汝往已也者、去十六日參內之次、可奏聞之由觸頭辨、又申左相國、兼隆朝臣者、主基齋場所預、今有公家勘事、不能從事、仍所令奏聞、彼日內返給怠狀、兼隆遲參及今日云々、

〔經信卿記〕治曆四年十一月十一日、自右衞門督御許被示云、按察大納言被示送云、今日可廻見齋場所云々、〇中略大嘗會撿校三人、相共向齋場所巡見、行事辨史等不參、問申按察、被答云、雖示此由不參會歟、巡行之後各々分散、今日主基人三四人所參也、

〔本朝世紀〕寬治元年十一月十六日甲子、今日攝政殿下巡撿北野齋場所、

〔中右記〕寬治元年十一月十九日丁卯、今日破却北野齋場所云々、

天仁元年十一月十八日、今日殿下御覽祭場所也、〇中略未時許渡御祭場所、御冠御直衣予、左宰相中將、忠殿上人五六輩連車屬從、於北野邊右大將、右衞門督被參加、御覽廻悠紀主基兩所祭場所、八女出來謳歌、行事辨等祗候、

〔本朝世紀〕康治元年九月十四日癸卯、北野齋場所棟上也、　十一月十二日庚子、攝政被巡撿齋場所幷大嘗宮、內大臣以下相從、

〔兵範記〕仁安元年十月十五日乙酉、今日齋場所內院神服院棟上、左中、左少、相向行事云々、大夫史云、行事辨近例頗不被向行、今度一同議定參向云々、是亦非僻事歟云々、　三年七月廿七日丙戌、行水解除、參行事所、召陰陽頭令勘申來月次第日時、〇中略

點齋場所地日時

同〇八月廿三日壬子　　時未二點　若酉

鎮謝日時

廿七日(〇八月)丙辰　時午二點　若申

立屋日時

木作日時

同日丙辰　時午二點　若申

立柱上棟日時

九月四日壬戌　時午二點　若酉

立柱次第先東、次西、次北、次南、

仁安三年七月廿七日　權大允賀茂修平

主計頭賀茂在憲

九月四日壬戌、今日齋場所棟上、七月廿七日勘日時、卽下知卜食國郡、悠紀方史預以下參向行之、主基行事辨以下參向云々、　八日丙寅、大夫史以下引率、向北邊齋場所、悠紀方國司等未催得所都十三宇、屋總三四宇、上棟造營、殘數屋併上假棟、雖稱近例、猶可謂違式也、國司目代家職在廳官人等參入、解怠之由仰含子細了、行事史生信職定友猶可張行旨又下知了、　十月十六日甲辰、內院幷神服院點地荒見河祓也、已剋先著行事所、差遣行事所主典代盛久、盛安、官掌宗職於齋場所、先是彼所主典代信元、貞友、早參行事所、午時下官引率史以下向齋場所、於南鳥居外下車、經屏垣西著廳屋、件座六間二面、(西南有庇)母屋西一間、副西敷高麗疊一枚、爲下官座、(東面)北母屋際敷紫緣疊四枚、爲五位六位史主典代等座、(西上南面)南母屋際敷同疊二枚、爲神祇官座、(北上西面)座末母屋西在官掌座、(橫切西面)南廂有神祇史生座、(西上東面)東切懸下半板敷使部座、(北上西面)官掌座以下皆用布緣帖、下官以下座前居看物、(二種物口口卜食國調進之机)各座定一獻、國人持參盃酌、次差官掌遣荒見河、又以主典代爲主基方、次起座出西鳥居、主基右少辨

重方以下出合相向、次各乘車經一條西、自右近馬場南方北行、於北野鳥居下下車、同東門前向御殿、深揖、次北行經林中、著祓幄、大藏省木工寮立五丈幄二宇、各南北妻、(北悠紀、南主基、)掃部寮鋪設、其儀每事如齋場所點地日、神祇祐大中臣能隆居下官贖物、(備二折敷、高杯一本、)同史生以下居五位六位史寄人等前、(備二疊官、)次卜部兼成著膝突、神祇官令史取大麻傳能隆、能隆持來下官前、下官取大麻末摩之、(能隆還持串、)次令史取寄大麻引寄、又五位六位史以下令史返大麻、次祝詞、中臣官人又不候、能隆一人兼勤、主基幷贖物役且先例也、兩方祓畢各退歸、於北野鳥居下各乘車馬歸齋場所、於西鳥居外又下車、主典代等召神祇祐史生令進丈尺繩等、次點定內院地齋場所、西鳥居去北三丈、去西一丈二尺、方十三丈打杭繩哉、次點定神服院、當內院中央去南五丈、東西五丈、南北十丈、悠紀主基兩內院中絕一丈八尺、次主典代取中央壤各二裹、(四裹也、內院神服院皆注銘、)次神祇官鎮謝畢指榊、主典代立簡、主基方次第作法同前、但神祇官悠紀役了向主基、次下官以下歸著廳屋兼居饗、各座定、主典代貞友內院神服院等壤四裹、盛折敷置下官前、次下官目神祇祐能隆、能隆取壤渡座傳給卜部、卜定了、此間一獻、國人持參盃酌、下官盞傳大夫史、次二獻同前、次居汁、次立箸、次三獻、次食汁、次卜定、卜形幷壤置元折敷能隆持來、能隆復座、下官披見卜形、(內院神服院一通、)見了留座前、次召主典代返給壤、仰云、下卜食國、次神祇官人等遣主基齋場所、次下官以下起座分散、兩院卜形、

神祇官

　卜大嘗會悠紀齋場所內院地事

　　山城國葛野郡野地如何

問以此處爲齋場所內院地吉哉、卜乙下合、

　推之吉也

　　仁安三年十月十六日　　　　卜部龜卜長上正六位上卜部宿禰兼濟

中臣從五位上權少祐大中臣能隆

神祇官

卜大嘗會齋場所神服院地事

山城國葛野郡野地如何

問以此處爲齋場所神服院地吉哉、卜乙下合、

推之吉也

仁安三年十月十六日（○署名同上文、故略、）

件勘文二通覽撿按、可返下齋場所、　廿七日乙卯、先向內院、修理大工國長著衣冠引率木工等、吉時申時先上神殿棟、（○中略）次向神服院、主基行事相共集會各棟上、（○中略）悠紀齋場所額板八枚、去十八日於廳屋造始、日來終功、畫師加彩色、爲史生使昨日遣皇后宮權大夫朝方卿許、南大額一枚、今日被書獻、卽令打南鳥居了、其文四字也、悠紀齋場、其額寸法、文字可塗胡粉、長一尺七寸、廣八寸五分、此外四方有色々彩色如常、殘七枚後日追可書進之由彼卿被申、且先例也、　十一月四日辛酉、皇后宮權大夫朝方卿書進齋場所額六枚、（○中略）卽付彼所主典代、仰可令打由、隱額一枚未書進、

額文字

悠紀齋場二　悠紀內院二　神服院一　大多明院一、（此院額古今有無不定、就中寬治無之、仍今度不可被打由、匠職容而執中、仍雖書進無益由下知了、行事主典代申云、是標額料也、而令書獻此院、仍標料又可遣云云、）

十三日庚午、早旦參齋場所、皇太后宮女房可歷覽之由、別當內々被告示之故也、先巡撿屋々作事幷掃除等、次著行事所屋、大夫史六位史主典代等參會、童女八女稻實公等召著此屋、六男子弟令候砌邊、見物男女尊卑貴賤濟々焉、頃之女車來座、口上皇（○後白河）網代御車也、皇后（○後白河后平滋子）御同車、別當（時、）右宰相中將（宗）盛從（各直衣、）左衛門佐信基、伯耆守親宗同候、（衣冠、）北面下﨟五六人候御車共、此外女房五

車先入南鳥居、御車以下被立行事所屋南庭、（廳屋也）次前庭舁立臼二基、入御稻、次八女取杵、各四人調
曲舂之、此間稻實公行事童女猶在南庭、公卿以下祗候庭芝、上下感興、漸及數刻、次御車廻北方、歷覽
所々屋々、次出御西鳥居、歷覽內院、次神服院、次入御主基東鳥居、於廳屋南庭又有舂稻事、其儀如悠
紀方、次第御覽、出御南鳥居還御了、

〔方角禁忌撰〕大嘗會齋場所屋事、後堀河院御卽位之時、泰忠撰申之、而在親難申云、北方者王相方也、
不可犯土云々、泰忠陳申云、代々皇居皆大內也、被立齋場所屋之時有御方違之由所不見也云々、爰
猪隈大殿（〇藤原家實）仰云、避偉鑒門西之事二丈之由見御記、然者避正方一辰之由被仰之、兩人感之退
出畢、有道談之、

〔平戶記〕仁治三年十一月十二日庚寅、傳聞今日雜人欲壞取齋場所屋之間、彼是鬪亂、被疵之者十餘
人、此中三人被殺害了、齋場所觸穢云々、然而無其沙汰如何、不便不便、

〔中務內侍日記〕十一月は大じやうゑとて、しも月（〇弘安十一年）八日女工所はじめとて、ゆうきしゆきに
てつくるがいまだいでこねば、ゆうきには神ぎくわんをもちゐらるとかや、しゆきには陰陽れ
うなり、八日、月さしいづるほどに、こうたうと一くるまにてゆく、夕づく夜のさびしき影、うち
のゝはる〴〵と霜がれの野べに、さはる物なくみえたるもなか〳〵にをかしきに、（〇中略）さて月
入てのちかへる、女工所にかねて十二日とてありしかど、おそくつくりいだすに、十七日より入
に、雪うちゝりて冬ごもりたる空のけしきのすごきに、陰陽れうのなかなるに、やしろのみぞひ
とつにみいだしたる、こうたうは、神ぎくわんのつかさの東に、女工所のやたてたるに侍るこれ
には陰陽れうのうちにいぬゐのすみなり、とくせんをとらぬおとゝい女官にはつかさとて代
代のくわんと名のりてれいぞもひきぎやうじくわんに、たゝみせめいだしてしく、さとよりび
やう風、さを、厨子やうのてうどゝもめしよせてしつらひつる、さる程に日くれぬ、さとより人ま

ゐりて、づしたて、さをつらせなどす、思ひもよらぬほどに御幸〇後宇多ありときゝ、こうたうの所よりこれへ入らせおはします、はれがましくなる女房たちいくらも〱もおし入て、いかにいかになどおほせらるゝ、さをなるはかま、ひきおとしてきつ、やがていらせおはしまして、衣のかけやう思ひ所あり、幸にこそかけたれどおほせごとありて、しつらひやさしなどぎよかんにあづかる、こよひおとなしき人まゐらずば、いかに〱はぢがましからましとおぼゆ、木丁などもたてめぐらしつ、よく〱御覽ありて還御なりぬ、めんぼくもはぢがましさもおとるかたなくこそおぼえ侍れ、さても夜もあけぬれば、くわんよりぎやうじくわんとて、いりさぶらはんことうけ給はらんと申、大じやうゑのいなのみのおきな、いんこや女とかや、色々のものゝしやうぞくの衣、色々のそめ草花くれなゐなどまゐらせたり、かたのごとくなれば、女官このぢやうにてはみち行がたきしだいども奉行の辨なかかねにふれ申せば、國々へ下知し侍れどもいまださたせず、せめふせ侍らんなど申、ぎやうじくわんと女官といさかふ、おそろしながらをかし、廿一日、〇中略さる程にぎやうじくわん色々のそめ草まゐらせたれば、女官づかさにうけとらす、しるしぶみにまかせて御ちやうのかたびら、いなのみのおきな、いんこや女の裝束の衣うけとらするに、そめくさどもりやうのこくしのもとへつみつかはすまた奉行の辨なかかねとざまのもよほしもしきりかけて御けうそつかはす、行事くわんぢきにうけとらせ給へとていできたれば、さぶらひどもをいだしてあひしらはするに、心えぬことゞもあれば、女工所のねうばうをはしにいだして、みすのきはへかの行事くわんをめしよせて、きぬのすんはうなどこまかにあひしらはせたれば、心えてよろこぶといへども、そめくさの色々みえずして、御所の御りきしやを申て、ところ〱へつけてかたのごとくせめいだしつ、ころもをとりかさねて、花の色々くれなゐの色々をひとへによせて、てうせさせてのちに、そのいろ〱しな〱にわかちぬはせては

ぞなくさたしいでたれば、行事の辨よりはじめて悦ぶ、いまだ夜の中に、行事くわんならびに奉行の辨、めん〳〵に裝束うけとらす、

〔實躬卿記〕正安三年十一月十九日甲寅、今日爲齋場所御覽行幸、〈○後二條〉未刻出御、八葉御車懸御下簾、如法密儀也、且近例如此、法皇、上皇、遊義門院〈○後宇多后姈子〉御同車、御車寄堀河大納言〈具守、直衣下括、〉殿上人公秀朝臣、〈二藍□□狩衣、青□衣、紅單衣、紫奴袴、〉童〈萠木平狩衣、香村濃帷、〉舍人〈水干、□色々、菊水文、葛袴、摺腰際、〉通氏朝臣、〈二藍狩衣、薄物、萠木衣、半色奴袴、〉童〈朽葉狩衣、□帷、〉北面時景、六位藤重頼、同後□源致憲、大江景朝、御隨身秦重躬、〈□花田黄御綾衣、黄單衣、〉同久勝〈褐衣、紅衣、〉返相國參會、齋場所歷覽之後遍立殿御覽、酉刻還御、

〔花園院御記〕元弘二年十一月十一日丁丑、内々爲覽女工所有御幸、申刻出御、按察寄御車、北面以下供奉、先於悠紀女工所鳥居下立榻、豐仁親王下車、次朕下車、次上皇〈○後伏見〉御下車、按察冷泉前中納言大藏卿等參會、日野大納言房光朝臣等追參會、女房等又參會、又於主基女工所御歷覽如前、〈○中略〉今度每年遲々之間、於女工裁縫物、先於行事所調之間、女工所冷然也、遲々之間自今日居之云々、十二日戊寅、今日爲齋場所御覽御事也、申刻出御、烏帽御直衣也、朕同之、豐仁親王〈直衣上括、乘公重車、後入自齋場所南鳥居、〉入道之卿爲多房保等朝臣供奉、至齋場所立御車於廳屋前、〈東西〉供奉人等候御車南、資名卿參會在此、悠紀行事幷定親朝臣遲參之間、先令行次第事、以女□稻唱歌稻欠解於御車前獻歌詞、主基又如前、今度御車西面立之、次第如前、

〔壬生家記〕文政元年八月廿六日、今日兩國御稻到著、　十月二日、今日御稻上加茂江相渡、幷御道具之事、

兩國御稻御道具

一長辛櫃二合〈棒二本、緘布四筋、〉

一荷辛櫃八合〈棒四本、緘布八筋、〉

一荷目籠二荷〈棒四本〉

一兩覆箱二荷〈大二枚、小十二枚、棒二本、〉

一挽臼二ッ　一舂臼二ッ　一杵六本　一桶二ッ
一績紙二枚　一筵二十枚
以上
十月　行事官
右一社より、宰領人足召連参相渡之事、
六日、御稲仕立出來に付、上加茂より相渡候事、
悠紀方
一黒米壹石八斗三合
內
中白五斗　御酒料　三杵九斗五升　御飯料
黒米二斗八升　餘米　三升八合　こぼれ
三升五合　減
外ニ
七升三合　粿交　七升　糠粉米
主基方
一黒米壹石八斗二升
內
中白五斗　御酒料　三杵九斗五升　御飯料
黒米二斗五升　餘米　四升　こぼれ
八升　減

外ニ

三升八合　籾交　壹斗七升　糠粉米

以上

十月　加茂一社總代梅辻大和守

岡本備後守

七日、兩國御稻配分之事、

目錄

悠紀近江國滋賀郡之分

拔穗五十筋　白米貳斗

主基丹波國桑田郡之分

拔穗五十筋　白米貳斗

合拔穗百筋、白米四斗、

十月　行事官

右內膳司江相渡候事

目錄

悠紀近江國滋賀郡之分

白米四斗八升　三杵米四斗八升

主基丹波國桑田郡之分

白米四斗八升　三杵米四斗八升

合白米九斗六升、三杵九斗六升、

十月　行事官

右造酒司江相渡候事

目錄

悠紀近江國滋賀郡之分

白米二斗

主基丹波國桑田郡之分

白米二斗

合白米四斗

十月　行事官

右大膳職江相渡候事

目錄

悠紀近江國滋賀郡之分

白米一升

主基丹波國桑田郡之分

白米一升

合白米二升

右主水司江相渡候事

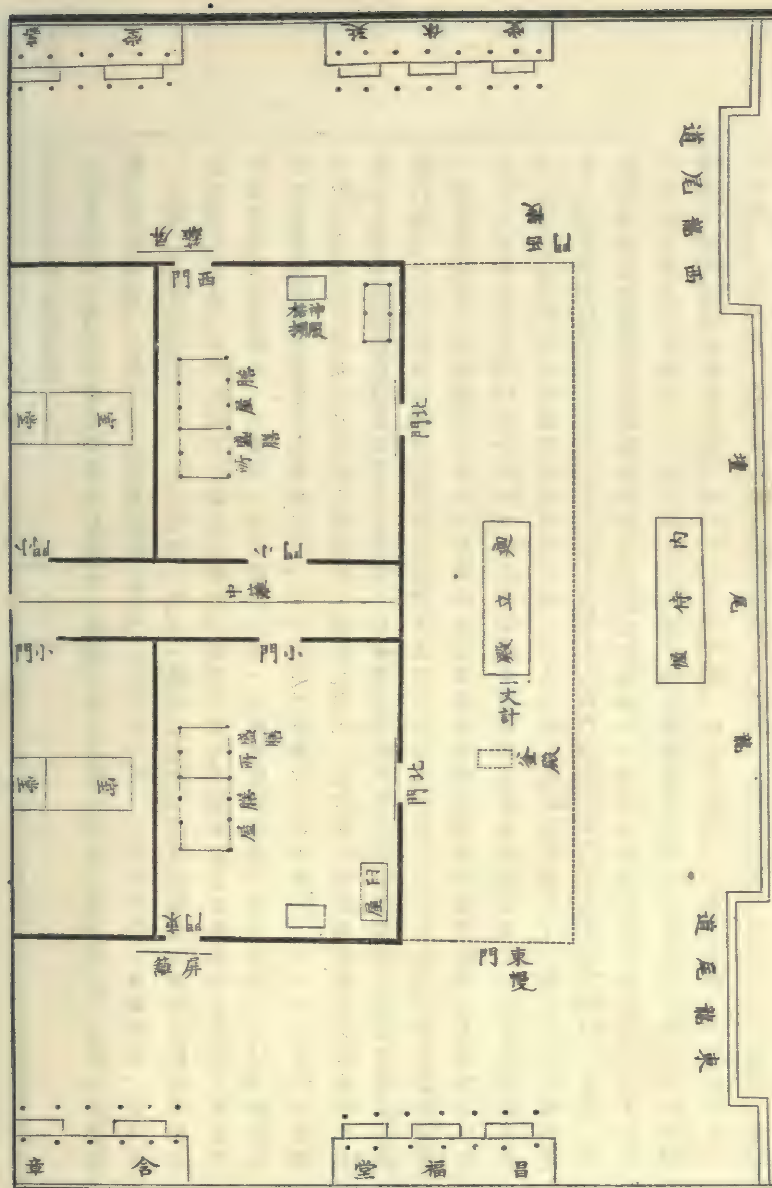
右渡方相濟候ニ付、先例之通傳奏奉行衆江屆候事、

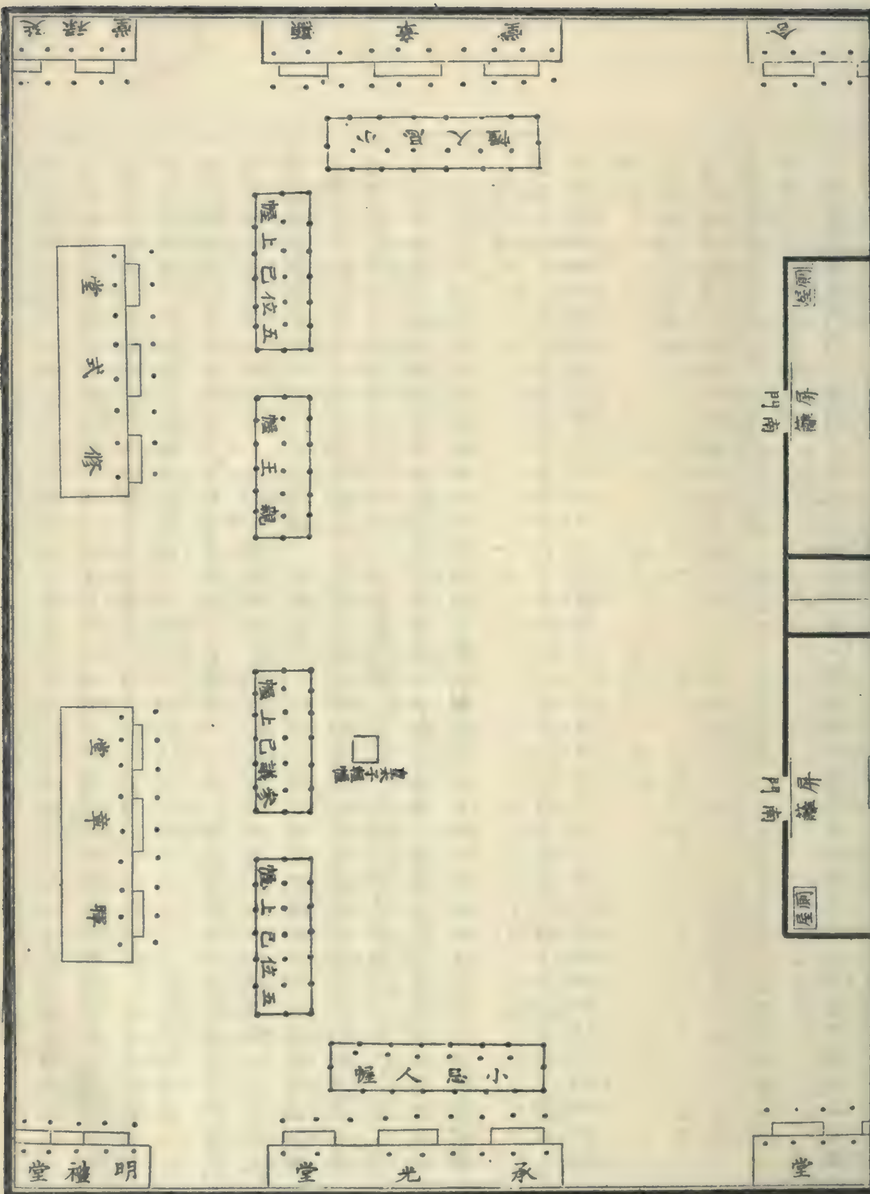
〔輔世卿記〕嘉永元年十月十三日癸丑、入來行事官、右者悠紀主基御米仕立出來候ニ付、今日賀茂より請取候ニ付、御屆申上候、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十月中旬、〇中略爲採大嘗宮御殿料材、禰宜卜部國司率造酒童女物部人幷夫等、向卜食山、祭山神、其料五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、鍬二口、米五斗、酒一缶、鰒堅魚各二連、雜魚腊一籠、海藻二連、鹽一斗、雜菓子一斗、稻二束、賦料絁一匹、布一端、綿二屯、(用國物)祭畢造酒童女執斧伐樹、夫等終之運置、次各爲艾同殿料萱、稻實卜部宮主禰宜卜部國司郡司率造酒童女物部男幷夫等、向卜食野、祭野神、其料五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿一斤、鍬一口、鰒堅魚海藻各一連、米酒各一斗、(用國物)祭畢造酒童女執鎌艾之、夫等終之運置齋場、〇中略下旬始於外院構大嘗宮雜殿、〇中略十一月上旬、〇中略先祭十餘日、各大嘗宮料雜材幷萱、運置朝堂第二殿前、先祭七日、鎭大嘗宮齋殿地、其儀也、神祇官中臣忌部官人、依次率悠紀國司及稻實卜部禰宜、卜部造酒童女燒灰等、令持鎭料雜物二輦、入自朝堂院南掖門、酒一缶次之、鍬四柄(裹布)次之、執著木綿賢木子弟二人次之、執丈尺工二人次之、到龍尾道南庭第二堂間、少時跪侍、(悠紀在左、主基在右、)于時燒灰率造酒童女參進、童女始鑽木燧、次稻實公鑽出火、次燒灰吹火、次子弟以松明炬之、(東北角一人、東南角一人、所所隨便六人、)訖稻實卜部辨備鎭物、率童女先鎭東北角、次東門、次東南角、次南門、次中央、(主基准之)其料庸布四段、安藝木綿一斤、凡木綿二斤、堅魚海藻各十斤、腊一斗六升、鹽四升、瓶十口、食薦十枚、雜菓子五升、柏五把、宮主執祭文、入南門內、再拜兩段、訖讀祝詞、(主基入其門內再拜)鎭畢二國童女各執著木綿賢木、捌神殿四角幷門處、訖執齋鍬、(國別四柄、以布袋、結以木綿、)始堀殿四角柱埳、(埳別八鍬)然後諸工一時起手、其宮地東西廿一丈四尺、南北十五丈、中分之東爲悠紀院、西爲主基院、其宮垣(搆柴爲垣、押以八重、垣末插椎枝者、古語所謂志比乃和惠、)正南開一門、(高廣各一丈二尺、搆爲扉、諸門亦同、其小門准減、)內樹屏籬、(長二丈)正東少北開一門、外樹屏籬、(長二丈五尺、悠紀國作、)正北亦開一門、內樹屏籬、正西少北開一門、外樹屏籬、(主基國作)南北兩門間縱有中籬、(長十丈)其南端通道、(道南籬長一丈、道北籬長九丈、兩國中分造之、)中籬以東一丈五許尺、有悠紀中垣、其南北兩端各開小門、(與南北宮垣相去各三丈、)其南北門間有中垣、其南縱五間正殿一宇、(長四丈、廣一丈六尺、柱高一丈、椽長一丈三尺、以葛野席覆其上、校高四尺、以北三間爲室、南戶懸席、以南二間爲堂、蒙

（大内裏圖考證 三 附録上）貞觀儀式大嘗宮全圖




小忌人幄
五位已上幄
親王幄
參議已上幄
皇太子幄
五位已上幄
小忌人幄
修式堂
暉章堂
南門
南門
承光堂
明禮堂
堂

（置五尺堅魚木、入枝著搏風、）構以黒木、葺以青草、其上以黒木為町形、以黒葛結之、以檜竿為承塵骨、以黒葛結之、以小町席為承塵、壁蔀以草、表用伊勢斑席、裏用小町席、鋪地以束草、（所謂阿都加草、）以播磨簀加其上、簀上加席、既而掃部寮以白端御畳加席上、以坂枕施畳上、内蔵寮以布幌懸戸、其堂東南西三面並表葦簾、裏席障子、但西面二間巻簾、正殿東南横御厠一字、（長一丈、廣八尺、高七尺、西戸、壁并扉等制同正殿、）中垣北六許尺、横五間膳屋一字、（其制同正殿、）東三間蔀以柴、裏用葛野席、西東壁下作楉棚、（高二尺、）西二間為盛所、其西南間皆以席柴蔀之、北垣南六許尺、横三間臼屋一字、（長一丈六尺、廣一丈、其東与盛殿東頭相對、）其西縦神服柏棚、（左右各有四柱、長一丈五尺、廣五尺、高四尺、）五日之内造畢、所須楉六百荷、柴千二百荷、葛二百荷、椎枝二百五十荷、承塵骨料檜榑卌四材、葺草千圍、葛野席百五十枚、小町席百枚、伊勢斑席五十枚、其主基院制作装束皆准悠紀焉、既而中臣忌部率御巫等祭殿及門、其料各五色薄絁各三尺、絲二両、安藝木綿一斤、筥二合、案二脚、米酒各二升、瓺二口、坏二口、

〔古語拾遺〕凡奉造神殿者、皆須依神代之職、齋部官率御木麁香二郷齋部、伐以齋斧、堀以齋鉏、然後工夫下手、造畢之後齋部殿祭及門祭訖、乃可御座、而造伊勢宮及大嘗由紀主基宮、皆不預齋部、所遺四也、

〔延喜式踐祚大嘗祭七〕凡應採大嘗殿材并御膳柏山、及苅葺草野、齋場地等、八月上旬神祇官共國司卜定、（其卜訖、先為解除、其料物當國所輸、）訖即申官令山野所属郡司一人専當禁守、勿入穢人、（採雜材山准此、其斑幔四百、令内匠寮造送神祇官、）

〔北山抄五〕大嘗會事

鎮大嘗宮地事（式、先祭七日鎮祭、即始作事也、近例前日行之、）

〔大嘗會儀式具釋六〕大嘗會卯日次第

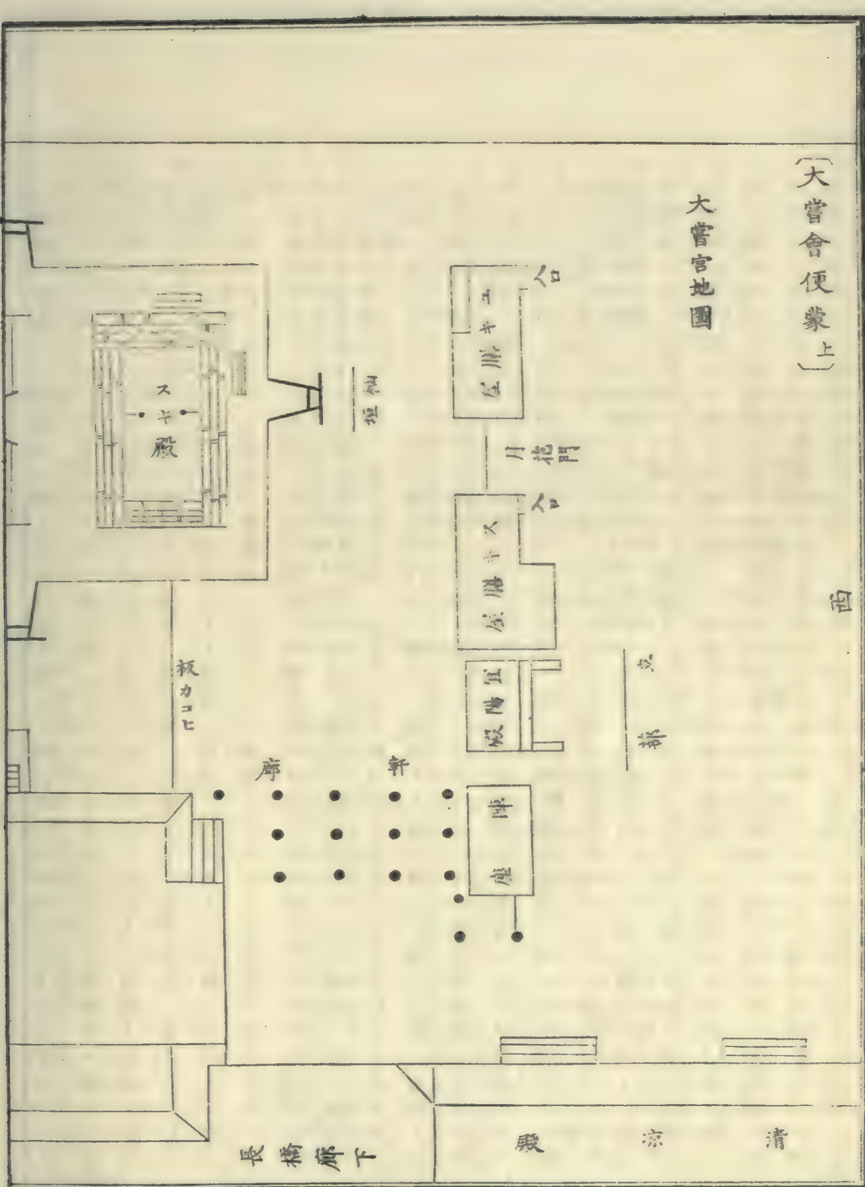
平明中臣祭大嘗宮殿及門

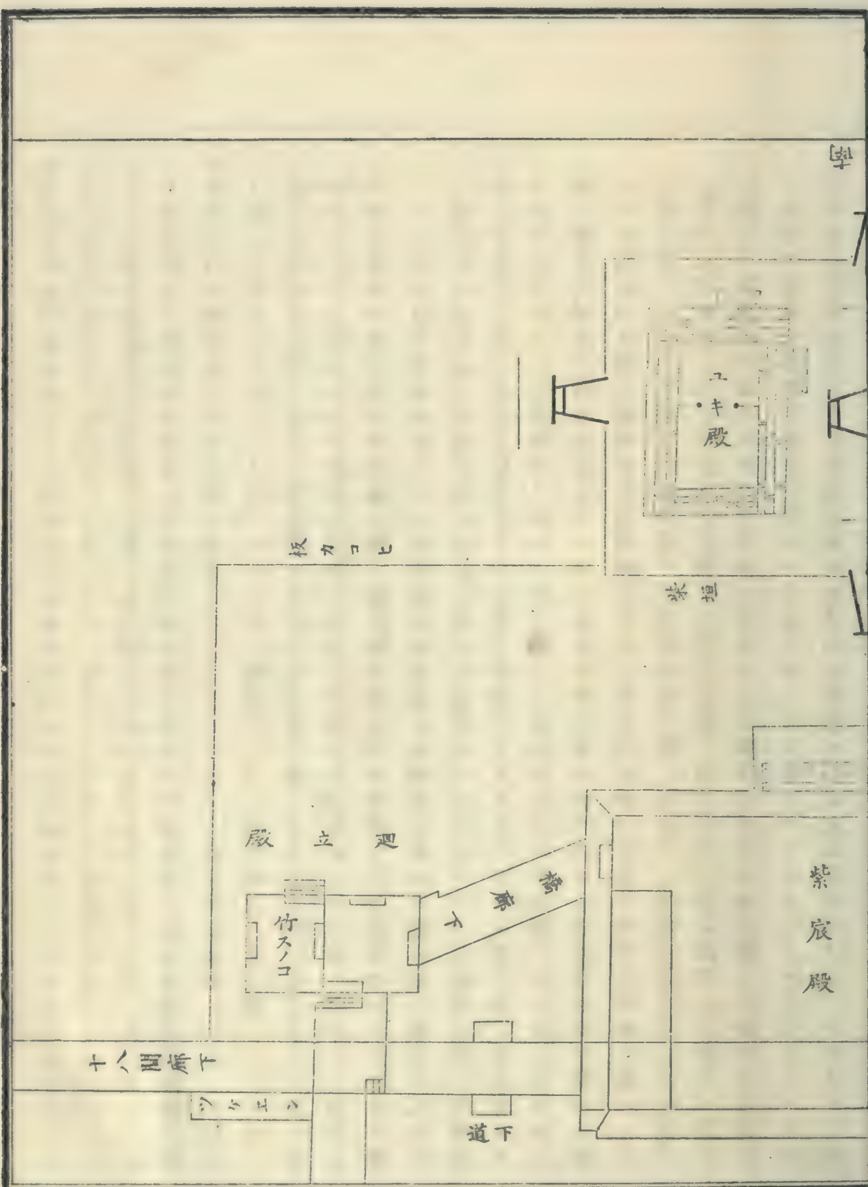
大嘗宮殿及門等ハ、當日ノ四五日以前マデニ修理職ノ役人之ヲ造リ了ル、其造リ様、先紫宸殿

ノ南庭ニ、東西十六間、南北十間ノ柴垣ヲ造リ廻ラス、（昔ノ垣ハ東西二十一丈四尺、南北十五丈ナリ、）垣ノ高サハ六尺バカリ、柴ハ内ノ方ハ北山柴、外ノ方ハ萩ノ柴、イヅレモ二タケナリ、竹ニテ押縁ヲシ、縄ニテ横ニ五所ユフ、四方ノ角ニ皮付ノ松ノ副柱アリ、其柱ヲ柴ニテ太ク包ミ、上ノ方開キ裾細ニ作ル、前日ニ成テハ椎ノ枝ヲ垣一面ニサシ廻ラス、是ヲ椎ノ和惠トイフ、垣ノ四方ニ歴木ノ皮付ノ鳥居ヲ立ツ、但南北ノ鳥居ハ垣ノ中央ニアリ、東西ノ鳥居ハ中央ヨリ少シ南ヘヨスル、鳥居ノ幅ハ四ツ共ニ八尺ヅヽ、高サハ南西東ノ三方ハ一ノ冠木ノ下バヨリ九尺、北ノ方バカリハ二ノ冠木ノ下バヨリ九尺、然ラザレバ渡御ノ時、御菅笠ツカユル故ニ跡ヨリ改メラル、（貞觀ノ頃ノ門ハ、高サ一丈二尺、廣サ一丈二尺ナリ、延喜ニ至リテ四ツ共ニ高サ九尺、廣サ八尺トナル、）又東西ノ鳥居ノ外一間ホド置テ、南北二間ノ袖垣ヲ立ツ、（是ヲ屏籬トイフ、昔ハ長サ二丈五尺ナリ、）垣ノ作リ様ハ、四方ノ垣ニ同ジ、垣ノ南北ノ端ニ副柱アリ、是モ柴ニテ太ク包ム、四方ノ垣ノ角ニ同ジ、又四方ノ鳥居ニ開戸アリ、是モ同ジク柴ニテ作リ、割竹ニテ縁ヲ四方ニ廻シ、表裏ヨリモ筋違ニ綾杉ノ如クニアテ、クワンヌキハ松ノ皮付藤ニテカラクリサシ込、（昔ノ扉ハ柊ニテ作ル、）イヅレモ外ジメナリ、又柴垣ノ内東西南北ノ中央ニ當リテ、東西ヘクヾルベキ鳥居ヲ一ツ立ル、是モ歴木ニテ作ル、高サ幅共ニ南西東ノ鳥居ニ同ジ、只此鳥居ニハ開戸ナシ、此ノ鳥居ノ南ノ柱ヨリ南ノ方、北ノ柱ヨリ北ノ方ヘ各二間半餘ヅヽ柴垣ヲ立ル、（昔ハ此垣長サ南北十丈ノ内、南端ニハ小門ヲ開キ、門ヨリ北ニ九丈、南ニ一丈アリテ、中央ニハ門ナシ、）其垣ノ南北ノハヅレニ、各一間ホドヅヽノ柴垣ヲ東西ノ行ニ立ル、（是モ屏籬トイフ、昔ハ二丈ナリ、）其東ノハヅレノ柱ハ柴ニテ包ム、總ジテ垣ノ作リ様四方ノ柴垣ニ同ジ、而シテ東ノ鳥居ノ内ニ一間退ケテ悠紀ノ御殿ヲ立、此内ニテ天神ヲ祭リ給フ、立テ様ハ南北五間、東西三間、（昔ハ長サ四丈、廣サ一丈六尺、）先アツカ草トテ青草ヲ地ニ敷、其上ニ竹簀子ヲカキ、其上ニ近江表ヲ敷、（昔大嘗宮ニ用井ラレシハ、總テ葛野席、小町席、伊勢ノ疏席ナドナリ、今用井ラルヽハ、總テ近江表ナリ、）南北五間ノ内、北ノ方三間ヲ内陣トシ、南方二間ヲ外陣トス、内外ノ陣ノ堺ニハ、東西ヨリ四尺五寸ヅヽノ張出シア

〔大嘗會便蒙上〕

大嘗宮地圖




ユキ殿
紫垣
廻立殿
竹スノコ
紫宸殿

リ、中ノ一間ガ間ハ、筵ニヌキヲアテタル開戸四枚、二枚ヅヽ蝶ツガヒニテ兩開キナリ、柱ハイブレモ松ノ皮付、立テ様ハ南ノ方北ノ方ハ一間半ヅヽノ間ニテ、兩端ト中央ニ一本ヅヽハシヲアリ、西ノ方東ノ方ハ、內陣ハ一間ヅヽノ間ニテ、北ノ端ト外陣ノ堺トノ柱ノ外ニ間柱二本ナリ、外陣ハ一間半ト半間トノ二間ニテ、南ノ端ノ柱ヨリ半間北ニ一本アリ、夫ヨリ內陣ノ堺ノ柱マデ一間半ナリ、此外東西ノ張出シノトマリニ一本ヅヽ、總テ內陣外陣ノ柱數十六本ナリ、面シテ四方ニ竹エンアリ、南ノエンハ幅一間、殘リ三方ハ幅半間ヅヽナリ、南ノエンノ西ノ端ヨリ半間去テ、幅一間半ノ階ヲ付ル、其作リ様皮付ノ松ノ木ヲ二ツ割ニシテ、皮メノ方ヲ外ヘナシテアテ、其上ニ平ナル板ヲ打付々々シテ三段ナリ、又西ノエンノ南ノ端ヨリ一間半去テ、幅一間半ノ階ヲ付ル、作リ様ハ南ノ階ニ同ジ、而シテ四方壁ナシ、皆近江表ヲアテ、皮付ノ松ノキニテ、ヌキヲ五本ヅヽ入ル、但南面ハ幅三間ノ內、中央ノ柱ヨリ西ノ方一間半ヲ入口トス、開戸アリ、近江表ニ皮付ノ松ノ木ニテ四方ノ縁トヌキヲ三ツトアツル、如此キ物一間半ガ間ニ四枚アリ、但二枚ヅヽ蝶ツガヒニテ繋ギ、兩開キニス、クワンヌキハ、是モ松ノ皮付藤ニテカラグル、外ジメナリ、此開戸ノ內ニハ葭ノ簾アリ、縁ハ白紙ニテ付ル、簾ノ內ノ方ニ白キ麻ノ總二條下リ、滅金ノ鈎アリ、簾ハ內ノ方ヘ卷上テ鈎ニ懸ル、簾ノ內ニハ白キ布ノ幌ヲ垂ル、幌ノ上ニ白キ布ノ總二條垂ル、華鬘結八段アリ、又中央ノ柱ヨリ東一間半ハ、四方ノ如クニ近江表アテタル上ニ、只葭ノ簾ヲ垂置ク、又西面ハ是モ階ノ付タル一間半ガ間ヲ入口トス、開戸ハ是モ近江表ニテ松ノ木ヲアツル事ナド、總テ南面ノ開戸ニ同ジ、但此開戸ハ一間半ガ間ニ二枚ニテ兩開ナリ、蝶ツガヒナシ、其內ニ葭簾卷上ゲ布幌總ナド南面ニ異ナル事ナシ、入口ヨリ外、內陣外陣合セテ三間半ガ間幷ニ北面ノ分ハ、近江表トヌキトバカリニテ、簾ヲモカケズ、又東面ハ內陣ガ間三間、幷ニ南ノ端半間ガ間ハ北面ニ同ジク、近江表トヌキトバカリナリ、殘

リテ一間半ガ間ハ、其上ニ葭イ簾ヲ垂置ク、南面ノ東ノ間ニ同ジ、而シテ南面ノカモヰヨリ上、棟ノ下マデハ、三間共ニ近江表ニヌキヲアテタルバカリナリ、北面モ是ニ同ジ、但北ハ下マデ此通ニテ一ツヾキナリ、(延喜式ニハ、東南西ノ三面皆簾ヲカケ、但西面二間ハ簾ヲ巻ト見エタリ、今ト同ジカラズ、)御殿ノ内天井ハ皆近江表ナリ、而シテ屋根ノ長サ南北七間、但南ノ端ハエンノ端ト等シク、北ノ端ハエンヨリ半間長シ、南北共ニ柴垣ヨリ屋根ノ端マデノ間一間半ヅヽアリ、東西ハコウバイニ下リテ簷口トエンノ端ト等シ、屋根ハ總テ萱葺、棟ハ皮付ノ松ノ木ニテ、南北ノ端ニ片ソギアリ、外ノ方ヲソグ、棟ニ堅魚木ヲ渡ス事三所、南北ノケラバノ下ニ搏風アリ、チギトテ木ノ頭ヲ出ス事、棟ヨリ西ニ四ツ、東ニ四ツ、又萱葺ノ下ニ南北ヘ渡セル木アリ、棟ヨリ西ニ八ツ東ニ八ツ、各其八ツノ内最上ニアルハ白木、其次ハ皮付、是ヨリ白木ト皮付トヲ互ニ置テ、第八本ノ皮付ノ木ハカモヰノ巡ニ當ル、東西合テ十六本、共ニ其端南北ヘ餘リ出ル、其木一本ヅヽニ皆下ニ薄キ小サキ板アリテ之ニ載ス、此十六本ノ木幷ニ載ル板等、搏風ヨリハ一間バカリ奥ノ方屋根裏ニ見ユルナリ、而シテ又柴垣ノ西ノ鳥居ノ内ニ二間退ケテ、主基ノ御殿ヲ立、此内ニテ地祇ヲ祭リタマフ、立テ様大キサ入口ノ付様マデ、悠紀ノ御殿ニ少シモ異ナル事ナシ、只片ソギノソギ様、外ノ方ヲソガズシテ下ノ方ヲソグ、是ヨリ外ニハ替リタル所ナシ、今度(元文三年)營作セラルヽ所右ノ如シ、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

木工寮於大嘗院以北、横作五間廻立殿、(長四丈、廣一丈六尺、其四面三間、以席蔀之、東南戸、)構以黒木、葺以板、掃部寮以苫覆板上、以席爲承塵、主殿寮以斑幔張東西北三間、(自大嘗宮北垣北、至廻立殿以北、)

〔北山抄五〕大嘗會事

先祭七日、南國龍尾道前造大嘗宮、(東悠紀、西主基、先十餘日、雜材等運置第二殿前、鎭祭殿地畢、諸工一時起、其宮五日內造畢、)其北三許丈、木工寮

造廻立殿〈卯酉爲妻、東南有戸、〉東去二許丈、造片庇爲御釜殿、

〔代始和抄〕大嘗會事

大嘗宮は悠紀主基各別也、大極殿の龍尾道の前にこれを造立す、これはまさしく神膳を供せらるゝ所也、又その北三丈許をさりて廻立殿をたつ、これは御湯をめさるゝ所也、悠紀の神事はてゝ後、この殿へ行幸なりて又御行水あり、故に廻立殿といふ名あるにや、

〔大嘗會儀式具釋〕〈六〉大嘗會卯日次第

戌剋御廻立殿

廻立殿ハ、大嘗宮ニ渡御アラントテ、先此所ニ渡御シテ御湯ヲ召サレ、御装束ヲ改メサセタマフ所ナリ、此殿ノ建チ所、昔ノ内裏ハ今同日ノ論ニ非ザレバ之ヲ略ス、三箇重事抄ニハ、大嘗宮ノ北三許丈ヲ去テ之ヲ建ルトアリ、貞享幷今度〈元文三年〉等ハ、紫宸殿ノ東庭、内侍所ノ西ノ方聊北ヘ寄テ之ヲ建ツ、其建テ様、南北三間、東西五間〈昔ハ長サ四丈、廣サ一丈六尺、〉但西ノ方三間ヲ一間トシ、是ニハ其中二間四方ニ疊ヲ敷キ、東ノ方二間ヲ一間トシ、是ハ竹簀子ナリ、其二間ノ堺南北三間ノ内、中ノ一間ハ開戸二枚ニテ、南ト北トノ一間ヅヽノ張出シハ近江表ニシメギヲ入ルヽ事大嘗宮ノ如シ、柱ノ立チヤウハ、皆一間ヅヽノ間ニテ、四面合セテ十六本、二間ノ堺ニ二本、總テ柱數十八本ナリ、四方ニエンナシ、南面西ヨリ第四ノ柱ト第五ノ柱トノ間一間ニ宮段ヲツケテ、渡御ノ時オリサセタマフ道トス、北面西ヨリ第二ノ柱ト第三ノ柱トノ間一間ハ、御茶湯所トノ堺トナル、同ジク第三ノ柱ト第四ノ柱トノ間一間ニ宮段ヲ付テ、御茶湯所ヘ下ル道トス、西面南第二ノ柱ノ南ヨリ第三ノ柱ノ聊北マデ一丈ガ間ニ、紫宸殿ヨリノ橋廊下ヲ取付ル、而シテ四方壁ナシ、近江表ヲアテ、皮付ノ松ノ木ニテヌキヲ入ルヽ、但南面西ヨリ第二ノ柱ト第三ノ柱トノ間一間ハ二枚ノ開戸ナリ、又第四ノ柱ト第五ノ柱トノ間一間モ二枚ノ開戸ニテ、貫

拔ハ内ジメナリ、又東面幅三間ノ内、中ノ一間ガ間ト、北面西ヨリ第三ノ柱ト第四ノ柱トノ間一間ト、西面三間ノ内、中ノ一間ガ間ト、三所共ニ二枚ノ開戸ニテ、グハンヌキハ外ジメナリ、殿内天井ハ皆近江表ナリ、屋根ハ苫ブキ、桁行東西五門、梁行南北三間ナリ、而シテ其渡御セラルルニ、昔ハ本殿ヨリ鸞輿ニ御シテ、建禮門ヨリ出テ、昭訓門又ハ宣政門ヨリ入タルモ、東樓ノ壇上、又ハ東樓ノ小門ノ前庭、又ハ龍尾道ノ東階ノ上、又ハ含章承光兩道ノ間等ニテ、腰輿ニ改メ御シタマヒ、廻立殿ノ北、幷ニ西ノ幔外ヲ經テ、西方又ハ南門ヨリ入セタマヒテ御セラルヽ由見エタリ、今ハ本殿ヨリ廻立殿マデノ間纔ニシテ、且地上モナケレバ、行幸ノ儀ニ及バズ御歩セラル、アラカジメ紫宸殿ノ東ノエンノ東南ノ角ノ聯北ヨリ、廻立殿ノ西面中央ヨリ聯南ヘ寄タル所マデニ、スヂカヒニ橋廊下ヲカクル、長サ七間半ハヽ一丈アリ、南北兩方近江表ニテ圍ヒ、竹ト杉ノ皮付ニテ押縁ヲ打、屋根ハ苫ブキ、タルキコマヒハ皆竹ナリ、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡料理御膳、幷備小齋人食院者、近宮之地隨便卜定、訖卽鎭祭、其幣五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、綿二屯、商布四段、鍬五口、米四升、酒一斗、鰒海藻各一斤、祝詞布二端、並用國物、(餘祭不顧幣物色數者皆准此、)所作盛屋一字、酒屋一字、贄屋一字、器屋一字、大炊屋一字、供御膳屋一字、料理雜魚屋一字、備食屋一字、(已上屋數及長廣、臨事隨增減、)皆以板葺、掘井一處、其院四面各開一門、作訖稻實卜部等於院内、爲解除、其料物各當國所輸、

〔延喜式三十八掃部〕踐祚大嘗會、(○中略)十一月上旬、葺蔀大膳職多加須伎、比良須伎屋、及廻立殿、上葺苫、下蔀薦席、(藁入中、席著表裏、木工寮共營、)

〔大嘗會儀式具釋六〕大嘗會卯日次第

神祇官率內膳膳部等、於悠紀膳屋料理神饌、

悠紀膳屋トハ、膳屋ハ膳ヲ調修スル所、古供膳ヲバ必槲葉ニ盛故ニ、膳屋ヲカシハヤト云ヒ、又

ハカシハドノト云ヒ、膳夫ヲカシハデト云フ、其膳屋昔ハ悠紀主基共ニ柴垣ノ内ニアリ、今ハ月花門ノ南ノ廊ヲ近江表ニテ圍廻シテ悠紀膳屋トス、其内ノ東南ノ角ニ、長サ南北二間、幅東西一尺五寸ノ棚ヲ作ル、此棚昔ハ椙ニテ作ル、今ハ割竹ヲ釘ニテ打付ル、棚ノ高サ地上ヨリ二尺餘、其棚ノアル邊ニハ外ノ方筵圍ノ上ニ椎ノ葉ヲアテ、割竹ニテ押緣ヲ二通アツル、西南ノ角ニ西ノ方ヨリ入ベキ開戸アリ、竹ノ折戸ノ西面ヨリ近江表ヲアテタルヲ、繩ニテ結付オクナリ、

子一刻神祇官率内膳膳部等、還主基膳屋、料理神饌、

悠紀ノ所ニ注ガ如シ、其主基膳屋ハ、月花門、今ノ宜陽殿トノ間ノ廊ヲ近江表ニテ圍廻シテ膳屋トス、其開戸ノ體幷ニ付キ所、悠紀膳屋ニ同ジ、只此膳屋ニハ竹棚ナシ、

〔儀式 三〕踐祚大嘗祭儀

前祭一日、所司於承光顯章兩堂前、縱立七丈幄各一宇、設小齋人座、（天皇御悠紀殿、在東幄、御主基殿、在西幄、）顯章堂前横立五丈幄二宇、西一宇爲參議已上座、東一宇爲五位以上座、其參議以上幄以北二許丈立皇太子輕幄、修式堂前立五丈幄二宇、東一宇設親王座、西一宇設五位已上座、廻立殿北横立五丈幄一宇、設内侍座、

〔北山抄 五〕大嘗會事

先一日、所司廻立殿北四許丈立五丈幄、爲女官候所、大嘗宮西七許丈、設御輿宿幄、（安和記云、殿上侍臣候此幄、南妻爲造酒司候所、）承光顯章兩堂前、縱立七丈幄二宇、爲小忌座、（東悠紀、西主基、）暉章堂前、横立五丈幄二宇、西一宇爲參議以上座、東一宇爲五位以上座、西幄北去二許丈設皇太子輕幄、（近例不設、依无其人也、）脩式堂前立五丈幄二宇、東爲親王座、（永平以來記云、大忌王候主基座云々、非也、）西爲五位以上座、（新式云、暉章脩式兩堂後、立六位幄、云々、近例不立之、記文云、承光堂南、明義堂北、立五丈幄、爲諸家舁備所、大嘗宮南門外、南去三許丈、設左右近幄、東西相對、安和記云、諸大夫幄東立五丈幄、辨少納言以下、行事所召使以上候之、）子細在儀式幷指圖、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

太政官符大藏宮內省

大藏省

五色薄絁各三尺、絲二兩、安藝木綿一斤、宮二合直、

已上祭悠紀主基二大殿料

庸布四段、木綿二斤、麻二斤十兩、鎌八口、

已上鎭祭宮地料

宮內省

酒一斗（清二升濁八升）（祭悠紀主基二大殿料）（鎭祭悠紀主基二宮地料）

机二前（祭悠紀主基二大殿料）

右得神祇官解偁、件雜物依例所請如件者、省宜承知、依件行之、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

辰日卯一刻、宸儀還御廻立殿、一如初儀、（中略）祭禮已畢、百官各退、伴佐伯宿禰閉大嘗宮門、二刻神祇官中臣忌部、率御巫等鎭祭大嘗宮殿、其幣如初、訖卽令兩國人夫壞却大嘗宮、其御服衾單、狹帖、短席、幷廻立殿及供奉浴湯之具、並賜忌部、所須雜經火之類、賜宮主卜部、自餘雜物及殿舍屏籬賜中臣、訖各鎭大嘗宮舊地、其料庸布四段、木綿二斤、麻二斤十兩、鍬八口、米濁酒各八升、鰒四斤十兩、堅魚海藻各十斤六兩、腊一斗六升、鹽四升、瓶坏各八口、

〔大嘗會儀式具釋七〕辰日悠紀節會次第

中臣鎭祭壞大嘗宮、

其時刻ハ貞觀儀式ニ卯二刻トアリ、今度辰ノ正刻ナリ、鎭祭畢リテ修理職ノ、役人大嘗宮ヲ壞ッ、昔ハ悠紀主基兩國ノ人夫之ヲ壞ッ、

〔本朝世紀〕治曆四年十一月廿二日辛卯、於官廳有大嘗會事、先是擇告悠紀主基國、龍尾道前造大嘗宮、木工寮造廻立殿、

〔兵範記〕仁安三年十一月二日己未、拔穗使入洛、又大嘗宮點地也、○中略下官以下起座、於南門外調行列、童女乘輿、依大嘗宮點地、參八省院也、八女留齋場所、先六男稱警蹕先行、次供神物等、（安鞍）次童女、次卜部二人、次行事官、下官以下皆歩行、入達智門南行、自上東門大路末東行、自櫛匣末南行、至應天門前、主基行列入安嘉門、又南行會合應天門前、悠紀方入應天門、著會昌門外東廊座、（悠紀東、主基西、）卜食國錦設裝束、其儀敷弘筵、西第一間敷高麗帖一枚、爲下官座、（東面）其東副北壁敷紫緣帖、爲五位史以下主典代座、（西上南面）對座敷所々預等座、（西上北面）官掌座在東横切西向、其座後引隔斑幔、廊南壇下引同幔、次下官以下著座、□入立明、先例立柱松、今度不立、□懈怠也、一獻畢食汁、次三獻、次居菓子、次膳主基、次兩方相共起座列會昌門、悠紀入東戸、主基入西戸、先是神祇官、率國司郡司童女六男等、入會昌門東掖門、至于明禮堂西北角、著暉章堂西北角座、次下官等著座、去暉章堂北二丈、當西一間、敷下官座、（北面）其東有五位六位史史生座、官掌齋場所主典代座在其東、（南上西面）

主基座修式堂北去二丈、當東一間、敷辨座、暉章堂西北角在童女稻實公六男宮主等座、（皆西上北面）次取火燧授童女、童女授稻實公、稻實公鑽出火、次新採者取明松炬之、悠紀主基相向北行、此間行事官不動座、卜部以下立留承光堂面一間邊、次當國書生進大繩、木工寮大工□長任例點地、含章堂乾去西八丈六尺、其西廿一丈四尺、內中分、折南十五丈南、及含章承光兩堂爲悠紀大嘗宮、卽新採者以明松置六所、神祇官率童女鎭之、立賢木懸木綿、次卜部於南門路東掖所段再拜、次定御殿所丈尺立標、卜部率童女稻實公等、取鍬堀始四角柱穴等、（艮巽坤乾、先神祇官、次童女、每角入度、次稻實公、次六男、此間事依夜陰委不見、）次事訖卜部

以下退去、童女稻實公以下歸齋場所、畢下官退出、於朱雀門乘車、時戌刻也、　七日甲子、今日大嘗宮棟上也、兼日於行事所勘下日時、入宮送主基、而左少辨依犬死穢不出仕之間、主基方延引了云々、且是寬治天仁悠紀大嘗宮棟上之後、主基經兩三日棟上云々、見記文云々、下官不參入、是又近代如此云々、　十五日戊申、著行事所巡撿大嘗宮幷廻立殿作事、入夜退出、　廿三日庚辰、早旦參大極殿、(中略)先是神祇官令國人夫等具大嘗宮致鎭祭、各二國同官下給了、而主殿寮稱近例欲推取事及狼藉、令撿非違使下部糺斷畢、主殿下部對捍之間、使廳搦捕了、

〔業資王記〕建曆二年十一月十二日甲寅、今日夜巡見大嘗宮幷北野齋場所、　十四日丙辰、壞却大嘗宮幷北野內院築垣等了、

〔伏見院御記〕正應元年十一月五日丙戌、家教卿參、召前談大嘗會事、召左中辨冬季朝臣、仰廻立殿神殿御指圖可召進官之由、　六日丁亥、冬季朝臣持參廻立殿指圖、今度指圖未書出、仍文應舊指圖也云々、俊光持參官廳指圖、

〔萬一記〕正安三年九月十一日、廻立殿守護官人事仰大理、

廻立殿守護官人可爲章任章敎、可令下知給者、依院御氣色上啓如件、

九月十一日　　　　　　　　　　兵部少輔宣房奉

謹上　別當殿

〔大江俊冬記〕天明七年十一月一日乙丑、今日大嘗宮立柱也、造酒司酒兒等參仕、其儀豫立柱於庭上、(墨木皮付、其中一二柱ノ上、結苧與繩懸之、)先酒兒一人到悠紀方柱本有事由、次修理職率工長三人進同所、工長直到酒兒所持柱下、以土覆其本、訖修理職已下還本所、酒兒直至主基方、(一如悠紀方、)事訖各退入、

此儀雖全不預其沙汰、任所見略記之而已、

〔季連宿禰記〕貞享四年五月廿六日癸卯、一昨廿四日、予行向大外記許之時、大嘗宮繪圖一枚被取出

作圖古本以官務所持之圖寫之由有奧書、然共予不所持之間、令懇望寫之者也、　十一月三日戊寅、自今日大嘗宮悠紀主基殿被造始之由風聞、其所南殿前庭云々、凡悠紀主基殿廻立殿等、今度修理職沙汰立之歟、指圖追而可尋寫、　十六日辛卯、今日大嘗會也、八省院無其蹤跡、仍南殿前庭立悠紀主基二院、長橋南方立廻立殿被行之、月華門南腋爲悠紀膳屋、宣陽殿南腋爲主基膳屋、其外猶見差圖、

〔壬生家記〕貞享四年大嘗會大嘗宮

一悠紀御殿

作樣皮付ノ雜木ニテ作、ヤネハ萱ブキ也、天井ハ筵也、壁無之、萱ヲカベトスル也、内外ニ筵ヲハル也、地ハ草ヲ敷也、其上ニ竹ノ簀ヲ敷、其上又筵ヲ敷也、三面ニ蘆簾ヲカクル也、裏ハ筵ノ障子也、

右御殿四方短キ柴垣也、一方ニ口、其口ニ皮付ノ鳥居、

一主基御殿

作樣以下右同斷

右二ケ所ノ御殿長サ四丈、廣サ一丈六尺也、今度御庭セバキ故、丈尺被減也、

右四方短キ柴垣也、一方ニ口、其口ニ皮付ノ鳥居、

一入神殿

少キホコラ也、作樣悠紀ノ御殿ニ同、

一膳屋二ツ

作樣右同斷、但柴ヲ蔀ニスル也、内ニ棚一方ニアリ、此所ニテ神膳ヲ盛也、是亦丈尺右同斷被減也、

一臼屋二宇

作樣右同斷、長サ一丈四尺、廣サ八尺也、柴ヲ蔀ニシテ戶二有、

一高御倉貳ツ

作樣右同斷、是ハ神供米ヲ入藏也、

一廻立殿

作樣皮付ノ雜木ニテ作、ヤネハ苫ブキ也、天井ハ筵也、長サ四丈、廣サ一丈六尺、此所ハ主上御湯殿也、

右材木竹萱等、禁中ノ御領ノ山ヨリ出スベキ也、

〔文政度大嘗會調進物記〕大嘗宮造立始

大嘗宮立柱上棟十月十五日立柱辰、上棟午、

造酒皃參勤如例之事

右之通九月十七日被仰付候、造酒皃交名可差出旨、九月廿日被仰渡、同日交名差出候事、

〔行厚記〕文政元年十一月廿一日、大嘗會卯日也、主基所行事史參勤ニ付、巳刻著小忌參仕、

一大嘗宮巡撿之儀

申刻過辨殿ヨリ御沙汰有之、悠紀主基行事之輩、不殘高遣戶之邊ヘ參集、暫而撿挍公卿兩行事辨等下殿正列參進、先大炊御門大納言經久卿、次ニ庭田中納言重能卿、次ニ日野西宰相延光卿、次兩行事辨左右分立、悠紀左、主基右、次ニ兩行事史左右大史、左少史、右予、次行事寄人實貞朝臣左方常濟朝臣右方以下、從史後分立參進、入自月花門、悠紀主基嘗殿巡撿了、出月花門高遣戶下、撿挍公卿辨昇殿之後退下、是而已今日行事所役也、

〔代始和抄〕御禊行幸事

大嘗會行れんとての十月に此事あり、豐のみそぎと是をいふ、世俗には河原の御はらへといふ、

解除をば河にのぞみて修する事なれば、二條三條の川原に行幸してこれを行はる、大祀は一月の潔齋、中祀は三日、小祀は一日也、大嘗會は大祀たるに依て、十月より御神事あり、川原の御はらへは御神事をはじめらるゝ由也、大嘗會延引あればさらに又御禊の事あり、まづ九月中旬に、大臣陣に著て裝束司次第司の除目を申おこなひ、陰陽寮に仰て御禊の日時を勘申さしむ、裝束司といふは、御禊につきて兼日の義、點地等の事を奉行す、長官一人中納言を用ふ、次官一人中辨をさだむ、判官二人、主典二人あり、又次第司といふは、行幸につきて諸司百官悉く供奉するによりて、御前の長官次官主典、御後の長官次官判官主典の職をさだむ、御前の長官一人は納言參議の中を用ふ、御後の長官には參議の人を用ふ、これは御輿の前陣後陣の行列を奉行するによりて次第司とは名付るなり、次官たる人兼日に行列の圖を奏す、これをば鹵簿の圖といふ也、十月上旬に、陪從の五位以上八十二人、御前三十六人の歷名、留守の參議ならびに辨各一人をさだめて、裝束司にくだす事あり、裝束司吉日をえらびて官の東廳に著て次第の事どもを行ふ、點地の日は、近衞の少將を勅使とさだめて、其所職のともがら河原に行むかふ、長官次官以下おの〳〵幄の座につきて事を行ふ、川原の地を點じて、南北四十五丈、東西四十丈に大綱をひき札をたつる事あり、これより國司撿非違使等に仰て汚穢不淨をいましめ、牛馬の闌入をとゞめしむ、其後幄屋分といふ事あり、諸司の著べき輕幄等をうたるゝ也、御禊の地、上古は定れる事なし、平城天皇は葛野河にして御禊あり、嵯峨天皇は松が崎に行幸あり、文德天皇は鴨川にして御禊あり、其後二條三條の末を用らる、近代は大略三條の末を點せらる、陰陽寮吉方を勘申する者也、

〔儀式　三〕踐祚大嘗祭儀

九月中旬、任御禊裝束司長官一人、次官一人、判官二人、主典二人、即可給百度之宣旨下宮内省、○中略次大臣仰神祇官及陰陽寮、定御禊地幷日時奏之、訖長官以下率陰陽寮就所占方河頭擇廣遠地

面點定、次喚文武諸司、勘申可陪從之人數幷裝束雜物、(中略)○十月上旬、裝束司喚式部民部二省、令進諸司史生幷拔出仕丁二人、次可行幸其地之狀、下符京職及山城國、又仰可掃道路幷禊處之狀、次任前後次第司、御前長官一人、次官一人、判官二人、主典二人、御後長官一人、次官一人、判官二人、主典二人、次裝束司判官主典各一人、率國郡司定輦路、次次第司長官以下、率京職官人及國郡司、撿察道橋幷禊處、次諸衞府靑摺衣、幷左右馬寮騎士居飼等裝束、及左右衞門門部、數文武官留守等事、申大臣行之、次賑給使左右京各亮一人、進一人、屬一人、其料物庸綿百屯、錢六貫文、(用大藏物)卽使就大藏省受之、次喚大藏木工等省寮、點示幄幕之處、先禊一日、次官以下主典已上向禊處、供張幄幕、其御禊座便立五丈紺幄二宇、中置百子張、(第一第二柱樹於中流)去之三丈懸紺布垣代、其門內外屛懸斑幔、去之四丈立五丈幄、爲皇太子禊處、去之二丈立五丈幄、爲神祇官候處、去之三丈立五丈幄、爲置御輦之處、(方面各任地形)其御膳座去禊處五十丈、雙立五丈斑幕二宇、中置輕幄、幄中東南邊立皇太子倚子、去之三丈立七丈幄、爲親王以下侍從已上候處、去之十丈立五丈幄、爲內膳司候處、其前設輕幄、爲進物所、又去御幄二丈立七丈幄二宇、爲女御女孺以上候處、去之四丈立七丈幄、爲皇太子休息處、其大垣以紺布幔爲之、三面開門、一面臨流、去大垣三丈立五丈幄、爲大膳職候處、去之四丈立五丈幄、爲太政官候處、自餘諸幕本司設之、是日次第司判官主典率主禮等、立鹵簿標、騎陣連行相去之間一丈五尺、步陣七尺、卽到禊所亦立標、自後方大門右掖、而右去四許丈立節旗標、後去一丈五尺立大臣標、去之一丈五尺立少納言標、去之五許尺立外記標二、(左右相去各一丈五尺)自少納言標去之一丈五尺立鉦標、去之一丈立鼓標、自鉦鼓兩標間左右相去各一丈、立兵庫寮標二、自鼓標去之一丈、更右折二丈、立御前次第司長官標、其後去之六尺立次官標、去之六尺立判官標、去之六尺立主典標、去之一丈立主禮標、自節旗標右去四許丈、立左兵衞陣留標、右去四許丈立左衞門陣留標、右去十許丈立諸司留標、自左衞門陣標後相去十許丈、立大臣下馬標、去之廿許丈立諸司下馬標二、(左右各一丈、高三許尺、下同、)自左衞門陣標右去四許丈立右兵衞

留標、右去四許丈立右衞門留標、其後廿許丈立諸司下馬標、

〔延喜式大政官十一〕凡踐祚大嘗會、十月下旬天皇臨川禊、禊而齋、預令陰陽寮勘申禊日、前廿許日任御裝束司并次第司、御裝束司長官一人、（三位）次官一人、（五位辨）判官二人、（一人史）主典二人、（並六位已下）次第司御前長官一人、（三位）次官一人、（五位）判官二人、主典二人、（並六位已下）御後亦准此、前五日大臣及參議已上、定五位以上應陪從并留守歷名、奏聞訖下式部及裝束次第等司、（事見儀式）

〔延喜式踐祚大嘗祭七〕凡行幸陪從御巫戸座給乘馬、

〔延喜式典藥三十七〕凡踐祚大嘗御禊行幸陪從、職掌官人一人、侍醫一人、並給當色、（五位六位並從其色）藥生二人、各給調布紅衫一領、白袴一腰、布帶一條、直丁二人、亦各給調布黃衫一領、白袴一腰、布帶一條、仕丁二人、紺布衫二領、白布袴二腰、布帶二條、並申省請大藏省、

〔延喜式踐祚大嘗祭七〕凡行幸爲禊、路次邊神奉幣帛、座別五色薄絁各一尺、絁（大五尺、小三尺、）絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裹薦夫、（此二種准幣多少）

〔延喜式踐祚大嘗祭七〕凡天皇十月下旬臨幸川上爲禊、料五色薄絁各八尺、五色絹各八尺、御服庸布四段、祝詞賦料庸布二段、安藝木綿八斤、木綿麻各二斤、黃蘗十枚、鍬四口、鰒堅魚各六斤、腊二斗、鮭八隻、鹽八升、雜海菜八斤、酒米各四斗、稻四束、食薦四枚、柏廿把、坏八口、盆八口、匏二柄、簀籠二履、夫六人、

〔延喜式掃部三十八〕踐祚大嘗會、十月下旬裝束八省院頓宮、其所須薦席者、依辨官宣下用、

〔延喜式掃部三十八〕凡踐祚大嘗會祓禊儲料、輕幄百子帳軟障大床子屏風帳茵等、貯納寮家、臨事出用、

〔西宮記臨時四〕御禊

天皇位服、節下大臣前後次第使皆飾馬、（有手振、次官以下同之、權帶解、）王卿唐鞍、（魚袋、）五位以上唐倭隨有、皆著杏葉、諸衞將佐平裝束、自餘在御禊所帶、衞府公卿著螺鈿劒、（或記云、著飾劒、）

〔延喜式左右近衞四十五〕凡供奉踐祚祓禊少將已上、並著皁緌位襖橫刀弓箭靴、將監深紅衫、將曹紫褶貲衫、

醫師府生黃色柴摺貲衫、並行縢、近衛靑摺衫蒲脛巾草鞋、(騎隊行縢)並著皁緌白布帶橫刀弓箭、

〔延喜式 四十六 左右衛門〕凡供奉行幸官人以下府生以上、並准近衛府、門部皁緌紺布衫白布帶橫刀弓箭行縢麻鞋、(幷近衛以蒲脛巾代行縢)衞士皁緌挑染布衫白布帶橫刀弓箭白布脛巾草鞋、但踐祚大嘗會祓禊、用鷲像纛幡二旗、(其執纛一人、著末額緋行縢纈袍帛帶騎馬、執纛二人、黃布衫布帶步行、並用兵庫寮夫、他皆准此、)鷹像幡四旗、小幡卅旗、(少減於威儀幡、他亦准此、)鉦鼓各一面、(其用度雜物、及擊鉦鼓人、執纛夫等裝束、並見兵庫式、)

〔延喜式 四十七 左右兵衛〕凡供奉行幸官人以下裝束、並准近衛、(騎私馬)但踐祚大嘗會祓禊、用虎像纛幡一旗、鷹像隊幡四旗、小幡廿旗、鉦鼓各一面、其用度准衛門府、

〔江家次第 十四 踐祚〕大嘗會御禊定

九月中旬、大臣定裝束司、

長官一人中納言、次官一人中辨、判官二人、史一人、内記一人、主典二人、内藏屬勘解由主典各一人、

次第司

御前長官一人納言若參議、次官一人式部少輔、判官二人式部中務丞、主典二人式部中務錄、御後長官一人參議、次官一人兵部少輔、判官二人兵部民部丞、主典二人兵部民部錄、

奏聞下二省除目也

元慶八年、天慶九年、於外記廳任之、仍先給下名、注裝束鼓打時、列陣鼓打時、進鼓打時、行鼓打時、出御門吉方、御禊吉方、還御時、

太政官式云、預令勘申者、天慶例如之、淸涼抄云、裝束司令勘申云云、依儀式歟、近例任裝束司等之日、便令勘申、

同點地次第

辰一點、裝束司主典史生官掌率諸司等臨川原、大藏省立幄三字、掃部寮鋪設北五丈幄二字、(子午字)東

幄北第一間設長官座(南面)第二間設次官座、第三間設判官座(西面絶席)西幄中央北第二間設勅使座(東面北上、對次官座、)同幄第三四間設諸司國司五位已上座(東面北上、對判官座、)西幄南妻設主典史生官掌召使等座(北面東上、各有絶席、)西幄北第三四間設諸司六位座(東面北上、在五位後、)南去五丈立七丈幄爲饗所、官厨家奉仕饗五十前(長官以下)

山城國奉秣廿束芒蓴等、

午剋長官次官到著、各官乘車先點地形、次著幄座、次山城國進諸風土者二人解文、主典以解文覽長官、覽畢仰可下次第司之由返給、判官問諸風土者云、可申村邑名號者、即稱申其名、次召繪師一人令畫地樣圖、其端以判官史令書付村邑號、次主典令覽長官、覽畢長官付勅使(中將、少將)、此間召陰陽寮令勘地方、次召左京職官人令申京條丈尺、然後令勘申件勘文、相副村邑名文奉之、次木工寮(少屬)以丈綱點地方丈立札(南北四十五丈、東西四十丈、)次召仰檢非違使幷國司等、今日以後點地内外汚穢物幷牛馬制止闌入、兼又幄幔處分之日、饗可儲由可仰下、

〔類聚國史(八神祇)〕弘仁十四年十月甲申、任大嘗會御禊裝束司幷次第司、

〔文德實錄(三)〕仁壽元年十月己亥朔、定大嘗會御禊裝束司幷前後鹵簿次第司、

〔三代實錄(三清和)〕貞觀元年九月廿一日癸酉、任大嘗會御禊裝束及鹵簿次第等司、正三位行中納言源朝臣弘爲裝束司長官、從五位上守右少辨兼中宮亮藤原朝臣家宗爲次官、左大史正六位上菅野朝臣高松、大内記高階眞人菅根、並爲判官、主典二人、正三位行中納言橘朝臣峯繼爲前次第司長官、中務少輔從五位下源朝臣包爲次官、中務大丞正六位上藤原朝臣善枝、式部大丞紀朝臣春常、並爲判官、主典二人、參議正四位下行左兵衞督兼伊勢守源朝臣多爲後次第司長官、兵部少輔從五位下源朝臣直爲次官、中務少丞正六位下藤原朝臣忠基、兵部少丞正七位下安倍朝臣高貞、並爲判官、主典二人、

〔三代實錄(三十二陽成)〕元慶元年九月廿六日甲子、任大嘗會御禊裝束及前後次第司、以參議太宰權帥從

三位在原朝臣行平為裝束司長官、從五位上守右少辨兼行中宮亮藤原朝臣遠經為次官、判官二人、主典二人、參議從三位行左衞門督大江朝臣音人為御前次第司長官、式部少輔從五位下菅原朝臣道眞為次官、判官三人、主典二人、參議從三位行右衞門督源朝臣勤為御後次第司長官、中務少輔從五位下大江朝臣公幹為次官、判官二人、主典二人、

〔三代實錄 四十六 光孝〕元慶八年十月二日己丑、任大嘗會御禊裝束幷前後次第司、參議正四位下行左大辨兼播磨守藤原朝臣山蔭為裝束司長官、左少辨正五位下安倍朝臣淸行為次官、判官二人、主典二人、正三位行中納言兼民部卿在原朝臣行平為前次第司長官、從五位上行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原朝臣道眞為次官、判官主典各二人、中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有為後次第司長官、從五位上行兵部少輔源朝臣遠為次官、判官主典各二人、　廿二日己酉、差定大嘗會御禊陪從親王已下五位已上八十四人、令所司給朝服、

〔北山抄 五〕大嘗會御禊事

貞觀、外祖忠仁公(○藤原良房)騎馬供奉、仰大笠宣旨云云、

承平二年、侍從宗城朝臣奉仕右兵衞督代、以兼明朝臣補次侍從、(上卿仰中務輔云、源兼明朝臣、於毛止末不千君仁乎佐女給云云、)

天慶九年、右衞門督高明卿雖輕服任次第司長官、仁和例也、(仁和四年十月十六日、右大臣多、[illegible]王、[illegible]多在服親、而依宣旨供奉、廿五日御禊、)

右中將雅信為左中將代、左中將正明為大將代、又依無中將也、元慶以右中將業平為左中將代之例也、

〔日本紀略 五 冷泉〕安和元年九月廿六日丙午、左大臣(○源高明)已下參仗座、被行大嘗會御禊裝束司次第司除目、　十月二日壬子、左大臣已下參入、定行召名直物幷御禊裝束司長官替事、　五日乙卯、大嘗會大祓、(○中略)又被定御禊御前侍從等、　廿六日丙子、天皇禊于東河、(二條末、復日也、)依大嘗會也、左右大臣(○源高明藤原師尹、)參入、

〔日本紀略入花山〕寛和元年九月十四日乙酉、被定大嘗會御禊日時、又有除目、　廿一日壬辰、依大嘗會天皇可禊于東河、仍除目、　十月十四日甲寅、定大嘗會御禊裝束使次第使出居等、　十五日乙卯、今日大嘗會御禊點地、二條末

〔小右記〕寛弘八年九月九日己卯、良道朝臣傳宣耀殿女御御消息云、可奉仕女御代、彼日可出金作檳榔毛車者、金作車云、無世間、又不可忽造、仍答可奉作檳榔車之由了、　十六日丙戌、四條大納言告送云、昨日左相府定奏大嘗會御禊裝束司次第司供奉人等者、

〔本朝世紀〕治暦四年九月十三日壬午、內大臣以下參入、有大嘗會御禊次第使裝束司等除目事、給式部、依可及曉更、御前并諸衞督代定延引、　十月二日辛丑、內大臣以下諸卿參入被定申大嘗會御禊前驅八十二人、卅六人諸衞督代、○中略又權中納言經長以下留仗座、令勘御禊點地日時、　廿五日甲子、有御禊供奉官等小除目事、　廿七日丙寅、有明日御禊召仰事、上卿權中納言俊房、依長元九年例、以內府被行之、又兵庫頭參入同奉之、

〔經信卿記〕治暦四年十月二日、依有障催、午終參內、○中略內府使官人招頭中將、中將參入、奥座上卿被申云、爲定申御禊供奉人々參仕由可被奏達者、中將還來云、早可定申、○中略次內府被渡外座、令鐇藤実、召大外記爲長、爲長參入被仰云、御禊前驅定文等候哉、爲長申候由、上卿仰云可進、爲長稱唯出了、次少外記數基入舊定文於筥、經小庭奉之、副中務書注狀、親王上達部交名一通、四位已下一通交名、次同外記踐置硯於左大辨前退了、次上卿被目左大辨、左大辨取紙染毫、先被定八十二人、依上卿命僕讀中務省注申五位已上歷名、左大辨書之、但上卿被命云、舊定文親王所注四位之上不注無品字、可依此議歟如何、可奉載當時無品親王歟、人々被申云、可被問外記歟、上卿召爲長被問、所申不明、仍使頭中將被奏事旨、仰云、無慥例者不可入者、次又被奏了、先例不定申服者、而長元定服者等可隨何議乎、此事先被問爲長了、中云、寬平之間、有宣旨、服者侯參、此外、無所見者、仰云、可依長元例者、仍相加服者書之、八十二人者、親王、大臣、大納言、中納言、參議、非參議、二

位、三位、四位、五位等也、除留守也、已上一枚、卅六人者、除大臣幷衛府等被定、上一人文諸衛督代、左衛門、右衛門、左兵衛、右兵衛、已上一枚書了、左大臣□□□卿上卿被見之後入筥、三通、使頭中將被奏、留御所、

〔本朝世紀〕寛治元年九月十五日甲子、御禊行事所始日、佛事例有尋、不分明由申了、

〔中右記〕天仁元年六月廿三日壬寅、依有召未時許參殿下、五條○藤原忠實源大納言俊同被參會、仰云、依法王○白河仰、今年大嘗會御禊女御代可出立也、而今日依吉日件事欲沙汰始、雖相待民部卿、今夜有經營事不被來、兩人可相議者、源大納言幷下官○藤原宗忠申云、先尋吉例、萬事可被沙汰候、爰殿下被下度度定文案、披見之處、出車之數甚以不同、但長和五年例尤可為吉例、是御堂入道殿○藤原道長之女依令出立給也者、尤可然、至書定文者猶過此間也、仍內々可沙汰始者、源大納言被退出、　八月朔日戊寅、參東三條殿下、白地渡御也、是依女御代之定也、於東對南面有此事、民部卿、左大將、別當、源中納言、下官、治部卿、左宰相中將、忠右宰相中將、家左大辨、藤宰相參仕、殿下御于簀筵、御直衣、公卿直衣、但一兩人有束帶人、及秉燭其儀始、敷圓座一枚於南廣庇、傍立切燈臺一本、依召右大辨時範參著圓座、衣冠任仰旨書定文、寛弘九年例文之定云々、殿下持件定文給、一々被仰下、書了覽定文、公卿一々見了返上之、給時範朝臣、□不勘日時事也、仍不召陰陽師、但民部卿被申云、召陰陽師萬事可被調始、日次內々可被問事也、其事雖可然、忽依無用意後日可被問者、殿下先內々被仰合云、女御代出車度々例其數不同也、或十四兩、或十二兩、而近代多十兩也、仍申合院之處、御氣色云、今度皇后宮女房出車又可有也、仍只付近代說可有十兩者、但寛治之例十兩、十兩之中糸毛二兩、金作一兩、檳榔七兩也、件女御代之人不吉也、今度雖十兩、頗欲替彼例如何、尤可然之由申了、仍糸毛二兩、金作二兩、檳榔毛六兩、此中女房五兩、童女一兩、可用之由所被定也、深更退出、　九月五日壬子、今夕大嘗會御禊裝束司次第司除目可被行也、仍有催、○中略左大臣命云、今夜式八十二人、陪從卅六人、御前交名所定申也、或又後日定之、但今夜依深更、後日可定申也、裝束司除目可下式部省也、　八日乙卯、予任大嘗會御禊裝束司之後、今日依日次宜可沙汰始萬事也、○中略招陰陽助家榮、次第日時之事

尋問之處、事始明日十四日者、予答云、明日早可被始也、十四日遲々之故也、如此大事、一日モ懈怠甚不便也、就中近代作法、諸國之吏以所濫爲宗也、左中辨許諾、明日可始之由可被仰下諸司旨、下知左中辨了、又付何例可申行之事、以消息尋頭爲房之處、返事云、付後一條院長和五年例可行者、此旨同令左中辨了、　九日丙辰、未刻許參內著仗座、○中略　予仰曰、大嘗會御禊裝束司雜事可被始日時可令勘申、左中辨起座於陣邊仰判官右大史高橋定政令勘、持來勘文、予披見之處、今日申二點、若酉、二頭光平、助家榮連署、召外記令進宮入勘文、以左中辨令內覽攝政殿、○中略　予起座出從敷政門、○中略　大夫史以下陣門南行召使二人前行、入從太政官東門幷東廳東面北戶著座、次官以下入從中戶、○中略　各著座了、○中略　次諸司居饗大膳大炊寮　有盃酌、而造酒司正不參、先例陰陽頭代官勸盃也、仍陰陽助家榮可勸盃由有議定、爰家榮勸盃酌巡流及主典座、任先例日時可勘之由下知家榮、乍在座日時二通勘之、次第司著座日時、可開於出兵庫寮器仗日時、或一通勘之、而長和例二通、於此座勘之、○中略　予披見、○中略　次任勘文可行之由仰下、定政稱唯取宮歸本座、左中辨史生二人某丸可令候行事所由申上、予相揖也、記文可請之由下知大夫史、申上云、請記文時、或主典或史生不定也、但長和時依承平例以史生請取之由見舊記、如何、予答云、可用長和例旨被仰下了、史生何事之有哉、爰史生一人起座書請文給史生、行向外記局受取記文一卷、則持參、○中略　予披見之處、長和五年後一條院記一卷也、自然叶可用之例、外記新書歟、近代本局之中無件記文云云、一覽之後返給了、判官定政以請奏覽次官、次入宮覽予、予可奏由下知、稱唯歸座之後、以件請奏奉辨了、此間下諸司諸國召物宣旨兩三通成上歟、次官辨加判也、次立箸、則拔了立座、從本路歸參仗座、依有平座也、

九月九日御禊事始例、永承承保二代例也、可云吉例歟、○中略　以朝所可爲行事所之由、與左中辨議定了、

十二日、左中辨以下今日著官朝所、萬事沙汰云云、是大嘗會御禊諸國召物、度々例漸及近代、道々細工所中變古議也、仍只任寬治元年例可成宣旨之由、一日頭爲房所示也、依件旨下知左中辨了、十

八日頭下宣旨云、撿非違使二人、尉近實、志行重、可爲御禊行事者、則仰下次官辨了、　廿日撿非違使行重、御禊之頓宮地、從今日慥可令守護之由召仰了、二條末以北、大炊御門末以南、先例從點地日雖令守護、猶御禊之前卅日之外可令守也、是爲用心也、下人之中自然穢物有恐之故也、但至河原不可忌穢物之由雖見天暦御記、末代之事能々爲致用心也、　廿三日、今日內大臣左府所勞替左大辨參仗座、被定申御禊陪從八十二人幷卅六人交名云々、　廿五日、左中辨御禊御輿修理料請奏持來、早可奏下由仰彼辨了、　廿七日、未時許重又不可持來之由含了、其次諸國濟物遲々之由申上、慥可催之旨下知左中辨了、　廿七日、未時許參仗座、是大嘗會御禊點地日時爲令勘申也、移著端座、召次官左中辨長忠朝臣、可勘日時由下知、而申上云、來月三日伐日四日殿下御衰日兩日之間、可隨仰之由陰陽寮申上也、其後忽無日次者、答云、殿下御衰日、猶臨河原點地頗有憚、但伐日如此吉事有其例哉如何、申上云、村上御時大嘗會御禊伐日也、是吉例也、早可用三日由下知、〇中略

今日令左中辨、從清涼殿南至中御門東、至左衞門陣令打丈尺、是河原點地之時爲令慥丈尺也、仍木工寮官人令持丈尺、行事史相共打之、御殿之上藏人沙汰也、至京內者、丈尺顯然也、打定之後、注丈尺給陰陽寮、卜點地之日爲令沙汰也、長和例點地之日雖打丈尺、尙兼日可打定旨陰陽寮所申也、

十月二日戊寅、今日大嘗會御禊裝束司判官以下行向兵庫寮、實撿節旗云云、晚頭主典俊兼持參件注文、　三日己卯、今日御禊點地也、判官史以下行向河原、先令立幄居饗之後、史定政來告事具了由、次官左中辨長忠被來于家中、未刻許、相共連車經二條大路出河原、二條末北邊立幄也、先與次官辨相共乍乘車見廻河原邊、次著幄座、大藏省立五丈幄二字、[illegible]長官以下座也、北一間長官座、南第二間次官座、第三間判官座、[illegible]中央北第二間設勅使座、[illegible]第三四間諸司國司五位以上座、北東上、兩幄南妻在座、主典、史生、官掌、召使等料、北面東上、各有絶席、西幄北第三四間在座、諸司等六位料、東面北上、在五位後、南去五許丈在七丈幄、爲饗所、官厨家奉仕饗、山城國司奉料、[illegible]皆居饗也、次官左中辨長忠朝臣

大夫盛仲加判官座上、是依行裝束使事也、判官史定政、少内記周衡以下各著座了、陰陽寮主計頭道言朝臣（道言弟一人）陰陽頭光平、助家榮來著西座、（與列官對座）勅使右少將宗能朝臣來加西座上、（與次官對座也）辨此間陰陽助家榮依氣色奉勘文、又山城國請風土者二人解文、主典俊兼覽之、見了後尋例、追可下裝束司之由仰下、件知風土者召前庭問郷名、愛宕郡錦織郷吉田村者、（布衣冠）次召繪師左近大夫信貞令圖此所地形、（付圖所圖之、續紙四五枚、件大嘗圖之進、）件繪圖端史定政書郡郷村名、勘文并繪圖主典覽之、予付勅使少將、少將執件勘文繪圖參內、（參御直廬進攝政殿、留御所也、）次召行事撿非違使二人尉秀清忠行、重可掃除之由仰下、各布衣冠、次召木工寮官人令打河原丈尺、此間雨脚頻灑、人々指笠於幄中、長和例點地之日雨下、長官用笠之由見記文、天之與書、自叶吉例歟、人々談此旨有感氣也、及晩頭人々歸、（強不及盃酌也、又先例也、）　八日、召式部錄實行下給文書三通、御禊八十二人卌六人諸衛督代、先例爲行列次第下式部者也、　十日、子刻被仰下事、木工寮申、因准前例賜榮爵二人、以其叙料造進大嘗會御禊河原莚屋五字事、仰、任寬治例一人依請、則下左中辨了、　十四日庚寅、今日御禊幄所分日也、仍先次官左中辨以下行向河原、（其座如點地日）未時許、著束帶行向川原、著幄座、（山城國司今日可儲饗也、而近代國事不叶、仍不儲之由申請、頗以奇怪也、但強又不可闕也、）相尋次官以下行事撿非違使等、召木工寮令打丈尺、分配幄所、了先御禊幄御膳幄所丈尺打定、了立札之後他幄等相分、又御井所三所相占神祇官令申御卜、覽長官、三所乙卜合、可用件所之由下知、了返給御卜、神祇官御井祭云々、召繪師左近大夫信貞、令施地形風流、此處之體鴨水流相分、西方有小流、塞件流水可令合流東大河之由仰撿非違使等了、諸國人夫如員不進不便也、可責催由所下知也、　十七日、害々著直衣行向河原、見廻御所、左中辨木工頭大夫等來會、諸國人夫不足、事及闕怠、令撿非違使季清奏院、從院人夫等下給、終日沙汰、　十八日甲午、午時許、著束帶行向川原、依御禊御所裝束始也、而人夫全不叶、以消息申院之處、撿非違使等皆以差進、各以京條人夫可令掃除者、行事左中辨大夫共懸始御簾、舗御座、木工寮莚屋御所今朝立始、又御井令堀始、（御卜之所也、）終日萬事沙汰、入夜歸、前後次第司長

官被奏由簿闕云々、今日始御覽御馬、右少將宗能候御前、先寮御馬、次又御禊出馬同御覽也、　十九日、召外記忠政、明日行事召仰之間、六陣次將佐等、必可參勤之由可催廻之狀召仰了、巳時許、密々著直衣行向河原見御裝束、懈怠事等相催、從院撿非違使等皆遣給也、爲掃除也、又雜役車五十兩給也、令運白砂、終日沙汰、臨夜陰歸家、　廿日丙申、早旦密々著直衣行向川原、沙汰懈怠事等、大略令御裝束、晚頭歸、今夕依可有召仰、參內之次參高陽院、女御代令出立給間事等不審也、從院中將殿〇藤原忠通御物具等被奉、誠以華麗也、可爲召仰由申請殿下了、殿下只今令參院之間、重不可申案內之由有其仰、今藏人可奏也、亥時許參仗座、諸衞佐多以不參、雖相待及深更、俄以申障也、移著端座、令內豎召諸衞、左少將忠宗、右少將宗能朝臣、左衞門尉平盛國等、入從日華門列立軒廊南庭、西上北面、先問誰等、各稱官名、予北面次仰云、明日之午時留依大嘗會御禊可有行事、長和五年之跡之まゝに候へ、此詞不知先例、今案所仰也、稱唯退出了、

京中行幸六衞府佐、城外召加馬寮也、先例度々此御禊召六府被仰下也、仍雖相催六府、三府已不參也、

御禊召仰不撰日次、只前之日仰下也、仍今日仰之、是先例也、或謂前日仰之云云、

〔續古事談〕二臣節 鳥羽院大嘗會ノ御禊ニ、內大臣〇藤原雅實俄ニ服暇ニ成テ、一大納言俊明節下ヲツトムベキヨシ被仰ケルヲ、江帥モリキヽテ、五代太政大臣ノ子孫ナル右大將〇藤原家忠ヲオキテ、受領ヘタル民部卿コノ事ヲツトム、心エズトヒトリゴチケルヲ、白川院キカセ給テ、ゲニトヤ覺シメシケン、右大將ニ改メ仰ラレケリ、江帥ニ、マコトニサヤ云ハレケルカト人間ケレバ、タシカニ覺エズ、藏人辨顯隆物イヒアシキ人ナリトナムイラヘケル、

〔台記〕康治元年八月七日丁卯、酉刻頭辨資信朝臣來傳執政〇藤原忠通命云、女御代可出立者、報云、他人不候者非此限、若他可然人候者可被用、件人余養女、公能卿女、〇近衞后多子母故俊忠卿女、　九日己巳、一

昨日(七日)以札口執柄云、女御代事、只今度許者無面目、向後如本意(爲女御)可候者神妙事也、被報云、早可申院(法皇)、仍今日申院(書狀)有御承諾之氣(事、向後)又仰云、今度他人全無可供奉之人、早可出立也、　十三日癸酉、定女御代雜事(大炊御門高藏宅)、親隆(左衞門權佐)書定文、右大將、權大納言(宗輔)、新中納言(公能)、宰相中將(經定)來會、讀長元九年定文、依爲吉例也、諸事如長元、但長元女房六十四人、童女八人、庇絲毛二兩、此事甚奢麗、因尋天仁元年之例、庇絲毛一兩、女房二十人、童女四人、今度於此事者依天仁之例、昨日知信朝臣親隆之間、誰人可書定文乎事申院、(今度事爲事可申院之故也、院者法皇)親隆可能之由有仰、今度女御代事仰親隆委令記、余竊見經史之間、無他暇之故也、○(中略)　後日見土御門記、長元九年定已後有議定、檳榔五兩之由所見也、料知女房廿人歟、　九月一日庚寅、大嘗會御禊定云々、　十月二日辛酉、今日御禊點地云々、少將師仲朝臣爲勅使、　八日丁卯、女御代來十四日可被沙汰之由仰親隆、申了用長治二年十二月十四日待賢門著袴例也、　十四日癸酉、酉刻左衞門權佐親隆召主計助泰親使勘申著袴日時、時酉、又申云、今日可有著裳者可勘申乎、待賢門院入內日有著裳被勘日時也、余對曰、如長元九年經頼記者、著裳密儀乎、不可有日時勘文、加之今日同時可著、更不可勘者、　廿一日庚辰、藏人來云、先日所召女騎馬廿四日可御覽、早朝可奉也、攝政仰云云、　廿五日甲申、御禊次第作了、但不淸書、少々可直改所等尙在、

〔本朝世紀〕寬治元年九月七日丙辰、午後左大臣以下參仗座、被定行大嘗會御禊日時裝束司次第使等除目、留守參議以下、(十二月廿二日庚子)　十三日壬戌、今日藏人辨爲房仰云、大嘗會御禊、節下大臣一上被奉仕時、尙可被下宣旨歟如何、次大臣及大納言奉仕之時被下宣旨、一上被奉仕之時被下宣旨之條、不分明之由申了、　十五日甲子、御禊裝束司行事所始也、仍長官以下參入省東廊、　廿七日丙子、治部卿(伊房)參入、被定大嘗會御禊點地日時、(十月二十日)　十一次左大臣以下參入、被定申御禊供奉五位以上(十八)(二人、卅六人、)諸衞督代等、此間大臣召師平仰云、近代兼衞府督公卿、前後次第司長官之外、猶不載卅六人

御前內、但可用長和五年例之由、前日有仰、彼年定文不候之由可申殿下者、即以此由申殿下、仰云、長和五年右大將(實實)、右衛門督賴宗、入御前定文之由、見彼年記、早可依件例者、仍今度左衛門督(家忠)、左兵衛督(宗賢)被入了、定文等留御前、追爲下給裝束司也、　廿八日丁丑、今日諸卿於攝政殿下被定申主上可遷御大膳職可有方角忌否事、　十月十二日庚寅、御禊點地也、(三條末)　裝束司長官伊房、辨基綱以下向河原行事、勅使右少將藤有家朝臣也、今日攝政殿下御覽大膳職、主上可遷御之故也、　十六日甲午、天皇從堀河院遷幸大膳職、來廿二日依可有大嘗會御禊也、晩頭內大臣參入、先有召仰事、次被奏實所可渡御日時、(今日亥刻)　次右大臣以下諸卿參入、遷御之後被下吉書、亥刻實所渡御、於御竈神者不渡御有先例、　十七日乙未、內大臣已下參入、有臨時除目事、御禊供奉官等也、　廿一日己亥、治部卿(伊房)參入、有明日御禊召仰事、以四府仰云、今日雖凶會日、依無當日召仰例被行之、次召外記被仰御節下鈴奏少納言事、(節下公實、鈴知家、)

〔本朝世紀〕康治元年八月十三日癸酉、是日於內大臣家、(○藤原賴長)被定大嘗會御禊女御代事、　九月一日庚寅、權大納言源雅定卿、權中納言藤原重通卿、參議同公行卿、參仗座被定大嘗會御禊日時、又有同次第司裝束司等除目、又被定留守、(御禊十月廿六日乙酉)　十七日丙午、內大臣參仗座、被定申大嘗會御禊入十二人卌六人御前幷諸衛督代事、次有公卿分配事、參議公行卿奏前駈定文、　十月二日辛酉、大嘗會御禊頓宮點地也、仍裝束司長官宗能卿、次官資信朝臣以下參仕、左近少將源師仲爲勅使、　廿六日乙酉、今日大嘗會御禊也、節下內大臣、少納言源師敎、次第司御前長官權中納言藤原公敎卿、同御後長官參議源季成卿、其外供奉公卿權大納言源雅定卿、藤原實能卿、同伊通卿、權中納言藤宗能卿、同成通卿、同家成卿、同重通卿、同公能卿、參議同公行卿、同公隆朝臣、同經定朝臣、非參議正三位同清隆卿、從三位左近中將同忠雅卿等供奉、皆用唐鞍、以上總守藤原季兼朝臣爲左衛門督代、以越中守源資賢朝臣爲右衛門督代、以散位藤原經雅朝臣爲左兵衛督代、以播磨介同忠兼朝臣爲右兵衛

督代皆帶弓箭、但不相具隨身、內大臣息女爲女御代、〈實權中納言公能卿女也〉今日供奉五位已上皆倭鞍付杏葉、節下幷次第司之外、帶衛府公卿皆帶弓箭、藏人勘解由次官藤原光房、藏人治部權少輔平範家、著緋闕腋、在入藏人之列、未二刻行鼓初動、乘輿出御、〈天皇（近衞）著位袍、御鳳輦、皇太后宮同輿、〉節下內大臣先出自御書所門著標、少納言源師教、少外記中原安俊、權少外記淸原景兼、相從車駕、行列一如鹵簿圖、但無警蹕、鈴奏等出自待賢門、自宮城東大路南行、至二條大路東行、法皇〈〇鳥羽〉幷上皇〈〇崇德〉於二條室町御棧敷有御見物、〈天仁保安二代御禊之時、白河上皇於此所有御見物事、今又如此、已及三代、〉皇后宮〈〇崇德后聖子〉幷暲子內親王、前齋院統子內親王同御見物事、女房等出紅袖、又宇治入道大相國同被參入、御棧敷東邊設五丈纐纈幄、爲殿上人座、侍臣等皆著衣冠、抑兵庫寮節旗渡御棧敷前之間、持旗者所騎馬甚旋轉、忽伏地不動、節旗已伏地、兵庫頭藤原成俊招下部等令扶持之、內大臣數刻扣馬、頗奇代之例也、又次第司御後次官兵部少輔高階忠能所著袍色薄紅梅色也、非緋衫色歟、參議公隆朝臣於二條油小路邊落馬、不遂供奉、攝政前大相國〈〇藤原忠實〉乘車自閑路被參頓宮、撿故事、貞觀外祖忠仁公騎馬供奉、爾來連綿不絕、今度事又有先例云云、申刻至河原頓宮、參議已上下馬列立西幔門外、裝束司長官權中納言宗能卿以下列立其南邊、輿欲入幔門之間、神祇官奉御麻、節下內大臣召外記令打靜障鼓、先御御膳幄、酉一刻駕腰輿移御御禊幄、祓禊之儀一如式、事了還御御膳幄、內大臣候御前、山城獻物卅棒、內大臣問之、各稱物名、其後事皆如代代、事了還御、

〔兵範記〕仁安元年十月十四日甲申、晩頭參內、御禊裝束司次官假奉行之間、可被勘下點地日時之故也、〇中略 今度權右少辨爲親補裝束司之條、希代例云云、古今多正左中辨兼行、保安元年右少辨顯頼奉行之外、無近例云云、　十五日乙酉、御禊點地也、辰刻許向河原、先是行事撿非違使源爲經、志中原章貞、臨地頭令掃除二條以北、大藏省立五丈幄二宇、〈子午妻宇合〉東幄北第一間敷長官座半帖、〈南向〉座後引幔立莚、第二間敷次官座、〈西向〉第三間敷判官主典座、南幄中

央第二間敷勅使近將座、西幄第三四間敷諸司五位以上座、（北上西面）第五間南妻敷主典辨史生官掌召使等座、（東上北面）長官次官判官座、及西第三四間座等居饗、但不居勅使座、南去五許丈、又立七丈幄為饗所、（東西妻）官厨家備饗、山城國奉翦秣云云、（○中略）上卿遲參之間、以判官史令申事具由、此間陰陽頭賀茂在憲朝臣、助安倍泰親朝臣、臨地頭打丈尺奉勘文、寮官引率木工寮以丈尺杖隨命奉仕之、先打杭引繩、此間使歸來、長官已參給云云、次長官自南方被參來、（駕毛車）先乍車被見廻、是天仁例也、下官依上宣連車扈從、次幄東邊留車下車、長官被著北座、下官著第二間座、（○中略）在憲朝臣成勘文付主典、次主典入覽筥覽長官、（不被返下留座）次主典以山城國諸士風者交名又覽長官、（入筥不被返下如何）次諸士風者召東庭、（一人布衣、冠著老懸、一人著布衣烏帽子）判官史問之、語云、愛宕郡錦織鄕吉田村、兩人退入、次召繪師、民部大夫宗茂朝臣參入東庭、仰繪圖事、（判官仰之）還入即圖繪持參、（續紙五六枚、於國所奉圖之）判官史取之、繪圖端注郡鄕村名、次令主典覽長官、（天仁勘文繪圖等一度覽之、今主典兩度持參、不可為後例歟）次長官以勘文并繪圖被付勅使、受之退去參內了、（可進攝政留中御所云云）次陰陽寮臨頓宮跡所打丈尺、立札於四方指榊等、郡點地東西四十丈、南北四十五丈、次召撿非違使令判官史仰云、今日以後點地內外早掃除汗穢物并牛馬飼止亂入者、次長官被尋問次第日次、在憲申云、御裝束始來廿四日庚寅、幄幔引付同廿一日者、長官被仰大夫史了、又下知饗饌可儲之由了、次長官以下起座退去、無盃酌事、今日山城國司不參、撿非違使府生奉忠為拒捍使參入、奉仕雜事也、

陰陽寮

勘申點定大嘗會御禊地事

乙方卯與辰之間（二條大路北邊、鴨川西邊、）

自御在所東行八百卅丈（京內六百九十九丈、京外百卅一丈）

自御在所南行二百六丈

右自待賢門末鴨川西邊、至于郁芳門北小路是卯地、自郁芳門北小路、至于三條大路北小路是乙地
內也、仍勘申如件、

仁安元年十月十五日

陰陽師菅野宗成
少屬大中臣知貞
少允大中臣季倫
大舍人頭兼助安部朝臣泰親
主計頭兼備中權介賀茂朝臣在憲 、

二條大路末南北共爲吉方由、兼日奏聞、其中依天仁吉例、被點地於北邊也、自二條末以北十九丈限
點地南了、御在所可當冷泉末程云云、
次向行事所、開兵庫寮、爲撿知器仗也、此事去上旬被定御禊雜事之時、被勘日時、畢於待賢門下車、主
水司正廳爲行事所也、入東門著西壁下座、大夫史行事史生三四人官掌爲宗等候座、大夫史云、兵庫
寮顛倒無實、以後官裝束司倉宿納伎器杖等、運渡此行事所、可令撿知者、卽仰寮官運寄也、
先節旗一流、裁縫茜絹、差兩面緣、但無手有足、首上兩面、在日形月形、其下圖龍形像、成文口、件龍口形
方向日也、月形方背月也云云、而今龍兩方共向日月形、頗不審、雖尋問彼大夫、無披陳詞、重可訪故人
歟、首在鉾、又付棹、長二丈許歟、
次鉦鼓一面、次行鼓一面、各在臺、
件物等多以破損、可修理云云、行事官等仰寮官、可令注申損色由下知了、

〔兵範記〕仁安三年七月卅日己丑、參皇太后宮大夫亭、實定 來十月大嘗會御禊女御代可被出立事、御
報承了、　九月七日乙丑、參內、官外記五位六位皆祗候、此間權大納言定房卿、參議宮內卿成賴卿、參
著仗座、次藏人治部少輔兼光仰可令勘申行幸日時由、○中略

陰陽寮

擇申大嘗會御禊日時

十月廿一日己酉

裝束鼓打時寅一二點

列陣鼓打時卯二點

進鼓打時巳二點

行鼓打時午二點(御出時)

御出南門

御禊時申二點

還御時戌二點

仁安三年九月七日(○官署名略)

八日丙寅、向御禊所地河原、(○中略)先議定方角、在憲朝臣云、准寛治例商量今所之間、彼年自大膳職計定御禊所、今度自大内清涼殿正方角、當三條以北程云云、仍姉小路末之間東西南北、打丈尺引繩議定了、但可對御所東西流、東小屋十餘家可令壞立、又西邊小屋門可令壞立、由下知了、　十五日癸酉、晩頭裝束司長官權大納言賫長卿參著仗座、召次官權右中辨信範被仰云、大嘗會御禊裝束司雜事令勘申日時、(○中略)次史生盛康成上宣旨等、

一紙　加賀國舂米百石可進上事

一紙　宮内食二十口百度毎日料

一紙　同省酒二斗同料

一紙　大膳職　廿前

已上下判官加判返下了〇中略

大嘗會御禊御裝束司

請雜物事

絹參佰匹　手作布佰伍拾段

信濃布漆佰段　米參佰斛

筵佰枚　茜佰伍拾斤

紫草佰斤　鐵貳佰挺

韓櫃拾貳合

右雜物所請如件

仁安三年九月十五日

廿日戊寅、主殿寮申請、御禊頓宮御裝束班幔六十帖用途料請奏、內覽殿下〇藤原忠隆 又申長官下大夫史了、仰云、年料准分充給之、內藏寮申請御禊用途米事同寮又申同料兩面三匹、朱漆唐櫃十二合事仰、已上依請、件宣旨三通藏人少輔宣下長官、長官下給大官信範、信範下知官了、廿七日乙酉、參裝束司行事所、大膳職殿 大夫史隆職宿禰、判官史廣盛、史生守康以下四五人、官掌爲宗等參著、撿知御禊御裝束具、

御膳幷御禊幄覆七帖、輕幄覆錦 骨百支帳、骨幷覆橫樃毛、同帷六帖、綾 大宋屛風、大床子面地鋪、御倚子覆、如此物猶巨多、不遑記錄、其中古弊破損物者可調替、尋常物者、或修理、或不可調替之由議定返納了、兵庫寮器仗類幷飾旗等同實撿、

作御裝束具、依損否定充用途、下知行事官了、任其色數被宣旨、可召諸國之故也、廿九日丁亥、兵庫寮申請被宣下御禊行事節下旗持、同綱張以下寮掌十一人裝束、幷鼓鉦各一面、駒形二脚、修理用途

料、以官使令催、　十月六日甲午、下官大夫史相議、開出兵庫寮器仗節旗一旒、鉦鼓一面、小鼓一面、懸鈞形、件物等依寮庫顛倒、近來宿納官厨家、今日儀任日時勘文、(去月廿七日勘之、未二點、)遣行事官欲令開出之間、寮官存近例持參、仍於此行事所可撿知也、旗以下或加修補可新調、由仰寮官了、任例可注進支度云云、旗以下幷寮官供奉輩裝束、任例可致沙汰、由下知本寮了、(○中略)裝束司申請御禊行幸御輿修理用途、請奏内覽了、下長官藤中納言了、仰依請、即被返下、又下知官了、兵庫寮要劇田所課山城國司信家功、宛河原禊所反橋幷黑木等、無先例由事同宣下、長官仰令免除、即被返下、又下知官了、同申請行幸供奉寮官裝束料、募寮納物未濟、宛諸國可被催給由重請奏、仰依請、晩頭退出、　十二日庚子、今日藤中納言宣、奉勅、下官傳宣大嘗會御禊行幸供奉諸司諸衞官人等、無故不勤仕輩宜解却見任、即下大夫史、　十七日乙巳、申刻於河原御禊所地幔幄處分也、(○中略)祭了立木綿榊覆薦、次召撿非違使府生友忠、可守護御井之由、又掃除山水、畢以諸國人夫殊可令勤仕由被召仰了、次長官以下起座分散、

主水司

注進今月廿一日御禊御井事

一所卜丙合

一所卜乙下合

一所卜不合

右依官宣旨注進如例

仁安三年十月十七日(○中略)

御禊行幸風雨難御祈、日來有議定、被始行事等、廿二社奉幣次被申辭別、又石清水、賀茂、春日、爲殿下御沙汰奉幣料被祈申、仰御持僧等殊令祈念申、諸社仁王講申行之、　十八日丙午、裝束司有御禊道巡撿事、上卿不被參、(○中略)左少史廣盛以下行事官等引率、閑院内裏二條面、騎馬通之、　十九日丁未、

有行幸召仰事、藏人少輔宣下、藤中納言令外記召諸衞、〈○中略〉兵庫寮相加五衞府各被召仰、件召仰近代前日被仰之、寛治同前日仰之、今度併被准行彼例之處、於此召仰今日宣下、上卿職事父子議定尤不審、今日有女騎料御馬御覽事、藏人少輔申行、清涼殿東庇下簾第三間敷御座、如常、〈座圖〉左近少將修範朝臣候御前簀子、其儀如常、頭中將不被候尤非也、御馬用途都卅餘匹、其中殿下太政大臣、左大臣、內大臣中召十匹、其殘廿餘匹召左右寮、御馬乘等祗候如常、是御後掌侍以下卅餘人騎用料也、移鞍等皆調儲藏人所了、　廿日戊申、早旦參院、申明日雜事、〈○中略〉次向河原頓宮、木工寮立葺屋五字、一字棟合御膳幄、一字檐合御禊幄、一字爲日攝政殿休幕之上、募成功令造進云云、

史生官掌以下供奉諸司各職掌勤行、每事撿知令致沙汰、其儀周廻東西四十丈、南北四十五丈爲限、南西北三面引廻紺大幔爲大垣、西南角北去十七丈爲西門、廣三丈、同西去三丈立紺幔爲屏、從同坤角東去十一丈爲南門、廣三丈、南去三丈引同幔爲屏、從南大垣北去十七丈、臨河東向立五間葺屋二字爲御禊幄、

合檐子午爲妻、其內板敷東面敷緣二枚、葺屋半葺檜皮、其上葺苫覆、纐纈斑幔、東幄中央間立百支帳、蓋葺檳榔、以紅梅色絹爲裏、其廻懸麴塵立涌雲綾帷六帖、〈先例或用小葵文綾云云、每幅有紐、南面□北垂帳、東面褰帷、廻引帳額、〉其內敷滿長筵、其上敷紫織物毯代、〈四幅小葵文付打裏〉其上立平文大床子二脚、其上敷高麗端二枚、其上敷東京錦茵、大床子前敷赤地錦毯代、〈四幅、四角置金銅犀形鎮子、〉其上敷東京錦茵、〈御禊之時御座也〉百支帳南西北立廻大宋御屏風六帖、其內百支帳北版敷、兩面緣疊一枚、〈東西行〉爲攝政御座、西幄同敷滿長筵、其內百支帳坤角〈南面〉一立廻御屏風、其中立赤漆小倚子、〈北面〉設褰器所、兩幄南西北三面、去砌丈許建廻纐纈幔、〈三面〉〈引滿十五帖、四面有屏風、件幔借用白川殿、唐綾二色、押綾文、在錦緣、美麗過差物也、事被用官行事所、葱花被押金薄、〉西面幔門二丈爲屏、

御禊幄西去三丈、北去十丈建五間葺屋二字、合檐子午妻、如巽幄爲御膳幄、其內敷板、東西有緣覆表葺等如禊幄、但南北妻懸纐纈、簷垂四面懸御簾、其內敷薦、其上敷長筵、兩幄中央引隔高松軟障五帖、

請藏人所、在閑林坊御倉、以東爲東幄、敷滿兩面地敷一帖、（長四丈許、弘一丈□、內藏司物敷、被付條、）□南第三間（中央間）立錦輕幄、其中敷赤地唐錦毯代、其上立平文大倚子、其上敷繧繝緣半帖、其上敷白織物褥、以青織物覆御倚子、御倚子前置御承足、裏白織物、其左右立平文置物机、（在高麗面、四角垂緒末濃緂等、）輕幄前置采女草墪、輕幄北間敷繧繝緣帖二枚、其上敷東京錦茵、爲平敷御座、（東面）其前居繪火桶、積炭、副火箸、其北敷兩面緣帖一枚、爲攝政御座、南妻切二間、北妻切二間簾中、副立屏風各一帖、西幄南第二間當輕幄坤、立御屏風二帖、其內北向立少障子、設褻器所、件幄皆敷滿長筵、南西北三面副簾中曳纐纈幔五帖、件幔同借用白川殿、敷緣緣帖八枚、爲女房候所、兩幄外南西北三面引廻斑幔、如御禊幄、（件幔十餘帖、又申白川殿、）御禊幄南去五丈、西去五丈立五間幄、爲神祇官候所、四面引紺幔、巽角庭中立山城國進黑木案二脚、置路次諸社幣物、又公卿以下祓物設之、御膳幄南去五丈立七間紺幄一宇、爲公卿幄、（東妻當御所中央、）其四面各去五尺立屏風、（北面有幔門、）其南去二丈立七間幄一宇、爲御前陪從座、（東妻當公卿幄第四間、）四面廻紺幔□□公卿幄西去二丈立二間幄、爲胡瓶幄、御膳幄西去二丈五尺、立七間幄二宇、爲內侍以下女房候所、（南北妻、）四面懸幔爲御膳幄、北去六丈立七間幄一宇、爲殿上人幄、（東西妻、東妻當御座所、先例五間、今度七間、）四面引幔、殿上幄西去二丈、立七間幄、爲御藥陪從并御厨子所女官幄、西去二丈、立五間幄、爲進物所典藥寮幄、西去七丈、進物所幄去五丈、立七間幄、爲內膳造酒主水等寮司候所、又立五間弘幄、爲御輿宿、四面引幔、御輿宿北去二丈堀御井、卜合御井、西門內南去五丈、立七間幄、爲大膳候所、

西門內東去十丈南入五丈、立五間幄、爲公卿休息所、（當大膳幄東、四面引幔、）西門外西去四丈南行五丈、立七間幄、爲節下大臣候所、西門外西去四丈北折去五丈、立七間幄、爲女騎休息所、南門內東去五丈、立五間幄、爲裝束司候所、大幔西南角各去五丈、立七間幄、爲次第司候所、大幔北乾角東去十丈、立五間葺屋、爲攝政休息所、覆班幔、如御在所、諸司諸衞存例、大幔外西門西夾路左右立休幄、諸衞立幡如例、

〔玉海〕壽永元年七月六日甲戌、藏人兵部權少輔定長爲院（○後白河）御使來、余招簾前謁之、傳仰旨云、大嘗

會御禊〇安徳同輿之料、前齋宮〇亮子内親王可有立后、院御女而今月難叶、八月近例如何、兼又大嘗會御禊日次廿一日之由注申、一條院二條院等例也、晦日白川院云云如何、又大藏省申云、御禊大嘗會等爲大事、一切無省納物、仍以諸國齋王頓給料三年一請是也欲宛之、雖無例爲省當時煩也云云、余申云、立后月八月雖無例全不可替、御禊日廿一日可宜、被定晦日之間、若有非常之難者後日如何、二條院例强不可被忌、仍一條院已最吉也、大藏省申事左右可在勅定、但諸國難濟納物者可被加譴責歟、近年來競起、國土不可安堵、而被返付頓給料、定爲諸國之愁歟、省申旨又可有哀憐、只可在聖斷者、其後談雜事、小時退出了、其後基輔語云、大藏省事一日於院所承也、泰經申云、東北兩國納物之分、以不塞之國國頓給料可被省之由所申也云云者、而如定長仰詞者已無此狀、只依諸國難濟有此議之由也、不仰其詮之條如何、

〔吉記〕壽永元年九月五日癸酉、今日大嘗會御禊定也、　十四日壬午、今日大嘗會御禊侍從代定也、上卿中御門大納言宗家参議修理大夫經盛卿書之、始勤如此役歟、甚有興事也、依闕如被責催云云、　廿日戊子、藏人大輔示送云、御禊料、主上〇安徳御帶自蓮華王院寶藏春宮御物中被取出云云、

〔山槐記〕元暦元年九月九日乙未、昨日藏人右衞門權佐定長來語曰、大嘗會御禊〇後鳥羽院〇後白河御棧敷可造進之由被仰三位入道俊盛者、予曰此事恒例也、尤可然、但彼禪門〇藤原俊盛有知行三箇國之由、然而於伊賀者武士知行、有名無實云云、常陸調物猶不輸、丹波爲主基國、不可有他事事歟、近年天下衰弊、此造營旁不便歟、壞東三條北築垣有爲棧敷事之樣所覺悟也、閑院當時雖爲皇居、御禊之期可幸大内也、閑院副西北築垣有卯酉已關屋、壞北築垣爲御棧敷有先跡、無人煩歟、此事内内可被申行歟、先以稱善歟者、今夕送書曰、昨日内内申旨叶法皇叡慮、彼御記可勘給者、注寛和二年例了、十月廿三日御禊也、壞東三條北築垣宮達見物給云云、是雖非法皇御見物、何不被准據哉、又同日法皇圓融院御棧敷、其所在閑院北築垣下、又立平張等、僧正寛朝權僧正最禪山座主儲在所、令見其僧正等云云、是壞築

垣事雖不備、以閑院爲御棧敷之例如此、圓融法皇令奉見一條院御禊給、共爲無雙之吉例、如昨日申狀有沙汰者、且叶先跡、且叶時務歟之由答了、此旨定奏法皇歟、

後日又引見治暦土御門右府記之處、陽明院破却閑院北築垣北面新造孫廂、構軒檻施翠簾前鋪白砂、榜曳斑幔、女房透出衣裳、照耀炳灼、當時男女宮達同於此中見物給云云、

後日相尋右佐之處、如予申旨有沙汰者、予爲世爲君爲人非無忠哉、

〔明月記〕建暦元年九月廿五日、職事宗宣奉行、催御禊行幸、〇順德 申障了、　十月十八日、左大辨宣房奉書云、少將〇定家子藤原爲家 可獻七條院策功車、車未調出、力不及由答了、内内語賴資、猶勸院御方出車、未聞殿上人車、出車之時以事宜車爲策功車之例、縱依新儀、五位殿上人雖獻之、諸大夫之輩尤可勸歟、

十九日、今夜行幸大内云云、又御覽女騎馬、少將爲毛付、　廿一日、自院有召馳參、以清範仰云、今度御膳幄御禊幄次將可陣由被仰了、其陣之間爲家進退何樣致訓乎、申云、全所見幷所存不候、如舊記僅所見及、須引陣、而次將不候、仍不陣之由小小雖記之、儲引陣儀總不見及之、但如新儀式者、御禊幄陣南北立陣之由有之、就之條條只可候幄南北歟、於御膳幄者、已爲尋常階前、大略可模例儀歟、此外所有者、清範申此由、重仰云、此事聊有御所見、但不及被仰委旨、御禊幄左東上南面、右東上北面陣也、於御膳幄可立胡床、仍不可有示、且爲被仰含此由所遣召也、恐悅不知所謝由申之、即退出、少將爲行幸召仰、束帶細大刀令參内、〇中略 入夜裝束物具等送少將宿所、宣華殿 闕腋袍巡方螺鈿野劍虎皮尻鞘 紫緂平緒雖菊紅葉 平胡籙青地錦丸緒 弓卷青薄樣、筒同青勾差薄樣、 エビゾメウチノ半臂、子リヌキノシロキ表袴例下襲、抑御禊行幸不可著染裝束之由、古賢當時人人多稱之、然而代代毎度禁色人皆著之、嘉永元年、故殿月輪(藤原兼實)令著給、 仍少年物此半臂表袴又非異染色、不可有難之由所存也、又申左府亞相、　廿三日、未時許、清範奉書云、昨日〇御禊當日少將弓箭卷青紙恒不見如何、可申所存、請文云、弓箭青紙事畏承候了、後法性寺禪閤招客之次、少年衛府弓箭有卷色色樺事、於紅梅色者、尋常所用也、白紙幷紅梅紙皆雖爲樺由、紅梅紙如十一月已

後梅花得境之時殊相應、至于如秋冬者、著青薄様、尤有其便、當初多用之、當時無之由承候之時、若貴賤差別可候哉之由、卿相伺候之處、其條不可依人、只少年者可然之由候キ、此事非一度雖承、猶依不審今度申九條大納言候之處、其事當初同聞之、又見彼御記之由候キ、仍少年者居過分之職候、今度殊依結構之思用此說候之處、今被仰下候之間、殊恐思給歟、得御意可令披露給歟、又同奉書云、昨日次將多不引陣由聞食、少將在其中云云、何様事乎、申云、御禊幄引陣候了、至于御膳幄之胡床不足、須令立加候之處、已及河頭之間、不能陣列之由所申候也、今朝歸參內裏候了、仍不尋承委聞、雨條御問尤爲恐、　廿五日、參大納言殿、被仰御禊間事、頓宮公卿列事、先例不同、仍於內裏對面之次申合博陸、幔內外代代例不同如何、被答云、內外共有例、但於內者已希歟、外叶其理歟、所存如此由申、又於頓宮示合中納言忠房卿、答云、供奉窮屈、自他無承之間、先入公卿幄休息、入御之間立出幔內、雖得當時便、先例於內者大略一度長元歟、天仁又雖聞內由、其年記不見之、於外者例多之上、頗爲可然說歟、所存又如此、仍相共立外、定通範朝家衡等同立、親兼不見等 師經卿又來云、元曆相國雖聞內由、已爲外儀不可背者、卽列立、通光卿下馬遙步過不及問答入內立、定通見之褰幔直入、二人立內了、又雜色事問忠房卿、答云、不可具雜色、而馬副六人悉持物、不空手之間、還御及晴者、無可取松明者、仍以雜色可令取、而及晴假召加雜色者、頗無其謂、仍象所相具也、馬副有餘分者、不可有此事歟者、於我者本自不具雜色、廿六日、參左大臣殿三條坊門、申昨日幔內外列立事、宇治左府御記云、宗輔以下立幔內、問其事、天仁元右府立內、仍存其儀由答之、何依先達之失錯、忘朝廷之禮乎由被難、宗輔閉口、以之思之尤可爲外儀歟者、　二年十月十一日、成寶僧正依御禊御祈、率二口僧可參籠賀茂之由蒙綸言、仍可出代官由觸送云云、滿座相儀他人定通口歟、尤可用代官由也、許之、　十一月一日、左近大夫清範來臨相逢、依仰來問云云、節下大臣手振不著半臂之由、論義之時所申出也、其間事委可尋問云云、予云、總件問事、論義以前以後共以無沙汰、僅所見出卽申了、所詮小野右府長和元記、載天慶之例、延久土右記、載同例、康

治宇治記、注裝束色目、手振裝束無半臂、依之所申也、又云、此御一門之中、儲所被著有其例乎、於其條者分明不覺悟之由陳了、此事依不達申左大臣殿、一日已被著之云云御返事云、此事尤可然、彼日懸參入不申出此事、又依遲參不見手振、忿忙之日、每事不可被仰之人尤可申事也、愚鈍之性、爲恥無極、重申此由、又有御返事、(〇中略)手振事依經營多、一向示付前內府、其身其裝束偏自彼家出立、不來出立所、去年彼大臣節下、依予教訓不令著半臂、事今年可調半臂哉、於建禮門前雖來會、愚眼全不顧見、愚鈍之至也者、

〔玉蘂〕建曆元年十月十五日癸巳、御禊求出了、仍付大納言令進覽院、(〇後鳥羽)了、歸來語云、御棧敷ニハ今度太政大臣(〇藤原家實)幷亞相可候之由有仰云云、衣冠可持笏哉否被尋問之、予云、尤可被持笏也、衣冠之時引刷事ニハ必持笏定事也、況於御禊御棧敷哉、不可及異議之由令答了、　十九日丁酉、今日參內以前藏人勘解由次官宗宣來、傳院宣云、大嘗會御禊御膳御禊等幄、近衞次將引陣事、儀式、新儀式、西宮、北山舊記等皆有之、而近年自寬治以來無此儀、縱雖無先蹤、如此大禮尤可立陣也、諸節會皆如此、況大儀哉、早可然事也、早兼日可被召仰次將等也者、予申云、尤可被召仰事候、上古例已明鏡候、近代自然懈怠歟、寬治ニモ有沙汰、令見及、口御禊御膳幄共可引陣之由可召仰次將者、此次宗宣談云、此事被仰關白幷大相國之處、殿下令申給云、誠尤可被興行事候、如用途雖叶事ハサテモ候、如此禮自然懈怠不可說候、式文顯然之上、舊例如此、御禊御膳共可候事也云云、相國申云、尤可候也、但御膳幄陣事ハ舊記ニ見及候、御禊幄不可然歟、式文ニ候バ不及左右、未見及候也云云、此申狀奇怪也、式文顯然之上、舊記皆有此事、何申御禊幄不然之由哉、雖無例尤可有沙汰事也、可謂奇怪、可謂奇怪、又云、御禊行幸出御刻限午二點ト宗平朝臣勘申之、仰云、近代日短定入夜歟、早可改勘卯辰刻云云、宗平申云、卯刻出御例、淸和天皇外一切無例、辰時ハ件日非吉時、仍難勘申候、又爲卯刻者、裝束使鼓已下時難叶候、一刻一度之事也、並時打之者不可爲今日時刻故也、仰云、不可然、又可召問在親云云、則

仰合之處、如例候、但次第鼓打了供奉ラル、如法卯刻ニ可参集之由被召仰テ、出御猶爲午二點ハ何及運遲哉、出御午刻ト令参集バ、定及未申刻歟、御幸寅刻候テ、被責候供奉之者、何令遲参哉云云、仰云、此申狀尤可然乎、可下知云云、如可有御早参也者、申可早参之由了、卽退出了、　二年八月廿一日、大嘗會御禊可供奉、甚早速歟、今日被下御點之間只今申也、又羅綾申者在中御門高倉、是諸卿被下人人冠具由、而度度炎上無用途之間如無、仍諸家冠口訴申院之處、仰關白可被下借件羅綾之由被仰下也、申共承了無之、　十月廿三日乙未、來廿八日女騎馬三匹令引獻、内今日可有御覽云云、件馬可獻之由、去月藏人所來告也、仍充召可然之輩令獻也、非廐馬、宗宣送消息於長俊許曰、今日御馬御覽、國近可召進者、依見所勞不能参仕、且今日供奉不召具可被察也、

○按ズルニ、順德天皇ハ建曆元年ニ御禊アリシカドモ、准母昇子内親王ノ崩ニ由リテ延引シ、翌二年再ビ御禊アリテ大嘗ヲ行ヒ給ヘリ、

〔明月記〕嘉禎元年十月十五日甲辰、午時許金吾〇藤原爲家來、〇中略次老者頻爲御禊行幸、〇四條本隨身童等付花事、有不可然之說、先々如何、又供奉諸司不具、〇中略如何、申云、付華事不然之說聞候歟、但壽永後京極殿〇藤原良經五位中將之時、御隨身童付菊紅葉、故入道殿〇藤原俊成定家父定御存知之間、口多難付風流、彼御所口可尤爲證據歟、不具難色事、是本說正歟、具隨身之人尤可然歟、次將之間父子共可具仰遣了、比巳前院公事御沙汰之次ニ被仰出此事、前内府通香可然由出詞、殊有不可然御氣色、被閉口了、宇治左府御記、囊沓之由被載云云、承上皇之仰之後、無略儀存候由答申、　十九日戊申、御禊有儲日歟由問金吾、伺申右府、更無延引之儀云云、河原之儀洪水如何、〇中略入夜金吾來、較自入道殿送給、雖大寺、美麗較云云、不可借人起請之由須雖途候哉者、非起請限、由口被給了、飾馬相口無驚氣云云、供奉人粗所傳聞、右大臣、節下右大將、九條新大納言、高別當、御前長宮、行桟敷盗取、供奉危由頻有其聞、大宮中納言、平宰相、被亥左兵衞督、皇后宮權大夫、式掌之外只五人云云、棧敷二條南高倉東角、資雅間地借之、此所前殿御棧敷、隔小路相對、極有恐之由日來雖痛恐、善思口彼入道等可見物由披露、密密隱入、不可傳由示之、仍懇欲行向、東

洞院東（定高間地用本主欠常住院大僧正御検敷、）禪室、（二條北富小路四、八間、准后宜秋門院、後堀河后嫜子、四條生母）渡御云云、右府（本亭南垣壞了、被造富小路東也、）不經程歸了、

〔平戸記〕仁治三年八月廿三日癸酉、今夜仗議可被忩行之由雖有沙汰、光兼朝臣、師朝明法道等勘文依有禁忌、今朝返給、被直之由傳聞之、仍不能忩參、日沒之後著束帶參內、先是人人多參、上卿御遲參、時刻推移、及亥刻右府（○藤原實經）令參給、其後諸卿著仗座、（○中略）

官外記幷諸道勘申、大嘗會御禊（○後嵯峨）當御忌月、如何樣可沙汰哉事、

右大臣定申云云、諸道勘文云、群議之趣大略一同歟、所存之旨又無相違、天武之例雖似規模、國史之文頗以勞駱歟、然而和漢准據之例多相存、至御禊之儀有何憚哉、

大納言源朝臣（○具實）太宰權帥藤原朝臣（○實親）民部卿平朝臣定嗣朝臣等定申云、御忌月無憚之條、諸道博士一同勘申、不有異議、於其先蹤者、天武天皇例式部大輔菅原朝臣（○爲長）雖有勘申之旨、所見若不詳者暗難被比擬、其外准據之例各見勘文、就中延喜長曆之明時者、繼體守文之勝躅也、彼二代依神今食幸中和院、案彼神嘉殿之儀、相似大嘗宮之記、神膳之薦享、尚以如此、御禊之臨幸何及猶豫、加之如左大辨藤原朝臣勘申、先院聖忌者、御禊以前歟、皇慮之處彌爲疑難、

權大納言藤原朝臣（○定雅）申云、諸道一同勘申、任彼勘奏之旨、如例被行之條可宜、

權大納言藤原朝臣（○實基）定申云、如諸道勘申者、有忌日不樂之文、無忌月可憚之說、仍和漢多存例准據不可有歟、且天永御元服殊雖有沙汰、猶被行其儀畢、何況踐祚大嘗會者、希代之大祀、嚴重之祭典也、早任式條之旨、宜有御禊之儀哉、

權中納言藤原朝臣（○爲經）定申云、諸道勘申之旨已以一同、禮經之意言忌日許、他日不憚忌月之條炳焉也、見我朝之例、於宴遊者雖有停止之先規、如神事行幸、蹤跡已多、祓除凶之禮也、無可避憚之謂歟、其上十月御禊式條有限、輙不可及延縮之沙汰歟、

權中納言藤原朝臣定申云、言忌日不言忌月者、經史之元龜、法令之大綱也、況亦我朝准據之例已以炳焉、宜就諸道之勘奏被行十月之御禊歟、

式部大輔菅原朝臣、左大辨藤原朝臣等定申云、聊課愚管粗載勘文畢、不能重陳、

侍從藤原朝臣（○實孝）定申云、臨時神事猶不憚御忌月、御禊臨幸何可有式條旨如大外記師朝勘文者、大同三年改三月齋爲一月齋云云、彼以前猶被用十月、今度輙難改他月歟、

仁治三年八月廿三日　執筆左大辨

九月十九日戊戌、未剋許參殿下、（○藤原實經）是小男高望、大嘗會御禊次第司次官被譴責之故也、拜任當職之時兼申畢了、年少之間不可堪騎馬、可勤仕此役者、不可被任之由申入了、而有沙汰正少輔不被改、依不可勤仕之由經其沙汰被任了、今譴責之條不審也、申入其由了、　十月十八日丁卯、今夜被行除目云云、御禊行幸式爲供奉、或其用途成功云云、

〔伏見院御記〕正應元年十月十二日甲子、今日大嘗會御禊（○伏見）點地也、少將源業顯朝臣藏人奏指圖、

十五日丁卯、此日爲祈御禊日晴、丹生貴布禰兩社奉幣使、上卿中宮大夫辨仲兼朝臣、日時幷宣命草入加同筥、頼藤付內侍奏之、見了返給、又奏宣命清書、今夜行昭僧正參施加持、（件僧正依御禊行幸祈禱、令修不動法）也、又慈助法親王自今夜令修如意輪法也、　十八日庚午、自院蓮華王院寶藏御禊行幸記文一卷賜之、申加一見可返進由了、此日內侍所御裝束改之、爲御禊行幸依可有渡御官司也、奉行職事爲兼朝臣藏人說春、勾當內侍參向、建長以後兩代無沙汰云云、今夕御禊行幸女騎料馬覽之、清涼殿庭御簾垂之、頭中將爲兼朝臣候簀子、左右馬寮各口匹獻之、今夜依遲參五匹先所引也、

〔公敏卿記〕文保二年十月十三日、今夜次第司著座定幷點地定、（○後醍醐御禊）又兵庫器仗開撿日也、裝束司長官著陣了、（點地定去廿八日也、而日次又被取改之、）又次第司著座卽今夜也、仍予參官廳毛車人、（隨身一人、青侍一人、內內召具之、）入東門著座、委細注書圖、今夜予有所存止獻盃、其故者與次第司以下獻盃之條不宜之由存之間、予有所勞

氣可早出可止獻盃之由予密密仰諸司之處、饗膳不居之、雖不可然強又不召仰、予著座之後、次官式部少輔行範、兵部少輔永實、判官不參云云、主典□前後以上□□主□已下著東廊、委細見圖、次予依例可行之由可仰次官候處、史生助右仰覽古記文二卷、前後天仁、鹵簿圖二卷前後文永等、入宮候予後、西也、自下覽之、予聯北面、助右置宮於予前、予置笏引寄宮、先□取天仁御前記文一卷見之、須至奥見了、如元置宮、但見了文懸文宮於、耳少見□□驗也、又一卷取後見之、見了置推□所、此記文各有木軸、次取前鹵簿圖一卷見之、其儀如記文、次見之、見了此一卷如最前入內、不懸、次以前見了文如先入內、聊廻遣取笏、助右取之退、覽御前、□官式部少輔行範□□見了、又助右取之覽後次官、兵部少輔永實見了助右取之退、次又助右覽定文二通請奏六通、入宮不奏、一位抑折入之、予次第開之見了返給、其儀如先、次自下臈次第起座退出、予起座出來東門退出、○中略抑入夜依召大夫殿被參禁裏、被申家君云、節下次第司事父子例不詳、去長和五年閑院大臣與子實成卿被定之歟、而件度聊有議、以中納言中宮大夫經任被改補之由、行成記且被遣見、今度儀可爲沙汰歟、長和又有沙汰被改補之上者、可有沙汰歟、然者一向可相似長和例、其上於今者長官不可出來一向無沙汰モ、件度サシモ經沙汰事、今度一向無沙汰、平且此由早可申入候者、被申云畏承了、節下次第司事重任候、勸勞歸治、當代指所勞之上者、不申子細候條不可然候間、不及引勘先例、奏催候時申領狀了、爲上無沙汰、爲下不申入先例領狀候條、有若亡候條恐存、然者有御沙汰候條、實不可有子細、又有議而被改補者、一向可相似長和例歟、雖聖代少年繼帝強不庶幾歟、此上事所詮可在時宜了、早有治定可被仰下之由被申了、　十五日、次第司長官事、去夜自禁裏被仰下之趣、以大夫殿令申仙洞給了、就其大夫殿、卽爲仙洞御使令參內里給也、又以頭修理大夫公明朝臣爲勅使、有勅問鷹司前關白幷關白云云、及深更頭大夫入來、東帶大臣殿被謁給、傳勅命曰、次第司事長和重重沙汰有之歟、而今度一向無沙汰モ有後難歟之間、去夜被仰出了、就其勅問兩關白之處、所存二人大略一同歟、此上者且違長和例、且散後難了、此上者如□早可存知之、抑頭大夫爲仙洞御使間兩關白、

廳司前關白

節下大臣次第司長官父子可有憚哉否事、父子勤仕之條無先例也、兼日尤可有沙汰歟、於長和例者、次第司行事所始已前被改之歟、今度期日近候、忽改定候條又有議歟、長和沙汰行列間依被近改也云云、此條非無准據、父子勤仕強有何事哉、

關白

節下大臣次第司長官父子可憚哉否事、父子勤仕事、長和五年之例、期日以前改定之由見行成卿記、行列近近之間有其憚之故云云、但豐明節會父爲內辨子爲小忌之時、著父上之條有先例、加之除目宮文之時、父子相列之例同存之、以彼等准據被著用、何事有哉、然而猶可被改哉否、宜在時宜候哉、

兩關白如此被申候間、申入仙洞之處、早申內里治定樣可申之由有院仰、參申候由公明朝臣申之旨、仍又治定了、後聞今日御禊行幸院御棧敷、今日有上棟、二條北高倉西北、內藏人菅原永宗宿所前被立了、此屋面三間中央間唐棟、其外左右廂各二間、凡東西七間也、南北廂一間唐棟、共同左右一間也、親直入道作口所奉行也、少少造進、　十六日、抑點地云云、又女騎馬御覽云云、毛付次將少將信隆云云、又文武諸司可懸裝束司事之由資明參奏下之、大臣殿出居了、〇冠直衣　十九日、後聞、今日頓宮幄分云云、

〔園太曆〕觀應元年九月九日、勸修寺前大納言送消息、御禊行幸女御代已下事勅問也、續左、

供奉女騎人數口、曆應〇光明被減之條不可有子細候哉、同可被計申之由被仰下候、

御禊行幸女御代事、曆應被經御沙汰被略了、今度可爲同前候歟何樣可候哉、可被計申之由被仰下候、〇中略　經顯誠恐謹言、

九月九日　經顯上

洞院殿

御禊行幸女御代間事、愚意所存載別紙獻之也、女騎人數事、同注載之候、可被得御意給候哉、謹言、

九月九日　　判

御禊行幸女御代事、召來陪從等幸路資裝臨威儀之條勿論歟、而曆應度無領狀人之上、又依無差所役、有沙汰被省略了、近日諸家窮困猶未復尋常、扶持之仁定難治歟、然者今度同無沙汰可叶當時之宜哉、女騎同被守曆應簡略人數之條、有何事哉、

十月五日丁亥、○中略

一昨日貴報畏存候、御禊日數迫來候、實晉出立愁雖被心懸候、粟田口分リ候間、雖廻秘計候、于今無其驗候、一定臨期御幸闕候ヌト歎存候、唐鞍第一未無安堵思候、一條黃門鞍ハ爲御相傳和鞍候云云、兼又內府可申トカヤ承候、足下ニ候ケルヲ不存知候、後悔無申限候、

抑兵衞府蠻繪文鷲丸勿論候、歟、左右一同令管領鷲候哉、此事文保御禊之時、實前卿申入先公候歟、落居之樣不審候、近衞衞門ハ左右相替候間、兼日兵衞府何無差別候哉、元弘長光卿參議左兵衞督、御後長官、用獅子丸候、若存近衞衞門等儀、依爲左用獅子候哉、委細沙汰候ケルヤラン、只今ムサク大樣候ケルヤラン、相尋候之處、其時注置候、撰給候ハントハ申候テ、未注送候、將又隨身袴、長光卿蘇芳末濃候、是ハ右ニテ候ヘバ、若可爲柄葉候哉、兵衞府令領タル文ハ何ニテ候ヤラン、只衞門同事候哉、裝束師頻雖令催促候、同ハ委致沙汰可進、左存候、是等條條可仰御處分候、誠恐謹言、

十月三日　　公秀上○中略

隨身蠻繪事、文保實前卿所爲、後日相尋公有卿、彼家一體之故也、返報續之、

鷲丸雖勿論、左右尤不定、凡文不論左右、可爲兵衞府文者、近衞衞門何樣可存哉、以獅子爲近衞文、以熊爲衞門文者、右近衞府獅子文、往昔以來不見、左衞門熊左同前歟、尤不審哉、曆應沙汰相違、先

公御誕諌雖不可然、代代例兵衛熊、又非無蹤之上、鵄丸武衛不分左右條猶有疑哉、蠻繪隨身袍文事、左近左衛門獅子、右近右衛門熊、兵衛鵄丸、如此候、兼兵衛府用獅子熊等例候歟、注別紙進入候、文保御後長官實前卿、用鵄丸之由記置旨申合候ケル上、定隨被御計候歟、凡用鵄之條、其謂候歟之由存候、如何、他事期後時候、公茂誠恐謹言、

十月八日　公茂〇中略

十五日丁酉、抑今日自武家大夫御禊行幸供奉訪五千匹送之云云、頗輕微歟、然而近俗不能左右、關白左府一條前關白等同有此事、各一萬匹云云、

〔後深心院關白記〕永和元年八月廿六日甲寅、頭辨宣方朝臣爲勅使來云、御禊行幸〇後圓融供奉事、先先毎度有沙汰歟、今度何樣可有沙汰哉、可計申者、余〇前關白近衛道嗣申云、儉約事尤可有其沙汰歟、宣方朝臣又云、御後次第司次官可沙汰進、大納言〇道嗣子兼嗣供奉事可爲何樣乎者、次第司次官事加問答、器用輩追可申左右、大納言供奉事、所勞之間難供奉之由令申之了、凡攝關之輩不兼大將、供奉此行幸無其例歟、　九月六日癸亥、及晩被下勅書、次第司次官相構可沙汰進、次衛府督代時盛可被勤仕、舊院御代望申四品歟、然者可勅許、亦可召仰之由被仰下、余申云、次第司次官事者、方難事行、子細候者、藏人歟、不然者次將可沙汰進候、時盛衛府督代事、亦召仰可申入散狀之由令申入畢、　十日丁卯、今夜御禊日時定并次第司留守定、上卿德大寺大納言云云、　廿五日壬午、入夜仲光朝臣爲勅使來云、衛府督代時盛領狀先神妙、四品兵部卿近例謹候哉、相尋可申者、次御禊行幸、面面可構參之由有其聞之處、近日被尋分明之散狀處、人人更不出請文之由奉行申之間、俄御仰天候、大納言若可令供奉哉、攝關之輩不兼大將之時供奉、先規不詳云云、然而雲客之時猶以有供奉之例歟、就關如所被仰也、構參者殊可爲御本意者、余申云、四品兵部卿時仲朝臣以拜任之例所望申也、次大納言供奉所勞、故障非一事之由令申入了、　十月一日戊子、御禊行幸繪〇七卷今日申出見之、是蓮花王院寶藏御繪也、當時被

預申御室、去比被召寄云云、　十日丁酉、傳聞、今日御禊點地云云、裝束司長官新藤中納言、勅使顯英朝臣云云、　十七日甲辰、傳聞、御禊行幸可為來廿二日之由有沙汰之處、武家料足全分未到之間、可被延引儲日之有沙汰云云、武家料足御禊行幸分三十萬匹云云、僅六萬匹許致沙汰云云、

〔後法興院記〕文正元年八月廿一日庚申、種光朝臣來申云、御禊行幸〇後土御門仙洞〇後花園可有御見物、御車寄之事可有御參之由被仰出云云、條々難事行由有御故障、彼朝臣院司也、　卅日己巳、種光朝臣來相語云、御禊行幸御見物也、御幸御車寄之事被仰久我前右府〇源通尚云云、行幸令過仙洞之御棧敷前給時、被向鳳輦云云、其時上皇令降簀子給、月卿雲客降地令蹲踞云云、然間攝關人非可降地、堂上又無便宜間、被前右府云云、先日殿御參事有催、御忘却之由有仰云云、彼朝臣御幸事沙汰云云、　十三日辛亥、種光朝臣來相談、今度就御禊行幸供奉、被任兵衛佐云云、凡自八省卿任兵衛佐事不審事也、有邂逅之例云云、　十五日癸丑、今夜御習禮之行幸云云、內裏仙洞程近間、供奉人步儀如恆云云、明日御逗留云云、　廿七日御幸御供也、座次事口宣次第之由有沙汰之處、有綱遲參之間、今度參次第之分ニ可有次座由自執權令下知云云、限有綱參次第事無其謂之間、此子細申遣執權許處、口宣次第事無所見、於五位可有如此歟、六位之事參次第候、但口宣次第事御所見候者可給之由有返答、此儀太無謂歟、於殿上六位者、參次第勿論歟、判官モ依本位列座也、又北面於五位者、口宣次第云云、限六位參次第不意得事也、此子細可尋外記也、　十八日丙辰、北面座次事、相尋常忠之處、五位位次次第、六位參次第、同日參候者可依年齡云云、抑去廿八日室町殿之局女房入江殿之比丘□所、室町殿妹、セイシャウ上〇闕ニテ、子ヲウミナガシテソノマヽ棄置了云云、人不知之、今月十三日セイシャウ掃除之時、人夫見出之云云、件女房去廿八日聊怪子細共アリシ間不審之處、今果如此云云、依是至來月十三日天下觸穢也、御禊行幸延引來月云云、當年事可有延引之由被仰武家之處、猶當年中可被行由被申云云、延引次年之例太不快御例也、大嘗會和歌作者臨期輕服、改始延引、今又觸穢出來非

直事、神慮尤難測者歟、今朝拂曉還幸云云、依穢事遂以無御習禮云云、御禊依日例不有先規歟、彼女房則被罪科云云、不便不便、　十一月廿六日、是日御禊行幸也、於棧敷令見物、　廿七日乙未、早旦殿被參禁裏仙洞室町殿等、御禊行幸御禮也、

〔大乘院寺社雜事記〕文正元年十一月五日、來廿六日御禊行幸云云、風雨御祈事、先內內被仰寺務云云、　廿五日、今日官司行幸、大納言殿（○足利義政）供奉、御訪錢百貫文被進之云云、仍御祈禱仁王會、予（○尋尊）行之了、

〔氏經卿神事記〕寬正七年（○文正元年）十月廿七日、大嘗會御禊行幸御祈事、十三日御教書、十五日祭主下知、今日宮司告狀同覽、　廿一日、同夜大嘗會御禊行幸延引、可爲來廿六日、無風雨難樣自十九日七ヶ日可奉祈由十七日御教書、十八日祭主下知、今日宮司告狀同前、

〔季連宿禰記〕貞享四年六月一日丁未、自頭中將基勝朝臣依使者參之、卽令面謁、被命云、大嘗會御禊行幸（○東山）裝束司前後次第司長官以下、度度例可勘進之由只今庭田中納言被命、今月中旬迄之間可勘進云云、申承之由、　廿日丙寅、相伴大外記師庸朝臣參頭中將基勝朝臣、去一日所被仰出御禊行幸裝束司前後次第司等之例令勘進、局務勘例自公卿補任之中拔出分一紙、幷同記之中撿挍行事、（已前勘進之外也）又應永度御禊行幸公卿以下（致狀寫歟）三枚勘進之、予分壽永元年、永和元年、永德三年、三ヶ度之例、注折紙進之、　十月十四日己未、依使者參頭中將基勝朝臣、被命旨記左、

來廿八日、可有大嘗會御禊、（剋限亥云云）於清涼殿可被行之由議定、（行幸河原之事、今度不及沙汰、）調進方官方之方、

行事官重基調進

一贖物（主上幷執柄料）　　一大麻

木工寮弘之調進

一案一脚（載贖物高坏料）　　一清涼殿結灯臺二本（此結灯臺用意無用之由後日有告）

主殿寮伴佐伯

一立明　一庭火　一清涼殿御前掌灯（此掌灯同後日無用之由有ㇾ官除ㇾ之）

右可ㇾ用ㇾ意旨可ㇾ下ㇾ知、猶向ㇾ庭田黄門ㇾ可ㇾ申ㇾ談之由有ㇾ命、

〔壬生家記〕文政元年十月十九日

一御禊（○仁孝）之節、殿下御贖物下敷薦一枚、掃部寮より調進仕候樣御下知之事、

一御贖物之下敷者、掃部寮より調進仕候得共、殿下御贖物者無ㇾ之候ニ付、先例も差掛り掃部寮江入混仕候得共、此度者前以御下知奉ㇾ願候事、

右之通日野殿江申上、御承知也、

廿七日、今日内内御禊御内見有ㇾ之候ニ付、御贖物手本、非藏人口持參候處、日野殿御落手也、

御料御贖物二基（折敷高坏在ㇾ覆紙）

一基散米（土器一）　一基人形解繩（土器二）　御大麻一

以上

殿下御贖物一基（衝重一）

盛人形　解繩　散米　土器三　御大麻一

以上

廿九日、今日御禊ニ付、申刻神祇官參勤、殿上邊江參候處、六位衆より大宋御屛風三帖許持參之旨御沙汰、仍持參六位衆相渡、御座南方ニ被ㇾ建候事、

一出御前、御巫袴許ニ而内見有ㇾ之候事、

一御料御贖物者、南廊出廂之案之上設ㇾ之、

一殿下御贖物者、西内廊之北端也、

一凡戌刻頃出御之御沙汰、仙花門外北之方迄參、御巫進見、先人形解繩之高坏ヲ取テ御巫江渡、六位衆附加也、又仙花門外江退テ御巫進見、散米之高坏ヲ渡、直ニ仙花門明儀門ヲ經テ、殿下之御贖物青瑣門江持、五位藏人江相渡、又仙花門外北之方江扣居、此間暫隙有、宮主大麻ヲ祭主渡、祭主中臣之女渡、中臣女供之後、初之通宮主ニ被返、宮主解除詞奏畢テ、青瑣門より同大麻ヲ五位藏人渡、五位藏人殿下江進、直被返之、

一御料御贖物被撤、請取案上置、又殿下御贖物青瑣門參請取、如元案上置、自夫入御、撤却退出被仰出候事、

一大麻先々宮主江相渡、跡者不返之事、

一殿下御贖物下敷之薦、先日日野殿江、掃部寮より調進致候樣御下知相願候得共、掃部寮江者御下知無之旨也、以來者掃部寮調進難相成者、辛櫃ニ入其儘可設旨哉可伺之事、

〔補世卿記〕嘉永元年十月十七日丁巳、大外記樣御使在之、左之通り、　手扣〇中略

過日被仰進候貞享度御禊御神事之事、段段取調候得共、御禊者十月廿八日之趣ニ而、御神事邊之義者、一向御書記等無之不相分候間、是亦宜被仰進度事、

十九日己未、非藏人口へ御名代石井豎物、〇中略來廿七日御禊御裝束設試已下日限、幷參集刻限等、御書付ニ而御渡、右之內御教書ニ而被告候廉廉者、御書付ニ而御返答有之候樣御賴、　廿八日戊辰、入來行事官、右者家君御面會、明日御禊〇中略御贖物調進之儀ニ付、天明文政と元文明和頃と次第相違ニ付、傳奏御奉行より御不審、御當局へ御相談申上候樣御達ニ付罷出候處、右供進之次第、御當家ニ而者御掌領無之、伯殿へ相伺候樣御返答之處、則伯殿へ相伺候處、伯殿ニ者、天明文政度之通可相心得候樣被申候趣ニ付、左候ハヽ其旨傳奏御奉行へ御返答申上候樣御達之處、畏退出候也、

御禊儀

廿九日己巳、今日禁中御禊也、仍而從₂今日₁御神事、右ニ付家君猶又御火改御行水、奥御客様其外御召使之面々、御髪切御月水者同席不₂相成₁候ニ付、表方下部迄奥へ不ㇾ通、食事等も明朝より別段表ニ而構候積、尤締仕切奥之面面西之穴門より通行之積、次飯焚先ヅ御客來中當分すま御雇表詰也、尤各行水後別隔火改也、雖ㇾ然家君とは火又別也、御門通用も、服者斷不ㇾ入候積り、又大外記様御重服ニ付、清掛り之仕者不ㇾ苦、其外被₂召仕₁候面々御使之節者、御門前より御門內ニ而取次積、尤此御方より何方へ御使ニ而も、重服者へ門外より可ㇾ達事心得、侍中へ申達候也、

一御神事中忌詞書付御渡、侍中へも達置候、右者萬一家君御目通に而忌詞申上候得者、家君御行水被ㇾ遊候程之御迷惑に付、各心得申達置候、

一日々役所へ當番之面々、朝宅に而行水之上出勤之事、

〔代始和抄〕御禊行幸事

當日は大內より川原へ行幸なる、大內燒て後は象日太政官の廳へ行幸なりて、それより出御し給ふ也、時刻に王卿仗座に參著す、次第司の次官已下かりに帶劒すべきよし宣下せらる、幼主の時は攝政左近の陣の內に行列すべきよし仰らる、節下の大臣といふ事あり、節といふは旗の名なり、世俗には大がしらと名づく、その旗の下に供奉するによりて節下の大臣とはいふなり、供奉の行粧は唐鞍といふ鞍を置たる馬にのる、銀面尾袋等あり、馬副の瀧口十人褐冠なり、隨身八人蠻繪の袍といふ物をきる、左は獅子の丸、右は熊の文の袍也、手振十二人、紫の布の褐を著す、瀧口の調度懸十人狩衣袴なり、舍人居飼各一人、纉の舍人二人、この外雜色その數定らず、攝政は或は騎馬或は乘車なり、車はかならず唐庇を用ふ、上臈の隨身番長はこれも蠻繪の袍を著す、地下の前駈定れる數なし、雜色又その數をゑらず、幼主の時は中宮同輿なり、女御代供奉の例あり、おのおの女房の車衣のつまを出す、とりどりの物見なり、およそ此行幸に供奉の百官裝束馬鞍已

下よのつねの行幸にかはれり、鞍にも杏葉といふ物を付るなり、兵庫寮その時刻にいたりて列陣の鼓進鼓行鼓などを打しむ、前後の行列をみだらざらむ爲なり、御輿は鳳輦也、河原頓宮にいたりては、まづ御膳幄に御輿をよせて下御ならせ給ふ、これより腰輿にめされて御禊の幄にうつらせ給ふ、主上は百子帳の内の大床子に著御し給ふ、百子帳といふは、檳榔をもて頂をおほひて、四方に帷をかけて、前後をひらきて出入するやうに飾りたり、其中に毯代をしきて大床子を立たり、この床子につかせ給ふ也、百子の名其說いまだつまびらかならず、一には百子は多きをいふ、此帳をつくる支度のおほき心をいふべし、主上御手水の事あり、主水司これを供す、其後大床子のまへの平敷の御座にうつらせ給ふ、神祇官御贖物を供す、宮主解除の詞を奏す、これすなはち御禊の義也、公卿以下おの〳〵禊つ物を前に置て、神祇官大麻をひく、次に腰輿に駕して御膳の幄に歸らしめ給ふ、晴の御膳献の御膳などを供す、そののち山城の國司獻物三十棒をとりて庭中に列立す、大臣物名を問て後かしはでに給へと仰す、又今日の見參を奏する事あり、神祇官幣帛を近邊の諸神にわかち奉る事あり、其後還幸あり、さきの如し、大臣外記に仰て解陣の鉦を打しむ、諸卿以下退出す、

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

其日（○御禊前日）平旦神祇官率路次神幣、其料座別五色薄絁各一尺、絁五尺（小所三尺）、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裹薦及擔夫准幣多少、建禮門前南去十餘丈立節旗標、南去一丈立大臣標、去之一丈立少納言標、去之五尺立外記標二（左右相去各一丈）、自少納言標去之一丈立鉦標、去之一丈立鼓標、自鉦鼓兩標間左右相去一丈立兵庫寮標二、自少納言標左右相去各二丈立前後次第司長官標、去之一丈立次官標、去之一丈立判官主典標、去之一丈五尺立主禮標（御前司在左、御後司在右）、訖次第司會集宮城門外、撿校行立標、次歷從五位已上及諸司諸衛各就標下、次第司判官主典率主禮等至諸司標下、令省掌二人左

右相分唱計陪從六位以下官、（五位已上、及衞府官人等不在唱限、）時刻擊動鼓、隔刻擊鉦、列陣鼓訖、節旗漸出、就宮城門外標、于時乘輿初出、警蹕如常、其前駈次第也、京職兵士左右各廿人、（左京在左、右京在右、）次市司官人左右各二人、（東西各二人、左右同上、）次京職官人左右各六人、（五位各一人在此中、）次神祇官左右各卜部一人、神部一人、官掌一人、長上一人、官人三人、執幣丁一人在其間、（輿卜部平頭、）次主禮左右各一人、（以諸司史生爲之、）次第司判官一人在其間、（輿主禮平頭、從近馬左右各一人、下同、）次彈正臺、（忠疏在左、巡察在右、）次兵部省、次主稅寮、次主計寮、次民部省、次治部省、次散位寮、次大學寮、次式部省、次官史、（已上相夾在道左右、其人數隨時增減、下不注數者亦同、）次隼人司、左右各步陣五人、騎陣二人、大衣一人、官人一人、次次第司主典一人在道中央、（從二人、）次主禮左右各一人、次第司次官一人在中、（輿主禮平頭、）次左衞門府、左右各衞士百人、門部卅人、其間府生醫師志尉佐纛鉦鼓次之、督次之、內器仗次之、次左右主器仗者、（輿內器仗平頭、）衞府佐已上副馬次之、持親王已下參議已上蓑笠者次之、主禮左右各一人、次第司判官一人（從二人、）在其間、次左右馬寮儲馬左右各四匹、馬部各二人、騎士各二人、史生各二人、馬醫各一人次之、次左兵衞府左右各兵衞卅人、其間府生醫師志尉佐纛鉦鼓次之、督次之、主禮左右各一人、次第司主典一人（從二人、）在其間、主禮左右各一人、次第司長官一人（從二人、）在其間、次陰陽寮左右各三人、（陰陽師漏刻博士在此中、）漏刻器在其間、次鼓次司、左右各長上一人、官人一人、節旗在其間、鉦鼓次之、少納言一人次之、（從四人、）大臣一人次之、（從八人、執物、少納言從亦同、）少後外記左右各一人、侍醫各一人次之、中務省左右各內舍人十五人、丞一人、侍從十四人次之、左右馬寮左右各六人、（馬已上頭已下、）右威儀御馬一匹在其間、（近馬左右各騎士五人、右兵衞一人亦在左右、輿馬寮第二官人平頭、）左威儀御馬一匹次之、（騎士左兵衞並同上、）次內記左右各一人、輿鎰各一人、主鈴各一人次之、負鎰馬在其間、（近馬令左右近衞各一人相夾、輿輿鎰平頭、）負鈴馬次之、（近衞相夾亦同上、）少納言一人次之、其次東宮前駈、亮在左、學士在右、侍從二人次之、（四位爲之、左右相分並在陣內、）東宮少後在中、執物者左右各若干人從之、次御劒櫃在中、（近衞令左右近衞各二人前後相夾、將監各一人在其外、）諸衞士者左右各一人、參議以上親王以下左右相分在中、左右近衞府左右各騎陣廿五人、步陣卅人、（在騎陣內、輿後亦同、）少將各一人、大將各一人、左右相分在步陣內、乘輿次之、中將各

一人、少將各一人、左右相分在乘輿後、輿前兩綱駕丁各六人擎之、輿長左近衞各一人在其外、其兩綱駕丁各十人、(左近衞丁十人、左兵衞丁十人、)大舍人左右各一人次之、(當第四丁)左近衞左右各一人次之、(當第六丁)大舍人左右各一人次之、(當第八丁)左兵衞左右各一人次之、(當第十丁)大舍人左右各一人次之、(當第二丁)竝在綱外、(輿後衞府及大舍人駕丁)(赤漆此、)其後陣執繖者二人次之、(左右相夾在綱末)左右近衞府左右各騎陣十一人、步陣十人次之、主水捧蓋左右各一人、(在步陣末)少後東豎子左右各一人、(在中路、與執繖者相當、)內侍左右各一人次之、女藏人各四人次之、內藏寮持各一人次之、左右近衞府左右各騎陣十人、步陣十人、腰輿在其間、菅蓋紫蓋次之、輿左右執翳者各二人、(近與相夾)次男藏人左右各三人、次主殿寮允已上左右各一人次之、(與紫蓋平頭)腰輿雨革、人給蓑笠、分在道左右、(雨革在右、蓑笠在左、)覆宮御廁斑幔在其內、(覆宮在右、斑幔在左、)小幔風爐在其內、(小幔在右、風爐在左、)內藏御櫛机在兩革之後、次掃部寮官人左右各一人、(與騎陣相當)胡床水樽、分在道左右、(胡床當於雨革、水樽當於蓑笠、)御菌松明在其內、(御菌在右、松明在左、)贄輕幄在其內、(贄在右、輕幄在左、)主殿炭櫃、造酒御酒、分在道左右、(炭櫃當於胡床、御酒當於水樽、)次獻物所櫃左右各一合在中路、次膳部酒部、分在道左右、(膳部當於炭櫃、酒部當於御酒、)次執物內豎左右各十人、次左右近衞少將已上副馬左右各四匹、次撿挍女孺左右各一人、次女孺左右各三人、次采女左右各八人、次御廁人左右各一人、次洗人左右各一人、次撿挍女左右各一人、次圖書和琴御硯次之、(和琴在右、御硯在左、)次春宮坊官人主藏官人左右各一人、(坊官在右、主藏在左、)坊儲宮儲媄在其兩間、(儲宮在左、儲媄在右、)坊藏人左右各一人、坊兩裝殿守在其兩間、(殿守在左、兩裝在右、)主殿主膳等官人各一人、分在道左右、(主殿在左、主膳在右、)女孺采女次之、內藏儲錢次之、同寮御韓櫃各四合次之、官人各一人次之、藏人所御韓櫃次之、出納次之、雜色次之、縫殿御韓櫃各六合次之、官人各一人次之、圖書馱餉次之、右兵衞府左右各兵衞五十五人、(與膳部寮相當)督佐尉志醫師府生在其兩間、次主鎰左右各一人、次第司長官在其間、(從二人)次主鎰左右各一人、次第司判官一人在其間、(從二人)東宮儲馬次之、衞府佐已上副馬各三匹、分在道左右、持諸司簑笠者次之、捉搦非違者各一人次之、(以右近衞爲之、下同、)主鎰左右各一人次之、次第司次官一人(從二人)在其間、次兵部省掌左右各一人、次第司主典一人(從二人)

在其間、持唱計及鹵簿札直丁各一人、(唱計在左、鹵簿在右、與主馬頭相當、並在省掌內、)次大舍人寮官人左右各二人、圖書官人左右各一人、內藏寮官人各一人次之、縫殿寮官人各一人次之、內匠寮官人各一人次之、儲調度韓櫃在其間、內藥司官人左右各一人、御藥儲韓櫃在其間、次大藏省官人各一人在道左右、宮內省官人各一人次之、主殿寮官人各一人次之、典藥寮官人左右各一人御藥儲韓櫃在其間、進物所膳部各三人在道左右、進物所御韓櫃二合在其間、內膳司正并奉膳在道左右、(正在左、奉膳在右、)典膳左右各一人次之、御膳韓櫃十合在其間、(第一韓櫃監、與正奉膳平頭、)主水司官人各一人在道左右、大膳職官人各一人次之、大炊寮官人各一人次之、造酒司官人各一人次之、采女司官人各一人次之、捉搦非違者各一人次之、主禮各一人在道左右、次第司判官一人在其間、(從二人、)木工寮官人各一人在道左右、兵庫寮官人各一人次之、雅樂寮官人各一人次之、右衞門府左右各門部卅人、衞士百人、(與右兵衞陣相當、)督佐尉志醫師府生在其間、捉搦非違者左右各一人、(與雅樂寮相當、)主禮左右各一人次之、次第司主典一人在其間、(從二人、)左右馬寮儲御馬左右各四匹、馬醫左右各一人次之、史生各一人次之、裝束司長官以下聞警蹕、豫出列立路邊、(異位重行、)乘輿御禊所之後、皇太子步行參詣、時剋神祇官奏禊詞、訖還御供膳所、賜陪從五位以下衣被各有差、(山城國掾以上御衣、)訖車駕還宮、

〔江家次第十四踐祚〕大嘗會御禊

寅二剋打裝束鼓、　平旦奉幣路次諸社、

被仰下前後次第司可帶劍由、御前次第司參入就美福門、(胡床、長官次官東面北上、列官主典西面北上、主鈴在主典後、)御後次第司參入就豐樂院北邊、(長官暫留便所、)於彼院北門立胡床、(北面西上、今案件所等可隨御在所、)打列陣鼓、

次第司撿挍標杭事

撿非違使佐以下巡撿當路事

御前司巡撿宮外標事　省掌召計事

打進鼓

大臣起仗座、出自宣陽門、經春華門進立節下、外記各立標下、

天皇御紫宸殿（聞女御代被参由之後出御）

先是掃司舁出大刀契、置西二間簀子、

內侍二人候劒璽、於御帳西邊、陰陽師反閇、（陰陽師進下給祿）次立御於正南、內侍立左右、

右近將度階下、向日華門、左右大將夾南階立、

王卿列立櫻樹南庭（北上西面）

少納言率主鈴等出鈴、（無闈司奏鈴奏等）寄御輿、

掃部敷筵道　主殿寮撤御輿帊

次將開蔀戸、內侍進、　次將傳取劒璽之

天皇乘御輦（無警蹕）　次置璽筥

東豎子取御插鞋　左右將監舁大刀契等櫃

此間開門（可警蹕）　王卿前行

節旗漸出就宮門外標

次乘輿到宮門（五位以上騎馬、六位以下列待賢門衆之、）

打行鼓

大臣仰外記、外記又仰兵庫頭、

次鹵簿次第行列、至京極京職留下馬、

山城率子弟奉迎

此至頓宮節下大臣就標、諸司列立、

裝束長官以下迎謁於西門外（南邊、東上北面、長和西面北上、可覽鸞路、）
公卿著休息幕（侍輿同）
御輿留西門外、祭主進御麻、（一撫一吻返給）入門、
次第司以下就標　　公卿列立
御御膳幄（經御禊幄北、寄御輿於東面中央間、若時刻至者、先御御禊幄、）
節下大臣令擊鎮陣鉦（召外記令仰兵庫）
大臣前後長官等入門各著幄（近代不必著）
主上御腰輿幸御禊幄（入自西方）、公卿列立、
公卿幄東頭（東面北上）大將不著靴進候、他公卿不進歟、主上自百子帳方入御（近衞次將執翳）
開百子帳後設之大床子、近仗退（御輿近候御幄西邊）
執柄候東面北第一間（南面）中臣女候南第一間中隔屏風西、次公卿就幄南邊地上座、
裝束次第長官同著此座、裝束次官以下著同後座、
次供御手水
主水官人獻之、頭藏人傳取奉之、開百支帳南間西屏風爲路、
主上御百支帳前平鋪座、次宮主參入候幄東南砌上膝突、神祇官以折敷幷祓物等置幄東庭石疊上
薦上、
祭主進御麻（經幄南幄北邊、候幄東面南第二間）
中臣女進取之傳進、御吻後返給中臣女（中臣女返祭主）
神祇官人取御贖物二（本如祭主路）進之
御巫取之又傳進（舊記可獻高坏出不見、而近代如此、）

御巫四人可獻由見舊記、

五位藏人獻執柄御祓物、(衝重)

開幄第二間中隔屛風爲路、

次置公卿以下祓物之、(神祇官人置、安於結筥、)

次宮主奏解除詞了退出、大炊官人散五穀、

神祇官引大麻於公卿座、

御巫撤御前御祓物、次撤關白祓物、

次又駕腰輿、(自此始稱警蹕、大將進候如初、)

還御御膳幄、公卿以下著幄、

此間或參入執柄休息幕、

采女供御膳、(陪膳一人、役供六人、入自御膳幄東南角供之、內膳造酒傳供、)

但不可供夕膳、

若及晴者供御燈、(居於東緣北第二間、五位藏人以下役、)主殿官人奉炬火列御前、(西面北上)行事所立柱松、此間供被御膳、

大臣令奏山城國獻物間、國司員少、近衛等相加使奉仕、(依請付辨若頭申之)

次藏人以圓座一枚置於東面南第二間東緣、

次大臣參入著圓座、山城國司捧籠物列立、(西上北面)

大臣宣、何乃物曾、(天慶例不問)

守以下一々稱物名、大臣宣、膳部爾給へ、

各稱唯退出、大臣退下、

次大臣奏見參、(二通、供二幄東面南第一間、)

內侍取之奏聞、返給、

大臣退出(召中務輔於公卿幄給之、或令外記傳給、)

縫殿寮給公卿以下祿

　執柄御祿頭若行事辨申其由、依仰給隨身、鞾行鼓、次寄御輿還御、輦

雅樂寮奏立樂、至建禮門奉御麻、

還宮儀如恒(警蹕、鈴奏、名對面、留守參議、當公卿後立軒廊南、最後稱名、)

節下大臣者、御輿過間暫立之、

節下大臣幷前後長官立標

大臣令打靜鉦如恒、外記仰兵庫令打、諸衞應之、

　前後長官各進、申諸陣靜了由於大臣、

大臣宣、縱ヨシ、長官次官復本位、

大臣仰外記令打召隊司鼓、兵庫打訖、又仰外記令打解陣鉦、

　同儀(皇后同輿儀)

早旦御沐浴

次公卿以下參陣

次女御代車、列立郁芳門外北掖、(以南爲上)

次皇后出車立其南、(同上)女御代參入之後有行幸、

次御乳母等、幷皇后上臈女房拂曉參頓宮、

次撿非違使佐以下巡撿行幸路、近代必不見、

次被下次第司次官以下可帶劍之由、幷攝政可行列於左近陣內之由宣旨、(依可遂御覽也)

上卿仰大外記

次掃部女官舁大刀契、置於南殿南簀子西第二間、留守上卿并辨兼日被定、仍當日不仰、

次節下大臣出自春華門、著於建禮門外標、必用遲方有文玉旒、大將者番長二人、近衛六人相從、又少納言、外記各一人相從、若自建春門出御、節旗在侍從所北旗三丈云云、

次前後次第司長官以下各著標、御前次第司著美福門內標、御後次第司著不老門內標、近來無件門、量程可立標歟、

次宸儀渡御南殿、內侍取御璽在前後、

執柄并頭藏人等相從如常

次於御帳西陰陽師反閉、先是皇后御於南殿御帳後六尺御屏風內御座、

次右近次將渡東、經階下、

次出御御帳前、內侍立左右、

次公卿列立

右大將渡西、經階下、

次左右近衛引陣

次少納言出鈴印、無奏、

次寄御輿、公卿次將離列就之、

次左右近將監舁大刀契下

次上﨟次將一人進開輦戶、取內侍之所持劍入輦中、

次乘御、不脫靴鞋、仍東豎子不參、輿帷垂之、

次入御輿退、次將、

次次將等下南殿御格子、不下額間、

次皇后乘御（女房并近習人奉御几帳、無警蹕、）

次次將舁閉輦戸、

次開門

次節下大臣令打行鼓

次五位以上皆騎馬

殿上人於春華門騎馬在前陣、宸輿出承明門、（不仰御綱、依神事也、）

次出宮城門、六位騎馬、

大臣召外記仰云、宸輿已近、前陣可催、外記於馬上稱唯催之、行列次第見鹵簿圖、（仍更不記）騎馬內侍以下女官以上、并皇后宮女官女房等相從、

次至頓宮

次雅樂寮奏長慶子

依神事不可奏歟、而近代多奏、

次參議以下列立西幔門外、其南裝束司長官以下北面列立、（長官拂曉參頓宮、行事若參勅散、少時、有宣旨供奉行幸、仍不迎謁、）

其西節下大臣就其標、其北次第司長官以下列立、次車駕欲入西幔門之間、神祇官奉御麻、次王卿入後、節下大臣令打靜陣鉦而入、（記文云、大臣召外記仰可令打鉦之由、外記仰兵庫寮令打、請陣相應云、）

次裝束使、次第使依次入、

次御御膳幄、（經幄南自東面入御、時刻至時、先御御寢幄、而幼主時依不可御皇后此幄、仍建御膳幄、大刀契鈴印等置幄北廂、）

次皇后同下御（奉御几帳如前）

御西薪屋北第一二三間六尺御屏風內

次王卿侍從各著幄座

次供御厨子所御膳、藏人頭爲陪膳、五位藏人役送、先例自西北供之、然而皇后御、自西南可供歟、依或執柄於此所進衡重、五位藏人爲陪膳、先是皇后出車、女御代出車、列立於頓宮北錦幄內、相對立之、皇后南、女御代北、

次御御禊幄、自幄東西入御

大將進候、不著靴、自餘王卿立幄前、

次御百子帳前平鋪座、

次供御手水、頭五位藏人從事、自西屋取傳供之、經御幄西并南、幷東第三間到、

次祭主捧御麻、授中臣氏女、件女本候中隔御屛風西、

次一物一摩返給、祭主授宮主、

次御撫物叠授御巫、四人供之、治部神祇官人奏例贖物、

執柄被候御座北、五位藏人居祓物、居之以衡重、被候御座北、

王卿及裝束司候禊座、在御幄南右近陣前、辨以下在後座、神祇官置祓物、大臣料居高坏、納言以下居折敷、

次宮主就御前南東庭膝突、奏解除詞、禊畢神祇官引大麻、執柄料五位藏人傳奉、諸卿料神祇官行之、

次御禊了大炊寮散五穀幷米、先是件五穀等置宮主座前、大炊官人散之、

次撤御祓物、執柄祓物又同撤之、

次五穀類流之水、或記云、埋砂石、

次還御御膳幄、於御禊幄具間、初稱警蹕、

次王卿著座

次神祇官頒幣帛於近邊諸神、

次內膳司舁御臺盤參入、采女傳取入、自東南角供經幄前、

次大臣令藏人奏山城國獻物、國司不足、加交近衛官人以下令奉仕、

次大臣候御前座、（先藏人敷圓座於東簀子敷南第二間、）
山城國獻物卌棒（目以上井內竪或近衞府生以下取之、北面東上列立、）
大臣問之、各稱物名、大臣仰云、膳部ニ給ヘ、次國司退付進物所、
次大臣取見參付內侍奏之、（治曆右大臣付內侍被奏、承保源右大臣付藏人頭、寬治源左大臣五位藏人、治曆大臣參入於御膳宿付內侍、余二代大臣立南殿門內喚藏人付之、）
返給之後下外記、（承平二年、仲平卿自幄南方參入、跪付內侍云云、）山城守、介、賀茂兩社禰宜預給祿例、
次縫殿寮立祿辛櫃於幄巽角、
次中務輔唱名
次親王以下進祿所給祿、執柄祿行事辨取之、參御膳幄邊申御祿候之由、依仰給隨身、
公卿祿侍從取之、殿上人料上宮取之、（天慶例、一拜後或取手、或被懸頸云云、）
次時剋擊行鼓
次乘輿
次雅樂寮奏音樂（還城樂）
還宮（至建禮門、神祇官奉御麻、）
裝束司留河原
御南殿後鈴奏如恒
次下御作法准初、次將同之、
公卿稱名
留守參議當公卿後、立軒廊南稱名、當宜陽殿南一間、初亦如此、但節下大臣留建禮門外標、
次節下大臣著兀子、（御輿過前之間起座）
次召外記仰云、令打解陣鉦、外記仰兵庫寮令打之、諸陣應之、

次御前次第司長官進申諸陣靜了之由、北面進立申之、其詞御前整司申久、司司靜（奴留）事申給（ヘ止）申、（此事以下近代不見）

次御後長官又同之、大臣云、縱（志）、長官復本位、大臣召外記仰云、令打止隊（乃）司鼓（興、謂諸衞次官以上）兵庫寮打了、又仰外記令打解陣鉦、

〔大嘗會儀式具釋三〕御禊次第

禊モハラヘト訓ジテ、祓ト同義ナレドモ、皇帝、三后、東宮、齋王ナドニハ禊ト云ヒ、常ノ人ニハ祓ト云フ、是モ荒見河祓ト同意ニテ、皇帝是ヨリ清淨ニシタマハンガ爲ニ、是マデノ汙穢ヲ祓除シタマハントテ御禊ヲ爲シタマフナリ、十一月朔ヨリ大嘗會ノ散齋ナルガ故ニ、十月ノ末ニ行ハル、今度（元文三〇年）ハ廿九日ナリ、中古マデハ河邊ニ行幸アリテ行ハル、其鹵簿儀式廣大ナリキ、後世ハ略セラレテ、清涼殿ノ晝御座ニ出御アリテ行ハル、

刻限出御晝御座、

晝御座ハ清涼殿ニアリ、東面ナリ、アラカジメ御座ノ前左右ニ菊燈臺ヲ立テオキ、刻限（酉刻）ニ至リテ御座ニ出御、御座ノ後ノ御簾垂オク、

豫神祇官人、居御贖物於案上置庭中、

此御贖物ハ荒見河祓ノ贖物トハ同ジカラズ、木ヲ以之ヲ作リ、葉ヲ以テ結ブ、必シモ人ノ形ニ模セルトモミエズ、是ハ行事官神祇大祐紀春清（行事官和泉守）調進ス、アラカジメ清涼殿ノ東庭東階ノ巡ニ當リテ葉薦ヲシキ、其上ニ八脚ノ案ヲオキ、案ノ上ニ土ノ高坏ニ贖物二本ヲ供ジ、其上ニ薄絹ノ掩ヲ懸ク、其葉薦ヨリ掩マデ皆西面、少シ南ヘヒヅミテ斜ニ向フ、正シク御座ノ方ニハ向ハズ、又東階ノ下左右ニ立明アリ、左ハ（北）主殿權助重威（小野常陸介）右ハ（南）主殿少允職秀（小野民部少丞）之ヲ勤ム、如此クニ設クルトイヘドモ、今度雨ニ依テ、皆今少シ南ノ方長橋廊下ノ中間ノ絕

間ニ之ヲ移ス、

關白著二孫廂圓座一

今ノ關白ハ一條殿(兼香公)ナリ、孫廂トハ凡殿舍ノ中央ヲ母屋トシ、其廻ヲ廂トス、又其外簀子敷トノ間ヲ孫廂ト云、圓座ハ其形今民間ニ用ユル圓座ノ如シ、但綱綾等ニテ作リ、ウラヲモツケル也、關白ノ圓座ハ御座ノ前右ノ方ノ菊燈臺ノ東ニアリ、關白北面ニ之ニ著セラル、其關白ノ東ニモ御座ノ左右ノ巡ニ各掌燈ヲ供ズ、

中臣女候二便所一

中臣女ハ字ノ如ク、中臣氏ノ女ナリ、中臣ハ神事ニ關リ勤ムル者ナレバ之ヲ用ユ、今度ハ大御乳人之ヲ勤ム、是春日祠官中三位ノ女ニシテ、中臣氏ナレバナリ、便所ハ便宜ノ所ニテ、俗ニイフ勝手ヨキ所ナリ、卽御座ノ左ノ巡北方ノ掌灯ノ東ニ南面シテ候ス、

次供二御贖物一

二本共ニ御前ニ供獻ス、其樣左ノ文ニミユ、

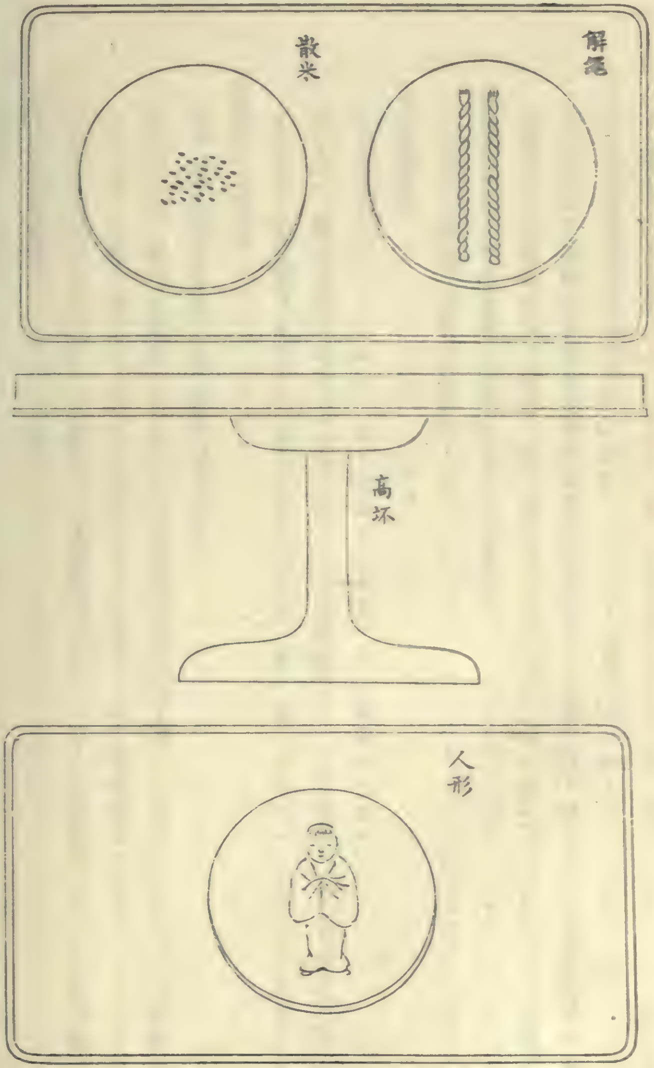
神祇官人取レ之授二御巫一、御巫授二中臣女一、中臣女供レ之、

神祇官人ハ春淸出仕ス、御巫ハ神ヲ齋キ祭ル女ニテ、男ノ祝ニ同ジ、今ノ神子ノ類ニハ非ズ、昔ハ大御巫、生嶋御巫、座摩御巫、御門御巫ナドトテ有テ、各祭ル所ノ神アリ、今ハ御巫絕タルガ故ニ、今度ハ讃岐守利盛朝臣(齋藤左衛門大尉)ノ女ト、右大史盛行(山口中務少丞)ノ女トヲ御巫ニ定ム、アラカジメ兩人ノ御巫御座ノ前ノ簀子敷ノ東ノ端、東階ノ上リ口ノ所ニ御座ノ左右ノ巡ニ當リテ候ス、利盛朝臣ノ女ハ北方ニ在テ南面、盛行ノ女ハ南方ニ在テ北面、兩人對坐ス、神祇官人案上ノ二本ノ御贖物ヲ取テ、兩人ノ御巫ニ一本ヅヽ之ヲ授ク、御巫之ヲ受テ中臣女ノ前ニ至リ之ヲ授ク、中臣女之ヲ受テ御前ニ至リ之ヲ供獻ス、

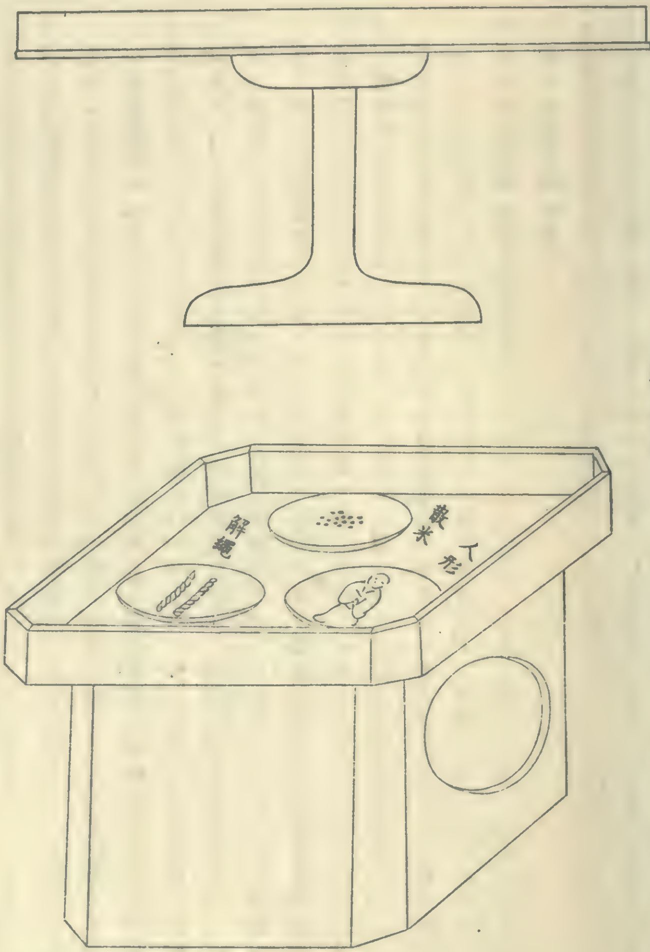
貞享四年大嘗會圖

折敷

御禊之御贖



攝政贖



衝重

次獻御麻

此御麻モ荒見河祓ノ大麻ニ同ジク、常ノ幣ナリ、其獻ズル樣左ノ文ニミユ、

宮主授大麻於祭主、祭主取之授中臣女、中臣女獻之、

宮主ハ神祇官ノ流外ノ職ニシテ、長上ノ官ノ例ニ准ズル者ナリ、今ハ常ニハ宮主ナシ、御禊ノ當日ニ至リテ、奉行ノ職事ヲ以テ宮主タルベキ由ヲ其人ニ宣下セラルヽ、是例ナリ、今度神祇權少副兼成吉田淡路守ヲ以テ之ニ補セラル、兼成初ノ名ハ兼村、貞享ノ御禊ノ時モ宮主ニ補セラレテ之ヲ勤ム、今度モ更ニ補セラル、重熙朝臣庭田頭中將ヲ以テ當日宣下セラル、祭主ハ伊勢大神宮ノ祭主ニシテ、藤波家世々之ニ補ス、今度ハ神祇大副ナリ、藤波三位和忠卿祭主アラカジメ長橋ノ中間ノ絶間ノ西ノ廊上ニ候シテ大麻ヲ受ク、貞享ニハ庭上ニテ之ヲウクト云リ、御贖物ノ供獻畢リタル時、宮主進ミテ廊ノ下ヨリ大麻ヲ祭主ニ授ク、祭主廊ノ上ニテ之ヲ取、中臣女ノ前ニ往テ之ヲ授ク、中臣女之ヲウケテ之ヲ獻ツル、

次一撫一吻後返賜

是モ荒見河祓ノ辨史ノ一撫一吻ニ同ジ、但是ハ中臣女ニ持シメナガラニハ非ズ、天子自取玉ヒテ一撫一吻シタマヒ、畢リテ中臣女ニ返授ケ玉フ、

中臣女取之授祭主、祭主授宮主、

獻ツル時ノ儀ノ如シ

次居關白贖物

アラカジメ御贖物ノ案ノ東南ニ小サキ葉薦ヲシキ、其上ニ八脚ノ小案ヲオキ、案ノ上ニ衝重ニ贖物ヲ供ジ、其上ニ薄絹ノ掩ヲカク、其葉薦ヨリ掩マデ皆西面ニシテ少シ斜ニ南ニ向フコト御贖物ノ案ノ如シ、是モ雨ニ依テ長橋廊下ノ中間ニ移セルコト亦上ニ同ジ、御贖物御麻等

供獻ノコト畢リテ關白ニモ供ズ、其樣左ノ如シ、又江次第ナドニミエタル河原ノ御禊ニハ、此次ニ公卿以下ニモ祓物大麻ヲ引ク、輩御座ノ御禊ニハ略セラレテ關白ノミナル歟、

五位藏人役之

五位藏人ハ顯道（勧修寺右中弁）出仕ス、是モ春清贖物ヲ取テ顯道ニ授ケ、顯道關白ニ供ズ、

次宮主就藤突奏解除詞

アラカジメ御贖物ノ案ノ東北ニ薬薦ヲシキ、其上ニ白縁ノ膝突ヲ敷テ宮主ノ座ト爲、是モ西面ニシテ少シ斜ニ南ニ向フコト、幷ニ雨ニ依テ長橋廊下ノ中間ニ移セルコト、幷ニ上ノ如シ、

宮主此座ニ就テ祓詞ヲヨムナリ、御前ニ參リテ奏スルニハ非ズ、

次宮主授大麻於五位藏人、五位藏人取之進關白、關白取之返賜藏人、藏人授宮主、

關白ノ一撫一吻ヲ書カザルハ文ノ略ナリ、宮主祓詞ヲ讀畢リテ、進ミテ廊ノ下ヨリ大麻ヲ顯道ニ授ク、顯道廊ノ上ニテ之ヲ取、關白ノ前ニ往テ之ヲ進ツル、關白之ヲ取テ一撫一吻シテ顯道ニ返賜フ、顯道之ヲ宮主ニ授クルコト、獻ツル時ノ儀ノ如シ、

次宮主退出、次撤御贖物、次撤關白贖物、次入御、次關白退出　是ニテ御禊ノ儀畢

〔季經記〕御禊

定前後次第司、御前長官ハ中納言、御後長官ハ參議也、前後長官共爲衛府督人ヲ定、不帶衛府之人ハ、當日前後次第司可帶劒宣旨ヲ被下、（當日許事也）女御代事、上古ハ第一女御被參、而第一女御懷姙之間、其以後每度爲女御代、幼主之時關白御供奉之時、令列左近陣內給、長君之時、令供奉御後給、

〔三中口傳（四）〕大嘗會御禊於大床子被行之、而自中比於前之平座有此事、敬神甚之故歟云々、人以褒美歟、

〔類聚國史（八神祇）〕大同二年十月壬午、車駕（○平城）禊於葛野川、緣大嘗事也、山城國奉獻、賜五位已上衣被、

〔日本後紀十七平城〕大同三年十月乙亥、行幸近江國大津、修禊、以御大嘗也、

〔一代要記平城〕大同二年十月乙亥、御禊、但依中務卿伊豫親王事、停十一月大嘗會、　三年十月、又御禊大津、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁元年十月甲午、禊於松崎川、緣大嘗會事也、

〔類聚國史八神祇〕弘仁十四年十月甲辰、幸佐比河、（淳和）○修禊事也、有勅振贍京中窮乏之輩、祓除了御頓宮、陪從五位已上依例賜衣被、

〔續日本後紀二仁明〕天長十年十月辛丑、爲大嘗會將修禊事、行幸賀茂河、鹵簿之儀具如式文、皇太子先在禊處、及聞蹕聲、出幄而立迎謁天皇、禊事畢、御直相幄、賜扈從五位已上大官儀焉、三四舍後、賜五位及神祇官長上以上、山城國司、幷非侍從著當色者祿、各有差、

〔續日本後紀七仁明〕承和五年三月乙丑、散位從四位下池田朝臣春野卒、春野者、天應以往之人也、（中略）○春野宿禰能說故事、或可採容、此十年（天長）○冬、將有大嘗會事、天皇欲修禊、被幸賀茂河、春野以擢爲部頭、奉鹵簿陣、看諸大夫所著當色、其裾曳地、大咲曰、是尋常之裝束、非神事之古體、便指自所著、爲古體之證、其裾離地差高、而袴襴露見矣、諸大夫皆驚云、古之儀制、應與唐同、後代當效之、春野衣冠古樸、身長六尺餘、稠人之中揭焉而立、會集衆人莫不駐眼、嗚々國老如此者今則不見也、

〔文德實錄三〕仁壽元年十月甲子、帝幸鴨川、大修禊事、爲大嘗祭豫除邪穢也、

〔大嘗會御禊日例〕文德天皇（御下大臣常）仁壽元年辛未十月廿六日甲子御禊、廣橋社與下宮少社間、巳四刻出自陽明門、指東至京極、折指北上御座云云、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十月廿一日癸卯、爲來月將奉大嘗會、行幸鴨水、修禊事例也、

〔大嘗會御禊日例〕清和天皇

貞觀元年己卯十月廿一日、御禊四條末、東宮爲內裏、辰四點自西門出南行、自美福門出、到四條大路東折、

〔三代實錄(三十二陽成)〕元慶元年十月廿九日丙申、天皇備法駕、幸鴨水、修禊事、爲十一月將行大嘗會也、

〔三代實錄(四十六光孝)〕元慶八年十月廿八日乙卯、行幸鴨河、大修禊事、天皇踐祚之年十一月修大嘗會祭、先一月、修法駕、建旗鼓、行臨水豐禊之例也、是日聽京城萬民會聚縱觀、山城國獻物、親王已下五位已上賜祿有差、日暮鸞輿還宮、

〔大嘗會御禊日例〕光孝天皇

元慶八年甲辰十月廿八日、三條末、巳四刻經建禮門、美福門等、自二條東行、自三條東行、午三刻著頓宮、午四點御禊、午時雖當魁惡時、而通甲吉時也、還御申四點、方辰方也、

〔西宮記(臨時四)〕御禊

寬平九年十月二十五日、幸三條末東河而御禊、(○臨)了賜祿親王以下五位以上各有差、同供奉妃內親王陪從、賜殿上四位內舍人各一人、今侍從其侍從者被行給祿之事、

〔日本紀略(二朱雀)〕承平二年十月廿五日癸酉、依大嘗會、天皇行幸鴨河有御禊、皇太后(○母后穩子)同輿、

〔大嘗會御禊日例〕朱雀天皇(節下大納言仲平)

承平二年十月廿五日、二條末、(南邊)寅二點打裝束鼓、同四點打列陣鼓、巳一點打進鼓、同二點御出自建春門、南行至美福門、自二條大路東行幸頓宮、四點御禊、申二點還御、

〔大嘗會御禊日例〕村上天皇(節下右大臣實賴)

天慶九年十月廿八日、三條末、(北邊)出建禮門、美福門、自二條東至京極南行、自三條東行御頓宮、日記也、

〔日本紀略(八花山)〕寬和元年十月廿五日乙丑、大嘗會御禊、午刻御出、左大臣(○源雅信)以下參入、右大臣(○藤原兼

家爲₂節下₁、太政大臣息女〇藤原頼忠女諟子爲₂女御₁、

〔榮花物語三様々の悦〕かくて十月〇寛和二年になりぬれば、御禊大嘗會とて世のゝしりたり、みかど〇一條なゝつにおはしませば、御こしにはみや〇詮子母后もろともにたてまつるべければ、みやのおはんかたの女ばうなど、さま〳〵いみじう世のゝしりたり、女御代の御ことなど、すべてよのいみじき大事なり、かくて御禊になりぬれば、東三條のきたおもてのついひぢくづして、おはんさじきせさせ給てみやたちも御らんずそのほどのぎしきありさまえもいはずめでたきに、ひとつ御こしにてみやおはします、みやの女ばうがたのくるま二十、又内の女ばうのくるま十、女御代の御くるまなどそへて、えもいはぬことゞもはまねびつくすべくもあらず、つねのことなればおしはかるべし、ことゞもはつるほどに、攝政どの〇藤原兼家おはします、御隨身どもいはんかたなくつき〳〵しきさまにてうちいでたるに、又御前の人々などやむごとなくきらゝかなるかぎりをえらせ給へり、あなめでたとみえさせ給に、東三條の御さじきのみすのかたはしおしあけさせ給て、四のみや〇冷泉皇子敦道いろ〳〵の御ぞどもに、こき御ぞなどのうへにおりものゝ御なをしを奉りて、みすのかたそばよりさしいでさせ給て、やおとゞこそと申させ給へば、攝政どのあなまさなと申させ給て、いとうつくしうみたてまつらせたまひて、うちゑませ給へるほど、すゞろにみたてまつる人いとゑましうおもひたてまつるべし、さてその日もくれぬれば、大嘗會の御いそぎぞあるべき、

〔大嘗會御禊日例〕三條院節下内大臣公季

寛弘九年〇長和元年壬子閏十月廿七日、二條末、寅二點打₂裝束鼓₁、卯二點打₂列陣鼓₁、午二點打₂進鼓₁、同二點打₂行鼓₁、御₂出南門₁、御禊申二點、還御戌二點

〔大鏡入〕いにしへのいみじき事どもの侍りけんはしらず、なにがしものおぼえて後ふしぎなり

しことは、三條院の大嘗會の御禊のいだしぐるま、大宮〇一條后彰子皇太后宮〇三條后妍子よりたてまつらせ給へりしぞありしや、大宮の一の車のくちのまゆに香嚢かけられて、そらだき物たかれたりしかば、二條のおほぢのつゆとけぶりみちたりしさまこそめでたく、いまにさばかりのみものまたなしといへば、よつぎが志か〴〵、いかばかり御心にいれていどみさせ給へりしかば、それに女房の御心のおほけなさは、さばかりの事をすだれおろしてわたり給ひにしはとよ、あさましかりし事ぞかしな、ものけ給はるくちにのるべしとおもはれけるが、志りにおしくだされ給へりけるとこそうけ給はりしか、げに女房のからきことにせらるなれども、志うのおぼしめさんところも志らず、をとこはえしかあるまじくこそ侍れ、

〔榮花物語十二玉の村菊〕御禊になりぬれば、〇長和五年十月いみじうつねにもわかず、これはなにはのこともあらためさせ給へり、とのばらきんだちの御むまくらゆみやなぐひのかざりまでいみじ、にようごだいにはたかまつどのゝひめぎみ〇藤原道長女寛子、後爲二小一條院女御一、いでさせ給へり、そのくるまのそでぐちかずしらずおほくかさなりかゝやけり、みかど〇後一條わらべにおはしませば、おほみや〇母后彰子御こしにたてまつりたれば、そのほどまねびやらんかたなくめでたし、おほとの〇道長の御ありさまなどきこえさせんにこだいなり、たび〳〵としごろの御けしきにこよなうたちまさらせ給へり、〇中略みや〇彰子のにようばうのくるま、内方のなど、にようごだいの御ともなど、えもいはぬくるま四五十りやうひきつゞきておしこりたり、左大臣にてはおほとの〇道長おはします、右大臣にてはかんゐんのおとゞ〇公季おはします、いづれのとのばらもみなむまにてつかうまつらせ給へれど、大とのはよろづはてゝ、わたらせ給ぬるきはに、又さらに御まへなどえりすぐりて、きずなくきらゝかなるかぎりをえらせ給て、三四十人ばかりつかうまつりたるに、御隨身十二人こどねりの御隨身などむまにのりて、みさきえもいはずまゐりのゝ志りて、われはか

らの御くるまにておはしますはど、すべてまねびきこえさすべきやうもなし、またさばかりめでたきことやはありつる、

〔榮花物語〕三十三きるは佗しと歎女房〕世の中は、御禊〇長元九年十月大嘗會などいひて心のどかなる折なし、〇中略女御代には故式部卿のみや〇敦康親王一品のひめぎみ、〇嫄子との丶うへ〇藤原頼通のことにたてまつらせ給、た丶せ給御禊のありさま〇後朱雀いとめでたし、せんてい〇後一條は廿一年くらゐにおはしまし丶かば、たえまひさしくてめづらしくおもふべし、糸毛にて、女御代はとの丶うへひとつ御くるまにてわたらせ給、またたてまつりたるをはなちて、いとけこがねづくり檳榔十、女房四十人わらは八人れいのさはうなり、いろ〳〵ふたつづ丶にえびぞめのうはぎなどにやありけん、十二三ばかりかさなりたり、しもづかへのかざしたりしなど、なべてのことにはにずおもしろくめでたし、御こしのうちのめでたさ、もの〳〵しくあざやかにめでたくておはしますにも、なはにようゐん〇禎子母后の御ありさまはいみじくめでたきにさしならびおはしまいしは、またいみじかりしことぞかし、大がしら〇頼通などいひて、れいのおそろしげにすぢふときかみよりかけて、さすがにうるはしくてわたる、むまにのりてわたればこ丶ろ〳〵にてや丶といふはどもおかしうちのにようばう十人むまにてつかうまつることそ、いかにけせうにわりなからんといとをしけれ、との〇道長はこのたびは御くるまにてひきおくれてさふらはせ給、一みや〇後冷泉いとうつくしき御なはしすがたにて、まだわらはにて、御めのとたち御くるまのしりにのせさせ給ひて御らんするいとめでたし、

〔江談抄〕一摂関家事〕大嘗會御禊日殿下乘車供奉事
後朱雀院大嘗會御禊之日、始乘ニ御車一令ニ供奉一給也、其後爲ニ常例一也、

〔經信卿記〕治暦四年十月廿八日丁卯、大嘗會御禊行幸也、〇後三條依ㇾ爲ニ留守一、相ニ具少將一巳剋參内、依ㇾ兼承ニ留守一不

（著有文帶、魚袋不具、）口依憚見證自大宮大路至二條、更西折下美福門下入、先是左大辨候殿上、次內大臣（○源師房）參著陣座、左大辨相共同以著陣、內府使口滕奐召辨（正家）被宣云、御輿居東門內不便、人人往反安久濃卜乎云御門中歟、正家申云、依憚雨氣暫居門內候歟、被命云、然者可安北廊中歟、辨稱唯退去、次關白被參、次內大臣被參殿上、又諸卿多以參集、次右府被參陣座、頭中將來滕奐仰內大臣云、次弟司長官以下令聽帶劒者、次召外記、（依大外記不候、少外記參入、）外記參小庭、被宣云、諸司皆參乎、申云裝候、次又被宣云、次第司長官以下可聽帶劒者、親資稱唯出了、此後日景及未、是被尋女御代被出立否之由云云、次左衞門督被申云、女御已被參郁芳門邊之由、仍人人著靴、此間密密相招左少辨、出自美福門、乘網代車、（有下簾）見物、是雖不快之事、爲不經幾路頭偷所向也、見物之後歸參、仰留守史（奉任）令問諸陣見參、申云、左衞門陣尉俊憲左兵衞陣尉候、此外官人不候、但右兵衞陣舍人候由令申者、次參殿上、藏人不候、次向頭中將宿所、（遣曹司北西）使內豎置信、招左少辨聊羞小膳、（自里第所被調送也）次又參殿上、新藏人參候、次神祇官勤仕大殿祭、次僕向陣邊令問神祇官大麻候否由、申候由、亥二點還御、有鈴奏、僕立上卿列後、諸卿名謁之後、稱籍退出了、

〔中右記〕天仁元年十月廿一日丁酉、大嘗會御禊也、（○鳥羽）巳時許、裝束司主典俊寬來告河原御裝束了由、則著裝束、（有文帶、魚袋、）參向河原御所、廻見御裝束大路如長和五年指圖、（今度春日小路末當御所、）但殿下（○藤原忠實）御休幕、（木工寮部屋五間、行事等懸御簾、疊、置幔、本家被立御屏風、東三間爲寶鋋、西二間爲御所、）其北（頭出東）女御代（○攝政忠實女）車立、（幄三間、中間幔、等擬錦幔、）其北立二字幄、爲出車立所、（北一字三間、其北一字七間、皆子午、）其北更東折立二字幄、爲皇后召出車立所、（卯酉、五間、東七間西、）凡皆其後廻簾引幔於西北幔外、諸司幄一宇爲女御代前駈休所、（本家居饗）殿下御所北幄一宇殿前駈料、（皇后出車立所）（無長和記）又西幔外諸陣旗幷鉾等立列、諸衞幄等儲之、（指圖外事也）神祇官來向勤大殿祭、未四點前陣漸來、任行幸圖供奉歟、下官裝束司、次官左中辨、幷判官二人、主典二人、立列西幔門外、（幔門南腋西面北上、手次官一列、判官主典顯入立、異位重行、是長和例也、迎謁西面北上也、用件例也、）前陣次第司長官按察中納言宗通卿來節下、右大將就旗標（少納言家隆相從）前

陣公卿權大納言(經實)右衛門督(能實、不帶弓箭)皇后宮權大夫(顯通)治部卿(基綱)修理大夫(顯季、散三位、今日件人忌日云云、而供奉如何)大藏卿(道良、散三位)左大辨(重資、藤中納言伊實騎馬之間、爲被損留了云云)入幔門內、暫著休息幕歟、或以徘徊近衞陣漸以來、宰相中將二人、忠敎家政爲左右大將代、供奉近幸、(皇后宮(母后今子內親王)御輿、仍著左右幔前方幔頭上也、)西幔門前暫留御輿、神祇少副輔清進御麻、(祭主爲御祈參神宮也、仍用輔清也、在幔門北腋)

裏書

後日問忠敎卿云、宰相中將勤仕大將代之時、御出之間立南階之東面歟、將又如宗任位階列公卿末歟、又取御劍役勤仕歟、答云、只列公卿末也、又取御劍役勤仕也、只路頭行列如大將儀也、

大宮殿御記云、承保元年十月卅日、大嘗會御禊、參議中將(左)基長爲大將代而立、加公卿列、予命之令立直、又還御名對面之間、件基長數刻不稱名、仍下﨟左大辨經信稱名了、此兩事奇怪歟、大將代列立之儀尤可尋知事歟、

或人云、天仁以往大將代勤仕、宰相中將如實大將立南階東面云云、

經公卿幄南東邊公卿列立東庭、北上西面歟、西宮誤歟、寄御輿於御膳幄東中央間、(中少將祗候、治部卿云、御輿可經公卿幄北邊云云、左中辨說南邊也、如何、)此間後陣漸來、後次第司長官參議左兵衞督(不能後列宮、帶弓箭、)來加、諸司各著幄座静了、此間公卿就休息幄、(諸司居寳)皇后宮出車、次女御代御車、(青糸毛)同出車等同立幄中了、光景漸傾、已欲及昏間、(中少將等著)攝腰輿、(淺履相從)公卿居公卿幄東頭、(北上東面)攝政殿奉扶持、宛如周公旦輔成王之儀歟、寄御輿於御禊幄西中央間前、(主殿寮撤御簾)入御之後、立幔如元、從百支帳後方著給於大床子御座、先有御手洗、(頭爲房陪膳、五位藏人二人顯隆、宗忠侯、寬治例也、)次於其東下御座有御禊、此間右大將以下諸卿著祓座、(北上東面)次官左中辨長忠以下判官主典著彼座、予在公卿座也、(座前人人祓物置、神祇官置之、人人若座之後可居也、)先御巫子四人供御祓物、(四折數、供之、角國、)中臣女(折節)傳獻、次神祇少副輔清捧御麻、返給授宮主、宮主取御麻著座、(異角座敷、除突)解除、公卿以下同解除、(殿下御巫子御前、御祓物顯隆居之、)御麻傳藏人辨顯隆奉殿下、返給之後宮主傳輔清、輔清取之捧居諸卿前、每人解除了、

次公卿居庭中如先、此間神祇史召給諸社幣物、（賀茂社祢宜参入也）事了寄腰輿如初、宰相中將忠教候璽劍、乘御之間中少將如初稱警蹕、還御于御膳幄、此間及秉燭、（主殿寮立明、庭燎有光、）次內膳供御膳、右大將依召候御前、（東面前二間程歟、先鋪菅圓座一枚、）山城守俊正捧獻物於庭中、依人數不足、近衞官人以下官史生等相加捧之、卅捧、右大將仰之後歸出付膳所歟、此間公卿祿、（無取傳人、是侍從代所役也、雖相尋臨夜陰不知在所、公卿各取之、無拜舞事、）外記奉見參、右大將進御所南頭付爲房、被奏返給、其後寄鳳輦、還御之間雅樂寮初奏樂、（法皇還御、又御見物云云、御棧敷二條南邊室町東、新宰相俊忠地也、五間檜殿伊與守基隆播磨守長實二人作之也、今朝前齋院大北政所渡給、此棧敷也、誠以過差、女房打出、）後聞還御、於建禮門前神祇官奉御麻、（輔清獻之）寄御輿於南階、先下格子、（中少將等下之）皇后宮入御之後、更上格子、主上入御、鈴奏少納言時俊、有勅答、公卿名對面、（左中將信通問之）

留守藤宰相顯實、權右中辨爲隆、

此五六日以後天霽雨不下、河原地形掃除了、是天之令然歟、可喜可悅、還御之後仰左中辨云、今夜許令行事撿非違使等守護御所、不然者河原之邊有恐之故也、又賑給事慥可令引者、亥時許歸家、

見物上下來談云、供奉諸司人數甚多、女御代過差華麗也、綾羅錦繡耀照路頭、

〔本朝世紀〕康治元年十月廿一日庚辰、左大臣召外記被宣下云、權中納言藤原朝臣公能、可爲大嘗會撿挍者、（○近衞）廿六日乙酉、今日大嘗會御禊也、（○中略）攝政前大相國（○藤原忠通）乘車、自閑路被參頓宮、撿故事、貞觀外祖忠仁公（○藤原良房）騎馬供奉、爾來連綿不絕、今度事又有先例云云、

〔兵範記〕仁安元年十月廿七日丁酉、大嘗會御禊也、（○六條）上皇御棧敷新造、二條南洞院西大路西邊、大宮權大夫俊盛卿造營、去夕御幸上西門院、皇后宮女御殿各渡御云云、

下官於油小路西邊見物

大行遲遲間、院御隨身騎移馬數度馳參大內、又遣仰次第司等、

未剋先陣東西市司渡大路、鹵簿行列如例歟、

次第司等

御前長官權中納言兼右衛門督平重盛卿、次官式部權少輔藤原敦綱、

御後長官參議左近衛中將藤成親卿、次官兵部權少輔藤原光綱、

節下右大臣兼左近衛大將藤原朝臣經、少納言源信康、

右大將大納言藤原忠雅卿被供奉御綱、攝政左大臣藤原朝臣基、供奉後陣、

院御馬被進御室唐鞍、八子雲珠鈴頸總也、被借申北政所歟、

內舍人二人、左右府生二人、騎移馬、番長以下八人步行、

馬副十二人、瀧口勤仕之、

藏人勘解由次官經房　越中權守延俊

六位六人爲入藏人、正員五人、非藏人一人、

四位五位雲客爲侍從代、皆在前陣、

中宮大進貴泰、信國、朝雅供奉御後、

次中宮出車、青紅葉衣出之、

次女御代中納言公保卿女、出車衣、白

但馬守親弘募遷任功出立申了、

衛府督代

左衛門能登守賴實朝臣前兵衛佐

右衛門前近江守實清朝臣同

左近衛前少將國雅朝臣但不見大路如何

右近衛備後守雅隆朝臣前左衛門佐

中宮(○二條后育子、六條母后)同輿、用途雜事、和泉守秀長募重任功調進之、

〔愚昧記〕仁安三年十月廿一日己酉、今日大嘗會御禊、(○高倉)行幸也、(○中略)上皇(○後白河)二條南烏丸東、新造御棧敷有御見物、皇太后宮同令見物給云云、太政大臣、右大臣、皇后宮大夫、各著衣冠候簀子、自餘貴賤連棚夾路、觀者如堵、

女御代、太政大臣養子、實入道大相國(○平清盛)息女、自花山院亭出立云云、

一車青糸毛、貞信公車云云、在鳴院云云、二三車紫毛有前駈、四車金造、已上不出衣、

以下六兩檳榔毛、其内童女一兩、

殿下乘唐車、(上蓆以檳榔、有同綱、皆綱歟、)車副蘇芳褐衣、青半臂下襲朽葉、末濃袴、牛童著褐衣白袴、隨身府生著供奉本陣之裝束、内舍人又同、番長以下褐綸、(左獅子、隔下襲、蘇芳末濃袴、鷲羽平胡籙、右熊、青末濃袴、柳下襲、熊皮羽平胡籙、)前駈廿人、其内有四位云云、

公卿飾劒魚袋、騎飾馬、或馬副接雲□□□(中宮權大夫宗家等騎也)多者不持、諸卿相具舍人二人、但予幷右大辨一人相具也、舍人二人相具事非常事歟、先人被嘲仰之旨留在耳底、然而近代衆人如此、一身倣古事、定類鼻闕猿歟、仍普通之時所相具二人也、然而大嘗會御禊嚴重晴也、已非尋常之儀、一人尤可宜歟、

〔兵範記〕仁安三年十月廿一日己酉、未明參河原頓宮、(裝束如常、還方御付魚袋、)大夫史以下行事官皆候、奉仕御裝束、御禊幄東屋立鳥獸作物、如代代例、内女房三車前行、申刻前陣到來左衞門左兵衞陣之間、裝束司長官資長、次官權右中辨信範、左大史小槻隆職、(雖非列官、追被加裝束司也、)列立西幔門外南掖、(北上西面)判官左少史大江廣盛、少内記中原經長、主典勘解由主典盛季、内藏屬菅野季保等列、下官以下(北上西面)即迎謁列也、御前長官右衞門督時忠、次官式部少輔業實、判官、主典等列立節旗西北、次節下左大臣被著節旗北床子、少納言秦經立其後、外記宗國、同近業其左右、兵庫頭範保立外記後、次左兵衞督成範、參議實綱、家通、敎盛、賴盛、權中納言忠親、實國、中納言宗家、權大納言實房、公保、定房、(已上爲先下臈、)列立西幔門外北方、

(南上西面)神祇大副大中臣親隆朝臣(祭主)候同幔門北掖、皇輿經左衞門陣、列前之比撤西幔門、次入御之間、親隆朝臣獻御麻、御吻了返給、次公卿扈從之後、節下大臣仰外記、令打靜鉦、兵庫頭奉行、次裝束司次第司依次入西幔、御輿經祓幄北、舁居御膳幄東面中央砌頭、五位藏人二人卷上御簾、右近中將實家卿參進、執御劒璽、傳內侍、令安左右置物机、次主上下輿、著御輕幄中倚子、下御簾、公卿著幄座、此間攝政令參給、次依召持參履與於東砌、藏人兼光、光雅又卷御簾□□□候庭上、左大將師長卿右大將(內大臣)被候同左右、主上乘御幸祓幄之間、公卿列立座幄前頭、主殿官人四人(允光方、貞方、屬二人、名右退紅袍、白牛臂、下襲如式文、)暫撤幄西面幔門、(各持幔柱暫立、御輿退如本立、)內藏官人供兩面筵道、自幄中央間西面至于百支帳御後、皇輿寄幄西面、三位中將實家卿、頭中將實守、取御劒璽候前後、主上下御、令入自百支帳後給、攝政令褰帳帷給、主上著大床子、近仗退去、攝政令候東面北一間座給(南面)、節折命婦候南第一間屏風□、(著摺唐衣纐纈裳、目染裙襷比禮、花紋子一、馬司事、自藏人方送之、)公卿著幄南庭中座、內大臣、左大將、實房、宗家、實國、忠親、裝束司資長著之、同次官信範、判官史廣盛、少內記經長、著後座、公卿座清絲帖四枚敷之、北上東面、次官以下座在西、列北上東面、次主水官人舁御手水具、候幄西南角、次供御手水、頭中將爲陪膳、取打敷(先例打敷不見、今度在之如何、)自百支帳後敷大床子上、藏人左衞門權佐經房持參御手水、(貫簀御器著重排手洗上、顧隨便宜、兩度可役數、三物一度重可用立、可依、)藏人少輔兼光持參巾、同大進光雅持御手巾囊、次第畢撤之、(先例或自東面、今度自御後供之、)次獻御笏、頭中將役之、次宮主卜部兼衡候幄東南膝突、次神祇官人以折櫃五合、(大炊寮穀云云)五拌稻折櫃等、置南中嶋小壇薦上、次供御撫物、神祇官調備之、御巫四人(總角闕腋袍、牛比下襲、糸鞋等、公家給料材、)捧之、節折命婦爲陪膳、折敷四枚備之、舊記調貢、近代折敷云云、次祭主親隆朝臣取宮主兼衡所持大麻、經幄南幔北邊東面南第二間砌下、節折命婦取之、獻主上、主上御吻了返給、節折令返祭主、祭主令返宮主、宮主進著、此間獻攝政御撫物、折敷高坏一本、官人持參幄西面、藏人大進取之、開北第二間屏風獻之、置公卿撫物、備葛筥、神祇大祐大中臣永親、少祐同爲貞等役之、下官料同之、(等裝束司座也)判官史以下料官人居之、先例大臣料葛筥、納言以下料折敷云云、

今日大臣以下至于史等皆一同用葛宮如何、次宮主奏解除詞了退出、捧大麻參進幄東面北方、藏人大進傳獻攝政、撫給畢光雅返給宮主、宮主經前庭進公御座、引內大臣以下、大炊寮散五穀、次撤御撫物、御巫四人役之、節折猶爲陪膳、次撤攝政撫物、光雅役之次撤南座引公卿撫物、次召腰輿還御御膳幄、自是初左大將稱警蹕、公卿列立如前、次公卿著幄、裝束司長官不著此幄、依有別幄也、次官又不著侍臣幄、次殿上人著幄饌、次供御膳、采女七人、一人出雲爲陪膳、六人役供、即騎馬輩也、著花釵子、摺唐衣、纈纐裳、目染裙褶、比禮、領巾、紅袴、其儀自東面南一間供之、主上著御、立御箸取三把、次撤之、不供夕膳、藏人少輔還宮之後、於大內可供由仰采女畢、次左大臣召藏人少輔被奏云、山城國獻物之間、國司不足、相加近衞官人、兼光奏聞、仰聞食由、次左大臣起座被參進之間、兼光取菅圓座一枚、敷東面南第二間緣、次左府參著簾外圓座、次山城獻物三十捧、各籠物付枝云々近衞官人捧持列立、北上西面、依前庭狹小二行列立、立定之後大臣問云、何ソノ物ゾ、一々稱名、左府仰云、カシハデニ給ヘ、各稱唯持退、大臣退去、兼光撤圓座、次左府歸著本座、召外記被見參、次如初進立取文杖、參進東面南一間簾下、被跪緣被差入簾中也、奏之內侍傳奏之、左府退立南幔外、次內侍被返出、左府進寄取之退去、於公卿幄東頭下給外記了、傳給中務錄次賜公卿祿、行事史幷史生官掌率祿辛櫃、於公卿座南頭分給、下官取綾大褂一重參進御所幄東南角邊奉氣色於殿下、殿下褰簾令出給、下官持還給御隨身了、左大臣內大臣綾大褂一重、左中將實宗朝臣、左少辨基家朝臣取之、大納言絹褂一領、四位五位殿上人取之、

四位被一條、五位襖子一領、已上雖儲不及分給、鴨社禰宜以下參入、任例給祿了、賀茂社司雖參依無先例不及分給、

御禊之間、頒行路次諸社幣帛如例、左右京職來、行事所物等賑給、差副撿非違使府生三善友忠令分行也、供奉行列等、〇中略

攝政殿令候後陣外給、寄車前駈廿人、隨身上﨟騎馬、物節以下蠻繪、左躑躅下重、面白瑩、裏濃打、右

柳面白、裏青打、手振如例、

左大將隨身下重濃打耳、右大將隨身如殿下、右、

女御代前太政大臣入道女子花山院中納言猶子、爲彼沙汰被出立、

酉一刻御禊畢、還御御膳幄、秉燭之後、次第事畢、戌刻還宮、裝束司留頓宮了、

入藏人五位二人、平絹茜袍闕腋、鄰國下重、已上織著、黑半臂、縮泉綾表袴、巡方帶、魚袋、野劒尻鞘、平緒、著靴、

楚秋不結唐尾、大學助藤賁綱、帶劒之外同兵衞尉、藏人左衞門尉平信廣、供奉本陣、蘇芳袍、織著、織物

下襲、面黄菊花文、單衣青打、是菊也、織著尻、黑半臂、萠黄織物袴、濃打相蘇芳衵、濃單衣、

布帶野劒、水豹尻鞘、平緒藁履巾、唐下鞍、連著楸、緂手繩、差繩、

糸鞋、平胡籙、弓懸、行騰緂、螺鈿鞍、華木、結唐尾、馬、舍人給當色、小舍人童、萌木不具錦色、裝束司長官藤中納

言、付典侍、

上皇幷皇太后宮御見物、二條南烏丸東、新造御棧敷、五間四面屋、後盛[illegible]爲年預役勤仕之、院宮去夕渡御、宮女房三箇

間被打出、皆紅花衣、太政大臣宗、右大臣兼、被候上皇御前簀子、宮權大進親宗一人祗候砌頭云云、

大內留守參議親範卿、左少辨爲親勤之、去月被下定文於裝束司了、藏人學生藤基光同候留守、

〔玉海〕養和二年○壽永元年十月二日己亥、此日自閑院第行幸大內、爲大嘗會御禊○安德也、　廿一日戊午、

此日大嘗會御禊行幸也、三條末此邊○中略後聞今日違例等事、

一未御御禊幄之前、供晝御膳事、

一公卿先列西幔門外、次列御膳幄幔內事、

一獻物無其實、仍折松紅葉等枝代之事、古來未聞、

一狂物一人亂入御膳幄、吐種々狂言事、遂猶得之、然而所書之聞等、皆不快事云云、

一節旗柄折事

廿三日庚申、及晚大夫史隆職來、語頓宮狂男之間事、未曾有之珍事也、誠是亂世之至也、

〔源平盛衰記〕二十八宗盛補大臣并拜賀事

同(〇壽永元年十月)廿二日大嘗會ノ御禊アリ、內大臣(〇平宗盛)先著陣ノ事アリ、頭右大辨親宗朝臣吉書ヲ下シテ次第ノ事ヲ被宣下ケリ、內大臣被供奉タリケルニ、馬沛艾シテ、春日大宮ニテ高クアガリテ走廻ケレバ、路上ニ下立レケリ、見物ノ貴賤異口同音ニ稱美シケリ、實ニ由申敷ゾ見エ給ケル、節下ノ大臣也ケレバ禮服ヲゾ被著ケル、冠際ヨリ始テ、チリ出ラレタル臂持最故有テゾ見エラレケル、

〔玉海〕壽永三年(〇元曆元年)十月廿四日己卯、大將(〇藤原實定)御禊供奉雜事等終日致沙汰、大略沙汰調畢、又以日記等敎訓子細、經房卿明日大將依可騎馬供送也、　廿六日辛巳、大將猶來語昨日事、無殊違例云云、節下不待御輿仰行鼓云云、(近例歟)大將渡御棧敷之時取弓如常云云、節下頓宮幔門外座南面云云、大將已下於西幔門外立替御輿、經公卿幄南東御御膳幄、(通親卿先示合大將、大將答可經北邊之由云云、)又頭中將通資朝臣豫問大將云、(入御幔之後云云)先例時刻至之時、先御御禊幄者例也、而攝政(〇藤原基通)遂供奉御後、相待彼御參可左右歟云云、大將答云、刻限至之時、先御御禊幄雖爲先例、至于皇后同輿之時者無此例、事理又須御御膳幄、然者何必待被參、早天御御膳幄歟者、仍渡御云云、御御禊幄之時、寄御輿於西面、異去去年云云、長元以後多西面也、又北山抄所載如此、而承平天慶下御自東面、安和寄西面、小一條大臣難之、案之上古寄東面、中古以來西面歟、而去去年復古儀歟、今度又逐近例、今日節下作法、頗未練之氣云云、又公卿列在西幔門外、而實家卿入幔內即退出、此作法不足言、賴實卿又同入幔門、渡御御禊幄之時列立其後早出云云、後日定能卿語云、賴實卿示定能卿云、今日無幔內之列如何、定能卿答云、有外列之時無內列、有內列無外列、今日已有外列、何重有內列哉、賴實閉口云云、識者之子不知先例如何、

〔源平盛衰記四十一〕義經拜賀御禊供奉附實平自西海飛脚事
同二十五日〈○元暦元年十月〉ニ、大嘗會ノ御禊アリ、源九郎大夫判官義經本陣ニ供奉ス、色白シテ長短〈タケ〉シ、容貌優美ニシテ進退優ナリ、木曾ナドガ有樣ニハ似ズ、事ノ外ニ京馴テ見エシカ共、平家ノ中ニ、エリクヅト云シ人ニダニモ及ネバ、心アル者ハ皆昔ヲ忍テ袖ヲ絞ル、豐ノ御衣今年ゾセサセ給ヒケル、節下ハ後德大寺内大臣實定公勤給ケル、敷政門ヲ入テ著陣セラレケル形勢、最ユヽシクゾ見エ給ケル、去々年先帝ノ御禊ニハ、節下ハ前内大臣宗盛勤給キ、作法進退優美ニ見エ給シニ、今ハ公庭ニテ再見奉ベキニ非ズト申出デ、淚流ス者多カリケリ、平家一族ノ人々、公事ノ庭ニハ取々ニハナヤカニノミ見エ給シニ、今日ハ一人モ見エ給ハズ、移行世ノ有樣、幾程ヲ經ザレ共、替果ニケリト哀ナリ、

〔自暦記〕建久九年十月廿七日辛卯、今日大嘗會御禊也、〈○土御門〉辰剋爲卿殿〈○記者藤原資經祖父民部卿經房〉御共向棧敷、〈二條南、烏丸西、二條面、〉宰相殿〈○資經父定經〉又渡御、經兼在御共、有連句、及未剋先陣御渡、酉剋許雨彌下、供奉人撩笠、無程又休、御輿御後髣髴見其形不分明、殿下〈○藤原基通〉令渡給之間彌不見、然而遂不被取松明云、未知其躰、女御代節下右大將遲參之間、自然如此云云、

節下權大納言右大將〈頼實、大納言勤仕之例、及度度歟、右大臣依叔父覺成僧正事、爲服解之故也、臨身御□〉

前後長官

御前權中納言兼左衞門督〈通資〉、蒙給隨身六人、〈府芳末遠、番平綱遠、〉自餘如常、院御馬舍人、〈著出衣上下款冬狩〉居飼、

御後參議源兼忠卿〈日來服川宰相中將兼宗頼狀、而依覺成事服解、仍被儲敗也、不兼衞府參議之例、〉

公卿

權中納言忠經卿、〈舍人二人、色色□□〉雜色二人、

權中納言兼中宮大夫公繼卿、雜色二人、

右衞門督實敎卿（隨身帶劔慎羽、無雜色、）

右兵衞督信淸卿（隨身帶劔慎羽、無雜色、）

右京大夫隆保卿（雜色濟濟具之、人以奇也、）

已上三人、散三位、見任公卿加增之時、無人之條如何、

衞府督代

散位隆雅朝臣、右馬頭隆衡朝臣、範行朝臣、（今一人可尋之、院御桟敷一兩町之外不渡云云、）

侍從代

侍從有通已下兩三輩之外、陰陽師醫師六七輩之外不見、

右大將代

二位中將兼良卿（隨身六人、帶劔慎羽、馬副六人、）

先被催三位中將公房、依所勞辭申、而及違亂云云、後日左府禪門被談云、先可被催内方將、先例多如此歟、又非參議中將勤仕有先例、强不可被責一身云云、

八藏人

木工頭源兼定、中宮權大進藤長兼、（已上、此外六位等、五位藏人可尋、）

皇后宮（○後鳥羽后任子）御同輿

雜事大進親國奉行之、其用途被付成功云云、

女御代

右大將賴實卿女、出立被用土左功、其外猶被付成功、予供奉出車、車副六人著褐衣冠、牛童同著褐衣襖袴、

下仕車、地下受領等獻之云云、

供奉諸司數少、其中撿非違使大夫尉明基、尉章廣、章親、公澄、志貴高、府生久忠、（騎馬）白守康等也、

此外一萬判官仲房（平納言、火長如例、入道左府殿被示合殿事也、）

近衞次將中、右少將基忠、（藤大納言隆忠卿息、實蘇芳、表袴、黄半臂、童一人、上下袴令人、上下有例、副嘻晶之間人不見、）

院御棧敷二條南東洞院西、土御門大納言新造、十間檜皮葺屋有御見物、朝間七條院有臨幸、公卿兩三供奉云云、巳剋許上皇有臨幸、（後鳥羽殿上人臨幸等前行、是依亞相命云云、後日入道左府云、步御幸殿上人公卿可在御車後、御隨身物節一人可在御車前云云、是案文）如此、土御門大納言著束帶候御前、權左少辨長房同著束帶候干砌下傍敷皮云云、仍不敷疊乎、依亞相命云云、閑盧簿圖云云、女院御幸御棧敷御服以下色目、（親長注之）

御服

龍膽御衣、十二紅御單、紅打御衣、黄青裏御表著、蘇芳御小打著、

御車後出衣

二色紅單衣

打出六具

上赤色櫨紅葉、青單衣、紅打衣、上白菊表著、龍膽唐衣、白腰裳、

出車三兩

黄青表（裏白）紅單衣、紅打衣、薔薇染唐衣、白腰、

半物二人

上紅櫨紅葉、青單衣、紅打衣、紅打袙、（風物、結紅裳付之）龍膽唐衣、（風物）紅張袴、（腰風物）

雜仕二人

鷄冠木紅葉、裏紅單二藍帷、赤地錦懸帶、（玉衣楯）綾裳（水文實丹畫也）紐懸閉、

河原頓宮進例非一、部屋北方立之、雜帷寸法不叶、堀下板敷云云、御裝束有種種之違失、御裝幄之

處、腰輿蓋取落、更遣取大內之間空短時刻、殿下被勘發、仰裝束使辨宗隆朝臣云云、又還御以前撤御禊幄裝束云云、供奉公卿參頓宮之人纔二人云云、

（玉葉）建曆元年十月十九日丁酉、此日依大嘗會事行幸大內、〇順德 又中宮立子〇藤原 同行啓、予〇藤原道家 共供奉之、〇中略 抑今夜可有名謁、而公卿屈以退出、仍無此事、尤違例也、近代事每事如此、退出時不終名謁退出哉、奇恠云云、　廿二日庚子、後聞、女御代不參頓宮、直自京極歸出立所云云、先例就幄、事未畢還宅故實也、或人談云、今度無四位前駈云云、職事馬毛欲定仰云云、而依院〇後鳥羽 仰停止云云、女御代絲毛、中宮御車也、待賢門院御車云云、依仰先日遣彼家、日者加修理也、歸宅之後返進云云、出車五兩、外童女二兩云云、右大將公房卿女、母故內大臣忠親女也、威儀御馬四疋之外、兼日無沙汰、昨日俄被催云云、又關白被借獻之云云、又自院被獻之、騎馬內侍、越中內侍、少將內侍等云云、命婦藏人等皆院女房被進云云、依今日御祈、兼日公家被行御修法二壇云云、不動東寺長者道尊僧正、一字金輪法印成圓云云、而今日無風雨之難之條、尤法驗也、左衞門督忠信卿於御棧敷前馬馳走云云、引切□□□□云云、於東洞院辻當見物車馬倒地、忠信落馬、但立地云云、即入高三位經仲棧敷、引刷云云、飾鞍皆打破了、甚不便事也、以車參會頓宮也、節旗二箇度顛倒云云、先例吉事云云、元曆又顛倒云云、　廿三日今日雨降尤甚、終日不止、昨日快晴、今日降雨、誠是天神之感應、衆口稱喜了、日來成圓法印奉仕、御祈尤可感事歟、以書札賀遣了、

（業資王記）建曆元年十月廿二日庚子、今日河原御禊也、午剋、行列次第大旨如例歟、院御棧敷二條室町云云、予於二條大宮之邊伺之、列見之間委不見得、可尋記歟、今日云棧敷云車、物見人濟濟焉歟、

裏書

廿二日、御禊、

神祇官行列官人

權大副大中臣隆雅　權少副同親光　權少祐同仲定　大史齋部安友　少史同明高〈○中略〉頓宮御麻使〈祭主能隆卿、依觸穢代云云、〉戸坐竟、則貞代官令沙汰進云云、

〔明月記〕建曆二年十月廿五日、秉燭之程相具少將〈○藤原定家子爲家〉參内之間、人云々、今夜可有御見物、兼告此由、頗可令刷之由有沙汰云々、各周章返遣雜色、令尋尋常裝束、其外事忽難直、人々漸參集、〈○中略〉崇宸殿新造甚以壯觀也、毎事如例、但基忠卿劒璽役言語道斷、諸人歎息、先乍懸裾昇南階檻西、超檻進寄、事了不閉妻戸出額西間、經本路下、加右將上、此間頭中將通方放聲勸發、御輿長追下更召上、次將閉妻戸、是又過分歟、守通昇云々、次歸本列之間、來予下見人々氣色、自後漸加立、非尋常失錯、可悲事也、少納言家時奏了、中將行能問名謁、稱籍退出、經宣仁青瑣門暫在御後、無程退出、内侍所入御訖、今夜入御本殿之間、右頭中將爲家付内侍云々、〈○中略〉今日知長於御前如例歌舞、二品賞翫有恩賜等云云、後聞基忠卿不閉妻戸、取御劒、主上令抑御劒御之間、久而思出閉戸云々、　廿九日、昏黑少將歸來語昨日事、〈○爲家〉等最前早參、帥〈○藤原資實〉著衣冠候御前、其後人々漸參入、奉行職事申右大將〈○藤原公房〉遲參之由、數剋相待、猶遲遲之間、出御南殿、次將皆候在日華門方、仍爲家親通付内侍、次經青瑣敷政門、向日華門著靴、次第如例、右大將參會列立、中宮權大夫殿〈○藤原教家〉劒璽役無違失、出御路頭等存例、直入御御禊幄、安御輿敷板上、左大將北、右大將南、相對坐地、次將向東群居、劒璽役同前、先開妻戸取御劒入、排御屛風置御劒退出、其北間、進御插鞋了、〈入時入中間、依開登也、〉坐置弓所、〈如緣所也、〉次入御、〈御裾人不取〉次頭平卿進璽置之退出、次左右次將引陣、右將在公卿幄南、左將東上南面、御禊之儀了、寄腰輿、宸儀出御、役人如初入中間、取御劒璽置御輿、次乘御、左大將以下警蹕、御裾無奉口參入人之間、通方朝臣置弓欲進寄之間、經通朝臣直又進寄役之、次頭平卿又入取璽安之、入御御膳幄、此間大將已下立替、御劒役同前、先自御輿北昇緣、置弓上御簾、〈突張之〉取御劒直置大床子上、進御插鞋、入御、〈御裾之人不參〉次取璽又置同所、還出垂御簾、此間内侍候左右、而直置大床子、人頗成不審云云、天仁依内侍遲參、次將直置大床子云

云、後日可散不審、寄御輿之間、大將以下公卿皆跪也、慶大將之儀如例、於次將者、只向西群居、次公卿還著幄座、次將引陣、依胡床員少、上﨟少々伺候、西上南面、幄艮其所幄北之第也、非尋常階前之儀、右陣在幄南、退、其陣東上北面云云、是先例也、次將等依催取祿、各著沓取之、相跪授之、爲家二位中納言云云〇中略還御之儀如例、公卿列立之人、源大納言、〇源通光大納言殿、〇藤原兼平少納言家時鈴奏、中將雅經朝臣問名謁、二位中納言顯俊朝臣入御口中將家信時賢付內侍、

〔玉蘂〕建暦二年十月廿八日庚子、此日天皇〇順德臨鴨河修禊、二條南畔爲其所、當押小路末、謂之大嘗會御禊行幸也、往代不必限鴨河云云、但是天長以來記皆以鴨川也、以往可尋、蓋用寬治例云云、〇中略後聞、女御前駈馬毛付不定、待賢門院絲毛、近代貞信公絲毛不被借云云、童女車二兩、花山前右府女、母故能保中納言女也、威儀御馬寮不足、仍自院被獻云云、今日不儲關白休幕、依無供奉也、依今日御祈、兼日公家被行御修法、口圓僧正行道云云、左衞門督代保季於二條堀川落馬、件馬即死去云云、仍不供奉、留途中了、衞府一兩人於上皇御棧敷前落馬云云、節下大臣與節旗之間二丈頗中絕云云、仍自御棧敷御隨身被口節旗云云、還御之時被口付口口口爲不令顚倒云云、今日無口是依寬治天仁例也、保安口口也云云、節下大臣依爲一上不被仰云云、御禊了之後近邊神社分幣物云云、〇中略後聞左衞門督、左兵衞督等、具雜色一兩追前云云、未曾有事也、御前次第司隨身六人、手振八人、馬副八人、御後次第司隨身六人、手振四人、馬副四人具之云云、節下馬副召具瀧口、是長元、治曆、康治等例也、但執柄騎馬之時不具之云云、今度依不供奉具之云云、又手振著半臂云云可尋、長元、治曆、承保、康治不著之云云、

〔百練抄十四四條〕嘉禎元年十月廿日己酉、大嘗會御禊也、姉小路東節下右大臣實氏、女御代右大將家嗣女、祭主代神祇權少輔仲宣朝臣、宮主兼躬修御禊、

〔明月記〕嘉禎元年十月廿日己酉、日出之程行冷泉見物、大嘗用金銅、鐙舌尤至要事歟、馬副用侍之所從等、各一人、手振又用賢寂下人等、已令成冠之間也、向都督宅可待行列時、輦路禁固、辻々不可融雜人車等云々、女房車先

違之間、前殿已渡御由聞之、雖忽出洞院大路、已引塞幔、萬里小路末固由聞之、馳融三條坊門西行（無押小路）高倉北行、入此地（閑地也）、棧敷南面寄車、放牛入口、訖西御棧敷東有纐戸（其内被立御車）、叅人人車立其南、雖路狹構入訖（借鴨光乘狹車）此棧敷殊不法、葺板不合（纐纈所作敷板口不知其體、賢寂又來儲食事等）、○中略京職兵士（廿人相並）適渡、後小小雖見騎馬者、諸司甚少、非如鹵簿歟、神祇官等行粧遠知、恥彈正無敎正音（無禁知者歟）、隼人伎子等過渡、次第司次官式部輔（不見知、馬副手振各四人）左衛門七人（皆入洛武士歟）其裝所負羽、皆以珍重驚目、其第二緒山入道五郎左衛門云云（此入道親昵扶持者也）第五本馬左衛門云云（時郎專一）第七不聞其名、直垂折烏帽子、左右各十人（白黑文紺）（白文左右當官）有相具者、次撿非違使五人歟之中、行範（右近將監行兼子）五位後親、權佐恒氏、頭代家季朝臣、雜口叅持予纛旗（今度此旗不作、榟燭面能調歟）、次兵衞尉歟、二人許左馬權頭兼敎口纛旗、次御前長官別當基實卿、馬副隨身火長看督手振（隨副稱）追前（行幸御前不宜、可在兵衞歟）、次馬寮歟、允白髮、助等不見知、相待節旗之間、實持卿進來（不得心）顯平卿（者懸弓蓄於殿御前、取弓此衞府隨身）馬副四人隨身六人、有親卿、實有卿、大納言已上馬副之外無雜色、于時反照已暗、而路頭不辨色、小小雖有過者不知之、少納言（馬副二人張口、無手振）渡歟、節旗奇行者取之、頻傾危而遲留、大臣已下昏黑（馬副不取松明）手振（不著中督歟）只推量也、威儀御馬近衞府不辨其體、右大將依松明僅見之、御輿過御訖、宰相定雅卿歟（小隨身紅衣不違見）中納言中將殿次將等不能分別、八歲人過間、殿下居飼（松明）進來、前駈不取松明（以知木雜色令取）不相並、一行中絕渡間甚久、御隨身內舍人等歟、總不見、物見懸簾構欄御車、（御車左近衞陣後、永怡御簾御車在兵衞前由聞之）、次纛旗左兵衞佐賴清尉一兩歟、賴氏朝臣依非召同無督代云云、次御後長官、隨身取松明前行、馬副（張口之外）四人、手振八人、皆取松明、愚眼者適似見漢官之威儀、過過又旗衞門督代（不見分）權佐行粧（尋常）正佐尉二三人同輿、出車女御代前駈事被下、只聞其音、其後扶入車中、融萬里小路僅歸廬、

〔平戸記〕仁治三年十月十八日丁卯、今夜行幸太政官廳、大嘗會御禊（○後嵯峨）自此所可有出御之故也、

廿一日庚午、今日大嘗會御禊也、殿下（○藤原良實）早旦令參官廳給、令催行給云云、午刻事具出御、於大炊

御門以南堀河以西立御車、有御見物、御隨身列居御車西方、前駈列居東方、供奉人數太少、就中公卿大納言二人、（公基、實雄）中納言一人、（冬忠）已上三人也、可謂未曾有、御前長官左衞門督顯親、御後長官別當公光卿、次官式部權少輔茂範、兵部權少輔在氏、幕下右大臣殿、以瀧口等爲御馬副、少納言長明、左衞門權佐經俊召具雜色二人、（副路傍行列如常）右衞門權佐資定不具雜色如何、出立等打梨、廷尉行粧逐日零落、可悲可悲、幸路出待賢門南行、自大宮大路到大炊御門東行、自町南行、（爲不臨閑院前也）到二條大路東行、自京極又南行至三條東行、至頓宮云云、裝束使長官二條中納言忠高卿、頭左中辨時高朝臣等許也、女御代（花山院大納言女子）供奉如例、但下仕車闕如云云、仍不見、不便不便、奉行職事不催得歟如何、兼無其沙汰、臨昨日有沙汰云云、然而不叶歟、人人多落馬云云、入夜還御云云、予大炊御門堀川邊構棧敷見物、殿下前駈廿人、不被催滿、纔十五人也、此外事逐可尋記也、

〔伏見院御記〕正應元年十月十九日辛未、今夜幸官司、奉行職事爲兼朝臣奏行幸幷内侍所渡御日時、亥剋關白（○藤原師忠）參、即出南殿、其儀如常、　廿日壬申、明日女御代殊可早參之由仰遣具守卿許、又御棧敷御幸急可申沙汰之由仰西園寺大納言了、女騎馬等實兼卿引進之、賴藤各分遣了、及晩正廳方歷覽之、今夜終夜大風、中宮大夫宿仕、　廿一日辛酉、今日爲禊除幸河原頓宮、卯剋奉行職事賴藤參、次第催促之、巳一點中納言家教卿參、同時關白參、（不追前）此後相續公卿等參、節下左大臣參著仗座、賴藤出陣仰次第司以下假帶劒事、先之供御湯了、内藏寮御服遲進之間數度責之、又女御代數反譴相催、及午半未參、依有例且仰可出之由於關白、即反閉、賀茂在秀朝臣自西方進、先之内侍二人取劒璽立母屋簾外、（母屋庇等御簾垂之也）反閉了陰陽師退出、（給祿歟）次寄輿於正廳後房南面、（兼儲御輿寄也）公卿等列立庭中、（西上北面）無闕司鈴等奏、五位藏人兩人（顯世、賴藤）參進、卷庇中央間御簾、次頭中將宗實朝臣參進開蔀戶、入自階間取劒入輿内、退候西簀子、次乘輿、關白取裾、次宗實朝臣取璽入輿中、出東門之間、節下左大臣著標下床子、鳳輿進北之間、進立伺氣色歟、雜人立停之間不見及、召外記仰行鼓事、次節下已下騎馬、次

將少少於節下前欲騎馬之間、大臣追却云云、持節旗者馬疲、旗重之間度度欲倒、相構渡之、女御代車待立定之間、數刻舁立輿之、院御棧敷（鬧院御所跡也、西園寺大納言造進云云、）北去引幔、供奉人等令渡其內、實隆卿一人祗候簀子、御輿過之間居庭上、雅藤朝臣候砌、申供奉人歟、殿上人等候東方幄、過御棧敷前之後、少將爲敎朝臣落馬、然而無爲云云、權中納言良宗卿所騎之馬頻沛艾、揚面走出之間、不至御棧敷前留路頭、酉半到頓宮、寄輿於御膳幄東面中央間、（地上敷筵）左右大將在幔外、（左居右立、）宗實朝臣進上御簾、開掌戶取劒授內侍、（筵居之也、）爲敎朝臣持參草鞋、下輿之後、宗實朝臣取璽授內侍、（作持璽筥閉掌戶、尤失也、）兩人取劒璽之由見仁治記、仍象仰其由之處、俄如此、宗實朝臣老耄歟、將又奉行不仰含歟、于時關白未參、暫相待之間、家敎卿密密設破子於西面行之、家敎卿爲象朝臣等祗候、頃之關白參之間、卽欲幸御禊幄召腰輿之處、未張畳、乘御之後可張之由、官稱先例申之、次將等申云、乘御之後、御輿長等可奉張之條有其恐、又次將等張之條何時例哉、仍猶象張之、誠可然歟、此間及昏黑、寄腰輿、次將等著淺履相副之、爲象朝臣獻草鞋、宗實朝臣參進卷御簾、取劒璽入腰輿、卽直南行、大將前行、關白進候御輿左頭、寄腰輿於御禊幄西面中央間、（地上敷筵）宗實朝臣進取劒、拔百子帳後屛風、置大床子上南方、（先開屛風之後可取御璽歟）次下輿、不獻草鞋、（此事先例不拜之間、不獻之由關白申之、仁治獻御草鞋之條、勿論歟、如何如何、）著大床子上座、（東面）次爲象朝臣取璽置大床子上北方、（可置御劒柄方歟）閉屛風退、次可供御手水之由關白催之、主殿寮舁御手水案立巽角砌、此事尤不宜、先例每度自西方供之歟、今度儀就關白所存如此歟、奉行職事無申旨、尤不宜、次宗實朝臣進自東方候屛風內、（平敷御座南頭、大床子巽方也、）藏人兵部少輔藤原顯世持參御手洗、（手洗上置貫簀、）自巽方供之、宗實朝臣取之、置大床子上南方、先例於南向供御手水之由、關白申之間忽向南方、（御劒置大床子南方之間、無可置手洗之所、仍自令押遣御劒少北方、）次中盤上置銀器四口、皇后宮大進藤原賴藤持參之、次右衞門權佐俊光持參楾、宗實朝臣取之候、手洗上乍置貫簀聊洗手、（不撤也）次本役人等次第參取御手水具退出、宗實朝臣退出、（於南面供御手水事未見先例、尤不宜、仍以此旨示關白之處、先例也、且仁治如此之由頻申之間、還於南面供之了、奉行職事又同關白所存歟、仁治御手水於東面供之歟、代代東面西面不同也、南面之例何度例哉、供御手水之路、）

〔披百子帳後屏風、羅大床於南頭、自東面供之先例也、自西面供之時、披帳後屏風、其時向西令洗御手也、〕次移著平敷御座、〔東面〕頭中將藤原爲兼朝臣持參笏、即取之持之、次自巽一間巫子四人獻御贖物、節折命婦傳取之供之、〔四折敷、先御手巾、次輿形、次解繩人形居一折敷、次散米、〕次宮主捧大麻持參、祭主取之進東面第一間、節折命婦傳取之獻之、取之一撫一吻之後返給節折、節折給之返給祭主、祭主返給宮主、先是御幣奠物等置河邊、此間居關白祓物、五位藏人等役之、公卿祓物等神祇官人役之、次宮主取大麻參著巽庭軾、奏解除詞、祓詞了間、解繩撫人形、此間大炊寮官人散五穀、數不見、次解除了、宮主付大麻於五位藏人、取之獻關白、撫了返給、次宮主引公卿大麻、次巫子進節折、撤御贖物、次出自御帳西北間、寄腰輿、宗實朝臣持參御草鞋、至還御之時、何可獻之哉、就中宗實八可取御笏、何取草鞋哉、仍追返之間、置草鞋取笏入腰輿、次乘輿、此間稱警蹕、次爲兼朝臣入璽筥、即歸御膳幄、少納言平兼有鈴奏、次可供御膳樣之由、賴藤申之、而仁治度、以久壽例被略之、仍可略之由仰之、此間供腋御膳、陪膳役送女房勤之、此間大臣奏山城國司事歟、不慥聞、大臣著御前座、次獻物列立東庭、〔數度雖促之後、纔三人立之、甚些少、〕大臣問之、各雖可稱物名、都以不稱之、大臣頻雖仰、都以不得其意之體也、數剋之後大臣可賜膳部之由仰之、然而不稱唯、不退出、仍大臣稱可罷出之由、仍退出、大臣起座、次大臣進南第二間奏見參、〔揷杖〕內侍取之、見了返給、大臣取之、右廻而退出、次昇出祿辛櫃、關白祿、爲兼朝臣取之、爲請取之、隨身自北方欲渡御前、關白自簾中鳴笏追返之、仍廻自西面取之、內大臣祿口口取之、內府不拜如何、次節下大臣令打行鼓寄御輿、宗實朝臣安劔璽如初、出西幔門之間、雅樂寮奏立樂、即還宮、事々如例、自今日至大嘗會日神事也、　廿二日甲戌、今夜還里第、供奉人次第會集、亥終駕鳳輿、少納言兼有奏鈴、三位中將冬平卿役劔璽、公卿中宮大夫、洞院中納言、侍從宰相俊定朝臣、〔依爲經路、次許令供奉也、〕內侍所同渡御、其間下地上、今夜右將等不問名謁退出、頻召出之處、敎顯朝臣進出問之了、上﨟俊通朝臣聞可問名謁之由、忽逐電云云、

〔公敏卿記〕文保二年十月十九日、藏人右兵衛佐資明入來、予對面、御禊行幸延引、〔藏人方依無用途行事官故障、仍延引云〕

云、可爲廿七日、就其日時定可爲廿二日、　廿七日、今日御禊行幸也、〇後闕節下左大臣殿、

〔宮主秘事口傳〕大嘗會年十月(被撰吉日)河原御禊、宮主所役事

文保二年十月廿七日甲寅、今日御禊行幸也、自官廳出御宮城東大路南行、自二條大路東行、自京極大路南行、自三條東行、折北至頓宮、(三條以北、姉小路以南、)未刻出御、然而左右大將(左大將内大臣、右大將右大臣家定、)依前後之相論、及秉燭、著御河原頓宮、神祇官人權大副親忠朝臣、權少副隆基、爲香等朝臣供奉、日來隆實朝臣領狀之處、子息隆基朝臣供奉畢、著御頓宮之時、於西幔門祭主隆直朝臣獻御麻、殿下以御車供奉云云、先幸御膳幄大殿祭、少副齋部平與權少副大中臣冬親勤之、次幸御禊幄、左大臣(實泰、節下、)以下諸卿著祓座(御禊幄南、東面北上、)殿下御幄北邊、次御巫三人、戶座童一人、(阿波國卜置戶座童不上洛、公文史生宗繁沙汰之、御巫戶座童以上四人裝束四千疋也、著下御禊奉行藏人佐實明下行之、但中分二千疋被下之、今中分追可被付足云云、)供御贖物、(一前御手巾、一前御輿形、一前人形解繩、一前散米、)付命婦進之、(於御禊幄東第一間進之也、)祭主幷宮主代兼高宿禰(宮主兼貫幼少之間、所相語也、)列立御禊幄巽角邊、宮主代授大麻於祭主、祭主傳節折命婦獻之、返給事同前、宮主著座(顏向巽)勤御祓、其後經公卿上方口御所東西於北面進、殿下御麻、(藏人右少辨資房獻之、)返給之後、引大臣以下(大臣跪引之、納言參議歸居引之、)大麻、以前先神祇官人居祓物於公卿前、親忠朝臣齋部平與多親等役之、祓詞之後大炊寮可散米也、史生氏兼沙汰之、　十一月十一日、祭主隆直朝臣參會談云、去月廿七日御禊條條有違例云云、御麻者供御贖物之後獻之處、先進御麻、次備進御贖物、寬治文應之例之由關白殿御張行云云、尤不審也、又御祓案御禊幄巽角立之處、當主上〇後闕御禊座立之、仍祭主談兼高立直之、然而猶在東方、兼高以雜色立直之、不可然事也、尤仰公文史生可直云云、又云、公卿祓物、今度大臣納言用葛筥、參議用折敷云云、予云、納之葛筥事先例不同也、又予問云、公卿贖物役官人誰誰勤仕哉、祭主云、左大臣贖物役權大副親忠朝臣勤之、其以下齋部平與大中臣冬親等勤之云云、又云、御禊案上公卿贖物等置之間、祭主下知之、不可然事也、可取退之由諷諫畢云云、又云、主上御禊御座紛失之間、面面馳走云云、然而遂求出畢、

〔皇年代略記 光嚴〕元弘二年正慶元十月廿八日甲子、御禊、三條東以北、節下左大臣基嗣、

〔花園院御記〕元弘二年十月廿八日、酉一點淸經參申、毎事無爲已事了、〇中略今日有沙汰事、

大將代勤仕劒璽役事

天仁、忠教卿勤之、仍實繼朝臣勤之、是通房卿年少之間、有違失之恐、仍如此被定之、

直入御御禊幄事

長元例也、今度入夜陰口可有御怖畏之口之由武家申之、仍口口建暦兩度被追長元其例以後口口是聊被通之歟、但長元爲佳例之上、後代例强不可及沙汰、仍如此被定之、

於御禊幄劒璽役事

常例二人也、而今度通房年少之間、實繼勤之上者、璽宮四位次將中可役之歟、上首具兼朝臣也、仍夜前差遣按察宿所、可令執謝之由被仰之、

於同幄劒璽置樣事

常例置大床子北歟、而後鳥羽院御說、御劒不爲跡方、仍隨何所可置東南方、古賢倘不知之、爲秘說之由被仰之、建暦實氏公、以院御說如此置之也、

今日資明卿馬沛艾落馬、但無殊事云云、忠兼卿又馬强梁之間、於路頭下馬更乘云云、勾當內侍所騎馬又頗相聚、然而無爲云云、

〔永和大嘗會記〕永和元年十月廿八日、天皇〇後圓融鴨河に幸して大嘗會の神奮のため祓したまふ、是を御禊の行幸といふ、上古は鴨河にかぎらざれども、天長以來おほくこの流に幄屋をまうけらる、一昨日より官司に行幸有、これ又代代の例なり、後房朝所を御所とす、執柄〇二條師嗣又直廬あり、大閤〇師嗣父良基、曉天より參候せらる、奉行職事頭左大辨宣方朝臣百寮をもよほす、凡此行幸は大儀をおこなひて、千官をさたがふ唐例なるによりて、群臣唐裝をもちふ、天明の程諸司やうやく參

集、未刻に關白參せらる、隨身十人褐をきる、上﨟四人きんらむの袖ひとへをかさぬ、前驅以下つねのごとし、騎馬の先規ありといへども、近例おほく唐車に乘じて幸路をわたる、さだまれる事なり、節下の右大臣又參せらる、兵仗をつがはざるゆゑに衞府長一人めしぐせらる、これも隨分行粧をひきつくろはるゝにや、節下と申すは、節旗の下にてけふ事を行なふ故也、このほか供奉人猶ぐせざるによりて、酉刻に出御あり、先簾外に出給、內侍二人左右にたつ、左の內侍御劍をもつ、關白左の方に候せらる、大殿御後にさぶらひて事を行はる、後房の南面に鳳輦をよす、大將代公卿中將少將御輿にそひてよる、此官廳にては兼て陣ひく事はなし、左大將又參せらる、幔門の左の方にたつ、隨身花をつけ錦をかざる、右大將代右之方にたつ、公卿正廳の北の砌に西上北面にたつ、けふは神事によりて鈴奏はなし、○中略巳に乘御の時、大炊御門宰相中將冬宗劍璽の役をつとむ、左右の內侍劍璽をもつべきなり、但壽永に寶劍西海にしづみし後、しばらく璽ばかりを行幸の時もたせられき、彼例に准じて御劍ばかりをぐせらる、○中略鳳輦乘御の程、關白御裾をとりてたゝみ入、例のごとし、けふは神事によりて諸將の警蹕なし、右大臣陣に付て事を行て、やがて節旗の下にむかはる、少納言秀長朝臣、兵庫頭常成、少外記中原師胤、淸原尙顯、おなじく床子にちやくす、御輿東門をいでゝ、しばらくおさへらる、節下の大臣ゆくつゝみをうたせらる、此鼓は幸路をもよほすべきなり、千官百寮ことごとく騎馬して翠華にしたがふ、其行列かくのごとし、

前陣

左行東市司佑藤原光繼　　左京職亮源兼勝 進和氣行豐

神祇官權大副大中臣實直　　彈正臺少忠安倍遠廣

隼人司正中原康陸　　次第司同次官式部少輔菅原淳嗣

左衞門府尉中原章賴使五位　　坂上明宣使

坂上滿明 市

次第司判官 式部少丞紀重弘

兵庫寮 頭和氣常成

侍醫 丹波泰康 和氣邦成

右馬寮 助藤孝繼

右
西市司 行 佑安倍近範

次第司判官 中務丞和氣助有

次第司主典 中務錄紀眞久

中原章胤 使五位

藤原詮季 勝田

次第司主典 式部錄和氣弘元

少納言菅原秀長

中務省 內舍人和氣弘景

內記局 少內記紀職景

公卿 權大納言藤原公永、權中納言藤原忠光、藤原公定、源通氏、藤原公時、藤原實冬、參木藤原公勝、右兵衛督、

左近衛府 大將藤原師嗣、中將藤原秀興、同親雅、同守數、少將藤原範匡、藤原實直、同顯資、

右近衛府 大將代參木右中將藤原冬宗、中將藤原隆廣、源顯英、少將藤原爲尹、藤原數冬、

後陣

左
藏人 左少辨藤原俊任、勘解由次官平知輔、式部大丞藤原永行、中務丞菅原長遠、兵部丞橘知季、菅原爲守、

非雜色 源康定

武
源氏信 海老名

同長官 權中納言藤原嗣房

權少外記 中原師胤 清原尙顯

侍從代 木工頭和氣房成 內藏助和氣仲繁

大刀櫃

右京職 亮源雅豐 進宗岡興尙

太政官 左大史高橋秀職 右大史三善家連

武
左衛門府 督代宮內卿藤原伊能 權佐藤原經重

源義秀 官

左兵衛府 督代散位平時成 權佐藤原家房

陰陽寮 漏刻博士賀茂在能 大同在俊

節下 九條殿 右大臣忠基

左馬寮 權頭源長繼

少納言平棟信

主殿寮 允伴守春 屬伴安力

右兵衛府督代散位藤原朝有　佐藤原實衡
同主典兵部錄和氣盛佐
大炊寮允清原國賴
次第司主典兵部錄和氣助久
掃部寮允源助貞
同次官兵部少輔平知兼
內膳司奉膳高橋清康
關白殿

次第司同判官兵部丞宗岡行助
縫殿寮允平貞行
右衛門府督代判官藤原爲教、佐官原宮長、　權佐藤原實教、
出納安倍親景　中原職富
次第司長官參木右兵衛督藤原顯保
圖書寮允伴康光　屬源爲重
次第司判官兵部少丞宗岡行春

御路大宮を南へ、二條をひんがしへ、京極を南へ、三條を東へ、河原の頓宮につき給ふ、關白二條堀川に車を立見物せらる、これ又代々の例也、御輿すぎて後陣に供奉せらる、御膳の幄御禊の幄とて、兩所に其かまへあり、御膳の幄は御膳を供せんがため、御禊の幄は御禊の所なり、日くるゝによりて直に御禊の幄に著御、すなはち百子帳の中につき給ふ、此百子帳といふことは、齊高帝百人を容せらるゝをつくる、これより百子帳と申、所謂穹廬の名なり、其後御手水まゐる、陪膳藏人頭長宗朝臣、諸卿禊の座につく、次御祓あり、神祇官大麻をたてまつる、其式つねのごとし、關白以下諸卿みな祓す、祓のものを河流になし、皆舊式におなじ、このほど雨ふりて事のわづらひありといへども、寛和一條院の御禊大雨降しより其嘉例おなじ、雨によりて獻物を略すべきよし右大臣申さる、これ又寛和の例にや、かの度は始終鳳輦にめされたり、腰輿は雨もりて便宜なき故なり、今度は小雨なるによりて腰輿をよせらる、則乘御ありて行列さきにおなじ、官司の後房にかへらせ給て、やがて內裏へ還入せ給ふ、けふの幸路みるものかきのごとし、貴賤のさじき更にひまなし、齋院〇後光嚴わたらせ給はゞ、御棧敷の御幸などもいかに嚴重に侍らんと、いまさら懷舊

を催侍なり、けふより天皇群臣みな神齋を專にして、大嘗會の經營晝夜おこたりなし、

〔椿葉記〕同二年(○永享)十月廿六日、御禊行幸なり、(○後花園)代々院の御棧敷立車などにて御見物ある事なれども、今度は其さたもなし、かやうの行幸ならでは、よそながらも龍顏拜見およびなき身なれば、(○後花園父後崇光)御いかゞしてと思案の所に、室町殿(○足利義敎)より見物申べきよしうけたまはれば、本望のいたりと悅覺侍る、勸修寺中納言(○經成)の亭を公方よりやどに定らる、あるじもかひ〲しくけいめいしていかゞと申さたす、やう〱その時分にいでゝ、二條油小路邊に車を立てをがみたてまつる、行幸の儀式舊例にかはらず、室町殿右大將にて供奉せられしかば、ことさらに嚴重も一段きら〱しくぞ侍る、我君の御代にあひ奉て、拜見申不思議さよとかたじけなきに付ても、まづ悅の淚ぞ落侍し、還幸まで見奉りて夜深て歸る、

〔季連宿禰記〕貞享四年十月廿八日癸酉、自今朝禁裏御神事也、(依今夜大嘗會御禊歟○中略)今夜大嘗會御禊也、(刻限云云、○東山)行幸河原之事今度不及沙汰、於清涼殿東庭被行之云云、堅固密儀也、(凡大嘗會御禊於清涼殿被行事、今度初例歟、)(開局不及參仕、御次第先日廿五日亮仲贈之間記于此、)

御禊次第

刻限出御清涼殿廂御座、若遲昏庭中設庭燎、主殿官人立明、神祇官居御贖物於案上、(置)庭中、攝政候廂座、中臣女候便所、次神祇官供御贖物、(居高坏二本)其儀神祇官人取之授御巫、御巫授中臣女、中臣女供御前座、次祭主獻御麻、其儀宮主授大麻於祭主、祭主取之授中臣女、中臣女獻之、次一撫一吻後返賜、其儀中臣女取之授祭主、祭主授宮主、次居執柄贖物、(居衝重)五位藏人役之、(神祇官人傳之)次宮主就獻奏解除詞、祓詞之間、上下解繩撫人形如常、次解除畢、宮主授大麻於五位藏人、五位藏人取之進執柄、執柄一撫一吻訖返賜本役人、其人取之授宮主、次宮主退出、次撤御贖物、役送如初、次撤執柄贖物、役送如初、次入御、次攝政退出、

一御巫、小女 自行事官重基沙汰出之、衣服可尋記、

一中臣女、禁中下﨟御局右近 被従此役云云、件右近者、平野社司女云云、

一祭主、神祇大副大中臣景忠卿、

一宮主、従五位下卜部兼林、

廿九日甲戌、宮中御神事、今朝令解給之由風聞、

〔壬生家記〕文政元年十月廿九日御禊次第〇仁孝

刻限出御晝御座、豫神祇官人居御贖物於案上置庭中、關白著孫廂圓座、中臣女候便所、次供御贖物、神祇官人取之授御巫、御巫授中臣女、中臣女供之、次獻御麻、宮主授大麻於祭主、祭主取之授中臣女、中臣女獻之、次一撫後返賜、中臣女取之授祭主、祭主授宮主、次居關白贖物、五位藏人役之、次宮主就膝突奏解除詞、次宮主授大麻於五位藏人、取之進關白、關白取之返賜藏人、藏人授宮主、次宮主退出、次撤御贖物、次撤關白贖物、次入御、關白退出、

〔實久卿記〕嘉永元年十月廿九日己巳、今日御禊也、〇孝明 申沙汰雜事、酉刻許殿下令参給、戌刻過於朝餉著御御服、次有御手水之事、次出御晝御座、〇中略 關白被候廂圓座、御禊供御贖物以下、如次第了入御、

古事類苑

神祇部二十

大嘗祭三

古事類苑

神祇部二十

大嘗祭三

〔令義解 神祇 二〕凡天皇即位、總祭天神地祇、（○中略）散齋一月、（謂仲冬之月、自朔至晦、）致齋三日、（謂自丑至卯、其辰日以後、即爲散齋、故下條云、致齋前後、兼爲散齋也、）

凡一月齋爲大祀、（謂上條云散齋一月、即此條稱齋者、皆散齋也、）

〔延喜式 四時祭 一〕凡踐祚大嘗祭爲大祀、

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年十月丁丑、制、稽於前例、大嘗散齋三月也、自今以後、以一月爲限、

〔大日本史 神祇 二〕按本書〇令義解作大祀散齋一月、然據類聚國史、此實大同改制、舊制則三月也、本書蓋係追改、

〔儀式 三〕踐祚大嘗祭儀

十月中旬、（○中略）依神祇官解、太政官下符左右京五畿內諸國司、告知散齋致齋及諸可忌之事、（謂散齋一月、致齋三日、從丑至卯、）其齋月不得預佛齋清食、弔喪問病食宍、亦不判刑殺、不決罰罪人、不作音樂、其忌語、死稱奈保流、病稱夜須彌、哭稱鹽垂、血稱赤汗、宍稱菌、（宍人姓亦同）

〔儀式 四〕踐祚大嘗祭儀

須下諸司諸國官符宣旨例

太政官符中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮內、彈正、左右京、春宮、勘解由、左右近衞、左右衞門、左右

兵衛、左右馬、兵庫等臺、省、職、坊、使、府、寮、五畿內諸國司、應爲大嘗會齋事、

散齋一月、(十一月)致齋三日、(同月丑寅卯)

可忌事六條

弔喪、問病、判刑殺、決罰罪人、作音樂事、(謂習供神之樂、不在此限、)

言語事(死稱奈保留、病稱夜須美、哭稱塩垂、血稱汗、宍人姓稱菌人、)

預喪産、并觸穢畜死産事、(喪忌計日、食宍限月、産并畜死七日、畜産三日、滿限而后祓淸乃參、但不得預祭事、)

預穢惡事(穢惡謂所云天罪國罪之類、皆神之所穢所惡也、)

行佛法事

擧哀并改葬事

右得神祇官解偁、爲供奉大嘗會、自來十一月一日迄卅日、百官五畿內諸國應忌、依例申送忌諸司國承知、依件行之、

〔北山抄五〕大嘗會事

九月、(中略)○此月停御燈潔齋、

依神祇官解下符左右京、五畿內、諸國、告知散齋致齋及諸可忌事、(散齋一月、自朔至晦、致齋三日、自丑至卯、)

〔北山抄二九月〕三日御燈事(同三月)

但伊勢齋王群行之年、給官符京畿及近江伊勢等國、此月停奉燈北辰、(式文)隨無潔齋、大嘗會年又無此事、貞觀元年、元慶八年、仁和四年等例如之、(見三代實錄)而承平二年、天慶十年外記記云、依穢雖无御燈、依例廢務云云、

安和元年、依三代實錄文停潔齋、

〔江家次第三六月〕三日御燈事九月同之

大嘗會年、九月御灯或停之、貞觀元年、元慶八年、仁和四年等如之、長和五年亦如之、安和元年、依三代實錄文停潔齋、或不停、長元九年、治暦四年、延久五年、寛治元年、也、承平六年、天慶十年、依穢雖無御灯、依例廢務、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年九月三日乙卯、停御燈潔齋、以有大嘗會、

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年十一月戊戌朔、頒告百官五畿、豫禁凶事、凡天皇受讓踐祚、七月以前即位者、當年行事、○大嘗會八月以後者、明年行事、散齋一月、致齋三日、齋月之內、豫忌凶惡之事、自餘諸事依式准擬、

〔日本紀略八花山〕寛和元年九月三日甲戌、御燈依大嘗會停止之、但廢務、

〔小右記〕長和元年六月四日庚子、參內、依可始大嘗會行事所著仗座、○中略左中辨朝經進陰陽寮大嘗會行事所雜事始日時勘文、今日、時申二點、若酉二點、○中略主基方史宣理依病不參間、以史善政可召仕事、若宣理死去、長可補也、若宣理病愈參入、依悠紀例有二人、可無殊難歟、同令申左府、○藤原道長小時歸來、日時勘文早可令奏聞、又史事承之有何事哉者、勘文幷史等事令奏聞、仰云、日時勘文御覽了、申時俗所忌歟、酉時可吉者、隨仰之旨了、但忌申日、不忌時者也、史事聞食畢者、奉親事仰左中辨、善政事仰右中辨、但不可給宣旨書、只宣理不參之間可參仕之由可召仰也、今日始行事所之日、不可仰凶惡事之故也、

八月廿七日壬戌、大嘗會事、從今月專始行雜事、只祓淨諸國之使兩度發遣、又自今月、每晦日於朱雀門可有大祓、若是潔齋之甚歟、　九月一日丙寅、早旦沐浴、出河邊解除、大嘗會年不奉御燈之事、諸人不知、余又不知、式文亦有齋王參伊勢之年事、而經四五年見不奉之、此三代實錄文也、具見故殿安和元年御記、爲後聊記件記、注寛弘八年曆、　九月二日丁卯、權左中辨持來、上野國雜物解文、丹波國米解文等、辨朝臣云、作物所預內藏允宇治良明、主基方御物事預仕者也、而被召御齋會行事所、進御周忌佛具勘文、神事佛事相並奉仕如何、予答云、作物所預五人、二人者各預仕悠紀主基御物、一人寄主

基標所、今二人預仕藏人所方大神寶事、仍除彼等、御齋會所事又誰人奉仕哉、大嘗會行事所不可論左右、十一月卅日至以可齋、其外事隨宜可進上歟、辨云、永平記文云、預仕大嘗會事之織手、雖仕御齋會事之由已有所見者、

〔東宮冠禮部類記〕永承元年十一月廿二日戊戌、今月物忌也、然而依有可申、辰刻許參殿、〇藤原賴通仰云、來廿六日東宮御元服延引、來月十九日吉云云、是大嘗會齋月無被行大小諸事之例者、仍所延引也、

〔本朝世紀〕康治元年十月廿四日癸未、法勝寺大乘會延引、依大嘗會以前也、

〔台記〕康治元年十一月廿三日辛亥、師能云、月內散齋也、〇此月十五日大嘗會而殿下〇藤原忠通偕等參入被行御講如何、余申止、所案不可說口日本者神國也、攝行天子之政、齋月行佛事、公私尤有恐、然而不出口外、

〔兵範記〕仁安三年九月七日乙丑、致齋官符、加判令請印、

太政官符、神祇、中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮內、彈正、左右京、勘解由、左右近衞、左右兵衞、左右馬、兵庫等官、省、臺、職、使、府、寮、

應爲大嘗會齋事

散齋壹月十一月　　致齋參日同月中丑寅卯

可忌事陸箇條

一弔喪、問疾、判殺、決罪人、音樂事、調習

一言語死稱奈保留、疾稱夜須美、哭稱鹽垂、血稱赤汗、宍人稱菌人、

一預喪產幷觸雜畜死產事

一預穢惡事

一行佛法事

一舉哀改葬事

右得神祇官解偁、爲供奉大嘗會、自來十一月一日迄卅日應忌申送如件者、諸國宜承知、依件行之、符到奉行、

正四位下行權右中辨平朝臣　修理右宮城判官正五位下右大史兼備前權介小槻宿禰

仁安三年七〇七恐九字誤月七日

〇按ズルニ、此次ニ五畿內諸國司ニ下ス所ノ太政官符アリ、其文同ジケレバ略ス、但喪ニ預リ死產ニ觸ルヽ事ノ條ニ、喪卅日、產七日、畜死五日、食宍三日、皆限日之後、祓潔乃參、但齋散全以禁制トアリ、

〔吉記〕壽永元年九月七日乙亥、左大將被送書狀被示云、大嘗會撿挍猶介補歟、齋月今月致齋之體如何、不異神宮奉行歟、如天仁記者、旬日祓之由有所見、散齋致齋事不分明、近代兼友之說超先例必不可取直歟、予注奉天仁元年八月十一日同九月家記了、

〔山槐記〕元曆元年八月十一日丁卯、召使持來大嘗會撿挍定文、書儀見昨日記、予被定入也、〇中略已奉撿挍、仍立神事簡、自今日僧尼重輕服之輩不可參入、八月十一日、神事淺深、古今不同、人人相異、未存一定、

小野宮右大臣〇藤原實資爲撿挍大納言、彼記云、〇中略

長和元年六月廿八日、今日法興院八講始、觸穢之上、依大嘗會行事不參入、七月廿二日、頭辨云、可被行不斷法華經御讀經之僧名若可下給乎、予答云、行大嘗會事之上卿、可無便歟、仍待他上卿之參入、〇中略八月廿七日、大嘗會事從今月專始行雜事、忽祓淨諸國之使兩度發遣、又自今月每晦日、於朱雀門可有大祓、若是潔齋之甚歟、〇中略

土御門右大臣〇源師房爲撿挍大納言、彼記云、〇中略

長元九年十月八日、大嘗會撿挍、下官中宮大夫替歸家、此日令立不可僧尼重輕服觸穢人來入簡、十日、於殿右衞門督云、忌佛事及服者事、今月內不可然、至來月、自朔日至晦日可忌之、但觸穢之氣

分、雖非來月内内可忌、右府所被談也者、（今案、右府者小野宮也、右衞門督者資平卿也、而小野宮記不參法興院八講、不下御讀經僧名、如此記與資平説相違）歟、卅日、女房渡給山井院、以大嘗會撿挍忌服者也、又家中佛經等奉送他所、（今案、中宮崩、室爲中宮御弟也、）十一月廿一日乙未、送消息右衞門督（資平）案内今日以後僧尼禁忌事、返事云、右府被勤仕件行事之時、今日以後不被忌僧尼、但例念誦從來月一日止、十二月一日、此日始念誦遇僧尼、

大宮右大臣（○藤原俊家）記云

永承元年十一月廿二日、依可參大將殿大嘗會奉行、上卿後齋之事先日承之、而何程殊始念誦可行哉、可尋申關白殿、即參賀陽院申此旨、御返事云、猶今月殊可被潔齋者、又雖可參院、鷹司殿猶可有其憚、仍不參、但依右大臣説、雖不念誦、逢僧云云、然而猶今夜不逢也、

經信爲撿挍宰相、彼記云、

治暦四年八月八日、被定被告、御卽位由山陵使云云、大外記爲長相示口不罷出之由、僕答云、大嘗會撿挍事、山陵使定文可有憚歟、爲長然者、僕罷出了、

爲隆爲行事辨、彼記云、

天仁元年八月十一日、參堀川院、中宮雖御出家人、不可憚之由、戸部（俊明）被談之、凡僧尼又被入門内念誦不僻、九月以後殊可被潔齋者、然而於下官者、自奉行日忌也、廿七日、今日荒見河解除、自今朝殊又潔齋、取髮上之護沐浴、又致私祓、

中御門右大臣（○藤原宗忠）爲撿挍大納言記

保安四年六月廿八日、從攝政殿給御消息、法成寺塔口此左大辨爲隆、往年爲遠江守之時、任遠江所造營也、未終功、依爲本功人造營云云、予進返事云、十一月大嘗會以後可造營畢之由被仰歟、

右粗勘見舊記等如此、小野右府案、六月憚參佛寺、自八月有大祓、潔齋之甚歟云云、中御門右府案、自承撿挍之日立神事簡、而十月卅日忌服者出佛經云云、前後似不相叶、又同記資平卿説、小野右府十

月以前不忌佛事服者云云、而後右府憚參法興院、又相違彼記、大宮右府案、十一月許忌佛事歟、經信案、八月以前忌服者、俊明案、九月以後可潔齋云云、中御門右府案、八月憚造營事、爲隆案、自奉行日潔齋、而荒見川祓日撤髮上之護云云、前後不相叶歟、予兼不尋知此事、先只自聞其告之日立於神事簡、叶土御門右府爲隆卿等案、然而依不審、今日以後雖止念誦、猶不奉出佛經於他所、髮上護、脣護不付身、奉懸居所、傍親僧尼猶在家中、又僧入自小門、於外邊謁之、而於例講者、於西隣令行之、未存一定之間、有駁斑之義也、是又叶彼土右爲隆之所爲、雖古賢如此歟、又々相尋先達、且隨近例可進退也、又將服者除服了在家中、大嘗會御禊除服供奉有例、又有候于廻立殿之例、於十一月者一切可禁之、兼日未案得、抑大嘗會潔齋元三月也、而大同三年改爲一月、仍被載延喜式了、其外更不可忌歟、然而古人奉行人、其心不同歟、雖一定、又九月一日先人、同七日母堂遠忌也、此事難默止、小野右府十一月有忌日、況於九月雖存不可憚歟之由、先賢案不同、不可不申此子細、仍達頭中將(○源通賢)之處、忌日當日之外不可憚云云、老後數月懈怠念誦、雖可爲歎、和光有憑、不可辭事也、　廿二日戊寅、午刻許頭左中辨光雅朝臣來、(○中略)辨曰、(○中略)自國郡卜定日、家中立神事簡、止念誦渡佛經於他所、但本自居住之尼不出之、自行事所始日、每日召陰陽師解除、月水女房殊忌之、自障出來之日過七日令歸入家中、若又引過七箇日者月水止了、過三箇日令入之家室者、移居他屋不出之、旬日并爲事日不見僧書札、輕服人除服之後、雖服日數之內在家中不憚之、是皆隨神祇權大副卜部兼貞說也、故大納言入道(光頼)問兼貞父故神祇大副兼康入道、雖爲悠紀行事一切無記錄、仍思先跡問兼貞也、所召仕之雜色重服、此事都忘却、行事所始日相具之、罷歸之後鼻血出、取者久低如御敎書之昨常有此事、然而當潔齋之時成不審之處、思出此事忽問兼貞之處、申云、可解除也、但件雜色不入門內、路頭相具之不可有憚者、凡神事之體、兼貞說頗緩、大副兼友說殊忌之云云、　廿五日辛巳、大嘗會撿挍神事體、猶未存一定、奉問前大相國(○藤原師家)之處、當月許萬潔齋歟、見土御門記歟、又初齋宮上卿神事重之、大嘗會撿挍神事輕之者、

彼記事見去十一日記、自承撿校之日、立神事簡、而十月卅日忌服者出佛經云云、就之有此仰歟、尤雖可然、猶中間念誦有無不慥歟、雖不念誦、佛經暫置他屋事常例也、件記雖被注資平卿說、實不被注我所爲、不審猶殘之、凡如此事、古今事異、仍以盛房朝臣、相尋神祇大副卜部兼友朝臣、返事云、

大嘗會御神事

一佛經事

可被移置他所、但御讀無憚、

一御念誦事

有憚、但御違忌日、於他所令修佛事、念誦讀經無憚、事了之後可有御潔齋也、

一僧尼事

本自伺候僧尼別屋無憚、但以注連可爲隔、又自立札門不可參入、又於便宜所御對面無憚、

一服者月水人事

雖除服以後、服日數之內伺候有憚、有月水人七箇日（自出來日也）以後可參入也、又同輩裁縫御裝束無憚、但經一宿可有御著用也、

一姙者事

十一月朔日以後不可參入、

一御精進事

每正五九月并六齋日、可居加魚味也、

右大嘗會初齋宮潔齋同事候歟、彼是共差使於京畿七道被祓淸之、又被下言語謹愼、十一月以前者尋常齋、十一月以後者殊潔齋、但解齋大祓以前末日以後可輕之故也者、就之案之、皆是日來存體也、但僧尼居住所引志女事强事歟、前々人々所爲只在別屋云云、仍不用此儀、輕服人日數之內

不可祇候、是又強事歟、一日頭辨稱權大副兼貞說曰、除服之後不可憚者、盛房朝臣殊召仕者也、朝夕致家中之沙汰、件朝臣宿廬小門內在別屋、以兼友兼貞說折中之、自今日彼屋令引志女、不忌來此方事、凡神事者只可守式文、十一月之外不可齋事也、然而古人所爲不同、又兼友兼貞兩人一族也、各申間又不同、是偏不可守一隅、隨宜心中可致勤愼歟、

廿六日壬午、國通云、○中略抑去十日於撿非違使義經宅、故出羽守信兼子息三人、或被殺害或自殺、件穢及院中歟之由有疑、　廿七日癸未、頭辨曰、信兼子息等殺害穢事、○中略先明日大祓者延引之由仰下了、於行事官者、其身雖穢、猶不可解齋之由神祇權大副兼貞所申也、此義實可然歟、同行事所行事官解齋者、又更始行事所、極大事之由所存也者、予所案身已穢了、此間神事之停止強不可忌佛經許、就中古爲撿挍之人、或存致齋一月、件人々存旨不同歟、然身不從神事之程可念誦也、且來月一日、七日雙親御遠忌也、雖恐王事之無盬、猶悲追善之已踈之間、更此沙汰出來、外者乍存天神地祇之禮、內者深有孝養報恩之心、仍自然垂冥鑒歟、仍歸家撤神事簡、至于來月九日可念誦也、　九月三日己丑、今日有御燈御拜云云、大嘗會年九月御燈事、或曰、被停止、有拜、件之年所停止也云云、此說爲可歟、○中略

長元九年八月廿七日經賴記云、自右府被問云、大嘗會年九月御燈奉不如何、令申云、安和元年高明卿被尋件事、外記連量勘申貞觀元年、元慶八年、仁和四年、承平二年等者、共無御燈由、今付此勘文、引勘件年年國史日記等、偏非依大嘗會之停止、皆有他故、此外寬平九年依御燈廢務云云、天慶九條殿御記、出河原祓不被奉歟、安和元年連量雖勘申停止之由、彼年九月三日廢務者、廢務可有歟、止時被行也、依大嘗會總不可有、專不可被廢務、如齋王云云、但貞觀元年依大嘗會無御燈之由注三代實錄、而外記記云、彼年九月主上未著美服、十日內豎奏云云、仁和四年又如此云云、元慶八年穢遍滿之由見外記記、然皆有他故似被停、但寬平寬和皆有御燈、承平天慶有穢不奉者、古今

聞所見如此一定給畢、

江帥年中行事云、有群行年可停止歟、大嘗會年不被停止、勘見此等記、小野右府幷北山抄雖可被停、經頼所勘其理可然歟、又江帥所注同之歟、仍被行之、可然也、　十日丙申、今日又立神事簡、依爲大嘗會撿挍也、依天下穢日來撤之也、　十九日乙巳、今日召權漏剋博士秀長解除、大嘗會事此間奉行、心中聊有不淨、仍所解謝也、　廿三日己亥、午剋許主基行事右中辨光長朝臣送書云、〇中略送返事之後、予輕服事始聞之、落胤女子也、不知之、去六日事云云、不知此事日來行神事極恐也、依輕服辭申之由仰付頭中將、辭申大嘗會撿挍事了、有可奏之返事、命撤神事簡、

〔玉海〕壽永三年〇元暦元年十月卅日乙酉、入夜與大將居改居所、本之大將之居所、丈六佛當時御座、五節之神事雖不忩、與佛同居非無憚之上、女房之中聊有夢想云云、仍所居改也、

〔玉蘂〕建暦二年十月廿一日癸巳、自今日神事立札、忌僧尼重輕服者、不忌女犯月水例也、但近日不見尼公、忩忩坐他屋、強不忌之、　十一月一日癸卯、自今日五節神事也、一說自定日有神事、而宇治左府記、入月之後可神事由有所見也、　四日丙午、自今日神事也、依昨日奉幣事也、日者五節神事也、然者令忌月水女犯也、右大辨宗行來、余依洗髮於簾前謁之、仰云、大嘗會間院中可有御神事、寛治例不分明、然而月次神今食已下諸社祭御神事也、被立神馬、鳥羽院同之、就中今度關白□□□一向有御沙汰、旁可有御神事歟、又云、致齋三ヶ日許歟、一日齋歟、仁和寺法親王重病更發、仍今年必可有灌頂事、仍今日齋有猶豫色云云、余申云、尤可有御神事歟、今度如例年一向有御沙汰、雖無例尤可及豫議者也、而猶有寛治御神事無疑歟、故攝政聊注置之、院中御神事候、神嘗祭前月內齋云云、尤可被准歟、大嘗會以後強不可然乎、且攝政之□□□□□猶有猶豫色、致齋三箇日何有乎、兩箇間在聖斷者、宗行卽歸參了、向攝政左府右府等云云、　六日戊申、傳聞院中御神事不可有云云、被憚保安例歟、松殿被

計申云云、

〔百練抄 十四〕天福元年九月三日甲辰、無御燈之、御禊大嘗會年長元以後度度被行之、今度任上古例被止歟、

〔園太暦〕觀應元年九月十七日、藏人右少辨時光來、木工寮年預親弘服假五旬中也、而御禊大嘗會大神事奉行難治歟之旨、寮頭知任朝臣申之、而又停勘例可爲何樣哉有勅問、予申詞續左、

木工寮年預事、大嘗會寮役頗嚴重神事也、親弘爲重喪身申沙汰、尤可有儀候哉、雖立申傍例、重輕服幷彙日臨期皆可有差異歟、今度親弘五旬中也、自此日數中次第神事雖立代官、爭可足奉行之器用哉、若猶難被改者、大祀已後雖有還補沙汰、先嚴重神事等、以他人令申沙汰候條、可叶敬神之儀候哉、

十月二日、欲參仙洞之處、有女房狀、忩可參云云、仍馳參、予(時秉燭)例不可堂上旨有女房告、仍下地參西面御壺、上皇出御、仰云、只今此所東中門頭犬噉入小死人、有卅日穢珍事也、此上御禊已下事有御迷惑、若可臨幸他所歟可計申云云者、此事驚歎不少、短慮當坐更難奏左右、被仰之法家幷神祇輩、可被左右歟、於他所臨幸事者、玉體已令帶甲穢給之上、臨幸更不可有詮哉旨所存思給候、殊可被經御沙汰歟旨申入之、其後大夫退出、此事被問先例可被經沙汰、且法曹輩幷神祇輩召里第可評議之云云者、其後予以狀申云、神祇法曹輩評議誠可然事也、但如此事執柄尤可被沙汰事也、尤臣非其人之上、輕服日數未過、如此事申沙汰候、旁不相應旨申入之、誠可然口、　三日、傳聞今日官外記、幷神祇官卜部輩、及明法道儒等召、執柄大祀事被仰談云云、　五日、官外記(匡遠宿禰、師茂、淸澄、)神祇官(兼員宿禰、兼豐宿禰、)明法(明淸、明成、章有、)等、勘文被下之、大祀事可申所存之由被仰下候也、○中略

右准據例管見所覃粗注進如斯、凡御禊大嘗會國重事也、廣可有其沙汰歟、院中觸穢之時、御沙汰憚有無、且被尋神祇官、且被決龜卜、宜在治定之左右乎、仍言上如件、

大外記師茂

十月四日

仙洞觸穢間、大嘗會沙汰、可爲何樣哉事、

右件例引勘之處、延慶二年十一月八日、內裏有五體不具穢、(犬喰入云云物)今日行幸持明院殿(仙洞)之間、彼穢同相引院中畢、同十一日大祀奉行辨兩人參仙洞奏事之時、始候中門下庭上申之後、於□□又今日於仙洞有淸暑堂御神樂拍子合□仙洞大祀御習禮延引依穢歟、但密密被遂行了云云、所見如此、將又安和三年五月卜定、同廿九日、右大臣已下參內、被仰外記云、冷泉院有死穢、賀茂祭延否如何、外記申不分明之由、諸卿被議定祭不可延引由、是件穢不及內裏齋院之故也、同四月三日被定伊勢齋宮入御諸司事、同廿二日、賀茂初齋院禊東河入御紫野院、同廿七日被定大嘗會行事所主典以上、此外國郡卜定已後、禁裏仙洞如犬死犬產等之穢者、古今之間其例相存之、然而難比今儀歟、仍不能注載者也、今大嘗會者一代一度之大神事、異他之條今更不及子細之間、齋宮群行等、并諸社行幸以下准據例、廣不及引勘、其上至自餘神事者、禁中觸穢之時、上卿以下於陣外奏事其例勿論、且就大祀事注進他神事等之例、未覺悟歟、今度沙汰之次第、被模延慶例之條何事之有哉、縱雖無先規、綷不可默止之上者、隨時可被立制歟、況已設先蹤、旁不可有巨難者乎、仍注進如件、

十月四日辰時　左大史小槻匡遠(請文○中略)

注進、仙洞穢中、大祀間、何樣可有沙汰哉事、(○中略)

右穢中神事御沙汰之條、准據例如斯、云御禊云大祀、爭可被擱候哉、傳奏參入庭上事頗難計申、尤可有豫儀歟、於門外奏事可宜者哉、兼又延慶二年十一月七日、禁裏有五體不具穢、同九日行幸仙洞、今日神膳御習禮事兼日有沙汰、宮主代兼夏宿禰隨身神膳具等、依觸穢不參入、於神膳具者被召入了、今度儀仙洞許觸穢、不觸及禁裏之上者、御禊以下御沙汰有何事候哉、管見所覃、依仰注進言上如件、

十月四日　神祇權大副卜部兼員

被仰下二箇條○中略

明法之所存如此、以著座飲食爲穢、神祇官所存代々一切令停止通達也、大祀者國家第一之神態也、諸事殊可被經御沙汰歟○中略

右管窺敍草如此、斯上事宜有時議歟、抑大嘗會、伊勢初齋宮、同公卿勅使、同役夫工、已上四ヶ條者、我朝無双之神事也、先門々被立如神事札者、僧尼、重輕服、月水輩不可入來云云、往昔以來、行事辨一切無同座同火之例也、彼是殊可被決群議乎、仍注進如件、

觀應元年十月四日　神祇權大副卜部兼豐

十三日、自仙洞有女房狀、忩可參之旨被仰大夫也、即馳參、即退出、條々有被仰合事、

一神祇輩物忌事任雅意歟、曾一巡之間每事有煩不可然、所詮以飲食著座爲穢限、古來所定也、而仙洞庭上參輩皆爲乙穢之由定申之、隨而行事辨已下不可向傳奏家之旨觸之云云、而於新院御所(自去去日御神事也)參會受取之條、不可有苦之旨計之云云、傳奏可定丙穢者、不依在所同座如何、行事辨可穢之條勿論歟、

十六日、仲房朝臣得還オトラヌ夫入道法師獲麟爲輕服、大祀以下出仕難治歟○中略愚意所存得還官女也、不可有人妻號、可爲妾歟、於妾者或憚神事、或又爲公儀不被憚事、有先例之樣存之、如此臨時勅斷、人主可有自專之條勿論歟、爲尋常時者不及沙汰被召仕候條、雖不可有子細、嚴重神事時分若可有儀歟、若如代官有其器可支朝用者禊齋者、尤大切歟、然無其仁可闕如者、就人主御自專之儀可有計沙汰歟、可在時宜之旨申了、

〔康富記〕永享二年十一月廿日丁巳、主基節會也○中略是日室町殿(姉小路萬里小路東北)御修法(不動法)結願也、著座公卿萬里小路大納言(時房)別當(秀光)新中納言(親光)殿上人中將雅永實雅等朝臣、左兵衛佐永豐朝臣、藏、

人權辨國光、左衞門佐資任、少將資益、藏人廷尉佐政光、六位重仲、懷藤、爲治等參之、此內所職事六位侍中等、今夜著小忌參官、實雅朝臣國司也、今夜又被參官、凡法會參仕人同日巳日出仕可爲何樣乎、又勸修寺中納言(撿按也、卜合也、)可參法會事、先例不審之由被尋、沙汰之至、巳日者雖神事頗似淺、各注進猶有疑、仍彼卿不被參御修法云云、(元曆元、十一、廿五庚戌、院御修法第二七日也、皇后宮大夫實房被參之、山槐記曰、此人大嘗會撿按也、雖事過、月中猶可被憚之歟、後日被命曰、近代大嘗會神事頗疎成了、申合左府之處、奉幣上卿不憚齋、准之不可憚、頗遂修雖默止、仍不審也云云、)

〔季連宿禰記〕貞享四年八月十日丙辰、出納豐州云、攝政殿(藤原冬經)仰云、白川說云、大嘗會參仕人人袍以下之事、縱法事之時雖爲令著用袍、祓淨之後著用之、大嘗會參仕不憚之、然而參大嘗宮幷廻立殿之輩、可有了簡之由有仰云云、　八月廿四日甲午、行事人神齋之事不分明之間、予雖爲悠紀所行事官、不及指神事、然而自今日至十一月、只僧尼、重輕服、月障女房等對面者隔席、不拜佛等、此分今案也、重而任所見可相改、撿按闇神事之事見山槐記元曆元年記、　十月廿八日癸酉、依使者向頭中將基勝朝臣、被命云、大嘗會參仕諸司著小忌分、自來月一日可構神事之由可申渡云云、申承之由、官方兩行事史二人神服宿禰大藏錄等也、此分神事自來月一日可相構之由申送也、　卅日乙亥、參庭田中納言(○重條卿中略)季連神齋日數之事、可爲何樣哉尋申庭田、命云、此事窺攝政殿、自是可示云云、著小忌人人自明朝(朔日)神事也、悠紀主基行事辨二人者、自去八月承行事之日構神事、自餘之行事(外辨)之者不及神齋、少納言幷外記(五位六位等)者依卜食著小忌之故、卜以前者各爲神齋云云、入夜自庭田中納言書狀云、季連神事之事、窺申攝政殿之處、於兩局者神齋可然歟之由攝政殿有仰云云、承之由答申了、自明朝可構神事事也、

〔大江俊光記〕貞享四年十一月六日、仙洞御神事

一佛札佛護等、與佛像佛經一所ニ可被居別殿、

一佛護念珠等懷中、御前へ伺公憚候事、

一法師繪者、愚昧記所見有之候共不苦候事、

一對屋佛像佛經等、他所へ被渡候ニ不及事、但神事女中者、別殿へ可被渡候事、

一於對屋朝夕看經憚之候、尤讀經名號申唱之類憚之候、心念者不苦候、

一對屋女中精進時、居交魚味一種候而、此身不魚食候而可然候、

右之通也、忌詞禁中ト同前、

〔堯恕法親王日記〕貞享四年十月廿八日、從今日宮中御神事也、

一今度被行大嘗會事、公武一人も不甘心、都攝政〇一條兼輝一人之計也、凡大嘗會ハ、備大禮祭神宮之儀也、然ニ此度諸事悉省略、非十分之一也、略ハ非禮、非禮則神不可受之、神不受則不可致福、不致福則應致禍歟、凡衆之心ハ即神慮也、衆已不悅、神不悅明矣、凡如此之大禮ハ、不省不略而可行之則可也、難行之則不行而可也、在難行之時強行之、則勞衆欺神也、勞衆欺神、而行之者何耶、只是爲今後數百歲之人、知何代何時被行之歟、是又非欺後世耶、

一從今夜宮中御神事、僧尼往來禁之、但醫師者著衣冠可出入旨被仰出云云、老輩之醫師等、俄ニツケガミ等、誠ニ可絕倒也、

一宮中ノ屛風障子等ノ繪、有法師者ハ皆撤之、難撤之處ハ以紙張之云云、仰凡神事禁僧尼者天竺之法ニ而、非日本ノ風俗故禁之也、今度張僧尼ノ繪寶聖ノ障子以下、唐人人形ノ有之繪ヲ不張ハ何事ゾ、有髮者ハ皆日本之風俗歟、

一御神事停止寺々ノ鐘云云、鐘聲入耳根不清淨ハ、比叡山、愛宕山、淨土寺山、阿彌陀峯等、從宮中皆見ユル處也、眼根可不清淨、何ゾ是ヲ不停止也、

一從古今和歌集至諸家集等、歌書御覽停止ニ候、哀傷歌幷僧ノ作者有之故云云、凡古今ハ神道無止傳授之隨一也、神道ノ內有穢物かし非不知和歌道而已、抑亦不知神道也、

一諸家參番之輩、衣服等可新調旨被仰出云云、地下輩訴訟、其束帶之具等、每度御法事御葬禮等ノ時、旣令著用之具也、今度衣服等サヘ新調之間、束帶料於令拜領者、可新調之云云、攝政返答候、被ヲシテ著之不苦云云、矛盾相違可絕笑、不可了々々々、

〔續百一錄〕元文三年八月廿六日

從來廿九日、撿按行事辨等神事候、乍然小番出勤ニ候、就夫服者輩不被致同座樣ニ、且於廊下被行合候共、從服者之方被指扣候樣ニ被心得可然候、右之旨、番番ヘ無漏脫可申傳旨、

十月廿七日

來月就大嘗會、從來廿九日朝至來月中御神事候事、御神事中忌詞、貞享四年大嘗會之節之通候事、

築地之內僧尼幷法體之輩往反停止候事、但其形俗體ニこしらへ候て、穩便ニ往反之分は不可苦候事、

同不淨之輩、往反停止候事、

火用心之儀、常常可有御申付候へ共、此節別テ可被入御念候、

〔文政傳奏記〕五月（〇元年）廿七日、主典代輩神齋、天明寬申之時、准行事官可神齋由殿下（〇一條忠良）御定了、此間到大祀期無所役長齋之條不本意之由歎申之間、卯日大嘗宮巡撿之末被加了、今度長齋雖義之趣也、仍申殿下不及長齋、於行事所始者可爲一夜齋、其後解齋有何事哉之由仰了、如此上ハ卯日巡撿之義尤不可有之由命了、

〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年十月廿九日、從今夜潔齋之事、（口口度從今夜神事札出之云云）今度撿按以下兩行事辨、從最初被出之間、准右從最初差出了

〔大嘗會書類〕嘉永元年大嘗會撿按權大納言基豐卿神事心得

僧尼　自本伺候僧尼無憚、但以注連可隔其所、自閑門參入不憚之、（旬幷爲事日不見之）

輕服除服後日數中在家中不憚之、（至十一月者可憚歟）重服一荐憚之、

月水女房　自行事所始日憚之、過七日歸參、月水不止者、止後過三日參入、

一月水人裁縫之服、經一宿可著之、

姙者　十一月憚

右之通任先規治定之由

妻幷乳母重服者、同廓中別棟別居、（別門出入）神事中旬月迄者、御用幷爲私用共、難去用談者貴所勿論、

雖中間內家主淸方江者行向不憚事、

右彼卿今度一分心得之由

以上殿下江被伺之由也

〔輔世卿記〕嘉永元年七月廿六日丁酉、大外記樣へ御使竹中右近、右者手扣を以昨日被仰進候贈位

錄物請取方手續、幷行事御神事中、右御下行帳御連名御連印之事、御准例も有之候間不苦候樣思

召候、然ル處幸今日坊城樣へ御出序御問合之所、於御用之邊者、御重服ニ而も床子之座御同席被

成候位之事、御伺濟之上右准例も有之候はゞ猶更不苦候樣、前大納言樣頭辨樣等御返答に付、御

連名御連印之御覺悟に思召候、乍併其方樣よりも武傳へ其旨猶御問合可然旨被仰進候所、御返

答如左、

御使手扣を以被仰進候御返答之趣、夫夫御承知被成候、猶亦左之通被仰進候事、

一行事御神事中、御贈官位錄物帳へ御連名御連印之事御取調、明和度御臺所御贈位宣下御下

行帳者、右被相憚候得共、於此度者天明七年十月浚明院（○德川家治）殿拜殿上棟影開眼、幷影遷座、

寶塔供養等日時定陣儀御下行帳、行事御神事中に候得共、御連名御連印に候間、此度之儀者、

右准例を以不及御憚候哉に思召候間、右草帳御帳元より武傳方へ御談可被成旨委細御承

習禮

知被成候、併右天明度於御當局者、新大外記樣御行事に而、局務樣右御調印に候得共、其御許

樣御例を以御談可被成候、

〔代始和抄〕大嘗會事

卯日は神膳を供せらる、○中略神膳の事は、陪膳の采女もつはらこれをつかさどる、重事たるに依

て兼日御習禮の事有、

〔玉蘂〕建暦元年九月二日壬子、不出行、中宮大夫公○藤原經被來、今日上皇○後鳥羽御覽官廳、聊有習禮事云

云、宰相中將同被相具、外辨幄、元暦例西上南面、大夫被申云々、人々申不可然之由云々、太尾籠事歟、

猶元暦者一定南面勿論、見定能記也、大夫以家記所被申云々、但今度准朝集堂議北上西面、可改元

幄之由被仰之云々、明日如法可有大嘗會習禮云々、上皇御内辨令勤仕給云々、然開自御所被召宰

相中將、即馳參了、小時歸來云、召舍人音聲、故入道說有聞食旨、尤不審也、委可申也云々、予申云、不可

有別儀、ト字ハ長ク、ネ字ハ短ク、リ字ハ頗長也、末ザマニ天漸出成也、又數尹ム字ハ引放召之由聞

食如何、申云、不可引切、只ツヽキ天可候也、　四日、今日上皇於官廳有大嘗會習禮、資實長兼等雖外

人、口口參入云々、　二年十月廿日壬辰、藤中納言光親卿傳院宣曰、消息、

大嘗會被供神膳間儀、御成人御成○原脫委可有御存知事候、仍可有行幸此御所候也、以吉曜可被

申其儀事候歟、而今月無日次候、來月二日可有行幸之由其沙汰候也、但御禊已後、入月幸他所之

條、聊雖似有先規、且猶非通儀候哉、然强不被撰吉曜、今月只可有行幸候哉、將又猶雖入月被撰日

次可幸候哉、兩樣之間可被計申澄候由、内々御氣色候也、仍言上如件、光親恐惶頓首謹白、

余返事狀如此

行幸間事、依神膳之沙汰、雖可被撰吉曜、今月中無上吉者、被用無巨難日、何事候乎、大嘗會中以前

入月幸他所之例、粗雖有先規、聊可被猶豫歟、以此等趣宜令洩奏給之狀如件、

十月廿日　內大臣

大嘗會以前入月行幸例

寬治元年十月十六日遷幸大膳職、廿二日御禊、廿六日遷御堀川院、十一月十九日大嘗會、（○堀河）也、

自堀川院幸大炊立殿、

保安四年十月十一日幸一本御書所、十五日御禊、十八日還幸土御門殿、十一月十五日幸一本御書所、十八日大嘗會、（○崇德）

仁安四年十一月□日幸閑院、御方違歟、同月十六日大嘗會（○六條）也、

已上余所勘出也

天慶九年十月十八日大嘗會御禊也、同廿二日行幸八省院、發進諸社幣、十一月十六日大嘗會（○村上）也、

安和元年十月廿六日大嘗會御禊也、十一月廿一日行幸八省院、被立伊勢幣使、廿四日大嘗會（○冷泉）也、

平治元年十月廿一日大嘗會御禊也、三十日今夕爲御方違行幸勘解由小路亭、十一月十二日爲御方違行幸勘解由小路第、廿三日大嘗會（○二條）也、

已上大外記師方勘進也

大納言來談曰、行幸間事、松殿近衞殿內府談也、余前中納言等申、來月不可然、今月事宜、何事有哉云々、左右府幷帥卿申、來月可宜之由云々、以仁安例可爲來月二日之由有沙汰云々、小時被歸了、廿一日癸巳、未剋許、大納言被來談曰、行幸猶可爲今月、明後日廿三日行幸院中、一日爲御所、廿五日直可幸大內云々、猶被用余申狀歟、當理可然歟、治曆記殊有御不審云々、小時被歸了、然間藏人民部少輔資頼催明後日行幸可參之狀、申承之由了、　廿三日乙未、此日行幸院也、夜中儀非朝覲禮、爲被申大

嘗會神膳間儀也、成人御時能可有御存知故也、

〔明月記〕建曆二年十月廿一日、藏人少輔資頼來門外、與少將〇藤原爲家定家子同乘參內云々、此次云、明後日廿三日行幸高陽院殿之由俄被仰下云々、〇中略未時許參院、人々云、十一月中他所行幸可憚乎之由忽有沙汰、被問人々、近衞入道殿下〇家實此條如何由事次序驚給、仍被問菩提院禪閤、誠可憚乎、但可被問人々之由申給、仍被問三公左右相府、有先例何事乎之由被申、內府雖有先例、其事不爲吉例、今月宜乎由令申給、叡慮頗在來月、夜前事不切、今夜猶有御案、忽可爲明後日云々、已被仰下了、但還御廿五日、直可御大內云々、此條召仰被仰輦路、而廿三日被仰院御所由、廿五日無音御大內之條又如何、內侍所又非輦路渡御、此等事先例辨沙汰等未聞分、

〔明月記〕嘉禎元年十一月六日乙丑、世間有重事議定等云々、寡后〇後堀河后藤原長子、四條准母、可臨供神物給由等云々、朝士疎遠不聞、〇中略申時許金吾〇藤原爲家來、〇中略母后可臨供神物給歟之間事示合、無例重事更難計申、七日丙寅、供神物后宮御沙汰一定云々、〇中略朝廷新儀事不審之餘、以愚札問前黃門、家光〇中略

一太后可令臨供神物事給由云々、舊例歟今案歟、誰人被申事哉、

此事粗承及、所推今案歟、昨日或人說、漢家例被准據云々、又母后皇胤也、可然云々、

一此間事被問諸道候歟、又不然歟、

不及卿士之上不及諸道歟、只沙汰之趣漏承候許也、長和八歲、其時執柄不候給、今度五歲〇四條、母后扶持何事在哉云々、

今聞此事、被問公卿之名字猶無之歟、我朝初被行事、尤可被問公卿諸道歟、漢家之例若此事歟、東漢和熹皇太后永初七年正月、初入大廟、齋七日、賜公卿百僚各有差、庚戌謁宗廟、率命婦群妾相禮儀、與皇帝交獻親薦、成禮而還、

九日戊辰、職事高嗣語云々、○中略后宮神供事、以頭辨被問師季、答云、此程枉不及申是非云々、

○按ズルニ、母后臨供神物トハ、四條天皇時ニ寶算僅ニ五歲ナレバ、母后習禮扶持ノ爲ニ、式場ニ臨御シタマハントスルヲ云フ、

〔帝王編年記〕二十六龜山文應元年十一月十一日、天皇御幸一院御在所、爲有大嘗會御習禮、

〔實躬卿記〕正安三年十一月十六日辛亥、今夜自仙洞直可有行幸官司、依可有大嘗會也、無人之由被責催之間、戌刻著束帶、卷纓懸老懸、堅固□間、可帶弓箭之故也、□即參御所、隨身□□持胡籙相具、別舍人持蘭尾大滑如恒、此間大嘗會神前□樣等事有御習禮、○伏見上皇○伏見御座、關白○藤原兼基祗候御前、陪膳采女、信乃卜部兼益等被召置、供物次第調進之歟、及子刻出御、寄御輿南階、三條宰相中將公茂役御劍璽、○下略

〔宮主秘事口傳〕大嘗會者、神膳之供進第一之大事也、秘事也、御當職關白殿下又生涯之御大事此事也、仍代々大祀年者、以當家○卜部達々所有御談合也、文應大祀○龜山年、關白殿下○藤原兼平神膳之御故實不可叶之由、于時左大臣○藤原公相被差申之間、縫殿大副兼文宿禰于時祖父大副、年少位淺、及深更著折烏帽子直垂、密密參殿下、令授申秘事云々、但此事又世以無其隱之由、祖父禪門幷先考被口傳畢、末代可止事也、

文保二年大祀○後醍醐之時、後光明照院殿○藤原道平御當職也、于時光明照院禪定殿下被召先考、委細條條有御問答、每事禪定殿下被扶持申之間、無相違也、

正慶之度○後光嚴者、御當職後圓光院殿○藤原冬教也、神膳御習禮之時、宮主申子細不參之間、殿下采女於主上御前被行御習禮、殿下以紙形被書付式目、被擬神膳、被行御習禮畢、大祀當日者、兼豐相替宮主勤悠紀神膳事、又相替主基大使先考令奉行主基神殿事畢、

曆應大祀○光明之時、一條前殿下○藤原經通御當職也、而十一月北政所俄御他界、御輕服御暇也、兼豐大略連日被召門前、乃委細之御問答、爲別勅不可受御輕服歟之由可被申歟之旨、以前宮內卿淸兼朝

臣寄々被仰談、兼豐申入云、大祀日殿下御輕服之例、三四箇度在之、雖爲御輕服御出仕不可有子細候、御祇候官廳之別殿、不可有子細候、但於卯日者、不可有御參神殿候、有御著座別所之幄屋可有御奉行候云々、清兼朝臣柏手令悅喜令安堵、則申入殿下、重被仰下云、日來未被知食之間、御仰天無極之處、於今者御安堵也、早被召出彼記錄所見等、能々可有御沙汰之旨被仰出畢、隨分之高名也、此後諸家之記幷官外記注申、內裏御安堵、武家被悅喜畢、此後連々被召、爲御暇中之間、兼豐賜圓座候庭上、殿下出御御椽、公私以記錄幷次第條々談申入畢、一事以上兼豐申定畢、

文和三年之度〇後光嚴者、二條前殿下〇藤原良基御當職也、十一月八日、依召參殿下、采女二人被召置於御前、任御記被行神膳御習禮、兼豐以紙於御前書付供物等、以此紙形、采女二人令供之、兼豐任次第令扶持之條々無相違者也、是今夜殿下可有御參內、又來十二日者、內裏御習禮也、仍先巨細爲可有御存知也云々、御習禮御雜談及數剋、先自上被下一獻、其後經時剋之上、剩小雪散亂之間、相語勸解由次官季定、執筆也召寄一獻翌日沙汰遣二百匹畢之處、有御感有御入興、此事付宮主、尤可被召兼前宿禰之處、依御疎遠無其儀歟、〇中略次內裏神膳御習禮事、他人不參勤也、宮主一人定役也、御習禮之時之神膳事、先例兩三樣也、延慶度〇花園爲藏人左衞門權佐親時奉行、別勅及度々之間、先考被調獻畢、是爲向後不可然事也、尤被仰內膳司、可被責出事也、或又以紙形書付式目、有御習禮、宮主調進之條不可然事也、

正應以前御習禮之時、宮主不參候也、正應之度〇伏見雖有其催宮主不參、

永仁度、〇後伏見兼淳宿禰相替宮主參候、但神膳之具不及調進也、御硯蓋神膳之名目ヲ被書テ、有御習禮之由、兼顯宿禰語申旨、見延慶之記、

文和度、內裏御習禮之時、兼前宿禰不調進也、

延慶度、先考調進御持參之式目、

鮮物四種
一種　甘鹽鯛（コマカニキリテ、赤大土器ニ盛之、）　一種　鮨鮑（同）
一種　雜魚腊（同、但無雜魚腊之間、アユノスシテキリテ盛之、）　一種　醬鮨（同、但鮨ヲキリテ盛之）

干魚四種
一種　蒸鮑（是モ同キリテ土器ニ盛之）　一種　干鯛（同）
一種　堅魚（同）　一種　干鰺（同）

菓子四種
干棗（同土器一盃ニ盛之）　搗栗（カチグリ）
生栗　干柿
已上赤土器ニ入テ、各四種ヲ大折敷ニ居テ、入長櫃畢、折敷ハ宮ノ儀也、

御汁物二種
鰒　海藻（メノ事也）
鰒一連、海藻一連ヲキリテ、大土器ニ入畢、
以上二盃也、

御飯料
白米　一升　粟　一升
各紙ニツヽミテ入長櫃畢、（中略）○
見色調進隨身如此、於宮主調進者、向後不可然事也、隨而正慶暦應文和等之近例皆紙形也、但爲上被仰内膳司之時者、宮主以此式目守次第可奉行事也、
文和三年於殿下御習禮條々、釆女二人候御前、一釆女者進代官、

兼疊切紙書付式目

一紙ニハ、鮮物四種ト書之、

一紙ニハ、干物四種ト書之、

一紙ニハ、菓子四種ト書之、

已上三色ヲ書テ、以紙一枚テ、擬葛筥シテ四種別置備之、

次汁物二種之紙形ヲ書付〇中略

次以一切黒酒之由書付

次以一切白酒之由書付

已上被召此切紙、殿下被仰含釆女、畢、文保御記委細歟之間、能御心得事也、〇中略

兼疊以次第、無所殘仰含釆女、又殿下有御問答、所詮代々次第記錄、兼日ニ見被之可加了見也、

〔後法興院記〕文正元年十一月十五日癸未、傳聞、去十三日夜、於禁中〇後土御門有大嘗會御習禮云々、

〔大江俊冬記〕天明七年十一月廿三日、大嘗會御習禮也、〇光格午刻各可參兼日傳奏奉行より被示處、俄依被急、辰刻過追々參仕、今日依雨下、自廻立殿到嘗宮、設假廊下、仍入夜有御習禮、内々出御廻立殿、先御手水供進內見、御陪膳頭羽林口長、右中辨、役送大江俊冬等也、尤出御ナシ、次出御悠紀殿、殿下令候御後給、傳奏奉行、傳奏議奏職事六位等候庭上、暫時而入御、〇嘗殿出御中、陪膳後取等悉候御前、

一今朝諸司出仕、嘗殿已下如御當日設之、

一入御之後、神饌自柏殿到嘗殿、行列內見陪膳釆女六位侍中扶持之、釆女十人、降內侍所南階到柏殿、〇先降南階、自廻立殿東ノ方幕仕切、經南殿前庭、到柏殿、

一菅蓋主殿寮舁、令持參、雨下故不被試也、

一內見等相濟、諸司撤却、退出申渡則退出、

廿四日、今日臣下内見也、辰半刻各參仕、

一營殿兩宮幌出納依二舊例一、臣下内見設レ之、但古物也

一南殿飾會御裝束悉調レ之、左府公已下卿相雲客殿庭内見、所司同レ之、

一菅蓋命二主殿寮一令二持參一、執綱執蓋設レ之、

一内見相濟、巳刻過退出、

〔壬生家記〕文政元年十一月十七日、今日大嘗會御習禮、○仁孝卯刻束帶著用ニ而出仕、昨日取片付候案幷和妙荒妙籠等、如二昨日一設置之事、 十八日、今日大嘗會内見ニ付束帶著用出仕、昨日取片付御物、昨日之通設置之事、○中略

一午半刻許内見被レ始、今日御巫猿女不參故、神祇大祐其替可レ勤ニ付、前行中臣、次忌部、次御巫猿女、大嘗宮北門より入て悠紀殿ニ行幸、中臣忌部御巫猿女、御殿簀子下巽之方ニ平伏、御殿江入御後同所ニ候之事、

一廻立殿幔仕切外迄沓著、行幸之前幔内入時沓撤之事、

一遷幸同前、主基者被レ略之事、

一廻立殿、中臣忌部代率二内藏官人一、御幞頭御服設之事、

諸大夫間ニ而請取、月華門ヲ經テ、大嘗宮柴垣北ヲ通リ、廻立殿南階より中臣忌部内藏官人二人ヲ入引、中臣御幞頭ヲ取テ御座坤方江設、忌部御衣ヲ取テ其末ニ設、内藏官人等兼中合之事、

一悠紀殿江供御御單御衾之事、先大嘗宮東鳥居より入、案上楊箱、縫殿大藏官人二人舁テ中臣忌部ニ相從、中臣忌部入レ殿、官人内ノ幔之外迄持參、中臣忌部取レ之、先御衾敷之神座上次御單供之同上、官人空箱ヲ取テ退、元案上ニ置、次神祇官人許、御檜扇御櫛之楊筥、打拂布之脇ニ供レ之、東座東次御沓楊

卯日祭

臺取、（神座御枕供之）

一和妙荒妙者、南簀子入口東、木工寮案其上設之、和妙者宮主卜神服宿禰代供之、荒妙者忌部代兩人供之、

一廻立殿御蹀頭御服等、悠紀相濟、内々入御之後設替之事、

一掃部頭神座設候者、直ニ御單御衾以下和妙荒妙迄供、直ニ廻立殿之御服等可供旨、六位衆ヲ以被命候事、

一御巫猿女等、内侍所南階より進、廻立殿南階之下迄召連可參旨、六位衆被申合置之事、

一凡申半刻頃、行幸之内見相濟候事、

一申半刻後相濟退出、昨日之通撤却之事、

廿日、今日大宮司中臣習禮ニ付、辰刻束帶著用出仕、何角申習禮相濟、午刻頃退出之事、

〔行厚記〕文政元年十一月十八日、大嘗會卯日以下御内見ニ付、辰半刻出仕、予裝束職事早參體也、未刻頃被始御内見、殿下（一條殿）前行、大臣（近衞殿）以下公卿殿上人地下之輩、一同庭上ニ參集、先廻立殿ヨリ悠紀宮殿ヘ渡御之儀、御習禮有之、夫ヨリ小忌群臣以下著座、開門奏、國風、次ニ大忌公卿以下就庭中版儀、次ニ柏殿ヨリ神饌行列供撤之儀、了廻立殿ヘ還御之儀等ニ而、御習禮相濟、外記史共所役無之、兩局以下庭上ニ相詰候而已也、

辰日以下節會之儀者、御習禮無之、御申合而已ニ而相濟候由、依之廣橋辨殿ヨリ、行事之輩所役之儀、折紙貳通ニ書付被相渡、朝山已下ヘ廻達可申入、廻覽相濟候ハヾ谷口ヨリ直ニ可返上、且又不審之儀、并可相窺筋合有之候ハヾ、今日中ニ非藏人口ヘ參リ可相窺旨、予ヘ被申渡、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

卯日平明、神祇官班幣帛於諸神、（預祈年祭上神）座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、

四座置一束、八座置一束、楯一枚、槍一竿、褁葉薦五枚、庸布一丈四尺、（前神除布）是日中臣官率卜部、於宮内省卜諸司小齋人、訖各還私舍、沐浴齋服赴集、○中略申時以前内辨已設、主殿寮供奉浴湯、（巳時大齋、酉時小齋、）時剋悠紀主基共發自齋場、詣大嘗宮、（悠紀自宮城東路、主基自西路、共南行、）其行列也、神祇官神部四人前行、（著青摺布衫、幷日蔭鬘、執著木綿賢木、分左右、神祇官行列縫服案以上者、未到朱雀之間、只列悠紀前、）次神服長二人、（著青摺布衫幷日蔭鬘、執賢木、分在左右、）次神服男七十二人、（著青摺布衫幷日蔭鬘、各執酒柏、所謂酒柏者、以弓絃葉挾白木、四重別四枚、在左右、）次神服女五十人、（衣色幷執物等同上、相對分在左右、）神祇官人一人立路中央、（前行神部之後、神服長之前、著當色木綿鬘、把笏、）次神服宿禰一人、（著當色木綿襷日蔭鬘、）次縫服案、（納細籠置案上、神服二人舁之、著青摺布衫、木綿鬘、案長四尺二寸、廣二尺、高三尺八寸、）次國前行二十人、（左右各十人、相分行列、著退紅染布衫、帶執白杖、國前行以下行列、主基亦同之、）湯二舁、（部領各二人左右相夾、擔丁各二人、納松樹比瓦加、居黑木案、飾以木綿賢木、其比瓦加徑一尺三寸、深一尺四寸、）次主禮二人、（左右相分、用諸司史生以下、皆同、）次次第司一人、（用諸司主典、）次標一基、（部領左右二人相夾、著退紅染布衫白布袴帶襷、幷曳夫二十人、著黃地黑摺布衫、白袴帶、屐巾幷、）次行事及國郡司幷眷族等五位已上、（著當色杖白木、左右分列、）次稻實卜部一人在中央、（著當色木綿襷日蔭鬘、）次造酒童女一人、（著紺布明衣日蔭鬘、乘白木輿、夫四人擔之、部領左右各一人相夾、著青摺布衫、白布袴帶、屐巾幷日蔭鬘、杖白木、）次御稻輿一基、（納布袋、居黑木輿、擔丁四人、部領左右各一人相夾、）次稻實一人、（著青摺布衫、木綿襷日蔭鬘、）次御膳足別案八脚、（各長四尺二寸、廣二尺、高二尺五寸、敷以曝布、覆以緋油單、以綠帶二所、物部女戴之、著紺布衫、木綿襷日蔭鬘、垂髻、部領左右各四人相夾、）次御酒足別案一脚、（長三尺八寸、廣二尺、高三尺、敷以曝布、覆以緋油單、以綠帶二所居以大案上、擔丁四人、部領左右各一人相夾、）次主禮二人、次次第司一人、次黑酒二瓶、（各納一石五斗、以白木盤爲蓋、覆以曝布、結以木綿、載六角黑木輿、其葺表以檜葉、裹以庭席、帖布數匝、下結以綱、飾以蘿葛、擔丁各八人、部領左右各二人、）次白酒二瓱、（裝束幷部領擔丁同黑酒、）次由加物八舁、（以四尺明櫃八合、納神物、居大案、各長九尺、廣二尺二寸、高二尺、覆以食薦、以布綱纏二所、擔丁卅二人、部領左右各四人相夾、）次木燧一荷、（納白筥二合、吳竹爲蓋、覆以綠纈、結以木綿、以布綱維之、其上挿賢木、擔丁一人、部領左右一人相夾、）次杵四枚、（納以布袋、吳竹爲蓋、飾以木綿賢木、擔丁一人、部領左右各一人相夾、）次箕二枚、（褁以曝布、吳竹爲蓋、飾以木綿賢木、擔丁一人、部領左右各一人相夾、）次薪十荷、（蒸各四尺、以黑葛束兩端、以細席居黑木臺、飾以蘿賢木、擔丁十人、部領左右各二人相夾、）次火臺四荷、（各方二尺、高三尺四寸、構以檜木、塗以白土、覆以細席、以布綱四所結之、飾以木綿賢木、擔丁八人、部領左右各一人相夾、）次主禮二人、次次第司一人、次松明四荷、（長各四尺、以黑葛束兩端、以細席、居黑木臺、飾以木綿賢木、擔丁四人、部領左右各二人相夾、）次土火爐四荷、（各廣方二尺五寸、構以檜木、塗以白土、覆以細席、懸以布綱、擔丁十六人、別四人、部領左右各二人相夾、）次榊葉二荷、（荷別四束、用卜食野柏、裹以細席、結以黑葛、著木蓋、飾以木綿賢木、擔丁二人、部領左右各一人相夾、）次食薦幷置簀一荷、（各十枚、裹以曝布、納之明櫃、置於大案、擔丁二人、部領左右各一人相夾、）次韓竈（カラカマ）一具、

納以明櫃、置於大案、覆以緋油單、結以綵帶、以布綱維之、擔丁六人、部領左右各一人相夾、次御水六缻、用瓷盛御井水、蓋以白木盤、覆以綵布、以木綿結之、帖布裹、延下、居六角黒木輿、飾以黃木葉、其上挿蘂剪、擔丁廿四人、部領左右各六人相夾、已上並置供神物、皆挿賢木、次禰宜卜部一人、著當色木綿襷日蔭鬘、已上當色皆官給之、六位已下國郡司、並著當色日蔭鬘、杖白木、分在左右、次酒臺案一脚、敷以緑布、覆以緑油單、以緑帶二處結之、擔丁四人、部領左右各一人相夾、次黒酒十缻、蓋以白木盤、覆以緑布、結以木綿、居黒木輿、以布綱維之、以美草爲飾、居上、挿蒋藥、擔丁廿人、部領左右各五人相夾、次主醴二人、次次第司一人、次白酒十缻、裝束及擔丁、部領同黒酒、次飾甕酒十口、裝束同黒酒、擔丁八十人、部領左右各五人相夾、次膳部卅二人、左右分列、下皆倣之、次倉代十輿、作黒木四角屋形、葺以檜葉、其裏張布、塗以白土、其屋形以白細布蓋、宮障子立于四面、輿別居二階子形一基、著牙床、敷以緑布、居四尺折櫃四合、別實看物、東子等類、飾以美草、以緑帶二處結之、擔丁八十人、部領左右各十人相夾、下皆倣之、次膳部卅二人、次倉代五輿、次主醴二人、次次第司一人、次倉代五輿、次膳部卅二人、次倉代十輿、次膳部卅二人、次倉代五輿、次主醴二人、次次第司一人、次倉代五輿、次膳部卅二人、次雜魚鮨一百缻、蓋以白木盤、覆以緑布、居檜木臺、擔丁二百人、部領左右各十人相夾、次主醴二人、次次第司一人、次看物菓子十輿、實以櫃、居黒木輿、以布綱結之、擔丁廿人、部領左右五人相夾、次飯一百櫃、實以明櫃、居白宮形、擔丁二百人、部領左右各十人相夾、次主醴二人、次次第司一人、次酒一百缻、蓋以白木盤、覆以緑布、居黒木宮形、飾以美草、其上挿造花、擔丁二百人、部領左右各十人相夾、次雜魚菜一百缻、蓋以白木盤、覆以緑布、居黒木宮形、擔丁部領同上、次主醴二人、次第司一人、後陣廿人、左右分列、共到七條衢而相會、出朱雀大路、于時神祇官并神服等、自悠紀行列進、立大路中央、兩國相分在左右、悠紀在左、主基在右、到朱雀門前須臾留止、先是阿波國忌部所織麁妙服、神語所謂阿良多倍是也、預於神祇官、拼備、納以細籠、置於案上、四角立賢木、阿波忌部一人、執著木綿賢木前行、四人舁案、并著木綿賢、供物未到朱雀門前、預出自神祇官而相待、供物既到、進就繒服案後立定、衛門開會昌應天朱雀三門、如元會儀、供物入應天門、隼人百餘人在門內、自胡床起、發大聲三節、神祇官中臣一人率神部等、持祓麻鹽湯、灑潔供神物并雜物、訖神祇官一人率神服男女等、到膳屋、置酒柏退出、次神祇官左右分列、率兩國供物參入、除供神物之外、及標等、皆留朝集院庭中、各分安置東西殿、到大嘗宮南門外、即悠紀左廻、主基右廻、共到北門、神祇官率神服宿禰、入其繒服案於悠紀殿神座上、次忌部官一人、入其麁服案於同座上、共訖引出、乃兩國獻物各收膳屋、訖衛門府閉三門、神祇官留候於北門內左掖、造酒童女先春御飯稻、次酒波等共不易手、且春且歌、歌詞當時制之

舂畢伴造鑽火授、安曇宿禰吹火、伴造炊御飯、內膳司率諸氏伴造、各供其職料理御膳、宮內省官人左右分率大膳職造酒司、各陳其所備供神物、高橋朝臣一人、安曇宿禰一人、各擎多賀須伎、其膳部亦依次而立、幷入大嘗宮、其神殿就案頭立定、前頭先奠案上、自餘以次手傳奉奠、訖相顧退出、（明日撤亦如是）酉刻主殿寮以寮火設燈燎於悠紀主基兩院、（院別二燈二燎）伴佐伯宿禰各一人各率門部八人、（著青摺衫）於南門外通夜設庭燎、悠紀主基兩國、進御殿油二斗、（自卯日至于午日、夜別五升、）燈坏盤各八口、燈炷布八尺、（夜別二尺）炭八石、（日別二石）松明三百卅把、（長各八尺、夜別八十把、）薪千二百斤、（日別三百斤、）戌刻、鸞輿御廻立殿、主殿寮供浴湯、即著祭服御大嘗宮、大藏省預以二幅布單鋪其通途、（其宮中地面鋪以八幅布單、上宮內輔二人左右膝行敷葉薦、掃部允以上二人從後且卷之、）不敢踏、還亦如之、（其葉薦者掃部寮設之）大臣一人率中臣忌部御巫猿女前行、（大臣在中央、中臣忌部在左右、）主殿官二人秉燭照路、車持朝臣一人執菅蓋、子部宿禰笠取直各一人、共膝行執蓋綱、還亦如是、既御悠紀正殿、小齋群官各就其座、但大齋人留宮門外、不入其內、訖伴佐伯宿禰各一人開大嘗宮南門、衞門府開朝堂院南門、宮內官人率吉野國栖十二人、楢笛工十二人、（幷著青摺布衫）入自朝堂院南左掖門、就位奏古風、悠紀國司率歌人入自同門、就位奏國風、伴佐伯宿禰各一人率語部十五人、（著青摺衫）亦入就位奏古詞、（伴入自左掖、佐伯入自右掖、）並掃部寮鋪設、（鋪座）（國栖、次歌女、次語部、皆北面東上、國司座在歌女人以東、）皇太子入自東方南掖門、親王入自西門、大臣以下入自南門、各就幄下座、六位以下在顯章修式兩堂後、依次列立、其群官初入、隼人發聲、立定乃止、訖國栖奏古風五成、次悠紀國奏國風四成、次語部奏古詞、次隼人司率隼人等從興禮門參入、於御在所屛外北向立、奏風俗歌舞、（主基亦同）皇太子以下五位以上、就庭中版跪拍手四度、（度別八遍、神語所謂八開手是也、皇太子先拍手而退、次五位以上拍手、）六位以下亦如是、（其小齋人不在拍限、）訖退出、唯五位以上退就幄座、座定安倍朝臣氏五位二人、左右相分共就位、奏侍宿文武官分番以上簿、（主典以上著姓名、分番唯其數、凡奏事於御在所者皆跪、若雨濕則立奏、其簿辨官仰諸司進之、即賜安倍朝臣氏、）亥一刻供御膳、四刻撤之、其次第也、膳夫伴造一人執火炬前行、（提盆擴灰炭）次采女朝臣二人左右分列、次宮主卜部一人著豎襷執竹杖、在道中央、水取一人執海老鰭盥槽、次之、水部一人執多志良加、次之、典水二人（一人執巾篋、一人執刀子篋、）次之、采

女八人各執供神幷供御雜物等、次之、內膳司高橋朝臣一人執鰒汁漬、次之、安曇宿禰一人執海藻汁漬、次之、膳部六人各執供神幷供御雜物等、次之、酒部四人(二人舁黑酒案、二人舁白酒案、)次之、薦享已畢、撤亦如之、子一刻、神祇官率內膳膳部等、還於主基膳屋、料理供神饌、宸儀還御廻立殿、其儀如初、主殿寮供浴湯、訖易御服、還御主基正殿、其儀一如悠紀、皇太子以下拍手及國栖等奏古風等事亦同、寅一刻供主基御膳、進退亦如悠紀、(○又見延喜式)

〔延喜式〕(三十一宮內)供奉神事行列

第一前頭內膳司膳部伴造一人、(執庭燎盆)次采女司采女朝臣二人、(分列左右)次宮主一人、(著木綿鬘襷執竹杖)次主水司水取連一人、(執蝦鰭槽)次水部一人、(執多志良加)次采女八人、(一人執刷筥、一人執巾筥、一人執神食薦、一人執御食薦、一人執神八枚手筥、一人執飯筥、一人執鮮物干物筥、一人執御菓子筥、但新嘗祭加二人、分執菓筥干物筥、)次內膳司高橋朝臣一人、(執鰒汁漬)安曇宿禰一人、(執海藻汁漬)膳部五人、(一人執鰒羹坏、一人執海藻羹坏、二人舁羹堝案、但一人守御、不行列、)次造酒司二人、(官人一人、酒部一人舁酒案、但新嘗祭加二人舁黑白酒案、)

〔北山抄〕(五)大嘗會事

卯日、(中略)○時刻主殿寮供御浴、(已時大忌、酉時小忌、式云、頃年唯供大忌、不供小忌、新式云、小忌於廻立殿供之、)戌刻鸞輿出自建禮門、入自昭訓門、於東廊壇上改駕腰輿、(式文如之、仁和四年御記云、太政大臣奏云、至昭訓門移御腰輿、自是徹行至神殿云々、清涼抄云、於龍尾道東階上移御者、寛平九年以來例如之、猶部寮敷筵於乘輿東邊、其上昇居腰輿、御之云云、天祿元年入自宣政門、於含章承光兩室間移御者、件等例輩不定、於承明門移御之由、見式幷仁和四年御記等文、又有便宜也、承平二年入自宜政門、不御腰輿、依皇后同輿也、寛和元年依近臣說不御之、已以違例也、)依經廻立殿北西入自南戶、御廻立殿、(不候給、持候大刀契、式云、是夜不警蹕、入御之後殊禁高聲、仁和四年記云、入自南戶、先御西方御床也、)小忌親王納言參議各一人供奉如常、(朝忌上著所司官攝、會檢按幷合小忌人式數、外不著小忌服在大忌列之由、見安和元年私記、)其外大臣一人著小忌服供奉、(後日位袍、)鈴擴立左近陣前屏幔內、(仁和記云、置御床南頭、而清涼抄及安和記如之、)大刀契同候之、(清涼抄云、候否未詳、而天曆以來例皆持候也、)小忌王鼎著巽角庭上座、大臣候坤角座、主殿寮供奉御浴、(自東戶供之、)即著祭服、(本著帛御衣、仁和記云、御東方小床著天羽衣供御湯、畢御中央二疊御座、次御西方供奉御裝束、清涼抄云、式云、水部一人執瓮立多之、其如者、而天慶九年於齋殿供御盥失也云々、仁和四年記云、御座定、內侍奉御衣四度、被服衣、次主水司供御盥者、撿式文、薦、拭弘仁宮內式、延喜式書之、殿供近例於齋殿可供歟、)御大嘗宮、其道大藏省鋪二幅布單、(其宮中地、鋪入)

〈幅布單八條、〉宮內輔二人左右膝行、以葉薦隨御步敷布單上、掃部允以上二人從後且卷、〈人不敢蹐〉車持朝臣一人執蓋、子部宿禰笠取直各一人共膝行執蓋綱、〈內侍二人供御劍璽、宮寬和次將供之、〉大臣〈脫劍把笏〉率中臣忌部在御前、〈大臣在中央、中臣在左、忌部在右、天慶外記記云、依數布單、大臣隨便宜奉仕右邊者、案之、葉薦人不可蹐、至子布單无妨、大臣蹐歟、准朝賀式可知、仍撿彼記无此事也、〉御巫猿女左右前行、主殿官人二人秉燭照路、〈式云、左右小忌次將各一人前行云々、近代无此例、〉既御悠紀正殿、〈仁和記云、自南廂階御之、天慶記、大臣就左近小忌幄行事云々、寬平例如之、〉小忌群官著其座、〈王卿經大嘗宮東邊就之、西面北上、辨少納言以下辨侍從等同就此座、大忌人不入大嘗宮及還立殿、〉次開門、〈伴佐伯宿禰開大嘗宮南門、衞門開會昌門、〉次大忌親王入自西門、大臣以下入自南門、各著幄下座、〈並北面、儀式國栖參入後、群臣參著云々、而新式次第如此、近例行事以前入自東門著之、官厨家儲饗饌、又親王不就修式堂前幄、便就公卿幄、承平二年王卿雖先著、開門後出自東掖門、歸司入後入會昌門、著座云々、天慶以後无宜著例、又案事理、先就延英堂、開門後入可就幄下座歟、西廊多米都物不裝束彼堂、仍直著幄座也、何更起座又還著乎、此日衞府公卿不帶弓箭、但小忌可帶、並不著靴、〉六位以下參入、亦就幄下、〈新式列立暉章修式兩堂後云々、隨无其幄、〉次宮內官人率吉野國栖〈十二人、楢笛工五人、〉入自左掖門就位、〈承平記云、立隨道當近仗平張南、天慶記在南門外東掖云々、案之、與式部列相違、可隨彼所便歟、但東掖不可然也、〉次悠紀國司率歌人入自同門、次伴佐伯宿禰率語部〈十五人〉入自東西掖門各就位、〈幷著青摺衣、前座國栖、次歌女、次語部、皆北面東上、國司在歌人東、掃部寮敷設、〉其群官初入、隼人發吠聲、立定即止、先國栖奏古風五成、〈承平記云、其笛似以指摩孔云云、〉次悠紀國奏國風四成、〈其聲似神歌還末、主基丹波國奏早歌云々、〉次語部奏古詞、〈其音似祝、又渉歌聲、出雲、美濃、但馬語部各奏之云々、〉次隼人司率隼人入自右掖門、於御在所屏外北面立、奏風俗歌舞、〈二人舞云々、神祇式、國栖等奏後、群官參入、隼人發吠聲、乃進儀前、拍手[illegible]云々、儀式國栖等似前後兩度奏云々、〉以次退出、親王以下五位以上就庭中版、〈異位重行、承平吏部王記云、進跪道東近仗南、式部不置版、是程行立云々、今案親王可立跪道西、公卿立東、四位以下相分立東西也、〉跪插笏拍手四度、〈度別八遍、神語所謂八開手是也、拍手了小拜、兩遍設膝突云々、〉六位以下又如此、〈小忌人不在拍手限、承平供刀禰不參、以少納言一人備五位、以外記史備六位云々、〉各　幄座、座定安倍朝臣五位二人、六位四人、〈儀式云、五位三人、而新式如之、〉左右相分就版、奏侍宿文武官分番以上簿、〈主典以上書姓名、分番唯奏其數、左右門部秉燭、其辨官仰諸司進之、給安倍朝臣、凡奏事於御在所者皆跪、若雨湿立奏之、〉亥一刻供御膳、四刻撤之、其次第在式也、薦享儀見仁和記幷清涼抄神今食新嘗祭等中、子一刻神祇官率內膳膳部等、還主基膳屋料理神饌、寢儀還御廻立殿、其儀如初、供浴湯易御服、御主基殿、其儀一同悠紀、小忌群官度馳道就主基幄、〈新式云、大忌不還、又大忌座悠紀主基不分別、而承平以來大忌又還云々、非也、〉不國栖等奏及親王以下拍手等

並同悠紀、○中略南氏閉門、（此間造酒司取供神物、入自南堂東門、陳昌福堂以南、掃部設寳辰日案北野、）

〔江家次第十五践祚〕大嘗會

卯日、主殿寮以齋火設燈燎於南院、各二燈二燎、伴佐伯宿禰率門部、（各八人、着青摺、）南門外設庭燎、時刻主殿寮供御浴、（巳時大忌、酉時小忌、）

式云、頃年唯供大忌、不供小忌、新式云、小忌於廻立殿供之、

戌刻御豐輿、（帛御衣、）

其儀式如常、小忌王卿列立、

出自建禮門、入自昭訓門、於東廊壇上改駕腰輿、

寛平式如之、仁和四年於東廊小門前庭移御云々、而寛平九年以來、於龍尾道東階上移御也、敷筵於御輿東邊、其上昇居腰輿、御云々、件筵東西妻、承平入自宣政門、不御腰輿、依皇后同輿也、天祿元年入自宣政門、於含章承光兩堂間移御者、然而用昭訓門、由見式幷仁和寛平記、寛和元年依近臣謬説、不御手輿、（已以違例、）

經廻立殿北幷西幔外、入自西方、（新儀式、入自東門云々、）御廻立殿、

不奏鈴持候、大刀契同候之、

寛平式云、是夜不警蹕、入御後殊禁高聲、仁和記云、入自南戸、先御西方御床、日記云、鈴櫃置御床南頭者、然而近例立左近陣南屏幔内云々、

小忌親王、納言、參議各一人供奉如常、即就殿巽角庭上座、

大臣一人著小忌服供奉、候坤角座、（後日著位袍、）

主殿寮供御湯、（用東戸、）

奉仕御湯殿之人、（殿上四位一人、六位一人、並歸山陰縣子孫之人、）於女官幄可解改裝束、而於釜殿脱之人有之云々、仁和

記云、御東方小床著天羽衣供御湯了御中央御帖、次西方供奉御裝束、治暦長元御記、乍著天羽衣入御下御槽給、又以一領奉拭云、承保供御河藥、（入土器居折敷、）

次御裝束

大臣（脫劔把笏）率中臣忌部在御前、大臣在中央、近例不踏葉薦、仍頗寄傍、中臣在左、忌部在右、

御巫猿女左右前行

主殿官人二人秉燭（寬平式云、左右小忌次將各一人前行云云、而近代無此事、）御悠紀殿（主上徒跣不著履給、供奉人亦同、）

其道大藏省敷二幅布單、宮中地面敷以八幅布單八條、宮內兩輔膝行、以葉薦隨御步敷布單上、掃部允以上二人自後且卷人不敢踏、車持朝臣執菅蓋、子部宿禰笠取直、共膝行執蓋綱、

內侍二人候御劒璽筥、寬和次將候之、承曆次將二人執、仁和記云、自南簷開簾入御、次御中央戶坤、

小忌群官各就其座（王卿經大嘗宮東邊就之）

西面北上、辨少納言以下侍從等皆候此幄、大臣就左近小忌幄、大忌不入大嘗宮及廻立殿、

次闢門（伴佐伯宿禰開大嘗宮南門、衞門開會昌門、）

大忌親王以下參入就幄下座、親王入自西門、大臣以下入自南門、並北面、

儀式幷寬平式國栖等參入後群官參著云々、而新式次第如此、近例行幸以前王卿入自東門、同就暉章堂前幄、官厨家儲饍、

承平雖先就、開門後出自東掖門、國司參入後、更入自會昌門著座云々、

天慶以後無重著例

六位以下參入（新式就幄下者、儀式俟無六位幄、列立堂後者、）

宮內官人率吉野國栖入自左掖門、（國栖十二人、笛工五人、）

承平記云、馳道當近仗平張南、

悠紀國司率歌人入自同門、
伴佐伯率語部十五人、入自東西掖門、各就版位、並青摺衣、
前座國栖次歌女、次語部、皆北面東上、
國司在歌人東、掃部寮敷設、
群官初入、隼人發聲、立定乃止、
國栖奏古風五成、承平記、其高以指摩、凡歟、
悠紀國奏國風四成、其聲似神歌遏末、主基爲早歌、
語部奏古詞、其音似祝、又渉歌聲、出雲、美濃、但馬語部各奏之、
隼人司入自右掖門、拍手歌舞、於御在所屏外北面立奏、二人舞、訖各退出、
親王以下五位已上就庭中版、其位置行、
承平記云、進馳道東近仗南、式部不置版、量程行列立云々、今案親王可立馳道西、公卿立東、四位以下相分立東西、
蹲插笏、拍手四度、度別八遍、神語所謂八開手是也、
拍手畢小拜、南濕設膝突、
次六位以下又如此、小忌人不在拍手限、承平記、刀禰不參、以少納言一人代五位、以外記史代六位、畢各復幄座、
安倍朝臣五位二人、六位四人、左右相分就版、奏侍宿文武官簿、主典以上書姓名、分番奏其數、左右門部秉燭、其簿辨官仰諸司進之、給安倍朝臣、
凡奏事者皆跪、若雨濕立奏、
亥一刻采女申時、取刻木、就殿南戸邊申之、
皇上召御手水、女藏人傳供、近侍藏人奉之、

入自中戸、經神座西幷北、著神座以東御座、

亥一剋供御膳、先伴造一人執火炬前行、（執炬擬笠、）

釆女朝臣二人（左右分列）宮主卜部一人、（著木綿襷、在道中央、）

執竹杖水取連一人、執海老鰭槽次之、

水部一人、執多之良加次之、

典水二人（一人執巾篋、一人執刀子篋、）次之

釆女八人、各執供神幷供御雜物等次之、

內膳司高橋朝臣一人、執鰒汁漬次之、

安曇宿禰一人、執海藻汁漬次之、

膳部四人、執供神幷供御雜物等次之、

酒部四人（舁黑白酒案、或說二人舁酒案、二人舁黑白酒案、）

次十姬十男以次參入、列居於中戸南、

次八姬之中二人、相分共舁海老鰭槽、置御前短帖之上、一姬留候、

二姬歸取楊枝筥授留姬、姬取之置槽南邊、

次取巾筥授之（如先開其蓋、）

次取水部所持多之良加（開入水瓶、）

授姬退候戸外、

御手水供了、三沃爲限、候戸外之姬、伺御盥畢參入取多之良加、却返給水部、

留姬取巾獻天皇、天皇拭手訖、

姬又歸參、次第取刷巾等匣退出、又進與留姬共舁槽退出、

返授主水連、取先所捧匜等候之、迫戸外祗候、

主水連水部等退下

八姫并高橋氏等捧神食薦、更北行向南列候、猶在戸外、最姫(顧階)捧神食薦、鋪短帖之右上、

次姫(顧後取)傳御食薦於最姫、最姫取鋪同疊之上、姫等以御食手傳置御食薦上、

先置八葉盤於御食薦上之外方、次御飯邊御前而供之、

次御肴鮮干合八種置御飯左、次菓子在御肴右、御飯已下、并盛窪手置小高坏、

又居御羹等於高坏、立同薦上、

薦不足者立短帖上、置菓子東邊、

高橋氏等列座、十姫受手傳供之、又御羹二種、後取列南戸傳取授最姫、最姫並置羹坏之上了姫等更

北向列候、最姫獨留御前、

最姫先開窪手蓋、置御食薦左右、(其開蓋置御羹坏北云、又開羹坏蓋同置之、)

次以御箸置御飯并御肴菓子等上、了姫先取葉盤奉天皇、天皇取御箸御飯盛給姫、如此總十度、他物

同之、便以其所加箸盛御、總十度也、姫給之置御食薦上、姫亦以葉盤奉天皇、天皇合盛八種肴於一枚

授姫、給之加盛汁物供之、(鮑海藻等汁也、)次菓子十二葉盤列置如此、

置膳之體如五出起東

最姫目後取采女令供清酒、不高聲、仍有此儀、次姫自南戸傳取瓶子來候、最姫傳取、本柏盛酒奉天皇、

內裏式奉柏於天皇、奉酒盛之、天皇受卽灑神食上、而近代所行姫取柏自盛、

天皇受之灑神食上、以其柏便置神食之上、

如斯四度、度別易瓶供之、此間采女祝曰、先可挾給之物(遠)後(ニ)挾(美)給、及諸有(止毛)神直(比)大直(比爾)受給(ヘ)

最姫取先所立之御箸、收於本宮、更加御箸於御飯上、天皇頗低頭拍手稱唯執之、羞飯如常、最姫目次姫供御酒、八度、以坏居高坏、（度別拍手稱唯）御飲了姫等傳始自最後之供物撤膳如初儀、訖最姫卽卷裹神食薦退出、次二姫參入供御手水如初儀、天皇洗了十男十姫相引退出、

天皇還御廻立殿、子一刻料理主基神膳、

天皇丑刻（采女申時、一如悠紀儀、）又御浴、易御服御主基殿、

天皇還廻立殿之後、采女進南戸下申云、阿佐女主水、夕曉乃御膳、平賈供奉部止申、

勅曰、好之、采女等稱唯還却、

小忌群官度馳道就主基幄、

新式云、大忌不還、又大忌座悠紀主基不分別、而承平以後大忌共還云々非也、

國栖等奏、及親王以下拍手、並同悠紀、

寅一刻供曉膳、（進退且如悠紀、）

事了還御廻立殿、（百官各退、闈氏閉門、）

〔大嘗會儀式具釋 六〕大嘗會卯日次第（無行幸儀）

神祇官率內膳膳部等、於悠紀膳屋料理神饌、主殿寮以忌火鑽燈燎於兩院、（各二燈、二燎）伴佐伯率門部設庭燎於南門外、主殿寮供大忌御湯、

大忌御湯トハ、御齋戒重キガ故ニ御湯ヲ度々メサル、其先一度メニ召ル湯ヲ大忌御湯ト名ヅケ、後ニ兩度メサル丶ヲ小忌御湯ト名ヅタルノミ、

戌刻御廻立殿、（帛御衣）不警蹕、入御之後殊禁高聲、

入御以前ヨリシテ高聲高音ハ禁ズレドモ、入御以後ハ殊ニ戒シムルナリ、其此夜警蹕セズ、入御ノ後殊ニ高聲ヲ禁ズルコト、並ニ寛平ノ式ヨリ見エタリ、

關白候便所、小忌公卿著巽角庭上座、(西面北上)大臣一人著小忌就坤角座、(東面)大忌公卿著座、(南北鳥居外、西面東上、)次主殿寮供小忌御湯、

アラカジメ主殿ノ官人、日華門ノ北ノ廊ノ内ニ御湯ヲ涌ス釜ヲ置、其釜ノ座ハ三尺バカリ、四方ノ廊ノ柱ニ近江表ヲアテヽ圍廻シ、三尺ヅヽノ腰板ヲアテ、此所ニテ御湯ヲ涌シ、廻立殿ノ東ノ所ヨリ之ヲ供ズ、

有御湯殿事、

先廻立殿内ノ東間ノ小床ノ上ニテ天羽衣ヲ著御セラレテ御湯ヲ供ズ、藏人頭一人、五位藏人一人、六位藏人一人之ニ奉仕ス、並ニ山陰中納言ノ子孫アレバ是ヲ用ユト云リ、今世(元文三年)ハ山陰卿ノ苗裔ナシ、

次著御祭服、次供御手水、采女申時、

申時トハ、其詞亥一ツト申ス、削木ヲ執テ廻立殿ノ南ノ戸ノ邊ヘ就テ之ヲ申ス、是モ亦昔ハ大嘗會ニハ神殿ヘ渡御ノ後、御手水ヲ供ズル前ニアリ、毎年ノ新嘗會ニハ渡御以前ニアリトイヘドモ、御手水ヨリ前ニアリ、案ズルニ、大嘗ニハ時ヲ申セルニ依テ、内陣ヘ入ラセタマハントテ先御手水ヲ御シ、新嘗ニハ時ヲ申セルニ依テ、渡御アラントテ先御手水ヲ御スル事其義通ズ、貞享幷今度ハ、御手水ノ儀、時ヲ申スヨリ前ニアルコト、イマダ其義ヲ知ラズ、又大嘗ノ神膳ハ亥ノ一刻ニ供ジ、新嘗ノ渡御ハ亥ノ一刻ニ催ス、故ニ亥ノ時ノ到シ由ヲ申ス事其義通ズ、貞享幷今度ノ儀ノ如キハ、今此所ニテ亥一ツト申スト雖、是ヨリ神殿ヘ渡御セラレ、小忌ノ人著座シ、伴佐伯開門シ、大忌ノ人拍手シ畢リテ後ニ神膳ヲ供ズ、然ルヲ猶次第ニハ亥一刻、供御膳ト定ム、何ゾ矛盾セルヤ、又昔ノ書ニ采女ト云ヘルハ皆官女ノ采女ナリ、男官ノ采女トノミ記ス事ハ、イカニモ紛レザル所ナラデハ司ノ字ヲ略スル事ナシ、大嘗新嘗ニ時ヲ申ス采女モ、采

女トバカリアレバ采女司ニハ非ズ、スナハチ神膳ニ奉仕スル宮女ノ采女ノ中ト見エタリ、然ルニ貞享幷今度、男官ノ采女司時ヲ申ス事、イマダ甘心セズ、

出御、其道大藏省豫鋪二幅布單、宮内輔以葉薦隨御歩敷布單上、掃部寮隨御後卷之、人不敢蹈、

布單トハ單ノ布ナリ、先ダチテ大藏官人之ヲ敷、其敷キ樣、廻立殿ノ東ノ間ノ南ノ方ヘ下ル踏段ノ下ヨリ南ヘ敷、板閣ノ北八尺バカリノ所ヨリ西ノ方ヘ折テ敷、大嘗宮ノ北ノ鳥居ノ前ヨリ南ヘ折テ敷、鳥居ヲクヾリ、行當リノ袖垣ト鳥居トノ中央ヨリ西ヘ折テ敷、袖垣ノ西ノ端ト主基殿ノエンノ端トノ中央ヨリ南ヘ折テ敷、正中ノ鳥居ノ前ヨリ東ヘ折テ敷、鳥居ト悠紀殿ノ西ノエンノ端トノ中央ヨリ南ヘ折テ敷、南ノ柴垣ト悠紀殿ノ南ノエンノ端トノ中央ヨリ東ヘ折テ敷、南階ノ中央ニ當リテ北ヘ折テ階下マデ敷ナリ、昔ハ柴垣ノ内ノ地面ニハ、八幅ノ布單八條ヲ敷トアリ、今ハ然ラズ、大藏ノ敷置ル布單ノ上ニ又葉薦ヲ敷テ、其上ヲ渡御ナシ奉ル、但出御ニ先ダチテ敷ニ非ズシテ、御歩次第ニ御前ヘ先グリニ膝行シテ敷キ行ナリ、昔ハ宮内輔兩人左右ニ膝行シテ、萱ノ薦ヲ敷トアリ、今ハ然ラズ、掃部ノ官人ハ御跡ニ隨ヒ之ヲ卷、但一度ニ卷カズシテ、御歩次第ニ御跡ヨリ先グリニ卷キ行ナリ、天子ヨリ外ノ人ハ此薦ヲ踏ズ、但關白ハ御裾ニ候ゼラルヽ故聊ハ之ヲ踏ル、

先大臣率中臣忌部前行、〈大臣在中央、中臣在左、忌部在右、〉次御巫猿女、次主殿官人二人執燭、次近衛將取劒璽候左右御歩、車持朝臣取菅蓋奉差覆、子部宿禰笠取直各一人取蓋綱、

上世此等ノ諸氏ノ人アリシ時ニ此役ニ充タルヲ古例トシテ、今ハ其姓ノ人ナキ故ニ他氏ノ人ヲ代トシテ勤メシム、ソノ中ニモ近例必六位藏人ヲ以代トス、是ハ至リテ親近ノ役ナルユエニ藏人ヲ用キ、手ニ業アル故ニ高位ヲ用キズシテ六位ヲ用ユルト見エタリ、蓋ハ菅ニテ作レルサシカケ笠ナリ、別ニ長キ柄アリ、柄ノ末曲リテ聊下ル、其曲リタル所ニ鳳凰ノ如クニテ

尾ノ長カラヌ鳥ヲ作リ居エ、其鳥ノ喙ヲ貫キテ紐ヲ下ゲ、其紐ノ末ヲ蓋ノ頂ニアル環ニ通シタル物ニテ、其柄ヲ持テ蓋ヲ天子ノ御上ニサシ覆ヒ奉ルナリ、仍テ車持朝臣ハ天子ノ御後ニアリ、之ヲ執蓋ノ役トイフ、又蓋ノ綱ハ蓋ノ裏ノ正中ニ圓ニ小サク出タル所アリテ、是ヲ綱ニテ貫キ、其綱ノ端ヲ左右ヘ分テ是ヲ執、是ハ御蓋ヲ必御頭上ノ邊ニ置ンガ爲ナリ、仍テ子部宿禰ハ御左ニアリ、笠取直ハ御右ニアリ、之ヲ執綱ノ役トイフ、抑御蓋ニ菅ヲ用ルコトハ古キ事ナリ、萬葉集ニモ、王之御笠爾縫有在間菅ト云歌見エタリ、

次關白、近衛將捧御翳候嘗殿西面簀子、中臣忌部御巫猿女等跪鳥居內、主殿執燭候階下、御悠紀嘗殿、經大嘗宮北門幷悠紀殿西、介入自南面戶御、大藏、宮內、掃部、車持、子部、笠取等出鳥居外、關白候便所、小忌群官各著座、（大臣南鳥居內東邊西面、納言已下同鳥居外、西面北上、）近代辨少納言外記史等不著之、次開門、伴佐伯開大嘗宮南門、次大忌公卿就庭中版位、（南鳥居外、異位重行、）拍手訖復座、

庭中トアレドモ、南ノ鳥居ノ外ナレバ、大嘗宮ノ庭中ニハ非ズ、昔ハ大忌公卿幄中ノ庭ニアリテ、夫ヨリ幄外ニ進ミ出テ版位ニ著、故ニ幄中ニ對シテ庭中ト云リ、今ハ幄ナケレバ初ヨリ紫宸殿ノ庭中ニアリ、更ニ庭中版位ト云ベカラズ、古キ次第ニ引レテ庭中ノ二字ヲ省カザルノミ、異位重行ハ儀式ニ依テ其行ハルヽ所異ナルガ故ニ聊ヅヽノ違アリ、近代據用キラルヽハ皆後成恩寺關白ノ注サレシ如ク、大臣ノ後ニ大納言、其後ニ三位ノ中納言、其後ニ四位ノ參議列ス、其二位ノ中納言ハ大納言ノ末ニ聊退キテ列シ、三位ノ參議ハ中納言ノ末ニ聊退キテ列ス、但是ハ稠人列立スル時ノ事ナリ、拍手ハ字ノ如ク手ヲウツニテ是拜ナリ、然ルヲ今世ト家ニ拍手ヲ誤マリテ柏手ニ作リ、隨フテカシハデト訓ズルハ大ナル誤ナリ、而シテ常ニ神祇ヲ拜スルニ用ユル拍手ハ二ツヅヽ之ヲウツ、此所ニテノ拍手ハ四ツヅヽ八遍合セテ一人ノ拍手ノ數三十二ナリ、是神語ニ所謂ル八開手ニシテ、此時此數ニ拍手スル事貞觀儀式ヨリ見エ

テ今モ猶然リ、抑此間ノ次第古今大ニ同ジカラズ、貞觀ノ儀ノ如キハ、小忌群官著座ノ時大忌ノ人モ共ニ來リ、但大忌ハ門外ニ留マル、又江次第ニ見エタルハ、小忌著座ノ次ニ開門シ次ニ大忌ノ人幄ニ就キ、其跡ニテ吉野國栖古風ヲ奏シ、悠紀國ノ歌人國風ヲ奏シ、主基早歌ヲ奏シ、語部古詞ヲ奏シ、隼人歌舞スル等ノ數事アリテ、後ニ大忌ノ五位以上拍手シ、次ニ六位以下拍手ス、今ハ開門ノ次ニ直ニ大忌ノ拍手アリテ、其間ノ數事ハ一向ナシ、

亥一刻供₂御膳₁

先天子内陣ニ入御、御座ニ著タマフ、其御座ハ神座ノ東邊、神座ノ中央ヨリ北ニ當リテ巽向ニ半帖ヲ敷テ之ニ御ス、御膳ハスナハチ上ニ見エタル、神祇官ノ悠紀膳屋ニテ料理セル神饌ナリ、是ヨリ前ニ東ノ鳥居ノ内柴垣ノ下ニ神饌物及供御ノ雜物ヲ運ビ並ベ置、其體柴垣ノ内ノ東南ノ角ニ、八脚案一脚ヲ南北ノ行ニ立テ、其案ノ上最南ニ、海老鰭槽トテ御手水ノ器ヲ置、木地ナル物ナリ、其次ニ少サキ黑葛筥ヲ置キ、其中ニ鐵ノ御楊枝ト葉穗ノ御楊枝トヲ入ル、其次ニ亦黑葛筥ヲ置キ、其中ニ御手巾ヲ入ル、六尺ノ布ヲ用ユ、其次ニ多志良加トテ置、水ヲ入ル丶瓶ナリ、又其案ノ北ニ同ジク八脚ノ案一脚ヲ立テ、其案ノ上最南ニ神食薦トテ荒薦ヲ置、此薦ハ圓ニ卷テ所々ニ紙シデヲ付、是ハ宮内ニテ神饌ヲ供ズル所ニシク薦ナリ、其次ニ御食薦ヲ置、此薦モ同ジク卷、但紙ノシデハ付ズ、其次ニ少サキ黑葛筥ヲ置キ、其中ニ竹ノ御箸ヲ入、是ヨリ御果子マデ八ノ葛筥ニハ皆其廻ニ紙シデヲ付ル、其次ニハ亦黑葛筥ヲ置キ、其中ニ平手ト本柏ヲ入ル、平手ハ柏葉ヲ竹ノ針ニテ常ノ盃ノ形ニ圓ク平ゲ作リタル物ナリ、本柏モ亦柏ノ葉ナリ、是ハ宮主期ニ臨ンデ稻穗ヲ以テ此柏葉ヲシタヽムル樣アリ、又其案ノ北ニ同ジク八脚ノ案ヲ立テ、其案ノ上最南ニ黑葛筥ヲ置キ、其中ニクボ手ニ盛タル御飯二坏ヲ入、クボテトハ柏葉ヲ竹ノ針ニテ破子ノ形ノ如クニ作リタル物ナリ、其次ニ亦小サキ黑葛筥ヲオキ、其中

ニクボ手ニ盛タル鮮物四種各一坏ヲ入、其次ニ亦小サキ黑葛筥ヲオキ、其中ニクボテニ盛タル干物四種各一坏ヲ入、又其案ノ北ニ同ジク八脚ノ案ヲ立、此案ノ北ノ端ハ、則東ノ鳥居ノ南傍ナリ、其案ノ上南ノ方ニ小サキ黑葛筥ヲオキ、其中ニクボ手ニ盛タル御果子四種各一坏ヲ入、果子トハ字ノ如タクダ物ナリ、今俗ニ云果子ニハ非ズ、北ノ方ニ高坏ニ盛タル米御粥、粟御粥各二盃ヲ東西ノ行ニ並ベ置、其粟御粥二坏ハ各米ノ御粥ノ北ニアリ、又其案ノ前西ニ四脚ノ小案ヲ立テ、其案ソ上南ノ方ニ高坏ニモリタル和布羹一坏ヲオキ、北ノ方ニ高坏ニ盛タル鮑羹一坏ヲ置ク、又東鳥居ヨリ北ニ同ジク八脚ノ案一脚ヲ立テ、其案ノ上南ノ方ニ土瓶子ニ入タル白御酒、黑御酒各二瓶ヲ東西ノ行ニ並ベ置、其黑御酒二瓶ハ各白御酒ノ北ニアリ、中央ニ高坏ニ載タル御盃二基ヲ東西ノ行ニ並ベ置、北ノ方ニ又土瓶子ニ入タル白御酒黑御酒各四瓶ヲ東西ノ行ニ並ベ置、其黑御酒四瓶ハ各白御酒ノ北ニアリ、其御膳具ノ韓櫃二口ハ、東鳥居ノ外、鳥居ヨリ北ノ柴垣ノ下ニ置、其韓櫃ノ廻ニハ、シメヲ引コト例ノ知シ、如此シテ並ベ置タル案上ノ物ヲ、一々悠紀ノ殿内ヘ供ジ、宮内ニ於テ天子自御供進ノ儀アリ、如此コトヲバ近世イツトナク秘スルコトノ樣ニ成來リテ語ル人ナケレバ、今ノ世ノ供進ノ樣ハ知ラズ、抑貞觀儀式ニミエタル次第ノ如キハ、大嘗會ニ付テ國郡ヲトセラルヽヨリ、卯日神膳ヲ殿内ニ供ズルマデ、其儀式最廣大ニシテ、且造作ノ殿舍、奉仕ノ百官等ノ多々ナルコト、今世ト同日ノ談ニ非ザレバ、其事跡ノ不同枚擧スベカラズ、江次第ニミエタル次第ハ、總テ今ト大ニ同ジウシテ少シキ異ナリ、サレバ此供進ノ事モ江次第ノ次第ヲミテ、今世ヲ略知スベシ、其次第ハ先伴造一人火炬ト摸盃トヲ執リテ前行シ、今ノ世モ同ジカルベシ、今度伴造ハ主殿權助重成之ヲ勤ム、采女朝臣二人左右ニ相分レ、今ハ采女朝臣ミエズ、宮主卜部一人、木綿ヲ著、竹杖ヲ取テ中央ニ立チ、今モ同ジカルベシ、今度當日ノ宮主ハ、代トシテ神祇權大副之ヲ勤ム、水取連一人、海老鰭槽ヲ執テ之ニ次、今ハ水取連見エズ、海老鰭槽ヲ執レル人ヲシラズ、水部一人、多志良加ヲ取

テ之ニ次、（今モ同ジカルベシ、今度水部代ハ、縫殿大膳藤原眞豐之ヲ勤ム、）典水一人巾ノ宮ヲ執リ、（今ハ典水見エズ、手巾ノ宮ヲ執レル人ヲシラズ、）一人カ子ノ宮ヲ執テ之ニ次、（今ハ楊子ノ宮モ見エズ、但御楊枝ノ宮ノ中ニ、一ツハ薦纖ニテ作レルアリ、一ツハ纖ニテ作レルアリ、其纖ニテ作レルヲモ今ハ楊枝ト稱スレドモ、是猶其本ハカ子ナルカ、此ニカ子ノ宮ト云ルハ、御楊枝ノ宮ト云ルト同ジ宮ナルト見エタリ、右ニ云ルガ如ク、今ハ典水見エズ、御楊枝ノ宮ヲ執レル人ヲシラズ、）供神幷供御ノ雑物等ヲ執テ之ニ次、（今ハ役送ノ采女六人出仕ス、蓋六人ニテ之ヲ執レルナルベシ、）内膳司高橋朝臣一人、鮑ノ汁漬ヲ執テ之ニ次、（今モ同ジカルベシ、今度高橋氏内膳ハ奉膳等清之ヲ勤ム、鮑ノ汁漬トハ鮑羹ト云ニオナジ、）安曇宿禰一人、海藻ノ汁漬ヲ執テ之ニ次、（今モ同ジカルベシ、今度安曇氏內膳代ハ左生火官人伴嘉享之ヲ勤ム、海藻汁漬トハ和布羹ト云ニオナジ、）膳部六人、供神幷供御ノ雑物等ヲ執テ之ニ次、（今ハ膳部二人出仕ス、蓋二人ニテ之ヲ執レルナルベシ、）酒部四人、黒白ノ酒ノ案ヲ舁テ之ニ次、（今ハ酒部見エズ、造酒司ハ佑大江盛晉出仕ス、酒ノ案ヲバ誰々カ舁ルヲシラズ、）次ニ十姫十男次第ヲ以參入シ、中戸南ニ列居ス、（十姫トアレドモ、今ハ采女六人、采女代一人合セテ七人ノ外ハ見エズ、其六人ノ采女ハ皆中戸ノ南ニ候ズ、其座東西ヘ二タ、南北ヘ三ツ、第一ハ北ノ東ニアリ、第二ハ北ノ西ニアリ、第三ハ中ノ東ニアリ、第四ハ中ノ西ニアリ、第五ハ南ノ東ニアリ、第六ハ南ノ西ニアリ、其采女代ハ内侍一人出仕ス、是ハ中戸ノ北西壁ノ下ニ候ズ、是モ初メ中戸ノ南ニ列居シ、海老鰭槽ヲ舁テ後北ニ留レルナルベシ、其中戸トハ内陣ト外陣ノ境ヲ云、其十男ハ今見エズ、）次八姫ノ中二人相分レテ、其ニ海老鰭槽ヲ舁テ御前ノ短帖ニ置、（今モ同ジカルベシ、但采女代一人ト采女六人ノ中一人ト二人ニテ舁ヤ、又ハ采女代一人ニテ舁ヤシラズ、）一姫留候、（今モ采女代ノ内侍如此ナルベシ、）一姫歸リテ楊枝ノ宮ヲ取テ留姫ニ授ク、姫之ヲ取テ槽ノ南邊ニ置、（今モ采女ノ内一人之ヲ授ケ、采女代ノ内侍之ヲ取ナルベシ、）次ニ巾ノ宮ヲ取テ之ヲ授クル事先ノ如シ、其蓋ヲ開イテ置、（上ニ同ジ、）次ニ水部ガ持ル所ノ多之良加ヲ取姫ニ授ケ、退イテ戸外ニ候ズ、（上ニ同ジ、）御手水供ジ了ル、三沃ヲ限ト爲、（今モ采女代ノ内侍供ズルナルベシ、）戸外ニ候ズル姫、御盥ヒ畢リタマフヲ伺ヒテ參入、多之良加ヲ取リ退イテ水部ニ返授ク、（今[illegible]采女ノ内一人之ヲ伺ヒ取テ、眞豐ニ授クルナルベシ、）姫又參リテ次第ニ巾等ノ宮ヲ取刷フテ退出、又進ミテ留姫ト共ニ槽ヲ舁テ退出、（今モ采女ノ中ニテ手巾ノ宮御楊枝ノ宮等ヲ取刷ヒ、采女ノ代ノ内侍ト槽ヲ舁ナルベシ、）水取連ニ返授ケ、（今ハ水取連見エズ、誰ニ返授クルヲ知ラズ、今モ采女如此ナルベシ、）先捧タル所ノ匣等ヲ取テ又外ニ迫リテ候ズ、水取連水部等退下、（水取連ハ右ニ云ルガ如シ、水部ハ今モ眞豐退下スルナルベシ、）八姫幷高橋氏等、神ノ食薦ヲ捧ゲテ更ニ北ニ行、南ニ向フテ列ナリ候ズ、猶戸外ニ候ズ、（今モ六人ノ采女幷

（等濟如此スルナルベシ）最姫神ノ食薦ヲ短帖ノ右ノ上ニ捧グ、（今モ采女代ノ内侍之ヲ捧グルナルベシ、今神ノ食薦ヲ置トコロハ、神座ノ東邊、神座ノ中央ヨリ南ニアタリテ巽向ニ、眞巾白絹ノ短帖ヲ敷タル上ニ置、）次姫御食薦ヲ最姫ニ傳フ、最姫取テ同ジ疊ノ上ニ敷、（今モ第一ノ采女取傳ヘ、采女代内侍之ヲ敷ナルベシ、）姫等御食ヲ以、手ヅカラ御食薦ノ上ニ傳置、先八葉手ヲ御食薦ノ上ノ外ノ方ニ置、次ニ御飯御前ニ通リテ之ヲ供ズ、次ニ鮮物干物合セテ八種ノ御肴ヲ御飯ノ左ニ置、次果子ヲ御肴ノ右ニ置、御飲已下ハ並ニ葉椀ニ盛テ小高坏ニ置、又御羹等ヲ高坏ニ居テ同ジ薦ノ上ニ立ツ、薦足ラザレバ短帖ノ上ニ立、果子ノ東邊ニ置、（今モ采女如此スルナルベシ）高橋氏等列座ス、（今モ同ジカルベシ）十姫手ニ受テ之ヲ傳供ス、又御羹二種、後取南ノ戸ニ列シ傳取テ最姫ニ授ク、最姫並ニ羹坏ノ上ニ置、（今モ采女六人手ニ受テ傳ヘ供シ、二種ノ御羹モ采女ノ内ニテ傳取テ、采女代ノ内侍ニ授タルナルベシ、）姫等更ニ北間ニ列ナリ候ジ、（今モ采女如此ナルベシ）最姫獨御前ニ留マル、（今モ采女代ノ内侍如此ナルベシ）最姫先葉椀ノ蓋ヲ開イテ御食薦ノ左右ニ置、其開ケル蓋ハ羹ノ坏ノ北ニ置、又羹ノ坏ノ蓋ヲ開イテ同ジク之ヲ重ヌ、次ニ御箸ヲ以御飯幷御肴果子等ノ上ニ置、姫先葉手ヲ取テ天子ニ奉ル、（上ニ同ジ）天子御箸ヲ取テ葉椀ニアル御飯ヲ葉手ニ盛タマヒテ姫ニ給フ、（今モ采女代ノ内侍ニ給フナルベシ）其箸ヲ加ヘテ盛タマフ所總テ十度、他ノ物モ之ニ同ジ、（今モ同ジカルベシ）姫之ヲ給ハリテ御食薦ノ上ニ置、姫又葉手ヲ以天子ニ奉ル、（今モ采女代内侍如此スルナルベシ）天子其葉椀ニアル八種ノ肴ヲ葉手一枚ニ合盛タマヒテ姫ニ授ケ給フ、（今モ同ク采女代ノ内侍ニ授ケ給フナルベシ）汁物ヲ加盛テ之ヲ供ズ、（今モ采女代ノ内侍テ供ズルナルベシ）之次ニ果子總テ十二ノ葉手列子置コト如此シ、膳ヲ置ク體五出ノ如シ、東ヨリ起ル、（今モ同ジカルベシ）最姫後取ノ采女ニ目シテ清酒ヲ供ゼシム、（今モ采女代ノ内侍、采女ニ目シテ供セシムルナルベシ、）次姫南ノ戸ヨリ瓶子ヲ傳ヘ來リテ候ズ、（今モ第一ノ采女如此スルナルベシ）最姫本柏ヲ取酒ヲ盛テ天子ニ奉ル、（今モ采女代ノ内侍奉ルナルベシ）天子之ヲ受テ神食ノ上ニ注ギタマヒ、スナハチ其柏ヲ神食ノ上ニ置タマフ、（今モ同ジカルベシ）如此シタマフ事四度、度ゴトニ瓶ヲ易テ之ヲ供ズ、（今モ同ジク采女代ノ内侍候ズルナルベシ）此間采女祝シテ曰ク、先挾ミ給フ可ノ物ヲ後ニ挾ミ給ヒ、及諸ノ咎アリト

モ神直日大直日ニ受タマヘ、今モ同ジカルベシ

四刻撤之、宮主采女等從其儀、

其供ズル時、撤スル時、共ニ宮主采女等其儀ニ從フナリ、江次第ニ見エタルガ如キハ、薦享ノ事畢リテ、スナハチ天子ニモ御飯御酒ヲ供ズル儀アリ、今ハ然ラザルカ詳ナラズ、供御了リテ姫等取傳ヘテ最後ノ供物ヨリ始メノ御膳ヲ撤スル事、初供ズル時ノ儀ノ如ク、訖リテ最姫スナハチ神ノ食薦ヲ卷裹ミテ退キ、次ニ二姫參入シテ御手水ヲ供ズル事初儀ノ如ク、天子洗ヒヲハリタマヒテ、十男十姫相列テ退出スト見エタリ、今モ同ジク采女等傳ヘテ御膳ヲ撤シ、采女代ノ内侍神ノ食薦ヲ卷キ、初ノ儀ノ如ク内侍ト采女十二人ニテ御手水ノ具ヲ供ジ、内侍御手水ヲ供ズルナルベシ、但十男見エズ、十姫定リタル事右ニ云ルガ如シ、又亥ノ四刻ニ撤スルト云事ハ貞觀儀式ナドニハ見エタリ、江次第ノ如キハ薦享供御了リテスナハチ撤ス、其撤スル刻限ナシ、今ノ刻限却テ舊式ト同ジ、

次還御廻立殿、其儀如初、子一刻神祇官率內膳膳部等、還主基膳屋料理神饌、次主殿寮供御湯、御湯殿已下一如悠紀儀、遷御主基嘗殿、

此御道モ亦大藏ノ官人二幅ノ布單ヲ敷、但廻立殿ヨリ大嘗宮ノ北ノ鳥居ノ内マデハ悠紀ノ時ノ道ニ同ジ、北ノ鳥居ヲ入テ行當リテ、袖垣ト鳥居トノ中央ヨリ東ヘ折テ敷、袖垣ノ東ノ端ト悠紀殿ノエンノ端トノ中央ヨリ南ヘ折テ敷、正中ノ鳥居ノ前ヨリ西ヘ折テ敷、鳥居ト主基殿ノ東ノエンノ端トノ中央ヨリ南ヘ折テ敷、南ノ柴垣ト主基殿ノ南ノエンノ端トノ中央ヨリ西ヘ折テ敷、南階ノ中央ニ當リテ北ヘ折テ階下マデ敷テ此上ヲ渡御アリ、宮内掃部ノ葉薦ヲ敷卷コト、幷ニ前行ノ大臣ヨリ御後ノ關白マデノ行列、及大藏、宮內以下鳥居ノ外ニ出、關白外陣ノ西壁ノ下ニ著座セラルヽマデ、總テ悠紀ノ時ニ同ジ、此遷御江次第ニモ丑刻トアリ、今

モ丑ノ正刻ナリ、

小忌群官各著座、（大臣已下南鳥居内西邊東面、納言已下南鳥居外東面北上、）大忌公卿無移著之儀、次大忌公卿就庭中版位拍手、

昔ハ此跡ニテ悠紀ノ時ノ如ク、國栖以下ノ奏アリ、今ハ其儀ナシ、

寅一刻供御膳、四刻撤之、還御廻立殿、次采女進南戸、有還申事、

並ニ悠紀ノ所ニ注スガ如シ、但神饌物及供御ノ雜物ヲ運ビ並ベ置トコロ、悠紀ノ時ハ東ニ置シヲ、此ニテハ皆西ニ置、仍柴垣ノ内ノ西南ノ角ノ案ニ海老鰭槽アリテ、其北ノ案ニ神ノ食薦等、其北ノ案ニ御飯ノ筥等、其北ノ案ニ御果子ノ筥等アリ、其御果子ノ筥ノアル案ノ前東ニ美ソノ小案アリ、西鳥居ヨリ北ノ案ニ白黑ノ御酒等アリ、其御膳具ノ韓櫃ハ、西鳥居ノ外鳥居ヨリ北ノ柴垣ノ下ニアリ、自餘ハ悠紀ノ時ニ少モ異ナル事ナシ、

還申ノ詞ハ、アナメモトリ、ヨヒアカツキノミケ、タヒラカニツカンマツリツト申スナリ、廻立殿ノ南ノ戸ノ下ニ進ミテ之ヲ申ス、

勅曰、云云、采女稱唯退出、次著御帛御衣、還御本殿、伴佐伯開南門、

〔大嘗會神饌假名記〕陪膳と後取と、ゑいのはたふねをかきて、まりぞきいづ、次御祈請の事有、〇中略

其詞云　此間采女程をおきて參べし

伊勢のいすゞの河かみにおはします、あまてる御神、天神地祇の諸の神たちに申てまさく、われ、諸神のひろきまもりによりて、國の中たいらかに、年穀ゆたかにして、たかきいやしきをおはひ、もろ〳〵の民をすくはん、よりてことし新にえたる所の、にいをものを奉る、又身の上におかすべきわざはひを未萌に拂ひのぞきて、さがなくあしきことをかしきたる事なからん、又高き山深き谷所々名をまるしてまじなひまつらん物みなこと〳〵くにけしはろぼさん事、これ天神地祇のあつきまもりをかうぶりていたすべきものなり、

〔伯家部類〕元文三作進ノ留　主上大嘗會降神御祝文

掛毛畏麻天神地祇八百萬神乃廣前爾神物乎備陪貯氐保企氐白佐久、是遠朕我奉留神衣乎羽槌雄乃織留文布、棚機姫乃所織留和衣能神衣登諸神達乃御心平介久聞食氐御魂懸此神物登受介幸比賜陪止言祝志氐奉留止申奏、八度拜志氐謹美愼美氐奉獻留青筋乃文布乃荒妙乃神服白絵縕帛乃和妙乃神衣乎諸神達倩須御心乎起志受介幸比氐、此乃文布縕帛乃清淨久明潔爾因利御魂依託利賜比氐、幽乎出氐顯明爾、朕我敬祭於受介朝威隆盛氐仁志朝廷興起利、實位爲勤久皇胤連綿麻皇道榮陪、食國乃天下毛泰平爾守護幸比賜陪止恐美恐美毛申奏、

次御拍手

右伯家御大祭御祈大法ヨリ考出獻上、

〔伯家部類〕大嘗會雜事、　大嘗會御供神御祝詞

掛毛畏麻某神乃廣前爾、朕恐美恐美毛申氐白佐久、神□增光氐神威增益志、神道興隆爾皇道榮昌仁志氐、朝廷興起氐、寶祚無動久、皇體堅固志氐天下大平仁、皇胤連綿氐朝威增盛仁志氐、伏誅逆命比百官康榮陪五穀成就氐、萬民豐樂幸事遠大神宮平介久安久耳介聞食天受介幸比賜比氐、夜乃守日乃護仁守利幸比賜陪止恐美恐美毛申奏、

大嘗會御供神御祝詞

伊世の五十鈴川の河上に湯津磐村の如く鎮りまします天照大神を初奉り、天つ神くにつ神八十萬の神のあら御玉、和御玉三はしらごとに申て申さく、朕すめ神たちの擁護給ふがゆゑに、寶祚つゞきて動ことなく、天が下平らかに年穀ゆたかにみのりてうつしき蒼生をも救ひ上下ゆたかに樂しめん、かるがゆゑに今年の新のたなつ物入握穂にゑなひたるを御食に奉りて、彌增の守護をのみいのり申す由を聞しめしてうけ幸ひて、諸の災をさけ、千早ぶる惡神を拂ひ、朝家

おこりさかへんに神の威をかゝやかし守り幸ひたまへと申す、

右元文三、十一、十九丁卯、大嘗會御供神の御祝詞也、

建暦二大嘗御供神御祝詞、前後首尾無之、依之蒙仰作進之、献上也、

已上　雅富王

〔扶桑略記(天武五)〕二年十一月、大嘗會、丹波播磨供奉其事、

○按ズルニ、本書干支ヲ記セズト雖ドモ、日本書紀ニ、二年十二月丙戌(五日)大嘗ニ從事セシ神官國郡司等ニ祿ヲ賜フコト見エタレバ、蓋シ卯日ノ事ナルベシ、而シテ日本書紀ニハ、十一月卯日ノ祭ヲ載セズ、

〔日本書紀(持統三十)〕五年十一月辛卯、大嘗、神祇伯中臣朝臣大嶋、讀天神壽詞、

〔續日本紀(文武一)〕二年十一月己卯、大嘗、直廣肆榎井朝臣倭麻呂竪大楯、直廣肆大伴宿禰手拍竪楯桙、

〔續日本紀(聖武九)〕神龜元年十一月己卯、大嘗、備前國爲由機、播磨國爲須機、

〔續日本紀(光仁三十一)〕寶龜二年十一月癸卯、御太政官院、行大嘗之事、參河國爲由機、因幡國爲須岐、參議從三位式部卿石上朝臣宅嗣、丹波守正五位上石上朝臣息嗣、勅旨少輔從五位上兼春宮員外亮石上朝臣家成、散位從七位上榎井朝臣種人、立神楯桙、大和守從四位上大伴宿禰古慈斐、左大辨從四位上兼播磨守佐伯宿禰今毛人開門、内藏頭從四位下阿陪朝臣息道、助從五位下阿倍朝臣草麻呂、奏諸司宿侍名簿、右大臣大中臣朝臣清麻呂、奏神壽詞、辨官史奏兩國獻物、賜右大臣絁六十匹、賜五位已上衾各一領、

〔續日本紀(桓武三十六)〕天應元年十一月丁卯、御太政官院、行大嘗之事、以越前國爲由機、備前國爲須機、兩國獻種々翫好之物、奏土風歌舞於庭、五位已上賜祿有差、

〔續日本後紀(仁明二)〕天長十年十一月丁卯、天皇御八省院、修禋祀之禮、

〔文德實錄三〕仁壽元年十一月辛卯、帝有事於八省院、緣大嘗祭也、

〔三代實錄（清和）三〕貞觀元年十一月十六日丁卯、車駕幸朝堂院齋殿、親奉大嘗祭、

〔三代實錄（陽成）三十二〕元慶元年十一月十八日乙卯、夜天皇御豐樂院、自供大嘗祭、王公畢會、百官供奉如式、

〔三代實錄（光孝）四十六〕元慶八年十一月廿二日己卯、天皇御朝堂院齋殿、親奉大嘗會祭、先御悠紀殿、後御主基殿、親王公卿文武百寮小齋大齋宿侍如式、

〔日本紀略（醍醐）一〕寬平九年十一月廿日辛卯、天皇御八省院、依大嘗會也、

〔貞信公記〕承平二年十一月十三日、（○辛卯）戌時幸廻立殿、（○朱雀）丑刻幸悠紀殿、寅刻幸主基殿、是行事所緩怠之甚也、同刻幸淸署堂、中宮（○母后穩子）同輿、

〔日本紀略（冷泉）五〕安和元年十一月廿四日癸卯、戌刻天皇遷御八省院、依大嘗會也、有叙位、

〔皇年代略記（花山）〕寬和元年十一月廿一日（辛卯）於大極殿（豐樂院破壞）大嘗會、（近江、丹波、）

○按ズルニ、日本紀略、扶桑略記等ニハ、廿日庚寅ニ作リ、一代要記ニハ廿四日癸卯ニ作ル、

〔帝王編年記（一條）十七〕寬和二年十一月十五日己卯、大嘗會、悠紀近江國野洲郡、主基備中國下道郡、

〔日本紀略（一條）九〕寬和二年十一月十六日庚辰、於豐樂院大嘗會、（近江國野洲郡、備中國下道郡、）十七日辛巳、同、十八日壬午、同、十九日癸未、豐明節會、（可尋見、）

〔長和元年記〕十一月廿二日乙卯、左府被候內、即以左衞門督可奉仕由被召仰了、參八省、諸卿入自會昌門、隼人不發吠聲、諸卿一兩相催令吠、不似例聲、卿相復幄座、左右近神樂云々、是慣中院例歟、不可然、伴佐伯率語部之例也、（但語部持白杖、非例、可尋、）諸卿五位六位（用□□□不參、上官例也、）進大嘗宮南門中庭、跪插笏拍手、（初悠紀、晚主基、）寅刻悠紀主基神事了還御廻立殿、兩氏閉門、諸卿退出、今夜左大臣著神服前行、主上（○三條）著帛御裝束、乘御鳳輿、昭訓門於東廊壇上改駕腰輿、是吉儀也、

〔日本紀略 後一條十三〕長和五年十一月十五日乙卯、大嘗會、入御自陽明門、左右大臣〈○藤原道長、藤原顯光、〉以下諸卿步行、近江備中供其事、

〔經信卿記〕治暦四年十一月廿二日〈○辛卯〉乘燭參大忌幄、次宮內卿右兵衛督左大辨被參、此間相共巡見大嘗宮、〈○中略〉次歸著大忌幄、〈蒙居〉頃之雨降、件幄疎略之內、已又深雨之時、漏濕尤甚、仍群卿相議赴應天門、數剋之後記亦進嘗宜、〈○後三條〉後聞被尋雨儀之間、已及亥終、又不遷御腰輿云々、行幸之後、內府〈被著小忌〉被來、向應天門、被行次第事、上達部出居門箸拍手、此外無指事還御、及卯人々退出、

〔百錬抄 五 白河〕承保元年十月三日〈○乙卯〉上東門院〈○藤原彰子、一條后、入十七〉崩、依此事大嘗會可被行哉否、仰諸道勘申、十一月大嘗會於大極殿被行之、豐樂院未作之間、於官廳可被行歟之由有議定、遂於大極殿所行之、

〔本朝世紀〕寛治元年十一月十九日丁卯、大嘗會祭也、戌刻天皇〈○堀河〉從堀川院御八省、攝政〈○藤原師實〉及左右大臣〈○源俊房、同顯房、〉內大臣〈○藤原師通〉以下步行扈從、攝政殿著小忌給、

〔中右記〕寛治元年十一月十九日丁卯、今日破却北野齋場所云々、〈○中略〉戌刻有行幸大嘗宮也、〈被用步儀、經膝道胡簶、〉先主上御南殿、左次將渡階下、向西中門、次上卿列立庭中、是小忌上卿許候列、〈左大臣、兩大將、新源大納言、左衛門督專、新宰相令近衛次將等皆悉此中、悠紀主基國司、次將候相具標山著私尋常小忌、用平胡簶蝦胡簶野劍五人尻鞘、皆悉淺沓胡簶、殿上人道具朝臣一人著大忌、〉次寄御輿、〈鳳輦、上達部次將不相許不著小忌也、〉無鈴奏幷警蹕、大將不被仰御綱、乘輿自堀川上、入自中御門、向八省、於昭訓門下神祇官奉御麻、入自同門、於龍尾道上留御輿、改御腰輿、〈御輿寄東殿〉經廻立殿、入自西幔門、〈次將〉藏人大膳權亮藤盛房著伊末支供奉、其事是觸山蔭中納言子孫之人勤仕事云々、若是何故哉、可尋知之、亥刻許敷筵道、御悠紀正殿、次第如式、子刻許還御廻立殿、又有御湯殿事如前、次御主基正殿、其儀如初、寅刻曉膳了還御廻立殿、次寄御輿、〈鳳輦、警蹕、無〉還自本路、御小安殿也、

嘉承三年〈○天仁元年〉十一月八日甲寅、以頭被問人々云、大嘗會夜行幸八省之間、皇后宮可有同輿歟、寛

和長和母后同輿給也、寛治無其事、今度如何、内々可量者、人々同心被申云、行幸程近、雖不令同輿給、何事之有哉、就中皇后乘給御輿之間、於事遲々歟、神事爲不誤刻限、雖不然不可有難、但主上羽○略猶可御于輿之事、可令隨其體給歟、以此趣奏聞、人々退出、廿一日丁卯、見大嘗宮廻立殿御裝束、中將殿令參内給了、○中略戌刻許參内、入從待賢門、著大嘗宮南（悠紀方）大忌幄、（東西行居疊、立大盤、西上對座、）按察中納言皇后宮權大夫被參入也、此間予密々竊見大嘗宮御裝束、八女等謳歌、御裝束如式、廻立殿東二間御湯殿、（湯舟東西行居之）大略如寛治元年記文歟、仍不能委記、戌四點行幸成、鳳輦出自建禮門、入自昭訓門、於龍尾道上（當東石階程也）移駕腰輿也、予密々遙見遣、（殿下令著小忌給、近衞次將小忌壷胡籙、但右少將宗能、藏人少將忠宗依爲近江丹波介、今朝付標山、私尋御小忌裝束上、平胡籙、螺鈿野劍、自餘次將并殿上人位袍之上、著諸司小忌、有日蔭、但標山引間步行之時、宗能忠宗巡方若馬腦螺鈿細劍、或樋螺鈿劍、紺地平緒、淺履也、隨身壷胡籙、垂袴、）小忌公卿權大納言經實、右衞門督能實卿（中納言）新宰相俊忠前行、殿上人貫首爲房以下皆悉著小忌供奉、廻立殿北面、寄腰輿於南面戶間、（皇后宮不同輿給、幾日有議也、）有御湯殿、藏人右中辨左衞門佐顯隆、藏人左衞門尉說定、勤仕御湯殿役、（脫袍下襲半臂、其上著宮色、不脫複袴、）爲山陰中納言末葉人勤此事也、（不論內外戚也）次供御手水、小忌上卿大納言以下三人著前庭、（北上西面、權大納言於此邊被著小忌、頗以儀忘也、御出以前皆悉可著也、）亥一刻令入悠紀神殿給、攝政殿前行、（左內大臣供服日數中不被出仕、有議殿下令前行給也、）左中將信通朝臣、藏人少將忠宗取劍璽前行、（左右相並、解劍胡籙也、）天皇端笏入御、諸司氏々如式相從、終夜次第神事存舊規歟、不能竊見、小忌上卿權大納言經實卿行諸事、外記祐隆奉小忌幄前、催右大將以下、大忌公卿付版、（異位重行、納言一列、參議一列、北面西上、）相跪拍手八度、（稱八度手）比了、還著本幄、安倍氏長奉讀宿簡、（付版讀之、諸司侍宿交名等付之、）還御廻立殿、又有御湯殿、入御主基神殿、供神物如式、（如初）天明寄鳳輦於廻立殿、稱警蹕、出自西幔門、經西花門、御小安殿、入自北中戶間、（還御之時、右大將并小忌公卿供奉、大將有召候著小忌、大忌公卿不參、又無名對面也、大將有召供奉還御、被著小忌、後日不著此事如何、大臣後日不著、納言如何可尋、或人云、還御之時、大忌公卿可供奉也者可尋、）五節舞姬渡八省廊了、小安殿御裝束、寛治記文、仍不記置、今夜天晴星明、全無風雨難、天之與善誠矣斯言、及曉更時々飛雪、臨幸之與、自然所致歟、

〔匡房卿大嘗會記〕天仁元年十一月廿一日（中略）主殿寮供御湯、先取下水、（以斗爲樋）次入御湯七度、次御湯殿人（左衛門佐顯隆、於女官儲解除下、置胡籙等、不解老懸、不脫襪、其上著（著下忌右脫字）藏人左衛門尉藤原說定、解胡籙著小忌、他裝束不改、）顯隆以右手合御湯、向神殿方提遣御湯七度、次張蓋、（二幅布也）次奏御湯取之由、主上渡御、次撤蓋、主上乍著御帷令下御槽給、（件槽東西妻也、其北立白木床子二閒、一脚設御帷幷御河藥、）故源右府御說、專不可令下御槽給、立床子可令沃懸給之、而後三條院仰云、乍著御帷令下御槽給之由見朱雀院御記云云、次奉摩御背三度、次脫捨御帷於槽中令上給、著他御帷拭御、次供御河藥、（供御河藥、不見舊記歟、隆方朝臣私記有此儀、三條院被注仰、）次還御御所、次著神態御裝束給、只易御袍御半臂御下襲許、自餘物等不易、童帝不用幘、諸司供御手水、頭五位藏人奉傳之、小忌王卿著巽角庭上座、大臣一候坤角座、（但主上渡御大嘗宮之後可著歟、）主上正笏以劒方枚上、次渡御大嘗宮、其道大藏省鋪二幅布單、（其宮中地鋪入二幅布單入儀、或二張云々、）宮內輔二人（藤基代官、取顯信使、）左右膝行、以葉薦隨御步敷布單上、掃部頭雅康朝臣允信貞以上二人從後卷之、（人不敢踐）主上先例徒跣、而童帝不脫御絲鞋給、又不著幞頭、車持朝臣一人（小忌垂纓）執御蓋、（件蓋御輿蓋也）子部宿禰笠取直張御笠綱、（細尾老懸、退紅布衫、伊知比厘巾、白）共膝行、（解弓箭劔、執御蓋綱、）御劒璽、（信通朝臣忠宗取之、左近次將執御劔、右近次將執御璽候御前後、不脫老懸、卽解弓箭幷劔等、）次攝政大臣（解劔、把笏、）率中臣（祭主親定朝臣、）忌部（条衛重、小忌、）在御前、（大臣在中央、中臣祭主親定在左、忌部太皇太后宮屬条衛重右、家保右大臣自右方布單上行之、依北山抄幷御卽位時御前命婦例歟、但自北可行由見後朱雀院御記、）御巫（小忌衣褶、[illegible]赤絹裳文、）猿女左右前行、（平額子、赤紐、唐衣、）次主殿官人二人、（允貞道、屬有俊、）秉燭照路在左右、自大嘗宮北門入、經悠紀殿西布單上、自南面褰座簾入御、經神座西北著御、如東座少巽、（相傳云、攝政入神座內、關白不入云々、）此間發稻舂歌、（入女舂之）裝束如女官、炊神膳料理神膳、稻實翁鑽火、（著帽子、裝束如常例、）忌子女物觸手裝束如御巫、次小忌群官著其座、（王卿經大嘗宮東邊著之、西面北上、辨少納言幷侍從等同就此座、大忌人不入大嘗宮幷迴立殿、）次璽劒近衛將立在神殿南簣子、次開門、（件佐伯宿禰開大嘗宮南門、衛門開會昌門、）次宮內官人率吉野國栖（十二人、楢笛工五人、幷小忌、）入自左腋門就位、次伴佐伯宿禰、率語部（十五人、小忌）入自東腋門各就位、（並著青摺衣、[illegible]國栖、次歌女、裝束如節會命婦、次語部、皆北面東上、裝束小忌、國司在歌人東、掃部寮鋪設座、）其群官初入時、隼人發吠聲、立定卽止、先國栖奏古風五成、（其笛音頗以指似摩）次悠紀國奏國風四成、（其聲似神歌遲、）但主基丹波國奏早歌、次語部奏古詞、（其音似祝）出雲美濃

但馬語部各奏、(小忌東)次隼人司率隼人入自右掖門、於御在所屛外北面立、奏風俗歌舞、(二人舞之、神祇式圖稱等、與後詳官參入、隼人發吠聲、乃進版前拍手歌舞云々、儀式圖稱等、似前後兩度奏、)以次退出、次公卿以下五位以上就庭中版、(異位重行、承平東部王記云、進就道東近伏南、式部不置版、量程行立云々、今案公卿立就道東、四位以下相分東西也、)跪插笏拍手四度、(度別八遍、神語所謂八開手是也、拍了少拜、)畢復座、座定安倍朝臣五位二人、六位四人、左右相分就版、奏侍宿文武官分番以上簿、(主典以上書姓名、分番唯奏其數、左右門部乘燭、其簿辨官仰諸司進之、安倍朝臣、凡奏事於御在所者皆跪、若雨湿立奏之、)亥一刻供神膳、其次第自柏殿東、其行列次第伴造一人執燎火、以瓫懸頸受燼、次采女朝臣一人捧削木稱警蹕、次宮主取竹杖立、次主水司水取連一人執蝦鰭船、(是土手洗也)次水部一人執多志良加、(土瓶也)次十女、(采女)其中典水二人、一人執楊枝筥、(納御楊枝并刀子、箸、或說楊枝一把十筋許、)一人執御巾筥、次八女一人執神食薦、(其薦以木綿貫之、號陪膳薦、最姫陪膳也、)一人執御食薦、(號次姫、後取也、)一人執枚手筥、(納葉盤八十枚、若六十枚、數可尋、)一人執御箸筥、(納竹箸六具、數可尋、屈竹以絲結之、入本柏四束、)一人執御飯筥、(納窪手一口、)一人執生魚筥、一人執干魚筥、一人執菓子筥、(納菓子四種、以木綿結之、)次内膳司高橋朝臣二人、(一人執鰒汁、一人執海藻汁、)以上汁漬盛陶器、次膳部二人各執空盞、(可盛二種御羹之料、同用陶器、以上四口器各居高坏、以窪盤覆之、以木綿結之、高坏下鋪枚手、)二人舁御羹八足机、(居羹堝二口、一口鰒、一口和布、皆不用鹽、切干海松和之、其堝覆用平手、以木綿結之、)次造酒司酒部二人舁御酒案八足、納酒於平居瓶居之、以陶器覆瓶、著柏葉盤結以木綿、供神膳次第、伴造一人、采女朝臣一人、相分左右立階前、宮主取竹杖從南第一間參入、水取采女等次第列座、(宮主候中戸闌外、小逼北向良居、)此間陪膳及女男官候戸南腋、(東西二行北上對座、供御手水、之間、水部候南第一間巽角、)次典水采女二人、各所執筥暫授水部、舁槽參入立八重帖上、(南北妻)一人留候、(北面)一人往還、取楊枝筥參、授留采女、還又取御手布筥同授、又還取多之良加授留采女、采女供御手水、(西面)楊枝手巾筥等置槽南邊、次御盥、(御手水沃之、三度爲良、)畢撤楊枝筥手巾筥准初、次舁槽退出列候艮角、次八姬六男共以南面、(若是臨行者、不可有此字、)次陪膳取神食薦敷八重帖上、(東西妻)留候戸內、(東迫)次後取采女取御食薦、傳授陪膳、陪膳取之敷御前八重帖上、(南北妻)次姬一々取供物傳陪膳、陪膳受之供之、(手傳)先取平手筥置於御薦上巽角、次取御飯筥置於平手西、次取生魚筥干魚筥置平手北、次取菓子筥置於生干魚西、次取鮑汁高坏立於魚北、(以下嶋北、土數上、)次取海藻汁

漬置於鮑西、次取御箸置御飯西、七女六男退候戸南廂、次後取采女持空盞(是盛切海松之器)一高坏參來、陪膳取之立於鮑北、又持一高坏參來、陪膳立之於海松西、(件二種、陪膳居於入足立於戸外、膝行盛之授後取、)後取之者送座於采女之列、陪膳先始自空盞及于平手筥一々解開蓋畢、(件蓋柏者、置御食薦北下入置帖上、)次取御箸、始自御飯一々立之、次陪膳取平手奉天皇、天皇取之盛之授陪膳、陪膳承之置於神食薦上、(始自東中間行北二行置之、但一枚、或記云、置件膳之中央東方、是爲結引遣所餘已、膝如五出、)次四度重疊如初、御飯五柏、其上御菓五柏、陪膳加汁漬於五柏之御菓上、菓子六柏、(五重疊於御菓上、一柏加夾、其儀陪膳以兩手奉平手一枚於天皇、天皇以箸盛之授陪膳、陪膳以左手受之、以右手奉次々平手、以上各三箸、一々盛授之、)次後取取清酒參來、陪膳取本柏御角請之(酒部於戸外盛之令供、近代所行、陪膳盛之奉天皇、)奉天皇、天皇取之灑神食上、其柏便置神物上、如此四度(度別易盞)次陪膳取五箸入御箸筥、更殘一箸立殘御飯、次天皇稱唯、(此兩宮先皇御記所註云々)嘗御飯三箸、餘味不嘗、次後取盛御酒於陶器(於戸外盛之)持參授陪膳、陪膳取之奉天皇、天皇拍手小低頭(敬、又可有稱唯、)了、御飲如此入度、(酒部候南廂東戸簾外、)次陪膳覆結如初、(始自平手至于空盞撤之、一々授後取、後取手轉、)陪膳取天皇御食薦授後取、次取神御食薦之東端、推捲捧持退出、如供儀、陪膳欲取神食薦、私祈曰、先可挾給之物(乎)後(爾)挾給(比)及諸咎有(止毛)神直(保比)大直(に保比)受給へ、入姫六男列座(南面、手轉)畢、即北面持御手水畢、次供御手水、其儀如初、供了撤去、次第退出、先宮主、次御手水采女二人、次陪膳、次後取、次六姫、次六男、次主水官人二人、供曉膳儀同夕、次還御廻立殿、其儀如初、次子剋御湯殿、次御手水、采女時申、丑剋御主基殿、(作法同上、但悠紀大嘗宮東方、入自南、御膳在西南、故也、)小忌公卿以下渡西、寅剋還御廻立殿、陪膳采女進南戸下申云、采女水取夕へ曉之御膳乎(留)仕(ツ)ト申(ス)、勅答好、承保例如此、而長元御記於主基殿申之云云、

〔殿暦〕嘉承三年(〇天仁元年)十一月廿一日丁卯、今日余爲恐頭を洗、巳時主上有御湯殿、余午剋著直衣出衣參御前、中將同參入、有直衣出衣、夜前參入、上達部又參入、童御覽如例、但左大辨重資宰相顯實不進、事了人々退出、余下宿所、戌剋許著束帶參入、又沐浴、戌剋許參御前、主上著帛御裝束給、(余今日裝束淨物也)御髻頬如(ノアヒツラ也)夾形如常、蘇文玉御帶(但近方)御裝束具御插鞋(を)著、次々儀有大嘗會御神物、次內余

出御後、於南殿御後著小忌、五位藏人顯隆令著之、行幸路幷次第如常、余還御後小安殿、於馬場道脫小忌、余下宿所、供解齋御粥、御手水同之、○中略、餘儀無別事、但今夜次第如寬治元年、有別次第、仍不記、余於廻立殿脫劒取笏前行、攝政多候御後、而前行無大臣、仍余前行、主上取御笏給、余入神殿、供神物間、御手ニ余ノ手ヲ副天刺給也、無極恐思也、雖然他乃無治術、仍如此、事了還御、渡主基給如悠紀、事了還御、今夜余裝束打下襲如常、但淨裝束也、蒔繪劒、中將今夜令參、裝束マツムシノ表衣、打下襲、壺胡籙、蒔繪劒、紫緂平緒、御悠紀之後、中將向余宿所、

〔本朝世紀〕康治元年十一月十五日癸卯、大嘗祭也、○中略、近衞、凡今日事甚失儀式、就中供神物一兩荷打入泥塗中了、希代之例也、

〔台記〕久壽二年十一月廿三日丁卯、入夜參皇后宮、次參高陽院宿候、傳聞、○中略、自一本御書所行幸廻立殿之間、○後白河内大臣、大納言宗能、參議雅通、著小忌供奉、中納言季成雖卜食不參云々、自廻立殿還御大嘗宮之間、內大臣前行、關白不被候、依妻服歟、民部卿中納言中將候大忌幄云々、

〔愚昧記〕仁安三年十一月廿二日己卯、今日大嘗祭也、○高倉仍晩頭沐浴、是依合卜可著小忌之故也、此事先例依不分明、尋申左府、○藤原經宗之處、命云、先例雖不慥、心中聊潔齋可宜歟、是敬神之至也、仍如此、戌剋許著束帶參大內、○中略、頃之出御南殿、近衞引陣、仍於壁外著小忌、召使持來也、進立軒廊、右次將渡左之後、列立櫻樹南、以右京大夫邦綱著小忌、雖此列、是稱可奉仕御裝束之由云々、然者參合廻立殿著小忌祗候、若可宜歟、但若先例歟、次乘輿、鳳輦、小忌公卿前行、出承明建禮門、可入昭訓門也、而新中納言右京大夫等稱可入御從宣政門之由、予云、自昭訓門入御於龍尾道壇上、可移御腰輿、皇后同輿之時、入御宣政門歟、兩人猶雖有確執之氣、愁入自昭訓門、又留立龍尾道東階下、云、御腰輿之間可候此所歟、予依示不可然之由、兼雅卿先行、經廻立殿北幔外、入西幔門、經神楯與杵之間、立座前、予○藤原實房於幔門外垂裾、先行之間掛之、經杵北立同所、先是左大臣著小忌立坤角、不參內裏、參合此所、於西幔門邊可著小忌之由、昨日有命也、次寄御

輿於廻立殿南面中央間下御、頭中將實守朝臣參上、所役如常、此間予以下跪候、次持去御輿、了正座候、又左大臣著坤角座、（依諸暫敷座、下御之後御敷之著座、上官左大臣著乾、）次主殿寮供御湯、右中將實宗藏人奉仕御湯殿云云、件間事依不見不能記、御湯殿了采女參上廻立殿南戸下、申時刻、（出東大嘗宮）即還御悠紀殿、其儀先大嘗宮敷二幅布單、但宮中地敷入幅布單、左大臣解劒（於座解之）取笏參進、跪脫沓、（息男中將頼實取履）進立布單上、（大臣）云（或進布單立右頭云、然而普通如此、）頭中將實守右中將實宗參上、取劒璽先行在左右、天皇御中央、宮內輔二人持葉薦膝行、隨御步敷布單、掃部助從後且卷之、人敢不踏、車持取菅蓋、子部笠取執蓋綱、攝政相從御後、（白布單令進著小忌幄之間）次予以下出東幔門、（但無幔門、仍當幔之、先例有幔門歟、）出經大嘗宮東頭向小忌幄、欲著座之處未敷座、又不掌燈、依仰右中辨長方（小忌）忽令敷座、再掌燈著座、（西面北上、辨少納言同著此座末、）次予召召使仰可置軾之由、而掃部寮一人持之置東方退去、尤奇怪、仍更令召仕置幄西、次召外記、外記參軾、予問云、諸司皆候哉、申云、候ハ、仰云、候ヘ、外記稱唯退去、先例依不分明、只總問諸司也、此間細雨頻灑、仍令召仕（召外記可問也）相尋雨儀於大外記之處、所答不分明、然而雨脚依須降、起座徘徊宜政門邊、喚大外記頼業眞人、重尋先例、猶以如先、但示云、治曆大忌小忌共群集應天門云々、然此門何事候哉、予云、然者此門南廊可宜歟、頼業云、廊狹候歟、只門可宜候歟、予又云、門已爲件口路、何乍置廊可居門哉、有廻廊之所必用廊歟、人々承諾、即敷座宣政門南廊著之、（西面北上、右中辨遲參、仍右大辨仰史令敷之、納言用大辨、隆不快、非無先例、中納言或用之、況至大納言哉、仍所仰也、且隨便宜也、）良久聞還御主基殿之由、移著章善門南廊、（先是敷座、無笠、依雜遣著之、）頭之召使來云、已還御廻立殿者、仍經西廊入自西花直參小安殿、（須擁笠參進廻立殿西幔門下也、然而甚雨之間、事々無威儀、仍如此、）即御輿進幸、仍各擁笠立幔門外東方、下輿了即退出、抑可有名謁哉如何、先例天曆之後還御、仍無此事、今度已夜中也、可有此事歟、然而次將不問之、又先例依不分明、獨退去了、

〔兵範記〕仁安三年十一月廿二日己卯、未明出立參齋場所、○中略下官○平信範著廬屋、行雜事、供神物自南鳥居至于國司宿前連立、行列次第、次國司在廳等付人夫於其物等、十荷別有採領、又差副官使儲不

可引損由各仰含、次令持立、次第見別行列圖、次引出標山、先拔并東鳥居、又破却南門西掖木柴垣两三丈、裝束人夫(用青袍)百人、雜夫百人、引綱寛出立達智門前、行事官供奉、次引下標、次行事官歩行、次供神物如式行列、下官於同所乘車、密々在神物後、自一條東行、自宮城東大路南行、自七條西行、經朱雀大路、留立東邊、下官自錦小路西行、自櫛笥小路南行、行合七條、是四條大宮、九條院御所前憚避之故也、於七條朱雀重整行列、仰含行事官等之後、奉見院御幸之處未成云々、頃之使者走來巳御幸、御車被立朱雀門前東邊由云々、次牒主基方同樣相並令行列、次引下官爲先、但立入七條北小路、密々乘車、自坊城小路北行、遣出五條末更加行列、依長途無術、頗略歩行也、

所衆瀧口各十人召具、但令前行、(所衆列左、布衣著淺沓、瀧口列右、帶胡籙著毛沓、各衣裳折花、)次下官著靴、御藏小舍人二人、(友弘久成著布衣)辨侍一人(安貞著淺沓)次雜色三様追前、次侍十餘人、(五位有官、雖無官召具、可然輩、不具上官五位皆著淺沓)於三條以北、仰行事官重令整行列、此間主基行事官不見來、尤不審、

悠紀標引入朱雀門應天門等東戸、立會昌門外、(朱雀門標左京職構之、應天門内外假構卜食圖構之、)天下官於院御車前居前後從者同時居、次入兩門休息東廊壇上、供神物任例舁居、卽仰行事官計渡神祇官了、數箇供祭一荷不失、併全色數皆付神司了、行列之間先々多紛失、今度未曾有也云々、兼仰行事官於所々整行列、又仰人夫採領之故也、神事相應之前表也、次退下宿所、(大膳職中略)○有御湯殿事、次供忌火御膳、此後大忌人不昇殿云々、主殿寮參大嘗宮供齋火、伴佐伯宿禰率門部各八人出南門外儲庭燎、次行幸、出御承明、建禮兩門、前陣左衞門左兵衞大忌公卿小忌陣、大刀契鈴印、外記淸原近業、左大史中原盛直、少納言信康、左中辨長方、次左大臣、次御輿、次攝政、(召小忌)次殿上人、次右兵衞右衞門、次著御八省東廊、御輿暫留門外、留久禮都古入御昭訓門、於龍尾東階壇上敷莚、其上並居御輿、移駕腰輿、次指屏繖、次經廻立殿北幔外、入御自西幔門、寄御輿於殿南中央間、小忌左大臣被候坤座、同權大納言實房、權中納言兼雅、右大辨實綱卿、候巽角座、次有御湯殿事、右近中將實宗朝臣、(於東幄邊脱靴下重懸腰、其上著當色)藏人藤原能頼(於□殿□)

上（着当色）奉仕御湯殿、四位入御湯殿、合御湯、六位立御湯殿東外樋下、鑚入御湯、数七度也、先例樋上居計、七度入湯、今度無計、只入樋也、近代件樋造計程、仍別無計云々、此條無謂、猶可居計歟、主殿允中原資重勤御湯入役之、先是内蔵寮供天羽衣二領、（一領著御令入御湯給、一領令上給之時者、御晩御浴之時、又供二領、凡四領儲之、）同寮献打清布、（以件布拭御湯也）天皇御浴如常、不召御川薬云々、次著御祭服、（中略）○次召御手水、頭中将為陪膳、持参御手洗、（蔵人持之、於御湯殿戸下被取之、）蔵人少輔大進等持様御手巾等、采女申時、亥一剋入御悠紀神殿、自廻立殿南面至于神殿南面、敷二幅布單、又大嘗宮中地鋪六幅布單、（大蔵省敷之、）其上掃部寮葉薦、次忌部神祇大祐明友、中臣同大副師親朝臣等前行、（相比）次猿女一人、御巫子一人、（相比）次左大臣（著小忌、脱剣、取笏、著浅沓、）次主殿允二人秉松明前行、次宮内大輔重頼同少輔棟紀、（殿上人）膝行展薦、掃部頭季弘朝臣（各可尋）随御歩巻之、右近中将實守朝臣（頭）資宗朝臣執御璽前行、（相比、皆解弓箭劔等、）次車持氏差菅御笠、子部氏笠取氏共膝行張蓋綱、（件蓋三人）（著冠緌、退紅白袴也、）天皇正笏入御、摂政扈従、次供神膳料□□膳、先是八女歌稲春歌春之、炊神膳料理、稲實公鑚火、氏々所司等捧御手水、

神膳参列次第

先伴造氏一人、以笠懸頸執燎、

次采女令史一人、取削木警蹕、

次宮主執竹杖、

次主水司水取連一人、執鰒鰭槽、

次水部一人、取多志良加、

次采女十人

二人御手水役（盛之泉水、一人取楊枝筥、一人取手巾筥、）

一人陪膳、（出雲）取神食薦、（以木綿兩所取貫之、）

一人取御食薦（紙木綿）

一人取御箸筥（御箸六本、指四入、以木綿結之、）

一人取平手水筥（入八盞二十三、十二枚、同結之、）　　一人取御飯筥（小筥手二稻粟、入柳筥、同結之、）
一人取生物筥（生魚四坏、同結之、）　　一人取干物筥（干魚四坏、結之、）
一人取菓子筥（入四坏、同結之、）
次高橋氏一人（奉膳、信濃、）取鮑汁漬、（盛土器、）
次安曇氏一人、取和布汁漬、
次内膳司膳部四人
二人取空盞各二口、（盛羹料、）各居土高坏、以盤覆之、二人舁御羹、八足机居瓫堝二口、（一口鰒羹、一口和布羹、覆平盤、以木綿結之、）
次造酒司二人舁御酒、八足机居、入御酒平居瓶、
次主水司二人舁粥、八足瓫堝四口、（黍二口、粟二口、）
次供神膳、主上入御、攝政令入神殿給、代天子供奉之、先是左大臣以下小忌五位已上就庭中版、跪插笏拍手、
次群官著座、（公卿經大嘗宮東著之、西面北上、辨少納言以下侍從等皆候此幄、）被行盃酌云々、
左府行事、先開門、伴佐伯開大嘗宮南門柴戶、衞門開會昌門、
宮内官人率吉野國栖入左腋門、（十二人、笛工五人、）悠紀國司率歌人、入自同門、
伴佐伯率語部十五人、入東西腋門、（著青摺、）
座前國栖、次歌女、次語部、皆北面東上、國司在歌人東、
群官初入、隼人發吠聲、次國栖奏、次風俗奏、（國司相具國人奏之、）語部奏古詞、（入西腋門、二人舞之、）安倍氏奏文武官簿、（御前行事所饌之、）就版奏侍宿文武官簿也、
五位二人、六位四人、左右相分、就版奏之、

次被撤神膳、先陪膳采女退出、次宮主稟衛祈申、次撤之、次氏々巳下退出、次第行列如初、次還御廻立殿、供御膳、次御浴、(如初)次著御齋服、今度又供也、次供御手水、(如初)采女申時、(取御木)次渡御主基神殿、次第如初、菅蓋主基人供之、于時寅一刻也、供神膳儀一如悠紀事畢還御廻立殿、大刀契鈴印安廻立殿巽壇上、渡御小安殿之後、安御所南壇、(敷薦)次取入被安御所東壁下、卯刻改祭服著御帛御裝束、次寄鳳輦於廻立殿、次乘輿、近仗初稱警蹕、出西掖門經西華門、御大極殿後房、寄御輦於北中階、次陪膳采女出雲參上、申神膳平安之由云云、

〔玉蘂〕養和二年(〇壽永元年)十一月廿四日辛卯、此日廻立殿行幸(〇安德)也、後聞戌刻行幸、前行左大臣云々、(〇中略)今夜行幸無揭焉之儀、又不可必備其儀之上、聊有相勞事不出仕也、御湯殿右少將實明云々、大忌公卿僅三人、各不著輕徘徊便所云々、又左大臣候御在所邊之間、前駈等列居、其前雜人圍繞云々、古來不聞事也、大嘗會鳥居之內、一切不入大忌人也、末代之儀、幾敢不可已者歟、

元曆元年十一月十八日癸卯、此日踐祚大嘗祭也、(〇中略)今夜依保安例無同輿、於龍尾壇遷駕腰輿云々、(〇中略)今夜廻立殿御浴殿之間、幼主(〇後鳥羽)偏如成人、見者稱奇異事云々、

〔源平盛衰記 四十一〕被行大嘗會附賴朝條々奏聞事

十一月十八日(〇元曆元年)ニハ大嘗會被遂行タリ、大極殿燒失シニケレバ、去々年ハ紫宸殿ニシテ被行タリケルガ、先帝西國ヘ落下ラセ給タレバ、今度不吉ノ例去ンガ爲ニ治曆ノ嘉例ニ任テ、太政官廳ニシテ被行ケリ、去治承四年ヨリ以來、諸國七道ノ人民百姓、或平家ノ爲ニ被追捕、或源氏ノ爲ニ被切略ケレバ、家烟ヲ捨テ山林ニ交リ、妻子ニ別レテ道路ニ吟テ、春ハ東作ノ企ヲ忘、秋ハ西収ノ營ヲ棄テケレバ、國衙庄園モ正税官物ノ所濟ナケレバ、如何ニシテカ加樣ノ大禮モ被行ベキナレ共、サテ又默止ベキ事ニアラザレバ、如形被遂行ケリ、

〔明月記〕建曆二年十一月十三日(〇癸卯)予爲見物馳向四條坊門朱雀邊、山僧都被同道、法印又被相催、

此所數剋相待、送使者源中將家數度問答、可被相伴事也、且亦少々事等問送、未剋御幸朱雀門前、訖云々、御車邊有僧供奉、公卿殿上人以下數疊列居、北面同之、出車家信朝臣云々、亦例別女房御車多、標山漸進來由聞之、四條邊之程、少將可進寄由催之、乍乘車在大路東邊、悠紀山先過了、次主基山過了、供主人數剋不見來、先辨、次守、次介、次權介以下可行列、然而亦必不守、次第云々、介權介相共、且進三條坊門邊、可相待餘人由相議進行云々、介時賢朝臣裝束大略同前無違亂、隨身四人、赤木袴、當色袴、衛府侍七人、童一人、權介行粧存外似宜、共人等面々刷之、不具、如木雜色、隨身二人、童二人、先在其後、次奴袴之輩侍等相交、各調度懸在其後、人數無過失、尤存外也、是人々省略之故也、於押小路南相待、次第渡云云、次悠紀辨之侍追前、著深沓侍十人許頗不優、次守、武勇家也、定有相傳家人等歟由人存之處、殊以無從、自餘雜人等面々著小忌付日蔭、或左付赤紐者等有之、次供神物、定存例歟不委見、但入女之員不定、若相儲上方歟、其中法師兩三人相交、人夫舁供神物太不當、次主基辨口沓辨侍等同前、共侍五位相交三十四人、調度懸一列、侍之體各知恥、黄門結構歟、人似不依貧、辨是非人如此、辨日蔭青組結纓下、定有所存歟、次國司等面々不尋常、兩介不見、在三條以北、供神物之間伺隙歸、又立二條北大宮大路、相待御幸還御、日入之程還御、○中略後聞付供神物法師等於御車前被追止、又悠紀標欲入朱雀門西間、而引懸柱不入之間、依仰引返入東間云々、辨每事如泥如此云々、

秉燭以後著打梁束帶參內、○中略行廻立殿方少々伺見之、歸於右近陣伺見行幸儀、○中略御輿先在日華門、臨期自中重外廻日華門云々、此事不得心、雖自西出御之輿何可廻乎、於御輿在西門否尤可渡歟、出御南殿、左將渡、信能資平朝臣爲家云々、小忌公卿經階下列立橘木東、左大臣殿、大納言殿公宣範朝卿又出口西廊外見物、出御陰明修明門、公卿前行如例無殊事、少將親通今日赤紐付左不足言、又渡大路之後不參內裏、後聞移御膳輿之間、取忘御草鞋良久待御、頭不存之歟、但內豎逐電之由各稱云々、大忌公卿定通、隆衡、實宣、公定、頭俊朝臣、又無小忌公卿幄、依內大臣殿仰忽取渡他幄等云云不委聞、劒璽役藤頭中將信能朝臣云云、予乘月歸宅、

十四日、二條中將示送云、夜前移御腰輿之間、次將不見御座所存如何、由右大辨奉書到來、爲之如何、予答曰、如先日申、此事一切不知、其子細、如舊記所不見及也、誠不可論、御輿之體乘御之時見之、何難在乎、

〔平戸記〕仁治三年十一月十三日辛卯、今夜大嘗祭也、〇後嵯峨行幸廻立殿之間、徵迷其路、前行侍從宰相資季行迷云々、希代事也、件路官使部取松明立所々、令敎導供奉定例也、今度無沙汰歟、上下不知故實之至也、凡出入之門皆違例云々、成人幼主之時彼門相違也、人以不知之由云々、祭祀之間又多違例等云々、無猿女云々、希代勝事也、

〔永和大嘗會記〕同〇元年十一月廿三日、卯の日なり、大嘗會の當日なり、神齋ことに嚴重なるべし、〇中略やう〳〵夜ふくる程、左大臣〇藤原兼基轉任の拜賀を申さる、後房の庭にて拜あり、其後廻立殿行幸うちまつ、忌火の御燈とて、よき御とのあぶらを御殿上にとぼして後は、小忌の人ならでは主上する人もなし、大殿關白〇藤原師忠輕服によりて直廬にこうせらる、これまた長元以來度々の例にてはべるとかや、夜ふけて行幸あり、帛の御衣をめさる、これ大神事の御しやうぞくなり、後房に鳳輦をよせて乘御あり、先行左大臣以下、袍のうへに所司の小忌を著す、東門より出御あり、その行列、

先左衞門府志坂上明兼、府生佐紀重

次小忌上官少外記清原季宜、少納言秀長朝臣、槇信、辨資廉朝臣、仲光朝臣、

次先行大臣左大臣

次小忌公卿中院大納言、西園寺中納言、中御門宰相、

次大忌公卿大炊御門大納言、洞院中納言

次御輿

次將左親雅朝臣、守教朝臣、實宣朝臣、右基明朝臣、公仲朝臣、資守朝臣、守春、季尹、

大極殿のあと龍尾道のまへにて腰輿にめしうつらせ給ふ、今はいづことも見えず草の原にてあれども、猶昔のあとをたづねてめしうつらせ給なり、廻立殿へは宮中の行幸の儀にて腰輿にめさるゝ也、むかし大内の中の行幸はみな腰輿なり、廻立殿の南面に御輿をよせておりさせ給ふ、この廻立殿は昔はうるはしき殿舍にて侍れど、いまはかたのごとくのかりやにて侍るなり、其後御湯をめす、其ありさまくだ〳〵しければかゝず、藏人頭宣方朝臣御湯殿のやくをつとむ、六位は山蔭流をもちひられ侍事なれども、其子孫なきによりて、この度はたゞの六位つとめ侍る、無念の事なり、あまの羽衣めされて御槽におりさせ給ふ、いとかう〳〵しくめづらしき御行水のさまなり、御湯はてゝ又帛の御裝束をめさる、幘とて御冠の巾子をすゞしのきぬにてまとはせ給ふ、これ又大神事の御裝束なり、御裝束師は二たびながら大炊御門大納言〇實宗勤仕せらる、代々此家ならでは御裝束の秘事口傳をば傳たる人もなきとぞ承る、御裝束めしてやがて出御あり、廻立殿より悠紀の神殿まで筵道ふたむなどをしきて、かもんれうあゆませ給ふにしたがひてこれをしく、前行左大臣さきにあゆぶ、關白輕服によりて參せられず、中山中將親雅朝臣御劒をとる、主上〇後醍醐の御前にすがゝさをさし、忌部中臣猿女などいふやうの者どもあゆみつらなる、いとめづらかなる御さまなり、悠紀の大嘗宮の鳥居を入せ給て內へ入給ふ、大臣は退て幄の屋にさぶらふ、さま〳〵の事あれどもさのみはしるし侍らず、まづ悠紀の神膳まゐる、陪膳の釆女より外には神殿の中へ入人もなし、卜部一人七節の竹の枝をもちて仕候す、〇中略夕膳は亥時にて侍べければも、やう〳〵夜あけがたになりぬ、近代はかやうにぞ侍る、神膳はてゝ又廻立殿にかへらせ給ふ、又御ゆかけあり、そのゝち主基の神殿へなりて、又御膳をそなへ給ふさきのごとし、〇中略主基の神供はてゝ廻立殿へかへらせ給ふ、釆女かへり申とかやと申て後、鳳輦に

めして宮廊へかへり入せ給ふ、このほど雪降ていとおもしろし、文和にも雪ふり侍し、代々の御佳例にて侍るとかや、事はつる事未の時ばかりなり

〔經嗣公記〕應永廿二年十一月廿一日、けふは卯日にて大嘗會也、〇中略夜に入て廻立殿の行幸なり、まづ主殿寮忌火の御燈を供す、此後は小忌の人ならでは堂上する事なし、〇中略後房の南のひさしに出御、内侍二人劒璽をとりて左右にたつ、次に鳳輦をよせ返閉、すゝの奏けいひつなどの事なし、これみな此行幸の例也、〇中略東門を出御、壬生を北へ、かすがを南へ、通陽門の前に至りて、又北へ昭訓門代に入御、〇中略ゆふかたより雨はやみたれども、以外の深泥にて、行列もとゝのはらず、此行幸供奉の人みなあさぐつにてあれども、あるひはふかぐつ糸鞋など人々の所爲まちまち也、さて大極殿のあと龍尾道の壇上にて、鳳輦をかきすゑて腰輿にめしうつる、此あひだ内大臣殿〇足利義持ふちし申さる、〇中略劒璽の置様ちがひたれば、關白〇藤原經嗣内侍に仰てまづおきなはさせらる、はじめは座の前によこさまにおきたるゆゑなり、此間内大臣殿御退出あり、永德には鹿苑院殿〇足利義滿神殿までまゐらせ給ひしかども、此度はいさゝか御ゑんゑやくの子細ありとて御まゐりなし、〇中略出御ありて悠紀の殿へならせ給ふ、其儀大藏省ふたんを敷て、宮内輔すごもを其上にしく、まづ中臣忌部、次に御巫猿女など左右にあゆむ、次に左大臣前行せらる、次劒璽左右にあり、次に主上〇稱光御裾をたれてすごもの上をあゆみ、〇中略つぎに大嘗宮の北の鳥居に入て、悠紀の西の鳥居よりなめどのゝ南面よりいらせ給ふ、關白おなじく參らる、〇中略よしのゝ國栖古風を奏し、語部古詞を奏する事など、さまざまの儀式どもあり、皆神代の風俗なり、又いなつきの八乙女うたふこゑ神さびておもしろし、〇中略神膳のぎしきは、執柄はいせんのうねめの外は、この人の見すゑらぬことなれば、ゑるすに及ばず、幼主の御時は、攝政大りやく相かはりて供せらるゝ、〇中略悠紀神膳の儀はてゝ、又廻立殿に還御あり、御ゆどのゝ儀などはじめのごとし、

夜明て後主基の神殿になる、其行列さきにおなじ、たゞし此あひだ雨ふりてことのわづらひ申ばかりなし、〇中略主上の御服、關白の衣やうぞく、采女の衣なども皆衣はたれたり、かねて雨儀の用意もなきにや、所司ぶさたのいたり也、主基の神膳はてゝ、又廻立殿へなりて、もとのごとく鳥の御衣やうぞくをめしあらためらる、これよりさきに采女かへり申とかやの事あり、次に鳳輦をよせてめさる、關白御裾に候せらる、次に劒璽を置其儀常のごとし、此たびは宣政門より春日の小路をへて、おきに官廳へ還御あり、此程雨なはやますして、供奉の人々も散々の衣ぎなり、何よりも神膳の儀ことゆゑなくとげておこなはれぬる、神威のいたりもいちゑるくめでたし、

〔康富記〕永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗祭也、午刻許、兩國標山自齋場所引四條、〇中略供奉輩可尋之、行列供神物色目別在之、〇中略申刻予著朝衣、〇中略參官司、入東門、床子座邊徘徊畢、召具小雜色二人而已、當司役人風俗舞人隼人等同沙汰進之、（付給官宣旨井御教書等）件役人等每度不令入門內、會昌門前坤邊召儲之、令待刻限焉、四品都事於予宿（大炊御門與冷泉間、大宮東頰也、爲役人出立、自未日點之、）同令出立給、（青朽葉如恒、巡方帶、）攝政殿（〇藤原持基）自丑日令候御直廬給、（正廳西登廊北面戶以西、同西廊戶以北、押廻爲其所、西北脇被指懸之、御簾被造出之、北方有立蔀、香殿等、）室町殿（權大納言右大將從一位〇足利義教）自丑日每日有御參於御休所、（以後房西面坤等爲其所、西被造副、人々候所已下云々、）北令著御裝束御云々、以正廳東登廊北面戶以西（北面）爲陣座、（西上）北有立蔀、以同戶以東（北面）爲床子座、（西上北面、西有大辨床子、副南垣在床子、如常構、）北有立蔀、東方有構、未及脇陣沙汰、先是有童女御覽殿上淵醉等、參仕人同昨云々、酉刻許左大臣殿（兼良）令著仗座給、（不令經床子座）自餘卿相不被加著之、奉行頭右大辨忠長朝臣進仰留守於一上、次大臣以官人召大外記師世朝臣、（玉帶）仰曰、藏人右少辨藤原朝臣政光宜爲留守、外史稱唯退、（右少辨廷尉也、顯職有何事哉之由）（有沙汰、被仰之、就中式事兼日被申左府、而未被作出之上、任永德例後日可被下官云々、示遣立殿奉路事、不及沙汰、先例也、今度御次第攝政殿有御作進、既被進室町殿云々、）次上下著小忌、〇中略戌刻天皇（〇後花園）出御、（帛御裝束、無文巡方帶、永豐朝臣一人候御裝束、每度同之、）〇中略近衞引陣、小忌公卿列立、寄鳳輦於朝所南、（有假御輿寄）主殿大夫家賢（衣冠）撤御座帖、（寮頭長賢、東帶巡方、候、雖然不役之如何、）次乘御、（不及御輿沙汰、）同攝政令候御裾給、室

町殿相副令扶持申給、右中將實雅朝臣役劒璽、（不釋不仰御綱、無闕司奏、無鈴奏、無反閇、皆無例也、）前陣人前行、先之大忌公卿（權大納言公保卿、權中納言實熙卿、○中略）被參八省、次御輿出官東門北行、同北門前（末春日）西行、至通陽門前北行、入御昭訓門代、（古跡也、但不行門、此行列強不及沙汰歟、但文應元、十一、十六記曰、上皇御車被立朝所北代、不儲立明、如何、行列門前、仍行列尋常可令立之由、職事承殿下仰、頻被來示之、仍下知外記了云々、）先雜隼人十二人、（貫衣白袴、相交之、烏帽子等出立知常、相副雜色男、不令扶持之、路次處々無立明、爲闕然之間用私松明、長官供奉事、近代無之、仍予不參、且供奉時不可叶儲位袍也、拜當司供奉事、御次第行列不被載之、雖然還立殿行幸供奉之條勿論也、永德分明也、應永度先人委令記給、且延慶二年十一月廿四日御記曰、還立殿行幸供奉人隼人正不參、外記少納言小忌廁相三人前行、右大臣殿左右近次將交御輿、次攝政殿候御後、殿上侍臣在其後云々、如件記者亦可供奉歟、雖然隼人事、局務有不審之氣色之間、彼御記取出自懷中奉見外史、外史返答云、然者前行勿論云々、又此事令尋申官務之處、隼人供奉定儀也、爲其分云々、先之予召具風俗舞人等、參大嘗宮、經西南令佇立南鳥居外矣、）次左衞門佐資任、次左兵衞佐永豐朝臣、次右大史員職、少外記宗種、右中辨幸房、少納言爲清朝臣、次小忌公卿三人、（公名卿、經成卿、宗繼卿、）次右大將殿、（諸監并衞府帶刀等被召具之、注文在別、）次御輿、左右近次將相交之供奉、（行列不整、御輿前後）次攝政、次殿上侍臣、（頭左大辨房長朝臣、頭右大辨忠長朝臣、藏人左少辨明豐、權右少辨親光、六位源重仲、藤原懷淳、源爲治等、各著諸司小忌、）次周枝宿禰、爲緒宿禰、（已上方違）師世朝臣、親種（方違）等被參御後、次右衞門府少志紀秀弘等供奉、右兵衞府不參、御樂陪從御厨子所預等不分明、可尋之、供奉人上下淺履也、先之主殿頭（位袍、常五位也、官務又自路被前行、）左衞門府前先行、被參廻立殿、雖召具立明官人等、猶路次分明不見之間、前陣行列不知幸路、頗狼藉云々、於龍尾道東階改駕腰輿、（其儀南面昇居之、敷弘筵於御輿下、寄腰輿於殿東頭、右中將實雅朝臣取劒璽入腰輿中、攝政殿下室町殿令扶持申給、劒璽御輿路同昇連之、安西方御輿宿云々、）當廻立殿北行、（殿北面外）入西向幔門、於廻立殿南面中央間有下御、攝政殿室町殿令參入殿內給、入御之後、前行大臣令著坤座給、（東面）小忌公卿被著巽庭座、（北上、西面）

此間帶劒人解劒、奉行職事、行事辨等、於殿前被申沙汰次第事、吉田前中納言（家俊卿、直垂大口、）中御門亞相（俊輔卿、衣冠、）等代子息右中辨左少辨被催次第、頗嚴密也、官務六位史、行事官等在此邊、四位史局務外史、二薦外史、予等在南鳥居外、或用私床子休息了、（局務外史、於此所被催次第事矣、）

此間大忌公卿二人（公保實熙等卿）被著大忌幄、（經大嘗宮東柴垣外被著之、件幄在南鳥居外東西妻也、南北對座、公保卿南面、實熙卿北面、不及辨沙汰、而仁安三記曰、子

午妻云々、天祿記文曰、大忌親王公卿已下辨少納言已上候所二字、卯酉爲妻云々、今日爲卯酉妻、又上官不及著餛若上也、次有御湯殿事、頭左大辨藏人左少辨源重仲等役之、大羽衣織手事、承日參河守經與星野令相論、所詮勅使下向參河國、令星野被官人織進之云々、將又御齋服不縫儲之、臨期難仰采女可縫獻之由、縫樣未覺悟之間、當座難叶之旨申之、遂以內侍被縫獻之、仍神殿出御及遲々云々、女工所內侍令齋龍縫給等云々、次著御齋服、有主水司御手水事、陪膳頭右大辨、役送藏人左少辨御手洗藏人權辨御手巾等也、申時如例、兼不存知、臨期責出之云々、次天皇出御廻立殿步給、先是大藏少輔高階成秀小忌令敷布單、宮內少輔同成藤小忌令敷葉薦、掃部頭師行候御後、令卷葉薦、右中將實雅朝臣取劍、左中將源定長朝臣取璽、主殿官人家賢五位職藤共以衣冠等秉松明前行、次中臣祭主三位淸忠卿、忌部親雄前行、次御巫少女總角猿女亦少女鮎等前行、次左大臣殿、次車持一人持菅蓋、奉差覆天皇、頭在御後子部笠取各一人張蓋綱在左右、次攝政殿室町殿有御供奉、次天皇入御大嘗悠紀宮南面東戶、攝政殿幷室町殿入給神殿、御巫中臣猿女忌部等跪候鳥居內、主殿取松明候階下、此間西面南鳥居外立柱松、延慶記曰、南鳥居外西脇邊立柱松云々、今度無之、又無立明、處々燈闇然云々、次將作持劍璽候西面簀子、宮內大藏掃部車持子部笠取等出鳥居外、奉行職事等作立砌下、被催行次第事、行事辨同之、官務行事官等徘徊此邊、康治字左御記曰、郎予立退出鳥居外、著履直南行、著左近小忌幄、件幄南鳥居內東脇、甚以狹少、子午妻立之、西面、行事辨雅綱立鳥居外行事、仁安三記云、攝政入給神殿、時忠邦綱兩人候簀子、永德度攝政殿左大臣殿入御神殿云々、次小忌大臣出西面南鳥居、著左近小忌幄給、南鳥居內東脇、西面不敷也、不打幄、如何、次小忌公卿經大嘗宮東柴垣外、著小忌幄、在南鳥居外、北上西面、列子午妻大忌之北也、一小忌辨少納言外記史、今日不著幄、近例也、昔次第云、相著小忌幄、小忌少納言以下幄在其後、外記置式筥於上卿前云々、寬治江記曰、臨上置式筥、上卿召外記問諸司、仁安三記曰、小忌相著幄、辨少納言外記史著之、延慶記曰、右大臣著左近小忌幄、召外記賜口敕、仰次第事可申行之旨、外記自幄進之、外記不置式、文永不置之、件度近年略之由注之、仍從之云々、然則辨少納言外記史著座幷式等、近來不及沙汰歟、次關門、闈官人開大嘗宮南鳥居柴門、如御次第者、伴佐伯開此門、衞門開會昌門之由見了、伴佐伯未知交名、但爲御位叙人者、件保方、佐伯暫久也、今度主殿兩年預沙汰立之、小忌、在鳥居內床子、對東西、開門之後可出鳥居外也、而始終候床子、如何、大臣今著平敷給咫尺也、爲無骨歟、兵庫寮神楯桙、南鳥居外東西脇各一枚充立之、略○中次宮內官人率國栖、悠紀國司率歌人、伴佐伯率語部、各著座事無之、永德亦如此、南鳥居外三行敷座、前座國栖、中座歌女、後座語部、皆北面東上可著云々、此等群官次國栖奏、歌女國風、語部古語等一向無之、永德度、外記依例勸國栖役、又國風古語等猶奏之云々、於國栖者、例年如初入之時、當司發吹警、近例不及此儀、

會不登也、國風古語、放無撲于仗云々、況手之至、尤歌存、仍予令申局務曰、歌女語部役事之後、宮司奏歌也、彼等有無如何、外史返答云、一向無之、向可遂行歟云々、則被命行歟之處、不存知之由申之、此上首可被奏當司役也者、先之左大臣殿以陣官被召予、予入鳥居平伏、仰曰、宮司奏相計時分可奏之、鳥居外事也、奏事者可申之云々、予歸參退出、又大忌門院中納言以前駈被示云、當司奏之後可進之、敢也、剋限可告申云々、奏事之由答申之、此次第如此、但永祿先有公卿拍手、次舞人奏風俗云々、不審、也、如舊次第、寬治師平朝臣記、仁安三記、同、今度御次第、先舞人奏歟、次公卿拍手也、仍今日不守永祿例、次當司奏風俗歌舞退、其儀當主基小忌幄西南邊佇立、朝臣經悠紀主基小忌大忌幄中央進寄着鳥居前東廊、五人各北面作立奏之、舞人二人、和琴二人、笛一人也、琴淨衣如先例、先吹出笛、次彈和琴、揚和歌、讀接和琴詩笛、吹花後、舞人在前列、又和琴笛付歌也、自餘樂器時不付歌、是故稱有器而已、舊例也、次大忌公卿權大納言公保卿、權中納言實熙卿、就庭中版拍手、有之八開手也、南鳥居外可置版也、文殿儀式不置之、是其程被進之、異位重行、復座、次安倍氏進寄南鳥居前、可奏文武官宿簿之處、各雖祇候、自辨官未給簿之由稱之不進出、有例、承保辨官不給簿之由、遂不奏之云々、次供神膳畢、其儀不例見之、先是室町殿御早出、天皇還御廻立殿、供奉人如出御、次渡御主基大嘗宮、采女申時、有御湯殿事、鳥御風、御主基殿、皆如悠紀儀、攝政殿下前行、大臣已下供奉役者如先、大臣著右近小忌幄給、在幄害准東可知之、小忌卿相移著主基幄、北上東面、大忌卿相不移主基幄、近例云々、國栖歌女語部等奏、准悠紀可知之、當司奏如先、但今度聯於西廳奏之、進退經馳道如先、大忌拍手如前、次安倍氏四人有實、有顯、有季、有詰等、小忌、進出南鳥居前、各北面、作立奏文武官宿簿退、有藤謀予曰、辨官未給簿之間、持寄其由云々、仁安三記曰、官方沙汰也云々、康治持寄奏、無簿之故云々、同今作法、同記云、主基奏主基人、悠紀奏悠紀人、簡書儀各別云々、此事難可奏歟、參事於御在所、者皆悉云云、但當司役人、如舊次第、井仁安文應記者、立乎、異予此、神膳畢、寅一剋供之、四剋撤之、還御廻立殿、其儀同悠紀、陪膳采女還中在之、亦不召儲、及延慶云々、之、伴佐伯開南門、此間予窮屈、牽役人等退出訖、至雜隼人者、爲官司還幸供奉、副雜色男殘留之、經大嘗宮西垣外、可令儲候西幔門外之由加下知畢、次改御裝束、帛衣、御乘鳳輿、還御官廳、前行大臣攝籙、御供奉已下如出御、四位史局務外史等不參、官司直退出、又出御官司時、或歸見參、然面雜人頃儲之間、上官不及其儀云々、仍還御時、寄腰輿於廻立殿南面之間、人々懷從有少沙汰、可爲鳳輦之由被仰之、腰輿爲寬元例之由、官務被申之云々、其說不體說也、途便令駕腰輿給者也、而頤左大丞後日被語曰、爲腰輿之由見及云々、非歟、中御門相公被語御予曰、腰輿雖有沙汰、被用鳳輦云々、四位史被語云、鳳輦每度儀也、腰輿例未覺悟云云、又還幸時出御西幔門者多分也、被用東幔門者還近也云々、今度爲西幔門云々、

〔後法興院記〕文正元年十二月十四日辛亥、是日亥刻、天皇○後土御門幸太政官廳、爲被行大祀也、武家兩所○足利義政、同義視供奉、十八日乙卯、今夜廻立殿行幸也、威儀嚴重云々、今夜御出之御時、鳳輿ニ乘御、於廻

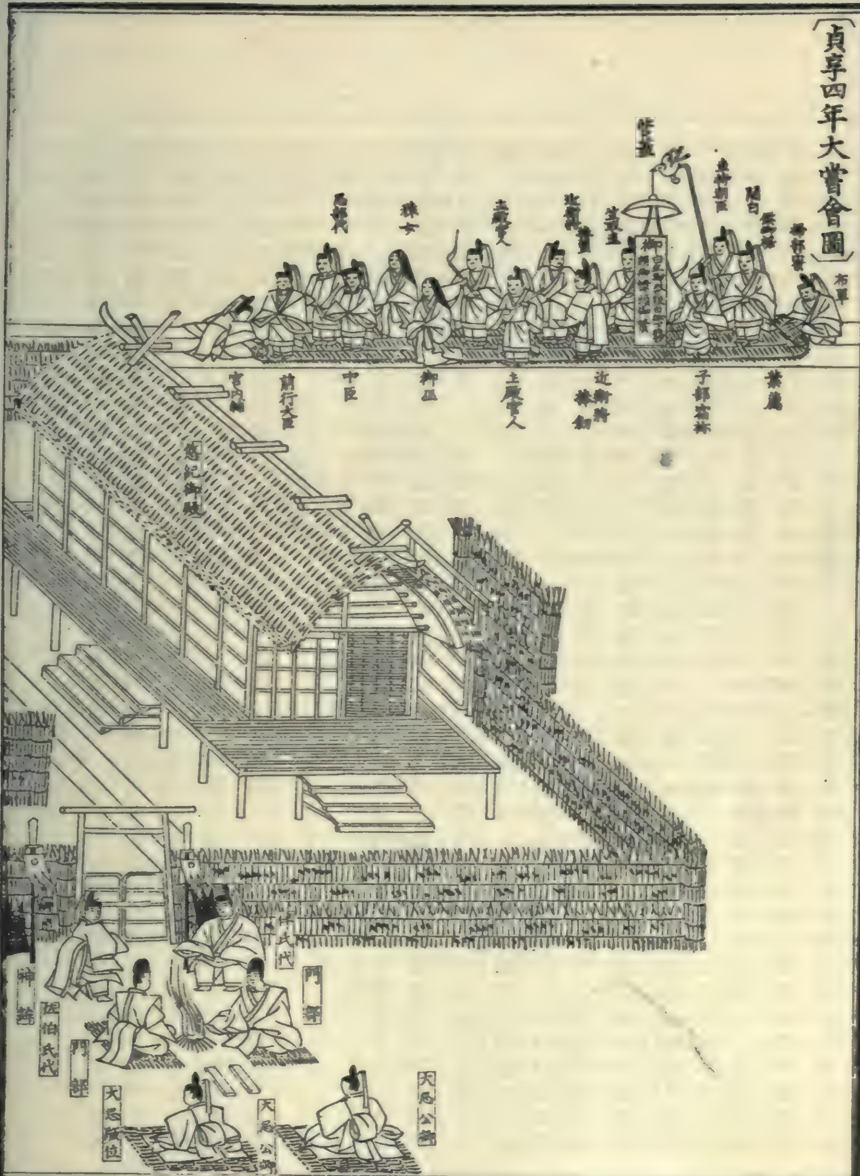
立殿近邊、改鳳輿、乘御葱花、然而入御廻立殿云々、前行左大臣云々、

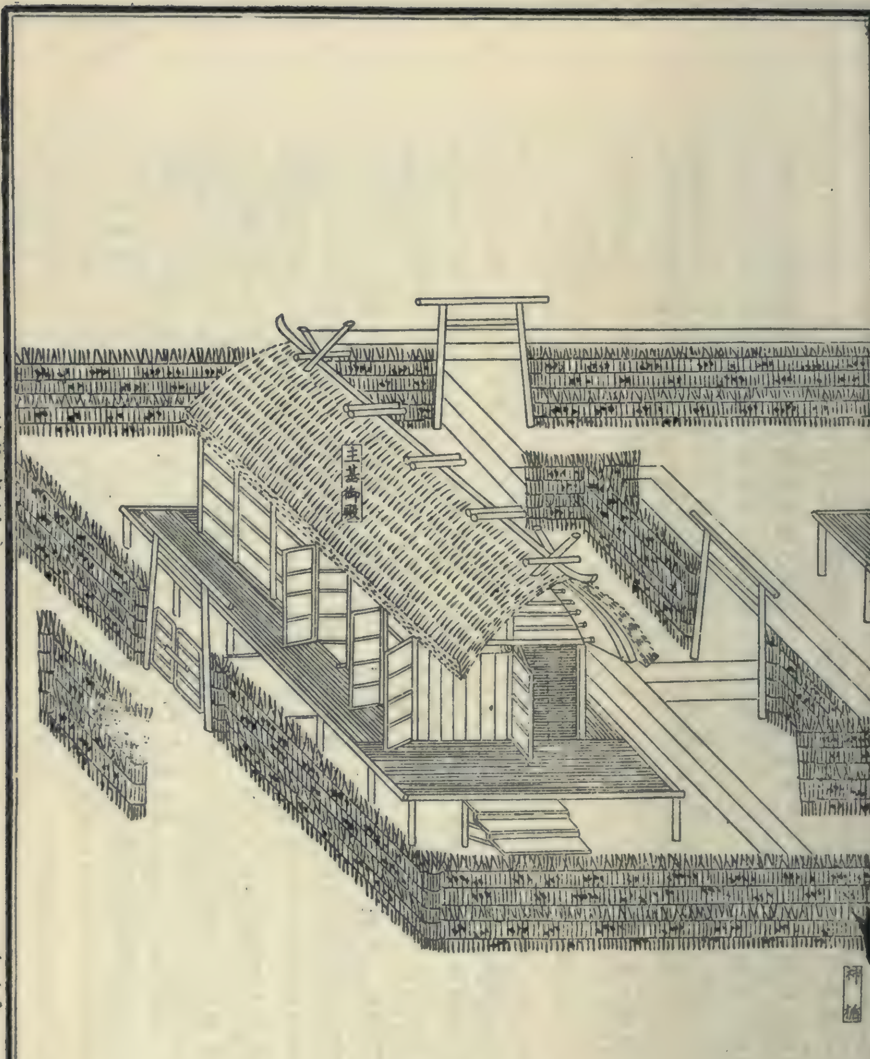
〔季連宿禰記〕貞享四年十一月十六日辛卯、今日大嘗會也、○中略 戌刻許出御廻立殿、先之主殿寮大允伴友治供御湯、御湯釜所、內侍所巽角庭設之、（次日主殿寮沙汰立）御湯七度運之云々、御湯遲々、出納馳來催之漸以合期、珍重々々、廻立殿丑寅角通樋而供御湯云々、出御廻立殿之間微雨下、依庭田中納言令仰主殿寮令用意衣笠、（件衣笠、當春御讓渡御之時、主殿寮所新調也、）御湯畢、於悠紀殿神饌之間、聊小雨即休止於主基殿神饌之間、又同時小雨降、希代事也、凡今夜之儀拙身不叶窺見、只尋問人々、或造眼事等、御次第之中以朱加之、（今夜刻限被始之、事畢于時寅終許也、）御次第續左、

大嘗會卯日次第（無行幸儀）

平明中臣祭大嘗宮殿及門、刻限兵庫寮立神楯戟於大嘗宮南門東西、（各一枚、竿立之、）次伴佐伯各一人、分就大嘗宮南門外左右腋胡床、次式部設大忌版位於大嘗宮南門外庭、酉刻掃部寮奉設神座御座於嘗殿、次中臣忌部官人各一人、率縫殿大藏等官人、奉置衾單於大嘗宮悠紀殿、（主基同之、）次中臣忌部官人各一人、率內藏官人、率置御服二襲絹御幞頭於廻立殿、次卜部官人一人、率神服宿禰、入筥繒服案於悠紀殿神座上、（主基同之、）次忌部卜部等官人各一人、入筥麁服案於同座上、（主基同之、）次神祇官率內膳膳部等、於悠紀膳屋料理神饌、主殿以齋火設燈燎於悠紀主基二院、（院別二燎、）伴佐伯於南門外設庭燎、主殿寮供大齋御湯、（大忌御湯今度被略之、只小忌御湯許供之云々、）戌刻著御帛御服御廻立殿、（不及行幸儀、密々出御、）入御之後殊禁高聲、攝政入殿內著座、小忌公卿著巽[illegible]座、（西面北上、）大臣一人著小忌著坤角座、（東面、）大忌公卿著大忌幄、（南鳥居外東西裏、南北對座、）次主殿寮供小齋御湯、次有御湯殿事、藏人頭一人、五位藏人一人、藏人一人奉仕之、幷用山蔭中納言子孫、無其人者他人勤之、次著御祭服、次供御手水、陪膳藏人頭、役送五位藏人二人、次采女申時、（取削木、就殿南戶邊申之、）次出御、其道大藏省豫鋪布單、宮內輔以葉薦隨御步敷布單上、掃部允隨御後卷之、人不敢踏、先近衛將取劒璽前行、次主殿官人二人執燭前行、次御巫猿女左右前行、次大臣率中臣忌

貞享四年大嘗會圖




主基御殿

部前行、大臣在中央、中臣在左、忌部在右、天皇〇東山車持朝臣取菅蓋、奉差覆、在御後、子部宿禰笠取直各一人取蓋綱、在左右、次攝政到大嘗宮、近衛將作持劔璽候西面簀子、中臣忌部御巫猿女等跪候鳥居內、主殿執燭候階下、入御南戸之後立明、主殿早鳥居ノ外ニ可出、出御之程人々群參其所、甚少之故云々、是謬面重儀歟、所被示也、次入自大嘗宮北門、經悠紀殿西、自南面戸入御、宮內大藏掃部車持子部笠取等出鳥居外、主上出御之時、小忌公卿等平伏、伴佐伯下胡床平伏、還御廻立殿之時又同、主基之時同前、攝政入嘗殿著座、次大臣著左近小忌幄、南鳥居內東腋西面、次小忌公卿著小忌幄、南鳥居外西面北上、近代小忌辨少納言外記史不著幄、次開門、大嘗宮南鳥居柴戸開之也、開門之後又還著胡床、伴佐伯開大嘗宮南門、次大忌公卿就庭中版位、南鳥居外異位重行跪插笏拍手四度、度別八遍、神語所謂八開手是也、拍手畢小拜復幄座、亥一刻供御膳、宮主卜部釆女等從、其儀、四刻撤之、神膳之儀委細在別、次還御廻立殿、其儀如初、子一刻神祇官率內膳膳部等、還主基膳屋、料理神饌、次主殿寮供御湯、御湯殿儀著御祭服事等一如悠紀、御手水、釆女申時等儀、一如悠紀、次遷御主基嘗殿、其儀供奉人等如悠紀、次大臣著右近小忌幄、南鳥居內西腋東面、次小忌公卿移著主基幄、南鳥居外東面北上、大忌公卿就庭中版位、拍手、其儀一如悠紀、寅一刻供御膳、四刻撤之、其儀如悠紀、次還御廻立殿、其儀如初、次釆女進南戸、有還申事、其詞、阿佐女主水夕晚乃御膳平聞供奉部止申、此申詞雖云々、ウ子メミグシアコロエフヘアカタキノオモノヲヒラカニシタテマツリヲ、後日ニ釆女ノ女官ニ尋申ノ處ニ、今夜ウ子メミグシドコロト申之由被語之、次著御帛御服、還御本殿、伴佐伯閉南門、

右攝政殿下御作進之次第也

〔友俊記〕寬延もとの年十一月中の七日卯の日、大嘗會おこなはる、〇中略主殿寮忌火燈燎を南院にまうく、二燈二燎なり、伴佐伯門部庭燎を南門の外にまうく、主殿寮大忌の御湯を供す、戌刻廻立殿帛御衣にて入御、〇中略警蹕の事なし、是神膳を恐れたまふゆゑなり高聲を禁す、攝政御前に候す、小忌の公卿庭上の座につく、大臣壹人小忌をつけ坤角座につく、東西大忌の公卿、南の鳥居北上東面に著座、主殿寮小忌の御湯を奉る、此間御湯殿の事、御內々の御沙汰、ゐるすにおそれあり、またの御調度あり、〇中略御祭服を著させたまふ、御手水、その調度品々あり釆女時刻を申出御、そのみち大藏二幅の布單をしき、宮內輔薦をもて御步

にしく、掃部寮御後よりまく、供奉の人其上をふます、大臣は中臣忌部をひきゐて前行、大臣中央にあり、中臣は左にあり、忌部は西にあり、御巫、猿女、主殿官人二人燭をとる、近衛の將劒璽をとりて左右に候す、車持の朝臣菅蓋をとりおほふ、子部宿禰、笠取直各一人綱をとる、次に攝政近衛將劒璽持候す、嘗殿の西の簀子に候す、中臣、忌部、御巫、猿女等鳥井の中に跪る、主殿燭を階下にとる、悠紀殿に御す、大嘗宮北門悠紀殿の西を經て南戸より入御、大藏、宮內、掃部、子部、笠取等鳥井外に出、攝政神殿に入、小忌群臣は南方鳥居の內東邊に東面につく、納言は鳥居の外西面北上につく、近代は辨、少納言、外記、史等こゝに著す、開門、伴佐伯大嘗宮南門をひらく、悠紀の風俗を奏す、大忌公卿庭中の版位南鳥居外異位重行につく、拍手をはり復座、亥の一刻に御膳を供す、四刻撤す、宮主采女等其儀にしたがふ、廻立殿に還御始のごとし、子の一刻、神祇官は內膳膳部等をひきゐて、主基の膳屋にうつりて料理神饌をまうく、主殿寮御湯を供す、御湯殿ひとつにゆきのごとし、主基嘗殿に還御、小忌の群官著座、大臣は南鳥居の中、西のほとり東面、納言以下は鳥居の外東面北上、大忌の公卿は移著の事なし、主基の風俗を奏す、大忌の公卿庭中の版位に著て拍手、寅の一刻御膳を供す、四刻撤す、廻立殿に還御、采女南戸に進て還申の事あり、勅あり、采女しりぞく、帛御衣を著御本殿に入御、伴佐伯南門をとづ、

〔壬生家記〕明和元年十一月八日、大嘗會也、〇後櫻町寅刻已前、忌火行水之後、著朝衣、令朝參、召具使部一人、平明殿門祭、祭主奉仕之、主殿寮掌燈、木工寮設灯燈、卯下刻事了、〇中略未半刻許、大臣以下神具運送之義有之、次稻春事有之、神祇官紀春昌八乙女引率之、於二所膳屋有此事、造酒兒代、稻實公代等從之、次口燭、主殿寮供二院御燈、戌過刻出御廻立殿、御湯殿事了、采女申時之後、行幸悠紀嘗殿、亥刻許子半刻許悠紀儀了還御廻立殿、寅下刻口口事了還御廻立殿、卯一點還御本殿、

〔壬生家記〕嘉永元年大嘗式

卯日、○中略時刻悠紀主基共發、自齋場所詣大嘗宮、乃兩國獻物各叙膳屋、訖、酉刻主殿寮以齋火設燈燎於悠紀主基兩院、（院別二燎）伴佐伯各一人、率門部（著靑摺衫）於南門外通夜設庭燎、戌刻行幸廻立殿、（○孝明）主殿寮供浴湯、即著祭服、御大嘗宮、大藏省預以二幅布單鋪其通途、（其宮中地面、鋪以八幅布單、上宮內輔二人、左右膝行敷葉薦、）掃部允以上二人從後且卷之、不敢踐、還亦如此、（其葉薦者、掃部寮設之、）大臣一人率中臣、齋部、御巫、猿女前行、（大臣在中央、齋部在左右、）主殿官人二人秉燭照路、車持朝臣一人執菅蓋、子部宿禰、笠取直各一人、共膝行執蓋綱、還亦如是、既御悠紀正殿、小齋群官各就其座、但大齋人留官門外不入其內、訖伴佐伯宿禰各一人、開大嘗宮南門、衞門府開會昌門、宮內官人率吉野國栖十二人、笛工十二人、（並著靑摺布衫、）入自左腋門、就位奏古風、悠紀國司率歌人、入自同門、就位奏國風、伴佐伯氏人各一人率語部十五人、（著靑摺衫、）亦入就位奏古詞、（伴入自左腋、佐伯入自右腋、）幷掃部寮鋪設、（自座國栖、次歌女、次語部、皆北面東上、國司座在歌女人以東、）大臣以下入自南門、各就幄下座、其群臣初入、隼人發聲、立定乃止、訖國栖奏古風五成、次悠紀國奏國風四成、次語部奏古詞、次隼人司率隼人等、參入於御在所屛外、北面立奏風俗歌舞、（主基亦同）王卿就庭中版、跪拍手四度、（度別八遍、神語所謂八開手是也、）訖退出、安倍朝臣五位二人、左右相分共就版位、奏侍宿文武官分番以上簿、（主典以上奏姓名、分番准其數、凡奏事於御在所者、皆跪、其簿辨官御、諸司進之、卽附安倍朝臣、）亥一刻供御膳、四刻撤之、其次第、先膳夫伴造一人執火炬前行、（以絁懸頭受盞、）次采女朝臣二人左右分列、次宮主卜部一人著緌、楇次之、水部一人執多志良加次之、典水二人（一人執巾筥、一人執刀子筥、）次之、采女八人各執供神幷供御雜物等次之、內膳司高橋朝臣一人執鰒汁漬次之、安曇宿禰一人執海藻汁漬次之、膳部六人各執供神幷供御雜物等次之、酒部四人（二人舁酒案、二人舁白黑酒案、）次之、薦享已畢、撤亦如之、子一刻神祇官率內膳膳部等遷於主基膳屋、料理供神饌、宸儀還御廻立殿、其儀如初、主殿寮供浴湯、訖易御服、還御主基正殿、其儀一如悠紀、王卿以下拍手、及國栖等奏古風等事亦同、丑一刻供主基御膳、進退亦如悠紀、寅刻宸儀還御廻立殿、一如初儀、易御服還御本宮、警蹕侍衞如常、祭禮已畢、百官各退、伴佐伯兩氏閉大嘗宮門、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

辰日卯四刻、神祇官祭仁壽殿、其料絲四兩、安藝木綿一斤、筥四合、各徑一尺五寸米四升、酒二升、瓶一口、盞二口、案二脚、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡大殿祭料安藝木綿十六斤、筥二合、米四升、酒二升、瓶一口、小坏二口、机一脚、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕辰日卯四點、神祇官准例祭仁壽殿、

〔北山抄五〕大嘗會事

辰日、○中略祭御殿如常、

〔神祇官年中行事臨時〕大嘗會、○中略大殿祭、中臣、忌部、

〔代始和抄〕大嘗會事

辰の日の節會には、中臣の人天神の壽詞を奏す、玉串といふさかきの枝をもちて、かしはでとて手をたゝく事などあり、兩國よりの獻物をば多米都物となづく、宮内省よりたてまつるくぼてをば、たかすき、ひらすきとなづく、しろきくろきの酒を供ずる事あり、

〔大嘗會便蒙下〕辰の日に悠紀節會といふ事あり、總て大嘗會は其年の新穀を先天神地祇に供し給ひて、次に天子も嘗させ給ふ儀也、昨卯の日に神祇への供進は畢りぬれば、今明兩日天子新穀をめし上られ、其ついでに諸臣へもたまはる也、今辰の日は悠紀の節會にて、悠紀の國司より物を奉り、明巳の日は主基の節會にて、主基の國司より物を奉る、但今日の悠紀の節會のあとにて、先主基の節會の略儀なるをも行ひ、明日の主基の節會の前に又悠紀の節會の略儀なるをも行はるゝゆゑ、兩日各兩節會ある也、先今日の悠紀の節會には、天子紫宸殿の悠紀の帳に出御あり、昔は悠紀の帳、主基の帳とて、帳を別に設けられたるを、今は帳は一つにて、其帳の廻りに悠紀の御屏風をたて廻らせば悠紀の御帳とよび、主基の御屏風をたて廻らせば主基の帳とよびかふ

る也、然うして中臣賢木を捧げ、紫宸殿前の版位に就て、天神の壽詞を奏し、群臣も共に奏する事あり、又常の節會の供膳の外に、白黒の御酒を供す、〇中略又一獻の後に悠紀方の鮮味とて、雉を梅の枝につけたると、蜜柑と搗栗とをひげこに入て、松の枝につけたるとを奉る、〇中略又三獻の後に御插頭を奉り、臣下にも插頭を給ふ儀あり、其插頭は天子は櫻、銀にて作る、大臣は藤、大中納言は山吹、參議は梅、いづれも眞鍮にて作り、滅金をかくる、但し此定昔とは同じからず、此外は内辨の行事、群卿の進退、供膳の次第等以下、常の節會に異なる事なければこれを略す、又主基の節會には、主基の帳に出御あるばかりにて、常の節會の如し、

〇按ズルニ、天皇ノ新穀ヲ喫シ給フコトハ、卯ノ日ニモアリテ、辰巳ノ日ノミニ限ラズ、

〔儀式 四〕踐祚大嘗祭儀

辰日卯一刻、宸儀還御廻立殿、一如初儀、〇中略四刻神祇官祭仁壽殿、〇中略先是所司預掃除豐樂院、兩國各設御帳於殿上、（悠紀立東第三間、主基立西第三間、）〇中略諸司供帳如元會儀、式部預置版、辰二刻車駕幸於豐樂院、須臾留清暑堂、乃御悠紀帳、所司開豐樂儀鸞南門、皇太子入自東北掖門、（待親王以下就版乃入）親王已下五位以上、左右相分入自儀鸞門東西戸、各就版、六位以下相續參入立定、神祇官中臣、捧賢木入自儀鸞門東戸就版、跪奏天神之壽詞、（群臣共跪）忌部奉神璽之鏡劒共退出、親王已下共起、次辨大夫入自同門就版、跪奏兩國所獻多米都物色目、〇中略訖退出、皇太子先跪拍手退出、次五位以上共拍手、次六位以下拍手四段、（段別八度、所謂八開手者也、）訖以次退出、式部取版退出、是時大臣於左近陣西頭少南謝座、升自東階（凡昇殿者皆用此階）就座、宮内省率大膳職造酒司、所備多賀須伎、比良須伎等物進列庭中、即將去、次皇太子昇殿到座東而西面謝座酒就座、訖大臣喚舍人二聲、舍人共稱唯、（候逢春門外）少納言代之、入自逢春門就版、大臣宣喚大夫等、少納言稱唯、出自儀鸞門東戸立班南面、北面喚之、親王以下五位以上共稱唯、（小齋先發、群臣次）之、次六位以下稱唯、（下皆倣之）訖親王以下參議以上入自儀鸞門東戸、（神祇官列、小齋列大嘗前、五位以上六位以下亦同、下皆同之、）比入

門諸仗共起、次五位以上左右分入、（近仗閉東西戸、但小齋人入自東戸、六位以下亦同、）入式部錄二人、左右相分進立屏內、互稱容止、次六位已下分入、省掌二人亦稱容止、（參議以下行間相去三許丈、後於親王五許丈、四位連屬、後於參議七許丈、五位最後者、到觀德明義兩堂北頭、六位以下始）入、異位重行立定、（參議已上幷小齋人列東方、四位以下東西分列中庭、未入之前、酒部等各立酒樽下、）大臣宣侍座、親王以下稱唯謝座、（小齋者先拜、群臣次、）訖造酒正把空盞來授貫首、（授受共跪、）更還却二三許丈、北面立謝酒、訖造酒正把盞還樽所、參議以上分就顯陽承歡兩堂、（參議已上兩三人昇殿、四位以下相共就之、不必待參議昇畢、）六位以下分就觀德明義兩堂、訖諸仗共居、悠紀國將別貢物參入、已一剋供御膳、次賜五位已上饌、（小齋悠紀國給之、大齋所司給之、）次辨官班給兩國多米都物於諸司、悠紀獻當時鮮味、于時鉦人持鉦一懸、入自儀鸞門、置悠紀幄、執槌人參入就鉦下、北首伏地、（著當色麻鞋、）須臾即起擊鉦二度、（度別二下、）訖伏地、次國司率風俗歌人等、且歌（還時亦同、）參入、（國司立前、次音聲人、次歌女、次歌男、）立庭中、歌人先入幄、次國司就幄座、伏地者更起擊鉦如初儀、入幄、乃奏風俗歌儛、（儛以八人成列之、）次奏所司樂、訖退出、次獻御插頭、（悠花足机一居高机、以紗覆、五位六人舁之、）和琴二面、（各長六尺、納袋、悠花足机一居高机、以紗覆之、）人給和琴二面、衾若干條、（六幅四幅相雜、）襖子若干領、（衾襖子納韓櫃、居机、加綠覆、）訖皇帝御清暑堂、未御主基帳前、皇太子以下參議以上、殿下經階下、度西方、宸儀出御之後、大臣昇自西階就座、次皇太子已下亦就座、並如悠紀儀、次參議已上參入自右近陣西頭、謝座酒就座、（小齋四位以下度馳道、共謝座謝酒、）訖諸仗居、次供御膳、賜群臣饌、奏國風、獻別貢物幷御插頭等事、一同悠紀、次悠紀祿、獻物韓櫃、列于殿前庭、外記仰式部令進五位已上見參歷名、外記加註皇太子見參進大臣、大臣執奏之、酉刻主殿寮舉燭賜祿、（參議一人就賜祿所、少納言喚名、悠紀國司賜之、）四位已上衾一條、五位襖子一領、（未得解由者亦預、七十已上者雖不參、面特賜之、祿物殘進內侍司、）訖御清暑堂、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕辰日卯四點、○中略悠紀主基兩國倉代等雜物列立於豐樂院庭中、先是所司預掃除豐樂院、悠紀主基二國各設御帳於殿上、（悠紀在東、主基在西、）諸司內外張設如常儀、式部預置版位、辰二點車駕臨豐樂院、御悠紀帳、諸衞陣列如常、皇太子入自東北掖門、（待親王以下就位畢、乃入、）五位以上入自南門、各就版位、六位以下相續參入立定、神祇官中臣執賢木副笏、入自南門就版位、跪奏天神之壽詞、忌部入奏（云）○

〈儀式作事〉神璽之鏡劍、訖退出、〈若有雨濕、卽立於之、〉次辨官五位一人亦就版位、跪奏兩國所獻供御及多明物色目、訖退出、皇太子先拍手退出、次五位以上倶拍手、六位以下相承拍手、並如前儀、以次退出、〈式部取版位出、〉宮內引大膳職造酒司所備多賀須伎比良須伎等物、進見於庭、訖將去、是時大臣侍殿上、喚五位以上、〈先召舍人、卽少納言參入、如常儀、〉倶入就顯陽承歡二堂座、六位以下以次參入、就觀德明義二堂、訖悠紀國別貢物參入、已一點悠紀國薦御膳、給饗五位以上、〈小忌悠紀國給之、大忌大膳職給之、〉如宴會儀、兩國多明物、並令辨官班給諸司、悠紀國獻當時鮮味、次國司引歌人入奏國風、訖撤朝膳、未二點遷御主基帳、皇太子以下亦就主基座、別貢物參入、獻當時鮮味、薦御膳、奏國風等、並同前、事訖悠紀國給祿、

〔延喜式 十三 大舍人〕凡踐祚大嘗會幸豐樂院者、舍人四人與少納言候逢春門外、大臣喚舍人、共稱唯、少納言替入、

〔北山抄 五〕大嘗會事

辰日卯刻、乘輿、〈安和私記云、於廻立殿寄御輿時、初稱警蹕、式於豐樂院後堂初稱云々、〉出光範門、〈仁和寬平例如之、承平依不御腰輿、入自宣政門、出自章善門也、天慶以後、入自昭訓門、出自章善門、无所據歟、〉入自豐樂院不老門、〈謂北門、〉御清暑堂、〈儀式幷新式云、易御服、還御本宮、警蹕侍衞如常者、裏式云、就御淸暑堂云々、近例如之、以殿南廊西面爲殿上座、以西廊堂爲藏人所、御膳子所、進物所等候所、〉小忌王卿經大嘗宮西邊供奉、如恒、〈承平記文、大忌王卿供奉在小忌前云々、今案、自廻立殿奉者、不可扈從乎、新嘗祭事還御時、不供奉也、〉少納言幷左右將監、從殿南庇進大刀契鈴等、〈具寬平記、〉○中略兩國各立御帳於殿上、〈悠紀立東第三間中央、主基西第三間、〉南廂當御座異設王卿座、〈北面西上、小忌在其上頭、天暦供臺盤、參議座前對立大盤、天祿對座云々、〉顯陽承歡兩堂第一間前、移立兩國標、觀德明義兩堂前、運置倉代等物、〈兩國物也、〉式部預置版位、諸司供張如元會儀、時刻御悠紀帳、近仗稱警蹕、〈先是入自靑綺白綺兩門、陣東西階下、天長十年記云、少納言奏進鈴、將監進御鈴、承平記、鈴奏如恒者、而寬平記、御鈴等猶在小安殿云々、天慶以後、不見進鈴事、〉所司開儀鸞豐樂兩門、〈近衞衞門開之、承平天慶外記記、分居云々非也、見式幷寬平記、〉闈親王以下五位以上、入自儀鸞門、各就版位、〈不著靴、式云、天慶記文、小忌不入、後代共入、而新式小忌不在此例云々、近例如之、經服人不預、陣起如常、延英堂有外辨座、王卿入自堂東閤明門、先著其座、如八省朝集堂儀、但大忌人先不著靴、就之、中臣奏事退出後著院、又自後階可退昇歟、天慶外記記、親王納言用中階、參議南階云々、今按、親王可用北階歟、式部引刀禰入自東西廊門、彈正圍外入、列立如常、天慶例、章善門北設公卿休幕、先就後所、後就外辨、〉六位

以下相續參入、（承平記云、此間大臣著東廊兀子、行事、）立定、神祇官中臣捧賢木、（式云、捧玉籤、神祇式云、賢木附笏、承平例、賢木加注壽詞紙云々、天慶不儲賢木把笏進失也、）入自同門東扉、就版、跪奏天神之壽詞、（群臣共跪、兩儀立奏、寬平兩儀、王卿立顯陽堂、五位以上立、承歡堂、六位以下立閑堂東西面、中臣立顯陽堂北面云々、）（而天慶親王以下就逢春門中廊西面、中臣就同廊北第二間南上、播部預數設、）忌部奉神璽鏡劒、共退出、（群臣立、○中略）次辨大夫就版、跪奏兩國所獻多米都物色目、退出、（承平天慶例、就外辨座、辨奏之、行事不奏、）次五位以上搢笏拍手如昨、六位以下相承拍手訖退出、（儀式次第如之、寬平式云、天長記文、拍手在下辨奏物數之前、但拍畢起、辨出後退出云々、而寬平有儀、辨未參之前拍手即退出云云、）式部取版退出、（寬平記云、錄率諸司史生、自儀鸞門分入取之、）

內侍臨東檻召人、大臣出自軒廊南橫、於左近陣南頭謝座、（式云、陣西頭少南謝座、而新式无西字、承平天慶例如此、案之件說、節會儀、於陣西頭謝座、儀式曰、內裏儀、左近仗南謝座云々、院儀、近仗在東階東、依相御膳道也、然則御悠紀帳之日、不可西進歟、）即經陣前、昇自南面東階著座、（凡昇殿者、皆用此階、昇降有揖、兩儀自東廊參上、）次宮內省率大膳職造酒司、多賀須伎比良須伎物（筌手等也、造酒司等召須伎、都邊波瓶也、）進列庭中、即將去、（承平記云、入自顯陽堂南楹前、北面列立云云、出自承歡堂南、天慶入自逢春門西面列立云々、新式群臣參著後進見云々、仁和例如之、而近代多如儀式次第、）次大臣召舍人、（式、候逢春門外者、而承平以來、入門立左右仗裝角、稱唯退出云々、非也、）少納言入自逢春門、（綏東記文云、又謂東廊北第七間通路、）就版、（寬平天祿兩儀、立顯陽堂乾角、其天祿記、可立逢春門廊上、失也、）大臣宣召刀禰、小納言稱唯、出自儀鸞門、立屏幔南、北面召之、（寬平依兩儀、於砌上召云々、）參議以上（內辨參上之後、王卿起座、列立仗頭、式云、五位以上共稱唯、小忌先發聲、）入自儀鸞門東戶、（小忌有前、諸仗起、）五位以上左右分入、（小忌人入自東戶、神祇官在前、）式部錄稱容止、次六位以下分入、（書掌稱容止、）異位重行立定、（參議以上幷小忌人列東方、四位已下東西分列、寬平依兩立顯陽承歡等堂、天祿立逢春門北壇上、）大臣宣侍座、親王以下謝座、（儀式云、小忌先拜、群臣次之、是如稱唯、小忌先[illegible]頭歟、新式止此文云云、）謝酒、訖各著座、（參議以上經陣前上殿、五位以上分著顯陽承歡兩堂、六位以下分著觀德明義兩堂、）諸仗共居、○中略所司供御膳、（仁和天慶用東階、承平、安和、天祿用中階、今案、諸節會御高座、猶自西階供之、況御東西御膳、何用中階乎、天祿兩儀自軒廊供奉云云、）次辨官分給兩國多米都物於諸司、○中略悠紀

賜五位以上饌、（小忌悠紀國給之、大忌所司給之、小忌所預等率內豎舁送、殿上給白黑酒、如常、）獻當時鮮味、（行事辨率國司及膳部等執之、入自顯陽堂南披門、經堂西壇下、立膳道東、北面西上、天祿兩儀、西面立逢春門北披、出自殿東披門云々、）大臣問之、稱唯、申云、悠紀所進御贄、稱物名如常、（天慶安和記、不奏國名、寫進例云々、然而申悠紀所之由、見寬平承平記、）大臣仰云、賜膳部、（或仰、給御厨子所、寬平天慶例也、）稱唯出逢春門、付內膳、（內膳預候門外、承平記、撤先召膳部、內膳進受云々、非也、）于時國司率風俗歌人等、入自儀鸞門、且歌參入、（儀式云、國司立前、次音聲人、次歌女、次歌男、天慶記云、前男廿人、後女廿人、樂人在最後、）立庭中、歌人先入幄、次國司著幄座、（儀式云、先鉦一懸置幄前、次撞鉦者就鉦下、北首伏地、發

良恐擬二度、度別三下、訖又伏地、國司著座後、更恐擬如初、天長例如之、又載清涼抄、而他式并日記无所見、近代无此儀歟、乃奏風俗歌舞、式云、舞者八人爲列、次所司奏樂、新式云、今不奏、鷹周三行、召大夫東西各二人、令賜御酒、儀式无此事、見寬平式也、於軒廊壇上召夾名、立東階上東頭、仰之云々、次撿按納言以下二人、寬和二年撿校公卿擧不合小忌、所可昇御挿頭、皆著小忌服、是已違例大夫也、率悠紀行事大夫等、昇御挿頭使琴等案、御挿頭新勅作之、和琴二面、入袋、各居高机、有覆等、五位以上六人、昇一案也、入自逢春門、經左仗南頭、昇自中階、使新式用件階、已爲近代之例、但元日御高座、御居矣、獨用東階、今昇中階、更東進、順无便歟、撿例天皇已日、昇西階云々、仁和主基又如之、立南榮、承平立御前壇下、拜頭在北面、天慶立南榮、插頭在西、安和例如之、天祿依、兩昇東廊云々、儀式并清涼抄、有人給和琴等、面寬平式无之、例文如之、從下

退出、大臣寬平式云、親王若公卿獻侯、寬平式、儀卿親王獻之、就案擧御挿頭、經座上昇御壇東階、天慶辰日、右大臣脫鞾、巳日大臣明親王不脫、安和辰日左大臣殿之、巳日大臣不脫、右候殿下、宣儀許之、即奉指御冠左、右臣下自座末復本座、群臣降階拜舞、不見儀式、在寬平式、答例未給臣下挿頭、之前有此拜也、而寬平九年給臣下後拜舞云々、是尤有便、平侯御幼主不傳侯御挿頭、賜无拜舞、天慶以來又无此事、承行事辨等賜王卿插頭、寬平式云、同司給者、而近例如之、承平例、親王紅梅、大臣藤花、納言以下櫻花也、而安和記參議歟、冬云々、承平天慶、撿按參議執大臣插頭、并參大辨者也、此間會撿按行酒、天慶例也、其儀可賜內宴乎、日暮主殿

寮供庭燎、當宜會殿立列、立左右各十炬、七日式云、入自逢春承明門者、面會記文、出自觀達明儀閣堂南妻云々、承平記云、開闔子第各眥人、左右堂前炬之者、午日可用左右門部、事訖

入御、儀式云、御清暑堂、新式云、撤朝膳、進御主基、承平記、采女撤御膳、清涼抄云、近代不御清暑堂、王卿下自東階、度西方、承平記云、暫立廊前、天慶巳日、依雨經南階、重明親王記、不詳也、今案殿後有便乎、經天皇御主基帳、帳障、如但、內侍臨西檻喚人、式無此召、而承平以來例如之、大臣進自右仗後、於仗頭謝座、天慶大臣依雨、於西廊北第三間謝座、安和左大臣依雨不謝座、上昇自南面西階著座、王卿仗頭列立、此面東上重行、第一人當西階東端云々、新式云、式部立標、承平東面、依天長記者、而巳日及他年々例如之、又見新式、天慶依南、西廊北第五間以南柱內、東面重行列立云々、障立如常、小忌五位以上直度、列立馳道西、寬平記云、神祇大副安則奉小忌少納言以下度馳道、承平記標南五丈列立、主基所寄人等也云々、大臣仰侍座、新式云、大臣召之、仁和記仰侍座者、而近例不仰之、謝座酒如常儀、寬平右中將善執盞、依有造酒正故障也、畢各著座、小忌諸大夫著承歡當座、大忌各在本座、謝座同立座前歟、天慶記云、上官可移候西階下、面依有殿上人座、就西廊、寬平承平不移、亘階下奉見參云々、

次供御膳、賜臣下饌、皆如悠紀、承平天慶不仰御酒勅使、依臨曉歟、天祿作闕日仰之、已日若可仰歟、安和又无獻物、天慶依及曉更不獻云々、中但無插頭事、式須兩日共可獻、而例辰日悠紀獻之、巳日主基獻之、次風俗樂人奏歌舞、次大臣著軒廊砌上兀子見見參、儀式云、未得解由者預之、七十以上者聽、不參悉預之、天慶外記記云、未得解由、并諸國入京吏五位以上預者、有宜旨皆悉預之、今案未得解由就式、不可有所宜旨歟、畢參上經座下、進軾降下、付內侍奏之、

降立初所、召少納言授之、此間先可示錄所見也歟、少納言進庭中唱名、王卿稱唯、下殿給悠紀祿、先是錄辛櫃立馳道東、新式立標南

(云々、參議一人就二祿所一、悠紀國給レ之、儀式云、祿物殘進二內侍所一、寬平依レ雨於二顯陽堂乾角一召給云云、畢御天皇已日右二諸卿跪一、北面一行列立、依二雨過一不レ拜直退云々、元日式云、經二顯陽堂南一出レ自二延明門一之)

清暑堂、(式曰、大臣仰二左右近一守二殿上雜物一、近衛卓雜例云、今夕宿侍、小忌大忌共中二大將一、)

〔江家次第十五踐祚〕大嘗會

辰日

卯刻於二廻立殿一駕二御輿一、(鳳輦始稱二豐樂一、式云、御二清暑堂一後稱レ之、)

出二光範門一、入レ自二豐樂院不老門一、御二清暑堂一、(以二殿南廊西面一爲二殿上座一、以二西華堂一爲二藏人所御厨子所進物所等侯所一、)

小忌王卿經二大嘗宮西邊一供奉、大忌在二其前一、(近代不二供奉一、)少納言幷左右將監、自二殿南庇一進二大刀契鈴等一、○中略

兩國司裝二束宴會儀一、○中略

時刻出御、(位服、內侍持二璽劍一、藏人奉二御鞋一、式筥等、命婦藏人各四人屬從、)

近衛陣二殿前一、(入レ自二會昌門一、陣二東西階下一、上古此次有下少納言奏二進鈴一、將監進二御鑰一儀上、近代無二此事一、)

王卿著二外辨一、(式部引二刀禰一入レ自二東西掖門一、深正同入列立、先著二章善門北休幕一之後、入レ自二延英堂東北開明門一、著二堂上座一、親王北階、納言中階、參議南階、)

內辨於二東廊邊一行事

出御、(著レ鞋、置二璽劍於東一、置二式於西一、近仗稱レ警、)

開門(近衛開二儀鸞門一、率二近衛八人一、衞門開二豐樂門一、)

親王以下五位已上、入レ自二儀鸞門一各就レ版、(不レ著レ鞋、小忌共入、)六位以下相續參入、神祇官中臣捧二賢木一、(副レ笏、或加二注壽詞紙一、)

入レ自二同門東扉一就レ版跪、

奏二天神壽詞一、(群臣共跪、)忌部奉二神璽鏡劍一、共退出、(群臣起、)近代無二此事一、(長元忌部爲レ賀奉二仕之一、)

五位以上拍レ手、(次六位四段、段別八度、)訖退出、

辨一人就レ版、跪奏二兩國所レ獻多米都物色目一退出、(就二外辨一云云)

式部取レ版、(率二諸司史生一、入レ自二儀鸞門一分取、)

内辨就兀子、内侍臨東檻、

内辨謝座昇出自軒廊南階、於左近陣南頭七尺再拜、經陣前、登自南面東階、昇降有揖、

宮内省率大膳造酒、列多賀須伎、比良須伎等於庭中、即持去、入自顯陽堂南、樓前北面列立、出自承歡堂南、或入自逢春門、西面列立、

内辨召舍人二、大舍人於逢春門外稱唯、

少納言立版、入自逢春門、　内辨宣召刀禰、

少納言稱唯出召之、左廻出自儀鸞門、息於機外、又稱唯、

王卿立標、入自儀鸞門東腋、小忌爲先、諸仗共起、

五位以上左右分入、小忌人入自東戸、神祇官在前、式部錄稱容止、

次六位以下分入、省掌稱容止、異位重行立定、參議以上幷小忌列東方、四位以下東西分列、

内辨宣敷居、留、群臣再拜、

酒正授空盞、貫首人跪取之、不取盤、群臣再拜跪、返上之、

王卿著堂上、經陣前上殿、

五位以上分著顯陽承歡堂、六位著觀德明義兩堂、諸仗共居、

酒部立撤御膳肥、采女一二御盞盤後、撤酒司盞盤把、件把進物所執西階受、

内膳供御膳、入人采女、令史前行陪膳、群臣諸仗共起、内膳官人登東階、第一采女出東階傳取供之、

酢、鹽、酒、醬、餛飩、索餅、餲餬、桂心、居了共居、

次次供膳、自東陛供之、鍵于鮎膳、御膳圖書、

給臣下餛飩、御箸鳴、臣下應之、

供鮑羹、撤菜餅、　供御飯、撤餛飩、

供進物所御菜、平盛六、窪坏三、汁物二、　給臣下菜、

供御厨子所御菜、(高盛八、御汁二、)焼物二、給臣下追物、

御箸下、(臣下應之、)供白黒酒、(八度、)

給臣下、(小忌悠紀國司給之、大忌諸司給之、)

一獻

悠紀獻鮮味、(行事辨率國司并諸部執之、入自顯陽堂南腋門、經宣西壇下、立馳道東、北面西上、)

内辨問、何曾、(乃物曾、)

各稱唯云、悠紀所進御贄、(各稱物名、)

内辨宣給膳部、

稱唯出自逢春門、(付内膳、内膳預候門外、)

二獻

國司奏風俗、(入自儀鸞門、且歌參入、國司立前、次音聲人、次歌女、次男、天慶男廿人、女廿人、樂人在後、先立庭中、次歌人入幄、次國司著幄座、)

奏風俗歌舞退出、(八人爲列、承保十二人、)

三獻

仰御酒勅使、(内辨起奏、後召參議仰之、立内辨後七尺、奉仰稱唯、左廻下東階、取外記所持交名、昇立南階東二門、(外記候)召之、右廻復座、召大夫、東西各二人、不必待大夫參、)

獻插頭、(逓授人同立此列、摂按納言以下、率悠紀行事大夫等、昇御插頭儀事案、五位以上六人、昇一案、入自逢春門、經左仗南頭、昇自中階、立之於南榮、([illegible])頓從下退出、)

大臣奉之、(起座就案、擎御插頭、經座上、於御壇東階脱靴、昇候帳下、宸儀目給、即奉插御冠左、自座末復本座、若無大辨時、摂按參議取之奉之、諸大臣料、)

此後有拜舞、

行事辨等給王卿插頭、(親王紅梅、大臣藤花、納言櫻花、參議款冬、親王及大臣料大辨取之奉之、皆右、此間會摂按行酒、近代不然、)

事訖入御、(王卿下自東階、度西方、)

天皇候主基帳、(暫擇如恒、不撤悠紀插頭御之、臣下同之、)

内侍臨西檻、

内辨謝座昇（自右仗後於仗頭謝座、昇自南面西階著座、）

王卿列立（仗頭北面東上重行、第一人當西階東端云々、）

小忌五位以上、直度則立馳道西、

謝座謝酒如前（内辨不仰侍座）各著座

此度不供白黒酒

次供御膳、給臣下饌如前、

一獻　二獻

次奏風俗（主基）如前（無獻物擲頭等事）

三獻

奏見參（内辨下殿、著軒廊南上兀子見見參了、參上經座下進軟障下、付内侍奏之、先是示祿所參議下殿召少納言授之、）

少納言進座中唱名

王卿下殿給祿（悠紀祿）

參議就祿所

還御（不必待王卿下殿）

〔大嘗會儀式具釋七〕辰日悠紀節會次第

兩國司裝束宴會儀

宴會トハ、今日ヨリ群臣ニ饌ヲタマフガ故ニ宴會ト云、但正シク宴會ト云ベキハ午日ニシテ、辰巳兩日ハ猶大嘗ノ儀ナレバ、古クハ之ヲ宴會トイハズ、○中略

群卿著仗座、内辨令官人敷膝突、召外記問諸司具否、

今度〔〇元文三年〕今日ノ悠紀節會ノ內辨ハ關白勤メラル、江次第ノ內辨細記ノ中ニ、大嘗會ノ內辨、攝政大臣奉仕セラルヽ時ハ、宿所ニ於テ之ヲ問ハルヽ事ノ由ミエタリ、今夜陣座ニテ問ルヽハ一條家ノ一流カ、

次群卿起座、近衛陣階下、出御悠紀帳、

清涼殿ヲ經テ紫宸殿ノ乾ノ戸ヨリ入シメタマフ、其樣常ノ節會ノ時ノ如シ、其道ニ先筵ヲ敷、其上ニ織物ノ筵道ヲ敷、赤地ニ黃ナル花菱ノ文アリ、先內侍一人寶劍ヲ捧ゲテ筵道ノ上ヲ行、是ヲ劒內侍ト云、次將一人筵道ノ左ニ在テ之ヲ扶持ス、次ニ脂燭殿上人等筵道ノ左右ニ相分レ、中央ノ方ニ向テ相對シ、各燭ヲ秉テ横ニ歩ム、次ニ天皇筵道ノ上ヲ御歩、關白御後ニ御裾ヲ持テ同ク筵道ノ上ヲ歩マル、次ニ藏人頭藏人等五人筵道ノ左ニ在テ從ヒ奉ル、其中ニ御笏ヲ筥ノ蓋ニ載テ從ヒ奉ル、此筥ハ黑漆ニ描金梨地緣ニ沃懸アリ、次ニ內侍一人神璽ヲ捧ゲテ筵道ノ上ヲ行、是ヲ璽內侍ト云、次將一人筵道ノ左ニ在テ之ヲ扶持ス、次ニ命婦二人筵道ノ上ヲ行、各六位藏人一人ヅヽ筵道ノ左ニ在テ之ヲ扶持ス、御座ニ御セラレテ內侍劒璽ヲ東ノ机ニ置ナリ、

近仗稱警

階下ノ近衛ノ陣ニアル次將、人々愼シメヨトノ戒ニ警ヲ稱スルナリ、昨日ハ致齋タルニ依テ警ヲ稱セズ、今日ヨリハ節會タルニ依テ、常ノ節會ニ同ジク警ヲ稱ス、其警ヲ稱スル時ハ起チ、稱シ畢レバ胡床ニ居ル、定マレル儀ナリ、

群卿著外辨、〔以小忌爲先〕政官同著床子、外辨上卿令召使下式筥、召外記、問諸司具否、內辨於軒廊邊行事、

次開門、

昔ハ此時豐樂儀鸞兩門ヲ開ク、今ノ儀ハ紫宸殿ニテ行ハルヽ故、常ノ節會ノ如ク承明門ヲ開

ク、但今ハ承明門ナシ、總テノ節會ノ時南門ヲ以承明門代トシ、闈門ノ時モ南門ヲ開キタリ、
群卿著標下、（異位重行、小忌不列、）諸仗立、次神祇官中臣捧賢木就版位、跪奏壽詞、群臣共跪、奏訖中臣退、次辨奏南國所獻多米都物色目、（今度無此儀、）群卿拍手訖退、諸仗居、式部撤壽詞版、内辨著東廊代兀子、内侍臨檻、

檻ハオバシマト訓ズ、欄檻ナリ、臨ハ目ヲ下シミルヲ云、是召ス由ヲ内辨ノ人ニ傳フルナリ、内侍表著、唐衣五衣張袴裳ヲ著、栢扇ヲ顏ニ當テ、殿ノ簀子ノ西南ノ隅、欄干ノ邊ニ出來リ、暫居テ退入、

次内辨謝座、昇殿著兀子、政官著砌下座、次宮内省率大膳職造酒司、列多賀須岐、比良須岐物等於庭中、部持去、（今度無此儀、）次内辨召舍人、大舍人稱唯、次少納言著版、内辨宣召刀禰、少納言稱唯出召之、

刀禰トハ諸ノ長上ノ官ヲ云、百官主典以上ハ皆長上ノ官ナリ、故ニ李部王記ニハ、百官主典以上稱刀禰也ト注ス、又令ノ文ナラバ長上官ト書スベキ所ヲ、義解ニ多クハ主典以上ト記ス、然レドモ主典以上ト云テハ却テモルヽ者アリ、諸ノ長上ノ官ト云ニハ如ズ、近世ハ公卿バカリ出仕スレドモ、昔ハ群臣出仕スルガ故ニ、之ヲ召ヲ刀禰ヲ召トハイフ、又公事根源に、小節にはまちきんだちめせと仰す、大節には刀禰めせと内辨の仰するかはりめ有、其故はまちきんだちとは大夫達とかけり、五位の者を申す也、五位以上の者をめせと仰する心なり、大節に刀禰とは六位をいふ、六位の輩までをめせといふ心也トアレドモ、刀禰トハ六位ヲ云トイヘルハ誤ナリ、六位以下トイハヾ聊近カルベケレド、古ニ刀禰ト云ルハ、五位以上ニモ亘レル名目ナルコト、古書ヲ考フル時ハ明ナリ、又其召ス詞ノ義モ、公事根源ノ如キハ中古以後ノミヲ見テ云ル說ナリ、昔ハ元日踏歌等ノ小節ニハ侍從メセト云ヒ、白馬、大嘗、新嘗等ノ大節ニハ大夫等メセト云、此詞ハ皆勅ノマヽナリ、勅ハ六位以下ニ及ボスコトナシ、古今ノ通規ナリ、故ニ大節ニテモ勅シテ召トコロハ五位以上ノミナレバ、昔ハ大夫等メセト云、又其後ニ至リテハ刀禰

召セト云、其刀禰ノ名目ハ六位以下ニ亘レドモ、勅シテ召トコロハ五位以上ノ刀禰ナリ、其五位以上ヲ召ユヱニ、六位以下モ准ジテ參入スルノミ、其小節ニハ六位以下ハ宴ニ預カラザルガ故ニ、五位以上ヲ召時、准ジテ入ベキ謂ナキノミ、召ルヽト召サレザルトノ差別ユハ非ズ、

群卿參列(異位重行、以小忌為先、)諸仗立、內辨宣敷尹、群卿謝座謝酒、訖昇殿著座、諸仗居、次撤御臺盤帊、

陪膳采女御膳ヲ供ゼンガ爲ニ、御臺盤ニ懸アル帊ヲ撤ジ、去テ草墪ニ著、昔ハ酒部モ撤スルカ、

內膳供御膳

內膳盤ヲ捧テ、正面ノ階ヲ一階上リテ止マル、采女傳取テ之ヲ供ズ、御膳ハ常ノ節會ノ如ク、酢、鹽、酒、醬、餛飩、索餅、餲餬、桂心、各一盤ヅヽ合セテ八盤ナリ、皆蓋擎子アリ、其供ズル間ハ群臣諸仗皆起ツ、昔ハ此御膳巳剋ニ供ズ、

次供殘御膳

殘ノ御膳モ常ノ節會ノ如ク、餢子、黏臍、饆饠、團喜ナリ、先右ニ出タル八盤ヲ供ズ、是ヲ晴御膳ト云、次ニ此四種ヲ供ズ、是ヲ殘ノ御膳ト云、晴ノ御膳供ジ畢レバ、群卿諸仗皆居ル、此殘ノ御膳ヲ供ズル時ハ起ズ、

次賜臣下粉熟、(以小忌為先、以下倣之、)居訖內辨候天氣、

粉熟ハ、和名抄ニ、粉粥以米爲之、今案粉粥卽粉熟也トアリ、但今用ユルハ知ラズ、抑貞觀儀式ナドニハ、御膳給膳ノ色目ヲ載セズ、江次第ニ見エタルガ如キハ、常ノ節會ニモ、大嘗ノ辰巳午ノ日新嘗ノ豐明ニモ、此處ニテ臣下ニ賜フハ皆餛飩ニシテ粉熟ニ非ズ、イツヨリ如此ナルヤ知ラズ、

御箸鳴、臣下應之、次供鮑羹、次供御飯、次供進物所御菜、

進物所ハ所ノ名、昔月華門ノ外ノ南掖ニアリテ、所々ヨリ進獻ノ物ヲ納メ、公卿近衞次將ヲ以

別當トシ、內膳奉膳ヲ以預ト爲、而シテ御菜ヲバ、此所ト御厨子所トヨリ供ズ、今ハ其所ナシト雖、進物所御菜ト稱シテ之ヲ供ズ、平盛窪坏汁物等ナリ、

次供御厨子所御菜、

御菜ハ、高盛燒物汁物等ナリ、

次賜臣下飯汁、

昔ハ小忌ノ人ノ饌ハ國司ヨリ給シ、大忌ノ人ノ饌バカリヲ所司ヨリ給フ、飯汁トノミアレドモ、菜モ亦賜フ、其飯菜汁等ヲ賜フ事、或ハ進物所御菜ヲ供ジタル次ト、御厨子所御菜ヲ供ジタル次トニ賜フ式アリ、又飯ハ御飯ヲ供ジタル次ニ賜フ式モ有テ次第一樣ナラズ、貞享幷今度ハ此次第ノ如シ、

居訖內辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、次供白黑御酒、各四坏

今ノ白酒ハ常ノ清ル酒ナリ、黑酒ハ酒熟シテ後ニ常山ノ灰ヲ入タル酒ナリ、其供ズルニハ、先白酒四坏ヲ四度ニ供ジ、次ニ黑酒四坏ヲ四度ニ供ズ、合セテ八度ナリ、

賜臣下、次一獻、悠紀獻鮮味、

今日ハ悠紀節會ノ當日ナレバ、悠紀方ヨリ之ヲ獻ル、其鮮味ハ、雉ヲ梅枝ニ附ケタルト、蜜柑ト搗栗トヲ毘籠ニ入テ松枝ニ附ケタルトナリ、又貞觀儀式ニハ、此鮮味ヲ獻ツル儀ノ前ニ、辨官兩國ノ多米都物ヲ諸司ニ班給フ儀アリ、中古以後ハ其儀ミエズ、

行事辨率國司幷膳部、執之立庭中、

昔ハ庭中ニ立タル時、內辨何物ゾト問、立ル人各稱唯シテ、悠紀ノ進ル所ノ御贄ト對ヘテ各物ノ名ヲ稱ス、內辨膳部ニ給ヘト宣レバ、又稱唯シテ、出テ內膳ニ授ク、內膳アラカジメ門外ニ候ジテ之ヲ受、今ハ只庭中ニ立ノミナルカ、

次二獻、奏二風俗一、

此儀昔ト今トハ大ニ同ジカラズ、貞觀儀式ニミエタルガ如キハ、先鉦人鉦ヲ撃等ノ儀アリテ、彌異ナレバ之ヲ略ス、江次第ニミエタルガ如キハ、音聲人、歌人、歌女等、此處ニテハ悠紀ノ國司ニ率キラレテ、悠紀ノ國ノ風俗ノ歌ヲ歌ヒナガラ參入シ、八人ニテ、風俗ノ歌舞ヲ奏シ退出ス、今モ風俗ノ歌トテアラカジメ作ラル、其中ニ悠紀主基各辰巳兩日ノ參入退出ノ音聲、樂ノ破急等ノ歌アリ、然レドモ是只先例ニ從フテ作ラルヽノミニシテ、節會ノ日之ヲ歌フコトヲ聞カズ、此奏風俗ト云所ニテハ、伶人櫻樹ノ東邊ニ跪イテ、北面シテ笛ヲ奏ス、今明兩日ニテ四度、皆同ジク音取ナリ、唯度ゴトニ調子ヲ替テ奏スルノミ、又昔ハ風俗ヲ奏セル次ニ、雅樂寮モ亦樂ヲ奏ス、中古以來ハ其儀見エズ、若クハ此伶人ノ笛ヲ奏スルハ、悠紀主基ノ風俗ヲ奏スルニハ非ズシテ、風俗ノ後ニ奏スル雅樂寮ノ樂ノ遺俗ニヤ、

次三獻、仰二御酒勅使一、

是ハ諸大夫ノ幄ニ御酒ヲ給ハラントノ勅使ヲ仰スルナリ、中古以後ハ幄ニ候ズル人ナシト雖、猶古風ヲ存シテ之ヲ仰ス、

獻二御插頭一（今度無二和琴臺一）

插頭ハ上世ヨリノ風俗ニテ、風流ノ爲ニ時ノ草木ノ花ヲ冠ニ插ム態ナリ、仍テ直ニ其華ヲ插頭ト云、後ニハ剪綵花ヲモ用ユル故ニ、其時ナラヌ花ヲモ插ムナリ、此所ノ插頭ナドモ作花ニシテ、眞花ニ非ズ、獻ラルハ臺ニ載テ之ヲ獻ツル、貞觀ノ頃ハ花足机ニ盛リ、高机ニ居テ、紗ヲ以帊トスルヨシミエタリ、江次第ニミエタルハ案ニノス、今ノ島臺ノ如クナル臺ニ戴、紅ノ四菱ノ綾ノ帊アリ、和琴ハ、是モ貞觀儀式ニミエタルハ、長サ六尺ノ和琴二面、各袋ニ納レ、花足机ニ盛リ、高机ニ居テ、紗ヲ以覆フトアリ、江次第ニミエタルハ案ニ載ス、今モ和琴ハ二面獻ツレド

モ、別ニ其臺ナシ、又貞觀ノ頃ハ、此時挿頭和琴ノ外ニ衾襖子等ヲモ獻ツル、中古以後ハ其儀ミエズ、

撿挍國司等下殿昇之、昇階立南榮、次内辨起座奉之、

内辨座ヲ起チ、臺ニ就テ御挿頭ヲ擎ゲ、靴ヲ脱シ進ミテ御帳ノ下ニ候ズ、天皇目シ給フ、内辨御挿頭ヲ御冠ノ左ノ方ニ挿ミ奉リテ復座ス、其御挿頭ハ銀ニテ作レル櫻花ナリ、

次群卿下殿拜舞、訖復座、

貞觀ノ頃ノ今日ノ悠紀節ノ儀ハ挿頭和琴等ヲ獻ツルニテ了ル、此舞蹈ノ儀ナド見エズ、

次賜臣下挿頭、

悠紀行事ノ辨之ヲ賜フ、但昔ハ大臣ノ挿頭ハ大辨之ヲ進ラス、若大辨在ラザレバ撿挍ノ參議之ヲ進ラストアリ、其挿頭ノ定、昔ト今ト聊同ジカラズ、昔ハ親王紅梅、大臣藤、納言櫻、參議山吹ナリ、今ハ大臣藤、納言山吹、參議梅、並ニ眞鍮ニテ作リ、滅金ヲ懸ク、而シテ關白以下其挿頭ヲ取テ各冠ノ右ノ方ニ挿ム、

此間撿挍行酒辨執瓶子

此儀貞觀ニハ見エズトイヘドモ、江次第ニ近代此事ナシトアレバ、中古以前ノ儀ナルトミエタリ、

入御、近仗稱蹕、次群卿退下、

同日主基節會次第

昔主基ノ儀ニハ、主基ノ國ノ貢スル物ヲ以行ハル、今モ其分ナリ、但主基儀ノ當日ハ明日ナリ、今日モ先行ハルトイヘドモ、其儀小シキナリ、古今共ニ然リ、

近衛陣階下、

凡主基ノ儀ハ、悠紀ノ儀畢テ行ハルヽニ依テ、諸事改メ備スニ及バズ、故ニ此儀ヨリ初マル、但昔ハ諸仗モ悠紀ノマヽニテ啓陣セズ、故ニ改メテ陣スルノ文ナシ、今ハ一度啓陣シテ、改メテ陣ニ著故ニ此文アリ、

出御主基帳、近仗稱警、內辨著西廊代兀子、

群卿政官ハ本ヨリ外辨ニアリ、諸司ハ悠紀ノ時ノマヽナリ、承明門ハ悠紀ノ時ニ開キテアリ、壽詞奏ハナシ、故ニ出御ノ次ニ直ニ此儀アリ、

內侍臨檻、次內辨謝座昇殿著兀子、政官著砌下座、群卿參列、以小忌爲先、以下倣之、諸仗立、群卿謝座謝酒、訖昇殿著座、諸仗居、次供御膳、次一獻、次二獻、奏風俗、次三獻、

御酒勅使ヲ仰スル儀ナシ、其揷頭ヲ獻ツルコトモ、貞觀ノ頃ハ辰巳兩日、各兩度ナガラ獻ツルトミエタレドモ、江次第以下ハ、辰日ハ由基ノ時、巳日ハ主基ノ時バカリニ獻ツリテ、今モ之ニ同ジ、

次內辨奏見參、訖賜少納言、次三木向祿所、

昔ハ大カタノ儀ノ畢リニ、見參ノ人ニ祿ヲ給フ、其祿前庭ニ積、其積ル所ニ向フヲ向祿所ト云、是ヨリ前內辨見參ヲ奏セル跡ニテ、參議ノ內一人ニ祿所ニ向フベキ由ヲ示ス、其參議下殿シテ之ニ向フ、但今ハ祿物ナケレバ、勿論積ム所モナシ、アラカジメ宜仁門ノ南邊ニ床子ヲ立、三木ノ西廊ヨリ下殿シテ此床子ニ著、群卿退出ニ此門ヲ經ル時、祿ヲ受ルマチス、仍テ其所ニ向フヲ向祿所ト云ノミ、

次群卿下殿、賜祿退出、

悠紀ノ祿ト稱ズ、悠紀ノ國ヨリ獻レル所ニシテ、卽上ニミエタル揷頭和琴ト同時ニ獻レル、衾襖子ノ韓櫃ニ納タルヲ殿前ニ列ネテ而シテ之ヲ給フ、但中古以後ハ衾襖子ヲ獻ツル儀ナク、

且今ハ總テ諸ノ節會以下ニ、賜祿ノ名ノミ有テ實ノ祿ナシ、白紙ヲ以テ祿ノ代トシ、其白紙ヲモ實ニ給ハルニハ非ズ、上ニミエタル宜仁門ノ三木ノ床子ノ北邊ニ、六位一人白紙ヲ持テ座ス、其前ニ簀薦一枚ヲ敷、群卿退出セントテ其前ニ至ル時、一人ヅヽ簀薦ノ上ニ上リ立テ磬折シ、笏ノ末ヲ以苟且ニ六位ノ持タル白紙ニ觸テ一拜ス、或ハ白紙ヲ苟且ニ受取テ一拜シ、了リテ更ニ返授クル人モアリ、其祿取ノ三木モ我巡ニ當リタル時簀薦ノ上ニ出テ、笏ヲ觸拜スルコト餘ノ群卿ト同ジ、如此ニテ賜ヒタル由ナル故ニ、只一片ノ白紙ヲ以テ、數輩ノ賜祿ノ儀形ノ如ク了ル、昔ハ此祿酉刻ニ賜フ、

入御、近仗稱蹕、○節略

〔日本書紀三十持統〕五年十一月辛卯、大嘗、　壬辰、賜公卿衾、

〔續日本紀十七孝謙〕天平勝寶元年十一月丙辰、宴五位已上、授從三位三原王正三位、從五位上藤原朝臣乙麻呂正五位上、正六位上高橋朝臣男河、高橋朝臣三綱、並從五位下、從五位上中臣朝臣益人正五位下、无位秋篠王正七位下當麻眞人子老、並從五位下、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十一月庚辰、詔曰、由紀須伎二國守等仁命久、汝多知方貞仁明伎心乎以天朝庭能護天奉之關仁奉供己禮曾方國方多久在止毛美濃止越前止御占仁合天大嘗乃政事乎取以天奉供止耳之念行天奈毛位冠賜止久宣、授美濃守正五位下小野朝臣竹良從四位下、介正六位上藤原朝臣家依從五位下、越前守從五位上藤原朝臣繼繩從四位下、介從五位下弓削宿禰牛養從五位上、又詔曰、今勅久、今日方大新嘗乃猶良比能豐明聞行日仁在、然此遍能常利余別仁在故方、朕方佛能御弟子等天菩薩能戒乎受賜天在、此仁依天上都方波三寶仁供奉、次仁方天社國社乃神等乎毛爲夜備末都利、次仁方供奉留親王多知臣多知百官能人等天下能人民諸乎愍賜慈賜牟等念天奈毛還天復天下乎治賜、故汝等毛安久於多比仁侍天、由紀須伎二國乃獻禮留黑紀白紀能御酒乎赤丹乃保仁多末倍

惠良伎、常毛賜酒幣乃物乎賜方科以天退止爲天奈毛御物賜方久止宣、復勅久神等乎方三寶余利離天不觸物曾止奈毛人能念天在、然經乎見末都禮方佛能御法乎護末都利尊末都流方諸乃神多知仁伊末志家利、故是以出家人毛白衣毛相雜天供奉仁豈障事波不在止念天奈毛本忌之可如久方不忌之天、此乃大嘗方聞行止宣御命乎諸聞食止宣、辛巳詔曰、必人方父我可多母我可多能親在天成物仁在、然王多知止藤原朝臣等止方朕親仁在我故仁、黑紀白紀乃御酒賜御手物賜方久止宣、

〔水鏡稱德下〕次のみかど稱德天皇と申き、これは孝謙天皇の又かへりつき給へりしなり、天平寶字八年、○中略十一月に大嘗會ありしに、われ佛の御弟子となれりとて、出家の人もあひまじりてつかはるべきよし仰られき、

〔日本後紀十七平城〕大同三年十一月壬辰、於豐樂殿宴五位已上、二國奏風俗歌舞、賜五位已上物、及二國獻物班給諸司、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁元年十一月丙辰、御豐樂院、悠紀主基兩國獻翫好雜物、奏土風歌舞、五位已上賜衣被、

〔文德實錄三〕仁壽元年十一月壬辰、幸豐樂院、賜宴群臣、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十一月十七日戊辰、未雞鳴大嘗宮祭禮既訖、天皇幸豐樂院、御悠紀帳、賜宴群臣、悠紀國獻物、移御主基帳、群臣移就主基座、悠紀國奏風俗歌舞、日暮以悠紀國所獻衣被、賜親王已下五位已上、諸司有雜怠、及內外官未得解由者皆預焉、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十一月十九日丙辰、悠紀國獻物、幷奏風俗歌舞、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年十一月廿三日庚辰、未鷄鳴、大嘗宮祭禮既訖、天皇幸豐樂院、巳時御悠紀帳、賜宴群臣、悠紀國獻物、未時移御主基帳、群臣移就主基座、悠紀國奏風俗歌舞、日暮以悠紀國所獻衣被、賜親王已下五位已上、諸司雜怠及內外官未得解由者皆預焉、

〔類聚符宣抄一〕左大臣宣、奉勅、未得解由幷諸有雜怠諸大夫、及任中入京未赴任所國司等、皆盡預今明兩日節會、

元慶八年十一月廿三日　大外記巨勢朝臣文宗奉

〔日本紀略醍醐一〕寛平九年十一月廿一日壬辰、天皇御豐樂院、奏舞樂風俗等、

〔貞信公記〕承平二年十一月十四日、〇壬辰口時、幸豐樂殿、依主基方公卿饗極緩怠所致也、

〔日本紀略冷泉五〕安和元年十一月廿五日甲辰、寅剋自入省院還御豐樂院小安殿、爲平、廣平、盛明等親王、左大臣〇源高明以下伺候、

〔長和元年記〕十一月十一日、近江守來云、式獻當時鮮味者、國司可獻歟、小忌所可獻歟、答小忌所調備之由申、又云、有別貢物歟、近代無其事由答也、

〔經信卿記〕治暦四年十一月廿三日、〇壬辰未剋參內、內府〇源師房被參陣座、藤大納言以下小忌、右衞門督、小野納言、新宰相中將等也、被著外辨座、以下爲上、民部省正廳以東爲上、辨以下床子立南壇上下、異角已達式、又閤門之後群卿參入、中臣齋主元範入跪讀壽詞、率忌部一人參進、次經時右少辨師賢出來廊邊跪奏多米都物色目、群卿拍手、件役在外辨之辨退可勤仕也、而右中辨辭退云々、次群卿歸外辨座、有召參進、謝座謝酒如例、次供御膳幷賜臣下饌、次々作法如式、左兵衞督御酒勅使、次按察大納言、右衞門督、宰相中將、僕按察使右衞門督被下自階、自餘不著座也、口閤依爲暗夜之間、所相加廊邊也、昇御插頭臺、登自南面東階、立御前間、倚西柱、僕幷宰相中將、下自同階、傍東廊邊、右衞門督、按察大納言、〇源隆國依內府被目下、自南階更登自東階、被著座、僕案此事甚失也、其故者如日記者、昇御插頭之人、置插頭後、自下可下者、是行事辨國司等儀也、於上達部者、下階昇臺立御前之後不下、經簀可著座歟、次國司幷行事辨等昇立御琴臺、二基退下、次內大臣起座、倚御插頭臺下、突膝行、刺笏、更起取花直入母屋、就御帳東、脫靴依御氣色、奉插御冠、左更下著靴、歷座末復本座、次群卿下座列立庭中、西面北上、異位重行、拜舞歸昇、次僕下、自東階取花一枝、藤花也、依臨昏黑、於東廊前庭取之、昇自同階、就內大臣後、插彼冠右、這上歸入、行事辨國司等

次第取花昇、自東階挿群卿冠、納言揷花、宰相欵冬、下自同階退去、次入御、後日或者云、入御以前、群卿起座者可尋、次上達部一々起座、下自東階度西、近代如初、次天皇御主基帳、内侍召人、内辨謝座、群卿列立如初、但内辨起座、於西廊下外記外記插見參於杖奉之、上卿披見、歷廊下付内侍、御覽之後返給、更下廊下召少納言給之、次内辨被昇、次依氣色左大辨起座、下自東階度階前就悠紀祿所、次少納言就版唱見參、少納言讀之、退出、次上達部一々起座、同度階前就祿所給祿退出、

〔中右記〕寛治元年十一月廿日戊辰、今朝破却兩大嘗宮幷廻立殿、節會如式、節會以前、標山引立龍尾道下、戌刻先御悠紀帳、警蹕侍衛如口、亥刻許渡御主基帳如先、子刻許事了還御小安殿、今日内辨左大臣也、

天仁元年十一月廿二日戊辰、申時許參八省、○中略、民部卿以下公卿多以參集、悠紀主基御裝束了、攝政殿忠實○藤原可令勤内辨給者、是此節會多以大臣勤仕内辨、次々日雖有大納言例、初日必大臣勤仕也、而左府内府依輕服日數中不被參也、但又被尋先例、承平二年大嘗會攝政貞信公勤仕、此日内辨依彼例有此事也、○中略戌刻天皇○鳥羽御悠紀帳、先引陣、近仗稱警、外辨公卿著朝集堂、會昌門外東堂也、○中略祭主親定朝臣縫腋小忌、犀角帶、紐二三位、末賜位記以前也、付版跪奏天神之壽詞、以文讀之、民部卿以下皆跪、小忌公卿不立此列、讀了祭主退出、上卿起、次權右中辨爲隆就版跪奏兩國所獻多米都物色目退出、上卿右跪、此後民部卿以下從本路退歸、○中略公卿如本雖可出會昌門、已及曙夜、仍於龍尾道下稱以徘徊、攝政殿令著東廊兀子給、内侍臨東檻召人、殿下下自東廊於左仗南頭謝座了、昇自大極殿南面東階給、頗昇給階間、頗寄東給、大膳造酒出庭中、將入了、多賀須伎、比耳須岐也、内辨召舍人、少納言定通小忌入自昭訓門就版、大臣宣云、刀禰召せ、少納言出會昌門、小忌權大納言經實右衛門督能實、撿校、新宰相俊忠、大忌民部卿俊、撿校、按察中納言宗通、皇后宮權大夫顯通、下官、○中略列立前庭、西上北面、異位重行、内辨宣云敷尹、謝座謝酒昇於堂上、南面東階、小忌上卿昇立之間、攝政殿起座出東壁外給、其後人人各著座了、○中略次内膳供御膳、從中階供之、公卿起座、又從東廊方有供物也、采女傳取供之、次第供了御箸下、供白黑御酒、給臣下、一獻國栖國司獻物、○中略内辨民部卿問云、何物ソ、各稱名歟不聞、内辨仰云、

加之波天爾給へ、二獻三獻、奏風俗歌舞、（○中略）御酒勅使左大辨、撿校民部卿、右衛門督、（小一条）左大辨、三人昇、御插頭臺入自昭訓門、昇自中階立御前、更下從中階又昇自東階著本座、又小忌相公（俊忠）行事辨爲隆、右少將宗能朝臣（近江介）三人、昇、和琴案同立之、（○中略）左大辨取殿下御插頭花、（藤花）自御後進殿下、行事辨取納言以下插頭花、指冠、（納言梅、參議款冬、指冠右趾、）插頭了、公卿下庭中拜舞、（○中略）民部卿行酒（○中略）入御、左宰相中將稱蹕、公卿渡西、天皇御主基帳、近仗警蹕、内侍臨西檻、内辨民部卿著座、著堂上座、（○中略）小忌弁外辨公卿按察中納言以下列立南庭、（東上北面、異位重行、）内辨仰云、敷尹、謝座謝酒了各著座、次供御膳、一二獻後風俗舞、三獻、内辨出西廊兀子見見參、上進高松軟障下、付内侍奏之、返給立初所、祿所別當公卿進東給祿、一拜退出、（今日悠紀祿也、仍向東、白掛一領、）丑剋許事了、人々退歸、

〔台記別記〕康治元年十一月十六日甲辰、知行光房來宿所云、攝政殿（○藤原忠通）仰云、節會可被始也、簡要諸司問内府（○藤原賴長）仰外記事可加催、予（○賴長）答云、御酒勅使并祿所料參議兩人、爲率伶人兩國國司可尋候、插頭和琴等、案之悠紀行事大夫等必可寵入者也、獻物可捧持膳事等、行事辨可催儲、仍不仰光房也、昇案大夫等同事辨沙汰也、然而爲解怠、且仰光房也、頃之雅綱師能等來、予問云、和琴二面可置一案歟、將可置二案歟、兩人共答云、二張可置一案也、江次第云、治曆件琴居案二脚、（各一面）源右府被仰可居一脚、由被追却云々、今案天慶妾戸召曰、二張可置一案、因寵源右府有此由歟、今兩辨爲彼右府之末孫有此答、尤有興事也、（○中略）予問左大將（○源雅定）曰、今日主基有白黑哉否、答曰、無之、予曰、諸次第記等、巳日不供之由所見也、而或一兩次第記等、（江次第并保安江記等也、然而不顯其名也、）辰日主基不供之由所見也、今朝問陪膳采女安藝、申云、辰日事分明不覺、卯日夜悠紀主基共供之、

陪膳采女安藝返事

よべは、ゆきにても、しゆきにても、やつれまゐらせさぶらひにき、けさはいかゞ候べからんと、申さぶらはゞやとおもひさぶらひつるに、御定にこそはよりさぶらはめ、ねそかみのおぼゆ

る事さぶらはず、そのよしをそうさせたまへ、

今案、卯日共供之、諸次第記等、辰日主基膳同悠紀、巳日無白黒酒、以之思之、今日主基猶可有白黒歟、伊通卿云、此理可然、左大將確執云、辰日主基儲有白黒之由有所見歟、予答曰、諸書云同悠紀、然而儲不見有白黒之文、大將曰、辰日主基以後无白黒之由儲有證文也、伊通卿猶執、今日主基可有白黒之由、然而左大將有證文之由被示、仍隨此今日主基示釆女不令供白黒、又不給臣下、後日左大將示曰、辰日主基有白黒之由所見出自或記也、但故土御門右府次第、辰日主基以後無白黒之由儲所被注置也、彼末流以此可爲定說、○中略伊通卿云、白黒事已大將軍被定、此事又可蒙足下之判、僕謝云、幸聞白黒事、未有散人疑之智、如此事上古多依宣旨被改定、申執政令一決如何、大將軍曰、善、即招光房令奏大將軍所申之趣、予問伊通卿云、北山午日之儀、云准七日儀、舞臺中央以東二丈、南去一許丈以南可立標也、而承平以後外記記云、列立版位云々、是北山之意與日記相違、可准式文當御座間立之儀哉、答曰、西宮北山已是式也、尤可相准、仍此由同示光房畢、此間漸及秉燭、光房來云、攝政仰云、予問光房曰、出御如何、答云、出御之後已經程、爰予驚示諸卿令就外辨、大將軍曰、執柄御答不分明、爲之如何、予曰、改式可依指仰、今無儲仰、只任式可立也、大將幷伊通卿承諾、則左大將已下出東福昭訓兩門、著朝集堂座、○中略見公卿座饗饌、兼居飯、仍外辨不參之前令內豎忩撤之、行事辨之失也、謂不足言、辰巳日南方公卿饗、皆用土器樣器、無高盛之物、又無匕、若先例歟可尋、至午日用朱器有匕、如新嘗節會、○中略副座之內外辨未參上之前、主上○近衞偸入御、攝政同入、諸人不知之、予亦不知、只內侍近臣等僅知之、其後不出御、攝政又不著給、但臨插頭期攝政歸著給、又今度不出御主基帳、攝政不著給、公卿座定後暫不供御膳、予示宗輔卿令催之、依爲內膳別當也、宗輔乍居座高聲催之、予示令起座、即經檐至東壁外催之、陪膳釆女安藝自母屋西行、昇自御壇東階、經御帳東、著南面東方座、撤御臺帊、內膳正著小忌以下自東方參來、經庭中稱警蹕、卽公卿諸仗起、自南面東階供之、凡稱東西階、南面階也、殿東面無階、釆女經公卿座

末出檐、於階上迎取、入自御座間東頭、乍立壇下授陪膳、一々如此、畢内膳引還、公卿諸仗等皆居、釆女等經公卿座末引還、此間宗輔復座、（須内膳參進間歸著也、而予今遲々不可歟、）次内膳自東軒廊供御膳、釆女於東戸下傳取之、自母屋直進供之、次（々搭自、此戸供也、）訖予示參議催粉熟、即敦長朝臣（最末參議也、今日大辨不候、）起座經檐、出東壁外催之著座、即内豎頭已下始自小忌次第居之、（小忌所預等、率内豎可勤小忌廊相也、今夜无之、可謂違失、今日主基、已日又如此、）畢下箸、（先敦長朝臣取氣色、示小忌廊相令下之後、予以下下之、依入御不伺御氣色、）次供鮑羹御飯等、畢予示參議催飯汁、（今度敦長朝臣不起、只示内豎令催之、）大外記兼大炊頭中原師安朝臣、（著座、）率内豎居端座飯、（大炊頭居飯、近代絶無此事、而大嘗會希代事也、大外記兼此職、尤有便宜、仍今朝仰師安令勤此役、乍三箇日所勤仕也、）師安誤欲勸小忌座、予示之、（主小忌座者、小忌所預可勸之也、而今度无之、仍只内豎勸之、大炊頭更不可勸之、）内豎勸小忌、畢後、師安勸予已下、（端座公卿、師安皆手長也、）奥座内豎頭、率内豎益送如常、（内豎頭奉供手長也、）次居汁、（加居菜汁、時大炊頭不參、）畢下箸、（依入御不伺御氣色、其儀同粉熟也、）次供進物所御厨子所御菜等、畢供白黒各四坏、畢令居臣下座白黒、（各坏、）一造酒正端座、小忌以下手長、奥座内豎頭手長、各率内豎居白一巡畢、居黒、（例两白黒各勸之、今不然失也、又未居白黒之前、造酒正勸一獻、予追喘之、）各不待居畢食之、凡供御膳之間、依暗不詳見、仍問釆女知之、行臣下之膳事、次一獻、（端座小忌以下造酒正勸之、奥座内豎勸臣下、而入御之後不可供、誤令供之、仍不知御酒供否、令勸臣下也、）巡行畢、予起座、（先是左大將曰、令參議催何事有哉、予云、初度猶自起可催之、）經檐至東壁外、爲催獻物召外記、（須著軒廊朝上兀子也、而依須雅長、於東壁外催之、）雅綱本在東壁外、予仰此人催獻物、答曰、早列立庭中退出者也、予曰、全不見列立、又不蒙可經膳部之命退出如何、辨答曰、列立之後、經程推量有大臣宣之由、所退出也、予曰、所陳其理不當、此後更又可列立、申云、膳部等皆以退出、更不可叶者、所申一々不覺、不足言事也、即予可令奏風俗之由仰辨復座、問諸卿云、獻物列立事、人々被見哉否、皆云、不見給者、答是雅綱之虚言歟、將又衆人之暗目歟、雅綱之奇怪言而有餘、次二獻、次悠紀國司率風俗歌人等、（風俗者新詠歌也、以其歌之心新造樂也、依樂又作歌、近代不辨歟、曲、不知歌心、强作樂成舞、自技五音不構、行事宮内卿時俊朝臣、風俗所歌人音聲人幷歌女樂人等相從、）發參音聲、（盤涉調曲破吹物、）參入、昇自龍尾道東階立庭中、（龍道東、）立定止聲、次吹盤涉調々子、舞人十人（小忌、垂纓、淺履、）進出當御所間分立東西、（東五人、西五人、）立定止聲、次奏破舞、次奏急同舞、（急、間有居舞乎、公卿座有與之由、被沙汰、）次急曲止、更又吹同急、舞人退出、次三獻巡行之後、予拔箸取笏召左

近中將忠基卿、（其詞曰、左□□□司藤原朝臣依入御不參直仰也、件卿在座否、先問左大將召之、）忠基卿起座微唯、經檐西行立予後左方、仰云、大夫君達ニ御酒給ヘ、微唯左廻、經檐至軒廊壇上取交名、（左將軍同、上官座階下可下階也、今按、北山抄云、於軒廊壇上召交名云々、更不可下階也、）歸自本路立南檐東第二間一揖、（可立東階上東頭也、而今立此所、先例歟如何、）南顧又揖、右廻復座、次予可昇御插頭之由示檢校、○（中略）此間僕問人々曰、大臣插之爲之如何、大理曰、非遙授檢校之參議取之例、粗有樣覺侍、但不憚覺、予曰、長元悠紀行事并國司等皆退出、仍有議令辨少納言給納言以下插頭、見經賴記、準彼例令參議取之如何、伊通卿稱善、（此議定已前、左大將退出、）即可取插頭之由示仰參議公行敎長、即兩相公經檐出東壁外取插頭、（公行西行欲就御插頭臺、予先大理敎諭、令出壁外、）先公行歸入、經座末北行、自母屋欲西行之間、公行曰、攝政不座帳中、爲之如何、大理曰、付職事可奉、即歸出壁外附職事復座、敎長自檐而進插予冠、（來予後左方乍立插之也、花末有右、）（如臨時祭舞人、予忘却不放緌冠巾子前際、仍暫不插得、適雖插得又落、仍渡主基之間、以插頭入冠中、於西軒廊召前駈、以紙捻令放巾子際、插插頭、而初敎長度々插頭之間、插頭已折、仍無乞插頭於悠紀行事史進之、）畢拔笏復座、此間攝政著帳中圓座、（丑寅角、）即予公行卿令獻御插頭、公行更出東壁外取御插頭、經座末入母屋、自母屋南間西行、至壇東階下跪脫靴、（後日左大將曰、大臣進御插頭之時、乍立可脫之云云、予案之跪脫有何難哉、非無便宜、）昇階候帳臺東、攝政目之、即膝行昇帳臺上插攝政冠、（花末在右、）逡巡降帳臺拔笏、次行事辨雅綱插小忌兩納言插頭、其後令行事史取插頭、予召雅綱仰云、國司憲方、樂行事時俊、汝等雖數遍可取卿相插頭、令史取之甚無便、（先例史取例粗有之歟、然而非也、）辨云、國司取由、先例不覺、（國司取公卿插頭定事也、今所申甚以奇怪、凡今度大嘗會雅綱如泥不覺、不可勝計、）插頭大臣藤花、（攝政同之、）納言櫻花、（小忌同之、）參議欵冬、（小忌并散三位同之、）攝政以下花末在右也、（奉插主上御插頭之時、花末在左也、）給小忌二三人之後可給攝政也、而今夜給攝政并予之後給小忌、可謂違失者、不答禮、又予失也、公卿插頭漸欲畢頃、予可行酒之由示大納言宗輔卿、即宗輔卿起座經檐至東壁外取杯、（先是酒部所渡主基云々、仍盃瓶子等遣召使之間、甚以遲怠、又可用土器也、而召使不見之間、彌可遲々、仍以朱器勸之、）內豎取杓相從、經檐西行、立小忌中納言之後西方、盛酒唱平勸納言、（先欲可勸之、今不然、若先例歟、）納言取之飯畢、沃凝濁返授、次第如之、但小忌參議以下自座下被勸如何、端座皆畢、經座末渡北奥座逆上勸之、畢還渡座末、自檐出東壁外返給杯復座、次小忌以下次第起座降東階、（予降西階、）

（先左足、餘人不然、不知故實歟、）右廻向北揖、左廻西行、渡馳道、進右近仗北、徘徊光範門南腋、但予登於西華門前階佇立軒廊、此間公卿座兀子移立主基□□□兀子未立、仍予仰大夫史政重立之、（是光範門北二間、東與相對也、）近代例兀子豫立儲、而悠紀兀子未造、仍乞請主基用之云々、于時招光房問云、可出御歟、答曰、不可出御、然則早可出內侍、光房曰、次將等著胡床之後、可出內侍之由攝政殿仰所候也、而左右次將皆以退出、一人不候、（悠紀事畢、天皇入御、大將稱警、其後王卿渡西方階下、大將警不退下、天皇出御主基帳之時、階下次將稱警、是定作法也、而今夜外辨公卿參上之後、次將漸退出、悠紀事終頭一人不候、不忠之甚、實而有餘、）予曰、雖遣召不可叶、只今事早可出內侍、□□予自軒廊柱內西行、自西廊柱外壇上南行著兀子、（東面、）內侍自西戶出、予起微唯揖、經柱外壇上北行、自軒廊柱內東行、降自西華門前階、至右仗南頭謝座、自仗前北行立南面西階下、又西頭揖即登階、（自西階頭登也、先左足、）入於庇西二間東頭著兀子、（自兀子下著之、入於當座間著之也、）予未謝座、座前上官著西階西腋砌下座、如初、（內辨參上之後可著歟、今先著如何、但已日主基又先著之、師安政重共屈代之議者也、末代百禮壞、只官外記僅存其禮、而乍明日知此、定有所存歟、）予參著之後、小忌以下列立右仗東南頭、異位重行如先、（東上北面、第一人當西階東端、）即謝座謝酒參上著座、（准東儀可知、）予不仰侍座、（治曆辰日內辨土御門右府、已日內辨京極大殿、渡主基之後共不仰之、隨彼例也、長元大二條、渡主基、乍開日被仰之、）見帳中攝政不座、主上依幼稚不著給、至攝政猶可著給也、若大嘗會神膳之間、依窮屈所勞不座給歟、公卿座定供御膳、（示采女、不令供白黑、）給臣下膳、（無白黑、）皆同悠紀、（御膳自西階供之、臣下膳自西戶供之、）二獻之後示參議、（長教、）令催風俗、即丹波守公信朝臣（今度叙四位、從上、）率樂行事、越中守資賢朝臣以下昇龍尾道西階參入、令奏風俗舞樂、宛同悠紀儀、（盤涉調曲也、雖左樂□□□、）右畢退出之後三獻巡行、畢可就祿所之由示藤宰相公隆朝臣、（今度叙從三位、然而不給位記之前猶列三位中將忠雅下、件人在座否問伊通卿之後示之、其示詞更無作法、不召立仰之、）公隆朝臣乍在座奉之、（無稱唯、）即起座自檐東行降自西階斜渡馳道經左仗南就悠紀祿所、（昭訓門西爲其所、）公隆初座立予後、是習例節會給祿法思違歟、予示令下殿、公隆下殿之後、予即起座、經檐著西軒廊砌上兀子、（南面、件兀子在西華門東間柱外壇上、）仰外記（最兼、）令進見參、大臣已下（攝政同載、）五位已上見參一通、（有禮紙、）插文杖、（外記覽上卿之時可挿也、而豎挿於烏口非也、）外記持之進、乍立南壇下奉之、予置笏於右尻下拔取文披見、（禮紙左右端、挿左手人差與中指之間、）畢如本卷禮紙、給外記令插之、（豎挿烏口如常、給外記畢取笏、）件外記經西華門

立小安殿坤角、(東面立幔外、入御之時參小安殿、著清暑堂給之由雖見舊記、立所全無所見、今計便宜所爲也、後日左大將問曰、立所先例無所見、如何、予曰、未見及、大將曰、今度如何、予曰、計便宜立此所、大將曰、深安內辨申事由於攝政、雖入御猶進歟、降下被奏、若是小安殿立所不分明之故歟、)附藏人左少辨師能奏之、返給、(不揷杖)給外記、經本路立兀子西、外記降於西華門前階、立予前之壇下、奉文、(揷杖)予揷笏於左腋、披取副笏、尋少納言成隆(非卜食、又非殿上人、仍不著小忌、)之處、儲候東廊邊云々、(後日成隆曰、依悠紀祿大臣著東廊見參由、見江次第、仍所存其由也者、江次第雖有此文、其儀甚惡、如代々日記諸次第等皆於西軒廊見之由所見也、江次第文雖指南、雖智者豈莫一失乎、成隆所申似守株、)被頻召參來、(著靴、往古少納言給見參、進庭中召唱、因茲著靴也、近代召唱之儀何可著靴乎、爲正禮還失儀、)進自壇上立予右邊、卽給見參、(左手作持笏、以右手給云々、)少納言取之退出、此間諸司下部等撤殿上饌、予徐令師能見之、申云、公卿一人不候、皆以退出、予復座之後、次第下殿、可著祿所也、而奏見參同諸卿悉出、不可說不可說、卽予經南庭出自昭訓門、(於昭訓門西壇下、雅綱朝臣取祿褒立、予過之間、伺氣色、給前駈盛憲、)自待賢門退出、先是曉鐘已報、夜漏屢移、還大炊亭解脫一寢、

〔兵範記〕仁安三年十一月廿三日庚辰、早旦參大極殿、大夫史幷行事官皆參、奉仕節會御裝束、〇中略戌刻主上〇六條召御裝束、黃櫨染闕腋御袍、他事如常、御總角頭中將實守朝臣奉仕之、召糸鞋、內藏司敷兩面筵道、次宸儀出御大極殿、攝政〇藤原基房令候御裾給、下官取殿下御裾、內侍二人候劒璽、頭中將右少將通能朝臣等扶持前後、藏人候御笏式筥等、女房八人扈從、〇中略近仗陣階下、次主上正笏出御悠紀帳中、攝政令候圓座給、近仗稱警、次卿相著外辨、右中辨長方朝臣、少納言信康同著之、次大納言定房以下入會昌門就版、(淺香)次祭主神祇權大副親隆朝臣(著小忌、捧賢木、)參上就版、跪奏天神壽詞、(小忌公卿不加此列、)〇中略悠紀獻鮮味、(中略)(件鮮味、雜物三十捧、常捧物折櫃物二十合、入菓子了、〇中略)也、悠紀進御插頭芝草、(以金銀造之、銀洲濱上立銀草樹、加瑠璃水精山形、其上安御插頭、件洲濱居花足机、著紫檀地螺鈿大机、在南紗覆、在縫物帶等、貫玉爲机總、)雖儲錦地鋪、今夜不進、撿按大納言公保、左衞門督實國、國司參議資賢、撿按寳綱等舁之、〇中略和琴二張各入錦袋、安高机一脚上、下官〇平信範國司基範、介俊光、經家、(皆著靴、)舁之、昇同階、立同間東、次參議親範卿取藤花一枝、(悠紀史生東壇上儲之、)自東一間進御帳東階下、脫靴昇階、插殿下御冠右、次左大辨取同花獻內辨、次下官國司等取櫻花插大納言冠、參議以下山吹、主上無

御插頭、仍群臣無拜舞事、〇中略次主上入御、近仗稱警蹕、公卿渡西、次天皇出御主基帳、其儀如悠紀、

〔玉海〕養和二年〇壽永元年十一月廿五日壬辰、此日大嘗會辰日也、內辨左大臣〇藤原經宗云々、戌刻、右大將〇藤原實通參內、節會如例、亥刻事始、大將勤外辨云々、其座如例、節會兩度就外辨如式、近代入宴會全不就外辨云々、仍必可書之由兼所相含也、又近例大嘗會外辨不被問諸司、寬治、康治例也、寬治上卿右大臣顯房、康治上卿中院右府雅定、此事無理、勸舊例、長和齊信卿問諸司之由見權大納言記、仍仰可問之由、其詞中臣大舍人刀禰列參也、中臣長和問之由見同記、但始就外辨之時、上官不著床子、仍不能問、後就外辨之時上官著座、仍問之云々、此事頗失也、其故者事不始以前可問也、何況中臣者已終其役退出之後也、主基著座之間早出云々、大將語云祭主奏壽詞之時、諸卿跪候如例、辨奏目錄之時、諸卿成疑、大將稱不然之由、諸卿從之云々、又供御膳之時、自東階供之、仍諸卿可起哉否有沙汰、遂猶立云々、此事大失也、八省之儀、南面有三階、或用中階、或用東階、而紫宸殿之儀南面階一也、東面階者已兩儀之路也、大極殿之儀雖無中階之說、南殿之儀猶可用南階也、況彼已背中階之說、是豈不用南階哉、何況用兩儀之路、旁無可據事歟、又渡主基之時被渡階前了云々、此事如何、須經階下也、大極殿ハ無階下之路、紫宸殿之習、未聞渡階前之例、里內渡階前之時先奏事之由、或申攝政、蒙許經此路者也、今於大內被行大禮之時、隨其所便宜可有進退也、就八省之例渡階前可謂守株者歟、又主基內辨兀子立孔雀間、尤可然、但承安暫可放兀子、近陣板敷歟、若兩儀之時公卿標可立校書殿之故也、如此事已大事也、委不被校行、後察可恥者歟、紫宸殿大禮今度始之、後代之主、偏被口今例歟、八省之造營土木難被終功之故也、凡宴會之儀見新式、

〔源平盛衰記〕二十八宗盛補大臣幷拜賀事

壽永元年〇中略十一月廿五日〇壬辰紫宸殿ニテ節會ヲ被行、大極殿燒失ノ後イマダ被造出ザリケレバ、治暦ノ例ニ任テ、太政官廳ニテ行ルベキニテ有ケルヲ、今度既ニ御卽位ノ時、高キ御座ヲ紫宸殿ニ立ラレテ被行ケル上ハ、節會又カハルベキニ非トテ、紫宸殿ニテ被行ケルトゾ承ル、

〔平戸記〕仁治三年十一月十四日壬辰、今日悠紀節會也、右相府令勤昨日前行給、今日不參行之間、內府令勤內辨給、節會之間雨脚如沃、而不被用雨儀、人々舐鼻、衣裳如入水不便歟、又依無祿儲、公卿空手云々、希代之違例也、凡悠紀辨行事泥々云々、

〔伏見院御記〕正應元年十一月廿三日甲辰、今夜節會、持笏著靴著倚子、及日出歸後房、今日天神壽詞奏之後、無拍子大失也、

〔實躬卿記〕正安三年十一月廿一日丙辰、今夜不審條々、

一壽詞奏之時一向不立版事

今夜尋常版、宣命版、壽詞版三可立之歟、而官方可催促之由外記申之、外記可催之由官論之、仍不立之云々、〇中略

一晴御膳、采女自御帳東階供之、自御帳南面指上可供歟、

一吉田中納言壽詞奏之時、立一大納言標事、〇中略

一實香朝臣重行、每度立替事、

或三位宰相實重行、或同參議ニ於女利天立、或二位大納言ニ重行、

同朝臣於堂上、一向無起居揖事、

每物催促之時、不召內豎事、

同催促之時、可下殿哉否、每度申合內辨事、〇中略

一入御之時、實躬警蹕、兩相公經守實香同稱之事、

〔永和大嘗會記〕廿四日、〇永和元年十一月けふは辰の日なり、〇中略悠紀主基の帳を高御座の左右にたてゝ節會あり、內辨左大臣、外辨德大寺大納言實時、中院大納言具通、西園寺大納言公永、日野大納言忠光、洞院中納言公定、藤中納言保光、三條中納言實冬、土御門中納言定具、侍從中納言公時、中御門宰

相宗泰、少納言秀長朝臣、辨資康朝臣、仲光朝臣、次將左季興朝臣、親雅朝臣、實宣朝臣、右基明朝臣、朝成、白晝の節會、大内の面影のこりていとおもしろし、官廳の高御座よりは、神泉苑も庭にあるやうにみえて、むかしのおもかげうかぶ心地ぞする、まづ祭主忠直朝臣さか木を笏にそへて、よごとの奏をよむ、諸卿ひざまづきて手をたゝきなど、いとかう〳〵しきことゞもなり、よごとの奏といふは、神祇の祭主奏詞のねぎごとをさま〳〵申なり、内辨ねりなど、ことの次第はさのみかきつくし侍らず、御かざしの臺かきなどしていとおもしろし、主上〇後醍醐の御かざし、かれにうちたるきくの枝なり、内辨御帳臺の上へのぼりて御冠にさし奉る、關白のかざしは藤の花なり、參議宗泰これをさす、人々のかざし悠紀行事辨これをくばる、又風俗とて小忌をきたる舞人樂を奏す、いとめづらしきさまなり、御膳まゐる、常の節會のごとし、悠紀事はてぬれば、又主基の帳にうつらせ給ふ、群臣また主基の帳にまゐりて、節會さきのごとし、ふつうの元日白馬のせちゑなどのやうなる儀を、一日にふたゝびおこなはれ侍る、いかめしき大儀なり、事はてぬれば、後房にかへり入せ給ふ、節會のほど大殿關白御帳臺の上にさむらひてことを行はる、他人さらに御帳臺にのぼる事なし、

〔經嗣公記〕廿二日、〇應永二十二年十一月けふは辰日悠紀の節會なり、まづ標の山を南門のうちへ引入れて、正廳の南階十丈をさりて東西にこれをたつ、高御座の左右、のつぎ壇に悠紀主基の御帳を立て、節會の御しやうぞくをそなふ、悠紀の行事右中辨藤光、裝束司史官務爲緒などこれを奉行す、御帳のうしろの左右に御屏風をたてゝ、其内に圓座をしきて、關白〇藤原經嗣ならびに内大臣殿〇足利義持の御座とす、夜にいりて後房よりしゆつ御ありて、悠紀の御帳に著御、劍璽内侍、供奉の女房などつねのごとし、〇中略けふは一日雨ふりて、雨儀にてあるべき由沙汰ありつれども、夜に入て雨やみたれば、晴の儀にて行はる、〇中略次に内辨左大將御かざしの花をとりて内大臣殿まゐらす、

内大臣殿これを取て主上○称光の御冠の左にまゐらせらる、○中略御かざしの拜、臣下のかざしなど次第のことはて丶、主基の御帳にうつりつかせ給ふ、

〔康富記〕永享二年十一月十九日丙辰、悠紀節會也、○中略自階前五丈餘、中務置宣命版、雖無宣制置之例也、其南去七八尺置尋常版、其南一許丈式部置壽詞版、其東西各二丈立行立標、皆當局專沙汰事也、但今日不立標、節會以前室町殿○足利義教有入御、於攝政御直廬被勸申御一獻、三傳奏以下令候給、永德御例也、長元寬治事記曰、於關白宿廬諸卿有盃饌云々、此由來歟、戌刻許內辨內大臣清通公以下卿相小忌三卿不加之著仗座、頭右大辨仰內辨事、次以召使行繼召大外記師世朝臣、被問諸司具否、無外任奏例也、召使陣腋候床子、獻事同數之、陣官人雖候、被用召使、發陣官人無所役者、可早出之由申之條云々、可謂比興、其間問答頗奇怪也、當局務會始終伺候云々、外史依床子錯亂、逢不著座、被佇立了、次諸卿被向外辨、權大隆光卿出東福昭訓兩門代、權大時房卿出陣立蔀東妻、直被向東門、權中實光卿參議隆夏卿等、經床子幔內云々、周枝宿禰一人被著打板歟、不見及、四品部寮逢以不被著之、各立官東門被引外辨、先之小忌權大公名卿、權中經成卿、參議宗繼卿被出東門了、外辨幄、官南門外退東南打之、子午妻、公卿北上西面一列、小忌公卿三人著大忌上例也、式筥置大忌上首前、件式永德鹿苑院足利義滿御作進正本也、借請官務、今日令置之由局務被語之、渡分配外記、令置之云々、少納言爲清朝臣、辨明豐、已上小忌權小外記忠種今日分配史員職小忌等著之、辨少納言床子在前、外史床子在後、共東上北面亞行也、永德度辨少納言外記史床子、公卿座末引退、東方北上西面儲之云々、此間內辨起仗座、於陣立蔀內東福門下著靴、被押笏紙、分配外記向外辨遲々、先可進之由局務被命、仍予從之、笏紙被副下之、紙用意續飯、如常跪押之、返上、內辨立東廊兀子前給、昭訓門內北先是天皇○後花園御悠紀帳、攝政候御帳上簀給、右大將殿令候同給、艮近衞陣階下、次開門、陣官人開南門東扉闈司不著座例也、但遐邇有著例次外辨公卿權大隆光卿已下四人小忌殘留外辨入南門東扉、列標下、異位重行、西上北面、經悠紀標東、次祭主清忠卿小忌、神祇權大副從三位、就版、經公卿列後并西方跪立賢木於地歟、披壽詞文讀之、公卿同跪、祭主退公卿起、次悠紀行事右中辨幸房出從東廊南頭經公卿列西南就壽常版、跪插笏披文進退時取副笏奏南國多米都物色目、退出、公卿同跪、拍手退出、南門邊徘徊給、式部撤壽詞版、次內辨著昭訓門代內兀子、西面內侍臨東檻、殿巽角、公卿座末程、次內辨降東福門代南面、自殿巽庭練步列左仗南頭、謝座昇南面東階、昇殿人告用此著兀子、南廂東二間西上對座、小忌座在大臣座上、次宮內省率大膳造酒捧多賀須岐宿手

比良須岐（平手、各物盛歟、）忍可列庭中之處、無其儀之間、內辨下殿、於東登廊召行繼、被催件事之處、行繼（行事官）不存知之由申之、官務同不知之旨被申、仍唯不用意之由可申歟之旨、局務外史被口入、行繼申此由、之後、內辨堂上遂無此奏、（如仁安三、壽永元等記者、官方沙汰也、但永承、承保、康治等有不奏之例、）次內辨召舍人、少納言爲清朝臣代之、自東廊邊進出就尋常版位、大臣宣、刀禰召々、少納言稱唯、於南門邊召之、（先之公卿佇立門下、）次公卿爲先、小忌參列標下、（小忌一列、大忌異位重行、西上北面、）諸仗起、大臣宣敷尹、諸卿謝座、造酒正師俊（小忌私）授空盞於小忌上首公名卿、（永雄著授大忌實直歸歟、如何、其外大忌例未勘、）諸卿謝酒訖昇階著座、諸大夫仗居、官務周枝宿禰、四品都事爲緒宿禰、四位大外記師世朝臣、六位外記親稱予、史盛久等著階下、（主種不著之、帶弓矢、年少之故云々、西上南面、二列、五位著南、六位著後、此事兼不觸階下座、）（又辨少納言事著座事、不及沙汰之間、兩局須臾之處、內辨御謝座之後、新中納言親光卿被令著座給、佐之輩不敷座、各自砌上著座、此座事可問官方、無沙汰歟、亦永雄度一行設之、將亦辨官等著座事、天祿記文曰、行事左中辨爲經朝臣、并外史史生已下著階下、仁安三記曰、左中辨俊經朝臣、加著階下、辨殿上人著位穩、仗不當卜歟、仗平座上官不及辨座云々、近例不及辨少納言著座云々、如何、）次供御膳、奉膳參進、從馳道自南面東階供之、（中階東階先例不同、今度被用永祿御例、）次供餕御膳、職事等於東壁下催之供之、（吉田前大納言、中御門大納言、新中納言等佇立此邊、被催次第事、最密也、）次內豎頭康行（五位例宿）羞粉熟蚫羹、御飯同之、居臣下飯汁下御箸、進物所、御厨子所供物如例云々、次供白黑御酒、（續當也、造酒司預光久付采女進之云々、）給臣下、（奧座內豎、端座造酒正置之、盛白黑於土器云云、白者自其色也、云玄者上聞濃烏麻鮮云々、小忌大忌人同之、取箸如食云々、）次一獻、參議隆夏卿於軒廊仰內豎、（但此獻盃事無沙汰也、供白黑之上者、直不可獻盃之由造酒司存之、不敷空盞云々、先例三獻之外、白黑各別供之條勿論也、）次內辨下殿仰獻物事、二﨟外史於軒廊兀子承之、催行事所訖、行事辨國司不列之、行事官（史生已下）捧持之進出中庭、須臾退出、內辨仰詞以下不與聞之、次內辨被催鮮昧事、（無用意之由、官務被申之、其色目體何者乎、不分明之由兩局被密談、天祿記云、次采女司內膳供奉御膳、當時鮮昧進御膳了、行事辨爲輔朝臣、率宮國司諸部等、執獻物五十捧云々、壽永式曰、悠紀獻當時鮮昧云々、此外度々記錄、行事辨率國司諸部執獻物之由被載之、鮮昧事未詳、今度御式被載獻鮮昧之由、不被注獻物之字、如何、爲一物歟、）次二獻、參議隆夏卿仰內豎、造酒正內豎役之、次悠紀行事右中辨率風俗舞人奏歌舞、（冠小忌三人）次三獻如元、次御酒勅使、（於軒廊下、外記親種獻交名於參木隆夏卿了、）次行事辨史（右中辨盛久、左少辨具職、）昇御插頭臺、（件臺可儲東廊西庭之處、正廳南榮下置之、臨期行事辨仰官務、以行事官等令昇退之、置東廊前之、後辨等進被昇之、）經左仗南頭到南面中階下、（東階）辨史退、于茲撿挍三人昇之、昇中階自南榮東行、立悠紀御

帳間、（東西妻）降本階、更昇東階、復座、次辨史昇和琴臺、（二帳一案）如先進經御插頭臺南、其東方立之、（東西妻）經本路退、次撿挍參議宗繼卿、昇帳臺上、被獻攝政殿御插頭、次同卿被獻右大將殿御插頭、（永享又如此、山槐記曰、先歸小忌、次獻攝政、次大忌云々、）公卿分行事辨插之、參議分行事史獻之、（主上御幼稚之時不奉御插頭、又無拜舞例也、此後室町殿御早出云々、）次天皇御主基帳、（臣下不改插頭、）內辨著光範門代北間兀子、（東面）內侍臨檻、（東北）內辨於右仗南頭謝座、昇南面西階著座、（今度上官不著、階下略之、）次小忌大忌公卿參列標下、（先之渡西庭、良逸徘徊、）謝座謝酒訖參上、（不仰侍座、無少納言召例也、）此間主上入御之間、不供御膳、今度不供白黑、不給臣下例也、但粉熟飯汁物如常、次一獻、（以如在儀猶被行之、）次二獻、主基左少辨季風俗樂人奏歌舞、次參議隆夏卿向祿所被著床子、（相公於西華門邊被尋曰、祿所何邊哉、官務無音、又右中辨被問、官曰、祿所已被下知歟、官思案之、後、拔次第示在所被加下知了、此間經程、相公被談予曰、祿所何所哉、進路不審云々、申云、降西階斜渡龍道、經右仗北左仗南就悠紀祿所、件祿所在昭訓門西庇之由見次第、候、卽奉見本了、相公此後被向祿所、其程事々遲引、）次三獻、（不仰御酒勅使例也、）此後內辨（內府）早出、（續內辨事、藤大納言與萬里小路相被讓之、藤大被申云、次第事不覺悟之上、內府早被與奪、難勤也云々、萬里小路被申云、內府不被命置之段同前也、然者就上首可被勤之、不然者可有御早出歟、閣上首可勤之條不打任云々、此後藤大伏理被橫出、）藤大納言同早出、權大納言時房卿於西軒廊、令外記親種押笏紙、（兼不用意、頗遲々、）被續行內辨事、著西華門代東兀子前、召見參、二𦊆進之、（無祿法、分配親種爲年少、仍代之、）內辨披見之後令持外記、入西華門參後房、付頭右大丞奏聞、（入御之故、）卽被返下之後歸兀子下、披取見參、外記持空杖退、內辨召少納言、（爲清朝臣、）下給之、外記乞取之、次諸卿向祿所、（床子在昭訓門西庇、參木辨史重行北面、但辨不被著之云々、）各被取祿、（公卿祿給行繼、）兩局務同被取之、（貫金）前官務幷六位等早出之間不預之、于時寅刻云々、攝政殿御祿、翌日悠紀辨被持參御直廬、室町殿御祿、同辨被持參申本所云々、

〔友俊記〕辰日悠紀節會、寬延元のとし十一月十八日おこなはる、○中略群卿仗座につく、內辨官人をして膝突を敷さしめ、外記をめして諸司そなふるやいなやを問ふ、群卿座を起、近衞階下陣す、悠紀の帳に出御、近仗警を稱し、群卿外辨につく（小忌を先とす）政官同じく床子につく、外辨上卿召使をして式の筥を下げさしむ、外記召す、諸司具するいなや問ふ、內辨軒廊邊にて事をおこなふ、開門群卿標の下につく、（異位重行、小忌に不列、）諸仗たつ、神祇官中臣賢木を捧、版位につき、跪て壽詞を奏す、群臣共

跪、奏をはりて中臣退、辨兩國の多米都物の色目を奏す、今度は其事略群卿拍手畢迄諸仗居、式部壽詞版を撤す、內辨東廊代の兀子につく、內侍臨檻、內辨謝座昇殿兀子につく、政官廁下の座につく、宮內省大膳職造酒等を率ゐて、多賀須岐、比良須岐物等庭中に列、卿相云、內辨舍人を召す、大舍人唯々と稱す、少納言版につく、內辨刀禰を召す、少納言唯々と稱して召、群卿異位重行、小忌を先として參列、諸仗立、內辨敷尹を宣ふ、群卿謝座謝酒畢昇殿著座、諸仗居、御臺盤帊を撤す、內記御膳を供す、臨の御膳を供す、臣下に粉熟をたまふ小忌は別也內辨天氣候す、御箸なる、臣下これに應す、白黑御酒各四杯臣下にたまふ、次一獻悠紀鮮味を奉る、行事辨國司幷膳部率ゐて執之庭中に立、二獻風俗を奏す、三獻御酒勅使御插頭を奉る、○中略此間撿挍行酒、辨瓶子取入御、近仗蹕を稱す、群卿退下、

〔壬生家記〕明和元年十一月九日、辰日節會也、午刻許予著私小忌朝參、未半刻許殿庭御裝束可設之由有命、申半刻御裝束辨備了、○中略酉半刻被始陣、予直被始宴會、壽詞奏之頃雨下、其後雨頻也、壽詞奏了後節會、雨儀相改事、于時鮮味以下雨儀立所注切紙示給事、右雨儀之事內々辨予へ被告事、雨儀相改之後、節會亥刻被始事、作法如次第、丑刻許悠紀節會了、其後御裝束主基方相改事、先饗許也、餘は如前、今度儀ニ於所設之事、卯刻事了各退出、

〔壬生家記〕明和元年大嘗會門下諸司訴訟居書等留牒

一去ル十六日御內見之節、辰日壽詞奏立明之義、出御無之候共奉仕可仕哉と中臣被尋候處、元文以來出御有之節者、奉仕來候義ニ御座候畢壽詞奏出御之時者、叡覽も被爲有候故、立明執申候義ニ御座候、爲中臣執候立明ニ而者無御座候、其故中臣進退、主殿寮進退之道筋、相違仕候義ニ御座候、依而明和元年之度不被爲有出御候處、立明執不申候、然ル處中臣出御無之候共執候樣ニ被示候ニ付、傳奏奉行へ御窺申上候處、何分先例之通立明執不及之旨被爲仰出候、今度若不被爲出御候者、先例之通不及立明樣、宜御沙汰奉願候以上、

十一月

官務殿　　　　　　　　　　　　主殿寮佐伯職秀

〔行厚記〕文政元年十一月廿二日、辰日悠紀主基節會也、分配春芳行事史參勤ニ付、巳日分配ト振替、仍右少史亮績（著行事小忌）參勤也、諸司一同巳刻參集云々、今日主基行事之輩御用無之候ヘ共、兩三人申合參勤可有之、去十八日辨殿ヨリ被申渡候ニ付、予著小忌參勤之處、常清朝臣宗峻紀重增等參勤可有之旨、昨夜更ニ被仰出云々、仍右三人著小忌參勤、依之予勝手ニ退出了、戌刻後著衣冠、爲見物出仕、三獻已後、御挿頭以下行事史所役相濟之後退出了、

一御始酉刻過、出御悠紀帳（戌過カ）入御群卿昇殿之後、

一外辨座、先小忌公卿、次ニ權大納言經久卿、以下御著座、（北上西面）次少納言宣明朝臣、左少辨經則、次ニ少外記禹昌、右少史三善亮績、次ニ史生、官掌、召使等著床子、（巳上西上北面、公卿巳下各淺沓也、其體幷床子之設等一如御即位儀也、）權大納言經久卿以下起座之後、上官起座、群卿參列標下、（小忌公卿不列之、猶在外辨座、）壽詞奏了群卿退出、外辨著靴、（上官各著靴再參進之處、群卿復座無之、仍不著之、）內辨謝座昇殿之後、上官著砌下座、其儀左大史以寧、大外記師德、少外記、（不參）行事史春芳、官外記史生等著之、群卿參列巳前起座、（依大外記有所役也云々）一獻悠紀獻鮮味、紅梅折枝ニ雉子、松折枝ニヒゲ籠等也、行事辨經則率國司幷膳部等執之、今度行事辨之外、地下之行事不率之、二獻奏風俗、三獻仰御酒勅使、次ニ獻御插頭、其儀豫日華門闔內北方ニ設之、（三獻之比、寬貞朝臣以下、各著靴昇立之、）撿挍公卿國司權守等下殿、向日華門被引率之、式部少輔寬貞朝臣、兵庫頭定賢、左少史春芳、式部大丞職顯等、昇之到南階下、撿挍國司等傳執之、昇階昇立南榮、寬貞朝臣以下經本路退出了、

次ニ臣下插頭

預日華門闔外化方ニ設之、中務丞三善亮績、大監物賀茂氏清等、（著靴）御插頭ニ引續キ昇居之、被獻

御插頭之後、三善亮績、平胤祿等舁之參進、置殿巽角（地上也）退出、（令國司權大掾守護之）

一插臣下插頭事

參議出簀子敷、召行事史被催之、先國司介公遂朝臣、行事辨經則、行事史春芳等、（各著靴）執小忌公卿插頭昇東階、經南簀子入當間插之、（國司辨等ハ召傭大嫌役遂之、史ハ到臺下自執之參進）次ニ關白大臣之料、參議出簀子敷召史仰之、春芳承之到臺下、自執之昇東階進之、參議執之參進插之、次ニ參議之料、行事史春芳執之參進、插之、

一主基節會、出御不被爲在、階下之座外記史不著之云々、祿所之座設日華門內、參議實勵卿、辨經則、史三善亮績等著之、如例節會云々、公卿退出卯半刻云々、

〔壬生家記〕史所役覺悟之事、十一月（文政元年）十八日內見、翌日勸修寺左中辨殿エ相伺之留、

事伺候條々（中略）

一御插頭臺敷地敷候儀、自明和元年進退仕候處、於此度者被止候旨、奉敬畏候、

一舁御插頭臺之事

右者此度蒙仰深奉畏候、然處先例明和八年之度、日記ニ有之、

御插頭臺舁立之時、撿挍三人國司權守下殿被向月華門、御插頭臺行事辨國司介權介行事史等舁之、撿挍國司權守被爲引率、南階之下ニ舁立之、（先是著靴）

然處此度寬貞朝臣、定賢、春芳、職頭等、南階下迄舁立之砌、如御次第、撿挍國司等御下殿有之、悠紀之日者、日華門、主基之日者月華門ヨリ御引率ニテ、舁立御插頭臺於南階之下、其後被居南榮候迄、其儘列立候テ、被奉居候後退去仕可宜哉之事、

但經本路次第退出可仕哉

一臣下插頭之事

右明和八年之度、攝政内辨之御插頭、參議被奉插之節御下殿有之行事史役送被仰出所役仕候、於此度者、殿下内辨之御插頭、如先例所役可仕哉之事、

一取參議之插頭事

右明和八年之度、到御插頭臺下自拔取之、山吹昇西階、自南簀子參進插之、北之方床子上﨟一人、南之方下﨟二人也、

插樣冠ノ右ノ方ニ插、カクガイナヒチリ、カケテサス也、

如右進退等仕候趣、於此度者、參議南之方床子許昨日見受候ニ付、入當間奉插候而可然候哉之事、

右進退插樣、殊殿上之儀、偏蒙高論度候事、

前顯之條々、近例天明之度、日記燒失仕難相分、明和八年之度、以書取爲覺悟奉窺候、乍恐御返答奉願候、於行厚モ准之勤仕仕度旨申聞候間、旁奉窺候、以上、

少史春芳

〔實久卿記〕嘉永元年十一月廿二日壬辰、辰日節會也、酉刻後有出御、天皇入御、于時子終刻也、○節略

〔壬生家記〕嘉永元年大嘗式

辰日、○中略式部豫置版、乃御悠紀帳、諸司開門、王卿各就版、立定、神祇官中臣捧賢木、入自會昌門東戶就版、跪奏天神之壽詞、群臣共跪王卿共起、次辨大夫入自同門就版、跪奏兩國所獻多米都物色目、○中略奏訖退出、次五位以上共拍手四段、段別八度、所謂八開手是也、訖以次退出、式部取版退出、是時大臣於左近陣西頭少南謝座、昇自東階、凡昇殿者皆用此階、就座、宮内省率大膳職、造酒司所備多賀須岐、比良須岐等物進列庭中、卽將去、大臣喚舍人二聲、舍人共稱唯、少納言代入就版、大臣宣喚大夫等、少納言稱唯、出自門東戶立班、暫南面北面喚之、王卿共稱唯、小齋群臣先、大齋群臣次之、發聲、訖王卿入自東扉入門、諸仗共起、異位重行、立定、大臣宣侍座、王卿稱唯謝座、小齋者先拜、群臣次之、訖造酒正把空盞、來授貫首、授受共跪更還却二三許丈北面立、謝酒訖造酒正受盞、參議以上昇殿、訖諸仗共居、巳一刻供御膳、次賜臣下饌、小齋悠紀國給之、大齋所司給、次供白黑御酒、給臣

下、次辨班給兩國多米都物於諸司、悠紀獻當時鮮味、次國司率風俗歌人等、且歌(選時亦同)參入、(次國司立前、次音聲、次歌女、次男、)立庭中、歌人先入幄、次國司就幄座、乃奏風俗歌舞、(歌舞成列、以八人、)退出、三節之後召大夫令賜御酒、次獻御插頭(盛花足机、居高机、以紗爲覆之、)和琴二面、(各長六尺、納袋盛花足机、居高机、以紗覆之、)奉御插頭、群臣降立拜舞、賜王卿、撿挍行酒、訖皇帝御於後房、未御主基帳前、參議以上經階下度西方、宸儀出御之後大臣昇西階就座、幷如悠紀儀、次參議已上自右近陣西頭謝座酒就座、訖諸仗居、次供御膳、賜群臣饌、奏風俗事一同悠紀、次悠紀祿獻物韓櫃列于殿前庭、外記仰式部省、令進五位已上見參歷名、進大臣、大臣執奏之、酉刻主殿寮擧燭賜祿、(參議一人、就賜祿所、少納言喚名、悠紀國司賜之、)訖御後房、

奏壽詞奉神器

〔代始和抄〕大嘗會事
辰の日の節會には、中臣の人天神の壽詞を奏す、

〔大嘗會儀式具釋七〕壽詞ハヨゴトヽ訓ズ、神祇令ニ、凡踐祚之日中臣奏天神之壽詞、義解ニ、謂以神代之古事、爲萬壽之寶詞也トアル是ニテ、神呂伎神呂美ノ詔命ヲ以、此豐葦原瑞穗國ヲ天孫瓊瓊杵尊ニ任シタマヒ、天降シタマヒシ事等、神代ノ古事ヲ述テ、皇統ノ無窮寶算ノ長久等ヲ祝セル詞ナリ、其中臣壽詞ノ文傳ハレル者少シ、唯台記別記卷第一ニ康治元年ノ壽詞アリ、ミツベシ、○中略昔ハ中臣壽詞ヲ奏スル時、忌部神璽ノ鏡劒ヲ奉ル、而シテ此兩事共ニ令ニミエタルハ御即位ノ日ナリ、貞觀儀式ヨリシテ大嘗ノ辰日ニアリ、其忌部ノ鏡劒ヲ奉ル事長元ノ頃マデハミエテ、夫ヨリ以後ハ見エズ、是忌部ノ絶タルノミナラズ、鏡劒ヲ重ンゼラルヽ事漸々ニ盛ナルガ故ニ、壽詞奏ノミアルナルベシ、

〔令義解二神祇〕凡踐祚之日、(謂天皇即位、謂之踐祚、祚位也、福也、)中臣奏天神之壽詞、(謂以神代之古事、爲萬壽之寶詞也、)忌部上神璽之鏡劒、(謂璽信也、猶云神明之徵信、此即以鏡劒稱璽、)

〔令集解七神祇〕中臣奏天神壽詞、(釋云、壽詞神代古事也、跡云、奏壽詞上劒鏡、至十一月爲大嘗耳、鏡劒以一物、永奏數帝耳、但奏壽詞在云々耳、又地祇不見文、穴云、同有

幷地祇壽詞哉、答不見文也、時行事大嘗祭之日奏壽詞、然至十一月祭日、新王不預神璽耳、與古說異、博士不伏、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

辰日、(略)○中神祇官中臣捧賢木、入自儀鸞門東戶、就版、跪奏天神壽詞、(群臣共跪)忌部奉神璽之鏡劒、共退出、

〔延喜式(踐祚大嘗祭)七〕辰日、(略)○中神祇官中臣執賢木副笏、入自南門就版位、跪奏天神之壽詞、忌部入奏神璽之鏡劒、訖退出、

〔北山抄五〕大嘗會事

辰日、(略)○中神祇官中臣捧賢木、(略)○中就版跪奏天神之壽詞、(略)○中忌部奉神璽鏡劒、共退出、(群臣起、寬平式云、天長以來此事停止、清凉抄云、近代不給神璽、只奏其詞者、而寬平以後記文、忌部猶不參入、天慶記云、稱基申云、件鏡劒、自御所暫下給奉之、而天長或奏、輙給重物、非无事危者、其後忌部雖申不給、)

〔江家次第(踐祚大嘗會)十五〕大嘗會

辰日、(略)○中神祇官中臣捧賢木、(略)○中奏天神壽詞、(群臣共跪)忌部奉神璽鏡劒共退出、(群臣起)近代無此事、(長元忌部爲賀奉仕之)

○按ズルニ、北山抄ニ引ケル寬平式清凉抄等ノ文ニ據レバ、忌部ノ鏡劒ヲ奉ルコトハ、淳和天皇ノ天長以後、全ク絕ヘタル事ト見ユ、而シテ貞觀儀式延喜式等ニ之ヲ載セタルハ、恐クハ舊文ヲ錄セシモノナランカ、江家次第ニ、長元ニ之ヲ行フトアルハ、其時ニ限リテ又行ハレシモノナルベシ、

〔日本書紀(持統)三十〕五年十一月辛卯、大嘗、神祇伯中臣朝臣大島、讀天神壽詞、

〔業資王記〕建曆元年七月廿二日辛未、兼衡談云、大嘗會始之、(淸寧天皇御時云々)中臣奏壽詞、(持統天皇御時始之云々)

〔台記別記〕康治元年十一月十六日甲辰、知行光房來宿所云、攝政殿仰云、節會可被始也、(略)○中

中臣壽詞

現御神止大八島國所知食須大倭根子天皇我御前仁、天神乃壽詞遠稱辭定奉止久申須、高天原仁、

神留坐須皇親神漏岐神漏美乃命遠持天、八百萬乃神等遠集賜天、皇孫尊波高天原仁事始天、豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天、天都日嗣乃天都高御座仁御坐天、天都御膳遠長御膳乃遠御膳止、千秋乃五百秋仁、瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依志奉氏、天降坐之後仁、中臣乃遠都祖天兒屋根命、皇御孫尊乃御前仁奉仕氏、天忍雲根神遠天乃二上仁奉上氏、神漏岐神漏美命乃前仁受給波里申仁、皇御孫尊乃御膳都水波、宇都志國乃水了天都水遠加立奉牟止申遠里事教給志仁依氏、天忍雲根神天乃浮雲仁乘氏、天乃二上仁上坐氏、神漏岐神漏美命乃前仁申世波、天乃玉櫛遠事依奉氏、此玉櫛遠刺立氏、自夕日至朝日照麻氏、天都詔戸乃太詔刀言遠以氏告禮、如此告波麻知波弱韮仁由都五百篁生出牟、自其下天乃八井出牟、此遠持氏天都水止所聞食止事依奉支、如此奉志任任仁、所聞食口由庭乃瑞穗遠、四國卜部等、太兆仁卜事遠持氏奉仕留、悠紀仁近江國野洲遠、主基仁丹波國氷上遠齋定氏、物部乃人等、酒造兒、酒波、粉走、灰燒、薪採、相侯、稻實公等、大嘗會乃齋場仁持齋波利參來氏、今年十一月中都卯日仁由志理伊都志理持、恐美恐美毛清麻波利仁奉仕利、月內仁日時遠撰定氏獻留、悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠、大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止、汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁毛所聞食氏、豐明仁明御坐氏、天都神乃壽詞遠稱辭定奉留、皇神等母千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉利堅磐常磐仁齋奉利氏、伊賀志御世仁榮志女奉利、自康治元年始氏、與天地月日共照志明良志御坐事仁本末不傾、茂槍乃中執持氏奉仕留中臣祭主正四位上行神祇大副大中臣朝臣清親、壽詞遠稱辭定奉久止申、又申久、天皇朝廷仁奉仕留親王等諸王等諸臣百官人等、天下四方國乃百姓諸々集侍氏、見食倍尊食倍歡食倍聞食倍、天皇明廷仁茂世仁、八桑枝乃立榮奉仕留倍支禱乎所聞食止、恐美恐美毛申給止波久申、

〔玉勝間一〕中臣壽詞

大嘗會の中臣壽詞といふ文あり、宇治左大臣賴長公の、台記の康治元年の大嘗會別記に載せ

られたり、〇中略さて今古言を考へて、訓をも加へたるついでに、いさゝかことの意をもとくべし、第六行なる天都御膳達の遠字は、かならず乃なるべし、遠にても聞ゆるが如くなれども、さては次に瑞穗達とある遠と重なれり、由庭仁所知食の知字は聞なるべし、第十行の天忍雲根神達天乃云々、受給波里申仁、これは天忍雲根神達、神漏岐神漏美命乃前仁、受給波里申仁、天乃二上仁奉上氐と、語を次第て見ればよく聞ゆる也、宇都志國乃水了の了字は、戸とも加ともあり、皆誤也、かならず仁なるべし、天都水達加立の立字は、互を誤れるなり、申里達は心得ず、かならず申世止と有べきところ也、麻知波弱韮仁は、何事にか聞えがたし、但し麻知は、神名帳に左京二條坐神二座、太詔戸命神久慈眞智命神とある、眞知よしありげ也、太詔戸命と並び坐し、又此二神相嘗に預り給ふこと、下にいふを合せ考ふべし、韮はもしくは蒜を誤れるにて、韮の借字ならむか、弱韮とは正午時より前をいふべければ、上に至朝日照眞互とあるつゞきの時刻なるべし、由都五百とは、同言重なりていかゞ、由都はすなはち五百箇といふことなれば也、八井は神武天皇の御子の御名に、日子八井命、又神八井耳命と申すおはせり、八井の意同じことにや、如此奉志は、奉の上に依字脱たるなるべし、四國卜部は、大祓詞の終に、四毛國卜部等とあれども、卜部は伊豆壹岐對馬の三國にかぎりて出ることにて、四方の國より出るものにあらざれば、毛字は後の人のさかしらに加へたるにて、かれもこゝも四箇國をいふ也、それにとりて、四國は右の三國といま一國はいづれの國ならむいぶかし、太兆仁の仁字は、乃を誤れるなるべし、奉仕留の留字は、互なるべし、氷上の下に、一本には郡字あり、もしそれによらば、上なる野洲の下にもその字あるべき也、相候は、儀式には相仕、大嘗祭式には共作とあり、これらを合せて思ふに、仕も候も誤にて、相作なるべし、由志理伊都志理は、由は齋、伊都は嚴にて、共に齋清めたることと、志理は、齋まはり清まはりのまはりの如き辭と聞えたり、日時達撰定、ではいつも定まれる

事なるをかく申すは、上代には其度々撰て定めしにや、さて其代の詞のまゝに後までも申せるか、赤丹乃穗仁毛の毛字は衍也、後人此言の意をしらず、たゞ上に二つ仁毛とあるにならひて、みだりにこゝにも加へたる物なるべし、明御坐豆の豆はかならず止と有べきところ也、○中略明良志は、理を延て良志といへるにて、阿加理也、事仁は下の奉仕留といふへつゞく辭也、食倍はみな多倍と訓べし、給へといふこと也、さて聞食倍の下に、豆といふ辭を添て心得べし、天皇朝庭の明字は、朝の誤也、稱乎所聞食止は、一本には稱辭竟奉止久とあり、これもあしからず、さて天忍雲根神云々の事、伊勢の外宮の書どもに、天村雲命の事として記せり、同神にやあらむ、

〔業資王記〕建暦二年十月九日辛巳、權少副隆繼來、祭主能隆卿、三ケ月輕服之間、大嘗會壽詞奏不可叶、非祭主之中臣勤仕之例不分明云々、權大副知雅等出其望歟之由所談也、隆繼其望內歟、祭主卿子、權大副隆宗已氏長者、可讓任之由擧申云々、

〔宮主秘事口傳〕曆應元年十二月廿六日丙戌、今日兼豐參殿下、一條殿藤原經通○有御對面、條々被仰下云、大祀壽詞奏秘說トテ一紙被下之、諡號事尊號事在此注文、御不審也、委可注申云々、兼豐歸華之後、予披見之、是文永十一年大祀之時、祭主爲繼卿不知壽詞文也、爭可爲其職之員、隆蔭卿訴申之、其時隆蔭卿注進之狀也、實者故家文書無之勘草歟予卽勘注之畢、

壽詞秘訓事

皇親神漏伎神漏美乃命乎持天

口傳曰、謂天神壽詞者、傳神語奏天子之祝言也、仍天神御名不讀、諡號奏尊號也、神漏伎神漏美者、是諡號也、諡者死後之稱、累生時之行而諡之云々、我后萬壽之初、有所憚之故不讀諡號者也、

自夕日朝日照爲天天都詔刀乃大刀詔言乎告[illegible]

口傳曰、自齋忌神膳之時、至于次神膳之時、殊祈請之儀也、讀様有口傳、大嘗宮臨幸之時、各解除之後唱訓言須隨御歩、其中間猶凝丹祈之儀也、十二箇口傳之内、且注申二箇條、自餘十箇之口傳同爲君爲世也、爲繼天神之號、殆不辨何神歟、況不傳神語、以何奏之、

○按ズルニ、天神壽詞ヲ奏スル事ハ、後世マデ行ハレシ事、辰日節會ノ條ニ併載シタレバ參看スベシ、

齋國獻物

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十一月上旬、〇中略次各獻會所御贄百捧以上、〈撿度記文、獻物無有定數、臨時增損、〉其行列儀也、子弟二人捧白木前行、五位已上六人次之、國司二人次之、〈分以上〉捧著木綿賢木子弟二人次之、捧著祓麻賢木子弟二人次之、〈已上左右分〉櫃物次之、屯櫃次之、缶物次之、松明次之、薪次之、藥灰次之、〈已上列途中〉捧賢木子弟二人左右分頭在後、捧著木綿賢木子弟二人次之、國司二人次之、〈自以上〉捧白木子弟次之、總納内膳司、受領送主殿造酒等寮司、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

辰日、〇中略辨大夫入自同門、〈〇儀鸞門〉就版、跪奏兩國所獻多米都物色目、其詞云、悠紀〈留〉供奉〈留〉其國宰姓名等〈加〉進〈禮留〉雜物、合若干荷、就中獻物黒木御酒若干缶、白木御酒若干缶、飾瓼若干口、倉代若干輿、缶物若干缶、多米都物雜菓子若干輿、飯若干櫃、酒若干缶、物若干缶、主基〈爾〉供奉〈留〉其國宰姓名等〈加〉進〈禮留〉雜物、合若干荷、就中獻物云々、多米都物云々進〈禮留〉事〈乎〉申賜〈波久止〉奏、訖退出、〇中略辨官班給兩國多米都物於諸司、悠紀獻當時鮮味、

〔北山抄五〕大嘗會事

辰日、〇中略辨大夫就版、跪奏兩國所獻多米都物色目、退出、〇中略次辨官分給兩國多米都物於諸司、〈近例明日出御以前給之、悠紀給左管諸司、主基給右管諸司、〉

〔大嘗會儀式具釋七〕辰日悠紀節會次第
辨奏〻兩國所〻獻多米都物色目〻〈今度無此儀〉
多米都物トハ、三ケ重事抄ニ、兩國ヨリノ獻物ヲバ、タメツ物ト名ヅクト云リ、但貞觀儀式ニ此時奏スル詞ヲ擧テ、〈○中略〉其詞ノ中ニ獻物ト多米都物トヲ別テ數フルナレバ、必獻物ト云ト全同ジキニハ非ズ、按ズルニ、黑酒白酒ハ獻物ト云中ニ入、酒ハ多米都物ト云中ニ入、又獻物ノ中ニモ多米都物ノ中ニモ各缶物アリ、又延喜大嘗式ニ多明米三十斛〈多明酒料〉トアルハ、白酒黑酒ニ分テル目トミエタリ、是等ヲ以思フニ、供神供御等ノ料トシテ獻ル物ヲバ獻物ト云、給賜ノ料トシテ獻ル物ヲバ多米都物ト云カ、多米ト云モ給フ義ナルベシ、而シテ此時色目ヲ奏スルニハ、獻物多米都物共ニ奏ス、辨一人版ニ就テ跪イテ之ヲ奏ス、但今ハ之ヲ奏スル儀ナシ、其實ナキコトナレバ省カルヽナルベシ、

〔古事記傳九〕味物は多米都母能と訓べし、中卷明宮〈○應神〉段の末に、種々之珍味とあるも、如此よむべし、其故は、貞觀儀式大嘗祭儀に、辨大夫入〻自〻儀鸞門〻、就〻版跪奏〻兩國所〻獻多米都物色目〻と有て、其詞に、御酒倉代缶物、多米都物雜菓子飯などの色目見え、又大多米津酒、大多米酒波、多米御酒、多毎米、大多米院と見え、延喜式にも、多明米、多明酒、多明酒屋、多明料理屋などゝ見えたれば、古に凡て美味飯食を云る名なり、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀
辰日、〈○中略〉悠紀國將〻別貢物〻參入、

〔北山抄五〕大嘗會事
辰日、〈○中略〉親王以下、謝座謝酒、訖各著座、諸仗共居、〈或次悠紀國司別貢物參入者、而近例无所見、新式謂挿頭等、然而相異之由、即見儀式、清涼抄謂獻物、又不可然歟、天長記、群臣著座後、獻御屏風廚子等有歟、又獻御挿頭等、然則往昔有如此別貢也、而近代无其事云云、〉

〔續日本後紀仁明〕天長十年十一月己巳、悠紀獻屛風四十帖、主基獻插頭華二机、和琴二机、厨子十基、屛風廿帖、

〔中右記〕寬治元年十一月廿二日甲午、節會如式、○中略

兩國所進之御屛風各十帖、四帖五尺、本文各三所、六帖四尺、和歌各三反、治部卿乍左右書、左眞、右草、若口傳歟、又悠紀所進之二階厨子一雙、是別進也、

一古文孝經御注孝經一帖、帝範二卷一帖、群書治要三帖、

一群書治要□二帖、內裏式三帖一帖、藏人式二卷一帖、七月以後相分爲二兩卷、

已上色々口紙、銀金泥口水精軸金泥外題帙口如例、美麗無雙也、當時各手書等書之、

〔台記別記〕康治元年十一月十六日甲辰、知行光房來宿所云、攝政殿仰云、節會可被始也、○中略

多女都物解文、悠紀主基國司所附二通進上之、件書樣不分明候、如悠紀解文者以一方解文可申候歟、兩國附之由所見候也、又月日下雜掌判署不候、書下可候歟、就尋常版所令奏候也、以此旨可令洩申給候、朝隆恐々謹言、

十一月十六日　　權右中辨在判

近江丹波國司解申進上多米都物事

合

酒百瓶、　鮑百斤　鮭百尺　干鳥百羽　雉百羽　鵜百羽

堅魚百斤　雜腊百斤　鮨鮒百缶　醬五十缶

右件物等進上如件

康治元年十一月十六日

丹波國

開蚫百帖　生蚫五十貝　石花二缶　細螺三缶　辛螺百貝　寄居子二缶
堅魚煎三缶　甲蠃二缶　飯百櫃　酒五十缶　餅五十合
右進上如件
康治元年十一月十六日　雜掌調成安

〔以享釋記〕文政元大嘗會一會文書部類
近江國解申進上多米都物事
合
酒百瓶　蚫百斤　雉百尺　千鳥百羽　雄百羽　鵠百羽
堅魚百斤　雜腊百斤　鮨鮒百缶　醬五十缶
右件物等進上如件
文政元年十一月廿二日
丹波國
開蚫百帖　生蚫五十貝　石花二疋　細螺三疋　辛螺百貝　寄居子二疋
堅魚煎三疋　甲蠃二疋　飯百櫃　酒五十缶　餅五十合
右進上如件
文政元年十一月廿二日　雜掌調成安

標山

〔代始和抄〕大嘗會事
標山といふは、大嘗宮のまへに、兩國の國司列立すべき所のまるしの木に大なる山をつくり、さまざまの作物を飾て、是を引立る事あり、此作物は本文の心を用ゆ、
〔北山抄五〕大嘗會事

史生以下巡撿曳標路事、橋上度、假橋、仰京職幷畿内國々、令修固、又朱雀門前石橋、仰京職、門内幷應天門修理職、

〔類聚國史神祇八〕弘仁十四年十月癸亥、右大臣正二位藤原朝臣冬嗣、大納言從二位藤原朝臣緒嗣等、於淸涼殿口奏言、○中略一切不用玩好金銀刻鏤等之飾、唯標者以榊造之、用橘幷木綿等飾之、即書悠紀主基字、以著樹末、凡以淸素、供神態耳、

〔續日本後紀仁明二〕天長十年十一月戊辰、御豐樂院、終日宴樂、悠紀主基共立標、其標、悠紀則山上栽梧桐、兩鳳集其上、從其樹中起五色雲、雲上懸悠紀近江四字、其上有日像、日上有半月像、其山前有天老及麟像、其後有連理呉竹、主基則慶山之上栽恒春樹、樹上泛五色慶雲、雲上有霞、霞中掛主基備中四字、且其山上有西王母獻益地圖、及偸王母仙桃童子、鸞鳳麒麟等像、其下鶴立矣、於是悠紀標忽被風吹折、工人扶持乃與復之、悠紀樂標則大象之背結構小臺、命兩童子擎書障子、其書曰、周禮曰、旄人掌樂也、禮記曰、民勞其舞綴短、民逸其舞綴遠、政覩舞而知民治不、其障子後起煙霞、霞中造機、隨舞人之出進、而擧其舞名、其象之左有一胡人而馭象、

〔日本諸手船神祇四〕標山

釋詁、大嘗會、天皇踐祚之後、徧薦新穀於天下大小神祇、上親尸之、一代之大祭祀也、故其制禮懿美嚴肅、乃載國史及延喜式、江家次第、御代始抄等而詳矣、若標山則大祼畢後翌日有宴會儀、上臨殿上帳、百官畢集、悠紀主基國司於大嘗宮庭上、各立標木、列立其下、標上金銀彩帛、巧作山形及日月麟鳳花卉瑞祥之物、騁伎施機、謂之標山、蓋各郡之所設造、足覩太平氣象矣、仍思每上世被修此大祭、當必有箇風流之美觀、諸史略焉、而玆乘惟備、故聊出爾、天老、五車韻瑞曰、韓詩外傳云、黃帝召天老問鳳象、恒春樹、事言要玄曰、宛委餘編云、樹有長生、萬年、靈壽、君子、女貞、端正、皆美名也、賓連、闕達、平露、紫脫、華平、恒春、皆祥名也、王子年拾遺記云、方丈山有恒春之樹、葉如蓮花、芬芳如桂花、隨四時之色、一名沈生、如今之沈香、益地、佩文韻府曰、鄘城集仙錄云、王母遣使授舜白玉環、又授益地圖、上官儀爲李

秘書上遊集表云、截海班朔、登地延圖、駱賓王露布云、天帝前星、廣陽秦公之冊、坤元登地、遙開王母之圖、張說詩云、獻圖開登地、張樂奏鈞天、旌人、周禮無所見、恐旄人之誤、宗伯屬官有旄人、曰、掌教舞散樂舞夷樂、此謂掌樂也、蓋省語也、禮記文見樂記、抑又至于淳和朝、此祭從省略、委見下條、其後後花園帝永享中被行之後、遭世衰亂、中絶二百五十餘年、逮于東山帝貞享中、遂被再興、已降相繼見修、尤可珍重、然而率循古禮之大體、不復及昔日盛典、故標山之作物亦莫有聞焉、

〔榮花物語三十三きるはわびしと歎女房〕大嘗會〇長元九年十一月れいの月日の山ひき、あやしのものまで、あをすりにあかひも、なまめかしうていそぎあゆみ、たふれぬべくあしきみちをつゝきたちてゆくもおかし、さるべき人はあゆまで、人よりのちまでかしづかれ、ふとりたるあふみのかみなどは、人におされなどしてあゆみゆくもおかしくなん、なはなべてのことにはあらず、

〔中右記〕寛治元年十一月十九日丁卯、午時許兩國引標山、國司等著小忌、行事辨同著之、引入朱雀門、立會昌門中、

天仁元年〇嘉承三年十一月廿一日〇丁卯巳時許、著直衣、行向陽明門邊、爲扈從殿下御見物、殿下御于内裏也、以人被仰云、暫可見物、晝御覽事沙汰之間、自然怠歟、早相具中將可見物者、則乘申私車、馳向二條朱雀大路之處、標山已引入了、甚遺恨也、但丹波守敦宗朝臣步之間、共人濟々、一家六位以下著布衣相從、見物車馬道路無隙、近江丹波人夫相挑引之間、主基山引懸見物車、三町許遲々云々、具申中將殿、入從朱雀門會昌門廻見標山、

〔本朝世紀〕康治元年十一月十五日癸卯、大嘗祭也、〇中略抑今朝近江丹波兩國標、引入自朱雀門引立會昌門前、行事辨源雅綱朝臣、同師能、近江國司憲方、丹波國司公信、幷寄行事供奉如恆、引入標山之間、能師朝臣僕從、與近江國司憲方僕從、聊有鬪諍論事、雖然不及刃傷、又一院〇白河臨幸、朱雀門前立御車、宇治前相國被候御車後、欲御覽標之處、兩國標不待御幸、早速引入朱雀門內蔀、頗不足言事也、召判官代通

憲爲御使、雖被勸發撿非違使等、全無其恙還御了、日來霖雨之間、朱雀大路悉變泥塗、行事官等步行之間、甚多其煩、

〔台記〕久壽二年十一月廿三日丁卯、傳聞引標山之間、悠紀山引懸見物車、其山破摧云々、

〔爲親記〕久壽二年十一月廿三日、今日引大嘗會標山、於四條朱雀邊見物之、大閤〇藤原實行令相伴給、本早旦事也、今日及午剋、先引標山、相並引也、

〔玉海〕養和二年〇壽永元年十一月廿四日辛卯、大將少將密々見標、余不見物、酉刻歸來云、標申刻引云々、悠紀行事左中辨兼光、國司重章、主基辨右少辨兼忠、國司清邦、故邦綱子云々、悠紀標在前云々、廿五日壬辰、標引立承明門內口門、小山大河兼有沙汰、欲縮寸法、有禁忌、不引入承明門者可毀禮、〇禮恐誤仍別々ニ造立テ取放テ引入之後、如本指合云々、

〔吉記〕元曆元年十一月十八日癸卯、江州標料所尋出之人夫及千人、其中四十人著裝束、付採領六十人、沙汰遣之齋場所、堪事侍等差定行事、予爲見物、午刻許向朱雀大路、其儀強不劣先例、近江守爲季、著小忌、如例、予侍十人許令相具也、丹波守□□朝臣、近江介公衡朝臣、右中將行事辨悠紀方左少辨基親、雖下﨟、依當時闕行悠紀方、畫先例也、主基方右中辨光長、南三町步行云々、上共人各十餘人、已醫道陰陽道之輩外、可然國司不見如何、標江州前行輪破云々、兩方行列甚以散々歟、攝政殿〇藤原師家御庇車、有御見物、爲童女御覽早令歸給云々、

〔玉葉〕建曆二年十一月二日甲辰、參殿上、良久藤中納言來仰、左府云、大嘗會兩國標引入南門、而寸法不叶、治曆例不分明、若自築垣可引入歟、將又減寸法可引入南門歟、兩條之間可計申者、〇中略

定詞

兩國標事

左大臣、內大臣、權大納言藤原、帥藤原卿、權中納言藤原卿等定申云、被引入築垣之條、一切不可然、元曆、建久、是依築垣無實也、今度修理、今更撤去之、□□治曆雖所見無不審、自南門引入歟、南

門與標之寸法暗難計、能々被尋問可被引入、□□難入者可減山寸法歟、無指式文故也、

參議藤原朝臣定申詞、大略同人々歟、但自築垣路可引歟、元曆建久吉例也云々、

六日戊申、傳聞、○中略自南門引入兩國標事、治曆記被撿出云々、山寸法一丈二尺、□□□二尺、合□二丈四尺云々、則引入南門□□分明云々、仍當時南門寸法有尋之處符合云々、可謂珍重事歟、

〔業資王記〕建曆二年十一月十三日乙卯、今日引標山於錦小路、來催之道伺之、標引次第如例歟、神祇官權少副大中臣宣康同宣經行列歟、行事辨慾紀左少辨藤家宣(衛府供人許歟)十主基右少辨藤長資(侍許人許)近衛司源賴茂(衛府少々相具、供侍一人持劍)時賢(中將、侍五六人許歟)藤爲家(少將、侍十人許)丹波國司公廣(貞敏朝臣、侍三人許歟)介清親(中將、不見)親通(少將)祭主任時本官符持向使□□一座史生吉元難望申、先例公文史生多被差遣之由象衙宿禰依注申、可爲清賴之由下知了、

〔平戶記〕仁治三年十一月十三日辛卯、午刻許遣出向朱雀門邊、爲見物標山也、見物車相並令立、已去其路、不可說不可說、標山數刻不見、及申刻漸引出、然而依無路無並引之儀、已違例、於所々標山車軸令折云々、於朱雀門內小童二人又殞命、(車軸折、懸云々)又以觸穢、不可說不可說、兩方標入門中間違例也、頭辨召具瀧口五人、所衆五人、(衣冠)中宮侍二人、(衣冠、先被侍、次瀧口所衆相並)私侍四五人(太無人數也、在自身之後)辨侍御倉小舍人等、相具右少辨時繼(赤紐付左、世以爲目、逐付直云々、)侍十二人、供奉人中絕、已及日沒了、其後歸家、○中略

今日見物小僧、爲天魔被取、懸結政內樹木頂飛行云々、其後見物者見付取下、此後絕入云々、上下擧而見之云々、希代事歟、件僧云、天魔云、大祀見物云々、

〔中務內侍日記〕廿二日、○弘安十一年十一月ひをの山○標山ひく、ひしめく、しやうぞくどもしてわたしつれば、心やすくて、くるればくわいりう殿の行事に、こうたうはまゐらせ給はず、

〔永和大嘗會記〕廿三日○永和元年十一月卯の日なり、○中略さてもけふ早旦に、標の山を朱雀の大路よりひき、國司ども供奉す、標の山は官の廳の門左右にたつるなり、

〔經嗣公記〕廿一日、〇應永二十年十一月けふは卯日にて大嘗會也、〇中略戌のこくばかりに兩國の標山をひきて、南門の外の左右にたつ、悠紀主基行事の辨藤光行、國司の次將敎豐朝臣、隆盛朝臣、六位史安倍盛久、高橋範職、史主官掌神祇官寄撿非違使以下供奉つねのごとし、〇中略この標の山は、悠紀主基の本文にまかせて、繪所てうまんする也、〇中略さても標山御見物のため御幸あり、八葉の御車を南門の外の東のかたに立られて御覽有、西園寺大納言直衣にて參會せらる、

〔康富記〕永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗祭也、午剋許兩國標山自齋場所令引四條、(先々到七條、而永享應永近例如此、)悠紀近江國標經東大宮、主基丹波標經西大宮、兩方供奉人史以上、東大宮南行、大路乘車、史或乘輿最略也、兩方史生官掌等乘馬雀、皆西大宮南行、於四條朱雀、行事史已下上乘物、相從兩標、朱雀北行、國司等猶乘物、路次不便之故歟、到三條下車、于茲上下整行列、所々預不供奉之云々、悠紀方右中辨藤原幸房、右大史安倍盛久、史生安倍保廣、官掌紀成茂、(已上行事)近江介藤原實雅朝臣、(右中將)神祇官人卜部兼富朝臣、同兼香、(實紹)寄撿非違使左尉大石員弘等、主基方左少辨藤原明豐、(丹波守藏人)右大史高橋員職、史生紀氏益、官掌同親秀、(已上行事)丹波介藤原雅親、(左少將)神祇官人卜部兼藤朝臣、同兼名、撿非違使中原章德等也云々、〇中略未剋標山曾昌門前引留之、室町殿(〇足利義敎)攝政(〇二條持基)殿下、(各御衣冠)於南門下有御見物、其南方官務居床子見行列云々、標山引人夫一百人、兩國守護召進之云々、

〔後法興院記〕文正元年十二月十八日乙卯、是日悠紀主基引渡兩國之標山云々、上皇有御見物、被立御車(八葉、御車寄大納言右府云々、)於南門前、供奉公卿以下自神祇官近邊下馬云々、標山引了、秉燭時分還幸云云、今日御裝束御下直衣、供奉人狩衣、公卿五人、雲客四人、北面五人、

〔續史愚抄〕(桃園)延享五年(〇寬延元年)十一月十七日丁卯、大嘗祭、(近代悠紀主基兩國司、無下引標山事上、)

〔續史愚抄〕(後櫻町)寶曆十四年(〇明和元年)十一月八日乙卯、此日被行大嘗祭、〇中略依近例、悠紀主基兩國司不曳標山、

古事類苑

神祇部二十一

大嘗祭四

古事類苑

神祇部二十一

大嘗祭四

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

巳日辰刻御悠紀帳、其儀一同辰日、群臣一兩巡後、悠紀人入自儀鸞門、就中庭左幄、奏和舞、(十人共舞)訖退出、次雅樂寮率樂人、亦入就同幄、奏樂、未刻御主基帳、其儀同上、卽國獻物韓櫃列于殿前座、次供御膳、次主基人等入就中庭右幄、奏田舞、(十人共舞)訖退出、次薦御膳、次雅樂寮奏樂退出、酉刻賜祿、同辰日儀、亥刻御清暑堂、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕巳日辰二點御悠紀帳、三點薦御膳、次奏和舞、其召五位已上給饗、及六位已下參入奏風俗樂等、並同辰日、未二點御主基帳、供御膳之後奏田舞、庶事同前儀、事訖主基國賜祿、

〔北山抄五〕大嘗會事

巳日辰刻御悠紀帳、近仗稱警蹕、內辨著兀子、內侍召人、內辨參上、開門召群臣、供御膳、賜臣下饌、(天慶記、今日无白黑酒云々、)等儀、一同辰日、(承平天慶例有獻物、无揖頭、安和天祿又无獻物云々、)一兩巡後、悠紀人就庭中左幄、奏倭舞、(寬平記云、著■揖、承平記云、舞人十人、歌人十人居庭中、琴師二人居歌人前、舞人用內舍人、寬平式云、琴笛歌人用大歌人、天慶記云、揖部庭中南北行設二行座、舞人分著、其南立床子、琴師二人著之、笛工一人在其後云々、寬平以來記文、此日給酒柏、午日不給之、而或此日不給、午日給也、)次奏風俗、(儀式有所司樂无風俗奏、或云、此樂停止、令兩國奏風俗、承平貞信公御記云、須先奏和舞田舞、後奏兩國風俗、而先奏風俗失也者、而天慶以來猶先奏風俗、)三獻後、仰御酒勅使、事訖御主基帳、雜事皆同昨日、但獻物後、主基人就右幄、奏田舞、(多治比氏內舍人等供奉、舞人十人、承平記云、樂人著幄座、奏音樂、天慶記云、件舞等大歌不具、不進、卽仰明日可供奉之由、有例故也云々、)次奏風俗、(寬平記云、舞人退出闕、親王以下下殿舞

遊、舉還昇、承平獻御挿頭、舉入後房、群臣醉時、或遣藏人大臣座邊、大臣招之、唱辭獻云々、次獻御挿頭、天慶當明親王樽供、仁和例云々、次奏見參、次給主基祿、辛櫃立廰
進西

〔江家次第十五踐祚〕大嘗會

巳日

時刻出御位服、內侍持置御劔、璽筥、命婦藏人各四人扈從、藏人奉御靴式宮等、近衞陣殿前、入自東福四擧等門、陣東西階下、

出御著靴、置璽劔於東、置式宮於西、近仗稱警、

內辨著東廊兀子、王卿著外辨、

式部引刀禰入自東西掖門、彈正同入列立、

內侍出、內辨謝座昇、

開門、近衞開會昌門、率近衞入人、兵衞開應天門、內辨召舍人、二大舍人、於昭訓門外稱唯、

少納言立版、入自昭訓門、內辨宣召刀禰、

少納言稱唯出召之、左廻經出自會昌門、息機外、又稱唯、

王卿立標、入自會昌門東扉、小忌爲先、諸仗共起、

五位以上左右分入、小忌人入自東戶、神祇官在前、式部錄稱容止、次六位以下分入、省掌稱之、異位重行立定、參議以上

幷小忌列東方、四位以下西分列、

內辨宣敷居、賀、群臣再拜、

酒正授空盞、貫首人跪取之、不取盞、群臣再拜、跪返與之、

王卿著堂上、經陣前上殿、五位六位分著幄座、諸仗共居、

酒部立撤御膳杞、采女、一二御臺盤後、撤酒司臺盤杞、件杞進物所就西階受之、

內膳供御膳、入人采女、令史前行稱警、群臣諸仗共起、內膳官人登東階、第一采女由東階、傳取供之、

酢　鹽　酒　醬　餛飩　索餅　餲餬　桂心

　臣下共居

次次供膳（自西拔供之　鎚子粘臍餺飩團喜）

給臣下餛飩　御箸鳴（臣下應之）　供鮑羹（撤索餅）

供御飯（撤餛飩）　供進物所御菜（平盛六、窪坏二、汁物三、）

供御厨子所御菜（高盛入、燒物二、汁物二、）給臣下菜汁、

御箸下（臣下應之）

一獻（承保、一獻如無、二獻無佗、民部卿一使家卿內辨、）

獻物（近代無此事）

奏風俗（入自會昌門、且歌參入、國司在前、次歌女、歌男、樂人在後、先立庭中、次歌人入幄、次國司著幄座、）

奏歌舞退出

二獻

奏和舞（著青摺舞人十人、歌人十人居庭中、舞師二人居歌人前、舞人用內舍人、播部庭中南北行設二行座、舞人分著其南、立床子舞師二人著之、笛工一人在其後云々、）

三獻

仰御酒勅使（內辨起座後、召參議仰之、立內辨後七尺奉仰、稱唯左廻下東階、取外記所持交名、昇立簀子、敷東二間（就少將）召之、右廻復座、（召大夫、五位各二人））

入御主基帳（置御劍於西机、置式於東、或如悠紀、）

內侍臨西檻、內辨謝座昇、（自右仗後於仗頭謝座、昇自南面西階著座、）

王卿列立（仗頭北面東上重行、第一人當西階東端云々、）

小忌五位以上直度、列立馳道西、

謝座謝酒如前、（內辨不仰侍座、）各著座、

次供御膳、給臣下饌、（皆如前儀）

一獻

主基獻鮮味、（行事辨率國司幷諸部執之、入自光範門、經壇下立龍道東、北面西上、）

內辨問、何食（乃）物（曾）、各稱唯云、主基所進御贄、（各稱物名）

內辨宣、給膳部、稱唯出、自逢春門、（付內膳、內膳預候門外、）

奏主基風俗、（如悠紀儀）

二獻

奏田儛、（多治比氏內舍人事供奉、舞人十人、樂人著幄座奏音樂、）

三獻

獻插頭、（擬按納言以下、率主基行事大夫等、昇御插頭儀爭等案、五位以上六人、昇案入自光範門、經右仗南頭、昇自中階、立之於南榮、插頭在西、從下退出、）

親王奉之、（起座就案、擎御插頭、經座上昇御壇西階、候[illegible]下、就饌目給節奉、指御冠左、自座末復本座、）

王卿下殿拜舞、（東面北上、異位重行、）

復座後、行事辨以下給王卿插頭、（大臣料、大辨若擬按參議取之、親王紅梅、大臣藤華、納言櫻華、參議款冬、親王及大臣料大辨若擬按參議取之、奉之皆右、此間會擬按行酒、）

（近代無此事、）

奏見參、（內辨下殿、著西軒廊壇上兀子、見見參了、參上、經座下進欵障下、付內侍奏之、先是示議所、參議下殿召少納言授之、）

少納言進庭中唱名、王卿下殿給祿、（主基）

還御（不必待王卿下殿）

〔大嘗會儀式具釋入〕巳日悠紀節會次第

悠紀儀ノ當日ハ昨日ナリ、今日モ亦行ハルトイヘドモ、其儀小シキナリ、古今共ニ然リ、

御裝束一如昨日、（不置高御座）群卿著仗座、內辨令官人敷膝突、召外記問諸史具否、次群卿起座、近衛陣階

下、出御悠紀帳、近仗稱警、群卿著外辨、(以小忌爲先、已下倣之、)政官同著床子、外辨上卿令召使下式宮、召外記問諸司具否、內辨著東廊代兀子、內侍臨檻、次內辨謝座昇殿著兀子、政官著砌下座、次開門、

貞觀儀式ニミエタルハ、今日モ昨日ニ異ナルコトナシ、江次第ニミエタルハ、今日ハ會昌應天南門ヲ開ク、今ノ儀ハ紫宸殿ニテ行ハルヽ故、承明門代トシテ南門ヲ開クコト、辰日ノ所ニ注スガ如シ、昨日ハ壽詞奏アルガ故ニ開門スルコト早シ、今日ハ壽詞奏ナキガ故ニ、開門スルコト常ノ節會ノ如ク內辨昇殿ノ後ニアリ、

次內辨召舍人、大舍人稱唯、次少納言就版、內辨宣召刀禰、少納言稱唯出召之、群卿參列、(異位重行)諸仗立、內辨宣敷尹、群卿謝座謝酒、訖昇殿著座、諸仗居、次撤御臺盤帊、內膳供御膳、次供殘御膳、次賜臣下粉熟、(以小忌爲先、已下倣之、)居訖內辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、次供鮑羹、次供御飯、次供進物所御菜、次供御厨子所御菜、次賜臣下飯汁、居訖內辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、次一獻奏和舞、(今度無此儀、)

和舞ハ今世傳ハラズ、江次第ニ見エタルハ、一獻ノ次ニ先悠紀物ヲ獻ル、但此儀ハ江次第ニモ近代ナシトミエタリ、其次ニ風俗ヲ奏シ、二獻ノ後ニ和舞ヲ奏ス、但承保ニハ一獻和舞、二獻風俗ノ由ミエタリ、貞觀儀式ノ如キハ、總テ一獻、二獻、三獻ノ定ナシ、此所ノ和儛モ一兩巡後ト記ス、今此次第ハ江次第ニミエタル承保ノ例ニ同ジ、但和舞ノ樣傳ハラザルガ故ニ之ヲ奏セズ、

次二獻奏風俗、次三獻仰御酒勅使、入御、近仗稱蹕、次群卿退下、

同日主基節會次第

近衞陣階下、出御主基帳、近仗稱警、內辨著南廊代兀子、內侍臨檻、次內辨謝座、昇殿著兀子、政官著砌下座、群卿參列、(以小忌爲先、以下倣之、)諸仗立、群卿謝座謝酒、訖昇殿著座、諸仗居、次供御膳、其儀一如前日、次一獻奏田舞、(今度無此儀、)

田舞モ亦今世傳ハラズ、昔之ヲ奏スル儀ハ、多治比氏ノ內舍人等ヲ舞人トシテ、十人舞ヲ奏ス、

但此所ノ次第古今一樣ナラズ、貞觀ノ頃ハ、先田舞ヲ奏シテ、次ニ御膳ヲ供ジ、次ニ雅樂寮樂ヲ奏ス、江次第ニ見エタルハ、御膳ヲ供ジ、一獻ノ後主基鮮味ヲ獻リ、次ニ風俗ヲ奏シ、二獻ノ後田舞ヲ奏シテ、樂人音樂ヲ奏ス、今此次第ハ辰日ノ悠紀儀ノ次第ニ同ジ、但田舞ノ樣傳ハラザルガ故ニ之ヲ奏セズ、

主基獻鮮味

今日ハ主基節會ノ當日ナレバ、主基方ヨリ之ヲ獻ツル、其鮮味ハ、梟ヲ楓ノ枝ニ附ケタルト、鶉ヲ鹿鳴草ノ枝ニ附ケタルトナリ、

行事辨率國司幷膳部、執之立庭中、次二獻奏風俗、次三獻奏御插頭、（今度無和琴）撿校國司等下殿昇之、昇階立南榮、次内辨起座奉之、

其儀及御插頭ノ花、辰日ニ同ジ、但昔ハ辰日ノ插頭ハ大臣之ヲ奉リ、今日ノ插頭ハ親王之ヲ奉ル、是互ニスル義ナルベシ、今世ハ總テノ儀ニ親王ノ出仕スルコトナシ、仍テ兩日共ニ内辨ノ大臣之ヲ奉ル、

次群卿下殿拜舞、訖復座、次賜臣下插頭、此間撿校行酒、（辨執瓶子）次内辨奏見參、訖賜少納言、次參議向祿所、次群卿下殿賜祿退出、入御、近仗稱蹕、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年十一月己卯、大嘗、　辛巳、宴五位以上于內殿、奏諸方樂於庭、賜祿各有差、

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年十一月己卯、大嘗、　辛巳、宴五位已上於朝堂、因召內裏、賜御酒幷祿、

〔續日本紀 十七孝謙〕天平勝寶元年十一月乙卯、於南藥園新宮大嘗、　丁巳、宴五位已上、賜祿有差、

〔續日本紀 二十一淳仁〕天平寶字二年十一月辛卯、御乾政官院行大嘗之事、　癸巳、御閤門、宴於五位已上、賜祿有差、

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜二年十一月癸卯、御太政官院、行大嘗之事、　乙巳、宴五位已上於閤門前幄、賜

五位已上及內外命婦祿各有差、

〔續日本紀 三十六 桓武〕天應元年十一月丁卯、御太政官院、行大嘗之事、　己巳、宴五位已上、奏雅樂寮樂及大歌於庭、授正四位上大伴宿禰家持從三位、從五位上當麻王正五位下、從五位下調使王、淨原王並從五位上、無位大伴王從五位下、正五位下石上朝臣家成從四位下、正五位下佐伯宿禰眞守正五位上、從五位下多治比眞人年主、紀朝臣難波麻呂並從五位上、正六位上中臣朝臣必登、藤原朝臣眞鷲、藤原朝臣淨岡並從五位下、宴訖賜祿各有差、

〔續日本後紀 二 仁明〕天長十年十一月己巳、是日親王已下五位以上、朝賜悠紀祿、夕主基、各有差、

〔文德實錄 三〕仁壽元年十一月癸巳、類御豐樂院宴飮、悠紀主基二國奏風俗歌舞、獻物同如昨儀、

〔三代實錄 三 淸和〕貞觀元年十一月十八日己巳、天皇御悠紀帳、賜宴群臣、主基國獻物、移御主基帳、群臣移座、及主基國奏風俗歌舞、賜主基國所獻衣被、一如昨儀、

〔三代實錄 三十二 陽成〕元慶元年十一月廿日丁巳、主基國獻物、風俗歌舞一同悠紀、自昨至今、王公已下晝夜飮宴、極歡而罷、悠紀主基並奉獻衣被、詔班賜五位已上預宴者也、

〔三代實錄 四十六 光孝〕元慶八年十一月廿四日辛巳、巳時天皇御悠紀帳、賜宴群臣、主基國獻物、未時移御主基帳、群臣移座、及主基國奏風俗歌舞、賜主基國所獻衣被、一如昨日儀、

〔貞信公記〕承平二年十一月十五日○癸巳、依神宴不能精食、未時御殿、其儀如昨、但須先奏和舞田舞後奏兩國風俗、而先奏失也、

天慶九年十一月十八日○乙巳、大嘗祭畢、還御本宮、更可幸豐樂院、而近代例從大嘗宮便幸豐樂院、爲之仍叙位儀承平例丑日行也、可依被例歟、

〔經信卿記〕治曆四年十一月廿四日○癸巳、午剋參內、右府○源師房被參、儀式如式、內府雖被參、上達部著座之後自殿參上、是先被奏事由歟、○中略今日按察不被參、仍右衛門督以下被昇御插頭臺、僕申云、昇御

插頭之人下自東階退出者、爲非參議所言歟、若上達部昇之者、下自簀可著座歟、被答云、此事難可然昨日已下自階今日不可改者、仍下自南階昇自東階復座、今日式部卿親王被參、自腋被著小忌下大臣上、（先例親王被著外座、可尋、）件親王獻御插頭、次如昨日有拜、次僕使內豎申右衞門督（被著小忌座、）云、大臣御插頭者、撿按參議所取獻也、仍經信一人者候、今一處御料誰人可獻乎、內豎還來云、他參議共可取者、是被申大臣達歟、先行事辨、（資綱、）次插頭奉李部大王、次右兵衞督幷僕下自東階、取花奉兩大臣、次々行事群卿插頭次被奏見參、僕依氣色就祿所、（西廊前、）群卿一々取之退出、今日有國栖奏、內大臣被示云、悠紀方有此奏云々可尋、

〔中右記〕天仁元年（○嘉承三年、）十一月廿三日己巳、晩頭參內、著東廊座、民部卿以下昨日公卿參集、（○中略）戌刻天皇御大極殿、右大將以下著朝集堂、北風頻吹、寒氣殊甚、仍皆人々徘徊會昌門邊、頃而開門、少納言定通來召、小忌公卿三人、外辨右大將以下著靴列立版位前、內辨宣云、敷尹、謝座謝酒著座、（如昨日儀、）供膳之後一獻、（無白黑、）二獻風俗舞、三獻仰御酒勅使左宰相中將、事了入御、公卿渡西、天皇御主基帳、內侍臨西檻召人、內辨民部卿謝座參上、（昇自南階、如昨日、）小忌外辨公卿謝座謝酒參上、（西階、）次供御膳、天皇入御、右大將稱蹕、殿下令歸著帳中給、三獻之後奏風俗舞、國司獻物御插頭臺、（撿按、民部卿、右衞門督、左大辨昇立如昨、）今日無拜、又御琴臺行事左中辨長忠朝臣、藏人少將忠宗（丹波介、）昇之、（藤宰相顯實已昇、丹波權守、尤可昇也、而於座居眠之間空過了、人々有咲氣、）右衞門督起座欲行酒之處、民部卿被止了、次奏見參、給主基祿所、藤宰相民部卿欲取祿之處、左中辨相尋史欲取祿、民部卿忩出了、行事辨取祿可奉上卿事也、（夜前行事辨爲座取之、奉上臈人々也、）次々公卿或史傳取奉之、亥時行事了、

裏書　殿下御插頭左大辨取之、入從幔代端、自御後方獻上之、或人難云、不可然云々、從御帳階可昇者、攝政同主上之故也、此事可尋知、

〔台記〕康治元年十一月十六日甲辰、節會三箇日間謝座事、（諸記不載、別記、○中略）巳日儀同辰日、但悠紀向乾立

定後揖、乍乾向再拜、乍乾向揖口、主基東向立定揖、乍東向再拜、了乍東面揖、是巳日不必可如此、大嘗會内辨希代事也、仍書三説也、但承平巳日李部王記、主基左大臣公（貞信）東向謝座由所見也、且又爲追彼例也、凡謝座有三説、西面揖乾面再拜、（第一是説稱説也）乾面揖再拜、（第二）西面揖再拜、（第三）

〔兵範記〕仁安元年十一月十七日丁巳、晩頭參大極殿、頭辨以下雲客廿餘人祇候、皆小忌有日蔭糸等、○中略亥刻主上（六條）出御大極殿、有筵道、其上敷兩面、内侍二人候劍璽、藏人候笏、○中略供御膳、賜臣下饌、如昨日、但無黑白御酒、一獻二獻、次悠紀人就中庭、奏和舞、次三獻奏風俗、次仰御酒勅使、次主上入御、次出御主基帳、（卽入御云々）次内辨參上、公卿參上、此間依時雨下、公卿廻殿北面、自西壇上被參、著御前座也、次供御膳、依雨儀、官人經西歩廊、采女自西戸供之、賜臣下饌、次一獻、次主基國司獻鮮味、次二獻、主基奏國舞、次三獻奏風俗、依雨儀、於西廊北二三間供之、次主基獻插頭、（賢木付金銀文、其上居銀洲濱臺、安金銀造物、珍重美麗、雖記筆端、有覆等、檢校上卿藤中納言、參議左大辨、行事右少辨、國司惟頼昇之、依雨儀、自西壇上昇出、立西第四間壇上也、）次和琴二帳、（白袋安机、行事辨介知康、掾兼基、時晴等昇之、立初所并開座、昇之先例云々、）次被賦插頭花、左大辨取藤花、插攝政御冠、右中辨左少辨取納言以下料、（内辨以下大納言櫻花、參議山吹云々、）

〔愚昧記別記〕仁安三年十一月廿四日辛巳、今日節會午刻可被始行之由云々、然而申終參大極殿、著東福門座、秉燭之後、右大臣參入、（參從嘉喜門）藏人大進光雅仰内辨事、大臣召大外記問諸司具否、天皇渡御大極殿云々、仍予以下出外辨、（中宮權大夫在大極殿壇上、仍以召仕可著朝集堂也、然而人雖隔示、答不可著之由、仍予以下著之、如昨日、人云、昨日不被著、今日又何事有哉云々、仍如此、）天皇出御、近衛引陣、内辨著兀子、内侍臨檻、内辨參上、開門、内辨召舍人、少納言參入、内辨宣刀禰召々、予以下參列、内辨宣敷尹、謝座謝酒了參上、供御膳、給臣下、御箸下、臣下應之、此間入御了、次一獻奏和儛、次二獻奏風俗、次三獻御酒勅使、（平相公）次入御、次公卿渡西、次内辨著兀子、主上出御、内辨參上著座、公卿列立、（今夜降從光範門前）謝座謝酒了著座、事々如悠紀、但一獻獻物、國司以下取之列立、而内辨不知其由、良久不問之、國司等退去、内辨又催遲々之由、人々云、巳列立退去了、仍不問之、有若亡歟、次二獻奏田舞、（仰左大辨催之）次風俗奏、次三獻獻御插頭和琴、其儀如昨日、次給臣下插頭、次參議就祿所、次

内辨起座見、見参、此間東方有炎上、人々起座之間、乞食亂入、甚以依狼籍、予幷右大辨起座、奇怪作法也、悠紀方未居餛飩之以前、左衛門督源宰相以内竪申参入之由、家道起座申内辨、内辨云、不居餛飩之以前、内竪不昇殿、自御後可参歟、而兩人推参者、甚奇怪事也、

〔伏見院御記〕正應元年十一月廿二日癸卯、今夜幸廻立殿、○中略　廿四日乙巳、節會如昨、及巳刻事了、今日不待侍座、小忌公卿以下謝座、大失也、

〔後山本左相府記〕延慶二年十一月廿六日乙巳、節會、亥刻著束帶、有文帶、付魚袋、飾劒紫口緒頂口以後依爲初度、内辨聊所刷也、依番長遲参彌經程、及子刻出門、○中略　入官東門、著東登廊北面座、戸西二箇間、間鋪仕座、也、職事仰内辨、予○藤原實泰、仰移端座、令敷軾、次予召大外記、問諸司、申皆具候之由、次示諸卿令就外辨、諸卿各起座出東門、自垣外南行、就南門外東腋朝集堂代幄北、以之爲外辨座、辨少納言外記史官掌召使定著座歟、此間予起座、於北幄外常戸間著靴押笏紙、香具用意、飯殺之也、更南行入登廊内徘徊、此間謹身事詳、居予右方、于時天皇登御悠紀御帳、東也、近仗稱警蹕、居胡床在東西階外、猶東西當第一間陣列也、次予廊内東行、又南行著東廊西面兀子、此間謹身列居予右方、次内侍臨東檻召之、予起座磬折微唯揖、廊内北行、此間謹身居直、又西行當戸間降砌南行、練歩到左仗南頭謝座、先西面揖、次引右足向乾再拜、次乾向揖、已上如例、畢經左仗陣前到南面東階下揖、昇階、副東欄、先右足、昇殿著座、□□座皆南庇、予著第四兀子、小忌三人在座上之故也、次上官著座、次予仰開門、又召舍人、二音、少納言菅原在雅就版、予宣刀禰召、セ、少納言退出南門召之、次外辨先小忌、先南門東扉參列、西上北面、異位重行、予宣敷居、ヘ、外辨謝座再拜、又造酒正授空盞於小忌公卿、公卿跪置笏、取盞一揖更立、外辨、予共謝酒再拜、畢酒正來跪返盞、取笏一揖、各次第北行、進昇如例、但其路經左仗前、如内辨到東階下揖昇、各著座、奥端相分如例、其座者在南庇、仍小忌一列在座上、内辨兼著第四兀子也、次予起座催御膳、御膳供間復座、次供腋御膳、次居臣下餛飩、仰參議催之、次參議申上、箸下如例、次供鮑羹御飯進物所御厨子所御菓等、但今日御厨子所不可供之由申、非也、仍預問答、次居臣下飯汁、次申上箸下、此後不供白黒、不賜臣

下、例也、次一獻和舞、(予下殿著軒廊兀子催之)二獻風俗歌舞、(新詠新樂也)三獻御酒勅使、次悠紀方事訖、小忌等揖起座、降本階(階下揖)如先、經階下渡西廊邊、予又起座降本階、(如初又副東檻、但先左足也、降階之間隨身猶可來會之由令遲來也、)更右廻揖、(此間隨身來、已降階了之間、番長一人如形追前、下臈悉不來臨之間、不能追前、)經階下渡西、此間番長以下相從渡畢、○中略予暫徘徊西登廊內、隨身群居予右方、次予以下公卿等悉降階渡西訖、

抑今日一獻之後、主上(○花園)入御、諸卿立座、先予一人稱警蹕、是大將例事也、警蹕儀只如微唯、近來不高聲、

次天皇御主基御帳、(西也)近仗稱警蹕、但大路早出、太奇怪也、次予廊內西行、又南行著西廊東面兀子、此間隨身等猶列居予左方、次內侍臨西欄召之、予起座警折微唯揖、廊內北行、(此間隨身居直)又東行當戶間降砌南行、(經西廊前也)少揀步到右仗南頭、謝座(其儀准可知之)揖拜、揖訖經右仗前到南面西階下、揖昇階(副西欄先左足)昇殿著座、(南庭第四兀子准東)次上官著座、次不仰開門、不召舍人、例也、次外辨小忌以下參列、(出自西廊南方、東上北面、異位重行、)予不仰侍座列也、外辨即謝酒、(酒正授盃、是者如先、)參上著座、皆准東可知之、次晴御膳脈御膳臣下餛飩、申上箸下如例、次供白黑、次獻物入南門列立、(行事辨國司以下引之)予問、(微顧)辨稱物名、(微)予仰仰詞、(膳部ニ給へ、微顧仰儀也、)辨以下退、次一獻田舞、次二獻風俗歌舞、次三獻立御插頭和琴臺、○中略次行酒儀略之、次予示平宰相分就祿所、(此參議無參承之儀、是例也、)惟輔卿起座降西階、經壇下到主基祿所著床子、(件床子立西廊戶內砌東庭、北面也、)次予起座著登廊兀子見參、(插杖)畢指笏取杖入壁內、直北行於北軟障西端(角也)付內侍奏聞返賜、返賜仗於外記、其次仰云、辨候哉、不候、然者祿所如何、此節會少納言所賜歟、去夜即然、予諾、仍予著登廊兀子、召少納言賜見參、次予歸昇、次小忌已下拔箸匕降西階、(此時隨身等經階下來會、各警前聲、予副西欄先右足降階也、)東左廻揖、經壇下到西廊砌內、自廬幕北突膝賜祿、乍居即向小拜、即立出登廊北面戶、放笏紙脫靴著淺履廻北方、(不撤插頭花)予時寅半剋歟、

〔永和大嘗會記〕廿五日、(○永和元年十一月)けふは巳日なり、悠紀主基の節會きのふの如し、內辨左大臣、外辨

德大寺大納言、○中略風俗田舞やまと舞など云事あり、皆神代の風俗也、

〔康富記〕永享二年十一月廿日丁巳、主基節會也、戌刻許著朝衣、參官陣座幷床子座、○中略兩局務四品都事等被候床子、次少納言爲清朝臣來著、人々無勤座、次右中辨同著之、官務以下各勤座、次左少辨加著之、兩局務勤座、四品都事獨不被勤座、依上首辨在座也、寅刻左大將信宗卿、大炊藤中納言、行光葉室中宗豐洞院中、實熈兩相公羽林定親季保等歟令著仗座給、頭右大丞來仰内辨事於左幕下、次内辨移端、以召使召大外記師世朝臣、被問諸司、次諸卿起仗座、經床子前、有揖如常出東門、向外辨、先之小忌卿相三人不候仗座、出自殿上方、經東門出外辨、少納言著之、辨不著之、予刻限出東門、廻築地外辨幄東南著外辨、深沓不用意之間、用淺沓史盛久小忌加予下、召使行寛著予後床子、上下著座儀如昨日、無召仰者也、次天皇○後花園御悠紀帳、次内辨於東福門代下、令隨身押笏紙、其由也、被取替之、著靴著昭訓門前兀子、西面次内侍臨檻、内辨謝座昇殿、次官務幷四位史局務二臈予盛久員職等著階下、二列如昨、五位自前著之、六位自後著之、局務外史者召使等向直之例也、延慶記曰、五位外記者召使取之、置座後、五位史者官下舎人取之云々、次開門、闈司不著次内辨召舎人、少納言就版、内辨宣刀禰召、次外辨卿相小忌爲先列標下、内辨宣敷尹、造酒正授空盞於小忌上首、諸卿著座酒之後昇殿、次供御膳、脧同之、參議季保卿下殿、仰外記了、已下雜事每度件觸被催之給臣下膳、不供白黑、或次第幷仁安三巳日記曰、悠紀御膳不供白黑、御主基帳時供之云云、如何、式次第等不供白黑之由被載之、造酒司兼日有沙汰、今日一向不供之云々、次一獻如常、次和舞、内辨下殿被催之、親種承之内舍人著小忌可奏風俗也、而如尋常伶人、仍局務口入之後令引出、如形表其由了、次二獻、次悠紀國司右中辨率歌人、常樂人舞人也奏風俗舞、内辨被催之次三獻、次御酒勅使、分配親種付參議定親卿進之、次天皇入御、次王卿渡西、次天皇御主基帳、次内辨著光範門前兀子、東面次内侍召人、内辨起座東行、降西華門前階、徐行、至右仗南頭謝座、昇西階著廂兀子、上官不著階下、略之、次小忌大忌公卿列標下、不召舍人、不仰侍座、兩謝之後昇殿、次供晴脧御膳、給臣下、次一獻、有獻物事、如昨次奏田舞、多治比氏供奉云々、其體人數已下同侍舞、秀國亦在此列、次二獻、次奏風俗、主基行事左少辨引率舞人、如悠紀、次三獻、次撿挍中納言參議右中辨等昇御插頭臺、大納言早出之間、悠紀辨加之昇壇上、先兼儲之於西

廊東庭、兩方辨史四人昇之到砌下、次兩方行事辨史昇和琴臺、昇中階西折、置插頭臺西退、御插頭役者如昨歟、(但室町殿今日雖有御參入、不令候御拜給、此間主上入御、攝政御早出云々、)撿挍行酒、昨今兩日被略之、次內辨著西廂兀子、召見參、二臈外史進之、內辨披覽之後出西華門、就後房被奏之、內辨歸兀子下、返給見參於外記了、少納言早出之故也、先之中山宰相中將、左少辨史員職等著祿所床子、(在光範門東庭、參木北、辨史南、以上北面重行、)次內辨已下各賜祿、官務四位史局務六位親種等同取祿退出、于時昧旦也、先之予早出、室町殿御祿物、翌日左少辨被持參御休所云々、○中略今夜節會以前、於室町殿御休所、(後房乾)被奏應申攝政殿下也、三傳奏近習人人群參之、酒醋及俳優音曲、亦刀自得選等應召預恩祿云々、

〔友俊記〕寬延元年十一月十九日巳、主基の節會おこなはる、○中略群卿仗座につき、內辨官をして軾を敷しむ、外記さし召て諸司の具否をとふ、群卿座を起、近仗階下に陣し、悠紀帳に出御、○中略近仗警を稱す、群卿外辨につく、小忌を先とす、已下これにならふ、政官同じく床子につく、上卿召使をして式の筥を下す、外記をめして諸の司の具いなやを問ふ、內辨東廊代の兀子につく、內侍おばしまにのぞむ、內辨謝座、殿に昇りて兀子につく、政官外記史砌下の座につく、次に開門、內辨舍人をめす、少納言版につく、內辨刀禰をめす、少納言唯々して出て召す、群卿參列、異位重行、諸仗たつ、內辨敷尹と宣ふ、群卿謝座謝酒、をはりて昇殿座につく、諸仗居す、御臺盤の杷をとる、內膳御膳を供す、脇のおものをすゝむ、臣下に粉熟をたまふ、小忌を先とす、已下これにならふ、居畢て內辨天氣をうかがふ、御箸鳴、臣下是に應ず、蝕のあつもの、御はん、進物所の御菜、厨子所の御菜を供じ奉る、臣下飯汁居をはる、內辨天氣をうかがふ、御箸なる、臣下それに應ず、一獻倭舞を奏す、(今度其事りやくす)二獻風俗を奏す、三獻御酒の勅使入御、近仗蹕を稱す、群卿退下、

主基の次第は、近衞階下に陣し、主基帳に出御、近仗警を稱す、內辨西廊代兀子につく、內辨謝座謝酒、殿に昇りて兀子につく、政官砌下座につく、群卿參列小忌を先とし、已下これに准らふ、群卿謝

座謝酒、畢て殿に昇座につく、諸仗居す、御膳をくうす、其事ひとつに前に同じ、次一獻田舞を奏す、（今度これを略す）主基の鮮味を獻す、行事辨圖づかさ幷膳部をひきゐて庭中にたつ、次二獻風俗を奏す、次三獻御插頭を獻る、（中略）此間撿挍行酒、內辨見參を奏し、畢て少納言にたまふ、參議祿所にむかふ、群卿殿を下りて祿をたまはり退出、入御、近仗蹕を稱す、

〔壬生家記〕明和元年十一月十日、巳日悠紀主基節會也、巳刻著朝衣參仕、午刻許殿庭鋪設可設之由有命、午下刻許被始陣、直ニ被始節會、臣下插頭昇立之事、昨夜命無之處、今夜同有命之間、其後可昇立之由庭田前亞相（○重熈）被示之、鮮味列立之事、先達而被相定之由以切紙被命事、酉半刻悠紀節會了、戌半刻許被始主基節會、子過刻事了、

〔行厚記〕文政元年十一月廿三日、巳日悠紀主基節會也、予行事史參勤ニ付、辰刻著綫著小忌、如卯日參仕、分配史春芳（著行事小忌、昨日兼揖參勤之代也、）參勤、

一御裝束一如昨日

一先悠紀節會御始未半刻

一悠紀帳出御（○仁孝）不被爲在

一東廂座右大臣（政通公）、右大將公修卿、新源中納言基豐卿、新宰相明光卿著座也、

一外辨權大納言經久卿已下著座、（爲小忌先）次少納言宣明朝臣、右中辨光成、次ニ左少史春芳、權少外記中原康昌、次ニ史生官掌召使等著座、一如昨日、（但今日依無御奏、公卿以下最初ヨリ著靴也、）

一政官著砌下座、如昨日、但予依爲主基行事不著此座、兩局許著座也、

一獻奏倭舞、悠紀行事式部少輔寬貞朝臣、兵庫頭定賢、大監物賀茂氏清等引率之、（自日華門出入）二獻奏風俗、三獻仰御酒勅使、次群卿下殿渡西、此間御休息アリ、

一主基節會御始、主基帳出御、內辨謝座昇殿著座、次政官著砌下座、兩局左少史春芳等著之、群卿參

列、謝座謝酒了昇殿著座、入御、(公卿昇殿之後)次供御膳、次一獻奏田舞、主基行事治部少輔常清朝臣、左京亮宗峻、宮内少丞紀重増等引率之、(自月華門出入)主基供鮮味、右中辨光成引率之、次二獻奏風俗、次三獻獻御插頭、(○下略)

〔實久卿記〕嘉永元年十一月廿三日癸巳、今日巳日節會也、酉終刻於朝餉著御御服出御、(○中略)次御遊、天明事了、(○節略)

〔壬生家記〕嘉永元年大嘗式

巳日、辰刻御悠紀帳、其儀一同辰日、群臣一兩巡後、悠紀人入門、就中庭左幄奏和舞、(十人共舞)訖退出、未刻御主基帳、其儀同上、即國獻物韓櫃列于殿前庭、供御膳、次主基人等入就中庭右幄奏田舞、(十人共舞)訖退出、次薦御膳、次獻御插頭和琴等、酉刻賜祿、同辰日儀、

〔代始和抄〕大嘗會事

巳の日の節會には、やまと舞、田舞などいふ舞を奏す今日清暑堂の御神樂あり、清暑堂は入省院の十二堂の其一也、大極殿にて行はるゝ時の名也、官廳にて行はるゝ時は、渡廊を以てその所とす、しかれどもなほ清暑堂の御神樂といひつけ侍る也、主上は御束帶にて簾中の大床子の御座に出御あり、執柄大臣そのほか所作の人ばかり著座す、節會に參する公卿は、小忌を著してかざしを撤せず、神樂ののち御遊あり、神樂の曲は綖合、阿知女、榊星三首、朝倉等也、御遊には安名尊、伊勢海などつねの如し、或はつけ物などあり、

○按ズルニ、清暑堂ハ、豐樂殿ノ後房ニアリ、本書入省院ニアリトスルハ誤ナリ、

〔北山抄五〕大嘗會事

巳日、(○中略)御清暑堂有御遊事、(寛平式云、此時更有曲宴、賜親王以下御衣、此權宜也、不爲恒例、)其儀、堂中間設御座、右立置物御机、御後及兩邊施屛風、軒廊雙行設王卿座、其南横敷侍臣座、(天慶九年例如之、承平二年、堂東隔戸内立大床子、其後立御几帳、帳隔内北頭施御屛風、其

（南對敷王卿座、王卿西、東、歩廊設侍臣座云々、）宸儀御御座、殿上王卿依召著座、（承平、參議實頼朝臣召之、又左大臣右大將先侍座、天慶右大臣先候王卿次參、藏人使喚臣）召之、（云々、）即給酒肴、（穀倉院儲衝重、）并賜管絃器、（寛平殿上記云、召悠紀主基御琴各一面、）先彈倭琴唱神歌、次變調、奏律呂歌、（天慶右大臣供御酒、）（伊與守師氏朝臣把銚子、重明親王勧盃大臣云々、）給王卿侍臣祿有差、（承平、賜王卿御衣各一襲、天慶、親王大臣御下襲表袴各一重、參議白細長袴、侍臣疋絹云々、）

〔江家次第（踐祚十五）〕大嘗會

巳日

行事藏人裝束清暑堂（不改御帳臺、出御、王卿調、）

出御、（不改御會屋）關白先候東座、

令藏人召王卿（頭若五位藏人、上古有公卿召例、近代不然、）

參上著座（拍子合卿相分著左右、）

次召侍臣堪絃歌者（參入著座、先例上卿座次催切數之、而治暦左右相分著之、若侯可有本末歟、承保催切、）

次召御遊具（置御前、給庭、）

次唱神樂歌（先和琴、次笛、次篳篥、次拍子、次取物、賢木、幣、杓、韓神、）

次給公卿衝重、次坏酒一行、（藏人頭勧盃、五位二人取瓶子、右左、）

次左井波利

此間供御膳（御臺二本、采女陪膳、大納言陪膳、承保顯房卿小忌、依無他大納言也、）

次左井波利了、亦坏酒一行、

　公卿二人勧盃（左右、殿上五位執瓶子、）

次朝倉　其駒

次召御遊具（箏琵琶笙）

次合笙　先吹調子（次御遊具等同調）

次拍子（安那多不東、眞山、鳥急、承保武德樂、）

次給レ祿

親王大臣（半臂下襲）關白（加二表袴一）大中納言（紅打衵一重）參議（表袴、以上四位以下役、）召人（四品、六位役之、）

次入御

〔大嘗會儀式具釋　八〕巳日悠紀節會次第

行事藏人裝二束清暑堂代一（今度無二出御一）

清暑堂ハ昔豐樂院ニアリ、則辰巳兩日ニ御セラルヽ所ニシテ、御神樂モ此所ニテアリ、今ハ豐樂院ナキガ故ニ、兩日ノ節會ハ紫宸殿ニテ行ハレ、御神樂ニ至リテハ、内侍所ノ御廊下ヲ清暑堂代トシテ行ハル、但此時ノ御神樂ノ儀、貞觀ノ頃ハミエズ、江次第ナドニハミエタリ、其儀ニハ、天皇出御アリテ御膳ヲモ供ズ、今度ハ出御ナシ、

次御神樂（無二御遊儀一）

昔出御アリテ、御神樂幷ニ御遊アリシ儀ハ、江次第ナドニミエタルガ如シ、今ハ出御モナク、御遊モナケレバ、其儀比スベキニ非ズ、唯事ニ堪タル公卿侍臣幷ニ伶人神樂ヲ奉仕スルノミ、

〔三代實錄　三清和〕貞觀元年十一月十七日戊辰、是夜天皇留二御豐樂殿後房一、文武百官侍宿、親王已下參議已上侍二御在所一、琴歌神宴、終夜歡樂、賜二御衣一、　十八日己巳、是夜天皇留御、親王已下百官侍宿亦如レ昨、

〔三代實錄　四十六光孝〕元慶八年十一月廿三日庚辰、是夜天皇留二御豐樂殿後房一、文武百官侍宿親王、已下參議已上侍二御在所一、琴歌神宴、徹夜歡樂、賜二御衣一、　廿四日辛巳、是夜天皇留御、王公以下百官侍宿亦如レ昨、

〔貞信公記〕承平二年十一月十五日（○癸巳）還二御清暑堂一、後召二親王公卿一、公卿聊有二管絃興一、賜レ祿、

〔經信卿記〕治暦四年十一月廿四日○癸巳今夜御神樂也、御裝束之間、人々被候殿上、御出之後有召被參神樂、朝所長押上裝束御座、大床子御屏風置物机等如例南廊殿疊二行、爲上達部座、左右長押居燈、西方式部卿親王民部卿以下、東方三公以下、次召堪管絃殿上人々幷御和琴笛等、本拍子民部卿、末左衛門督、上官衛重勸盃事等、次又獻御菓子、大納言爲陪膳、御神樂了各賜御衣、時及卯剋、

〔中右記〕天仁元年○嘉承三年十一月廿三日己巳、晩頭參內、○中略依可有御神樂事、人々廻大極殿西面方、小安殿南廊供御裝束、馬道間供御座歟、其前垂御簾、左右立燈臺供御燈、幼主御時不供御燈、仍先例垂御簾也、南廊皆敷指筵、東西壁下敷疊爲公卿座、對座、每柱打燈臺供燈、大極殿壇程北東西行鋪殿上侍臣座、○中略世稱清暑堂御神樂、是豐樂院後房名也、及後冷泉院御時、於清暑堂有此事、豐樂院有事後、此兩三代於小安殿南廊有此宴也、

舊神樂譜云、昔貞觀御時神宴之日、被撰定神樂歌者、若是此御神樂之事歟、彼時磯等前ト云歌、依有禁忌不被歌云々、此事可尋知、依何詞哉、然而其後又歌也、

信業、故堀川右大臣殿○藤原頼宗二代執此拍子給、又大宮右大臣殿○藤原俊家二代同勤仕、今度按察中納言○藤原宗通下官○藤原宗忠共承彼末葉、執此拍子、爲道爲家面目之極歟、就中寛治之初、與彼納言共爲五位少將候此神宴、未經幾程共昇納言、皆執拍子、一家光美、千歳勝事也、又信通、宗能伊通陪此筵、家之繁昌誠是傾感、抑奉此事總一兩月、未練之間、今夜無指失之上、絲管之聲自然叶時、神明所感定有冥助歟、萬人乘興歎樂無極、

〔讃岐典侍日記〕下院○白河よりせいそ○清暑堂のみかぐらには、すけ二人さき〳〵も參ると仰られたるに、一人ぞ辨のすけまゐる、○中略御神樂の夜○天仁元年十一月廿三日になりぬれば、事のさま內侍所のみかぐらにたがふ事なし、これは今すこしいまめかしくみゆる、みな人たちをみのすがたにて、おかひもかけ、日蔭のいとなどなまめかしく見ゆるに、かざしのはなの有さまみな臨時の祭みる

心ちする、皆座につきておの〳〵すべき事どもとり〳〵にせらるゝに、殿も本末のひやうしとり給ふぞうるはしき、ひのそうぞくなる殿は、今すこし人たちの座よりはあがりて御さじきなれば、それにゐさせ給ひたり、つがひのかざしの花さゝせ給ひたる、みるにさまかはりてめでたき、もとのひやうし、おせち中納言〈○宗通〉の子の中將のぶみち、こと、そのおとゞのびちうのかみこれみち、ひちりき、あきの前司つねたゞ、あまたゐたりしを、事ながければかゝず、かくて御神樂はじまりぬれば、もとすゑのはうしの音さばかりおほきに、たかき所にひゞきあひたり、聲きゝしらぬ耳にもめでたし、みかぐらやう〳〵はてがたになると聞ゆ、せんざい〳〵萬ざい〳〵とうたふこそ、あまてる神の岩戸にこもらせ給はざりけんもことわりと聞ゆ、

〔兵範記〕仁安三年十一月廿四日辛巳、藏人光雅六位基光等奉仕神宴、御裝束以前廊四ヶ間准清暑堂也、〈○中略〉次攝政殿〈○藤原基房〉召藏人光雅被尋仰事具否、次主上〈○六條〉出御大床子、次殿下令著座給、次召藏人頭右中將實守朝臣、被仰可召公卿之由、頭中將示諸卿、〈○中略〉參入自西面南戶、依次著座、右少將通能朝臣、左近少將定能朝臣、土佐守雅賢、應召候橫座、次召御遊具、御笛〈小水龍〉笙〈小螺〉大笛箏篥〈巳上〉納御笛筥、〈薫、拍子不見、如何、〉箏琵琶〈玄上〉和琴〈鈴鹿〉巳上殿上五位四人持參之、〈○中略〉次神宴始、〈○中略〉事了有御遊、右大臣彈琵琶、家通卿吹笙、兼雅卿彈箏、資賢卿取拍子歌催馬樂、〈阿奈尊、美山、伊勢海、〉御遊畢公卿以下賜祿、

〔玉海〕元曆元年〈○壽永三年〉十月廿八日癸未、入夜藤中納言定能卿來、〈○中略〉語云、清暑堂御神樂可候末拍子之由仰下畢、其子親能可口篳篥、父子勤仕一座之役、尤足自愛、加之故季行卿其身爲散三位勤此役、本拍子公能公也、〈于時大納言右大將〉今又定能備納言勤仕同役、其役雖異、其官已高、又今度本拍子內相府、〈○藤原實定〉卽公能息也、彼者大納言右大將也、是者內大臣左大將也、云本云末、其藝雖繼父、其職高於父、自愛之處有興有感云々、所云旨尤可然、

〔中務內侍日記〕廿二日〈○弘安十一年十一月〉　ことはてゝ、たかみくらよりわした所へなりぬ、せいしよ堂の

御かぐらは御代のはじめの御いのりなれば、ことに君もしんも御神事にてもてはやし給ふことなれば、そさの人かねてよりその人々とさだめられてみなまゐりぬ、御かぐらの御しやうぞくはてゝ、出御なりてはじまりぬ、ものゝねすみのぼりて、げんしやうの御ばちおと、ことにひゞきのぼりて、わごんのしらべ、もとすゑのひやうしにあはせてかきなす、おもしろくやさしきに、ふるめかしなど申もおろか也、八そぢにあまりたるさねたかの二位の聲の色、むかしゆかしくおぼゆ、ときどききえ返てとしのしるしとかすかなるをりにも、げんしやうの御ばちおとにまぎれて、おもしろくやさしくきこゆ、やうやう御かぐらもはつれば空もあけぬ、神ぎくわんもことにちかければ、なうしうし給ふらんとおぼえて、心のうちに、

君が世を千代のはじめといのる哉神のつかさのちかきたよりに、御神樂はてぬれば、人々ろくたまはりていでぬ、をみのすがたあくる日影にかゞやきて、やさしくみゆ、

山あゐの色やことはりにみだるらん日影うつろふをみのころもで、

〔萬一記〕正安三年九月三十日、淸暑堂神宴拍子合日次、相尋陰陽頭在秀朝臣、　十月一日、參殿下内覽條々、

大嘗會條々

淸暑堂御神樂、兩院殿下拍子合日次事、仰、閑食畢、殿下拍子合、關白時被略之例多歟、被行者宜房可申沙汰、

十三日、參院條々奏之

淸暑堂御神樂殿下拍子合事、仰、關白之時多被略之、今度可被略、

廿七日、拍子合條々、

其所事

中入云、保安□□九月廿五日、於南廊被行之、同廿八日、如一夜云々、十月廿八日、於東對行之、仁安三年於透渡殿被行之、今度此御所透渡殿院御方人歟、於何所可被行哉、仰云、一御所之上、通用常事也、可爲透渡殿、

〔實躬卿記〕正安三年十一月五日庚子、今夜清暑堂御神樂、法皇御方拍子合也、及子刻事始、於透渡殿有此事、（西對座、各敷座、上臈）以寢殿東面妻戶爲兩御所（法皇、上皇、）御在所、〇中略催馬樂之時、殿上人可止助音之由被仰下宗冬卿、冬定猶可助音之由再三雖申子細、猶以不許、及曉天事了、樂器五位殿上人等置之、藏人少輔宣房奉行也、　十日乙巳、今夜院拍子合也、爲聽聞參候、子刻事始、御所御裝束儀、如五日、法皇拍子合、但上皇可有御所作之間、寢殿西面妻卷御簾爲御所間、先出御、〇中略朗詠二首、（嘉辰、令月、德是、）前相國時々助音、殊勝之儀也、御隨身於砌下立明、□□重下毛野武勝、秦久風等也、（各布衣、）歌□大略如一夜云々、　廿二日丁巳、今日主基節會也、〇中略清暑堂御神樂、天晴之後被出御、（御烏帽子、直衣、）次人々參著透渡殿、〇中略樂器等五位殿上人持參之、御笛宮前相國傳取進入御所、（□□被召入此笛、此事保安鳥羽院御所作之時、於當座被召大神基□笛、此例云々、）即被遊御笛、韓神了被返下、笛於大理隨御氣色、兼季卿參上、跪相國前、依御目直參進給之退出、神樂之間無御所作、□□之時又被遊之、今度別御笛□□催馬樂了被始行云々、〇中略御膳陪膳春宮大夫、役送實任朝臣、定宗朝臣、獻盃定房朝臣、韓神獻盃別當高倉宰相云々、今度歌樂等被用仁治例、院拍子合被用文應例、仁治無此事之故也云々、

〔徒然草〕上元應（〇後醍醐）の清暑堂の御遊に、玄上はうせにし頃、菊亭のおとゞ（〇藤原兼季）牧馬を彈じ給ひけるに、座について先柱をさぐられたりければ、ひとつ落にけり、御ふところにそくひをもち給ひたるにてつけられにければ、神供のまゐる程によくひて、ことゆゑなかりけり、いか成意趣かありけん、物見けるきぬかづきのよりてはなちて、もとの樣におきたりけるとぞ、

〔永和大嘗會記〕廿五日、（〇永和元年十一月）けふは巳の日なり、〇中略清暑堂と申は、大極殿にありし堂の名な

り、今はそれも名のみにて、後房の渡廊を其所に准せられておこなはるゝなり、主上〈〇後圓融〉御倚子につかせ給ふ、御かざし御冠にあり、大殿關白は御後に候せらる、本拍子綾小路前宰相敦有、末拍子源宰相義賢、付歌中御門宰相季輿朝臣、信俊朝臣、資守朝臣、信俊朝臣、笛帥實音、篳篥前兵部卿象親、和琴大炊御門大納言宗實、御神樂の程あまりに雜人おほくてきゝもわかれず、そののち御遊あり、笙大宮前大納言實尙、琵琶前右大將公直、箏新宰相中將季顯なり、いとおもしろく、御賭のはいせん大炊御門大納言なり、事はてゝ祿どもたまふ、これも次日の酉時ばかりにはべりしやらむ、

〔花營公記〕廿三日、〈〇應永二十二年十一月〉巳の日主基の節會なり、〈〇中略〉其後淸暑堂の御神樂あり、淸暑堂と申は豐樂院の九堂のうちなり、むかしは大極殿のせちゑの儀はてゝ豐樂院に行幸なりて、此堂にて神宴を行はれけるにや、官廳にては後の登廊をその所に准せられておこなはるゝ也、〈〇中略〉主上〈〇稱光〉大床子の御座に出御あり、御かざしを撤せず、諸卿又これにおなじ、たゞし御くたびれによりて、やがて御入あるべきあひだ、御賭などもりやくせらるべきよしかねてよりさたありて、その用意にも及ず、〈〇中略〉次に勸盃あり、頭辨時房朝臣盃をとりて關白〈〇藤原經嗣〉にすゝむ、內藏頭敎豐朝臣、內大臣殿〈〇足利義持〉にすゝめまゐらす、五位殿上人瓶子をとり、西東の座をなして次第に巡流す、この勸盃、先例は藏人頭にて兩方おゆむりうあれども、この度は關白の盃を內大臣殿へさし申されん事びんなきによりて、かくべちに內藏頭勸盃をつとむ、これは臨時の故實に關白かねてより定めおかせられけるとかや、勸盃はてゝ內大臣殿御退出あり、〈〇中略〉關白の祿頭辨直廬にもちてまゐる、內大臣殿の御直ろへも頭辨もちて參る、大臣には大うちき一かさねなれども、これもたゞ一領なり、

〔椿葉記〕霜月〈〇永享二年〉十六日より大嘗會おこなはる、十四日より官司へ行幸なる、〈〇後花園〉室町殿〈〇足利義教〉

數れん日御まゐりありて申おこなはる、清暑堂の神宴は管絃に携はる人も、譜代その人を清撰せらるゝ事なれば、たゞ氏の人このえんにあふことはありがたき事なり、園中納言(基秀○藤原)は先祖にも神宴にあひたる事はなし、たうじその人なきによりておのづから所作し侍るこそ、みちのみやうがとはおぼえ侍れ、笛は中山宰相中將定親なり、名物の柯亭を出さる、こん度のためにや、故親王まゐらせおかれけんとふしぎにぞおぼゆる、

〔友俊記〕寛延元年十一月十九日巳、主基の節會おこなはる、(○中略)行事藏人清暑堂代を裝束す、今度は出御なし、(圖)○(挾)次に御神樂をおこなふ、御遊のことなし、

〔壬生家記〕明和元年十一月十日巳日、悠紀主基節會也、(○中略)丑半刻被始御神樂、中立已後予内々早出、清暑堂御神樂散狀、自奉行兩局出納一紙被出之、(公卿依故障多之由有斷)

〔壬生家記〕文政元年十一月十五日、院(○光格)御拍子合備忘、

先諸卿著公卿座、殿上人候殿上、刻限出御簾中御座、次奉行院司奉仰召諸卿、(候殿上前)次諸卿著透渡殿圓座、次堪事殿上人參著簀子、(北上東西)次地下召人入中門著砌下座、(北上東面)次五位殿上人持參御遊具、先置笛筥蓋上﨟座前、(以切目向其人)先是於殿上邊樂器乞取、其所作人盛之、若第一人雖爲絃所作猶置之、於殿上人器者不盛之、次琵琶箏和琴等持參、隨所作人座次置之、(於殿上小庭邊、藏官所衆等傳之)次取下笛筥蓋、次神宴、次御遊、次殿上人退出、(公先下﨟)此間地下召人退出、次取上笛筥蓋、次撤御遊具、(本役人參進撤之、先笛筥蓋、次絃)若爲所狹少者自末撤之、次公卿退出、(爲先下﨟)次入御、(○中略)

清暑堂神宴、朝倉唱我君說事、

わがきみは千世にや千世にさゞれいしの

此詞相用候、近例清暑堂神宴連綿相勤候、仍今度如此相唱候、(○中略)

去夜は、朝倉に我君の說と申ことを仕候、此說清暑堂に用候ものにて候や、仕候こと葉か、

豐明節會

玉體あんおんに、御延命長久のこと葉にて候程に、殊更仕て候、

院中拍子合用此說候、先例不相知、先年も不用候間、今度も不相用候、今度令月蓬萊山之祝言相唱候得者、尤恐悅仕候、

俊資

〔壬生家記〕嘉永元年大嘗式（〇事明）

巳日、〇中略亥刻御後房、有曲宴事、（依貞觀故事、雖非其意、開淸暑堂神宴、）

〔代始和抄〕大嘗會事

午の日は豐明の節會なり、久米舞、吉志舞などいふ舞を奏す、節會にはいづれもみな內辨外辨あり、悠紀主基とて、辰巳の日は東西にわたりて二度づゝ行はる、豐明の日はたゞ一度なり、儀式などは次第日記等に見えたり、しばらく大概をしるす也、

〔大嘗會便蒙下〕午の日に豐明節會といふ事あり、是は大嘗の禮畢りぬるから、群臣を遊宴し給ふ儀也、けふは紫宸殿に高御座を飾りて、天子是に出御あり、內辨の行事、群卿の進退、供膳の次第等以下、常の節會に異なる事なし、只三獻の後に吉志舞を奏す、昔は大嘗一會の間にあまたの歌舞あり、今は辰巳兩日四度の節會に各風俗を奏し、豐明節會に國栖奏と此吉志舞とばかり也、但此舞も傳はらざるよしにて、只伶人數輩巡廻するのみ也、大嘗一會の儀式、此豐明節會にて事畢る、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

午日卯刻、撤悠紀主基兩國帳、所司裝飾高御座、構舞臺於殿前、（自殿南階南去十一丈七尺、高三尺、方六丈、）設樂人幄於舞臺東南角、（南去八許丈、東去二許丈、）中務省舞臺北四丈、置宣命版、南去一許丈置尋常版、掃部寮立位記案於版東西、（自尋常版南去四尺、東折一丈、立親王位記案、南去七許尺、立三位已上案、南去七許尺、立四位已下案、兵部在西准之、）所司預辨御膳並群臣饌如常、辰刻賜可敍人歷名於內侍、內侍臨東檻授大臣、大臣喚內豎宣、喚式兵二省、二省丞各一人參入、大臣賜歷名、令召計、時刻皇帝出自淸暑堂、遷御豐樂殿高御座、內侍置位記筥於大臣之座前、卽臨東檻喚大臣、大臣

稱唯、到左近陣西頭、謝座升自東階就座、次皇太子升自同階至座東、西面謝座酒就座、所司開儀鸞豊樂兩門、闈司二人分坐逢春門南北、(掃部寮預設座)大臣喚內豎二聲、內豎共稱唯、大夫(元爲內豎者)一人趨立左近陣西頭、大臣宣喚式部省兵部省、稱唯退出喚之、式兵兩省輔稱唯、入自逢春門立左近陣西南頭、(若多位記筥者、丞等相從)大臣喚式部省、輔稱唯、升自東階、受位記筥復本所、(若可叙三位已上者、以初所受四位已下筥授丞、更升受三位已上筥、兵部亦同)大臣喚兵部省、輔稱唯升同階受位記筥復本所、依次直進置机上(兵部渡鞄道置之)退出、次大臣喚舍人二聲、舍人共稱唯、少納言代之、入自逢春門就版、大臣宣喚大夫等、少納言稱唯、出自儀鸞門喚之、親王已下依列稱唯、(小齋人先、群臣次之、下同、)參議以上一列入自儀鸞門東戶、比入門諸仗共起、次五位已上左右相分入、(並用東西戶、)式部錄二人左右相分、進立屏內互稱容止、次六位以下入、省掌亦稱容止立定、(並北面、異位重行、在東者以西爲上、在西者以東爲上、)大臣宣侍座依列、稱唯、謝座酒就座、訖諸衞共居、次內記以宣命文進大臣、大臣執奏之、訖大臣喚堪宣命參議以上一人授宣命文、受即復本座、次式部兵部兩省、率可叙位者、分入自儀鸞門東西(諸仗起)立於中庭、皇太子立座東西面、次親王以下共降立、(參議以上下殿、到左近陣南三丈、西面北上立、四位已下見參議以上下殿、則應之俱下、升同、但宣命者獨座、四位已下降立堂前、各東西去堂二丈、若大臣預叙位者便往就列、)宣命大夫下殿、進就版宣制、其詞云、天皇(我)大命(良麻止)勅大命(乎)諸聞食(止)宣、皇太子先稱唯、次親王以下共稱唯、皇太子先再拜、次親王已下共再拜、更宣云、悠紀主基(爾)奉仕(留)兩國(乃)國司等、日夜無怠事(久)務結(利)勤(之久)奉仕(留)依(天)治賜(布)、又奉仕人等中(爾)其仕奉(留)狀(乃)隨(爾)治賜人(毛)在、又御意(乃)愛盛(爾)治賜人人(毛)一二在、故是以冠位上賜治賜(波久止)詔天皇(我)大命(乎)衆聞食(止)宣、皇太子先稱唯、次親王以下稱唯、訖皇太子先再拜、次親王以下、(小齋先拜)宣命大夫復本座、親王以下亦復本座、式部就案依唱叙之、兵部亦如之、(輔叙親王、大輔叙三位以上、少輔叙五位以上、但叙親王者親王先入、次式部輔、其叙畢親王先出、次親王拜舞退、)訖兩省退出、次被叙人等相近馳道拜舞、(不必待二省出門)訖退出、諸仗居、爰式兵兩省丞入自逢春承秋兩門、執筥退出、訖掃部寮分入自同門、撤位記案、次新叙人親族下而拜舞、訖復本座、所司益供御膳、(其御器帳用兩國設)親王以下諸仗共起、次主膳監益供東宮饌、大膳職益送群臣饌、一觴之後、吉野國栖於

儀鸞門外、奏歌笛、幷獻御贄、訖伴佐伯兩氏、率舞人入自儀鸞門、左伴氏、右佐伯氏、五位已上相分而列、就中庭床子、所司預設奏久米舞、廿人二列而舞、訖退出、次安倍氏人五位已上相分而列奏吉志舞、出入門並人數行列等同久米舞、訖退出、次悠紀主基兩國司、率歌人歌女入同門東西戸、就左右幄、奏風俗樂、歌舞一曲退出、次奏大歌並五節舞、訖皇太子先起在座後、次小齋親王已下五位已上下殿堂列立、參議以上自左近陣南三丈、更西折一丈、西面北上、四位以下立各堂前、去堂二丈、次大嘗親王以下、又下共拜舞也、次治部雅樂率工人奏立歌、訖退出、次掃部寮立祿床於舞臺南、次神服女四人於舞臺北、供解齋和舞、○中略於是外記錄皇太子見參、式部省進親王五位以上見參文、外記受之計會、更寫一通、副祿法進大臣、內記亦進宣命文、大臣執奏之、又定堪宣命參議以上一人奏之、畢大臣喚宣命大夫付宣命文、受之復座、次以見參文付參議一人、受之就賜祿座、皇太子先起座在座後、次群臣下而列立如常、訖宣命大夫下殿就版、宣制云、天皇我詔旨良末止宣不大命乎衆聞食止宣、皇太子以下稱唯再拜、更宣云、今日波大嘗乃直會乃豐樂聞食日爾在、故是以黑岐白岐乃御酒赤丹乃穗爾食惠良岐罷止爲氏奈毛常毛賜御物賜久止宣、以次稱唯俱拜舞、宣命大夫復座、皇太子以下各復座、式部輔二人執札左右相分、立版南唱親王以下名、以次稱唯、進受祿再拜退出、乘輿還宮、

〔延喜式踐祚大嘗祭七〕午日卯一點、卸兩國帳、所司裝束尋常御帳、辰二點御此帳、召五位以上及六位以下、參入同前日、四點叙位兩國司及氏人等、叙位人數依勅召分、已二點所司薦御膳、其器並雜具者、便用前日兩國所供御膳之具、奏久米舞、吉志舞、申一點奏大歌並五節舞、三點供奉解齋舞、○中略酉二點皇太子已下五位已上給祿各有差、又諸司六位官以下及兩國驅使丁以上給祿、神祇伯大副、及齋部少副以上加給馬一疋、其悠紀主基兩國主典以下諸郡司主帳以上把笏者、別勅叙位者依臨時處分、諸司六位以下給祿、兩國主典以下叙位、或以未日行之、事見儀式、

〔北山抄五〕大嘗會事

午日卯刻、撤兩國帳並標、樂人幄等、裝飾高座、設王卿座如常、構舞臺於殿前、南階南去十一丈七尺、設樂人幄於舞臺東南角、南去八許丈、東去二許丈、中務省舞臺以北四許丈置宣命版、南去一許丈置尋常版、掃部立位記案於

版東西、尋常以版南去四尺、東折一丈、立親王案、南去七尺、立三位以上案、南去七尺、立四位以下案、兵部對之、辰剋內侍授下名於大臣、先是著兀子、進自廊內給之云々、

大臣召內豎、式云、大夫一人參入、本局內豎者云々、寬平例如此、而承平以來六位別當參入如恒、令召二省、賜下名如常、內豎坐二省出、入自逢春門、天皇出

清暑堂御高御座、近仗稱警蹕、內侍置位記筥於大臣座前、卽臨東檻召人、大臣到左近陣西頭謝座、承平天慶例如式、仗南七尺四進一丈可拜歟、昇自東階著座、次內記取宣命文、昇東廊、於殿東砌下奉大臣、大臣參上、付內侍奏之、儀式群臣著座後奏之、卽給宣命使、其後引叙列、而式開門以前奏之、承平天慶例如之、次所司開門、闈司二人出自青綺門、就殿東掖門、分居逢春門南北、寬平式云、此事年來停止者、而近例此日皆候、訖召內豎、令喚二省、立左仗西南頭、經陣前參上、令置位記筥又如恒、次召舍人、少納言參入、

大臣宣喚刀禰、親王以下參入、准七日儀、舞臺中央以東二丈、南去許丈以南可立標也、而承平以後外記記、列立版位云々、此日小忌四位以下可列四歟、謝座謝酒著座、二省率叙人參入、舞臺東南角東去二丈、南折一丈以南立標、兵部准之、寬平例如之、而承平以來如南殿儀、大臣召參議以上一人授宣命、卽復本座、親王以下下殿、左近陣南頭列立、參議以上左近陣南三丈、西面北上、重行列立、四位以下降立堂前、去堂二丈、宣命大夫就版宣制、經左仗前、於宣命版南一許丈、揖而可西進也、親王以下再拜如常、叙人不拜、宣命使復本座、群臣又復本座、二省唱叙訖退出、次叙人拜舞退出、若叙親王、先拜舞、退出如常、爰二省丞入自逢春承秋兩門、執位記筥退出、掃部寮撤案、次親族拜舞、列立儀同上歟、次所司供御膳、其器便用兩國所設、自中階可供歟、親王以下諸仗共起、大膳職賜群臣饌、一觴後國栖奏如常、次伴佐伯兩氏入自儀鸞門、著中庭床子奏久米舞、伴左、佐伯右、五位以上相分列立、舞人二十人、樂工六人、前式云、所司設五位並彈琴床子、又設樂臺床子、寬平記云、工四人著緋衣末額帶靴、承平記云、於舞臺東供奉、舞人在前後端者服四位袍、中間服五位袍、皆帶劒、終頭拔劒舞、无歌、以琴爲節、舞如駿河舞、次安倍氏奏吉志舞、五位以上引之、設床子奉如前、作高麗亂聲、而進舞者廿人、樂人廿人、安倍吉志、大國、三宅、日下部、難波等氏供奉、寬平記云、工四人著六位袍、闕腋打懸、甲冑執桙、承平記云、於舞臺西奏之、引頭二人立臺下、舞人在前後端者服甲冑、在中間者幞頭冠末額、褐衣裲襠、皆執楯戟、舞頭拔刀云々、畢各退出、儀式云、次兩國奏風俗一曲、新式云、奏雜樂、寬平式无此事、承平記云、國風發音、勅停之、天慶吉志舞後奏田舞、云云、三獻後仰御酒勅使、次大歌別當下殿出南門、率歌人參入、於舞臺南頭奏大歌、新式云、大歌樂器參入、次掃部立床子、次別當率歌人參入云々、若是參來申歟、承平天慶外記記云、別當下殿南行、於儀鸞堂巽角率歌人參入云々、大臣奏令參議喚別當、隨召之如常、別當昇殿著座、亦召大歌人於舞臺北、次五節舞姬五人進出、舞畢退出、次親王以下下殿堂拜舞、參議以上左近衛陣南三丈、西折一丈、西面列立、式文如之、而承平以後外記記、列立左仗南頭云々、記文不違歟、儀式此次雅樂奏立歌者、寬平式年來无此事云々、次神服女四人、於舞臺北供解齋和舞、儀式云、於

舞臺北奏之、新式云、神祇官著舞臺南幄奏神歌、神服女入自承秋門、進西階下舞之、承平記云、於臺西供奉、歌人在臺北、次神祇官小忌侍從以下番上以上、左右分入奏和舞、造酒司持酒瓮、人別給長目柏、受酒飲畢、以柏爲縵起舞、先神祇官中臣忌部各一人、次侍從廿人、次大舍人廿人、次左近衞人、次右近衞人、次左右兵衞、近例有宣旨一度舞、又內舍人十人、侍從次舞云云、而式无內舍人、掃部寮立祿床子於舞臺南、式和舞前立之、而近例如之、大藏積祿、辨奏目祿、儀式云、申畢給大膳大炊造酒及兩國司酒食、訖解齋服著常服者、而神祇式、於宮內解齋復常云々、大臣奏宣命見參、承平重記云、左大臣立殿東檻北頭北面、召外記於壇下見見參事、進清暑堂奏之、安和外記記云、左大臣著東廊、喚上兀子、外記拜東廊奏見參、承平外記記云、今日依有宣旨、諸國入京吏或未赴任、及諸司雜怠、宣旨預見參、但未得解由非此限、天慶記雖宣未得解由者、今日不預云々、召參議一人賜宣命、又召一人賜見參、受之就祿所、群臣下殿列立、其所同五節拜、宣命使宣制、拜舞如常、宣命使復本座、次群臣各復座、式部輔二人、執札相分、立版南唱名、王卿以次下殿給祿、訖參清暑堂、承平重記云、乘輿出自青綺門、還宮、衞府公卿不帶弓箭、次將等又不帶之、執杖供奉、到建禮門、神祇官進御麻、天慶不奉之、後日進過狀、到紫宸殿、鈴奏等如常、儀式、晩頭小忌公卿一人、率史及中務宮內供奉、諸司向宮內云々、

〔江家次第十五踐祚〕大嘗會

午日

裝束使奉仕上下裝束、

撤兩國幄並標樂人幄等、裝飾高座、設王卿座如常、

構舞臺於殿前、設樂人幄於舞臺東南角、中務省舞臺北四丈置宣命版、南去一丈置尋常版、掃部立位記案、二省立標、

藏人頭召外記、渡殿上見參、

一上著陣、令奏外任奏、以次上者可仰內辨、若有追叙者、被仰下、大臣申下下名、書入返上之、不入筥、外記申代官、

天皇御大極殿、內侍取璽劒、[illegible]、藏人奉持御靴式筥等、命婦藏人各四人從、藏人持位記筥、

內侍給下名於大臣、出東廊給之、內辨著靴給之、內侍歸、

大臣持下名、著東廊兀子、召內豎、二音

稱唯參入出自昭訓門、當門北第一間西去一許丈、北面磬折立、
內辨宣、式部兵部召世、稱唯出召之、
二省丞參進入自昭訓門、當門北第一間西去一許丈、北面磬折立、
內辨宣式部、稱唯丞參進、
給下名、以左手給給文館立之、次召兵部給如初、
二省退出、內辨歸入內侍置位記筥、計內辨座程置臺盤、兵部在下、式部一在中、二在上、近代藏人置之、解結緒、
近衛陣階下、
天皇出御著御靴、置劍璽於東机、置式於西机、
近仗稱警、內辨又著兀子、聞警蹕著之
王卿著外辨、內侍臨檻、此間將監以下仆胡床平伏、內辨謝座昇著座、起微音稱唯、北行自軒廊前階出、斜行當左近陣坤角、南去七尺、西
去六尺、乾面再拜、更進經陣前、自南面東階登、入自母屋東第一間、又西進著座、承保右大臣自庇西進著座、
開門、闈司著、入自東福門、著昭訓門南北、
內辨奏宣命、內記以宣命副杖、候東檻下、內辨大臣執杖登自東階、北折自東庇進於軟障東端付內侍、乍杖拔笏退立、
內侍乍杖進之、主上取文覽、
天覽了返給、之返給、[illegible]內侍取之返、
內辨給之、下自東欄、返杖於內記復座、
內辨召內豎、二音稱唯入立左仗南、
內辨宣式部兵部召世稱唯出召之、
二省輔丞參進必用代官、六位在後列著靴、
內辨宣式部輔、稱唯參進、昇自東階、自軒廊東一間入、立大臣後、巽去七尺、
內辨給位記筥、寄於臺盤、自右方給之、宣命暫入懷中、輔給之下階、給丞、立本所、內辨又給次筥如初、若有三筥者又登、

次召兵部給如初

丞等以宮置案上（式部輔丞置宮之間、兵部輔丞経度離道、置宮於案上、式部自昭訓門出、兵部自光範門出、）

內辨召舍人（二）大舍人四人、於幔外稱唯、

少納言就版、（入自昭訓門）內辨宣、刀禰召（使）、

少納言稱唯出召之（左廻経出於會昌門外召之）

王卿立標（入自會昌門東扉、小忌爲先、北面西上、異位重行、諸仗起、）

內辨宣敷居（賀）、群臣再拜、（謂之謝座）

酒正授空盞（出自左仗、授貫首人、貫首人相跪取之、不取盤、酒正持盤左廻去、貫首人置笏、作跪少拜、起再拜、謂之謝酒、更跪、酒正来、貫首人拔笏、作居小拜、更立、謂之謝酒）

王卿著堂上、群臣著幄、（諸仗居）式部錄以簡點撿、

式部輔率叙人參入（參議以上在叙列者立輔前、兵部率武官叙人、自會昌門左右扉參、諸仗起、）

立定內辨召宣命使

若叙三位以上之時召中納言、四位以下時召參議、被召者稱唯、立內辨後七尺、

內辨給宣命、（右廻復本座）王卿下堂列立、（西面北上、諸大夫立幄前、）

宣命使就版（降自東階、每曲折有揖、）

宣制一段、（群臣再拜）又宣制、（再拜）此間叙人不拜舞而立、

宣命使復座、王卿同復座、

式部輔召給位記（叙親王者以參議爲輔代、就案唱位記、大輔唱公卿位記、少輔唱五位以上位記、被唱者進跪於輔之右邊、輔相跪授之、叙人置笏取位記、作座一拜、把笏左廻立新叙之標、）

（但六位置笏取位記、挿笏、叙人中有不參人者、省史生取之、）

次兵部輔叙武官了、（兵部輔等退出、文官左廻、武官右廻、）

叙人拜舞退出、（相讓）二省丞代取位記筥（入自昭訓門、光範門）

掃部寮撤案（入自同四門）

王卿下堂、列立拜舞、（群臣同之、謂之親族拜、）

王卿復座、（諸仗居）酒部立、

采女撤御膳肥、（先內膳御膳、次酒司、件肥織子等、蓮物所就西階受之、群臣諸仗共起、）

內膳正以下入人供御膳、（采女正並令史、又手嘗行、留版下、內膳官人登西階下第一階、采女出南階傳取、酢、鹽、酒、醬、餛飩、棗餅、鶴餅、桂心供之、臣下共居、）

次次供膳（自西拔供之、饒子黏臍傳傳團喜）

給臣下餛飩、御箸鳴、（臣下應之）供鮑羹、（撤棗餅）

供御飯、（撤餛飩）供進物所御菜、（進坏二、汁物二、平盛六）

供御廚子所御菜、（高盛八、汁二、燒物二、二度）給臣下追物、

御箸下（臣下應之）

一獻

國栖奏歌笛、（於會昌門外奏之）

二獻

久米舞（入自南門、著中庭床子、出自舞臺東、）伴左、佐伯右、五位以上相分引之、舞人廿人、琴工六人、（如駿河舞）夾版位舞、終頭

拔劍、（無歌）以琴爲節、了退出、

三獻

仰御酒勅使

吉志舞（出自舞臺西、或三獻前久米舞後、）

安倍氏五位以上著床子、高麗亂聲、舞廿人、樂廿人、了退出

大歌別當退下（下自東階、經左仗後、出會昌門東脇、著門外幄下、仰左兵衛、令召歌人、此間右兵衛勸坏、不返盃）

掃部立床子、(門內)別當立壇上、(召歌人、別當及歌人進著門內床子、別當座在舞人臺巽、)
大歌發物聲、內辨奏可召別當由、(召參議、起座、勅許後仰之、)
參議奉仰出南檻召之、(召了右廻下、自東令近衞官人告其由、)
別當參上、(如出儀、)　掃部移床子於舞臺北頭、
歌人著床子發歌笛、(自舞臺東著之、)
下小忌臺盤、(內豎、承保不下、依殿弘歟、)
舞姬出、(出自四、登上相副、女官五人秉燭副南柱南立、隨身顯燈、)舞畢退入、
歌人退出、所司撤床子、
王卿下堂拜舞、(諸仗立、西面北上、異位重行、拜了復座、諸仗居、)
神服女四人供和儛、(於舞臺北舞、解齋樂云々)
神祇官小忌侍從以下、左右分入奏和儛、(中臣一人、忌部一人、侍從廿人、大舍人廿人、左近衞人、右近衞人、左右兵衞等也、近代一度儛、)
次掃部寮立祿床子、(舞臺南)　大藏省積祿、
辨官奏目錄、
宣命一通、大臣以下見參一通、國司見參一通、祿法一通、
次大臣下殿見見參宣命、以上插一杖、外記進之、參上經座末、到殿東頭付內侍令奏、
天覽了返給、下殿返書杖復座、
召參議二人給之、(先召宣命人、右廻復座、次召見參人、左廻降殿、斜行著祿所、以目錄下辨、)
內辨以下降立、(諸仗起)
宣命使就版、(宣制一段、再拜、又宣制、拜舞、)　宣命使登、
王卿復座、(諸仗居、)　式部輔唱名、

王卿以下下殿給祿（小拜、出自東福門、可參淸暑堂、）
天皇入御（近代不必待王卿降入御、仍有警蹕、）
乘輿還宮（衞府公卿不帶弓箭、將佐杖槍供奉、）
到建禮門、神祇官獻御麻、
到南殿、鈴奏名謁等如常
〔柱史抄　下　臨時〕大嘗會
午日早旦、參大極殿、著上官座、宸儀御高御座、近仗稱警蹕、内侍臨東檻、召内辨、謝座昇自東階著座、更起座立東廊一間壇上、召内記、（大内記可參也、但雖六位何事之有哉、）内記持宣命杖、出自宣光門、降自昭訓門西階、趁座上、進宣命、内辨披見之、如元插杖、付内侍奏之、内記暫退、其後召内記賜空杖退、
〔朝野群載　十二〕大嘗會宣命
天皇我大命止良末勅大命乎諸聞食止宣、今日波大嘗會乃直相乃豐樂罷日爾在、故是以黑岐白岐乃御酒赤丹乃穗爾食へ惠良支罷止爲切不可叶事也、凡世間御物賜久止宣、
〔大嘗會儀式具釋　九〕豐明節會次第（无加叙儀）
豐明トハ宴會ヲ云、古クハ宴會豐樂等ノ字ヲ直之法ヨノアカリト訓ズ、大嘗新嘗ノ後ニハ必宴會アリ、仍テ大嘗ノ豐明、新嘗ノ豐明ナドヽハイヘド、節會ノ字ヲ加ヘテ豐明節會トハ云ハザリシヲ、中古以後ハ十一月ノ節會ノ名トナリテ、豐明節會ト稱ス、其大嘗ノ辰巳ノ日モ節會ナレドモ、是ハ大嘗ノ儀ノ中ナリ、今日ハ大嘗ノ儀了レルニ依テ、更ニ宴會ヲ行ハルヽ心ニテ、此節會アリ、大嘗ノ儀ハ、巳日マデニ亘ル故ニ、午日ニ豐明アリ、新嘗ノ儀ハ、卯日ニテ了ル故ニ、辰日ニ豐明アリ、貞享再興ノ大嘗ニハ、辰巳兩日ノ節會ヲ略セラレシ故、新嘗ノ時ノ如ク辰日ニ豐明アリ、今度（元文三〇年）ハ舊式ニ復セラレテ午日ニ行ハル、其貞享ノ豐明ハ一日ニテ辰巳午

三日ノ代ノ儀ナレバ、昔ノ豊明ノ儀ニ異ナル所多シ、今度ハ昔ノ如ク三ケ日ニ行ハレタレバ、昔ノ儀ニ近シ、但昔ハ今日ノ節會ニ、王卿以下ニ位階ヲ加賜フ、仍テ節會ノ儀ノ中ニ叙位ノ儀交ハリ行ハル、今ハ加叙ノ儀ナシ、仍テ節會ノ次第昔ト一同ナルニハ非ズ、

群卿著仗座

昔ノ儀ハ、今日モ辰巳日ト同ジク仗座ノ儀ナシ、昇亦紫宸殿ニテ行ハルヽニ非ザレバナリ、唯左ニミエタル外任奏ノ時、内辨ノ人著陣スルノミ、

内辨令官人敷膝突、召外記問諸司具否、次外記持參外任奏、

外任奏トハ、凡昔ノ節會トハ、小節ニハ五位以上、大節ニハ六位以下マデモ宴ニ預カル、是皆京官ノ五位以上六位以下ナリ、外官ハ遠路ナレバ之ニ預カラズ、然レドモ諸國ノ守介ナド上京改任シテ、未ダ任符ヲ給ハラズシテ在京シ、又ハ任符ヲ給ハリテモイマダ京ヲ發セズ、或ハ國政ノコトニ依テ入京シテ居ル等ノ間、節會ノ行ハルヽ時ニ當レバ則宴ニ預カル、其宴ニ預カルベキ人々ノ名ヲ錄シテ奏スルヲ外任奏ト云、今世ハ京官トテモ、公卿ニ非ザレバ宴ニ預カラズ、且諸國ノ國司モ有名無實ナレバ、宴ニ預カルベキ人ハアラザレドモ、舊例ニ從ヒテ此奏アリ、辰日巳日ニハ昔ヨリ此奏ナシ、是尋デ午日アルガ故ナルベシ、

次内辨以職事奏聞、訖返賜、次内辨召外記給外任奏、次群卿起座、近衛陣階下、皇上御高御座、近仗稱警、群卿著外辨、〔以小忌爲先、已下倣之〕政官同著床子、外辨上卿令召使下式筥、召外記問諸司具否、内辨著兀子、内侍臨檻、次内辨謝座昇殿著兀子、政官著砌下座、次開門、

〔註〕〔昔ハ豊樂儀鸞兩門ヲ開キ、今ハ承明門代トシテ南門ヲ開ク、

闈司分居

闈司ハ女司ノ名、長官ヲ尙闈、次官ヲ典闈ト云、昔ハ諸門ノ管鑰ヲ預リテ之ヲ出納スルコトヲ

掌ル、故ニ闈門セル時其門ノ左右ニ分居ル、今ハ尙闈、典闈ノ差別モ聞エズ、且常ニ禁中ニ奉仕スル女司ノ中ニハ非ズシテ、一人ハ大聖寺宮ノ抱、一人ハ甘露寺家ノ抱ノ者ナレバ、本ヨリ管鑰ヲバ預カラズ、唯遺風ヲ存シテ、節會ノ夜闈門セル時、門ノ左右ニ分居ルノミ、辰巳日ノ闈門ニハ、古今共ニ闈司分居ノ儀ミエズ、

次内辨召舍人、大舍人稱唯、次少納言就版、内辨宣召刀禰、少納言稱唯出召之、群卿參列、(異位重行)諸仗立、内辨宣敷尹、群卿謝座謝酒、訖昇殿著座、諸仗居、次撤御臺盤、内膳供御膳、次供餞御膳、次賜臣下粉熟、(以小忌爲先、以下倣之)居訖内辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、次供鮑羹、次供御飯、次供進物所御菜、次供御厨子所御菜、次賜臣下飯汁、居訖内辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、次一獻、國栖奏、

中古以後ハ、國栖ニ非ザル人國栖ノ分ニシテ歌笛ヲ奏ス、紫宸殿ニテ行ハルヽ節會ニハ承明門ノ外ニテ奏ス、猶歌ト笛トナリ、今世ハ歌ヲ奏スルコトナシ、唯伶人形ノ如ク二聲ノ笛ヲ奏ス、但南門ノ内ニテ奏ス、外ニハ非ズ、

次二獻、奏久米舞、(今度无此儀)

貞觀ノ頃ハ既ニ來目部ナキカ、貞觀儀式、江次第等ニミエタル久米舞ハ、伴氏ト佐伯氏トノ二氏久米舞ヲ率ユルトミエタリ、又江次第ニハ舞ノ終リニ劒ヲ拔ク、歌ナシ、琴ヲ以節ヲ爲トアリ、歌ナシト云ルハ日本紀ニ合ハズ、中古既ニ其歌曲傳ハラザルナルベシ、今世ハ舞モ亦傳ハラズ、仍テ一向此儀ナシ、

次三獻、仰御酒勅使、奏吉志舞、

吉志舞ノ儀イマダ考ヘズ、今ハ其舞ノ樣傳ハラザル由ニテ、只亂聲ヲ奏シテ、伶人巡廻スルノミ、此舞ヲ奏スルコト、貞觀儀式ニハ久米舞ノ次ニ奏ス、其頃ハ總テ幾獻ノ後ト云定ナシ、江次第ニ載タルハ今度ノ次第ニ同ジ、但式ハ三獻前、久米舞後ト記ス、貞享ニハ三獻ノ前ニアリ、今

度ハ後ニアリ、必シモ一定ナラズ、又昔ハ此跡ニテ大歌、五節舞、和舞等アリ、貞觀ノ頃ハ、其上ニ悠紀主基風俗ノ歌舞、所司ノ立樂等モアリ、

次內辨奏宣命見參祿法

此宣命ハ今日豐明ノ日ニ依テ、酒食ヲ給ヒ、物ヲ給フトノ宣命ナリ、昔ハ此日宣命兩度アリ、初ノ宣命ハ悠紀主基ノ國司其外ノ人々ニモ位ヲ進メタマフ由ノ宣命ニシテ、是ハ早ク奏シテ御膳以前ニ宣シ了リ、此ニ至リテ又酒食祿物ヲ給フ由ノ宣命ヲ奏ス、今ハ加叙ノ儀ナキガ故ニ初ノ宣命ナシ、

次內辨召參木一人賜宣命、又召一人賜見參祿法、三木向祿所、群卿下殿列立、次宣命使就版宣制、拜舞如常、

宣制トハ、制モミコトノリト訓ズ、詔命ヲ宣讀ム義ナリ、昔ハ宣命ト云モ宣讀ム態ヲ云、中古以來ハ其文ヲ指テ宣命ト云ガ故ニ、讀ム態ヲ宣制ト稱シテ之ヲ分ツ、而シテ其之ヲ讀ムモ、實ニ讀ムニハ非ズ、先宣命使版ニ就、揖シテ笏ヲ搢ミ、宣命ヲ聊開イテ後、押合セテ横ニ顧ミルノミニシテ讀ル分ナリ、今度ノ宣命ノ文左ノ如シ、

天皇我詔旨良止萬宣布大命乎諸衆聞食度宣布、今日波大嘗會乃直相乃豐樂畢者牟奴留日爾在利、故是以氐黑紀白岐御酒赤丹乃穗食部惠耳岐罷止爲毛天奈常毛給布酒幣乃御物賜止者久宣、

元文三年十一月廿二日

中古以後ハ實ニ宣セズ、右ニ云ルガ如ク、宣命使宣命ヲ聊開イテ、押合セテ顧ミル時、群卿再拜シ、次ニ又宣命使初ノ如ク押合セテ顧ミル時群卿拜舞ス、兩度共ニ中古以來ハ稱唯セズ、抑今日ノ宣命ノ詞ハ、古今共ニサシテ替ルコトナシ、但今日波ト云ル次ノ文、昔ノ大嘗會ニハ大嘗乃直會ト記シ、新嘗會ニハ新嘗乃直會ト記ス、是大ムベ又ハ新ナメト訓讀スルニ依テナリ、今

度ノ宣命ニ大嘗會ト記ス者ハ、音讀スル意トミエタリ、妄ニ字音ヲ用ユル者古體ニ合ハズ、又内裏式、貞觀儀式等ニミエタル宣命ニハ、畢ノ詞常モ賜御物トアリ、酒幣乃ノ詞ナシ、此外ハ異ナル所ナシ、

群卿復座、次群卿下殿賜祿退出、入御、近仗稱蹕、

抑諸ノ節會賜祿ノ儀アレバ、其次第今度ノ次第ノ如ク、入御ハ群卿下殿賜祿ノ後ニ記ス、唯貞享ノ豐明ノ儀ニハ、入御、群臣磬折起座前、次近仗歸入、次群臣下殿賜祿、一拜退出ト記ス、案ズルニ、中古以前ハ其次第ニ記スガ如ク、入御ハ群臣下殿ノ後ニアルトミエタリ、中古以來ハ必シモ王卿ノ降入ヲマタズシテ、入御セラル、仍テ警蹕アリト江次第ニミエタリ、是天皇徒ニ久シクマチタマフガ故ニ、先入御セラルヽナルベシ、サレド入御ヲ以、群臣下殿ノ前ニ改メテ次第セルニハ非ズ、故ニ次第ヲ記スニハ猶入御ヲ以後トス、今度ノ次第モ入御ヲ後ニ記ストイヘドモ、亦群卿ノ下殿シ了ルヲマチタマフ可ラズ、故ニ蹕アリ、若群卿下殿シ了ラバ蹕スルニ及ブ可ラズ、然レバ貞享ノ次第ト今度ノ次第ト、記ス所ノ先後同ジカラズトイヘドモ、其實ニ至リテハ異ナルベカラズ、今度ノ儀此先後イマダ詳ニ聞ズトイヘドモ蓋先入御セラレ、其時群卿磬折シテ座ノ前ニ立チ、近仗蹕ヲ稱シ了リテ、近仗ハ退入シ、王卿ハ下殿シテ祿所ニ就シナルベシ、辰巳兩日ノ主基ノ儀ノ畢モ此ニ同ジ、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年十一月己卯大嘗、　壬午、賜饗百寮主典已上於朝堂、又賜無位宗室諸司番上、及兩國郡司并妻子酒食并祿、

〔續日本紀十七孝謙〕天平勝寶元年十一月乙卯、於南藥園新宮大嘗、　戊午、賜饗諸司主典已上、賞祿有差、番上人等亦在祿例、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年十一月辛卯、御乾政官院行大嘗之事、　甲午、饗内外諸司主典已上

於朝堂、賜主典已上番上及學生等六千六百七十餘人布綿有差、其明經、文章、明法、音、算、醫、針、陰陽、天文、暦、勤公、勤產、工巧、打射等五十七人賜絲人十絇、文人上詩者更益十絇、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年十一月癸卯、御太政官院、行大嘗之事、　丙午、賜親王已下五位已上絲各有差、其明經、文章、音博士、明法、算術、醫術、陰陽、天文、暦術、貨殖、恪勤、工巧、武士總五十五人賜絲人十絇、授從五位上紀朝臣廣庭正五位下、復無位大伴宿禰田麻呂本位從五位下、

〔續日本紀桓武三十六〕天應元年十一月丁卯、御太政官院、行大嘗之事、　庚午、授三品不破內親王二品、從四位下淨橋王從四位上、從五位下垂水王從五位上、無位小楊王從五位下、正四位下安倍朝臣古美奈正四位上、從四位下藤原朝臣諸姉從四位上、正五位上和氣朝臣廣虫從四位下、從五位下安曇宿禰刀自正五位下、從五位下神服宿禰毛人女從五位上、無位藤原朝臣明子從五位下、正六位上嶋名古刀自外從五位下、又授正五位下山邊王正五位上、從四位上藤原朝臣鷹取正四位下、從五位下藤原朝臣眞葛、紀朝臣伯麻呂、並從五位上、並由機須基國司也、正六位上林忌寸稻麻呂、凡直黑鯛、朝原忌寸道永、並外從五位下、

〔日本後紀平城十七〕大同三年十一月甲午、奏雅舞幷大歌、五節舞等、賜由貴主基兩國國郡司役夫物各有差、是日從五位下葛井王授從五位上、○中略　正六位上名草直道主外從五位下、賜五位已上揩衣、

〔日本後紀嵯峨二十〕弘仁元年十一月乙卯、行大嘗於朝堂院、　戊午、宴五位已上、奏雅樂幷大歌、從四位下大庭王授從四位上、○中略　正六位上林朝臣山主、志賀忌寸周興、賀茂縣主立長、藏人根主外從五位下、宴訖賜祿有差、

〔類聚國史八嵯峨〕弘仁十四年十一月庚午、天皇之命止耳良勅大命乎諸聞食止宣、悠紀主基爾奉仕流二國乃國司郡司等日夜怠事無久務來志麻理伊佐乎志久奉仕爾流依氐治賜布、又奉仕人等中□其奉仕流狀乃隨仁治賜人毛在、又御意乃愛盛爾治賜人毛在、故是以冠位上賜治賜波止久詔天皇大命乎

衆聞食止宣、叙位云々、天皇我大命良麻止勅大命乎諸衆聞食止宣、神祇官人等乎始氐大嘗會爾參出來氐奉仕流悠紀主基二國乃國司、郡司、百姓及司司人毛止番上已上爾御物賜布、又悠紀國乃去年言上未納、主基國乃當年庸物免賜不、又卜食流二郡司仁波特御物加賜止波久宣、

〔續日本後紀二仁明〕天長十年十一月癸卯、天皇御八省院、修禋祀之禮、庚午、御豐樂殿、宴于群臣、詔授正三位紀朝臣百繼從二位、〇中略正六位上余阿成、豐岡宿禰眞黒麻呂、並外從五位下、宴畢賜祿有差、夜闌還宮、

〔文德實錄三〕仁壽元年十一月甲午、御豐樂殿、策命曰、天皇我大命良麻止勅大命乎諸聞給止宣、悠紀主基爾仕奉流二國乃國司等日夜無怠事久務結利勤之久仕奉爾依天治賜不、又仕奉人等中爾其仕奉狀乃隨治賜人毛在、又御意乃愛盛爾治賜人毛一二在、故是以冠位上賜治賜止波久詔天皇大命乎衆聞食止宣、授四品時康親王階三品、〇中略正六位上山田連春城、朝宗宿禰吉繼、春道宿禰永藏、安原宿禰岳、永野宿禰加祐麻呂、並叙外從五位下、奏大歌、五節舞人如舊儀、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十一月十九日庚午、撤去悠紀主基兩帳、天皇御豐樂殿廣廂、宴百官、多治氏奏田舞、伴佐伯兩氏久米舞、安倍氏吉志舞、內舍人倭舞、入夜宮人奏五節舞、並如舊儀、宴竟賜絹綿各有差、諸司官人五位已上有雜怠、及諸國司就事入京、幷新除外吏過裝束程未向任之輩皆預之、但未得解由者不在預限、詔曰天皇我大命良麻止勅大命乎諸聞給止宣、悠紀主基爾仕奉流二國乃國司等日夜無怠事久務結利勤之久仕奉爾依天治賜不、又仕奉人等中爾其仕奉狀乃隨爾治賜人毛在、又御意乃愛盛爾治賜人毛一二在、故是以冠位上賜治賜止波久詔天皇大命乎衆聞食止宣、進右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相階加正二位、〇中略美作掾佐伯直豐麻呂、並外從五位下、日暮事訖還宮、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十一月廿一日戊午、會百官而廣讌、賜祿各有差、詔曰、天皇我大命良麻止勅

大命乎諸聞食止宣、悠紀主基爾仕奉流二國乃國司等夜晝息事無久務志万利伊佐乎久之仕奉仁依天治賜布、又仕奉人等中爾其仕奉狀乃隨爾治賜人毛在、又御意乃愛盛爾治賜毛一二在、故是以冠位上賜治賜止宣久詔天皇大命乎衆聞食止宣、授參議正四位下行左近衞中將兼備中權守源朝臣能有從三位、○中略園池正春日朝臣宅成並外從五位下、

〔三代實錄光孝四十六〕元慶八年十一月廿五日壬午、撤去悠紀主基之兩帳、天皇御豐樂殿廣廂、宴百官、多治氏奏田舞、伴佐伯兩氏久米舞、安倍氏吉志舞、內舍人倭舞、入夜宮人五節舞、並如舊儀、宴竟賜祿綿各有差、諸司官人五位已上有雜怠、及諸國司就事入京、幷新除外吏過裝束程未向任之輩皆預之、但未得解由者不在預限、宣詔曰天皇我大命良萬止勅大命乎諸衆聞食止宣、今日波大嘗會乃直相乃豐樂聞食日仁在、故是以黑支白支乃御酒赤丹穗爾食惠良閇罷止爲天奈毛常毛賜酒乃幣乃御物賜久止宣、授無位直實王從四位下、○中略夜蹕輿還宮、

〔貞信公記〕承平二年十一月十六日、○甲午未時幸豐樂殿、○宴會其儀如例、但式部敍一人、後、主殿寮秉燭、依殿裝束懈怠所致也、寅時還本宮、

〔經信卿記〕治曆四年十一月廿五日、○甲午午刻參內、節會如式、今日大臣不給下名於所司之前御出大失歟、依著外辨、其前作法不見、召後上達部參議如例、宣命使左兵衞督○藤原經季經上達部上就版立列、可尋上達部祿如常、宣命使自本路昇著、次群卿參上、次二省唱敍位、次親族拜舞、次々儀如式、御酒勅使宰相中將、聽大臣召起立大臣後、大臣仰賜大夫達御酒之由、微音稱唯、左廻入自東廊間夾名書紙云云、於外記歷著立東第一間、西向仰云、某々大夫達ニ御酒給ヘ、右廻復座、次大歌別當宮內卿、此議依不候座不見、下自東階經舞臺東被趣南門、次召內辨取笏被申宮內卿源朝臣○經長可召之由、勅許之後復座、召左大辨、○藤原泰憲左大辨起座、微音稱唯立內辨後、承可召宮內卿源朝臣之由、稱唯右廻立南第一間西柱東邊、微音云、宮ノ內ノ省ノ卿召ス、右廻復座、內辨被示云、遣告乎、大辨起座、出東廊邊、使陣官人令告、即

內卿被參上、次々如例、但神服舞女頻被催後、無歌人等、只四人進舞、又神祇官和舞三四人許、神服女同時出來退出、失也、次大臣起座見宣命見參、被奏之後召宰相中將給宣命、召僕給見參、作法如例、中前退出、

〔中右記〕寬治元年十一月廿二日庚午、節會如式、戌刻出御、〇堀河內辨右大臣、敍人給位記拜舞、五節舞姬參上舞之、子刻許事畢還御小安殿、今度依有太白神障、丑刻以後、還御堀川院、其儀寄御輿於小安殿北、（左大將束立、右大將西立、）警蹕如常、出自昭慶門幷待賢門、堀川南、於堀川院西門、神祇官奉御麻入中門、次將等相替於中門邊、宰相中將等相加、依著大忌、路間不供奉、公卿之列如常、小忌上卿等相加本位、御南殿之後、鈴奏名對面如常、

〔台記〕康治元年十一月午日、北山抄云、左仗南七尺、西進一丈可拜歟、今案如師說者、仗南一丈餘、西進二丈可拜也、（仗者揖、次將座）但今度午日降雨、仍東廊兀子南一兩步拜也、（微唯後不揖、傍行二左右足各二步、）立定不揖、乍西面再拜、（伏時先右膝、起時先左膝、）了揖自東廊砌（柱外）北行、自軒廊柱內西行、自大極殿東檐（昇大極殿東壇時無揖）南行、出南檐更北折、入南庇東一間、斜西行、入母屋東一間、（如庇者二間也）自座後西行、自座下著之、（著第一兀子、南面兀子只立一脚之故也、）晴儀昇南面東階、自檐東行、入南庇東一間也、

〔兵範記〕仁安元年十一月十八日戊午、早旦撤兩國御帳幷標等、裝束司裝飾高御座如例、〇中略入夜內辨左大臣大將以下公卿來著東步廊內東福門以西座、藏人次官經房仰下加敍事於左大臣、給下名加入、次被奏外任奏云々、次主上出御、近仗陣列、藏人置位記筥於內辨大臣臺盤上頭、次內辨著兀子、右大將以下著外辨、如一昨日、內侍臨東檻、授下名於大臣、次內辨著兀子、召內豎令召二省如常、（二省入昭訓門）次近仗稱警、次內侍臨檻、內辨於左仗南頭謝座、昇東階著座、次內辨召內豎、（二人）令召二省輔代、參上分給位記筥、輔代傳丞令置案上、次內辨奏宣命、次開門、闈司分居、次內辨召舍人、少納言信康替參內、辨宣刀禰召、右大將以下參入、爲先小忌卿相兩人、內辨宣敷尹、謝座酒了、各昇東階著座、

此間外辨儀了、下官退出、不見其後次第、權辨爲親可付祿所之故也、節會以後可還御禁中、〇六條云々、
三年十一月廿五日壬午、早旦撤南圍御帳幷標山樂人幄等、次裝束司令所司奉仕大極殿御裝束、〇中略戌刻主上〇高倉出御、劒璽內侍候前後、藏人持式筥、藏人權佐經房書位記筥二合於內辨大盤南緣、先兵部、式部、其上〇中略宸儀出御帳中、近仗稱警、〇中略次舞姫五人參上、童女前行、雲客扶持、皆入自北面西戸、頭中將幷下官、於件戸中傳居軟障中座、姫君昇畢、雲客於昇廊亂舞、大歌於舞臺北發歌笛、舞姫經軟障西、自南廂東行、於御前廂引舞、主殿女嬬四人、執柱秉燭各照舞姫、舞了退下、此間下官退出、不見此後事、神服女人供解齋和舞、次神祇官奏同舞、掃部寮立祿床子於舞臺南、大藏省積祿、左中辨長方朝臣奏目錄、此後儀如寬治例、次公卿出東福門、參小安殿、子刻主上還御小安殿北面、著鳳輦、供奉公卿以下不裝束云々、入御建禮承明門、著御南殿、少納言鈴奏、公卿名謁如例云々、

〔資房卿記〕正安三年十一月廿三日戊午、戌刻著束帶、每事如昨日參內、〇中略

午日節會兩儀條々

參入之時、於郁芳門懸裾、可著深沓歟、

著陣儀

昇右階著淺履、可下裾歟、

外辨事南門東腋著其座歟、但近例不分明、

不及著座歟

近衞陣事

東西廊歟

參列事入南門、以召使令揖並、

入東廊南切口、列立戸間以南北上西面、異位重行、歟、兩儀或一列、

小忌以下著₂堂上₁

經₂東廊幷軒廊柱內₁昇₂壇上₁（著₂床子₁之儀、如₂晴日₁歟、）

宣命拜事（自餘可ㇾ爲₂同前₁歟）

出₂南面東一間₁、經₂軒廊幷東廊柱內₁、列₂立祿所₁歟、

宣命使事

其路如₂諸卿作法₁、又如ㇾ常可ㇾ立₂諸卿北₁歟、然者顧₂左披₁文、

訪₂五節所₁事

强不ㇾ然歟、不ㇾ可ㇾ依₂雨儀₁、猶可ㇾ訪歟、或又路之常事也、

御膳事（雨儀之時不□□□□□）

自₂西軒廊₁供ㇾ之、仍諸卿不ㇾ起歟、

諸舞事

於₂南門下₁舞歟、然者催促之時、頗不ㇾ及ㇾ見歟、閒₂□簾₁可₂昇歸₁歟、

祿所事

床子可ㇾ儲₂東廊戶南₁歟、其路可ㇾ同₂自餘事₁歟、

節會條々事、今度（○後三條）重問₂答前右府₁（公衡公）爲ㇾ散₂後日不審₁録ㇾ之、

〔永和大嘗會記〕廿六日、（○永和元年十一月）けふは午日なり、悠紀主基の御帳標山などを撤して、高御座につかせ給て、豐明の節會なり、內辨今出川大納言實直、外辨日野大納言、洞院中納言、土御門中納言、御子左中納言爲遠、中院中納言通氏、侍從中納言別當嗣房、中御門宰相、園宰相基光、少納言秀長朝臣、辨仲光朝臣、次將左親雅朝臣、右敎藤朝臣、基明朝臣、敎冬、公邦、其儀敘位の位記などをくばり敘列にたつ事、白馬の節會の如し、けふも乙女舞さし舞など云事どもあり、ことはてゝ、やがて土御門

内裏へ還御あり、雨風のさはりなく、數日の大儀ども、無爲におこなはれ侍ぬる事いとありがたし、文和には世の中もしづかならざりしかばあわたゞしきやうなり、此たびは〇後圓融四海浪をさまり、一天風しづかなる時分に、武家恐懃に申さたせられぬる、目出度天命、神慮に通じ侍れば、寳運武運も萬歲を期せるべし、いとめでたき事なりとぞ、

〔經嗣公記〕廿四日、〇應永二十二年十一月午の日、豐明の節會也、〇中略夜に入て節會ははじまる〇中略内大臣殿〇足利義持おなじく御扈從あり、〇中略主上〇稱光御くたびれによりて、内大臣殿とく入御を申なさる、このたび内大臣殿御裾に候じ給ふ、後房に還御のゝち、内大臣殿も關白〇藤原經嗣も直廬に退出し給ふ、〇中略こよひやがて土御門殿へ還御なり、節會はてゝ内大臣殿御直廬より御まゐりあり、魚袋節劒をてつして、らてむの劒を帶し給ふ、〇中略内大臣殿出御に御祗候あり、永德にも攝政はまゐり給はで、鹿苑院殿〇足利義滿申御沙汰ありしかば、これも御かれいにあひかなひ侍るにや、か樣に度ごとに供奉せさせ給ふ、いとありがたき御事なり、〇中略内侍所もおなじく還御ありて、職事次將女官など、供奉つねのごとし、〇中略およそ數日の大儀、一事の違亂もなくとげ行はれぬる、二所宗廟の感應もあらたに、百王鎭護のちかひもたがはず、内大臣殿御忠切のいたりも、冥鑒に通じ給ふかとおぼえたり、

〔康富記〕永享二年十一月廿一日戊午、節會也、未刻著朝衣參官、違方害、劔平緒檜扇知常、今日予爲分配、具笏紙懷飯等、又取散狀於局務催、見餘御調紡使交名等、畢召具雜色一人而已、版標岡條外記尋沙汰事也、不及御使部、予見回了、是日引出南圖標山、撤悠紀主基御帳、所司裝束高御座、王卿座母屋儲之、小忌座南庇儲之、構舞臺於殿前、南階南去十許丈樂人幄在舞臺巽、舞臺北中務省置宣命版、南階南去五六丈其南去一許丈、式部置尋常版、其南去一丈置中臣版、式部兵部立行立標、但實不立之近例也掃部立位記案三脚、申下刻程室町殿〇足利義教有御參、戌刻許西園寺大納言公名花山院大納言、葉室中納言、三相公等著仗座給、頭右大辨仰内辨事於公名卿、拔拔也、卜合也、今日改小忌書位署、被□□□□□□凡拔拔人勤仕已午内辨例、天仁嘉永

（元曆、正安等也、局務日、亦長元有例云々、）次內辨移端、以官人（今日不召使）召大外記師世朝臣、問諸司、召外任奏、卽外史被持參之、次內辨召頭辨被奏之、次予正笏跪小庭（向上歸方）申云、式司兵司輔丞人申障不候、代給、內辨宣、誠乎、予申云、式ノ司ノ輔代散位三善朝臣重德、丞代大主鈴川忠行、兵ノ司ノ輔ノ代散位三善朝臣親衡、丞人代少典鎰宗岡秀國誠（天）候、內辨宣、令候（與）、予稱唯退、（此事內辨不被仰之、推參申者也、外任奏前後不同也、如白馬節會、以外任奏未被返下之時分上爲宜、）次返下外任奏、卽召大外史被下之、外史被結申之、（內辨爲大歌別當、仍代事此次被申請歟、不被仰外記、直仰菜人云々、）次諸卿向外辨如昨、但上官早起不在床子、各被徘徊廊內、少納言爲清朝臣、外記忠種、史盛時、召使行繼等、著外辨置式有召仰云々、次內辨於東福門北令押笏紙給、予磬折押之返獻、卽著靴進立東廊兀子（西面）、內侍持下名出東檻、內辨進寄跪給之歸著昭訓門北間兀子（西面）、召內豎（二音）、頭康行進立（東面、可爲北面歟）、內辨宣、式ノ司兵ノ司召々、內豎稱唯退召之、次式部丞代中務源重仲（藏人極﨟）、兵部丞代將監藤原懷藤（藏人、已上小忌）列立昭訓門前（北上東面、可爲西上北面歟）、各賜下名退入、局務以行繼被乞取之、訖內辨退入登廊戶、次近衞引陣、天皇（○後花園）出御高御座（攝政令座昇給、室町殿令候良御）、次內辨著東廊兀子（西面）、次內侍置位記筥於內辨座前臺盤上、卽臨檻、內辨降登廊階、於左仗南頭謝座、昇南面東階、自南榮東行入東一間、經柱外著兀子、次官務四品都事局務予員職盛時等著階下（二行）、次內辨下殿立軒廊兀子前（東福門西）、見叙位宣命、少內記員職插杖進之、（先被下叙位宣命、例宣命之由之間、予披之示了、）內辨入北庇立東二間歟、降下、付內侍奏之、天覽了返下、內辨於兀子下返杖於內記、取宣命返昇給、次開門（南門）、闈司分著昭訓門內南北腋、（永德度、開門之後有宣命奏、先例不同、）次內辨以內豎召二省輔丞代、進立左仗西（西上北面）、式部輔代三善重德先進昇東階、給位記筥退、令持丞代內豎忠行之後復列、次兵部輔代三善親衡參進給筥、令持丞代、各就位記案置之退出、次內辨召舍人、少納言就版、內辨宣、刀禰召々、少納言出南喚之、王卿爲先、小忌入南門東扉、列標下、（異位重行、西上北面、小忌在前、）諸仗立、內辨宣、敷尹、諸卿謝座、造酒正授空盞於經成卿、謝酒畢各昇殿、（小忌座在庇、大忌座在母屋乾、巽妻立臺盤、）次內辨出登廊催叙列、予承之令行繼催之、次輔代引叙人參入、式右中辨幸房、左少辨明豐（兩行事、去十六日叙正五位上）兵左少將敎賢（依錄兵叙人、儀）

叙〈入正五位下拜了、〉參列、〈式東、兵西也、伴佐叙人自左、各當南門下着佇立云々、而雖人成群拜隔之、伴部等奔走東西雖尋之、不見付之間、頗及遲々了、〉次內辨授宣命於參議
中將定親卿、次小忌卿相降殿列左仗南頭、北上西面、〈經成卿經左仗前失歟、宗繼卿內辨已下、經左仗後被列立、〉次內辨已下同列
立、〈北上西面、異位重行、〉次宣命使渡左仗前就版位、宣制兩段、諸卿每段再拜、〈叙人不拜、〉宣命使幷群卿復座、輔代賦位
記、叙人取之、立上新叙標拜舞退、〈此後內辨早出歟、叙位供奉還御、〉次掃部撤案、次公卿拜舞、〈親族拜、〉此後內辨之外、卿相
相引被向五節所、〈出東登廊戶、經正殿北面、〉卽歸昇、次次供御膳、〈用中階、〉臨御膳自西庇供之、不供白黑、〈仁安三記、不供白黑云々、局務
外史曰、辰巳午三箇日內、唯辰日供之、巳午日云々、然而後日拜見御次第之處、今日供之由、〉否給臣下膳、次一獻、〈造酒正、奧內豎、〉次國栖奏、〈內辨於軒廊被催之、予參進、實
不參也、知例節會不參也、〉二獻、伴佐伯五位各一人、〈主殿頭年預、家賢、奏沙汰立之云々、〉職率舞人奏久米舞、〈冠、紅、退、〉次安陪氏〈有重、有季等歟、〉
率舞人列前庭、奏吉志舞、〈成著甲冑、戴著冠穗、各執干戈突之、傳聞天王寺舞人樂人等也云々、三位有盛卿沙汰立之時分、件卿東帶立正廊戶邊壇上、相望職事辨官等令下
知被舞人、其體不似、〉三獻之後、參議隆夏卿出軒廊、召御酒勅使交名、予兼懷中之、指笏取出獻之、〈左仲則朝臣、親雅朝臣、右重綱
朝臣、成雅朝臣、〉次大歌別當代權中納言〈宗豐卿、〉降東階、經左仗前著前庭床子、〈兼不儲之、臨期仰官令立之、〉次大歌人立舞臺
南頭、次中相公〈定親卿、〉臨東檻、令陣官人召大歌別當、別當昇東階復座、次大歌人進舞臺北、發歌笛、次舞
姬出自五節所、參進於南庇、縫袖、〈職事等相副、被扶持之、所司數輩道、先之、天皇入御之間、亦參後房云々、如何、〉大歌退出、次公卿列庭中拜
舞、〈舞姬拜也、西面北上、〉次神服女可奏解齋和舞、而不及沙汰、次神祇官小忌侍從以下、可奏解齋倭舞、是又其由
許也、〈神服女和舞事、仰兩辨、神祇官和舞事、官外記方畢、有相論、康治被經御沙汰、被口兩行事辨云々、外記方不知事也、〉次內辨立東福門脇兀子前、少內記員
職進宣命退、次以陣官人仰可進見參之由、予持參之、〈五位已上一通加禮紙、立揷之、膝法横揷之、無侍四見參近例也、予猶注奧、〉內辨披閱
之後加宣命返給、予給之、宣命立指之、見參〈錄法卷、禮紙、〉横揷之、內辨入東福門、經陣立蔀內、就朝所幔門前、
付頭辨被奏之、〈予從之、〉卽被返下、〈予於陣邊立留、如元揷之、〉內辨歸兀子下、拔取文披見之後目給、予持空杖退、內辨
復座、次給宣命於參議尹賢卿、給見祿於參議隆夏卿、隆夏卿卽就祿所、〈床子在昭訓門內壇下、參木辨史北面重行、〉權辨圖
光史員職同著之、卽辨起床子、被參上、次公卿列左仗南頭、宣命使就版宣制、公卿拜舞昇殿、次公卿就
祿所、各取祿一拜退出、〈昭訓門西壇上敷疊薦、祿櫃在其邊、〉四條相公同被取之、皆出戶給、行繼官務四品都事局務予

忠種等同取祿退出、(六位外記史可爲正絹之處爲黄衾、退案之辰巳兩日爲悠紀主基沙汰、及六位外記史、仁安三記分明、至豐明者大藏省祿也、六位不預之歟、猶可勘之、忩忙之餘、不外顯議之所致也、如之何、)于時丑刻許也、三獻之後、有露臺之亂舞云々、即還幸土御門殿、其儀權大納言(時房)著仗奥座給、職事權右少辨嗣光(還御沙汰)申進下日時勘文(還幸井內侍所渡御二通)幸路注文、次移端召大外記師世朝臣被下三通、外史結申之後、令懷中幸路注文、取副勘文二通於笏退出、次召權辨仰御輿御裝束事之後起座給、(先之陣疊取之、早出之間、及臨期違亂、俄數、經爲座、又陣官早出、經租貫出、)次寄鳳輿於朝所南面、攝政令候御裾給、(室町殿此前御退出)已公卿列立前庭、二位中將(實量)仰御綱鈴奏如常、頭辨以下職事、改小忌著位袍被供奉、左少將實益不改小忌供奉、有例云々、(假被宣下右了)別當(秀光)不帶弓箭被供奉、二位中將爲後騎、少納言爲清朝臣不供奉路次、參會土御門殿云々、藏人右少辨政光(廷尉)爲備御所奉行、雜隼人十二人爲前行、召進之、如十四日矣、相續內侍所有渡御、供奉人注左、見參祿法案同見奥、室町殿連日雖有御參、三箇日見參不奉入之、且職事之所被命也、今日還幸供奉卿相次將等、不入節會見參者也、元日見參、不入小朝拜參人爲准的矣、

○下略

〔季連宿禰記〕貞享四年十月十八日癸亥、依召參一條攝政殿、(兼輝)○一條被召御前仰云、文永度大嘗會被略子細有御勘度被思食云々、仍歸宅之後、文永代始公事抄一卷令借獻、十一月十七日壬辰、早旦壞却大嘗宮、(悠紀主基神殿)略悠紀主基節會今日被行豐明節會、○中略未刻許著朝衣、刻限巳前令參陣、御裝束運々事等令催設、諸司漸以參集、著小忌諸司等今日猶不改之、(私小忌諸司小忌同前也、大臣之外者、不脱小忌之由見舊記、)秉燭之程內辨內大臣殿御參、令經床子座前給、予一身候座前蹲踞、御揖之後平伏如恒、(大外記不候床子座、小忌政官)行、其儀內辨內大臣殿令著仗座給、(奥)次今出川大納言(伊)、廣幡中納言(豐)、左大辨宰相(熙)等著陣座、(小忌之前大臣令過給時、不致其禮者不可然歟、仍不候床子座云々、是攝政殿密々被告仰大外記云々、但納言經前之時者、可爲各別歟、人不著陣座、)次職事頭中將仰內辨、次內府令著端座給、此間之儀一如御次第歟、陣儀畢頃之諸卿著外辨、經床子座前人々、今出川大、廣幡中、(直揖也)左大辨宰相等也、(大外記在床子座、不起座、依小忌也、予一身起座、向人々相揖如恒、)右史生重

基、左官掌紀氏辰、依小忌不著外辨座、此事兼令窺攝政殿之處、仰云、於小忌政官者、可有子細歟、然而早速雖被勘之間、可用捨歟之由被仰下、仍今夜彼輩不出外辨座、中臣奏壽詞已前、外辨大忌公卿起外辨座之時、在外辨座外記史等起座磬折、史生官掌召使等蹲踞、大忌公卿還著之時同前、大中臣景忠卿就版奏壽詞之時、主殿少允亮信取松明候中臣之右方、壽詞奏畢入御之由人々稱之、吉志舞人四人、（持昭舞、如倍隨舞人、）兼候月華門、二獻居畢之程、藏人安倍泰貞（殿上六位、倉橋、）出目舞人、退著胡床、舞人出庭中、音樂如舞還入、（吉志舞跡絕歟、只其由許也、）階下座今夜儀置之、兼而不用意之故不置打板、只疊許置之、奇怪之間予不著之、（階下座者、元官方沙汰歟、然而掃部寮置之、打板者、修理職之沙汰也、仍官方強而不及口入、）宣命使御酒勅使左衛門督勤之、祿所奉行左大辨宰相也、事了子終刻許歟、兩日共無異無事令申沙汰、冥助之至雖盡端筆千喜萬悅無限者也、

御次第攝政殿御作進也、續左、

大嘗會辰日豐明節會次第

早旦中臣鎮祭大嘗宮殿、令人夫壞却、次主水司供解齋御手水御粥、陪膳藏人頭、役送藏人、次裝束司奉仕殿庭裝束、其儀撤御帳立高御座、當高御座坤設大忌座、立臺盤、（如例節會）又設小忌座於南廂西第二間、立臺盤、中務省右仗南五尺置宣命版、其南去一丈許置尋常版、式部省尋常版南一丈許置壽詞版、其西立標、諸卿著仗座、小忌大忌裝束如例、一上不參者、職事仰內辨、內辨召官人令敷軾、內辨召外記問諸司、次問外任奏、外記持參之、次內辨召職事進外任奏、（先進攝政、如例、）次返賜外任奏、內辨結申、職事仰詞、內辨目之、職事退、次內辨召外記賜外任奏、仰可候列之由、次諸卿起座、次內辨起座、諸卿著外辨、（小忌書殺、大忌後著、以小忌爲先、）上官同著床子、（上官外記中原友昌、史安倍亮仲、史生宗岡信行、同宗岡直行、官掌紀氏友、同親盛、同兵親、召使宗岡行長、同季行等著之、式部季行下之、案下ノ盛、其大忌公卿著一伊、季綱ノ前へ引下也、）外辨上首令召使下式筥、次召外記問諸司、近衞引陣、次御高御座、內侍置劍璽於東机、藏人置式筥於西机、近仗警蹕、起居胡床、內辨徘徊軒廊行事、次開門、闈司分居、（今夜闈司不見、但出歟、可尋、）諸卿就標下、（異位重行、不著靴、小忌人々就此列、外辨大忌公卿起座、不經後門直東行、入南門者、乘也、還著之時、皆經後門、）諸仗立、次神祇官中臣、執賢木副

笏、就版跪奏壽詞、群臣共跪、奏訖中臣退出、諸卿拍手四段、（段別八度）作居一拜、自上﨟退出、著靴復外辨座、諸仗居、式部撤壽詞版、內辨著東廊代兀子、次內侍臨西檻、次內辨謝座昇殿著座、（內辨東方ニ令練步給之程、外辨自下﨟起座、）次內辨召舍人、次少納言參入著版、次內辨宣、刀禰召セ、次少納言稱唯出召之、次外辨參列標下、（異位重行、以小忌為先、）諸仗立、次內辨宣、敷尹、次群臣謝座再拜、次造酒正授空盞於小忌上首、（造酒正大外記師廣朝臣著靴取空盞、如例節會、）次群臣相共再拜、次小忌上首返授空盞於造酒正、次群臣（以小忌為先、）昇殿著座、（小忌著庇座、大忌著母屋座、）諸仗居、次陪膳采女撤御臺盤帊、著草塾、（當時草塾代設圓座、）次內膳供御膳、（八盤、蓋詞發之後入御也、仍不供御膳歟、）次供殘御膳、次賜臣下粉熟、（先居小忌座、）居畢內辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、次供鮑羹、次供御飯、次供進物所御菜、次供御廚子所御菜、次賜臣下飯汁、（先居小忌座、）居畢內辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、次供白酒、（四度、）次供黑酒、（四度、）次賜臣下白黑酒、（各一坏、先居小忌座、）次供一獻、賜臣下、（先賜小忌、）次國栖奏、（如例節會之國栖、）內辨催之如例節會、次供二獻、賜臣下、（先賜小忌、）次奏吉志舞、次供三獻、賜臣下、（先賜小忌、）次御酒勅使、（其儀如例節會、）次內辨奏宣命見參祿法、先著軒廊兀子見文、畢取杖參上、進御屛風南妻、付內侍奏聞、御覽畢返賜、內辨取之退下、賜杖於外記、取文復座、入御時參弓場、付職事奏聞、次內辨召參議賜宣命、次召參議賜見參祿法、次參議著祿所、次群臣下殿列立、（以小忌為先、）次宣命使著版宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣拜舞、次宣命使復座、次群臣復座、次入御、群臣警折起座前、次近仗歸入、次群臣下殿賜祿、一拜退出、

〔友俊記〕寬延元年十一月廿日午、豐明節會行る、（中略）群卿仗座に著、內辨官人をして膝突を立かしめ、外記をめして諸司具するやと問ふ、外記外任の奏をもてまゐる、內辨披見、職事をもて奏聞、をはりてかへしたまふ、內辨外記を召して仰奏をたまふ、群卿座をたつ、近衞階下に陣す、皇上（桃園）高御座に御す、近仗警を稱す、群卿外辨につく、（小忌を先とし、已下なぞらふ、）政官同じく床子につく、外辨の上卿召使を召、式の筥を下す、外記を召、諸司の具否をとふ、內辨兀子につく、內侍をばしまにのぞむ、內辨謝座昇殿兀子につく、政官砌下座につく、次開門を仰す、闈司分れをる、內豎舍人を召す、大舍人

唯と稱す、少納言版につく、內辨刀禰を召す、少納言唯と稱し出て召す、群臣參列、(異位重行)諸仗立、內辨敷尹を宣まふ、群臣謝座謝酒をはり、殿にのぼりて座につく、諸仗立つ、御臺盤の帷をはらふ、內膳御膳胳のおものを供す、臣下粉熟を下す、(小忌を先にし、巳下ならぶ、)すゑ畢て內辨天氣をうかゞふ、御箸なる、臣下應す、おつもの、御飯、進物所の御菜、御厝子所御菓を供す、臣下飯汁を下す、すゑ畢て內辨天氣をうかゞふ、御はしなる、臣下應す、次一獻國栖の奏、二獻久米舞、(今度其儀なし、)三獻御酒勅使、吉志舞を奏す、次倭舞、內辨宣命見參祿法を奏す、內辨參議一人を召宣命をたまふ、一人見參祿法をたまふ、參議祿所にむかふ、群卿殿を降り列立、宣命使版につく、宣制一段、群臣再拜、又一段群臣拜舞、群卿復座、群卿殿を下り祿法をたまはり退出、入御近仗蹕を稱す、

〔壬生家記〕嘉永元年大嘗式

午日、卯刻撤悠紀主基兩國標、所司裝飾高御座、構舞臺於殿前、中務省舞臺北東一許丈置宣命版、南去一許丈置尋常版、所司預辨備御膳幷群臣饌如常、皇帝(○孝明)出自後房遷御高御座、卽內侍臨檻喚大臣、大臣稱唯到左近陣西頭、謝座昇自東階就座、所司開門、次大臣喚舍人二聲、舍人共稱唯、少納言代之入就版、大臣宣喚大夫等、少納言稱唯出喚之、王卿依例稱唯、(小忌人先、群臣次之、下同、)參議以上一列入自會昌門東戶北入門、諸仗共起立定、大臣宣侍座、依例稱唯、謝座酒就座、訖諸衞共居、所司益供御膳、(其御器便用兩圖所已設)王卿諸仗共起、大膳職益送群臣饌、一巡之後吉野國栖奏歌笛、訖伴佐伯兩氏率舞人入門、(左伴氏、右佐伯氏、五位已上相分而列、)就中庭床子(所司預設、)奏久米舞(廿人二列而舞、)訖退出、三巡之後、召大夫分賜御酒、次安倍氏人(五位已上相分而列、)奏吉志舞(出人幷人數行列等同久米舞、)次奏大歌幷五節舞、訖次小齋王卿以下下殿列立拜舞、次掃部寮立祿床於舞臺南、次神服女四人於舞臺北供解齋和舞、次神祇官中臣忌部及小齋侍從以下番上左右分入、造酒司人別賜柏、卽受酒而飮、訖以柏爲縵而和舞、(先神祇官、次侍從、次大舍人、次左近衞、次右近衞、次左兵衞、次右兵衞也、)訖辨大夫就版奏祿數、其詞云、絹若干匹、綿若干屯進(止)申、訖式部省進王卿五位以上見參文、外記受之計

會、更寫一通、副祿法進大臣、內記亦進宣命文、大臣執奏之、又定堪宣命參議以上一人奏之、畢大臣喚宣命大夫付宣命文、受之復座、次以見參文付參議一人、受之就賜祿座、次群臣下而列立如常、訖宣命大夫下殿、就版宣制云、天皇我詔旨止末宣不大命乎衆聞食止宣、群臣稱唯再拜、更宣云、今日波大嘗乃直會乃豐樂聞食日爾在、故是以黑岐白岐乃御酒赤丹乃穗爾食惠耳岐罷止爲氏奈毛常毛賜御物賜久止宣、以次稱唯、俱拜舞、宣命大夫復座、群臣各復座、式部輔二人執机、左右相分立版南、唱王卿以下名、以次稱唯進受祿、再拜退出、皇帝還宮、

〔代始和抄〕大嘗會事

五節といふ事は、毎年十一月にある事也、大嘗會の年にはかぎらず、○中略中の丑の日は舞姬參入、帳臺の試といふ事あり、昔は常寧殿にして此事あり、官廳にて行はるゝ時は、西廳七ヶ間をもて北二間をば大師の局と名づく、これを帳臺ともいふ、大師とは舞姬に舞を敎る女をいふ也、ひかしは舞姬參入の儀式などことごとしく有けり、いまの世には曉參といひて、ひそかに參入するよし也、舞姬毎年は四人にすぎず、大嘗會には五人あり、二人をば受領分と名付て、國司の女を奉る、三人をば公卿分といひて、公卿おのおのむすめをえたてゝまゐらせられけるなるべし、

帳臺の試といふは、主上自ら大師の局へ出御なりて、舞姬を御覽ずる事也、この時は主上御直衣に御指貫を著御あり、これは殿上人に立まぎれさせおはしますよしなり、舞姬一人ごとに、火取の童、茵のわらはは下仕などゝて、かいしやくの女房そひて參上する也、后町の廊の亂舞などいふ事あり、殿上人共袖をかへす風情あり、

御前の試といふは、寅の日の事也、是は五人の舞姬を御殿の庇へめされて御覽するなり、官廳にては、後房のひさしに大宋の御屛風をたてゝ、そのうちに座をまうけらるゝ也、露臺の亂舞といふ事あり、渡廊に殿上人立ならびて、藏人頭わき戸の內にて袖をかへす事などあり、御前のめし

に今樣の物まねなどいひて、をかしき事どもある也、所々の推參は、院の御所をはじめて、郢曲の殿上人などのまゐりて、朗詠今樣亂舞などあり、思の津といふ事をうたひて、殿上より御前に參上する事あり、

童女御覽といふ事は、卯日のことなり、舞姫の介錯のわらは下づかへを、朝所の廣庇に召れて天覽ある事也、主上は簾中に出御あり、殿上人等これを扶持す、仰によりておの〳〵かざしたる扇をおかしむ、さかるべきをばめしおかれんためなるべし、

〔中右記〕寬治元年十一月十七日乙丑、五所五節舞姫參、（治部卿、宰相舍二人殘參、右大臣、美作守清長、備前守季綱、參入、儀如例、）有帳臺試、但依御物忌無御出、（○堀河）攝政殿自御宿所相替出御、內府以下親昵上達部等扈從、殿上人候脂燭、其儀宛如主上之御出、　十八日丙寅、五節舞姫參上、有御前試如例、　十九日丁卯、申刻許有童女御覽、其儀如常、（治部卿童女事不被年、有故障云々、）攝政殿候簾中給、右大臣以下親昵上達部五六人被候簾前、

〔本朝世紀〕康治元年十一月十三日辛丑、今夜五節舞姫參內、（權中納言藤原實光卿、參議同經業、同經實朝臣、越後守藤原光明、甲斐守同顯遠、）各獻舞姫、今夜帳臺試也、

〔兵範記〕仁安元年十一月十三日癸丑、五節參也、獻舞姫人々、右衞門督重盛卿、參議成賴卿、參議親範朝臣、美作守宗盛朝臣、武藏守知盛、此中美作有參議、偏爲內府（○平清盛）御沙汰、仍晚頭參六波羅亭、三位中將六角宰相來座、雲客濟々、諸大夫群候、自入候院（○鳥羽皇女暲子）遣叢物銀鎰、入其身硯筥蓋、敷紅薄樣、被居之、少納言信康爲御使、春宮亮敎盛朝臣代主人被給、請之申畏由、次御使歸參畢、

童女二人、下仕四人令著裝束、（盛業奉仕之、）

次出立、姬君乘毛車、（著裝束、納物行事相副遣五節所、）

女房六人、（白衣濃打衣、）乘毛車三兩、

童女二人、裝束色目如恒、同乘毛車、

下仕四人(乘二網代車二兩一)

前駈

姬公車十人(民部大夫六人、衞府四人、皆束帶、)

女房車以下、衞府各二人、

入上東門參著郁芳門外、副北築垣立連之、南向立、楊以西爲上、北間預藏人光能使出納等問舞姬參否、及亥刻雲客群集北陣、雨貫首不被座、希代事也、頭辨稱五體不具穢、頭中將假所勞由今日披露云云、仍左中將實守賴定朝臣等以下自殿上口被起也、先貞觀殿北面列立、此間掃部寮敷筵道、(自朔平門下經玄輝門、至于常寧殿東北、)次雲客被向朔平門、次寄童女車、(毛車)下車參上、雲客扶持又取裾、次傅女房六人、(乘三兩、)次下仕四人、(已上雲客等扶持之、)次姬公昇、次政宗賢範保時盛取几帳之角、衞府四人差之、又一人抱姬公、右衞門督新宰相武藏守舞姬曉參云々、次預藏人經廻童女下仕等裝束乎、各此間攝政(基房)○藤原令光能(令出給之)可有帳臺御出之處、公卿一人不參、兩頭不候、左府以下雖被相催、臨期不被參入、是頭中將兼不告申云々、以外懈怠也、攝政御出、依無扈從不渡給、仍雲客卿預藏人行事令昇舞姬、五位藏人經房延後不及知行歟、於后町廊亂舞如例、此外事存式無違亂、下官雖無出仕之志、美作五節所事、依內府幷二品命所參內也、不列亂舞所、不指出他所云々、常寧殿辰巳角南面自馬道以東、爲右衞門督五節所、其北丑寅角、爲辨宰相五節所、三　其西北面自馬道以東、爲武藏五節所、五　同殿未申角南面自馬道以西、爲新宰相五節所、二、其北角爲美作五節所、四　十五日乙卯、有童女御覽事、先雲客著殿上座、盃酌如昨日、次廻五節所、右衞門督童女二人、左中將賴定朝臣一人付之、下仕二人、藏人二人付之、此外無御覽事云々、五節所等今夕移入省廊單、大極殿後房中央間爲馬道、馬道以東四箇間爲主上(六○條)幷中宮御在所、其儀上張承塵、下有假板敷、東第二間爲御寢所、第三間爲御座、向馬道有棟別戶、東第二間南北有戶、以馬道以西四箇間爲女房候所、馬道有戶、西第二間南北有戶、馬道北面戶幷彼

新造戸六箇間、及馬道南面等懸御簾、歩廊四箇間南北第一間、東西各立戸、第二三間上構連子打廡、長押下塗壁、西面構廂二間、二行對敷疊爲殿上人座、但不立臺盤、東福門以西廊北面四箇間爲仗座、東廊南第三間以北西面五箇間、爲右衞門督五節所、第一人其北五箇間爲平宰相五節所、第三人北廊自東三箇間南面爲大師局、皇嘉門以西五箇間南北兩面、爲攝政御直廬、西歩廊西華門以西北面三箇間爲殿上、敷長筵并疊等立大盤箇唐櫃等、西廊自南三箇間爲藏人町并主殿司宿、其北五箇間爲藤宰相五節所、第二人其北五箇間爲美作五節所、第四人北廊永福門以西二箇間南面、爲御輿宿、其西五間爲武藏五節所、第五人昭慶門西掖南面二間爲女官候所、其西三箇間爲御廚子所、其西樓爲右近陣、昭訓門西廊西面爲瀧口候所、西爲樓爲右近陣、昭訓門以南東面爲內辨右大臣休幕、

〔愚昧記〕仁安三年十一月廿日丁丑、今日大嘗會叙位、又皇太后宮可入御大內云々、〇中略藏人保信來云、可候帳臺試者、申承了由、是兼日蒙催之人々右大臣、〇藤原兼實內大臣、〇源雅通左大將、〇藤原師長而右府俄申所勞之由、兩將軍供奉行啓御供也、〇中略雖有宮仰、兩人〇內大臣、左大將、退出云々、仍其替予〇三條實房并左衞門督〇藤原實國可候云々、〇中略彼兩人不可扈從攝政〇藤原基房之由存也、於予等者相親之間何可然哉、兩人所存甚以奇恠、且又恐也、康治度法性寺禪閤、于時爲攝政、出給帳臺試之時、雅定實能子時共大納言大將扈從之、兩人已異姓他人也、必相親之人不可追從歟、彼雅定何人哉、則是內府親父也、雖爲養子、偏知實子、至內府者尤可存彼例、況謂花族氣、與雅定非一日之論、今有天運至丞相之位、嫌攝政之扈從、甚見苦事歟、左大將者又一門也、何可遁避哉、但思彼舊意歟、然尤有恐、於今者併可忘舊懷歟、兩人之意趣至愚事歟、又有遁避此事之心者、今夜不參行啓可稱故障、而乍供奉行啓、陳無道之意趣、已似蔑朝威、殿下腹立、忽稱胸所勞更發之由、令申不可罷出之由云々、仍伯耆守親宗爲御使、自宮頻依被勸申、及晚天、然出給、〇中略予、金吾同參入、金吾申云、今夜參入之人、不參童女御覽事定不候歟、然者明日無左右著直衣可參內候歟、命云、今夜參入打任御覽日可參入、但近代事雖知歟、予云、猶无左右參入之

條、頗可无便歟、此間舞姬參上、併參上之後、予又退出了、殿下歸給、已曁日卯刻也、金吾云、可參御覽否事承切之後可退出也、予云、不能所望事歟、則退出歸路之次向大丞許、參御覽事、可伺御氣色歟之由示合之、答云、可令申入也、又語件間事等了退了、抑左衞門督云、御覽日不可參者、今夜不可候之由欲令申者、予云、一口請之條、頗雖无面目何爲哉、不參御覽者、不可候之由尤可無便、又強不能所望事也、殿下腹立退出、自宮雖令奉留、明日申可參入之由出給云々、甚不便事也、 廿一日戊寅、秉燭之後向左府(○藤原經宗)亭、(○中略)左府云左右大將解官之由、此曉信範所來仰也、仍召遣大外記了、而未見來、所待入也、然間賴業參入之由勾當清光申之、予起座立隱遣戶外、即召賴業於眼前被仰云、右近大將源朝臣(○內大臣雅通)大納言皇太后宮大夫左近大將藤原朝臣、夜部不候帳臺試、各可解却其官、賴業稱唯、左府云、大臣無解官之例歟、賴業云、左遷流罪之外不候歟、頭辨可勸申之由依仰遣、雖引勘不候者、(○又見兵範記)

〔百練抄 三高倉〕治承四年十一月十七日、五節於新都(○福原)被行之、大嘗會年不被行之、但於新嘗祭者於古京神祇官被行之、

頭書 大嘗會以前五節、圓融、花山、二條院例也、

○按ズルニ、安德天皇ハ、此年大嘗會ヲ行ヒ給フベキヲ、遷都諒闇等ノ事ニ由リテ、壽永元年十一月ニ延引セリ、サレバ此年ハ唯五節ノミヲ行ハレシナリ、

〔玉海〕元曆元年十月廿七日壬午、頭辨光雅來云、今年五節無勸仕御覽之人、右大將(○記者藤原兼實子良通)相構可勸仕者、申無計略之子細畢、入夜以書狀重仰云、(遣基輔朝臣之許之狀也)猶可廻秘計者、申猶無術之由畢、此責甚無謂、如何如何、 廿九日甲申、光雅朝臣送札云、御覽事猶可勸仕者、答以使者可申之狀畢、此事尤有恐、仍內々可申入歟、疎遠之身愁在朝廷、於事損面目、以非預譴責、生涯彌可厭歟、雖存此理不遂其事、可恐可恐、 卅日乙酉、早旦招法皇(○後白河)近臣藏人右少辨定長、謝辭退御覽之恐、 十一月一日丙戌、定長爲院御使來猶被責御覽之事、勿論勿論、然而不能申領狀、只奏恐歎之趣畢、計略無其力之上、

事又爲非據、何爲何爲、　二日丁亥、自女院被仰下云、院仰云、御覽日童女裝束事、右大臣所申之、永久例實雖默止、但院中無物、又有指合事等、仍可調賜一具、早可注申色目之由可仰、遣彼大臣之許者云云、卽付御使注進色目、此事一昨日招定長令申子細之次、永久三年故殿〇于時内大臣藤原忠通被獻五節之時、自白河院御出家之後又無妻后被調獻御覽日童女裝束、若雖被許御覽者、任彼吉例、自院可調賜之由雖可致所望、事體似逆鱗、仍不能申出之由内々語定長、而伺松容奏聞云々、仍有此勅命歟、凡今度御覽譴責之次第、不當之上失面目、仍致固辭、而若頗有優恕沙汰、誘其事可致此營、若又有無道之責者、更不能致其沙汰、存此旨申出彼例之處、不慮有此沙汰、仍慭可經營歟、但可調賜一具之由、奇特之中奇特、凡未曾有獲麟、殊勝第一之事也、可彈指可彈指、然而近代之事不能是非、只奏恐悅之趣許也、　三日戊子、自女院被仰云、自院乍二具可調給云々、尤畏申之由申了、　十三日戊戌、此日召集下仕所望之輩撰定之、童女同前、　十六日辛丑、此日五節參入也、公卿三人、右大將、左兵衞督經實、平宰相親宗、受領二人、但馬守範能、紀伊守範光、右大將御覽、左兵衞督參入、自餘三人參入御覽共不勤仕之、右大將無參入之儀、〇中略今夜五節所無傾、先例云々、童女二人、一人行賴女、[illegible]一人正綱女、[illegible]舞姬、前家司[illegible]忠重女下仕二人、不明、其父大將方女房所進也、　十八日癸卯、此日踐祚大嘗祭也、先有童女御覽事、寛治江記云、大嘗會事御覽云々、檢先例、寛和、長元、承保、久壽無之、長和、永承、治暦有之、寛和以後、除久壽之外、皆有之、但無御覽者、皆有由緒云々、長元先帝御事、承保上東門院御事、久壽近衞院御事、長元例云々、於寛和者、無指由緒歟、余案之、神鏡遷御在外土、豈非朝家之歎哉、此先帝之心喪、輕重不辨、況寛和例無殊故、又爲吉例、加之、天下衰弊之比、過差之遊興、太以無所據歟、御覽及泥醉者、非神事、非儀式、只爲催興宴也、旁背道理、今年御覽事不可然、後鑒有憚歟、爲後代聊注也、〇中略

今日大將御覽勤仕事

去八月之頃、蒙五節催之時、頭中將奉行領狀已畢、彼時付奉行人及院近臣定長等奏聞云、家習於五節者殊所刷也、而近年之爲體、每事失計略、下官〇兼實爲大納言獻五節之時、長寛元年依故禪閤命參入御覽共無其儀、卽爲恐父例、今度欲被免彼兩事、可獻五節之人五人、今四人之人中、何無勤一事之人哉者、有可然之御氣色云々、仍不致用意、其後依余重病、彌以無沙汰、而去朔比譴責再三、事失理致、

又無面目、仍堅以辭退、而及逆鱗之由有其告、仍招定長奏子細、（不能具載）此次申云、五人之中招一人譴責、人々所思、依天氣不快有此責云々、此條頗難、永久三年禪閤獻舞姬、白川院調賜御覽童女裝束、任彼例調賜者、且可施當時之面目歟、不然者異實不可叶者、翌日定長來仰之趣、雖無免除之仰、頗似和顏、然間内々自八條院被傳仰可注進裝束色目之由、注兩三進上、卽可調賜之由有院宣、仍忽然而有此儀之間、參入已下五節所禮儀等、不能卒爾之經營、只御覽之一事、依別院宣所勤仕也、雖乖家例、隨時之宜有此營、不可爲例耳、

廿二日丁未、五節事畢、舞姬已下今夜退出、大將五節裝束已下裝祿等注文、

舞姬裝束、丑日、

赤色織物唐衣　濃打袙　裏濃蘇芳袙一領　已上堀川大納言（入織物裏）

寅日

裏濃蘇芳袙一領　青單衣　濃打袙　濃張袴　青色扇　已上中御門大納言（入假裏）

青色唐衣　裙帶比禮　蘇芳末濃裳　已上借花山大納言

午日（例年辰日也、大嘗會時、以午日爲豐明也、）

青摺唐衣　濃打袙　裏濃蘇芳袙一領　青單衣　濃袴　目染裳　裙帶比禮　青摺扇　已上前源中納言（入假裏）

日蔭糸　蘿　古々呂葉　赤紐　已上於此殿新調

七尺鬘（理髮用意也）

童女裝束丑日二具（入八條院、各召衣宮遣、上召之日、裏赤色織物裏、）

織物白菊汗衫　濃打衣　裏濃蘇芳袙三領　青單衣　白表袴（織物）　濃袴　扇（雅賢朝臣）

卯日二具（院、各裏赤色織物、裏、不足衣宮遣、）

黄菊汗衫（織物）　紅打袙　紫匂袙四領　青單衣（謂之龍鱗）　白菊表袴　紅三重打袴　扇（公時朝臣）

下仕裝束　丑日（余沙汰、於光綱爲庄所課調進之、）

梅唐衣（立文）　裏濃紅梅褂三領　青單衣　濃打衣　濃袴　村摺裳　釵子（在緒）　扇（定長）

卯日（據政、生絹假裏、不置衣筥蓋、）

萠黄唐衣　黄褂四領（皆同色）　濃蘇芳打褂　紅單衣　紅張袴　村摺裳　釵子（在緒）　扇（兼定）

打出四具（保元入具、今度略定、）

裏濃紅梅褂五領（入五百兩綿、高一尺六寸、）　濃打衣　濃紅梅單衣　梅表著　蒲萄染唐衣　不出袴（是故實也）

五節雜事、（依略儀無定文、長寬例也、）此注文經泰注進之、

一調度

二階　泔坏（在蓋）　薫爐（在籠七寸）　打亂箱（每夜入紅薄様一重）　脇息　行事國行、所司重經、

一理髪具

末額　七尺鬘　蒔櫛　彫櫛　上櫛　下櫛　釵子四（花釵子一二、在緒、）　本結（紫糸二兩許）　日蔭（在緒六筋）　心

葉二　鬘　行事國行、所司重經、

一裝束

屏風五帖（四尺一帖、濃繪、）　壁代七帖　几帳八本（在帷、三尺一本、四尺七本、）　茵二枚（唐錦、東京錦、）　御簾十三間（母屋四間、庇九間、）

疊十五枚（繧繝二枚、高麗十一枚、紫二枚、）　領筵五枚　差筵卅枚　鎭子十二　燈樓（四、在綱）　燈臺三本（在打敷）　火櫃二口（在鉢箸）　炭取二口　行事以政朝臣、光綱、賴高、兼親、所司政職、侍仲政、下家司久行、

一盥具

手洗二口　楾二口　行事

一舞姫裝束（色目在端）　行事經泰、所司政職

一童女裝束四具(色目在端) 行事兼親、經泰、所司重經、
一下仕裝束四具(色目在端) 行事保行、長俊、所司重經、
一打出四具(色目在端) 行事賴高、兼時、所司賴重、
一仕丁裝束八具
退紅 襖袴 襖衣 帶 烏帽子
一祿
大師 長絹六匹 綿三連(三十兩) 凡絹百匹(代白布十段) 白布七段(共女官七人料) 長絹一匹(執行女官料) 口
筥一口(在裹料美絹四丈) 火櫃一口(在鉢箸) 炭取一口 紙立菓子十合 雜菓子二百七十合 饗料
理髮 長絹三匹 綿二連(廿兩) 褂一領(執行女官) 凡絹三十匹(代白布三段) 疊三枚(高麗) 白布一段(執行
女官) 白布七段(共女官七人料) 椋手洗一具 口筥一口(在裹料絹四丈) 薰物一裹 白物一帖 紙 經粉一
盤 細綿一壺 紙立菓子十合 雜菓子百七十合(共七十合女官料) 饗料米三石
小師 上絹三匹 綿二連(二十兩) 褂一重(裏濃蘇芳、青單衣) 濃袴一腰 凡絹三十匹(代白布三段) 細美
布一段(手巾料) 美絹四丈(帶料) 几帳一本(在帷料美絹四丈) 手筥一合(在納物) 屛風一帖(唐紙) 火桶一口(在鉢
箸) 炭取一口 疊七枚(高麗二枚、紫五枚) 燈臺一本 簾三間 圓座一枚 貲布七段(共女官七人料) 饗料
米二石四斗 紙立菓子十合 雜菓子二百五十合 炭一籠
琴師 絹一匹 綿五屯 凡絹二匹
鬪司 絹二匹 綿十屯 凡絹五匹
小歌 絹一匹 綿五屯 凡絹二匹
拍子 絹一匹 綿五屯 凡絹二匹
今良三人 各綿三屯 信乃布二段

小舍人三人今度不給之、不參之故也、　一人六丈絹一匹、凡絹三匹、　二人凡絹各二匹

仕人二人　各布一段

行事光綱、經泰、侍貞光、

一饗

朝餉　寅日二位中納言　卯日堀小路中納言　午日新宰相中將　各白布五段、以絹裹之、

前物　大師左衞門督　理髮右兵衞督

小歌衞重　右近府庭頭濟最

屯食十具　六府各一具　北陣一具　藏人所小舍人二具　進物所膳部一具

大破子十一荷　小歌二荷　脇陣二荷　掃部寮一荷　主殿寮一荷　內膳司一荷　主水司一荷　朔平門一荷、和德門一荷　玄輝門一荷

雜菓子　內侍所女官卅合　掃部女官廿五合　同男官十合　御服所女官廿合　洗女官十合　東豎三十合　御手水女官十合　御匣殿女官十五合　主殿女官廿合　御藥女官十五合　御膳宿女官十五合　御湯殿刀自十五合　進物所女官廿五合　水司女官十合　御樋殿女官十合　小歌女官四十合　大盤所女官三十合　上御厨子所十合　上刀自廿五合　命婦十五合　藥殿十合　書女官十合　油守十合　主水十合　御門守十合　女史十合　內膳刀自十五合　采女中廿合　同官人中十五合、縫殿女官十合　御井廿合　黑摺十合　闈司十合　糸所十五合　水取十合　女孺十合　當女十合　上御厨子所廿合　御厠人十合　長女十合　御服所命婦廿合　下御厨子所十合　御髮上女官廿合　主殿十合　女工所十合　女嬬十合　裹人所五十合　行事所小舍人卅合　仕人中廿合　內豎中五十合　官召使廿合　木工寮十合　和德門十合　朔平門十合　脇陣廿合左右各十合　縫殿陣十合　內膳十合　六府各十合

一棚

内十荷　院十二荷　上西門院八荷　八條院十荷　皇后宮八荷　殿下八荷（已上御使御隨身）三位殿五荷　右大臣殿五荷　權大納言五荷　源中納言三荷　藤中納言三荷　中御門大納言三荷（已上內々事也）　行事經泰、所司重經、

一櫛

内（書結）　院（和結）　八條院（大繪）　皇后宮（棚）　殿（洲濱）　此夜寅午兩夜、裹櫛少々被儲五節所、行事國行、兼時、所司重經、

一雜事

打覆七間　打出長櫃四合　例長櫃四合　疊臺四脚　覆筵三十枚　炭百籠　油壹斗八升

雜器用途高足二脚　簾代筒木（九竿）　針　糸

一貴所御使祿

院　宮内卿經家朝臣、女裝束一襲、廳官六丈絹一匹、

八條院　右馬權頭基輔朝臣、女裝束一襲、廳官六丈絹一匹、

殿下　兵部權少輔信廣、白褂一領、

〔自曆記〕建久九年十一月廿五日戊午、今日午日節會也、〇中略今朝風流櫛三、（琵琶一面入遣袋、大納言殿所令調給也、箏一面、紀州經高訪也、臨息與州、宰相殿御訪也、）一作物五十荷令進院給、右衛門尉定滿爲使、（衣冠）兼依相觸權辨參會取進之云々、美麗云々、巨多見者稱美、此外院宮所々、次第令分之給、子細見雜事文書、　廿六日己未、今日棚櫛猶被遣所々、〇中略　次參宣陽門院、謁女房進櫛、頗有感悅之氣、源大納言先是參入、可被挾懷、女房密々被告示、然而不能遁避、出來被謁、自大納言殿給獻物、殊喜悅之由頻被談、中宮權大夫當參入、是爲御覽也、今日先是有院御覽、少將實宣雖可付不見、仍無扶持之人、右中辨參上、予〇吉田資經　不慮參會、取臺尻中

門邊候、然而非扶持之儀、只不期依參會也、右中辨扶持也、又謂女房退出、于時秉燭以後也、

〔玉葉〕建暦二年十月廿一日癸巳、今日五節定也、○中略 親房來申頭中將參由、余○藤原道家 出居招頭中將、中將昇居公卿座末、仰云、可獻五節舞姬者、申承了由、 廿四日丙申、頭中將示送曰、五節棚太以爲失損、内院各十荷、他之院宮、次第可減員數之由有院宣云々、申承之由、 十一月十一日癸丑、五節參入也、○中略 自院有御使、早可令出立之由也、別當出車退之間、如此之由申了、親房朝臣來申殷富門院御使候由、余仰可召之由、即諸大夫敷圓座於廣庇、西間、余座間也、今一人取之舞姬裝束持來、置余前長押上、以打敷裹重之、色目在別、 次御使中宮權大進朝房參上著圓座、即親房朝臣持來祿給之、大褂一領、濃袴一腰、加朝房取之、經中門廊西簀子、降自南妻、進出庭中再拜、退出中門外了、次諸大夫來取裝束、置舞姬裝束前、次親房朝臣又來申中宮御使候由、仰可召之由、如初、即諸大夫取置女裝束二具、裹打敷、如例、置余前、如例、次大進象隆持壺物來置裝束北方、蒔繪硯筥上置火取□□在重物、又有銀筥也、必勤陪膳也、 退候同座、實隆朝臣殿上人也、取余衣一領給之、余衣取衣可給也、然而近代多如此、永久自本宮令獻給、象隆取之降庭、一拜退出、其儀如朝房、諸大夫二人、來取裝束、置女裝束前、所乘一人取壺物進御所、又一人取圓座退出了、此間寄舞姬已下車、余向其所、先之候車寄南階、侍從三位定家卿立几帳屏風、齋司三分付車、舞姬乘車、寄々女房一人乘後、列立南庭、先是余仰云、有出車列立南庭、西上北面、次寄一車、先例同可寄之、今度最末、車遲々、仍催促耳、 乘了引立、余候車東、已下次第乘車、實信親房等朝臣寄之、殿上人出來、仍無人、仍親房相加寄之、不可爲後例、然間童女車猶遲々、別當可進之由、先日達奉書、今夜專遣之處、未失空歸了、仍催點實氏卿車也、仍仰置奉行家司親房、余且以參內、○中略 小時舞姬參之由以經來告、予前駈也、 實首已下殿上人等過北陣、小時殿上人等引導舞姬已下來、余於簾中扶持之、皆悉參入之後、余經承香殿馬道幷南簀子假長橋等、參殿上方、○中略 頭中將經通告出御之由、大相國已下經殿上上戶、進候清涼殿孫庇、主上於額北間長押上著御御沓、淺沓也、先例大內之時著御深御沓、敷可尋、又御直衣如恒、紫浮文御指貫、御下袴、則著御沓侯□□、 經弘庇幷長橋給、大相國、余、源大納言等、於長橋西邊著沓、大相國沓中將家嗣持來、余沓實隆朝臣通光可取沓前駈□□□□□、 御路長橋承香殿南簀子馬道、幷后町廊等、相國以下於五節所南壺上脫沓、各殿上人取之、 馬道到御壺禰妻戶、主

上入御、大相國褰簾、頭辨取御沓、（執柄之外無褰御簾之儀、若藏人頭可候歟、可尋事也、）此間余已下跪候、入御了、大相國氣色、余入簾中候南方、（無帖、）余通光同入候、（北方）主上御屏風中也、相國云、御路不敷莚道如何、佗人不言、心中思様八敷之了□□、今案可謂不審事歟、近代敷之時被撤歟、次舞姫參上、殿上人等扶持如例、依程遠不見、次第之儀如例、又見次第、仍不記事了、殿上人必奏亂舞、次舞姫以下退出、次還御、先大相國等儀外之後出御、（大相國褰簾、頭中將獻御沓、）經本路還御、　十七日己未、今日送棚於所々、院風流櫛二、棚十、（新制也、）內同之、各隨身爲使、其上以殿上人內々相副也、七條院（御櫛一、）殷富門院、宜秋門院、承明門院、（無風流櫛、）齋宮齋院等（同之、）六荷、各遣之、以侍隨身等爲使、關白家（櫛七荷、棚一、）右大臣（櫛六荷、棚一、）九條大納言等也、陰明門院、宣陽門院去十二日遣了、又二品許內々以以經爲使、送棚櫛等了、　十八日庚申、棚六荷送右大臣、以侍爲使、依有訪也、　十九日辛酉、此日院童女御覽也、辰一點之由有催、自然遲々、未刻童下仕裝束了參上、（童用公雅車、下仕車侍男、）（共一兩在侯、）下仕用家司職事車、須余相具也、而依相勞事不參、永久法性寺殿引兩三卿相命參給也、不可爲後例、傳聞於廣御所有御覽、所々皆參之後各下車、下仕於門外□之、童女於東中門廊下車、但余下仕許於中門同車、是家例也、初扶持人々相副參上御前云々、佗所下仕候東庭、余下仕在簀子、是同家例也、童女等在廣庇云々、源大納言藤大納言在御前座云々、

〔百鍊抄　十五　後嵯峨〕仁治三年十一月十一日己丑、五節舞姫參入也、帥中納言（資頼、）左衛門督（顯親、）中宮大夫（實藤、）國伊賀三條中納言（公親、）長門大藏卿爲長卿等也、

〔增鏡　十六　久米のさら山〕みやこには十月（〇元弘二年）廿五日、御禊の行幸なり、（〇中略）十一月十一日より五節はじまる、前の御代（〇後醍醐）には、談天門院の御忌月にてとまりにしかば、さう〴〵しかりしに、めづらしくて、わかきうへ人どもなど心ことに思へり、おきの御門（〇後醍醐）の御めのとなりし吉田の一品宣房も當代（〇光嚴）につかへて、五節などたてまつる、こゝろのうちぞあはれにおしはかる定房の大納言も、さるべき雜務の事などにはいでつかへけり、

〔園太曆〕觀應元年十月十日壬辰、藏人右少辨時光爲勅使入來謁之、五節間事也、申詞續左、〇中略
五節事依往代舊風行來尙矣、而近來諸國衰微、群臣窮困、無沙汰歟、然而尙累代始、一向被停止之條不可然、且文永不依蒙古蜂起、被減員數可被行之由、衆日令治定歟、然而事依倍增臨期停止了、雖不足爲例、本數被減少之段其沙汰勿論歟、於折中之儀雖爲兩三箇所被構行之條有何事哉、此上宜在時議乎、
十六日戊戌、藏人辨時經來、勅使也、可獻五節舞姬云々、當時涯分經營雖治之上、日數相迫了、難治之由申、

〔後深心院關白記〕永和元年九月十七日甲戌、俊任來、有勅問事、仰詞、五節事、五箇所不可事行之上者、任文和例可爲二箇所歟、以折中之儀可爲三箇所歟、可計申之由可仰焉、　余申詞、五節事五箇所不可事行者、任文和佳例、二箇所何事之有乎、

〔永和大嘗會記〕廿一日〇永和元年十一月丑の日にて、五節の舞姬まゐる、其儀式省略によりて、殿上人などむかふ儀なし、侍從中納言公時、藏人權右少辨資敎五節を奉る、五ヶ所たるべしといへども、文和の例によりて二ヶ所の五節なり、けふ天皇〇後圓融帳臺に入せ給ふ、其儀朝所の東の間より出御有、御直衣むらさきの御指貫淺沓をめさる、關白御簾をかゝぐ、宣方朝臣御沓をたてまつる、大閤直衣かれのいいだしぎぬ御後に候す、關白直衣、すはうのいだし衣西園寺前右大臣〇實俊同大納言公永皆直衣いだしぎぬなし扈從す、殿上人脂燭をさして前後にさぶらふ、けふはしのびたる儀にて、御劒璽道など供する事はなし、大方帳臺といふ所は、五節所の大師がつぼねなり、大師とは舞姬ををしふる者の名にや、五節所に入せ給ふ、大閤〇藤原良基關白〇良基子師嗣簾中に候せらる、前右大臣父子おなじく座につかる、其後舞姬のほか下仕以下、おもひ〳〵のきぬいと其興あり、むかしは美人をえらび童女にたてまつる、この帳臺の儀も、天子舞姬をめして密宴の儀なり、童御覽のほど、殿上人雅兼朝臣、秀長

朝臣、親雅朝臣、兼時朝臣、信俊朝臣、俊任、經重、資狀、言長、兼邦、藤原永行、菅原長遠、みな束帶にて、后町の廊に二行に列立して、郢曲の人、びんだゝらをうたひはやしあげて、下臈より亂舞あり、藏人頭宣方朝臣、妻戶の內に立たるを、戶をあけて萬歲樂をうたひて、たび〳〵はやす、宣方朝臣袖をかへす、いと其興あり、これは藏人頭をもてなす儀なり、事はてぬれば還御あり、御路は渡廊より正廳の北おもて、五節所に入せ給ふなり、還御又もとのごとし、天子のさしぬきをめす事は、けふより外にはなきにや、殿上人にまぎれさせ給ふよしなり、後鳥羽院御まりの時ぞ、此張臺の出御に准じて、御さしぬきをめされけるとは承り侍る、廿二日、けふは寅の日なり、○中略御前の試あり、舞姬まゐりて、後房のひさしに屛風をたてゝさぶらふ、大齋といふもの庭にすゝみて歌をうたふ、此間露臺の亂舞あり、渡廊なり殿上人も左右に立てびんたゝらをうたひて、萬歲樂のはやしあり、藏人頭隆廣朝臣脇戶の內にて袖をかへす、其後舞姬出て、殿上人ども御前にめして、物まねさるがく、いろ〳〵のきやうせ有、いとおかし、廿三日卯の日なり、○中略童御覽あるべけれども、あまりに計會によりて略せらる、

〔代始和抄〕大嘗會事

殿上の淵醉は、寅卯の日この事あり、殿上人ども直衣あるひは衣冠にて、色々の出し衣をして盃酌をすゝむ、朗詠今やうなどうたふ、寅の日は獻無極盤山御山をいだす、卯の日は新豐蓬萊山をうたふといへり、貫首の人紐をとき、亂舞の事あり、すそかづきといひて、女房など見物せし事どもむかしはありけるにや、

〔中右記〕寬治元年十一月十八日丙寅、未時許於殿上有淵醉、藏人左近將監高階重仲爲一獻、基有瓶子也、事了貫首以下相引廻五節所、次參院、於前齋宮御方有淵醉事、院御大炊殿、近々之間步行、院司上達部互有勸盃事、了各退出、十九日丁卯、未剋許於殿上人々有淵醉、藏人左近將監高階忠依爲一獻瓶子、事了貫首以下引向五節所、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、殿上淵醉、兩頭不參、左中將實宗、右少將基家朝臣以下雲客、藏人左少辨長方、勸解由經房、權守近俊等廿餘人著殿上、藏人等勸盃、秀才光能（青色袍、紅梅織物下襲、織物指貫、布袴云々、）勸三獻盃、有饗應、五位藏人經房朗詠云々、亂舞一通、畢立出渡殿、廻五節所、其儀如何、於中宮御方又有淵醉、權大夫定房、左兵衛督實國被候座上、盃酌三獻、四位殿上人初之、事訖雲客退出、

〔自暦記〕建久九年十一月廿一日甲寅、今日殿上淵醉也、仍巳刻參大内、而及午刻、貫首頭中將遲參之間、未事始、及未終殿上始事、頭中將公國、內藏頭經仲、源中將雅行、前右衛門佐隆雅、伯耆守仲經、梅小路少將公清、四位少將教成、藤少將實宣、高倉少將經通、藏人勸解由次官清長、三條侍從伊時、左衛門佐隆仲等著座、初獻勸盃、（藏人基輔、）二獻（基邦、）朗詠藏人次官出之、經通朝臣助音、三獻勸盃仲房、（當時一臈、）今樣仲房出之、各一廵饗應、以外五獻解紐、源中將是次立座、各袒裼著座、（此間阿音、）有通渡殿幷朝餉出御湯殿、今更東折、經弘徽殿前、同五節所、于時秉燭也、次皇后宮淵醉也、公卿冷泉納言以下少々參、次參院、殿上人卅餘人、藏人遲參之間、强及夜半、頗被待成不興、是遲參故也、被相待之處、殿上事遲始之間、如此及夜陰、亂舞兩度、先置檜、其度不舞、次歸參、　廿二日乙卯、今日殿上淵醉也午刻事始、貫首羽林遲參之故歟、著殿上人、貫首、羽林、前右衛門佐隆雅、源中將、中御門少將、頭辨、梅小路少將、木工頭兼定、（出衣、昨日不參、）此間朗詠雜藝、勸盃如昨日、次袒裼殿上人回五箇所、殿上人纔十餘人也、各遲參不可說、

〔玉蘂〕建暦元年十一月四日壬子、兼隆來申大夫申狀淵醉之間殿上裝束事、申云、副奥座被出打出之條不可然、座上北障子一間有打出、西三箇間ニハ副御簾立亘御屛風可宜、是先例也云々、尤有理可然之由口久大炊御門殿二棟廊之儀如此之由見故殿御記、又晝御座押出尤可有事也云々、是自本有沙汰事等也、此外多有申旨等、不遑具記、　五日癸丑、兼隆來申淵醉公卿事、今日參院申御點云々、右大臣、源大納言、大宮大納言、藤大納言、新大納言、權中納言、別當源宰相等有御點云々、早可加催之由仰了、有辭退之人ハ、重申事由、以院宣可催遣也、　二年十月十九日辛卯、賴資云、淵醉之時、廣庇可

敷、筵哉否有沙汰、内々如何、余云、尤可被敷也、必不限后宮、凡如此可敷之歟、院中如此、又云座末后宮御時紫緣帖、院中如何、予云、先例不審、后宮敷之、院中不敷之歟、尤可被尋例歟、卽退出了、十一月十二日甲寅、修明門院淵醉也、○中略殿上人淵醉未始、良平卿來言談、此間殿上人等參集、愛隆來云、範茂朝臣爲女院御使可參五節所、令向可宜云々、余相共良平向五節所、然間殿上淵醉又始了、仍不能更歸南殿方、事了向藤壺方、○中略余於此所待女院淵醉、刻限遣人見之處、右府、○藤原公繼光親卿之外未參云々、仍余參女院御方、昇弘徽殿南階、暫候東庇座、卽淵醉之座也、只假所坐也、右府被坐言談、此間諸卿多以參集、只被待相國、○藤原家實出仕云々、小時相國參入云々、有召之後了著座歟、自本非著座之儀歟、今余未得其意、仍右府、余起座、出南戶向殿上方、相國來此所、殿上人發集狼籍、無物于取喩、左中辨定高來告召之由、次大相國已下著東庇座、北上對座、簾同不打出、爲御座、其南三間有打出、座上有燈臺二本、依召兩頭候座末居便、手長殿上五位、大相國、右府、余等、陪膳皆四位也、一兩人居了、殘不居畢、次一獻、左中將範茂朝臣、次二獻、頭中將經通朝臣、次居汁、次三獻、宰相中將實氏、次朗詠、別當出之、此間高通已下可然殿上人等應召候簀子、次四獻、宰相中將實氏、今度可脫紐歟、而大相國無左右取盃、實氏有不審之氣、尤可然、暫不起座、目令復座、此間大相國議定可脫紐、□□右府有猶四獻之氣、相國可及六七獻之由稱之、光親五獻先例之由申之、次今様朗詠數反、次五獻、別當有雅脫紐、大相國暫仰可飮也者、取盃兩三巡之後仰袖口事也、已下皆脫紐如例、別當復座之後又今様、次萬歳樂、自下臈舞之、至大臣皆立舞之、又有謂物舞、殿上人等置櫛公卿舞之、次出白薄、高通出之有相舞事、余與通光舞、大相國右府舞之、先是依召進菓子與余相舞了、已下起座下殿、次下宿所、脫裝束就寢、

〔增鏡 十一 今日の日蔭〕十一月、○正應元年、中略此程は大嘗會五節などのゝしる、さきの御世○伏見にはひきかへて、中宮、皇后宮、院たち、おかれ／＼おはくおはしませば、殿上人どもすいさんの所おはく、かしらいたきまでめぐりありく、

〔實躬卿記〕正安三年十一月十九日甲寅、今日殿上淵醉也、中終刻事始、頭大藏卿經継朝臣、〈藤圓織物奴袴、無文、〉〈裝束者、□□事行、白衣、同單衣、〉頭左中將定房朝臣、〈及多數浮織物奴袴、裏山吹、表著浮線綾物、今度制符□□□多用御綾織物、有其煩歟、〉郢曲左中將頼成、敦定、俊兼、□□少將景邦、侍從冬定、職事兩貫首、藏人大輔經世、少輔宣房、權大夫仲高之外、中將經氏□前木工頭隆長、〈定房弟〉左衛門權佐藤朝著殿上、基藤朝臣不候之、深責出云々、傳說如此、○中略今夜遊義門院、昭訓門院等淵醉也、子剋人々參集、以評定所西向爲其所、御所間有押出、左右供奉掌燈、公卿座南北面對面敷高麗端疊、其末加敷紫端各一枚、末又立燈臺一本、透渡殿內庭座御隨身〈久長、重□、久□、武時、久風、〉立明參仕、公卿奧端相分著座、二獻之後、兩貫首被召著之、參仕人々、關白、〈松重出衣、〉左大臣〈欅出衣、〉右大臣、〈不出衣、〉權大納言、〈實兼、〉春宮大夫、〈兼重、紅打出衣、朽葉、〉左大將〈內實、紅打出衣、圓浮線綾物奴袴、〉藤殿大納言〈道平、紅打出衣、紫奴袴、〉中納言中將、〈經平、紅打出衣、〉〈蘇芳衣、青單衣、紫奴袴、〉中御門宰相、〈宗冬、不出衣、〉別當、〈冬季、斤染衣、不出衣、綾奴袴、已上直衣、〉一獻實前朝臣、二獻定房朝臣、三獻別當、四獻中御門宰相、〈□□、□用、〉五獻權大納言、三獻以後郢曲、殿上人被召著弘庇、五獻以後亂舞等如常、權大納言、春宮大夫、中御門宰相等、音曲事了之後、昭訓門院御方、於西公卿座有此事、御裝束儀大略同前、但無御隨身立明、廳官立明、前右大臣〈黃青裏出衣〉加候、此外人數同前、一獻實前朝臣、二獻親氏朝臣、三獻經繼朝臣、四獻別當、五獻左大將、〈□座上、□顯用、〉亂舞以下每事如前、抑不母后女院淵醉、頗無先例云々、但定有其謂歟、可尋記、予密々見物、群女濟々、頗以狼藉、今夜猶可有所々推參之由支度之處、已天曙間歸參內云々、

〔花園院御記〕元弘二年十一月十二日戊寅、今日廣義門院公卿淵醉也、於公卿座有此事、三間狹之間、南弘庇一間假指入之、東南二方卷簾、西壁懸翠簾、別屛風二行敷疊、北第一間妻戶出纐纈几帳、有打出、左右供掌燈、二棟南弘庇指入之、掛簾爲見物所、亥終殿上人等殿上淵醉了參入、仍先於院御方推參、賴教宗兼朝臣以下亂舞等如例、於東透渡殿有此事、郢曲無人數之上未練之間、太以無興、雖成依咳氣無聲、能行大略一人也、尤冷然、雅朝、教有未練之故也、次於公卿座有淵醉事、○中略

淵醉次第○中略

刻限新院御隨身□久澄、久文、□三人也、□立明北上西面

上達部著座

次居看物 打敷 大臣三本 高坏 納言以下二本

大臣前 同殿上四位陪膳五位役送

納言以下前 殿上五位役之、頭數奧宗兼歟

此間依上首命藏人頭著座

其次可然殿上人有之者、同可召付六位藏人居看物、懸盤一脚

次居菓子 盛硯蓋二合、或三合 盛手筥蓋二合、或三合

殿上五位役之

公卿上首前一合、座末一合、與殿上人之間爲三合者、公卿座上下殿上人座少置之、

次一獻勸盃

四位院司 能行朝臣、廳官傳盃、大臣候者可取次酌、

六位藏人取瓶子 銀提

次二獻勸盃

藏人頭 宗兼朝臣 瓶子同上

郢曲殿上人等依召參候弘廂、不預看物并盃、

此次殿上人皆悉推參、仍郢曲許可召之由自簾中被仰之、內府傳仰之、面々起座退出了、

次三獻勸盃

參議 實繼朝臣 勸盃之役退下、巡流了後還著座、

朗詠今月實守卿出之、後兼頼以下助音

次四獻

中納言實守卿進盞之、後着座瓶子同上、

於座上朗詠雖是助音同前

祖揚内大臣爲解劒、不改府、

今様蓮華山後兼頼出之、實守卿着座以後也、郎助音、

次五獻勸盃

大納言、實忠卿瓶子同上、

今様靈山御山、能行出之歟、

萬歳楽至三兩實甘二以

亂拍子及公卿

納言以下二反、實尹卿以上三反、後兼頼出之左大將以上五反、公宗卿以上後兼拍子、□白髪、内大臣舞三反之時、實守卿拍子、

次殿上人同舞起座

次公卿差劒、自下﨟起座、今夜不差劒、於座公卿事相談、内府不可差之由存之歟、

〔永和大嘗會記〕おなじき廿二日、○永和元年十一月けふは寅の日なり、先殿上人の淵酔あり、夜に入て殿上人ども参あつまる、頭左大辨宣方朝臣、直衣、櫻のいだしぎぬ、頭中將隆廣朝臣、直衣、紅のいだしぎぬ、室町左兵衛督雅兼朝臣、直衣、櫻のいだし衣、楊梅中將兼時朝臣、直衣、紅のいだしぎぬ、綾小路少將信俊朝臣、直衣、紅梅のいだしぎぬ、藏人左少辨俊任、束帶藏人右少辨經重、束帶藏人權右少辨資教、同右兵衛佐資、衣冠、紅のいだしぎぬ、楊梅少將兼邦直衣、紅のいだし衣、藏人將監藤原永行、青いろ衣冠、紅のうちぎの、橘知季、衣冠、濃打衣、藏人中務丞菅原長遠、衣冠、こきうちぎぬ、みな殿上の座

のおくはしにわかれ著す、主上〇後醍醐大殿、關白、右大臣など、上の戶にて御覽あり、女房十人ばかり、すそかづきとて、衣のすそをかづきてさぶらふ、皆これ先例なり、三獻あり、二獻に雅衆朝臣獻無極の朗詠をいだす、五位職事ことにたへたるなきゆゑに、郢曲の人いだすなり、三獻はわずかりの藏人永行を賞翫す、藏人頭ひぼをとく、みなかたぬぐ、色々の衣のいろはえ〴〵しく見えたり、又いまやうあり、信俊朝臣、靈山のみ山の句を出す、人々助音いとおもしろく、やがて扇子をたゝきて萬歲樂をはやす、下臈より次第にたちてまふ、そのさまいと興あり、藏人頭再三はやす、かたのごとぐ袖かへすばかりなり、事はてゝみな座を立て五節所にむかふ、後房の前庭をへて渡りらうの戶より五節所にむかふ、行列下臈より一位にわたる五節所のまへにてひぼをさし、かたぬぎ、おなじまをおの〳〵退出す、昔は五節所にてうるはしく遊などありけるにや、〇中略同廿三日、卯の日なり、〇中略殿上の淵醉、昨日のごとし、こよひは人々なはおほく著座、資康朝臣、仲光朝臣左右の行事にて、けふの標山に供奉す、小忌ながら別めしありて殿上にくはゝる、その外實宣朝臣標山の國司將にて、おなじく小忌を著す、淵醉の式昨日におなじ、けふの朗詠は新豐酒色、信俊朝臣これをいだす、今様蓬萊山の句、兼時朝臣これをいだす、五節所にむかふ儀よべのごとし、殿上の上戶にて御覽、大閤、關白、右大臣、前右大臣、前內大臣など內々しからず、見物のきぬかづきども、所せばきまで見えたり

〔神祇官年中行事〕臨時大嘗會

荒見河祓　中臣二人、卜部四人、神部等參勤、

〔代始和抄〕大嘗會事

荒見河のはらへとて、紙屋河にて、上卿以下參向して、祓の事あり、

〔大嘗會儀式具釋二〕荒見河祓次第

是ハ大嘗會ニ奉仕スル行事ノ辨史等、是マデ思ハズモ汙穢ニ觸テ自知ザルコトモアルベケレバ、其ヲ祓棄テヽ、是ヨリ清淨ニスル儀ナリ、大嘗會ノ散齋ハ十一月朔ヨリナレドモ、行事ノ辨史ハ、先是マデノ汙穢ヲ除カンガ爲ニ、九月晦ニ河祓ヲナスナリ、凡祓ハ水邊ニテスル物ニテ、贖物ニ我罪咎ニテモ汙穢ニテモ移シテ河水ニ流シ捨、跡ノ殘ラヌ樣ニスルコトナリ、昔ハ荒見河ト云ルハイヅレノ流ヤラン知ラズ、今ノ祓ハ京ノ西北ニ紙屋川トイフアリ、今ノ人カイ川トヨブ、此川ノ高橋ト云モトニテ祓ヲ行ハルレドモ、名目ニハ荒見河祓ト云ナリ、

刻限兩方行事辨史著座（悠紀方自北進著、主基方自南進著、）

兩方ハ悠紀ト主基トナリ、豫メ紙屋川ノ流ノ東崖ニ西面ノ幄ヲ立テ、其幄ノ東極ニ白縁ノ疊ヲ敷事、中央ヨリ北ニ三枚、南ニ三枚、其幄ノ後東ニ、五幅ノ青白斑幔ヲ南北ノ行ニ引ク、幔ノ柱五株アリ、

次中臣進出執贖物（神部授之）居由紀辨前、

贖物ハ人形ナリ、陶器ヲ以テ之ヲ作ル、神部ハ神祇官ノ伴部ニテ、官中ノ雜事ニ供スル者、昔ハ中臣忌部等モ神部ノ中ニ約シテ、職員令ノ如キモ神部ハト部ヨリ上ニアリ、近世吉田家ノ昇殿セショリ、何トナクト部ハ卑シカラヌ者ニナリ、神部ハ廢絶シテ臨時ニ取充ル故、無下ニ卑シキ者ニ成下リヌ、今度悠紀方ノ神部ニハ、賀茂社ノ刀禰仁兵衞ト云者ヲ以テ之ニ充ツ、益親朝臣幔ノ北ヨリ進ミテ幄中ニ出ヅ、仁兵衞贖物ヲ益親朝臣ニ授ク、益親朝臣之ヲ執テ賴要ガ前ニ居ユ、但贖物バカリニハ非ズ、總テ三ノ土器アリ、其一ツニハ贖物、一ツニハ散米、一ツニハ解繩ヲ載テ、三ツ共ニ之ヲ賴要ガ前ニ居ユ、

主基方同之、次居贖物於史前、（悠紀史前神祇官史生置之、主基史前鑰取置之、史生依爲一人也、）

贖物ハ辨ノ前ニ居ルト異ナルコトナシ、亦是悠紀主基各三ノ土器ニ載ス、

次兩方卜部進出著膝突、或辨史著座之後著之、

兩方ハ、悠紀ト主基トナリ、其悠紀方ヲバ稻實卜部ト云ヒ、主基方ヲバ禰宜卜部ト云フ、但昔ハ拔穗使ニ、悠紀ニモ主基ニモ各稻實卜部、禰宜卜部トテ兩人ヅヽアリ、貞觀儀式以下ニミエ、今荒見河祓ニ、悠紀方ヲ稻實、主基方ヲ禰宜ト分チ稱スルコト、據ドコロ有ヤ知ラズ、卜部ノ膝突ハ、アラカジメ悠紀主基各史ノ座ノ前西河邊ニ葉薦ヲ敷テ、其上ニ白縁ノ膝突ヲ敷ク、此卜部ノ著座スルコト、或ハ辨史著座ノ次、中臣進出ノ以前ニアリ、即今度ノ次第モ中臣進出ヨリハ以前ナリ、然レバ今度ノ次第ヲ注サンニハ、直ニ辨史著座ノ次ニ卜部ノ著座ヲ注スベシ、何ガ故ニ通式ノマヽニ之ヲ次第シ、式ヲ以テ今度ノ次第ヲ注セル、作進ノ人ノ差失ナリ、

次悠紀方卜部取大麻授中臣、中臣取之進辨前、

此大麻ハ當時用ユル幣ニテ紙シデヲ幣串ニ著タル物ナリ、アラカジメ悠紀主基各卜部ノ座ノ前ニ八脚ノ小案ヲ置キ、其上ニ俵ノ形セル薦ヲ置ク、其薦ノ中ニハ物アリヤ知ラズ、幣串ノ本ヲ薦ニ突立テ置ク、

主基方同之、次辨作令持大麻於中臣、取大麻末一撫一吻、（或辨取大麻、一撫一吻返授之、）其儀畢中臣授大麻於神部、

神部引史又中臣、

一撫ハ一タビ撫ルヲ云、但大麻ノ末ノ所ニ手ヲ荷且ニ著ルバカリナリ、一吻ハ一タビ息ヲシカクルヲ云、撫ルハ是我身ノ表ニアル汗穢ヲ移サンガタメ、吻スルハ是我身ノ裏ニアル汗穢ヲ移サンガタメノ態ナリ、引史トハ史ニ屆カシムルト云義ナリ、或ハ此所辨大麻ヲ取テ、一撫一吻シテ中臣ニ返授クル事モアリ、但今度モ辨ハ取ラズシテ、中臣ニ持シメタレバ、如此或以下ノ十二字、今度ノ次第ニ書加フルハ是ナラズ、

次中臣返大麻於卜部、退著座、次卜部立大麻於軾前、讀祝詞、又取大麻修祓、其儀畢退入、次中臣起座、

進辨前撤贖物、史前贖物並取撤之、

此土器辨史ノ前ニアル間ニ、兩辨兩史各贖物ヲ振テ散米ヲ散キ、解縄ヲ口ニテ嚼解ク等ノ態アリ、今度モ同ジク然リ、次第ニ載セザルハ略ナリ

以上各主基方同之

以上トハ一振一吻ノ態以下ヲ指ス、各其所ニ注セルガ如シ、

次兩方行事辨史起座〇下略

〔本朝世紀〕康治元年九月八日丁酉、神祇官及悠紀主基兩國司幷山城國郡司等荒見河祓事、悠紀右中辨源雅綱、主基權右中辨藤原朝隆朝臣等以下、寄行事等參仕、各就幄下卜定齋場、

〔兵範記〕仁安三年七月廿七日丙戌、參行事所、召陰陽頭令勘申來月次第日時、〇中略

陰陽寮

擇申、可被行大嘗會悠紀主基荒見河祓、幷齋場所雜事日時、

八月廿三日壬子　時巳二點　若未〇中略

仁安三年七月廿七日　權大允賀茂朝臣修平

主計頭賀茂朝臣在憲

〔三長記〕建暦元年九月廿四日癸酉、今日荒見河祓云々、

〔季連宿禰記〕貞享四年九月廿一日丙申、依使者參頭中將基勝朝臣許、被命云、近日可有大嘗會荒見川祓、官方調進物、以此一冊可了簡之由、即被出一冊、件一冊、年號幷記者不知云々、即披見之、彼間事申談之、頭中將被命云、行事官調進祭物贖物、木工寮調進入足机幄一字等也、　廿二日丁酉、參庭田中納言、重條卿荒見川祓調進物之事令申談、庭田被命云、舊記不分明之間、只隨便宜可用意云々、即荒增定申調進物等之事、

祭物　贖物　大麻

右行事官重基調進（是昨日基時朝臣、被召仰行事官代右少史亮仲云々、祭物贖物等行事官爲覺悟云々、）

幄一字（南北四間、東西二間半、屋形幷東北以幕引廻之、昨日被出記趣者、今例悠紀主基一字云々、往古二字立之、）

八足小机二脚（載祭物机也、寸法可尋、祭物之品、猶可示合行事官云々、）

右木工寮弘之調進

調進之品、右之趣可下知之由庭田被命、仍歸宅之後召仰木工寮弘之、行事官代亮仲等各申承之由、

卅日乙巳、今日大嘗會荒見川祓也、悠紀行事辨左中辨韶光朝臣、（勘解由小路）同史右大夫高橋春宣、主基行事辨右中辨賴重（葉室藏人辨也）同史左少史三善亮衆等著行之、自餘之行事不及參向、只行事辨史許也、卜部二人、神祇權大祐連直、卜部連屋、（以上二人、自吉田家被催出歟、各五位云々、然而著四位袍、）中臣二人、久富、全親、（以上二人、平野社家云々、）神祇官史生代紀氏辰、（東帶、左官掌神祇官公文所等兼帶、）神部二人、鎰取二人（以上四人賀茂社氏人也、神部二人者淨衣、鎰取二人者黃衣、）等也、次第無之間不及委記、

去廿一日、自頭中將基勝朝臣所被出荒見川祓記一冊記于茲、（此記者非年號不分明、文字不審多端、）

荒見川祓

刻限兩辨中臣等同行向之、乙屋跡座三獻訖、兩辨率六位史已下被臨荒見川、神祇官四人（卜部二人、中臣二人、）同步列相向河頭、其東岸有幄一字、（悠紀主基二字也、今例一字、）迫岸西頭立小八足二脚、（悠紀、主基、）其上置祭物、（各一裹如形置）之、大麻指件祭物上、（兩方幄五間或四間）東敷座、（祓座也、左右同之、）辨以下著座之後、悠紀稻實卜部經悠紀幄北、進著軾一揖、中臣著座、（各北上西面、）次主基禰宜卜部、同時經主基幄南、著軾一揖、次中臣先進贖物、（神部授中臣、）進悠紀辨前、六位史前（史生）置之、主基同前、（六位史前鎰取居之、）次先悠紀稻實卜部一揖、取大麻授中臣、中臣獻辨、辨返中臣、史神部引之、其以下鎰取引之、神部返中臣、中臣返授卜部、卜部取之立軾前地、主基方役、（次第同前、）次稻實二拜、先讀詔戶詞、禰宜同間讀祝詞、次取大麻修祓、一返已後一揖、左廻趍退、主基同前也、次中臣

進辨前撤贖物、史以下盛取撤之、此間於幄前主殿寮立明、

右自頭中將基勝朝臣所被出之記也、今日之作法大概如此、但今度三獻之儀無之、又不入夜之間、

主殿寮立明等無之、○中略

祭物わらづと也、中へ何物を入歟不知、上に大麻をさす、

贖物つゝらのこりの丸きふたの如き物三つ、内に解縄と人形と散米とを被つゝらの一蓋に入て折敷に居也、解縄は、白き麻の緒三四寸計なるを二つによりあせたる也、左ならひ一筋、右ならひ一筋入之、件贖物居舉て、左の手と齒とをして解也、解舉て如元蓋に入、次人形を取て我身を拭、如元置之、拭事只其體計也、次散米を取てまくて也、毎度用左手、一筋者在右手、贖物居體、居たる右の方解縄、中央は人形、左の方散米也、

〔大嘗會雜事錄〕明和八年之度知音卿御記

一荒見河祓幄設樣之事、木工寮ヨリ以圖相伺之事、

一荒見河幄設場所、平野高橋邊掃除之事、如先例自武家有沙汰之旨申入事、

一幄內辨史以下座鋪設、示合局務、給圖ニ而相伺之事、

一荒見河參仕交名、一會傳奏奉行被差出之事、

荒見河祓參仕

悠紀行事史　　主基行事史

神祇官大祐　　大藏省兼木工寮少丞

〔壬生家記〕明和元年大嘗會門下諸司訴訟居書等留牒

事願口上

今度就大嘗會荒見川祓之節、神祇官史生代之事、任貞享元文寬延等之例、今度も參仕被仰付被下候樣奉願上候、此旨御沙汰奉願候已上、

申八月　　左官掌大炊大允紀氏富

官務殿

〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年九月四日、傳〈○傳奏〉奉〈○奉行〉招、荒見川川瀨、天明度トハ相違ニ付、敷設ノ所無之間、見分之儀請之度旨、從川奉行申出ニ付、大藏省ニテモ見分ニ可遣之被達事、　十二日、午一點荒見川川瀨見分行向之事、　十三日、從大藏省、昨日見分ノ川瀨繪圖并口狀書持參附傳奏事、　廿一日、今日荒見川祓也、兩行事辨史以下參向也、當局不及參向事、但事了後、兩行事史神祇官史生代辨侍等、各爲屆入來之事、但贖物役送悠紀之史前大祐居之事、明和元御定、文政更御定有之事、

〔行厚記〕文政元年九月十三日、入夜官務家ヨリ使者、御用之儀候間、只今可參入云々、卽刻參入之處、以書付被申渡之條如左、

來廿一日巳刻荒見川祓ニ付、兩行事史參向被仰出候、最御請出頭之儀ハ、天明之振合ニ可然候事、

右之趣被申渡候ニ付、天明之日記、此事不分明之由申答候處、左候ハヽ此度ハ殿下一會傳奏奉行衆等へ可申上旨被示聞、　十九日、村田左少史入來、來廿一日於平野休所之儀、神樂所と中所休所ニ相成候へ共、辨殿御兩人ニ而狹少ニ付、史兩人之休所別ニ被相渡候樣願書可差出旨、勸修寺辨殿ヨリ御心添有之候旨ニ而、願書相認、今夜官務家へ被差出、　二十日、明日荒見川祓參向ニ付、昨夜ヨリ更ニ神事入、廣橋殿へ參上、明日之御次第申出ス、此便ニ萬事相窺候處、辨殿御面會ニテ、萬端申合候事、御次第如左、

荒見川祓儀

先行事辨史幷史生官掌等著座、〈今度史生官掌不參向〉次卜部著座、次中臣居贖物於辨前、〈神部傳之〉神祇官史生居史前、次卜部取大麻授中臣、中臣取之進辨前、辨祓畢返中臣、中臣授神部、神部取之進史前、祓畢返之、神部返中臣、中臣返卜部、次卜部立大麻於軾前、中臣祝詞、取大麻修祓、此間辨史解除、次中臣撤辨贖物

史贖物、鎰取撤之、次辨已下起座、先下﨟
廿一日、荒見川祓也、束帶雜色一人、白丁沓持傘持二人、向平野參ル、暫休息、直ニ場所ニ向、紙屋川假
之場所、高橋ヨリ三十間許北也、假屋如先々、贖物史之前ニ居候事、行事官トモ談之上、史ヘ掛合申
候處、御次第之通、悠紀主基共氏意可居、且辨殿者、悠紀主基ト贖物中臣居之候ヘ共、史ハ依位次先
主基方之史山口、次悠紀方之史村田ヘ可居旨、右ニ付此度ハ行事官ハ調進計ニテ無役送、各座定
テ贖物ヲ行事官ヨリ神部ヘ渡、神部授中臣、中臣悠紀之辨藤修寺經則朝臣前ニ居、次同斷之次第
ニテ、中臣贖物ヲ主基之辨廣橋右中辨光成朝臣前ニ居、次神祇史生代氏意贖物ヲ行事官ヨリ請
取、先主基之史右大史紀行厚前ニ居、依位次主基方先ニ居次悠紀之史高橋春芳前ニ居、撤之義如先例、鎰取
ヘ與奪、神部鎰取ハ、上加茂社司ニ隨來ル、鎰取ハ黃衣ヲ著ス、相濟起座之上、一統退出、
〔壬生家記〕文政元年九月廿一日、今日荒見河祓贖物調進、辰刻前參向之事、當寮史生士信相從、
一辨史贖物四通、但先例之通人形計也、折數四枚、
一祭物舁苞
一同祓串二本
一兩辨贖物神部二人、唐櫃元ニ而渡之、士信役送、神部二人、夫より卜部二人江渡之、兩辨座前江居
之、
一兩史贖物史生代氏意、唐櫃元ニ而士信ヲ以渡之、
一兩辨贖物、如元役送撤之、
一兩使贖物、鎰取撤之、唐櫃本ニ而持參、士信ヲ以請取之、
一祓串中臣唐櫃邊持參、士信ヲ以請取之、
一午刻前相濟、如初唐櫃士信相從退出、

〔輔世卿記〕嘉永元年八月二日癸卯、依御招入來堀川近江守、右者過日荒見川祓御場所、下夕點撿被致候趣之處、早々繪圖面可被差出哉、且右幄之布覆之儀、雨覆用意可有之哉、右夫々御尋之處、右紙屋川者、一滴水之節者、瀬替リ候間、當月中頃ニ者、尙得と見分之上、圖面可差上旨被申上候處、御承知、右幄之布覆之儀者、天明度より板屋根に被仰付候旨被申上候處、左樣候者、右屋根ニ被仰付候、月日可取調御達之處、畏退出也、　九月十一日辛巳、入來堀川大藏丞、右者昨日御達有之候荒見川祓參向道筋、北野神明町作門樣之もの、取拂之事承合候處、何時ニ而も取拂候得共、先年者右道筋ニ而者無之、其向フニ在之候野道御通行之由、町内者申答候旨御返答被申上候處御承知也、　十二日壬午、家君御出門、右者裏松辨樣へ昨日依御招御出之處、辨樣御面會ニ而、荒見川祓所行事史贖物役送之事、文政度彼是間違有之候間、此度明和之通、行事官神祇官史生代等是を居ゑ候樣、御伺定可有之候間、御差支之外、彼是違背等之筋無之候哉御相談之處、尤御内意違背有之間敷候旨御返答、　十三日癸未、入來堀川大藏少丞、右者今日荒見川祓御場所、武邊立會相濟候旨御屆被申上、尤武邊立合人ハ、東西ノ町奉行附之與力同心二人ツヽ、當時在京之御普請役一人、〆五人也、且今日先例之通右御場所圖面一枚、武邊立合者へ相渡置候旨、且又先年とは御場所も廣ゲ有之候間、畢竟水切之事故、今度は蛇籠は不取立土俵而已之由武邊より申し候旨、且又高橋之邊より凡七八間程之處、道幅七尺計有之、又一間半程之處も有之、又貳間計之處七尺許有之、其餘者凡壹間半計ツヽ有之、尤右高橋小口より七八間之間、道幅七尺計有之處手摺出來之旨、武邊立合之もの申し候旨被申上候處、左候ヘバ定例之屆書ハ四ツ折ニ而被相認、幷右道幅之儀ニ付武邊より談候義者切紙ニ相認メ、明朝辰剋迄ニ可差出旨御達之處、畏退出也、　廿九日己亥、入來大藏丞、右者、荒見川祓無滯相濟候段御屆、猶御蔭を以無難ニ相濟候段御禮等被申上候處御承知、　十月三日癸卯、柳原樣へ御出、此間内々御賴有之候、大藏省調進荒見川祓之幄御所望ニ付、内々破却方之事

御取調候處、別紙之通申出候旨御返答之趣、御參內中雜掌ヘ御申入置、右大藏省書付ハ、御一覽ノ上御返却有之候樣御申入置、申刻許御歸館也、

大嘗會荒見川祓之節、調進仕候幄一字破却之儀、內々御尋之趣奉畏候、右者先例別段破却不相伺候得共、內實者天明度御再興調進被仰付候小忌幄二字、御下行少分候間、荒見川祓幄破却仕、小忌幄相用候、且又文政度小忌幄大幔三張、新調調進被仰付、是又御下行米小分ニ御座候間、總而見込ニテ、天明度文政度等兩樣共御請申上候由故、天明文政兩度共、別段破却御屆不申上候先例ニ御座候、右御品々ニテ、中ニ者其御下行ニテ調進難出來御品モ御座候故、夫々御下行米流用仕見込ニテ、新調調進仕候儀ニ御座候、於今度御同樣仕度奉願候事、

申十月　　木工寮

晦日大祓

〔儀式〕三踐祚大嘗祭儀

十月中略○下旬始於外院構大嘗宮雜殿、次天皇幸卜食川祓禊、其儀見上晦日於朱雀門前大祓、其儀同二季、

〔延喜式〕七踐祚大嘗祭凡大祓使者、八月上旬卜定差遣、中略○在京諸司晦日集祓、如二季儀、

〔文德實錄〕三仁壽元年八月己巳、十三日○大祓於朱雀門前、百官壹會、爲大嘗祭豫除群穢、　十月戊辰晦、大祓於朱雀門前、

〔三代實錄〕三淸和貞觀元年九月卅日壬午、雨、大祓於八省院東廊、爲大嘗會近也、依雨行事、故用東廊、

〔三代實錄〕三十陽成二元慶元年八月卅日戊戌、大祓於朱雀門前、以來十一月可修大嘗會也、　十月卅日丁酉、所司大祓於朱雀門前、緣欲供奉大嘗會也、

〔日本紀略〕八花山寬和元年閏八月卅日辛未、於朱雀門大祓、依可有大嘗會也、　九月廿九日庚子、今日於朱雀門大祓、依大嘗會、　十月卅日庚午、大祓、於朱雀門行之、依大嘗會也、

〔小右記〕寛弘八年九月六日丙子、今日申刻、於朱雀門行大祓、參議實成（左兵衛督）著行、大嘗會雜事定後、每月晦日可有大祓、而去月晦日坎日、仍今日行之、前日以陰陽家所令勘申也、今日大祓、而大雷甚雨卽止、有感應歟如何、酉刻許外記孝道來申云、朱雀門大祓了者、又申云、雷鳴以前諸司參、其雷聲漸止之間、左兵衛督參入者、　廿九日己亥、辨朝臣云、今日於朱雀門有大祓、每月晦日行之是例也、　九年（長和元年）六月廿七日癸亥、左中辨來云、（中略）○安和元年六月廿九日記云々、恒例大祓也、會行事五位已上辨大夫已下會朱雀門、但行事所幷所々預五位座、設辨大夫幷三省輔座後、六位已下假召掃部寮、令敷門內壇上東頭、（先例無座、而此度假設此座、）人形散米等、依天慶例行事所儲之、又所々主典代已上見參文令進云々、悠紀主基方內侍可參會云々、詳見後年日記、答依前例可催行之由了、　廿八日甲子、左中辨來、乍立相會、天祿記文持來、記六月晦日不行大祓之由、能見案抄出之處似相誤、是七月晦大祓事歟、六月晦例、大祓次有行事所祓、八月遣祓使於諸國、彼八月晦日、九、十月等、必有晦祓、至七月晦必不可有歟、仍示此趣、尙書有甘心氣、但又可尋之由相示了、　卅日丙寅、今日大祓事問遣案內左中辨、其狀云、依安和例可行之由、一日召仰史是氏侍、是則如仰、久永宿禰抄依似有事誤也、又承平記文、八月以後大祓由略所見也云々、始行大嘗會之官符、昨日請印了者、相副奉親朝臣書、其狀云、今日大祓、仰行事所令儲人形散米等、但分配上左宰相中將也、依尋常儀著輕服裝束被參入歟、今被加大嘗會司、可被著吉服歟者、可然事也、右中辨來云、（乍立相遇、）今日大祓分配上左宰相中將、而諒闇間、大祓或著吉服、或著鈍色行之、可有大嘗會大祓、著鈍色無便歟、會行事左兵衛督著行如何者、余答云、本分配人可著行、若無後障之時、行事所示案內於左兵衛督可宜歟、但左宰相中將可著吉服之事、可仰外記之由相答了、

九月廿九日甲午、今日大祓事、去夕思慮、國忌日相並行之如何、夜中可尋前例之由仰史是氏、是氏今旦參來云、古年中行事、六月晦日國忌、同日大祓者、依彼例可被行歟者、引見舊年中行事、如是氏申也、卽仰可准行之由、

〔日本紀略〕三十二後〕長和元年六月卅日丙寅、大祓、依可行大嘗會也、　八月卅日乙丑、大祓、依大嘗會也、

九月卅日甲子、大祓、依大嘗會也、

〔類國記〕長元九年九月廿九日、今日可有大嘗會毎月御祓、然而依當國忌延引、

〔本朝世紀〕治暦四年九月卅日己亥、大嘗會大祓也、

寛治元年八月五日甲申、大嘗會毎月晦日大祓、八月以後可被行事、　八月卅日己酉、於朱雀門有大嘗會大祓事、主基行事辨不參云々、　九月廿五日甲戌、右少辨命云、來晦日大祓、當國忌如何、承保元年九月晦日依國忌、十月一日被行大祓之由申了、　十月六日甲申、大嘗會大祓也、(朱雀門、去晦日依國忌延引、)　十一月二日庚戌、於朱雀門有大嘗會大祓事、去晦日依宰相不參延引之故也、

〔兵範記〕仁安三年七月卅日己丑、今日大嘗會行事所大祓事、長和寛治例也、　九月卅日戊子、今日毎月大祓也、主基方奉行朱雀門鋪設裝束如恒、未刻悠紀主基内侍駕車列立門南面垣下、(悠紀東二間、主基西二間、各口、)　下官幷右少辨大夫史以下諸司著座、大祓儀次第如去月晦日、次内侍歸參、下官等退去、諸司分散、　十月廿九日丁巳、參行事所、月次大祓也、所司存式、朱雀門裝束如例、未刻事具、牒主基右少辨自行事所來臨、女工所内侍同到來、次下官自行事所著圖座、悠紀内侍同出合、(令乘車、)　下官大夫史以下著圖座如前々、内侍二車引立門外壇、祓儀如去月月次解除、了内侍等歸行事所、下官同歸著、右少辨退出、

〔山槐記〕元暦元年九月十七日癸卯、今日被行大嘗會月次大祓、去月廿八日可被行之處、(毎月晦日大祓、初度擇日時、去月晦日滅日、)依天下穢氣及今日也、申刻(吉時申二點、)行事官向朱雀門行之云々、後聞宰相不參、撿按右大辨兼光卿辭申之後、人々又申故障、于今未定之故云々、但非撿按宰相參勤有例、又内侍不參、同未定云云、悠紀行事頭左中辨光雅朝臣、主基行事權右中辨光長朝臣、史等參仕、外記清原信安避座云々、抑

初度大祓宰相不參、久事例也、

〔園太曆〕觀應元年九月廿八日己卯、傳聞今日、去月晦分大嘗會大祓被行了、去月觸穢不被行之故也、仁治觸穢之時、大祓不及沙汰云々、而官務匡遠頻申行被行了云々、

〔延喜式四十主水〕踐祚大嘗會解齋七種御粥料

米、粟、黍子、稗子、葟子、胡麻子、小豆各三斗、鹽二顆、陶瓫、堝各七口、土垸七合、銃形片坏各十口、阿世利盤七口、洗盤四口、麻笥盤二口、中取案切案各二脚、陶臼土火爐各二口、炭二斛、白米九升、藥料薪足土垸四合、瓫三口、炭六斗(親王已下五位已上通用)

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

午日、(○中略)神服女四人、於舞臺北供解齋和舞、次神祇官中臣忌部、及小齋侍從以下番上以上左右分入、造酒司人別賜柏、卽受酒而飮、訖以柏爲鬘而和舞、(先神祇官、次侍從、次大舍人、次左近衞、次右近衞、次左兵衞、次右兵衞也、)訖辨大夫就版奏祿數、其詞云、絹若干匹、綿若干屯進止(止)申、訖給大膳、大炊、造酒及兩國司酒食、訖解齋服著常服、(○中略)晚頭掃部寮設解齋公卿以下座於宮內省廳事、其面位也、東方西面設公卿一人座、北方南面東上、次侍從以上座、南方北面東上神祇官座、其北面東上雅樂寮座、西方東面北上官史及中務宮內供奉所司座、豐樂殿宴畢未賜祿之前、小齋公卿一人率史及中務宮內供奉所司等向宮內省、神祇官先就座、次公卿已下依次就座、(公卿用東側階、侍從以上用北東一階、自餘用西側階、)訖神祇官奏解齋歌一成、次雅樂寮奏同歌、宮內丞二人先和舞、次神祇祐一人、次侍從二人、次內舍人二人、次大舍人二人、訖辨大夫喚官掌二聲、官掌稱唯立庭中、辨大夫問云、阿誰、官掌稱姓名、辨大夫命云、喚宮內省、官掌稱唯、退喚二聲、錄稱唯進立、(官掌所立)辨大夫問云、阿誰、錄稱官姓名、大夫仰御飯早速令賜、錄稱唯喚膳部二聲、膳部五六人共稱唯、錄仰云、御飯賜(部)、膳部稱唯、錄以下相分賜之、錄申云、御飯賜畢、公卿以下拍手四段、各退出、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕午日、(○中略)巳三點、供奉解齋舞、先神服女舞、(數限四人)次神祇官中臣忌部、及小齋侍從

以下番上以上左右分入、造酒司人別給レ柏、卽受レ酒而飮、訖卽爲レ鬘而舞レ之、○中略是日小齋侍從以下、於二宮内省一解齋歌舞如レ常、大膳、大炊、造酒及兩國司給二酒食一、訖脫二齋服一復レ常、

〔北山抄五〕大嘗會事

午日、○中略大藏積レ祿、辨奏二目祿一、儀式云、中事給二大膳大炊、造酒及兩國司酒食一、訖釋二齋服一、着二常服一者、而神祇式、於二宮内一解齋復レ常云々、○中略

天慶記云、此日晚頭、參議師氏、權右少辨好古、左少史御笠維宗等、率二緣事諸司一就二宮内省一行二解齋事一云々、近例不レ行二此議一、

〔北山抄五〕大嘗會事

辰日卯刻、乘輿安和私記云、於二綾綺殿一駕二御輿一時、初稱二警蹕一、或於二豐樂院後堂一初稱云々、出二光範門一、仁和寛平例如レ之、承平依レ不レ御二腰輿一、入レ自二宣政門一、出レ自二章善門一也、天慶以後、入レ自二昭訓門一、出レ自二章善門一、无レ所レ違歟、入レ自二豐樂院不老門一、謂二北門一御二清暑堂一、儀式幷新式云、易二御服一、遷二御本宮一、警蹕侍衞如レ常者、西式云、或頃御二清暑堂一云々、近例如レ之、以二殿南廊西面一爲二殿上座一、以二西華堂一爲二藏人所、御厨子所、進物所等候所一、少納言幷左右將監從二殿南庇一進二大刀契鈴等一、主水司供二解齋御豐御粥一、七種、巳日同供、午日供二一種一云々、神祇官鎭祭畢、令三國人夫壞二大嘗宮一、

〔大嘗會儀式具釋七〕辰日悠紀節會次第

主水司供二解齋御手水御粥一

解齋トハ神事ノ御齋戒ヲ解タマフナリ、辰日以下モ散齋ノ中ナレドモ、致齋ハ卯日マデナレバ、今朝解齋ヲ供ズ、但貞觀ノ儀ノ如キハ、午日ニ至リテ解齋ノ式アリ、中古以後ト同ジカラズ、又江次第ニ見エタルハ、今朝先清暑堂ニ御セラレ、小忌ノ王卿供奉シ、小納言左右ノ將監大刀契鈴等ヲ進リテ、次ニ御手水御粥ヲ供ズ、今ハ今朝清暑堂代ニ御セラルヽ儀ナシ、御手水御粥何ニテ供ズルカ知ラズ、其御粥ハ堅粥和布羹ヲ副供ズ、陪膳ハ藏人頭、○中略手長ハ五位藏人、○中略役送ハ六位藏人、

〔業資王記〕建曆二年十一月十六日戊午、今日解齋、

〔康富記〕永享二年十一月十九日丙辰、悠紀節會也、〇中略先是早旦、供御手水御粥、陪膳頭右大辨忠長朝臣、役送政光、源爲治等云々、

〔孟春記〕元文四年十月廿八日、自去年被仰付、大嘗會御調度之圖、先頃畫所預土佐大藏少輔光芳より差出于此宅、〇中略

廿三枚、解齋御粥御菜、

第一米、黍干、栗、薢干、　第二菓子胡麻干、小豆、

第三鮑、堅魚、鹽　第四和布御汁物

御粥御汁物等、主水司供之、但此内鮑、堅魚、鹽等、從内膳司主水司渡調進之、

〔友俊記〕辰日悠紀の節會、寛延元の年十一月十八日おこなはる、主水司解齋の御手水御粥を供す、

〔壬生家記〕明和元年十一月八日、大嘗會也、〇中略卯一點還御本殿、其後解齋御粥御手水事有之、于時卯半刻許、

〔輔世卿記〕嘉永元年大嘗會傳奏奉行備忘

當日、〇中略解齋方諸司、幷中臣鎭祭諸司可參候、

一解齋幷鎭祭御裝束、早々奉仕、仰六位、

一大祀方警固退御門閉申渡之事、但及天明者直御門開、如文政之事、且解齋鎭祭警固可立申渡、

一解齋御裝束出來、諸司具居有之事、大床子御座前燈臺二臺、御膳宿萬杉戸廊下等各一臺、都四臺供之、鬼間南方鳥居障子二枚撤之、西南隅立御膳厨子一臺、萬杉戸廊下設御手水具、如例、

一御裝束點撿之事

一采女廻リ催六位商量

一具之旨申殿下、折紙一紙、藏人方一枚、右進上、或兼進上

解齋大祓

一關請奏、言上、折紙一紙獻上、議奏料二枚進入、
一供進被仰出、
一仰六位事、
一陪膳釆供（六位）等供進有手水、
一釆女昇御臺盤一脚、立鬼間簀子、（簀二双、居五器、）
一陪膳與釆供、昇立御臺盤於大床子之前、（不居器、）
一釆供持來御粥、陪膳取之居御臺盤西緣、
一釆供持來御汁物、陪膳取之居御粥南、
第一（米粥、麥粥、小豆粥、薭子粥、）　第二（大豆粥、胡麻子粥、小豆粥、）
第三御菜二種（鮑、鯛、堅魚、）　第四御汁物（和布）
一供畢六位告來申議奏、
一出御之旨議奏傳宣（走告傳奏、知側）
一傳奏職事六位等、候馬形障子邊、
一御手水了（女房沙汰、）御大床子、立御箸之後入御、傳奏已下退休所、
一撤畢陪膳釆供歸內々方、
一御裝束撤却、諸司退出申渡、
一早參職事六位等退出申渡
〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀
十一月（○中略）晦日、於朱雀門大祓、如二季儀、十二月上旬、差神祇官卜部、遣兩齋國、祭御膳八神、訖召集物部人等、解齋解除、（祭祀并解除用度一同初副物用物、）

〔延喜式 七踐祚大嘗祭〕凡晦日十一月在京諸司集祓、准二季儀、

〔北山抄 五〕大嘗會事

晦日十一月修解齋大祓、其儀同他月晦、

〔大嘗會便蒙 下〕大嘗一會の儀式、此豐明節會にて事畢る、但十一月晦日迄ハ猶散齋也、是を後齋といふ、

〔文德實錄 三〕仁壽元年十一月辛卯、帝有事於八省院、緣大嘗會也、丁酉晦、大祓於朱雀門前、爲之解齋、

〔三代實錄 三清和〕貞觀元年十一月卅日辛巳、大祓於朱雀門前、大嘗祭解齋也、

〔三代實錄 三十二陽成〕元慶元年十一月廿九日丙寅晦、大祓於朱雀門前、大嘗祭祀禮解齋也、

〔日本紀略 一醍醐〕寛平九年十一月廿日辛卯、天皇御八省院、依大嘗會也、卅日、大祓、

〔日本紀略 八花山〕寛和元年十一月廿九日己亥、大嘗會了大祓、

〔日本紀略 十三後一條〕長和五年十一月卅日庚午、大祓依大嘗會也、

〔本朝世紀〕治曆四年十一月廿九日戊戌、大嘗會了由大祓也、

寛治元年十一月卅日戊寅、於朱雀門前有大嘗會解齋大祓事、

〔中右記〕天仁元年十一月晦日、今日有大嘗會御祓云々、

〔本朝世紀〕康治元年十一月廿七日乙卯、於朱雀門前被行大嘗會解齋大祓、

〔業資王記〕建曆二年十一月廿九日辛未、大嘗會解齋大祓云々、

〔實躬卿記〕正安三年十一月卅日乙丑、今日大嘗會解齋大祓也、

〔兵範記〕仁安三年十一月廿二日己卯、卜食齋郡柴燒事、今日仰下了、

左辨官下近江國、

使稻實卜部宮主卜部兼衡　從三人

禰宜卜部紀伊權守卜部宿禰兼貞　從五人

神部二人　從各一人

右權大納言藤原朝臣公保宣、奉勅、宜令勤行齋國之使部解之事、差件等人發向者、國宜承知、依宜行之、使者經彼之間、依例供給、官符追下、

大史小槻宿禰在判

仁安三年十一月廿日

權右中辨平朝臣在判

左辨官下近江國

應早充齋郡入前神祭物事

五色薄絹各八丈　生絹三丈二尺

倭文八尺　糸八勾

綿八屯　庸布八段

木綿麻各八兩　鍬八口

稻八束　酒米各三斗二升

鮨一斗六升　鹽一斗六升

鮑堅魚海藻各六斤　滑海藻十六斤

筱二具　明衣一具

右得神祇官解狀偁、齋郡解齋祭入前神料、依例申送者、國宜承知、依件行之、官符追下、

仁安三年十一月廿日　大史小槻宿禰在判

權右中辨平朝臣在判

左辨官下近江國
應早充下解齋祓物事
馬一疋　大刀一柄　弓一張
簾二隻　鹿皮一枚　庸布一段
木綿一斤　酒米各一升　鹽一升
鮑鰹海藻各四斤　刀子一柄　盆一口
麻一斤
右權大納言藤原朝臣公保宣、奉勅件物等爲充□□日解齋祓用途料、宜仰彼國早令下者、國宜承知、依宣行之、
仁安三年十一月廿日　大史小槻在判
權右中辨平朝臣在判

即位後直行大嘗

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字二年八月庚子朔、是日皇太子〇淳仁受禪卽天皇位於大極殿、十一月辛卯、御乾政官院行大嘗之事、丹波國爲由機、播磨國爲須岐、

〔皇年代略記後白河〕久壽二年十月廿六日庚子、卽位、廿九日癸卯、御禊、十一月廿三日丁卯、大嘗會、

〔帝王編年記二十七後伏見〕永仁六年十月十三日、卽位太政官廳、廿五日、御禊、十一月廿日、大嘗會、悠紀近江國甲賀郡、主基丹波國氷上郡、

再行大嘗

〔續日本紀十七孝謙〕天平勝寶元年十一月乙卯、於南藥園新宮大嘗、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十一月癸酉、先是廢帝〇淳仁既遷淡路、天皇重臨萬機、於是更行大嘗之事、

過期行大嘗

〔日本書紀持統三十〕四年正月戊寅朔、皇后卽天皇位、　五年十一月戊辰朔辛卯、〇朔辛卯三字據日本書紀通證補、大嘗、

〔續日本紀元明四〕慶雲四年〇丁未七月壬子、天皇卽位於大極殿、

和銅元年〇戊申十一月己卯、大嘗、遠江但馬二國供奉其事、

〇按ズルニ、元明天皇ハ七月ニ卽位シ給ヘドモ、先帝文武天皇ノ崩後ヲ承ケ給フニ由リテ、翌年ニ大嘗ヲ行ヒ給ヒシナルベシ、

〔類聚國史八神祇〕大同二年二月辛酉、將有大嘗之事、伊勢國爲由貴、備前國爲須貴、　十月壬午、車駕〇平城幸於葛野川、緣大嘗事也、　十一月乙酉、停大嘗事、亂故也、　三年十一月辛卯、是夜、御朝堂院、行大嘗之事、

〔日本紀略平城〕大同二年十月辛巳、蔭子藤原宗成勸中務卿三品伊豫親王、潛謀不軌、　十一月乙酉、停大嘗事、亂故也、　己酉、徙親王幷母夫人藤原吉子於川原寺、幽之一室、不通飮食、　乙未親王母子仰藥而死時人哀之、

〇按ズルニ、平城天皇ハ、先帝ノ崩後ヲ承ケテ大同元年五月ニ卽位アリシカバ、翌二年ニ大嘗ヲ行ヒ給フベカリシニ、其年亦伊豫親王ノ事ニ由リテ遂ニ三年ニ延引セシナリ、

又按ズルニ、水鏡大同二年ノ條ニ、そのゝち世中心ちおこりて、大嘗會もとまりにきトアレド正史ニ所見ナシ、

〔類聚國史八神祇〕大同四年四月辛丑、參河國爲悠紀、美作國爲主基、五月甲戌、勅、今年停大嘗會、

弘仁元年十一月乙卯、行大嘗〇嵯峨於朝堂院、

〔皇年代略記文德〕嘉祥三年庚午四月十七日甲子、卽位、　仁壽元年〇辛未十一月廿六日辛卯、大嘗會、

〇按ズルニ、文德天皇ハ、先帝仁明天皇ノ崩後ヲ承ケテ卽位シ給フニ由リ、其翌年ニ大嘗ヲ行ヒ給ヒシナリ、

〔日本紀略 二朱雀〕承平元年五月八日乙丑、定大嘗會國郡等、七月十九日甲辰、戌時宇多院太上法皇崩仁和寺御室、八月七日壬戌、被定行大嘗會事、十日乙丑、停大嘗會、二年十一月十三日辛卯、大嘗會、

〔一代要記 朱雀〕承平二年十一月十三日、大嘗會、○中略去年依法皇崩御延引、

〔日本紀略 十三二條〕寛弘八年八月十三日甲寅、大嘗會國郡卜定、十月廿四日癸亥、戌剋冷泉院太上皇崩于南院、○中略右近大將實資卿、召大嘗會悠紀主基辨仰云、祭庭幷小忌所、令國司幷撿非違使守護之、六男八女隨役召之由可宣下者、廿八日丁卯、於朱雀門大祓依停大嘗會也、十一月廿二日辛卯、大嘗會停止之、

長和元年十一月廿二日乙卯、依大嘗會天皇行幸八省院、

〔大鏡 一冷泉〕寛弘八年辛亥十月廿四日、御歳六十にてかくれおはしましけるを、三條院位につかせ給ふとしにて、大嘗會などののびけるをぞ、をりわしとよの人申ける、

〔皇年代略記 安德〕治承四年庚子四月廿二日甲辰、卽位、六月二日癸未、遷都於攝州、五年○養和元辛丑正月十四日、父帝高倉院崩諒闇、壽永元年○壬寅十一月廿四日辛卯、大嘗會、

〔帝王編年記 二十二安德〕養和元年、○中略去年遷都、今年諒闇、大嘗會不及沙汰、凡踐祚大嘗、七月以前卽位者當年行事、八月以後者明年行事、二年延引無例云々、

〔玉海〕治承四年六月十五日丙申、早旦大夫史隆職來談遷都之間事、○中略

一大嘗會事

右依式文、今年可被行之處、期日以前宮城若難出來者、於何處可被行幸、遷都云、大嘗云、彼是共大營也、同時被遂行者、諸國煩多、民力定疲歟、何樣可被進退哉、

以前條々殊加斟酌、可令計言上給者、依新院御氣色、言上如件、以此旨可令申上給、經房恐惶頓首謹

言、

申云、謂大祀、謂遷都、共是國家重事也、相並被行者、國費多歟、暫還御舊都、被遂大嘗會之後、一向有遷都之沙汰尤宜歟、且是表神事之不輕、欲遷都之無煩之故也、但遷都事、必可被急行者、又以勿論雖須延行、大祀禮式以來曾無此例、仍新宮之造營、併雖終其功者、猶可備禮儀所々成不日之功、可被果遂、如其業不可叶者、縱雖無例、延引之外如何、

經房云、外記勘申云、七月以前即位之主、明年被行大嘗會之例、大同弘仁是也云々、

申云、若是撰式以前事也、不足爲例者歟、

又云、於離宮被行大嘗會如何、是新都造營雖叶、仍當時御在所等、少々造加舍屋被行如何云々、

申云、於離宮被行大祀之條、縱雖有古昔之例、專難遂行歟云々、○中略

次參新院依召參御前、頃之退下、謁女房等、此間時忠卿參上、於御前召經房朝臣仰下、以和田都門小屋野可爲其地、早遣木工寮可打定其地、和田之京町數狹少、難儀萬端、衆人不堪、萬民有苦色、於小屋野者、頗有便宜云々、但愚心案之、不如無遷都、女房等語云、遷都萬人莫不歎息、或有流涙之族云々、上皇不被仰是非云々、又聞相少納言宗綱被拷問之間、申種々事等云々、又行隆來示云、都地改定小屋野了、此旨可申之由、禪門(○平清盛)申也云々、　八月八日戊子、酉刻頭辨經房朝臣送札云、來十二日以前可參入福原、新院御氣色者、禮紙云、大嘗會事可被豫議云々、申依疾重不耐參入之狀、傳聞去朔日爲時忠卿奉行召經房朝臣、大嘗會猶今年可被行、於當時御座(福原)可被行、可申慶之由被仰下云々、而經房朝臣依申可被問人々之由、可及僉議云々、左大臣及堀河納言等被召、是在京之輩之內也、實定隆季在福原、自餘之輩強不可預僉議歟云々、　十一日辛卯、左衛門權佐光長來、日來候福原、去六日入洛云々、呼簾前問不審等、先大禮事、一定於福原可被行云々、余問云、彼地可爲帝都之由被仰歟、將又於離宮可被行大嘗會歟、其條專不可然歟、還御古京不可叶ハ、以福原被定都地之後、可被行此禮歟

如何、申云、此條無申出人、只如承者、如形造營里內可被遂行歟、凡其間事可被問人々云々、又方角事爲被尋、召在京陰陽師等云々、　十四日甲午、邦綱卿送札云、大嘗會猶延引之由被仰了、明年可被行、期日近々造作不可叶之故也、人々所定申如此云々、　廿九日己酉、未刻頭辨經房朝臣來、（中略）先余示所勞子細、經房大有驚氣、又問遷都事、答云、福原如只今者離宮也、明後年可造八省云々、今年五節以前可被造皇居、是禪門私造作也、彼人移徙之後可被借取之儀云々、卽件離宮之傍占造八省之地、幷可立要須之垣同移建云々、件指圖源納言造進之、堀川納言又加潤色云々、凡此儀不能左右、非言語之所及歟、大嘗會事先度有沙汰延引、今又俄有此儀、又延引之子細如何之由問之、答云、先今月朔比以別當時忠卿被仰下云、（於御前仰之）猶今年可被行大嘗會也、仍可被造營內裏、其間事早々可令申沙汰者、爰經房乍恐申子細云、大禮今年被遂是正禮也、而先日有沙汰延引、而追期日之後忽有此儀、恐神事懈怠之因緣歟、何況內裏祭、方角禁忌如何、延曆十三年自長岡被遷平安城之時、被犯王相方、（十月有遷都、而此京當北方、仍猶犯之、）以此例不可有方忌之由有儀定歟、倩見沙汰次第、頗皆違彼例、故何者彼者自延曆十二年有其沙汰、內裏造畢、人家過半移住、同十三年十月遷幸之後、公事併於新都被行之、偏是遷都之儀也、於今度者、六月二日卒爾遷幸、彼時不被仰遷都之由、（是一）其後雖有可被遷都之儀、其地度々未定、當時御所、未被定仰可爲帝都之由、已似離宮、（是二）舊都人屋一人未移住、諸公事併於彼都行之、（是三）以此等之儀比延曆例、聊以不符合、至不被避方忌之一事、被准用件例、道理不少歟、加之彼延曆例者移徙也、不可同犯土歟、長岡京當北之祭未被打大尺、旁貽疑殆者也、且被尋問陰陽道、且被仰合有職卿相尤宜歟、其儀一決之後可被仰一定歟、言上子細雖有其恐、爲後沙汰所執奏也者、時忠云、不可有忌之由賴業眞人所申也云々、爰新院御定云、周公營洛邑無方忌之由令稱申云々、忽以漢家攝籙之例、難比本朝帝王之儀歟、經房申云、一々有其謂、早以此等之趣可相觸攝政（藤原基通）者、卽參攝政第申此旨、被申可被問人々之由、歸參奏此趣、左大臣閣下、（藤原經宗）左大將、（藤原實定）都督、堀川納言等許可召

之、不可及廣云々、仍各催申之處、閤下無御參、自餘四人參入、去十二日於院殿上僉議、先是去八日於臨陣、召陰陽師(泰親朝臣、季弘朝臣等也、在憲遲參、)并兩大外記大夫史等、內々尋問此事、先方角事問泰親、泰親申云、先日議定之時不參會、雖不承子細、於犯土作事者、尤可被忌勿論事也、但爲禪門之沙汰被造可然之舍屋、被人移徙之後被借召被用皇居可宜、公家之沙汰一切不可然者、以此趣問季弘定時、(申可有憚之由者也、)季弘申云、移徙犯土可同之由存之、而延曆已有移徙、今度犯土何事之有哉旨所存也云々、爰泰親大怒作色云、汝受誰人訓說仕候哉、太奇怪也云々、季弘卷舌無申旨、只申可從父申狀之由、初爲諛時議、以詐僞奏君、今被糺決之旨、變詞從父命、誠是謀計之由不忠之臣也、人以謂可取召怠狀、衆庶莫不惡季弘云々、次問齋場所事、泰親先例不忌方角也者、次問大禮事於兩大外記大夫史等、先賴業申云、大事不再舉、先度有延引之沙汰、更有此儀、非無事之憚、猶可被延引者、師尙申云、孝謙天皇於離宮有大嘗會、任彼例今年於離宮被行何事有哉、隆職申云、期日已迫、次第神事可遲々歟、今年被遂行、八爲守式文申、而日者無沙汰、今月以後有沙汰者、還違式文、猶於今者、明年可宜者、同九日在憲朝臣參上申云、泰親申狀彌可有異議、抑福原者、自舊都當申方角、仍非正方、無妨于造齋場所云々、兼又先日議定之場、於方角事者一切不可沙汰之由別當卿有其仰、仍卷舌退出了、以季弘申狀被擬用之間、成恐之處、今又有此儀、素勿論不足言事也云々、以此事之趣去十二日被仰人々、忠親卿發語云、方角事、陰陽之兩儒申旨無實、餘人不能加詞、大祀事於離宮被行何事有哉、但皇居爲禪門之沙汰、雖可被造、其所未出來、遂大嘗會事有沙汰之條如何、被造齋場又以不可然、此條何樣可然哉云々、隆季云、已爲朝家大事、雖申左右、可在勅定、(人以謂有據、顯基無歟、)左大將同忠親卿、左大臣申云、次第神事懈怠有不法事歟、於今者延引可宜、若必今年可被遂之由有靈告者非此限云々、奏此趣之處、可延引之由被仰了、次第如此云云、余雖不候僉議之場、事爲重事、仍以奉行職事御狀具注之、爲備後鑒也、

〔山槐記〕治承四年八月十日庚寅、未刻正日未出、出舊都參福原、一昨日亥刻爲頭辨經房朝臣奉行、自

新院有召來、十二日以前可參入云々、內々示送曰、今年猶可被行大嘗會歟之由可議定、　十二日壬辰、未剋著束帶參內乘輿、次參新院、左大將(實定、直衣、車、)三條大納言(實房、束帶、輿、)被祗候、頭之左府(直衣、輿、)被參、相次帥大納言(隆季、直衣、)參入、良久頭辨經房朝臣參入、奉院宣仰左大臣意趣、內々出民部卿紙二通、一通者大膳權大夫泰親朝臣、掃部頭季弘朝臣、大外記賴業、大外記師尙、大夫史隆職等申狀、其後陰陽頭在憲朝臣、助濟憲朝臣參入、又後一通者、頭辨云、爲備忘各申狀粗注之、但見苦候歟、左府答何事之有哉之由被乞取、次第見下之、候座之人左大臣、左大將、帥卿、予等也、右府(○藤原實)依所勞不被參入、頭辨曰、非參議只各評定可申也者、然而左府猶被目予、(○藤原忠親)發語云、方忌事、在憲泰親朝臣申旨一同也、尤可被憚大將軍方歟、但偏被棄舊都者、當時皇居可爲御本所、自其所可被立方忌之處、此地非遷都儀、只爲離宮云々、仍可有憚儀歟、抑禁忌方不遷本所忌之由申條不審事也、延曆冬節遷御平安京、本所者遷忌方之條顯然也歟、然而今依右被定都、有御猶豫者、如內儀入道太政大臣終土木功、被新皇居何事之有哉、但今年依可被行大嘗會、件造營之條首尾不相叶歟、其故今明雖被始造作、遂移徙之後被罷內裏遷幸之條、今月中不可叶、而九月可被造齋場所、不被定皇居、先被定齋場所之條不可然事也、雖似避禁忌、相待彼所造、兼設齋場所、還有御自由之恐歟、今年新嘗會節會以前終被造作、於大嘗會者、明年被行之可宜歟、弘仁欲有遷都、雖不被遂其事、猶大嘗會延引、今度雖非遷都儀、已被遷皇居、非無事之條、任彼吉例明年可被行歟、於離宮被行大嘗會之條、師尙勘申例尤可相准之上、於舊都一切不可被行者不可及議、大嘗會營無方忌沙汰之條先例也、至齋場所者、有方忌之時避正方例也、而在憲朝臣當申方之由申條、猶暗難決、委可被尋事歟者、帥卿申云、大嘗會ハ國ノ大祀也、神慮難測矣、左右可在勅定者、左大將申云同予、左大臣申云、大略同予、今年強被行之條還可有不法之恐、又齋場所幷引標之間、其地等可有沙汰者、頭辨參御所申定事趣、歸出仰云、定申旨尤可然、不可及異儀、於今者各可罷出者、仍左府以下退出、頭辨送書云、定申趣尤神妙思給者、大外記師尙云、朝家大事議定五

六簟之內、應召人々有珍重之氣色、随命定申之趣神妙、左相府左將軍被申同、不可申盡者、

〔百練抄八高倉〕治承四年八月十二日、於新院(○高倉)被定今年大嘗會延否幷方忌等事、

〔吉記〕壽永元年八月十九日、參內、殿下令參給、臨夕人々參入、謁左司郎、談世事、大嘗會一切難叶、上無許容、下不應勤、何况追討使下向者、近江國々勤彌難叶歟、　廿二日、大嘗會延否可有議、可被遣追討使之故云々、未辨可否、近日公事、逐日難成之由人々談之、悲哉々々、　廿五日癸亥、大嘗會不可延引、又追討使一定可發向、共可被雙昇之由事切了之旨、藏人辨示之、

〔百練抄九安德〕壽永元年十一月廿四日、大嘗會也、去年空不被行之、今年所被遂行也、

〔源平盛衰記二十七〕大嘗會延引事

今年(○養和元年)モ諒闇ナリシカバ、大嘗會不被行、大嘗會ト申ハ天武天皇御宇ニ始レリ、七月以前ニ御即位アレバ必其年ノ中ニ被行事ナレ共、去年ハ都遷トテ新都ニテ叶ハズ、様々議定有シカ共、五節計ニテサテ止ヌ、今年ハ又諒闇ナレバ沙汰ニ及ハズ、大嘗會ノ延引スル事、平城天皇御宇、大同二年十月ニ御禊有テ、十一月ニ有ベカリシニ、坂上田村丸ヲ以、夷賊ヲ随ヘ給ケル兵革ノ事ニ依テ、同三年ノ十月ニ又御禊アリ、同十一月ニ遂行ケリ、嵯峨天皇御宇、同四年ニ平城宮ヲ造ラレシニ依テ、次年弘仁元年十一月ニ被行、朱雀院御宇、承平元年七月十九日ニ宇多院隱レサセ給テ、次年行ハル、三條院御宇、寛弘八年十月廿四日ニ冷泉院ノ御事ニ依テ延タリシカ共、次年被行ケリ、二箇年延引ノ例イマダナシ、去年ハ新都所狹シテ行ハレズ、今年ハ大極殿豐樂院コソ未造畢ナケレドモ、後三條院ノ例ニ任テ太政官廳ニテ有ベカリツルニ、天下諒闇ノ上ハ兎角子細ニ及バズ、二箇年マデ延ヌル事如何ナルベキヤラント、人皆怪ヲ成ス、

〔皇年代略記順德〕建曆元年十一月十三日己卯、大嘗會延引也、今月八日、依春花門院崩(○後鳥羽皇女昇子)　二年四月廿八日更、國郡卜定、　十一月十三日乙卯、大嘗會(近江丹波)

〔仲資王記〕承元五年〇建暦元年十一月八日丙辰、女院辰刻一定御閉眼云々、十七日乙丑、五節大嘗會等延引、可有明年云々、來十二月可被行有其沙汰、然而依無其例、猶被延引歟、廿五日癸酉、大嘗會幷諸社祭延引云々、

〔帝王編年記二十四〕貞永元年十二月五日庚辰、卽位、天福元年九月十八日、國母藻壁門院〇四條母后竴子依御流產崩、廿五仍大嘗會延引、文暦元年〇天福二年五月廿一日、承久先帝〇仲恭崩御、春秋十七號後廢帝、八月六日、戊時太上天皇崩御、春秋廿三號後堀河院、仍大嘗會又以延引、

〔増鏡三藤衣〕十二月〇貞永元年五日、御そくゐ〇四條はことなくはてぬれば、めでたくてとしかはりぬ、〇中略古宮〇四條母后竴子の御はてだにすぎず、又とりかさねてりやうあむ〇後堀河崩の三とせまでにならん事を、いとまが〳〵しくゆゝしとみな人おもふべし、〇中略御禊、大嘗會などもいとゞのびぬ、唯こゝもかしこも、たかきもくだれるも、みやこもとほきも嶋々も、涙にうきしづみてぞすぐし給ひける、〇中略ことし〇嘉禎元年ぞ御色どもあらたまりぬれば、冬になりて御禊、大嘗會おこなはる、

〔園太暦〕觀應二年六月十四日、抑昨日被尋下間事、所存載折紙付按察卿了、大嘗會國郡卜定間事、大同以來、延引蹤跡七八ヶ度也、〇中略

延引時例

平城天皇

大同二年二月卜定、十月御禊、當年止會、依伊與親王兵亂事也、同三年十月御禊、十一月大嘗會、

嵯峨天皇

大同四年四月卜定、當年止會、依遷平城宮事也、弘仁元年十月御禊、十一月大嘗會、

朱雀院

承平元年五月卜定、依宇多院御事、當年延引、同二年四月廿六日、更被始行行事所、十月御禊、十一月大嘗會、

三條院 寛弘八年八月卜定、依冷泉院御事當年延引、長和元年六月四日、更被始行事所、閏十月御禊、十一月大嘗會、

安德天皇 治承四年四月卜定、當年依遷都幷兵亂止、養和二年五月廿七日、重被始行事所、於國郡者重不被卜定、抜穗行事等今日少々被改仰也、十月御禊、十一月大嘗會、

順德院 建曆元年八月卜定、十月御禊、依春華門院御事當年延引、同二年四月廿八日、重有卜定、五月廿日行事所始、十月御禊、十一月大嘗會、

四條院 天福元年四月卜定、依藻壁門院御事當年延引、同二年六月更被始行、依堀河院御事重延引、月大文曆二年六月十九日、被宣下抜穗行事、於國郡者不被卜定、同月廿五日行事所始、十月御禊、十一嘗會、

〔皇年代略記 後土御門〕文正元年月日、大嘗會國郡卜定、十一月廿六日、御禊、十二月十八日乙卯、大嘗會 近江、丹波、十二月大嘗會、上古已來勿論歟、然而隔絶無力之上、京中已及兵亂、令延引者雖被行、仍无力被遂行之、

〔公卿補任 後土御門〕寛正七年元年○文正十一月廿八日、御禊行幸、十月、依天下騷動延引、十二月十六○六恐八誤日、大嘗會、十一月、依天下騷動延引、仍可爲來年、或亦以白黑例可爲十二月歟、有勅問、任諸卿議、雖他月被行事、

〔大嘗會延引勘例〕文正元年十月、大嘗會依騷動延引、兩局勘例、

大嘗會被行十二月例、不及引勘候、國郡卜定以後延引事卜定以後雖延引不改定嵯峨天皇大同四年四月戊子、卽位於大極殿、辛丑參河國爲悠紀、美作國爲主基、五月甲戌、勅、今年停大嘗會、弘仁元年十月甲戌、禊松崎川、緣大嘗事也、只今所見如此、可得御意候、恐々謹言、

十月十九日　常忠 清三位入道

就大嘗會條々例

一他月被行例

天武天皇二年十二月壬午朔丙戌、侍奉大嘗中臣忌部神官人等、幷播磨丹波二國郡司已下悉賜祿、(在日本書紀)

一國郡卜定已後延引例

承平元年五月八日、國郡卜定、　同二年大嘗會

寛弘八年八月十五日、國郡卜定、　長和元年大嘗會、(當二箇年)

治承四年四月廿七日、國郡卜定、　壽永元年大嘗會、(當三箇年)

建暦元年八月十一日、國郡卜定、　同二年四月廿八日、依大祀延引、重卜定今年大嘗會、

天福元年四月十六日、國郡卜定、　嘉禎元年大嘗會、(當三箇年)〇中略

右條々注進如件、

文正元年十月十九日　　左大史小槻晨照(上〇中略)

以兩局勘例、勅問諸卿、仰詞、(奉行右中辨廣光)大嘗會延引、十二月並翌年被行之事、局中勘例如此、兩端之間宜被計申矣

諸卿申

大閤(兼良公)

大嘗會依觸穢可被延引來年哉事、凡有國郡卜定而延引事、兩局勘狀之中、承平元、治承四、建暦元、觀應元等例、或依亂逆、或因凶事、不及其沙汰上者、尤可謂不快者歟、次十二月大禮例、天武佳躅頗難遂、如此於難默事者、訪上古例被准用之條、古今之通規也、且天武大嘗則爲此會之濫觴、五節舞女等、又以彼御宇爲來歷者歟、然者以十二月可被遂行之條、已非無其例之上者、可謂勝于延引不吉例者哉、愚存之趣如斯、宜在時議耳、

前關白(房嗣公)

大嘗會延引、十二月幷翌年被行之哉否事、雖爲幽玄有其例之上者、當年中可被遂行條、不可有豫儀候、此上事宜在時宜矣、

關白 持通公

大嘗會可被延引歟、又可被用他月歟事、局中勘例加一見候、他月事雖爲幽玄、既有其例上者、可被宥用條、尤珍重候、

入道太政大臣 ○藤原房平

大嘗會延引翌年之事、度々例不快之上者、以白鳳之例、十二月可被行之條可宜者乎、但凡慮難及、宜在聖斷、

前左大臣 實量公

大嘗會依觸穢可被延引來年哉事、於弘仁之度者雖爲佳例、其以後度々爲不快之上者、追天武佳躅、當年十二月被行之條有何事哉、猶可在叡慮乎、

右大臣 公有公

大嘗會延引、十二月幷翌年被行事、

延引事、兩局勘申例、多分不快、難被用歟、以天武天皇御例、被行十二月之條可然之由、愚意相存候、

久我前右大臣 通尙公

大嘗會延引、十二月幷翌年兩樣事、卜定已後度々延引、多分雖不吉例、御禊十月事、就爲古今之規範、延引來年有一儀歟、將又天武例聊存子細、且幽玄、雖然於于今國家之大營空延引、太有事之煩者、以他月例可被宥行之條何事候乎、所詮卜三人從二人者歟、短才不足信用、宜在聖裁矣、

三條入道内大臣 實雅公

大嘗會延引、十二月幷翌年可被行之兩端事、於延引者度々例共以不快歟、十二月之儀雖爲幽玄、

不行大嘗

已有其例上者、被遂行可有何子細哉、此上猶宜在聖斷耳、

一位大納言 時光卿

大嘗會依觸穢可被延引來年歟、十二月可被遂行哉間事、兩局勘狀加一見候、被行國郡卜定、大禮延引事、於弘仁者雖無子細沿承、建暦、天福等之例、連綿不快之上者、縱雖先規不詳、猶可及猶豫歟、況雖爲幽玄、白鳳之度爲佳例、追彼佳蹤、十二月可被遂行條、不能左右乎、短慮如斯、宜在聖斷矣、

〔皇胤紹運錄〕櫻町院

享保廿年十一月三日即位十六 元文三年十一月十九日、大嘗會、

〔續史愚抄〕櫻町 享保二十年十一月三日戊戌、於紫宸殿被行即位禮、 廿一年〇元文元年 十月三日癸亥、入道准后前攝政前太政大臣家熙、法名眞覺、號豫樂院、〇天皇外祖父 薨、歳七十 因自今日三箇日廢朝、 元文二年四月十一日己巳、院〇中御門 自昨有御惱、時氣御感冒云 而今曉已來大漸、御脚氣云〇中略 亥刻崩于下御所、御年卅七、實耆 云、已刻 天下諒闇、 三年六月廿五日丙午、今年可被行大嘗會、

〔大嘗會延引勘例〕文正元年十月、大嘗會依觸穢延引兩局勘例、

就大嘗會條々例〇中略

一不被行例

崇光院觀應元年四月十九日、國郡卜定、今度大嘗會竟無之、

右條々注進如件、

文正元年十月十九日 左大史小槻晨照上

〔皇年代略記〕崇光 觀應元年四月廿九日、大嘗會國郡卜定、同十月廿二日、御禊治定之處、天下擾亂、仍不被行之、大嘗會遂以無沙汰、

〔園太曆〕觀應元年八月廿三日丙午、中御門前中納言爲勅使入來、謁之、大嘗會已下事被仰合候也、所

詮諸國不靜、諸家窮困、大祀可爲何樣哉、軍陣已平定之上者、可有沙汰之條雖勿論、臨期難被行者、衆日沙汰頗無詮歟、又非殊現在障延引、無左右難被仰出歟、可計申云々者、軍旅已平、武將歸參、此上大祀以下可被行之條勿論歟、天下尫弱者勿論之上者、事體又如法之儀雖難治、文永大祀依蒙古事被定行省略儀了、其分何無沙汰哉、先必定之由沙汰勿論歟、但穢氣事被問武家次第、日次以下治定可被仰定哉之旨申了、　廿五日、大祀延引事、先日爲勅使入來之間、爲不審注出、今日遣宣明卿也、〇中略

大祀事、先日之趣今日奏聞了、執柄同前被申候、仍不可延引之由御沙汰候、〇中略　宣明誠恐頓首謹言、

八月廿五日　宣明上

大祀間事治定之趣不審候旨、內々付女房尋申被下勅書

大祀事面々所存趣、宣明卿今日參申候ツ、讓國已後大禮迄四箇年之條、嘉顧之外無先規之上者、縱被用儉約之儀、今年可被構行條不能是非之由大略一揆、愚意之趣、本來於此大慮者勿論候間、於今者竟寸陰有沙汰之條、不可有異論候歟、〇中略　天下穢否間事、匡遠、師茂等只今進勘例候、就其猶可經沙汰事候、明日以仲房猶旁可申談候也、

十月十六日戊戌、世上物忩事口口云々、何事候哉不審、或語言、鎭西大友代官、去夜逐電之由風聞云云、〇中略　世上事猶有說歟、不審之間、以狀欲尋女房之處、有勅書、世上事定聞及歟、言語道斷事、旁可被仰合、令參仕哉、且又可進大夫云々、卽雖可馳參、遲怠之間進大夫、小時退出、語曰、九州蜂起、直冬隨九州之勢、大友小輔以下無不歸之、隨而大友京都代官二人逐電之間、爲征罰前大納言〇足利尊氏幷師直可發向、於義詮者、爲京都守護所進置也、於當時御所可奉守護歟、〇中略　至御禊行幸者已被沙汰懸歟、可有其沙汰哉、大嘗會事可隨彼左右歟之旨申之、付經顯卿所奏如此歟、實俊又有申旨歟、珍事至極、不能左右、就之旁雖可被仰合、此上只今別義勢不可入歟、明日可參仕云々者、驚歎不能左右、天下穢

服暇等充滿非直也事、大祀延否可被決龜卜歟之旨、最前議奏了、不被用其趣之上有此說者、老臣所奏誠勿論之由有勅定、　十七日己亥、大外記師茂來謁之、世上事驚申就中御禊以下延否事不審之由申之、今日欲早參仙洞之處、實俊僧正伺定武家形勢可參申、其後參仕每事被仰談之條可宜云々者、○中略參持明院殿、○中略仰云、今日一色飛脚到來、大友小卿悉與同之條勿論也、一色相憑上杉、松浦輩并草野等、如形籠城、將軍爲發向者、定無子細歟之旨申之、仍來廿五日進發必定之由有其聞、委旨可參申之由實俊僧正申之云々、先於御禊者被行之、大嘗會隨事體可有沙汰之旨武家令申、此條不存知事子細之故歟、御禊被行之條有何詮哉、所詮將軍發向爲必定者、大禮大祀今年延引勿論歟、若於鎮西者雖不靜謐、發向延引者、先被行御禊之條尤可然哉之旨申入了、○中略戌半刻許被下天書、大祀等事也、實俊僧正狀被籠御書中、武家形勢也、恐存又載請文申入了、○中略御書以下寫給左也、

彼僧正參相待候之處、如此令申候、大禮事不申分明返事之條、彼時議之趣頗被察候、然者鎮西無爲、大樹進發及與義者勿論、若彼進發可爲必定者、於大禮者、都難被行之由抑而被仰遣之條可爲分明落居之基候哉之由恐案候、且經顯卿ナドモ此儀無子細歟之由申候、御所存如何樣候哉、見參之時申承候ツル趣モ、此分御所存相違候ハント存候ヘドモ、就此狀加思案之處、事々遲引逗而諸人之煩、倍增不便歟之間、此一義案立、キト申合候歟、

被仰下候之旨畏承了、大禮以下事、愚存之趣參仕言上仕了、此上延引勿論候歟、延否事元來非武家可進止候之上者、今被仰下之趣、進被仰遣候條、不可有子細候哉之旨故思給、參仕言上之間、且可令計被露給候、恐々謹言、

十月十七日　　公賢上

四條中納言殿

十九日、頭辨仲房朝臣來、大外記師茂、四位大史匡遠宿禰等來、皆大禮延引驚存候旨申之、匡遠云、延

引之時被宣下、且被行大祓代々例也云々、尤可然歟、今朝有女房奉書、大祀延引事也、案之中也、言語道斷、大夫等參仙洞了、

よべふけてそう正まゐられ候、大禮のび候にさだまりさふらふ、返々申ばかりも候はず候、よろづこまかなる事は、大夫殿なども御まゐり候に申され候はんずれども、まづ御心えのためにかつ〴〵申されと申とて候、かしこ、

廿日壬寅、今日予參院、○光明於折妻戸入見參、心閑有勅語等、大祀延引非直也事之由有勅定、酉刻退出、

大嘗會延引之由宣下、幷大祓事、匡遠宿禰如此申候、得御意候哉、以此旨可令洩申給、仲房誠恐頓首謹言、

十月廿日　仲房上

大嘗會延引時宣下、幷大祓事、治承四年度、云宣下云大祓無所見候、別不及沙汰之故候歟之由存候、大同二年依兵亂延引、是又大祓之有無不見國史候歟、此外延引年ニ被行大祓之條、難所見候、其者又皆別儀候歟、態不注進仕候、兩樣之間何樣可候乎、所詮可在時宜候歟、可得御意候哉、恐惶謹言、

十月廿日午刻　匡遠狀

御宿所

廿三日乙巳、抑今日仲房朝臣、大嘗會延引宣下大祓事、執進匡遠注進、此事先日彼宿禰來候時、可有宣下幷大祓之由申之、而又不可及沙汰之由去廿日申之由仲房朝臣申之、前後申狀參差何樣哉、尋究可申歟之旨仰了、仍今執進止注進也、此趣申入御所、後案文續了、

大嘗會延引宣下幷大祓事、承平、寛弘、建暦、天福等沙汰之次第、一紙隨仰注進仕候、如先度令言上

候此年々皆有憚之例候之間不及注進今度儀被模大同治承例之條若可協准據歟之由存候仍
其趣申上了然而如此被仰下候之間重注進候殊可得御意候哉恐惶謹言

十月廿二日　匡遠

承平元年八月七日宣旨云大嘗會今年停止者大祓事不分明

寬弘八年十月廿五日被下大嘗會停止官符同月廿八日於朱雀門平敷有大嘗會停止之由大祓
事

建曆元年十一月十六日大嘗會停止幷大祓可被行之由被宣下之同月十九日大嘗會新嘗祭共
停止仍於朱雀門有大祓事

天福元年十月十三日大嘗會延引之由被宣下之大祓事不分明

廿四日丙午抑大祀延引宣下以下事治承例猶尋勞局且申談執柄可申沙汰之旨有女房奉書仍仰
仲房朝臣了　廿九日今日仲房朝臣送消息大祀延引事也卽申入御所兩人注進別無子細只先度
注進同前之由申之師茂大同治承例無所見候由申之也大夫參之時可被仰下候旨有女房返事大
夫退下仰云此上依兩度例可有沙汰之由申了執柄無相違之由早可仰兩局云云者　十一月一日
壬子頭辨仲房朝臣來大嘗會延引宣下幷大祓有無事此間被經沙汰了而任大同治承例每事不可
及沙汰之旨思食其趣內覽關白可下知之旨昨日大夫參候時承候仍仰此趣了彼兩度之外代々雖
有停止宣下大祓皆不吉年也仍任兩度合戰之時被仰下了　二年六月九日申刻許自仙洞被下手
書大嘗會以下事可有沙汰之旨武家申之就其可被仰合事有之可召進春宮大夫云々者大夫此間
依所勞久不參也片時可扶參之由召仰之間申入了

此間無差事候上依咳氣心神彌蒙々擱筆候烟轡勤涉日々存外候如評定度々依無人延引歟歎
入候御出現時分無心許歟思給候兼又大禮事於今者可有沙汰之由武家令申候就總別安堵目

出悅入、仍令申候、如本行人事、旁可申事等候、大夫又所勞、不能出現候歟、折節旁令周章候、相構今明之間、片時扶參哉之由、可被傳仰候哉、千萬紙上難盡候也、

入夜大夫參、亥剋許歸來云、大祀已下事、于今被擱送居諸、雖不可然、武家南山和親等事、縱橫說未聞食之間、口涉日月了、而此間和睦之儀止之由有其聞、然者大祀已下事、若可被尋仰歟之旨思食之處、今日申剋信濃入道行珍爲武家使參了、大嘗會事可有御沙汰歟、○中略就其事行傳奏按察祗候之間、被仰了、

〔續神皇正統記崇光〕第九十九代崇光院、諱は興仁、光嚴院第一皇子、御母陽祿門院○秀子、內大臣公秀女也、已丑の年卽位、○中略さても今度打つゞき天下擾亂によりて、御禊も俄に停止せられ、大嘗會も取行はれぬ事こそ帝闕の初例無念に侍る、清寧天皇二年十一月、依大嘗會供奉料遣播磨國司といふ事あり、此會の濫觴にや、天武天皇白鳳よりこのかたは綿々として于今不絕、一代一度の重事これを大祀といふ、神國無雙の大事は大嘗會也、大嘗會の大事は神膳なり、まづ廻立殿に行幸ありて、御湯殿の儀式も甚深のゆゑあることにや、悠紀主基の神殿には神膳を備、大神宮勸請申されて御みづからまつりたまふ御事なり、御代の始には此大儀をとげられてぞ神鑑もいつくしく、公道もをさまる心地し侍るに、空く被擱ぬる、凡慮難及事にや、陰陽師國弘朝臣、此御宇には大祀令行給ふべからざる由申たりし、已に十月御禊前二日にいたりて、此上は子細に及べからざるかのよし、人の落合けるに、都て遂行あるべからず、是程治定已に中二日なり、誠にふしぎのよし申けるが、俄に停止あり、國弘いかなる故ありてか申侍る、道の才學のほども奇特にこそ、

○按ズルニ、此他大嘗ヲ行ヒ給ハザリシハ仲恭天皇、中御門天皇ナリ、然レドモ仲恭天皇ハ卽位ノ禮ヲ行ヒ給ハズ、中御門天皇ハ中絕ノ條ニ收メタレバ、共ニ此處ニ載セズ

〔大嘗會記錄〕凡大嘗會ハ、百四代後土御門院、文正元年十一月十三日卯時被行、其後中絕ス、二百廿

三年ニ及ベリ、百十四代東山院、貞享四年丁卯、主上今年十三歳、叡慮大嘗會ノ事ヲ減ジ、其形義ヲ執行也、攝籙ハ一條右府冬經公、

〔大嘗會私記〕貞享四年四月二十八日、新帝〇東山即位、上下萬歳ヲ唱ヘ、目出度カリケル時代ナリ、依テ此冬大嘗會執行アルベキトテ諸司ヲ催サル、此一會ハ後土御門院、文正元年十一月三日行ハレシ後、至今年二百廿二年打絶シ事ナレバ、諸家ノ記錄モナク、尤覺悟ナキ體、文獻不足徵、然ルニ吉田ト部家ニ記シオカレシ舊記等殘リ、其趣ヲ考再興アルベキトノ勅ナリ、其家ト申ナガラ最殊勝ニ覺ユ、

〔續百一錄〕元文三年六月廿五日、當年冬十一月可被行大嘗會、自明年可被行新嘗會候、此旨今日被仰出候旨、

〔續史愚抄櫻町〕元文三年六月廿五日丙午、今年可被行大嘗會、一代〈中御門〉中絕

〔有德院殿御實紀四十八〕元文三年十一月廿六日、この十九日、京にて大嘗會行はれしをもて、宿老少老賀し奉る、こは貞享四年よりこのかた五十一年中絕したるを、こたびこなたよりの御沙汰にて御再興ありしなり、

〔大嘗會儀式具釋一〕元文三年大嘗會

新帝ノ御即位七月以前ナレバ其年ニ大嘗會ヲ行ハレ、八月以後ナレバ明年行ハルヽ例ニテ、後花園院永享二年庚戌マデハ行ハレ來リシヲ、後土御門院ノ御宇ノ初兵亂ノ半ナリシニ依テ行ハレズ、夫ヨリ中絕シテ、中間二百五十六年ヲ經テ、東山院貞享四年丁卯ニ至リテ再興セラル、然ルニ先帝中御門院ノ御宇ノ初、又故アリテ行ハレズ、當今〇櫻町モ享保二十年乙卯十一月ニ即位シタマフ、左レバ翌元文元年丙辰ニ行ハルベキ例ナレドモ、行ハレ難キコトアリテ延ラレタル內、二年丁巳ハ諒闇タリシニ依テ、三年戊午貞享ヨリ中間五十一年ニテ復再興セラル、抑貞觀、延

嘗ノ頃ニ行ハレタル大嘗會ハ、其儀式廣大ニシテ、今ノ世模スベカラズ、江次第ナドニ載タル所ト、貞享ニ行ハレシト、今度ノ儀式トハ大略同ジ、但今度儀ハ江次第ヨリハ略ニシテ、貞享ヨリハ少シキ嚴也、

○按ズルニ、後土御門天皇ハ文正元年十二月ニ大嘗會アリ、兵亂ニ由リテ行ハレズト云フハ誤ナリ、

〔閑窓自語〕大嘗會等再興事

大嘗會ハ後土御門院文正元年の後絶えたるを、東山院貞享四年に、かたの如く再興はありけれども、辰日に巳午の節會をたゞ一日の宴會あり、例にかなはざること多かりしを、櫻町院元文三年に、かさねておよそのこるところなく再興ありて、いまにつたへ行はるゝなり、

〔有德院殿御實紀附錄三〕禁廷の公事をも御心を加へ玉ひし事數多有しが、貞享以來絶し大嘗會をふたゝび興し玉ひ、大内の大禮をいにしへに復せられけることそたぐひなき御事なれ、これより先、當時有職の公卿をはじめ、古禮に練せしものどもにもあまねくとひはからせ玉ひ、御みづからも御勘考を加へられ、所司代はじめ京職の人々にも懇に御さたありて、後元文三年十一月十九日大禮遂に行はれしかば、これにつぎ五年十一月新嘗會をも行はる、大嘗會の時は府よりも羽倉藤之進在滿〈田安小十人組〉住吉内記廣守をつかはされ、其禮をうかゞひ歸り、ありし樣をくはしく聞えあげしめ、重ねて廣守に仰ありて、そのかたをゑがゝせ、八卷となして永く考證に備へらる、

〔續視聽草二集七〕文政中大嘗會

抑大嘗會と申奉るは、かけまくもかしこき代々の皇帝御位しろしめして行はせ給ふ御事とかや、しかはあれど、中ごろ後土御門院より二百年餘り中絶侍りしに、貞享のころほひ東山院の御

字に、絶たるをつぎ、すたれたるを起しおはしまして、今はた元文みつの霜降月に執行はせ給ふ、いともかしこき御惠也、

〔翁草九十二〕櫻町の帝は、享保五庚子の年正月元旦降誕、〇中略此君聖主の聞えましく〳〵、久しく廢れたる公事をもふたたび興され、中にも大嘗會、はた年毎のにひなめまつりは、此御宇よりぞふるきに返されける、

〔續史愚抄挑園〕延享五年〇寛延元年十一月十七日丁卯、大嘗祭、〇中略今夜神樂歌再興云、〇中略辰巳日風俗今度再興云、　二十日庚午、此日和舞再興、

〔友俊記〕寛延もとの年十一月中の七日卯の日、大嘗會おこなはる、〇中略膳屋稻春の事、今度御再興にて、〇中略八乙女もことし御再興なり、

〔續史愚抄後櫻町〕寶曆十四年〇明和元年十一月十一日戊午、豐明節會、〇中略今夜立舞臺於南庭有大歌、再興自今豐明宴可爲如斯者、

〔大江俊名記〕明和八年十一月一日、大嘗宮造立始辰刻前也、造酒皃今度御再興ニ而、造立始之節庭上へ廻、造酒司誘引、其外修理職已下廻可始旨、傳奏奉行より修理職へ直被命、於南殿攝政殿被覽、仍南面自西第二間上格子計、命爲伺令上、

〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年九月十九日、傳〇傳奏奉〇奉行招、今度午日久米舞御再興、伴佐伯誘引被仰渡事、

古事類苑

神祇部二十二

大嘗祭五

古事類苑

神祇部二十二

大嘗祭五

〔延喜式三十八掃部〕踐祚大嘗會、〇中略十一月、〇中略中卯未剋、懸葦簾於悠紀主基正殿南堂、殿別六枚主殿寮樹幔、訖更鋪簀十六枚於廻立殿內、其上加席十四枚、其上黃端帖八枚、其中央雙施御牀二脚、其上加疊繝端御帖各一枚、布帷黃御牀東西鋪白端御帖四枚、西廂官人已下掃部已上卜食人十人持御座等物、自大嘗宮北門入、鋪白端御帖十枚、布端御坂枕一枚於悠紀正殿中央、又設打拂布一條、納筥御廁殿鋪折薦八重帖一枚、主基殿亦如之、訖自廻立殿至兩宮正殿道、鋪布單、事具神祇式上安卷葉薦、官人已上持湯殿御榻、候於廻立殿西幔內、女孺已上座隨宜設之卽悠紀御膳所須、折薦帖八枚、折薦八枚、折薦短帖八枚、葉薦八枚、山城食薦八枚、寮造食薦八枚、付內膳司、主基亦同戌剋天皇御於廻立殿、典掃退出喚寮、寮微聲稱唯、爲近御所不敢高聲典掃宣御榻持來、官人稱唯、卽舁自殿北方廻詣東、轉授女孺、訖復本所、掃部四人便留、餘皆退出候大嘗宮北門東腋、天皇幸悠紀殿、宮內兩輔於御前左右膝行、隨御步敷葉薦、官人二人於御後左右膝行、隨御步卷、訖退出候於本所、卽設小齋侍從座二枚於承光堂前幄下、又設辨官奏事座一枚於大嘗宮南庭、天皇還御於廻立殿、宮內幷寮供奉如初、更幸主基殿、供奉亦如悠紀、

〔北山抄五〕大嘗會事

卯日平明、〇中略式部設親王以下版於大嘗宮南門外庭、門南去二丈五尺、置參事版、東西去一丈五尺、異行置親王以下版、申時以前庶事咸畢、酉剋掃部寮、以神座御座供于嘗殿、承平二年、開門後、王卿侍從入自南門、供之、天慶九年、裝束司圖司相從、行幸以前供畢、而供神祇大副賴基等申、任承

（平例、臨時改供云々、清涼抄云、供宮内、掃部式、可供之、天慶例失也、）次中臣忌部各一人率縫殿大藏等官人、率置衾單於悠紀殿、率内藏官人、率置御服二襲并絹幞頭於廻立殿、（掃部寮敷簀於殿内、其上加席、其上黄端帖八枚、中央重施御床子二脚、其上加緋端御帖各一枚、御床東西敷白端御帖四枚、縫殿又儲天羽衣、掃部官人儲湯殿御槽於廻立殿西幔、内藏寮式云、供廻立殿、與掃部寮、卽昇自殿北戸、授女孺云々、）次神祇官率神服宿禰、人莫縮服案於悠紀殿神座上、次忌部官一人、入莫篚服案於同座上、（先是悠紀主基、自祭場、未時以前到朱雀門、齋門開暉天會昌等門、開暉儲會昌門前、倉代物置東西堂、供物到大嘗宮、取扱屋、華開門、神祇官留候北門内左腋、所司率諸氏、供御飯料、稷御膳、陪内膳、率莫知式、）主殿寮以齋火設燈燎於南院、（各二燈二燎）伴佐伯宿禰各率門部八人、（著青摺衫）於南門外通夜設庭燎、

〔大嘗會儀式具釋　六〕大嘗會卯日次第

大臣取打拂筥參上

是ヨリ以下ノ六條ハ、並ニ大嘗會宮内ヲシツラフ節ナリ、打拂筥トハ、打拂布トテ、神座ヲ拂フ料ノ布ヲ入タル柳筥ナリ、其布ノ長、昔ハ一丈三尺ト延喜掃部寮式ニ見エタリ、今ノ樣ハ知ラズ、大臣是ヲ大嘗宮マデ持參セラルヽバカリナリ、是ハ最上ノ人ノ取コトヽ見エテ、昔ノ儀ニハ或ハ親王之ヲ取ト見エタリ、今ハ凡朝廷ノ公事ニ親王ノ出仕セラルヽヲ見ズ、且親王ハ大臣ノ下ニ班ナレバ、今ノ世ニテハ親王ノ取ベキニ非ズ、

次參議辨昇坂枕、次侍從内舍人大舍人等昇神座御座等參入、

神座ハ一丈二尺ノ疊、九尺ノ疊、六尺ノ疊、八重ノ疊等ナリ、御座ハ天子ノ御座ノ短疊ナリ、是亦並ニ大嘗宮マデ持參スルバカリナリ、

次掃部入殿内供之

是ハ上ニ見エタル大臣以下ノ持參セル物ヲ裝束スルナリ、先神座ハ内陣ノ中央ニ一丈二尺ノ疊ヲ敷キ、其上ニ六尺ノ疊ヲ竪ニ二疊ヅヽ二重重ネテ四疊敷ク、此四疊ノ内、南ノ方ノ二疊ニハ白布ノ裏アリ、其上ニ九尺ノ疊ヲ敷ク、此疊ハ是ヨリ下ノ疊ト南ノ端ヲソロヘテ敷ク故、

北ノ方ハ三尺アクナリ、其アキタル所六尺ノ疊ノ上ニ、錦ノ御沓一雙ヲ北面ニ置ク、此九尺ノ疊、昔ハ七疊重子敷、其内一疊ヲ少シ東ノ方ニ引出シテ、其引出シタル所ニ打拂筥ヲ置トアリ、貞享ニハ只四疊重テ、其内上ノ二疊ニ白裏ヲ付ケ、下ノ二疊ヲ少シ東ヘ引出シテ、其引出シタル所ノ南ノ端ヨリ聊北ナル所ニ打拂ノ布ヲ置カレ、筥ハ其東ニ疊ヲ離レテ置ル、今度モ貞享ノ如クナルヤ、此堺ハ知ラズ、此九尺ノ疊ノ上、南ノ端ニ坂枕ヲ敷キ、其上ニ九尺ノ八重疊ヲ敷テ是ヲ神座トス、總テ疊ハ白緣ナリ、又御座ハ神座ノ東八重疊ノ中央ノ巡ヨリ北ノ方ヘ寄セテ、巽向ニ短疊ヲ敷ナリ、神座御座ノ設ケ樣、悠紀御殿ニ一通リ如此、又主基御殿ニモ一通如此ニテ少シモ替ラズ、二通設ルナリ、

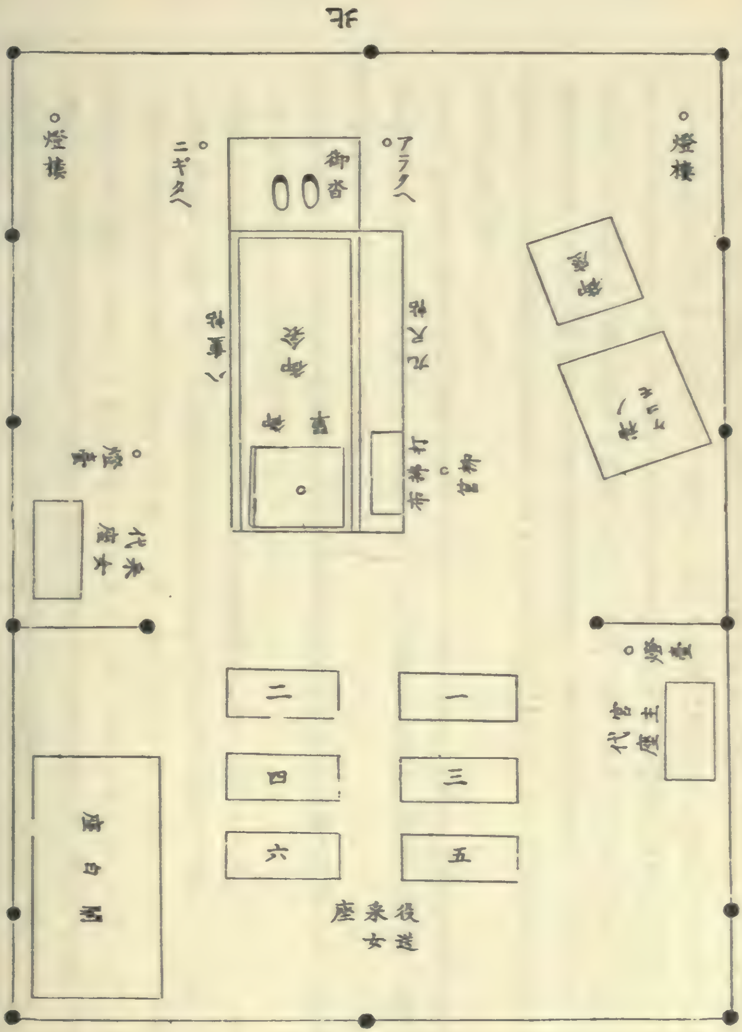
次中臣忌部各一人、率縫殿大藏等官人、奉置衾單於悠紀殿、（主基同之）率内藏官人奉置御服二襲絹御幞頭於廻立殿、

御衾御單ハ並ニ生ナリ、御衾ハ八重疊ノ上ニノベ敷、御單ハ御衾ノ上、南ノ端ノ所ニ帖ミテ置ナリ、〇中略御服ハ廻立殿内西間ノ南邊ニ、東西ノ中央ニ當リテ一襲ヅヽ双ベ置、御冠ハ柳筥ニ居テ、御服ノ西ニ双ベ置ナリ、

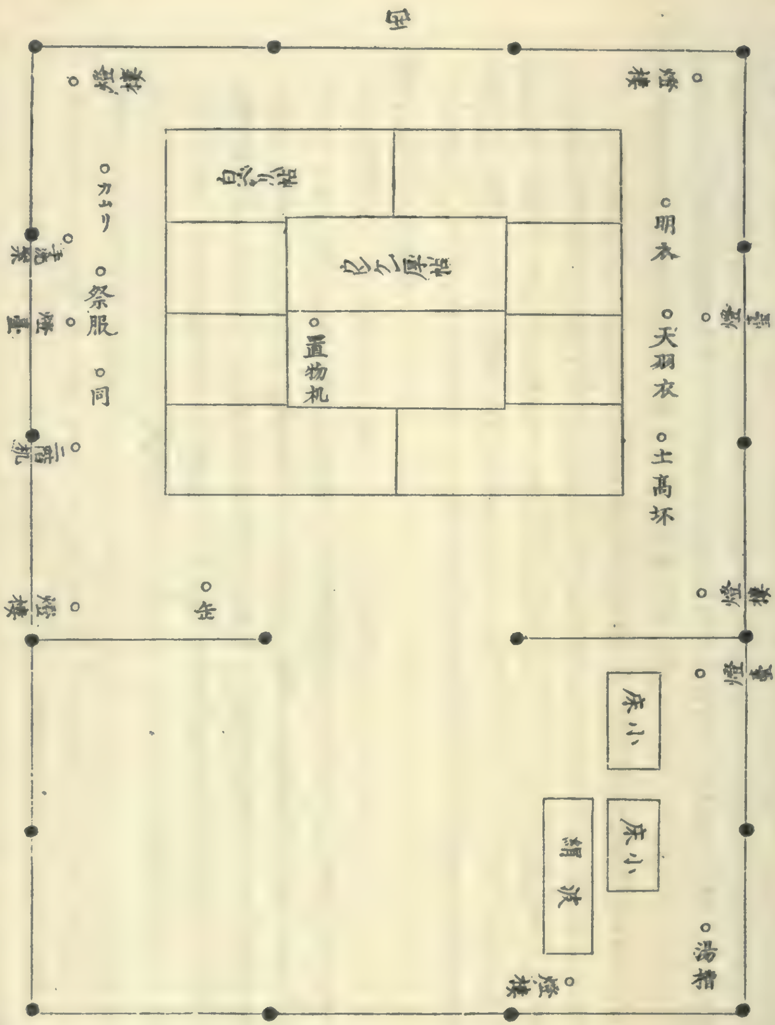
次神祇官一人、率神服宿禰、入奠繒服案於悠紀殿神座上、（主基同之）忌部二人、入奠麁服案於同座上、（主基同之）

繒服麁服共ニ、此所ハ神服ナルガ故ニ、神祇官忌部之ヱ關カル、神服宿禰ハ姓氏ノ名、古來神服ヲ織コトヲ業トスル家ナリ、今ハ此姓ノ人ナキガ故ニ他氏ノ人ヲ以テ代トス、〇中略繒服ハニギタヘト訓ズ、ニギハ和ナル儀、タヘハ絹布ノ總名、ニギタヘハ則絹ノ古名ナリ、麁服ハアラタヘト訓ズ、アラハ地合ノ密ナラザル儀、アラタヘハ則布ノ古名ナリ、但昔ノ大嘗供神ノニギタヘハ、三河國ノ神服ノ織タルヲ用キ、アラタヘハ、必阿波國ノ忌部ノ織タルヲ用ユ、此繒服麁服各竹ノカタマ（俗ニイフヒゲコ）ニ入レ、四角ニ龍眼木ノ葉ヲ刺テ、八脚ノ案ニ載、是ヲ繒服案麁服案ト

〔大嘗會便蒙下〕大嘗宮内圖



廻立殿内圖



云、神座上ハ神座ノホトリナリ、ウヘニハ非ズ、此二ツノ案ハ神座ノ北邊左右ニ分置、繒服案ハ西ニアリ、麁服案ハ東ニアリ、此所ノ儀、貞享ニハト部ト神服宿禰繒服案ヲ置キ、忌部トト部麁服案ヲ置ケリ、但是ト部ノ爲ベキ態ニ非ズ、今度ハ議アリテ改メラレタルニヤ、(中略)

主殿寮以忌火、設燈燎於兩院、(各二燈二燎)

忌火ハ齋火ニテ、新ニ火ヲ鑽テ大嘗宮ニトモスガ故ニ忌火トイフ、別段ノ火アルニハ非ズ、燈燎トハ、燈ハトモシ火、燎ハタキビナレドモ、此所ニテハ黑木ノ燈樓ヲ指テ燈ト云ヒ、白木ノ燈臺ヲ指テ燎ト云トミエタリ、兩院ハ悠紀殿ト主基殿ナリ、兩院各其東北ノ角ト西北ノ角トニ黑木ノ燈樓ヲオキ、又内障ノ西邊采女代ノ座ノ北ト、外障ノ東邊宮主代ノ座ノ北トニ、白木ノ燈臺ヲオク、一院ニ二燈二燎ブヽ、兩院ニテ四燈四燎、合セテトモシビノ數八ツナリ、昔ノ燈ハ杏ヲ以燈炷トス、今ハ然ラザル歟、

〔儀式三〕践祚大嘗祭儀

十月中旬、(中略)仰木工寮令、造長上工十人、構作豊樂殿御座板敷、仰衛門府、掃除豊樂院、仰京職、掃除道橋、(中略)前祭一日、(中略)装飾豊樂院御座、塗漆斗帳一基、(方一丈四尺五寸、一面白綾覆上、白地錦押縁、爲蓋帳表、白絹爲裏、同色爲帷、深紫芳縁爲幌、)鏤斗帳料鏡二面、(徑一尺一寸)御床子一脚、(長八尺、廣五尺、高一尺二寸、以藍染纈爲褥、長一丈四尺、五幅、淺黄遠山纈爲畳縁、)錦端龍鬢御帖二枚、(長八尺、廣五尺、)下敷御畳十五枚、(長各八尺、廣各四尺、白端雲繝端、紫地黄文兩面端、)三尺屏風一具、五尺屏風二具、濱樁二尺、几帳二基、三尺一基、白綾御帳二枚、(緋綱纐纈)白絹御衾二條、淺縹芳摺御衾二條、白羅草木鳥獸繡縁御敷枕二枚、採色羅繡御几二枚、摺大服御衣二領、(已上五種、韓櫃五合盛之、櫃足案、以兩面爲覆、)

〔延喜式三十大嘗祭〕践祚大嘗朝堂院祭場立幄八字、又豊樂院宴會殿庭左立南面七丈幄一字、右立紺幄一字、自餘同新嘗會、

〔延喜式三十八掃部〕践祚大嘗會、(中略)辰日、官人分率掃部、入豊樂院、檢校兩國所備御座、與國司共設殿上

御座、悠紀在左、主基在右、五位已上座設於顯陽、承歡兩堂、供奉如常儀、巳日夕悉撤兩國斗帳及御座、更設寮家御座於殿中央、午日官人各執置位記案二脚、左右分入自儀鸞門東西扉、立殿前中庭、事畢入撤、五節舞訖立積祿床、

〔北山抄 五〕大嘗會事

辰日裝束、（天慶、巳日御插頭臺南立云々、）兩國豐樂殿東西第三間構壇、（擬高座壇、悠紀有東階、主基有西階、東修理職、西木工寮作之、）其上立御帳、卷三面帷、（承平、又令卷乾艮二角云々、而天慶例如之、）前後懸犀角鏡等、中央立御倚子、（承平平文、天慶螺鈿、）立置物机、置獅子形如常、（有御臨足、銀鐎嗽壺、蒔繪火桶、炭取等云々、置所可尋、）御帳東西立四尺屏風、乾北艮三方立五尺屏風四帖、（天慶記云、御帳艮角立五尺屏風一帖、乾角立同屏風二帖、其一帖立廻爲隱所云々、）東壁北第二間立黑漆棚厨子一基、其南立御酒器、御座左右壇下以軟障引隔母屋與北庇之間、（承平記云、東壁及北壁東第一間臨之、天祿悠紀記云、自壇北階東間柱東、東階北壁間柱北立廻一方各二條四幅云々、）南廂一列設王卿座、（小忌在其上頭、）（御座巽角設之、天祿南北相對、所司設之、）南面東階東砌下設上官座、（二列、）造酒司候軒廊、逢春門北腋第一間中央立內辨兀子、（西面、寬平九年、依左大臣宣、改立第二間、）與顯陽、承歡兩堂北端平頭、當殿東西端立兩國標、（天慶記云、去殿階十六丈、兩國標間八許丈、）其南各立樂人幄、（南去五丈、卯酉妻、）中務置尋常版、式部置行立版、（殿南十二丈置尋常版、南去一許丈置蕃賓版、東西各去二丈五尺置行立版、版前加標云々、）顯陽、承歡兩堂設五位已上座、其前砌上各立胡瓶二基、造酒司候壇下、當顯陽觀德兩堂間、立左兵衛仗戟、（右陣相對、）兩國倉代等物列立觀德、明義兩堂前、（仁和主基記云、酒魚菓井樣物類前列、大飾居酒十基、六角倉代、次立倉代物、東上北面、式云、部領擔夫退出、承平記云、擔夫皆在其下、）顯陽堂前置陰陽寮行漏具、儀鸞門外立左右衛門仗戟、豐樂門內對立集人楯戟、（承平午日記云、衛門隼人陣不立仗、兵衛陣皆立戟、今案彼日兵衛可陣儀鸞門內、衛門可陣豐樂門內、又何不立戟乎、）其東西設兩國樂鼓各二面鉦等、（天慶先例、立儀鸞門內、爲逢例、承平記云、鼓鉦假立儀鸞門屋內、須立門外屋內、）延英堂北第三四間立兀子、（親王以下納言以上座、）五六間立床子、（參議座、西面北上、）東庭當第五間以南立床子四行、（辨已下料、件日裝束、年々記文不定、臨无所見、准元日裝束、隨便宜可定行歟、）

〔江家次第 十五 踐祚〕大嘗會

辰日、〇中略兩國司裝束宴會儀、（悠紀幄立東第三間、主基立西第三間、南廂當御座巽設王卿座、小忌在其上頭、顯陽、承歡兩堂第一間前移立兩國標、觀德明義兩堂前運

置倉代等物、殿上式部預置版位、諸司供張如元會、

〔大嘗會儀式具釋 七〕辰日悠紀節會次第

兩國司裝束宴會儀

裝束ハ裝飾ト云ニ同ジク、ヨソホヒカザルヲ云、左ノ文スナハチ其裝束ノ樣ナリ、但今明日ノ儀、昔ハ豐樂院ニテ行ハル、是天皇宴會ノ所ナレバナリ、今ハ豐樂院ノ儀ニ依テ紫宸殿ニテ行ハル、故、殿内殿庭ノ裝束以下、君臣ノ座共ニ大ニ昔ト同ジカラズ、

其儀當御帳坤設群卿座、立臺盤、小忌座在其上頭、

帳ハトバリト訓ズ、帳ヲ以テ圍フテ其中ニ御座ヲ供ズ、其帳昔ハ悠紀張主基帳トテ帳ヲ二ツ設ケ、今明兩日共ニ先悠紀帳ニ御シ、後ニ主基帳ニ御セラル、今ハ帳ハ一ツニシテ、其廻ニ悠紀ノ御屛風ヲ立廻セバ悠紀帳トヨビ、主基ノ御屛風ヲ立廻ラセバ主基帳トヨブノミ、其座ハ殿内ニテ聯ニツク座ナリ、故ニ臺盤ヲ立、小忌座在其上頭トハ、群卿ノ中ニテ小忌公卿ハ、下臈ニテモ其座ヲ上座ニ設クル例ナリ、

中務省、右仗南一許丈置尋常版、

尋常版トハ、常ニ之ヲ撤セザル故ニ尋常版ト云ヨシ、江次第元日宴會ノ條ニ見エタレドモ、卽江次第ニモ尋常版ヲ置ト云ル文所々ニアリ、然レバ常ニ撤セザルト云ニハ非ズシテ、此版ノ外、當日バカリニ置ク版アル故、夫ニ對シテ尋常版ト云カ、今日ノ如キモ外ニ壽詞版ナドアル故ニ、版トバカリ云テハソレニマギレン事ヲオソレテ、尋常版トイフト見エタリ、

式部省尋常版南去一許丈置壽詞版、其西立標、（小忌在前）

壽詞版ハ下ニミエタル、中臣ノ跪イテ壽詞ヲ奏スル所ノ版ナリ、標ハ杭ナリ、是ハ朝廷ニシテ何ニテモ儀式行ハレ、群臣庭上ニ列立スル時、廣濶ナル所ナレバ、其人々ノ心ニ任セテ列立ス

レバ、其所其次第等宜シカラザル故ニ、其以前ニ此ニ某官ノ立ベキ所、此ニ某位ノ立ベキ所ト云シルシニ杭ヲ立ル事ニテ、意ハ大抵版ト同ジ、但令ニハ版位アリテ標見エズ、儀制令ノ文ヲ案ズルニ、其頃ハ一兩人バカリ坐スル所ノシルシニモ、群臣ノ列立スルシルシニモ、共ニ版位ヲ置タルガ、貞觀儀式以下ニミユル如キハ、坐スベキ所ノシルシニハ版ヲ置、立ベキ所ノシルシニハ標ヲ立ルトミユ、今モ又然リ、但概シテハ云可ラズ、此ニ云ル標ハスナハチ下ニ見エタル、群卿著標下、群卿參列等ノ時ノタメニタテル標ナリ、

〔大嘗會儀式具釋九〕豐明節會次第

早旦裝束司、奉仕上下裝束、

裝束司ハ當日ノ役ノ名、辨官ノ中ニテ勤ム、上下ハ殿上殿下ナリ、裝束ハ裝飾ニテ、ヨソホヒカザルナリ、當日早旦裝束司ソレ〳〵ノ役人ヲ率キテ上下裝束セシム、左ノ文スナハチ其裝束ノ樣ナリ、但昔ハ豐樂殿ニテ行ハレ、今ハ紫宸殿ニテ行ハルヽ故、殿内殿庭ノ裝束以下君臣ノ座共ニ、大ニ昔ト同ジカラザルコト辰日ノ所ニ注スガ如シ、

其儀撤御帳装飾高御座、當母屋西第二間、設群卿座、同間南庇設小忌座、各立臺盤、

是殿上ノ裝束ナリ、御帳ハ昨日悠紀主基ニ御セラレシ御帳之ヲ撤シ去、高御座ハ階アル高キ御座ナリ、御座ノ廻ニハ欄檻アリ、四方ニハ鏡瓔珞ナドヲカケ、前ニハ錦帳ヲタレ、上ニハ八角ノ屋根アリ、其頂ニハ鳥形ヲ居ユ、藤原光忠卿ノ圖說ニミエタル昔ノ高御座ハ最玲瓏タル物ナリ、今ハサホドニハアラチド、猶金玉ヲ以飾リ、丹青ヲ以綵リ、其莊嚴ミツベシ、其樣ハ筆シ難シ、大略當時大社ノ神輿ニ似タリ、今世高御座ハ行事官之ヲ掌ル、略〇中小忌ノ座、辰巳ノ日ハ大忌ノ座ノ上頭ニ設ク、今日ハ南庇ニ設ク、昔モ豐樂院ニテノ新嘗ノ豐明ニ、小忌公卿ノ座ヲ南庇ニ設クル事ミエタリ、

中務省置版、式部省立標、

昔ハ今日殿前ニ舞臺ヲ構フ、是五節ノ舞アルガ故ナリ、今ハ其舞ナケレバ之ヲ構ヘズ、

〔經信卿記〕治暦四年十一月廿二日(辛卯)○秉燭參大忌幄、次宮內卿、右兵衞督、左大辨被參、此間相共巡見大嘗宮、大略如指圖、先月悠紀西鳥居內敷布、神殿內中央重置八重疊、疊東西有机、机上有入籠物、但西籠物頗小、自東是神服歟、同殿內四角有燈樓、(居盤)巽角有半帖、戶外每角又立燈臺、中戶懸帳、南端懸簾、次見北膳屋臼殿等、件北屋皆椎柴飾、有稻實公并八女等、次見主基方、大略同前、但八重疊無供神物、若臨期欲供進歟可尋、

〔匡房卿大嘗會記〕天仁元年十一月廿一日、延喜式并小一條大將抄、小野宮右大臣抄、清涼、新儀式等、與近代所行太以相違、稱掃部寮古老說二行敷之、是成光、時成等說云々、依延喜式必作圖、奉院仰云、彼時只依所司說耳、如式并圖者、以河內國黑山筵帖長一丈二尺五寸二枚敷神坐中央、(東西妻)南北相去九尺、次官人四人、一度以帖四枚敷黑山筵帖中、(南北妻)中央二枚相重、用寮織筵廣四尺五寸、其上帖者、筵一枚、薦七枚、(縁、裏、白絁、帖薦一重、縫一重、並白布縁也、)其左右又敷四尺帖二枚、(用黑山筵)相合三行帖東西一丈二尺五寸也云々、

〔中右記〕天仁元年十一月廿四日庚午、裝束使辨御裝束高座、公卿大盤母屋、小忌座庇如例、仍不能委記、前庭舞臺幄等如新嘗會、(○中略)辰巳日御裝束悠紀主基行事辨勤仕、午日幷小安殿御裝束、裝束司辨奉仕也、

〔台記別記〕康治元年十一月十六日甲辰、昇大極殿見御裝束等、于時未辨備、雅綱辨大夫史政重監臨之、高御座東西各二間、鎮壇母屋東第三間立御几帳、御壇東北南面有昇階、御壇下東一間母屋敷滿繧繝、南座東第三間以東、設小忌公卿座、

西上對座東、三間臺盤南儲小忌座、綠兀子二脚、南納言料、簀子床子一脚、參議料、其臺盤口無座、同

二間西柱下臺盤南立南面兀子一脚、爲予座、大臣料用四尺臺盤、其臺盤口無座、予座東畔臺盤南頭、立緣兀子、爲納言座、其東畔南北立渡子床子、爲參議幷散三位座、東山一間中央、主基准之可知

〔兵範記〕仁安元年十一月十六日丙辰、今夜節會、兩國供奉大極殿御裝束、其儀高御座東西第四間立御帳、（悠紀東、主基西、）御帳艮乾兩角壇上立五尺屏風、

件屏風各新調也、艮立一帖、乾立二帖、主基方准可知之、宮內少輔伊行書本文、

同左右壇下立高松軟障之、（迄于東西庇壁下引之、爲母屋與庇隔也、）　高御座懸帷垂之、（件帷用豐樂院帷云々、在內藏司歟、）

悠紀主基御帳東西南三面卷帷、（白綾有繪物文等、各樣々、）懸鏡角等、立件御帳壇、兩國構之、以板按敷之、遶高御座壇也、

件壇敷青打絹、帳臺上有敷物、（兩方參差各別也、）鋪唐錦毯代、立紫檀地螺鈿御倚子、有唐錦面幷覆等、御承足、（有無不見、）

御倚子南左右、立平文置物机各一脚、（有錦面幷覆等、）兩机間立蒔繪火爐、悠紀帳上、艮角敷菅圓座、爲攝政御座、（主基可准知、）

御帳前、立御臺盤二脚、（二臺盤左右、）　東面第三間內母屋、鋪滿兩面、

南庇東第二三間、立小忌公卿座、　其次絕席、設大臣以下兀子床子等、（但座各對立之、）

兀子前立朱漆臺盤、小忌與大忌有絕席、臺盤下敷紺布、以胡粉書文、（主基公卿座准可知、）

東壁下北第二間、立黑漆棚厨子一脚、其南立御酒器二脚、有杷、（主基准之、）

御後軟障內設內侍以下座幷御裝物所、昭訓門北第二間、掃部寮立內辨兀子、龍尾道上東西、設諸大夫幄、

同殿南面東階下、鋪辨少納言以下座、（西准之、）左右近陣階下、左右兵衞陣龍尾壇下、左右衞門相分陣三

門如常、　兩國標與立龍尾道庭中、
兩國多米都物、昇立昌福延休兩堂前庭中、式兵兩省置版位、立標如式、　朝集堂設外辨座、
此外御裝束儀不能委見、詳在寬治記、
十七日丁巳、藏人光能、令所司奉仕神宴御裝束、其儀後房馬道敷滿長筵、其南端間立四大宋屏風、鋪錦毯代、立螺鈿大床子二脚、在錦面、東西妻立之、召纂紀方以口其前垂御簾、昇殿廊北第一二三間二行對座、敷綠縁半帖、爲納言以下座、依大臣不坐、敷兩面縁、如舊或御料兩面一枚、敷左方座上、疊帖下、繧繝疊、卿相座末横切鋪黃縁帖、爲侍臣召人座、馬道御簾前供燈也、每廊柱打木燈臺參燈、　十八日戊午、早旦撤兩國御帳幷標等、裝束司裝飾高御座、如例、帳三面褰之、高座外壇上敷青絹、撤高座敷錦毯代、立平文御倚子、其御前安承足、其左右立置物机、其間立火爐、御帳艮角敷菅圓座、爲攝政御座、御帳艮乾兩角立御屏風、御帳前立御臺盤、壇上巽角立陪膳采女草墪、母屋東二三四間、立大臣以下兀子床子等、二行對座、小忌座在上、繧繝疊、其臺盤、件座上盤等すちかへて立也、御帳以東母屋與庇引隔高松軟障、御帳以西第一二間母屋與庇間立廻障子、其以西引隔同軟障、至于西庇與母屋間、更南折引同軟障、西庇壁下立黑漆厨子、通障子內立臺床子二脚、爲內侍座、御後設御裝物所、幷敷女房座、儲母后御座、殿前構舞臺、舞臺巽角立舞人幄、中務立宣命幷例版位、掃部寮立位記案、此外儀大略如辰巳日、　三年十月廿七日乙卯、於南門各乘車向大極殿、可始帳代幷御裝束事、依寬治例、於達智門下車、可歩行之由皆相存之處、及昏刻之上、下官老骨已盡、乘車經大宮、向待賢門之間、大夫史已下相從、自他所行、已違先規歟、不可爲後例、於大極殿主基辨已下皆集會、隆職宿禰於悠紀方高御座東母屋開裝束司圖、先悠紀壇打丈尺、次帳代一脚立始之、主基方所行同前、于時及昏刻、主殿寮立明、　十一月十七日甲戌、早旦著行事所、立大極殿御帳、吉時未刻率大夫以下行事官入應天會昌兩門、參上高御座東二箇間、卜食國繼御帳板敷廻高欄、渡新造斗帳先案居、次立柱、內匠司供奉此役、主基方右少辨重方同行事、如悠基方、其後事事沙汰了、入夜退出、　廿二日己卯、晚頭

參大嘗宮、(裝束如圖)先巡撿廻立殿御裝束、

大嘗宮北鳥居前、木工寮造立廻立殿、五間黑木屋一宇、東西妻以黑木作之、南面中央有戶、懸白生絹幌、南面有御輿寄、西三間爲御所、寄中隔南有戶、御所中央立床、敷御座二枚、(白生絹端)床東西敷疊、東二間爲御湯殿、寄東方北有戶懸布幌、其內東間中央東西妻立槽、有絹覆、又有蓋、御槽南居打板、御槽西頭立置物机、(南北妻)副西間南立方四尺床子、口(供御座、件床子臨期召之、而供近例不立之由、歷職宿禰所中也、)巽乾兩角立小机、居燈樓供燈、又御所方坤乾立同机、供燈、殿東方去二許丈、立釜殿、居新釜二口、(悠紀主基各一口居之、南北相並、)坤角有小忌大臣座、巽角庭中敷小忌納言參議座、(南北行)殿西北兩面立庭幔、又自殿艮角至于釜殿乾角東西行同引之、

次大嘗宮儀、南北門外腋立神楯戟、件門有扉、門內左方有悠紀神殿、南北妻以黑木作之、葺青草、以檜網代爲蔀隔、北三間爲神殿、天井用檜網代、板敷用播磨簀、其上展弘筵、有中隔戶懸幌、神殿艮乾兩角立机、居燈樓供燈、中隔南二箇間北間同兩角立同机、供燈同前、南面西間有戶、其前構御輿寄、件殿西面張檜網代、巽角有御樋殿、(二間東西妻)西面有戶、三面引筵、他事如正殿、神殿北垣外有五間膳屋、(東西妻)西三間爲膳殿、東三間爲盛殿、艮角有三間臼殿、(東西妻)乾角有二間柏殿、(南北妻)神殿方南西北三面劃庭、居榛々鳥獸作物、栽種々草樹、過差之至、調莊嚴雜鏤筆端、金銅蝶小鳥付正殿四面、於事過美、殊表勤節歟、

右方有主基神殿、御樋殿、膳殿、臼殿、柏殿等、准悠紀可知、

次供神座、下官幷掃部寮相共奉仕之、先六尺疊四枚南北行並敷之、(有裏)其上一丈二尺五寸疊二枚同並敷、(無裏)其上中央九尺疊四枚重敷、(二枚有裏、件疊等弘皆四尺、但九尺疊四枚、中二枚弘四尺九寸、已上疊緣一枚、黃八枚、有白布端、)九尺疊一枚引出之、(中分東引出)其上置打掃布、(件布置御其官人中云、六尺五寸、)南北行引展置之、九尺疊上敷八重疊一枚、(長八尺、弘四尺、緣一枚、黃七枚、疊差也、每疊有端、七重疊緣、故稱八重也、)神座巽角又供神座、半帖一枚向巽也、其北敷御座、半帖一枚、件二帖各長三尺餘、八重疊南端安坂枕、(東西行插八重疊下也、)次神服氏人持參天羽衣、安置案二脚、有覆、一脚參河國和世天羽衣

也、(絹云)云　宮主卜部兼衡神服氏雅景舁之、一脚阿波國荒世天羽衣也、(布云)云　卜部兼貞(已上三人小忌裝束)忌部明友等舁之、立神座北端、次內侍參上、供神衣、先是縫殿寮納朱漆辛櫃、命婦相具參上也、內侍二人先參廻立殿、(悠紀主基女工所勾當、掃部寮少納言內侍等、依先例參此殿也、)下官歸廻立殿、催行諸事、左大臣已下參集伎座、供奉諸司合外記見參云々、戌剋、大忌公卿著大忌幄、豫官厨家居膳、左中辨俊經朝臣、少納言等勸盃、　廿三日庚辰、早旦參大極殿、大夫史幷行事官皆參、奉仕節會御裝束、(略)○中　高御座東西第四間立御帳、(悠紀在東、主基西、)御帳艮乾兩角壇上立五尺御屏風、(件屏風新調也、艮一帖乾二帖立之、各書本文繪、調方錦書色紙形、主基一同、)同左右壇下、立高松軟障、(新調也、主于東西壁下立之、悠紀方以書樣題爲曝、各入幄、寬治色法也、主基以赤地錦爲端、天仁例云々、此條無所見、諸事用寬治之由御定先畢、行事自由也、以件軟障立隔母屋與廂、)高御座懸紫面帷、(裏赤、件帷古物、在內藏寮歟、)四面皆垂之、其內敷差筵、其上敷繧繝端弘疊二枚、其上又一枚中敷敷之、(件疊三枚裝束司儲之、各長一丈餘、弘五尺餘、御座覆入角、疊不及其角、)

悠紀主基御帳懸白帷、東西南一面卷上之、(悠紀小葵文綾二色、如常、旋繪寬治例也、主基白唐綾、以色々糸縫竹桐鳳凰等、天仁例云々、進退如軟障、)鏡懸角、如常、件御帳悠紀主基以板敷鎮其上、塗石灰、新造高欄塗朱漆、悠紀壇東北有登階、敷唐綾繝、面敷青打絹、(押纈丸文、)　薄帳臺面敷滿唐錦、(悠紀赤地唐錦、弘七尺、長一丈餘、故殿御物也、中請白川殿、主基例錦、中請院云々、後日返上、)其上敷唐錦毯代、立紫檀地螺鈿御倚子、(在唐錦面、)其前安御承足、(悠紀主基共裹唐錦、)御倚子南左右立平文置物机各一脚、(在錦面縁朱等、)兩机中央立蒔繪火爐、(炭櫃)悠紀帳上艮角敷菅圓座、爲攝政御座、同南巽坤角立獅子形、其中央立御臺盤二脚、如例、(二臺盤在右、件臺盤南妻懸黑漆子机上、悠紀在兩面寬治例也、主基用赤地錦、天仁例也、陪膳采女草墪、立御帳巽角、)　東西第三間中母屋敷滿兩面、置鎮子、南廂東二三間先立小忌公卿兀子、(西上北面、)其前立朱漆臺盤、居饌、其次絕席立大臣以下兀子床子、(但座末對座立)兀子床子等中央立臺盤、居饌、(饌盤下敷紺布在白文、主基公卿座准可知、)東壁下北第二間立黑漆厨子一脚、其南立御酒器二脚、(在兩面覆、)御後軟障中當御帳東間、東西立大宋御屏風各一帖、其中敷兩面端疊二枚、爲攝政御在所、昭訓門北第二間、掃部寮立內辨兀子、龍尾道上東西立諸大夫幄、大極殿南面東階下敷辨少納言以下出居座、左右近衞陣階下、左右兵衞陣龍尾壇下、左右衞門陣三門外、兩國標列立龍尾道庭中、

(今朝引入會昌門也)南國多米都物异立昌福延休兩堂前庭、弱集堂儲外辨座、自餘御裝束儀不能具記、

〔玉海〕仁安三年十一月十四日辛未、早旦參院奏條々雜事、○中略

供神膳間事○中略

承保元年十一月廿一日乙卯、自納言□□問之云、所司未進衾單云々、入御之時雖參中戸下、不詳撿見、驚此尋、問悠紀辨實政朝臣、答云、件事神官所司等所職也、仍重不相尋也、召候廻立殿內侍與掌縫令供之云々、此間事甚狼藉也、各不觸事由、任意執行、奇怪無極、大略行事辨子細不行歟、賞殿內事宮主所司等相加所行也、而卜部宮主祝衆國子也、有未進之氣、衆國相副候殿外云々、召衆國問案內之處、申云、至宮主者、習傳件膳事所營行也、至神座事者、自本所知給也、內侍掌縫等供衾單事、是神嘉殿儀也、至大嘗宮者不可專然、中臣忌部官人各一人、率縫殿大藏等官人、奉置衾單於大嘗宮悠紀殿云云、而今掌縫偏執神嘉殿儀所申至愚也、不可憑用、實謂謬說也、

〔玉蘂〕建暦二年十一月二日甲辰、番殿上、良久藤中納言來仰、左府(○藤原良輔)云、○中略大嘗宮神殿神座已下寸法、式文四尺、神殿間廣十丈六尺也、中央敷神座、其東敷之、不能直敷、仍被尋掃部寮官人(古老者也)之處、近代自然減寸法、式六尺□□差過了云々、可依此例歟、又御裝束之儀何樣可有乎、各可計申者、即復座、左府仰可定申由、自顯俊朝臣次第定申之、(取樣之儀、大嘗會兩國挾間事、大嘗會神座寸法事云々、)御所方奏聞、小時歸來、仰聞食之由、人々分散、

定詞○中略

神座事

同卿(○左大臣以下中納言以上)定申云、任近例可減神座寸法、此詞無外計略故也、隨又有例、□式文也云々、

此中帥卿□□□神座、如式文四尺、御座減寸法、自中央頗□西可敷歟云々、

已上雖子細多、不過之、

〔萬一記〕正安三年九月十二日、大史伊綱參會、大嘗會廻立殿節會等圖書與之、後戸御裝束鋪設者、官方沙汰送、藏人請取之令奉仕之由示之、又大嘗會御衾奉仕之時、於舊例者內侍參之役也、近例中臣役歟之由示之處、內侍參爲本儀、不參爲近例之由答之、　十月十四日、爲御使向大炊御門大納言(良宗)示條々事、

大嘗會御裝束奉仕事

中云、所勞扶得者可參、不然者可遣三位中將、自官司行幸廻立殿之時、於官司可奉仕之、於廻立殿者、代々外戚、幷藏人頭奉仕之由申之、御裝束事則不仰之、以事次示之、

〔宮主秘事口傳〕大嘗會者、神膳之供進、第一之大事也、○中略

延慶二年十一月廿四日、當日記云、神座行事、辨大夫史等可撿知之處、不見來之間予口入、仰掃部寮、任仁治記令敷畢、廣筵上敷六尺帖四枚、(南方二帖有裏也)次敷一丈二尺疊、其上敷九尺疊四帖、(仁治記云、第一帖第四帖弘四尺、第二三弘四尺五寸也、)其上敷入重疊、(仁治記云、九尺第四帖ヲ東方ヘ引出之、第一帖ヲ西方ヘ引出之云々、)次置坂枕、(入重疊ノ下南方)其後東九尺疊上敷、柳筥置御手巾、(長六尺餘)同掃部寮所奉仕也、次縫殿寮、坂枕西置錦一枚、(錦方ヲ西ヘ向テ置也)次御沓一足、向西方、置九尺疊歟、乾艮兩角燈樓如例、次當神座之巽方敷短疊幷御座、次中戸口ニ懸絹幌、其外敷諸司半帖、爲宮主座、

已上此條々、官方縫殿寮掃部寮所役也、雖然或遲參、或不辨故實之時、宮家存先規、以別義口入、仁治延慶之例也、仍爲存知注置、○中略

行幸以前、先於悠紀主基神殿、令沙汰具條々、

宮主與神服長令舁繪服案、(差蒭舁、於案下差之、)宮主者舁後方、神服長者舁前方也、經神座西北兩方、立懸長疊上案外ヲ主上御通達之間廣立也、御通達無違亂之樣立之、是故實也、(神服長八官方儀也)

次小使與齋部官人舁競妙案、(小使者後方、齋部者前方、)各先於案下差蒭、立神座西方南北行也、次各退出、

次主基神殿者、大使與神服長各於案下差笏昇紺服案、經神座西北兩方立東方、縣長疊上、案外ヲ主上御通達之間廣立也、次各拔笏退出、

次小使與齋部官人昇荒妙案、(先於案下各差笏、小使後方、齋部官人前方、)立神座西方、(南北行也、)差笏事先々有違失、延慶度主基小使兼倚宿禰横ニ指之間、曾不被指諸人驚目云々、文保度主基小使兼彥宿禰先指笏之處、不差得之、適差出之處落口其時子息兼員(衣冠)寄テ取已上是等、(○此間有神殿圖、今略、)

神殿座大概如此、主上御通達不迫之樣可用意事也、又可昇置案事也、

〔經嗣公記〕廿四日(○應永二十二年十一月)午の日、豐明の節會也、悠紀主基の御帳幷に兩國の標山を撤して、たかみくらに御しやうぞくをそなふ、御後の壇下に兩面二帖をしきて關白(○藤原經嗣)内大臣殿(○足利義持)の御座とす、せんれい壇上にも孔雀の御屏風をたてゝ、そのうちに圓座をしきて執柄の座とす、このたび悠紀主基のごとく兩方にまうくべきに、一こうこれをまうけず、ふしんの事なり、ただし仁治のさしづにこの御座なきよし、のちに官務爲緒申けるとかや、

〔康富記〕永享二年十一月十九日丙辰、悠紀節會也、酉剋著朝衣參官、(帶劍遲方等如昨日、)先之兩局大略被參集、局務外史被談曰、陣座幷床子座構樣奇異也、不審之餘尋官務之處、返答曰、辰巳兩日如此、於午日者可改也、寬元永德例云々、公卿經過時進退未覺悟、先規不分明、無左右難著之故、令佇立之由被示之、予御覽見之、陣座正廳東登廊北面戸以西、(北面也、)床子座同戸以東、(北面也、)陣座前立蔀内幷床子座前蔀内打幔、(各東西行、)床子之下敷打板、(東西二行、)薦上加敷半帖、設辨少納言外記史座、(南北對座、)者也、予令答局務曰、如永德康隆記者、外辨上首權大實直卿起陣座、經床子前被向外辨、局務大夫史予等候床子、於四品外史前有揖、外史已下答揖、陣座床子等構樣委記之、不若今構樣歟、凡大極殿東福門内、王卿幷上官座各東西北三方引廻幔、少納言外記著北、辨史著南、西上對座勿論也、元曆追治曆例、於官廳被行時、

山槐記曰、東福門代爲陣座、小東引幔、上官座西北引幔、座敷様如今、寛元度指圖如官務被申也、但元暦寛元等未有立蔀并床子也、文永記曰、左大臣起座出立蔀外著靴云々、延慶記曰、辨、少納言、外記、史候床子、右大臣殿入立蔀給時、辨、少納言蹲踞、予已下平伏、大臣於少納言前少揖過給云々、有立蔀時幔事不見、然則今宵立蔀上重引幔、床子下削有敷打板之條、誤之儀歟、殊今度可被用永德例之由既被宣下了、略近例被本寛元往跡之事無其詮歟、參差之由人々稱之、予懐中之記等入外史見參了、辨、少納言各不可著之由被稱之云々、　廿日丁巳、主基節會也、戌刻許著朝衣、參官陣座并床子座、構様異于昨、打板并幔事、今夕奉行右大辨被命官曰、昨日構人々有疑心、且辨、少納言稱不可著之由、忩寛元之外可被注申例、随注進可申辨、少納言者、官返答曰、永德家記朽損、所見未詳、其外無有例、主人人有疑殆者無益也、無左右可改之由申之、即使主殿寮撤幔、仰木工寮令取打板云々、

〔季連宿禰記〕貞享四年十一月十四日己丑、參一條攝政殿、〔○編原冬經〕大嘗會同辰日節會間事窺定之、其趣記左、

一節會高御座内敷充鏡、艮角置攝政殿座、〔圓座〕等之事如即位時、御座朱塗御倚子南面置之、東西置物机切臺盤二脚等置之儀如例節會、

一御倚子前火櫃之事窺申之處、御即位々之時、近代不置設者今度火櫃不可置之由有仰、

一高御座内御倚子、與内侍所高卑之事、今度御倚子之方高之間、内侍所濱床之下、置高二尺餘之臺被上濱床、件臺者、今度仰修理職所調進也云々、此事攝政殿有御尋之間、尋行事官重基、今日件趣申攝政殿也、

十七日壬辰、早旦壇却大嘗宮、〔悠紀主基神殿〕略、悠紀主基節會、今日被行豐明節會、立高御座於南殿、堂上堂下御裝束、裝束司沙汰也、右少史安倍亮仲、右史生重基、官掌紀氏辰等奉仕御裝束、其儀高御座中敷滿鏡、〔如御即位時〕中央置朱塗御倚子、〔近代如恒〕左右置置物机并四尺臺盤二脚、〔各有臺盤机置鏡子、一脚者中央東西行、内一脚者南北行、外寄西〕

方、如二例節會時一、但不レ置二火爐一、艮角置二攝政座一、圓座高御座壇下巽角母屋置二陪膳采女座一、草墪代置二圓座一高御座西設二内侍座一、如二例節會一

壁代如レ恒、但卷二上之一高御座坤設二大忌公卿座一、如二例節會時一其儀設二四尺大盤一脚、北黒塗兀子一脚、南朱塗兀子

一脚、黒塗朱塗之兀子者、親王料自兀子也云々、近代例節會之時設來、自二何比一置レ之歟、不レ知二其謂一、其西南面兀子一脚南、内辨大臣料、四尺大盤西置二長大盤

二脚一、縁兀子四脚南北相對置レ之、大忌大中納言料其末獨床子二脚南北相對置レ之、大忌參議料、三位參議者獨床子也、南廂西

二間西階間也置二長臺盤一脚、東西行、大盤不足之間、件大盤者當々自二省一被レ借二渡之一、大盤南置二縁兀子二脚一、小忌大中納言料其西置二獨床子

一脚、小忌參議料、共東上北面、北廂御粧物所御倚子、如二例節會時一、次將胡床南庭瓶子等、亦如二例節會時一設レ之、宜命

版、尋常版、壽詞版等、中務輔令二沙汰一設、外記沙汰也標者壽詞版南、量レ程可レ置云々、小忌大中納言參議標者

北、不レ異二位重行一、只三本相竝立レ之、其南一丈大忌公卿標、異位重行立レ之、小忌大忌共東上北面、外辨座兼日依二攝政殿御氣色一、北上東面

設レ之、其所月華門坤方、例節會外辨之所也北方小忌大中納言參議座、縁兀子二脚、獨床子一脚、次大臣兀子、南面也、前置二式案一、件案黒塗、下

敷レ簀、次大忌大中納言參議座、縁兀子四脚、獨床子二脚、折レ東置二辨少納言床子一、長床子也、東西行、其南外記史床子一脚、其南

史生官掌召使床子三脚置レ之、共長床子也幔北二張、西七張、南二張構レ之、其體圖レ奥、外辨式案東砌置二火爐一軒廊東一間

南端、兀子一脚置レ之、内辨下殿料爲二東廊代兀子一、宜陽殿壇上、量レ程臨期已前置レ之、依二便宜一木工寮置レ之、如二例節會時一、藏所床子

如二例節會一置レ之、藏者大藏省藏也、是亦如二例節會一、安倍氏奏二吉志舞一料胡床一脚、宜陽殿壇上南端柱程

東面置レ之、臨期已前置レ之

〔大嘗會家記〕修理職方記

天明文政共

一南殿東階ヨリ廻立殿ヘ出御、御橋廊下長八間、巾一間、軒高サ一丈二尺、杉皮苫取交葺、

同

一廻立殿ヨリ北御鳥居之口迄、假御廊下、雨儀之御廊下、御當日晴ニ候得者、御下知次第取拂、桁行長延十八間半、梁行巾一間、軒高サ九尺、何れも明放土間、苫杉皮取交葺、

文政度ヨリ

一十八間廊下ヨリ廻立殿ヘ假御廊下、桁行長延十七間餘、梁行巾一間、軒高サ九尺許、苫杉皮取交葺、

天明文政共

一廻立殿巽角ヨリ柴垣艮角迄、并南殿南面簀子ヨリ柴垣迄幔仕切、長延二十四間餘、

文政度

一廻廊東西外諸司休所辨備所幕張、大臣宿所三仕切ニ幕張、休所之儀右之通書記ニ有レ之、委細之圖無レ之候、

〔壬生家記〕文政元年十月十四日

一主基御幌并御帷等ニ至迄、從二出納一請取設候儀、天明度之通覺悟仕候事、

一同御臺盤二脚、右同樣之事、

一豐明節會之節、悠紀主基御幌繡幢等、天明度者、其儘被二建置一候樣承傳候得共、其度之儀、私記不分明ニ付事、窺候事、

右日野殿江差出候事

十五日、昨日書付ヲ以相伺候主基御幌同御帷至迄、出納より請取設候儀、并御臺盤共南殿ニ被レ建候儀故、行事官職掌ニ候得者、勿論天明度之通行事官より設之儀ニ候、且又繡幢兩御幌、豐明節會ニ者被レ撤、高御座許ニ相成候儀、中山殿記錄ニ委敷相見候間、此度も豐明ニ者兩御幌并繡幢共被レ撤候儀ニ候間、左樣相心得可レ申旨御沙汰也、

十九日

一豐明節會之日、悠紀主基御幌并繡幢共、午剋迄ニ撤却可レ仕旨、最餘程手間取可レ申存候間、巳日節

會相濟次第、撤却ニ取掛リ可ㇾ申候、併清暑堂御神樂中ニ相成可ㇾ申候間、至而穩便可ㇾ撤旨之事、
一相濟次第撤却ニ取掛候得者、夜中故萬事甚混雜仕候間、不ㇾ苦候得者、午日夜明次第取掛リ、午刻迄急度撤却可ㇾ仕旨申上、御承知也、
一兩御帳撤却之上、出納御帳ハ直樣返却仕、南殿御帳者、天明度之通、十八間廊下ヘ入置可ㇾ申歟、尙又今一應可ㇾ相伺旨申上候事、
一辰日兩御帳共御裝束、例節會之通設候樣被ㇾ仰渡之事、
一同日高御座帳中、御卽位之節之通、御帷者皆垂置可ㇾ申之事、
一南殿壁代之事伺之處、大極殿被ㇾ擬候事故、壁代者不ㇾ被ㇾ掛旨被ㇾ仰渡之事、
〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年十一月十六日、御裝束設試也、卯刻參勤、酉半刻退出、參勤所司如ㇾ左、
大藏省分
一小忌幄今日設之事
一大幄同設之事
一神膳方八足之案類モ今日運送、納ㇾ置議所大臣宿所等事、但新調之分也
一神座案、臣下手水案等、所ㇾ設依ㇾ未ㇾ定、今日不ㇾ設之事、
一布單今日不ㇾ設之事
一悠紀主基兩殿南簀子東ノ方、荒妙和妙案二脚宛設之事、
一次將伴佐伯四府ノ胡床、如ㇾ圖設之事、
一辰日散狀ヲ以、小忌大中納言三木胡床、悠紀主基可ㇾ設之事、外辨數設無ㇾ之事
大臣一人、紫 大納言三人、中納言四人、黄 三木四人、縞 床子 但今夜取片付、臺盤邊ニ置也、
一內辨行事座不ㇾ及ㇾ設之事

一廻立殿新調大燈臺四基設之、(今日不及撤却也)

主殿寮分

一外辨幄ノ幔并覆布

一廻立殿御湯ノ具、御指湯、御指水、(各添杓)案上ニ設、殿外計案上設之、

行事官分

一出納ヨリ獅子狛犬、同臺二枚、皆朱臺盤二脚等可請取事、

一悠紀御帳御帷、茵代二帖、平文御倚子、(在褥)黑漆置物御机、(在表敷)御火爐、御臺盤二脚、同覆二帖、麟形鎮子八口、

一主基御帳同上

一高御座如御即位節、(壇上不敷錦也)

一南廂公卿東西ニ立、上ニ八尺一脚、次四尺三脚、次八尺一脚、

一本文和歌御屏風、今日古物設之、悠紀御帳艮角ニ二帖、乾角ニ一帖、繼壇艮角ヨリ軟障迄ノ間、同御屏風ニテ建切、東ノ壁ノ下ニ和歌八帖ヲ建之、

一御帳外艮角ニ關白殿御座ヲ設

一主基御帳

一御後御粧物所、大宋御屏風二帖、赤漆御倚子、同艮角唐戸西ノ中央ニ、南面ニ設關白座、大宋御屏風二帖立之、

以上節會御裝束、外辨略之、

一悠紀殿東鳥居ノ内、南柱邊柴垣ノ内ニ、御單御衾ヲ納ル、楊筥一合、筥案許設之、次御檜扇、御櫛楊臺一基、次御沓一足楊臺(各入足案、付札書付)設之事、

儀杖

一同殿南簀子巽ノ方ニ、案上ニ荒妙和妙ノ籠許設之、

一主基殿同上

撤却御單、御衾、御檜扇、御櫛、御沓等案、和妙荒妙ノ籠納納殿、其餘其儘也、

掃部寮分

一淸涼殿ヨリ廻立殿迄ノ御筵道

一悠紀主基廻立殿等弘筵

一廻立殿繧繝端御座已下

一南殿采女座、宮主座、

一同殿前左右幄座、廻立殿前大臣座、大忌公卿座、

一淸暑堂神樂座

一紫宸殿御粧物所

一殿下御座

一內侍座

一命婦座

一采女座

〔儀式　三〕踐祚大嘗祭儀

卯日平明、略〇中諸衞設大儀、諸司陳威儀物、如元日儀、但兵部左右兵庫不與焉、石上榎井二氏人各二人、著明服、率內物部卅人、著緋布衫、立大嘗宮南北門神楯戟、門別楯二枚、戟四竿、木工寮預設格木於門左右、其楯戟等物、祭事畢收左右衞門府、訖物部分就左右楯下胡床、門別物部廿人、左右各十人、五人爲列、六尺爲間、伴佐伯氏人各一人、分就南門左右內掖胡床、左右近衞中將已下各引隊仗、分衞大嘗宮左右兵衞督以下各引部隊、分衞其方、左右衞門督以下各引其隊、

分衞其方及門、門部糺察諸門出入、隼人司率隼人、分立左右朝集殿前、侍開門乃發聲、中務輔丞率大舍人寮及舍人、宮內輔丞率主殿掃部等寮及殿部掃部等、並公服執威儀物、左右分陣、〇又見延喜式

〔北山抄五〕大嘗會事

卯日平明、〇中略諸衞設大儀、分衞如常、除鼙鼓鉦鼓、承平記云、近衞小忌陣在大嘗宮內、大忌陣在南門外、兵衞陣在兩楯室間、衞門陣在會昌門外、其小忌陣在同門內、之諸司公服、陳威儀物、如元日儀、中務率大舍人、宮內率主殿掃部、左右分陣、兵部兵庫不與、承平記云、立近仗南鷂道東、今案相分可立鷂道東西、但列所可南退歟、石上榎井二氏各二人、著朝服率內物部卅人、著紺衣立大嘗宮南北門神楯戟、門別楯二枚、戟四竿、木工寮預儲格木於二門左右、伴佐伯氏各一人、著五位當色、帶劒、分就南門左右、儀式注內讀、新式及神祇式注外讀、天暦內讀云々、隼人司率隼人、分立左右朝集堂前、承平記云、式部輔正列立如恒、〇中略申時以前庶事咸畢、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡大嘗宮南北門所建神楯四枚、各長一丈二尺、上廣三尺九寸、中廣四尺七寸、下廣四尺四寸五分、厚二寸、戟八竿、各長一丈八尺左右衞門府、九月上旬申官、令兵庫寮依儀造備、楯丹波國楯縫氏造之、戟紀伊國忌部氏造之、祭事便敷衞門府、又朱雀、應天、會昌等門所建、大楯六枚、戟十二竿、亦令同寮修理、

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡踐祚大嘗會新造神楯四枚、各長一丈二尺四寸、本闊四尺四寸五分、中闊四尺七寸、末闊三尺九寸、厚二寸、丹波國楯縫氏造、戟八竿、各長一丈八尺、紀伊國忌部氏造、其料黑牛皮八張、各長八尺、廣六尺、掃墨一斗三升六合、楯別二升八合、戟別三合、膠一斤十二兩、以二兩和掃墨一升、以一升和掃墨二升、酒六升八合、商布四段四尺、裹料、楯別二丈六尺、糯米六升二合、著裹料、漆二合、楯料、塗面金四枚、各長四尺、廣五寸、厚一分、料鐵卅九斤十二兩、和炭十二石、工十二人、手力十二人、六寸平釘六十四隻、楯別十六隻、料鐵十六斤、和炭五石、工五人、手力五人、二寸平釘七百八十隻、楯別百九十五隻、料鐵廿四斤六兩、和炭十一石五斗、工十五人、手力十五人、戟鋒八隻、料鐵廿六斤八兩、和炭十二石、工廿人、手力十二人、食料一人、日米二升、鹽二勺、海藻一把、醬滓二合、功錢、其數臨時、並申官請受、

〔北山抄五〕大嘗會事

兵庫寮造神楯戟事、左右衞門府、九月上旬申官、

大嘗宮料楯四枚、丹波國楯縫氏造之、戟八竿、紀伊國忌部氏造之、祭畢收衞門府、朱雀、應天、會昌等門大楯六枚、戟十二竿、令間寮修理之、木工寮儲格木、

〔大嘗會儀式具釋 六〕大嘗會卯日次第

兵庫寮、立神楯戟於大嘗宮南門東西、各一竿一枚

兵庫寮ハ武器ヲ掌ル官ナルガ故ニ楯戟ヲ立、○中略昔ハ石上榎井兩氏ノ人ノ内物部ヲ率キテ之ヲ立テ、兵庫寮ハ關カラズ、後世ハ兩氏ノ人絶タルガ故ニ兵庫寮之ヲ立ルカ、神楯ハ長サ三尺バカリ、廣サ一尺二寸バカリ、頭ハカケタルガ如クニテ、尖リタル所三ツバカリ出ル、裏ノ方ニ執手アリ、表裏共ニ黑漆ナリ、昔ノ楯ハタケモ長ク幅モ廣ク、數モ南北門ニテ四枚アリ、後世ハ略セラレテ、南門ニバカリ二枚オク、神桙ハ柄ノ太サ七寸、マハリ黑漆、鍔ニハ金薄ヲ貼ケ、刃ニハ銀薄ヲ貼ケ、鍔ノ下ニ大和錦ノ幟アリ、幟ノ末三ツニ割ケテ、三ツナガラ其端尖ル、此桙ハ大嘗宮ノ南門ノ外、東西ニ一竿ヅヽ地ニ突立ル、昔ハ是モ八竿ナリ、今ハ略セラレテ二竿ナリ、楯ハ桙ノ外ノ方ニ一枚ヅヽ、裏ヲ外ヘナシテ柴垣ニタテカケ置ナリ、

〔大嘗會儀式具釋 七〕辰日悠紀節會次第

近衞陣階下

近衞府ハ御在所ニ近キ所ヲ警固スル官故ニ、弓箭ヲ帶シテ階下ニ陣ス、左近ハ左ニ列シ、右近ハ右ニ列ス、昔ハ尋常トテモ階下ニ陣列シテ警固ニ備ヘ、何ニテモ儀式行ハルヽ時ハ、大將、中將、少將、將監、將曹、府生、番長、近衞マデ皆陣列ス、其陣列ノ體、裝束ノ定等、詳ニ貞觀儀式、延喜式等ニミエタリ、中古以後ハ尋常ニハ陣ナシ、儀式アル時モ御即位ノ外ハ次將バカリ陣ス、○中略皆缺腋ニ靫ヲ著、各木ニテ作レル矛ヲ持進ミ來ル、左將ノ矛ニハ赤地錦幟、右將ノ矛ニハ青地錦ノ幟アリ、各其幟ニ金ニテ三巴ノ紋アリ、幟ノ末ハ皆四ニ割タリ、次將等此矛ノ末ヲ右ニ、本ヲ

左ニシテ持來リ、進ミテ胡床ニ著、胡床ハアラカジメ左陣ニ三ツ、右陣ニ三ツ設ケ置タリ、陣ニ至リテ各矛ヲ其人ノ右ノ方ニ立テ置、

〔續日本紀　一文武〕二年十一月己卯、大嘗、直廣肆榎井朝臣倭麻呂竪大楯、直廣肆大伴宿禰手拍竪楯桙、

〔續日本紀　九聖武〕神龜元年十一月己卯、大嘗、備前國爲由機、播磨國爲須機、從五位下石上朝臣勝男、石上朝臣乙麻呂、從六位上石上朝臣諸男、從七位上榎井朝臣大嶋等、率內物部、立神楯於齋宮南北二門、

〔兵範記〕仁安三年十月廿七日乙卯、早旦參行事所、大夫史已下行事官寄人等多以參集、先可被行來月次第日時沙汰許定、勘文云、〇中略

陰陽寮

擇申可被立神楯日時

十一月十九日丙子　時午二點　若申

仁安三年十月廿七日

十一月十九日丙子、今日兵庫寮立神楯於大嘗宮南北鳥居左右、兼日勘定日時、成宣旨、召渡料材、令造立也、主基一同云々、

〔康富記〕永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗祭也、〇中略兵庫寮神楯桙、南鳥居外東西脇各一枚充立之、自餘在所近來不立之、件楯桙、紀州鳴神社祝氏人等相論之、然經御沙汰之後、賦與氏人、相合楯一帖充遣之云々、

〔友俊記〕寬延もとの年十一月中の七日卯の日、大嘗會おこなはる、〇中略兵庫寮神楯戟を大嘗宮の南門の東西、各一枚一竿をたつ、

〔大嘗會家記〕口代

文政度大嘗會御當日、石上榎井二氏之義、內々御尋之趣承知仕候、則當案史生二人右兩氏ニ擬ヘ

調度

參勤仕候、尤衣體ハ尋常束帶ニ而是迄參勤仕候、且又楯戟設樣之義ハ、御當日參勤次第兼而設置候、尤南門許東西之腋ニ楯戟各一枚一竿ツヽ設置候事、則御式御次第等ニハ、御存之通石上、榎井二氏代各二人、立神楯戟於大嘗宮南北門ト御座候へ共、當時二枚二竿ニ御座候間、南門許設候也、已ニ天明度右相伺候處、御次第之通ニ而者、人體も四人、楯戟各四枚四竿御入用ニ候へ共、當時二枚二竿故、明和之通、只南門許可設置樣被仰付、尤天明度迄ハ、始南門之兩脇ニ設置、悠紀主基殿出御還御ニ隨ひ、楯戟扉の上へ設替候へとも、文政度ハ右之義無之由、尤伴佐伯開閉門も同樣之義之由ニ御座候、依而文政度ハ初設置候儘、撤却迄設替無之趣ニ御座候事、

七月六日　兵庫頭

官務殿御使江

〔輔世卿記〕嘉永元年三月十八日壬辰、入來大崎遠江掾、○中略大祀鉾立調物日記持參、段々依命猶亦取調候得共、他之職而已在之、鉾立方之義一向無之、寶曆度者、左右鉾十本と在之、明和、文政度者、鉾左右八本許在之候旨、是又御斷、參河掾所勞ニ付、入魂御返答被申上候也、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡御大嘗殿之時、所服御服二具、衾三條、敷衾三條、縚枕二枚、絹帙頭三枚、望陀布單二張、帨二具、宮三合、預令縫殿寮裁縫并備、並盛櫃又供同殿衾八條、單四張、令同寮縫備、

凡大嘗殿所須長帖十二枚、短帖六枚、簾十六張、預令掃部寮造備、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

掃部寮以白端御疊加席上、以坂枕施疊上、

〔延喜式三十八掃部〕造鋪設功程

神事料、○中略御坂枕一枚、長三尺、廣四尺、料編薦一枚、織席一枚、端料曝布一尺七寸五分、麻二兩、木綿一兩三分、長功一人小半、中功一人大半、短功二人、

右六月、十二月、神今食新嘗祭供御料、

雜給料

坂枕一枚、長二尺五寸、廣三尺、料編薦一枚、生絲一兩、長功一人小半、中功一人大半、短功二人、

〔西宮記六月〕神今食、〇中略納言參議昇坂枕、納言東、參議爲ノ枕、

〔年中行事歌合〕三十三番左　神今食

更ぬとて今ぞそなふる坂まくら神もぬる夜の時や知らん　入道大納言〇藤原忠嗣

〔大嘗會儀式具釋六〕大嘗會卯日次第

參議昇坂枕

坂枕ト云ハ、大嘗宮神座ノ八重疊ノ下ニシク枕ナリ、其制今ノ樣ハ知ラズ、昔ノ樣モ時世ニ依テ一樣ナラザル歟、貞觀儀式ニハ白羅草木鳥獸繡緣御坂枕トアリ、又御枕一枚料、美濃紙一丈八尺トアルモ坂枕ノ事ナリ、又延喜掃部寮式ニハ、坂枕一枚長二尺五寸、廣三尺、料編薦一枚、生絲一兩ト見エタリ、日本紀武烈紀影媛ガ歌ニ、擧暮摩矩羅(コモマクラ)ト詠ルヲ、私記ニ古以薦爲枕トアリ、是ヲ以テ思フニ、薦ヲ用ユル者古風ナラン歟、是亦參議ト辨トハ大嘗宮マデ持參スルバカリナリ、

〇按ズルニ、坂枕ニ二アリ、一ハ大嘗、新嘗、神今食等ノ時、神座ニ置カルヽモノニテ、上ニ引ケル儀式延喜式等ニ見エタルモノ是ナリ、一ハ節會等ノ日、豐樂院ニテ天皇ノ御座ヲ裝飾スルモノニテ、上文諸殿裝飾條ニ揭ゲタル儀式ニ、白羅草木鳥獸繡緣御坂枕トアル是ナリ、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

太政官符大藏宮內省

大藏省

御衾一領半料、美濃帛一匹三丈、敷衾一領半料、河夫理絁四丈二尺五寸、綿廿六屯七兩、御枕一枚料、美濃絁一丈口尺、帷一張料、望陀布二丈一尺、御裏一枚半料、布三丈四尺、練絲二分、生絲二分、大殿戸一具、幌料望陀布三丈二尺、已上縫殿寮所縫作、部縫女等卜食令縫、木綿大九斤、用大嘗宮料、調布三丈三尺、膳部縫部等料

宮內省

大宮一合

右得神祇官解偁、主基大殿御衾幷雜物料、依例所請如件者、省宜承知、依件充之、

〔兵範記〕仁安三年十一月十四日辛未、早旦參院、奏條々雜事、大極殿繼壇御帳敷物料、唐錦五段可入之、往古有裝束司、延久以後無其實、每御卽位大嘗會被借用之、在白川殿云々、仍申事由、啓彼殿、卽被借獻之、付行事所了、

其寸法

一帖長一丈七尺弘七尺五寸　一帖長二丈六尺弘七尺二寸

一帖長一丈六尺弘七尺五寸　一帖長一丈二尺弘七尺三寸

一帖長一丈弘七尺九寸

准七段八尺、皆赤地唐錦、過差美麗物也、

主基方申請院御物、但依普通幅唐錦、頗不足云々、

於悠紀料者、代々御物、在執政家、由下官知案內、今傳有白川殿由申行也、

十七日甲戌、參攝政殿內、覽唐錦染交纐纈等不足事、次歸華、　十八日乙亥、參院奏條々事、錦等可召大貳、又可尋入道大相國(平清盛)幷邦綱卿等由有仰、各遣仰了、向六波羅亭、大貳赤地錦一段、纐纈一段、付使進上、右京大夫又進錦二丈、纐纈一段、口口禪門被尋云々、

〔季連宿禰記〕貞享四年十月廿三日戊辰、大嘗會調度之中、菅蓋之事、主殿寮爲調進之由、頃日主殿大允友治申之、然而件菅蓋、最早行事官重基調進之中、已前既被定仰了、仍於今者難被改之間、其旨可存之由、仰含之、然今日菅蓋繪圖一紙友治持參云、今朝友治參庭田中納言、申事之由之處、庭田黄門被仰云、此事已前被仰出行事官了、然而猶可申攝政殿〈兼輝○一條〉之由也、件繪圖寫一枚留當家、後世主殿寮調進可被相改者也、　廿七日壬申、未刻許、依有召參攝政殿、仰云、菅蓋之事、主殿寮所注進繪圖何比所圖歟、可逐吟味云々、申承由、卽召問主殿大允友治、于直參攝政殿可申事由旨仰了、暫而友治歸來申上之由答之、件圖應永度伴光方所記置圖也、卽繪圖今日入御覽之處、此分可調進之由攝政殿有仰、畏存由友治所申也、　十一月十六日辛卯、今日大嘗會也、〈○中略〉官方催調進物、

行事官重基調進

一和妙二〈御目籠二入、生絹、〉　一荒妙二〈目籠二入、晒布、〉　一御單二　一御衾二
一楊宮二合〈納御單御衾、〉　一八足案二脚〈居楊宮二合、〉　一御櫛二枚　一御扇二柄
一楊宮二合〈盛御櫛御扇、〉　一錦御沓二足　一楊宮二合〈居御沓、〉　一御楯二枚
一戟二本　一黑木御燈樓四　一黑木八足臺〈四脚、居燈樓、〉　一白木燈樓四
一白木八足臺〈四脚、居燈樓、〉　一瓮(ヒラカ)二　一竹杖二本
一御巫猿女等袍二、並袴二、

木工寮調進

一八足案八脚〈載悠紀主基神供、御手水之具等料、〉　一八足大案二脚〈載瓶子、空盃、陶器等料、〉
一案四脚〈悠紀主基和妙荒妙之案也〉　一小案二脚〈載汁物〉
一燈臺二拾五基

大藏省調進

一貳幅布單七拾參圍

主殿寮佐伯

一悠紀主基二院、忌火御燈八、幷指油、

一悠紀主基院膳屋忌火掌燈六、指油、幷油坏二、白木臺二、

一廻立殿忌火掌燈九、幷指油、

一淸涼殿所々、其外忌火掌燈十九、幷指油、

一淸涼殿階間、幷長橋、南殿北之庇、御物宿(よもつやどり)東之庇、忌火掌燈二十三、幷指油、

一立明自二廻立殿一悠紀主基へ行幸還御四度之料

一立明自二本殿一廻立殿へ出御入御二度之料

主殿寮伴

一菅蓋　一釜殿　一釜殿薪　一荷桶三荷副レ棒

一手桶　一曲物三口　一杓四本　一水瓫一口

一案三脚　一庭火三ヶ所　一伴造松明　一覆布

〔壬生家記〕掃部頭記

貞享度神座設樣南枕

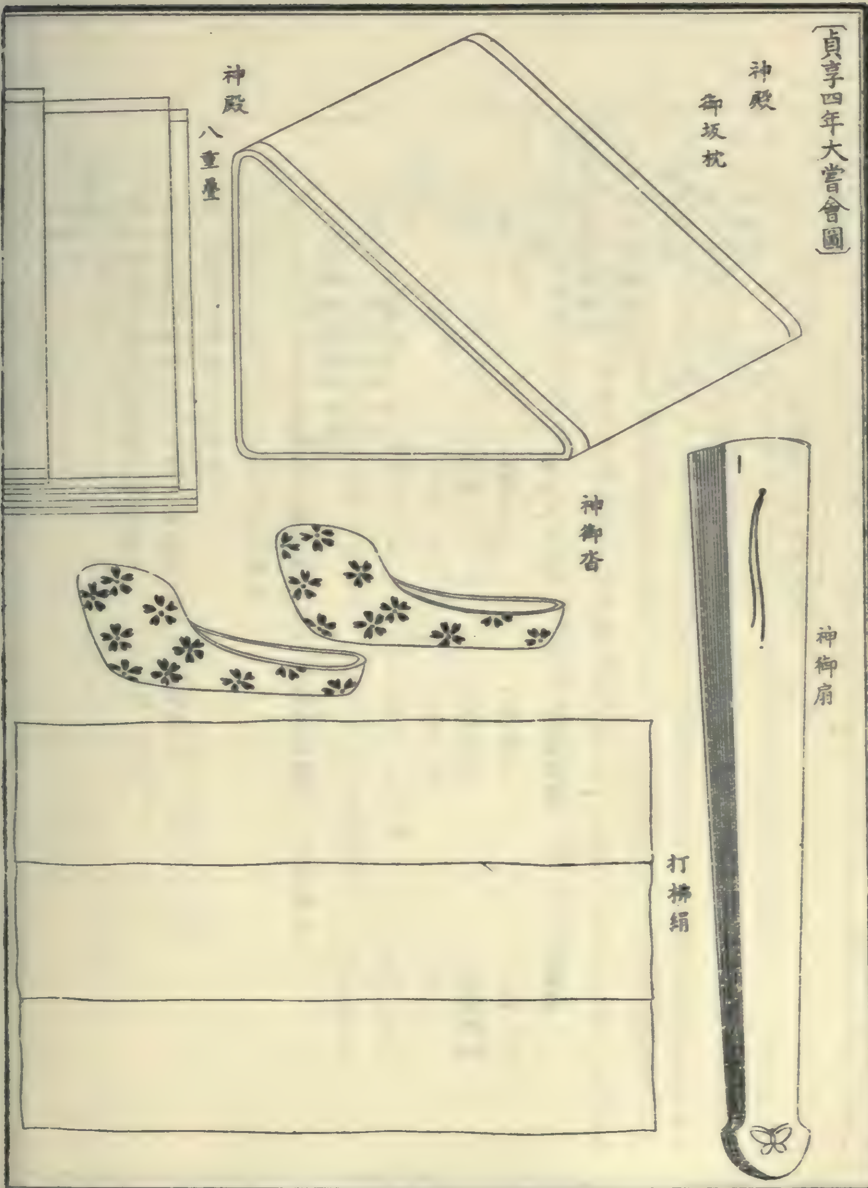
一白布縁疊　一枚

長サ壹丈二尺、ウスベリ也、

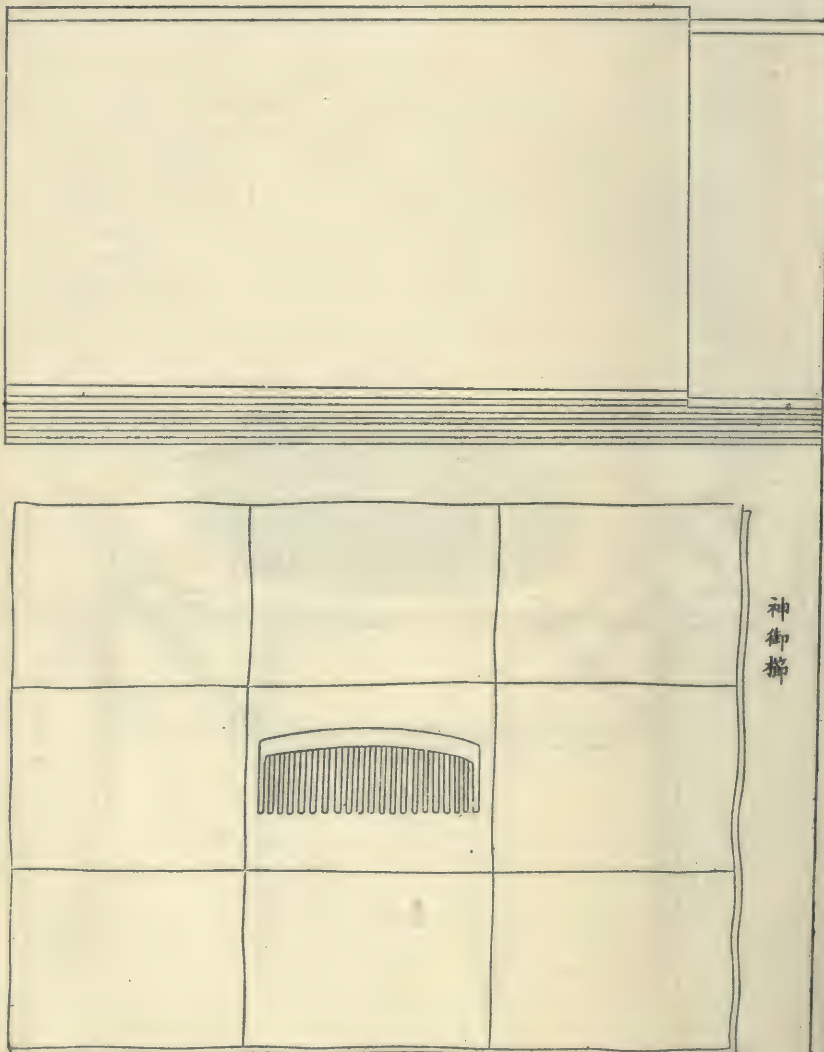
一白布縁疊　四枚

長サ六尺、ウスベリ也、枕方二枚ニ有二裏布一、

一白布縁疊　四枚

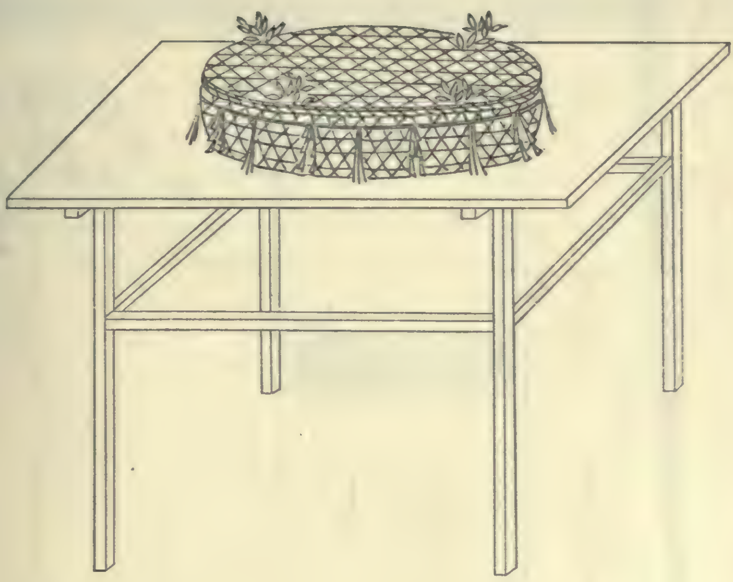

貞享四年大嘗會圖
神殿御坂枕
神殿八重疊
神御沓
神御扇
打拂絹

神御櫛

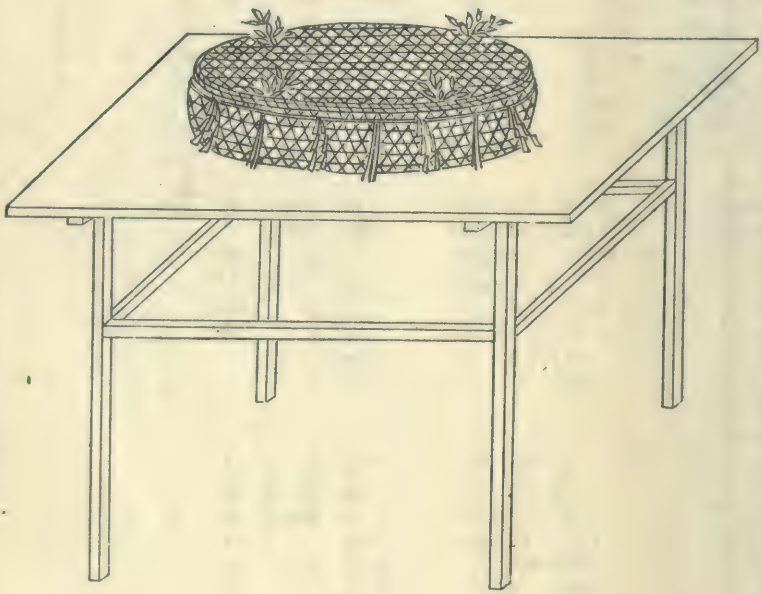


（貞享四年大嘗會圖）

荒妙神服入目籠



和妙神服入細目籠



長サ九尺、ウスベリ也、內二枚ニ裏布有、有₂裏布₁疊二枚重テ、東方ヘ聊引出敷也、

一、白布縁八重疊　八枚

長サ八尺、ウスベリ、內一枚ニ裏布有、

一坂枕

八重疊ノ下枕ニ敷₂之

〔壬生家記〕貞享四年大嘗會悠紀主基御殿ノ內御道具

一疊八枚裏布也　一同四枚　一同八枚(內四枚裏布也)　一八重疊十六枚(ウスベリ也)

一坂枕(一方高キ疊也)二ツ　一御椅二ツ　一御沓二足　一登樓四ツ

一打拂布二(六尺九寸宛)　一短疊半疊也　一白絹縁ノ半疊二枚　一白縁疊二枚

一廣筵(常ノ筵也)十四枚　一布幌二ツ　一布縁半疊二枚(神座也)　一縁端半疊廿四枚

一二幅布單(常ノ布也)　一葉薦(常ノ薦也)

廻立殿ノ內御道具

一疊(高麗縁半疊)一枚　一同(雲繝縁)二枚　一白縁疊四枚　一兩面半疊二枚

一縁端半疊四枚(下敷薦也)　一同五枚　一荒妙御服(布也、目籠ニ入、)　一和妙御服(絹也、細目籠ニ入、)

一帛御服一具(白絹也、御束帶ノ道具也、)　一齋服一具(白生ノ絹也、右同斷、)　一天羽衣二(生也、御湯帷也、)

一明衣二(右同斷)　一浪絹二(生也、御湯船ヲオホフ物也、)　一御湯船(木地)二

清暑堂之座(內侍所ノ御座下ヲ清暑堂ニ用ラル)

一縁端薄疊六枚　一兩面半疊一枚

〔登恭記〕元文四年十月廿八日、自₂去年₁被₂仰付₁、大嘗會御調度之圖、先頃畫所預土佐大藏少輔光芳より差₂出于此宅₁、於₂此方₁加₂書付₁、○中略今日持₂參于頭右中將重熙朝臣之許₁、依₂朝參₁靑侍ニ申₂置之₁歸家、

枚國郡卜定
火爐二口　主殿寮調進　炭斗　同
水器二　大膳職調進〇中略
三枚
耳土器是火舎料　木御箸二雙　內膳司調進　御臺盤　出納調進
四枚
御衾二　行事官調進　納御單衾楊筥二合　同
御櫛二枚、御扇二柄、楊筥二、　同　錦御沓二足、楊筥二、　同
五枚
和妙二行事官調進　八足案二脚、　木工寮調進、　荒妙二行事官調進　八足案二脚、　木工寮調進
六枚
打拂布二、同楊筥二合、　掃部頭調進　坂枕二帖　同
白布端短疊二帖　同
七枚
白布端六尺疊四帖有二裏布　掃部頭調進　同一丈二尺疊二帖　同
同六尺疊四帖　同　同九尺疊八帖、內四帖有二裏布、　同
同八尺八重疊十六帖、內二帖有二裏布、　同
右各神座薄疊也〇中略
十二枚
卯日大嘗宮黑木燈樓四　行事官調進　卯日廻立殿白木燈樓四　同

卯日大嘗宮白木燈樓四基　同　齋火油坏二、同白木臺二、　主殿寮調進

十三枚

白硯　出納調進　蓋篋　同

十四枚

曲桶臺杓(各白木)　主水司調進　白木燈臺二十五基　木工寮調進

神座案二脚　同(○中略)　八足案二(御疊、御單衾、搨筥)　行事官調進

十五枚

菅蓋　主殿寮調進

十六枚

供二小忌御湯一閼桶三、杓二柄、八足案三脚、　主殿寮調進

同覆布二條　同

卯日廻立殿白木御手洗(竹簀、白木案)　各出納調進

卯日蝦鰭槽(白木)　各出納調進

黒葛筥二(一ニハ納二御手巾一白布、一ニハ御搨拔御刀子納、)　同白木八足案二脚　木工寮調進

十七枚

御筥納二天羽衣一　出納調進　卯日廻立殿白木二階机

調布　黒葛筥(手巾納)　白木馬頭盤(御箸御匕)　土器二(有二尻居一)

唾口一　各出納調進　缶杓(白木)　白木八足机、　各出納調進

後曉解齋御粥御裹無一足　出納調進

十八枚

白木大床子二脚　出納調進　量繝端疊二帖　掃部頭調進
小紋疊二帖　同、　白木小床二脚　出納調進
十九枚
卯日廻立殿天羽衣　出納調進　同波絹　出納調進
同御湯槽白木　出納調進〇中略
廿四枚
御插頭櫻、銀、　出納調進　御插頭各臣下之料、藤、梅、款冬、右各金銅、　出納調進
御插頭臺　各出納調進
白木鷲足机白糸繡角伏組　机表青地錦　白木花足机四方伏組啄木　机表赤地錦、
州濱山巖草樹各銀　地敷赤地錦
覆紗赤〇中略
廿九枚
鮮味四枚　御厨子所預紀宗直調進之　辰日悠紀節會二枚
雉二、付紅梅作枝、　籠物二、付松作枝、
三十枚
巳日主基節會二枚　鴨二、付楓作枝、
鵜九、付荻作枝、
〔大嘗會雜事錄〕明和八年之度知音編錄記
一招畫所土佐左近將監予面謁、辰巳節會悠紀主基御屏風、今度於御內新調被仰付、畫所之儀許繪所江被仰付、此由可意得之由申渡之云々、

〔壬生家記〕天明文政大祀、本文和歌御屏風調進手續、從土佐守光孚差出分、

天明七年八月廿二日、今日御用ニ付、非藏人口江罷出候樣、大嘗會傳奏奉行衆被仰渡候旨申來、尤土佐守、左近將監兩人共也、卽刻參ル、傳奏中山前大納言殿〇愛親、奉行坊城頭辨殿〇基理、御列座ニ而被仰渡、左之通奉書四ッ折御書付壹通御渡候、

本文御屏風　八帖

和歌御屏風　十二帖

右各新造調進

本文御屏風繪所　土佐守光貞

和歌御屏風繪所　左近將監藤原光時

九月二十日、中山前大納言殿江被召、卽刻參、表ノ口ニテ前大納言殿、頭辨殿御兩所被仰渡者、先御書博士より本文色紙形色目書付被差出候、則御渡在之候處、軸ノ處花田白並ビ同樣ニ相成候ニ付、左之通相定メ調進可仕旨也、

本文御屏風之御色紙

一帖　第一紅　二紅梅　三黃

二帖　第一萠黃　二花田　三白

三帖　第一花田　二白　三紅

四帖　第一萠黃　二花田　三紫

右之通今度御治定也

文政元年十月十二日、日野殿江參ル、御面會、御屏風草案至極宜出來、伺通御治定御返し也、且御屏風裏色目伺差出置也、御屏風調進以前ニ御內覽被為在候ニ付、十七日頃迄ニ、皆出來置候樣被仰

渡、尙御內覽日限者、追而被仰出候筈也、尤外ニ調進物御調度之類も、不殘御內覽被爲在候由仰也、
十一月七日、非藏人口江被召、前大納言殿御直談、悠紀主基和歌御色紙三十六枚、御淸書出來ニ付御渡也、請取退出、　十七日、今日御覽ニ付、巳刻御屛風唐櫃十合調進、尤土佐守光孚、狩衣著用ニ而出仕、唐櫃五合宛兩度調進運送、　十八日、殿上御屛風設方、北小路新藏人殿設方差圖、不殘拜見承知仕事、　廿二日、今日辰日節會、巳刻出仕、○中略　伯耆守者夜須美ニ付出仕無之、土佐守一人參役相勤也、則日野前大納言殿御差圖、藏人北小路新藏人殿等御差圖ニ而、御帳臺之壇上壇下ニ本文御屛風設之、和歌御屛風ハ殿上之東西ニ立設之、後休所ニ相扣居候旨、日野殿內々御節會拜見仕度相願、悠紀節會月花門外ニ而拜見、夕方兩局より觸書、庭上休所江使部持參、尤勝手ニ退出候樣傳奏衆仰ニ、夜寅刻過退出候也、　廿三日、今日巳日節會ニ付、昨日設置候御屛風點撿出仕、巳刻過非藏人口江參御屆申上、直樣相廻リ候樣直ニ南殿西ノ階ヨリ昇、御屛風設方委點撿、夫ヨリ休所江扣ヘ居、曉卯刻頃相濟、右御屛風貳拾共撤却、唐櫃拾合共則西ノ御物舍ニ相納メ置也、其後殿上小庭ニ而、六位藏人衆江相伺退出、

〔壬生家記〕文政元年悠紀主基御帳繼壇御裝束類之事

一高御座、壇ノ廣サ東西一丈九尺餘、南北一丈七尺餘、同高サ三尺餘、四方ノ高欄高サ一丈餘、左右階ノ幅五尺餘、御後ノ階幅六尺餘、各三級也、壇ノ四面ニ有牙象形、各麟ヲ畫、南面ノ正中ハ鳳ヲ畫、御帳中ノ廣サ東西一丈一尺餘、南北九尺餘、柱ノ高サ九尺餘、但壇上ヨリ桁迄ノ尺數、桁ト鴨居ノ間ニ有靑鏁、帳中ノ床ハ外ヨリ五寸許モ高シ、八角屋根ノ軒廣サ南北二方ハ八尺餘、自餘ノ六方六尺餘、軒ノ上ニ有雲形、其上ニ有順光ノ鏡二十八面、金銅唐草十六本、露盤ノ上ニ有金銅大鳳一翼、蕨手ノ上ニ有同小鳳各一翼、蕨手ノ下ニ金銅ノ玉幡各一流ヲ懸ル、其次ニ同蛇舌ノ帽額八枚ヲ懸ル、其次ニ御帷四帖ヲ懸ル、表小葵紋紫ノ綾、裏蘇芳ノ平絹、帳中ニ敷滿ル錦一帖、紺地倭錦、裏蘇芳平絹、其上ニ有疊二帖、

龍鬢御座一帖、御茵二帖、各繧繝端

一悠紀主基御帳繼壇、廣サ東西一丈三尺、南北一丈七尺餘、高サ三尺餘、都テ同高御座壇二、

一悠紀御帳臺、方一丈、今度疊床ヲ不レ被レ用敷設如レ例飾會、

御地敷二帖兩面端

御下敷二帖同

御帷八帖四幅四帖、五幅四帖、表白平絹、朽木形ヲ摺ル、裏同平絹、表紅濃蘇芳、以二銀粉一蝶鳥ヲ畫ク、表紅白平絹也、

疊代二帖表赤地ノ唐錦、裏紅打、

平文御倚子一脚黑漆金平文、金銅金物、御茵一帖、表幸菱白綾、端赤地唐錦、裏紅打、

置物御机二脚黑漆無文、表敷二帖、赤地唐錦、裏紅打、村濃ノ伏組總アリ、

赤漆御火爐一口

獅子狛一雙

御臺盤二脚紀二帖、兩面ノ錦、裏蘇芳平絹、䲭形ノ緖子八箇アリ、

黑漆小床子一脚兩面端小疊一帖アリ

一主基御帳同レ之

一豐明節會高御座御調度

帳中ニ敷滿ル錦一帖表擷地錦、裏蘇芳平絹、八角ニ仕立也、

繧繝端御疊二帖龍鬢御座一帖、御茵大小二帖、各繧繝端、

平文御倚子一脚黑漆金平文、金銅金物、御茵一帖、表幸菱白綾、端赤地唐錦、裏紅打、

置物御机一脚黑漆無文、表敷二帖、赤地唐錦、裏紅打、村濃ノ伏組總アリ、

赤漆御火爐一口

獅子狗一雙

御臺盤二脚（紀二帖、兩面ノ錦、裏蘇芳、平絹、鎮形ノ鎮子八箇アリ、）

黑漆小床子一脚（繧繝端小疊アリ）

壇上ノ錦一帖（赤地倭錦、無裏、銀銅細鎮子十六本アリ、）

平鎮子八箇（御帳ノ鎮ニ用ル）

〔文政元年大嘗會記〕文化十五年（〇文政元年）十一月廿一日乙卯、大嘗祭也、（〇中略）菅蓋（亘六尺許、長□□）主殿寮（作）調進也、（今度柄製擬舊儀云々、各違恐存、舊制恐不可如此、今度制甚重、目形二貫七百目餘云々、柄執尤肥大、不便無極、非微力之可堪、後來在此職執此蓋者、兼可歎中事歟、倘可考々々、〇中略）菅蓋事、先日內見之節、執試處殊外重、非微力之可堪、仍附傳奏奉行申子細之處、即被申上殿下、殿下亦即依有內見御覽、其體不容易事有御會得、仍被經天聽院廳之後有仰、其旨自御後於執之者、彌進退可爲難澁間、進御先執之可然歟、（菅蓋之端、聊掛玉體程不苦云々、）尤不限車持代、各申合執之、或扶助等交替可奉仕之所詮以不危可爲專要由、兼日以傳奏奉行被仰下一統、深畏入所也、

〔插頭花臺考〕文政大嘗會御插頭華及臺

悠紀方御插頭花

蘭（花銀、葉塗金、長七寸許、）

謂當爲王者香草（本書學士職長朝臣撰進、本文文章博）

主基方同

梨（實葉技木、金花含銀、長六寸許、）

塗山之背梨如升、色紫千年一花、（本文文章博士菅原爲定朝臣）

悠紀方洲濱（總銀メツキ、長一尺五寸許、幅八寸許、高四寸許、）

方丈洲仙家數十萬、耕田種芝草、課計頃畝、如種稻狀、（本書十洲記、職長朝臣、）

主基方同

生洲在東海、有儒家數萬、天氣安和、地無寒暑、本書十洲記、爲定朝臣、

御插頭臺色目、

白木臺足机　一脚

長サ二尺二寸、廣一尺五寸、高二尺二寸、以檜造之、以胡粉畫螺鳥、表敷、表萠黃地雲形錦、裏萠黃平絹、差糸白蜷結四角總角垂之、

白木花足机　一脚

長一尺八寸、廣一尺、高三寸、以檜造之、表敷、表赤地錦、文唐花、裏紅平絹、差糸啄木蜷結四角總角垂之、

地敷

表二幅、赤地錦、文雲形、裏二幅、紅平絹、

覆

紋雲形赤紗

〔輔世卿記〕嘉永元年三月一日乙亥、入夜坊城頭辨様へ御名代石井左內、右者御所勞氣ニ付、代御差出之處、雜掌津田雅樂面會、大嘗會悠紀主基繪壇ニ無之、灰壇ニ致候而、何程ニ而調進ニ相成候哉、御噂モ有之候事故、灰壇之積書明日中御差出候樣、尤天明度ニも拜壇之積有之候由、右も同樣相認御差出候樣、中略○御達也、　二日丙子、寅剋入來、行事官代山口內匠助、右者悠紀主基灰壇ノ積書、幷勘物繪圖等三枚被差出候處、代銀矢張六貫目餘ニ相成候ニ付、精々減少不相成哉、外箱等相止、材木等も略候而精々減少三貫目位ニ相成候ハヾ、明早朝可差出御達之處、如何樣減少仕候而も、六貫目內ニ而者出來兼候趣ニ付、左候ハヾ先此儘可被成御差出、自然勘使へ相渡リ、減少ニ相成候而ハ如何之者ニ候間、爲念御尋之所、何方ニ而被仰付候共、六貫目內ニ而者出來不仕候趣、職人共申聞候間、此上ハ致方無之旨御返答被申上、御承知ノ上退出也、　四月十八日辛酉、家君○壬生以寧

御出門、右者昨夜依御招中山樣へ御出之所、大納言樣御面會ニ而、御相談御達之條々左之通、〇中略

一行事官主基御帳臺御道具出納調進、同御帳臺御帷子以下、先達テ御取調ノ節、新調或者御修復之書付差出有之候得共、今度右別帳之口々御下行、彌於關東不出來候ハヽ出方無之ニ付、大嘗會御下行總用之內ニテ勘考可繰合旨、內々殿下御命ニ付、高松之軟障、文政之度新調ニ而格別御損モ無之間、右今度御修復ニテ宥被用、右御下行代銀、凡三貫目許リヲ以被充之候哉、又ハ行事官出納調進主基御帳臺之具、今度新調ニ申立、內々ハ御修覆ニテ、右殘米ヲ以可被充之哉、兩樣之內武傳へ御內談被申置候間、先出納行事官共、文政之如く新調調進申立書、更ニ可差出旨御達、尤行事官出納調進物ハ、賄頭拜見も可有之故、其邊ハ武傳ヨリ申含被置候樣談置候間、於賄頭右差含、可相成筋ニ候ハヽ、行事官出納之分表向新調申立ニ而、內實ハ御修覆、其餘ハ御殘米ニ可相成、右差含不出來候ハヽ、高松軟障之方ニ可相成哉も難計候間、其旨も爲御心得御噂也、

八月十一日壬子、家君御出門、右者依御招非藏人口より東之御間へ御通之處中山大納言樣御面會、御達之條々左之通、

一先達て以來段々御談有之候、高御座繼壇之事、行事官注進狀書取を以、武傳方へ御內談之處、御間違にて土壇積書も武家へ御一緒に御達に相成、即武邊にても、行事官御增銀無之候ては調進御理之旨を以、段々職人共に積合爲致候處、無餘儀次第に相聞取候得共、何分天明文政等も三貫目にて行事官御請申上候事故、迚も御增銀は難出來候間、行事官差出候下之積にて、七百目御增銀御所限にて被下之、行事官へ調進被仰付候旨相伺來候故、右にて御請可申上哉、但武家より申來候下之積書者、土壇之積書に候得共、右者全於武傳間違にて武邊へ達に相成候得共、此度者土壇幷間數被相縮候方者御差支にて難相成、矢張文政之形通り、下之積上ケにて調

進之方可然候間、其邊は行事官へ得と可申合、且又家君限御相談には右繼壇之儀に付、大祀之節々、右樣御互に御心配御手數相掛候も御迷惑之儀故、先達來段々御相談にて御申立に相成候、總體御下行之儀も、先先達て御申立通にて關東へ通達に相成候哉、未何等之沙汰無之候得共、大體ハ出來可致哉、左候ハヾ乍内密御殘米少々有之事故、一向行事官差含、今度中通積書之通に調進にて御用相濟候後、破却不致、其儘官庫へ被殘置、以來大祀之節々、右御品御修復調進に相成候はゞ、左程心配之儀も有之間敷、附ては以來御損之不寄多少、是迄被下候御下行三貫目宛ハ、急度御修覆料として被下候樣、今度御取計可被成候間、右等之邊も御差含、行事官へ御示諭有之候樣、尤右之通にて御請申上候ハヾ、今度調進料不足之分者、前文御殘米有之候ハヾ可被下候間、先其心組にて下地丈にても取掛居、右御殘米彌無之節ハ、文政度之通、極下之方に調進可致哉、兩樣之內得と御勘考御取計有之候樣御達、卽附武家紙面之寫壹通御渡也、委細大嘗會往來留ニ有之、

十月三日癸卯、入來行事官、〇中略只今御招可被成所、幸に付御達、繼壇高御座と組合、南殿にて致度旨願之通御聞屆、乍併被心附、御損に不相成樣附添可被心附、且人夫之儀拜借被仰付候、右日限ハ十七十八十九日と拜借被仰付候、當日建春門邊へ人夫差出置候得共、自然遲刻候ハヾ、直に番頭與代可申談旨傳奏御奉行只今御達之旨御達、且又高御座繼壇踏込板繪樣之事、高御座御壇之通、御前許鳳凰、其餘麒麟御治定之旨御達、且南殿拜借之儀ハ、文政度ハ不相成候所、此度如願相成候間、傳奏奉行へ右御挨拶可罷出御達、畏退出也、　十二月一日辛丑、家君御出門、右者非藏人口より東之間へ御通、中山樣御面會、〇中略今度大嘗會調進物之內、新嘗祭御用ニ相成候品、文政之度御取調、各番付差出有之候間、於此度も同樣御差出可被成哉、又文政之度、其餘之品破却屆ケ有無種々ニ相成有之候得共、於此度者一統可差出方ニ而も可有之哉、無左候而ハ、如此度破却有無取調ニ

手間取候間、否御相談之處、御尤ニ思召候間、一統差出候方可然旨御返答也、

〔輔世卿記〕嘉永元年四月一日甲辰、入來小野主殿助、右者菅蓋之圖面并元文以來大嘗會毎之家記取調以書取差上、猶文政度外古物御見按御再興ニ相成候樣、御奉行より御沙汰之旨御尋ニ候得共、文政度ニ御再興ニ相成候次第書留無御座、元文以來文政度迄、右之圖面之通ニ御座候文政度之圖面、其節之關白殿一條樣ニも右之通之圖在之由承候、貞享之度御再興ニ相見得候得共、只今之圖面ハ何分元文之圖ニ而、寛延之度右柄長迚切縮候趣等書取ニ被申上候處左候ハヽ圖面ハ御預り、右家記四ッ折之外ニ、文政度御再興之儀無之、今度ハ如何可仕哉、理伺書可被添御達之所、承退出也、　二日乙巳、入來小野主殿助、右者過日大嘗會御調度類古物御點撿之節、文政度菅蓋御寸法被改候旨ニ付取調被仰付、家記吟味仕、書取之趣相分り候間、書改可差出被仰、則書改候而被差出、先御預り之旨御返答也、　六月廿三日乙丑、依御招入來小野筑前守、右者御面會、今日於中山樣御談置有之候、菅蓋目形減少之事、於此度者欅之柄ニテ無之、金物ハ十分手薄く仕立、形而已ニ致、目形何程減候哉、又貞享度之通、上之方自然生之木ニ而仕立、如何程目形相減候哉、兩樣積書可差出、且明日御腰輿御平緻拜見ニ付、家君行事官等御參候間、主殿寮ニも、過日入御内見候菅蓋之柄、并古物菅蓋等持參可被出旨御達也、　廿八日庚午、家君御出門、略○中 於中山樣此間御達有之候、菅蓋鷺鳥伺之圖面、目形減少書付伺等、今日ニも御差出可有之候處、此節畫工手支ニ而、右圖面未出來不致候ニ付、主殿寮御斷申出候旨、今一兩日之所御延引之儀、御頼被仰入候處御承知也、七月六日丁丑、入來小野主殿助、右者今度大嘗會ニ付、菅蓋調進之儀ニ付、自元文度文政度迄菅蓋鷺寸法并此度菅蓋鷺寸法等之書付被差出候處御落手也、　廿二日癸巳、家君御出門、右者依御招非藏人口より東之間へ御通之所、略○中 主殿寮先達而相伺候大嘗會菅蓋、彌四尺五寸之方御治定候間、骨、ロクロ共總體精々細メニ出來、目形相減候樣製作可致、又柄之所ハ自然曲木之方ニ御治

調度御覽

定候間、是又精々目形減省製作可有之、鸞鳥之儀者、今一應追て可有御沙汰旨御達也、八月十一日壬子、家君御出門、右者依御招非藏人口より東之間へ御通之處、中山大納言樣御面會、御達之條々左之通〇中略

一先達來段々御取調有之候、主殿寮菅蓋之事、自然之曲木相用候ては、目形重く相成候由故、過日伺之內、文政通にて目形減少之柄之方ニ御治定、尤鸞鳥も種々御取調候得共、何れも蓬鵜難相分候間、先文政通にて古形調進可仕、尤大體下地出來之處にて一應御點撿有之候間、何也とも御神事、公事、障之儀之節、持參可有之旨御達也、

〔台記〕康治元年十一月廿三日辛亥、申刻參院、行事辨（主基）師能、相具悠紀主基御物參入、（悠紀辨雅綱依觸穢不參）付通憲覽目錄、仰云、任先例可收置、不可令破損、師能云、先持參殿下、少々所御覽也、

〔兵範記〕仁安三年十二月十日丁酉、早旦著行事所、大嘗會威儀御物并副御調度內覽殿下可進納內裏件御物等調合會日、仍去月中可進納處、主基御物等遲々、悠紀先雖可進上、寬治元年十一月兩方同日調進、依准彼例、主基出來之後、今日可進覽也、令注目錄二通、卷籠一懸紙、下官插著懷中、次御調度等皆悉調立、令持左衞士、官使副之、史生四人、著束帶相副、（行事所主典代盛康、細工所預國經、繪所預國直等、件人數先例不同、每度召具四人也、）官掌宗職造物所預二人相副之、下官駕車追從、（辨侍御藏小舍人、瀧口二人、召具之、）先參殿下、（三條烏丸里小路）御物等令昇立中門外、下官參上、藏人少輔兼光（執行家司）相逢、先進上注文二通、次依仰昇上副御調度於中門廊、並立對代南弘廂、家司職事（束帶）役之、次殿下出御御座、次第御覽之、次令兼光召下官、下官參進御前、散位資泰朝臣取白褂濃袴賜下官、大夫史隆職宿禰給白褂、右大史三善章貞給六丈絹、（已上兩人於藏人所給之、五位諸大夫取之、六位絹同前、）史生官掌造物所預等各給疋絹、（同絹歟、下家司於庭中取之、〇中略）次以兼光被仰云、威儀御物不可御覽乎、早可持參院、返給目錄了、次相具參院、此間主基御調度等、右少辨重方相具持參殿下、撤悠紀御物、更運置御前覽之、依弘庇狹少不能並置云々、次第并祿法同前云々、〇中略同返給目錄、不覽御物云々、右少辨同參

院、兩人一同令高少納言申事由、次北面織戶中兩方御物併比、並（堂上庭中）經御覽、下官右少辨候御前中、次第、皇太后宮同御于簾中云々、皆御覽畢、堂上之物、少納言以下殿上人藏人等撤之、在庭中之物史生等昇出之、兩方如元返給、可進內裏之由奏、仰退出了、于時秉燭也、今日不能參內、仍返給行事所了、

大嘗會悠紀所

注進御物目錄事

合

御插頭花（居鏡地小机、在洲濱、）　在臺唐錦面、色々玉藥赤地唐錦地鋪、顯文紗覆、同緒帶二筋、

和琴二面（各納紺地唐錦袋）　在臺赤地唐錦面、顯文紗覆、丸緒志部總等、赤地唐錦面地鋪、

黑染斗帳一具　帷入帖（四幅四帖、五幅四帖、面小葵文綾、裏白絹）　在帽額一條

犀角二枚（以桐木作之、以銀羅飾之、加丸緒志部總等、）

獅子形二頭（各居洲濱）

御鏡二面（各一尺二寸）　納蒔繪筥、加縫緒（伏組）入帷（白織物）

枕二（以唐錦裹之）

御几帳六基　四尺四基（蘇芳織物帷、書泥繪、）三尺二基（白織物帷、書泥繪菅文、）

御屏風十帖（在青色薄物袋、臺二脚、）　五尺四帖（本文）　四尺六帖（和繪）

軟障六帖（各八幅、長九尺、面唐綾、裏練張白絹、在緋綱、）

紫檀地螺鈿御脇息一脚（在銀筋）

同倚子一脚（在唐錦茵、赤地唐錦覆、毯代、承足等、）

同置物机二脚（在赤地唐錦面、唐組等）

同大床子二脚（在紫地錦茵、并唐毯代等、）

螺鈿蠻繪御厨子一雙　納御書六十九卷、御注孝經一卷、古文孝經一卷、帝範二卷、群書治要五十卷、貞觀政要十卷、內裏式三卷、藏人式二卷、

螺鈿蠻繪二階一脚在黃地唐錦面

同唐匣一合在蓋白地宮形唐錦折立、　納御髮搔、銀枚、櫛一挿、耳鑷、御鏡一面、銀面子一口干各一合　銀泔坏一口、在螺鈿蠻繪臺、面赤地唐錦并唐組等、

淺硯筥一合、螺鈿蠻繪在花利木筆臺、御硯、銀筆二管、御墨、小刀、瑩、硯瓶等、

螺鈿蠻繪打亂筥一合在白地宮形唐錦折立

同火取母一合在銀籠、金銅箸、匕、火爐、

銀御唾壺一口、在螺鈿蠻繪筥、赤地唐錦折立

手巾筥一合在蓋青地錦折立、銀蠻繪、

火爐一合在大爐、火箸、匕箸、鐵蠻繪、

熨斗一合在熨斗背地錦折立、銀蠻繪、

切紙筥一合在赤地錦折立

彫木一脚在幡井松鐵蠻物等

大壺一口在□□□

黑漆辛櫃四合在蘇芳纈物覆錦表黑裏深等

手洗二口、打敷一帖具七尺、五幅、貫簀一枚、楾三口、

鶏尾琴二面各納錦面袋、着津緒等、一面神祇官、一面大歌所、

銀器　御飯垸一口、饒餉一口、索餅垸一口、馬頭盤一枚、御箸二雙、匕二枚、大花盤二枚、御汁物器二口、窪器四口、四種四口、盤十二枚、水垸一口、干脊菓一枚、酒盞一口、故用金銅也、

金銅物　酒海一口、黑漆下机胡瓶一基、在臺、杓一柄、火爐二口、火箸一雙、犀形鎮子八枚、箸二雙、匕二枚、泔

坏二具、干荷葉一枚、

白銅物　風爐一具、(加二下居一)油坏四口、(在レ蓋下居)銚子一口、(加二下居、龍頭一)棚厨子一基、立作爵子一基、樽二口、(加二蓋、桐杓一)(筌一、三斗納)水樽二口、(同)手湯戸一具、手洗臺二脚、燈臺八本、冷壺一口、炭取一口、赤漆辛櫃七合、切板二足、(加レ覆)大盤八枚、中盤廿枚、糞坑廿四、箸子四十口、蓋箸子廿枚、四種四口、御飯筥二合、臺盤十一脚、御臺六枚、木胡瓶二口、高坏四本、鐵燒棚二基、同串二枚、通障子一基、菅御笠一本、小疊三十枚、泥繪火桶二口、(在二鉢一、菅一)

仁安三年十二月十日　　左史生中原國繼上

大嘗會悠紀所

注進　副御調度事

合

御冠筥二合(白鑞置口、赤地唐錦折立、菊蒔繪螺鈿文、)

御脇息一脚

手巾筥一合(白鑞置口、白地唐錦折立、)

塗硯筥一合(菊蒔繪螺鈿)　納花利木筆代、銀筆一管、墨、小刀、瑩、硯瓶、金銅檀紙三帖、薄様三帖、

播上筥一合(菊文蒔繪)

納小鏡一面、御櫛二枚、(銀伏輪)髮搔、耳僑、櫛拂、毛拔、鋏、鑷、(已上銀)

金銅泔坏一口(在レ蓋、赤地唐錦面、)

火取母一合(在二銀籠、金銅香匕、同灑爐一)

三階御厨子一雙(菊蒔繪螺鈿)

納檀紙廿四枚、色紙十二帖、

手洗一口、（在打敷一帖、長七尺三幅、）貫簀一枚、杓一口、

御屛風四帖（四尺五寸）

右注進如件、

仁安三年十二月十日　左史生中原國經上

主基御調度御物幷副御調度色目、尋問右少辨、可加注色目、幷御帳帷副御調度文（水島）併相違也、依無寛治文書、就天仁例調出云々、是亦吉例也、隨無御難云々、　十三日庚子、今日大嘗會悠紀主基威儀御調度御覽內裏、而方行事官相具持參弓場殿、下官右少辨相共先申殿下、（御直廬御座）次令昇給、依仰自高遣戸方召朝倫、依御物巨多、放却馬形障子、還御北弘庇、藏人等役之、御插頭、幷小机下机和琴、幷机御厨子障子屛風以下御物任目錄、下官申上、主上幷殿下出御北庇、併御覽、下官令開覽之、御厨子御書札殊經御覽、次撤却、御覽畢又進主基方、右少辨先取打敷參進、每物併昇置、御覽畢又撤却、而方目錄下給藏人基光、令請納校書殿納殿了、是蘭林坊、桂芳坊、依如此御物多、無其所之故也、

〔吉續記〕正安三年十二月一日丙寅、參院評定也、今日大嘗會御調度御覽也、奉行院司左衞門權佐藤朝、（予御之）寛元文應無御覽、仁安於院御覽、被用彼例、所役五位殿上人無領狀之由藤朝令申、隆長可參之由召仰之、（中略）○評定了有御調度御覽、上皇御座弘御所簾中、（東面）被卷御簾、權大納言、予（已上直衣）依別仰候弘御所、五位殿上人昇御調度、立御前、（入夜之間、供常燈、殿上人役之、弘庇左右）先悠紀御調度、御插頭臺（在地鋪）御冠筥二、和琴、（在地鋪）御屛風（四尺五寸）等也、御覽了撤之、次主基、（目錄同悠紀）以隆長被申法皇御方、有出御、有御覽云々、撤之、（本役人撤之）於內裏可有御覽、而行事辨令參、御調度目六、而辨付藤朝云々、付予奏之、目六可被返下之由光實朝臣惟輔等申之、此儀御覽已前事也、內裏御覽了、御調度等可進仙洞、可被納寶藏云々、

〔玉蘂〕嘉禎元年十二月九日、今日大嘗會御調度御覽幷女叙位也、未刻悠紀主基行事辨忠高彖高等朝臣相具御調度、先忠高朝臣以家司藏人兵部大輔季賴進御調度目六、（有二通、紙一通、威儀御調度目六一通、副御調度目六一通、）

(紙中)予見了返給、但留副御調度目六(或給御覧之後返給、仁安二如此、)早仰可昇居御調度之由、以諸大夫等昇御調度於公卿座前弘庇(先敷紙儀副御調度並置歟)、次著直衣出居公卿座、次召人家司家頼参上、仰可召忠高朝臣由、則権右中辨忠高朝臣入中門廊車寄戸候西縁邊、次四位家司左馬権頭兼敦朝臣取禄(白大褂一領、濃袴一腰、)給之、忠高朝臣懸右肩降自中門廊南妻、於中門砌内二拜退出(於砌外可拜也)、此日行事辨於藏人所給禄、(有違所司)取之(著衣冠)、次役人如初撤御調度等返給行事所、副御調度下家司交取之、依受領撿非違使行範又交取令納御倉、以季頼取主基御調度目六覧之、(如悠紀)予見了返給、(召副御調度目六如初)次諸大夫置並御調度如初、次以季頼召兼高朝臣令参候中門廊西縁、兼敦朝臣取禄如初、行事辨給禄如初、次令撤御調度如初、行範又交取副御調度令納御倉、盛成御調度等持参内裏了、次参内(兼帰也)直参御所、主上(○四條)御寝了、高嗣以内侍申御調度之由、忠高朝臣覧目六、内侍傳進之、御覧了仰可持参御調度之由、上朝餉西面御格子、其前簀子南北懸燈、次六位藏人等置並之、插頭臺、和琴臺、二階厨子、几帳等覧之、此外雜具悉不覧之、忠高朝臣先敷打敷、(錦)其上立插頭和琴臺也、御覧了昇出之、次兼高朝臣覧目六、次持参御調度等如初、御覧了可昇出、次兩方御調度目六、以内侍下給藏人重輔、令交取之、先例多宿納校書殿、或蘭林坊也、而蘭林坊破損之上、大内無四壁如荒野、不能宿納、授一宿又此皇居無便宜、以西庇爲藏人町、仍不可叶、密々令内覧者也、且近例多被納院御倉了、可相准歟、件御調度御元服之時可被用也、仍殊可加守護之由下知也、次予下宿所、

〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年十一月廿五日、被招省中、兩行事辨出座、來廿七日御調度御覧、目録如先例、参勤史生可調法、明朝兩行事辨(江)可差出、即手本給之事、　廿七日、今日悠紀主基御調度御覧ニ付、卯刻参勤、(著常東帯○中略)辰半刻頃於行事所代、悠紀主基御調度、(御插頭、御屛風、軟障等也、)六位藏人等取出之、(條矣)(奉行兩行事辨等撿知之)官務行厚并史生官掌等参上、次第相違無之様相改、藏人以下立合各納辛櫃、先悠紀主基御插頭(臺并地敷帋等ハ、一ツヲ兩方可被用云々、)辛櫃一合、(於御插頭ハ、専行事史可撿知之、ユキスキ取違等無之様可撿知事、)次悠紀方本文御屛風

辛櫃二合、同和歌御屏風辛櫃三合、次悠紀主基軟障辛櫃二合等也、悉調了史生官掌等舁下之、令衛士舁立之、（此衛士ハ御内儀之仕丁也、退紅白丁等以上三十人云々、御ヨヅレ辛櫃軟障等ハ退紅白丁舁之、）各具了自平唐門進發、（此間小雨、依辛櫃各掛雨皮、）出宜秋門、到殿下御里亭、○中略入四足門、御物等令舁立中門外、（先ユキ方御物進立之、次スキ方御物相分進立之、）此間御祝酒可被下旨ニテ、内々之方（江）參上、茶、多葉粉盆、火鉢等被出之、次御祝酒、吸物、臺肴等被下之、諸大夫愛敬朝臣出會挨拶、此次ニ祿物ニ被下之白襯ハ、目錄ニ取替給之間、拜領後早速可返旨被申渡、史生已下絶席ニテ御祝酒被下之、

先悠紀行事辨著侍所座、（北面）令家司進上送文、次依仰舁上御調度於中門廊、並立寢殿出居間、史生官掌等次第ニ取出之、家司職事取之參進、行厚於便所撿知之、御覽了召辨賜祿、（白大褂）此間史生知昌官掌氏意等賜祿、（西絹、下家司賀茂朝保取之、於中門外庭上賜之、各賜一拜、）次辨稽頭祿、於中門外（四足門内也）再拜了復座、家司返給目錄、仰御詞、次被返渡御調度、（勤役之人被取出之、史生官掌等取之、納辛櫃令舁立之、）次辨退出、次覽主基方御調度一如初、○中略次調行列退出、到院御所、○中略次調行列退出、歸參内裏、（行列如初、）到陽明門代、先史生官掌等經置路南、（童僕經置路北、）次御物辛櫃十一合經置路之上、次軟障辛櫃二合經置路南、（非御物故云々）次行厚經置路南、（童僕經置路北、）參上、兩辨下車追從如初、次入建春門、經承明門前入月花門、（自此此内止白丁也、各相替退紅舁之、）舁立弓場殿、（ユキスキ相分立、）史以下退出到殿上立蔀下、退紅等舁入御辛櫃、（經神仙名門舁入之、）史生官掌等取出之傳藏人、藏人等取之參上、ユキスキ共悉上之、次出御、御覽了藏人等被返出之、仰可納納殿之由、史生官掌等取之、各納辛櫃令舁立之、調行列自殿上方進發、經月花門并承明門前、入自日花門、舁立宜陽殿西砌庭上、（今度辨史等不及騎從、）差次藏人隨從、令史生官掌等納件御辛櫃於納殿、了經本路歸參殿上方、（官務行厚等、自便路行向撿知之、）予隨身之錠鍵等返上之渡差次藏人、次言上之儀有之云々、相濟退出被仰出、戌刻前也、

一今日於庭上、傳奏奉行以六位被示云、今度大祀調進物之内、明年新嘗祭之節、其儘御間ニ合品々書付可差出事、

〔以夢卿記〕文政元大嘗會一會文書部類

大嘗會悠紀所

注進御物目錄事

合

御插頭花洲濱、盛花足机居高机、副赤地唐錦地敷、顯文紗覆等、

御屛風十帖本文五尺四帖、和歌四尺六帖、

軟障三帖

文政元年十一月廿七日　　　左史生紀知昌

大嘗會主基所

注進御物目錄事

合

御插頭花洲濱、盛花足机居高机、副赤地唐錦地敷、顯文紗覆等、

御屛風十帖本文五尺四帖、和歌四尺六帖、

軟障三帖

文政元年十一月廿七日　　　左史生紀尹昌

〔厚生記〕嘉永元年十一月廿七日、御調度御覽、殿下御里亭備忘、

先入自四ッ足門、御物御辛櫃舁立中門外、悠紀方御辛櫃七合、並立中門東、以北爲上、主基方御辛櫃七合、並立中門西、以東爲上、

此間兩辨以下參御內々方、自御玄關參上、今度御祝酒不被下、史生官掌等別席、諸大夫侯備朝臣出會挨拶、

且祿物ニ被下候白褂ニ取替之、御目祿銀一枚、豫被下候旨ニ而被渡了、史生官掌等同人出會、同

樣被渡金二百疋宛云々、次諸大夫義脩朝臣出會、內見之儀申入、一同御場所內見之事、

先悠紀行事辨恭光朝臣立中門外、（北面、）家司出逢、辨進上送文、次家司仰可昇上御調度之由於辨、辨仰史、（先是史辨後相去一許丈許立、史生官掌等史後相去又一許丈許立、）史仰史生官掌等、次悠紀方御物辛櫃七合、令衛士昇立中門外際、先御插頭（辛櫃之内ニテ飾立、以插頭文抄置之、）昇上中門廊、（東面居之、敷地敷、）次本文御屏風四帖、和歌御屏風六帖、軟障三帖等次第ニ昇上、（史生官掌等取出之、參進、厚生於便所撿知之、）家司職事等取之、並立寢殿出居間、御覽了召辨賜祿、（大褂、）此間左史生代宗國行敦左官掌紀氏萬等（去中門三許丈南、西上北面ニ立、）賜祿、（疋絹、下家司橘發重弘源義一枚等取之、於中門外庭上賜之、各一拜、）次辨插頭祿、於中門外再拜、（悠紀史依不參、辨一人再拜也、）了（件祿令主辨侍返上御內々方、史生官掌等直返上御內々方、）次辨立中門外、家司來返給目錄於辨、辨目史、史目史生官掌等、次被返渡御調度、（家司職事等取之、納辛櫃、厚生於便所撿知之、史生官掌等）次辨退去、（候便所、）次覽主基方御調度如初、先行事辨光愛立中門外、令家司進上送文、次依仰昇上御調度於中門廊、家司職事等取之、並立寢殿出居間、（其儀如初、）御覽了召辨賜祿、（大褂、）此間史厚生參著侍所座、（昇香殿參上著座、東面、）賜祿、（白褂一領、諸大夫一人行取之、）厚生賜之掛左肩、起座退下、次辨史於中門外列拜、（厚生辨之後隔右之方ニ寄、同時再拜、）此間右史生以昌右官掌紀親成等賜祿如初、厚生直參御內々方返上件祿、（史生官掌等同上、辨之祿、令主辨侍返上之、）次辨立中門外、令家司返給送文、次被返渡御調度如初、次辨退去、次調行列歸參內裏、（行列如初、）

〔補世鄰記〕嘉永元年十二月一日辛丑、今日納殿へ納置候御調度御覽取出、御儀へ返上ニ付、行事官巳刻參勤、傳奏奉行へ相屆、各虎之間之緣へ遂送返上也、右遂送人夫之事、先例口向より被見候哉否之事不相分候ニ付、幸家君（〇壬生以事）御參合故、中山樣へ御相談之處、口向御取調ニ付、人夫三四人被相廻候事、右仕末行事官へ御申渡置ニ而、家君別段御用無之ニ付、午刻過御退出也、

用途

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡大嘗會雜用料稻者、國別充正稅一萬束、及卜食一郡調庸中男作物、當郡有封鄉者、以他郡鄉相替給之、若兩國更有請稻者、臨時處分、隨申充之、（其代加正稅、取利補塡、）

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡悠紀主基國、各令卜食郡辨備多明米卅斛、（多明酒料、）短帖卅枚、帖卅枚、薦七十枚、長席七十枚、簀五十枚、差驅使丁三百人、與拔穗稻同領送、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十月中旬、〇中略　召市人令奏調獻物料絹、以美木爲軸、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宜旨例

太政官符其國司（此所共用此符、下皆倣之、）

正稅稻壹萬束　卜食郡調庸及封物

右供奉大嘗會雜用料、依例所充如件、國宜承知、依件行之、其卜食者有食封、換以他郡、

太政官符其道諸國司

應運進大嘗會所雜物事

右被大臣宣偁、會料交易雜物、宜差傜夫、依例令運進者、諸國宜承知、依宜行之、

太政官符其國司

多每米卅斛、（大多每、黑木白木酒料、）　駈使三百人、當郡鋪設疊卅枚、短疊卅枚、席七十枚、長薦七十枚、簀五十枚、

物部人十五人

造酒童女一人　稻實公一人　灰燒一人　大酒波女一人　粉走一人　相作二人

大多米酒波女一人　粉走女一人　相作女二人　採薪四人　歌人卌人（男廿人、女廿人、）

右得神祇官解偁、供奉大嘗會用度幷雜色人等、且申送如件者、國宜承知、依例行之、

太政官符其道諸國司

其國稻若干束

右被大臣宣偁、件稻宜充大嘗會其所雜用料、但彼代者、來年出擧依數令塡者、諸國承知、依宜行之、

太政官符其國司

正税稻若干束

右爲充大嘗會料、寡當年公廨、彼國所請如件、大臣宣、奉勅、宜充之者、國宜承知、依宣充收、

大嘗會其所牒山城國司

應採薪五百荷

牒、爲用會所雜用料、牒送如件、國宜察狀、仰便郡令採進、但其價直依例充行、定專當郡司、送其夾名、牒到准狀、故牒、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國宮符宣旨例

太政官符諸道國司幷太宰府

其國官長位姓名

右得大嘗會其所解偁、依太政官月日符、所充會料、穀應交易雜物狀、會所牒依例送諸國訖、若非依數辨備、及期內進送、恐會事致闕怠、望請國別充專當、令行件事者、大臣宣、差件等人、充其專當、如有闕怠、隨狀科責者、國承知、依宣行之、但不得寄事專當、傍官致怠、

大嘗會其所牒諸道國司

應交易進雜物事（具錄色目）

牒、爲用會料可進如件、國察之狀、早速送達、其價直者、以太政官月日符所充會料稻充之、用途有限、不得延怠、但鮮物者、隨會時進之、國家大事不可違闕、牒到准狀、故牒、

大嘗會其所牒山城國司

使官姓名

牒、件人等、爲勘對大井前瀧雨津雜材、發向如件、國也察之、不論諸司諸家、所在雜材、悉合勘對、作事有

期、奏令妨留、牒到准狀、故牒、

〔類聚國史 八神祇〕弘仁十四年十一月癸亥、右大臣正二位藤原朝臣冬嗣、大納言從二位藤原朝臣緒嗣等、於清涼殿口奏言、○中略 須此度大嘗會停飾省弊者、天皇○淳和 勅答、元不好飾、唯事神態耳者、卽大臣奏云、○中略 所用正稅悠紀主基各十萬、後依國司析口各加五萬、以從省約也、

〔三代實錄 三十陽成〕元慶元年七月十九日戊午、主基卜食、備中國都宇郡年貢調物、例輸鍬鐵、不中大嘗會用、仍以比郡絹相轉貢、　廿七日丙寅、大嘗會行事所奏、五畿七道諸國運輸會料雜物、差課傜丁、負擔就路、遠近多疲、請輸程粮、無失期會、詔以正稅給之、後年舉塡、

〔小右記〕寬弘八年九月廿一日辛卯、左中辨○中略 傳宣云、悠紀主基兩國給掾三人、各行事所可給七人、但下給爵宣旨、使給國令進其料、充行大嘗會用途、但依會前後、隨國司申請可裁給者、可給宣旨於兩國之由仰兩辨、　廿二日壬辰、早旦左中辨來申各々方々雜事、見昨日記、可給爵於兩國之宣旨、答可請左府處分之由、又有悠紀主基行事所召物不進、國司科大祓、可解却見任之宣旨、非是新起請之宣旨、尋前例所申下之宣旨也、　九年○長和元年 五月十日丁丑、左中辨云、國々進大嘗會召物解文、若可見歟、答云、亦更始行事所之後可見也、其故者著鈍色、○喪服 見解文可無便宜、大略來月四日吉日、內々光榮朝臣所申也、彼日早旦令勘申、著吉服經奏聞可宜歟、　六月四日庚子、參內、依可始大嘗會行事所著仗座、○中略 左中辨見陸奧進絹五十匹解文、右中辨見同國解文、絹數如悠紀、

〔兵範記〕仁安元年十月廿三日癸巳、參院、申尊勝寺近江丹波國庄々大嘗會所課事、仰云、任前例或免除、或可減免由仰國司、卽申上卿源大納言、仰國司基仲、惟頼等了、　三年七月十一日庚午、參著行事所、○中略 諸司諸國所課召物用途事等、終日沙汰、　九月二日庚申、參御精進屋、奏雜事、奉仰、大嘗會悠紀卜食國以下、諸國所課未濟事有仰遣趣等、　十七日乙亥、參殿下、內覽悠紀方幷裝束司雜事、○中略 肥前國進唐錦一段、銀七十兩、蘇芳陶沙、肥後國進銀九十兩、紫檀蘇芳、出雲國進鐵等、各令撿納了、

廿九日丁亥、參行事所、諸國召物多辨濟、　十月七日乙未、早旦參院、大嘗會幷御禊行幸執奏日來沙汰、就中諸國召物多未濟、每事不成、宰粗可及解怠由具申上、如此之時代々例勘申了、仰云、依寬治例、先召物未濟國司可科大祓解却見任之由、且賜宣旨者、參殿下申此旨、又仰官內々尋見符案、　十一日己亥、行事所奏狀內覽殿下、次奏院、依仰宣下、撿按左大將仰依請、上卿宣云々、依寬治元年例可仰左大辨云々、卽左大辨奉行下知官云々、

大嘗會悠紀主基所

請殊因准舊例被下宣旨裁定不從大嘗會悠紀主基行事所誂國司科大祓解却見任狀

右謹撿案內、大嘗會時、供神之物、供御之色、尋其所產、計其用途、每國定充、式條夆存、則官符下知早畢、凡件會期限已定、非可延引、而諸國司等寄事於左右、爲宗辭遁不口至、責而有餘、希代大事、殆欲闕怠、望請因准長和寬治等舊例、賜官符於諸國、將令勤會事、若有不遵行之輩、令任法制早科大祓解却見任、抑往古聖代依如舊之訴、度々被賜官符、前跡已存、早仰天裁而已、仍勤事狀謹解、

仁安三年九月七日　右大史正六位上三善朝臣章定

左大史正六位上行皇太后宮少屬中原朝臣盛直

右少辨正五位下藤原朝臣重方

修理左宮城判官正六位上行左大史備中介小槻宿禰隆職

正四位下行權右中辨平朝臣信範

太政官符五畿內七道諸國司

應不從大嘗會悠紀主基行事所誂國司等科祓解却見任事

右得彼所去月七日奏狀偁、○以下文同解文故略、正二位行大納言兼左近衛大將皇太后宮大夫藤原朝臣師長宣、奉勅依請者、國宜承知依宣行之、符到奉行、

左大辨源朝臣　　　　　　　　　　左大史小槻宿禰

仁安三年十月十一日

寛治元年撿按大納言經信被下左大辨匡房卿、仍今度准彼例被下左大辨云々、十六日甲辰、大嘗會召物、不隨行事所請國司可科大祓解却見任官符、被行結政請印、十一月一日戊午、今朝左兵衞督成範卿大炊御門京極家燒亡、是卜食國司親父、偏彼卿沙汰也、可慎可恐、四日辛酉、下官下左大將文、

左兵衞尉平道貞申請大嘗會悠紀方進納私物萬匹可拜任靫負尉事

仰依請、上卿返給、下官結申、次下史了、此事雖無寛治例、卜食國無力之上遇火災、殊可及闕怠、仍被仰成功也、六日癸亥、參行事所、兵衞尉平道貞成功物、銀白鑞錦銅綾等進納、是卜食國司火災之間、被召靫負尉功中〇中恐由誤也、可進納准萬匹云々、十一日戊辰、參殿、諸國召物未濟巨多、可付催撿非違使由奉仰申別當了、依仰渡未濟注文了、主基方自昨日有此沙汰、是御定一同也、十二日己巳、參行事所、依院仰別當宣、撿非違使左衞門尉橘盛康、右衞門志中原基弘參行事所、諸國召物未濟給注文幷祇承官使退出了、依此催國々兩三直進解文、或進雜物了、十三日庚午、下官著行事所、握諸國進濟公物、依卜食國難濟、不足雜物等下行、諸國辨物可交易由下知了、

〔玉海〕元暦元年十月六日辛酉、今夜被行除目、權中納言頼實任左兵衞督、又受領少々被任、其外大嘗會御禊可獻成功之輩、衞府廿余人所被先任也、朝家之政、其德衰微、以之可察、神鏡劒璽事曾無其沙汰、強行卽位、大祀之禮自本滅亡、國土人民彌致其費、是可叶天意哉否如何、

〔吉記〕元暦元年十一月三日、左少辨入來、大嘗會雜事闕如之間事爲談合也、御免庄々已及三百所、未曾有例也、賜成功八男等裝束、幷標山雜事等可致沙汰歟由示畢、

〔玉葉〕建暦元年十月十一日己丑、入夜職事棟基在消息、明日於院殿上、大嘗會國庄園實否定、可被候

之由有御奉書云々、依所勞申其旨了、

〔明月記〕建暦元年十月十六日、酉時許、淸季朝臣奉書、吉富莊大嘗會不云勤免、先例任可勤由昨日被仰定云々、同此事國景參院付內侍申入、仰更無所遁、又依仰行向光親卿宿所問聞子細、且示合所存、重役不足、所詮勤定難遁、見米卅石可給、其上雜事皆免之由申請之退歸、　十七日、中納言夜前申狀且奏聞、天氣快然、以御教書被仰行事辨之由示送之、歎之中歎、難題堪近代事云而無詮、只隨形勢耳、

〔平戶記〕仁治三年六月廿六日丁丑、依召巳刻許參殿下、先是帥卿祇候、直參其所、大嘗會用途被支配諸國諸庄、件注文季繼宿禰內々注之、獻前內府、內府備天覽云々、仍以此注文可被催之由被申云々、件支配至庄々分頗荒凉也、仍申其由、又行事辨不可催、藏人方可催之由被申行云々、件事當時穢中也、被催沙汰之條如何之由申之、被召師兼、淳方、爲景、師兼、淳方難藏人方、大祀事爭可有穢中御沙汰哉之由申也、如予申狀、以此等之趣、以經俊被奏內裏、其間暫入御、被出雲客兩人勤之、其後大卿參經俊歸參、次又出御、雖穢中猶可被催云々、至庄々事者如予申、先可召田數注文之由被仰、仍其定可致沙汰之由被仰經俊了、凡闕行事辨、藏人方催沙汰之條、如法新儀也、太不可然歟、穢中沙汰猶以難知神慮、世以相傾歟、秉燭以前退出、　十一月八日丙戌、參內、終日祇候、大嘗會用途闕如之間、種々有沙汰、及晚退出、

〔吉續記〕正安三年十一月三日戊戌、參院、大嘗會用途事申沙汰、關東御訪用途未到之間、欲及闕如、任官成功不及沙汰、種々有其沙汰、　六日辛丑大嘗會用途事、何樣可有沙汰哉之由有沙汰、重任受領功等可爲正理歟、此分御卽位御禊之時被召了、如一列可被付其足、而可然之國近日難事行歟、諸國段米、嚴密雖有沙汰不事行歟、無才學之由執柄被申、從升米體事猶可有沙汰歟、坊城前中納言申云、河和田庄口口御代有評定、被付眞乘院使庄內熟所被召、被寺家申被付本庄者、用途少々可沙汰之由令申、爲理訴之上、可有御計歟之由執申也、　十四日己酉、參廻立殿見廻之、官掌盛繼申云、無用途

之間每事無沙汰、期日已迫、仰天之由申之、黑木屋等一向無沙汰、點地遲々之故歟、卜食國不合期之間、拔穗使上洛遲々、仍未被行點地云々、入夜歸畢、　十五日庚戌、參院、○中略大嘗會事遲々、召所行事辨委可仰之由有仰、光方朝臣惟輔參仕、關東御訪用途未到之間、行事官頻難申、別被付其足段米未濟、猶令難濟者、可付馮部於雜掌之由有沙汰、

〔萬一記〕正安三年九月八日、大嘗會條々、

官司內侍所御在所事

奏云、先例至正廳東廊、被新造三間檜皮葺屋（修理職用途事五千疋）為御在所、而永仁被用官司東廊、被減彼用途云々、今度可為何樣哉、仰任近例可為東廊、

〔南狩遺文東寺藏〕大嘗會米事

院宣（副具書）如此、於濟例者雖為段別參升、以撫民之儀停止厨雜事以下課役、所有宛直錢參拾文也、任先例令支配國中、來月十五日以前搶納之、相副配符畢、進未程々可進濟、且守事書、嚴密可致沙汰、若有非法之聞者、可處罪科、凡天下大禮也、日數不幾、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

建武五年八月廿九日　武藏守判

攝津國守護

大嘗會米事

院宣御敎書如此、早任被仰下之旨、三代御起請之地、幷三社御領等外者、平均隨田數、來廿三日以前、被運送段別參拾文宛代錢、於湊河宿者、任配符田之旨可請取之、為今日限違期者、任御事書之旨、嚴密可致其沙汰候、恐々謹言、

曆應元年十月十六日　沙彌圓道在判

謹上　攝津國諸庄園領主御中

〔東寺文書〕大嘗會幷伊勢造宮段錢免許院宣

東寺領、丹波國大山庄大嘗會段米事、任レ例可レ致二免除一候、院宣如レ此、仍上啓如件、

曆應元年十一月十五日　右少辨判

謹上　長者僧正御房

〔園太曆〕觀應元年八月廿五日

大祀事、先日之趣今日奏聞了、〇中略但武家料足事、今日分明被二相尋一、急速可レ有二其沙汰一候歟、爲二御不審一内々令二言上一候、〇中略

八月廿五日　宣明上

大祀間事、治定之趣不審之間、内々付二女房一尋申、被レ下二勅書一、

大祀事、面々所存趣、宣明卿今日參申候ッ、〇中略就二其武家沙汰間事一、内々猶爲レ仰二含事之子細一召二寶俊僧正一、〇中略明後日沙汰、以外難義人、中絶不レ可レ然候間、如レ形可レ申二沙汰一之由今日仰二宣明卿一了、事々其次可レ申二承一候也、

廿七日、諸國大嘗會米事、爲二武家沙汰一可レ令二催濟一旨被レ仰之云々、今日被レ下二院宣一也、資明卿書下云々、

二年六月九日、入レ夜大夫〇公賢息春宮大夫藤原實夏參、亥刻許歸來云、〇中略今日申刻信濃入道行珍爲二武家使一參了、大嘗會事可レ有二御沙汰一歟、就中段米事可レ致二沙汰一者、被レ下二院宣一、可レ致二沙汰一旨申之間、卽按察卿祗候之間被レ下二院宣一了、　廿二日、左少辨時經來、大嘗會事行事、以二大夫一問二答之一、

諸國大嘗會米事、三代御起請三社領、任二先例一可レ免除一之由被レ仰二武家一了、就二其彼所々一可レ被二注下一也、武家可レ被二計申一之由其沙汰候、資明誠恐謹言、

六月廿一日　資明

洞院殿

大嘗會諸國段米事、三代御起請地、幷三社領免除、代々例勿論候哉、就其彼所々被注下目錄之條、誠雖似當時至要、春日日吉以下諸社、及諸寺領勅免地多候歟、其所々衆難被知食候哉、無左右沙汰候者、後日愁申之時、何樣可有沙汰候哉、此事去年頗及巨細、被經御沙汰了、可被尋究、無後日煩之樣可被仰下候歟、得此意可令計披露給候也、謹言、

六月廿三日

〔太平記 二十五〕崇光院受禪附仙洞妖怪事

貞和四年、○中略今年大嘗會ヲ行ハルベシトテ武家ヘ院宣ヲ成下サル、武家是ヲ施行シテ、國々ヘ大嘗米ヲ充課セテ、不日ニ責ハタル、近年ハ天下ノ兵亂打續テ國弊民苦メル處ニ、君ノ御位恒ニ替テ、大禮止時無リシカバ、人ノ歎ノミ有テ、聊モ是コソ仁政ナレト思フ事モナシ、サレバ事騷ガシノ大嘗會ヤ、今年ハ無テモ有ナント、世皆唇ヲ翻セリ、

〔後深心院關白記〕永和元年七月廿五日癸未、俊任來、有勅問事、

仰詞、大嘗會用途、諸國段米之外御訪事、任代々之例、可被仰武家乎、

余申詞、大嘗會用途、諸國段米之外御訪事、文和沙汰之次第不存知之間、輙難計申、任近例可有沙汰乎、

廿六日甲申、右中辨資康朝臣來、有勅問事、前右大將幷藤中納言申、悠紀主基國々武家給旨事也、

八月四日壬辰、俊任來、有勅問事、繪所行忠申、丹波國大芋庄一圓遵行事、可被仰武家哉否事、十九日丁未、藤中納言送書、（付年預）云、法隆寺申、播磨國鵤庄大嘗米事、顯遍僧正狀（副申狀具書）如此候、任曆應勅裁可被免除哉否、可被計申之由其沙汰候者、披見申狀之處、嘉承仁平被免除公役之由被成官符、曆應被免除大嘗米之由院宣分明也、尤可被免除歟之由令申之、件庄者、推古天皇勅施入之地、聖德太

子遣領、勝覺大會料所云々、子細異他之趣見官符、不能左右云々、十月十七日甲辰、傳聞御禊行幸、可爲來廿二日之由有沙汰之處、武家料足全分未到之間可被延引、儲日廿八日之由有沙汰云々、武家料足御禊行幸分三千萬匹云々、僅六萬匹許致沙汰云々、

〔集古文書四勅書〕相模國鎌倉圓覺寺藏

左辨官下相模國

應因准傍例免除〇中略御禊大嘗會以下〇中略凡恒例臨時公役等、永爲圓覺寺開山塔正續院領、當國厚木郷半分事、

右得彼院住持存圓去五月日奏狀偁〇中略權大納言藤原朝臣嗣房宣、奉勅依請者、國宜承知、依宣行之、

至徳元年七月五日　大史小槻宿禰

權右中辨藤原朝臣

太政官牒正續院

應因准傍例免除〇中略御禊大嘗會以下〇中略凡恒例臨時公役等、永爲當院領伊豆國多留郷、相模國厚木郷半分、幷同國秋葉村、上總國庄吉郷等事、

右得彼院住持比丘存圓去五月日奏狀偁〇中略從三位行權大納言藤原朝臣嗣房宣、奉勅依請者、同下知彼國々既畢、院宜承知依宣行之、牒到准狀、故牒、

至徳元年七月五日　修理東大寺大佛長官從四位下行左大史播磨介小槻

從四位下行權右中辨藤原朝臣

〔氏經卿神事記〕寛正七年〇文正元年八月八日、三河國渥美郡彌熊郷長仙寺御厨、大嘗會段錢依新儀成應宣、四神主請、

〔東寺百合古文書〕寬正七年丙戌十一月三日、右京職大嘗會段錢事、寺家分幷諸坊申分等引合爲總寺貳百疋、以二一獻分一他事落居了、仍各々下地配分云々、此外左京職、左馬寮、右馬寮、圖書寮等段錢各懸レ之、半分等他事可レ懸之云々、

〔親基日記〕文正元年閏二月廿一日、大嘗會要脚段錢國分、文正元、閏二、

遠江　　備前使節松田治郎左衛門尉　　出雲鹽冶五郎

五月十日、大嘗會段錢、飯三左爲修使節下向、　十一月、大嘗會面付、幷錦綾代沙汰分、文正元、十一、三、

遠江管領政長　面付一國百貫文、上絹廿丈、代四十貫文、上綾十三丈、代十八貫五百文、
能信州右京兆勝元　同前
松丹州礒部稅廉　同前
治河山名右金吾宗全　同前
清泉細川讃岐守成之　面付十國絹六十三丈、代廿貫文、
寄民一色左京兆義直　同前
寄四右畠山左衛門佐義統　同前
治河佐々木大膳大夫入道生觀　同前
飯和山名相模守教之　同前
寄五兵山名兵部少輔成敏淸　同前
飯和山名七郎　同前
讃信州細川阿波入道常泰　面付五千四上綾廿丈、代廿二貫五百文、
寄四右細川刑部少輔常有　同前
飯兵大細川兵部大輔勝久　面付萬四上綾二十丈、代廿貫文、

讚五兵細川淡路守成春　置付五千匹、上綾廿丈、代卅貫文、
讚民土岐美濃守頼成　置付萬匹、上綾六十三丈、代卅貫文、
飯新左佐々木龜壽　同前
同武田大膳大夫信賢　同前
飯兵大赤松次郎政則　置付五千匹、上綾十五丈、代十五貫文、
松丹州富樫鶴童　同前
飯肥州上杉民部大輔房定　置付萬匹、綿六十三丈、代廿貫文、

六日、大嘗會前諸役者訴訟、幷急事之外、番伺事等可令斟酌、御要脚方爲急事之上者、一段各可申沙汰之旨、以伊勢備中守貞藤被仰出之、

〔季連宿禰記〕貞享四年五月十九日丙申、依使者參頭中將基勝朝臣、予細者、大嘗會三社奉幣發遣、辰巳午節會、淸暑堂御神樂、國郡卜定等、御訪方大槪可草進由、大祀傳奏庭田中納言命給云々、大外記同參承之、　六月十日丙辰、予出納豐後守等向大外記宅、予編去五月十六日自勸修寺家所被出、今度大嘗以下一會下行帳下書各遂一覽、催方漏脫之事等、以付紙加之也、大外記云、御卽位方一會下行米銀、如寬文度員數自關東被成進之條必定也、然而以彼內被行、大嘗會料米參千石可殘由已前勸修寺大納言所被命也、然者御卽位方下行雖被減少、以寬文度御訪被半減共潤澤也、所詮半減分之沙汰可然歟之由、可申勸修寺大納言哉否之由被示之、此沙汰可然之由、予出納等同之了、　十一日丁巳、巳下剋許、大外記師庸朝臣予出納豐後守等向勸修寺大納言御卽位傳奏許、卽被面謁、御卽位以下御訪方之事、昨日大外記被述所存之趣、一同申之、勸亞相被命云、大嘗會方總用米參千石、銀二十貫目相殘之、其餘者御卽位以下一會御訪方可割付之歟、　七月二日戊寅、大外記、予、出納等相伴向勸亞相、出納依示所參也勸亞相被命條々、大嘗會方總用參千石之內參百石、加入御卽位以下諸司御訪之

中、下書帳可調改云々、　十九日乙未、相伴大外記、予出納豐後守、向所司代土屋相模守許、先之兩傳奏雜掌(田付主税、高川左近、)二人參相州許、良久相待之後、用人一人(失名)出來逢予輩云、御即位以下御訪方、於大坂藏可相渡、件下行之内、除米、(大嘗會料)有之間、奥書可爲何樣哉令言談之處、自武家被定仰之事共也、大外記以下一向不申所存之間不一決、仍用人件奥書如此認可然哉之由下書出之、彼文言云、總高何丶丶丶之内、大嘗會料被殘之也、仍小拂無之由載之、件大嘗會料、先兩局等請取置之所、重而可了簡云々、兩局以下同此儀了、　廿日丙申、大外記、予、出納等、向土屋相州之許、(○中略)良久相待之後、町奉行前田藝州來、暫而用人二人出座云、御即位以下御訪之中、何々程大嘗會料被殘之帳面難書載、其謂者、自關東所被出之御證文之中、大嘗會料事無之故也、所詮今度所被出、總高七千貳百貳石六升也、不殘御即位以下之帳面割付之、(假令大嘗會料事一向不載之、大概如寛文三年小割、)以件帳面請取之、以最前注進之帳面可配分、其餘者兩局預置之、大嘗會料可宛之云々、大外記以下申云、如所命者、似謀書謀判、此條已前自傳奏(柳原、千種、)内々被命、然共各不令承伏、今相州藝州等如此被定之、特傳奏等被一同之上者、先可任定旨云々、(○中略)

大嘗會總用者、武家之用脚厭思召之故、各別不被仰出武家、只以御即位總用之中可被行之由叡慮歟、仍大嘗會之事、於關東一向無其聞歟、

八月廿五日辛未、大嘗會料事、尋申武家傳奏了、米代雖下直、米遣買人、以米代可被相殘由定之、　十月三日戊申、向大外記師庸朝臣許、出納行事官等同以參集、子細大嘗會料、(米穀貳千七百斛、代八拾五貫五拾文目、米一石料廿一文目五分宛云々、白銀貳十貫目、總合百五貫五拾目也、)以上此分、今日被入内侍所清藏(本書ノマヽ)也、今迄有大外記宅、然而及數日之間申傳奏、今日所入彼清藏也、　十一月廿七日壬寅、自大外記使者云、大嘗會方御訪帳可沙汰由、自庭田黄門使者到來云々、觸調進方之諸司、可令注進用途也、　十二月十四日戊午、一昨十二日淺出納、大嘗會諸司調進方集書一冊之内、主殿寮伴氏調進菅蓋、幷釜殿之料甚過分之由、武家久留嶋雲州

申之間、此分仰主殿寮可減少之由出納示之、仍召主殿寮左治令問答、友治一向不承伏、予依病事不能對面、每事以青侍令問答之故、不逃得心底難議定、依之入夜召行事官重基、示合主殿友治件一冊書改、可遣出納之由仰含之、重基承之由申之、且友治調進方御訪之分、難信用事過半有之、今度仰重基令問答之條大幸也、　十八日壬戌、自庭田中納言（重條）使者云、庭田來廿八日迄、依故障大嘗會下行方難令沙汰之間、來春可沙汰、且先日所令注進調進方帳、不得其意事共繁多也、先已前注進帳面之中、今年中三分一御訪可被下行、殘分來春可沙汰云々、尙可示合大外記之由答之、　廿三日丁卯、大嘗會諸司調進物料、人別三ヶ一之分、今日於大外記許被渡之云々、（官方之分、行事官、大藏省、主殿寮、木工寮、齋士、由奉幣參向料等也、主殿許佐伯兩家齋士、此分自大外記到來、於此宅令渡之、）

〔師守記〕元文三年八月七日、頭羽林依命參非藏人口、官務出納同參、一會傳奏奉行御列座被仰渡、今度大嘗會下行帳草案依被極申、淸書之儀被仰、今度新加も有之由、帳面今度武家江被達之間、隨分入念可令淸書、又貞享之度、大嘗會下行帳之寫も相添、十日朝迄ニ國家江可差出（○中略）且又圖書寮剛紙之祿、先年無祿、今度壹石被付、且又節會之節、史生官掌雜下行、今度一人ニ六斗六升六合御加增、此兩樣者、予兼日御願申入候處被仰付候者也、退出亥刻、

〔敬義宿禰記〕天明七年十月十六日、今日關東浚明院（○將軍家治）家造營（○大嘗宮）以下之下行、於二條藏前相渡、家僕出會、當局申沙汰之分十二石也、

〔壬生家記〕文政元年十一月十二日

奉願口上覺

大嘗會ニ付、飛香舍御帳臺御調度新調被仰付、追々出來仕候、然處右御下行米減少仕候儀にも御座候者、何卒當年中、別紙之通頂戴被仰付被下候樣奉願候、以御憐愍願之通被仰付被下候者、難有仕合ニ可奉存候、此段宜御沙汰奉願候以上、

寅十一月　　　　　行事官大和守

日野前大納言殿

坊城頭辨殿

御雜掌中

飛香舍御帳臺新調御調度

一平文御倚子一脚　　　一御下敷二枚

一御地敷二枚　　　一置物御机二脚

一同表敷二帖　　　一褥一帖

一毯代二帖　　　一御火爐一口

右之料七拾壹石九斗六升

寅十一月　　　行事官〇中略

一大嘗會御當日調進物御下行前借、出納以例今日願書差出候事、

奉願口上覺

大嘗會御用、御調度調進物御下行米高貳百五拾石餘之內、米六拾石前拜借被仰付被下候樣奉願候、此節從職人共追々內質相願候ニ付、私方調進方御下行米前借奉願候儀者是迄無御座候得共、出納調進物御下行米前借相願候先例も御座候故、右御振合之通、何卒以御憐愍被仰付被下候者難有仕合ニ奉存候、此段武邊江宜御沙汰奉願候以上、

寅十一月　　　行事官大和守

山科前大納言殿御內

小林左馬少允殿

〔山科家留記〕文政元年大嘗會御下行一件武邊往復紙面寫留

以手紙啓上候、然者大嘗會御下行之儀ニ付、別紙書取一通、幷御下行帳十八冊、願書廿通とも、進達仕候以上、

渡邊筑後守

卯三月廿四日

大嘗會下行帳之儀ニ付、各被差出候書取帳面等迄一覽候、右者久米舞之方ハ、去寅九月御取締懸江相違候石數ニ致符合、其餘下行米出方先例ニ引當候得者、此度之國郡卜定以下下行一帳ニ而、三千四百九拾壹石五斗壹升七勺者二條御藏渡、幷殿門鎭祭調進物料、卯日悠紀主基風俗大歌參役、本文御屛風、巳日田舞、卯日采女、右以下夫々下行下帳六冊分ニ而、三百貳拾石七斗四升ハ、臨時御神事料米より相渡り有之、天明度國郡卜定以下一帳下行高と差引、此度之方百九石七斗四升餘、幷殿門鎭祭其外下行六冊分ニ而、前同斷指引九石七斗四升相增、卯日宮內省且破損難用修復之分、古物燒失ニ付新調之分共、下行下帳三冊分、高合百貳拾石六斗九升者、天明度ニ可引當分無之、全新規增方ニ相見、前書久米舞之分共、天明度ニ見合、此度之增米合貳百五十石壹斗七升餘ニ相成、尤當時地下之輩相增、御調度類燒失新調等之分も有之、其外品々御下行增口之掛紙、幷願面之趣も有之、新規御下行米可被下筋之儀ニ候ハヾ、下行帳出來以前、前以取調可有之儀ニ而、相洩候道理者有之間鋪、縱令差懸調進被仰付候而も、下行米可被下筋之儀者、別段其砌申立も可有之筈之處、右體先例不被下儀を、此度願立候迚被下候樣成行候而者際限も無之、無左候而も都而御入用向無據譯とは乍申、前々よりは次第ニ相增候樣成行、聊之儀たり共、一旦相增候儀者、後來之響ニ相成不可然候、依之朱書掛紙之分者相除、定例之手積を以、下行帳差出候樣、傳奏衆江可被申談候、則先達而被差出候帳面十八冊、願書等貳拾通令返却候、

右之通松平和泉守申聞候ニ付、則別紙張面願書等返進仕、此段申上候事、

三月　山科――

廣橋――
曾我――
渡邊――

〔山科家留記〕文政元年大嘗會御下行一件武邊往復紙面寫留

此度大嘗會本文御屏風御下行帳之内、臺盤四脚新造三拾石貳斗四升有之候處、天明度ニ者臺盤新造修復貳拾石と有之候、右者何故不殘新造相成候哉、且新造一脚ニ付御下行米何程と申極り有之候哉、承知仕度奉存候、且又東階帳出屋根一式今度相止メ、陣小庭以下新規之廉相増、五斗加増之趣ニ相見江申候、右兩條共最初被仰立ニ而も有之、右之通ニ相成候哉、御所限被仰出候而出來仕候哉、承知仕度奉存候、

陣小庭假建物以下、下行五斗加増之儀取調候處、最初ヨリ決算相違有之、却而五斗減少ニ相成候、帳面改申達候、

右兩條共最初申立在之候哉、御所限被仰出候而出來候哉之事、別段申立者無之候、如類例下行下帳増減之譯ニ而申立候儀ニ候、尤御所限被仰出候と申儀ニ而者無之候、

此度相増候御下行帳四冊之内、久米舞御再興之義者、兼而被仰立相濟有之候趣承知仕候、右之外依破損難被用修覆之分拾五石餘、古物燒失ニ付新調之分五拾壹石餘、卯日宮内省以下一帳五拾四石餘、都合三冊之分調進物參役等之儀、此度別段被仰立候上被仰付候儀ニ候哉、又者御所限被仰出、右之通相増候哉、且又諸司願書ニ、天明度者最早帳面も相〆リ、不被及御沙汰旨被仰渡候と有之候、右者其節武邊江被仰達候上、不被及御沙汰儀ニ候哉、又者御所限不被及御沙汰儀ニ候哉、承知仕度奉存候、

是又別段申立と申ニ者無之、下帳ニ而申立、類例之通ニ候、尤御所限之儀ニ而無之候、

諸司願書、天明度武邊江申達、不被及御沙汰儀ニ而ハ無之、御所限不被及御沙汰儀ニ候、於參役者此度も同樣に仰付候故、御下行前以願候ニ付、於此〔度〕者被下度下帳ヲ以申立、爲念願書進達之儀ニ候、○中略

願書廿通之內

口狀

天明七年大嘗會之節、小忌辨少納言侍從等座、黃端小半疊六帖調進被仰出、其節御下行之儀奉願候處、最早御帳面も相〆リ候ニ付、不被及御沙汰旨被仰渡、難治仕合奉存候、依之其後押而奉願候得共、只今不被爲在御沙汰も甚以歎ケ敷奉存候、然處今度就大嘗會、右座不相替調進被仰付候間、於此度者御下行四石八斗被宛行候樣奉願候、何卒以御憐愍御沙汰、願之通被宛行候者、難有可奉畏候、此段宜御沙汰奉仰候以上

十一月　掃部頭

○按ズルニ、此他諸司ヨリ下行ヲ請ヘルモノ二十通アレドモ、文意大略同ジケレバ略ス、

〔山科家留記〕文政元年大嘗會御下行一件武邊往復紙面寫留

所司代より切紙之寫

大嘗會御下行之儀ニ付、壬生官務、押小路大外記、出納內藏權頭申立候書面、幷別紙書附共、先達而被差遣之、致一覽候、右者米價下直ニ而難澁ニ付、御下行米壹石六拾目ニ而被下候歟、御加增米又者御足米被下候樣致度旨ニ候得共、米價高下ニ寄、御下行米增減可被下筋合ニ者無之候間、此度申立候趣難及沙汰候、其段官務大外記內藏權頭へ御達被成候樣にと存候、依之被指遣候書附四通致返却候事、

十二月

奉再願口上覺

昨年大嘗會御下行米之儀、當時米價至而下落ニ而、一統難澁罷在候ニ付、一向ニモ御憐愍ヲ以、石六拾目ニ而被下置候樣奉願度、其儀難相成御筋合ニ候者、御加增米或御足米ニ而も被下置候樣奉願上候處、○中略難被及御沙汰、願書御差返ニ相成候趣被仰渡奉承知候、然ル上相願候儀恐入奉存候得共、御大禮御用無御滯被爲遂行候儀、調進方者不容易御物共モ有之、且身下行ニ於而者、其砌之諸雜費ニモ難相辨程之御下行物モ有之、平日困窮之輩ニ御座候得共、格別之御用ニ御座候故、銘々他借引當置、候儀共、如此御下行被相渡候儀遲々相成候內、八木下落之仕合ニ御座候得バ、不得止事奉願上候儀ニ御座候、尤右御下行先達被相渡候儀ニ御座候得者、何等之儀も可奉願筋合ニ者無御座候得共、一年越にも相成不被相渡、御延滯之內追々八木下落ニ相成、諸司之者立行候義難相成仕合ニ御座候故、至奉願候義に御座候、右等之儀難被爲聞食分候而者、乍恐夫々下方之者共江難示談筋合共自然ニ出來候而、人口之程も深恐入奉存候間、幾重にも此段御勘考、御憐愍御沙汰之程伏而奉願上候、

右等之趣、吳々宜御沙汰奉願候以上、

卯十二月　　外記官諸司中

官務殿

大外記殿○中略

大嘗會御下行米之儀ニ付、兩局出納再應申立候書面、幷別紙書付共、先達而指進被一覽候、右者一統難澁之趣度々歎出、申宥方無之ニ付、又候申立候趣ニ者候得共、先達而も被相達候通、米價高下に寄、御下行米增減可有之筋合ニ者無之候間、再應之申立ニ者候得共、難被及沙汰候、其段相達候樣にと被存候、依之書付四通被返却、被示聞候趣令承知、則申渡候處、何れも承知之由に候事、

二月　見返し御賄頭

〔大嘗會雜記〕文政三年六月十五日己亥、明十六日於二條藏大嘗會下行米相渡之間、辰半刻請取人可差出、尤雨天順延、印鑑今日中、官務亭可差出由使部觸來、　十六日庚子、大嘗會下行米今日相渡、予分拾三石、帶刀請取之、〔常顯以上昨日相渡、俊常以下今日相渡云々、三年振被渡之、否有遲滯也、〕

同列中渡米石數有不同、後日承合注左、〔但先例通也〕

拾三石〔當時藤島右馬助〕助功〔予時一臈〕

〔貳石、忌火役送、五石、車持朝臣、貳石、辰日早參、貳石、巳日早參、貳石、午日早參、〕

拾壹石〔同細川播上總〕常顯〔予時二臈〕

〔五石、于部官輕、貳石、辰日早參、貳石、巳日早參、貳石、午日早參、〕

拾壹石〔同北小路左大藏人〕俊常〔予時三臈〕

〔五石、登取直、貳石、辰日早參、貳石、巳日早參、貳石、午日早參、〕

拾三石〔同北小路江藏人〕俊矩〔予時四臈〕

〔貳石、卯日早參、三石、同御手水役送、貳石、解齋役送、貳石、辰日早參、貳石、巳日早參、貳石、午日早參、〕

〔大祀放求〕嘉永元年二月十一日、傳奏招中山被示云、今度大嘗會被仰出ニ付、文政度別御下行帳面口々、以殘米被充行處、右度御殘米甚拂底、傳奏雨局等甚心配、漸内々從御内儀銀子被出、殘米不足相補、其上改元御殘米等差加、漸配分相濟候由、今度右別帳面口々、從只今出方無之間、可勘考旨過日輔世申入間、傳奏段々勘考、精々於此度者從傳奏武邊ニ被申立覺悟之間、文政度御下行帳面都十三冊、右本帳之外十二冊、追々相増候譯合得ト取調置被覺悟度、且亦文政度御調度類新調之品今度御修覆、又ハ修覆之品今度新調否之事、豫取調置度旨被示之也、仍承知猶得ト取調可注進間、四五日之處用捨可給旨申入處承知也、尤大外記出納にも、從輔世可被達旨也、　十二日、坊頭招非

藏人口面會、被示云、今度大嘗會御下行之内、文政別下行帳口々、今度傳奉より被申立武家間、申立書案極密々爲心得被見之、尤今度武邊へ者、文政之度件別帳之口々以殘米被下之事ハ極密々可秘之、自然段々武邊より尋有之節ハ、都從御内儀銀子被出之、一統へ配分之旨可返答間、萬一三催并催者共へ勘使或從武邊内々尋等有之バ、猶取調可返答ト答置、傳奉へ示談之上可返答、尤大外記出納之事由、得ト申合置可然旨被示也、就テハ今度中務省史生下行、今度新加別帳ニ仕立、昨日可差出申渡、伺書添之明朝可差出旨也、仍被見之、傳奉申立書案借用、猶大外記出納所等へも可傳覽旨申入處領掌也、且昨夜被達伺書雖持參、右中務省史生下行帳面ニ相成間、下行石數可除之間、持歸了、　三月廿日、傳奉御用召、予所勞之間新外史被參之處、傳奉面會、先達而差出置大祀御下行帳面外下行之事、更ニ四折ニ相認、前日認之節、別廉之間不差出候得共、大嘗會御用之儀故、彙爲念差出置旨ニ而可差出、且文政度新加下行申立手續年月日取調可差出旨、被申渡事、　四月十五日、大嘗會下行帳之内、掃部頭調進物、今度下行增方之分、增高ニテ可加、依燒失文政度新調之分今度御修覆ニ付、下行減方之分ハ、減高ニテ可加帳面旨傳奉示之由傍局傳達之事、

〔輔世卿記〕嘉永元年四月十八日辛酉、家君御出門、右者昨夜依御招中山樣へ御出之所、大納言樣御面會ニテ、御相談御達之條々左之通、

一先日御申立ニ相成候、文政之度大嘗會別御下行帳之儀、於武邊も取調候處、今度傳奏奉行衆御申立方と文政之度御申立方と符合不致候付、右之譯柄今一應可取調旨、武家紙面寫壹通、并由奉幣御拜出御下行以下調進料口々、飛行舍御帳臺以下御修復新調御下行等之内、二條御藏渡之分ハ取調方際取候付、早々御治定御達可有之旨同紙面之寫一通、高御座繼擯之儀新調御修復御治定譯書御下行付等、早々承度旨同紙面之寫一通等、都合三通爲御心得御達之由、委細大嘗會願書留ニ有之候、

右別紙之通申來候付、先達而以來御申立ニ相成有之候、文政之度大嘗會別御下行帳面之儀ニ付、武邊往復之次第三催ニおいて御分り無之由、於一會傳奏奉行も巨細御分り無之候間、極密密其節武家傳奏山科樣御書記御借出ニ候間、內々被入御披見候故、右之內ニ而得と御取調置可有之旨御達之所、家君御返答ニハ、右御書記御役中之儀ニ候得バ御持歸りも如何、於中山樣御披見御取調可有之哉、併家君御一身ニ而ハ、數冊之儀故御行屆難被成、大外記樣出納等へも御申傳、何れも御參集ニ而御取調可有之哉之旨御相談之所、至極御尤之旨御承知也、尤決而御他言無之樣御賴之旨也、

廿三日丙寅、家君御出門、右者非藏人口御參、御例席へ御通之處、大嘗會傳奉方御面會、先日從武邊不審申來候、文政度大祀御下行申立、今度申立方と不合之儀、此間以來從中山樣御借用有之候御書留御一覽、段々御取調之處、右ニ而漸相分り、全右ハ文政度大祀之節、新內裏後初度旁數度下行帳草稿御出來、且武邊へ度々御往復ニ相成候由、尤其度々一會傳奉方より武傳方限御內談ニ而御往復之始末、一々ハ御兩局へ御達無之候故、委細御分り難被成候處、今度極密々借用有之候、其節武傳方御留御一覽ニ付、其子細御承知被成候處、右之度武邊へ御達無之、御所限ニ而不被及御沙汰廉も有之、又武邊へ御達之處、不被及沙汰廉も有之候由、然ル處御兩局へ御達ニハ、只無子細不被及御沙汰候旨御達候故、何れも武邊へ御達之上ニ而不被及御沙汰儀と被存候、且夫故都而武邊へ御掛合之次第御分り難被成候故、今度御兩局より御申立方と不合之儀、從武邊不審も無理無之、併只今ニ而ハ餘り御不都合御返答も難被成、昨日御傍局出納等も御熟談ニ而、先右御返答書御草稿御出來ニ付被入御相談、且文政度從武傳方武邊へ御往復之次第譯書壹通、并右之節御下行帳之寫へ委細御下札ニ而、武邊ヨリ被省廉々下札寫譯書御認本帳書拔一冊、別御下行帳一冊、宮內省以下御下行帳一冊、合三冊等被入御一覽御內談之處、至極御尤ニ被存候由、先此分ニ

而武傳方へも御內談可有之候間、早々御清書御差出有之候樣御返答、巨細ハ大嘗會一會傳奉往來留ニ有之略之也、　五月廿九日辛丑、家君御出門、右者依御招非藏人口へ御參、御例席東之間へ御通ニ而、大嘗會奉行坊城頭辨樣御面會ニ而、昨日中山樣御面會之節御談有之候、大嘗會別御下行之儀ニ付、宮內省已下十八石御下行、文政之度武邊へ御申立ニ相成候得共不被及沙汰ニ付、於勸使所ニ臨時祭御殘米之內ヲ以、代銀ニ而被相渡候譯柄、矢張御書取ニ而御差出可有之、無左候而者、今度別御下行帳之口々申立ニ相成、文政之度不被及沙汰、宮內省以下十八石出方不相分候而ハ、於武邊不審も可有之候哉ニ被存候旨御相談也、依テ種々御相談之上、御伺書御差出可有之御返答也、委細ハ大嘗會一會之留ニ有之候也、　六月廿日壬戌、家君御出門、右者依御招中山大納言樣へ御出之所御面會ニ而、去ル朔日武家傳奏方へ大嘗會傳奏奉行方より差出ニ相成、武邊へ御內談ニ相成候大嘗會別御下行帳面之御下行之事、迚も御六ヶ敷由ニ候、然所此度右御下行武邊より不出候得ハ、此已後ハ愈六ヶ敷、申立も難相成次第故、折角是迄御互ニ御骨折之事故、何分調不調共關東年寄中迄達ニ相成、其上愈不出來候ハヽ、無是非次第ニ候得共、所司代限ニテ相濟候者甚以殘念ニ候間、種々御勘考之所、何分別御下行と申名目、於武邊差支有之候由、且宮內省拾八石、由奉幣御拜出御拾壹石七斗五升等、文政之度於勸使所代銀ニ而被下候廉々も、右別帳面へ書加へニ相成、一帳ニ而大嘗會御下行不足帳面と名目相改差出候方可然哉之由、武家噂之趣御傳承被成候間、殊ニ寄火急ニ右之通御書改之事御達ニ相成候哉モ難計候間、極密々兼而爲御心得御達置被成候間、右ニ而も三催共御差支無之哉、早々御示談、明日中ニ右帳面御拵、中山樣迄御差出置有之候樣御達也、仍右掛札之事種々御談御承知之旨御返答也、委細大嘗會傳奏往來ニ在之候、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕是日、〇卯日中臣官人率卜部、於宮內省卜諸司小齋人、訖各還私舍、沐浴齋服赴集、

〔北山抄 五〕大嘗會事

卯日平明、神祇官班二幣帛於諸神一、卜二諸司小忌人一、同二新嘗會一、（新式云、參議以上及侍從等寅日卜レ之、內侍命婦藏人等卯日卜レ之、自餘寅日卜定、給二榛藍摺綿袍井青摺衣等一、）

〔延喜式 三十一 宮內〕供奉踐祚大嘗小齋

神祇官一百五十人、（伯已下史已上七人、史生四人、宮主一人、彈琴二人、巫部一人、神部廿四人、卜部十八人、使部七十二人、忌部五人、神服七十六人、）太政官十人、（中納言已上一人、參議一人、外記二人、史生二人、史二人、史生二人、）中務省七人、（輔一人、丞二人、錄二人、史生二人、）侍從已上廿人、內舍人十人、內記二人、監物二人、主鈴二人、典鑰二人、大舍人寮卅二人、（官人二人、史生一人、舍人廿九人、）圖書寮四人、（官人二人、書手二人、）內藏寮廿人、（官人六人、史生四人、藏部十人、）縫殿寮十人、（官人四人、番上六人、）宮內省五人、（大少輔丞錄各一人、史生一人、）大膳職八十四人、（官人二人、史生二人、膳部八十人、）大炊寮廿六人、（官人二人、炊部廿四人、）主殿寮廿二人、（官人二人、史生已下十八人、火炬小子二人、）典藥寮六人、（官人二人、侍醫二人、藥生二人、）掃部寮十人、（官人二人、掃部八人、）內膳司十六人、（官人二人、膳部十四人、）造酒司卅人、（官人二人、酒部廿八人、）采女司四人、（官人二人、采女二人、）主水司十二人、（官人二人、水部十人、）左右近衞府各官人四人、府生一人、近衞卅人、駕輿丁八人、左右兵衞府各官人二人、兵衞廿人、左右衞門府各官人二人、府生一人、門部廿人、語部十五人、門部八人、內侍已下數同二每年新嘗一、

大齋

內膳司十四人、（並膳部、）采女司廿八人、（官人二人、采部六人、采女廿人、）主水司廿三人、（官人一人、水部廿二人、）國栖十二人、笛工五人、

〔康富記〕永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗祭也、○中略 大忌公卿、（權大納言公保卿、權中納言實熈卿、已上兩卿例也、不レ著二小忌一、開二之大忌一、對二小忌一之兩歟、）被レ參二八省一、

〔大嘗會儀式具釋 六〕大忌トハ齋戒スル諸司ノ中、嚴密ニ齋戒スルヲ小齋ト云、訓ヲ借テ小忌トモカク、大抵ニ齋戒スルヲ大齋ト云、訓ヲ借テ大忌トモカク、然ルヲ衣服ノ名ト心得テ、小忌ト大忌ハ身幅ヲ以差別スルナドヽ云ル說アルハ誤ナリ、貞觀儀式、延喜式等ヲ考ヘテ其誤ヲ知ベシ、昔大嘗新嘗等ノ時ハ、卜ヲ以テ小忌ノ人ヲ定メラル、卜ニ合ザル人ハ皆大忌ナリ、今ハ小

忌ノ人ヲトセラル丶事ハ聞エテド、猶小忌ノ人誰々ト定メラル、其餘ハ皆大忌ナリ、

〔延喜式十三大舍人〕凡供奉諸祭及齋會節會等舍人者、略○中踐祚大嘗官人二人、史生一人、舍人卅九人、舞人部在此內、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十月中旬、略○中仰諸氏長者、令進容儀端正堪膳部者交名、

〔北山抄五〕大嘗會事

廻仰膳部事王卿出之、大學寮差進學生、又校書殿內豎等、一方百人、

仁和例、百人之中、大學寮十二人、校書殿十人、內豎廿人、有職親王、太政大臣各四人、無職二人、大臣三人、納言二人、參議一人、近例親王二品四人、三品四品三人、太政大臣五人、大臣四人、納言三人、參議二人四位一人、學生廿人、校書殿內豎、同仁和例、

催國司舂馬事五位以上一方膳人、王卿催部及件人々、以大舍人令廻、

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

九月上旬、略○中請田舞內舍人六人、內豎六人、大歌生二人、彈琴一人、笛工一人、御琴一面之狀奏聞、略○中又左右衞門府申官、令諸國量程進物部門部語部等、物部者左右京各廿人、門部者左右各二人、山城國三人、大和國八人、伊勢國二人、紀伊國一人、語部者美濃國八人、丹波國一人、丹後國二人、但馬國七人、因幡國三人、出雲國四人、淡路國二人、略

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡物部門部語部者、左右衞門府九月上旬申官、預令量程參集、物部左右京各廿人、門部左右京各二人、大和國八人、山城三人、伊勢二人、紀伊一人、語部美濃八人、丹波二人、丹後二人、但馬七人、因幡三人、出雲四人、淡路二人、

〔北山抄五〕大嘗會事

召物部門部語部隼人等事左右衞門府九月上旬申之、仰左右京并國々、

物部、左右京各廿人、

門部、左右京各二人、山城國三人、大和八人、伊勢二人、紀伊一人
語部、美濃八人、丹波二人、丹後二人、但馬七人、因幡三人、出雲四人、淡路二人、
隼人、大和十人、河内十二人、和泉七人、攝津十人、丹波廿四人、伊勢七人、
又依彼司申召之
召氏々事（仰本司及國々）
車持朝臣　子部宿禰　笠取直　伴　佐伯　石上　榎井　田舞、多治比氏、　久米舞、伴、佐伯等
氏、　吉志舞、安倍氏、吉志、大國、日下部、三宅、難波等氏
請田舞人御琴等事（已上見式）
内舍人六人　内豎六人　大歌生二人　彈琴一人　笛工一人

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例
太政官牒其等諸寺（國所共用此）
應借送樂人幷樂器事（具註色目）
右大嘗會其所所請如件、寺宜承知、依件借送、故牒、
年月日史位姓名牒
辨位姓
大嘗會其所牒興福元興兩寺（每寺有牒）
應送向會所淨女四人事（各四人）
牒、爲造小齋幷齋場唐菓物、依例所請如件、寺宜察之、其日以前送向、不可違延、

〔中右記〕天仁元年十月十一日、辰刻許參殿下、（中御門東洞院）民部卿左宰相中將（忠）、左大辨（重）被參會、（源大納言、治部）

(藤原宰相、雖召、有障不參、)有被仰云、院仰云、依土御門尼上入滅事、左大臣、內大臣、(節下也、)御禊前次第司長官左衛門尉雅俊卿、主基國司丹波守秀房朝臣、同行事左少辨雅兼等、已三月服、廿日假也、而何樣可被行哉、大略可議定申者、凡此外一家人々、公卿殿上人有其數如何、先被問大外記師遠之處、大略勘申云、服假中供奉大嘗會御禊例、

仁和四年右大臣源多、十月十七日薨、其年大嘗會御禊、一家人々雖假中有指仰、皆以供奉、

服日數中供奉御禊例

長元九年九月六日、中宮威子(藤原道長女○後一條后)崩、其年御禊、御堂(道長○)子族皆供奉、內大臣(二條殿○道長子教通)勤仕節下、

承保元年十月三日、上東門院崩給、其月卅日御禊、一家人々依仰除服供奉也、

又次第司裝束司長官、幷行事辨、依服假多被改替也、

悠紀主基國司服假之例全不見、但忽卒去之時、早被成其替也者、

依件例何樣可被量行哉、民部卿、宰相中將、左大辨被申云、依仁和例服假之人供奉御禊何事之有哉、就中長元九年、承保元年又以如此也、節下大臣、次第司長官不可被改、是齋院御禊、穢氣之人供奉常例也、可准據歟、至丹波國司者被相轉他國可宜歟、空不可解官之故也、行事辨又可被改替也、但縱雖上臈辨、主基行事、於今者何事之有哉、下官(藤原宗忠○)申云、服假之人々供奉御禊之條頗不穩便、先仁和之例雖有舊跡、往古如此之事強不避忌、近代其忌頗重、延喜天曆以後例近來被用之、長元承保之例非假之中、是服日數之內也、假重服輕、何不可爲例、猶節下大臣、次第司長官被改可宜歟、就中大納言爲節下大臣代官、其例甚多、元慶元年、(大納言源多)寬平九年、(大納言時平)承平二年、(大納言仲平)天祿元年、(大納言源兼明、以上皆一大納言、)如此吉例甚多、左內府假中也、被用大納言可宜歟、主基國司相傳之條、同人々被申旨、行事辨又以可被改也、強尋用服假供奉例、不穩便歟、事不可闕者、猶假內之人々不供奉可宜歟、天下大神事不

可過斯之故也、殿下仰、人々供奉有例者、何事之有哉、但至節下人次第司長官者、猶可被改歟、服假同事歟、將又有輕重歟、被問明法博士二人、資清申云、假重服輕、信貞申云、大略同事也、但假輕歟、件二人召儲也、予申云、服之中假猶重之故也、至假者全不出仕、信貞申旨甚無其理者、人々申旨令藏人辨顯隆奏院、已及夜陰歸來申云、以此旨被問帥卿匡房也、大略同人々被申旨也、院仰云、仁和例已爲往古事、頗不叶今世作法、假內人々供奉御禊條、不甘心思食也、是非遊興臨幸、第一之神事也、藤中納言申旨尤可然也、强尋上古希代例不可用歟、明法博士信貞申旨、服重假輕之條甚以奇恠也、服是輕事也、早至節下者大納言吉例多、民部卿可勤仕、次第司長官止左衛門督、可用右衛門督宗通卿也、主基國司密々可被仰也、大略國替儀歟、至行事辨、左中辨長忠、右中辨顯隆間可勤仕、服假之人々、皆不可供奉行幸之日、人數少條不可有難、猶服假人々其數供奉、頗所輕思食也者、藤中納言申旨已叶御案也者、又左兵衛督代家定朝臣服假之替、可催明賢朝臣也、又右兵衛督代家保朝臣申灸治由、不可被免、仍可責催者、其後各々分散、下官量申之條已叶天意也、

〔台記〕康治元年十月廿一日庚辰、大嘗會悠紀主基勝部廻文持來、各四人可取之、而悠紀五人取之、因只四人可進之由申了、

〔玉海〕壽永元年十一月廿四日辛卯、此日廻立殿行幸也、後聞、〇中略左大將雖不合卜、著小忌供奉云々、近代例也、中古以往、雖爲大將不合卜不候大忌、

元曆元年十一月十八日癸卯、此日踐祚大嘗祭也、〇中略改著束帶參陣、依供忌火御湯畢、不昇殿、於恭禮門邊招職事、五位藏人親經、當時例候云々、申攝政〇藤原師家云、依不合卜可候大忌之由存之、於大臣大將者、不論合否著小忌、長和編記、寬治江記等所見也、然而不載其由云々、於納言大將者、卜合之時著小忌、而或依別御定有供奉之例、天仁、保安、康治、云々、隨仰欲進止、如何、攝政答云、就近例可被供奉者、仍於南殿御後邊著小忌著陣云々、先例被仰留守、而今夜不被仰云々、前行左大臣儲候廻立殿邊云々、〇中略遷御悠紀大嘗宮之後、小忌人々欲著小

忌輕之處、不儲其座、只有大忌輕、敢無大忌之人云々、仍人々相議著件輕云々、上首大將也、其外愛厥、
賴實、隆房等云々、撿按大納言忠親卿雖合卜不出仕、依中納言二人例、賴實著小忌供奉、但不合卜云々 大將
有風氣早出畢、

〔玉蘂〕建曆元年十一月七日乙卯、詣善提院者、〇中略 禪門出逢給、巷雜不審事等粗問答了、〇中略
一大嘗會卯日、納言大將不卜合ハ、事理可候大忌也、而近代依別仰候小忌、不可然候、必可供奉者准
長和例、左右大將重卜可候小忌歟、□□□小忌哉、誠長和例可取也云々、予云、重卜著小忌之人、辰
日以下不可著歟、仰然也、近例或撿按皆著小忌、甚不可然也、

二年九月十五日、自悠紀行事所、催大嘗會膳部代可進者、廻文如此、

大嘗會悠紀所

可早供奉會日膳部代事

左大臣家五人　右大臣家五人　內大臣家五人

右任先例可供奉之狀如件

建曆二年九月日

早可進之由申了、先例每度如此定申也、或人云、右大臣自是可申左右候、不被數例歟不審云々、納言
被下廻文條如此、

大嘗會悠紀所

可早供奉會日膳部代事

右大將家四人　堀川大納言家四人　近衞殿大納言家四人　源大納言家四人　大宮大
納言家四人　藤大納言家四人　九條殿大納言家四人

右任先例可供奉之狀如件

年月日

已下人々以是可准

〔百練抄 十四後四條〕嘉禎元年十一月廿日己卯、今夜大嘗會也、○中略攝政依輕服事不被參入、於昭訓門廊代幄被行之、長元例也、但有別勅被參廻立殿云々、　廿一日庚辰、神祇權大副隆繼朝臣奏天神壽詞、祭主隆通朝臣輕服之間、隆繼奉仕此役、未曾有事也、

〔後深心院關白記〕永和元年十一月六日壬戌、俊任來、有勅問事、仰詞、中詞等注進之、

仰詞如此

大嘗會條々 ○中略

廻立殿御湯殿藏人事

山蔭中納言後胤無其器、被用他藏人之條、爲新儀、何樣可有沙汰哉、可被計申矣、

〔經嗣公記〕廿二日、○應永二十二年十一月けふは辰日悠紀節會なり、○中略内大臣殿義持○足利とくより御まゐり有て、御裾に候ヒ給ふ、○中略さても此節會の内辨は、永德に鹿苑院殿義滿○足利つとめさせ給ひしかば、この度内大臣殿御つとめあらばよかるべきに、さもなきこそよに無念におぼえ侍れ、さりながらかく樣に嚴重に御まゐり在て御よこうあれば、ことさら散狀に書のせ奉るなり、

〔康富記〕永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗祭也、○中略

廻立殿行幸 此散狀職事所書出也、書樣不審、先規猶可勘

公卿

攝政　左大臣　右大將殿　三條大納言　西園寺大納言　勸修寺中納言　洞院中納言　中御門宰相

少納言

爲清朝臣

辨

幸房　明豐

次將

左　定長朝臣　雅親

右　實雅朝臣　公久朝臣　行尙

左衞門府

責任

右衞門府

紀秀弘

左兵衞府

永豐朝臣

職事

房長朝臣　明豐　嗣光　源重仲　藤原懷藤　源爲治　忠長各著二諸司小忌一云々〇中略

辰日節會

公卿

內大臣　藤大納言　萬里小路大納言　西園寺大納言　京極中納言　勸修寺中納言　中御門宰相　四條宰相

少納言

爲清朝臣

辨
　幸房　明豐
次將
　左　基尹朝臣　隆遠朝臣　貴金
　右　有定朝臣　親賴朝臣
此外御參
　攝政殿　室町殿
職事
　頭左大辨房長朝臣節會以前被補之間横出仕　頭右大辨忠長朝臣行事　權右少辨嗣光　右少辨政光　源
　重仲　藤原懷藤　源爲治各小忌
局中
　左大史周枝宿禰　同爲緒宿禰　大外記師世朝臣　六位外記親種　康富　忠種分配　史盛久
　員職　史生遠廣　氏卿　官掌親秀　召使行繼　行寛　師俊　康行○中略
　巳日節會
公卿
　左大將　西園寺大納言　勸修寺中納言　藤中納言　葉室中納言　洞院中納言　中山宰相
　中將　中御門宰相　四辻宰相中將
少納言
　爲清朝臣
辨

明豊

次將

左　信守朝臣　雅豊　親豊

右　光清朝臣　實雅朝臣　兼重

此外職事如ㇾ昨日、但左大辨不ㇾ參、政光不ㇾ知ㇾ著小忌云々、

兩局

周枝宿禰　爲緒宿禰　師世朝臣　親種　康富　盛久　員職　氏卿　盛忠　職秀　成茂

師俊　康行　行繼　秀國　行寛〇中略

豊明節會

公卿

西園寺大納言　花山院大納言　勸修寺中納言　葉室中納言　新中納言　中山宰相中將

中御門宰相　四條宰相　新宰相

少納言

爲清朝臣

辨

嗣光

次將

左　雅藤朝臣　雅永朝臣　基尹朝臣　資益

右　長資朝臣

〔季連宿禰記〕貞享四年十一月十五日庚寅、今日小忌公卿、少納言、外記等、神祇官雅卜ㇾ之云々、寅日卜

之、先例歟、可考記、當卜公卿、少納言、外記等著小忌事也、卜食人々追可尋記、件催者皆諸司小忌也、

十六日辛卯、今日大嘗會也、○中略

大嘗會公卿以下（次第不同）

攝政（一條殿冬經公）

小忌大臣

左大臣（近衛殿基熙公、前行大臣也、）

小忌公卿三人

萬里小路大納言（淳房卿、擬卜合、）　正親町中納言（公通卿、卜合、）　裏松宰相（意光卿、卜合、）

大忌公卿二人

烏丸大納言（光雄卿）　花山院中納言（持重卿）

少納言

行豐朝臣（石井、小忌卜合、）

辨

左中辨韶光朝臣（勘解由小路、私小忌、悠紀行事、）藏人右中辨賴重（葉室、私小忌、主基行事、）

御次將

有胤朝臣（綾小路右中將）

聖次將

公晴朝臣（花園右中將）

同政官以下（次第不同）

大外記師庸朝臣（兼掃部頭、仍著諸司小忌、在日陰ニ心葉、赤紐、又卜合ノ外記也、）左大史季連（尋常袍、悠紀行事、）少外記中原定清（尋常袍）同中

原友昌、(尋常袍)右大史高松春宣、(悠紀行事、私小忌、)左少史三善亮兼、(主基行事、私小忌、)召使四人、(各尋常袍、〇中略)
大膳職造酒司(私小忌)大藏省弘之(兼木工寮)
立明前行主殿官人二人、大允職仲、(諸司小忌、有日陰、心葉、赤紐、)少允職方、(同)
開門伴佐伯二人、伴亮信、(諸司小忌也、仍不帶劒云々、予細可考、從五位下主殿少允、)佐伯職秦、(同)
供忌火御燈、主殿大允職仲(立明兩役也)
供小忌御湯、主殿大允友治(諸司小忌)
安曇氏內膳代伴守吏之、(私小忌也、日陰、心葉、赤紐等在之、候悠紀主基膳屋、運神饌歟、)
伴造友治(諸司小忌也、元伴造者私小忌歟、然共就供小忌御湯著諸司小忌、)
掃部寮大允藤原利有、(如形小忌)掃部寮藤原利章、(如形小忌、利章ハ掃部寮ノ官未申上、仍只稱掃部寮、)
使部外記官各四人
右之外諸司追而可尋記
供奉中臣祭主神祇大副大中臣景忠卿、(私小忌、此小忌縫腋也、自餘私小忌皆闕腋也、上階以後人者、闕腋不著云々、)同忌部代從五位下卜部兼充、(私小忌、猪隈、)
御衾單御服縑御幞繒服俺服等奉設、忌部代紀重基、(私小忌、從五位下、)同中臣神祇權大副德忠、(私小忌)
候悠紀主基管殿、卜部神祇權大副兼連朝臣、(私小忌、吉田侍從左兵衛督、)
神服宿禰代左官掌紀氏辰(私小忌)
右有脫漏歟、可追尋記、
置御衾單、大藏大錄和氣安重(諸司小忌、內舍人正六位下、)
置版位、式部大丞宗岡常辰(位袍、外記史生也、)
置御衾單、縫殿官人允定成(諸司小忌、贊者、)

宮内輔（花山院家諸大夫也、姓名可尋記、）

一車持朝臣笠取直、子部宿禰等、殿上六位藏人奉仕之、

一猿女一人、御巫一人、以上小女也、髮垂橡衣、（ナハヤノ如キ衣也、）赤袴、猿女御巫等者、行事官重甚沙汰出、○中略

一内裏伊豫局（故忠利宿禰女、季連姉也、小槻文子、）今夜勤采女代、（采女六人之中、第一采女云々、大嘗宮之内者、主上第一采女只二人也、殘采女者候大嘗宮簀子云々、爾一同者攝政殿幷宮主代吉田兼連朝臣只二人也、）縫腋、非爲指規模、一家眉目、是天恩不淺也、且采女女官先規何人歟不分明、仍兼日被經御沙汰、以伊豫局被定云々、殘五人刀自等也、

十七日壬辰、今日被行豐明節會、○中略後聞、今夜出御之時、命婦不出云々、其稱者兼而奉行職事不被相催之、臨期雖責催、俄難事具之由稱之、終以不出云々、是奉行職事之失也、○中略今日巳刻許、禁裏伊豫局依月事退出、昨夜采女代（一采女代也、）無異無事被勤仕、今日退出之條、偏冥助之至、祝着無限者也、

〔壬生家記〕明和元年大嘗會門下諸司訴丞居書等留牒

奉願口上

大嘗會卯日内舍人出仕之事、元文之度則貞、寬延之度亡父正芳、出仕被爲仰付候、以此等之例、於今度（萬、薰正）出仕被仰付候者難有可奉存候、此旨宜御沙汰奉願候、以上、

八月　　　　内舍人和氣薰正

官務殿

奉願口狀書

一大嘗會卯日伴造幷安曇氏内膳代、貞享以來當寮伴方參勤被爲仰付候、尤伴造者當氏之儀調進等（萬）御座候故、寮家相兼參勤仕候、依之左生火官人爲安曇氏參勤仕候、於此度（萬）御近例之通各參勤被爲仰付被下候樣ニ奉願候、右之趣宜御沙汰奉願候、已上、

九月　　　　主殿寮伴重威

官務殿

〔大嘗會中沙汰之備忘〕文政元年十一月廿一日、大嘗會御當日也、○中略

権大納言　卜乙下合建通　卜丙合隆光
権中納言　卜丙合公遂　卜乙下合家信
參議　卜乙下合愛長　卜丙合實愛
少納言　卜丙合爲政　卜乙下合宣諭
外記　卜丙合邦昌　卜乙下合昌言
左中將　實嗣卜乙下合　實城卜丙合
左少將　實建卜乙下合　隆賢卜丙合
右中將　公正卜乙下合　重胤卜丙合
右少將　通熙卜丙合　定功卜乙下合
侍從　隆韶卜乙下合　實在卜丙合

卯日參勤輩如左

少外記、卜合行事史、二人召使、四人辨少納言侍、一人宛使部、四人雨行事、十三人忌部代、神服宿禰代、式部省同史生、大藏省輔大錄、宮內省權大輔少輔、大舍人寮、內舍人、內藏官人、二人縫殿官人、二人主殿寮、二人官人、史生、火炬師、松持、駈仕丁、掃部寮、三人同史生、二人內膳司、膳部代史生、二人膳部安曇氏內膳代、造酒司佑、酒部四人造酒兒代、稻實公代、采女司、主水司佑、水部、二人伴造、開門伴佐伯、門部二人兵庫寮史生二人內豎、二人近江權大掾、丹波權掾、衞士、

調進物參仕之輩

大藏省、並木工寮縫殿寮、二人同史生、二人大膳職內匠寮史生、二人內藏寮史生、二人造酒司史生、二

人小忌四府官人、四人大忌四府官人、四人

廿二日、辰日悠紀主基節會、○中略參勤諸司如左、

少外記、一人少史、一人官外記史生、四人左右官掌、四人召使、二人辨少納言侍、二人使部、四人悠紀行事、六人主基行事、三人畫所、二人近江、丹波掾、二人中務省、內記局、式部省史生、大藏省、宮內省、大舍人寮、二人內藏寮同史生、二人大膳職同史生、主殿寮、二人官人、史生、火炬師、松持、掃部寮、二人史生、二人內膳司史生、造酒司正佑、二人史生、二人采女司正、內豎、二人御厨子所、陣官人、左右衛門府、二人左右兵衛府、二人衛士、近衛、二人鉾立、○巳午兩日節會職員殆同、故略、

〔輔世卿記〕嘉永元年七月廿二日癸巳、家君御出門、右者依御招非藏人口より東之間へ御通之所、大嘗會傳奏奉行御面會、○中略此間御差出有之候、安曇氏左之生火官人御再興已來參勤之儀は、安曇氏と伴姓と由緒ニ而も有之、連々參勤被仰付候儀歟御尋之處、家君御返答、右ニ而者無之、貞享御再興之節、安曇氏代勤人體已下之事、傳奏御奉行より御相談有之、其節主殿寮下司之內代勤之儀、御先代より御伺有之、其後連々被仰付候趣御返答之處、左候はヽ右御伺定之記文御書拔、御差出可有之旨御達也、　廿五日丙申、入來德岡內藏大允、右者大嘗會神饌之案舁酒部四人參勤、內貳人ハ手傳之樣ニ留書有之候、今度九條樣御次第御認ニ付、文政度最初貳人と在之、又四人と相成在之候ニ付、何れニ御認可然哉、大外記樣へ御尋ニ付、右參勤之次第御尋ニ付、右之通留書之趣御返答申上候所、已前案壹脚之處貳脚ニ相成候、何れ之頃より貳脚ニ相成候哉御尋ニ付、不案內之趣御答申上候所、左候はヽ直ニ御當家へ認出可相伺歟、大外記樣被命候ニ付、案一脚相增候儀、幷右舁候酒部貳人增候儀被相伺候處、則御取調ニ而、文政已前迄ハ、酒部四人參勤ニ候共表向ニ無之、衣服も不被下、文政度御再興案壹脚增候ニ付、表向酒部二人增候間、衣服料願立、貳石六斗被下候趣御返答也、

神供御膳及雜器

〔實久卿記〕嘉永元年十一月廿一日辛卯、大嘗祭也、○中略今日參仕人々、前行右大臣忠熙、公卿小忌新大納言建通、小忌新中納言家信、左大辨宰相愛長、少納言小忌宣諭朝臣、辨悠紀行事恭光朝臣、主基行事光愛侍從小忌隆韶朝臣、次將小忌左實嗣朝臣、實建朝臣、右小忌公正朝臣小忌定功朝臣、大忌公卿撿挍權大納言基豐、日野大納言隆光、撿挍姉小路中納言公遂、菅中納言爲顯、撿挍水無瀨宰相有成、同次將左政季朝臣、右公前朝臣、國司近江介實建朝臣、權介基佑、丹波介公恪朝臣、權介實知、神祇官伯資敬王、大副祭主三位教忠、

○按ズルニ、大嘗祭準備ニツキテノ職員ハ、各事項ノ下ニ併載シタリ、

〔代始和抄〕大嘗會事

卯日は神膳を供せらる、其儀ことなる重事たるによりて、委しく記すに及ばず、さりながら名目ばかりをばおろ〳〵申侍べし、まづ廻立殿に行幸なりて御湯を奉る、天の羽衣と云は、主上の御湯の舟におりさせ給ふ時召るゝ御帷子の名也、おかはといふは明衣とかく、御湯帷子をいふ也、浪ぎ〳〵といふは御湯舟におはふきぬ也、海老鰭槽といふは御手水の具也、たじらかといふは、御手水の時のはんざふの代なり、かしは殿といふは神膳を調る所なり、嘗殿といふは板敷をまかす筵をまく、神膳を供ずる所なり、神座の備には八重疊、打拂の布、坂枕などいふ物あり、三河の國より奉る神服をば和妙といふ、阿波の國より奉るをば荒妙といふ、神食を供ずる時、神のすども御食どもといふ物あり、もと柏は神酒を供ずる時用ゆ、くぼてひらでは神食をもる物なり、此時に供奉する人に、十姫十男、御巫子、猿女、石上、榎井、車持、子部、語部、歌女などいふものども事にまたがふ也、神膳の事は陪膳の采女もつはらこれをつかさどる、○中略秘事口傳さま〳〵なればたやすくかきのする事あたはず、主上のまろしめす外は、時の關白宮主などの外は皆てしる人なし、まさしく天照おほん神をおろし奉りて、天子みづから神食をすゝめ申さるゝ事なれば、一代一

度の重事これにすぐべからず、

〔宮主秘事口傳〕

一童女八女以下於悠紀主基柏殿終夜可歌稻舂歌也、此歌悠紀方者宮主、主基方者大使、自兼日自行事辨申賜之、兼日於里亭令敎歌也、當日ニハ爲國司沙汰被召進、

行幸以前以拔穗御稻令歌舂歌、其實者悠紀方三升許、主基方三升許、舂出之、是神膳御飯米料也、

先々拔穗使等申狀ニ、以千五百之嘉穗備億千載之神膳由載之者、此稻事也、

次神膳事、諸司供物事、於柏殿悉撿知之後、奏天皇畢、以之思之、先於閑所能々可差試事也、此後可奉待臨幸、

次由加物可撿知也

次筥二（悠紀主基）一、伴造懸頭也、是等同無臨期之違亂之樣ニ可撿知也、近代者此氏不見沙汰、立其代云々、（宮方沙汰歟）

一鮮物干物菓子等事、一種毎々三籌、五度被備進之樣々可用意之由、後醍醐院元亨二年十二月神今食行幸時、爲九條前宰相光經卿奉行被仰出畢、其後被御代神今食行幸每度幷正慶、曆應、文和大祀之時、此分限可用意之由兼日召仰內膳司、且又當日ニ先令撿知、〇中略

一七節竹二（悠紀主基）一、仰內膳司可請取之、宮主參入神殿時、持副笏令參候、以此竹杖神膳次第令指敎于采女也、采女者十人、內二人之外不參入神殿也、以一號陪膳、以二號後取也、自餘者候神殿之外、

神殿ニハ殿下宮主采女二人之外者不參入也、當家奉同座殿下事、此一日也、文保度後光明照院殿御著座、正慶度後圓光院殿御著座、曆應度一條前殿下依御輕服無御著座、文和度二條前殿下悠紀神殿ニハ無御著座、兼豐能々可撿知之由被仰出、御著座主基神殿云々、

一主上入御神殿之後、采女官人持削木警蹕、其後供御手水具之後、采女官人每度逐電、或沈醉平臥、

事之煩也、云々、兼日云、當日、能々可下知也、可召置也、

〔大嘗會神饌假名記〕亥一刻(卯日○)天皇神殿の中戸の外の面のわきに(南めん)立ましまして、神膳のけいひつの聲をきこしめして中戸に入御、(關白さぶらひ、なかくゞり)神座の西北をへて(御璽をひく、御笏を正す、)半帖に著御(南面すこぶるたつみむき)御揖あり、(右の御足をしりぞけらる、)關白中戸の外にさぶらふ、(或說立殿にしりぞき候)次神膳を供する行列の次第あり、(近代この儀なし、よりてこれを略す、)次采女二人(はいぜん、しんどり、)えびのはたぶねをかきてまゐる、御前の短帖のまへにおく、(東西のつま)はいせん御前にとゞまりさぶらふ、(東面)次しんどりかへり出て、やうじばこをとりて陪膳にさづく、ばいせんごきをとりて、ふねの西のほとりにおく、次又かへりて御たなごひのはこをとりてばいせんにさづく、これをとりてやうじばこのみなみにおく、(そのふたをひらきておく、)次又かへりてたじらかを取てばいせんにさづけて、戸の外にまかでさぶらふ、次ばいせんこれをとりて御手水をかく、(三度なかぎりさす)主上御手をあらひまします、(御口をすゝがず、御やうじをつかひ給はず、)次戸の外にさぶらふ采女參て、たじらかをとりてしりぞく、次陪膳たなごひをとりて主上にまゐらす、主上御手をのごひて返したまふ、次しんどり參て、やうじばこをとりて本やく人に返したぶ、次又御たなごひのはこを取て返したぶ、次陪膳と後取とえびのはたぶねをかきてしりぞきいづ、次御祈請の事あり、(○中略)次ばいせん神のすごもをとりて、中戸を入て短帖のうへの右方にしきて、(ゆふをつけたる南北のつま短帖の南のはたにしく)戸のうちにとゞまりて南のきはにさぶらふ、次しんどり御すごもをとりて參てばいせんにさづく、これをとりて短帖のうへにしく、(東西のつま、短帖の北の御座のまへをせめてしく)次又歸いでゝ御はしのはこをとりて陪膳にさづく、是をとりて御すごものうへ南の方にしの第一におく、又かへり出て、ひらでのはこをとりて陪膳にさづく、是を取て御はしのはこのひんがしにおく、又かへり出て御はんのはこを取て、御すごもの北の方にしの第一におく、又かへり出てなま物のはこをとりてばいせんにさづく、是をとりて御はんのはこのひんがしにおく、

又歸りいで、からものゝはこをとりて陪膳にさづく、是をとりてなま物のはこの東におく、又歸いでゝくわしのはこを取て陪膳にさづく、これをとりてから物のはこの東におく、又かへり出てめのあつ物を取てばいせんにさづく、是をとりてひらでのはこのひんがしにおく、又かへり出てあはびのあつものをとりてばいせんにさづく、是をとりてめの東におく、こと〳〵くすゑをはりて、まんぜり右にめぐり歸て戸の外にさぶらふ、次ばいせん御まる物よりはじめて御はしのはこにいたるまで、一々にまでをときてくぼてのふたをひらく、くだんのはこは、御すごもの東、まる物のたかつきの東におく、みなかさねてこれをおく、まる物のうつは物のふたのかしは、同くかさねてこれをおく、次ばいせん御はしをとりて六まうの中、五まうのはしをもてこれをたつ、一まうはこの内の御れうにる也、皆御はんならびにから物くわしる物めの、あつものゝうへに次第にたつ、次陪膳雨の手をもてひらで一まいをとりて主上にまゐらす、主上御箸を右の御ひざの下におかれて、左の御手にてとらせたまひて、右の御手にて御はんのうへの御はしを取て、御はんいねあはを三はしづゝひらでにもらせたまひて、左の御手にてばいせんに返し給ふ、ばいせんこれをたまはりて神のすごものうへにおく、ばいせん又ひらで一まいを取てまゐらす、主上左の御手にてとらせたまひて、御はんをもらせたまひて返し給、はじめのごとし、

第二度のゝち、ばいせん右の手をもて主上にまゐらす、主上たまはる所のひらでを左の手にてこれをうく、かくのごとくのさはふ十度なり、

たびごとに三はし御はんをはさみて是をおく、二へにおく、くだんのひらでをおく次第、二行南のかたによりこれをはじむ、まづ東一行、西一行しだいにこれをおく、たゞし、南のはしらの所にのこしておく、よねあはのかゆをおくべきによりてなり、

次にばいせん又ひらでをまゐらす、主上左の御手にてとらせ給ひて、右の御手にて、なま物のは

この上にたつる所のはしにてもらせたまひて、四玄ゆおの〳〵もとのごとくはしをたてらる、ひらで御入口三はし左の御手にあり次又から物のうへのはしをとらせ給て、右の御手おの〳〵から物をおなじきひらでにもりくはへて四玄ゆ毎〆物三はしはじめのごとしばいせんに返し給ふ、陪膳左の手にてこれをとりて、右の手にて三度めの玄る物にたつる所のはしを取てもりくはふ、次又あはびの玄る物をもりくはへて、三ど神のすごものうへにかさねおく、御はんひらで如此十度二重、次陪膳又ひらでをまゐらす、主上これをとらせたまひて、くわしばこのうへにたつる所のはしをとらせたまひて、くわしをもらせたまひて毎〆物三はしな□□四しゆ返したまふ、ばいせん是をとりて、神のすごものうへにかさねておく、御菜のひらではじめのごとし、およそ十二のひらでなり、三重、たゞし第六度のひらで、第十二度のひらで、みな中程にかさねておく、

おき様

まづ御はん十のひらでをおきをはりて、その上に御菜のひらで十まいをかさねおく、その上に又くわしのひらでをかさねおく、仍あはせて三かさねなり、御はん御菜くわしなり二行おの〳〵五のひらで、たゞしくわし十二のひらで、仍第六第十二の二行の中央にかさねおくなり、

次ばいせん玄んどりにきそくして後神酒を供す白黒玄んどり戸の外よりへいじをつたへとりてばいせんにさづく、陪膳これをとりて、いまかた手をもて本かしはを取て、みづから御酒をもりてまゐらす、主上右の御手にてとらせ給ひて、神のすごものうへにかさねおく、右のひらでにそゝがせ給ひて、本かしはを御すごもの左の方におかせ給、はん帖のうへかくのごとく四たびかめをかへてこれを供す、白黒二度、次玄んどりよねの御かゆ二はいをとりて参て、陪膳にさづく、ばいせんこれを取て、神のすごもの上、ひらでの南の方におく、東のほとり次あはの御かゆ二はいをとりてばいせんにさづくばいせん是をとりて、よねのかゆの西のほとりにならべおく、次ばいせんさ

きにたつる所の御はんのはこ以下の五のはしをとりて、みなことゞゝくもとの箱にをさめ、次又のこる所のはし一さうをとりて、小くぼての御はんのうへにたつ(命の折の御はんなり、水供する所の二のくぼてなり、)次主上御手を三度たゝきていせうして、くだんのはしを取て三はしなめさせたまひて(まづよれ三はさみ、次あはは三にさみ、よの物はなめさせ給はず、)もとのごとく御はしを返したつ、次ばいせんえんざりにきそくして御酒を供せしむ、えんざりのうねめ、戸の外にてさかづきをとりてばいせんにさづく、又御酒のかめをとりて參る、ばいせんさかづきをとりて酒を入て主上にまゐらす、あるひはえんざり戸の外にてかはらけ取て、酒を入て持參してばいせんにさづく、主上御手を三度たゝきて、兩の御手をもてこれをうけていせうして、御ぐしをすこし右の方にかたぶけてのませたまふ、かくのごとく入度、(白四はい、黑四はい、)まづ四たびのましめ給、次黑がめをかへて又四たびなり、次ばいせんさきにひらきおく所のふうしをとりて、おのゝゝもとのごとくおはひむすびておく、はじめのごとし、次宮主中戸の外にてのとを申す、これにさきだちて、ばいせんえばらくえりぞきて、戸をとぢて、戸の外にて御せんをはるよしを宮主に告る由、伏見院の次第にみゆ、ひらでのはこよりはじめて御かゆにいたるまで、一々にとりてえんざりにさづく、えんざり次第にまかりいだす、次ばいせん御すごもを取てえんざりにさづく、次ばいせんの釆女いのり申事あり、其詞云、

まづはさみ給ふべき物を後にはさみたまひ、およびもろゝゝのとがありとも、神なほび大直日にうけ給へ、

次御手水をまゐらす、さきのごとし、次主上御座をたゝせ給ひて、(御口ゆふ、はじめのごさし、)右にめぐりてもとのごとく神座の北面をへて戸の外に出させ給ふ、次くわいらうでんに還御、とらのこくに主基の神せんを供す、その儀悠紀におなじ、

御故實の條々

神殿の御床のしきやうあやまりある時は、ばいせんのうねめをもてひきなはさせらるべし、
此事延喜の御記以下に見ゆ、しからば中戸をいらせ給時、まづ御座のしきやうをうかゞひ御覽せられて、若相違あらば被仰べし、
神殿の燈くらきときは、女は是をかゝぐべし、
此事天暦の御記に見ゆ、但女は當時神殿にまゐらざるか、しからばいづれの物所やくすべきことやらん、宮主などぞ口らすべきか、
神殿の南北をとはらせ給ふとき、御裾のつくゑなどにかゝらぬやうにて御しんたいあるべし、御座据のゝち御裾を引よせらるゝ儀あるべからず、これ神前におそれましますゆゑ也、およそ神殿の事は、まさしく神ますがごとくの禮嚴重なるべき事なり、いかにも御心を正しくせらるべし、くわしのたぐひをはさみ給とき、もし御はしよりおち、またひらでより落ることあらば、さらにもりくはへ給べきなり、毎物ひらでのうへにひらくもらるべき也、これおとさゞるがためなり、
此次第、後福光園攝政〔○藤原良基〕おく書の本をもて、これを假名にうつす、但進退以下巨細の書、伏見院御作の次第をもて、かく是をかきのする所なり、又御故實の條々は所見の分これをしるしつく、神膳の次第に於ては尤肝心といふべき歟、能々秘藏あるべき者也、
文正元年十二月十三日記之
〔富家語談〕仰云、〔○藤原忠實〕主上大嘗會、神御陪膳令勤仕給事、神今食中院行幸之時同事也、イカノ甲ヲ用、御手洗御手水ハアル也、令用行著給也、近來案內知タル釆女誰人哉、安藝ト云釆女コソ重代者ニ天相知タリシガ、作者死去歟、
〔玉海〕仁安三年十一月十四日辛未、早旦參院奏條々雜事、〔○中略〕

供神膳間事

治暦四年十一月廿二日（〇辛卯）右大臣（〇藤原師實）下官欲起之處、有勅近召令同、書殿神座御座供饌□□□、書殿神座御座等事、依長元撿按大略所申也、彼時指圖先日所進也、神饌等事都不知給事也、然而依先日仰大略書右、内裏式、新儀式、延喜、天暦舊記又御覽了、以其旨奏聞、但右府有供饌子細文、以人書送、□□□□□許所奏也、猶有不審御氣色、卽退出送書右府云、前日供神次第、頗天氣所令不審也、然而不審其書、依難知貴殿御心也、如此書此時隱覆有何益哉、若有許容者、今度經奏聞如何、令具其書給、今隨形勢□□□□請之由、秉燭之後返書、戌一點也、參御前申供神之間事、又以神崎采女所□□□文下給也、開見大略不違新儀式、只有一兩相違歟、采女申云、不傳文書、只以彼先祖口傳年來所奉仕也、下官申云、口傳令文書、甚有感事也、但一兩所相違者、猶可令改新儀式及二代御記也、

〔伏見院御記〕正應元年十一月五日丙戌、遣手狀於關白許、仰大嘗會供神膳次第早可進之由、返事云、以所勞無染筆之間遲々、今兩三日之間、早可持參云々、　十日辛卯、入夜左大臣（〇藤原師忠）參、大嘗會神膳間事、相令問答、　十四日乙未、夜陰右大臣（〇藤原忠教）參、召前問大嘗會神供間事、卽秘書等隨身也、於常盤井殿備叡覽云々、仍召覽之、法性寺入道自筆也、誠殊勝也、又保安度切紙次第同自筆也、兩卷取出之、暫見返給、進置書寫本一号也、凡今度大祀神膳間事、關白不存知、難奉行之由、傍家一同所言也、仍不審之間、面々存知之分、大概尋問之也、凡一蹤皆以存知事也、

〔永和大嘗會記〕同（〇永和元年十一月）廿三日、卯の日なり、（〇中略）神膳の次第は、人のしらず見ぬ事なれば、しるし申におよばず、天神地祇を天子のてづからまつらせ給て、神供をそなへ給ふとぞうけ給はる、執柄の家などの外はしる人もなきにや、（〇中略）抑天子の代の始に、大神宮以下にたてまつらせ給ふ神膳なれば、いかほども結構せられて、金銀の器などにてこそまゐるべけれども、たゞ器かしはの葉ばかりをあみつらねて、御膳の器にそなへたり、神代の風俗、儉約をさきとせられけるこ

とのいみじさ、

〔友俊記〕寛延もとの年十一月中の七日卯の日、大嘗會おこなはる、○中略膳屋稲舂の事、今度御再興にて、御次にはじまらざる以前午の半刻ばかり、まづ稲實公（內藏寮史生少膳源唯親（親恐誤字、下同、）之女、萌黄の長絹の上さきわらは、）御酒兒（唯親由緒の童子、藤原親重內官人の千代童形、長絹の上のごさきを着してかへる、是前日俄にもよほされ、內藏寮大江盛林これをいだす、膳屋に入、臼の傍にたち、杵をもつさなり、）次に八乙女伊豫、伯耆、阿茶、阿かゝ、たき、むめ、いそ、岩崎、赤ばかま、ひとへばかま、波のゑのきぬをつけて、清涼殿南階より降りて、內膳造酒の膳家に入歌をとなふ、膳屋の外にては、その尋常の言語のごとし、

〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年十一月廿一日、大嘗會御當日也、○中略申刻前稲舂被始、八乙女膳屋エ可引率旨申來、則南殿西階ヨリ八人下リ、（是者采女也、）極﨟附副案內、南殿西階ヨリ柴垣ノ北ヲ通リ、悠紀膳屋エ引率、行事官戸外ニ立、八乙女內ニ入テ舂歌發、相濟出膳屋、南柴垣ノ外ヨリ西エ通テ、主基ノ膳屋ニ引率、同相濟上吉田エ屆申也、但今度傳奏ヨリ被申間、不及其儀旨以六位被示了、○中略

稲舂事

未刻頃、（此以前以六位被仰下）於悠紀膳屋發稲舂歌、其儀造酒兒（童女、白褂、紅袴、）稲實公代（私小忌）入悠紀膳屋列立南方、（北上西面、北ノ方造酒兒也、）酒部四人居膳屋外南邊、米納器（有覆布、白木筥也、入米一升、從內膳司渡之、筥造酒司調進之、）令酒部一人持之在同戸外、須臾八乙女八人（采女御末刀自等也）降南殿西階、（極﨟附案內也）神祇大祐尹昌率之、經柴垣北入悠紀膳屋、（西方北上東面列立、三人目程ヨリ北面ニ成リ、臼ヲ卷體也、）次造酒兒自東方進持杵立臼北、（南面）次稲實公代出膳屋口、自酒部執米納器、（但撤覆布、）自東方進臼（造酒司調進）之本入米、（造酒兒東方）經本路空筥返授酒部、如元復立、次造酒兒舂之、八乙女唱歌、（微音不聞）廻臼（一度右廻）復立、次造酒兒復立、次八乙女造酒兒、自上首出膳屋、經柴垣南外渡西、到主基膳屋、其儀專如悠紀、訖各本路退入、（但主基方八乙女北上東面、稲實公造酒兒北上東面、）

此儀貞享以來、寄々以前被行之也、於天明度者、子刻過於主基膳屋有此事、文政度晝間相續被

備之爲便宜也、

〔輔世卿記〕嘉永元年大嘗會傳奏奉行備忘

稻舂之事(以六位備之、但依時刻雖供神座中行此儀、)相濟之後六位屆來、

稻舂之事、內膳司事具由以六位告傳奏、時刻入乙女可廻命六位(神饌之采女也)六人、一人令引導、其路經壽常御膳宿之中、降西階、經南殿階前東行、向悠紀膳屋、(膳屋中央行北、設置臼添杵、)入乙女經臼西廻南、東上北面ニ漸圓ク立並、造酒兒參進、立向臼北方、稻實公以米納升、自升移入臼中、造酒兒取杵舂之、唱稻舂歌、(唱口中云々、)了經南門前渡西、到主基膳屋、(初進)了昇西階歸入御內儀、〇中略

稻舂畢、神饌料理命內膳司、了有屆、(告吉田、點撿屆有之、次伯點撿同上、)

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十一月上旬、〇中略二所供御雜器、送內膳等諸司、(所記物數只擧一所料、)

內膳司

御机六前、(御前机一前、副御机二前、菓子御机一前、副御机二前、)銀鐃御飯筥一合、(徑七寸、深七寸、)盤一枚、(徑八寸、深二寸、)御飯白筥一合、銀筋壺二口、鈍金壺瓶二口、(各受二合、)江沼貝花五十八口、(造洲濱居盤、樹雜美草木、)夜久貝壺坏八口、朱漆筥手代二口、(通用二箇日、)褥六枚、覆紗六條、帶十二條、(已上褥、帶、心葉等、紗纈羅染摺雜用之、長廣隨宜制之、)

右初日料

御机六前、銀鐃御飯筥一合、(徑深同初日、)盤一枚、(徑同上、)御飯白筥一合、銀筋壺二口、鈍金壺瓶二口、(各受同上、)銀壺坏八口、盤卅枚、褥六枚、覆紗六條、帶十二條、盤褥卅枚、(已上飾同初日、)

右次日料

造酒司

御机三前、御酒壺一口、御盞四合、(徑三寸、)御酒臺四枚、(各居小盞、)杓二柄、銀鍩子一合、(徑七寸、通用二箇日、)褥三枚、覆紗三

條、帶六條、(御裝束同御膳机)

右初日料

御机三前、御酒壺一口、(居盤)御盞四合、(副盞井小盤)杓一柄、篩三枚、覆三條、帶六條、(御裝束同御膳机)

右次日料

主水司

御机一前、銀御水鋺一合、(徑六寸、深一寸五分、通用二箇日、)冷鋺二口、盤三枚、(敷褥)

右初日料

御机一前、冷鋺二口、(居敷褥盤)

右次日料

御膳下机六前、(日別三前)御飯櫃十二合、(日別六合)御膳机袋六口、

右送內膳司

御飯櫃四合、(日別二合)御膳机覆三枚、

右送造酒司

御飯櫃二合、(日別一合)御膳机袋一枚、

右送主水司

下机十八前、(送內膳司、通用二箇日、檢度記文、上件御器等雖此不同、隨時增減、)次獻春宮坊雜物送主膳監、(物數半減供御)

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

先祭七日、(○中略)料理所須刀子百七十枚、(長八十八枚、中二枚、小八十枚、)壺實宮三合、木綿十八斤、巾料布三段二丈四尺、並以官物分付兩國、(先是神祇官修解申官、官下府所司令充、神祇官受之頒兩國、)

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

須下諸司諸國官符宣旨例

下大藏、絁二丈二尺、絲四兩、調布三端一丈、紵一丈二尺、細布一丈六尺、縣布一丈二尺、

下民部、日蔭二荷、

下宮內、油三升、

右其月其日大嘗會神態料、依例神祇官所請如件、

年月日　　辨姓名奉

大臣宣旨允之

太政官符宮內省

應充行雜器事

缶廿七口、足著坏廿口、小坏八口、山瓶都婆巴大小各四口、波佐布八口、筥坏卅口、多志良加陶碓各四口、酒垂八口、坏、比岐女坏、高坏各卅口、足舉取次廿具、壺卅口、土師韓竈二口、瓮八口、鹽坏廿口、陶坏十六口、御水戸十口、土師御手洗四口、洗盤八口、叩戸八口、盤卅口、片埦六十口、比良加廿口、片盤廿七口、莞筥四合、御食筥廿八口、御筒水埦各四口、

右得某國解偁、供奉大嘗會神態料、依例所請如件者、省宜承知、依件充之、

太政官符

調布壹端　絲捌兩

右得神祇官解偁、供奉大嘗會御鎭魂鵄尾琴二面袋并緒料、所請如件者、宜承知、依件充之、

太政官符中務大藏兩省（每會有符）

中務省

應造御琴二面

右得神祇官解偁、供奉大嘗會御鎭魂料、依例所請如件者、省宜承知、依件令造充、

大藏省

調布一端、御琴二面袋料、

右得神祇官解偁、供奉大嘗會御鎭魂鵄尾琴二面調度、所請如件者、省宜承知、依件充之、

下大藏、調韓櫃廿合

右大嘗會其所所請如件、但事畢返上、

年月日　　　　辨姓名奉

大臣宜充收

左辨官下木工(依承前例、改仰下寮構、)

足別机拾壹前(可加各足料、)縮服案壹前(長四尺二寸、廣三尺、高三尺八寸、)御膳机四前(長各四尺二寸、廣二尺、高二尺五寸、)御酒机壹前(長三尺八寸、廣三尺、高三尺、)多米御酒机壹前(長廣同上、)大机貳拾漆前(可加各足料、)由加物八前(長各九尺、廣各二尺二寸、高二尺、)置切板二前(長廣同上、)置韓竈一前、(同上、)置火爐二前、(同上、)置火臺一前、(長廣同上、)置多米物十前、置御酒机一前、打机肆前、

右大嘗會悠紀所所請如件、宜早造充之、

下治部、金作釼廿口、

右久米儛料、悠紀所所請如件、

〔延喜式(七踐祚大嘗祭)〕凡供神御雜物者、大膳職所備多加須伎八十枚(高五寸五分、口徑七寸、無蓋、折足四所、別盛隱岐鰒、烏賊各十四兩、熬海鼠十五兩、魚腊一升、海藻十兩、鹽五勺、)並居葉椀(久菩氏)覆以笠形葉盤(比良氏、似笠形、)以木綿結垂裝飾、比良須伎八十枚(高及口徑裝飾與多加須伎同、但足不折、別盛具物種々別五合、)山坏卅口(別盛鮨貝鮓、鮑鮓各一升、裝飾與比良須伎同、)龜盛白筥三百合(長一尺五寸、廣一尺二寸、深三寸、)一盛、東鰒筥五合、(別納十斤、)隱岐鰒筥十六合、(別納二十斤、)熬海鼠筥十六合、(別納二十斤、)烏賊筥十二合、(別納六斤、)佐渡鰒筥四合、

(別納十斤)煑堅魚筥十五合、(別一籠不納)堅魚筥廿四合、(別納十二斤)腊筥五十五合、(別一籠不納)與理刀魚筥十一合、(別納一斗五升)鮭筥二合、(別納十隻)昆布筥四合、(別納十五斤)海松筥六合、(別納六斤)紫菜筥四合、(別一籠不納)海藻筥六合、(別納六斤)橘子筥十合、(別納十蔭)搗栗子筥五合、(別納一升)扁栗子筥五合、(別廿籠不納)干柿筥二合、(別納五十連)菓子筥五合、(別納一斗)燥栗子筥六合、(別納一斗)削栗子筥二合、(別納二斗)熟柿筥三合、(別納一斗)柚筥二合、(別納三籠)勾餅筥五合、末豆子筥五合、大豆餅筥十合、小豆餅筥十合、捻頭筥五合、粰梳筥五合、(已上六種、別納六枚、)祭畢山坏已上皆置山野淨處、餘皆須給諸司、

造酒司所備等呂須伎十六口、(口別酒五升、)都婆波卅二口、(十六口別酒一斗、十六口別五升、各以八口置一案、)缻八口、(口別酒一斛五斗、各置一案、)匜六十口、小盞六十口、(已上各盛、皆置案、)長女柏一筥、(置案、)祭畢都婆波已上亦置山野淨地、餘皆准上須給、

〔延喜式 七 践祚大嘗祭〕凡料理所須刀子一百七十枚、(長八十八、中二、小八十、並盛筥二合、)預令所司造備、及木綿十八斤、手巾料調布三端二丈四尺、並以官物分付兩國、

〔延喜式 二十八 隼人〕凡應供大嘗會竹器熬笥七十二口、煤籠七十二口、(料竹口別六株、)乾棗餅籠廿四口、(口別三株、)籠六口、(口別十五株、)預前造備送宮內省、

〔延喜式 四十 造酒〕践祚大嘗祭供神料

等呂須伎十六口、(口別酒五升、)都婆波卅二口、(十六口別酒一斗、十六口五升、各以八口置於一案、)瓱絁卌八條、(十六條別二尺、十六條一尺八寸、十六條一尺四寸、)陶鉢十六口、絁篩十條、(別一尺、)縫篩絲二分、木綿二斤八兩、(結篩供神物料、)麻六斤十兩三分、(結周中取案高闌料、)播磨樹廿俵、韓櫃二合、中取案六脚、小楉十二擔、(中取案高闌料、)檜葉眞木葉各五擔、弓弦葉寄生各十擔、眞前葛日蔭山孫組各三擔、山橘子袁等貫草各二擔、(已上九種、畿內所進、)簀五枚、(中取案下敷料、)折薦五枚、(料理供神物人等座料、)

右九月中旬、木工寮於司家內、構造黑木舍一宇、(長四丈八尺、廣二丈、)十月上旬、掃部寮以苫八枚葺蓋其上、以薦八枚藉作其下、十一月中戌日、始料理供神物、丑日畢、卯日申時、執供神物、入自朝堂院東中門、陳於昌福堂內以南、(掃部寮設簀、)辰日平旦、撤棄北野淸地、先是卯日平明、小齋官人一人、史生一人、酒部二人、交名進省、即令卜食、酉刻入悠紀神殿之盛所、受取干柏十把、刀子二枚、小坏四口、匜四口、竹二株、

白筥二合、白木別脚案二脚、木綿一兩、手巾料調布一丈二尺、（人別二尺）食薦一枚、長疊一枚、各依職掌儲備、以亥一刻、隨神祇官宮主、與諸司共引入神殿供奉、訖退出、卽雜物返送神祇官、又丑刻入主基神殿之盛所、行事並如悠紀、畢各退本司、

供奉料

酒一石二斗、（日別四斗）三津野柏廿四把、（日別八把）長女柏卅八把、（日別十六把）瓶四口、坩二口、酒盞八口、高盤八口、匜八口、小坏八口、片坏八口、乳盆二口、擇盤一口、麻笥盤一口、陶臼一口、陶鉢一口、水瓶一口、明櫃二合、柳筥一合、（長二尺、廣一尺、深四寸五分、）別脚案六脚、（各長三尺一寸、廣一尺七寸五分、厚一寸二分、高一尺八寸五分、）三種糟料、白米一石、糯米一石、粱米一石、小麥六斗、殿釀酒二石一斗、甅三口、韓櫃二合、食薦四枚、明櫃三合、韓竈二具、絁平篩一條、（長五尺）小坂平絁篩一條、（長五尺）甅帊調布單三條、（別二尺）調布襷十三條、（別八尺）青摺調布衫卅領、（四領著赤紐小齋人四人料、廿六領大忌人廿六人料、）

右依例設備、卽悠紀主基二國御酒、各日二缶、（盛國進壺）二種酒各日二缶、（盛本司器）前二日酒案雜器等受收、

内膳盛所、與司供物共奉、其小齋大齋人充青摺調布衫、（人數見宮内式）

東宮料

酒六斗、（日別二斗）三津野柏廿四把、（日別八把）長女柏卅八把、（日別十六把）

雜給料

缶卅口、都婆波廿五口、瓶廿五口、置盞五口、短女坏十口、土盞二百口、坏三百口、乳盆五口、坩九口、別脚案四脚、炭三石、（已上親王已下料）缶六十口、酒盞六百口、匏百柄、輿籠十口、（已上六位已下雜色人雜給料）中取案四脚、宇岐筥二合、（納匜坏料）小筥一合、（納三津野柏料）陶匜六十口、小坏六十口、調布二丈、（覆宇岐筥料、別一丈）篦竹卅株、（作匜口及杓柄料）殿釀酒十缶、白黑酒各十缶、（二國所進）調布襷十條、（各長八尺）縣釀酒卅八石、（畿内所進）

右豐樂日料、其給酒者、三位已上日二升、五位已上一升、（並殿釀酒）六位已下幷歌儛人等六合、（並縣釀酒）

〔宮主秘事口傳〕大嘗會者、神膳之供進第一之大事也、〇中略延慶度、先考調進御持參之式目、〇中略

神食薦

御食薦

　薦ニ切ヲ入畢

御箸六前五前者神料、一前者主上御料、居二折敷一也、折敷者筥之儀也、大嘗會ノ日ハウルハシキ筥也、

八足案四脚竹ヲ折カヾメテ作レ之也、長二尺五寸、高一尺八寸、弘六寸也、

海老鰭槽御手水料

御手巾

　已上兩種、依二卒爾一不二用意一之間、采女等頻精二好之一、於二向後一者、尤可二用意一也、

柏二三十束窪手料也、采女取レ之、窪手ヲ指也、

此外大小赤土器用意之、宮ノ料ニ、大小折敷三十枚許用二意之一、

又黑白酒研子土瓶也二、盃二、用二意之一、

　已上入二長櫃一、采女ニ度レ之、後晉於二柏殿一宮主相共沙二汰之一也、

見色調進隨身如レ此、於二宮乇一調進者、向後不レ可レ然事也、〇中略

文和三年於二殿下一〇藤原良基御習禮條々、〇中略　兼豐切紙書付式目、〇中略

次御飯ノ筥書付

次以二相原一枚一神食薦ト書レ之

次以二一枚一書二御食薦之由一

次以二紙四切一書二八足案四脚之由一

次以二一切一書二海老鰭槽之由一

次以一切書御手巾之由、
次以二切奄手料本柏二三十束之由書付之、〇中略
仰云、神膳之儀、本柏秘事也、重事也、能々可存知云々、〇中略

一寸尺等事

神食薦

延慶二年記云、神食薦、攝政殿仰云、何寸哉云々、兼夏宿禰申云、長五尺、弘三尺候、
又仰云、短帖長四尺五寸或四尺也、其上ニ敷ハ以外廣也云々、申云、舊記所見如此也、後日兼彦宿禰云、正安之度、五尺ハ長之間切縮云々、
又仰云、蝦鰭槽寸法如何、申云、長一尺二寸五分、廣四寸餘云々、或說長二尺餘云々、
又仰云、本柏何枚哉云々、申云、本柏者稱安藝說、(稱安藝者、根本采女名也、)以柏本葉一枚結其本候、
又仰云、本柏者十枚也、仍後日引勘之處十枚也、重柏十枚ニ、以藁穗令結合其本方云々、
已上延慶兼日問答記也、〇中略
文保二年記云、神膳、〇中略次神食薦二枚、御食薦二枚、今度寸法依勅定、長二尺五寸、弘一尺三寸、御箸六前入葛籠、次御手巾布二切、長六尺餘、但今度三尺許也、入葛籠、次御楊枝筥ニ入、加藁穗十筋許、小刀一也、已上是者悠紀方分也、次主基方分同之、葛籠十六合也、廣八寸、深一寸許也、次陶器四、(悠紀二、主基二、)次八足机八、(悠紀四、主基四、)長二尺五寸、高一尺八寸、廣六寸也、次土瓶廿四、(悠紀十二、主基十二、)次空盞廿四、(悠紀十二、主基十二、)次土高坏十六前、是ハ御箸筥、御楊枝筥、御手巾筥、以下居之料也、次黑酒(澄酒也、)白酒(濁酒也、)入分竹筒二、(若者小橘、)次多志良加二、入御手水料也、〇中略
已上是等宮主自兼日書遣目錄、召仰內膳可用意也、文保度、宮主用意、太以不可然之間、正慶、曆應、文和度、內膳司令用意訖、兼日宮主可申行事辨也、又可問答內膳司也、又當日ニハ、行幸以前先於柏殿

悉可₂撿知₁也、萬一有₂懈怠者₁可₂訴₁申辨₁也、宮主者以₂次第幷竹杖₁令₂差₁敎采女等₁、又主上神膳御供進之後、未₂撤之以前申₂詔戸₁許也、有₂限諸司役事可₂調進₁哉、

〔壬生家記〕貞享四年大嘗會御道具 中略○

一蝦鰭槽 悠紀主基 二ツ 木地、御手水道具、
一瓫 右同斷 二ツ
一御食薦 右同斷 二枚
一御手巾 布六尺宛、右同斷、 二ツ
一葛筥 コモリ也、悠紀主基、 十六
一土瓶 二十四
一空盃 ヤキ物也 二十四
一柏葉 窪手本柏用也 五十枚
一小土器 百 中略○
一案 右同斷 二脚
一八足机 右同斷 一脚
一桙 小キホコ也、柄黒、身鐵薄也、 二本
一菅蓋 菅笠五尺四方柄アリ
一長唐櫃 四荷
一籠 四荷
一舂 二ツ
一鎌 二

一多志良加 右同斷 三ツ 土ニテ作リ、ハンザフノ代也、此外一ツ用意也、
一神食薦 右同斷 二枚
一御箸 右同斷 十二前
一御楊枝 右同斷 四ツ
一藁穗 二十計
一陶器 ヤキ物也 四ツ
一土高坏 十六
一竹杖 二本
一案 檜木地 二脚
一八足机 右同斷 八ツ 長サ二尺五寸、高サ一尺八寸、弘六寸、
一小案 右同斷 一脚
一板 二枚
一削木 木ヲケヅリタル杖也、
一荷唐櫃 四角ノ匱也、檜木地、 四荷
一引臼 二ツ
一杵 六本
一鋤 二

一薬刀二　　一土ナベ二

一疊面畳也二枚　　一薦二枚

一桶二ッ　　一韓紙二枚

〔大嘗會神饌調度之圖〕大嘗會神饌之具寸法

葉椀窪手

四寸五分四方也、米御飯粟御飯此窪手にもる也、青竹の皮目を細くわりて、針にして、此形に作るなり、口傳云、青柏は葉やはらかにして作りよき也、十一月頃枯葉は葉强くして作りがたき也、枯葉のときは、湯をぬるくして、しばらく漬おきて作べし、葉やはらかになりてしよき也、平手もかくの如くすべし、

葉椀窪手

三寸五分四方也、干物、生物、御菓子等此くぼてにもる也、

葉椀平手

大きさ窪手の口に准ずべし、葉椀の蓋なり、又平手の宮にいる丶、六十四悠紀主基の料の平手の作りやうは、蓋の平手とおなじ、貞享八枚にて作るべきよし、兼連朝臣宗恒朝臣へ仰出さる丶、

土瓶

悠紀主基入料に二十四、造酒司調進、高九寸壹分、白黒の御酒をいる丶也、少き土器を口におはふ也、貞享元文の大嘗會、おとはにてやきたり、

土高坏

はたえだ村にて作る、高九寸壹分四本、造酒司上る、高五寸十六本、大膳職上ぞ、

陶器

口徑四寸、尻高三分、はたえだ村の細工也、米粟御粥此器に盛也、

窪土器

嵯枝村の細工也、大せんより內せんに渡す、御飯、生物、干物、菓子の窪手をこと〳〵くのせて、葛ばこに入る也、三度といふ常の土器也、

本柏料

悠紀四十枚、主基四枚、上かもの山よりとりよせて、造酒司より內せんしへ俵入て渡す、內せん屋にて一枚ヅヽとり重ねて黒葛筥に入る、臨期神殿の內にて本柏に作らるゝ事とぞ、此本柏を作らるゝ事は極秘なり、しかし貞享のたび、宗恒朝臣本柏の筆跡あり、又元文のたび、本柏之事、殿下兼香公宗直へひそかに被仰下たる事あり、故に別巻にして本柏の圖を作り、其事を悉くかきて秘書とす、みだりにみるべからず、

舊記を考に、かしは樣々の名目ありて、一種にあらず、(みつがしに、長がしは、三角柏、葉ひろがしは、)日本紀代々の集の歌にあり、貞享のたび、祭主景忠卿御吟味ありて此柏に定めらるゝ也、是延喜式にはりまがしはとある是なり、葉椀平手も此はりま柏にて作るなり、葉の形圖の如し、

葉穗

悠紀主基各一把、行事官より御卜田拔穗の稻のもみの附たるを內せんに渡す、內せん膳屋にてもみをとりて、末の節よりきりて、十筋ばかりを一把として、黒葛のはこにいるゝ也、此穗は本柏をつくらるゝとき被用物と云々、元文三のたびは、十二筋いるゝ也、

黒葛筥拾二合

御飯筥二合、長一尺一寸五分、弘八寸五分、高六寸五分、生物筥二合、干物筥二合、菓子筥二合、各長一尺一寸五分、弘八寸五分、高三寸、葉椀筥二合、長一尺一寸五分、弘八寸五分、高四寸、大膳調進內

せんにわたす、ゆふしでも相添わたす也、(白紙なきりたる物也)内せんにてゆふしでを附る、水口といふ所にて此黒葛はこは作る也、

貞享の度ふたなし、元文のたびふたあり、しかれども鳥居内案に設るときはふたなし、

竹御箸(拾二具、悠紀六、主基六、)

青竹を用ゆべし、ゆふは梶の木のかは也、六具之内強きを三具、少しよはきを三具づゝあるべし、秘説なり、長一尺七寸の竹節一つあるをおしまげてゆふにて本をゆふ、圖の如し、

御箸黒葛筥(二合、悠紀主基料也、)

長九寸横三寸、高二寸、貞享のたびふたはなし、元文のたびはふたあり、しかれども案に設る時はふたなし、是も大膳調進内せんにわたす、ゆふしでも相添わたすなり、内膳にてとゝのへ付る、

神食薦(悠紀一枚 主基一枚)

長四尺、付木綿、但切白紙而二所付貫之、あみゝ五所あり、掃部頭調進之、撤却之後は内せん給りて、清淨の山に埋む、

御食薦(悠紀一枚 主基一枚)

長四尺、不付木綿、あみめ五所あり、掃部頭調進之、是も撤却之後は、内せんに給りて山に埋む、

神饌案

以檜木作之、長貳尺、弘一尺六寸、高一尺八寸、悠紀は四脚、主基に四脚、木工寮まうく、足の體貞享のたびかくの如し、案の寸法、殿下(○一條兼香)の仰にて宗恒朝臣寸法を考定らるゝ、貞享のたび、跡にて大藏省弘之自筆に寸法をかきたる一紙、于今當家に傳へたり、

同案

長二尺五寸、弘一尺二寸二分、高一尺八寸、元文大嘗會のたび御さたありて、足のつきやう如此改めらるゝ也、

白黒御酒案

長三尺八寸、弘一尺八寸、高一尺八寸、貞享のたび、足のやうかくの如し、木工りやうまうく、悠紀に一脚主基に一脚なり、

同案

長三尺五寸、弘三尺、高一尺八寸、元文のたび、足の付やうかくの如く改めらる

和布羹鮑羹案

長二尺二寸、弘一尺、高一尺八寸、貞享のたびかくの如し、悠紀主基の料二脚木工寮儲之、

同案

長一尺五寸、弘一尺、高一尺四寸一分、元文のたび御沙汰ありて、寸法并足の附やう如此改らるる、

瓮盛筥（廿八合、悠紀主基の料也、）

大膳調進内膳司にわたす、寸法追可記之、貞享のたびも了簡して寸法を極たりと云々、鮮物干物筥十四、長一尺二寸、横八寸、深三寸、汁物筥四、長八寸、横五寸、深二寸五分、菓子筥八、長一尺、横七寸、深二寸、右以檜木作之、蓋あり、貞享度、大膳大進小野久勝へ此寸法宗恒朝臣より指圖す、是亦殿下之仰也、久勝が寸法を書たる一紙富家にあり、元文大嘗會のときも、瓮もりのはこの數并寸法貞享の如し、

土風爐（六具）

土釜（有二木蓋一）

土塌〈有二木蓋一〉六具

中取案

長三尺二寸、高八寸、幅一尺五寸、內膳二脚、大膳二脚、悠紀主基料調二進之一、膳屋にて水桶風爐の類雜具をのするため也、後聞大膳にはなしと云々、

かること

大膳薪以下雜具を是にのせてはこぶ也

水桶

檜葉　弓絃葉　日蔭　山橘　寄木　賢木

辛櫃

神饌悠紀主基別一合、長三尺五寸、廣一尺八寸、高一尺二寸、

同雜具韓櫃

長四尺五寸、橫二尺一寸、高二尺、〇上文插圖今略

此餘神饌調味之雜具、刀子六柄、魚箸四雙、切机四脚俎也、御飯櫃白四口、御飯匕四柄、御粥匕四柄、杓四口、水桶四口、桶二口、水振二張、籮二、杉箸三十雙、白布八尺手巾料、以上內膳司、火爐二具、薪火吹、已上大膳職、

右膳屋雜具也、其形俗通用皆通之具、故不レ圖レ之、又造酒司造二白黑酒一之雜具、是亦俗通用皆通之具、故雖レ爲二神饌之具一不レ圖レ之、

御厨子所預從五位上行釆女正紀朝臣宗直

〔盈春記〕元文四年十月廿八日、自二去年一被二仰付一、大嘗會御調度之圖、先頃畫所預土佐大藏少輔光芳より差二出于此宅一、〇中略

廿五枚、辰日悠紀主基節會、巳日悠紀主基節會、午日豐明節會御膳圖、年節同之、於白黒御酒者、辰日悠紀節會而已供之、他節不供之、

松子　干棗　椎子　干柿　搗栗　橘子　柑子　梨子

馬頭盤銀御箸二雙、銀御匙二支、木御箸二雙、

第一御四種酢、鹽、酒、醬、

第二唐御膳桂心、索餅、粉熟、之汁、餲餬、粉熟、

第三腹御膳鎚子、饆饠、黏臍、團喜、

廿六枚

第四鮑御羹

第五御飯

第六生鯛、海月、辛螺、生鮑、老海鼠、

第七石花、鮎鮨、冷汁鯛、烏賊、冷汁鱠、

第八堅魚、蒸鮑、干鯛、熬海鼠、鮭楚割、煮鹽鮎、鮭、鱒、

廿七枚

第九鯵汁鱠、零餘燒、鯵汁鳥、雉足、

第十白御酒四坏

第十黒御酒四坏

第十一御酒盞

第十二三獻同ク

第十三

右第一、第二、第四、第五、第六、第七、第十一、第十二、第十三、內膳司調進、
第三、第八、第九、御厨子所預調進、
第十、造酒司調進、○中略
三十一枚、辰巳日悠紀節會饗膳、豐明節會同之、

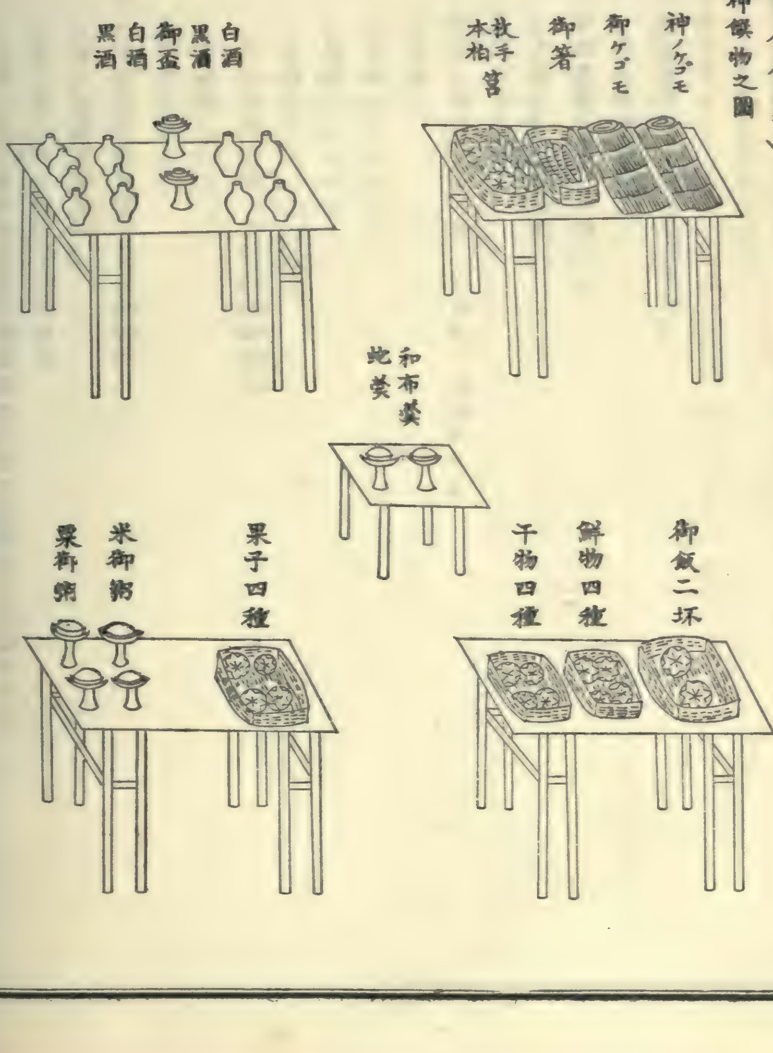
中墨物六坏
加久繩
餲餬、黏臍、合盛一坏、生物鯛、鯛醬、鱧、干物干鳥、[illegible]、
大柑子
搗栗
干柿
椿餅
粉熟　同汁小豆擣赤　飯　汁物鮑　進物熬海鼠

辰巳日主基節會
汁物和布　追物腊
自餘皆同于悠紀節會、
已上大膳職調進

〔壬生家記〕文政元年十一月十三日○中略
神供物之事
一削木　三尺ナリ
一竹杖　七節、檜木綿ヲ掛タリ、

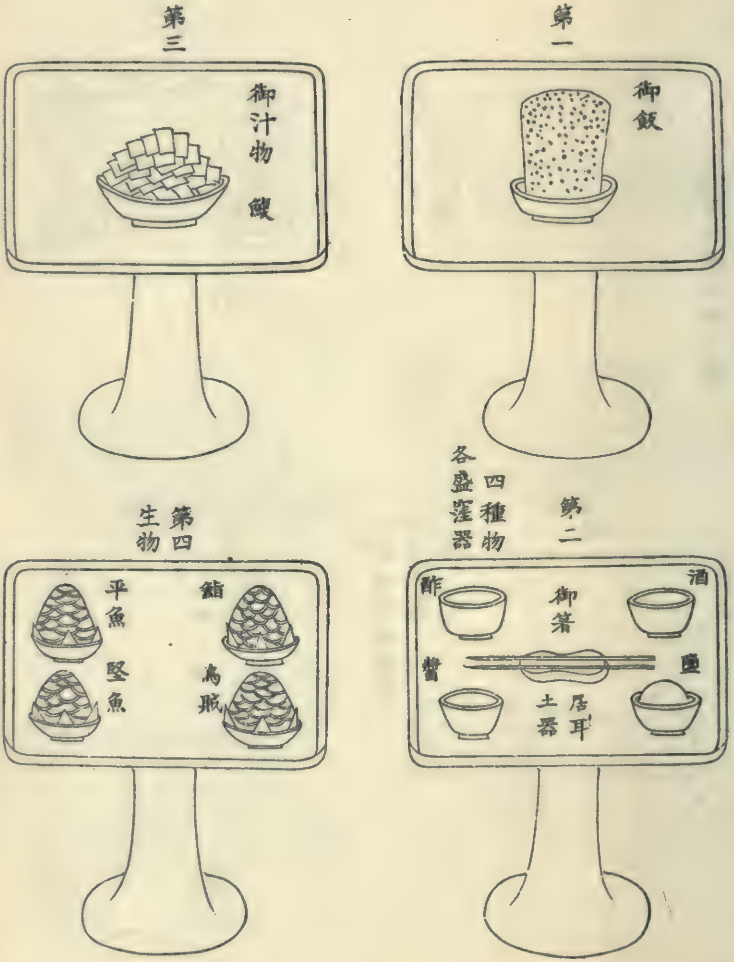
〔大嘗會便蒙　下〕

神饌物之圖

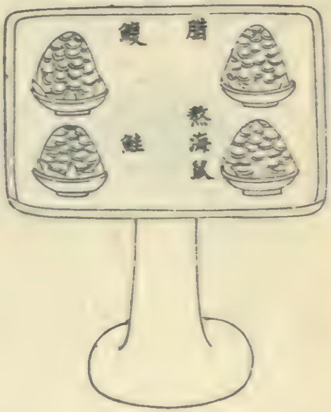


〔大嘗會供御圖〕

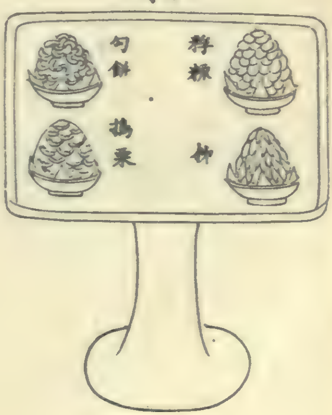
大膳職調進之



第五　干物



第六　菓子



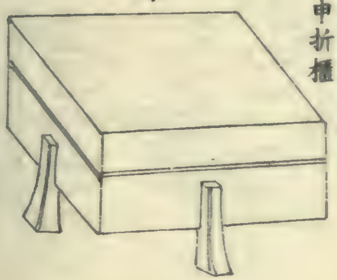
土高坏圖



大膳大進小野久勝

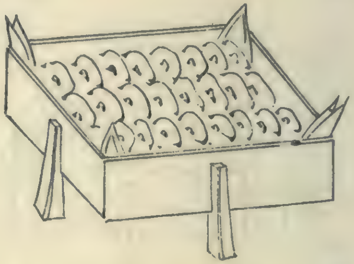
折櫃有蓋圖

内侍所御神樂神供申折櫃

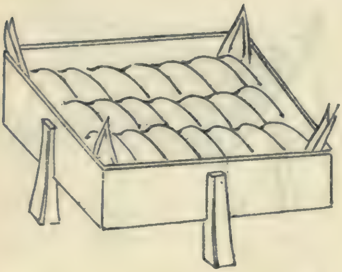


内藏寮調進之

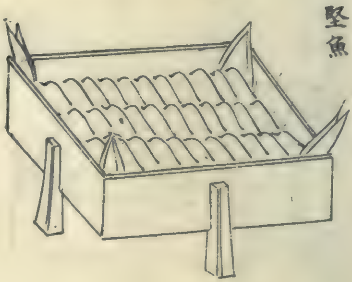
鰒



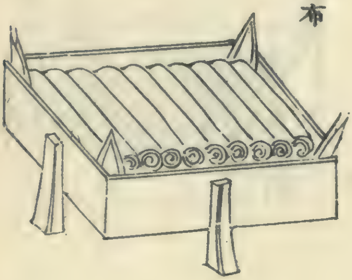
鮭



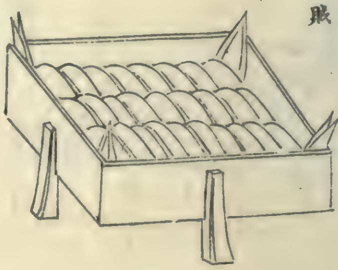
堅魚



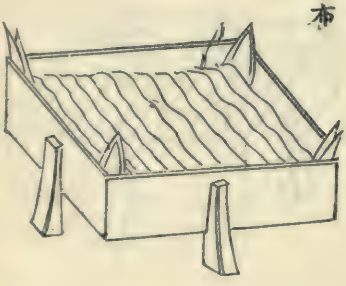
昆布



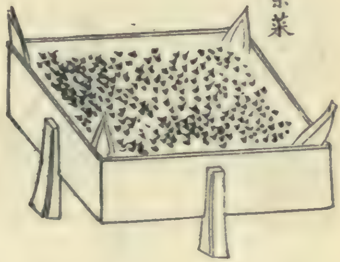
烏賊



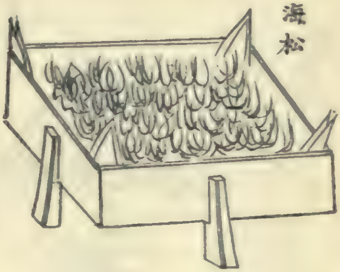
和布



紫菜



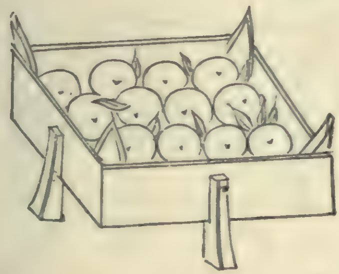
海松



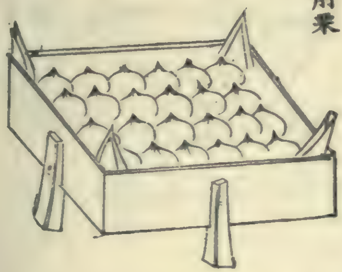
橘子



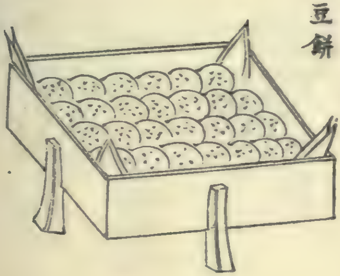
柚



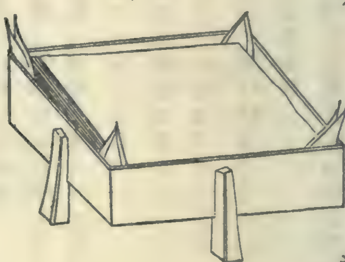
削栗



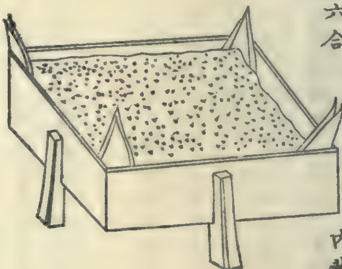
小豆餅



紙二合



米六合



内藏寮大江盛言

一蝦鰭槽（御手水具、盥ナリ、長一尺、幅一寸、中ブトナリ、）

一多志良加（土水瓶ナリ）

一御巾筥（俗ニ手ヌグヒナリ）

一御楊枝筥（中ニ御楊枝二、小刀ハフスベ十筋、筥ハ竹ヲマゲテ木トシ、黒木柱ニテクタルナリ、）

一御神食薦

一御食薦

一御箸筥（竹ノ箸六ツヲ入、五ハ神ノ料、一ツハ御直會料、竹一筋ヲヒキマゲテ、裏上ヲ糸ニテカケタリ、）

一平手筥（中ニ平手アリ、葉ヲカサネ、上下丸ク折、竹アシヲサシトメタリ、）

一御飯筥（窪手ニモル、粳米粟ナリ、）

一生魚筥（窪手ニ入、土器四枚アリ、甘干鯛、鮓、鮑、鯵、魚鮓、醤鮨、）

一干魚筥（窪手ニ入、蒸鯛、干鯛、干堅魚、鰹、）

一菓子筥（窪手ニ入、干棗、搗栗、生栗、干柿、）

一鮑汁漬（和布汁漬）

一空盞

一御羹（鮑和布ナリ）

一御酒（清酒黒白ナリ）

一御粥（稻米粟ナリ○中略）

大膳職勘物

一多賀須伎之事、寛延元年度御再興、其節延喜式、天仁匡房等記之外無所見由、仍右之兩說相考、又聊加今案調進仕、其以後度々幷今年迄、製作無相替事調進仕候、

酒醴

延喜式、大膳職所備多賀須岐八十枚（高五寸五分、口徑七寸、無蓋、折足四所、別盛隱岐鰒、烏賊各十四兩、熬海鼠十五兩、魚腊一升、海藻十兩、鹽五勺、）並居葉盤（久菩氏）覆以笠形葉盤（比良氏、似笠形、）以木綿結垂裝飾、

天仁江記、多賀須伎八十枚（窪手也、又稱葉椀、高五寸五分、口徑七寸、無蓋、折足四所、）別盛隱岐鰒十四兩、烏賊十四兩、海鼠十口十五兩、魚腊一升、海藻十兩、鹽五勺（以下文同延喜式）

右所盛六種、數八十枚ニ御座候、仍四種者各十三合宛、二種十四合ニ盛分ケ候由、延享度（寬延元）趣意ニ御座候、但多賀須伎ト窪手ト異ル物ニ御座候歟、多賀須岐製依不知、葉椀ニ足ヲ付盛候歟、流例右之通ニ御座候、

一今度盛納候者、烏賊代ニ御座候、魚腊、令義解、雜腊（謂全干物也）仍生干ノ魚ヲ盛候、

一多賀須伎、比良須伎、柏葉、朴葉、差別有無之事、全差別無御座候、柏葉本樣ニ御座候、朴葉其類之内ニ御座候間、葉大キク作ヨク御座候ニ付用之候、全無差別事ニ御座候、

一多賀須岐、比良須伎供ニ、大膳職所備勿論ニ御座候、寬延度等高須伎御再興依無之、比良須伎者造酒司江被仰付候歟、但寬延度委所見無御座候、

右之段、民部權少輔御直答可申上旨申聞候、仍言上仕候、以上、

十二月　　大膳職久明

比良須岐八十合（方五寸、深二寸許、無足、）熬海鼠十三合、鰺（腊也）十三合、蛸（代ツリ貝）十三合、海月（代烏賊歟）十三合、和布十四合、鹽十四合、右色目、式文并天仁江記等多賀須岐ニ同キ由所見御座候、尤色目其品々無之時、便宜之品替用候儀者、流例ニ御座候、

右舊年御大祀之砌一覽仕、尙造酒司盛敏江尋問之上、言上仕候、以上、

五月　　伊豆守久明

〔大嘗會儀式具釋　七〕抑大嘗新嘗等ニ白酒黑酒ヲ用ユル事ハ、至リテ古キ例ナルベシ、萬葉集天平

勝寳四年ノ新嘗ノ歌ニ出、其以前イツノ頃ヨリ用キタルヤ知ベカラズ、而シテ其黑酒ニ常山ノ灰ヲ入ルヽ事モ古キ事トミエテ、貞觀儀式ニモ大嘗ノ前ニ燒灰トテ、山ニ入テ灰ヲ燒者アリ、延喜式ニハ明ニ久佐木灰三升ヲ入ルヽト云文アリ、其常山ヲ用ユルハ蓋西土ノ鬱鬯ノ例ニテ、其香氣ヲ以神靈ニ通ゼシメントノ義ナルベシ、其故ニヤ卯日ニハ神食ノ上ニ注ギタマフ、是亦鬱鬯ニ類ス、但永享二年十一月ノ康富記ニ醴齊也、白者白其色也、黑者上聊振烏麻粉ト見エタリ、其白酒ハ本ヨリ醴酒ヲ用ユベキ事ナリ、永享ノ次ノ大嘗ハ貞享ナリ、貞享ヨリシテ常ノ清ル酒ヲ用キラルヽ事イマダ甘心セズ、又黑酒ニ烏麻粉ヲ振ハ右ニ云ルガ如ク上世ノ例ニハ非ザレドモ、蓋常山ノ味苦寒ニシテ毒アリ、且其氣惡ムベケレバ、酒ニ入テ供ズル事然ルベキニ非ズ、故ニ中世烏麻ニ替タルニヤ、サモアルベキコトナリ、貞享ヨリシテ又上世ノ如ク常山ヲ用キラルヽ、其時ニ議アリシヤ知ラズ、

〔儀式 三〕踐祚大嘗祭儀

十月上旬、〇中略鎮小齋麴室、其料木綿五枚、紙四枚、堅魚、薄鰒各一連、雜腊一升、酒五升、米二升、橘子廿顆、鑪竈一把、(並用國物)、鎮畢卽始各納麴料米、厭明各炊白黑幷大多米三酒麴料飯、次各堀居小齋御酒料甕四口(造酒司卜食甕)、瓼四口(所役)、次各稻實卜部禰宜卜部、率造酒童女幷物部人等、祭六神(竈、門、井、山、嶽、童加美、水神)、其料各五色薄絁各三尺、倭文一尺、木綿三斤、鰒、堅魚、海藻各三連、鹽二升、滑海藻二連、米酒各一斗二升、凡料絁二匹、絲二絇、布二段、庸布四段、(並用國物)、次各堀居齋院大多米酒料甕八口、瓼四口、次各賜物部人明衣料、稻實卜部二人料布一段一丈、(衣袴具料)一稻實公一人、酒部一人、燒灰一人、採薪四人、驅使丁四人、幷十一人料六段三丈四尺、(人別衣料三丈、袴料六尺、)童女一人、酒波二人、粉走二人、相作四人、幷九人料三端三丈四尺、(衣料別丈八尺)一又童女一人、物部女八人、酒部一人、燒灰一人、驅使丁四人、幷十五人冠料一段三尺、(人別三尺)又物部男六人、女九人、幷十五人襌料一段三丈三尺、(人別五尺、並用國物)、次各禰宜卜部郡司等、率造酒童女物

部人六人、工一人、夫十人、始堀齋場御井、童女井、于時童女先執齋鉏堀御井、次禰宜執鉏堀童女井、物部人工夫終之、次各拔穗御稻幷雜物遷納内院、次始各舂御稻造酒、童女先之、(大酒波仕女等終之)次始各釀小齋院御酒、次各受大膳職水戸五口、都婆波四口、酒缶二口、陶臼二口、匾二口、坏廿口、小坏二口、短女坏廿口、高坏廿口、筥坏廿口、足擧取次廿口、御取次廿口、多志良加二口、土師韓竈一口、瓫二口、堝二口、高盤廿脚、(已上依神祇官解所充)缶廿七口、著足坏廿口、山瓶四口、平瓶四口、匾八口、短女坏四十口、小坏八口、酒垂八口、坏四十口、都婆波十八口、陶臼四具、瓫八口、堝廿口、叩戸八口、盤卅枚、陶鉢十六口、土師缶四口、片垸六十口、比良可廿口、御筒四合、水垸四口、片盤廿七口、御筒筥廿八合、高坏四十口、足擧取次二十口、壺四十口、筥坏四十口、多志良可四口、土師韓竈二具、洗盤八口、荒筥四口、(已上依國解所充)中旬各祭大多米酒殿神、其料各五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、鰒堅魚海藻各一連、鹽二顆、酒一斗、米四升、鍬五口、布二端、商布四段、訖始各釀大多米酒、○中略 次各祭内院酒殿神、其料五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、鍬八口、鰒堅魚海藻各一連、雜菓子一斗、柏五把、米五斗、酒一缶、雜腊三籠、凡料絁二尺、布五段、綿二屯、(用國物)○中略 十一月上旬、始釀内院御酒、次進三國料御贄、(國幷物數見上)次各燒藥灰、使造酒司酒部一人率燒灰幷夫五人、向卜食山祭山神、其料五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、鍬一口、米酒各一斗、雜魚腊一籠、海藻一連、滑海藻一束、鰒堅魚各一連、鹽五升、凡料絹一尺、布一端、酒部明衣料布一端、燒灰料雜物斧一柄、鎒鎌各一柄、堝一口、水椀一口、苫二枚、明櫃二合、疊一枚、餚料絁七尺、其住山一宿、燒得藥灰一斛、訖以藥灰和御酒、(五斗和内院白黑二酒、五斗和大多米院白黑二酒、)

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡舂黑白酒料米者、造酒兒先下手、次諸女共舂、訖祭井神、次祭竈神、始釀酒日、亦祭酒神、國別所須甕四口、[illegible]四口、(各二口、黑酒料二口、白酒料二口、竝大膳職所充、)大麻筒四口、臼四腰、杵八枚、箕八枚、槽三口、籮八口、志多美八口、平筒八口、酒槽三隻、明櫃四合、折櫃廿二合、大案二脚、韓櫃二合、大明櫃一合、小麻筒六口、匏七柄、杓四柄、灰單二張、粉單二張、匙[illegible]口以曝布覆之、其釀多明酒者、用國備米卅斛、

凡造酒司酒部一人、率燒灰一人、驅使五人、入卜食山、先祭山神、燒得藥灰一斛、所資小斧釿鎌明櫃二合、苫二枚、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

左辨官下左右京

甕八十口（等、職瓶口）件直用會料內

右爲充大嘗會其所釀酒料所仰如件、而職承知、或借或買、須先定可買數受其直、早速辨進、不得遲廻、

年月日史姓名

〔兵範記〕仁安三年九月十三日辛未、右大史三善章貞、持來始悠紀所日時勘文、見了返下了、〇中略

陰陽寮

擇申可被卜定造白黑酒瓶日時、

十月十六日甲辰　時口二點　若申

〔宮主秘事口傳〕大嘗會年造酒司卜形事（宮主所役也）

文保二年十一月二日、今日造酒司卜串、公文史生宗兼送之、開合不令返遣之、書入神祇官位署、門生爲圖書入畢、

造酒司

注進　大嘗會主基白黑酒起事

合

二殿內三口

一口　五石納卜　卜丙合

一口　三石納ト　ト不合
一口　三石納　ト乙ト合
三殿內三口
一口　五石納ト　ト乙ト合
一口　三石納ト　ト丙合
一口　二石納ト　ト不合
右依例注進如件
文保二年十一月十一日
預官人代年預左衛門尉中原盛長
神祇官正六位上伊岐宿禰爲國
正四位上行權大副大中臣朝臣隆實

此卜串ニト乙ト合、ト丙合、ト不合許ヲ宮主書注也、又神祇官マデヲバ宗兼書送之、宮主代幷中臣官人官位實名ヲバ宮主書載返遣也、無大嘗會年者無此卜形也、假他筆令清書、兼豊在判

〔文政度大嘗會調進物記〕大嘗會造酒之場所

上加茂造酒之場所、天明度九月ニ內撿仕候、此度者未無其儀候間、明日明後日之內、內撿仕度旨、十月朔日、日野前大納言様江申上候卽刻加茂一社總代江被仰付、十月四日內撿仕候事、

右御場所內撿仕候日限刻限之儀者、一社總代より、以前當司江〇造酒司被相尋、日限取極メ候先例ニ而御座候、

從行事官悠紀主基米、當司江被送候事、

目錄

悠紀近江國滋賀郡之分
白米四斗八升　三杵米四斗八升
主基丹波國桑田郡之分
白米四斗八升　三杵米四斗八升
合白米九斗六升、三杵米九斗六升、
十月　行事官
右之通十月七日當司江請取申候

造酒之具
一糀室　一室
一井籠　一組
一半切桶　二ツ
一大桶　二ツ
一中桶各蓋有　四ツ
一小桶各蓋有　十七
一糀蓋
一筵、木綿袋、縄袋、敷布、上戸、炭ふるい、擂鉢、草ぼうき、大いかき、箕升、土鍋、かゐ杓、大杓子、折敷、
一薪
右加茂江運送之御道具、但シ新調之事、○中略
一十一月十三日、造酒出來ニ付、御神酒供奉歸京之事、
右供奉仕候ニ、私始メ寮史生下司等召連、辛櫃二合納、供奉仕候先例ニ御座候、其砌一社より

警固武人被付候事、

〔西宮記臨時四〕大嘗會卯日

天皇行幸之間帛衣齋服衣著幘、就大嘗宮之間御裝束也、

〔江家次第十五踐祚〕大嘗會

卯日、○中略御裝束、

近例脱帛御衣之袍下襲等、令著祭服給、至表袴以下者不改給、又御幘令廻御巾子給、不必曳廻御頬、童帝無供幘之儀、

〔大嘗會儀式具釋六〕大嘗會卯日次第

中臣忌部各一人、○中略率内藏官人、奉置御服二襲、絹御幞頭於廻立殿、○中略

御服ハ、白キ生ノ御祭服ト御下襲トヲ一襲トシテ、悠紀御殿ヘ御セラル丶時ノ料一襲、主基御殿ヘ御セラル丶時ノ料一襲、合セテ二襲ナリ、絹御幞頭トハ、幞頭ハカムリナリ、常ノ御冠ハ羅ニテ包ミ、菱形ヲ織付テ有文ノ分ナリ、絹御幞頭ハ絹ニテ包ミ、菱形ノ織付ナシ、神事ナルガ故ニ、無文ヲ用キタマフナリ、○中略

戌刻御廻立殿、○帛御衣中略

帛御衣ハ白練ノ御袍ニテ、天子御神事ニ著御ノ御衣ナリ、渡御以前本殿ニテ著御アリ、○中略

次著御祭服、

祭服ハスナハチ上ニ見エタル白生ノ御祭服ニテ、中臣忌部ノ内藏官人ヲ率キテ、廻立殿ニ置タル二襲ノ御服ノ内ナリ、御湯供ジ畢リテ、西間ノ中央ノ縹絹縁ノ厚帖ノ上ニテ著御アリ、是マデ著御セラレシ常ノ御冠、帛御衣、御下襲ヲバ著シタマハズシテ、御祭服一襲ト絹御幞頭ヲ著御シ、御幘ヲ御巾子ニ廻サシメタマフ、但御表袴以下ハ中古以來改メタマハズ、御湯以前ノ

ヲ元ノ如ク用キタマフ、

〔大嘗會儀式具釋七〕辰日悠紀節會次第

出御悠紀帳、

今日ノ御裝束ハ、黃櫨染御袍、小葵御下襲、繧繝緣ニテ包ミタル御插鞋ヲ著、

〔御所談二〕御祭服帛御裝束差別

仁安三年十一月廿二日人車記大祀條云、次著御祭服、闕腋御袍、半臂、下襲、以生絹調之、表御袴、相單大口等召、本御裝束、件祭服、曉夕料各一具也、縫殿寮調進之、中略卯刻改祭服著御帛御裝束、コレヲ以テ御祭服ハ生ナルコト明ナリ、又帛御裝束ハ練ナルコト、令義解ニ帛衣ハ白練衣也トアリテ知ベシ、按ズルニ、生絹ハ生糸ヲ以テ織タルマヽ、練絹ハ其生絹ヲ湯ニトホシテ用ルニヨリ、生絹ノ潔清ナルニ及バザル故ニ、最初廻立殿マデハ帛御裝束、又神饌御供進ノ時ハ、嚴重ニ御祭服ニ改ラレ、其儀訖テ廻立殿エ還御ノ後、又帛御裝束ヲ著御ナリ、

〔長和元年記〕十一月十一日甲辰、左中辨來仰、卯日主上於廻立殿令著給神服、□□大嘗會供祭間御服、□□□先著御服、或云、位御服、式帛御衣、此間人々疑慮、或無所見、去夕左相國道長〇藤原云、見□記者、今朝被送件記、丑三刻御主基殿、儀式同上、卯乙刻歸去廻立殿西御床、脫却祭神御服、雖更著御初白御服、次鸞駕出自西廊小門、到豐樂院北門、御清暑堂、今案、件記先著御帛御服、於廻立殿令脫却帛御服著神服歟、

〔古事談一王道后宮〕大嘗會之時、代々令著給玉冠ハ、應神天皇之御冠也、相具御禮服在內藏寮、後三條院御頭ニメデタクアハセ給タリケル、此事ヲツネニ御自讚云云、

〔兵範記〕仁安三年十一月廿二日己卯、天皇御浴如常、不召御川藥云々、次著御祭服、闕腋御袍、半臂、下襲、以生絹調之、表御袴、相單大口等召、本御裝束、件祭服、曉夕料各一具也、縫殿寮調進之、先例進夕料、

悠紀神事了還御御浴之時又獻曉料、今度一度獻二具、行事失也、　廿三日庚辰、戌刻主上召御裝束、黃櫨染闕腋御袍、他事如常、御總角頭中將實守朝臣奉仕之、召糸鞋、

〔吉記〕壽永元年九月廿五日癸巳、頭辨示送云、仁安三年大嘗會帛御裝束、御帶、自何所被獻哉、答云、自院被獻、自宮御方予爲御使持參內御方、無文玉御帶也、(還方)於返納子細者不知之、愚記之趣大概注進了、

〔萬一記〕正安三年十月十四日、爲御使向大炊御門大納言、(眞宗)示條々事、〇中略

御幘頭事

私相尋大納言云、相具帛御服、自廻立殿行幸神殿之時奉供之、絹切五六寸許也、御冠ノ巾子ノ根ヲウシロニヒトムスビニ結也、御纓上ニカタカギニ結之、或一說ニハ師カギニ結之、サガリタルヲバ垂也、此外無殊事、

〔經嗣公記〕廿一日、〇應永二十二年十一月けふは卯日にて大嘗會也、〇中略御湯のことはてゝ、大床子のひんがしのかたの御座にて御齋服をめさる、これは縫殿寮のたてまつるまろきすゞしの御服なり、御まやうぞくには、右兵衛督永藤朝臣まゐる、又內藏寮よりたてまつる御幘とて、まろきすゞしのきぬを御かぶりの巾子にひきまとはせ給ふ、これ皆大神事の御裝束也、

〔大嘗會家記〕文政元年十一月廿一日大嘗會、申刻頃六位侍中於南殿、御膳宿家尊江御面會、御幘御齋服、御明衣(納三辛櫃)等被渡之、同時ニ於同所、尾崎縫殿頭積興宿禰江、天羽衣二領等六位侍中被渡之、廻立殿江右御幘以下家尊、幷德岡內藏大允大江盛敏等(下部)被設之、

御幘家尊　御明衣盛敏　御齋服家尊

右南殿御膳宿內ニ而辛櫃ヨリ取出之、南殿西階ヲ下、橘木東ノ幔仕切ノ南ヨリ入幔內、亘南階前廻立殿東御間ノ南階ヲ昇、中臣(大宮司長祥朝臣)忌部代(行事官紀尹昌)等江被渡之、則中臣忌部代次第ニ設之也、

一子刻過廻立殿江還御、曉之具設替之儀沙汰有之、廻立殿江御齋服(家事)御明衣(大江盛數)等設有之、專宵之通也、但此時者御幘無之、

〔輔世卿記〕嘉永元年大嘗會傳奏奉行備忘

豫日內藏頭調進、引合目六之上附議奏、(遂日六不及封)當日申出撿知之上、乍櫃命六位令渡出納、(南殿御膳宿)

御齋服二組分(御下襲二領、御袴二腰、包平裹、居柳筥、置宵曉御料二組也、)

御幘一帖(入柳筥、居土高杯、)

御明衣四襟二組也(入柳筥、居土高杯、此柳筥、高杯、山料調進、二組用之、)

御插鞋一足(居柳筥蓋、)

右相渡分

天羽衣二領、納柳筥二合、(居土高杯、)出納調進、傳奏一覽之後、命六位令渡縫殿頭、(裁縫事、曉御料供進以前、家代遂面用意之、辛櫃二可納置事、)

〔言成卿記〕嘉永元年九月廿四日、當番參仕、謁于議奏當番飛鳥井中納言、昨日橋本大納言被示、大嘗會明衣御寸法之事、一紙指出了、(昨日女房奉、直ニ相尋御平常御浴帷御寸法也、以件御寸法、明衣縫立先例也、)

明衣御寸法御仕立上ゲ

一御たけ四尺五寸

一御袖下壹尺三寸五分

一御えりたけ二尺五寸

一御おくみはゞ四寸五分

一御身はゞ御ゆき御陌はゞ一ばい

件明衣御寸法にて、出納天羽衣准據、御仕立上調進也、

〔代始和抄〕大嘗會事

小忌といふは神事の衣服なり、しろき布をはりて、山藍といふ草にてかた木を摺物なり、大方狩衣の如し、赤紐といひて、紗をたゝみてあふみむすびをして、泥繪など書て、右の肩に二筋とぢ付る事あり、又日影の鬘といふは、白き糸をあげまきにして、左右八すぢ、或は十二筋など、冠の左右の角にまとひて垂る事あり、是は蘿といふ草をばひかげぐさといふ、神代に此草を鬘にしたる事日本紀にみえたり、さがりごけといふ物也、是は草木などは清淨なるに依て、神事の飾に用る心也、これにまた心葉といひて、梅の枝の四寸ばかりなるを糸にてむすびて、日影の鬘につくる事あり、半臂下襲など常の如し、小忌の平緒は白地に繡したるをいふ、この小忌は私に用意して著する也、國司をかねたる次將衞府の佐などこれを用ふ、その外は諸司の小忌出納の小忌といひて、かたの如く、布に青摺したる物也、それをはたゝ袍の上に打かけて著する也、いづれも山藍にてすれる物なれど、臨時祭の舞人の著するをば青摺となづけ、大嘗會の時は小忌といふ也、小忌青摺大かたはおなじことなれど、裁縫のやうかはれるなり、

〔錦所談二〕小齋大齋差別

造酒式云、青摺調布衫四十領、注云、四領著赤紐、小齋人四人料、三十六領大齋人三十六人料、マタ大炊御門良宗卿裝束抄云、身ノ二ツアルヲ大忌ト云、一アルヲ小忌ト云、永享二年十一月十八日康富記云、大忌公卿權大納言公保卿、權中納言實熙卿、已上兩卿例袍也、不著小忌、謂之大忌、對小忌之稱歟、按ズルニ古小齋大齋ノ衣差アルコト知ベシ、又康富記ニ例袍也、小忌ヲ著セズトアリ、因ニ云、スベテ小齋ハ致齋(マイミ)、大齋ハ散齋(アライミ)ノ義ナルベシ、

〔錦所談二〕青摺袍

踐祚大嘗祭式云、小齋親王以下皆青摺袍、五位以上紅垂紐、淺深相副自餘皆結紐、○中略コレヲ以テ見

ル二、貞觀、延喜ノ間、靑摺ノ制今ト異ナリ、垂紐ト云ハ今モ靑摺ノ肩ニ結垂タルナルベシ、結紐ハ諸司ノ小齋ノ如ク、紐ヲ肩ニ付タルナルベシ、中古ノ小齋ハ、今ノ石摺ノ如ク形木ニアテヽスリ、靑摺ハ紙形ニテスリ、或ハ畫ガク樣ニ見エタリ、又延喜ノ比ハ綿ヲ入タル由式文ニ見ユ、

〔年中諸公事裝束抄〕大嘗會御禊行幸

これも常の行幸のごとし、但如木の雜色ごとき、烏帽子の物をいたくめしぐせぬ事也、大和鞍を用人かならず杏葉を付、そのかず不同、說々多き事也、移には杏葉をうちまかせて付ぬ事にてあれども、むかしもまヽ付たる人もあり、つけぬ尋常の說也、

廻立殿行幸代始にある事也

纔腋袍、蒔繪弓、蒔繪細劔、巻纓、老懸、淺沓を用也、此日標山に供奉したる次將小忌を改ずして老懸をかけ、弓箭を帶して供奉する也、辰巳午三箇夜節會次將著小忌、常の節會にはかはるべき也、

〔大嘗會小忌抄〕大しやうゑのをみのしやうぞくの事

だいぶ殿の四十のとしの事にて候、したがさね上下、しもとはしりの事、又はんぴ、又おこめ、そでひとへあこめにつく

上のはかま、又をみ、又わかひぼ、又ひかげのいと、又ひめのはな、又ひかげのいとのわたしのれうに、おをぐみ一しやくばかり、

又わすれを、これらかはるべし、十二しなにて候、

すんはうの事

したがさねのながさ、ぜうは九しやく、

かたみの事

たけ、うしろ二しやく五すん、まへ五しやく四すん、みのまへよりくびをいだす、

くびのひろさ三ずん、ぬいたて二すん五ふん、
大くびはえりのもとより五すん五ふんおとしにて候
小そでのやうにかきちがへにて候、たけをばながく、大くびのひろさ、志もは七すん、ぬひ候時に
つま三志やくにて候、
そでのひきたて二志やく一すん五ふんぬひたてにて候、そでひとはたばりにて候、
一又志たがさねのみのひろさ九すん
そでのひろさ一志やく一すん五ふん
ぬひたての事
かやうにぬひたて丶のち、えりよりうしろへ五すん五ふんまはして、そののちそのをりめよ
り志て、そでもつけ候へば、そでのぬひめもまへ丶まはるべし、はんぴもそのぢやうに、はたの
はんぴにはそでつかず候、
志たがさねは、くらかふしがねにてくろく、おもてはこはりにて候、志りにおなじ、
一又志りはかた〳〵か八志やくづ丶ながさの事
一又はんぴのたけ三志やくはゞにして、ぬひてのち、えりよりうしろ五すん五ふんまはしてを
り、志たがさねのぢやうに、
はんぴにはらん口口口らん一ぢやう三志やく二すん、又は両はらのわきのぬひめに九づ丶
た丶みてひだをとる、又はんぴのらんのひろさ八すんに候也、はんぴはひとへにて候也、くび
のすそはらんのきはより一志やく七すんながくて、ひらりとさげておき候、
はんぴのみのひろさ九すん、のらん袖はつかず候、はんぴのらんふたへにて候、おもてはこはりにて候、
あこめの色は、たゞあをばなばかりにて候、あかばなはちといれて候、みたけ四志やく一すん

たけにて候、小そでのしやうにして、ゑのうしろよりくびをいだす、ひろさ三すんにて、袖はひとはたばかりにて、袖のひきたて二しやく一すん五ふん、(はんぴ、またがさねんにおたじ、)

一又をみはこはりにしててうじ候なり、まへをかりぎぬに一しやくばかりながくうしろはかりぎぬに三しやくながくひき候、

一又わすれをのながさ一ちやう二しやく、ひろさふたへにたゝみて二すん五ふん、(はたなばそくびつけに)てしをみのしやうぞくはしたぎよりうへは、しだい〳〵に一すんづゝにはい候なり、

一又あかひぼのきぬ五しやくを、あかばなにてあかくそめて、又くろくもして、ふた色にして、一丈三尺にそくひつぎにして、ながくたゝみてむすび候、

一又ひかげのいとのれうに、糸一兩ねりぐりにして、ふとくあはせて、一丈八尺にへて、糸によりて、十二すぢつゝにて、くみわけにくみて、なかよりをりかへして、六ながれづゝにてもしろく、

一又裝束どもの袖つくる時は、たもとは一しやく、はゝあけは、をみのすりもんは、だいぶ殿のはよつたけにすゝめ、

一又したがさねのたちやう、うしろ二尺五寸、まへ五尺五寸、まへよりくびをいだす、ながくおくにもかやうにかきつけて候也、

文□二年十二月廿二日の事にて候

明應元年九月廿日修補之記　　神祇權大副兼侍從卜部朝臣兼致

〔橘以國裝束抄〕大嘗會五節ノ小忌繪様

五節之時ハ、アナガチニカタヌガズ、但五節ノカタヌギト云ハ、袍著タル時ノ事也、其時ハ袍バカリヌグナリ、梅ヲ付ズシテ小草ヲ付タルヲバ、小草ノ小忌ト云、草ヲハラ〳〵ト摺付ナリ、

殿上ノ淵醉如此

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

先祭一日、略○中薄暮參議已上就宮內省令賜齋服、神祇官伯已下彈琴已上十三人、伯一人、副二人、祐二人、史二人、宮主二人、卜長上一人、部一人、彈琴二人、巫各榛藍摺綿袍一領、白袴一腰、史生已下神服已上百卅七人、史生四人、神部廿四人、卜部十六人、使部十二人、阿波國忌部五人、神服七十六人、各青摺布衫一領、中務錄唱名、縫殿寮賜之、御巫、猿女各四人、各緑袍一領、緑表、帛裏、別三丈、綿二屯、兩面帶一條、長一丈九寸、廣五寸、汗衫一領、三丈緑裙一腰、緑表、帛裏、別三丈、裙腰料緑帛一條、長一丈五尺綿二屯、下裙一腰、裙三丈、腰一丈五尺、袴一腰、三尺綿一屯、縹帶一條、長六尺、廣四寸五分、細布髮髻一條、長二丈緋帔一條、緋表、帛裏、別一丈五尺、細布衫一領、長三尺線鞋一兩、次賜小齋親王已下及群官幷內侍已下女孺已上青摺衫各一領、五位已上不開男女淺深相副、紅染垂紐、自餘結紐、祭及宴會同著、加日陰鬘、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡齋服者十一月中寅日給之、神祇官伯以下彈琴以上十三人、伯一人、副二人、祐二人、史二人、宮主一人、卜長上二人、部一人、彈琴二人、巫各榛藍摺綿袍一領、白袴一腰、史生以下神服以上一百卅七人、史生四人、神部廿四人、卜部十六人、使部十二人、阿波國忌部五人、神服七十六人、各青摺布衫一領、其御巫、猿女等服者依新嘗例、小齋親王以下皆青摺袍、五位以上紅垂紐、淺深相副自餘皆結紐、內親王及命婦以下女孺以上亦青摺袍、紅垂紐、五位以上亦淺深相副自餘皆結紐、親王以下女孺以上皆日陰鬘並卜食訖乃給、卯日夜、帛被布被各五十領付小齋人等侍宿所、事畢返上門部、語部、楯笛工並青摺布衫、物部紺布衫、中務省預支料申官請受、神祇官齋服令縫殿寮縫備、自餘縫物各付本司班給、其稻實卜部二人、禰宜卜部二人各給當色、

〔西宮記臨時四〕大嘗會卯日

諸衛服大儀、候御前、大臣及小忌人等著青摺布袍緌等扈從、略○中候大忌幄公卿衛府不帶弓箭、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十一月上旬、略○中各賜可供奉膳部者國司同族及諸氏人青摺袍各一領、其表以山藍摺之、裏淺緑、○中略先祭七日

（中略）○賜物部人等行列日裝束、造酒童女纐纈表衣一領、藍地青草摺綿袍一領、支子染綿衣一領、紅染單衣一領、白絹袴一腰、赤裳一腰、支子染下裳一腰、赤薄機引下裳一腰、板押羅帶一條、小刀子一具、錦襪一兩、皺文沓一兩、大酒波、大多米酒波、粉走、相作各紵青摺單衣一領、緑地青草摺綿袍一領、支子染綿衣一領、紅花染單衣一領、赤裳一腰、支子染下裳一腰、赤薄機引下裳一腰、板押羅帶一條、小刀子一具、深紅染襪一兩、皺文沓一兩、稻實公紵青摺單衣一領、紅花染汗衫一領、白絹綿袴一腰、支子染襖子一領、調布袴一腰、調布襪一兩、皺文沓一兩、次賜部領并擔夫等裝束、標部領各纐纈袍一領、細布袴一腰、細布帶一腰、調布襪一兩、自餘部領各青摺調布衣一領、調布帶一條、其歷巾並私設之、擔夫各青摺庸布衣一領、調布帶一條、庸布袴一腰、冠一條、巾子一口、庸布襪一兩、菲蒲脛巾各一具、其部領簡用國司子弟百姓容止端正者、

〔延喜式十三大舍人〕凡供奉諸祭及齋會節會等舍人者、（中略）○踐祚大嘗會青摺衫、請縫殿寮班給小忌人等、（衫數隨人）

〔延喜式四十五左右近衛〕凡踐祚大嘗會、小齋官人已下幷著青摺布衫、餘裝束如元日、陣於齋院內、其大齋裝束亦如元日、齋院以外除之、但除纛隊幡鉦鼓、又辰日除武禮冠襠挂甲、巳午日除脛巾末額、

〔延喜式四十六左右衛門〕凡踐祚大嘗會齋院屯陣裝束、一如元日、但除纛隊幡鉦鼓、

〔延喜式四十七左右兵衛〕凡踐祚大嘗會小齋官人兵衛裝束、並准近衛府、陣於齋院諸門、其大齋屯陣裝束、一如元日、但除纛隊幡鉦鼓、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十月中旬、（中略）○風俗歌人兩國男女各二十人裝束、男細布摺袍各一領、襖子汗衫半臂各一領、白施綿袴一腰、細布襪一兩、（舞人八人著布帶末額、各執阿禮木）女各領巾一條、褶一領、長袖衣一領、汗衫一領、小襖子一領、裳一腰、袴一腰、下袴一腰、下裙帶一條、施襪一兩、細布襪一兩、線鞋一兩、錦鞋一兩、釵一枚、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

左辨官下中務

應行青摺袍捌百陸拾捌領（細布百八十一領、佐渡布六百八十七領、）

二領外記料、二領辨官料、二領男藏人料、廿四領侍從料、五領中務省料、十領内舍人料、二領内記料、二領監物料、二領主鈴料、二領主鑰料、四領内藏寮料、四領大舍人寮料、四領縫殿寮料、二領内藥司料、三領宮内省料、四領主殿寮料、四領掃部寮料、四領内膳司料、二領主水司料、一領采女司料、八領左右近衛府料、（各四領）四領左右衛門府料、（各二領）四領左右兵衛府料、（各二領）八十領女孺八十人料、

已上細布

百卅七領神祇官料、（史生四人、神部廿四人、卜部十六人、忌部五人、使部十二人、神服七十六人、）一領官掌料、六領中務省料、十二領内豎所料、十六領内藏寮料、卅八領大舍人寮料、六領縫殿寮料、四領内藥司料、一領宮内省料、八十領大膳職料、卅四領主水司料、廿領主殿寮料、廿六領大炊寮料、三領采女司料、六領掃部寮料、七十六領内膳司料、卌領造酒司料、八十二領左右近衛府料、（各卌一領）卌二領左右衛門府料、（各廿一領）卌領左右兵衛府料、（各廿領）十七領國栖等料、

已上佐渡布

右供奉大嘗會小忌人等青摺袍、諸司所請如件、宜以去八月五日官符所裁九百四領之内充之、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

下大藏、（主基亦用此宣旨）紺調布十端、調布八端三丈二尺、

右供奉大嘗會悠紀所白丁物部廿人裝束料、左衞門府所請如件、

年月日　　辨姓名奉

大臣宣、宜充之、

〔長和元年記〕十一月廿二日乙卯、膳部六人、(三人□□)令著青摺下襲表袴、日蔭赤紐如常、令參入齋場所、

〔中右記〕寛治元年十一月廿一日己巳、節會如昨日、(中略)致家朝臣夜前昇殿著大忌、而爲悠紀國司、不著小忌事如何、　廿二日庚午、節會如式、(中略)今夜行幸雖有執杖、著靴儀猶被用壺胡簶、但加敍列之次將等便用平胡簶野劍、但路間淺履、是依爲主基國司也云々、左衞門權佐爲房小忌、僅著平胡簶、螺鈿野劍不入尻鞘、攝政殿、左大臣、兩大將、卯日雖令著小忌之當色給、其後不令著給、自餘人々節會三箇日皆悉著之、(中略)新頭中將能實、今日著小忌參內、而依敍三位、卯日行幸不被供奉、而今日被著之、萬人爲奇、仍則退出了、預敍位次將等、少忌上螺鈿野劍、(不著魚袋)老懸參內、大略如正月七日儀也、

〔台記別記〕康治元年十一月十六日甲辰、知行光房來宿所云、攝政殿仰云、節會可被始也、(中略)中刻著束帶、

打下重堅文表袴如法、飾劍有文巡方、紫緂平緒、劍帶平緒、皆御禊所用也、餘人多用飾劍代、(中略)頭之左將軍(夜前雖著小忌今日位袍、依非卜食也、闕身垂袴、蛮胡簶、香長染狩袴、下襲白襖袴、)參入著奧座、

〔兵範記〕仁安元年十一月十七日丁巳、晩頭參大極殿、頭辨以下雲客廿餘人祗候、皆小忌、有日蔭糸等、春宮亮敎盛朝臣、刑部卿重家朝臣、下官等著大忌、且是前例也、左衞門佐信基小忌袍、(尻長)蘇芳下襲、濃打半臂、例表袴紅相單衣、垂纓冠日蔭組、四結垂之、在巾子根羅幷付所、心葉、螺鈿長劍、紺地平緒、巡方、魚袋、(右)淺沓、赤紐付左方、　三年十一月廿二日己卯、未明出立參齋場所、

小忌袍(其文用悠紀方、今度龍鱗花唐鳥相交、)

蘇芳下襲(已上尻長)

黑半臂固文袴（可用縮線綾、有所存著堅文、）紅袙單衣等如常、巡方帶、（不付魚袋）

日蔭組、（在心葉）赤紐、付右靴沓相具、

〔明月記〕建曆二年十一月十三日、乙卯、午一點少將（○藤原定家子爲家）令裝束、紅梅日蔭（左右各八筋、四筋を結也、心葉紅梅結花、件一心葉普通ニ付之、通具卿、久我相國自筆記藏一紙被借送、心葉四枚付上緒由有之、仍四枚、二ハ左右ニ上緒へなびかして付之、二ハ巾子ニそびて立樣ニ付之、ふしたる枝のしたに付日陰組、是皆青色の如著組付也、件組纓之上ニかたかぎに結也、或纓下ニ結、又二ニ結、樣々也、予拔之如老懸、皆懸上、仍上ニ懸流テ用也、）日蔭ヲバ一組四筋ヅヽ、上緒ノ前後へ引分テさぐる也、垂纓、小忌、半臂、下襲、紅打袙、紅梅匂袖ニ紅、單衣、表袴、大口如例、可著淺沓巡方帶、（無魚袋）螺鈿細大刀（有蒔具緒）紺地平緒（縫梅）專如昨日、隨身萌木同布袴（付昨日梅）垂袴壺、乘軒車先立入四條坊門坊城小屋、可待刻限由示合、共人少々來會、又少々可向彼小屋由兼約束、長邦朝臣、（花田狩衣、白衣、）八條院前判官代某、（青紗狩衣、例袙貫薄色衣、紅單衣、）左近將監康房、（狩袴、紅下袴、帶地敷劒、有調度懸、）

此三人ハ乘車令向彼所了

十六日、巷説節會可始之由、傳聞左大臣殿御裝束云々、仍參官廳、（乘毛車、下自郁芳門、）公氏宰相同時參、先是民部卿新宰相顯俊參入云々、見節會御裝束、小忌大納言殿、藤宰相等徘徊、先是少將參入云々、裝束如昨日、來卷纓帶螺鈿野劍、猶令付魚袋、相具綏尻鞘弓箭參入、先引陣帶胡籙之時、解取魚袋秘説云々、師時卿如此、已御覽了被待內辨參云々、聖代之儀視聽備感、　十八日、清範朝臣奉書云、

大嘗會午日還幸、少將殿令著魚袋給云々、是本儀候歟、而近代説多不著云々、隨御所見可令申給之由內々御氣色候也、仍以言上如件、

内々言上

此條御口口事やなどとも御尋候ニハ不候、只爲聞食御所見可尋候由沙汰候也、重謹言、

予申云、爲家午日還幸付魚袋候事、別付魚袋之由所見全不候、件日還御偏不改節會裝束、垂纓取笏供奉、此上限魚袋可解取由管見不及候之上、事理未案得候、總次將之身、著闕腋用巡方帶螺鈿日、不

付魚袋之體不覺悟候、可謂祭使至于、如臨時祭使幷內宴出居、入夜帶胡籙之時解魚袋、只北山抄所載、叙列日引陣間此事候歟、件儀猶裏書被之秘說、以付魚袋爲可云々、依思此等事、限此還御可解魚袋由不諷諫候也者、以此趣可令披露給、此事誠不存事也、案之忠親公於事以今案稱秘說之人也、如此之輩云出事歟、依不改飾會裝束取袴之儀、至于魚袋何撤之乎、如何如何、重伺被仰之處、御氣色宜之由示之、　十九日、淸範奉書云、

大嘗會辰日、近將先著淺沓、壽詞奏了改靴事、御存知之由其聞候、何程可著改候哉、御所見何記候哉、可令注申給候、此事可然之由被思食、且被御覽及之間、爲潤色御尋候之由內々御氣色候也、仍以言上如件、

頻勤悶恐惶無極、申云、辰日近將先著淺履事、總大嘗會之間、如舊記依其用否一切不尋見、只去年來論議之催之時、催所借出少々引見候許也、此事兩說之由粗雖伺見、更不知可否、去比事次伺申內府候之處、淺履爲宜說歟之由口遮外候、於著改事者、上古記總不見及候、但外辨出南門外著靴還著云云、著靴之人、參列之後可無便宜歟、何此間相替各可著改之由廻愚案候許也、凡依無身至要、如日記不尋見、萬事向暗夜、僅所存如此候也、但內辨任所存申此由了、權辨兩府其禮異他、仍後參入以前可退陣由申含了、仍此事總不沙汰候也、

〔季連宿禰記〕貞享四年八月九日乙巳、自頭中將基勝朝臣使者云、兩局行事官重基幷出納等、只今可參攝政殿〇一條冬經云々、卽令參上之處、以基勝朝臣被仰下條々、略〇中

一小忌之事、以永享二年員數出納可調進事、當時攝政家無之間、小忌之事者、一向出納可調進云々、

十一月十六日辛卯、今日大嘗會也、略〇中　予不著小忌、爲尋常袍之間、不入大嘗宮柴戶幷廻立殿等、徘徊便所、略〇中

一私小忌其體如布衣、白布二山藍ヲ以紋ヲ付、當時山藍無其實歟、只以青色畫紋也、身ハ一幅、袖二幅尻長シ、紋有品々可尋注、是私ニ用意之小忌也、仍自里

亭著之、日蔭、心葉、赤紐等有之、下襲ノ上ニ著之、(単衣袴等如常、不著袍、)行事史ノ小忌ハ、悠紀ノ史ノ紋菊ニ蝶、心葉金梅ノ立枝、(花金)主基ノ史ノ小忌ハ紋松鶴、心葉金梅枝、(花銀)赤紐ハ各右ノ肩ニ著之、小忌ノ角ノ立様、幷日蔭、心葉、緘(カラゲ)様等、有故實事歟、行事史ノ日蔭ハ左右八筋也、(一方四筋)神祇官輩等私小忌也、日蔭十二筋云々、

一諸司小忌(身二幅、袖一幅、無頸紙、紋椿柳也、自大臣公卿至于諸司、各無替歟、)攝政、前行大臣、小忌公卿、四位五位六位職事、幷入大嘗宮諸司各著之、(只尋常袍之上、如形著之也、)大臣ノ小忌者、臨夜六位外記中原友昌取之、(自出納渡之歟、)傳諸大夫歟、於殿上令著給云々、自餘於便所著之歟、是所傳聞也、予不慥窺見、大臣幷小忌公卿之分、日蔭、心葉、(金銀)赤紐等有之、自餘無之歟、但掃部頭立明、主殿、宮内、大藏輔等日蔭、心葉、(紅梅花也、絲)赤紐等有之、

一出納小忌(紋水鹿云々、尋常袍上著之、)近臣爲拝倍大嘗宮簀子被著之歟、別勅小忌是也、

凡諸司小忌、出納小忌、日蔭、心葉、赤紐等、今度一向出納所調進也、(七拾領許、用意云々、)又私ノ小忌各不覺悟之間、大概仰出納令調之云々、

赤紐結様、今度自攝政殿被仰下出納云々、仍出納一家結之也、他家無知人由風聞、(○中略)

采女、女官各如形小忌也、(非小忌ナハヤト稱之歟可尋、)有日蔭、心葉、カプロカモジニ緘付之歟、

一諸司小忌、出納小忌者、只袍上著之、如形小忌也、然而奥ニ所記如形小忌者、無紋白布如形者也、是等者私ニ令用意之、袍或白張等上著之、

〔壬生家記〕貞享四年大嘗會御道具(○中略)

一小忌服數、臣下人數次第、

布ニテ作、肩衣ノゴトシ、靑摺トテ、草ノ葉ニテ紋ヲツクル、

一童女裝束二人前

天冠、袍紫色ノ絹、裏同、表袴絹白、上著生ノ絹水色、襪練ギヌ、絲鞋、檜扇、

一八女裝束四人前

　表衣絹水色、袴絹アカネ染也、襪ギヌ、絲鞋、檜扇、

一六男裝束四人前

冠、老懸、白張、紋鹿丸、金チ以押之、白袴絹、

一稲實公

　鵠ノ角帽子、裝束白張布、紋鹿丸、金以薄押之、袴白布、

〔壬生家記〕卯日〇貞享四年十一月十六日 伴佐伯裝束

冠 垂纓　袍 縫腋　單　表袴　大口　遙方帶　螺鈿劍　魚袋

紫裾平緒　淺沓

同門部裝束

冠 細卷纓　老懸　紺褐衣　紅單　白布帶　黒條劍　白布脛巾　麻鞋

午日伴佐伯裝束

冠　日蔭　小忌袍　半臂　下襲　單　表袴　遙方帶

魚袋　螺鈿劍　紺地平緒　靴

一卯日、伴佐伯二人、主殿寮二人、給諸司小忌、

一於下司官人史生者、恒例新嘗祭拜領諸司小忌著之、

〔師守記〕元文三年八月七日〇中略 四位五位私小忌靑摺、

一菫、蒲公英、何にても一種、

一若松の折枝

梅折枝

尾長鳥　小鳥のよし

さんじやく　同斷

右之内一種、何にても二種に相成候樣よろしく、

一くびかみ

蝶鳥、是は一通り蝶鳥の形にて候、

此鳥を直に身へ用候ても宜

〔盈春記〕元文四年十月廿八日、自去年被仰付、大嘗會御調度之圖、先頃畫所預土佐大藏少輔光芳より差出于此宅、〇中略

二十枚

諸司小忌 紋梅柳、へり蝶鳥、各青摺赤紐、　出納調進

出納小忌 紋木二蕨、へり小草、各青摺、　出納調進

心葉 花貝、木金銅、　出納調進

心葉 花鎌、木金銅、　出納調進

心葉 結花、木雜木、　出納調進

廿一枚

日蔭蘰 白、紅梅、匂、紅梅、青、　出納調進

采女褌 紋蝶鳥、青摺、　出納調進

采女插頭之具 丸かもじ、日蔭蔓、　出納調進

〔壬生家記〕明和元年大嘗會門下諸司訴訟屆書等留牒

奉願口狀書

〔大嘗會便蒙　下〕

小忌着用之體

私小忌

諸司小忌





出納小忌



如形小忌

一寛延之度、大嘗會卯日行幸、供奉諸司小忌拜領之輩、辰巳之日、私小忌著用參勤仕候輩有ㇾ之候、於寮官人ㇾ者、卯日諸司小忌拜領供奉相勤候儀御座候間、辰巳之日、私小忌著用參勤仕度奉ㇾ願候、右之趣宜御沙汰奉ㇾ願候已上、

九月　主殿寮佐伯職秀
伴重威

官務殿

〔壬生家記〕明和八祀大嘗會方諸司訴訟并届書等留帳

奉ㇾ願口狀

今度大嘗會行事被ㇾ仰出、殊ニ先規之通私小忌著用可ㇾ仕旨被ㇾ仰出、一統難ㇾ有奉ㇾ畏候、然處行事史其外多參仕之輩、小忌料頂戴仕候處、於ㇾ行事而已ㇾ者、小忌料頂戴不ㇾ仕候、累年困窮之者共御座候得者、右用意等甚難ㇾ澁仕候、何卒被ㇾ准ㇾ他之例、以ㇾ御憐愍ㇾ小忌料頂戴仕度奉ㇾ願候、尤御下行帳御草案ㇾ者被ㇾ爲ㇾ濟候樣粗承仕候、然上御願申上候儀甚奉ㇾ恐候得共何卒以ㇾ御憐愍、願之通御下行帳之外ニ而ㇾ者頂戴被ㇾ爲ㇾ仰付ㇾ被ㇾ下候者、深難ㇾ有可ㇾ奉ㇾ畏候、此段偏奉ㇾ願候、

右之趣御沙汰奉ㇾ願候以上

十月　官外記催行事輩〇人名略

官務殿

大外記殿

〔大嘗會雜事錄〕明和八年之度知音編御記

一明和元年之度ハ、卯日諸司小忌著用輩、辰巳午等節會參役之節、各可ㇾ著ㇾ私小忌之由被ㇾ仰出ㇾ也、此度勿論可ㇾ爲ㇾ其通ㇾ之由被ㇾ命之事、

小忌著用明和元年之度書付○中略

官務大外記、卜合、兼役掃部頭、大藏輔、同官人、宮內輔、內藏官人、縫殿官人、內舍人、大舍人、主殿寮二人、聞門伴佐伯、掃部寮二人、右各著諸司小忌、行事史二人、忌部代、神服宿禰代、大膳職、內膳司、安曇氏內膳代、采女司、主水司、造酒司、稻實公代、右各著私小忌、

大藏省兼木工寮、膳部、水部、酒部、駈仕丁、右各著如形小忌、

一諸司、下司、如形小忌著用之輩、右之外も有之候事、

十月

壬生官務

押小路大外記○中略

一行事節會參役之節、私小忌著用著靴事、著雜木心葉、金銀無用之事、兩局催外、行事江も可申傳候事、○中略

一內舍人、大舍人、卯日參役、寬延之度ハ、私小忌著用、明和元年之度ハ、諸司小忌被下之著用、於今度も賜諸司小忌候事、○中略

一此度辰巳節會行事參役之節、各私小忌著用著靴事、明和之通有之旨被仰出候、各可被存知候也、

悠紀行事　主基行事

追而雜木心葉著之、金銀無用之由、先年之通御沙汰候、可被相心得候也、

大嘗會參勤觸狀云

一卯日、諸司小忌、私小忌著用輩、辰巳午等節會參役之節、私小忌著用勿論之由被仰出候、尤兼官有之輩其職替候共、卯日小忌著用之人體ハ、辰巳午私小忌著用之事、各可有意得候、且此度諸司小忌給之輩江心葉、日蔭蔓等不被下候旨御沙汰候、仍而爲心得內々令告知候、

〔大江俊名記〕明和八年十一月十二日、小忌點撿之事如左、

諸司小忌

一攝政殿　紋松梅、有二赤紐一、ヨケ蒲、合目摺、

一前行大臣　紋龍鶴、尾長鳥、有二赤紐一、ヨケ蒲、合目摺、

一小忌公卿三人　紋梅柳、有二赤紐一、合目不レ摺、ヨケ蒲、

一卜合次將四人　紋同、有二赤紐一、合目不レ摺、ヨケ蒲、

一少納言　紋同、有二赤紐一、ヨケ蒲、合目摺、

一侍從　紋同、有二赤紐一、合目不レ摺、ヨケ蒲、

一奉行職事　紋同、其外同斷、

一早參職事二人　同斷

內隆建朝臣卜合、次將紀光朝臣、奉行貴矩行事辨、依レ之早參二人許相濟也、

一六位藏人四人同斷　　一官務同斷

一大外記同斷　　一少外記同斷

一大藏輔同斷　　一宮內輔同斷

一大藏官人同斷　　一縫殿官人同斷

一內舍人同斷　　一大舍人同斷

一主殿寮二人同斷　　一伴佐伯二人同斷

一掃部寮二人同斷　　一出納同斷

右合三十四人分　但餘分七有レ之

出納小忌分

一武家傳奏二人　紋水鳥、無二赤紐一、ヨケ蒲、合目摺、

一議奏五人同斷
一小兒代同斷
一紙燭殿上人六人同斷
一一會傳奏同斷
一臨期大臣方一人同斷
一劒璽內侍二人紋同、但合目不摺、
一御服奉仕三人同斷

如形小忌

內豎康昆澄了

〔大江俊冬記〕天明七年十月九日、同姓入來、昨日於差次亭雖被催集會、予依不參病相談之一件被示云、去七日自傳奏奉行被招一﨟、於閑所內々被示云、車持朝臣、子部宿禰、笠取直等之服色、可有御再興叡慮之趣、粗御沙汰も有之候得者、臨期ニ被仰出候而者、各難澁にも可有之、且違背之義於有之者、氣毒ニ候得者、爲心得前以內々申置也、但於車持者、小忌著用之事兼有之候得者、自餘之二氏も准是度所存ニ候ハヽ、又得其意可取計間、勘辨之上早々可致返答旨也、答云、委細奉畢、併以一存難申御答候得者、尙一統相談之上、可及返答旨ニ而被退出也、依之二﨟據或卿三姓服色舊記相尋處、則勸物到來之由如左、

江記、天仁元年十一月廿一日、車持朝臣、小忌垂纓子部宿禰、笠取直張御笠綱、細燕尾老懸、退紅、白布袴、伊知美屋巾、

兵範記、仁安三年十一月廿二日己卯、○中略車持氏差御笠、子部氏、笠取氏共膝行張蓋綱、件三人著冠、緌、退紅、白袴、

十日、一﨟、三﨟參陽明家、○近衞家以諸大夫委細演說、且以書付相伺如左、

當七日自大嘗會傳奏奉行常芳被相招、中山前亞相內意被申聞候趣者、此度大嘗會被用舊規候ニ付、車持朝臣、子部宿禰、笠取直衣體之義、舊例者退紅白袴候、車持朝臣者、小忌著用之事も有之候、不相應之衣體ニ候得者、被仰出候上ニ而及違背候而も不相濟事、且臨期之義ニ而ハ難澁ニ

可有之間、内々被申聞候間、各所意被聞置度候、尤古來御禊之節、六藏人衣體も退紅之類ニ候間、右ニ准、平絹之退紅抔と申事に而も可有之歟、或任車持例、三人共私小忌著用之事歟、何に而も表向不被仰出間、聞屆被置候得者、以其趣意取計も有之候間、各申合返答可申旨ニ候事、右之通被申聞候處、各不覺悟之事故、内々相伺候、古代之義者、車持朝臣已下本姓之人有之候故、右之通之服に而も可有之哉、御再興已來、本姓之人無之ニ付、六位藏人相勤候事ニ有之候得者、身柄不相應之服著用候段も歎入事存候得共、古代之車持已下何等之身柄ニ候や、不覺悟之事に候得者、決定候而違背候段も憚入候事ニ御座候事、

十三日、三﨟入來被示云、自陽明兩人可參旨申來、則一﨟三﨟參殿之處、以諸大夫被仰下云、先日所相伺之一件、委細尤ニ御聞之由、則賜書付、此趣書付可致返答旨也、如左、

車持朝臣、子部宿禰、笠取直等代服色、如舊例被相改無差支哉、且於車持者、著小忌例有之候、子部、笠取等代歟申時者、被准車持之例可爲小忌哉所志御内々被尋下畏奉候、被復舊儀之事畢可申御請、北山抄云、召氏々事、仰京職及國々車持朝臣、子部宿禰、笠取直、下略右之通ニ候得者、上古微微之人品令恐察候、然ニ拙劣之者共至成彼委候時者、對地下之輩失面目候、加之輕藏人之職儀、往々可出來哉深歎入存候、且著退紅白布袴之時者、不可叶昇殿と存候、既侍中之輩預巡爵之時、除其籍加末座之儀、有奉公之望、殊昇殿致規模候事ニ御座候へバ、雖一箇夜於被止昇殿者、侍中之瑕瑾不過之、代役之者者勿論、居此職之輩一同不堪悲歎候、彌被准據車持服色、自餘二姓於著小忌者可畏存候、何卒難澁之子細御察、宜御取計希入存候事、

月日　　　　四人連名

右披見畏奉候、結構之思召之段委曲御禮申上、退出之由也、

十四日、自三﨟被傳廻文如左、○中略

大嘗會參役之節、准車持朝臣之例、各可令著用小忌旨被仰出候段、傳奏奉行被申渡候、最無所役藏人者、可爲諸司之小忌旨同被申候也、

十月十四日　　常芳

三人

〔敬義宿禰記〕天明七年十一月三日、悠紀主基膳屋之邊御調度爲見、不著小忌人徘徊堅可禁止之由、諸司輩可申渡置由被命、尤雖如形小忌、著之人者不苦由也、

〔壬生家記〕文政元年十月五日、日野殿より御尋ニ付、御巫裝束色目差出候事、

貞享以來天明之度迄、御巫、猿女裝束、

一萌黃生絹袍

一緋袴

寬政三年從新嘗祭之度、御巫裝束、

汗衫表花田、生絹單、　表袴表白平絹、濃裏、　濃袴打物　單濃　半臂黑平絹　襲蘇芳　裾　石帶犀角丸

領　檜扇　糸鞋　總角之具、夾形物忌總角組、紫

以上

十月　　行事官

十九日、御巫、猿女裝束此度伺之處、寬政三年以來新嘗祭著用之事、最猿女も同樣之事、

〔大嘗會家記〕文政元年十一月廿一日、大嘗會等庭朝臣蒙別參勤之仰、於禁庭賜諸司小忌、於便所袍上著之、但於腋陣邊官務以寧授之、此事於南局者、每例爲庭上下知、參勤賜諸司小忌、今度於官務者、悠紀行事也、著私小忌、此諸司小忌雖拜領不用也、依之可讓充予之旨、兼日被命之云々、

〔大嘗會書類〕嘉永元年六月十八日、依尋進裏松左中辨恭光朝臣扣、

悠紀主基小忌紋之事

貞享度

悠紀方　菊ニ蝶、心葉金梅ノ立枝、花金、

主基方　松ニ鶴、心葉金梅ノ枝、花銀、

元文度

悠紀方主基方　梅雉遠山、襟小草、赤紐二筋、心葉金梅、

寛延度

悠紀方主基方　同上

明和元度

悠紀方　小草(メンホヽ)心葉雑木紅梅、結糸花、

主基方　若松ニ鶴、心葉同上歟、

明和八度

悠紀方同上、主基方同上歟、

天明度

悠紀方　龍膽ニ唐鳥、心葉雑木、結花、(仁安三年人車記之例)

主基方　若松ニ鶴、心葉同上、

文政度

悠紀方同上、主基方松ニ鶴、心葉同上歟、

古事類苑

神祇部二十三

大嘗祭六 大神寶使 八十嶋祭附

古事類苑

神祇部二十三

大嘗祭六 大神寶使、八十嶋祭、附

敍位賜祿

〔儀式 四〕踐祚大嘗祭儀

未日賜神祇官幷諸司六位以下官人以下、及兩齋國國郡司役夫以上祿、其儀也、平明所司自儀鸞門東第一間南去一許丈、更東折五許尺、南面設勅使參議床子、東去一許丈辨大夫床子、其南面式部輔床子、其東一許丈官史床子、其南式部丞床子、並西面、其南五許尺、更西折五許尺、式部錄床子四脚、北面門西、與式部輔相對兵部輔床子、其西一許丈兵部丞床子、其南五許尺、更東折五許尺、兵部錄床子四脚、大藏丞錄床子在祿床子前、左右相分當門、訖中務省於儀鸞門前正中、南去三許丈置宣命版、南去三許丈、掃部寮左右相分設積祿床子、大藏省積祿物於床子上、午剋勅使參議一人就床子、次辨大夫、式兵二省輔、官史以下次就床子、可賜祿者群立祿床子南頭、訖勅使起自床子、南去二許丈、更折西去二許丈、進就版宣制、其詞云、天皇我大命止良万勅大命乎衆聞食止宣布、可賜祿者共稱唯再拜、又宣云、神祇官人等乎始氏、大嘗會爾參來氐仕奉流悠紀主基兩國司、郡司、百姓、及司々人毛止番上以上爾御物賜布、又卜食留二郡司波爾特御物加賜波久止宣、或時有勅、免兩國舊負若雜庸井物、可賜祿者共稱唯拜舞、訖勅使復床子、次式兵二省錄分四番執札唱名、大藏省隨即賜之、其祿法神祇齋主加賜馬一匹、諸司判官各綿五屯、主典各四屯、史生掌等各三屯、內豎、大舍人、使部等亦同、自餘番上各二屯、悠紀主基兩國守介各絹十匹、綿廿屯、調布廿端、掾各絹五匹、綿十屯、調布六端、目各絹三匹、綿六屯、調布四端、史生、博士、醫師各絹二匹、綿四屯、

調布三端、齋郡大少領各絹四匹、綿十屯、調布六端、(大少領加賜馬一匹、)主政帳各絹二匹、綿四屯、調布二端、諸郡大少領各絹三匹、綿六屯、調布三端、主政帳各絹一匹、綿三屯、調布二端、(其國司并郡司不在賜限、)造酒、童女、稻實公、燒灰、大酒、波粉走各絹一匹、綿二屯、調布一端、相作女、大多米酒波女、粉走、相作、採薪等各調布一端、風俗歌人并國書生子弟等各庸綿二屯、擬丁各綿一屯、又悠紀主基二所雜色人隨等第賜之、一等各綿四屯、二等三屯三等二屯、祝部各綿四屯、供奉闕門并久米舞伴佐伯、宿禰主典以上各綿廿屯、散位并齋子孫等各綿十屯、供奉神事神服各絹一匹、神主各絹一匹、綿四屯、調布一端、服長各絹一匹、綿一屯、服女各調布一端、又勅使內侍於中重對勘見參國司以下郡司以上妻賜祿、其祿法也、守介妻各絹六匹、綿廿屯、調布十端、掾妻各絹四匹、綿八屯、調布五端、目妻各絹二匹、綿六屯、調布二端、史生、博士、醫師妻各絹二匹、綿二屯、調布二端、供奉神事神服妻絹一匹、調布一端、綿一屯、齋郡大少領妻各絹三匹、綿六屯、調布三端、主政帳妻各絹二匹、綿二屯、調布二端、諸郡大少領妻各絹二匹、綿二屯、調布二端、主政帳妻各絹一匹、綿二屯、調布二端、

〔延喜式 七踐祚大嘗祭〕午日、○中略諸司六位官以下及兩國駈使丁以上給祿、(神祇伯大副及齋郡少領以上加給馬一匹、)其悠紀主基兩國主典以下諸郡司主帳以上把笏者、別勅敍位者、依臨時處分、(諸司六位以下給祿、兩國主典以下敍位、並以未日行之、)
(事見儀式二)

〔北山抄 五〕大嘗會事

未日、於儀鸞門外、賜神祇官并諸司六位以下及兩國郡司役夫以上祿、參議爲勅使、率辨官行事、參議即宜制、式兵二省唱名、大藏給之、具見于式、(承平例十二月七日給之、參議扶病行事云々、但年々無所見云々、)又勅使內侍於中重見參國司以下郡司以上妻給祿云々、

〔柱史抄 下〕大嘗會

丑寅日間、不當御衰日者、被行敍位、(先々四會、九欠行之、但兩日不當御衰日者不擇日次也、)

〔年中行事秘抄〕大嘗會叙位例

仁和書曰、國家大嘗會、起自天武天皇御代、于時供奉神官并國司等賜祿有差、自爾以降、代々帝王因循爲例、只有給祿之恩、曾無賜級之事、而高野姫天皇〔○孝謙〕天平勝寶元年、大嘗會國介已上預恩榮、〔此女帝御世、朝政顚亂、有内寵嬖者在闈閤中、孫有恩私偏所行、未必足爲後代彝式、〕次帝淡路天皇〔○淳仁〕天平寶字二年大嘗會之日、兩國長官各一人賜加階、不及任用之吏、自此其後時議未定、或行、或止、弘仁以降、掾已上在國造任共預榮、以此例行來年久、推之政理、公損甚多、論之人事、私怨不少云々、

〔北山抄五〕大嘗會事

巳日、〔○中略〕此日於縫殿寮、賜女王祿、

〔年中行事秘抄十一月〕給女王祿事

大嘗會年、雖午日行節會、至女王祿者、猶巳於宮内省行之、

○按ズルニ、大嘗祭供奉人ノ叙位賜祿ハ、必シモ未日ノミニアラズ、女王祿亦巳日ニ限リタルニハアラズ、故ニ今其何レノ日ナルヲ問ハズ共ニ此條ニ收ム、而シテ辰日以下節會ノ時、他ノ公卿雲客ト共ニ位ニ叙シ祿ヲ賜フハ、各其條下ニ存セリ、

〔日本書紀二十九天武〕二年十二月丙戌、侍奉大嘗、中臣忌部及神官人等、并播磨丹波二國郡司、亦以下人夫等悉賜祿、因以郡司等、各賜爵一級、

〔日本書紀三十持統〕五年十一月戊辰、〔○辰下恐脫朔辛卯三字〕大嘗、 乙未、饗公卿以下至主典、並賜絹等各有差、 丁酉、饗神祇官長上以下至神部等、及供奉播磨國、因幡國郡司以下至百姓男女、並賜絹等各有差、

〔續日本紀一文武〕二年十一月己卯、大嘗、〔○中略〕賜神祇官人、及供事尾張美濃二國郡司百姓等物各有差、

〔續日本紀四元明〕和銅元年十一月己卯、大嘗、 癸未、賜宴職事六位以下、設〔○設恐訖字誤〕賜絁各一匹、 乙酉、神祇官及遠江但馬二國郡司、并國人男女總一千八百五十四人、叙位賜祿各有差、

〔續日本紀孝謙十七〕天平勝寶元年十一月己未、由機須岐國司從五位上小田王授正五位下、正四位下大伴宿禰兄麻呂正四位上、從四位下大伴宿禰古慈斐、〔背〕奈王福信並從四位上、正六位上津嶋朝臣雄子從五位下、軍毅已上叙位一級、國司及軍毅百姓賜饗并祿、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年十一月乙未、神祇官人及由機須岐兩國國郡司等、並加位階、并賜祿有差、授播磨介從五位下上毛野公廣濱從五位上、丹波守外從五位下大藏忌寸麻呂從五位下、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年十一月丁未、授從五位下壹志濃王從四位下、正五位下奈癸王正五位上、從五位下當麻王從五位上、從四位上大伴宿禰古慈斐、藤原朝臣楓麻呂並正四位下、從四位下藤原朝臣濱足、大伴宿禰伯麻呂並從四位上、正五位上大伴宿禰駿河麻呂、正五位下大伴宿禰家持、正五位上石上朝臣息嗣、並從四位下、從五位上多治比眞人長野、李忌寸元環、並正五位下、從五位下阿倍朝臣意宇麻呂、石川朝臣眞守、當麻眞人總足、紀朝臣船守、並從五位上、外從五位下內藏忌寸若人、外正五位下葛井連根主、正六位上大中臣朝臣宿奈麻呂、紀朝臣諸繼、平群朝臣巨足、藤原朝臣宅美、並從五位下、正六位上阿刀宿禰眞足、內藏忌寸全成並外從五位下、是日宴於五位已上、其內外文武官主典已上於朝堂、賜五位已上綿各有差、賜神祇官及主典〔已上至國郡司役夫物各有差、　戊申、授國司從五位上船井王正五位下、正四位下藤原朝臣田麻呂正四位上、從五位下大伴宿禰潔足、栗田朝臣鷹守並從五位上、正六位上賀茂朝臣人麻呂、安倍朝臣諸奈麻呂、笠朝臣名末呂、並從五位下、正六位上日下部直安提麻呂外從五位下、賜郡司僚人一級、　己酉、御由機廚、授正四位上藤原朝臣田麻呂、藤原朝臣繼繩、並從三位、從四位上佐伯宿禰今毛人正四位下、　庚戌、御須岐廚、叙正三位文室眞人大市從二位、〇下略

〔續日本紀桓武三十六〕天應元年十二月丁卯、御太政官院、行大嘗之事、　辛未、饗諸司主典已上、賜祿有差、　壬申、授從五位下和氣朝臣清麻呂從四位下、明經、紀傳、及陰陽、醫家、諸才能之士、賜絲各十絢、　癸

酉、授正六位上藤原朝臣根麻呂從五位下、從七位下酒人忌寸刀自古、無位佐和良臣靜女並外從五位下、　甲戌、授正四位上安倍朝臣古美奈從三位、從四位下橘朝臣眞都賀、百濟王明信、並從四位上、從五位下藤原朝臣勤子從五位上、　丙子、授無位藤原朝臣春蓮從五位下、

〔日本後紀十七平城〕大同三年十一月辛卯、御朝堂院、行大嘗之事、　丙申、從四位上藤原朝臣緒嗣、吉備朝臣泉授正四位下、正四位上五百井女王、藤原朝臣勤子從三位、從四位下藤原朝臣藥子正四位下、无位紀朝臣田村子從四位下、從五位上三善宿禰姉繼、无位伊勢朝臣繼子正五位下、无位藤原朝臣佐禰子從五位上、无位坂上大宿禰井手子、大中臣朝臣百子、藤原朝臣高子、藤原朝臣岡子正六位上、粟田朝臣仲繼從五位下、從七位上尾張連眞縵外從五位下、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁元年十一月乙卯、行大嘗於朝堂院、　己未、正四位下橘朝臣諱嵯峨太皇太后多治比眞人高子授從三位、无位廣長女王從五位上、正六位上藤野女王、无位繼子女王從五位下、從五位下藤原朝臣松子正五位下、无位藤原朝臣緒夏、坂上大宿禰御井子從五位上、无位藤原朝臣葛子、橘朝臣安萬子、三善宿禰弟姉、三國眞人眞主從五位下、　辛酉、正六位上朝野宿禰道守、丹波史鳥守授外從五位下、

〔類聚國史八神祇〕弘仁十四年十一月辛未、賜諸司五位已上祿有差、女叙位云々、

〔續日本後紀二仁明〕天長十年十一月辛未、授從三位繼子王正二位云云、賜女王及命婦祿有差、　癸酉於本宮有悠紀之奉獻、終日奏樂舞、賜親王以下次侍從已上祿、

〔文德實錄三〕仁壽元年十一月乙未、策命曰、天皇我大命良萬止勅大命乎衆聞給止宣、神祇官人等乎始天、大嘗會爾參出來天仕奉流悠紀主基二國乃國司、郡司、百姓、及司司人毛止番上已上爾御物賜布、又悠紀主基兩國乃主典與利以下國醫師爾至万氏、及諸郡司主帳已上乃把笏者爾、位一階上賜治賜布、又悠紀國乃今年庸物、主基國乃今年田租免賜布、兩國乃卜相郡司爾波特御物賜波久止宣、是日從四位下

清子女王叙從四位上、无位定子女王正五位下、伴宿禰友子、无位橘朝臣忠子、並叙從四位下、從五位下綾公姑繼從五位上、无位藤原朝臣香子、藤原朝臣貳子、正六位上安倍朝臣厚子、並叙從五位下、

〔三代實錄 清和三〕貞觀元年十一月廿日辛未、詔曰、天皇我大命良万止勅大命乎衆聞給止宣、神祇官人等乎始天、大嘗會爾參出來天仕奉流悠紀主基二國乃國司、郡司、百姓、及司司人止毛番上已上爾御物賜布、又悠紀主基兩國乃主典與利以下國醫師爾至麻氏、及諸郡司主帳已上乃把笏者爾位一階上賜治賜布、又悠紀國乃今年庸物、主基國乃今年田租免賜布、兩國乃卜相郡司爾波特御物賜波久止宣、神祇伯、大副、及二國齋部少領已上、加賜馬各一匹、授正四位下源朝臣全姫從三位、無位爲子女王、意子女王、異子女王、並從四位下、從四位下伴宿禰友子從四位上、無位源朝臣盈姫從四位下、從五位上菅原朝臣閑子、甘南備眞人伊勢子、並正五位下、從五位下田口朝臣敏子、菅原朝臣勢子、並從五位上、外從五位下賀陽朝臣始子、無位源朝臣高子、橘朝臣常子、藤原朝臣繼子、藤原朝臣商子、藤原朝臣榮善子、百濟王香春、笠朝臣道子、並從五位上、從六位上江沼臣河子從五位下、

〔三代實錄 陽成三十二〕元慶元年十一月十八日乙卯、夜天皇御豐樂院、自供大嘗祭、　廿二日己未、授右衞門大尉正六位下藤原朝臣佐命從五位下、進女御正三位藤原朝臣多美子階加從二位、无品隆子女王、並重子女王、與侍從四位上甘南備眞人伊勢子正四位下、二十五人　廿五日壬戌、悠紀主基國宰、郡司、歌女、百姓賜祿有差、

〔日本紀略 醍醐一〕寛平九年十一月廿日辛卯、天皇御八省院、依大嘗會也、　廿九日、女叙位、

〔日本紀略 冷泉五〕安和元年十一月廿四日癸卯、戌刻天皇遷御八省院、依大嘗會也、有叙位、　十二月四日壬子、行女叙位、

〔經信卿記〕治暦四年十一月廿一日、今日叙位議也、依陣儀未刻參內、人々未被參之間暫候陣座、此間殿上人參、若宮御方、幷遙見五節所、申刻許、右府〇藤原師實內府〇源師房以下被參陣、次藏人連々召遣參殿

上、（外記筥文知例）但朝所異角也、弓場殿代幄中、大臣南面西上、納言（西面北上）參議（北面東上）列立、下臈上達部等依處狹不立列、大臣參上、次納言三人取筥文被昇自小板敷、次群卿經殿上參上、事始之後、左大辨（○藤原泰憲）依大臣命、尋遣諸宮御申文等、次被問群卿云、佐伯氏可給爵人誰乎、人々被申忽不覺由、仍被敘外記二人爵、此事有歟、先度敘爵佐伯幷伴、其氏者先可被尋、可敘人々臨期給爵外記二人、如何、又一人已敘爵、又何被加敘乎、亥剋事訖、撒位被披殿上之後、人々退出、入眼皇太后宮權大夫左衞門督也、

〔本朝世紀〕治曆四年十一月廿一日庚寅、敘位儀也、右大臣、內大臣以下參入、　廿八日丁酉、女敘位也、內大臣以下參入、（○中略）

從四位上高階朝臣平子（眞子內親王給）　從四位下藤原朝臣忠子（馨子內親王給）

正五位下船朝臣滋子（陪膳采女）　從五位下藤原香子（藏人）

中原淸子（御匣殿藏人）

（獻舞姬人々內大臣）源淸子　藤原姬子　大江長子

（右近中將藤原宗俊朝臣）藤原經子　藤原琳子

已上五人五節舞姬

（左近中將源隆俊朝臣）藤原相子（太皇太后御給）　藤原菩子（皇太后御給）

（周防守藤原眞綱）源宗子（中宮御給）　平義子（皇后宮御給）

（備前守大江淸定）藤原邦子（祐子內親王給）　淸科成子（內敎坊）

外從五位下下毛野長子（采女）

〔中右記〕天仁元年十一月廿日丙寅、今夕依有敘位儀、（○中略）祭主敘三位、希代勝事也、長元比、輔親以後、此事久絕也、但崇神德人自致此位歟、悠紀國大掾三人之中二人不闕爵、依人給也、　十二月五日庚辰、今夕大嘗會女敘位也、（○中略）今度御乳母二人無尻付、（或有歟）又無上階人、抑聞大內記云、若女敘位中

有女上階時、可入別宮歟如何、答云、女敍位雖上階只入一宮也、於男位記者、依有次第入別宮、至上階者不次第、仍只入同宮也、其理可然、

〔本朝世紀〕康治元年十一月九日丁酉、此日內大臣參仗座、被行大嘗會國司除目、參議藤原公行卿書之、又有賑給并位祿等定、〇中略

近江大掾賀茂憲榮兼

少掾藤原俊永　安倍盛言　同　親良　紀　成俊

藤原宗敎　中原元貞　平　材安　大中臣季近

紀　行信　大中臣友正

丹波大掾丹波重長兼侍醫

少掾同　良康　藤原道能　賀茂憲仲　同　憲定

和氣兼相　大江俊村　三善宗親　淸原友親

大江重盛　平　貞仲　惟宗廣告

康治元年十一月九日

十四日壬寅、今夜大嘗會敍位議也、於攝政直廬被行、桂芳坊也、參議藤原公行卿候執筆、十八日丙午、今日有女王祿事、

〔兵範記〕仁安三年十一月六日癸亥、行水解除、先參殿下申敍位日事、廿日丁丑五節參、廿一日戊寅可被行敍位、而當御衰日、先例度々當御衰日之時、丑日被行之云々、仰云、可申院〇後白河者、七日甲子、參院申敍位日事、仰云、御衰日有憚、丑日可行者、參殿下申御旨、次可奉行件敍位之由與奪藏人大進了、十三日庚午、今夕可被行國司除目、仍守基範注申少掾所望交名七人、行事所擧三人、相加注奉狀、

〇中略

大嘗會悠紀所望近江掾

正六位上平朝臣盛成　正六位上中原朝臣盛貞　正六位上津守宿禰國光　正六位上中原朝臣成業　正六位上中原朝臣親賴　正六位上賀茂朝臣爲平　正六位上中原朝臣長盛

正六位上菅野朝臣季長　正六位上中原朝臣實親　正六位上中原朝臣兼誠

右爵料進納已畢、仍所請如件、

仁安三年十一月十三日

修理左宮城判官正五位下左大史兼備前權介小槻宿禰隆職

正四位下行權右中辨平朝臣信範

於大內被行大嘗會卜食國司除目、左大臣以下著仗座、藏人左衞門權佐經房下申文、行事所擧狀等右大辨實綱卿執筆云々、　廿日丁丑、職事奉仕叙位御裝束、其儀飛香舍南面庇卷簾、副立四尺屛風、西屛風前敷御座(厚疊座)　其前敷例圓座、爲執筆座、其東間以東二行對座、敷高麗緣六枚、爲公卿座、東庇上庇簾、敷高麗帖四枚、爲公卿息所、此外儀如例、申刻卿相參著仗座、殿下出御御座、次藏人大進奉仰召公卿、其詞可尋知、但人々コナタヘト云々、次公卿權大納言實房、中納言宗家、實國、資長、忠親、參議親範、家通、實綱卿參著、次置宮文、左中辨俊經朝臣、藏人少輔、同大進役之(左少辨爲親遲參、又依左中辨役、下官不取、仍職事兼人)取之、次右大辨依御目參著圓座、次藏人大進依召持參續紙(料紙二帖、懸五六枚、置柳筥、持參之)、次議始供饌、左中辨爲殿下陪膳、依家司殿上人也、家司職事勤役並居公卿饌、內藏寮任例調備之(折敷高坏、殿下三本、納言以下二本)、次勸盃、下官役之、殿下令取坏之後、取酌令傳新大納言給之時、返酌於藏人資綱、次居火櫃、諸大夫役之、此間及昏黑供燈、藏人等役之、事畢中納言宗家、參議家通行淸書事、納言進弓場奏位記、初度仰令請印、次仰令次第、次留御所仰聞食、　十二月四日辛卯、午後參內、大嘗會女叙位也○(中略)典侍二人(別當中納言)不叶勸文歷、去春讓位之時任之故也、仍以御乳母勞、入袖書、(注云御乳母)

陪膳采女二人依寛治例献申文、

第一出雲、位依究四位正下譲與息申請、袖書云采女清子、以神膳供賞譲與息女康子申、今一人

以御膳宿奉叙爵、短冊云、采女申爵、

掌侍二人又雖献申文、同不叶、歷年、只依当職労被叙爵也、短冊云、掌侍申爵、

命婦蔵人依当年賀茂祭使預爵、水取、闈司、東豎子各献申文、是依小輪転輩皆付短冊了、依前文可被叙一人之故也、

御匣殿蔵人坊家掌縫等如例

五節舞姫五人可叙爵、其中権中納言別当左大弁等被献名簿、仍袖書注其人申、能登守通盛朝臣、舞姫献例申文、短冊云、五節舞姫申爵、是長元九年、寛治元年例也、○中略

次諸大夫奉仕女叙位御装束如例、除目叙位儀、殿下御座敷簾外、其前居御硯筥、入夜殿下出御、○中略叙位了、執筆進殿下退出、次召兼光被尋仰入眼上卿、兼光申、新藤中納言候内、次召件卿、納言参上、給叙位向仗座、被行位記事、殿下入御、右大弁退出、○中略

正五位下藤原綱子御乳母　平清子同

従五位下高階行子掌侍　藤原能子同　藤原範子御匣殿　藤原信子命婦

藤原弘子蔵人　源雅子太皇太后宮　藤原俊子高松院　平信子皇太后宮

藤原香子中宮　藤原成子舞姫　平久子同　源保子同

藤原季子同　安倍康子采女、源清子依神膳譲、　安倍永子采女　橘皓子掌縫

藤原今子内教坊

外従五位下河内春子水取、小輪転、

主殿女孺依切杭必可預叙爵、而申文注親母、依母子見存非切杭儀、不被叙爵、已行事失禮也、向

後猶可憑先母若亡母也、
東豎子、聞司隸獻申文、依小輪轉巡、被叙水取了、女史雖進内侍所奏、不被叙如何、

〔玉海〕壽永元年十一月廿三日庚寅、此日大嘗會叙位也、於攝政直廬行之、執筆源宰相中將通親參入、公卿中御門大納言只一人云々、件人早出之間、無入眼之上卿、及曉更之間、攝政逐電退出、腹立云々、親定朝臣捧叙位雖催上卿、敢無指出之人、空曙了云々、希代之勝事也、近世之爲體、悲而有餘者歟、

〔明月記〕建曆二年十一月二日、傳聞今日延引、來五日拍子合幷國司除目云々、爲家原定家子○記者藤所望事、度々示付左近、未知許否之由今日猶示送、　三日、今朝重示清範朝臣、猶不知許否、心神太不快、　四日、申時許清範朝臣消息云、今日伺天氣頗以快然、但不知其許否、所申具聞食云々、心神彌物忩、予所申非望、今度加階、只廻立殿行幸夜著私小忌帶平胡籙供奉、少年者榮華爲養老眼之由也、　五日、今日國司除目云々、○中略中刻許女子告送云、越中内侍云、近江介事内々被仰光親卿、事已成就歟、披見此狀心中如聞天香樂、予本自偏不貪官爵、只思境節之榮華、於廻立殿行幸之、彖國次將裝束太珍重也、若有勅許者、喜悅更無物取喩、每事施面目、可謂至孝之子、酉刻清範朝臣又告送可成就由、每聞感悅千廻、答深恩之由了、博陸參入給、只今其沙汰最中云々、束帶裝束劒平緖笏等送之、尋聞除目事、實者除目了進殿上口可拜舞之由示送之、遙授拜賀大略雖斷絕、今度事面目已過分之上是故實也、遙授之賀内裏申也、不申他所之由載北山抄、仍示此由、深更範列爲裝束送之歸來云、除目了、束帶參上拜賀訖者、先是少將示送、近江介時賢、權介爲家、丹波介淸親、權介親通被任之、猶々自愛云々、此兩人更不存知、爲家出仕之故存吉事也、怨被申任、　十日、予付越中内侍奏聞、以爲家加階、老父叙正三位哉、仰云、所申雖似可然、上臈已有十八人、其中十一人可訴訟人也、不知誰人々之奏聞歟、其外無得□其中相國子公經子等有之、然者不叙而可待後歟、申云、以及賞申父恩是依嚴重賞爲超少年、有若亡上臈也而依其人多不被免者、父漏恩、子爲人被超、全無其益、早以爲家可被叙、但賴平實氏兩卿依今度國司可叙入也、爲之如何、又仰云、兩國司宰相

今度不可叙、只各可待後歟、猶申云、人不超者可待後、其身有超越之人父漏恩者、只早可被叙、此上不承左右、

〔玉蘂〕嘉禎元年十二月九日、今日大嘗會御調度御覽幷女叙位也、○中略執筆摺墨染筆問、加階人數、予答云、三四人許歟、（院折紙給之、仍仰之由、）執筆取續紙染筆書從五位下、（置二端一枚）次取藏人申文披見、讀申置硯南、叙人口句申文置硯北、次叙御匣殿藏人、其說同前、次執筆取笏申云、院宮御申文、予目之執筆召男共、六位藏人重輔參上、執筆仰云、近衞司誰カ候フ、重輔申云、能定候、仰可召之由、則右少將能定參上、執筆仰云、院宮御申文、能定退下、（寬治以頭中將召之退出）此間予仰可叙他者之由、執筆申云、可叙何者哉、予云、若可被叙命婦歟、執筆撰取申文叙之、先例多書藏人上、而藏人上不置所、仍書御匣殿藏人下、是非無强非失歟、次能定持參院宮御申文、執筆取之置前、伺予氣色、置笏進之、今度尤可推硯歟、是又略說非可咎、仰、仍予取之置前、一々引禮紙、（封紙入硯筥）次御申文等卷籠北白川院御申文中、授執筆、取之置硯南、此間予卷禮紙等置硯筥蓋、次叙院宮給仕、次第一々取之讀申叙之、此中皇后宮御給名字親子云々、是修明門院御名也、仍仰善由、執筆不慥覺、若範子云々、予云範能卿室名也、女院等名歟、親子被改範子、次又改親子云々、依不審召高嗣問之、申狀不分明、仍仰可問大外記之由、高嗣退下問之、歸來云、親子爲女院御名之由所改、置申云々、仍不令叙之、母后御給若可優免歟、然而循不覺悟、仍不叙也、（後日引檢先例、如此一字誤書直叙之有例云々、）次取空勘文、自庁卷寄置硯左、取內教坊申文叙之、內教坊釆女等年給也、女史、掌縫、女醫等依無大輪轉皆直叙之、而大嘗會女叙位、康治、平治、建曆皆叙之、寬治叙女醫一人、仍任彼例令叙女醫一人、但不叙也、仍叙外從五位下、爲叙舞姬、小輪轉等從五位下與五六行置所書外從五位下、是予告仰也、次叙五節舞姬、撰取申文叙之、四所獻申文、次叙四人、是寬治、天仁例也、（右大臣申文舞姬不書姓、是年月日下書大臣位署、仍喚予息申文云々、理可然、建曆予申文又如此、）次執筆取笏申云、小輪轉勘文召サレ予許也、執筆召高嗣仰可召輪轉勘文之由、則持參之、執筆取之、列禮紙披置硯左叙之、先例多先覽攝政之

後叙之歟、今度叙闌司當巡也、以年第一者叙之、是年限遙者也、近代執筆多有書誤歟、次叙加階道也、先從五位上、次正五位下、此位叙人只一人也、而少置所之間無其所、叙位故實加階書樣、能々練習之、不可書也、拔見每一階書叙人、其末置一所也、其廣寸法同樣也、或狹或廣不宜也、右大臣室叙從三位、是御乳母勞也、雖無位直叙三品近例也、先是高嗣朝臣云、大臣室無尻付、御乳母多有尻付如何、予云、右大臣室有尻付定事也、執柄室又有尻付、最可准歟、仍書御乳母、一々叙了、〇中略今日無申文内覽、是女叙位例也、

〔平戶記〕仁治三年十一月四日壬午、今夜被行大嘗會國司除目云々、

近江權守藤原公光兼　介藤兼繼兼　權大掾和氣爲成兼　權少掾藤近行　安部昌平　同晴平　中原盛重　安部範職　清原爲蔭　惟宗信重　津守助茂　玉造景里　中原盛時

備中權守藤原定嗣兼　大掾丹波忠氏　權大掾惟宗昌盛兼　權少掾平範定　大中臣定景

安倍滋房　安倍晴信　中原能定　菅原長秀　惟宗盛倚　忌部季秀　鴨弘正　賀茂益平

除目之儀如例云々、新宰相右筆之、公光卿雖失時、此御字又爲權頻有恩、可哀可哀、　六日甲申、今日可被行除目云々、〇中略

除目聞書

神祇權少副齋部親倚主基齋場所鳥居功　內舍人藤原盛時臨時內給　橘賴清同　源親重同　同親倚　同

信直同　藤原信遠主基齋場木柴功　同盛遠　治部丞中原國繼同小忌功　源國盛同齋場所木柴功　兵部少輔

平範繼　丞神宗兼　刑部丞藤原盛清悠紀齋場所木柴功　同親繼　木工助藤原俊繼　允同仲業功

源寵功　左京權大夫藤原經朝　修理亮紀文昌同齋場所木柴功　進同康昌　左近將監源宗房主基大嘗

會功　大中臣俊忠同功　左近將監藤原吉盛功　中原盛親功　左衞門尉橘秀村功

十二日庚寅、今夜被行大嘗會叙位、〇中略

叙位聞書

正二位藤原公基（中宮御給）　正三位藤忠高（臨時）　藤原公光（近江權守）　從三位藤原定嗣（備中權守）　正四位下加茂俊重（臨時）　藤原公脩（近江權介）　藤原良嗣（安嘉門院御給）　藤原基雅（備中介）　從四位上藤原兼繼（近江介）　藤原公朝（臨時）　從四位下丹波忠氏（備中大掾）　正五位下和氣爲成（近江大掾）　中原師顯（臨時）　從五位上藤原永實（從下一）　大中臣忠長（臨時）　惟宗昌盛（備中權大掾）　藤原公貞（備中權介、實直親臣讓）　平親望（備中守）　從五位下兼行王（天曆御後）　源則長（藏人）　平爲時（式部）　藤原惟忠（民部）　源定成（氏）　藤原雅俊（氏）　橘以氏（氏）　鴨基長（熙子内親王給）　藤原用澄（諸司）

廿七日乙巳、今夜被行女叙位、其次又有男叙位云々、兩公被申障、仍堀川大納言（具實）勤執筆、後聞多有違失等、叙位簿以徒手奏聞返給、盧神宮文奏云々、聞書及後朝風聞、

從五位上惟宗元子（陪膳采女）　從五位下源行子（藏人）　藤原正子（御匣殿藏人）　藤原保子（永明門院御給）　藤原喜子（中宮御給）　平惟子（掌侍）　源盛子　中原種子（内教坊）　橘石子（主殿女嬬）　藤原同子、　源艶子　藤原忠子　源仲子　藤原行子（已上五節舞姬）

正三位大中臣隆通（祭主）

奏壽詞之賞、代々被行之歟、而今度不望申、有子細云々、然而有沙汰遂被行也、

〔永和大嘗會記〕廿二日、〇永和元年十一月けふは寅の日なり、〇中略大嘗會の叙位あり、右大臣けふ拜賀を申て、やがて執筆に候す、太閤簾中にさぶらはる、關白著座、宮文にて新大納言忠光、藤中納言保光、侍從中納言公時などなり、參議中御門宗泰一人さぶらふ、執筆の儀つねのごとし、此叙位は、悠紀主基の大嘗會に供奉したる人々に位を給なり、

〔薩戒記〕永享二年十二月十八日甲寅、今夜上皇被仰定親云、今年可被行大嘗會女叙位、執筆事可存知者、奏奉了之由、又勅定云、有被延引明春之例歟之由思食、于今御無沙汰之處、嘉例皆年内被遂行

之、必可被行之由、頭辨所申也、仍俄有此沙汰者、　十九日乙卯、巳刻許中御門大納言(俊輔)被送消息云、可被行女叙位之由只今女房奉書如此、執筆事可存知、日次未定、重可申者、答且可存知、日次治定者、重可參存之由申了、女房奉書返送之了、執筆事可仰予之由所被仰也、〇(中略)酉始刻藏人左少辨明豊送御敎書云、

來廿七日可被行女叙位、可令參仕給者、攝政殿御消息所候也、仍上啓如件、

十二月十九日　　　　左少辨明豊

謹上中山宰相中將殿

廿五日辛酉、昏黃之程中御門大納言(俊輔)光臨、被示合女叙位叙人等事、

一典侍當時三人、所謂綱子、(従四位下、故雅宣卿女、)光子、(正五位下、入道一位有光卿女、)條子(従五位下、予妹、)等也、綱子、光子、去春御即位女叙位之時加階了、於條子者爲理運、殊御行幸茄屋勞有之、勿論、但又雖去春加階之人、猶可被叙歟、可伺定云々、

一掌侍當時二人、茂子(勾當、従四位下、)藤子(従五位下)也、同皆去春被叙了、然而於勾當內侍者、爲女工所勾當之間、若猶可加階歟、同可伺定云々、

一藏人當時一人之外無之、又去春叙爵了、重可被加階哉否、可伺申云々、

自餘申文出納作上之也者、　廿七日癸亥、今夜可被行大嘗會女叙位、予候執筆、彼叙雖等爲執筆、甚難堪事也、其儀見次第、入眼上卿勸修寺中納言(經成)也、

〔親基日記〕文正元年十二月廿五日、大嘗會總御大刀進上也、　廿六日、掃部頭之親爲大嘗會中沙汰忠賞、御腰物(助宗)御大刀(包平)被下之、　廿九日、之親爲大嘗會總奉行賞、可被改官位之旨忝被染勅筆、仍任修理大夫、叙従四位下、爲諸大夫列、(康正二四品歟)傳奏廣橋黃門御使也、

〔以事卿記〕文政元大嘗會一會文書部類

祿法（料紙闕紙一枚、入ヶ折無界紙、）

合見參五位已上

大臣二人料

絹百匹（各五十匹）　綿八百屯（各四百屯）

大納言四人料

絹百二十匹（各三十匹）　綿千二百屯（各三百屯）

中納言三人料

絹七十五匹（各二十五匹）　綿六百屯（各二百屯）

參議四人料

絹八十匹（各二十匹）　綿四百屯（各百屯）

四位十人料

絹六十匹（各六匹）　綿三百屯（各三十屯）

五位四人料

絹十六匹（各四匹）　綿八十屯（各二十屯）

惣下

絹二千匹　綿一萬屯

用

絹四百五十一匹　綿三千三百八十屯

殘

絹千五百四十九匹　綿六千六百二十屯

文政元年十一月廿四日

〔輔世卿記〕嘉永元年十月廿四日甲子、御所より仕丁使來、右者日野頭辨様より御封中を以、文政之度、悠紀主基之節會祿所、史著座候哉、祿者召使取候哉、又國司之撿取候哉、早々御取調御返答有之候様御達之所、御承知之旨御返書被遣候也、

免租庸

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁元年十一月甲子、免參河、美作兩國田租、以供奉大嘗也、

〔文德實錄 三〕仁壽元年十一月乙未、策命曰、(中略)悠紀國乃今年庸物、主基國乃今年田租免賜(布、下略)

〔三代實錄 三 清和〕貞觀元年十一月廿日辛未、詔曰、(中略)悠紀國乃今年庸物、主基乃國乃今年田租免賜(布、下略)

〔三代實錄 三十二 陽成〕元慶元年十二月廿一日丁亥、美濃、備中兩國、供奉大嘗會悠紀主基、仍免當年庸米、

〔三代實錄 四十八 光孝〕仁和元年十二月廿一日辛未、除免伊勢、備前兩國百姓去年庸、以供大嘗事多費也、其卜食郡免田租、

歌詠

〔北山抄 五〕大嘗會事

勘標并御插頭御屛風等本文事(作風俗舞詠事)

詠風俗及春稻歌等事

〔袋草紙 一〕大嘗會歌次第

先從國々註進所々名於行事辨、下作者許、作者撰便宜所々(各可避樂忌)諷詠之、進行事辨所、以風俗歌下樂所、(以之人々作樂)以屛風歌被下繪所、(以之書圖之)若和歌有遲々之時、所々名ニ書詞先進之、和歌ハ追進之、(件調作者計之)又風俗歌許進常事也、書和歌之時、家々之說不同也、輔親、兼澄等假名、又風俗幷屛風歌等書一紙、義忠假名別紙、資業之流眞名別紙、家經之流歌假名詞眞名一紙、(又以神樂歌爲初、自餘人以稻舂歌爲初、)匡房眞名別紙、(但天仁度假名也)以下人々皆眞名別紙、但故左京詞眞名歌假名一紙也、長和以上人書樣不信也、進覽之

時可有禮紙也、　宮內少輔伊行云、件歌先被下淸書所、而又書三通、送辨許、一通一紙書稻春歌神樂兩首一枚緘書風俗歌八首一通二枚書屛風歌十八首、並稻春歌ヲバ下云々、風俗ハ下樂所、屛風歌下繪所、又云、行成幷伊房書置秘書有、號右筆抄、書寫之間口傳也、件書悠紀ノ歌ハ假名書之、主基歌ハ眞名也、作者皆如此存、淸書人又可然云々、但近代不必然歟、大嘗會、天武天皇御宇白鳳二年癸酉十一月始之、但歌不見、而自承和御宇出來、但歌少々歟、勤悠紀主基國名、其初丹波播磨也、其後因幡、美濃、尾張、遠江、但馬、近江、備前、美作、越前、參河、伊勢、備中、隨令下用其郡、但書嘉名郡一兩ヲ下之歟、近來以後偏悠紀國近江、主基國丹波、備中替々勤也、但冷泉院時主基國播磨也、〇中略

行事所獻和歌之消息書樣

獻上

主基方和歌二通

右滿八旬之季算、致數度之忠勤、於今度者可預優恤也、以此旨可令奏聞給歟、敦光謹言、

十月八日　式部大輔敦光

謹上權右中辨殿

〔八雲御抄二作注〕大嘗會歌者、上古所見不詳、起自承和于時丹波播磨國也仁明、淸和、陽成、光孝在古今、其後丹後、因幡、美濃、尾張、遠江、伊勢、參河、越前美作、備中、備前、但馬等郡名少々詠之、而延喜以後偏以近江爲悠紀、以丹後、備中替々爲主基也、後冷泉院主基爲播磨歟、唯先例歌人詠之、自中古儒者必交之云々、〇中略行事辨注國所々名下作者、作者撰其所計其詞詠之、遣行事辨家、以風俗歌下樂所、以屛風歌給繪所、若歌遲々時ハ、以名所名加詞且遣之、風俗歌許遣先例也、和歌書樣、或以神樂歌爲始、或稻春歌爲始、又賁業家には眞名別紙、風俗與屛風也、家經には假名一紙、匡房眞名別紙、但匡房一度書假名、他人皆眞名別紙也同賁業說、但顯輔は、詞は眞名、歌假名也、悠紀主基共十月上旬可進、皆遣行事辨許、

近代先經院奏流例也、

〔殘夜抄〕大嘗會には、和歌所いはひの歌をよみてたてまつりたるを、風俗所にくだして、歌のふりをつけて、其歌のこはぶりに隨て、悠紀主基の樂人樂を作たるにて、左右舞人まひを作るべきとかや、されどこのころは樂も舞も其歌によらず、おもひ〳〵につくりあひたんなり、樂はがく、舞はまひといふたとへは、これよりおこるとぞふるき人は申し、

〔山槐記〕元暦元年九月十五日辛丑、悠紀史國通、依二兼命一持二來日時四通占地美名注文一通一、〇中略

近江國

注進風土記事

志賀山　大松原志賀　笊立郷同　青柳里同　信樂杣甲賀　佐野山里神崎
千松原犬上　千鳥浦神崎　千倉里甲賀　安吉郷蒲生上　富羽里野洲北　櫻村同
益田橋蒲生下　秋昌村野洲　大原山甲賀東　朝日里淺井　松江同　千束橋蒲生下
勝野濱高島　音羽山同　万木植杜〇植恐誤　廣瀬郷同　萬農池　稲倉山淺井東
長倉山　万木泉　玉井栗太　高宮郷犬上　河上里善積　千草原
萬世濱　鵜濱井　鏡山蒲山　會坂關志賀　石根山甲賀　三上山
高月川淺井　打出濱志賀　日雲里　玉蔭井　勢多橋栗太　梅原坂田
佐野船橋神崎　祝郷　大富山　泉川　五井江栗太　長溝池
玉川里　石根山甲賀　板蔵山　神山　高御藏山　彌高山坂
亀岡　吉水郷　安良郷栗太　小松原志賀　音高郷　富津濱同
國見岡　玉野郷　比良山　藏部山　心見里志賀　岡見牧
篠原堤　大瀧山　大津浦　富野山　日吉社　彦根山犬上

石山　金柱（古麻長者持佛也）　外白川（同）　衣川（志賀）　内白川（甲賀）　安曇川（同）
龍川（栗太）　枌瀬（伊賀）

右注進如件

元暦元年九月　日

此文不加懸紙入覧筥見了返給、

〔行厚記〕文政元年八月廿一日、主基所丹波國風土記撿按御許ヘ被覧ニ付、午半刻著束帶先廣橋殿ヘ參上、家司濱路雅樂權助（狩衣）出會、申次之後辨殿御面會、（雖被申御場所、中辨亭ヘ大史參上之作法、舊例不分明ニ付、於内々方被渡之云、）予空筥ヲ持參進辨、辨入風土記賜之、仰可覧撿按許之由、予取之退出、直ニ向撿按亭、（大炊御門大納言殿、）諸大夫（束帶）出會挨拶、先左少史春芳參上（所悠紀）覧近江國風土記了、次ニ予參中門外、諸大夫出會相揖、申次了再來會相揖了、予取筥（入風土記）參進、到寢殿簀子候氣色、大納言殿目許、予受目參進、進筥（入風土記）退出簀子跪候ズ、御覧了有御目許、予受目參進賜筥（入風土記如元）無仰詞、予取之出簀子一揖、了經本路退出、再到御玄關、諸大夫出會、御挨拶了退出、次右中辨殿亭ヘ歸參、辨殿御面會、返上筥（入風土記）申仰詞無之由、辨更ニ賜之、右少辨ノ許ヘ可持參之由仰之、予取之退出、向右少辨殿亭、（和歌作者）家司眞繼美濃守出會、挨拶之後到中門外、家司來會、先有申次之事、家司歸來一揖、（辨殿依所勞直不被請之、令家司被請之由被申答由也云々、）予答揖了取筥（入風土記）入中門、依家司按内昇中門廊著座、（南面ニ敷薄帖、）家司出會、予取廻筥取笏一揖、家司取之退入、暫テ返賜空筥、予取之一揖起座、經本路再參御内々方、挨拶了退出、又廣橋殿ヘ歸參ル、右少辨殿許ヘ持參相濟候旨御屆申上、右中辨殿御面會御挨拶了、

〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年八月十八日、來廿一日撿按許（江）悠紀方風土記被覧ニ付、午半刻出仕之事、悠紀方被達之、同日主基方辨被達之旨兩行事史屆來事、　廿一日、兩行事史風土記持參、無恙相濟旨屆來事、但當局商量之儀無之事、

〔大嘗會書類〕嘉永元年大嘗會悠紀主基風土記

近江國

悠紀所風土記事

志賀郡

志賀浦　大松原　松本村　筏立郷　會坂關　長等山　打出濱　小松原　勢多橋　心

見里　衣河

栗太郡

玉井　五井江

甲賀郡

南土山村　信樂杣　千倉里　大原山　石根山　藏部鄕　內白川　安曇川

野洲郡

富羽里　櫻村　鏡山　三上山　安河　笠原鄕　山田里

蒲生郡

松尾山　蒲生野　安吉鄕　益田里　千束橋

神崎郡

佐野山里　千鳥浦　佐野船橋

愛智郡

愛智河

犬上郡

千松原　高宮鄕　鳥籠山　伊佐也河　彥根山　千坂浦

坂田郡
朝妻山　梅原　伊吹峯　彌高山
淺井郡
朝日里　松江　稲倉山　高月河
伊香郡
位山
嶋
美尾山　勝野濱　板倉山　河上里　香羽山　万木杜
右注進如件
嘉永元年八月廿三日

丹波國
主基所風土記
桑田郡
埀井水　川人里　愛敬岡　入千代池　稲春岡　須形淵　小松崎　神吉郷　桑田里
稲津村　足穂村　並賀村　川關津　石代山　星尾村　月呼杜　鳥井村　千年山
船井郡
西田村　入木村　鼓打村　布引瀧　朝倉山　紅村　船岡山　櫻井山　高岡村　高屋村　母衣杜
多紀郡
粟井里　重富村　福住山　天曳津　長田村　遊楽里　老人杜　味間村　油井村

酒井村　駒桉村　雲岡村　福貴村　櫻山

氷上郡

上田村　金山　岡倉山　稻幡村　玉纏村　心樂里　稻村岡　千田村　稻津村　常樂村　竹田村

天田郡

豐富村　花並里　湊岡　鷲杜　千束橋

何鹿郡

吉美里　富緒川　長宮山　藤浪杜　篠杜　若槻村

嘉永元年八月日

〔古今和歌集二十大歌所〕

美作やくめのさら山さら〳〵にわが名はたてじ萬代までに

これは水のを和〇清の御べのみまさかのくにのうた

みの丶國せきの藤川たえずして君につかへむ萬代までに

これは元慶〇陽成の御べのみの丶うた

君が世はかぎりもあらじながはまの眞砂の數はよみつくすとも

これは仁和〇光孝の御べのいせのくにのうた

〔拾遺和歌集五賀〕仁和〇光孝御時大嘗會の歌　讀人不知

かまふの丶たまのを山にすむつるのちとせは君が御代のかずなり

〔古今和歌集二十大歌所〕　大とものくろぬし

あふみのや鏡の山をたてたればかねてぞみゆる君が千年は

これは今上〇圓融の御べのあふみのうた

〔新千載和歌集二十慶賀〕村上御時、天慶九年大嘗會主基方參入音聲、備中國高倉山をよめる、

よみ人しらず

雲の上に萬代とのみ聞ゆるは高倉山の聲にぞ有ける

〔榮花物語十日蔭の鬘〕ふゆの日〇長和元年もはかなくくれて大じやうゑ〇三條のいそぎせさせ給、されぞその日はたゞうるはしうぞある、悠紀のかたは大中臣能宣が子の祭主輔親つかうまつる、主基の方は前加賀守源兼澄なり、この人々輔親はよしのぶが子なればとおぼしめしたり、かねずみは公忠のべんのすぢなり〇公忠孫、信明子、などおぼしめして、歌のかたにさもあるべき人どもをあてさせ給へるなるべし、悠紀のかたのいねつきうた、さかたのこほり、すけちか、

やまのごとさかたのいねをぬきつみて君がちとせのはつほにぞつく、御かぐらのうた、おなじ人、

おほやしまくにしろしめすはじめよりやはよろづよのかみぞまもれる、まゐり音聲、たかみくら山、

よろづよはたかみくらやまうごきなきときはかきはにあふぐべきかな、樂の破のうた、しき地、

おほみやのまきちぞいとゞさかえぬるやへのくみがきつくりかさねて、樂の急のうた、かなやま、

かなやまにかたくねさせるときはぎのかずにおひますくにのとみくさ、まかで音聲、やすかは、

すべらきのみよをまちでゝみづすめるやすのかはなみのどけかるらし、又つぎの日の參入

音聲、ながらのやま
あめつちのともにひさしきなによりてながらのやまのあがきみよかな、樂の破のうた、よしみづ、
よしみづのよきことおほくつめるかなおほくら山のはせはるかにて
樂の急のうた
ゆふしでの日かげのかづらよりかけてとよのわかりのおもしろきかな、まかで音聲、やすらのさと、
もろ人のねがふこゝろのあふみなるやすらのさとのやすらけくして、主基の方いなつきうた、おほくら山、かねずみ、
ふたばよりおほくらやまにはこぶいねとしはつむともつくるよもあらじ、御かぐらうた、ながむらやま、
きみがみよながむらやまのさかきばをやそうぢ人のかざしにはせん、たつの日の樂の破のうた、たまゝつやま、
あまつそらあしたにはるゝはじめにはたまゝつやまのかげさへぞゝふ、おなじ日のがくの急のうた、いなふさやま、
としつくりたのしかるべききみよなればいなふさやまのゆたかなりける、おなじ日まゐり音聲、さゝれいしやま、
かずしらぬさゝれいし山ことしよりいはほとならむはせはいくよぞ、おなじ日のまかで音聲、ちとせやま、
うごきなきちとせのやまにいとゞしくよろづ世そふるこゑのするかな、みの日のがくのは、

とみつぎやま、

きみが世はとみつぎやまのつぎ〳〵にさかえぞまさんよろづよまでに、おなじ日のがくの急のうた、ながむら山、

よろづよをながむら山のながらへてつきずはこばんみつぎものかな、おなじ日のまゐり音聲、とみのをがは、

あめのしたとみのをがはのすゑなればいづれのあきかうるはざるべき、おなじ日のまかで音聲、ちゃがは、

にごりなくみえわたるかなちゃがはのはじめてすめるとよのあかりに、このおなじをりの御屏風のうたなどあれど、おなじすぢのことなればかゝず、

〔榮花物語 三十二 玉の村菊〕しも月〇長和五年になりぬれば、大じやうゑ〇後一條とて又人々ひゃきのゝしる、〇中略ゆきすきのうたども、れいのすぢおなじことなれどかたはしをだにとてしるせり、ゆきのかたのうた、備中國いねつきうた、内の藏人よししげのためまさ、たまだのこほり、

としへたるたまだのいねをかりつみてちよのためしにつきぞはじむる、すきのかた、大内記藤原のりたゞのあそん、

いはかきのはしふみならしはこぶなりそとものみちのみつぎゆたかに、ゆきすきのうたどもおなじさまにかやうなり、御屏風のうたためまさ、はやのといふ所を、

あきかぜになびくはやのゝはなすゝきはにいでゝみゆるきみがよろづよ、たまのむらぎくといふところを、これも御屏風、のりたゞ、

うちはへてにはおもしろきはつしもにれなじいろなるたまのむらぎく、にひだのいけ、ためまさ、御びやうぶ、

そこきよきにひだのいけの水のおもはくもりなきよのかゞみとぞ見る、かやうにおなじこころなればみなとゞめつ、

〔千載和歌集神祇二十〕長元九年後朱雀院の御時、大嘗會主基方の神あそびの歌、丹波國神なび山をよめる、

藤原義忠朝臣

ときはなるかみなび山の榊葉をさしてぞいのるよろづよのため

〔金葉和歌集賀五〕後冷泉院の御時の大嘗會の主基方、備中國二万郷をよめる、

藤原家經朝臣

みつぎ物はこぶよほろをかぞふればにまの里人かずそひにけり

同國いなみのさとを人にかはりてよめる

高階明賴

苗代の水はいな井にまかせたり民やすげなる君が御代かな

〔詞花和歌集雜十〕後冷泉院御時、大嘗會主基方御屛風に、備中國高倉山にあまたの人花つみたるかたかきたる所をよめる、

藤原家經朝臣

うちむれてたかくら山につむ物はあらたなるよのとみ草の花

〔千載和歌集神祇二十〕治暦四年後三條院の御時、大嘗會主基方神樂のうた、いはや山をよめる、

藤原經衡

うごきなき千世をぞいのるいはや山とる榊葉のいろかへずして

寬治元年堀川院の御時、大嘗會悠紀方神あそびの歌、諸神鄕をよめる、

前中納言匡房

いにしへの神の御代よりもろがみの祈るいはひはきみが世のため

〔新千載和歌集慶賀二十〕天仁元年大嘗會悠紀方、近江國石根山、　前中納言匡房

石根山やま藍にすれる小忌衣袂ゆたかに立ぞうれしき

〔詞花和歌集雑十〕今上〇近衛大嘗會悠紀方の御屛風に、近江の國板倉の山田にいねをおほくかりつめり、これを人見たるかたかきたる所を讀る、

左京大夫顯輔

板くらの山田につめるいねをみてをさまれる世のほどをしるかな

〔千載和歌集神祇十〕久壽二年院〇後白河の御時、大嘗會悠紀方の神樂の歌、近江國木綿の園をよめる、

宮内卿永範

神うくるとよのあかりにゆふぞのゝ日かげかづらぞはえまさりける

嘉應元年高倉院の御時、大嘗會悠紀方の神あそびの歌、近江國守山をよめる、

すべらきをやはよろづよの神も皆ときはに守る山の名ぞこれ

壽永元年大嘗會主基方の歌よみて奉ける時、神樂歌、丹波國神南備山をよめる、

權中納言兼光

みしまゆふかたにとりかけ神なびの山のさかきをかざしにぞする

〔増鏡一おどろの下〕同年〇元元年の十月廿五日に御禊、十一月十八日に大嘗會なり、〇後鳥羽主基がたの御びやうぶの歌、兼光の中納言といふ人、たんばの國ながたむらとかやを、

神代よりけふのためとや八束穗にながたのいねのしなひそめけむ

〔千載和歌集神祇十〕元暦元年今上〇後鳥羽の御時の大嘗會の悠紀方歌奉りける神あそびの歌、近江の國諸神郷をよめる、

藤原季經朝臣

もろ神のこゝろにいまぞかなふらしきみを八千代といのることは

おなじ大嘗會の主基方歌よみ奉りける神樂の歌、丹波國千年山をよめる、

藤原光範朝臣

ちとせやま神の代させる榊葉のさかえまさるはきみがためとか

〔增鏡一おどろの下〕建暦二年十一月十三日、大嘗會なり、○順徳新院○土御門の御時もつかうまつられたりし貴實の中納言に、このたびもゆうきがたの御びやうぶのうためさる、ながら山、

すがのねのながらの山のみねの松ふきくる風もよろづよのこゑ

〔增鏡四三神山〕神無月○仁治三年になりぬれば、御禊とて世中ひしめきたつも、思ひよりし事かはとめでたし、大嘗會○後嵯峨の悠紀がたの御屛風三神山、管さいしやう爲長つかうまつられける、

いにしへに名をのみきゝてもとめけむ三神の山はこれぞそのやま、主基方風俗のうた、經光の中納言にめされたり、

すゑとほき千世のかげこそ久しけれまだ二葉なる岩さきの松

〔新千載和歌集二十慶賀〕文應元年大嘗會主基方神樂に　從二位行家

色かへぬ榮かみ山の山かづらかくてやひさにつかへまつらん

文保二年大嘗會悠紀方巳日の參入音聲、近江國新居郷、　前大納言俊光

いにしへにやゝたちまさる御たからの新井の里はにぎはひにけり

〔永和大嘗會記〕廿三日○永和元年十一月卯の日なり、○中略いなつきの八乙女歌うたふ、其聲さやけく神さびておもしろし、○中略

悠紀はかけつみて千くらにおまろいれなれば　つきせぬ御代のためしにぞつく

主基は（なかさみのむらあはせ田にえめぬきて萬代ふへきはつほなぞつく）

〔親基日記〕文正元年十二月廿五日、齋郡（江州坂田郡、備中下道郡、）歌（○後土御門大嘗）

悠紀

いくよろづかぎりもえらず年をつむ千くらのいねのはつほをぞつむ

世にこゆる君が千とせのためしには坂田のいねのはつほをぞぬく

主基

すゑひさにちぎりてぞつくすむ民も吉田の村の鶴のこのいね

はる〴〵ときびの中山ふもとなるゆにはのいなばぬきつゝぞゆく

〔友俊記〕寛延もとの年十一月中の七日卯の日、大嘗會おこなはる、○中略

悠紀稲舂うた、近江國松本村、

萬津嚢止乃、牟良能波都穂乎、奴岐會女氏、那保與呂津世乃、多兔志楚登都久、

主基の方、丹波の國並賀村なる稲穂舂歌

須邏良嚢能、千輿能波志女仁都岐會牟留、奈見賀乃牟良濃、屋津賀穂乃伊穪、

〔以事御記〕文政元大嘗會一會文書部類

悠紀方（近江國）御屏風六帖和歌十八首

正二位藤原朝臣胤定

甲帖（正二月）

美尾山朝日初昇

あきらけき代のはつ春はのどかにものぼる朝日をみ尾のやまのは

龜岡松樹多生

かめをかに千もとの松の生ぬればやはようづ世のはるにさかえむ

梅原花樹盛開行人見之

ゆくひともめでゝぞすぐる梅のはらなにおふはなのふかきいろかを

乙帖三四月

朝妻山櫻漸開

ひもときしおさづま山のさくらばなかすみをわけてかをりそめぬる

藤江杜藤花多淀有祭神之人

かみのますふお江のもりの藤かづらちとせをかけてあふぐはふりこ

朝日郷民屋卯花得所

たみのとのさかふるときとあきらけきあさひのさとにさけるうのはな

丙帖五六月

筑摩江採菖蒲

つくま江にしげるあやめのながきねをきみがやちよのためしにぞひく

志賀浦納涼人望之

なにたかきまつのこかげのゆふすゞみすゞしさそふるしがのうらかぜ

河上郷行六月祓

かはかみのさとのながれのきよきせにきみよろづよとみそぎをぞする

丁帖七八月

蒲生野萩花芳開鹿來遊

さきみちしはぎのにしきをわけきつゝしかもかす〳〵あそぶかまふ野

鏡山明月清澄

すゑひさにうごかぬみよのかゝみ山かげあきらけく月にみがきて

秋富村秋稼得年

よろづたみあきとみむらにつむいねのとしゆたかなる御代あふぐなり

戊帖九十月

鳥籠山谷水菊花浮秋

千世ゑめてとこの山べにさくきくのはなのかふかくうつすたにみづ

石戸山有紅樹

きみが代のつきせぬあきをちぎりにていはとの山にそむるもみぢ葉

笠原郷時雨數降

君がめぐみさしてぞあふぐ笠はらのさともらさずうるふ志ぐれを

己帖十一十二月

安川千鳥群遊

ともちどりなれてこゝろもやす川に君を八千世とよばふこゑ〲

泉川有運調物之人

あめのしたたのしきみよにいづみ川霜をいとはすはこぶおほにへ

位山白雪積表豐年之瑞

わがきみがあまつ日つぎのくらゐ山ゆたけさ見せて雪もつもれる

文政元年十月十一日〇中略

主基方丹波國御屛風六帖和歌十八首　右少辨正五位下藤原朝臣隆光

甲帖正二月

朝倉山早霞發

遊太加那類、美與能志留之止、阿左可須見、安佐久良耶蒲爾、波屋多知仁計理、

紅村風暖梅盛綻

布久加勢毛、能登介幾波留止、牟女酒者那、佐可理比左志岐、久連奈爲乃武羅、

高岡山苗代蒔種

喜美加與者、多可乎加耶滿乃、布裳止田爾、万久奈波志路乃、多根裳都岐勢之、

乙帖三四月

櫻山花開行人見之

佐久者那能、會酒名仁之於布、左久良耶滿、由岐岐爾免都類、波留乃裳呂比登、

藤浪杜藤花多開遊客翫之、

波奈仁安加氏、屋須良不比登耶、布知那見酒、裳理能巨可計爾、千與毛倍奴遍之、

神山新佳祝懸葵

阿布飛久佐、會能加見耶萬仁、喜美加與乎、加計天裳伊乃留、登岐者可岐者仁、

丙帖五六月

雲岡村雨中農夫採早苗

布類安免裳、止幾乎多加倍壽、左那遍止留、巨呂登者之類岐、久毛遠可乃武羅、

桑田里家々蠶養

於佐萬連類、與酒志留之登氐、止志止志爾、久波田乃佐止者、己加飛壽流那利、

富緖川松根有納涼之人

遊久見都乎、牟須者奴左岐爾、數數志喜波、止美乃緖可者酒、滿津乃之太可勢、

丁帖七八月

豐富村黎民嘉樂

古登之那保、止與止見武羅邇、名宴之流久、仁岐波不太美能、亘衛曾喜己由類、

高屋村夜靜月淸明

安岐加勢毛、遠止勢奴與者者、都幾毛奈保、多加屋邇牟良能、名仁耶須武羅鋒、

稻村關稼得年

津見太女志、加須宴之良禮壽、以那牟羅邇、乎可多乃加理保、耶萬止美流滿氐、

戊帖九十月

長良村有谷々菊水

幾美加與波比、那可羅邇武良乃、太仁見都者、岐久能千登勢乃、之津久奈理計理、

岡倉山紅葉色々

阿喜不加見、氐良須宴美知乃、以呂以呂爾、仁之岐遠利奈壽、乎可久羅邇耶滿、

千田村運調物不絶

佐羅仁萬多、於左滿留美與邇、見都喜毛能、滿津太氐萬都類、千太乃牟良飛止、

己帖十一十二月

石代山採日蔭草

飛加計久佐、宇亘可奴美與邇、加左志登氐、伊波之呂也滿爾、止理曾曾女奴流、

疊杜霜後松呈貞

佐岐乃宴利、志毛能能千仁毛、安良波連天、美左乎太太之幾、滿都邇武良多知、

老人杜雪朝之望

加志巨久裳、美與爾登之布類、保止見江氏、由岐乎以多多久、於伊乘登酒毛理、

文政元年十月十一日

〔輔世卿記〕嘉永元年大嘗會傳奏奉行備忘

稻春之事〇中略

悠紀方　近江國土山村

宇良爾安布、都知屋萬牟羅爾、奴岐保之氏、幾美賀千登勢能、多免志爾曾津久、

主基方　丹波國並賀村

於保也志滿久爾志呂之女須、波志女仁者、奈見加乃牟良濃、伊禰遠都久可那、〇中略

近江國奏風俗、〇中略光成卿詠進、

神樂歌　石戸山

伊波度山、伊保津萬佐可伎、止理止理爾、以能留與古登波、和賀喜見濃多免、〇中略

丹波國奏風俗、〇中略光政卿詠進、

神樂歌　神吉鄕

佐加木波爾、由布登利志氏氏、幾美賀與遠、千與止裳伊能留、賀美與志能佐登、

〔長元大嘗會御屛風本文〕長元九年大嘗會悠紀御屛風五尺四帖本文

一帖

高辛氏以正月七日恒登東崗、命青衣人令列青馬七匹、調青陽之氣、馬者主陽、靑者主春、崗者萬物之始、人主之居、七者七曜之淸徵、陽之氣溫如也、

江陽縣北有魚穴、聖明之代二月八日、出嘉魚、名白景穴、其地多桃、竹、鵰鵠、白鶴、

平蓋山上多茄支、櫻、桃、洞中有道士館、傍山帶水、猿嘯鳥吟、蓋長生之勝地、舊老相傳云、張公求仙之處也、

二帖

西方有山、壁立千仞、深谷之中有獸、其文如豹、其角如牛、其名曰狡夏、見則其國大穰、

高寄縣有寄水、故高有高寄名、今俗所謂百尺水者蓋寄水也、古堰斷此水、以爲稻田數千頃、平昔人多以耕殖、

列嶽之中、一嶽在中、樹木茂盛、其高不知幾千仞、以六月祭之、如諸嶽之祠、法明則天下安寧、

三帖

上中之山生白鹿、仁獸也、白若霜雪、自有牝牡、不與衆鹿群、其壽千歲、五百歲則色純白、德至鳥獸則見、

安林之山、其陽多赤銅、其獸多虎、豹、犀、兕、有鳥其狀如䳢、而五采以文、名曰鸞、見則天下和平、

觀水者、西流注于流沙、是多鰩魚、狀如鯉、鯉身而鳥翼、蒼文而白喙、常行西海、游於東海、以夜飛、其音如鸞鷄、見則天下大穰、秋稼如雲、

四帖

周四年冬、旃塗國獻鳳雛、載以瑤華之乘、以五色玉爲飾、驅以采象、至京師、畜於靈禽之苑、飲以瓊漿、餇以靈實、

角獸者、瑞獸也、日行萬口以千里能言口曉四夷之言、明君聖王在位、明達方外、德被幽遠、則奉書而至、

琴鼓之山、其木多穀柞、多椒柘、其上多白珉、其下多洗石、其獸多豕鹿、多白犀、其鳥多鴻雁、麥寒而來、

〔兵範記〕仁安三年九月一日己未、內藏權頭長光朝臣獻大嘗會悠紀方本文一通、

勘申

悠紀方標山幷御插頭花等本文事

標山

崑崙山上〻〻〻〻〻〻〻〻

挿頭花
芝草壯似桑〻〻〻〻〻〻〻〻〻
洲濱
瀛洲在東海之東〻〻〻〻〻
仁安三年八月廿七日　正四位下行內藏權頭藤原朝臣長光
一通
勘申悠紀方御屏風四帖本文事
一帖
後漢元初三年〻〻〻〻〻〻〻
成王時然丘之國〻〻〻〻〻〻〻〻〻
漢宣帝神雀元年〻〻〻〻〻〻〻〻〻
二帖　三帖　四帖
已上本文各三如右
仁安三年八月廿七日　正四位下行內藏權頭藤原朝臣長光
件勘文三通、籠一懸紙、副書札、付下官、下官持向撿挍大納言亭、覽之、返給覽、殿下、又返給下、大夫史了、
屏風本文書寫下給、繪師能登權守宗茂、正文留官致沙汰、
〔以亨卿記〕文政元大嘗會一會文書部類
勘申
大嘗會悠紀方御屏風本文事
一帖

正月七日爲人日、以七種菜爲羹、

玄鳥至、玄鳥燕也、至者至人室屋也、常以春分至、

芝英者、王者親延耆養老、有道則生、

二帖

四月惟夏、運臻正陽、和氣穆而屬物、麥含露而飛芒、

仲夏之月、蟬初鳴、半夏生、木菫榮、

季夏之月、溫風始至、蟋蟀居壁、鷹乃學習、

三帖

七月七日、上于承華齋、忽有一靑鳥從西方來集殿前、上問東方朔、朔曰、此王母欲來也、

輕雲飄霏以籠朗、素月披曜而舒光、

彼芳菊之爲草兮、稟自然之醇精、當靑春而潛翳兮、迄素秋而敷榮、

四帖

豐年多黍多稌、亦有高廩、萬億及秭、

道術則白鹿見、王者明惠及下則見、

何時雪之嘉澤、亦應變而俱凝、隨同雲而下降、固需渥之所興、

文政元年十月十一日　從四位上行少納言兼侍從文章博士大內記菅原朝臣聰長○中略

勘申

大嘗會主基方御屛風本文事

一帖

律暖而池冰消、玉風和而園柳綻金、

春日載陽、有鳴倉庚、女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑、
東都龍興、觀有古松樹枝偃倒垂、相傳云、已經千年、常有白鶴、飛止其間、
二帖
夏至之日雨、名曰黄梅雨、
鯉最爲魚中之主、形既可愛、又能神變、乃至飛越山湖、所以琴高乘之、
風從離來爲順、其年大熟、
三帖
露色濃爲甘露、王者施德惠、則甘露降其草木、
八月涼風天氣晶、萬里無雲河漢明、
季秋赤雀銜丹書入酆、止于昌戸、
四帖
方塘含白水、中有鳧與鴈、
禮之於人、如竹箭之有筠、故貫四時而不改柯易葉、
騰黄者神馬也、其色黄、王者德御四方則至、一名吉光、乘之壽三千歲
文政元年十月十一日　　從四位下行侍從兼文章博士菅原朝臣爲定
〔代始和抄〕大嘗會事
插頭の臺御屏風以下の本文をば、大學頭文章博士などかんがへ申すこと也、風俗の和歌十首、この中に稻春の歌あり、又四尺の御屏風六帖、和歌十八首、歌仙ならびに儒林の人これを詠進す、或は兼作の例あり、日野一流には非成業の人不詠といへり、歌仙の例は顯輔、淸輔、俊成、有家等也、齋場所の額、御屏風の色紙形は、行成大納言の子孫相傳して書進す、

〔袋草紙一〕大嘗會歌次第

和歌作者

光孝天皇御時大伴黒主也

輔親　兼澄　三條院　　輔親　爲政　後一條院〔儒者始從此時〕
輔親　義忠　後朱雀院　　資業　家經　後冷泉院
實政　經衡　後三條院　　實政　匡房　白川院
匡房　行家　堀川院　　匡房　正家　鳥羽院
顯季卿出家後替之
敦光　行盛　新院　　顯輔　敦光　近衛院
永範　茂明　一院　　俊憲　範兼　二條院
顯廣　永範　新院　　永範　清輔　高倉院
兼光　季經　當今崇德院　　兼光　季經　今上

大嘗會和歌宣下狀

左京大夫藤原朝臣顯輔

右中辨源朝臣雅綱傳宣、權大納言藤原朝臣宗輔宣、奉勅、宜令件人勤仕大嘗會悠紀所和歌者、

康治元年八月十九日　修理東大寺別當兼大史笇博士攝津守小槻宿禰〔奉政重也〕

宣旨請文書樣　大博士師光草

某位某官姓朝臣名解申請宣旨事

一紙〔被下可勤仕大嘗會悠紀和歌狀上〕

右去某日宣旨、同某日到來、併某辨傳宣、某人宣、奉勅、宜令件人勤仕大嘗會悠紀所和歌者、

謹所レ請如レ件、仍注二事狀一謹解、

是ハ地下人請書様也

年號月日　　官位

謹請

大嘗會某方和歌事

右任二宣下旨一、可レ勤二仕之狀一、所レ請如レ件、

年月日　是ハ殿上人請文也、大概政宣下之時者、仰旨ト可レ書云々、

〔夜鶴庭訓抄〕大嘗會御屛風大事也、悠紀主基とて左右あり、五尺六帖四尺六帖づゝ左右にあるなり、五尺には本文を書、四尺にはかなを書、はかせ二人左右にして本文はかんがへて、やがて所のはかせ歌よみなれば、歌も兼よむ也、さらねば別のもよむ、悠紀の方の歌をばたゞかんなに、主基の方はさうに書、秘說也、

悠紀主基御屛風書人々

醍醐野美村　　朱雀、村上、道風

冷泉時文　　圓融、花山、一條、佐理

三條、後一條、行成　　後朱雀定賴

後冷泉、後三條、白河、兼行　　堀河伊房

本院(鳥羽)定實、章綱、　　新院(崇德)定信

近衛當院(後白河)朝隆　　二條院伊行

六條院同　　當今(高倉)朝方

〔吉記〕壽永元年六月八日丁未、藏人左少辨來臨、談二世事一、○中略、大嘗會本文、文章博士敦周、光範等朝臣

可勤申之、和歌悠紀前皇后宮亮季經朝臣、主基左中辨兼光朝臣可讀之、既被定仰、　八月二日庚子、大嘗會本文儒士並歌人、悠紀辨光長申定仰、撿按、撿按下知主基辨經信師記ニモ如此、又雅綱辨申定口朝隆記ニモ見タリ、俊經卿モ如此示之、而主基辨兼忠可爲口宣之由難之、于今相論云々、

〔明月記〕天福元年五月廿一日乙丑、秉燭之程給攝政殿教實〇藤原御書、被副折紙一紙、

無指事之間、久不申案內、何事侍乎、抑大嘗會歌人誰人當其任乎、可令計給、儒者二人白河、堀河、鳥羽頗以吉歟、又一人可爲四位歟、公卿二人例、先例不分明、一度例不快之由覺悟如何、委細可注給之狀如件、

五月廿一日　御判

折紙

大嘗會繪所風俗所預和歌人例

白河院

繪所　悠紀左中辨文章博士實政　主基右中辨文章博士正家

風俗所　悠紀民部大輔政長　主基近江□源兼俊

和歌　悠紀左中辨實政　主基美作守匡房

堀河院

繪所　悠紀若狹守正家　主基右少辨文章博士敦宗

風俗　悠紀刑部卿源行家　主基左京權大夫源俊頼

和歌　悠紀左大辨式部大輔匡房　主基前阿波守行家

鳥羽院

繪所　悠紀式部大輔正家　主基文章博士菅在良

風俗所 悠紀木工頭俊頼 主基右京權大夫家俊
和歌 悠紀大宰權帥匡房 主基式部大輔正家
高倉院
繪所 悠紀內藏權頭長光 主基文章博士成光
風俗 悠紀刑部卿重家 主基左近權少將定能
和歌 悠紀式部大輔永範 主基散位清輔
跪請
大嘗會和歌作者事
右所被副下候之例炳焉候歟、於被用此例、儒者三度之例、儒者二人候、尤可然候之處、往古例或如取輔等不限二人詠進、又輔親卿詠候之外、吉不吉之例、大略儒者二人候歟、卽是儒者堪詠歌之人多候之故、且被用堪能候歟、顯輔卿耽道、懇望詠進以後、非成業連々勤仕候、儒者連卅一字者次第陵遲、於今世者、一門兩卿之外、大略無其仁候歟、因玆每度被用彼家候、公卿昇進極難、遂候之時、一人猶希候、況二人勿論候歟、當時奉公出仕之人、皆叙上階之時、被求其外候者、少年嬰兒候歟、加斟酌候者、又隨時儀二人無其難候歟、於見任者、愚眼見及其歌候事、未及十首候之間、暗難辨堪否候、被撰和歌堪能候者前納言顯知家卿尤當其仁候歟、被用儒者二人、作者一門兩卿之外、無其人候歟、非儒相交吉例、仁安三年、貞應元年、又以神妙候、若被嫌公卿二人候者、非參議四位已下誰人可候乎、於大祀所作者、辨存歌趣之人、爲事爲道尤可爲公用候歟、致愚存知如此候、以此趣可令洩披露給候、定家誠惶誠恐謹言、

五月廿一日

今可及此沙汰者、去年諸卿定以前、予伺御氣色之時、知家卿可然之由仰、至于昨今無相違、萬事反掌、

不足言事歟、廿四日戊辰、大祀歌、賴納言、知三位可詠歟、公卿二人例、依不吉頗未定云々、廿八日己丑、入夜殿下給御書、大嘗會撿挍巳下皆被改、歌人又可然、承保、寛治、天仁三代吉例儒者二人也、家光卿之外無其人、菅相公恐傍難由申、又非儒者家隆卿如何者、申云、當世作者之仁、去年具申入了、儒者二人最吉、尤可然候、菅相公內々不思放由年來承及、當時無其人、誅其仁勤仕何難候哉、又非儒者家隆卿、世定歸伏候歟由令申了、閏六月六日丁酉、申終有長朝臣來臨相謁、主基歌儒卿各固辭云云、八日己亥、有長朝臣口奉書、主基歌兩卿辭退、經光如何由被仰、菅卿更不可有難、經光少年、忽勤仕重事、無先蹤由申之、

〔實一記〕正安三年八月十四日、平宰相來雜事、

大嘗會兩條

和歌作者事

申入云、舊例并仁治宣下也、仁治度寄撿非違使、同日（八月六日）宣下也、彼以後官方相觸也、不及宣下也、今度可爲何樣哉、勅定云、宣下本儀也、藤中納言（俊光）、隆教朝臣等可勤仕之由早可宣下、○中略

正安三年八月四日宣旨

權中納言藤原朝臣（俊）

宣令勤仕大嘗會悠紀所和歌

左近衞權中將藤原隆教朝臣

宣令勤仕同主基所和歌

藏人兵部少輔宣房（奉）

〔後深心院關白記〕永和元年七月十日戊辰、入夜右中辨資康朝臣（悠紀行事辨）、權右中辨仲光朝臣（主基行事）等來云、大嘗會悠紀主基和歌作者、今度可爲誰人哉、可計申者、同書役事、侍從宰相入道（行忠）事申、宰相

入道内擧狀在之、子息伊能朝臣兩方共可被仰被朝臣哉、同可計申者、余〇藤原進詞申詞注進、

余申詞如此

大嘗會悠紀主基和歌作者事、永承資業卿、康治顯輔卿詠進以來、共以子孫相續、而顯輔卿餘流、行輔朝臣尤雖當其仁、近年一向在國、在所不分明歟、此上者、兩方共以可爲資業卿後胤歟、然者勘解由小路前中納言、藤中納言相當其仁乎、同書役事、無相爭之仁者、共以被仰伊能朝臣之條何事之有乎、

〔永和大嘗會記〕廿三日〇永和元年十一月卯の日なり、〇中略いなつきの八乙女歌うたふ、〇中略此度の歌、悠紀は勘解由小路大納言兼綱卿、主基ハ日野大納言忠光卿〇中略此外山水の御屏風とてあり、悠紀主基の歌、この兩卿よむなり、悠紀主基御屏風、積山以下の本文は、文章博士秀長朝臣、大學頭爲綱朝臣勘進す、此外又歌などを、宮内卿伊能朝臣色紙にかきたる也、繪所行忠畫圖の藝をほどこす、いと興あり、

〔經嗣公記〕廿一日、〇應永二十二年十一月けふは卯日にて大嘗會也、〇中略本文の勘者、悠紀大學頭在直朝臣、主基文章博士長政朝臣、このほか山水の御屏風、御かざしのだいなどの本文も、おなじ勘者なり、又御屏風のわか、風俗の歌などあり、悠紀は別當、すきは左中辨義資朝臣これを詠進す、繪師は左近將監光久、御屏風の色紙形、本文清書は侍從行豐これをかく、いづれも道々の藝能を施すにや、

〔以寧卿記〕文政元、大嘗會一會文書部類

本文作進宣旨

文章博士菅原朝臣聰長

左中辨藤原朝臣經則傳宣、權大納言藤原朝臣經久宣、奉勅件人宜進大嘗會悠紀所本文者、

文政元年七月二十二日

兵部少丞兼左少史小槻宿禰秀壽奉

件宣旨、悠紀行事史左少史春芳率副使使部等、作者東坊城文章博士許江持參、

和歌作進宣旨

左中辨藤原朝臣經則傳宣、權大納言藤原朝臣經久宣、奉勅件人宜進大嘗會悠紀和歌者、

文政元年七月二十二日　兵部少丞兼左少史小槻宿禰秀壽奉

正二位藤原朝臣胤定

參賀進獻

〔輔世卿記〕嘉永元年七月廿二日癸巳、依御招入來、土佐左近將監、○中略此序本文作進悠紀方文章博士淸岡三位様、○長熙主基方同桑原少納言様、○長順悠紀方和歌廣橋大納言様、○光成主基方同烏丸右衛門督様、○光政未表向御沙汰無之候得共、先々依尋御達也、

〔後深心院關白記〕永和元年十一月廿九日乙酉、以前平宰相、大祀無爲珍重由申入禁裏了、

〔椿葉記〕霜月○永享二年十六日より大嘗會おこなはる、○中略風雨のさはりなく無爲にとげおこなはれはべれば、聖運のいたりもかたじけなくぞ侍る、室町殿○足利義教より、勸修寺中納言○經成を御つかひにて賀し承はれば、めでたさもいとゞ氣味そふ心地して侍る、九條前關白○滿家久我前内府○淸通以下淸華名家の人々大略參賀あり、執柄門跡いしいし御つかひも群參すれば、伏見のさと車の道もちかごろはたえにしに、むかしにかへるにぎはひにてぞ侍る、かくて室町殿をさへ入申侍れば、よもぎのやどにひぐらの露をはらはせ給、これもきみの御ひかりと眉目にてぞ侍し、

〔後法興院記〕文正元年十二月二十五日壬戌、早旦殿、○御冠直衣平絹下括被參禁裏仙洞室町殿等、是大祀無爲目出度之御禮也、諸家皆如此云々、

〔季連宿禰記〕貞享四年十一月十八日癸巳、禁裏仙洞女院、自諸家御大刀獻上云々、大外記予御大刀獻上、下札如例入御大刀、午刻著狩衣、大外記相伴、參禁裏、長橋者所參仙洞、女院、次參攝政殿、左大臣殿、内大臣殿、幷庭田中納言、頭中將等、奉賀大嘗會一會無異無事之條、攝政殿庭田黄門、令進鮮魚一種、申賀儀、大外記同

遣レ之云々　廿三日戊戌、自二攝政殿一奉書到來、明晝爲二大嘗會大祝一可レ被レ下二大料理一之間、外記官并當日著二小忌一諸司等引率可二參上一云々、申二畏之由一、次示二遣小忌諸司等一、　廿四日己亥、午刻許著二狩衣一參二一條攝政殿一、大外記以下諸司各參集、各狩衣也官方行事史二人、忌部代神服宿禰代主殿伴佐伯大藏官人等也、其外不レ及レ注、御對面之後、各於二便所一被レ下二膳及酒一、實亂舞人々沈醉無レ限、戌刻許各申二賀儀一退出歸宅、　十二月十三日丁巳、入レ夜自二松室大隅守重綱一書狀到來、今度大嘗會無異無事被二遂行一御祝、明十四日午半刻於二仙洞一可レ賜レ饌、可二參上院一之由被二仰出一云々、予依二所勞一難レ令二祗候一之旨載二返書一了、所勞難二推參一有レ恐事也、頃之自二大外記一使者云、明日可二參院一由被二仰下一之間、先明巳刻許可レ參二御禮一、予令二祗候一者可二相伴一云云、予依二所勞一不二參上一之由答了、

〔續百一錄〕元文三年十一月廿五日、廿三日ニ大嘗會濟候御祝儀、御肴御獻上廣橋家

生鯛二枚八十七匁、　たひ八匁　〆九拾五匁、廿四方ニ割、三匁九分六厘ヅヽ

〔惇信院殿御實紀八〕寛延元年十二月一日、去月十七日大嘗會行はれしにより、高家堀川兵部大輔廣益に慶賀の御使命せられて、暇をたまふ、

〔浚明院殿御實紀十一〕明和元年十二月一日、高家六角越前守廣孝は京への暇給ふ、これは大嘗會行れし慶賀として、御大刀進せらるゝ御使也、　閏十二月十五日、高家六角越前守廣孝京より歸り謁す、

〔浚明院殿御實紀二十四〕明和八年十一月十三日、こたび京都にて大嘗會行はるれば、高家前田伊豆守長敦、慶賀の御使奉り、いとま給はる、

〔大江俊冬記〕天明七年三月三日辛未、自二一臈一來、自二御所一仕丁使

來十一月可レ被レ行二大嘗會一旨、唯今兩貫首被二申渡一候、四御所可レ令二參賀一旨云々、御同伴可レ申候間、御參可レ有レ之候也、

三月三日　常房

藏人大學助殿

御刻(栗田已前)參內、各附御帳恐悅申上、其後參仙洞、兩女院殿下、恐悅申上歸家、

〔文政元年大嘗會記〕文化十五年(○文政元年)二月十一日己卯、大嘗會御治定恐悅、兩三日中可申上由也、然而於同列未聞其沙汰、可爲漏脫、頗不審也、頭辨今日不參、仍常顯申其由、談廣橋辨、辨曰、頭辨可爲漏脫、以致談光成趣、同列中一統參賀可然云々、仍今日令參賀、

禁中(御帳)　仙洞(同)　中宮(同)　女御(同)　殿下

已上常顯(俊矩)同道參賀、(此日御當座役遂、兩人令參勤)助功俊常依所勞、以名代申上、(常顯爲助功代、俊矩爲俊常代、)十一月廿五日己未、

一御所御所(禁中、仙洞、中宮、女御、)殿下等參賀、於禁中賜御祝、(赤飯、吸物、酒肴等也、)諸家一統如此、尤參上陽明奉賀、御參役無滯被爲濟儀且奉謝、御大禮無滯遂勤仕畏入由也、

一御所御所獻上御肴一折宛、常顯催之、各附奏者所獻上、(使麻上下着用如常)

禁中　鰭二尾、(染紙二重搦燕、添手目六、如例、)四人組合獻上、

仙洞　同斷、同上、

中宮　同斷、三人組合獻上、(俊矩宮司一統列組合獻上、仍不入此列、)

女御　同斷、四人組合獻上、

〔大祀申沙汰之備忘〕文政元年十一月廿五日、今日大祀無異被遂行參賀、禁中、洞中、中宮、殿下、左府公、內府公、一會傳奏、女御、(依御月水中不參)傍局、組合進獻如左、

禁中掛鯛一折　洞中同上　殿下同上　一會傳奉鰭、蛤、

〔輔世卿記〕嘉永元年十二月朔日辛丑、今朝大嘗會御神事解也、尤〆樁等解、(○中略)御局樣方へ御使上

杉要人、右者、○中略御神事解恐悅等被仰進候、右ニ付而御局ヘ御神事解爲御祝、御酒、御肴種々被進候處、御挨拶被仰進候也、○中略御使藤井左門へ要人、右者御神事解ニ付、御祝御酒被下候間、少々之所勞、推而事頃より出勤候樣被仰遣候處、畏候旨也、○中略入來森永織部、右者御神事解御歡、且過刻被進物御挨拶等被仰進候所、御留守中監物承置候也、○中略入來山口右少史、右者一昨日以御封中大嘗會前御手傳申上候ニ付、爲御挨拶何寄之品々下給、忝御理も可申上處、却而恐入候間、任命拜受仕候、右御禮昨日にも可罷出所取込居、乍延引御禮申上候旨、監物面會被申置候、

〔文政元年大嘗會記〕文化十五年○文政元年十二月十一日甲戌、關東使畠山飛驒守、松平和泉守同伴參內、役送議奏催一人、傳奏催二人常顯後矩各辰半刻參勤、臨期無出御、於小御所下段賜空天盃、手長顯孝、役送後常、事訖申半刻各退出了、此日大嘗會御祝儀進獻之品如左、

大樹公　御大刀一腰、御馬一匹、代白銀三百枚、

右幕下　御大刀一腰、御馬一匹、代白銀貳百枚、

御臺　紗綾紅白三拾卷、貳種一荷、

簾中　紗綾紅白三拾卷、貳種一荷、

廿五日戊子、依御用召午半刻四人共參勤、此日大嘗會御祝儀、關東進獻御配也、晚景於八景間大御乳人渡賜之、其時儀如例、但如近例小番御免未勤入道以後侍中、兩人宛幷進分拜領、人別賜白銀一枚也、御禮之事如例、自第一申上了、戌刻計各分退出了、　廿六日己丑、關東使畠山飛驒守、松平和泉守同伴參內、賜御暇、有賜物、傳奏催役送二人、助功、常顯辰半刻參勤、於小御所有御對面之後、於虎間有賜物、助功常顯兩人分役送、其時儀如例、其品如左、

白銀三拾枚　綿三拾把

暫時之後、別段有賜物、御暇日數被延引、仍格別賜之云々、

禁飾

羽二重五匹

事訖兩人口刻令退出了

〔日本後紀 十七平城〕大同三年十一月戊子、勅、如聞大嘗會之雜樂伎人等、專乖朝憲、以唐物爲飾、令之不行、往古所譏、宜重加禁斷、不得許容、

〔類聚國史 八詔勅〕弘仁十四年十一月癸亥、右大臣正二位藤原朝臣冬嗣、大納言從二位藤原朝臣緒嗣等、於清涼殿口奏言、聖王相續、大嘗頻御、天下騷動、人民多弊、然神態不得已、須此度大嘗會停飾省弊者、天皇勅答、元不好飾、唯事神態耳者、卽大臣奏云、請令大納言緒嗣撿挍其事者、勅依請、於是緒嗣請中納言良岑朝臣安世、參議伴宿禰國道爲撿挍、便以治部省廳爲行事所、唯齋院依卜筮定之、以宮內省爲悠紀所、以中務省爲主基所、作借屋用之、但齋場依例定北野、一切不用玩好金銀刻鏤等之飾、唯標者、以神造之、用橘并木綿等飾之、卽書悠紀主基字以著樹末、凡以淸素供神態耳、所用正稅悠紀主基各十萬、後依國司所口、各加五萬、以從省約也、又運悠紀主基兩國雜物擔夫各給路粮、斯以頻有大嘗會、國民彫弊者也、

〔類聚國史 七十七音樂〕天長七年十一月庚辰、散位從三位藤原朝臣眞夏薨云々、性有飾詞、隨時容身、音樂之閒、能盡其妙、大同初預大嘗會所、造千功之標、調入佾之舞、可謂大業之發從此而起者也、

〔中右記〕天仁元年十一月廿四日庚午、裝束使辨御裝束高座、○中略主上羽○鳥御出、近仗稱警蹕、○中略六箇日已無風雨難、誠有神感歟、我君雖有年少之恐、○御歲六每夜出御、已及曉更、進退有度、次第不誤、天之授大位、器量相叶給歟、群臣皆驚、上下歎服、

〔帝王編年記 二十四仲恭〕承久三年四月廿日甲戌、受禪、○年四大。嘗。會。不。被。行。以。前。退。下。世。稱。半。帝。、

〔明月記〕嘉禎元年十一月廿一日庚辰、雜人云、悠紀標升朱雀門間、日像隨龍破損、下人等可言不忠、拼(懈)怠也、非朝家之佐異歟、○中略晚鐘報後、主上○御年五四條、自悠紀御帳入御由有來語者、大嘗宮之間御湯

之時、聊無違亂、無御睡眠、令遂神事御云々、實是天令然歟、

〔園太曆〕觀應元年九月廿日壬申、今日上皇〇光明可還御旨兼有其聞、而直幸長講堂云々、何事哉、大祀日數相迫、每事無沙汰時分、旅御所及數日、以外事歟、

〔台記〕康治元年十月十五日甲戌、仰教任使勘逢大嘗會七度之人之處、四條太皇太后宇治殿女〇後冷泉后寛子其人也、長元八年生、大治元〇元二誤年崩、九二十余七歲時崩給、余常奉之、其顏色僅令覺給、　十九日戊寅、天皇還幸一本御書所、御禊大嘗會等間可御此所云々、保安之例也、

〔伯家部類〕御拜御相傳幷御代官之事雅光王筆

一貞享四年十一月大嘗會御沙汰之砌、於去所卜部兼連朝臣申云、白川家御拜御相傳幷御代官勤仕、忠富へト部兼俱傳受仕候、于今相違無之候哉、無覺束之由申云々、右中條聊無之候事、

〔輔世卿記〕嘉永元年九月十日庚辰、家君御出門、〇中略坊城頭辨樣御面會、御㕝之條々左之通り、〇中略

一先達而中山樣御內々御噂有之候、今度大嘗會以下、擬殿と申名ニ而被行候由、關白樣御命之趣、右者最早何殿ニ被擬候と申事御分りに候哉、追々御伺之事も有之候間、御樣子被成御承知度旨御申入之處、今少御分り無之旨御返答也、

十月十九日己未、今日中山樣より御達、大嘗會御再興以來、辰巳午等節會出御入御、幷晴之御膳供進否之事御取調、兩三日中御差出有之候樣御賴之事、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十一月十七日甲寅、於神祇官修鎭魂祭、緣宮內省行大嘗會事也、

〔兵範記〕仁安元年十月十四日甲申、下官參著軾、上宣云、大嘗會御禊點地、幷同御祈奉幣日時令勘申ヨ下官微音稱唯、退著床子座、〇中略

陰陽寮勘文等

擇申可被發遣奉幣使於丹生川上幷貴布禰社日時

今月廿五日　　時午二點

仁安元年〻〻〻〻

○按ズルニ、此月廿五日ノ下ニ、大嘗會祈雨奉幣、今日先可ㇾ進發トアリ、蓋祈雨ハ祈霽ノ誤ニテ、大嘗ノ日ノ晴ヲ祈リシモノナラン、

〔玉蘂〕建暦二年十月十一日癸未、參院、〇後鳥羽直參廣御所、左右府以下在ㇾ座、小時藤中納言來仰云、大嘗會延引所ㇾ恐思食也、今年無爲可ㇾ遂行也、然而非ㇾ無ㇾ其故、就中近日天變頻示、例幣以下依ㇾ穢延引、去年又如ㇾ此、可ㇾ被ㇾ仰ㇾ行御祈歟、可ㇾ計申、若可ㇾ寄ㇾ進伊勢國公田一郡ㇾ歟、

〔明月記〕建暦二年十月十二日、參院、人々云、夜前有ㇾ議定云々、三公資實、長兼、公定卿應ㇾ召云々、被ㇾ問事相傳聞、

大禮無爲爲ㇾ被ㇾ遂行、大切可ㇾ有ㇾ別御祈ㇾ歟、其條如何、祭主服假可ㇾ被ㇾ改ㇾ任子息、父當任、父子相續拜任如何云々、

大略一同、縱難ㇾ被ㇾ改ㇾ任子息、不ㇾ可ㇾ憚由申ㇾ之云々、

〔衞府官裝束抄〕大嘗會

衞府皆供奉せず、一府ハ六人づゝまはる也、をみをきて、ひかげのいとゝいふものつけてあるなり、よりて行事といふ、

〔内安錄〕大嘗會の夜、承明門外の著座先例なれ共、御門外にては警衞の詮もなく、御門内に居申度と武傳へ談じ、殿下〇鷹司政通へ被ㇾ伺しに、承明門は大嘗會には會昌門代になり、御門内は小忌衣を著する者計、小忌を不ㇾ著ものは御門内へ入事は不ㇾ相成との答、なまものじりに言出して赤面せし也、

○按ズルニ、是ハ内藤安房守忠明ノ記ナリ、本文ハ其禁裏附トナリテ在京セシ時ノ事ナリ、

〔古語拾遺〕天日鷲命之孫、造木綿及麻幷織布、古語阿良多倍 仍令天富命率日鷲命之孫求肥饒地、遣阿波國殖穀麻種、其裔今在彼國、當大嘗之年、貢木綿麻布及種種物、所以郡名爲麻殖之緣也、

〔中右記〕天仁元年十二月廿九日、右大將、予〇藤原宗忠 左大辨、藤宰相參入、是丹波守敦宗朝臣申請事一箇條、狀伏云、依任當國、勤仕大嘗會事之間、已忘濟物勤、仍當年濟物、混合後年可濟者、績文云、傍例其數多存也、人々一同定申云、申請之旨有道理、任傍例可被裁許者、左大辨書定文奉大將了、人々退出、亥剋歸家、

〔親基日記〕文正元年七月廿九日、就大嘗會、齋郡吉田神主拜領得分物、

悠紀方 江州坂田郡使節飯四左衞門飯三左衞修、於京都礼明、奉行忠郷、種基等承之、

主基方 備中下道郡使節濟式部丞秀數貞秀舍弟

京都奉行元連、親基等承之、

兩條以酒樽之親被仰出之、

〔山槐記〕元曆元年八月廿二日戊寅、予〇藤原忠親 又曰、近年天下逆亂、不通國々甚多、有限神供等之外、如御調度、或止或減、尤不可然上、計可被申定事歟、辨曰、尤可然事也、又書沙汰之後可申定者、

〔兵範記〕仁安三年十一月十四日辛未、行事官申云、大嘗宮幷齋場所、各會日其儀未終之間、諸人集會壞取、各濫行鬪諍、或合戰殺害、衆被仰撿非違使若武士、可令守護由可被仰下旨進奏狀、即申上依仰下知別當了、

〔十訓抄一〕天智天皇、世につゝしみ給事ありて、筑前國上座郡朝倉と云所の山中に、黒木の屋を造ておはしけるを木丸殿と云、圓木にて造故也、今大嘗會の時、黒木の屋とて北野の齋場所につくる、彼時の例也、

〔大嘗會雜事私記〕貞享四年十一月三日、考天正本之太平記云、正慶元年十一月十三日、被行大嘗會、

奉行職事藏人左馬頭平親名也、〇中略悠紀主基之神殿ハ以黒木造先規也、其故ハ天智天皇筑前國朝倉ト云所ニ忍ビテ被造皇居時、以丸木是造、仍木丸殿ト申ケル是先例トシテ代々之大嘗會以黒木被造之、此材木ヲバ和束山ニテ取事ナルヲ、近比之動亂ニ彼山之往來依不容易、主基方ノ神殿ハ如形黒木也、悠紀方ハ朔日近々ノ間依闕如、堀川之材木ニテ造ケルト云々、氏辰案之、此度不及御沙汰、然而自然以彼和束山之材木被造事、誠可謂聖代之嘉躅乎、

〔明德記上〕佐々木ノ治部少輔高詮ハ、七百餘騎ニテ一條ノ大路ヲ前ヘ當テ、北野ノ森ヲ背ニシテ、大嘗會畠ニ陣ヲ取ル、

〔康富記〕康正元年十月十七日己未、是日當國大住庄內隼人司領名主南（未知実名）來申、予對面申云、大住內隼人領大嘗會田ト申テ田地一町二段有之、大嘗會時參洛、於官廳奏風俗舞人役是也、南ガ叔父ニ西ト云者、相傳知行シテ、彼役人ヲ沙汰立テ、其外常ニハ無所役、年々此年貢ヲ令知行也、當年八月ニ、此西方（未知実名、老僧）圓寂、附男女無實子、而此大嘗會田ヲ一段二段宛、彼方此方令沽却了、在家ニモ買得之、寺庵ニモ買得之所詮一跡斷絕之間、如元雖爲誰身、一人取集テ全知行シテ、此公役ヲ可令勤仕歟、公田如今令散在バ、役人可沙汰立候條、定其違亂可出來歟令來申、南モ此下地二三段買得也、可爲如何哉、可從本所下知之由申上了、予申云、罷上委言上神妙也、西方死去事粗定、件又四郞兼申入歟、重來申悅入也、誠彼料田令散在バ、大嘗會之時役人沙汰立ハ、定我人申事出來、可爲臨期之煩也、如先々爲一人可相續知行也、西ガ跡無相續之子孫者、就由緖可申付也、下地を取集全知行、御代始嚴重之役人可沙汰進事也、爲公領料田之間、私雖賣買之儀不可立也、早買得之方々加下知、可押下知之由返答了、重申云、尤可然云々、少々當座申候間、當時買主注付了、定役又四郞自伊勢令返向者、可申付之由返答了、

〔壬生家記〕明和元年十一月八日、大嘗祭也、〇中略曉之儀被始已前、兩局出納代被召高遣戶邊、傳奏奉

行而謁卯日參役諸司、爲御祝折櫃二合、一合花餅、一合肴物、柳樽二荷被下間、一統不相漏樣可頂戴之由被命事、奉畏之旨申上了、予申云、右拜領物於諸大夫間庇簀子、諸司令配當之由申入候處、子細有間敷之由被示也、仍諸司輩配遣事、

〔行厚記〕文政元年十一月廿一日、大嘗會卯日也、〇中略

一今夜諸司中へ御酒貳樽、折櫃貳合一合ハ餡高盛、一合ハ粽高盛、各松梅御楊枝アリ、被下之、是ハ仙洞御所ヨリ被進候ヲ、御上ヨリ被下候由ニテ兩局へ被相渡、外記史等奉行之、今夜床子座敷設無之、仍於其所敷薦、大外記ヨリ被出之、內侍所へ入魂、桶杓土器等拜借頂戴、場所相構之後、使部ヲ以諸司一同不洩樣觸其由、一同追々參上頂戴之事、使部兩人令取杓、右折櫃酒樽等ハ、任先例兩局之頂戴云々、然ニ右之二樽行事史兩人入魂ヲ以申請事、且御楊枝松梅各壹本兩局ニテ請頂戴了、

〔文政元年大嘗會記〕文政二年五月十五日乙亥、議奏觸折紙到來、奉書四折也、鳥飼人見林之丞持廻、卽加奉返却、如左、

就大嘗會無異被遂行、來十八日可賜酒饌候間、巳刻可被參候也、

五月十四日

極﨟殿　奉

差次藏人殿　奉

江藏人殿　奉

新藏人殿　奉

十八日戊寅、依召巳刻各參內、四人相揃後、其由申屆議奏卿、今日被召人々、大嘗會卯日參役一統云云、左府公依御所勞不令參給、右府、內府兩公御參、其餘辰日以下參役之人不召、件輩皆有御對面賜酒饌也、

今夜又於御學問所有御酒宴、小忌方之外、兩御所役人、近習、小番御免近習、院祗候等一統云々、被召人々、未半刻參集之由也、

一當番議奏、池尻前中納言招勘功被示曰、於御學問所一統可有御對面各可申傳云々、
一申刻前出御御學問所中段御座、（御茵御板）殿下令候御左方給、役人、近習、列候雁間如常、先右府公、内府公御對面了、次大炊御門亞相以下到俊矩、公卿雲客次第參進、公卿入下段、殿上人於南椽取敷拜天顏、（御金巾子、御袴、）時儀如例、但本番所之人及侍中自南廊下進行、近習、院祇候之人者、自鈴口廊下相進、近習、本番所相交、守官位次第人別進出拜龍顏也、（無申次、如例、）
一御對面之御禮、大炊御門以下一統、人別申上、（近習、院祇候一組、本番所一組、侍中候此末、）先議奏、次御内儀、（大炊御門被申口上、侍中在其中、）
一申半刻許賜酒饌、其儀於便所便所賜之、役人於林和靖間、近習、院祇候之人於鶺鴒間、本番所之人於内々八景間、同列四人於東間、御獻奉行者於北、各於便所便所頂戴也、（於虎間一統同時雖可賜之、膳部依不都合如此云）云、御料理一統同樣二汁七菜、中酒三獻、吸物一度、口取、菓子、薄茶硯蓋、菓子等賜之也、獻方付添、非藏人陪膳也、
一御料理頂戴之御禮、大炊御門以下人別、議奏御内儀等申上如先例、（是又大炊御門口上被申上、侍中籠其中、不及別段申上、）退出之儀亦、自大炊御門被問議奏可退出由同卿被示傳了、
一此日御對面之事、依不知先例、各不覺悟、衣體等甚見苦恐懼之至也、後來可用心事歟、於寂寥補者聊令用意了、
一今日之儀誠不思議、深々畏入儀也、先例每度雖有此事、不及侍中、仍先例一向不覺悟處、今度不圖被召、殊更有御對面、格別之御時儀、一列之眉目不可過之、深以所令恐懼也、可愼云々、
一事訖、戌刻許各退出了、（自申半刻過、於御學問所御酒宴始、亥刻許終云々、）
〔台記〕康治元年十一月廿日戊申、招伶人令奏悠紀主基新作舞樂、（舞人、樂人、布衣烏帽、）右大將、新中納言、新宰相中將來見之、又令奏甘州、王仁等、左近將監光時、（五位）得舞骨之由人々被感、

〔玉蘂〕建暦二年十一月廿九日庚午、參內、〇中略良平卿被參、小時相共向二間方言談、多大嘗會間事也、〇中略小時主上〇順德出御、御引直衣數刻有物語等、此間職事於石灰間擇申文、知長著衣冠出見長橋邊、勅召之、良平參入也、通方云勿論也、知長被召入簾中、當時近習無雙舞者也、其體如面形、可咲之、余云、今度五節第一歟、知長云、五節實過先代云々、余云舞事也、主上令咲給、院舞之時落冠、其定可舞之由有仰、卽令舞、比興無物、手取喩、又舞大嘗會之儀、其曲希代也、不能左右也、予時入御、

〔增鏡十三秋のみ山〕十月〇文保二年廿七日、大嘗會清暑堂の御神樂の拍子のために、綾小路の宰相有時といふ人大內へまゐるを、車よりおるゝ程に、いとすぐよかなるゐ中さぶらひめくもの、大刀をぬきてはしりよるまゝに、あやなくうちてけり、さばかりたちこみたる人の中にて、いとめづらかにあさまし、さて拍子にはかにこと人うけたまはる、大事どもはてゝのち、たづねさたあるほどに、かひ河の三位顯香といふものゝ、此拍子をいどみて、我こそつとむべけれと思ひければ、かゝる事をせさせけり、道にすけるほどはやさしけれども、いとむくつけし、さてかの三位はながされぬ、

〔花園院御記〕元弘二年十一月七日癸酉、大嘗會和歌、悠紀資名卿、主基隆教卿、內々進之、朕一見之處、難波宮梅詠之、此事聊可有議歟之由內々申之、仍有御尋之處、季經元卑資宣正卑等詠之由申之、然而事儀尙聊可避之歟、後日詠改之可然事也、又此河石者爲星斾卜詠之、聊似有議、又可有御尋歟之由申之處、日本紀新羅王詞之由申之、非深難歟、仍不及改之、但聊似無詮歟、資名卿歌、付歌詞聊有不叶事等、仰其由之處、三首直之、猶有不思議詞等、然而不及重仰、本文房範在成等朝臣口進之、一見之處無相違、今度清書、悠紀行尹主基行信也、

〔增鏡十六久米のさら山〕十月〇元弘二年になりて、御禊大嘗會〇光嚴などのいそぎに、おめのした物さわがしう、くらづかさ、たくみづかさ、うち殿、そめ殿、なにくれの道々につけて、かしがましうひゞきあ

ひたるも、かたつかた〇[illegible]は涙のもよほしなり、悠紀主基の御屏風の歌、人々にめさる、かくべきもの丶なければ、かしこ〇岐阜へまゐれる、行房中將をや、召かへされましなどさだめ給ふを、まだきにつたへきこしめしければ、よひのまのまづかなるに、御まへにことに人もなく、この朝臣ばかりさぶらひて、むかしいまの御物がたりのついでに、宮古にいふなる事はいかゞあらんとすらむ、さもあらばいとこそうら山しからめとうちおはせられて、火をつら〳〵とながめさせ給へる御まみの、しのぶとすれどいとうしぐれさせ給へるを見たてまつるに、中將もこ丶ろづよからずいとかなし、いかばかりの道ならば、か丶る御ありさまを見おき聞えながら、うきふる里には、いて歸らむと思ふも、えきこえやらず、

〔拾遺和歌集十雜四一〕大嘗會の御禊に、ものみける所に、わらはの侍けるを見て、又の日つかはしける、

寛祐法師

あまた見しとよのみそぎの諸人のきみしものをおもはするかな

〔後拾遺和歌集十九雜〕三條院御時、大嘗會の御禊など過てのころ雪のふり侍けるに、大原にすみける少將井のあまのもとにつかはしける、

伊勢大輔

世にとよむとよのみそぎをよそにしてをしほの山のみゆきをや見し

〔榮花物語十二玉の村菊〕ことしも月〇長和五年になりぬれば、大じやうゑとて、又人々ひゞきのゝしる、五せちもことしはいまめかしさまさりておかし、〇中略とよのあかりのよ、あれたるやどに月のもりたりければ、さと人たれとしらず、

めづらしきとよのあかりのひかりにはあれたるやどのうちさへぞてる、この御時〇後一條の御即位大嘗會、御禊などの程の事ども、すべてめづらしくやんごとなき事かずしらず、年中行事の

御障子にも、かきそへられたる事どもいとおほくなんあなる、

〔中務内侍日記〕廿一日、〇弘安十一年十一月 いまだ夜の中に、行事くはん、ならびに奉行の辨、めん／＼に裝束うけとらす、そのぎもつき、ぬし／＼女工所にいできてしやうぞくもあり、いなのみのおきなとてびん白く、髭は帯のもとまでながくて、年もも丶とせにもやとみゆるに、そくたいせさす、これをみて心の中に、

いなのみのおきなさびたるびんしろし君が千年もかねてしられて　廿二日、くればくわいりう殿の行事にこうたうはまゐらせ給はず、少將、内侍どのなどぞまゐり侍る、くろ木のやにまゐる、行幸なりて、山蔭の氏の藏人またせて御ゆまゐりて、はくの御しやうぞくにて、筵道しき神殿になる、御ぎしき申もおろかなり、殿いげしよしのをみどもきて、神殿に内侍もまゐるべかりしかども、かたてかはりて女工所のならではまゐらぬことなれば、ひとりしてふたつのことをつとむべきにもあらずとて、これにとゞまりて、還御なりて又御ゆをめして又なる、殿はたびたび御まゐりありて、されどもまた御歸ありて、還御のほどに御むかへに御まゐりあり、ほのぼのと明行にみれば、こしばあちこちおほくゆひまはして、くろ木のとりゐあまたたてたる、めづらかにおもしろきに、か丶る公事の御けいきをみのこしたらましかばと、さはりなくけふまでのことみつるもうれしくて、ありがたく、ことはて丶あふべきにもあらず、

君にかく契りありけりかしこくてけさの御ゆきにかくてあふ身よ、還御なれば夜は明はてて日さしいづるほどに、風もしづかに、さし出る日影ものどやかなれば、

御幸なるけさとやみねに出る日もつねよりことに影ものどけき、ゆうき、しゆきのせちゑ、とよのあかりのせちゑ、ことになごりおほくおぼえて、ろだいのらんぶ、ほの／＼とするほどにこゑばかりきく、ゆうきしゆきとよみしに、かはる／＼かみあぐ、とよのあかりのせちゑはてがた

に、まひゝめのはか、大うた所うたひをそうす、まひ人樂をそうす、まひごとのもとはてゝ、よごとのそうとて、さいしゆたてわかしの光りにみれば、をみの志やうぞくことにうるはしく、こはごはしげに志やうぞきて、はいしたてまつるをみるにも、

すべらきのやはよろづよといのるらしわまつひるめの神ぞしるらん、と思ひつゞけらる、

〔金槐和歌集〕大嘗會のとしのうた

くろ木もて君がつくれる宿なればふとも萬代ふりすもあらなん

〔新拾遺和歌集雑十九〕文和三年十一月大嘗會悠紀方の稻書とて、代々の古本をみ侍て、

今つくる黑木のむろやふりすして君はかよはん萬代までに　　從二位行忠

みるたびに思ひぞいづる水ぐきの跡はわすれぬよゝのかたみを

〔台記〕康治元年十一月卅日戊午、大嘗會日記、(自卯至午別記也)始自去廿一日、今日書了、執筆山城前史源實長、(不安他人筆)但未讀之、實長、予等忘寢食書之、(予雖病口不執筆)四箇日記合卅六枚、

〔兵範記〕仁安三年十一月廿六日癸未、早旦參院、令高少納言執奏日來次第、仰云、嚴重神態、天下大事無爲了、供神物事等如式無煩、夜々御出次第作法、不異成人之由令聞食及、非直也事也、奉行無懈怠、最感悅思食者、下官(○平信範)畏申畢、優恩案、當今御讓位御卽位職事方、大嘗會御禊裝束司、悠紀所奉行等官方、以一身歸處行數箇重事畢、奔波之至、古今之間未曾有事也、已蒙勅感、勤節之忠也、神明之加被也、加之主上(○高倉)出給我氏國母御坐弘徽殿、大理獻舞姬在五節所、下官列雲客爲貫首、唯獨自明了、餘人所不見、已叶佛說、前世之宿因、德化之甚深、當家之繁昌、可悅可樂、幸甚幸甚、

〔明月記〕建曆二年十一月九日、明後日齋場所御見物御幸、出車宗行朝臣催之、卽令領狀了、早旦行向朱雀大路見事體、三條大路朱雀以東河水也、車馬有煩、又出大路見北方、相向朱雀門事甚近如寸步、

仍次第巡檢出自四條坊門可宜、其邊相國勝地家人等宅多、仍於其所喚出大夫忠實、此邊小屋一所可借取由語付了、依爲土左前司定家聟住彼家也、卽歸來間、左大臣殿（〇藤原良輔）仰云、只今在中御門殿有可示合事者、卽參入、仰云、頭中將夜前消息云、可令造進式給之由、只今被仰下、仍明旦參入可申此由、且内々所申也、此事一旦欲辭申、治暦大殿爲一上、御坐土御門作進之、承儀又如此、康治宇治左府蒙可作式由仰、被申云、無才年少、以有職之人可令作、其後實行公作之、今案之、才不可及百萬里、年又同前、仍欲申此由、頭中將卽參入、御對面之後歸參、無程以書狀申云、猶可令作進給、卽領狀、仰云午日開門不思得、又插頭拜事不達、且内々可伺御氣色歟、開門事、延喜式所載、開門訖奏宣命、是定時平大臣有所存歟、延喜式尤爲規模、而貞信公、清愼公已下、又定有所存給歟、承平、天慶以下式悉奏宣命後開門、而西宮、北山共用延喜式之儀、治暦大殿令用此儀給、其後他人又不用之、法性寺殿御記、又可用此儀由被載、仍土我勤仕者、無異儀可奉隨大殿法性寺殿由存之處、至于作式此事思煩、次插頭拜、上古以下悉進御插頭了拜、次賜臣下插頭、寛平九年只一度賜臣下了後有拜、此儀當時之事體尤有便、而去年上皇御習禮、被用寛平之儀、此事又有猶與、未思得之、長兼卿參入、對面之間依無心歸華、

〔看聞日記〕永享二年六月廿四日、大嘗會記錄神膳御記（後深草、伏見、後伏見院三代宸筆、）二合、仙洞へ進之、是累代之文書、殊神膳御記、代々御秘藏也、始終禁裏可進之間、只今大嘗會記錄御用歟之間、先仙洞へ進畢、勅報甲斐甲斐敷被悅思召之由被仰下、殊神膳秘說等、今度可被授申之間、悅思食云々、三代宸筆且天下重寶也、

〔季連宿禰記〕貞享四年十二月卅日甲戌、年中無異無事、珍重珍重、特今年大祀大禮等一會、無違亂令遂申沙汰、偏是先祖之餘慶也、千回萬回冥助難盡端筆者也、

〔大鏡〕四（右大臣師輔）御物のけこはくて（〇冷泉）いかゞとおぼしゝに、大嘗會の御禊にこそ、いとうるはしくてわたらせ給ひにしか、それは人のめにわらはれて、九條殿（〇外祖父藤原師輔）なん御うしろをいだ

きたてまつりて、御こしのうちにさぶらはせ給ひけるとぞ人申しゝ、げにうつゝにてもいとただびとゝみえさせ給はざりしかば、ましておはしまさぬあとには、さやうに御まもりにてもそひまゐらせ給つらむ、

〔明月記〕建暦元年九月廿五日、職事宗宣奉行、僕、御禊行幸、申障了、後聞論義被遂云々、博陸相國著座云々、有失錯之時、自御簾中被叩板敷、尤爲聖屛云々、

大嘗會付御禊論義

一番　通具卿 長兼卿

長兼卿問云、大嘗會辰日撿挍有行酒事者、其儀何事哉、行字以何讀可相叶禮儀之微意哉、

通具卿問云、自廻立殿行幸小安殿路次如何、

答者相互分明歟

二番　資實卿 顯家卿

顯家卿問云、問獻物事、節下大臣可問之歟、將他大臣可問哉、

資實卿問狀不詳聞、

答者相互分明歟

三番　高通卿 通方朝臣

通方朝臣問云、御禊之時、御願寺塔婆等備叡覽者、其儀可何樣哉、

高通卿問狀不詳聞、

高通卿答頗分明歟

四番　資家卿 忠明朝臣

通方朝臣不及答、稱問狀微音聞不聞之由、無左右起座了、頗無法之由在人口歟、

忠明問云、大嘗會御禊、就鴨河被定行流例也、若有臨幸他河事哉、

資家朝臣問云、御禊行幸之時、雖及御禊刻限、先可幸御膳幄哉、

忠明愚意之所及答申之、

資家朝臣答不分明、

五番 顯俊朝臣 親輔朝臣

親輔朝臣問、顯俊朝臣問、兩人問答不詳聞、

六番 宣房朝臣 家宣

家宣問、宣房朝臣問同前、

七番 親長 範時

範時問云、御禊行幸、有皇太子參例哉、行幸前後又如何、

親長問云、節下大臣於建禮門前召外記事、以人召之歟、將自召之歟、自召之者其詞如何、以人召之者、以何人可召哉、

兩人相互無分明答歟

八番 經高 兼隆

兼隆問、經高問、兩人問答不詳聞、

九番 宗房 賴資

賴資問、不詳聞、

宗房問云、行幸廻立殿之時、大刀契可置何所哉、

十番 俊基 成長

賴資分明答之

成長問云、壽詞奏不審歟、是何故哉、

棟基問云、於廻立殿有御湯殿事、御楷畳樣可何樣哉、

相互無分明答歟

今度事偏可及恥歟、雖非終身之恨、當時之恥難堪、雖被取不覺、以不參爲右耳、但如此事不限今度、定達々歟何爲哉、

〔輔世卿記〕嘉永元年九月晦日甲子、家君御出門、右者裏松樣へ御出、荒見川祓無御滯被行遂候御獻、且象日色々御面倒之義御申入、諸司一統無滯勤仕候旨、御挨拶御申入之處、卽御面會、彼御方よりも象日段々被預御世話、無御滯相濟候旨御挨拶也、附而ハ今度吉田殿右御場所へ御參向之由、右者何等之御用有之御參向候哉、御樣子御尋之處、强而御用と申而ハ無之候得共、先例ハ御參向も有之候趣ニ而、天明者御重服ニ而御參向無之、文政度者、任天明之例御參向無之候間、此度ハ御參向被成度旨、傳奏御奉行方へ御屆之由故、傳奏御奉行方にも强而御用ハ無之候得共、御承知之趣之由御返答也、依而右之御次第ニ候ハヽ、昨日屏幔外より上首立ニ而、兩行事之辨樣已下次第退出之處、主基之辨柳原樣御退出之後、悠紀之史村田右大史退出可仕處、右之間へ御割込御退出故、無據兩行事史とも差扣へ、吉田殿御跡より退出仕候旨、右者高橋邊ニ而乘車迄之義ハ、御式中同樣之事と兩行事史共相心得居候處、右樣退出之次第相替り候義者於今度ハ何ぞ御時宜ニ而も有之候事哉、已來爲覺悟相尋度旨、兩行事史內々伺出候間、御樣子御尋之處、實ハ兩行事辨樣へも御同樣御失禮之義有之、北野鳥井前ニ而主基辨樣御一拜之間、右御列中を打拔き、次ニ裏松樣御列を御打越し、雜色警固之間を御通り拔け故、甚如何に候間、御一分之義ニ而も無之候故、事之由傳奏御奉行へ兩行事辨樣より被附候由故、今日家君より御內々御噂之儀者御聞無之分ニ而、矢張傳奏御奉行へ事之由御申入置可有之旨內々御噂也、尙傳奏御奉行へ御申入可有之旨御返答

也、十月十八日戊午、家君御出門、〇中略右者昨夜依御招、非藏人口より御例席へ御通之處、日野頭辨樣御面會、先達而兩行事之史より伺出候荒見川祓之節、吉田殿失敬之儀、今度關白樣より御沙汰ニ而、吉田殿御叱之旨、以御書付爲心得御達、兩行事之史へ御達之上、右書付御返却有之候樣御申渡也、

〔實躬卿記〕正安三年十一月廿三日戊午

條々

一諸卿參入之路、悠紀標東歟、兩標間歟、

標山之東西不同也、豐樂院儀、東階當標山西、八省儀、東階當標山東、當時官廳之儀、東階同豐樂院儀、然者經標山西之條有便宜、然而經東其例多、只可依上首進退歟、

一壽詞奏了退入之時、各可經同官後歟、大中納言一列立之時、可爲何樣哉、

各可經同官後、大中納言若一列ニ立者、猶自中出天可經大納言後中納言前歟、爲大納言所〇中略

一取內辨插頭作法等事

取執柄插頭者跪獻之、近例直不插、只獻之、取內辨插頭之作法、此定

於東壁外乍立指笏、經南檐參進、乍立插之、拔笏復座、如此歟、

一撿按內辨插頭前後事

常儀先小忌、次關白、大臣、納言、參議也、但文應先執柄、次內辨、次小忌以下、內辨幷師繼卿存知如此、常例猶不然歟、寬治江記曰、自外辨至賜祿爲先小忌、而今夜先賜大臣插頭、如何、爲此儀者小忌不可上座歟

一御插頭拜臣下插頭前後事

北山幷式文、天仁俊明卿、貞應實氏卿所存等、賜臣下插頭之後可拜、公卿賜插頭之由の拜也云々、仁治巳日臣下插頭以前可拜之由、前內大臣定通公自閑所給之、此條太不可然、賜臣下插頭之故

可拜之由、內辨右大臣被答之、但文應例臣下插頭以前有此拜、

〔花園院御記〕元弘二年十一月十三日己卯、後聞丑刻行幸、辰一點主基事了還御、主基神膳間、雨灑幸路、雖潤不及違亂云々、大祀無爲無事之條、天下大慶、一統之安堵也、大慶何事如之哉、就中今度諸國亡弊之上、依兵亂段米等有名無實、及今月上旬行事官等不可叶旨度々申切了、然而種々沙汰、無爲被遂行、併宗廟之助也、公私心勞無極、然而面々奉行不存公平、只有私曲、而依仁政無嚴密之沙汰、仍彌如此歟、而今此大祀無爲之條、眞實非天之冥助、爭被遂此大祀哉、而後運命猶有憑事也、

〔後深心院關白記〕永和元年八月十四日壬寅、俊任來有勅問事、仰詞幷余申詞注裏、

仰詞如此、大嘗會省略條々事、文和世上擾亂之間、被因准文永例有其沙汰歟、今度之儀、天下泰平之上者、不可似彼例哉、宜被計申矣、

余申詞、大嘗會省略條々事、文和度者、依世上擾亂有其沙汰、今度之儀、天下泰平之上者、任舊儀每事可有沙汰乎、

十一月六日壬戌、俊任來、有勅問事、仰詞申詞等注裏、

仰詞如此〇中略

廻立殿御湯殿藏人事

山蔭中納言後胤無其器、被用他藏人之條爲新儀、何樣可有沙汰哉、可被計申矣、〇中略

余申詞如此〇中略

廻立殿御湯殿藏人事

山蔭中納言後胤斷絕之上者、可被用他藏人哉、然者殿上六位何事有乎、

〔增鏡九草枕〕三月十一日〇文永十一年廿六日は御卽位めでたくてすぎもてゆく、十月廿二日御禊なり、十九日官廳へ行幸あり、女御代花山院よりいださる、糸毛の車、寢殿の階の間に左大臣殿〇藤原家經大納言長

雅よせらる、みな紅の十五の衣、おなじきひとへ、車のしりよりいださる、十一月十九日、〇卯日又宮廳へ行幸、廿日より五節はじまるべく聞えしを、むぐりおこる〇寇元とてとまりぬ、廿二日大嘗會廻立殿の行幸節會ばかりおこなはれて、淸署堂の御神樂もなし、

〔應仁略記〕當年大亂現行の次第

當今〇後土御門御在位のはじめごとに、河原の御禊大嘗會以下、いろ〳〵の御節會あり、此まへ神訴、あまつさへ神輿御入洛しかるべからず、〇中略河原の御禊、ならびに大嘗會等御節のこゝろみの日すでに定まれり、しかりといへども京中のていたらく、一つとして安堵のこゝろこれなし、〇中略その外家々宿意をふくんで年月をおくり、兩陣をあらそふたぐひ一方ならず、をりふし見物、誰人は長やり、長具そく、甕の穂をたてたるがごとし、その中に河原の御禊幷に大嘗會、しかしながら戰場をしのぐ風情、先代未聞の嘉躅、ふしぎふかせつの節會開闢已來これはじめなりと云云、

附大神寶使

天皇卽位ノ後、使ヲ京畿七道ノ諸社五十三所ニ遣シテ神寶幣帛ヲ奉リ、寶祚ノ長久、國家ノ平安ヲ祈ラシメ給フ、是ヲ大神寶使ト云ヒ、又一代一度大神寶トモ大奉幣トモ稱ス、天皇沐浴シ給ヒテ神寶神馬ノ御覽アリ、伊勢宇佐ノ幣帛ヲ拜シ給フ事アリ、行事ノ辨、掌侍ト共ニ八省院ニ於テ伊勢ノ幣帛ヲ裹ミ、行事ノ史、宮城門ニ於テ諸社ノ幣帛ヲ裹ム、諸使各宮城ニ到リ、之ヲ受ケテ諸社ニ向フ、伊勢ハ王及ビ中臣忌部ヲ使ト爲シ、宮中及ビ京邊ハ殿上人ヲ以テシ、畿內ハ諸大夫ヲ以テス、而シテ七道ハ藏人所ノ雜色以下ヲ以テシ、多クハ蔭子蔭孫ヲ之ニ充ツル例ナリ、其他發使ノ前、又ハ當日ニ大祓ノ事アリ、

抑此儀式ノ事、延喜式ニ載セザレドモ、淸和天皇ノ貞觀元年、旣ニ此儀アリ、醍醐天皇ノ昌泰

元年ニモ亦此儀ヲ行ヒ、朱雀天皇ノ承平二年ニハ、大嘗會ニ依リ、一代一度大神寶ヲ伊勢及ビ諸社ニ奉ラシム、當時發遣ノ年月ハ、大嘗祭ノ前ナルコトアリ、後ナルコトモアリテ一定セザリシガ、三條天皇以後、多クハ大嘗祭ノ次年ニ之ヲ發遣セリ、而シテ此神寶奉獻ノ事ハ、伊勢大神宮ヲ除ク外ハ、宇佐宮ヲ以テ宗トナシ、石灰壇ノ御拜モ、宇佐宮ニノミ有リシ事アリテ、神寶幣帛等モ自ラ他ノ諸社ニ異ナルモノアリ、發使ノ後ニ精進シ給フコトモ、此宇佐宮ノ預リ給フ故ナリ、後世朝綱衰フルニ及ビテハ、用途闕乏シテ舊儀ノ如クナル能ハズ、遂ニ大嘗祭ノ中絶ト共ニ、此儀モ亦廢絶スルニ至レリ、

〔北山抄五〕奉諸社神寶事

伊勢使如例、宇佐、並宮中、京邊七社、以殿上人爲使、或殿上差定下給、或上卿奉仰差奏、畿内諸大夫、一國各一人、上卿差定、七道藏人所雜色以下、一道各一人、自殿上下給、上卿向八省給宣命如常、至于神寶使向宮城請取、但宇佐御衣、於御前給之、有御禊也、○中略 諸道使給官符鈴等、又給藏人所牒、往年有遣白紙官符之例、見天徳四年十一月鹿島使御記、以期日有限也、

〔江家次第十五裏書〕大神寶次第延久元年四月七日

一被勘日時、右大臣下藏人所、藏人季仲爲行事、

一勘使立日并大祓日時、大納言能長卿行之、參議泰憲奉三箇國使書定文、奏下之後、使立日勘文並使定文下外記、大祓日時下辨、

次藏人頭實季朝臣、於御前定申七社使、至于七道使者出納以定文入同宮奏聞下藏人所、伊勢并宇佐幣料藏人奏下、卅九社幣料行事辨正家申上卿之後、付藏人奏下、召兵部少輔通俊被仰可奉仕宇佐使之由、當日十月七日庚子御湯殿、

次於石灰壇御覽神寶、御直衣 大十備伊勢二、宇佐二、加小一 石淸水二、加小一 賀茂二、日前國懸各一、次餝

覽之、五位以下役送、辛櫃有小板敷前、
次垂御簾御覽神馬、候頭中將、左右一匹、伊勢內宮料也、左二匹伊勢外宮料、右二匹宇佐宮料、並近衞官人自瀧口方引之、
次行事辨於八省裹伊勢幣參內侍
次行事史於宮城門令裹諸社幣（立嘉喜門左右）
次參議參八省東廊、行大祓事、
次上卿能長卿參陣、開伊勢卜串、
次奏宣命五十三枚、令持內記、使官符十二枚令持外記就御所奏之、頭幷六位藏人一人取之、於御前頭皆奏之返給、
次上卿使王令奏御馬申之由
次上卿還陣行內文
次令參議向結政所請印宇佐使祿官符、此間主上（〇後三條）御束帶、於石灰間先奉拜伊勢大神、頭中將奉御笏、次宇佐有御禊、其儀如恒、神寶案立南一間、儲御座第三間（南向）御幣案立東庭、當第二間（二脚六挿）使宮主座、（使在南、東退在宮主座北、）
次出御、（位袍、頭中將獻御笏、）次供御祓物、（頭中將藏人辨、於青璅門取之、）次宮主兼國入自仙華門、於長橋下付頭中將奉大麻、返給著座、
次使通俊入自同門著座、巡方帶魚袋、
次宮主御祓訖退出、次撤御贖物、
次使跪案下插笏、取御幣三捧立、主上兩段再拜了、
次使置幣退出、主上入御、次使與行事藏人、舁出神寶案、

次改御裝束、上御簾、主上御於晝御座、頭中將令召使、使取笏出自殿上戶、候年中行事障子下、依天氣候第三間長押下、被仰道間能可奮、不可致路次煩、藏人辨取御衣、入自鬼間障子、出自第二間、被使、被了出自殿上、

次使下自長橋、於川竹異徒跣拜舞、出自仙華門、於弓場殿行事藏人仰賜御馬之由、

次上卿渡八省、如常奉幣儀、

次行事藏人、出納小舍人具神寶、候八省廊艮角、但伊勢大神寶、御馬在昭訓門外、

次上卿渡東廊、立伊勢幣、召使王賜宣命二通、

一通、伊勢度會乃五十鈴川上乃下津磐根、

一通、伊勢度會乃山田乃原乃下津磐根、

次上卿還本座、賜宇佐宣命二通、

一通、宇佐宮御坐ス八幡大菩薩寶前、

一通、香椎御廟前、

次石淸水一通　使正四位下行民部大輔源朝臣信宗

次賀茂二通　使散位正四位上藤原朝臣公基

一通、賀茂別雷皇大神、

一通、賀茂御祖皇大神、

次松尾　使內藏頭藤原朝臣基家

次平野　使左近衞權少將源朝臣俊明

次稻荷

次春日　加大和他社四社宣命、

次大原野　使左馬頭藤原朝臣顯經

次住吉　加攝津他社四社宣命

次日吉　加東山道他國國六社宣命

次園幷韓　二通使兵部大輔藤原朝臣公房

次河內使　二社宣命蔭子中原眞俊

次東海道　六社宣命使

次東山道　使蔭子藤原宗政

次北陸道　四社宣命使蔭子橘季任

次山陰道　二社宣命使蔭子藤原季遠

次山陽道　四社宣命使蔭子清原爲業

次南海道　三社宣命使蔭子藤原親通

次西海道　四社宣命使蔭子紀定遠

事畢上卿退出、行事藏人、神寶於便所渡使、立了之後、主上渡御於南殿、有御拜如恒、

〔神祇官年中行事臨時〕一代一度大神寶、伊勢使四姓氏人、

〔日本紀略村上三〕天曆元年四月十七日壬申、定一代一度諸社神寶使、　十九日甲戌、請內印諸社神寶並奉幣使符、十三通　又請外印太宰府八幡大菩薩並香椎廟幣帛使祿料符也、　廿日乙亥、奉遣一代一度大奉幣於伊勢大神宮幷京畿七道諸國神社、天皇依御物忌不御八省院、

〔左經記〕寬仁元年九月十九日甲寅、候內、入夜攝政殿令參給、明日可有官奏之由、幷可被定大神寶使等案內、被仰頭右中辨日時勘文、幷殿上人所乘等者殿上方相定可下給云云　廿日乙卯、依可被定一代一度奉幣、早旦退出、風聞頭右中辨於攝政殿御前書定文云云、

宇佐（右衛門佐藤原頁賴）　石清水（修理權大夫源濟政）
園幷韓神（式部大輔藤原朝臣廣業）　賀茂上下（春宮亮藤原朝臣惟憲）
稻荷（右近衛權中將藤原朝臣公成）　松尾（兵部權大輔藤原朝臣中障、替備中守知光朝臣）
平野（左近中將朝任朝臣中障、替彈正弼顯定朝臣）　大原野（左近少將□親、已上殿上人）
大和使（散位藤原連盛）　河內使（散位藤原賴□）
攝津使（和氣致賴、件畿內使等、依上宣外記催之、）　東海道使（蔭子藤原季忠）
東山道使（右兵衛權少尉平明範）　北陸道使（蔭子大中臣賴宣）
山陰道使（蔭孫橘則經）　山陽道使（蔭子藤原行任）
南海道使（蔭子藤原經□）　西海道使（雜色蔭子平賴盛）

已上使等、藏人所衆等也、同右中辨於御前定之、從所方令催之、殿上人同且從所方令催之、

廿七日壬戌、使々供給官符可儲之由有仰、七道五畿內宣旨可仰云云、又宇佐使可賜祿綿官符可仰儲者、入夜歸宅、　十月二日丁卯、早旦參內、七道幷給太宰宇佐使綿官符等仁加署、令渡外記、次參內、可覽神寶等之由云云、頃之參入八省、御裝束等如常、巳剋許、右大辨被參八省東廊、被行大祓、（是依京畿七道諸神、一代一度幣帛、神寶等被奉也、）次被著政請印所、（是給太宰祿綿官符也、）次內侍相共於小安殿裹伊勢幣、次史神祇官人相共於宮城令裹諸社幣等、列立嘉喜門西腋廊北面、未剋源大納言率內記外記史等、從內被參八省、座定之後、大內記義忠伊勢度會兩宮宣命二卷、入筥覽上卿、上卿移著東廊座、（召使、官掌同從、余幷內記外記史、）中臣忌部進給御幣、次使王進給宣命、退出、次上卿以下歸著北廊、次義忠宇佐香椎宣命二卷入筥、進置上卿前、次諸社宣命卅九卷入筥進置、次先召宇佐使右衛門佐良賴給宣命、（香椎相加、）次次第召使使給宣命、使等賜宣命退出之間、神祇官人幷史致任、官掌等相共於嘉喜門西腋邊□□帛幷供給官符等、（但殿上人不賜供給官符、宇佐使不在此限、）使等各請□進宮城、又請神寶等分參、及晚事畢、今日被立宇佐使之由於御前有御祓、又召

使御衣一襲云云、

〔本朝世紀〕康治二年八月十三日丁酉、權大納言藤伊通卿參仗座、仰外記云、軒廊御卜之日、一代一度大神寶定例可勘申者、御卽位御祈奉幣之日、幷被立大神寶使之日、被行佛事幷他事有所見、可准據之由令申了、先被定大神寶日時、又被始行事所、　十月廿六日己酉、權大納言藤宗輔卿參、被定一代一度大神寶日時幷大祓日時事、(奉幣十一月六日戊午、時巳二點、大祓同日時辰二點、)　右中辨藤資信朝臣書定文、　十一月九日辛酉、今日權大納言藤宗輔卿參仗座、被立一代一度大神寶使、辨以下於建禮門行大祓事、以右衞門權佐藤宗保、爲宇佐使、同使官符有請印事、少納言源師教等勤內印事、次有結政請印、參議藤教長朝臣、少納言源師國、大外記淸原景憲等參仗、以散位行憲王爲伊勢使也、抑宇佐使宗保俄奉使節、旅裝束不具、逗留鳥羽邊、後日進發云云、

〔山槐記〕永曆元年十一月十一日乙酉、今日大神寶次第、自內令申大殿御、只今淸書持參也者、○中略　未刻參內、大神寶未持參、件事本藏人皇后宮權大進長方奉行、而七日服暇事出來辭申、仍予(○藤原忠親)奉仰仰藏人少納言信範了、○中略　信範召左右馬部付諸國雜掌、太難叶、秉燭以後御覽、先是申刻許大納言令著仗座給、就弓場且被奏聞宣命草、(入宮二合、)信範奏之、次又就弓場被奏淸書、入宮(二合五十三通也、)信範召具藏人泰綱、各取一合奏聞、(於鬼間邊付內侍、)　返給、(此後大納言殿暫之候小板敷、被仰云、須參八省也、而神寶遲引之間、暗夜東廊有恐、相計程著也者、)　次有御湯殿、

次掃部寮敷筵二枚於西三間、(右灰壇御所、南面西禮也、)東西行南北對敷之、三間敷圓座、(用大床子圓座、蓋御座西數之、)爲御座、(左右供掌燈、)　二間母屋敷圓座一枚、(用陪膳圓座、)　爲關白御座、次於長橋下(此殿依傾也、自小板敷可往返也云云、)　開韓櫃蓋、蓋上取居神寶、(御細工成、襲居之、)　五位殿上人幷六位昇也、居筵上、與內宮(御劒一蓋、錦蓋以下□□物、一蓋、御桙以下一蓋同前、)　居了申此由、次出御、(御直衣、)　著御圓座、(自晝御座上令往返御、)　關白令候第二間圓座給、次予往筵西幷中、(皆雖相待召無其氣色、仍參進者也、)跪內宮神寶傍、先覽幣、次覽御鏡、(蓋ヲ後方ヘ開テ傾テ、其備擬覽也、如本蓋退、)次歸自本路、跪長押下、覽外宮御幣幷御鏡同前、次催五

六位令撤之、次覽宇佐、(加御裝束)其儀如初、幣許覽之、大神宮以下不覽、鏡令置之間、予候簀子、(此殿無孫庇)覽了撤之、次石清水、覽了又撤之、次賀茂同前、次日前國懸同前、次京内五社(松尾、平野、稲荷、大原野、韓神、)一度覽之、撤了入御、七道道口各可覽歟、無夫不持參不足言、但先例不覽南海道云云、日前御覽了之故也、次御馬御覽、撤弘筵下庇御簾第三間簾中副御簾(退北二許丈)供圓座(用大床子圓座)次出御、(御束帶、爲御拜令改給、)關白令候二間簾中、予進候簀子、(第二間東第二間)予仰可引御馬之由、行事藏人傳催、自東中門引入御馬四匹、(三匹伊世、一匹宇佐、)三匝引廻引出西中門、予退歸、上入御、伊世御馬遣八省、宇佐御馬并使給御馬、暫令候、次有御拜事、其儀垂御簾、(此殿無孫庇、仍下母屋以庇撤之、)第四間敷小筵二枚、(南北妻)其上供半帖、(高麗縁、方在東西、撤御座、)御座左右供掌燈、西第一間立黒漆案一脚、(南北行、下敷葉薦、)其上置宇佐御劒、御鏡宮御幣宮等、(御劒入宮、刃西柄北、南北行置之、仍机上無所、仍御鏡幣等宮被止、此事如何、頼保云、院御時、御劒宮東西妻置之、仍机上有其所、置兩宮、如何者、信範辭事也者、可尋、)當御座間敷宮主使等座、次出御、關白(藤原基通)候御簾、給予供御笏、次供御贖物、信範役供、宮主獻大麻、予供之返給、(已上依去十日平野御祓記)次宮主著座、次使著座、御祓了宮主使退出、予撤御贖物、次御拜、次予賜御笏、次宇佐使民部少輔盛方、行事藏人頼保參進、昇出神寶(案テ取加テ昇出也)次入御、次撤御裝束、無伊勢御拜事如何、大殿令進次第給、信範奉行之、尤不審、追可尋事也、次如常敷晝御座、(依無孫庇暫撤之)次予召使、(可候殿上歟、今度只臨便候長橋西方、)使重候第三間、(先疑年中行事障子、可候簀子長押邊歟、而先候二間、頗久信範書令藏人談、仍被候三間、如何、)可有被仰事歟、而無其御氣色、依爲定事歟、次信範取御裝束、(御半臂、下襲、表袴、)入自鬼間障子出第二間、彼使出殿上方、次使下長橋、於西廊砌徒跣舞蹈退出、於八省給宣命云云、諸社使等皆於八省給宣命云云、件使等見定文有先日記、事了退出了、後聞神寶無夫、積雜役車云云、未曾有事也、

〔兵範記〕嘉應元年十月十日、壬辰、權大納言公保、修理大夫成頼卿被候仗座、藏人治部少輔兼光仰納言云、一代一度大神寶奉遣日時令勘申ヨ、幾内奉幣使令定申ヨ、次上卿召左少辨爲親、被仰日時事、召外記、被召奉幣使例文硯等、次左少辨獻日時、修理大夫書定文、次内覽奏聞如例、大祓日時同被勘下之、藏人少輔下幣料請奏二通、并宇佐使祿請奏等、上卿給左少辨、次左少辨申神祇官幣料請奏、即

被返下了、〇中略

應奉幣帛幷神寶使

大和　散位藤原朝臣成淸

河內　散位紀朝臣久明

攝津　散位源朝臣經仲

嘉應元年十月十日

奉幣幷使日時定文等下給外記、大祓日時下給史成重了、

入夜攝政殿令參內給、先於御直廬召御裝束、此間下官申行幸日時勘文依仰下上卿、此次申召仰事、次出仗座、左大將以下公卿多被候、〇中略殿下出御御座、有大奉幣京內七社使定、頭中將實守朝臣帶胡籙持弓執具硯參進、候弘庇、先撤硯、置例文於柳筥參進、御覽了返給、復本座、如元居硯執紙筆、隨仰書定文、次又撤硯置定文進覽之、又返給、如元置硯取之退入、定文給藏人了、次於殿上令書下七道使所衆欵、此間事委不見及、殿下令參朝餉給、

奉諸社神寶使

宮中幷京邊

石淸水　右近衞權少將源朝臣道親

賀茂　內藏頭平朝臣經盛

松尾　右近衞權中將藤原朝臣實宗

平野　右近衞權少將源朝臣有房

大原野　左近衞權少將藤原朝臣定能

稻荷　能登守平朝臣通盛

國狀韓神　右中辨藤原朝臣長方

嘉應元年十月十日

奉諸社神寶使

東海道　藤孫大江公朝

東山道　藤子源季清

北陸道　藤孫中原康言

山陰道　藤子中原友長

山陽道　藤子惟宗清實

南海道　藤子藤原貞經

西海道　藤子源安元

嘉應元年十月十日

藏人左近將監源兼親書之

廿六日戊申、下官參內、依大神寶進發也、于時未剋大神宮以下神寶從行事桂芳坊、併持參安置東中門內外庭上、掃部下敷薦、藏人治部少輔兼光、左近將監源兼親爲行事、又出納右衞門志盛俊、御藏小舍人宗時、同奉行有末、行事小舍人兩三人、此間上卿權大納言公保、於仗座見宣命草、次內覽奏聞、殿下召御裝束、候御前給、令郎返給、仰令清書、次歸仗座、有清書事、官符十三枚同被副奏、仰令請印、次有內文請印事、少納言秦經奉行之、

大和、河內、攝津三箇國、七道等各一枚、太宰府二枚、併十二枚云云、

有結政請印一枚、宇佐使祿綿文云云、修理大夫成賴參向行之、其次於八省東廊行大祓、左少辨爲親相共奉行、

又於小安殿奉裹伊勢幣物、內侍參入、件幣物兩面羅綱色々綾絹等、從神寶行事所調渡官方、是先例也、

次上卿於東中門、重被奏清書宣命請印文等、藏人大輔光雅、左近將監兼親等傳奏之、此次被申伊勢使御馬申由、各有仰詞云云、晝御座奉仕神寶御覽御裝束、(南一二間二行敷長筵、又三間南頭敷菅圓座、爲御座、二間母屋際在殿下御座、)

次童帝(○高倉)出御、(御引直衣無總角、紅御袴在打衣、)攝政令候母屋際座給、頭中將實守朝臣候西簀子、次五位雲客六位藏人運置神寶、

先大神宮御料、各大備一具、(內宮安奥筵、外宮安端筵、)

鏡筥、幣筥、錦蓋、麻桶、線柱、玉佩、

已上安辛櫃蓋置筵上、

御劒(副平緒)安筥蓋置之

御弓一、鉾一、箭四、幣串四、(已上安了筥蓋)

一備置了、頭中將參進、先開鏡筥蓋備天覽返置、次覽幣筥、內宮御料如此、

先例先覽幣薄歟、今度先鏡、定有樣歟、可尋知是非、皆撤了、

次宇佐御料四備(大二具小二具)(宇佐香椎大多羅志姬宮)

造花二前、御裝束二具副之、

御覽次第同前、次撤了、

次石清水二具、(大小)御覽了又撤了、

次賀茂二具(大)

次日前國懸二具、(大)松尾、(小)平野、(小)稻荷、(小三)大原野、(小二)園、(小)

已上七具、一度御覽併撤之、

次三箇國御料

大和春日　河內恩知　攝津住吉

一度御覽了撤之

次七道云云、各一社、又御覽了撤之、置晝御座、件神寶併返納、出納小舍人相具向八省、先是上卿同參向了、

此間主上召御裝束、藏人奉仕御馬、御覽御裝束、其儀上南面格子、西第二間簾中敷圓座一枚、返燈樓綱也、

次主上出御、頭中將候南簀子、御馬四匹引出自東中門、近衞官人有纓、南庭三匝引廻了、依引入了、(大神宮二匹、外宮一匹、宇佐一匹云云、)

此外又一匹儲門外、無御覽、給宇佐使了、

次奉仕御禊御裝束、南弘庇西第三間敷小筵二枚、供半帖為御座、(西向)同一間掃部寮敷小筵一枚、其上立內藏寮黑漆案、(南北妻)其上置御劍一腰、平緒一筋、(已上入宮筥、)御鏡筥、幣筥各一合、南庭當西二間去砌丈許、敷宮主座、其東北敷使座、弘庇返燈樓綱、年中行事障子押南、次主上出御、(御束帶、[illegible]、角糸鞋、)頭中將獻御笏、

次下官供御贖物、(散米)左衞門權佐經房役送、(人形)宮主捧大麻、就東廊西砌、下官傳供即返給、宮主著座、使左兵衞佐盛賴(闕腋、蝶鈿剱、巡方、魚袋、)著座、御禊了宮主退去、撤御贖物、次御拜、殿下令候御座邊給、次使退去、主上入御、返給御笏、次使昇殿、藏人兼親、相共昇出神寶案、次撤御拜座、次主上著御晝御座、殿下令候給、依仰下官召使、使參上候西簀子、殿下近召寄被仰勅旨、使退去之間、藏人少輔取御裝束、(半比、下重、表御袴、)自鬼間出弘庇給使、使經頭下南庭、參西方拜舞、退出之間、於中門邊、又給御直衣、(藏人兼親給之、此度無拜、自拔申也、)使歸昇候殿上、下官奉仰、仰云、十一月十九日可參著、又仰云、路次國々不可令滅亡、先使奉仰退出了、

于時戌刻也、使向八省了、爲給神寶幷宣命也、別給御馬於陣頭給了、瀧口一人、御藏小舍人國守等引率了、於八省院先伊勢奉幣使神寶等進發、次上卿歸座、宇佐使給宣命進發、
次八幡以下京內七社使殿上人、見定文所、
次三箇國使、五位使等、
次七道諸國使、所衆、次第進發云云、
宇佐使藏人所成給准擬牒了、
官符於八省給主典神司云云、
今日次第、具見于去去年十一月記、忩劇之間、大概注之、
〔玉海〕文治三年十月十六日癸未、此日大神寶日時定也、秉燭之後著直衣參內、內府相伴先是上卿新大納言實家卿、參議宰相中將通資卿等著仗座、定日時使等、余著殿上、宗隆持來日時定文等、發遣幷大祓日時共十一月三日也、各加禮紙、又近國使使之定文一通、不加懸紙、余○藤原兼實見了返給、次余向直廬定殿上使、頭中將實敎朝臣書定文、此事猶奇異也、雖一字不書之、只以筆宛紙上許也、未曾有事也、其儀如例、先高燭職事等立切燈臺如例實敎先覽例文、余讀之書定文、自懷中取出替也持來覽之、盛柳筥如例余見了卷加例文返給之、實敎加置硯折敷上、取之退下、次余參御前、此後實敎於殿上小板敷定七道使、藏人基定書之、頭及藏人共居小板敷也書了實敎持來令見之、先例不必覽歟、然而見之返給之、以所衆爲使也、事了余及內府退出、十一月廿二日己未、此日一代一度大神寶也、巳刻著宿衣、永保大殿御宿袍、見堀川左大臣記、寬治同殿御直衣、天仁、天治又同、然而余案事情、猶宿袍可宜歟、隨又公卿勅使神寶御覽之時、故殿著宿衣給、仍所著宿衣袍也、參內、神寶未持參、使未參、仰奉行職事宗隆、各加催促、頃之上卿新大納言實家卿參入、先以行事辨基親奏聞日時、發遣大祓各一通、共有懸紙、先日被勘去三日之由了、而依每事不具所延引也、今日時未二點云云、余候朝餉、見了卽返給、小時被奏宣命草、○中略余見了返給、仰可請印之由、次以六位藏人被奏官符、使使官符內印之文云云見了返給、仰可請印之由、此間主上○後鳥羽御湯殿了、是又太懈怠也、每事如此、更無治術事歟、神寶僅以持參、被十度遣使所責出也卽先口可取遣伊勢神寶之由、主上著御御直衣、御引直衣也、無御捻角、實

（敷朝臣奉仕御裝束也、）置伊勢神寶了、主上出御神寶御覽之御座、（先是敷疊御座、其隣敷大宋子、厚圓座爲御座、南面、）余候南庇東方、（母屋方也、）（以陪膳圓座爲其座、西南、）以西庇南一二間爲置神寶之所、南北行與端相並、（置中疊、）敷莚、（南端四五尺不及、南格子爲役人道、）其上置神寶、（內宮置奧、外宮置端、內外宮各大一備也、）殿上五位六位役之、（出入南一間西面也、）出御以前置伊勢神寶許了也、出御之後召頭中將實敎、先開金銀幣筥蓋、近持參備叡覽、次開御劒筥蓋、如初、（外宮同前、）了殿上五位六位撤之、了次置宇佐、香椎、大多羅志姬宮等神寶、（宇佐香椎各大一備、大多羅志小一備、宇佐御裝束四具、香椎各一具、女體二具也、奧置宇佐、端置香椎也、）次寶敎開蓋備叡覽如例、（但宇佐已下、只覽金銀幣許也、）次役人等運出之、次石淸水（大二備、小一備、）叡覽如初、卽運出、次賀茂、（上下各大二備也、）御覽了運出之、次日前國懸（各大一備、加賀茂、）御覽了運出之、次京邊五社（松尾、平野、稻荷、大原野、園、韓神等也、但此中園、韓神不覽之、爲先例之由、見天治故殿御記也、又稻荷三社也、松尾、平野、大原野各小一備、稻荷小三備、所備叡覽坐七具也、稍小一備者二蓋也、稍大一備者三蓋也、）一度取置、覽了卽運出了、次畿內三社、（大和、春日、河內平岡、攝津住吉、是又各小一備也、此外社雖有其數、各覽爲宗之一座也、）一度御覽運出了、次七道各一社覽之、（是又各小一備也、但南海道不覽之、日前國懸先覽之故也、七道之中雖其社多、各御覽最初社之神寶一也、是先例也、）一度御覽了、皆運出了、次入御、御覽神寶之間、奏聞宣命淸書、（宗隆自鬼間方持來、）余少見畢返給、此次申使王申御馬之由、仰聞食了之由、次撤莚等了、次仰藏人等上南面御格子、垂西面御簾、南面簾中當階間敷大牀子、厚圓座爲御座、其東間敷陪膳圓座爲余座、次主上出御件御座、（驗御直衣也、）余候東間、次頭中將實敎朝臣參候南簀子、次奉神馬四匹、（伊勢內宮二匹、外宮一匹、宇佐一匹也、府者二人牽之、御馬乘馭身不牽、）三匹之後引出了、（不令鳴之、）次入御、令脫御裝束給、經家朝臣奉仕御總角、此間余向直廬改著裝束、（蒔繪劒如例、）卽歸參、主上著御裝束之間也、御殿南廣庇、只雖敷御拜座、未立神寶案、仍仰宗隆令立馬庭中立此案、余聞之、宗隆云、御幣案也云云、此事勿論也、大神寶之時全無宮幣、只神寶金銀幣許也、仍庭中使宮主座之外、全不可有他物、堂上立案一脚、可置御劒等也、仍仰此旨令改直、又御拜座可敷西第三間、而敷二間、仍同令直之、次召殿上五位六位令置神寶、（件案立南廣庇西第一間中央、南北妻立之、下敷小筵一枚、件案南端置御劒箱蓋、敷袋其上置御劒、御覽之時無相違、其北置御幣筥二合、東西相並、案狹少之間、其端各餘案外、北端置御鏡筥一合也、）當御拜座間、寄西敷宮主座、其艮方敷使座、（各膝突也、）其後數刻宇佐使不參、先是能保朝臣申云、存人夜可參之由云云、勿論不足言也、尋宗隆之時、徒仰卯刻

可參之由、返返召仰了之由所申也、重可召遣之由仰宗隆、又仰能保朝臣了、（件使隆保、能保相親人也、仍仰也、）日已欲入之間使參入、卽主上著御御拜座、（先拂庭中雜人、余褰御簾、卽出御、自御拜座間也、御座西面也、）余候御座後北方、仰實教朝臣令進御笏、次供御贖物、（陪膳實教朝臣、役送宗隆、）次宮主獻御麻、實教朝臣於中門廊南妻傳取之持參、主上一撫一吻了返給、宮主取之著座、次使著御禊之間、令撫人形給如先、次宮主退出、次使退出、依無官幣無取御幣立之儀也、此間撤御贖物、次御拜、（向坤方給、兩段再拜如常、）次頭中將參上賜御笏退下、次入御、（余褰御簾、）次召使幷行事藏人基定、令舁出神寶案、是定例也、（所居中央之御幣宮二合、依有其差置也、）次仰藏人等如本令敷晝御座、又卷西面御簾、次主上更出御晝御座、（御東帶如本、西面、）余候御座北間、召頭中將參候西簀子敷、仰使可召之由、卽隆保參上、候西簀子御座南間長押下、主上仰云、在位可久之由可祈申者、（微音也、仍余僅御聞也、）使退下之間五位藏人宗隆取御衣、（御半臂、下襲、表御袴等也、）出自鬼間障子、經南庇出自西面妻戶、（南第一間也、）於同妻戶下給使、（使、宗隆作立給之、仍余仰居天可給之由、卽居給之、尤未練也、）次使取祿自堂上欲退、仍余仰降庭可拜之由、降自西面階作西、（御所方向後、余雖敎訓、僅向乳母方奇異也、）先左右左、又臥天左右左、其後退、一切無拜、奇恠希有、不可說之事也、次入御、〇中略抑大神寶者、伊勢有奉幣、有神馬、又宇佐勅使發遣、理須有兩方御拜也、而代代例無伊勢御拜、只宇佐御拜許也、天治故殿御記如此、其後代代記全無件御拜、只江家次第載件御拜、但頗非無事理、其故先石灰壇奉拜大神宮事了、發遣之後、又於南殿有同御拜之由候也、件條頗不審也、依此等之疑問禪門、（〇藤原忠雅）被答云、數代之例雖被乖歟、任故殿記可有沙汰歟、大神寶爲宗宇佐事、因玆不服魚味給歟云云、隨又保元有沙汰、猶依無代代例無御拜之由見後經記、皆親經申也、彼時故殿定有御沙汰歟、仍今日又無件御拜、猶恐心所傾思也、

〔百練抄 十五 後嵯峨〕寬元三年十月八日己巳、大神寶行事所始日時定也、堀河大納言具實卿參行之、

十一月五日丙申、大神寶發遣、幷當日大祓日時定也、大納言具實卿以下參入云云、　十三日甲辰、一代一度大神寶發遣也、

〔柱史抄 帝王下〕大神寶事

天皇卽位後、一兩年間必有此事、宣命合五十三通也、兼日任例令書、設宣命、其儀上卿參仗座、先是神寶等昇居於射場殿、任目錄、兼日尋行事出納、可注入宣命也、上卿召內記、內記持參宣命草三通、伊勢一通、宇佐一通、諸社一通、有辭別之時四通、願有眞假、仍內宮宣命草二通所書分也、無辭別之時、或無草奏云云、外內覽之後、上卿參射場殿奏之、次還著仗座、令清書、內記給五十三通於筥一合進之、上卿向八省發遣、次第如恒、

〔朝野群載 內記十二〕一代一度神寶

天皇我詔旨度、掛畏支賀茂皇大神乃廣前爾申賜倍申久、先先乃御代御代乃例爾、卽位之後仁神寶造飾天奉出給利倍、故是以吉日良辰乎擇定天、錦蓋、弓、箭、劒、桙等乃種種乃神寶遠潔久妙仁令造飾天、禮代乃大幣帛遠令副捧天、官位姓名遠差使天奉出給布、此狀遠神奈加毛聞食天、天皇朝廷遠、常磐堅磐爾夜護日護爾守幸給天、風雨順時倍、五穀豐登之、災難永斷、依万民平安久惠給倍申給久申、

〔玉海〕文治三年十一月廿二日己未、此日一代一度大神寶也、○中略小時被奏宣命草、以職事宗隆被奏之、大神宮一通、宇佐一通、諸社一通、各書紙屋紙、并三通也、不載辭別、先日宗隆觸辭別有無、余仰云、諸社宣命可載天變壇賞等事、宇佐宣命可加怪異遲留事、但先例大神宮宣命被載加此事哉、可依先例者、今日依不審問宗隆之處、任先日御定宣下、且問了云云、而今無辭別、仍問宗隆、申云、隨仰上卿了云云、余仰云、然者可問上卿實家卿也、歸來云、上卿被申不覺悟之由、勿論也、隨可下知之由、有其請文云云、余仰云、直不仰內記歟如何、宗隆云、不然云云、是又有若亡也、但日已及晚陽、忽書改五十三通之宣命者更不可叶、今日之事、隨又先例多無辭別、仍就宜不仰可加載之由、但臨事無沙汰、上卿之不覺取而有餘、

〔皇大神宮年中行事〕于時自外宮六禰宜康久神主方此記被送之間注留、○中略

天皇我詔旨止、掛畏支伊勢乃度會乃山田原乃下都石根爾大宮柱廣口立天、高天原仁千木高知天稱辭定奉留、豐受皇大神乃廣前爾恐美恐美毛申給波久止申久、先先乃御代乃例爾、卽位之後爾神寶造飾天奉出給倍利、故是以吉日良辰乎擇定天、錦蓋、弓、箭、劒、鉾、并御服玉佩、寶鏡等乃種種乃神寶乎潔久妙爾令造飾天、王散位從五位下兼邦王、中臣從五位上行神祇權少副大中臣朝臣永基等乎差使天、忌部散位正六位上齋部宿禰親宣加弱肩仁太繦取懸氐、金銀乃御幣爾禮代乃

大幣帛乎相副天持齋利令捧持天奉出給布、但雖非舊貫止毛、近代乃例爾依天御馬一匹乎所牽進奈利、此狀乎神奈加良毛聞食天、天皇朝廷乎常石堅石爾夜守日守、風雨順時比五穀豐登奈良志女、災難永斷天萬民平安惠給倍止恐美恐美毛申給波久止申、

辭別天申久、異國者雖通遠候止毛、類三韓天永爲西蕃之臣志女、殊俗者彌致欽戴天隔萬里天皆爲夷狄之民良牟、夫吾朝者神國奈留故爾、神明乃靈鑒不違須、四海者王土奈留故爾、王法乃聖運无恙志、因茲天朕者繼千堯之口支、神者護百王之世太利滿倍、就中去七月之比、三星合影天敵日星變須、候臺所奏呂畏途多禎、縱理運天皆志可來支不祥奈利止毛、可至災孽奈利止毛、皇大神此狀乎聞食天、未兆爾、拂退給比天、玉體安穩爾、赤縣无爲爾護幸給倍止恐美恐美毛申賜波久止申、

文永六年八月廿三日

〔北山抄五〕奉諸社神寶事、先於建禮門前有大祓、承平二年前日行之、天慶十年、當日早旦有此事也、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年正月十日丁卯、是日始奉天下諸社神寶、仍大祓於建禮門前、

〔三代實錄清和三〕貞觀元年七月十三日丙寅、大祓建禮門前、以明日將發奉諸神社幣幷財寶使也、

〔日本紀略村上三〕天曆元年四月廿日乙亥、奉遣一代一度大奉幣於伊勢大神宮幷京畿七道諸國神社、○中略於建禮門大祓、

〔日本紀略圓融六〕天祿元年十一月十日戊申、於建禮門大祓、依明日大神寶也、

〔左經記〕寬仁元年九月廿七日壬戌、參源大納言俊賢○中略御許、奉宣旨、即令余申云、來月二日依可被立大神寶使、朔日可行大祓、而彼日欠日也、非無事忌、今月晦日若二日早旦令行如何者、即參內申此由、仰云、晦日若可行者、

〔日本紀略後一條十三〕寬仁元年十月二日丁卯、一代一度大神寶、先之於八省院東廊大祓、

〔兵範記〕嘉應元年十月十日壬辰、藏人治部少輔兼光仰納言云、一代一度大神寶奉遣日時令勘申■、

奉幣使

○中略大祓日時同被勘下之、○中略

陰陽寮

擇申可被行奉遣一代一度大神寶使於七道諸國大祓日時

今月廿六日戊申　時辰二點

嘉應元年十月十日　　連署同前

〔三代實錄 清和三〕貞觀元年七月十四日丁卯、遣使諸社奉神寶幣帛、參議正四位下行左大辨兼左衞門督美作守藤原朝臣氏宗爲賀茂御祖、別雷兩社使、散位從五位下正峯王爲松尾社使、正五位下守右中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人爲平野社使、從五位下行主殿權助藤原朝臣水谷爲大原野社使、右兵衞佐從五位下源朝臣至爲乙訓社使、從五位下守兵庫頭藤原朝臣四時爲大神社使、掃部頭從五位上藤原朝臣貞敏爲石上社使、從四位下行兵部大輔藤原朝臣仲統爲春日社使、從五位下守圖書頭當麻眞人清雄爲當麻社使、中務少輔從五位下源朝臣包爲住吉社使、散位從五位下丹墀眞人縄主爲丹墀社使、少納言兼侍從從五位下良岑朝臣經世爲杜本社使、神祇大祐正六位上大中臣朝臣豐雄爲氣比氣多兩社使、散位從五位下紀朝臣宗守爲日前國懸兩社使、

〔日本紀略 醍醐一〕昌泰元年七月廿日戊子、下知五畿七道諸國、奉幣神寶於諸名神社、或云、廿六日發遣之、八月廿三日庚申、發遣使者於伊勢大神宮、幷五畿七道諸名神、奉神財、又豐前國宇佐宮同奉神財、

〔日本紀略 朱雀二〕承平二年九月廿二日辛丑、依大嘗會、被奉一代一度大神寶於伊勢及諸社、

〔貞信公記〕承平二年九月廿二日、卽位之後神社神寶、今日奉遣、從八省出云云、

〔九暦〕天暦元年四月廿日、一代一度神寶被奉諸社事、宣命在五十三卷云云

〔日本紀略 冷泉五〕安和元年十月廿日庚午、天皇御大極殿、被立伊勢已下諸社幣帛使、是則大神寶被奉故也、

〔日本紀略圓融六〕天祿元年十一月十一日己酉、被奉五畿七道神寶使、

〔日本紀略花山八〕寬和元年十一月十五日乙酉、奉遣一代一度大神寶使、

〔日本紀略後一條三十二〕長和元年十二月十九日壬午、奉遣大神寶使伊勢以下五十一社、先之大祓、　二年十月一日己未、一代一度大神寶、宇佐使左衞門尉源賴國朝臣、

〔日本紀略後一條十三〕寬仁元年十月二日丁卯、一代一度大神寶、　十四日己卯、奉遣去二日神寶漏落神寶、

〔小右記〕寬仁元年十月二日丁卯、今日五畿七道使、近邊神社使殿上人、宇佐使右衞門佐良賴、道道使藏人所衆、宇佐使良賴者帥納言〇藤原隆家息、帥爲下官芳心殊深、仍志與良賴朝臣於女裝束二襲馬一匹、

〔左經記〕寬仁元年九月十四日己酉、今朝右衞門佐藤原良賴被聽昇殿、帥中納言一男也、爲遣宇佐使也云云、件使右衞門權佐章信朝臣被定擬狀、依爲東宮進有定被改替也、先例坊官不勤此役云云、　廿日乙卯、依可被定一代一度奉幣早旦退出、風聞頭右中辨於攝政殿御前書定文云云、〇以下見上文儀式條、故略、　三十日乙丑、今日於殿上有宇佐使餞事、兼日以廻文告示一種物可被出之由於人々、及晚始事、內藏寮儲使前物、令居殿上人盤上、或人云、使前物藏人頭用意云々、而依事忽、昨日召仰內藏寮也、或先例仰此寮云々、　十月八日癸酉、源大納言被示云、香椎、姬宮幷坐石淸水姬宮、並三所料神寶前日取落不奉、仍差御倉小舍人幷神祇官人追可被奉也、早可召試可然小舍人者、〇中略　又召出納令仰小舍人保重可遣宇佐之由、幷可然官人一人可差奉之由、令仰神祇官畢、　十日乙亥、早旦參攝政御宿所、〇中略　被仰云、宇佐使良賴、以來廿五日可著太宰府、從其可參宇佐之由云云、追可奉神寶、同者追著彼日以前、令請取使良賴宜歟、人々從播磨乘船下向者、廿日以前可遂前途者、又明日御衰日、明後日凶會也、恐及延引、若件日可忌哉、又被立使日者可有御祓哉否、如此事等參大殿申事由、隨仰可行者、卽參大殿申事由、被仰云、船甚吉事也、又御衰日幷凶會日尤可忌、

又前日取落不奉之由有御祓、尤可吉者、則歸參申仰旨等、被仰云、召播磨守廣業朝臣於國津早儲船、宛粮料等、使可送太宰府之由可仰者、其粮料水手等料、可用所在官物者、則召廣業仰仰旨、幷賜所御牒於播磨幷路次國國、使小舍人保重聞此由隱不參、仍差秋成發遣、但保重申事由、永解却所職、又神祇官龜卜長則正差奉、皆載所牒畢、及晚退出、　十二日丁丑、今朝蒙攝政殿仰、宇佐使小舍人秋成可加勞之由、遣御教書於路次國國司等、入夜攝政殿仰云、明日石淸水使可用殿上四位、以朝任朝臣可差仰者、　十三日戊寅、以小舍人友信可奉仕石淸水使之由示源中將、卽令申可奉仕之由、及晚景源中將申犬死之由、卽攝政殿令輔尹申障由、(依御物忌)仰云、石淸水神寶使付宇佐使小舍人可奉歟、(八字)爲當別差殿上侍臣可奉歟、此由參大殿可申者、卽參申此由、仰汝參詣奉神寶之次、能申事心可祈申者卽參令申事由、　十四日己卯、早旦參內、神寶三具令調備、○中略　巳一刻有御禊、(宇佐石淸水神寶等、行事藏人輔宜取遂奉他所、仍更仰)(神寶追獻奉、因是有此獻也、)御禊畢、令持神寶參石淸水、及申刻參著、令申祝奉神寶等畢、○中略　及丑刻歸京、　十二月二日丙寅、宇佐使良賴歸參、令藏人修理亮範永奏平安奉安神寶等之由退出、

〔扶桑略記 二十九 後三條〕延久元年十月□□□□諸國發大神寶使、

〔年中行事秘抄〕依一社穢諸社奉幣延引例

天仁二年十月廿三日、可被立一代一度大神寶使、而依賀茂別雷社俄有丙穢延引、廿九日、被立一代一度大神寶使、

〔顯廣王記〕仁安二年十二月十一日己亥、一代一度大奉幣使也、上卿源大納言定房卿、行事頭辨信範朝臣也、伊勢使王資遠、中臣親賴、忌部致貞、卜部伊岐宗信、(初度)　十二日丙子、宇佐使左衞門佐平信基、主典伊岐季遠、神部正元云云、今月被下宣旨云、正親正顯行解氏務可付長者云云、此事不穩便、更以所不存也、使王等參障所訴申歟、追是外記使部助正骨張也、

八幡(源少將通能朝臣)　賀茂(中宮亮國雅朝臣)　松尾(少將房通朝臣)

齋戒

〔玉海〕文治三年十一月廿二日己未、此日一代一度大神寶也、○中略

今日殿上使

石清水　刑部卿宗雅朝臣

賀茂　右少將顯家朝臣

廿三日庚申、宗隆來申云、七道使所乘等、稱不賜國司廳宣、于今不進發、雖受取宣命神寶、猶宿納神祇官、今朝責取國司廳宣等、雖下給、稱可給院廳御下文、猶不發遣、爲之如何、余仰云、憖付苛法使可追立、去夜不進發之條尤違例也、兼日不召給廳宣之條、可謂懈怠、廳御下文之條、無先例ハ、専不可然事也者、

〔仲資王記〕建曆三年十一月廿八日甲午、宇佐使進發、侍從光家自本殿上人也、今日一代一度大神寶同被發遣云云、侍從參內、爲神寶御覽役云々、

〔百練抄〕十五後嵯峨仁治三年八月十七日丁卯、內大臣參入、被定一代一度大奉幣幷宇佐使日時、今月十九日大奉幣、廿二日宇佐使、　十九日己巳、大奉幣等官符請印、其後於神祇官被發遣、　廿二日壬申、宇佐和氣使典藥大允和氣弘成被發遣、

〔吉續記〕文永五年九月十八日、參院、奏大神寶條々、○中略宇佐使可仰俊氏、○中略發遣可爲來十一月九日云々、期日不幾歟、　廿一日己巳、參院、大神寶宇佐使俊氏申子細、以彼請文奏聞、

〔江家次第〕十五踐祚大神寶次第

行事藏人、神寶於便所渡、使立了之後、主上渡御於南殿、有御拜、如恒、次經二箇日被仰衞府可停贄、近江可停雉、宇治田上網代可放、至宇佐使參宮日、御精進、此間御讀經出外、御修法御加持不可奉仕、有伊勢幣、供魚實不食也、

〔左經記〕寬仁元年十一月一日乙未、早旦供忌火御膳、依宇佐奉幣使事、月來御精進也、仍有定、忌火御

膳同用精進物、廿二日丙辰、今日內膳御膳皆用魚、又解齋御粥同用魚、但贄御膳御精進也、是宇佐使未還參、仍月來御精進也、雖然晴御膳用御精進物頗無便、仍有定供魚也、

○按ズルニ、宇佐奉幣事トハ、是ヨリ先キ十月二日ニ大神寶使ヲ發遣セシヲ云フ、(事見上文儀式條)又十一月廿二日ハ、新嘗祭ノ豐明節會ナリ、

〔兵範記〕嘉應元年十月廿六日戊申、下官參內、依大神寶進發也、(○中略)自今日至于來月十九日參著御精進由、下知四府幷御厨等了、晝御膳殿上同前、

〔令義解 二神祇〕凡天皇即位、總祭天神地祇、(○中略)其大幣者三月之內、令修理訖、(謂大幣者、供神幣物、各有色目、金木幡金線柱、奉伊勢神宮、幡戈奉住吉神之類是也、三月之內者、唯據月言、不以日計、謂始自九月、終十一月也、修理者、此官新造也、)

〔北山抄 五〕奉諸社神寶事

諸社神寶、蓋劍弓矢桙也、幣帛加之、大神宮加飾劍玉佩、宇佐加御衣二襲、(一襲俗、一襲僧)各飾劍玉佩云云、(寬弘例、所有二社以上者、每社一前、但一社有二座以上者、只奉一前、幣帛如常、天慶例、宇佐御裝束、僧俗幷后裝束及女裝束合四襲云云、神寶五十七具、伊勢二具、宇佐香椎四具、賀茂二具、稻荷三具、日前國懸二具、合五十七具、石淸水只奉幣帛也、)

〔左經記〕寬仁元年九月廿七日壬戌、參內、(○中略)被仰云、伊勢宇佐(仁)神寶幣帛相具奉之、自餘諸社只奉神寶不奉幣、而年々宣命、幣帛神寶奉者是如何、相尋可行之由可示大納言(○源俊賢)者、卽參申此由、可尋行之由被申、　十月二日丁卯、參內、可覽神寶等之由云々、(○中略)

神寶支配事

伊勢　度會　宇佐二所(宇佐、并大多羅志女料也)　石淸水二所(八幡、并大多羅志女料也)　賀茂上下　紀伊國日前國懸

已上十一所、(○一恐衍)各被奉金銀幣各二枚、(納平文筥、在錦折立、)

錦蓋一蓋、(付四角金銅鈴、)玉佩一流、(納平文筥、在錦折立、)一尺鏡一面、(納平文筥、在錦折立、)金銅鈴一口、(付錦緖、)

已上口物等納赤漆韓櫃一合、以盤繪絹覆、以赤絹結之、

平文麻桶一口、平文線柱一本、平文柞一本、在鐵身尻、飾劒一腰、付唐組緒物結、納赤漆細櫃、白革袋紫色組、□□之、

赤漆弓一張、箭四筋、納赤漆細櫃、但此外宇佐被副奉御幣并御裝束等、錦二匹、綾十二匹、緋六匹、紫六匹、五色絹

卌匹五丈、各青、黄、緋、白、黒、八匹一丈、木綿大二斤二兩、生絹二匹一丈、

已上幣物等納赤漆韓櫃二合、在覆綱等、

法服一具、甲漆袈裟一條、□□一□、赤白橡綾表衣一領、五重赤色裳一腰、淺黄綺線綾表袴一腰、大口一腰、□綾帶一筋、青織物座具一枚、錦襪一足、挿鞋一足、

已上物等入平文衣宮一合、□□□□錦折以綾裹之、

俗御裝束一具、綾青白橡表衣一領、綾下襲、井半臂、縮線綾表袴一腰、大口一腰、綾襪一足、入物等同前、大多羅志女御裝束、摺綾唐衣一領、染薄物裳帶等、蘇芳

目染綾、裳一腰、各在金銀泥繪、御袴一腰、入物等同前、

姫宮御裝束一具、三重唐御衣一領、摺裳一腰、單袴一具、已上入物等同前、副調布一襟端一丈、小篋四枚、篦四枚、宮司等料絹卅匹、綿六十屯、調布卅端、

園并韓神　稻荷　松尾　平野　大原野

大和國春日、大和、大神、石上、率川、廿河内國恩知、平岡、攝津國住吉、大依羅、生田、長田、已上不宛、

驛鈴

東海道伊勢國多度社、尾張國熱田、駿河國淺間、伊豆國三島、下總國香取、常陸國鹿島、

東山道近江國日吉、美乃不破、信乃須波、上野貫前、下野二荒、陸奥鹽竈、出羽大物忌、

北陸道若狹若狹彦、越前氣比、加賀白山、能登氣多、

山陰道出雲熊野、杵築、

山陽道播磨伊和、美作中山、備中吉備津彦、安藝伊都伎島、五十

南海道伊與大山津見

西海道筑前宗像、住吉、筑後高良、肥後阿蘇、豐前宇佐、香椎、石清水姫、○宇佐、石清水ハ既ニ上ニ在リ、此宇佐、香椎、石清水姫ノ三神ハ共ニ姫神ニテ、下ノ八日ノ條ニ云ヘル三神ナルベシ、

已上卅八所、被奉紫綾蓋一蓋、(四角在金銅鈴)

平文野劍一腰、(入赤漆細櫃)　赤漆御弓一張、箭四筋、

平文鉾一本、(在綫身尻)　五寸鏡一面、(在平文錦折立)

平文麻桶一口　平文線柱一本

奉除伊勢兩所、幷宇佐、香椎等之外者、皆被奉御幣一捧、(各絹五疋、綿一屯、糸一兩、以薦裹之、)

八日癸酉、参内、○中略源大納言被示云、香椎、姫宮幷坐石清水姫宮、幷三所料神寶、前日取落不奉、仍差御倉小舍人幷神祇官人、追可被奉也、早可召試可然小舍人者、有頃攝政殿被仰云、藏人頼宣誤留件所神寶等、加奉園幷韓神、稻荷等社、(御定園韓神一具也、而加奉園幷韓神二具、稻荷三具也、)仍蒙大殿勘責、恐申退出、早召仰作物所、來十二日以前、可令作奉件神寶三具者、卽召預衆善宿禰、仰此由、次小舍人豐信仰件三具料物、可□□(件神寶依本預行事、其殘等預置、仍所仰也、)　十日乙亥、早旦参攝政御宿所、衆善所申請之金四兩二分、銀四兩二分、申事由取出、自納殿令宛給、(神寶料也)　十四日己卯、早旦参内、神寶三具令調備、造物所預衆善宿禰参入、卽令給祿、(疋絹○中略)令持神寶参石清水、○中略宮司等云、朔三日追被奉錦蓋一、飾劍一、御弓二、箭八、桙二、一尺鏡一、玉佩一、麻桶、線柱各一、金銀幣一筥、野劍一腰等也、今日神寶相加四具也者、

〔小右記〕寬仁元年十月二日丁卯、令仰大外記文義朝臣、令申参來由、臨昏参來云、○中略今日被立畿内七道奉幣帛之使、有被奉神寶社々、大納言俊賢卿出八省院、給宣命於使々、有所憚不参八省、諸社神寶有其疑、日來被尋前例、無慥記、依作物所勘文所被作、其後多事疑、被問神祇官、所申不慥、飾劍二柄、鹿嶋香取料者、卽載宣命、忽磨宣命、被載石清水宣命、或云、若可被奉園幷韓神歟者、此間縱橫無一定、逐被載石清水宣命、又云、不可被奉神寶之神社、載神寶於宣命、上卿云、於八省可改直者、奏覽文於八省院、上卿任意令改直如何者、内記須以藏人所注送神寶之文可載宣命、又藏人所(行事左中辨定賴、藏人頼宣、)定尋前例、其社(仁)其神寶(止)定可令造歟、故院(條)○三御時、左大辨道方行件事、被問彼時例、所申不慥云云、從

始能可被尊事也、神事違例、非無事徴歟、當時治天下之始、神事〈伊勢〉降雨、後々神事必雨、太佐々々、有感應歟將如何、後日可知應不者也、〈○中略〉後日大殿〈○藤原道長〉被示宰相〈○藤原實平〉奉神寶之社々、臨當日脫牢事、誤太多、勘當行事藏人賴宣、但石淸水宮奉神寶二具、今一具不足、彼使讃岐守濟政也、宮寺司神主兼任申云、可有三具而有二具、可止何實前乎、宮寺司難進止者、良久不奉者、神寶等又更奉令造可令被奉之由有大殿命者、此事極不宜事也、件事藏人頭定賴同承行事也、宰相云、香椎廟不被奉神寶、只奉幣帛、而此度被奉、以石淸水宮神寶被奉香椎廟歟者、能々不被尋行歟、但此事無慥說耳、宇佐三所、而被奉二具、仍更造今二具、追被奉宇佐石淸水宮等名一具、

十月十二日奉謁大殿之次被談云、神寶等充社々仰行事藏人、而當日改先日定仰社、奉他社々、宇佐姬大神、石淸水同大神料不奉、仍忽令造宇佐宮料、十四日以隼船馳奉宇佐使、未奉御幣之前可附被使之由所令仰也者、此事猶不快事歟、能定仰何有相違哉、不慥之所致歟、外記文義先日云、當日有左右議事頗荒凉云々、後日藏人左少辨經賴談宰相云、宇佐二具石淸水各一具、合三具令造、差小舍人發遣宇佐使所、仰經賴朝臣被令造件神寶者、行事改定如何、猶不吉事也、件神寶事在十七日記、

十七日壬午、早旦左少辨經賴持來石淸水御封支配宜旨、〈○中略〉又云、去十四日令持神寶參石淸水、二具亦二具被奉宇佐、以小倉爲使馳遣使所、〈初石淸水二具被奉之、宇佐二具被奉、各今二具被奉之、先例、宇佐四具云々、〉件神寶等、忽奉仰事所令奉仕也者、

〔玉海〕文治三年十一月廿二日己未、此日一代一度大神寶也、〈○中略〉亥刻賀茂使右少將顯家朝臣馳來云、下御社神寶、先被奉二備、今有一備、加之辛櫃銘被書國懸、仍旁不能奉納之由禰宜季平所申也云云、余答云、石淸水、賀茂、日前國懸〈各一〉皆二備也、行幸神寶、下社二備上一備也、若慣彼例所申歟、大神寶之時上下各一備、是爲流例、更無異端、兼又辛櫃銘相違事、全不爲苦、賀茂與國懸神寶色目、一塵無相

違、早可奉納之由仰了、顯家卿歸參奉納了云々、卽召奉行出納久近（職事宗隆在入依以南仍不召）卽來、召問神寳違亂事、申云、日前國懸神寳紛失之由承之、今如承者持參賀茂歟、然者賀茂神寳失了歟、馳向使使許可尋問云々、丑剋歸來申云、日前國懸神寳相加河內國神寳等沙汰、出付南海道使了、書札之間、國懸ヲ二書テ押賀茂了云々、仍無相違云々尤神妙、

〔氏經卿記〕文正二年三月廿二日、大奉幣幷月次可被付行ノ由、十七日祭主下知、廿三日、幣使敎忠、御供氏賢、宮司氏長、神宮九人、九神主不參、去月次新年大奉幣等一度ニ被淸、玉串行事所ニ奉入（中略）爰大奉幣之官幣ヲ請取之處、無小幣モ只綾錦綾七反計也、送文モ無之、例幣臨時等每度入反由申處、於京都其旨申處、大奉幣ニハ大藏卿沙汰一反無之由被仰了、有御不審者、可被注進ノ由衞士等申、無送文又覺悟不分明之間請取之、外宮者只御倉ニ被納、無儀式云々、仍予捧持之、是趣ヲ申上、外幣殿ニ奉納、占部雖可有下向歟、無其儀、又不及宣命詔刀之沙汰、不審不少、舊記曰、大奉幣者、正殿ニ奉納、神事次第ハ、如公卿勅使參宮時、但饗膳等者、如臨時祭禮之時云々、

〔皇大神宮年中行事〕于時自外宮六禰宜康久神主方此記被送之間注留

文正二年丁亥

一代一度大神寳（祿人方沙汰）

一伊勢大神宮二備　可副例幣但官方沙汰

一備內宮御料

金銀御幣各二枚　錦笠一蓋（付金銀鈴四口）　玉佩一流（納平文筥）　一尺御鏡一面（納平文箱在錦）　御麻桶一口（在平）

文　御線柱一本（在平文）　金銅鈴一口（在錦緒）　御飾釼一腰（在雜物平緒赤地錦袋）　赤漆御弓一張（在赤地錦袋）

箭四筋（二隻雁俣二隻鏑目）　御杵一本（在纈貫尻錦比禮）

一備外宮御料（色目同前、使官行事沙汰、）

別相傳

文永六年八月廿三日、大神寶送文幷宣命等色目、爲同前間不注之、

內藏寮　奉送

五色絹陸匹

右奉送如件

文永六年八月廿三日　　正六位上行少辨中原朝臣式親

　　　　　　　　　　　正六位上行少辨中原朝臣季保奉

藏人所　奉送

御神寶一備

御幣四枚　金二枚　銀二枚　納蒔繪筥一合同平文白鑞置口鑞折立

錦笠一枚

面赤地錦、裏紫小紋綾、泥繪骨蒔繪、白鑞平文金銅蕨形蕊花鎰、帽額於骨爲、裏小鏡、四角上卷色色總玉上平玉、四角居玉、金銅榊打枝付銀木綿、置臺、

玉佩一流

色色總玉水精露　金銅金物　鏡火打　唐組緒　納蒔繪筥白鑞置口鑞折立　同平文

鏡一面

徑一尺　八花崎　繡緒　綾入帷　納蒔繪箱白鑞置口鑞折立　同平文

麻桶一口

蒔繪　白鑞平文　錦底敷

線柱一本

[illegible]

蒔繪白鑞平文　金銅金物、頂居水精玉、
已上納朱漆辛櫃一合、（金銅金物、鏁鏁、）綠絹折立、兩面覆、裏生絹袷、黑漆臺、同金銅木尻、
劒一腰
蒔繪金銅金物鐃鮫同水火　金麒麟　水精露　赤草裝束縫物平緒（付金銅螺小鳥孔雀螺鈿螺小鳥）　赤
地錦袋緌唐綾裏（泥繪付金銅螺小鳥）
弓一張
朱漆金銅藤殖　錦弓束村濃糸弦　赤地錦袋緌唐綾（付物同平緒）縫目伏組
箭四隻
塗箟鷲羽　水精殖金蒔口　金銅雁俣二　同蟆目二
鉾一本
散物實　金銅鐫同木尻　蒔繪　白鑞平文
幣串四本
蒔繪　白鑞平文　金銅木尻
已上納朱染辛櫃一合（金銅金物、鏁鏁、綠絹折立、兩面覆、裏生絹袷、黑漆臺、同物金銅木尻、）
御馬一匹　（鞍具）
右伊勢豐受宮御料、依例奉送如件、
文永六年八月廿〔三〕日　　　　出納右兵衞少尉中原國長
〔北山抄　五〕奉諸社神寶事
（頭書）一本裏書
大和五所、河內二所、攝津五所、海道六所、山道七所、北陸三所、山陰三所、山陽五所、南海二所、西海道

四所、合五十所、承平、天慶例也、宣命五十三卷云云可尋、伊勢二卷、日前、國懸二卷、香椎、合有五十三卷也、

〔山槐記〕永曆元年十一月十一日乙酉、今日大神寶次第、自內介申大殿御、○中略六位左衞門尉藤賴保廷尉奉行、頻遣催、行事所住芳坊御所、大炊御門高倉也、申人夫依不相叶于今遲引之由、兼日召畿內受領等、百人可進之由下知云云、所總進二三十云云、又昨日仰使廳被召人夫、同前云云、

〔玉海〕文治三年十一月廿二日己未、此日一代一度大神寶也、廿三日庚申、宗隆○宗隆ハ大神寶使發遣ノ職事ナリ來申云、○中略諸國不進人夫、近江丹波撿非違使左右衞門府等相幷八十餘人、其外百餘人宗隆所尋集也、又鷲羽殿上人僅九十餘枚、其不足又宗隆所尋進也云々、仰可奏聞之由了、又每事有勤、神妙之由同仰也、

〔平戶記〕寬元三年十月十五日丙子、大神寶用途、依譴責少少進濟之、依造社前前如此事一向被免、是代代例也、而當代此平責、如蹈薄氷、誠是苛政猛自口難堪事也、十一月十三日甲辰、被發遣一代一度大神寶使、用途大略被宛召諸國、藏人佐經俊本奉行也、而依服暇大進光國俄奉行沙汰之間散口云云、加州雖爲造社之國、譴責之間、少々進濟畢、

〔吉續記〕文永五年九月十八日、參院、奏大神寶條條、行事所始可爲來月七日、宇佐使可仰俊氏、奉行上卿可爲皇后宮大夫、武家用途二百匹、且可被付大神寶行事所之由被仰下、廿日、參院奏大神寶條條、可被仰武家國國驛家幷路次副使事、可注進寬元、延長之例之由有仰、人夫幷錦事等同前、廿三日、早旦參院、申大神寶條條、可被仰武家、驛家已下事、來廿五日評定之時可申出之由有仰、廿五日、參院、○中略今日評定大神寶驛家事、可被仰武家條條、評定之時可申出之由、先日被仰下之由、付權中納言申入、廿八日、不出仕、大神寶驛家事、任先例可仰遣武家之由昨日被仰下之間、仰遣帥中納言許、御敎書在文書、

〔忠富王記〕明應十年(○文龜元年)閏六月六日、御即位大奉幣等綸旨到來、(去二日付也)　八日、大奉幣米之事御成敗、仍室町殿參賀、千匹御大刀(金)、中將爲參百匹、攝津中務大輔、松田丹後守各千匹、御大刀同レ之、廿日、大奉幣米諸國奉書事、攝津中務元親伺定御下知事、　七月廿七日、伯耆國大奉幣米事、大橋又次郎申付畢、次若州段米事、永源軒ニ書狀遣了、　八月八日、但馬國大奉幣米奉書到來、　九月廿四日、大奉幣米事、重而綸旨申沙汰事談合、
文龜三年正月十八日、丹波攝津國大奉幣米事文申出、付藤宰相了、　三月七日、安重上洛、(○中略)申曰、攝津國大奉幣米、藥師寺與一與二、爲兩人奉行相懸之云云、　四月廿六日、大奉幣米催促奉書到來、攝丹兩國也、　五月一日丁卯、攝丹奉幣米且三十匹到來、請取案、
請取申大奉幣米段錢之事、合參拾貫文者、右丹波、攝津兩國且所請取申如件、
文龜三年五月二日　　伯家雜掌
左衞門尉孝久判
安富筑後守殿
三日、奉幣米且到來候間、一荷兩種進上、
○按ズルニ、後柏原天皇ハ、明應九年十月踐祚アリ、永正十八年三月即位ノ禮ヲ行ヒ給ヘリ、サレバ此處ニ云ヘル大奉幣ハ、踐祚後諸社ニ神寶幣帛ヲ獻ゼラルヽヲ云フカ、
〔由奉幣大奉幣部類〕慶長以後天下泰平の德化にて應仁以來廢絕したる朝儀、連速に古に復するによりて、御即位由奉幣、大嘗會由奉幣、御元服由奉幣は御再興あり、然れば御即位大奉幣、大嘗會大奉幣、一代一度大奉幣も、何時御再興あらんも計がたし、其時搜索の勞なからしめん料に、辻氏由奉幣の事を問はるゝ因に、此部類を著述し、尙提覽に備へん爲、大略を作て卷端に加ふ、
天保十三年壬寅二月　　從四位上度會弘訓

附八十嶋祭

名稱

天皇卽位ノ後、使ヲ攝津國難波津ニ遣シテ、住吉神、大依羅神、海神、垂水神、住道神ヲ祭リ、天皇ノ御衣ヲ納レタル宮ヲ搖動シテ禊ヲ修シ、祭リ訖リテ後祭物ヲ海ニ投ズ、是ヲ八十嶋祭ト云フ、中宮東宮モ亦同ジク此祭アリ、祭前符ヲ下シ、山城國ヲシテ船ヲ艤セシメ、攝津國ヲシテ祭場ヲ鋪設セシム、祭使以下淀ヨリ船ニ乘ジテ難波ニ到ル、宮主アリ、御巫アリ、琴師アリ、神祇官及ビ內藏寮ノ官人等之ニ從ヒ、一行ノ人數甚多ク、殊ニ典侍ハ天皇ノ御衣ヲ奉ジ、祭使タルヲ以テ、車副ハ爲ニ警蹕ヲ稱シ、其親近緣者ノ相共ニ下向スルモノ多ク、發途歸京共ニ、送迎極メテ盛ナリ、

此祭ノ初テ史ニ見エタルハ、文德天皇ノ嘉祥三年九月ニ在リ、其後歷朝多クハ大神寶使ノ年ヲ以テ、此祭使ヲモ發遣セラレシガ、後世遂ニ廢絕スルニ至レリ、

〔侍中群要 七〕八十嶋祭 於同處(攝津國難波)祭、供給同前、但一代一度事也、

〔袖中抄 十九〕やそしま

代始にぞ、やそ嶋のつかひとて、內の御めのとのたちて、やそしまめぐりといふ事は侍る、それも嶋々にてはらへすべきを、住吉の濱のこなたにて、西の海にむかひて、もろ〳〵の嶋ぐまの神をまつるといへり、

〔倭訓栞 前編 三十四〕やそしま 祝詞に、皇神の敷坐嶋の八十嶋と見えたり、嶋は卽國也、數多をいふ、八十嶋祭は嘉祥三年に始る、大嘗の次の年に行はるゝよし江次第に見えたり、難波の湖 ○湖恐津誤 に赴いて祭ると式に見え、攝津西成郡圓神祠、今稱御霰、古今秘注云、堀江東有澤廻一萬步許、名八十嶋頭といへり、今大阪に屬す、

祭神

〔延喜式 三 臨時祭〕八十嶋神祭 中宮准之

住吉神四座、大依羅神四座、海神二座、垂水神二座、住道神二座、

〔江家次第十五(踐祚)〕八十嶋祭

大嘗會次年行之、多在大神寶之後、上卿參陣奉仰、仰辨、令陰陽寮勘申日時、往年神祇官卜其日、近代如此、可立使之日、祭日勘載於一紙、但長暦、延久別紙、兩日之間必用酉日、但當御衰日者用他日、昌泰元、御歳十四、天暦元、御歳廿二等例也、雖非主上御衰日、當東宮御衰日者又用他日、延久元年、東宮御年十七、是中宮東宮同日祭之故也、至于祭者用晝時、仍長暦元年改勘時、又閏月不可祭之由見長暦記、

〔江談抄(一公事)〕八十嶋祭日可避主上御衰日事

又云、八十嶋祭者、多以酉日為使立并行祭日、若日次不宜之時雖不行之、使立并行祭日之間、一日用酉日、而延喜聖主(○醍醐)十四歳之時、被立件使、酉日御衰日也、主上(○白河)廿二歳、仍以酉日為御衰日、依然又避之、

同祭日猶被避儲君御衰日例

又云、延久之時、雖不當主上(○後三條)御衰日、以當儲君(○白河)御衰日亦避之、

〔日本紀略(三村上)〕天暦元年七月十四日丁酉、是日令勘八十嶋祭日時、　九月廿三日甲戌、定奉幣并八十嶋祭日時、　十一月卅日庚辰、八十嶋祭、

〔中右記〕寛治二年閏十月十三日乙卯、八十嶋使立日時勘文被勘、件事前前或於所被勘、或於陣被勘云云、今度被用陣儀也、上卿右衞門督、辨頭辨也、

〔山槐記〕永暦元年十二月七日辛亥、今日參陣可被勘改八十嶋使日時、(本儀來十日進發、十二日祭云云、而看督長并子息四人病惱之間、申延云云、來十五日進發、同十六日祭云云、不當公家御衰日之時、多用酉日云云、來十七日酉日也、可然神妙歟、)

〔兵範記〕嘉應元年十月廿五日、陰陽寮擇申可被行八十嶋祭日時、

立使日時

十一月廿三日乙亥　時辰二點若未

行祭日時

廿五日丁丑　時辰二點若巳

嘉應元年十月廿五日

漏剋博士安部朝臣經明

主税助兼安藝介安部朝臣時晴

主税頭兼頭賀茂朝臣在憲

〔明月記〕元久二年閏七月廿八日、八十嶋廿八日進發、(吉日)九月一日祭、厭對可憚歟、廿九日進發、(峰日道虛)九月二日祭(吉日)祭厭對道虛之間、可依議定、各外記陰陽勘申狀等、

〔江家次第〕(十五踐祚)八十嶋祭

祭日到難波津、宮主作壇、(國司作之)置祭物、女官內藏寮官人等以御衣案立宮主前、典侍車幷出車等列立宮主座東、(西南北上)件座東立平張、可敷神祇官幷中宮東宮內藏等屬以下座歟、神祇官彈御琴、女官披御衣筥振之、次中宮御料、次春宮御料、宮主著膝突、(西面)捧御麻、修禊、禊了以祭物投海、次歸京、

〔延喜式〕(三臨時祭)八十嶋神祭(中宮准之)

五色帛各一匹二丈、絁一匹二丈、絲卅約、綿卅屯、倭文一端三丈八尺、木綿麻各卅斤、庸布十段、紙二百張、插幣帛木一百廿枚、絁御服八具、料庸布八段、御輿形卅具、覆料紫帛四丈、鍬卅口、錢三貫文、(二貫文散料、一貫文雜鮮魚菓子直、)金銀人像各八十枚、金塗鈴八十口、鏡八十二面、(二面五寸、八十面一寸、)玉一百枚、大刀一口、弓一張、矢、五十隻、胡籙一具、黃蘗八十枚、瓮堝各卅口、杯八十口、米酒各一石、糒八斗、缶六口、鰒堅魚腊海藻各八籠、鮭五十隻、鹽五籠、[illegible]二俵、稻廿束、席薦各八枚、食薦八枚、輿籠五脚、明櫃四合、匏十柄、祝詞料絁二匹、調布二端、

東宮八十嶋祭

祭使

五色帛各二丈、絁二丈、絲八絇、綿八屯、倭文二丈、木綿麻各八斤、庸布四段、紙五十張、鹿服八具、料庸布四段、輿形廿具、覆料紫帛二丈、鍬八口、錢六百文、（二百文數料、四百文鮮魚菓子料、）插幣帛木六十枚、金銀人像各卌枚、金塗鈴卌口、鏡卌面、（二面徑五寸、卅八面徑一寸、）大刀一口、弓一張、矢五十隻、胡籙一具、黃櫱廿枚、瓮堝各八口、杯卌口、米酒各四斗、缶二口、鰒、堅魚、腊、海藻、鹽各二籠、鮭十隻、楉卌把、稻四束、席薦各二枚、食薦二枚、輿籠二脚、明櫃二合、匏二柄、夫四人、祝詞料、絁一匹、調布二端、

住吉神四座、大依羅神四座、海神二座、垂水神二座、住道神二座、

座別五色帛各五尺、絹五尺、絲一絇、綿一屯、倭文一尺、裹料布三尺、住吉社神主料絹一匹、祝幷大依羅祝料各布二端、垂水社祝布二端、海神、住道社祝布各一端、御巫、生嶋巫各絹二匹、布二端、擔夫十人、

右八十嶋祭御巫、生嶋巫幷史一人、御琴彈一人、神部二人、及內侍一人、內藏屬一人、舍人二人、赴難波津祭之、

〔延喜式三臨時祭〕八十嶋神祭（中宮准之、○中略）

〔江家次第十五臨時〕八十嶋祭

上卿參陣、奉仰仰辨、令陰陽寮勘申日時、（○中略）奏聞之後下辨、辨申神祇官請奏、（上古上宜、近代奏聞、全鏡自藏人所可下之故歟、在式事多是上宜也、然而近代皆經內給之、）兩日（○使立日、行祭日、）之間相去四五日許、次以典侍一人為使、（多用御乳母、）典侍進請奏二通、（年年位祿季祿未行等也、）勘例依請、此外或給諸司三分一人祭曾兩三人、神祇史一人、御琴彈一人、神部四人、相副宮主下向、內藏官人允以下一員、又以下向、

成官符給

山城（可給鎮、五鎮事、）

一艘內侍司料　一艘典侍幷闈司女孺料

二艘神祇官料　一艘內藏寮料

給攝津國供給事、又以六位藏人一人爲行事、撿非違使若衞府藏人尤有便宜云云、小舍人等相具下向、戚所牒二枚、(一枚攝津、一枚山城、)藏人一人、小舍人三人、供給船等事、使立之日宮主參入、付頭若藏人獻御麻、一撫一息之後返給、內藏寮官人參入、女官取御衣筥授之、居八足案、卽女官相具下向、典侍參北陣、令藏人奏事由給祿、近代或不參內、自里第下向、典侍車女房車四輛、童女車一兩、大略如賀茂祭使、於淀乘船、車在別船、公卿以下殿上人有事緣者、皆相共下向、○中略 次歸京、於江口遊女參入、纏頭例祿如恒、歸京之後、典侍參內、返上御衣、幷申御祭平安奉仕畢由、典侍俄有障、仍以五位藏人爲代官之例昌泰元年、(未勘)公卿三人下向例延久元年、藏人三人下向例同上、中宮東宮使相具、(其儀可尋)

〔文德實錄 二〕嘉祥三年九月壬午、遣宮主正六位下卜部雄貞、神琴師正六位上菅生朝臣末繼、典侍正五位下藤原朝臣泉子、御巫無位榎本連淨子等、向攝津國祭八十嶋、

〔日本紀略 二朱雀〕承平三年六月廿五日庚午、典侍滋野朝臣、於難波津行八十嶋祭、

〔日本紀略 三村上〕天曆元年六月廿五日戊寅、發遣八十嶋祭使、典侍滋野幸子、藏人左衞門尉淸遠等爲使、以來廿七日可祭也、而內裏穢氣忽出來、可停止件祭之由、左近番長豐原春方差使令召返已畢、十一月十六日甲寅、立八十嶋祭使、 廿四日甲戌、八十嶋祭延引、內裏觸來丙穢、明日可爲穢限、然者祭使進發可有穢內、仍被延也、 廿八日戊寅、天皇幸朱雀院、此日發遣八十嶋祭使、掌侍橘平子、藏人左衞門尉橘公輔爲使、

〔日本紀略 五冷泉〕安和二年五月廿一日丁酉、發遣八十嶋祭使、藏人右衞門尉雅中、典侍都子等、

〔左經記〕寬仁元年十月十八日癸未、早旦參源大納言御許、仰令勘申八十嶋祭可被行日時、幷可行其事之由、卽被命云、內々令陰陽寮勘申、可奏者、卽勘申今日廿六日、內々相向中務典侍許、以件月可有八十嶋祭可下向之由、典侍申云、事忽無爲術、奏事由、令改勘如例、 十九日、參大殿、仰云、典侍中務申云、著院御服之後、依無指事、未改、今有可下向八十嶋祭之仰、仍可改也、而期日近近無程、更衣者所申

可然、申事由可令改勘者、即參內此由申攝津殿、仰云、早可令勘改者、　廿日乙酉、早旦參內、〇中略先是源大納言召陰陽寮、令勘可被行八十嶋祭日時、令余奏、次令神祇官進祭物、請奏覽上卿之後、令成宣旨等賜諸司、借用本國正稅、（內印官符）又陰陽寮神祇官官人等、皇太后宮、春宮等屬以下、宮主、御巫等可下向之由可相催、又內侍以下件諸司等乃可乘船、并供給可儲之由宣旨可給山城、又同可賜件國者、件事等仰史維信、余候宿、　十二月十二日丙子、今日典侍美子、藏人章任等爲八十嶋祭勅使、令持御衣、下向攝津國、內藏屬舍人等同以下向、又神祇官并宮主率御巫等下向、皇太后宮并東宮屬舍人、并宮主等同率御巫等下向、古例陰陽寮助以下可下向、而近代不下云々、仍難載供給宣旨不下云々、又中宮、（〇三條后姸子）皇后宮（〇三條后娍子）等使依御服不被立、又藏人所御牒給山城攝津兩國、（只入藏人一人、小舍人三人、自餘人事皆官宣旨、仍不能所牒、件祭已明日也、）

〔小右記〕寬仁元年十二月十二日丙子、八十嶋祭使典侍今朝發遣云々、　十五日己卯、今夜八十嶋使典侍入京、（近江守惟憲妻）迎送者極多々云々、惟憲相迎云々、

〔中右記〕寬治二年十二月十四日、丙辰、今日早旦八十嶋使立、　十七日、八十嶋使出京、（家子內侍）藏人有家、

〔本朝世紀〕康治二年十一月廿七日、今日被立八十嶋祭使、御乳母典侍藤家子、（故家成卿女、清隆卿室也、）行裝之儀世以爲壯觀、藏人頭右近中將藤經宗騎馬送之、依爲因緣也、藏人左近將監藤隆憲爲勅使發向、典侍用唐車云々、子族等皆前驅布衣也、

〔台記〕康治二年十一月廿八日庚辰、八十嶋、大納言典侍（御乳母參議淸隆女）出京云々、

〔山槐記〕永曆元年十二月十五日己未、今日八十嶋使典侍（右衞門督清盛卿女子）下向也、自六波羅家云々、仍巳終刻爲見物、密々向七條室町小屋、大納言殿同見物給、午刻進發、先神寶韓櫃二合、次八足、次勅使藏人右衞門尉平時盛（廷尉三﨟）衣冠青色袍、令懸調度、隨身火丁小舍人（時宗）相具、巳上騎馬、無首尾至朱雀邊、不可然歟、瀧口惟宗頼平、（十五﨟、此公役依爲藏人、共上﨟遁避云々、）負胡籙在共、御衣公役云々、次一家殿上人地下人十

三人、尾張守賴盛朝臣、常陸介敎盛朝臣、伊賀守經盛朝臣、藏人少納言信範、（束帶）紀伊前司雅重、右少辨時忠、（衣冠）佐渡前司爲信、宮內卿大夫資長、淡路兵衞佐宗盛、藏人大夫親宗、少男二人、（已上布衣、金吾一黨、令持劒、於鏽色、）次輿侍車、（唐車、車副八人、萠木上下、出歟冬衣、牛飼著赤色上下、出歟冬衣、蘇芳打衣綱、車後出紅匂八、車副隨襖、）次伊豫守重盛朝臣騎馬供奉、撿非違使平貞能、左近將監秦兼弘、（在共）次女房車四兩、（一家人々車新調、女房衣色々五、所乘一人、濃口一人、不負胡籙在共、）次童女車一兩、（所乘濃口各一人在共）次半物車一兩、（同）次左宰相中將俊通卿、鴛毛車相送、隨身垂袴、褐衣、次備中守信忠以下、及衞府武者所九十三人、次中持四合、次船打出女房裝束入長櫃持列、未刻事了歸宅、

〔愚昧記〕嘉應元年十一月廿五日、八十嶋祭使典侍（前大納言重盛卿室家、中納言家成卿息女、）進發云々、仍爲見物向六條東洞院邊、（愛在車後、朝宗連車）扈從、見物之輩連楊夾路、宛如堵墻、日入程見物了歸華、扈從公卿七人、（新大納言、代四人、車、女車騎馬二、）（人右兵衞督、毛車、不懸中納言別當、前駈四人衣冠、火長衣冠、隨身已上毛車、隨身、毛車、隨身騎馬、宰相中將、隨身衣冠新平宰相二騎人、大貳、已上毛車、）一家幷親昵之輩騎馬供奉、但外人少々相交如何々々、左中將知盛在車後、近江守實敎在車前、胡籙負筑前守貞能一男通定、郎等七十人相具之、此中二十人一門者云々、

〔百練抄〕（十後鳥羽）建久二年十一月九日甲寅、被立八十嶋祭使、（侍從三位藤原保子）藏人左衞門尉源仲景、

〔玉海〕建久二年十一月九日甲寅、此日八十嶋祭發遣日也、御乳母大納言三位（保能卿未嫁之人也、）下向、請院廂御車云云、勅使藏人仲章奉禮、陰陽助濟憲朝臣、（今日當違忌、然而依非一事日、自院有譴責、雖然不供奉、路頭先以下向云云、今一人助秀弘朝臣可下向、而依今際野供奉、依被譴責違忌人、）自中宮被副使、蓋先例也、少屬左少史三善仲親爲使所被副御衣也、禁中、宮中、下官皆爲神齋、而余忘却有不淨事、仍行水解除、又中宮御方、同諸人忘却、今曉追邪氣、仍同以御衣解除之、○中略後聞今日八十嶋公卿八人、扈從殿上人十七人、其外藏人五位等又十餘人云云、隨兵相模守源惟義、（世號大內）是源氏之末流也云云、

〔百練抄〕（十一土御門）元久二年八月廿九日、被立八十嶋祭使、御乳母典侍前大納言隆房卿娘、上皇於鳥羽殿有御見物、

〔三長記〕元久二年八月廿九日癸未、今日八十嶋使進發、爲見物向三條京極邊、于時午刻也、見物車滿衢、中始渡大路、

路頭行列

春宮御衣使、前拂二人、(持笠、如常、)御衣案、(仕丁二人舁之、御衣入衣筥、裹打敷、其上又有白生絹、)次召使二人、(騎馬著退紅、)次廳官二人、(京帶騎馬、)次權少屬大江景高、(京帶騎馬、)次內御衣使、次殿上人、次中宮御衣使、(可列春宮使次歟、賢寛遲參云々、)次前驅藏人五位八人、(布衣、)次典侍車、次後騎少將隆仲朝臣、次左將曹中臣近武、次撿非違使有範、次廳官六人、次出車六兩、次雜色辛櫃二合、侍五位六位十八人、次公卿車、以下略之、

〔明月記〕元久二年八月廿九日、今日八十嶋典侍發向云々、巳一點許向七條坊門、(東洞院、)光資門樓敷、出立所雖其近、車中見物、依腰痛遠行向、數刻相待雨漸灑、不及取笠、未一點許先祓等渡、少年殿上人總不見知、御衣藏人江信歟、(衣冠、)二(時、)小舍人瀧口、次殿上人著朽葉狩衣、(不見知、若隆保歟、嗣子隆俊歟、)保雜色个長童狩衣、人(猪、)二少納言長季、(京帶、大刀、)細左衛門佐經時、(皆褐、八、雜色、青狩布、童狩、少々美麗、)少將忠明、(束帶、壺胡籙、)隨身兵衛佐知家、(束帶、)隨身、左衛門親房、(束帶、隆仲妻見也、其妻死時日中、依所勞、供奉、顯賢尋常歟、)公基、(束帶、不似其身事歟、)季房歟、(隨不見知、)村濃所從、中將實宣、(束帶、隨身壺胡籙、)公時女也、家成、云々、家衡朝臣、(不儀口不平禮、)保季朝臣、(前同、)次前驅不見、橘邦長、(平禮其中、)交次隆宗朝臣、白ちかへの當色、次車(毛檳榔、)次隆仲朝臣、(妻人也、)紺青(子)打狩衣、(宗末摺貫、)童隨身雜色、紺藍摺染交歟、摺鷹羽、又染紺、左近將曹近武、撿非違使、出車六兩、(一殿上人車、門皆壯年人車歟、)見之內、第五童女、第六半物、(已上加羅、)瀧口(不矢)相具、雜仕騎馬二人、衣襲二荷、侍五位三人、衞府廿人許、(不計)次前驅六人、前大納言、(車寬、)藤芳下簾、次前驅四人、毛車、前大納言、次毛車、(皇后宮大夫歟、)次宰相、(隆衡歟、)駕車、次毛車、(經仲歟、)次駕車、(親實歟、)其次有毛車、(不知其人、)次親國朝臣乘車、瀧口二人相具、平入道太政大臣(淸盛公)妻准后平時子、隆衡卿外祖母也、親國件准后之舍弟、中納言親宗卿子也、仍供奉云々、次胡籙負郞等如例歟、上皇於鳥羽殿御覽、按察(妻、遠、)嫡子中將、(隆季卿妹所生、)長途可伴之由日來快領狀、此三四日五體不具穢云々、(其儀無見物人云々、)

雜載

〔百練抄十二順德〕承久二年十一月廿七日癸丑、被發遣八十嶋祭使、典侍藤原滿子、按察使光親女、藏人文章生宗範、內宮主已下參向、

〔貞信公記〕天曆二年正月廿五日、中使頭來云、八十嶋祭裝束不具事令問神祇官勘申云、去承平年祭國不備、仍召住吉社司令進者、可免國司怠歟云々、節內公朝臣申云、御琴師高枝彼日申云、前例有神樂事、何無座中云々、又神樂人々此度不候、只高枝一人彈琴且歌云々、

〔續世繼三內裏〕紀のご〇從二位朝子とて、御ちの人ときこえしがをとこにて、かの少納言みちのりの子、おまたうみなどして、今は御めのとにて、八十嶋の使などせられければ、ならぶ人もなきにこそ、

すべらきのちよのみかげにかくれずばけふ住吉の松をみましや、などよまれはべりけるときこえ侍し、まことにかひ〳〵しき人におはすべし、〇又見玉葉和歌集

〔平治物語一〕唐僧來朝事

紀伊二位ト申ハ、紀伊守範元ガ孫、右馬頭範國ガ娘也、八十嶋下ニ三位ニ叙シ、軈テ從二位シテ、紀伊二位トゾ申ケル、

〔新拾遺和歌集十六神祇〕後白河院御時、やそ嶋の祭に住吉にまかりてよみ侍ける、

權大納言隆季

住の江に八十嶋かけてくる人や松をときはの友とみるらん

〔新葉和歌集二十賀〕住吉の行宮におまし〳〵ける頃、人々いろ〳〵こゝろばへをつくして、風流の破子ども奉りける中に、神主國量、八十嶋のまつりのかたをつくりて奉りけるを御覽じて、

後村上院御製

みそぎする八十嶋かけていましもや浪をさまれる時はみえける

古事類苑

神祇部二十四

祈年祭

古事類苑

神祇部二十四

祈年祭

祈年祭ハ、訓ジテトシゴヒノマツリト云フ、毎年二月、神祇官及ビ國司ノ廳ニ於テ、年穀ノ豐穰ヲ神祇ニ祈請スル儀ナリ、文武天皇ノ慶雲三年、甲斐、信濃、越中、但馬、土佐諸國ノ十九社、始メテ祈年祭幣ノ例ニ列セラル、祈年祭幣社、始メテ此ニ見ユ、其後桓武天皇ノ延暦十七年、亦祈年ノ幣帛ヲ奉ルベキ神社ヲ定メラレシカドモ、其數詳ナラズ、次デ宇多天皇寛平五年ノ太政官符ニハ、京畿外國大小通計五百五十八社トアリ、以上ハ皆官幣ナルベシ、醍醐天皇ノ延喜式ニ據レバ、總テ三千一百三十二座ニシテ、其内神祇官ニ於テ祭ル所七百三十七座ナリ、而シテ幣ヲ案上ニ奠スル大社三百四座アリ、之ヲ案上官幣ト云ヒ、(此後一條天皇長元三年、山城國乙訓郡大原野神社ヲ祈年案上官幣ニ列シ、鳥羽天皇保安元年、同國愛宕郡太田神社モ亦同ジク案上官幣ニ列セラレタリ、)然ラザル小社四百三十三座アリ、之ヲ案下官幣ト云フ、國司ノ祭ル所、又大社百八十八座、小社二千二百七座アリ、是ヲ國幣ト稱ス、官祭國祭共ニ毎年二月四日ニ於テ之ヲ行フ、其齋戒ハ、散齋三日、致齋一日ニシテ、散齋ノ前一日、所司ヲ召シテ其由ヲ宣示シ、翌日平旦、所司神祇官ノ齋院ニ就キテ點ヲ受クルヲ例トス、

此祭ハ、傳ヘテ云フ、天武天皇ノ四年二月ニ始マルト、次デ文武天皇ノ大寶令ニモ略、其儀式ヲ制定セラレシカドモ、其最モ詳ナルハ、清和天皇ノ貞觀儀式、醍醐天皇ノ延喜式等トス、其

儀當日幣物ヲ神祇官ノ齋院ニ陳シ、神祇官人ハ御巫等ヲ率キテ西廳ノ座ニ就キ、大臣以下ハ北廳ノ座ニ就キ、式部亦群官ヲ率キテ南廳ノ座ニ就ク、既ニシテ大臣以下官人所司、共ニ降リテ廳前ノ座ニ就キ、中臣進ミテ祝詞ヲ宣ス、大臣以下諸司拍手兩段、然ル後各〻本座ニ復ス、次ニ忌部ハ神祇伯ノ命ニ由リテ幣帛ヲ頒チ、事畢リテ大臣以下諸司各〻退出スルヲ例トス、祭ニ前ツコト十五日、忌部及ビ木工ヲシテ供神ノ調度ヲ作ラシメ、又當日ニハ、京畿ヨリ白鷄一隻、近江國ヨリ白猪一頭ヲ貢シ、左右馬寮ハ各〻祓馬十一匹ヲ進ム、鷄猪ハ御歳神ニ奠スル所、神馬ハ伊勢兩宮ヲ始メ、御歳神、高御魂神、大宮女神、及ビ山口水分等ノ神、總テ二十二社ニ獻ズル所タリ、而シテ此等ノ調度幣物ヲ頒ツニハ、伊勢兩宮ヘハ特ニ使ヲ遣シ、其他ハ諸社ノ祝等ヲシテ、當日祭庭ニ來リ受ケシムル例ナリシガ、嵯峨天皇ノ頃ヨリ、既ニ諸社ノ祝等祭庭ニ參會セザルモノ多ク、醍醐天皇ノ延喜ノ頃ニ至リテハ、祝等ノ懈怠益〻甚シタ、偶〻參會シテ幣物ヲ受クルモノモ、之ヲ私シテ其社ニ奉ゼズ、神馬ノ如キハ、郁芳門外ニ於テ直ニ市人ニ沽ルニ至レリ、サレバ屢〻官符ヲ下シテ、或ハ神官ノ懈怠ヲ誡メ、或ハ國司ヲシテ此等ノ非違ヲ監察セシメ、又程途遼遠ノ地ハ、特ニ當國ノ幣ヲ以テ之ニ充テシメ、若クハ朝集使等ニ附シテ之ヲ送ル等ノ制ヲモ設ケラレタリ、サレド後世朝威ノ衰フルニ及ビテハ、此等ノ制亦遂ニ行ハレズ、龜山天皇ノ文永ノ頃ニハ、徒ニ幣物ヲ神祇伯ノ許ニ放擲シテ顧ミザリシカバ、之ヲ諸社ニ進ムルニ由ナクシテ、奉行ノ官人ハ其處置ニ困ミシコトサヘアリ、加之儀式モ亦朝廷ノ陵夷ト共ニ、漸ク衰頽ニ趨キ、往時日時ヲ延引スルハ僅ニ止マリシガ、後世ハ往々用途ノ不足ニヨリテ行ハレザル事アリ、應仁ノ大亂ヲ經テ、遂ニ文明以後全ク廢絶ス、近世東山天皇元祿ノ頃、再興ノ議アリシニヤ、祈年祭、神嘗祭等ノ舊儀ヲ徵スルモノハ進獻スベシトノ命アリシカドモ、遂ニ再興ニ至ラズ、文明以後凡ソ四百年ヲ經テ、今上

天皇ノ明治二年ニ至リ、始メテ再興シ給フコトヽナレリ、寛政年中行事ニ、二月四日祈年穀祭ト見エタレドモ、恐クハ空文ナラン、月次祭以下亦同ジ、

當日參集ノ官人ハ、神祇官ハ伯以下悉ク奉仕シ、太政官ハ大臣以下參議以上、其他宮內、大舍人寮等ノ官人モ亦各〻參集ノ定員アリ、而シテ神祇官人以下悉ク齋料ヲ賜ヒ、中臣ハ祝詞ヲ宣スル料トシテ庸布短帖ヲ賜フ、其他供神ノ調度ヲ作ラシムル諸工人ニハ、各〻衣食ヲ賜フ制アリ、又新任ノ人、當日始メテ上卿ヲ務ムル時ハ、事畢リテ後、神祇官ノ史生、官掌、及ビ太政官ノ召使等ニ、私ニ饗祿ヲ給スルヲ例トセリ、

名稱

〔令義解 二神祇〕仲春祈年祭 謂祈猶禱也、欲令歲災不作、時令順度、卽於神祇官祭之、故曰祈年、

〔貴嶺問答〕祈年祭トシゴヒノ 令所點如此、然而只讀祈年祭キネンサイ、

〔祝詞考 上〕祈年祭トシゴヒノマツリ 登志其比乃万都里と唱ふ、年とは、五穀の中に専ら稻をいふ、初春に種子を水に浸より、冬をさむるまで、一とせを經故也、

〔類聚名物考 神祇十二〕祈年祭 としごひのまつり

年は卽ち穀なり、有年豐年などいへる年も、みな稻穀のみのりのよきをいふ、よてすなはち年穀ともいふ也、稔年と相通ふ意あり、延喜式の祝詞に、みとしとといふは、みな年穀の事也、

〔壒添壒囊抄 七〕祈年祭トシゴヒノマツリ事 付木古事

祈年祭事、〇中略其本古ヲ云バ、周禮曰、祈年求豐年也、又神祇令曰、謂祈猶禱也祈年ヲバ、トシゴヒノ祭トヨム也、大神宮已下三千一百卅二座ノ神ヲ祭テ、年災ヲ祈リ除カルヽ故ニ、祈年祭ト申侍也、

〔周禮註疏 二十四〕凡國祈年于田祖、〇中略註、祈年祈豐年也、疏、〇中略釋曰、祈祈豐年者、義取小祝求豐年ハ俱是求甘雨使年豐

〔毛詩註疏 十八 大雅〕祈年孔夙方社、方社不莫、箋云、我祈豐年甚早、祭四方與社又不晚、

〔倭訓栞 前編十八〕としごひまつり 祈年祭の訓也、周禮に、祈年は豐年を求る也と見えたり、され

ば祝詞にも、二月に御年初將賜とみゆ、說文に、年は穀熟也といへり、今伊勢參宮に年越詣といへる事は、此事より誤れる成べし、

〔說文解字七上〕秊　穀熟也、以禾千聲、春秋傳曰、大有年、

〔年中行事大概〕新年祭

二月四日に、神祇官にして、三千餘座の神をまつりて年穀をいのるによりて、としごひのまつりとはいふなり、

〔年中行事歌合〕右　新年祭二月四日　　秀長朝臣

祈てふ年の緖ながき君が代を三ちやあまりの神やうくらん

右新年祭は、大神宮以下三千一百三十二座の神をまつりて、年災を祈申さるゝによりて、年ごひの祭と申侍也、

〔おもひのまゝの日記〕二月にもなりぬ、○中略きねんのまつり、きねんこくの奉幣など、しきのまゝにおこなはる、

〔公事根源二月〕新年祭　四日

是は大神宮以下三千一百卅二座の神をまつらせたまふ、其所のたしかならざるも有、國々におのおの幣をつけらる、諸國にも年ごひのまつりをば行ふ也、周禮に、祈年は豐年をもとむるなりとみえたり、○中略大かた新年の祭、月次兩度、新嘗祭をば四ヶ祭とて、國の大事とするなり、

〔樵談治要〕神をうやまふべき事

一年中のまつりは、二月四日の新年の祭より始まる、此祭はあきつしまの中にあとをたれ給三千一百三十二座の神に、御てぐらのつかひをたてらるゝ物也、其中に七百三十七座には、神祇官よりこれを獻せらる、のこり二千三百九十五座には、六十餘國の國のつかさ、おの／＼うけたま

はりて幣帛を奉る也、年中の災難をのぞき、國土の豊饒をいのるによりて、新年のまつりとは名付たる也、

〔古語拾遺〕昔在神代、大地主神營田之日、以牛宍食田人、于時御歳神之子、至於其田、唾饗而還、以狀告父、御歳神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神、令片巫(志止止鳥)肱巫(今俗竈輪及米占也)占求其由、御歳神爲祟、宜獻白猪白馬白鷄以解其怒、依教奉謝、御歳神答曰、實吾意也、宜以麻柄作桛桛之、乃以其葉掃之、以天押草押之、以烏扇扇之、若如此不出去者、宜以牛宍置溝口、作男莖形以加之、(是所以厭其心也)以薏子蜀椒呉桃葉及鹽班置其畔、(古語以薏子謂都須)仍從其教、苗葉復茂、年穀豐稔、是今神祇官以白猪白馬白鷄祭御歳神之緣也、

〔二十二社註式〕新年

人皇四十代天武天皇白鳳四年(乙亥)二月(甲申)始之

〔年中行事秘抄 二月〕四日新年祭事(殿務有前後奮)

官史記云、天武天皇四年二月甲申新年祭、

〔年中行事抄 二月〕四日新年祭事

天武天皇四年二月甲申新年祭

〔公事根源 二月〕新年祭　四日

天武天皇四年二月に、はじめて此祭有、

〔大日本史 神祇四〕按、本書並爲三年二月四日甲申、然推長曆、二年二月甲申實爲其四日、〇中略其祭用四日者蓋始此、

〔祝詞考 上〕新年祭、〇中略此祭は崇神天皇の御代に始れりとすべし、其御代、萬の大神を崇み給ふまゝに、天地の神うべなひまして、雨風時にしたがひ、百の種つものなりぬといふ事、紀にしる

祭神

された、且下の風神祭にも見えたり、

或説に、此祭は天武天皇の御代に始といへるはよしなし、大寶令の常行の祭に擧られしをおもふに、儀式なども天武の御代さだめ給ひけむ、

○按ズルニ、天武天皇ノ四年ニ新年祭アリシコト、日本書紀ニ見エズ、崇神天皇ノ朝ヲ以テ此祭ノ起原トナセルモ推測ノ説タリ、今俱ニ錄シテ後考ヲ俟ツ

〔續日本紀 三文武〕慶雲三年閏正月庚子、是日甲斐、信濃、越中、但馬、土左等國一十九社、始入新年幣帛例、其神名具神祇官記、

〔類聚國史 十神祇〕延暦十七年九月癸丑、定可奉新年幣帛神社、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應殊加檢察敬祀神四箇祭事

右檢案内、二月新年、六月十二月月次、十一月新嘗祭等者、國家之大事也、○中略預此祭神、京畿外國大小通計五百五十八社、因茲特致潔齋、愼令祭祀、○中略

寛平五年三月二日

〔延喜式 一四時祭〕二月祭

新年祭神三千一百卅二座

大四百九十二座（三百四座案上官幣、一百八十八座國司所祭）

小二千六百卅座（四百卅三座案下官幣、二千二百七座國司所祭）

神祇官祭神七百卅七座

其幣案上神三百四座（宮中卅座、京中三座、畿内山城國五十三座、大和國一百廿八座、河内國廿三座、和泉國一座、攝津國廿六座、東海道伊勢國十四座、伊豆國一座、武藏國一座、安房國一座、下總國一座、常陸國一座、東山道近江國五座、北陸道若狹國一座、山陰道丹後國一座、山陽道播磨國三座、安藝國一座、南海道紀伊國八座、阿波國二座、）

不ㇾ奠ㇾ幣案上祈年神四百卅三座（並小、宮中六座、畿内山城國六十九座、大和國一百五十八座、河内國九十座、和泉國六十一座、攝津國卌九座、）

國司祭祈年神二千三百九十五座

大一百八十八座（東海道卅三座、東山道卅七座、北陸道十三座、山陰道卅六座、山陽道十二座、南海道十九座、西海道卅八座、）

小二千二百七座（東海道六百八十座、東山道三百卌座、北陸道三百卌八座、山陰道五百廿三座、山陽道百廿四座、南海道百卌四座、西海道六十九座、）

〔類聚符宣抄　一〕太政官符神祇官

應ㇾ預祈年祭幣大原野神社肆座事

右新年祭者、京畿外國名神靈社、皆享禮奠、各預幣帛、而件社自漏彼祭、已忘如在、今加斟量、 𡈽備其數、右大臣宣、奉ㇾ勅宜ㇾ預案上幣、列春日社下、自今以後立爲恒例者、官宜承知、依ㇾ宣行ㇾ之、符到奉行、

従四位上行權左中辨藤原朝臣　　従五位下行左大史惟宗朝臣

長元三年二月廿日

〔延喜式神名帳頭註〕山城愛宕郡大田　元永三年（○保安元年）官符預案上官幣

〔延喜式（四時祭一）〕凡祈年祭二月四日

〔續日本後紀（十一仁明）〕承和九年二月己巳（○四日）遣ㇾ使奉幣伊勢大神宮及諸社、祈ㇾ年也、

〔三代實錄（二清和）〕貞觀元年二月四日庚寅、於神祇官修祈年祭、

〔三代實錄（七清和）〕貞觀五年三月五日丁卯、於神祇官修祈年祭、此祭例用二月四日、而有穢停止、故今日祠焉、

〔年中行事秘抄〕諸祭剋限

二月祈年祭

辰二點以前、所司庶事辨備訖、三點參議以上著座始行事、（○中略）

以前右大臣宣、永以爲ㇾ例、

齋戒

弘仁十四年十二月廿八日　少外記都宿禰廣田麻呂奉

〔薩戒部類私要抄四〕應永廿七年

新年祭延引、日次可被擇申之由、被仰下候也、仍執達如件、

二月八日

陰陽頭殿〇中略

新年祭日時定可爲當日、先可令參陣給之由被仰下候也、仍執達如件、

謹上　左中辨殿

明後日十三日可被行新年祭日時定、可被參陣之由被仰下候也、仍執達如件、

陰陽頭殿

〔後竹林院左相府記〕康正二年三月四日、新年祭依令參行、酉刻著束帶、〇中略依可有日時定、先參禁裏、奉行頭辨責申未參、數刻相待了、戌畢時分著陣、先著奥座、頭辨來仰新年祭日時可令勘之由、予居向敷膝、次起座移著端座、其儀如恒召官人令敷軾、次又以官人召辨、權右中辨高淸來軾、予仰云、新年祭日時令勘申、次持參日時勘文、予執之、覽畢披見置前、次以官人召外記、六位外記旋小庭、受予目著軾、仰云、宮持參、持參宮蓋置予前、予執日時勘文入宮蓋、以官人召職事、頭辨參軾、予押出宮蓋、職事取之退出、奏聞了下賜、如元置予前、予取勘文結申、如恒職事退、次以官人召外記、下日時勘文、作書次令官人撤軾起座、

〔延喜式四時祭一〕凡踐祚大嘗會爲大祀、新年、月次、神嘗、新嘗、賀茂等祭爲中祀、

〔令義解神祇令二〕凡一月齋爲大祀、三日齋爲中祀、一日齋爲小祀、

〔延喜式臨時祭三〕凡新年、賀茂、月次、神嘗、新嘗等祭、前後散齋之日、僧尼及重服、奪情從公之輩、不得參入內裏、雖輕服人、致齋幷散齋之日不得參入、自餘諸祭齋日皆同此例、

〔延喜式十九式部〕新年月次二祭

前散齋一日、左辨官召諸司宣示齋日、錄進受宣復省擧申、輔命曰、召所管司而宣之、錄稱唯命史生喚省掌、省掌稱唯就版位、丞命召大學寮、省掌稱唯復座令召之、寮屬就版位、丞命如辨官宣、屬稱唯退告本局、（餘祭准此）其日平旦、輔以下就神祇官齋院外座、省掌執版位進當丞座而置之、五位已上就版受點、（辨大夫不在此例、事見儀式、）

〔西宮記二月〕新年祭（殿務、先一日、少納言付内侍奏齋文、他殿務准之、）

〔北山抄二一月〕四日新年祭事（殿務、前散齋一日、少納言付内侍、令奏齋文、）

〔小野宮年中行事二月〕四日新年祭事（殿務）

前散齋一日、少納言付内侍令奏齋文如常、○中略依穢延引停止時、於建禮門前行大祓、

類聚國史第七十四云、弘仁十一年二月丁丑、○四日停釋奠定中丁、緣當新年祭可忌三牲也、當新年祭用中丁之濫觴也、

〔師遠年中行事二月〕四日新年祭事（殿務）

〔師光年中行事二月〕新年祭、幷前後齋日、僧尼重輕服人不可參內事、

有前後齋、於神祇官行之、上卿已下行之、

四日新年祭事（殿務、有前後齋、）

法性寺殿仰、前後齋許也、承安三年殿下仰口如此、大外記賴業申狀同之、

〔禁秘御抄中〕神事次第

二月四日新年祭（前後齋、白河院仰也、他說自一日不用之、）

〔建武年中行事〕二月四日としてひのまつり、一日より御神事のよしみえたれど、白河院の仰にて、前後齋ばかり也、

祭式

〔延喜式一四時祭〕二月祭

新年祭

國司祭新年神二千三百九十五座（○中略）

右國司長官以下、准レ例散齋三日、致齋一日、其會祭之（祭日并班幣儀、並准二神祇官一、）

〔年中行事抄二月〕四日新年祭事

貞觀十八年、公卿并外記史等、觸二内裏穢一、仍於二門前一行レ事、不レ著二齋院一、

〔中外抄〕新年祭齋事

康治三年正月廿八日、祗二候御前一、仰云、二月四日新年祭者、自二朔日一忌二僧尼一佛事也、自二二日一忌レ之、（故白川院御事）

〔玉海〕治承三年二月廿二日庚戌、今日雖二新年祭後齋一、依二先例一奏總行云々、　廿三日辛亥、酉刻大外記賴業來、召二簾前一談二雜事一、語云、昨日新年祭後齋也、而依二春宮（○安德）御百日一有二御遊一、可レ有レ憚哉否之由、大進光長内々相尋、申下不レ可レ憚之由上了、至二于舞樂一可レ有レ憚、主上御遊先例不レ憚云々、　四年二月四日丙戌、此日新年祭也、右大將（○藤原良通）實子（耳遣）奉二行之一、（○中略）大將自二今日一神齋、（諸社祭、一日齋定例也、）忌二僧尼、重輕服、姙者、月水女等一皆如レ常、

〔資益王記〕文明六年二月四日、予自二今夕一始二神事一、新年祭也、行水、

〔令義解二神祇〕仲春（新年祭○中略）

前件諸祭供神調度、及禮儀齋日皆依二別式一、其新年月次祭者、百官集二神祇官一、中臣宣二祝詞一、（謂宣者布也、祝者贊辭也、言以下告二神祝詞一、宣中聞百官上、故曰レ宣二祝詞一、）忌部班二幣帛一、（謂班猶レ頒、其中臣忌部者、當司及諸司中取二用之一、）

〔儀式一〕二月四日新年祭儀

其日卯四刻、所司辨二備庶事一、神祇官陳二幣物於齋院一、（○中略）次神祇官人率二御巫等一、入レ自二中門一、就二西舍座一、東面北上、大臣以下入レ自二北門一、就二門内座一、（大臣在二西披一東面、參議以上在二東披一西面、皆北上、五位以上在二門外東披一西面、外記史生召使等在二西披一、東面重行、外記中二

庶事辨畢之狀、共起就北舍座、大臣南面、參議以上西面、諸王東面、並北上、（其大臣用北戶、參議以上東砌、諸王西砌、）大臣喚召使二聲、召使稱唯進立舍前、大臣宣、式部（乎）刀禰率入（止）宣（還）、召使稱唯、出命云、式部（乎）刀禰率入（止）宣、輔稱唯、率群官入自南門、就南舍座、北面東上、御巫降就西舍前庭座、左右馬寮各率御馬廿一疋、（寮別十疋）立南舍東頭、（○中略）神祇官掌二人率祝部等、入自南門、立西舍南頭、神祇官人降就舍前座、大臣以下及諸司、共降就舍前座、中臣進就庭座、讀祝詞、每一段了、祝部稱唯、讀訖中臣退出、神祇官拍手兩段、次大臣以下五位以上、次諸司主典以上、次祝部並不稱唯、然後皆復本座、伯命史奉班幣帛、（○中略）史復本座、申頒幣畢、伯命云縱、史共稱唯、訖大臣以下以次退出、

〔延喜式 四時祭上〕二月祭

祈年祭（○中略）

右神祇官所祭、幣帛一依前件、具數申官、（○中略）致齋之日平明、奠幣物於齋院案上幷案下、（所司預敷案下幣薦）掃部寮設座於內外、（諸祭設座准此）神祇官人率御巫等、入自中門、就西廳座、東面北上、大臣以下入自北門、就北廳座、（大臣南面、參議以上就廳東座西面、王大夫就廳西座東面、）御巫就廳下座、群官入自南門、就南廳座、北面東上、神部引祝部等、入立於西廳之南庭、既而神祇官人降就廳前座、大臣以下及諸司共降就廳前座、中臣進就座、宣祝詞、每一段畢、祝部稱唯、宣訖中臣退出、大臣以下諸司拍手兩段不稱唯、然後皆還本座、伯命云、奉班幣帛、史稱唯、（○中略）史還座申頒幣訖、諸司退出、

〔延喜式 十八式部〕凡祈年月次兩祭所參諸司者、先大臣就座之後不得參著、

〔延喜式 三十八掃部〕凡二月四日祈年祭、設大臣及參議以上座於神祇官西院北舍、（大臣南面、參議以上西面北上、）同舍西壁下設王大臣座、（東面北上）南舍敷座二行、（北面東上）前一行爲辨官幷諸司五位已上座、後一行爲官史幷諸司六位已下座、大臣舍之東屋設外記座、西屋設神祇官伯已下座、又其屋前庭設讀祝詞者座、（東面）但御巫座在祝師後、又大臣已下諸司六位已上座、預設於各舍前庭、（爲讀祝詞時座、敷以薦、）

〔西宮記 二月〕新年祭

平旦、上卿著神祇官北門、（在門中東腋、西面、王大夫在門外、外記在西腋、史生在前、西腋大臣座、東腋參議以上座、）上卿著廳座、（大臣入自後戸、東第三間北壁下座、南面、）納言參議東一間、（入自巽角、南面、又著式筥、）王大夫著、（西第一間東面、入自坤、或用代官、）上卿召召使、（二音）稱唯參立、上卿云、式乃省乎刀禰率入止宣尸、召使稱唯出召、輔率祝官北面東上、五位前六位後入著、（入自南門、著南座、）御巫坐西廳前、牽御馬十一（疋、寮牽猪鹿、）

神部祝入立西廳南庭、神祇官降居、（或除居西舍、或追參入、）上卿幷諸司降居砌下、（南儀居砌上、敷薦、）中臣進宣祝詞十段、（度別稱唯、）中臣出、上卿以下拍手、（兩段、）祝還座、伯命史、史令班幣、○（中略）史申頒幣訖、次自上退、

〔北山抄 一 二月〕四日新年祭事

神祇官率御巫著西廳、大臣以下入自齋院北門、（若事未辨備、皆坐北門西面、外記候門外、外記申供神物辨備了之由、大臣東面、參議以上）就北廳座、（大臣南面、入北面妻戸、參議以上西面、入自東妻著之、王大夫東面、坐北上、延長二年、伯安則中、先例大臣入自西戸、納言入自東戸、參議入自東壁下云々、而儀式及先年例如之、）上卿召召使二聲、稱唯參入、上宣、式部省乎刀禰率入（止、末ヲ禮、末以禮歟、）若宣、式部省率群官入自南門、著南廳座、御巫坐西廳前庭、左右馬寮各引馬十一匹、立刀禰殿東庭、（猪鶏等預繋之、）神部祝部等、入立西廳南庭、神祇官人降坐廳前、次上卿以下、降著廳前座、（南儀砌上、）中臣進就座讀祝詞、畢上卿以下拍手、各復本座、次班幣物、（南儀立砌上、）訖史申其由、上卿以下退出、

神祇官有穢時、於宮內省行之、上卿先著後廳北廂、供神物辨備畢、經廳東砌上著座、如神祇官儀、

〔江家次第 五 二月〕四日新年祭

神祇官率御巫著西廳、上卿參神祇官、先著北門內掖座、（東掖西面、但大臣著西掖、案彼記、納言上卿之時、東掖座東面著座之由、有所見、而西宮北山、並此次第皆載西面之由、如此、）王大夫可著同門、外記著同西掖座、外記申代官、（一人、初著神事之人、或不令申、）上卿答如恆、又申供神物辨備之由、（先例召史問之、近例外記申之、召召使可令外記申、然或又上卿以召使被問、辨不必參、）上卿著廳、（入自東妻著西面座、一東第三間、據置式、大臣者入自北庇、自餘入自東妻、）王大夫著、（入自西妻、西第一間座、或用代官、）上卿召召使、召使二人立艮壁、（先是辨著南門外幄南面、式部彈正等同著坤幷東幄、）外壇下、（同音稱唯、一人）

經東屏井倉後立座中、上卿宣、式乃省平刀禰奉入止宣へ、召使稱唯、出南門召之、辨幷式部省諸司等、入自南門著南廳座、御巫著西廳前庭、左右馬寮各引馬十一匹、立於刀禰殿東庭、(白猪入檻、白鷄裹之、)神部祝部等入立西廳庭、神祇官人降坐廳前座、(本官人皆可著木綿、近代不然、可依之、)上卿以下降著廳前座、南儀砌上設座、南廳座人々皆著砌下座、南儀著砌內、次祝師申祝、(如式十段、座別稱唯、)上卿以下復本座、○中略次自上退、

〔建武年中行事〕二月四日としごひのまつり、○中略辨かねてより諸國のめし物もよほしとゝのへて、二三日かけて神祇官に幣をつゝましむ、忌部つゝむなり、案上案下三千餘座の神をまつる、その所々たしかならざるもあり、國司におの〳〵つかはす、諸國にも祈年をおこなふなり、その日。。。南殿にて。。。御は。。。あり。。。たつみの間に、巽にむけて御座をしく、筵二枚半帖れいの御けいにおなじ、御帳にかたびらかけて、額間東一間のかうしをあぐ、大宋御屛風、御座のかたはらにたつ、御劒御笏などつねのごとし、伊勢大神宮を拜し給ふ

〔日本紀略村上三〕天曆二年正月十一日辛酉、諸卿定申祈年祭事、件祭年來懈怠甚多、仍可致如在之禮事也、

〔貞信公記〕天曆二年正月十四日、中使頭朝臣來云、祈年祭事、可致如在之禮者也、而年來解怠甚多、仍令定、諸卿申云、神態御食、置勾當官人令勤行、

〔左經記〕寬仁二年二月四日戊辰、參大殿、次著祈年祭所、上新中納言、雜事如常、(今日王不參、仍以陰陽頭文高爲代官、)

〔中右記〕嘉承二年二月四日、祈年祭也、爲勤上卿、巳時許參神祇官、先入北門之間、外記義貴立門前、相揖過之、著北門東腋座、(依式、立居揖如恆、)王大夫一人、著西腋座、(是大臣座也、近代王大夫著云々可尋、外記在圍外、此事後聞、王大夫不可著此座、)以召使令召外記、外記著軾、諸司參了否之由相尋、申具了由、因之外記稱唯退、近代申代官云々、雖然不令申之、依初著行也、則起座申代官云々、(上卿二間西面、王大夫同著東面一間、其路經廳東、入從南著也、)先是神祇官祭主以下在西廳、(東面北上)分配辨藏人左少辨雅兼、史官掌吉行在南屋座、予召召使二聲、召使稱唯、仰云、式部省乎刀禰奉

入ト、召使出南門召之、先左右馬寮各引馬十一匹、(猪陽等牽之)神部祝部等、入立西廳南庭、御幣兼居案上、(伊勢幣案東、諸社二脚案置之、)神祇官人降廳前座、予降廳前座、王大夫同下居、中臣進就座讀祝詞、了上卿以下拍手、此後伊勢幣出從東門、(當主親定使同出)予登本座、次本官大夫史宗元來南庭、申幣分了由、予以召使遣仰分配辨許於諸社幣儘可分由、則起座退出、諸社幣分配、辨召讀社禰宜等分給云々、

〔重憲記〕天養元年二月三日甲申、明日新年祭、○中略未刻新少納言通憲、於本局可有習禮、外記一人可參會由所示也、○中略未刻新少納言被參、(束帶釼)不前少納言(俊通)、中直講(師長)所相具也、是爲傳者之故也、晴政儀略習禮了退出、　四日乙酉、新年祭廢務、予巳終參神祇官、先々左少史賴季參入、予先著北門闕外東面平敷座、頃之正親正顯廣王參入、午終左中辨資信朝臣參入、予起座徘徊之間、入北門被向南廳邊、(辨自東門可被參由存知之間、自此門被入、仍起座也、如何、)相次權大納言宗輔卿參入、予起座、當門簷外出立、(東面、當西廊西邊、去)(當北五許尺、)上卿入北門著門內東腋座、(西面板敷也、當其壇上掃部寮被置軾、予又仰使部令置軾、)王又著西腋東面座、(與上卿對座、)上卿仰云、王可著門外東腋由有所見、而近代著闕內座、可早起座也、王頻雖申先例、上卿尙不甘心之間、召頭辨被尋仰、辨被申云、可著闕外也、(先々幷去年兩度月次祭、著闕內西腋、而依上卿仰、可著門外由令申了、是付江次第也、)王起座著東腋、(與予對座、)○中略予參軾申式部輔代官、其詞云、式部輔申障代官給ラム、上宜誠タリヤ、予云、當官權大祐俊信宿禰誠候、上宜令候、(與、不申令候二字一說也、恐錯事歟、)予稱唯歸本座、(予欲起座之所、上卿仰予云、供神物辨備事、外記可申歟、予申云、近代例辨若史可申也、然而外記令申由見江次第、)(第一面去年六月十二月月次祭、史依辨命令申了、左右可在御定歟、上卿仰云、須史申也、然而近代外記令申由云々、)次以召使召右少史賴季、被問供神物事、史申云、作事具了者、不稱唯退出異樣也、次上卿王起座著北廳座、(上卿經北廳東壁下、入東方著西面座、王東面歟、式部官令置由、見古記幷江次第、)(第一面近例不置、北門不必置歟、而近代必置、)予又候東屋內南面平敷座、(在西一間、)次上卿召召使助吉、稱唯進立南庭、上宜大舍火司式司召セ、召使稱唯、出南門唱之、○中略次上卿以下著出居座、著南廳、辨以下著同簷外座、(上卿王東面北、)(於前、平敷也、祭主淸親著王上、予著東廳簷外座、)次祝師一人著庭中座、(東面、諸社幣西也、神祇官人二人、持幣立其南面東西、)祝師祝申了、上卿以下拍手二段、次祝師退出、未刻天顏頗陰、小雨忽下、仍仰掃部寮、砌上令改座之後、上卿祭主王著座、予同著

雨儀座也、（東屋皆內、向南面、）次祝師退出、（江次第云、祝師起座之後、上卿已下著本座云々、今日不然、）上卿次神祇官人拘御巫子、不廻幣物由已有所見、早可歸入、又予依召參入、（依無弓跪候上卿東方、）仰云、御巫子廻見幣物事如何、予云、不廻見幣物由存江次第、然而式文云、其儀同月次祭云々、而於月次祭者所廻見也、左右可在御定、上卿仰云、不可見也、（式文廻見幣物事無所見、於祈年祭者不廻見由有所見、）其後復本座、上卿尙依不審、以召使被尋申頭辨、辨被申云、御巫子雖著西廳邊、不廻見幣物歟云々、次神祇官人（左右衞門衞士相副歟云々、）頒伊勢幣、祭主行親卿起座渡庭中、（諸社幣南也、）自東門退出、次被立諸社幣、但被立春日幣之後、上卿予退出、（上卿被立伊勢幣之後、與外記可退出、而於藤氏人者、被立春日幣之後可退出云々、）但上卿予出北門之間、辨史同退出、○中略申刻上卿以下退出、後日依公事參仕之時、仰云、去四日祈年祭、御巫子不見幣物事、王顯廣於式所傾云々、予申云、（但如先日雖者沙汰了事歟、定有所存令申歟、）上卿所懷之次第、不廻見由有考物、件次第故按察納言（宗俊、殿閣也、）

〔愚昧記〕承安三年二月四日、祈年祭也、午刻參神祇官、事々如次第、祭主卿在北舍、（上卿著舍也、）是依爲公卿也、頒奉幣了退下、以下社事、能可奉行之由、以召使示右中辨重方了、

〔玉海〕治承四年二月二日甲申、今日召光盛仰云、大將（○藤原兼實子良通）可行祈年祭之由、可仰官外記、（刻限巳時者、）即以御教書仰遣隆職賴業等之許、　三日乙酉、入夜大夫史隆職參入、召前問神祇官正廳座不審事、申云、六位史官掌等相共奉行、五位史殊不尋行之間、分明不覺申、就中官中之習、以裝束司記文爲證據、而彼記文不載此儀、又年々例不同、只所詮以被仰下之趣可相存云々、仍注西宮、（十卷抄井十五卷抄等也、）北山、江次第等文相加、先日所進指圖（少紙）押下給之、今日未刻右中辨兼光參入、申云、祈年祭所奉行也、若有可承事者、兼可存知者、仰云、巳刻可參仕、幣物已下事不可被解怠者、大將于時在此第也、　四日丙戌、此日祈年祭也、右大將奉行之、始從神態也、依寬治六年（知足院殿、于時中納言中將、）天永三年（故殿、于時中納言中將、）○中略等例所行也、早旦修諷誦於七箇寺、（八幡、賀茂上下、春日、大原野、吉田、六角堂、法成寺、）大將自今日神齋、○中略辰刻浴郎來此第、（神事之日、出立自女院御所、不可然之故也、）午刻著束帶、（色目如常、唐草蒔繪劒、紺地平緒、）令參神祇官、（出立之間、新宰相定能卿來訪、直衣也、）前駈六人、（兼親、賴高、能業、長俊、勾當二人、）

國基、業基、家事也、扈從殿上人二人、基輔朝臣、季信、隨身裝束如例、青長染狩衣、下濃白襖衣、已上當胡籙壺衣、常出仕定也、祭儀訖參內、申刻歸來、〇中略

祭儀　以大納口狀記之

於都芳門下車、召使向來、追前行、大夫史隆職來門下、申御裝束子細、就去夜定、仰之趣奉仰之云々、入自神祇官北門、自壇上東行、著門內東掖座、先立座下揖天、突膝天東面ニ居定天又揖、然後置式筥、敷軾、件座綠緣半帖也、次召召使、音二召使稱唯、進立南庭、仰云、外記召々、稱唯退下召之、近例外記先申代官云々、然而依初度不申之、是又先例也、次大外記賴業入自同門進就軾、先例五位外記史強不參入、而寬治六年、大夫史祐俊、天永三年、大外記師遠、大夫史盛仲等、各以參候、令存彼等吉例、各可參入歟、就中五位外記徒、如此之使可謂嗚呼、上卿仰云、諸司ハ具タリヤ、賴業申候之由、又仰云、幣物ハ具タリヤ、申候由、上卿目之、賴業稱唯退下、或召使同之、或又以史同弁、而寬治以後家習同外記、仍隨彼例也、又江次第以同注可聞外記之狀、次上卿起座、南揖、如常、自當間降壇下、或說、更西行自中門降壇下云々、其理可然、但當中門不登階、又其壇不高、仍閑宜可用當間之由、案所致歟也、昇自正廳、前北廳是也、北面經東南壇上、經西廳身被昇壇上、其後自取之於巽角、程座之云々、立南面東第一間、有妻戶、長押下、揖昇天著座、件座西面、副東壁敷之、自座後著之、揖如常、召使直稱著云々、此間召使取在北門座之式筥、走來先置此座前、上卿未著之前置之、次王大夫著西第一間座、件座東西相對天敷之、次上卿召召使、音二召使稱唯進立南庭、上卿仰云、式ノ省サヲ刀禰入マワレト宣ヘ、微音仰之、但召使聲聞程也、字末頗不分明、召使稱唯、挿幣案東、出南門召之、即行事右中辨兼光朝臣、式部少輔光輔、先例多用代官、而寬治在實、天永有元、共正員參入、仍依仰其父長光入道令參者也、諸司等入自南門、著南廳座、先是神祇官人等、率御巫著西廳座、此間召使參進、申云、左馬寮御馬未參云々、此事於北門座、同事具否之時可申也、今中此旨尤奇、其後暫而召使又參上、申將參之由、即引立御馬、左右各十匹云々、又西廳東南邊繫白猪、居白鷄、入物云々、次神祇官人降居西廳前座、次上卿起座、南揖如常、先召召使、問下可降坐後、否、是非作法、爲恐違失、可問云々、自當間降壇下、自砌內西行、著砌外座、先立座後揖天、著座之後又揖、如常、南面著之、件座當東二間敷之、王大夫同降坐砌前座、件座當西二間敷之、辨已下同降居南廳前、但被隔幣帳、簾不見云々、次祝師進庭中座、申祝詞、十段、度別稱唯云々、即拍手、兩段、上卿已下從之、上卿拍手作法、不令有聲、手ノサキヲアハセテ、ヤチヲヤヲ打合也、次申訖祝詞退座、次御巫人把之云々、出來廻伊勢幣三匝之後歸去、次頒幣、先伊勢幣、衞士受取、了使出東門了、此間可平伏、而余忘却不敷其

由、（仍不平伏云々、余失也、）次頒諸社幣等、召使參進申春日幣立了由、卽大將起座、（兩度揖如初）不還著堂上座、直以退下、（是又家之習也）留立正廳東庭、（今度不經壇上也）召召使仰云、諸社幣儲可奉分之由、可仰辨者、卽出北門赴郁芳門之間、召使歸來申辨報旨、（長承云々）了大夫外記史、幷式部輔等同相從云々、於郁芳門乘車參內、敕列候御前云々、今日始終致前驅、伊勢幣出日是廢務也、音奏停止、然而隨身不止前聲、是皆先例也、

正廳座事

西宮十卷抄云、（中略）○巳上納言座可在東一間之證文也、

長元七年公記云、著東第二間、（入自東第一間西面）寬治六年爲房記云、經東南庭、西第三間爲上卿座、（南面）王大夫座在西第一間、（東面）長承三年知信記云、入自南面東三間戶、令著同間母屋座給、（西面、先例入自南面東第一間、令著第一若第二間給云々、而所□中也、大臣入自北面東第二戶著第二間、納言入自南面東第三間戶、令著同間母屋、仍今日御座此定也、第一二間蔀妻戶不開之者、）巳上記等皆以相違、爰知行事官等儲不尋行之間、每度有相違歟、仍任三抄之文、可敷一間之由、豫所仰隆職宿禰也、

壞同廳東西一間隔事

隆職申云、大神宮正遷宮之時、以彼廳爲行事所之間、東西一間隔之、其後于今不壞却之云々、仰云、當時無其用者、以行事所之例、不可備常途之儀、但若塗壁者、自閑院當大將軍寅年、（當今於閑院經四十五日、去正月十日行幸五條第、未及四十五日、故御忌付閑院、自彼院可有方角之沙汰也、）且依先例可令致沙汰者、重申云、件隔妻戶也、仍可致扉云々者、今日如此、

上卿不復座事

寬治爲房記云、拍手之後、復本座可被分幣物、是式文歟、左府示給云、任中納言後始奉仕日、宇治殿仰云、不著本座、乍爲座伊勢使發進之後、早可罷出者、可依其說者、天永中右記云、上卿乍庭中座、伊勢幣幷春日幣使立之後、自砌下座所退出給也、是殿原行給之儀云々、就此等之記、不可復座之由觸諫大將、而於神祇官、大夫史幷右少辨彙忠等、存他家之例、可復座之由再往令申、然而大將不承引退出云

云、長承發遣幣之後復座云々、尤無證據事歟、

祭主不參事

長承知信記云、祭主三位、入自西第二戸、著同間母屋座云々者、余案祭主爲公卿之時、可著正廳座歟、但可著第一間也、二間之條失錯歟、今度親隆卿依服暇不參、仍無此儀、

〔百練抄 十四 四條〕仁治二年二月四日壬戌、祈年祭也、本官東廳、去頃有三十日穢、稱拵濡中門、於西院被行神事、伊勢幣自北門退出、未曾有事也

〔康富記〕文安四年四月廿一日壬午、是日祈年祭也、去二月四日依無武家用途、今延引、先是有日時定、上卿鷲尾中納言隆遠卿、奉行頭左大辨俊秀朝臣、官方右中辨冬房、（藏人）權大外記予、右大史員職等參陣、（中略）○其後上卿已下引參神祇官、兩脚頻也、本官儀上卿被著北門東廳座、辨被著同門外東脇、外記史著同門外西脇、上卿召外記被問使之參否、次召辨被問幣物具否歟、（但辨被座被申返事、不被進軾歟如何、）次上卿被著北廳内、使王兼夏、中臣房直朝臣、卜部兼香、忌部親憲等參役也、出居座上卿、外記北廳簷下西上南面也、辨史東門下西上北面云々、南廳代無之、降雨之故也、（中略）○天明各退出、（中略）○今日頭左大辨内々送書狀、有被尋問事等、祈年祭宣命有無事、内侍參入哉否事等也、宣命無之、内侍無參向之由申返事了、

〔後竹林院左相府記〕康正二年三月四日、祈年祭依令參行、酉刻著束帶、（蒔繪劍、無文帶、）乘八葉、（前驅一人、布衣、小雜色四人、）次參神祇官、（路次之間、高清登車、）暫徘徊北廳北邊、相待幣物具否、其後著北門廳座、其儀向北揖、脱沓昇座、上猶向北揖、次西方へ居直召召使、召使參軾、仰可外記召之由、召使稱唯退去、外記參軾、予問云、諸司候ヤ、申云候、即退去、次以召使問云、辨幣物具候歟、歸來申具之由、然間揖起座、（作法同前、）著北廳座、妻戸間也、於地上揖昇、脱沓著西南面座、次王大夫著座、社司參北廳内、跪幣前申祝、（此條不審、但近年如此、社司未練歟、）次予召召使仰云、式ノ省ヲ刀禰率入ト宣へ、儀色計也、次起座著簷下座、聽其妻戸之通歟、著南面、伊勢幣發、警蹕龕之間平伏、次發遣吉田幣、自餘幣近年明日發遣云々、予起座、抑今夜

祭、毎事違例如何、迷惑々々、高清相語云、近年毎度如此、社司依未練也、然間毎度之上卿立不審云々、

〔季連宿禰記〕元祿二年六月十四日己卯、新年祭、月次祭、神今食、新嘗祭等次第、(後醍醐以後之分)於所持者可獻覽之由、自關白殿(○一條冬經、後兼輝、)有奉書、(內藏權頭之狀也)　十五日、昨日被仰出新年祭以下之次第、無所持之間、今日參關白殿、以諸大夫令申其由、

〔延喜式(八祝詞)〕新年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、(神主祝部等共稱唯、餘宣准此、)高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久、今年二月爾御年祈將賜登爲而、皇御孫命宇豆能幣帛乎朝日能豐逆登爾稱辭竟奉久宣、

御年皇神等能前爾白久、皇神等能依左志奉牟奥津御年乎、手肱爾水沫畫垂、向股爾泥畫寄氐取作牟奥津御年乎、八束穗能伊加志穗爾皇神等能依左志奉者、初穗波千穎八百穎爾奉置氐、𤭖閉高知𤭖腹滿雙氐、汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟、大野原爾生物者甘菜辛菜、青海原住物者鰭能廣物鰭能狹物、奥津藻菜邊津藻菜爾至萬氐爾、御服者明妙照妙和妙荒妙爾稱辭竟奉牟、御年皇神能前爾白馬白猪白鷄種々色物乎備奉氐、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣、

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、神魂高御魂生魂足魂玉留魂大宮乃賣大御膳都神辭代主登御名者白而辭竟奉者、皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣、

座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久、生井榮井津長井阿須波婆比支登御名者白氐辭竟奉者、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立高天原爾千木高知氐、皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣、

御門能御巫能稱辭竟奉皇神等能前爾白久、櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白氐辭竟奉者、四方

能御門爾湯都磐村能如塞坐氐、朝者御門開奉、夕者御門閉奉氐、疎夫留物能自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜能守日能守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

生嶋能御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、生國足國登御名者白氐辭竟奉者、皇神能敷坐嶋能八十嶋者、谷蟆能狹度極、鹽沫能留限、狹國者廣久、峻國者平久、嶋能八十嶋墮事無、皇神等能依左志奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

辭別伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久、皇神能見霽志坐四方國者、天能壁立極、國能退立限、青雲能靄極、白雲能墜坐向伏限、青海原者棹柁不干、舟艫能至留極、大海原爾舟滿都都氣氐、自陸往道者荷緒縛堅氐、磐根木根履佐久彌氐、馬爪至留限、長道無間久立都都氣氐、狹國者廣久、峻國者平久、遠國者八十綱打掛氐引寄如事、皇大御神能寄奉波、荷前者皇大御神能大前爾如横山打積置氐、殘乎波平聞看、又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閇奉故、皇吾睦神漏伎神漏彌命登宇事物頸根衝拔氐、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

御縣爾坐皇神等前爾白久、高市葛木十市志貴山邊曾布登御名者白氐、此六御縣爾生出甘菜辛菜乎持參來氐、皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

山口坐皇神等能前爾白久、飛鳥石村忍坂長谷畝火耳無登御名者白氐、遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐、皇御孫命能瑞能御舍仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

水分坐皇神等能前爾白久、吉野宇陀都祁葛木登御名者白氐辭竟奉者、皇神等能寄志奉牟奧都御年乎、八束穗能伊加志穗爾寄志奉者、皇神等爾初穗波穎爾毛汁爾母瓱閇高知瓱腹滿雙氐稱辭竟奉氐、遺乎波皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛稱辭竟奉久登諸聞食登宣、

辟別忌部（能登）弱肩（爾）太多須支取掛（氐）持由麻波利仕奉（禮留）幣帛（乎）神主祝部等受賜（氐）、事不過捧持奉
宣、

〔儀式 一〕二月四日新年祭儀
其日卯四刻、所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、（○中略）伯命史、史奉班幣帛、史二人共稱唯、各取札分立
案西頭東向、忌部二人率神部二人、進夾案立、監頒幣事、史以次唱御巫及諸神祝、各稱唯、神部執幣頒
之、（大神宮幣帛者、差使進之、）史復本座、申頒幣畢、伯命云縦、史共稱唯、訖大臣以下以次退出、

〔西宮記 二月〕新年祭
伯命史令班幣、史二人執簡唱社名、（忌部二人立案下）史申頒幣訖、次自上退、（近社幣祝來請、遠國幣納官庫、付朝集使、延長四年官符云、新年、月次、新嘗等之祭、幣帛物不受之國、朝集公文、自今以後宜令彼官物勘申移者云々、）

〔江家次第 五 二月〕四日新年祭
御巫廻見幣物、（三人出自西壁、始自伊勢料見之、件事或不被行、御巫又近例有一人、可往之、件事月次祭有之、西宮抄也、新年祭不見、）次神祇史二人持簡、召諸社
祝、（忌部二人立案下、兩儀史以下立砌內、）史申頒幣訖、（遠社幣納官庫、）次自上退、（藤氏公卿頒春日幣之後、或早退出、以召使傳辨曰、諸社幣能可被頒行云々、源氏（諸王）頒平野幣之後可出歟、）

〔神祇官年中行事 二月〕四日新年祭也、諸社幣料請奏、長官以下官人等加署、諸社催口長官已下加判
行、奉行忌部書進之、當日官人著座出居、御巫子廻見幣物案、詔戸師申詔戸、

〔續日本紀 二 文武〕大寶二年二月庚戌、（○十三日）是日爲班大幣、馳驛追諸國國造等入京、
○按ズルニ、此レ恐クハ新年ノ頒幣ナルベシ、故ニ姑ク此ニ擧グ、

〔類聚國史 十 神祇〕延暦十七年九月癸丑、定可奉新年幣帛神社、先是諸國祝等、毎年入京各受幣帛、而道
路僻遠、往還多艱、今便用當國物、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應奉新年月次新嘗等祭幣事

右得神祇官解偁、檢案內、武藏、下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部受取供祭、而頃年緩怠曾不勞受、徒積庫底、無由走奉、斯固程途遼遠、往還難澁之所致也、望請差使令奉、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但自今以後、宜附貢調大帳等使送之、仍須官長齋敬躬奉、不得踈略、

齊衡二年五月廿一日

〔類聚三代格　一〕太政官符

應附送税帳大帳朝集等使諸社不受新年月次新嘗等祭幣帛事

右得神祇官解偁、件等祭幣帛、依祝部不參、納置官庫、謹案齊衡二年五月廿一日格偁、武藏、下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國不受幣帛、自今以後、宜附貢調大帳等使送之者、而貢調使不著此官、但税帳大帳朝集使等爲例來著、今如格條、外國諸社不受幣帛可附大帳使、畿內祝部不受幣帛未被處分、望請畿內外國不受幣物、同附件三箇使班送、但頒幣帛之日不參祝部者、須依格先科祓令愼將來、若猶不悛、將從解却、謹請官裁者、右大臣宣、依請、

貞觀十七年三月廿八日

〔類聚三代格　一〕太政官符

應二月新年六月十二月月次祭國司一人率禰宜祝部等向神祇官受取幣帛物事

右可受取幣物如法愼祭之狀、去年三月二日下符五畿內七道諸國已畢、今聞國司緩怠不勤、祝部疎略無愼、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅國之大事莫過祭祀、不守符旨、怠在主司、須畿內幷近江紀伊等國、選國司掾目若史生品官之中謹厚恭敬者一人充使者、率禰宜祝部等向神祇官受取幣帛物、卽便每社如法愼祭、祭畢□□之狀差使言上、若致闕失、殊處科法、又其

見參祝部夾名者、前祭一日、使者等進官、事據新嗣、不得乖違、自今以後、立爲恒例、

寛平六年十一月十一日

〔本朝文粹二 意見封事〕意見十二箇條 其一 ○今錄二　善相公 清行

一應消水旱求豐穰事

右臣伏以、國以民爲天、民以食爲天、無民何據、無食何資、然則安民之道、足食之要、唯在水旱無沴、年穀有登也、故朝家毎年、二月四日、六月十一日、十二月十一日、於神祇官立新年月次之祭、殊加齋肅、遍饗神祇、乞其豐熟、致其報賽、其儀公卿率辨官及百官、參神祇官、神祇官毎社設幣帛一裹、淸酒一瓮、鐵鉾一枚、陳列棚上、又社或有奉馬者、焉（新年祭一匹、月次祭二匹、）亦皆左右馬寮、牽列神馬、爰神祇官讀祭文、畢以件祭物頒諸社祝部、奉本社、祝部須潔齋捧持各以奉進、而皆於上卿前、卽以幣絹插著懷中、拔棄鉾柄、唯取其鋒、傾其瓮酒、一擧飮盡、曾無一人全持出神祇官之門者、況其神馬、則市人於郁芳門外、皆買取而去、然則所祭之神、豈有歆饗乎、若不歆饗者、何求豐穰、伏望申勅諸國、差史生以上一人、率祝部令受取此祭物、慥致本社、以存如在之禮、○中略

延喜十四年四月廿八日從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

〔新編追加 神社〕神事祭禮條

一可興行諸社幣物不法事 建長五、七、十二、宣旨、

抑以聖承重敬神爲本、資明繼口、治世爲先、而祈年月次祭神今食、以諸社祭幣帛供神物等、追年有不法之聞、偏是有司存擁怠而不備職掌、宰吏專雖遊、而如忘式條、縱雖非本數、守建久二年符旨、慥可遂行、

一可慥進發同使事

抑稱取幣物、置私宅徒過日限、付本社之由有其聞、四位五位守結番、慥令勤仕、不誤行程、不違日限、雖

延引

為遠所可參着、

〔深心院關白記〕文永二年正月三十日庚子、左中辨高輔朝臣來云、新年祭幣物事、與行以後、如式可有之、而不知在所社幣物等不進、徒置神祇伯許、今年何樣可為哉、可分給神祇之輩歟、又可被燒歟、可量申者、余申云、輕難量申、可被行御卜歟、關白三公被向之云々、

〔續史愚抄後宇多〕弘安五年二月四日乙未、新年祭、上卿土御門源大納言通頼、奉行藏人頭右兵衛督為世朝臣、依神木〇春日神木在洛、春日幣物並被裹、被宿納于神祇官、是嘉禎例云

〔康富記〕文安四年四月廿一日壬午、是日新年祭也、〇中略抑是日鴨社御蔭山祭禮也、祠官神人等各指合之間、當社御幣可被殘置之條如何、云先規、云傍例、可被注進之由、頭左大辨為奉行被尋申局務之間、被引勘之處無先規、遠國之神社之御幣、他日被送進之事有之、雖然於當社御幣者、被殘置後日被送進者、重又上卿已下可有參行哉、為事煩歟之由局務被申之、但如新年穀奉幣一社二社御幣、被殘置本官、後日行事官渡社家使之條、連綿之由行事官等申之、故今夜鴨社御幣被殘置神祇官了、後日社家之請使參入之時、可渡之由治定了、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年二月四日丁酉、停新年祭、並以有穢也、　三月五日丁卯、於神祇官修新年祭、此祭例用二月四日、而有穢停止、故今日祠焉、

〔三代實錄四十陽成一〕元慶六年二月四日丁丑、停新年祭、以去月大炊寮有人死穢也、　九日壬午、修新年祭、

〔日本紀略醍醐一〕延喜六年二月一日甲申、止春日祭、依左兵衛府有死人也、　四日、新年祭延引、依同穢也、

〔扶桑略記二十三裏書〕延喜十三年二月四日癸丑、新年祭延引、去月十三日觸死穢人、入東宮又參内、

〔日本紀略朱雀二〕天慶九年二月四日乙丑、新年祭依穢延引、於建禮門大祓、　十九日庚辰、新年祭、

〔日本紀略四村上〕康保元年二月四日辛亥、祈年祭延引、仍於八省院東廊大祓、　廿二日己巳、祈年祭、(式日依穢延引也)

〔日本紀略七圓融〕天元元年二月四日己未、今日祈年祭、依内裏穢延引、　十八日癸酉、祈年祭、

〔小右記〕天元五年正月廿六日己未、是日來月祈年等祭延引之例、外記相加勘奉之、即奏聞之、被仰云、大相府(○藤原賴忠)可定申者、　二月三日丙寅、參式、大相國被奏祈年祭、(○中略)十九日件等祭依穢所被延引也、自今日内四箇日御物忌、仍參腋陣、以藏人令奏此由、早可令仰上卿者、又大祓事同可仰之、參左府申此由、書件祭日被奉之、被申云、祈年祭是東宮御元服日也、非彼日被行宜歟者、祈年祭日廢務、仍所被申也、殿下被命云、十九日行祈年祭、誠可無便、十八日被行宜歟、以此由可奏者、　四日丁卯、祈年祭等延引、仍今日有大祓、　十八日辛巳、今日祈年祭、依穢所被延引、

〔日本紀略十一一條〕寛弘八年二月四日戊申、祈年祭幷春日祭延引、　八日壬子、大祓、依穢祈年祭延引也、

〔左經記〕長元八年二月四日己未、去廿九日夜、於神祇官有被殺害者、仍祈年祭於他所可有歟、將過穢之後、可有歟之由、兼日被問外記、外記賴隆眞人申云、於他所被行之由不見、過穢可被行也、若月中无日之時、三。四。月。被。行。多。有。例。云。々、仍延今日之由、於朱雀門可有大祓云々、入夜式部錄公義申云、雖未初參、依有催著大祓所、而辨達皆有故障不被參入、仍日上大藏卿召外記、被問无辨被行之例、外記申有例之由、仍无辨被行了、

〔中右記〕天永三年二月四日辛卯、從殿下有召、則參入、(○中略)民部卿新中納言被參、被仰云、中納言中將、今日爲令勤祈年祭上卿出立之間、分配藏人辨雅兼走來云、祈年祭祭物、近江國所進猪、今朝於神祇官中斃了、而可爲穢哉否事、問明法博士信貞之處、所申不明、或爲穢或不可然、可隨勅定者、又問大外記之處、大神宮之習忌鹿者、於鹿者不入六畜、於猪者入六畜、可有其忌者、被問祭主親定卿之處、申云、可忌鹿穢之由、嘉承之間、公卿僉議了者、件旨奏院之處、可被問公卿者、以藏人辨遣左大臣里亭之處、

被申云、凡年來之間、不知猪穢忌由、仍自本不忌事歟者、民部卿被申云、如此穢氣有疑之時、先々依勅定事也、然者可隨當時仰者、予申云、六畜可忌由見式文、但鷄者非忌限者、依此文除鷄之外、可有穢之義也、就中大神宮忌鹿、然者鹿猪同物也、祈年祭被延引可宜歟、殿下被仰云、可有猪穢者、參釋奠人々、自今以後可爲穢歟、是依供三牲也、件三牲之中有猪也、而大外記師遠申上云、大學寮式、當諸社祭日、止用三牲可用魚之由見也、付此文者、頗有忌歟者、此文尤有興事也、右中辨爲隆云、六畜無五體不具歟、仍强不忌也、殿下仰云、猶可爲穢之事也、以人々申旨、以藏人辨被奏院、仰云、早可延引、藏人辨向左大臣亭、仰下其旨、則被下知彼辨云々、但可被仰外記歟、(件猪有疑云々、七八所、近江國司被申之猪不敢不假也、被實檢所々有之、)祈年祭延引之由、俄被行大祓云々、祭主申上云、祈年祭以前、不可被立臨時伊勢幣、仍來六日祈年穀奉幣可延引者、加沙汰了、　廿一日、今日被勘祈年祭日時云々、上卿權大納言來廿九日者、　廿九日、祈年祭也、中納言中將令著行給、仍早旦從殿下有召參入、祈年祭次第書出、奉彼中納言、午時許參神祇官給、前驅六人、藏人辨雅兼、同著行者、中納言歸給之後、於東三條給祿、於召使云々、去春日祭時雖可有此事、思食忘、今日有此儀云々、中納言殿此間雖御坐殿下御所、依無所便宜、於三條所行也、(向、波守忠長三條)

〔玉海〕治承三年二月四日壬辰、酉剋參女院御方、此間依大神宮穢氣、祈年祭延引了云々、　廿日戊申、今日被行祈年祭延引之由大祓云々、權右中辨親宗著行之、參議史等不參云々、　廿一日己酉、今日被行祈年祭云々、依神宮穢所延引也、

〔百練抄十一土御門〕建仁三年二月四日、依內裏五體不具穢、祈年祭幷大原野祭延引、

〔百練抄十二順德〕建曆元年二月四日、祈年祭延引、依大神宮穢、　五月八日、被立伊勢奉幣使、是依被謝申去二月祈年祭幷祈年穀奉幣等神宮觸穢之間、數日不奉納事也、

〔勘仲記〕正應二年二月四日甲寅、今日祈年祭、依祭主隆直朝臣穢延引云々、　九日己未、今日被行祈

年祭、辨仲兼朝臣奉行上卿可尋記入、

〔伏見院御記〕正應二年二月四日甲寅、祈年祭上卿、權大納言藤原朝臣公守日頃領狀、而觸穢之間、權大納言源朝臣具守欲參行、後光奏云、仲兼申、今日幣使祭主隆直觸穢之由、前祭主定世申之、仍相尋隆直之處、非穢云々、兩人申狀太參差、猶依有穢疑、爲別儀被仰可沙汰立之由口爲繼卿云々、入夜自院被仰曰、幣使事可計申之由、以仲兼被仰關白之處、可在勅定之由再三申之、仍被仰爲繼之處領狀、然間關白又申云、隆直觸穢無其儀、猶可勤仕幣使云々、此條凡不得其意、始被仰合之時ハ、可在勅定仍如此沙汰之時又如然申之如何云々、關白所存誠以奇、彼隆直關白無雙知音云々、祭主沙汰之時分發故也、祈年祭延引之間、不拜神事、

〔薩戒記類私要抄四〕應永廿七年、○中略書御教書、相觸延引之由、

祈年祭延引、可爲來十三日、可被存知之狀如件、○中略

四位史爲緒宿禰請文云

祈年祭延引、可爲來十三日之由謹奉候了、早可存知之、仍言上如件、

二月四日　左大史小槻爲緒請文

禮紙云

追言上

依何事延引候畢、然者來十三日、先於陣可被定日時候、大祓事等、同可有申御沙汰御定得御意候歟、陰陽寮事、任近例御下知候哉、恐惶謹言、

件申狀甚不審、若天下穢、幷神祇官觸穢之時、被行大祓歟不明、仍重相尋兩局、

祈年祭參行之輩、依觸他所之穢延引之時、不可及大祓歟、不審之間內々所尋申候也、謹言、

二月四日　左中將判

停祭

此事於師胤朝臣者、答無所見之由、於爲緒宿禰者、可被行大祓之由所申也、予以此等之趣披露、被仰曰、天下觸穢之外、若内裏有穢之時、若可有大祓歟、其猶以不分明、被觸他所之穢延引之時、不可及大祓也者、則加下知了、

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年三月五日戊子、新年祭、以冷然院火、二月四日不祀、故此日祭焉、

〔岡屋關白記〕寬治三年二月一日、今夜回祿出來、自綾殿陣北面妻戶内放火云々、或數所付火云々、

二日、宜下條々、

一新年祭延引、以吉日可被行事、

四日、此日新年祭延引由、於建禮門前有大祓、參議皇后宮權大夫師繼卿、權右中辨時繼朝臣參行、

十日、今日被行新年祭、式日依内裏火事穢延引、上卿權大納言源顯定卿、辨右中辨藤原親賴朝臣（分配）等參行、

〔康富記〕文安四年四月三日甲子、新年祭御訪貳百匹、内一貫七百七十文、自官掌季包許到來、予分配也、　廿日辛巳、新年祭御訪百七十六匹到來、其内酒直引留云々、　廿一日壬午、是日新年祭也、去二月四日、依無武家用途令延引、　六年二月四日乙卯、新年祭延引、武家料足未到之故云々、　三月廿七日丁未、是日新年祭可被行之由勸申日時之處、廢務日、相當縣召竟夜之例未勘得、於小除目者、近有例歟之由、依被注申令延引了、　四月二日壬子、今日新年祭也、（式日依無武家用脚延引）

〔續史愚抄 後土御門〕文正二年（○應仁元年）三月十七日癸未、此日被行新年祭、依非式日先被定日時、上卿北畠中納言（教親）參行、内侍不參、

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年二月四日戊午、停新年祭、

〔三代實錄 三十五 陽成〕元慶三年二月四日甲子、停新年祭、以左馬寮牛死也、

〔日本紀略 宇多〕寬平三年二月四日、諸司觸太政大臣（○藤原基經）穢、仍停新年祭、

〔日本紀略 醍醐〕延喜十年二月四日、依犬死、新年祭止之、

○按ズルニ、停祭ノ事、後世其例ヲ見ズ、多クハ延引ナリ、蓋シ此處ニ收メタルモ亦其實延引ナラン、姑ク錄シテ疑ヲ存ス、

一年再祭

〔日本紀略 村上〕康保四年二月四日癸亥、新年祭、　四月四日壬戌、新年祭、

○按ズルニ、一年二度ノ新年祭アリシコトハ、此他ニ例ヲ見ズ、姑ク錄シテ疑ヲ存ス、

〔儀式 一〕二月四日新年祭儀

前祭十五日、充忌部八人、鍛工共作木工各二人、令造供神調度、但叡者叡編氏造之、神祇官忌部官一人監造、若官內無忌部官人及神部之中忌部不足八人者、兼取諸司氏人充之、

供神料物

〔延喜式 一 四時祭〕二月祭

新年祭神三千一百卅二座

神祇官祭神七百卅七座

奠幣案上神三百四座

社一百九十八所

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、倭文纏刀形、(三寸)絁纏刀形、(三寸)布纏刀形(三寸)各一口、四座置、八座置各一束、楯一枚、槍鋒一竿、弓一張、靫一口、鹿角一隻、鍬一口、酒四升、鰒、堅魚各五兩、腊二升、海藻、滑海藻、雜海菜各六兩、鹽一升、酒坩一口、裹葉薦五尺、

前一百六座

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、倭文纏刀形、絁纏刀形、布纏刀形各一口、四座置、八座置各一束、楯一枚、槍鋒一竿、裹葉薦五尺、

不奠幣案上新年神四百卅三座

社三百七十五所

座別絁三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置、八座置各一束、楯一枚、槍鋒一口、庸布一丈四尺、裹葉薦三尺、就中六十五座各加鍬一口、靫一口、卅座各鍬一口、三座各靫一口、(並見神名帳)

前五十八座

座別絁三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置、八座置各一束、楯一枚、槍鋒一口、裹葉薦三尺、

右神祇官所祭幣帛一依前件、其數中宮、三后、皇太子御巫祭神各八座、並奠幣案上、但臨時加減、仍不入恒數、○中略 前祭十五日、充忌部八人木工一人、令造供神調度、(但取靫者、靫編氏作、槍木者讃岐國造納、前祭五日、令木工寮受之、)當齋忌部官一人監造、若齋內無忌部官人、及神部之中忌部不足九人者、兼取諸司充之、○中略

國司祭新年神二千三百九十五座

大一百八十八座

座別絲三兩、綿三兩、

小二千二百七座

座別絲二兩、綿二兩、

右○中略 其幣皆用正稅、

〔延喜式三 臨時祭〕凡祈年、月次、神今食、新嘗等祭料楯板、置座木等之類、仰五畿內諸國神戸百姓令採進之、(山城國楯板二百枚、大和國四百枚、置座木一万二千五百隻、攝津國楯板三百九十枚、置座木一万二千隻、又河內國楯板二百八十枚、置座木一万二千隻、又靫編戸百姓等置座木一千八百卌二隻、和泉國楯板百十一枚、)

〔百練抄 十後鳥羽〕建久七年二月四日甲寅、祈年祭也、兼日於記錄所殊有沙汰、召諸司諸國沙汰人被誡仰、幣物如法被注行也、

〔平戸記〕寬元三年二月四日己巳、祈年祭幣料、任大藏省切下文、如式數只今可濟之由、左中辨顯朝朝

臣送御敎書、是巳刻時付、未刻到來如何、件事一日頃蒙催、件納物依白山造營、代々免除、今度又同前、而被召返歟、如何之由申了、其後無音、已臨刻限有此催、及遲々者、可被付馬部云々、凡迷是非了、實變最前之政途、其法可然哉、凡未曾有事也、如此御政一切不可叶事也、凡世間之法、諸人仰天之外無他歟、〈○中略〉今日新年祭、中納言中將殿御奉行云々

〔儀式一〕二月四日新年祭儀

其日、〈○中略〉左右馬寮各牽御馬廿一〈○一恐二誤〉〈寮別十匹○十下恐脫一字〉立南舍東頭、

〔延喜式一四時祭〕二月祭

新年祭〈○中略〉

右神祇官所祭幣帛一依前件、具數申官、〈○中略〉大神宮度會宮各加馬一匹、〈轡頭料庸布一段〉御歲社加白馬、白猪、白鷄各一、高御魂神、大宮女神、及甘樫、飛鳥、石村、忍坂、長谷、吉野、巨勢、賀茂、當麻、大坂、膽駒、都祁、養布等山口、幷吉野、宇陀、葛木、竹谿等水分十九社各加馬一匹、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡年中諸祭祓馬者、二月新年祭十一匹、〈○中略〉竝覆奏以放近都牧繫飼馬充、

〔西宮記二月〕新年祭

牽御馬十一匹

〔北山抄一二月〕四日新年祭事

左右馬寮各引馬十一匹、立刀禰殿東庭、

天德五年二月、左馬寮申、馬十一匹內不堪牽進狀、仰以野飼馬令充、

〔神祇官年中行事二月〕四日新年祭也、〈○中略〉諸社神馬廿二匹、〈左馬寮十一匹、右馬寮十一匹、〉諸社司可請取之處、近代本官年預請取之、〈伊勢使祭主勤之、出居官人事、諸司被用事、〉

〔重憲記〕天養元年二月四日乙酉、新年祭、〈○中略〉左右馬寮各引馬十一匹、並廿一〈○一恐二誤〉匹、引立諸社幣

南邊、

〔康富記〕文安四年四月廿一日壬午、是日祈年祭也、○中略右馬寮御馬、自菊亭殿今日不被引進之間、伊勢衞士申子細、不可請取伊勢御幣之由申之、上卿辨等臨期被進雜色二人於菊亭、被催之後被始行了、

獻鷄猪

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭○中略

右神祇官所祭幣帛一依前件、○詳見神料物具數申官、○中略御歲社加白馬、白猪、白鷄各一、

〔古語拾遺〕昔在神代、大地主神營田之日、以牛宍食田人、于時御歲神之子至於其田、唾饗而還、以狀告父、御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神、令片巫志止都鳥肱巫今俗竈輪及米占也占求其由、御歲神爲祟、宜獻白猪、白馬、白鷄、以解其怒、依教奉謝、○中略苗葉復茂、年穀豐稔、是今神祇官以白猪、白馬、白鷄、祭御歲神之緣也、

〔年中行事大概〕祈年祭

二月四日に、神祇官にして三千餘座の神をまつりて、年穀をいのるによりて、○中略しろきゐのしし、しろきには鳥をもちゐる事なり、いまの世にはそのさたなし、

〔續所談一〕祈年祭白鷄白猪

祈年祭ニ白鷄、白猪ヲ奉ル、コノ白猪ハ純白ナル猪ヲ云ニアラズ、若キ猪ノ色ノウスキ也ト云リ、按ズルニ、官史記ニ、今ハ白猪ナキ間、作テ被進、雞ハ今モ生ヲ被獻トアリ、マタ言談抄云、祈年祭料白猪ハ、近江國ヨリマキラスル也、行任國司ナリタルニ、件猪ヲ責ラレケレバ、當時ナクテラ無術テ、米百石ヲセメラレニケリ、後年猪ヲモトメテ、暫ハナキヨシヲイヒケレバ、如去年イタクカタクセヌケリ、猪ヲトリイデヽトラセケレバ、使ステヽイヌ、國司行事所へ送テケリ、コレ

奉行官人

等ノ文ヲ以テ考フレバ、前說信ジガタシ、

〔儀式一〕二月四日新年祭儀

其日卯四刻、所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、京職貢白鷄一隻、近江國豚一頭、

〔師光年中行事二月〕四日新年祭事、〇中略 奠白猪、近江國進 白雞、左京職進

〔台記〕仁平元年二月四日乙巳、右少辨資長申曰、新年祭猪、近江國未進者、件國本禪閤〇藤原忠實 掌吏務、今度除目相傳已了、然者依下名之前申禪閤、仰曰、目代俊弘申曰、先例不過今日必所奉進也、定无延怠歟、以此由仰資長了、 九日庚戌、近江目代俊弘申云、郡司申曰、祭前十餘日、狩猪不得之、連日狩獵于今無得、先例如此之時用代物云々、先卽見北山抄四、承平四年六月月次祭馬代進調布八端 任彼例可以調布八端爲猪代之由仰了、以同趣仰史、

〔重憲記〕天養元年二月四日乙酉、新年祭庭務、〇中略 辨進弑被申上卿云、今日依無白猪先例遣尋師安許了、件猪近江國所進也、而新任國司頗被澁申云々、〇中略 上卿以召使國口猪事被尋申頭辨、辨被申云、件事尋大外記之處、申云、去保延七年二月祭、白猪忽斃、仍被尋信俊眞人之處、申云、有以牛爲猪代之例、但件時無猪被行了、左右可有御定、見小野宮記、天暦十一年二月四日不獻猪、然而被行了、此例爾度被尋問之時、不勘申、〇中略 又左右馬寮各引馬十一匹、幷廿一〇一爲二 匹、引立諸社幣南邊、白猪、白雞等須繫其南木邊云々、今日無白猪、但白雞許繫之云々、

〔百練抄後鳥羽十〕建久三年二月四日丁未、新年祭也、無白猪云々、

〔百練抄後嵯峨十五〕寬元元年二月四日辛亥、新年祭也、近江國司不進白猪、不當事也、

〔延喜式太政官十一〕凡二月四日奉班新年幣帛、大臣及參議以上赴神祇官、辨外記史各一人、及諸司五位以上六位以下各一人共集、事見儀式

〔延喜式大舍人十三〕凡二月四日早朝、官人二人五位一人六位一人、參神祇官新年祭所、

〔延喜式十八式部〕凡新年月次兩祭所參諸司者、先大臣就座之後不得參著、

〔延喜式三十一宮內〕凡諸祭祀日、官人史生省掌各一人、向祭所行事、祈年祭五位一人、六位一人參神祇官、

〔夕拜備急至要抄上二月〕一新年祭

上卿　辨尋分配人、有障者可相觸他人、　官外記

〔中右記〕嘉承二年二月四日、祈年祭也、爲勤上卿、巳時許參神祇官、○中略加階之後初著行神事也、此後他大小公事可奉行也、去十二月廿七日任中納言、未奉行神事前、圓宗寺修正上卿、并兵部手結依別仰勤了、然而猶今度加階之後、先奉行神事也、歸家之後、召仕十人、官掌一人吉行來給祿、各疋絹、又要代疋絹、本八召使四人、官掌一人、在後祭庭蒙許可給祿也、雖然近代皆參仍給了、是稱神態也、但新任之時有此事、每昇進強不聞歟、雖然民部卿中納言、初勤行新年祭之後給祿云々、仍爲思吉例今度給也、民部卿時八、祿法官掌一人二疋絹、召使四人一疋絹各云々、召使十人、又申上云、中納言初任之時、各給祿了、各疋絹、此事殊不聞、大略近代說歟、雖然如此事及數何事之有哉、關白殿御車副等來、申可給祿之由、是納言昇進之後、稱下簾料、古未有如此事、近代作法云々、仍給之也、

〔重憲記〕天養元年二月三日甲申、明日新年祭分配按察大納言也、而依所勞、次第雖催申、各以被申故障、但別當○藤原公教仰云、件祭上﨟上卿可被參勤也、然而依口御定了參也云々、予以折紙注取之後、先向長亭、示子細、被示云、可申事由也、○中略其後參攝政殿、申新年祭上卿事、付大夫進盛定、仰云、右大將京極大納言、大宮大納言、重可催申、但尚被申故障者、別當稱別御定可令申也、次參京極大納言亭、須以召使申上也、而近代有別御定時、奉行外記可參入申子細也、諸卿被仰云々、然而先々尚以召使申、於今日之儀事本當參入申也、申仰旨、以左近將監仲盛、仰云、爲別御定者、縱左右午剋可參也、須參殿下申御返事、然而近代全不闕參、仍予付近例不便也、

〔玉海〕治承四年二月一日癸未、大將○藤原兼實子良通始可行新年祭、招源中納言、○源雅賴令敎其間作法、宰相定能有此座、又大夫史隆職注進神祇官裝束指圖、有不審事等、召寄可尋也、　二日甲申、巳時許大外記

賴業來、召簾前仰雜事、此次仰大將可行新年祭之間事、申云、新年祭者一大納言(左大將藤原實定)○分配也、可觸申此旨云々、○中略今日召光盛仰云、大將可行新年祭之由可仰官外記、(刻限呼者)已即以御教書仰遣隆職賴業等之許、　四日丙戌、此日新年祭也、右大將奉行之、始○○○從神態也、○中略祭儀訖參內、申刻歸來、大將候內裏之間、官史生官掌太政官召使等來給饗祿、其間事光盛注進之、申刻右辨官史生國行官掌篤宗(已上兼仰官)召使六人(仰大外記賴業、人數相叶寛治例、)參著、夾名、(和氣助安、宗岡兼延、和氣盛安、同助直、宗岡吉兼、同兼次、)副御隨身所西壁敷紫帖一枚、爲史生官掌座、(北上東面)其前居懸盤饗二前、其下二行對座敷同帖四枚、爲召使座、其前居机饗十前、下家司(衣冠)勸盃、(三獻)出納取酌居汁、食畢賜祿、(下家司)親族分賜之、

史生　官掌　(美絹六丈、各一疋、)

召使　(國絹六丈、各一疋、雖六人參入給十人料云々、)

政所對饗　(給料)

史生事

近代之例、諸家之習、官掌召使給饗祿、史生不有此例、就中長承三年、宇治左大臣初度神態不召史生、而寛治六年知足院殿御勤仕之度、召史生之由雖見爲房記、官外記之間不審猶殘、問隆職賴業等之處各申狀不分明、彼寛治史生名惟任云々、勘同年匡房記之處、元三參入之史生之中、有云是任之者、是與惟其訓惟同、疑字樣混亂歟、仍猶可爲官史生之由、仰隆職宿禰了、

〔勘仲記〕正應二年二月一日辛亥、予參院、以女房奏聞新年祭幣料事、入夜退出、　二日壬子、依禪門穢三十ヶ日觸穢、辭申新年祭奉行了、付俊光令奏聞者也、

〔伏見院御記〕正應五年二月四日丁卯、新年祭上卿通雄卿、雖無辨不參之例闕如無力之間、以史可行仰了、申合仙洞、又仰合關白了、

〔園太曆〕延慶四年二月四日丙午、裏書曰、抑今日新年祭、中納言中將參行云々、□仲定(藏人、勾勘、)元勘解由

次官、岡行高〔元前兵衛佐〕正五位上藤資名〔右少弁〕正五位下平知有〔少納言〕此外濟々、

〔薩戒部類私要抄四〕應永廿七年〇中略

新年祭可レ令二參行一給者、依二天氣一言上如レ件、

後正月十八日　左中將定親

進上　大炊御門大納言殿

新年祭可レ令二參向一給者、依二天氣一執達如レ件、

後正月十八日　左中將定親

進上　右中弁殿

禮紙

追申

分配左少弁候之處、依レ目所勞一不レ可レ叶候、必可レ令二存知一給之由被二仰下一候也、

新年祭可レ爲二式日使一之事、任レ例可レ令二下知一給之由被二仰下一候也、仍執達如レ件、

後正月十八日　左中將定親

謹上　伯二位殿

新年祭、任レ例可レ被レ申二沙汰一之狀如レ件、

藏人中務丞殿

新年祭、任レ例可レ被レ致二沙汰一之狀如レ件、

後正月十八日　左中將判

四位大外記殿〇中略

件、御敎書等、各結合、遣二一薦出納職貞許一、令下使人付上レ之、但遣伯之狀、召使宗岡行繼來取レ之、其次又申云、

可被遣南曹辨之御教書、同可下賜者則與之、其狀云、

新年祭□□事、任例可令下知春日社給之由被仰下候也、仍執達如件、

後正月十八日　左中將定親

謹上　右中辨殿

今日頭右中辨盛光朝臣送消息云、

經與朝臣分配公事、可令申沙汰給、仍執達如件、

經與朝臣分配公事、可令申沙汰之由奉了、恐々謹言、

今日仕人持新年祭請文等、但大炊御門大納言幷持經請文未到、具僉上卿消息云、

新年祭御參事、獻御教書候之處、御請文未到、何樣候乎、必可令存知給由重被仰下候也、仍言上如件、

官人賜給

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀

前祭十五日、充忌部八人、鍛工共作木工各二人、令造供神調度、〇中略神祇官忌部官一人監造、〇中略其潔衣料布、人別二丈七尺、官人綿布一端一人白米二升、酒六合、五位一升鮨三兩、五位五兩、加東鰒、煮堅魚各二兩、鹽二勺、五位五勺海藻二兩、但鍛工共作木工者、不賜潔衣及食、〇又見延喜式

〔延喜式一四時祭〕二月祭

新年祭〇中略

右〇中略神祇官人以下鬘料、安藝木綿一斤、中臣宣祝詞料庸布五段、短帖一枚、

戒諸神官

〔類聚國史十神祇〕弘仁八年二月丙申、神祇官言、祈年月次等祭日、諸社祝部等、事須參集祭庭受幣供神、而比年之間、未有參會、仍幣帛一百卅二裹、收諸官庫、無人預付、伏望准寶龜六年格、頒幣之日不參祝部、不論有位無位、一切還本、許之、

〔類聚三代格一〕太政官符

應科上祓新年月次新嘗祭不參五畿内近江等國諸社祝事

右撰格所起請偁、太政官弘仁八年二月六日下諸國符偁、得神祇官解偁、件等祭日諸社祝部等、理須未祭之前、會集官底、各請幣帛、依例供祭、而比年祝部等怠慢不會集、再三教導、習常不愼、遂使幣帛一百卌二裹在〇在一本作收官庫、無人預付、謹案太政官去寶龜六年六月十三日符偁、右大臣宣、頒幣之日祝部不參、自今以後不得更然、若不悛者、宜早解替者、望請不論有位無位、還本永懲將來者、右大臣宣奉詢之禮〇事下恐脫勅字、禮上下有脫字、務在潔誠、闕怠之徒、實須科處、宜委曲所由、據示要路、覺悟愚輩、勿令違失、若猶不愼、解却還本者、今案格旨、依一度怠、永停其任、事渉苛細、理乖適中、伏望先科件祓、令愼將來、若不悛革、即從解却者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔類聚三代格一〕太政官符

應殊加檢察敬禮四箇祭事

右檢案内、二月祈年、六月十二月月次、十一月新嘗祭等者、國家之大事也、欲令歲災不起、時令順度、預此祭神、京畿外國大小通計五百五十八社、因茲特致潔齋、愼令祭祀、而敬惟疎簡、禮非如在、毎至祭日、奸濫雲集、至獻幣帛、老少挐攘、徒有陳設之營、曾無供神之實、禰宜祝部、須向神祇官敬受幣物、虔奉其社、而件等人無致其敬、或雇出身代、不自參進、或雖躬受取、無心奠祭、頑愚之輩、猥瀆神禁、神靈之祟、職此之由、凡祭神之禮、以神主禰宜祝部、爲其齋主、而不勤職掌、疎略神事、非唯神主等之怠、還又齋官不加糺勘之所致也、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、自今以後京内諸社、所帶諸司殊加檢察、畿内外國、當國官長相共監臨、祭禮之日、必致齋敬、若祭事不愼、監察有怠者、官司處之重責、神主禰宜祝部等科祓解職、一如貞觀十年六月廿八日格、曾不寬宥、

寛平五年三月二日

〔園太曆〕延文二年二月十六日、抑祈年祭一昨日勅問、所存今日注進候、兼又文書等寫留返遣也、

新年祭間事、愚意之所存注別紙獻之、可令計披露給之狀如件、

二月十二日　判

祈年祭間事、以二月四日爲式日之條、式文明白也、隨而禁中潔齋廢務、奕代之流例、今更構新儀、不可及朝儀之疑殆歟、於本宮行來之祭奠者、無公家御肅之沙汰乎、二月九日御神事、不載式文歟、加之例幣者九月十一日式日、致齋廢務已爲發遣日、參著日事別無所見、又同十四日本宮雖有神衣祭、公家强無御神事、已下知食之儀旁足令比擬哉、然者依新道之遠近、有行程之延縮者、本宮神事、幣使到著之前後、宜廻商量令計行歟、且如兼豐宿禰注進者、四度祭祀、式日被發遣之後、幣使中途逗留之時、違期日祭納例、自長保至建曆及數度歟、以彼臨時沙汰之准的、被定向後祭祀之規矩之條、可無其難、且不可乖違式心候乎、抑伊勢奉幣事異他、尤被行仗議、且被決官占、可被左右之由雖可言上、於此篇目者、古來軌範、今更不可有改動之新儀歟之旨加短慮者、了簡之闕遞梗概之旨趣者也、此上事可在時宜矣、〇中略

重被尋下條々

祈年祭、以四日官幣發遣可爲本歟、將又九日依有本宮祭被遣幣使歟事、

延喜神祇式云、祈年祭二月四日、祭神三千一百卅二座、又曰、祈年賀茂月次新嘗、前後散齋之日、僧尼及重服、奪情從公之輩不得參入內裏、又云、宮女懷妊者、散齋之前退出、有月事者、祭日之前退下宿廬、不得上殿、神祇令曰、仲春祈年祭、〇中略

九日本宮御祭事不被載之

就之廻短慮之商量、以四日本官發遣之日、被正宗之條、神祇式又令條分明也、然者依官幣有本宮

祭之條勿論歟、加之公家御神事淸書之義、後朱雀院以後月朔日限四日也、其御齋不至于九日者乎、又廢務者二月四日、六月十一日、九月十一日、十二月十一日、各發遣之日候、以本宮御祭之日非廢務之義矣、以非御不審之限候乎、次以發遣之式日可被引上事無先規候之上、以他日被行新年祭者、二月朔日二日、若相當禁裏御忌并支干之凶日者、雖爲正月被行新年祭、以六月十二同之月九月之上旬、可被行月次及神嘗祭神今食等歟、此條迷是非候、殊被病御沙汰可被周備者乎、於日次者陰陽寮之最也、象日雖被決之、又雖決之無左右難定申之故也、路次之新道者、其事輕々之上、被行仗議決御卜之所、如龜兆者帶神明有應之象、又主繁昌太平之支干、事見御卜形是併君之欽信通于宗祀之謂也、次於發遣者、雖被用式日、御路次本宮有障之時、幣使於途中逗留、以他日令祭納例、○中略

元久三年五月四日甲申、被發遣新年穀奉幣、是疱瘡流行事被祈申、又霖雨事被載辭別、

此時幣使依穢、於離宮院五ヶ日逗留云々、

建曆元年二月四日新年祭、依本宮穢延引、有大祓、代始延引元曆吉例也同月廿一日被行新年祭之處、又依神宮穢、幣帛不奉納也、剰不思食此事、又被發遣新年穀奉幣如何、象直宿禰祭豐主父高言上云、去文治元年二月四日新年祭、依本宮穢延引、同月廿六日被行之處、後日本宮言上云自十六日辰時見付猪足之間、次第神事延引、以此例可被准據者、三月八日新年祭幣奉納、其後新年穀幣使參宮也、

此外有例歟、毎度不記置之、

次於四日發遣者雖延引於本宮御祭者九日猶無相違歟事、此條就官幣令祭納之上者、被延引發遣候者、不可有本宮之儀歟之所、祠官等號同國祭執行來候云々、此事長和六年五月有其沙汰、雖止月次神今食、猶有御神事被供忌火御飯之由、左大辨經賴記明白候、加之如江次第者、賀茂祭雖被停止之猶可被行警固、是有國祭之故也云々、此等之次第曆應三年神宮不通達、被止幣使之時、象豊注進之間、其後禁中如舊被召忌火御飯候訖、今度之儀不可依國祭候歟、次式日之發遣猶都

不可事行者、以式日被行新年祭之後、有路次幷本宮障之時、幣使於途中令逗留、以後日令祭納之例分明候上者、若因准此例、以參著日可被行本宮儀候歟、可被決時議之旨、先日言上候處、已式日馳過候上者、於今者勘進之篇目若可猶違候乎、次以後日被行候者、任例可被勘發遣之日時候、於本宮御祭者、代々一切不載日時候歟、至于行程之日數一事者、海道行程之分限、猶被尋究故實之輩、重可有御問答歟、次延引之時者、每度被宣下、被行建禮門大祓之例候、近年者、分配職事若此儀不及申沙汰候歟、可令得此等御意給候、兼豐誠恐謹言、

二月三日　　神祇大副卜部兼豐請文

重注進言上

一新年祭以本官發遣儀爲正實事

神祇式神祇令文先度注進之、所被載之淸潔者、限于發遣之儀（四日新年祭也、但五日者有後齋矣）者也、後齋已後者、被解御神事之間、重輕服月水之輩、幷僧尼參入內裏、若者被修法事矣、新儀式曰、二月四日新年祭廢務、江次第云、二月四日廢務、廢務者、本宮發遣日、被閣万機被請祈之義也、九日本宮御祭事不被載式條、令條又無廢務幷御潔齋之上者、輕重爲其隔歟、重案舊記、文治三年九月十四日被尋下云、今月御神事普通迄十二日（加後齋）也、而齋宮群行之年至十八日、依何事哉不審者、兼貞宿禰（兼豐祖父）言上云、公卿勅使者、依爲宸筆宣命、至于本宮之日有御潔齋也、於齋宮群行幷諸幣使者、進發日若者後齋一日也云々、（自餘略之）承久三年三月廿九日被仰下云、大神宮御祭者、奉幣進發前後齋之外、件祭日事者、公家不被知食事也云々、

一國祭以遲延准據例難被引上事

於新年祭者、被引上之例、往昔以來未勘得之、以新儀若被用他日者、以延引之先蹤可被勘日時之

間、二月朔日二日（以二日可被行之由、忠直朝臣所申請歟）、相當公家御憚支干之凶日者、以正月難被行之趣言上先畢、月次神今食被引上之例日未案得仕矣、而至于神嘗祭（例幣也）者、九月者爲伊勢齋王群行之式月之間、以群行之使被副付十一日例幣事上古在之、所謂寛平三年九月十一日無廢務、去四日例幣被進發之故也、寛仁六年九月八日丁卯、齋宮群行、十一日例幣被付群行使、仍無廢務、天永元年九月十一日例幣被付去八日齋宮（恂子）群行使畢、仍無廢務、天養元年九月十一日例幣、被付去八日齋宮（妍子）群行使、永曆元年九月十一日例幣、被付去八日齋宮（好子）群行使、嘉應二年九月十一日例幣、昨日被付齋宮（惇子二日）群行使云々、爰知齋王者、崇神天皇御宇始而被奉副之、是宗廟嚴重之儀式、朝廷邂逅之神態也、雖爲向後有齋宮群行者、於例幣者可被付副歟、以此因准、云新年祭、云月次神今食、爭可被比量乎、猶巨細被勘定行程之分限、云本官儀、云本宮祭禮、可被專式日歟、將又就繁多之准據、以幣使參著之日、被行本宮御祭歟、可被決群議者乎、

右條々、先日依卒爾之勸進、令相漏之間、重披竹帛、遂枝葉、斯外法皇御代曆應度、重々有勅問事、非今之至要候之間不注進候、可得此御意候、仍言上如件、兼豊誠恐謹言、

二月五日　　神祇大副卜部兼豊上

進上　人々御中

〇中略

新年祭間事、就兼豊宿禰、忠直朝臣注進等被通了、以二月四日爲式日、有禁中潔齋廢務者、奕代流例不可及朝儀之疑殆歟、以新儀輙難被引上乎、就中如風聞者、以二日被行新年祭、以三日可進發之由忠直朝臣申請云々、非式日者、上卿先於陣可勘日時、爭暗可定申乎、依日次者、四度幣使一向可被背式條歟、此條不辨可否、又被尋九日者、數日路次逗留之煩如何、事與情不可周備矣、齋王群行之時、被副付九月例幣事、不足今度之義歟、於九日本宮祭奠之義者不載式文、非公家清事廢務、加之以式日被行本官儀之後、有路次之障、以他日令祭納之例、自長保至于建曆及數度之上者、准

的彼例、以幣使參著之日、可有本宮儀之由、兼豐宿禰所申無相違者歟、且神祇式云、新年幣帛者、朝使到日、大神宮司引使者、先參度會宮云々、匪啻因准之例、相協式條之上者、爭可勞新儀乎、次忠直朝臣所申請者、依爲新道可被延路次之日數議也、此條古來本道之時、路次爲五ヶ日之處、公卿勅使以下忌事之時、寄二宿以三ヶ日令參著之例多存之、新道行程之分限、先可被尋究故實之輩歟、不限此祭、可爲月次神嘗祭之傍例之故也、此上事宜在時宜矣、

敦光朝臣

〔本朝續文粹二勘文〕變異疾疫飢饉盜賊等事

一去年風水有難今年春夏飢饉事○中略

右王者八政、食爲其先、古人有言曰、寒者不貪尺玉而思短褐、饑者不願千金而羨一食、自非兼年之食、何免荒饑之愁、夫衰弊之漸、其來區分、一者依廟社不祀也、而二月祈年祭、六月十二月月次祭神今食、九月神嘗祭、十一月新嘗會者、朝之重事也、其祭纔存、其禮漸薄、就中天皇神今食幸中和院、神嘗祭幸大極殿、威儀棣々、自感神心、昔告朔餼羊、仲尼愛禮、以小喩大、何失恒規、事々任式、可被行之、諸國所在大小神社、雖有破壞、雖加修理、雖有顚倒、無復基趾、國宰不參祭祀之場、社司無致修治之事、况非家譜之輩、知社務之人、誰能竭謹愼之誠乎、誰能懃齋肅之禮乎、○中略

以前參箇條、據史籍課愚管、勘申如件、

保延元年七月廿七日　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

〔鹽尻初編五〕祈年の祭は周禮に出で、詩の雲漢にも祈年孔夙といふ、祈年は孟春に穀をあまつ神に祈り給ふ事也、されば正月ぞあるべきに、我國祈年は二月に行はれけるは故をしらず、古は神祇官より國々まで行はれて、いとめでたく、國の大事とこそ古き文にも見えける、いつの時よりか絕えて、其名をだに知る人なし、熱田の社なんぞにかたのごとく行はれ侍りけれど、官幣もくだらず、私のやうに見え侍る、

古事類苑

神祇部二十五

祈年穀奉幣

古事類苑

神祇部二十五

新年穀奉幣

祈年穀ハ、其義祈年ト全ク同ジ、唯其名ヲ變ジテ以テ之ヲ別ツニ過ギズ、亦年穀ノ豐稔ヲ祈ルナリ、而シテ祈年祭ハ神名帳ニ載セタル諸神ヲ盡ク祭ルナレドモ、是ハ大神宮及ビ近京有名ノ諸社ニ奉幣スルナリ、祭神ハ其始一定セズシテ、村上天皇天德三年七月ニハ、伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、石上、大和、廣瀨、龍田、住吉、丹生、貴布禰ノ十六社ニ奉幣アリ、一條天皇正曆二年八月ノ奉幣ニハ、吉田、廣田、北野、梅宮ヲ加ヘテ二十社トシ、同長保二年二月ノ奉幣ニハ、祇園ヲ加ヘテ二十一社トシ、同寬弘六年二月ニハ、更ニ日吉ヲ加ヘテ、二十二社ニ奉幣セラレタリ、サレド其後日吉社ハ時ニヨリテ或ハ除クコトモアリシガ、白河天皇ノ永保元年ヨリ、永世二十二社ノ列ニ加ヘ、祈年穀ニハ必ズ二十二社ニ奉幣スルコトトナレリ、祭日ハ定ラズ、吉日ヲ擇ビテ行フヲ例トス、祭月ハ大凡毎年二月七月ノ兩度ト定メタレドモ、或ハ然ラザルコトアリ、蓋シ此祭ノ恒例トナリシハ、一條天皇以後ニシテ、古ハ全ク臨時ナリシカバ、後世ニ至リテモ必ズシモ二月七月ニ限ラザリシハ、自ラ此風ノ存セルナルベシ、加之、觸穢及ビ用途ノ不足等ニ由リテ延引スル事多ク、甚シキハ春時ノ奉幣ニシテ七月ニ行ハレシ事アリ、秋時ノ奉幣ノ十二月ニ延引セシ事モアリ、一條天皇ノ長保三年、後花園天皇ノ文安元年ノ如キハ此例ナリ、

奉幣使ヲ發遣スルニハ、豫日先ヅ奉幣定アリ、上卿以下陣ニ就キ、日時ノ勘文、幣使ノ差文、及ビ宣命ノ事等ヲ議定シテ奏聞ス、後世ハ多ク當日ニ行ヒタリ、祭日ニハ八省院ヲ裝飾シ、內侍以下女官來テ幣帛ヲ裹ミ、上卿以下各〻入リテ其座ニ就キ、伊勢使以下諸社ノ幣使ヲ召シテ、順次宣命ヲ授ケテ、(宣命ノ用紙、伊勢ハ縹紙、賀茂ハ紅紙、其他ハ黄紙ナリ、)各〻其社ニ發向セシムルナリ、伊勢使ヲ發遣シタル後、天皇紫宸殿ニ於テ御拜ノ儀アリ、御物忌ノ時ハ、石灰壇ニテ行ハル、又天皇八省院ニ行幸ノ時ハ、伊勢使ノ發遣ヲ待チ給ヒテ後ニ還御アリ、而シテ伊勢ノ幣使ハ、特ニ諸王一人ヲト定シ、中臣忌部ヲシテ之ニ從ハシメ、其他賀茂、松尾、平野ハ各〻參議及ビ五位、石清水、稻荷ハ各〻四位、丹生、貴布禰ハ各〻神祇官ノ六位、自餘ハ各〻五位ヲ任ズ、但シ石清水ハ源氏、春日、吉田ハ藤原氏、梅宮ハ橘氏、北野ハ菅原氏ヲ選定スル例ナリ、然ルニ此等ノ幣使、後世ハ一人ニシテ數社ヲ兼ヌルノミナラズ、多クハ疾病事故ヲ稱シテ、發遣ヲ辭セシカバ、祭事ヲ廢闕スルヲ以テ、屢〻譴責ヲ加フレドモ、多年ノ因襲改ムルニ由ナク、又幣料ノ如キモ、諸國ニ課シテ調進セシムル例アリシガ、後世ニ至リテハ、每ニ督促スレドモ、多クハ徵收ニ應ゼズ、或ハ前夜督責シテ、當日僅ニ辨濟セシメタルコトアリ、或ハ當日刻限ニ臨ミテ幣物猶具セザリシカバ、已ムコトヲ得ズ、他ノ用途ヲ借リテ僅ニ補充シタルコトアリ、此等ノ流弊モ恬トシテ異マザルニ至レリ、

抑〻此祭ノ初見ハ、天武天皇ノ四年ナリトノ說アレドモ、其明文ノ史上ニ見エタルハ、醍醐天皇ノ延喜二年ニシテ、其恒例ノ如クナリシハ、又降リテ一條天皇以後ナリトス、且其祭式ノ如キモ、儀式等ノ古書ニ載セズシテ、江家次第ニ始メテ詳ナルヲ見レバ、此祭ノ後世ニ至リテ盛ナリシコト自ラ明ナリ、然レドモ前ニ述ベタル如ク、幣使ノ懈怠幣料ノ不足等ニヨリテ、後漸ク衰頽ニ趨キ、後花園天皇ノ文安年中ニハ暫ク絕エタリシガ、武家ノ執奏ニ由リ、再

ビ行ハル丶コトトナレリ、サレド久シカラズシテ爭亂ノ世トナリ、朝威衰ヘシカバ、祈年祭ト等シク遂ニ全ク廢絶セリ、

〔塵添壒囊抄七〕祈年穀奉幣事

是ハ廿一社ニ御幣ヲ奉テ、年穀ノ田苅事ヲ祈リ申ル丶事也トナン、

〔年中行事大概〕祈年穀奉幣〇中略

神祇官にして、廿二社へ官幣をたてまつりて、これも豊年をもとむるよしなり、

〔年中行事歌合〕祈年穀奉幣七月廿九日　　大藏卿〇坊城長綱

祈してたのもしげなるはつ稲や神のめぐみの秋をなすらん

廿二社に御幣を奉て、年穀の豊ならん事を祈申さる丶也、

〔おもひのま丶の日記〕二月にもなりぬ〇中略きねんのまつり、きねんこくの奉幣など、しきのまにおこなはる、みな大臣上卿にてぞありし〇中略七月にもなりぬ〇中略新年こくの奉幣仁王會など春にかはらず、

〔樵談治要〕神をうやまふべき事

此月〇二月に祈年穀の奉幣といふことあり、これは廿二社に別して幣使をたてられて、旱水風損のうれへなく、五穀不熟なからん事をいのり奉る祭なり、五穀は人民のいのちなり、たれの人か是をかろくせむや、

〔日本紀略一醍醐〕延喜二年四月十三日、祈年穀奉幣、

〔師光年中行事二月〕祈年穀奉幣事

天武天皇四年正月戊辰幣諸社、

〔公事根源二月〕祈年穀奉幣

祭許

天武天皇四年正月、諸社に幣を奉る、天慶六年五月、年穀を祈らんがため、十一社に奉幣有とみえたり、

○按ズルニ、師光年中行事、公事根源等ニ、天武天皇ノ四年ヲ以テ祈年穀奉幣ノ始トシタルハ、日本書紀ニ天武天皇四年正月戊辰祭幣諸社トアルニ據レルナレドモ信ジ難シ、又續日本後紀承和九年二月己巳ノ條ニ、遣使奉幣伊勢大神宮及諸社、祈年也トアルヲ、類聚國史ニハ祈禱部ニ收メタレド、大日本史神祇志ニハ祈年祭條ニ收メタリ、己巳ハ四日ニテ祈年祭日ニ相當スレバ大日本史ノ説從フベキニ似タリ、然レドモ祈年祭ノ奉幣ニハ使ヲ諸社ニ遣ハスコトナケレバ、是レ或ハ祈年穀奉幣ナランモ未ダ知ルベカラズ、姑ラク錄シテ疑ヲ存ス、而シテ史上ニ此祭ノ明文ノ見エタルハ、醍醐天皇ノ延喜二年ヲ始トス、

〔新儀式臨時四〕祈年穀事

若有可祈年穀、上卿奉仰、先以陰陽寮勘吉日文幷十六社（或減社員增不定也）使差文、

〔日本紀略村上四〕天德三年七月十日癸丑、祈年穀奉幣十六社、

〔日本紀略一條九〕正曆二年八月十八日甲申、依祈年穀奉幣廿一社、被加祈可止霖雨之由、

〔日本紀略一條十〕長保二年二月廿七日乙亥、奉幣廿一社、祈年穀也、

〔日本紀略一條十一〕寬弘六年二月十四日庚子、祈年穀奉幣廿二社、

〔朝野群載內記十二〕廿二社奉幣次第

伊勢　石淸水　賀茂上下　松尾　平野　稻荷

春日　大原野　大神　石上　大和　廣瀨

龍田　住吉　日吉　梅宮　吉田　廣田

祇園　北野　丹生　貴布禰

祭月及日時

○按ズルニ、十六社、二十二社等ノ事ハ、社格篇ニ其條アレバ參看スベシ、

〔公事根源二月〕新年穀奉幣

是は二月七月二たびあり、よき日して奉らる、

〔神祇官年中行事二月〕新年穀奉幣、(中旬之間)廿二社幣物事、以本官請奏、

〔雲圖抄〕二月(或三月)新年穀奉幣御拜座(○下略)

〔柱史抄上二月〕新年穀奉幣(擇吉日被行之、或及三月、七月同前、○中略)

〔柱史抄上七月〕新年穀奉幣(同春、或及八月、)

〔貞信公記〕延喜十二年十二月十一日、行幸中院、今日新年穀幣奉伊勢、 十八年七月十二日癸未、行幸八省、爲奉幣伊勢、是新年穀云々、

延長四年九月十九日、新年穀幣使、 廿六日庚辰、行幸八省院、有新年穀使事、

承平二年八月廿三日、新年穀御幣使立、

〔日本紀略四村上〕應和三年六月九日己丑、奉幣伊勢大神宮以下十六社、依新年穀也、但伊勢幣帛可付來十一日使、仍今日諸司廢務、抑月次以前奉幣之例、延長七年六月七日、天慶六年六月五日也、

〔日本紀略九一條〕永祚元年二月廿六日丁丑、奉幣諸社、爲新年穀也、

正暦二年五月十日戊申、奉幣新年穀、 八月十八日甲申、依新年穀奉幣廿社、

〔日本紀略十一條〕長德三年七月十九日辛巳、新年穀奉幣、天皇行幸八省院、

長保三年閏十二月十三日庚辰、奉幣新年穀、 四年三月廿五日辛酉、新年穀奉幣使、

〔日本紀略十二三條〕長和元年三月九日丙子、新年穀奉幣廿一社、 八月八日癸卯、新年穀廿一社、 二年五月十七日丁未、新年穀奉幣廿一社、 八月廿九日戊子、新年穀奉幣廿二社、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁二年二月廿日甲申、奉幣廿一社、依新年穀也、辭別三合天朔、 閏四月十六日

戊申、奉幣廿一社新年穀、

〔日本紀略後一條十四〕長元四年二月五日壬午、新年穀奉幣定、十一日戊子、新年穀廿一社、八月十七日壬辰、於神祇官發遣新年穀廿一社奉幣使、五年五月七日丁丑、新年穀奉幣廿一社、八月三日壬寅、新年穀奉幣諸社定、九日戊申、奉遣諸社使、依新年穀也、

〔日本紀略後一條十四〕長元七年二月九日庚子、奉幣廿一社、依新年穀也、辭別天變也、六月十五日癸卯、奉幣廿一社新年穀、七月廿一日戊申、奉幣廿一社、依新年穀也、

○按ズルニ、一年三度ノ奉幣ハ異例ナリ、

〔日本紀略後一條十四〕長元八年二月十五日庚午、奉幣廿二社新年穀、六月三日乙卯、奉幣廿一社、依新年穀也、天皇行幸八省院、

〔經信卿記〕寛治二年十月十九日辛卯、有新年穀奉幣云々、

〔吉記〕壽永元年八月廿八日丙寅、今日新年穀奉幣定也、九月二日庚午、今日新年穀奉幣也、

〔塵添壒囊抄七〕新年穀奉幣事

新年穀奉幣事、七月也、撰吉日、故サレバ、日不定也、

〔師光年中行事二月〕撰吉日事

新年穀奉幣事〔慶賀、前十許日、上卿奉仰、定申日時使者、〕

〔年中行事抄二月〕擇吉日事

新年穀奉幣事、〔慶賀式三日〕前十許日、定日時使等、

〔建武年中行事〕二月、〇中略新年穀奉幣、この月よき日して奉らる、〇中略七月新年穀奉幣、日ついでをえらぶ二月におなじ、

〔法成寺攝政記〕寛弘四年二月九日丙子、參内著陣、定新年穀御幣使奏聞、日時十七日、事了退出、

〔左經記〕寬仁元年七月一日丁酉、有召參攝政殿、〔藤原賴通〕○中略、以七日可立新年穀奉幣使等、此由明日向源大納言許可仰者、○中略 蒙仰歸宅、 三日己亥、午刻許參攝政殿、○中略 申云、七日造宮檜皮可葺始日也、而彼日可被立新年穀幣使、仍廢務、然者何有他公事哉者、被仰云、尤可然事也、早仰上卿、以他日可令行奉幣事者、卽令官掌問吉平朝臣許、勘申云、十一日者、

〔中右記〕大治五年二月五日戊寅、頭中將送書云、新年穀奉幣日時、今日可定申、○中略 申時參內、著仗座、召官人令敷膝突、召辨、權辨顯賴朝臣來、仰云、新年穀奉幣日時可令勘申、則持來勘文、披見之處、來十八日、時申、暫置座前、〔陰陽寮上官等內々催儲也〕

〔台記〕久安三年七月廿八日庚寅、未刻參內、定秋氣新年穀奉幣事、參議敎長卿書定文、仰左少辨光賴令行幣物事、勘申八月十七日、二十一日、仰相計可仰、余定仰云、十七日事了、 八月十七日戊申、午一刻參內、依新年穀奉幣也、

〔玉海〕嘉應二年二月五日丙戌、午時許左頭中將賴定朝臣來云、可奉行新年穀奉幣事、左府被申障也、日次事內々相尋之處、十五六日之由令勘申、攝政仰云、十五日可宜者、 六日丁亥、奉幣定日次事內內尋遣在憲朝臣之許之處、注申云、今月九日〔庚寅〕十二日〔癸巳〕十四日〔乙未〕等也云々、則在憲來申云、奉幣日次十五六日之由令注申了、而件日常樂會日也如何、余云、强不可憚歟、先例如何、申云、禁中神事、他所佛事、更無憚、然而十八日、隨二月十五日釋迦如來涅槃日也、同十八日如何之由雖令申、又不可憚歟云々、申旨無所據歟、但有所存者、付本奉行ノ職事可申歟之由答了、 八日己丑、巳刻許、依昨日告賴業眞人來、○中略 余又云、奉幣日次事、陰陽寮勘申十五六日之由、十五日可宜之由有攝政御命云々、仍存其旨之間、在憲朝臣來示云、奈良常樂會日也、隨釋迦如來涅槃日也、若可被改歟、十八日無障云々、此事不存可憚之由、如何、賴業申云、內裏神事、他所佛事、更不憚、何況於被付寺家哉、勿論云々、 十五日丙申、此日新年穀奉幣也、

齋戒

〔三長記〕建永元年七月廿九日戊申、參殿下、以季宗申條々、祈年穀奉幣日時事、(來月七日)仰曰、可奏此由、
八月五日甲寅、未刻許參內、(中略)予宿侍、日時勘文史送之、

陰陽寮

擇申可被奉遣祈年穀御幣使於諸社日時

今月七日丙辰　時午二點

建永元年八月五日

權漏刻博士兼伯耆介　菅野朝臣季長

大膳權大夫兼天文博士安倍朝臣資元

助　賀茂朝臣宣平

〔公名公記〕永享八年二月十二日、今日祈年穀奉幣發遣日也、(春秋兩度發遣、其式月二七兩月也、而秋分遇代始八月也、又無定日、撰吉日所被行也、)

〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、(中略)職事已下上卿折紙寫之見左、(中略)

陰陽寮

擇申可被奉遣祈年穀御幣使諸社日時

今月廿二日己亥　時巳二點若午

文安元年七月廿二日

頭兼天文博士安倍朝臣有季

〔江家次第〕(五二月)祈年穀奉幣

依有伊勢幣、散齋二日、(前後兩日、有六種忌、)致齋一日、(當日也、唯祭事外、不行他事、)當日朝夕御膳不警蹕、內豎不音奏、瀧口不名謁、難當宇佐使間御精進、供於魚味、

〔禁秘御抄上〕神事次第

二季祈年穀奉幣(前後齋、雖爲廿二社、供魚味、)

〔建武年中行事〕祈年穀奉幣、この月〇二月よき日して奉らる、〇中略これも前後齋也、

〔中右記〕寛治八年七月廿日己未、有祈年穀奉幣、〇中略行事辨三ヶ日潔齋、當日早旦解除、但被勸日時後、不逢僧尼重輕服者也、

康和四年二月廿四日己酉、今日祈年穀奉幣也、〇中略祈年穀奉幣朝家大事也、仍諸司廢務、而今日太上天皇〇白河有御幸條、世人不甘心歟、

長承二年七月廿五日戊寅、夜前可定申祈年穀奉幣使之由有催、〇中略從今夜尤居席ニ出居也、與尼不可同宿之故也、又不淨輩不可入來由立札歟、　八月二日甲申、此日祈年穀奉幣也、

〔台記〕久安三年七月廿八日庚寅、未刻參內、定秋氣祈年穀奉幣事、〇中略年來承可爲奉幣上卿之仰、後散齋、近例如此、京極殿又如此、見治曆二年四月七日御曆、而勸御堂御記、寛弘四年二月九日、定祈年穀御幣使、御堂十五日召宜義朝臣、仰可作奉幣宣命之由、祈年穀入夜渡堂、集讀經僧等修懺法、十七日、奉幣諸社、著八省院、御堂愛知奉幣前一日之外無散齋、仍自今以後不可散齋、家中僧尼重服人來臨、參入堂舍、又不可憚者也、不用御曆、既用御堂御記、合延喜式意之故也、且又余好復古禮之故也、行事辨光頼申云、承可行八月十一日一院御堂供養請僧事之仰、兼行幣物事可有憚歟、仰云、近代憚如此、勸舊前一日之外無齋、因之余前一日之外可從佛事、被供養日可參入也、然者辨又兼行更不可憚者、辨諾、　八月十七日戊申、今日有月事之女在局、又不犯女自餘同昨日、午一刻參內、依祈年穀奉幣也、〇中略則立使了歸宅、此後僧尼重服輩來臨、行佛事更無憚、伊勢幣上卿有後齋否勸例、長和二年八月廿五日定臨時奉幣使、上卿御堂廿九日臨時奉幣、著八省行之、上卿御堂三十日如例供養經、以定基內供令申上、其次如常、有管絃事、已上御堂御記愛知上卿無後齋、

〔玉海〕嘉應二年二月五日丙戌、午時許左頭中將頼定朝臣來云、可奉行祈年穀奉幣事、〇中略日次事內內相尋之處、十五六日之由令勘申、攝政仰云、十五日可宜者、〇中略自今日立神事簡了、自今日忌僧尼重輕服人幷月水女等也、別屋月水女等居住强不忌之、自前日可出之、　十四日乙未、自今日殊以潔

齋、十五日丙申、此日祈年穀奉幣也、

承安三年七月十七日戊申、頭辨長方朝臣來、余相逢長方、仰云、祈年穀奉幣可有御奉行、申承了由、但聊有憚事、（依有姙者也）件條先例必申此旨、或被免、或不被免不定、夜間引檢、若被憚者、明旦可申其旨、彼時可被奏、其上於有別仰不可及沙汰之由相含了、（中略）祈年穀奉行辨兼光來、來廿五日云々、暫退出了、姙者之夫、神事奉行憚哉否、引檢先例不定、示合源納言許之處、返事云、尤可被奏事由、先例不定候、抑七ヶ月以後ハ准當月可申憚之由、是七八九等月數有誕生之例、仍必可申其旨之由、故人申置云々、所示之旨可然、余又本自不聞置、

〔吉記〕壽永元年八月廿九日丁卯、昨日祈年穀奉幣定了云々、（中略）依御記者、定以後被從神事了、然而被載定文哉否、不審未決、尋申堀河納言、返報云、神事ハ定以後、潔齋ハ當日許也、口口佛事可依人心、口者、伊勢有前齋、自餘當日許也、其理可然云々、爲專神事也、後日可決、不審、

〔三長記〕建仁元年八月十日丁亥、今日行水立神事札、明後日祈年穀奉幣奉行之故也、前三箇日潔齋之由、見都護殿御記、

〔猪熊關白記〕承元元年二月廿三日癸亥、此日祈年穀奉幣也、（中略）自昨日至明日、潔齋如例、

〔岡屋關白記〕建長三年八月廿七日乙卯、明日祈年穀奉幣也、依爲前齋、不聽聞佛事、

〔吉續記〕文永八年二月廿五日、自今日殊始神事、依祈年穀奉幣奉行也、女房有輕服事之間、下棟各別所、（此事家尋承文宿禰、依被訓讀也、）　廿七日辛酉、祈年穀奉幣也、

〔薩戒記〕永享五年二月廿七日辛亥、自今夜始神事、明日祈年穀奉幣、可勤春日使之故也、自昨日可始歟、然於進發者可爲明後日、仍今日所始也、

〔公名公記〕永享八年二月十日、明後日祈年穀奉幣、予奉行事、兼日頭左中將隆遠朝臣觸仰之、（中略）仍今日出請文、（中略）其後始潔齋、先沐浴洗髮、此間渡佛經於他屋、（禪閤御方庇有木屋等、然而別儀之間不憚之、）服者月障輩令

出之、立神事札也、(自今日至明後日、三箇日齋也、此儀併守中山内府壽永三年記了、家例無所見、上先賢之所爲、可爲規模也、近日諸人存省略歟、神道匠測、猶可存敬信事也、)

〔康富記〕應永廿七年八月廿五日辛酉、祈年穀奉幣、傳奏廣橋大納言兼宣卿、奉行藏人權右中辨俊國、

傳奏者輕服也、伊勢幣傳奏輕服之例、先例不審也、可引勘之、○中略

一伊勢幣傳奏輕服之人申沙汰、頗不得其意、不審之由、去廿三日予參淨居庵之處、常宗被語仰了、尤有其謂、於伊勢幣者、前後齋致齋也、公方御沙汰、又其人　狀、共以如何乎如何乎、今度祈年穀奉幣、傳奏兼宣卿輕服也云々、

〔江家次第五 二月〕祈年穀奉幣

上卿參議著陣、上卿奉仰著外座、令置膝突、

仰外記、令進例文硯、(例文硯例文筥置上卿前、硯筥置參議前、)

二人奉之如恒、其筥入年年定文諸大夫歷名、又小書一枚、(今日可奉仕之使也、)硯筥加入續紙、

上卿仰參議令書、(大辨)

(上卿略見例文了、取笏目執筆參議、參議進著座上、次搢取笏候、上卿示氣色、參議搢笏、卷返續紙、副笏候氣色、上卿目許、參議置笏染筆、上卿披例文、讀揚社號、其詞諸社奉幣使、參議書了、又讀云、伊勢、如此至貴布禰、參議書社號了、上卿見使交名、次第示之、其詞可書定讀之、官姓名朝臣也、雖公卿如此、自石清水至北野、次第示之、令參議次第書之、伊勢使井丹生貴布禰不入之、其奥注年月日、參議書了、副笏進寄上卿前、上卿置笏取之、參議復座、)

若無大辨者、他參議、若又無者令辨書之、

又仰辨令進日時勘文、

　辨仰陰陽寮令勘申進之

參議書畢奉上卿、○中略

次上卿撤例文等、入日時定文於筥、

次令藏人若殿上辨奏之、(作居座奏之)

次返給、上卿下外記、(上卿、中家結申、清家不結之、即詞如職事、其次仰云、伊勢弁生貴布禰使、仰神祇官令差進、)行事弁、若今夜奏神祇官勘文者、即令弁奏之、仰奉分年料相分依請、(神祇官勘文神祇官請奏、付弁奏聞、返給、上卿結申、下同弁)

(結申之、此外又職事下伊勢幣料請奏、上卿結申、職事仰詞、上卿微唯登文、次召行事弁下之、上卿仰曰、宜旨タタヘ、〇中略)

前一日、上卿参陣奏宣命草、(草注年號月不入日)并就御所奏之如恒、返給後仰可清書由於内記、(執柄人在里第、先内覧、或付大臣以行事弁、納言以外記令内覧、可尋、)又以卜串外記入宮覧、(以不合卜串、横置宮下方、或外記留不合、)上卿返給、仰外記令開之、外記覧之、即仰其王可令奉仕使由、(若在乙丁合丙合者、可用乙丁合、或作置乙合、有遺丙合者之例、上卿會釋被行歟、)若無可奉仕使之王者、上卿奏事由、忽以六位王令叙爵非無其例、大臣或於里第令開卜串、(大臣布袴云々、若有家中知尼之人者、大臣乗車出於門外開之、其車頗向巽、外記自車前方進之、)

〔柱史抄 上 二月〕新年穀奉幣

兼日上卿著仗座、仰弁召陰陽寮令勘日時、召外記令進硯續紙、令進諸社使定文、召大内記仰宣命趣、大内記參試奉之退出、

内記不參之時、後日上卿或召内記、於里亭仰之、若有辭別者、或以職事書狀賜之、或以詞仰之、

前一日、有草奏事、(近代或用當日)上卿著陣、召大内記令進宣命草、(諸社一通書之、但有辭別之時及數通、)内覽奏聞如恒、又開卜串、仰其王可令奉仕使之由、

〔建武年中行事〕新年穀奉幣、この月(〇二月)よき日して奉らる、廿二社なり、上卿陣のざにて使をさだむ、(兼日にあるべけれど、つれは當日也、)奉行藏人かねて催しのふ、(〇中略)定文は參議是をかく、上卿奏聞して返し下す、大内記宣命の案を上卿に付て奏す、御覽じて返給ふ、廿二社の宣命を書て、はこのふたに入て奏す、伊勢ははなだのかみ、賀茂は紅梅、その外みなきなる紙なり、一々に御覽じて返し給ふ、神祇官の請奏下使の王御馬申よし奏して、上卿神祇官に參て使々にあかち給、

〔中右記〕嘉保三年二月十三日、入夜中宮大夫(〇源師忠)被參仗座、召予令勘申新年穀奉幣日時、出陣令陰

陽寮勘、來廿六日取勘文、奉上卿、召外記、令奉例文、令左大辨書定文、入定文幷勘文於筥、令予奏、先參殿下○藤原師通二條殿、付説長令內覽、其次神祇官請奏同內覽、先例中上也新藏人雅職、同內覽伊勢幣料、同車歸參御前奏聞、則出陣下、申上卿、幣料等下給、予則下行事史俊忠日時勘文、使定文被下外記、上卿退出、

大治五年二月五日戊寅、頭中將送書云、新年穀奉幣日時、今日可定申、○中略申時參內著仗座、召官人令敷膝突、召辨、權辨顯賴朝臣來、仰云、新年穀奉幣日時可令勘申、則持來勘文、○中略召外記、令進例文、入筥持來、使宰相以下交名別入也參議左大辨象在座、召硯、外記持硯筥置參議座、續紙入之、此筥也予例文與今度使々交名見合、廿二社次第令書了、左大辨持來定文、予一々見了、暫取例文等、入日時勘文幷使々定文、召權辨仰云、內覽幷奏、○中略則御覽了返給、予取定文結申、辨氣色、則起座召外記返入例文、給外記之次、仰云、伊世使等可催、又使王可令申、二社使仰神祇官可令著進、外記定信取筥稱唯、歸入之次取重硯筥退歸了、行事辨覽神祇官請奏、廿二社幣料也可內覽奏聞由示之、返給則奏了返給、予結申則下、同辨結申、辨歸了、伊勢幣料藏人今日不下、　十四日丁亥、奉幣行事外記紀有定來、申使々散用遲申上由、勘發之處、上﨟外記定信本奉行之人也、六ヶ日取籠定文不渡之間懈怠者也、太奇恠也、仍爲問子細召遣定信了、　十五日、外記定信來、奉幣使事勘發申旨甚非理也、太奇恠歟、邦忠事以件外記申內大臣之處、早可令勤由返答、可催之旨仰含了、

〔兵範記〕仁安三年七月十七日丙子、巳刻參內、行水解除午刻權大納言公保卿、參議家通朝臣、參著左仗、次召辨、下官參軾、○中略被仰可令勘申新年穀奉幣日時由、召大內記光範被仰宣命事、下官退去、於床子座仰右少史中原季能、季能於腋陣召勘文於在憲朝臣持來、下官獻上卿、退去、次上卿召外記筥入之、次召下官被內覽、下官參殿下、高倉內覽了返奉、上卿又申神祇官申請諸社幣料請文、上卿見了被加下日時勘文、下官先結申請文、其詞云、神祇官請申幣料、上宣宣旨宜へ、次退著床子下、史仰詞同上、此間上卿召例文硯等、被定使等、六角宰相執筆、次令外記被內覽、令藏人大進奏聞之、次大進下申伊勢幣料內藏寮請

奏、次召下官下幣料請奏、結申退出、於床子又下史了、次召外記下給使定文、又被開伊勢使卜串、大内記覽宣命草、上卿令藏人大進奏、即返給令清書、攝政殿依御服日數不内覽、是年々例也、（寬治元年七月廿一日社奉幣、康治元年六月十一日伊勢幣、久安二年八月十九日廿一社奉幣、各依御服日數不内覽宣命草幷清書之由、外記論申也、）此間下官逐電參入省、入自嘉喜門著座、

〔玉海〕嘉應二年二月十二日癸巳、此日新年穀奉幣定也、申時許著束帶、（直衣如例、〇中略）參内、（于時御閑院、）入自左衛門陣著左仗奥座、則家通卿著横切座、次余移著外座、以扇直履之後、以官人令置軾、此次仰可召左少辨之由、（行事辨也、）即經房來就膝突、余仰云、新年穀奉幣日時勘申セ、經房微音稱唯、退持參日時勘文、（不入宮、）余置笏於奥、取文置前、披禮紙取勘文見了、如本卷之置前、經房退之後取笏、以官人召外記、則頼業眞人參進、余仰云、奉幣ノ例文持參（礼）、頼業稱唯退、次六位外記持例文筥、趨來置余前、（其筥入五位已上歷名一卷、年年定文一卷紀上、又今度可奉仕之使交名二通、公卿一通、四位五位折紙一枚、）是其社其人著定之所注也云々、又一人持硯筥置參議座前、余略見例文交名等了、取笏目家通、家通退下、更昇著參議座上頭、搢正笏而候、余示氣色、家通置（入禮紙）笏取續紙、撤禮紙卷之入硯筥下方、卷返續紙横置座前、搢墨染筆置筆臺、取副續紙於笏候于氣色、余目之、參議置笏染筆、余讀揚之、（先讀揚云、諸社奉幣ノ使、參議書了、讀上之次伊勢、次石清水、次第先令書社、且可入使之由歟、是近代之例歟、但故殿令勸奉幣上卿給之時、先書社、其後入使、仍隨被例也、）次余披見、今度使交名讀揚之、（可書之定二讀之、官姓朝臣名也、雖公卿如此、自石清水至北野次第示之、伊勢丹生貴布禰等雖注社號不入、依爲神祇官之沙汰也、）參議入使等了、注年月日、押遣硯於奥、取副定文於笏進余前、（經緯座也、）余置笏取、參議復座之後披見之、（先撤禮紙、）如本卷之取出例文等、置筥奥方、加入日時定文於件筥、取笏以官人召辨、即經房來、余置笏押遣筥、仰云、内覽、經房取筥退、頃之持歸置余前、則示可奏之由給之、經房參進、少時返給之、余先結●申日時、經房仰云、依勸申レ、余微音稱唯、卷文入筥口結申定文、經房仰云、依定申レ、余卷文入筥如初、經房退去、次加入例文於件筥、取笏以官人召外記、則頼業參進、余押出、頼業搢笏取之、余目之、即唯退、〇中略次行事辨覽神祇官請奏、余取之披見、誤欲結申、忽覺悟卷之、即付辨奏之、返給結申如恒、經房仰

云、宣旨ノタウヘ、余微唯卷文返下辨、辨又結申、余仰仰詞、（如職事）經房稱唯退了、次藏人下內藏寮請奏、余結申、藏人仰詞不聞、大略有氣色、余微唯卷文置前、（藏人不待稱唯退歸了）次召行事辨下之、辨結申、余仰詞如初、辨唯退去、次召外記、則賴業來軾、余仰云、伊勢、丹生、貴布禰等使、仰神祇官可令差進者、賴業稱唯退了、（須下定文等之次仰此事上也、而思失不仰之、仍更召仰之、頗似有事煩、但如此事更无定法、是不及失儀也、）次以官人傳仰內記可參之由、則內記參進、（于時臨乘燭之期、座中猶以暗然、）余仰可草新年穀奉幣宣命之由、內記退了、後起座欲參御所之間、經房於陣腋之邊示云、今日日時定文等內覽事、今朝參攝政殿（○藤原基房）之次、不可持參之由有其仰云云、余參御前、攝政被參、良久談話、及子終退出、抑今日大內記不出仕、尤奇恠、宣命事、大內記不參之時、仰文章生內記共不候者、仰儒者辨是恒例也、而仰非文章生內記頗失也、但大內記遂可出仕、依所勞今日許不參也、強雖非巨難、爲後記之、　十五日丙申、此日新年穀奉幣也、

〔吉記〕承安四年八月十八日壬申、今日新年穀奉幣也、（○中略）當日被勸日時定使等、

〔玉海〕承安五年二月七日己未、此日新年穀奉幣定也、申刻著束帶參內著仗座、（先奧次端、于時御于閑院、）使官人置軾之次、仰可召權辨之由、經房來軾、仰新年穀奉幣日時可令勸申由、卽持來、見了置前、次召外記（大外記賴業參上）問執筆宰相參否、申云、賴定卿只今參由所申也、仍遣召使了云々、且仰例文硯等可進由、其後良久不進、仍以官人令催促、小時六位外記、持參例文筥置余前、目外記退、其後取硯置宰相座、（二人可雖也、一身兼役、尤見苦事也、）余披見例文之處、今度可勸仕之者折紙、大原野、吉田等使同名同姓也、依不審召賴業問之、申書誤由、仍竊給折紙、賴業取之副笏退下、摩改大原野使持參、余取之入筥了、（近代相兼數社之使定例也、然而定文ニハ不可載同人、仍今改直也、）先是招光雅宰相之許可遣人由仰了、又尙遲々者可用辨之由相觸了、使々事、無懈怠可沙汰之由、此次仰含了、參議尙不參、仍召經房仰可書定文之由之間、賴定參入、仍不用辨、賴定直著參議座上、余讀上例文等欲令書之處、給折紙可書之由申請仍給之、（此人每度如此、不便云々、）書了持來、披見之處有落字、仍返給令直之、賴定申云、傍可入歟如何、答傍不可入之、摩改可改直也、賴定改直持來、字樣全不見、

然而重能令直加入日時定於宮、取出例文招於經房、問關白被候禁中哉否、申云、被口里第也、仍招光雅奏之、（今日依御物忌、當宮祇候、先例御物忌之時、先奏聞、次內覽者也、仍如此、）返給結申、次光雅持來內藏寮請奏、結申、次召辨仰云、內覽若申請歟、（近代辨官依參入頗遲、請關白云々、仍內々問之、）不然云々、余曰、頗雖非例事、且可覽神祇官請奏、是爲令早速也、經房持參之、余見了撤宮文等入件請奏、付辨奏之、辨有傾氣、件請奏近例上宣也、辨之所傾不可然、但上古奏之、又北山抄說如此、仍今日雖爲異說用此儀、近代之人不辨古事歟、爲之如何、即持歸、余結申、即加內藏寮請奏下給了、（不入宮）辨作二通結申、仰詞如恒、辨退去下史、又召辨付日時定文等、（入宮）經房云、可歸參歟、余曰、舊例或有直給外記上卿早出之例、近代如何、經房云、雖不打任事間有例云々、余案之宿老人公事多々之時可有如此之非常事歟、行路儀之條甚不當、仍仰可歸參由了、此間良久候仗座、仍召大內記業實、仰可草宣命之由了、（先是問辨別之有無於光雅、光雅云、未申定云々、仍不仰辨別事、）次經房歸參、余加入例文等於宮召大外記下之、其次仰伊勢、丹生、貴布禰等使、仰神祇官儲可令差遣之由、（○中略）其後余退出、經房光雅等云、期日近々間幣物定雖具歟、此條近代定例也云々、（○中略）

奏神祇官請奏事、或先召陣勘文加入日時定文奏之有便、今日追奏之、又不及殊難、不待內覽歸參上可早出、例文等下外記、可尋取定文日時等之由仰之、例在保延五年臨時奉幣、（宇治左府記）然而尙依爲非常說、仍所相待也、

八日庚申、光經申云、經房語云、昨日定之間有和談事、神祇官請奏被奏問、仍申近代爲上宣文之由、是先年御奉行之由不令奏聞給之故也、罷歸引檢之處、有奏聞之例、尤有興事也云々者、先年奏否不覺、可見愚記也、

〔猪隈關白記〕建久二年二月十日己丑、親國來申云、祈年穀奉幣、上卿右大臣（○藤原兼雅）領狀、可爲當日定云々、尤不審々々、此大臣被好事也、

正治三年二月十六日壬午、此日祈年穀奉幣也、當日被行定、雖不當有近例、又子細見先日記、

建仁二年二月廿日乙未、此日新年穀奉幣定也、未時許參內著仗座、(奥座)頭辨公定朝臣來、仰新年穀奉幣日時可勘申之由、其次仰宣命趣、頭辨退出、次余(○藤原家實)移著外座、左宰相中將家經著座、令官人置膝突、其次仰可召行事辨之由、卽左少辨長兼來、余仰新年穀奉幣日時可勘申之由、辨退出卽持來之、余披見之了置前、次召外記、召例文硯等、卽少外記一人持來例文、置余座前、令一人外記置硯於宰相前、次余披例文、家經卿令書定文、如例書了覽之、披見了入定文并日時於筥、召外記返給、(依殿仰內覽也)不次召內記、仰宣命可草進之由、又仰宣命趣了、頭辨來下內藏寮請奏、余結申召行事辨下之、卽同辨覽神祇官請奏、見了返給、　廿二日丁酉、此日新年穀奉幣也、午時許參內、

〔岡屋關白記〕建長三年八月廿八日丙辰、今日新年穀奉幣也、右大臣(○藤原忠家)參行、先定申日時使、右少辨宗雅持來日時使定文、不披見、依爲輕服日數中也、宗雅云、右相被示云、宣命內覽如何、余(○藤原兼經)答云、先例雖持來之、輕服之時不披見、往還有煩、不可持來者、執柄雖輕服、諸祭當日猶參內、加御禊之間候直廬、事了參上有例、今日依無指要不參、

〔吉續記〕文永四年八月五日、先參關白殿、內覽御卜形、今日新年穀奉幣也、被載宣命辭別之條可宜、且可奏聞之由有仰、○中略　上卿著仗座、辨(經親)辭別事、親朝招寄大內記在守、內々仰御卜形之趣、以詞示上卿、不書下、有先例歟、人々難之、柱下當座草進如此、臨時宣命辭別職事之大事也、然而不書下、以詞仰上卿事先例不審、且可謂有若亡歟、上卿向神祇官、　八年二月廿七日辛酉、新年穀奉幣也、依爲行事辨行水解除、著束帶參陣、○中略　上卿以官人召予參軾、上卿仰云、新年穀奉幣日時令勘申(者)云々、予於床子召六位史能兼仰之、史持來日時勘文、予取之披見、如元卷之持參進上卿、上卿披見了之後、欲退歸之時、上卿被命云、內覽事申請歟、無其儀可尋奉行職事之由返答申、上卿重被命云、內覽事辨可申請事也、關白不被參內者以狀可申之由被命、辨內覽事申請之條、不存知之事也、然而重不及申子細退入、相尋奉行職事之處、殿下御參內云々、次召外記被仰例文硯事、

〔薩戒記〕永享五年二月廿八日壬子、今日被發遣祈年穀奉幣也、予(定親○中山)勤春日使也、仍巳刻著束帶(如例、蒔繪劔、)參內、同始刻事始、園中納言(基秀、著四打下襲、此人年齡巳六旬有五、仍用平絹直衣平絹白奴袴等也、然者可用柳下襲歟、但若隨所得歟、勿論、)著陣、奥予著橫敷座、(於宜仁門外欲請益、而納言無覺悟之氣、仍推著座了、)藏人左少辨明豐出陣、仰仰旨於納言退入、納言移著端座、召官人令敷軾、又以官人召辨、明豐著軾、納言仰日時事、(其詞云、日時勘文云々、若猶今日可被發遣、祈年穀奉幣使日時令勘申云々可仰歟、)辨退入持參勘文、納言取之披見、置前目之辨退入、以官人召外記、大外記師勝朝臣參著軾、納言被仰例文硯等事歟、(其詞不分明、中間有微咲、何事哉、)外記稱唯退入、次少外記清原親種持參例文筥置上卿前、次持參硯筥置予前、納言氣色、予摺墨染筆、次卷返續紙、(無懸紙、外記失也、)取副笏請益、納言不被讀例文、又不被授小書出、只被氣色許也、予示云、可賜小書出也、于時被求筥內、予押下硯筥參進取小書出歸著、披置座下、取續紙如書引入左袖中、自右袖取出兼所書設之定文、置前、取小書出入懷中、取副定文於笏請益參進、奉定文幷小書出等、上卿令披見之後、復本座引直硯、納言以官人招明豐被奏日時勘文幷定文等、(例文幷歷名帳小書出等皆加入也、欲奏之、予示件等文可被留置座之由了、)明豐歸來返下之、納言引寄前目明豐、明豐退入、此事不可然、上卿可被結日時、職事又可仰仰詞也、次納言以官人召外記、大外記師鄉朝臣參軾、納言被押出、(如元入加例文幷小書出等、)師鄉指笏賜筥退入、是又不結申如何、外記結申之時、上卿仰仰詞也、外記稱唯可退也、彼是有若亡之體也、此後明豐覽神祇官請奏幷差文等、納言頗披見被返下、(此事兼不覺悟、予諷諫、不當公事、還々、爲公爲私無益、仍愁口入了、)辨結申退入、先是納言以官人召內記、大內記未參云々、須臾大內記爲清朝臣參上、(爲清朝臣云、先臨事可被仰宣命趣、其後內記可參也者、明豐有不審之氣、暫思惟、予示云、有特例之時儀如然、今日不可然歟、仍內記參進、)納言仰宣命事、(其詞云、宣命、爲清有不審之氣、尤理也、祈年穀奉幣使宣命卜可被仰也、)大內記退入、少內記安陪盛久持參宣命草、(入筥、)納言令官人令撤軾、起座就弓場奏聞、明豐於臺盤所付內侍奏聞、則返給、納言直欲退出、予示可被奏清書之由、仍立歸仰少內記、以清書宣命入更草令進之、更招明豐被奏之、其儀同前返給之、納言直被向神祇官、予相從之、今日職事不下內藏寮請奏、此事予兼問明豐、有不覺悟之氣色、仍閉口了、

〔公名公記〕永享八年二月十二日、今日祈年穀奉幣發遣日也、（中略）巳刻小浴解除參內、蒔繪細釼、紺地平緒、無文帶、鞾地臨一人、親尚具之、先爲行日時幷使定等也、須被日行之也、而或當日例古今存之、近代又大略同日、是叶公平之故歟、予先有著陣事、（中略）先著仗座、奥、揖等如常、則移著端座、其作法如例、自以屬直沓、頭中將隆遠朝臣下吉書、予不能之、職事遮而下之例也、予結申之、職事仰仰詞、予微唯、職事退入、次予令官人召辨、其詞云、右中辨コナタニ、被而儀狀ノ間召之也、右中辨幸房來軾、予下吉書、辨結申、予仰仰詞、其詞云、宣旨ノメウヘ、辨持吉書退入、以上著陣之儀也、不及官方申文歟、此後不起座、於東端座依可定申日時也、常儀職事來奥座、仰日時可勘申由、後移端、或又於奥座以職事奏日時可勘申由、勅許之後移端、而今日復任已後、初著陣之間、無左右移端、今又不起也、隨日歟儀、時之職事無來仰之儀、上卿又不及奏聞、直著端奉行之例存之、今可准此儀也、職事又存其例歟、不來仰日時事也、此間四條宰相著橫切座、予令官人可被著座歟之由密仰之、仍所著也、予案之强不可關職事也、但臨時定之期不見者可仰歟、今予成敗不審歟、强又無隨予、予令官人召辨、其詞如先、右中辨幸房來軾、予仰日時可勘由、其詞云、祈年穀奉幣日時勘申、辨退入則持參勘文、不入筥、持手、予披見之、如元加禮紙、置座前、取笏、此間辨退入、次令官人召外記、其詞云、外記メセ、大外記師勝朝臣來軾、予仰例文幷硯事、其詞云、祈年穀ノ奉幣ノ例文硯持テマヰレ、外記稱唯退入、則持參例文、入筥、年々例文一卷、歷名帳一卷、各有載、今度使三位已上一通、五位已上一通、又社充土代折紙一枚、內々入加之、近來外記之故實歟、披見例文、或不見之歟、此間六位外記置硯於參議座、當第一座也、予取笏、師勝朝臣退入、次予目參議、令移著第一座、隆夏相公者、爲第六參議、仍降座更所昇著也、揖等如例、予目參議、令引寄硯、如形摺墨染筆、卷返續紙、置座前、取笏有氣色、是可賜土代之由歟、予不許之間取續紙、染筆、予相示令書之、其詞云、讀社社奉幣ノ使、參議書之、此間予投遣土代之折紙、常儀上卿添示使々前、參議可令書也、々參議披置之、如形書之、兼日書設之歟、當座大略其氣色許也、存遲々、故歟、不堪右筆之故歟、卷定文、取副笏伺氣色、予目許、參議持參定文授之、先返與土代折紙、予取之置前、予披見定文、置座前、此間參議退予前復本座、予取出在筥之例文、暫置座前、入加日時勘文幷使定文等於件筥、勘文右、定文左、令官人召辨、其詞如元、又右中辨幸房來軾、押出筥仰可奏聞由、先可內覽也、然而攝申免之由、辨示之、仍不仰內覽事、可奏聞之由直仰了、猶仰可內覽由、依辨申狀可奏聞之由可仰歟、又付職事奏例有之、先例多分付辨、仍今日用其例、若爲地下辨者可付職事也、幸房爲殿上辨、不能左右、頭而返下、予結申兩文、先日時也、其作法併如例、或不結申云々、是先例兩說也、今日猶用懇懃說也、辨仰仰詞、其詞不聞、勘申一日者、其詞依勘申レ、若勘申兩三日者、以何日可行由可仰也、而無書如何、予微唯加入所取出之例文等於勘文筥、召外記下給之、師勝朝臣著軾、結申定文等、予每度仰仰詞、或以定文等有下辨之例、而以下外記爲善歟、便

奉幣式

仰云、伊勢、丹生、貴布禰使、仰神祇官令差進、師勝朝臣稱唯退、伊勢事雖不可及仰、爲僅仰了且存例也、先例頭中將隆遠朝臣下内藏寮請奏、是伊勢幣料請奏也、仍伊勢幣時者不下之也、無予結之、職事仰予、予稱唯、卷請奏暫置座前、職事退入、予召辨下内藏寮請奏、幸房結申之、予目許、幸房退入、辨官不下神祇官請奏者、此後可下之歟、今日延引、次可開卜串也、然而當時使王一人之間無此事、使王數輩時爲定、一人開卜串之故也、但猶仰可開之由於外記、外記使王一人間、不進卜之由令申者、其時上卿可諾歟、中右記所見、在京之使王一人之由、雖知之、猶於當座仰卜串可開事、每度如此也、又伊勢幣時不可及沙汰事也、使王入勤伊勢幣使之故也、次召内記仰宣命事、其詞云、新年穀奉幣宣命令草、内記稱唯退、此間六位外記臨小庭、申使王御馬事、六位外記史之習、候小庭直不著軾、然而上卿有可仰事召之時、先目令著軾之後仰予、或必不召軾仰之、況予如此外記還而有申事時、上卿不目許聞、作居小庭申之、法事違儀也、○中略予諾之間外記退、次少内記安倍盛時兼右少史持參宣命草、伊勢與諸社宣命之草兩通、書宿紙入筥、不書入使名日付等、著軾、於外記史者直不著軾、六位内記直著之例也、予置笏引寄筥、披見之、如元入筥仰可内覽由、但關白坐里亭、其程遼遠、持向者頗可移刻、同内覽申使不上之由相尋之處、遙而不知案内、仍准申使之儀、問奏聞、遣不可然事也、但往昔殿以例式文、恐不及内覽歟、有餘例者、猶可内覽也、令持宣命筥於内記、分名族門代範職之時、頭中將隆遠朝臣出逢、此間予見遣内記方、内記持來筥之間、予指笏取筥付隆遠朝臣拔笏、其次奏使王御馬事、其詞云、使王御馬申云、此事奏聞之早晚、先規不同也、奏宣命之後外記申者、奏清書、次奏之、於本官仰可賜之由於外記、未奏草已前外記申時者、如今日奏草之次奏之、歸陣仰清書使、仰御馬可賜之由於外記也、召予暫佇立、小時頭中將返下宣命草、仰可清書之由、予指笏賜筥、令持内記拔笏、又云、使王御馬事聞召ス、予歸著陣端座、其作法如例、又自直沓也、内記置宣命筥於座前、予仰可清書由、内記持退也、此後召外記可仰御馬可賜之由也、而忘却於陣不仰也、不可說也、次右中辨幸房下神祇官請奏、是諸社幣料請奏也、伊勢一社奉幣之時不可下之也、予披見之則返下辨、往昔奏之歟、而近代不奏之、中古以來如此、依上宣之也、又上卿不結之、不奏之故也、辨結申之、予目許、持退、次少内記持來宣命清書、入筥、伊勢黃紙、賀茂紅紙、餘社悉黃紙、皆是例也、予次第一々披見、使名并月日等僅見之、就弓場付頭中將隆遠朝臣奏聞、其儀併同奏草、又不及御覽、小時被返下之、予取筥給内記、直出禁門於陣頭乘車、四條宰相已下外記史相從也、參向神祇官、爲發遣伊勢已下幣也、

〔新儀式 四臨時〕祈年穀事

若有可祈年穀、上卿奉仰、先以陰陽寮勘吉日文、并十六社或社員數或不定也使差文、○中略奏之、前一日上卿以

宣命草、附藏人奏之、御覽返給、令清書之、當日供御浴、奏覽清書、上卿返賜、召使須給、（依他所奉幣亦准之、依奉幣伊勢行幸八省院、遣宮之後、立諸社使、）

〔江家次第五二月〕祈年穀奉幣〇中略

同御裝束

辨參八省、令奉仕裝束、左右衛門奉仕掃除幷敷砂、小安殿馬道以東四間之內、東一間敷滿薦、（東西妻、）一間薦上又斜敷一枚、（巽乾妻、）第二三四間、幷馬道以西四間南邊立布障子、馬道東西各立大布衛立障子各二本、西衛立障子西邊逼北壁立屏風一帖、（大宋、）其內敷帖一枚、（東西妻、）爲內侍候所、其屏風前立高足案一脚、（其上有大筥如斗、）其東敷半帖一枚、爲行事辨座、當大極殿艮角壇下、南北行立幔一條、當同幔北妻、西去六七尺許、南北行立幔、卽經小安殿東、到北廊砌、（去砌五尺許、此幔南當大極殿艮角柱、北當嘉喜門西腋柱、）自同幔北妻西行立幔、當昭慶門東腋柱北行引之、（去昭慶門五尺許、）昭慶門東廊、嘉喜門以西、五間之內西四間爲公卿座、西第二三四間北橋子壁邊立亘筵、同四間內敷薦、西第二間以東、三間內薦上敷滿筵、其上南北對座、敷半帖長帖等、（西第二間兩面端、第三間緣端半帖等也、第四間長帖、）當上卿座砌上、敷膝突小筵、件四間幷第五間南柱外面、打亘幔、褰引、亘三幅調布大幔、第五間爲行事辨以下座、（西以廣筵立滿之、引於大幔也、東不引間大幔、）其內設帖三行、（一行在西邊、南北妻、爲辨座、二行在其東、卿西妻相對、爲行事官掌等座、）嘉喜門以東廊七間內、西三間西南東三方、引廻同大幔、其中敷座三行、（二行在南北邊相對、北外記座、南史座、一行在東邊、南北妻行事官掌等座、）東子午廊十二間之內、南第三間東橋子下壁下立筵、其前敷筵、其上敷半帖一枚、爲上卿座、（大臣者兩面、納言者緣端、）其前敷膝突小筵一枚、（敷在坤方、）第五間敷帖一枚、爲辨座、（黃端帖、或四妻、）第六間敷同帖一枚、爲外記史內記座、嘉喜門北庭、西東北三方引廻大幔、（立白木柱引之、西幔當門西第五柱、南北行引之五間許也、東幔當同第四柱引之、北幔又東西各五間許立之、但中央一間、幔差去東西行引之、以其間爲往反路、）大內中重宮城門爲褰諸社幣之所、（門額之後、立幔其中設座、辨座在東、不必著、史座在北、諸司座在西、）行事辨幷史、早參候於八省、內侍乘行事藏人車參入、下自永福門、其內敷筵道、入自小安殿北面西戶、（女官等相具、以几帳遮之、）行事辨內藏寮官人使忌部等相共檢臨、（量其丈尺、）女官褰之、（先內宮料、五色薄幷生綾之上加兩面錦等、其上以

御宮盛之、亦以木綿結之、其上以調布裹之、以木綿結所々、其上以薦裹之、次外宮料亦如之、各付短册、内藏寮亦各載之文、加之、令内侍懸手、木須内侍裹之歟、其餘以下皆以六丈為匹端、次置短脚小案、置之於第一間、斜行寫上、內宮在内、外宮在外、件案艮坤為妻、相去五尺許、幣物同艮坤為妻置之、史於宮城門裹幣、裹了次第立於嘉喜門外面東西腋、可東行者立東腋、可西行者立西腋、

石清水　松尾　平野　大原野　廣瀬　龍田　住吉　梅宮

廣田　北野已上並立西腋

賀茂上下　稻荷　春日　大神　石上　大和　日吉　祇園

丹生　貴布禰已上立東腋

同奉幣儀○中略

當日早旦、内記清書宣命、伊勢縹紙、賀茂紅紙、自餘黃紙、内記自藏人所請之、各一倍給之、備之損紙、内記具、少時、外記史相共書之、前一日、被奏草時乃請紙、夜間書之、上卿參陣奏宣命清書、入筥、以伊勢宣命横置於上、先令内記内覽於執柄、持歸之後、令持内記進御所、令藏人奏之如恒、近例主上着御冠直衣、洗手覽之、或御遊殿後覽之、使參議等參陣、近例參議先向入省、不可然歟、就中大辨為使者、必可參陣云云、先是外記使以名簿渡内記、為令入清書也、亦以一通渡於行事所、入筥為令成使宣旨也、上卿返給宣命、仰云、御覽シク、率使參議少納言内記、於月華門外、授宣命筥於史生、外記史等、經月華陰明脩明等門、示事由、更不還著、或復陣座、相引向云々、兩儀出自敷政門、先向入省、行事辨史出立、當門西腋東第三柱、立於北廊、史當其西立、大臣為上卿之時史跪、上卿以下參議相共、次第揖著於北廊座、召辨問幣物具否、召外記問使等參否、幣物使等具畢、令召使召内記、内記取伊勢宣命、入筥立於嘉喜門南壇下、上卿著東廊座、經南、辨外記史召使等相從、但内記在上卿後、參議猶在本座、内記置宣命筥於上卿前、先令中臣等取幣物、入自東福門、中臣在先、次忌部、次卜部、入於幔中列立、忌部木綿織、此宣命所謂大體也、先進取外宮幣、退授卜部、更取内宮幣、藏家官人藏候退出、忌部在先、卜部次之、中臣在後、此間上卿仰召使、召使王、給宣命、畢、入自東福門、著膝著給之、召内記、令取筥、或起座後取之、上卿起座、辨内記外記史等出立、當座北間北上西面立、上卿相揖過畢、辨以下相從、今度内記在上官列、還著本座、次令内記進宣命、入筥置座前、先召石清水使給之、撤假結、次賀茂使參議進於座上給之、復本座揖退出、或北座之人渡

於南、經他參路南進給之、或左廻、或右廻、出自嘉喜門、立北壇、召次官給宣命、各向其所、他亦如此、上卿退出嘉喜門、辨以下出立如初、(今度行事外記史皆列立、揖如初、大臣時、五位外記史以下皆跪、)上卿出自待賢門、(故實不行南路、用北路、)辨少納言相分自脩明門參、內記外記史等相從送之、上卿於待賢門當下、一顧而退出、(是九條殿御說也、若辨以下皆相從者、可有出立之儀歟、可尋之、○中略)使立後、於南殿有御拜事、(以小舍人令尋八省、)下南殿御格子、(唯上東第一間井額間格子、又御帳帷等常蹤不懸懸之、)北障子亦立之、(御當時不必立之、)東第一間南廂立廻大宋御屏風、開巽角、其中敷小筵二枚、(艮坤爲妻、)其上供高麗半帖一枚、(巽向、)主上御東帶、(位袍、)渡御南殿、(自清涼殿廣廂下、至南殿西北戶北簀子敷筵道、但不敷階上、依有事危也、)入自殿西戶、入自御障子中戶、經御帳後、出御於南廂、近衞次將一人、取晝御座御劒前行、(用上臈次將、頭中將尤得其便、)藏人頭候御裾、殿上侍臣等扈從、五位藏人於御屏風外獻御笏、(入宮蓋獻之、先之六位所持也、主上令取笏給入御、)開(○開一本作閉)屏風、入御之間、持御劒之人、持宮蓋之人等、候於屏風外、御拜兩段後還御、(給御笏如恒、)若當御物忌者、於石灰壇有御拜、東廂南第一間、供小筵二枚、(艮坤爲妻、)其上供半帖一枚、(巽向、)自朝餉南出、經臺盤所東障子幷晝帳上(○一本帳上有御字、)後、入御石灰壇、藏人頭若五位藏人、於四季御屏風北妻獻御笏、退候於鬼間障子外、(皆閉障子戶、)御拜了後、亦進初所給御笏、若有行幸時儀、(見於別卷、)發伊勢使之後還御、上卿於左仗召使給宣命、於左衞門陣北舍裏幣畢之後、立幣於外記門內南北、自餘儀准可知、祈年月次祭間有奉幣、以伊勢幣加王付彼使時諸社幣後日亦於陣被立、

〔雲圖抄〕二月(或三月)祈年穀奉幣御拜座(南殿、但御物忌之時、於石灰壇有此事、不立屏風、只供半帖小筵、頭藏人於鬼間供御笏、九月十一日例幣同之、)

南殿南庇東第一間、立御屏風三帖、其中供小筵、供半帖、(向巽方、)行事藏人先令下南殿御格子、(東第一間垂額間不下、或下額間云云、)御帳懸帷南面卷之、(巽坤角間卷之、)立御倚子、御路供筵道、御出之時、頭以下扈從、(頭候御裾、)獻御笏御草鞋如例、御座定之後、頭自御後獻御笏、次取御草鞋、藏人引塞御屏風、次御拜了還御、

行事藏人遣小舍人入省、伊勢使立了後奏事由也、其後出御也、

〔柱史抄上〕二月 祈年穀奉幣

當日早旦皆參、少內記於腋陣清書宣命、(或草奏之後、召六位等於大內記里亭、且令清書、觸使名所幷年月日、若有辭別者、爲令書加也、兼日清書、縱雖無其請、上卿

(書障之後、還引之賞爲違過也、)尋取使差符於外記、書入之筥一合、次第積之、毎宣命細揺同色紙結中、(或說不結之、)宣命之上端銘社名一字、所謂伊、石、賀、松、平、稻、春、原、神、上、和、廣、龍、住、日、梅、吉、祇、北、丹、貴也、(但伊勢賀茂等不銘、是依色異也、)就件次第並宮內、賀茂以下廿一社並之、伊勢一通、諸社宣命首横置之、

成季朝臣記曰、二條殿(實教)招客之次、被語仰云、往年或人云、諸社奉幣同日被發遣之時、當初以石清水宣命諸社宣命首横置之、而彼時以伊勢宣命可横置之由有夢想告、以來以伊勢横所置也、又敦光朝臣曰、俊明卿稱家說、以石清水宣命横置之者、故內府(通)一度被用其說之處、自上直入下給、又承保二年三月六日、大內記成季朝臣、如例以伊勢宣命一通、諸社宣命上横入之、而上卿權大納言俊家卿被命云、伊勢宣命强以横不可入、但又有其說歟被命、此日諸社一列所被加入也、成季申云、近代皆横所被入也、往古以石清水宣命横入云々、然而近代只以伊勢横所被入也者、是則博陸前大相國御說也、奏下之處、如近代例以伊勢宣命横入直所下給也、

時刻上卿著仗座、召內記仰宣命可持參之由、內記持參清書宣命筥、候軾、內覽奏聞儀如恒、上卿返給宣命、經月華脩明等門向入省、著嘉喜門北廊座、召辨問幣物具否、召外記問使參否、次以召使召內記、內記持參伊勢宣命、(入筥、)其路入自嘉喜門、降自南石階、立庭上幕巽角、(北面、)上卿起座著東廊座、內記持宣命筥相隨後座、次辨外記史等相隨、上卿著座、(此座五位必著之、今六位著之、)座定之後、內記置宣命筥於上卿前著座、上卿座(西面、)一許丈相去、敷辨座(南面、)政官座、(東上南面、)內記外記史等一行著之、次召使趨出召中臣、中臣相率齋部卜部等出、入自東福門、(或無召、雖無其召進參也、)向小安殿、忌部卜部等請幣物二捧、(內宮、外宮、)自上捧之出自同門、中臣取笏在其後、次王著上卿前軾、上卿賜宣命、王賜之出自同門、幣物出郁芳門之後、上卿目內記、參進賜空筥、本座北二間許、當膝長押下持筥立、辨外記史等立定、上卿起座、過其前之間辨磬折、上官平伏、(大臣之時、五位外記史平伏、納言時磬折、於六位者、雖納言平伏、但內記依捧筥不平伏也、)上卿還著北廊座、辨出自嘉喜門、於小腋行事、諸社幣皇城東立件門東腋、內記隨召(或不待召參云々、)持參諸社宣命、置上卿前、內記將出嘉喜門東腋邊之時、上卿召

諸社使一々賜之、事訖辨以下政官立嘉喜門、（幷一行、上官行、南上東面、）一上卿出自待賢門、辨少納言相分入自脩明門、參內、外記史等相隨從之、上卿於待賢門霤下一獻而退也、

神祇官儀（入書無實之時用此所）

神祇官門外東腋敷莚、爲辨官幷內記座、（南上西面）西腋敷莚、爲外記史座、（南上東面）同門內東腋敷莚、爲奉幣使公卿座、（北上西面）西腋敷莚、爲上卿座、（東面、近代上卿多被著東腋座、）內記隨上卿召、持參伊勢宣命一通、（入筥）其儀先起座著沓降壇下、搢笏取筥、入自門扉、過上卿前、立庭中、（西上北面）次上卿起座著東屋、（近代用幄）大內記持筥相從、辨外記史少內記等在其後、上卿已下著座、上卿南面、辨東面、其後史內記等同東面、上卿座定之後、大內記持筥渡砌、進上卿前退歸、（近代大內記不著座、六位所著也、）賜宣命於使王之後、上卿召內記、內記參上卿前、給筥退歸、外記史起座立幄中、上卿經外記史內記等前、著門內本座、辨外記史內記等經上卿前、著門外本座、次上卿召大內記、大內記持參諸社宣命、（納筥、社次第進之、）進上卿前、獻筥退歸著本座、上卿召諸社使、一々賜宣命之後、召內記、賜空筥、次上卿以下退出、

〔小右記〕天元五年五月三日甲午、參內、今日爲祈年穀奉幣諸社、（十六社）左府參射場殿、被奏宣命草、今日可參被奉八省院、而雨脚不止、仍停止、○中略又被奏宣命清書、了經月華陰明等門、被向八省院、各賜宣命了、○中略今日主上於南殿遙拜之、（下南殿御格子、當御帳巽、供神事御座、）

永觀三年（○寬和元年）二月十七日壬辰、早朝參內、被立祈年穀御幣使、（十六社）未時幸八省、先是左大臣（○源雅信）奏宣命、○中略御幣裹內侍藤基子、於八省俄申有月事之由、仍以女史令裹也、扈從行幸之內侍一人不候、以代官令奉仕、甚奇事也、御小安殿之後、其儀如例、但不召舍人以前、有兩段再拜之御拜、是雖不見內裏式、自邑上御時已來、已有此事、仍奏聞此由事了還御云々、

寬弘二年五月廿六日癸酉、今日八省行幸由、將曹安春申、未剋許參內、左右內三相國（○道長、顯光、公季、）中納言齊信、時光、俊賢、參議有國、懷平、輔正、忠輔、行成、正光、三位中將兼隆等在陣、右大臣召宣命清書、於陣

壁後、令持内記、經宜陽殿壇軒廊等、進御前奏聞、復陣北座、先例著南座、召宣命見了返給、内記渡小庭進御前、而今日不然、若依左府著南座歟、上臈雖在南、申案内猶著其座、可見宣命者也、今日儀違前跡、申二點幸八省、右大臣進東廊門、給伊勢宣命、小選御輿歸御本宮、右大臣於仗座、給石清水等宣命、

〔左經記〕寛仁元年七月十一日丁未、今日於神祇官可被立新年穀幣、（中略）延長四年六月十一日有被立例、准此例於神祇官可被立幣使之由被兼定畢、件御裝束等無儀日記、仍量便宜所定行也、其儀北廳北面中西廂二間許引廻幔、其中立屏風敷筵疊等、爲内侍裹御幣所、東一間敷薦等、爲置御幣所、同廳東庭立五間幄一宇、（卯酉妻）面引幔（東北西等）爲給宣命之所、（中略）北門内□□□□（西面）西廂使々宰相座（北上）（東面）同門外東廂□□□等座、（辨記南面）（西面、内）同門西廂、外記史官外記史生官掌召使等座、（外記北面東上、史東面南上、史生巳）（下東上南面、顯下西數此座、）同門前庭引廻幔、於神祇官後廳座裹諸社幣等、列立北大門東廂垣邊、及申刻源大納言從内被參入、先著北門座、召外記被問諸社使々具否之由、外記申具畢由、卽率辨以下著東幄座、次使中臣忌部後取等入自東門、賜御幣退出、次召使王、使王入自同門、賜宣命退出、次歸北門召諸社使等賜宣命、□退出云々、　四年二月十四日丙申、參内、於八省被立新年穀使、（宮大夫、右少辨、辨）出御南殿有御拜、（關白殿令儀給）其儀南殿御帳懸帷、下南面隔子等、唯上東第一間御隔子、二間立屏風三帖、（東北西各立一帖）其内敷筵并疊等爲御座、剋限出御、（頭中將取御劒、御座□立御劒）拜了卽還御、

長元元年六月三日丙寅、參關白殿、（○藤原賴通、中略）仰云、爲新年穀并疫癘等事、可被立廿一社奉幣使之由、前日右衞門督奉仰、今日參入定使々、并可令勘日時云々、不可内覽之由可示督者、則參内、督於陣座令余書使々、（使々參議遲參也）加日時文、（七日、時巳午、）進弓場令奏還給、歸於陣座下外記、次余申神祇官幣料勘文於督、奏下畢、（同不内覽、御覽同不内覽神事文也、）　七日庚午、早旦參入省、内侍相共令裹御幣、上卿令奏宣命草并淸書等、率上官等、從内裏被參八省、午二刻被立伊勢使、歸北廊被立諸社使々、是依疫癘并新年穀所被行也、上卿退出、　四年二月十一日戊子、巳刻參内、依新年穀奉幣使也、内府（○藤原敎通）忽被申障、仍召他上卿

之間已及晩景、權大納言（○藤原長家）被參入、令開卜串、幷奏宣命草淸書等、著八省、先伊勢使等入給幣、退出之後、大納言著東廊、召使王給宣命、次歸北廊、召諸社使給宣命、余爲平野使、參社奉幣了歸京、　七月十三日戊午、午刻許參神祇官、（使爲祈年穀奉幣也、日來入倉修理、仍於此官被立使也、）行事辨史外記他人不參、仍暫徘徊神殿屋邊見裝束體、神殿東一間敷葉薦等、（頗異乾、以ス、ザカヘテ數之、）立小机二脚置內外宮御幣、自同第三間北壁下至于南柱引亘斑幔、自同柱至于西妻引亘同幔、北向西戶東邊立廻大宋屛風、敷筵疊等、爲內侍裹御幣處、同屋東庭立五丈幄一字、東西北面引幔、東一間上座（南向）三間辨座（東向）四間外記史內記座（北上東向）五間史生等座、（北上東向）南去二許丈引亘斑幔、（東面爲妻）北門內東腋上卿座、（西向）西腋使宰相座（東面北上）同間外東腋辨座、（西向）北邊內記座（南向）西腋外記座、（北面東上）西邊史座（東面南上）北邊官外記史生官掌等、（南面東上）自同門艮角柱東行二許丈、北行三許丈、立貫木引幔、又自乾角西行二許丈、北行三許丈、同立貫木引幔、又門北去四許丈同立貫木引幔、史於神祇官東廳屋令裹諸社幣、立亘北門東西引幔貫木、未刻上卿參、內記等（先是參內、奏宣命草幷淸書等、經逢春門被著此官云々、）先著門座、召辨（南廂置膝突）問御幣等具不之由、辨申皆具之由、次召外記問使々參否之由、外記申皆參之由、上卿令召使、可賜御幣之由令告神祇官使、中臣率忌部後取等、入自東間給御幣退出、次上卿召內記給宣命、（先是內記奉上卿也）內記取之（入宮）磬折立前庭、上卿移幄座、（內記相從）辨外記史同著幄座、上卿令召使王、令入自東間、經南庭斑幔東妻、進膝突、給宣命退出、上卿目內記、內記進給宮退去、上卿以下歸北門座、（辨以下經同門往還）先召石淸水使、使入自門著膝突、給宣命退出、次召賀茂使、左宰相中將起座著沓、進居上卿座前板敷上授宣命、中將置笏取宣命、又把笏揖、起座著沓歸立揖退出、次々使々、次第給宣命退出、余參平野、先洗手（社司儲手水）著祝座、禰宜捧御幣立前庭、先把笏再拜、了插笏讀宣命了、禰宜奉幣了返申、次拍手、余又應之、次再拜退出、

〔後二條關白記〕寬治六年二月廿四日丁丑、時雨降、參右仗、皇太后宮權大夫（○源俊實）著橫座、余（○藤原師通）令置膝突、依官人未參、令隨身（府生）置膝突、召大內記、即參、仰云、昨日二字可被直入云云、直了奉之、仰可令

獻宣命清書之由、承仰（天）退來、上一々開見了、昨日不經內覽、早可被奏、仍令持內記、而余就御所奏聞返給、卽向八省、著北廊座、問幣物具否、如常、召外記使事被問、稻荷使令申未參之由、仰重可令催由、內侍良久不參、頻ニ令催申可參之由、良久所參也、行事辨來云、幣裹了、令催內記、如常、其後著東廊、甚雨、隨身等出自東福門外候、忌部中臣等二人入自東福門、更西折經大極殿壇上東北等幷淸暑堂、立北間（北向）立定忌部進而取幣（此間事可尋）退出入門、了使王參解結緒、見定使所名字、其後賜於使王、使王口了退出、被下覽宮大內記如常、復本座、召石淸水使給之如常、上達部一々給了、外記參申云、祇園使稱穢所勞、待賢門下給宣命出、一々給了、一町許程、上卿退出、於雨儀忌部中臣等立所可尋云云、

〔中右記〕寬治八年（○嘉保元年）七月廿日己未、天陰大雨、有祈年穀奉幣、（廿二社）早旦依爲行事參八省小安殿、率行事史時資、官掌廷光、相催所司、御裝束存先例、（見圖、）但甚雨之間、嘉喜門北砌、已以流水、仍召仰修理職、俄令儲借橋（板二枚許）爲上卿道、未時許、上卿右大將（○藤原忠實）相率上官等被來、（先參議三人被參著本座、諸社使參集、）此間雨脚暫止、仍予與行事史出立於嘉喜門前、上卿相揖被過著本座、（先是外記置式筥、）以召使召辨、予進出參膝突、上卿命云、御幣等具了哉、則申具了之由、歸本座、上卿又以召使召行事外記、（盛道）則參膝突、命云、使使幣具了哉否、申具了由、歸本座、次上卿起座被進東廊座、大內記在良取宣命筥在上卿後、予行事外記史相從、（上卿前召使六人隨身等）上卿著東廊座、伊勢使等三人進出、（用雨儀路、大極殿壇上、）取幣物出、次令召使召使王、著膝突、上卿給宣命、了後使還出、上卿召內記返給筥了、起座、此間行事辨外記史等列立壁下、（南上西面、）上卿相揖被過、被著本座、乍居座給使々於宣命、（先令內記進宣命筥、）石淸水使源俊輔朝臣、賀茂下上左宰相中將保實、松尾皇太后宮權大夫公定、平野左大辨季仲、（各有次官、）稻荷使基實朝臣、自餘地下五位等各給宣命出嘉喜門之間、左右衞門衞士等持御幣前行、（御幣餘立ニ件門左右、著之、）事了上卿被出門之間、辨內記上官等出立、（先例無此出立、上官等失也者、辨一人其西上官一列、南上東面、）一出從待賢門各分散、予猶參內、此間爲有御拜、御出於南殿巽角間、（御緣敷東敷道、）右中將顯實朝臣持御劔前行、頭中將國信朝臣持御衣尻廻從、雲客五六輩陪從、

後聞、上卿今朝早參、被奏宣命草幷淸書、有辭別、近曾天變頻示、世間不閑、風雨順時、農業可叶節之由者、

早旦予參入小安殿、掌侍伊勢女官二人、此中從予忌部一人、持尺內藏寮下部一人相具、令裹伊勢內外宮御幣、了後以內藏寮官人令置一間、其後行事史官掌等相具於昭慶門北裹諸社幣、依雨儀也事了晚頭歸家、○中略

事了後、上卿出嘉喜門間、上官等幷內記皆悉出立、予未習知此事、仍問大外記定俊眞人、可有此出立歟如何、定俊答云、尤可有也、辨可令立加給者、新任未練之間、偏取信出立、依不審其後相尋新中納言通俊、件出立全不可有之事也、上官等大失也、奇恠者、予被引上官大失禮也、爲後度所記置也、

件出立之事、付新中納言說存失禮由之處、江中納言被申云、必可有之事也、昔猶又於待賢門有出立、但近代絕了、於嘉喜門出立者、上卿出入之時、兩度必可在者、後尋大外記定俊幷大夫史祐俊等之處、近代必作兩度、於嘉喜門前有出立者、然者非失禮歟、但兩中納言之說太以相違歟、迷是非、

嘉保三年二月廿六日丁亥、今日新年穀奉幣也、予依爲行事、早旦參八省、相具史俊忠、官掌光経、相催諸司、令裝束如常、○中略午時侍從宰相能實、賀茂使皇太后宮權大夫公定、松尾使左大辨季仲、平野使參來、仍上卿被渡東廊座、大內記俊信取宣命宮相從、予幷外記信貞、史俊忠扈從、中臣官人輔弘、參小安殿賜幣物、了後召使王給宣命、次還著本座、諸社使々一々被立了、予與上官出立於嘉喜門前、上卿從待賢門被出了、予參內、奉幣事了由奏聞、只今被有御拜、從南殿還御之後也、

康和四年二月廿四日己酉、今日新年穀奉幣也、上卿內大臣源雅實使參議三人顯通、基綱、能俊、宣命之中有辭別云云、禰宜宣綱失心柱事云云、行事右少辨俊信俄依服假不參入、仍晚頭召右中辨時範朝臣爲行事、間、已及秉燭云云、

(殿曆)康和五年八月廿三日、戊刻許右少辨俊信來云、權大納言被申云、明日新年穀奉幣也、而此午剋

許、於八省之廊内、馬死、爲之如何、余答云、可被尋先例、又被奏事由、余事也、即還出了、職事業房申之、如此時於神祇官被行例也、　廿四日、巳刻許、辨俊信來云、八省穢時於神祇官被行、寛治比云々、仍於神祇官可被行之由上卿被申、余答云、可依先例、

〔中右記〕天仁元年八月七日甲申、今日新年穀奉幣也、殿下〈○藤原忠實〉初渡御八省云云、後聞〈○中略〉上卿移著東廊座、後伊勢使等參入給御幣、上卿歸著本座、諸社使々被立、〈石清水使經兼朝臣、稻荷使宗季朝臣、〉

大治四年二月十四日癸亥、新年穀奉幣也、〈○中略〉予仰外記召伊勢使、外記不起座傳召使、令召權少副大中臣基行以下、卜部忌部等入自東福門、列立小安殿南庭、取幣、〈殿下先有御手水事歟、〉次第退出如恒、次召使王來膝突給宣命、次召内記返給筥、起座如本路向、辨小揖復西廊座、召内記令進諸社宣命、則持來置座前、召石清水、〈上野介源俊朝臣、有所勞候門外之由外記申上、以外記傳給、〉次目宰相中將、來座前、給賀茂宣命、〈次官宗時、〉次目右兵衛督給松尾、平野宣命、〈依無使宰相兼二社也、次官盛邦、〉次召稻荷使、〈散位源季房朝臣、所勞候門外、以外記傳給、〉之春日、〈秦盛〉大原野、〈達藤〉大神、〈親實〉石上、大和、〈二社兼、依使不足也、〉廣瀨、〈親康〉龍田、〈兼〉住吉、〈行遠、有所勞候近邊之由申、以外記傳給、〉日吉、〈朝俊〉梅宮、〈基政〉吉田、〈篤昌、殿下前驅也、依使不足只今被給也、〉廣田、〈行遠兼也、〉祇園、〈伊通〉北野、〈時登〉丹生、〈神祇官六位〉貴布禰〈同〉召内記返給、申時事了、時々小雨、不及衣濕、殿下令歸給、〈辨上官等列居幔外北庭、東上南面平伏、〉予暫立嘉喜門内、殿下〈○藤原忠通〉過給北庭間立出扈從、　五年二月十八日辛卯、今日新年穀奉幣也、予依爲上卿早旦沐浴、辰刻參内著仗座、〈○中略〉以召使召使王、行兼王來膝突、予給宣命、仰云、任宣命趣可祈申由、可仰内外宮禰宜等、〈予今案詞也、〉内記撤筥、予起座歸自本路、辨列立、予揖退之、歸著北廊本座、以召使諸社宣命可持參由仰、内記入筥置座前、召石清水使、四位侍從頭顯親朝臣、〈依院仰催也、〉外記申云、有所勞候待賢門邊、以外記傳給宣命、次賀茂使參議長實、次官家時、松尾使參議爲隆、次官盛邦、平野使參議伊通、次官清職、稻荷親仲朝臣、春日雅清、大原野宗康、大神行遠、石上、〈大和同前兼之〉也、廣瀨伊俊、龍田〈同前〉住吉清仲、日吉清國、梅宮基政、吉田篤昌、廣田清仲、祇園親康、北野清能、丹生祝師大中臣倫兼、貴布禰神祇少史卜部貞景、各使々立了召内記返給筥、歸退出之間辨上官等列立、予揖

過了、秉燭以前歸家、

長承二年八月二日甲申、祈年穀奉幣也、予依為上卿已初參內、(○中略)伊勢使中臣神祇權大副親仲、忌部、(某)卜部、(某)入自東福門取幣退出、次召使王、頼行已來膝突、給宣命歸出了、召內記給宮、歸著北廊座、召外記令重諸社宣命、(入宮置座前)以召使諸社使次第一々召之給宣命、石清水(實房朝臣、雖申服藥由、不被免之、)目左宰相中將(自元在座)來座前、給賀茂宣命、次官篤昌、次召右宰相中將成通、給松尾、平野宣命、(使宰相今一人闕也、仍兼二社、)次官親康、稻荷、(為重朝臣、雖為院殿上人、依有仰也、)春日、(泰盛)大原野、(知安)大神、(伊使)石上、大和、(兼)廣瀨、(兼)龍田、(兼)住吉、(仲房)日吉、(致時)梅宮、(氏人頼兼)吉田、(貞兼)廣田、(仲房)祇園、(實基)北野、(憲明)丹生、貴布禰(已上神祇官六位官人)給畢、

〔本朝世紀〕康治元年二月十七日辛巳、被立新年穀奉幣使、右大將藤原實能卿參仗座、召權少外記清原景兼、被尋使散狀、召少內記藤原守光、守光入宣命草於宮覽上卿、內覽清書之間、上卿召外記景兼、被仰可持參卜串之由、景兼持參之、依上卿氣色開之、上卿仰曰、可令勤卜合、稱唯退出、次外記進出申使王御馬、上卿付藏人被奏宣命畢、清書畢內記覽上卿、上卿起座進弓場、付藏人奏之、次向八省、此間使等參、召外記被仰云、使王御馬可給、上卿起座著東廊座、右少辨藤光頼、右少史中原宗遠著座、上卿召伊勢使宗重王賜宣命、自餘如常、宗重王賜左馬寮御馬也、今度依寬治、(○堀河)天仁、保安(○鳥羽)例、使之無懸手也、

〔台記〕仁平元年二月十九日庚申、是日祈年穀奉幣、上右大臣、(○源雅定)宣命清書不可內覽之由昨日示、右大臣先例輕服日數之內不見之故也、

〔兵範記〕仁平三年二月十四日癸酉、今日祈年穀奉幣、主上(○近衞)無伊勢幣御拜、依中宮御懷妊有也、

〔山槐記〕應保元年七月廿五日丙申、被發遣祈年穀奉幣云云、巳刻右大臣(○藤原公能)參陣、於南殿有御拜、頭辨候御裾云云、藏人方事、藏人少納言信範申沙汰云云、予不參依為御物忌也、此殿無宿所、去夜頭辨可被宿之由藏人定正示送、仍不參也、抑為御物忌之時、於石灰壇御拜先例也、而出南殿、未知其由

緒事也、

〔兵範記〕仁安四年二月廿四日辛亥、今日祈年穀奉幣、巳刻太皇太后宮大夫公保卿參著仗座、先覽宣命草、次令藏人治部少輔兼光奏聞、(依御物忌先被奏之、○中略) 八幡使權中納言兼雅　賀茂修理大夫成頼　松尾右大辨定綱　平野左京大夫定隆　稻荷前民部少輔盛方　右大辨長方朝臣奉行、先於小安殿裹幣、大神宮以下各有宣命辭別、神宮宣命其趣云々、禁中御湯殿外無他事、無御拜、

〔玉海〕嘉應二年二月十五日丙申、巳刻以後、雨脚間灑、臨晚風雨甚烈、此日祈年穀奉幣也、○中略 次忌部經中臣之前、自小安殿南壇上東行、入自南面東第一間、取外宮幣授卜部、(件卜部相隨忌部、跪取之、) 次執內宮幣、相共經本路、出自東福門、(今度先忌部、卜部、次中臣、) 次御幣過前之間余平伏、經房以下深平伏、(如主上御前、不伏是不然事也、) 次召召使、喚使王之間、王則入自東福門、經砌參進著膝突、余置笏於右、以右手給宣命、(以本文為使方、) 王取副笏左廻、經本路出自東福門了、○中略 次余目左衞門督、(件人在端座、石清水使也、) 督揖進寄余前、余置笏於奥、以右手授石清水宣命、實國卿置笏左、(若可置右歟、) 取副宣命於笏、右廻復本座、揖起座出自嘉喜門了、次目家通卿、給賀茂宣命、退出如初、(但置笏於右、取宣命也、) 次目實家卿、(件人在奥座也、而經座同進寄、失也、在奥座之人經端座之人後也、但是又近例云云、) 給松尾宣命、次目信隆卿、(件人在端座、) 給平野宣命、公卿使等各立座之後召召使、召稻荷使、卽重雅朝臣進著軾、余給宣命、(以右手給之、以下如此、) 次召使等同前、但兼兩社之使、取合宣命二通給之、(雖隔他社、尙如此、住吉、廣田是也、) 丹生貴布禰兩社宣命、以外記傳給之、舊例或召使於軾給之、今度且返給宮、次余起座經本路、自待賢門退出、于時戌刻也、今日始終發前聲、幣立之後、退出之時、可發否尋申攝政、(基房○藤原) 之後、不可止之由有敎訓者、抑台山衆徒騷動事、被謝申七社(伊勢、石清水、賀茂、春日、祇園、北野等也、) 尤可然、但長曆三年二月祈年穀奉幣之次、被申衆徒事於廿一社、尤可被准彼例也、今度被追長治天永等例云云、是非如此之次、臨時別被申之、其例頗不相叶歟、

〔顯廣王記〕治承二年八月十二日、祈年穀奉幣、伊勢王中臣定輔、忌部孝吉、卜部兼綱、丹生致賴、貴布禰

社致友、上卿藤大納言實國卿、奉行右少辨光雅也、依不造大極殿、於神祇官有此例、是先例也、

〔玉海〕文治三年二月廿一日癸巳、此日新年穀奉幣也、（中略）已一點、余（藤原兼實）及內府（良通、兼實子）共修祓、先是沐了、（中略）余先參內、（直衣、前驅衣冠、隨身布衣也、）相續內府（束帶、蒔繪劒、前驅八人、）參陣、依陰陽師遲參、暫而勘奏日時、見了返給、（行事辨親經所持來也、）暫之覽宣命草奏、依余候御前、直進弓場殿、內覽奏聞所相兼也、是雖略儀有便宜之說也、幼主（後鳥羽）之時、雖不可有奏聞之儀、於宣命者、猶別可奏之由、有確執之人々歟、見了返給、（中略）又申使王御馬之由、仰聞食之由、即於弓場殿返給上卿、上卿直召內記返給、（中略）上卿昇自小板敷、經南殿御後、出自右衞門陣、參神祇官了、余暫可候、然而聊依有可見沙汰事退出了、今日依御物忌、於御殿可有御拜、（上東對坤角間南面格子一間、垂御簾、敷小筵、其上敷中紺一枚、其西也、件間東邊立御屛風一帖、）仰實敎宗隆等可行御拜之間事之由了、御總角御裝束等料、經家朝臣遣召了、

〔吉記〕壽永元年九月二日庚午、今日祈年穀奉幣也、（中略）入郁芳門參神祇官、入北門著西廳南口西座、賴實卿在東（北面）南座、賴輔卿在西（乾）北座、次上卿藤大納言參入、自南方著東廳座、（西面）次通親卿參著、（自東著東具北座、）次上卿召辨兼忠問幣物具否、召外記弘康問使參否、次內記持宣命參進、次上卿（經壇上西行、當門間降壇下、）辨外記史等移著東舍、伊勢幣發遣之後、上卿歸著北門座、（於舍北辨以下出立、南上西面、）次內記進諸社宣命、次上卿雖被目通親卿、其座敢不見、且聞咳聲、且隨傍輩氣色、起居如初、於東著沓參進上卿座前、（當南面）脫左沓懸片尻、給八幡宣命退出、次賀茂使賴定卿依上卿目參進、（於座南著沓）當上卿座南、一揖昇、懸片尻給宣命、降立一揖退去、次松尾使賴輔卿起座、（中略）如前、次隨上卿目、予一揖起座、乍背著沓（沓在南）又一揖、東行至于上卿座南間、脫左沓、使懸其膝幷片尻、給宣命、退降著沓左廻、（不揖、爲關說歟、後日通河納言雖不可揖云々、前源納言云、脫片沓之後可揖云々、）出北門披宣命見之、天永於嘉喜門外披見之、天治復座披見之、二代所爲如此、又非無其謂歟、仍逐彼例所披覽也、社幷使付爲無違失也、次次官邦兼來、予給宣命、至郁芳門下取返宣命留了、近代之例也、強召具無其詮之故也、次參平野社舞殿、口儲手水具、（挾手洗紙一枚、令供人取之、）以洗手之後著舞殿座、（承敷）

(高禮中站小逕等、)先再拜、次插笏讀宣命、(其聲閑程)次再拜、次召社司給宣命、(天治々、尤不審事歟、中退出云、)次社司申祝、(先是寶前當中門、立黑漆案、傍立幣、)次申還祝拍手、次予退出、于時昏黑、秉燭之後歸家、(略)○中予供人二人(兵衞尉貞俊、馬允康業、)也、人々車、源羽林網代差縄、三品羽林網代、牛童遣之放埒歟、刑部卿幷予毛車也、

公卿仗座指圖事(略)○中

第一人自扉南合眼上卿、依目著沓進寄上卿座南、脱左沓懸片尻、給宣命退、不復座出門、於門外尋次官賜宣命、次官來車下申障者、取返宣命留、次官第二人、第一人進寄上卿前之時、直移著第一人座、是如先爲蒙上卿目也、次第如先、第三人又如第二人所爲、第四人乍本座當上卿眼路、仍不動座、此事爲故實、而上卿不存之、或以使召之、或每度開閣扉目使、或又使不存此儀惘然、

已上差圖幷作法、尋堀川納言之處、被注送之旨如此、此說爲指南之間、又不尋他人、此次第皆有其謂歟、今度人々所爲、若異說歟、但無其謂歟、於座者今度南北二行敷之、三品羽林云、或北上對座、或南上對座也、今日傍輩三人南北對座、三品一人西面也、(上卿當後如何、又其旨有自然有居直之氣、)當時座如愚案東上、雖不違一人、源羽林可著南而著北、最末參著人也、三品羽林可著北面著南、早參人也、是等相違歟、但有說々歟、不可守一隅歟、

〔吉續記〕文永四年八月五日、今日新年穀奉幣也、(略)○中上卿向神祇官、次南殿御裝束如例、格子下之、額間幷東第一間不下之、御拜座立廻御屛風、及晚伊勢幣使發遣之由告申、親朝奏之、自御殿有出御、(御束帶)敷筵道、兩貫首不祗候、(依重服也、輕服、)五位職事三人皆參、親朝候御裾、御草鞋予(○藤原經長)可獻之由奉行人相觸、藏人淳範可傳進之由、親朝下知之申子細、雖有出御淳範不承之、此條不可然、催可承進之由以親朝被仰下、此事都不可叶之由申、有逆鱗、雖有出御、依此事被扣之、太狼藉、猶申子細者、定有後悔歟之由雖被仰、猶不承引、被召淳範猶被仰下、拍子揚之間淳範承之傳予、事之次第太奇恠也、御笏光朝、(極臈則任傳之)於南殿光朝進之、淳範即逐電、可召淳範上之由被仰親朝、　八年二月廿七日辛酉、新年穀奉

幣也、○中略奉行職事逐電參神祇官、入北門（衣笠中納言被著門西腋）經廳東入西幔門、經南砌於第三間北一揖昇揖著座、（辨座南敷之北面、辨侍相從、）內侍座副北壁立廻屏風、忌部座西第一間敷之、內侍巳令參未下車、忌部依未參也、再三被催、遲參奇怪事也、頃之忌部參仕著座、次內侍自東門令參敷筵道、女官指几帳、次內藏寮官人內外宮御幣送文覽忌部、忌部先裹內宮御幣、（加錦定入段也、錦藏人方沙汰也、）女官奉裹、（加送文撤尺等、）次外宮（色々絹六段）裹了、寮官以薦裹之後、女官覽內侍、次寮官捧持奉置東第一間、此間予平伏、（諸社幣以史令裹也、）次揖起座、上卿以召使被召、予於本路持笏於軾一揖、被問幣物具否、申具之由一揖退出、○中略次忌部二人捧持內外宮御幣出東門、此間上卿予等平伏、次召使王給宣命、上卿伊勢幣發遣之由、可申內裏之由被命、予下知之、

〔伏見院御記〕正應二年二月十二日壬戌、依明日新年穀奉幣、自今日神事也、　十三日癸亥、今日新年穀奉幣也、上卿右近大將藤原朝臣（家○實）參著陣、爲兼朝臣書定文、頭中將冬季朝臣奏聞三使、中宮權大夫、（通入道賴）、左兵衛督、（春日、雅有、）基光公世等卿也、頃之奏宣命草、見了返給、卽又奏清書、著直衣見之、（廿二社入一筥、大神宮頭橫入之、）覽了返給、上卿給之向神祇官、秉燭之後、冬季朝臣告伊勢幣發遣之由、卽著東帶奉拜大神宮、（淸凉殿東端間裝束、立廻大宋御屏風、其中敷疊、其上敷半疊一帖、於屏風外冬季朝臣獻笏、任宮可獻之、而笏許取之失也、）兩段再拜了還入、（於屏風外返給笏、令藏人以笏可受之、而取笏授藏人、人歟、諸臣之不可然也、）

〔薩戒記〕應永三十二年二月十三日甲寅、右衛門督（敎豐）以狀被問新年穀奉幣使間事、　五月一日庚午、傳聞今日被發遣新年穀奉幣、○中略公卿使於神祇官賜宣命之時、依社次第召之云々、又件使座北上東面一列也、近年如此云々、如何、但又或儲四ヶ座事有之云々、若依上卿命歟、　三十三年三月十日甲辰、左頭中將隆夏朝臣來臨、明日新年穀奉幣事、藏人方事、藏人右少辨經直奉行也、而於兼日雖奉行之、當日參事依所勞不可叶云々、仍我可申沙汰也、仰詞事被尋問、大概示之、先公仰云、可被發遣新年穀奉幣日時使令定申（歟）、日時奏聞了返下、仰云依勘申（歟、但此事或以辨奏之歟、可在上命、）宣命奏聞了返給、仰云、御

覽シツ、使王御馬率聞食ツ、已上此外無殊事歟、拝御拝之時、南殿御格子、近年東一間許上之、不可然、額間同可上之、自件間職事持參御笏、自御後可獻之也者、

永享五年二月廿八日壬子、今日被發遣新年穀奉幣也、予(○藤原定親)勤春日使也、仍巳剋著束帶(如例、蒔繪劔)參内、(略○中)納言直被向神祇官、予相從之、(略○中)上卿被入官北門間、少外記内記列立西方、右少辨重政立東方、納言不及揖、剩不下裾被過、予欲向辨相揖之處、辨乍持裾於左手立、甚不足言、仍予又不能揖、只下裾過了、若各不存出立之由、只假所列立歟、雖然上卿已下猶可揖歟、迷惑體也、上卿被著北門内東腋座、此後勸修寺中納言、(經成、依在門内、)予(在門外、)四條宰相、(隆夏、)前右兵衞督(隆遠)等、著北門内西座、(此座須敷四ヶ座於門西)(敷上也、今日不然、北腋北庭、北上東面一列敷之、予先以隨身問勸修寺中納言云、予使座可爲此定)(使者、納言答云、今日如此可候歟、此答頗不審、去々年納言予共參入、納言殊張行令敷四ヶ座、今日又)(被答之旨如此、此座之儀相違如何)略　納言尋事具否、令持伊勢宣命於少内記、就北廡行事、伊勢幣發遣了、歸著本座、召諸社宣命、次以召使被示合勸修寺中納言云、使次第可召歟、社次第可召歟、納言示合予、予云、於公卿者、使次第可然歟、納言被答此旨、次上卿次第召之賜宣命、今日上卿座有崩下、其前敷軾、使々著件軾賜宣命、頗違例也、仍予進上卿前、不揖、乍著沓突膝、置笏賜宣命、取副笏出門、於門外招次官、仰云、雖可授宣命、長途之儀、先例於宣命者使持之、於社頭授次官之例也、仍予隨身可下向之由示之、使承諾、次予歸蓬蓽、欲乘車之間、右少辨重政在後方、予立歸揖乘車了、(略○中)今日主上有御拜、如此御拜今日初度也、予見南殿御裝束、東第二間御格子上之、自餘下之、此事如何、常儀第一間、幷額間許可上之歟、

廿九日癸丑、天晴、程出門、申始剋著南都、乘燭之程著束帶(令帶劔)乘輿參社頭、(入慶賀門、)次官(越中前司友長)未參、然而於宣命者、予自京隨身、仍取副宣命於笏、欲著舞殿座、(先是御幣到來之由社家申之、)之處、使座設樓門下云々、此事先例歟之由尋之、社司申云、近年皆如此者、太違例、雖可令改敷于舞殿、事々及夜景、且近例皆如此云々、仍著移門下座、(先是撤劔、是祭之時、上卿已下撤劔、昇入樓門、慣此儀、予忽撤了、事既不思得、)(於舞殿者帶劔不可有煩事也、依樓門下頗恐煩者也、猶可勘先例、其間暫不可爲)例、再拜了讀宣命、次再拜、(其儀皆如去々年五月平野社儀、)神主申祝、歸出拍手、予如形拱手、則可起座也、然而予有私

奉幣、仍猶在此座、祝師時元持來幣、兩段再拜、了參若宮奉幣、了歸宿所、

〔公名公記〕永享八年二月十二日、今日新年穀奉幣發遣日也、○中略 直出禁門、於陣頭乘車、(四條宰相已下外記史相從也、)參向神祇官、(爲發遣伊勢已下幣也、)於郁芳門舊跡(大炊御門大宮、)下車、(先招召使、尋事具否、是非作法、內々爲知子細也、故實也、召使云、春日使幷內侍來參者、事具了後、可申案內之由仰、官不及下車、入北門之間、不及其□云々、閒而官掌外記又不見、知何、但於聞幣小時、召使來申事具之由、仍則下車也、)入北門、(門外辨已下有出立者、垂纓揖、可過之、而辨命參此御幣、外垂纓所入門也、)到東廳座南、(古來柱內構板敷、(中略)其上敷座、上卿所意也、而近代此門下板敷、東西共雖然、於座者、猶守舊規、可敷柱內壇上也、爲任諸司沙汰、著砌下座了、剩又著其座之路、今日經座東北、自南著之、縱雖敷座於砌下、猶經西自南著之條、可宜歟云々、敷座所之近□路敷々、只如泥土、不可說不可說、不可爲後例事也、爲愚昧之質、行公事、頗招恥之基歟、而欲補公事之闕、而已、呈圖以雖是非於左行、以謝遂追後日此比矣、)北面揖、脫沓、突膝居寄、乍向北又揖居、向西刷裾、(以上作法、准陣座可知歟、)余召使直沓、參敷軾、(所司敷軾、不及上卿命、謙敷之例、宜陽殿平座之時又如此、)次公卿使(勸修寺中納言經成卿、葉室中納言宗豐卿、右衞門督隆盛卿、兼時也、四條宰相隆夏卿、)著門南庭西方、(南上東面、上卿著座已前、早參使等、雖可著門西腋柱內座也、有板敷者、其上敷座、可爲東上南北對座也、)然而予欲入門之間、勸修寺中納言已下來、向門下云、公卿使座事、掃部寮所敷、東西對座也、是雖存異說、不似常儀歟、仍相尋予所存、可意得由存之間、暫猶豫云々、予云、東西對座儀、雖異說存、猶可叶歟、然之時不在背、上卿之人無便于目許歟、以常儀南北對座可宜乎、(長和二、五、廿四、臨時廿二社奉幣時、坊城入道內大臣殿御記云、門西腋對座東上云々、是南北對座意也、)者、皆以諾之、又勸修寺中納言問云、賜宣命之儀、社次第歟、官次歟、予答云、可爲社次第也、(一家說儀無所見、而當家公事被執筆司、流之說、仍任嘉元二後稱念院關白、于時左大臣所爲存社次第之故也、)者、如法不請之氣、又云、爲公卿第一、雖可著端座、依社次賜宣命者、春日使最末可進歟、然者先可進人等、可無便宜歟者、予云、誠不便歟、但門廳座、今體以外狹少難堪歟、今年門南庭一列敷座之儀出來歟如何、右衞門督去々年則如然者、予云、末代之法、依某所便宜有背古記事、不可勝計乎、殊近年有一列之例者、不能左右歟、但非禮以外事歟者、人々入與、大略一同、則敷改座了、後聞門廳座聊雖狹少、柱內對座近代無相違云々、所詮依人々所爲、古儀與新儀相交也、然者今日猶敷門下柱內へカヘリケリ、予庭座事發言、太無益歟、可謂悖禮之上者、於子孫者、云使節、云上卿、若可勤之者、忽雖庭中一列之非禮、可守門下兩座本儀者也、

公卿使著座之後、予召召使、仰辨可召由、（其詞、右中辨コナタニ、）幸房來軾、予問幣物具否、（其詞、幣物ハ具タリヤ、）辨申具之由、予目許辨退、次召召使、仰外記可召之由、（其詞、外記召セ、）權少外記清原忠種直參著軾、（違陣儀、）予問使々參否、（其詞云、使使ハ候ナ、）外記申候之由、此次使王申御馬事、聞召之由予可仰外記也、然而忘却不仰之、已奏宣命草時、同奏此事之間、還陣可仰外記之處忘失、於本官可仰之處又失念、遂不仰勅許也、子細甚不可說之事也、旁有若亡散々也、次召召使、仰宣命事、（其詞云、內記ニ伊勢ノ宣命持テ參レ、）少內記安倍盛時宣命（入筥）入北門立北廳北簷、（宣命筥不置上卿前、持參直立、此所定例也、）次予居向北揖、又居向南著沓、起右廻更北面揖、左廻南行著東舍代座、（近代不據輕代空庭敷座、散々事也、其儀見圖、）次右中辨幸房著座、（予座列官西著、予問云、外記史同列可爲南上東面上者、幸房云、近代如此云々、猶不知由緒事也、）次外記著座、此間內記置宣命筥於予前之後、使著座、（外記南方也、依家史所也、但往昔內記モ著此座歟、）次予仰辨令催幣、辨仰史、史不知案內不及仰、史掌不足言事也、此間內侍參入輦車於北廳北面、（其間公卿使著座前、頗無骨之體也、）頃而伊世幣發遣、（大中臣卜部齋部等、辨幣物替歟、）予以下平伏、出東門之後起揖、次召召使、欲召使王之處、不待使王召則來軾、尤奇恠也、予置笏取宣命賜使王、次目內記令取筥、次外記辨等起座、辨出立北廳東簷下、（外記史等不見如何、）予揖起座、著沓經本路、（向辨相揖過、）直歸著北門座、次召召使、仰諸社幣事、（其詞云、內記諸社宣命持テ參レ、）內記盛時持參宣命、（入筥）置予前、次予正笏目賀茂使、（常儀先召石清水使也、予兼帶之間如此、）葉室中納言、○中略 起座來予前、（無板敷之間、不及懸膝儀著軾也、）予撰出宣命、（賀茂紅紙也、仍不可混餘社之間不書銘也、又舊儀皆封宣命等、時解賜之也、然而近來無封之儀也、）賜之、納言置笏取之、取副笏直出北門給、次官歟、次予目松尾使、右衞門督（隆盛卿）起座來軾、（如元）予給宣命、（見銘賜之也、）次目平野使、四條宰相（隆夏卿）來軾、予給宣命、次召召使、欲召稻荷使之處、使進而參入之間則給宣命、○中略 次召使（行嗣）於北門下、大原野已下社次第召使々、（地下五位等也、）不待予命所召也、（普通之儀、每度受上卿命可召其使々也、今日召使行嗣行爲頗違意也、）使々任社次參進給宣命、（一使兼兩三社之時、撰取其社之宣命一度賜之例也云々、使友長遲參之間、召外記給件宣命、仰可傳賜由也、又丹生貴布禰宣命同給外記、是定例也、古儀皆直召兩社使賜之歟、）次召內記令撤宣命筥、先之取副石清水宣命於笏、內記退出之後、居向北方揖、更居廻南、著沓經本路、出北門、召次官美作守親尙、（予前驅也、去八日任受領、）給宣命、先之辨外記史列立門外、（西腋南上東面、）予左

廻向、辨揖、辨以下答揖、予右廻東行、出郁芳門乘車、大宮南行、於二條邊扣駕、立入或在所、解脫裝束、乘輿、密向南山、（普通之儀、束帶乘車、直可參向也、而緯不劣易、偏存省略、近來之風也、但不可爲後例）酉刻登猪鼻、步行入宿坊、（號阿彌陀院、淨華院末寺也、件長老借之矣）之、（社頭近々、究竟所也）暫休息相催社家之處、奉幣事、每度自兼日蒙催致用意之處、奉幣無承旨、仍臨期不可叶者、又遣人云、自官方必相觸事也、而爲使更雖不可知、事遲怠不可然、早可催具之由堅仰也、及夜社務送使者云、祝師等在遠所、定及曉天歟、今暫不可參仕、事具程可啓案內者、不慮成一宿之構、臨期迷惑了、其後度々雖加催促、猶不具歟、　十三日、自早旦連々相催社家、然而猶無音、不可說事也、未刻許適申具之由、仍著裝束、（帶劒、前駈一人如昨日）參社頭、於樓門外解大刀入門、（先可洗手也、然而手水不及用意云々、雖可責出、彌遲々甚歟、無不淨疑間、偏仰冥鑒了、縱不可然事也）到舞殿座後、（舞殿中央座數也）乍立揖脫沓、懸膝著座揖、直足纔寄裾、次再拜、次插笏於腰、（此間持宣命於左手、如笏持也）次披宣命讀申、（不及出聲）次如元卷之、拔笏又再拜安座、（或先兩段再拜、讀宣命後又兩段再拜、但兩說之間今日如此）目祝師、祝師來予前、予置笏給宣命、祝師給之置幣於案上、冠黃衣之神人、敷席於予前、祝師於其席上向正殿再拜、次向右腋殿再拜、又向左殿再拜、次著座、申祝之後拍手、予置笏同拍手、次祝師又如先再拜三箇度了退、（祝師之作法定存例歟）次予揖著沓揖、右廻出樓門、（於門外可帶劒歟、而略之）經本路入宿坊、改裝束下山、（以便宜聊巡禮、今度用懸路反步行）於山下乘輿歸京、于時申刻歟、窮屈失何方云々、

〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、（中略）御拜之儀如常、但南殿御殿通用之間、御劒次將不入之云々、奉行兼日先雖被催促、庭田中將重賢朝臣、前日稱不可入之由不被催之云々、此皇居（一條東洞院伏見殿）南殿御殿通用故也、本官之儀可尋注之、式事於四度幣被下者置之、祈年穀奉幣之時不置式者也、今日一篇申此分、又於內裏置硯之時、參議之右方ヨリ可置之由存之處、自左方可置之由、上卿參議被示之間、今日自相公左方置御硯云々勿論事也、參議之上方ヨリ置之也、土御門殿皇居之時參議之座東上北面也、仍東方ヨリ置之、今此皇居（伏見殿）陣座參議之座東面北上也、然間自北方可置事也、參議起進上卿前之時、硯ヲ押遣ニ就テ有進退作法之者也、局務外史退出之時、於茅屋

宣命

被改朝衣被語云、今日奉幣使次官事、自久我前內府、可召進秀直之由、象日被申之間、定文ニモ此分也、內記ニモ宣命清書ニ、此分書入之處、今朝俄秀直故障之間、仲重朝臣可召進之由雖被申、已宣命已下可爲事煩之間、只不改定文等、雖然於宣命者、名字之處、以押紙書付仲重者也、事爲聊示之由被物語者也、

寶德元年八月廿三日辛未、是日被發遣祈年穀奉幣使者也、〇中略 神祇官儀、上卿右中辨康顯參時、召使久親秀國內侍等參之、大內記在治朝臣同參之、先於北門持參伊勢宣命、相從上卿後參進東屋代廈、事畢上卿歸著北門、大內記持參諸社宣命、畢、每年如例歟、此條事不遑于尋記、

〔朝野群載內記十二〕祈年穀

天皇我詔旨止掛畏支某大神乃廣前仁恐美恐美毛申賜へ止申久、農者民之天奈利、民者國之寶奈利、而今年乃春始女雨澤隨旬天年穀豐登奈留へ支由乎聞食シ悅給不事在利、是則大神乃厚御惠美廣御助奈利止所念行天奈幸、故是以吉日良辰遠擇定天、某官位姓名乎差使天、禮代乃御幣遠令捧持天奉出給布、掛畏支大神此狀遠平久安久聞食天、東作乃春天與利西成乃秋日未仁、天旱蝗風水乃患不聞須、農圃蠶養乃業如意留天、之天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐爾夜守日守仁護幸へ奉賜比天、四海淸肅仁萬民富饒仁護幸給へ止恐美恐美毛申給波止久申、

寬仁三年二月廿日

〔柱史抄上二月〕祈年穀奉幣

宣命弁ニ例狀新作也

天皇我詔旨止掛畏岐其大神乃廣前爾恐美恐美毛申賜者止久申久云々、天皇朝廷乎寶位無動常磐堅磐爾夜守日守爾護幸倍奉賜比天云々、恐美恐美毛申賜波止久申、

年月日

廿二社有辭別之時、隨上卿命書載之、但丹生貴布禰等社、祈雨止雨之外、不載他事云々、

宣命載卜部有勅難事

寬弘七年九月十一日御記曰、辰刻沐浴、午剋治部卿藤原朝臣、令藏人季任奉幣宣命草覽了令給、仰云、前例不載卜部名、而今日書之、令問其由、令申云々、召間內記菅原資高、令申、偏任神祇官差文、不尋先例書載之由、仰令改貴、暫改書令奏覽了、令入省院、發遣使、則刻限出南殿、拜伊勢大神宮、

宣命文勅難事

延久三年三月十四日、大內記成季進宣命草、頭中將實季朝臣仰云、宣命文作雨澤順旬之句如何、先例順時也、入新年穀狀也、而載蠶養之事如何者、余返給宣命、書改件文等奏覽之、次奏云、件兩條事、新年狀先例多作載、又有不載之例、仍書改所奏覽也、重仰云、順旬之句、御前所候之舊宣命、屢令作載、又蠶養事等、只如本清書之時可書載者、

〔左經記〕長元元年二月廿一日、參關白殿、〈○藤原頼通〉次藤中納言〈朝經〉被參、令余申云、明日新年穀幣使、可令定奏之由今朝有仰、〈○中略〉又被申云、宣命趣如何、仰云、年穀豐祭、幷今年可愼御坐之由頻有恠異、可無事故之由等可令作者、奉仰被退出了、

〔後二條關白記〕寬治六年二月十六日己巳、晚頭頭辨來云、新年穀奉幣被仰、承給之由承了、　十七日庚午、黃昏參於內、著右仗、余行之事如常、被仰宣命趣、辭別等仰事、三合年天下公家可愼之由所被仰也、　廿三日丙午、申刻許參右仗、〈○中略〉卽內記參、仰可令獻宣命之草之由、起座奉之、付御在所奏聞返給、其後內覽披見之間、傍字者可載宣命歟如何、大內記申云、舊宣命合申被載之由、又問左大辨爲之如何、而无先例之由大內記所申也、左大辨申云、最可候由所申也、其後令申殿下其由、良久歸來、已及黃昏、傍字不可載宣命、次申云、種々發災孽五字者如何、令申先例候之由、然而五字不可留之由所被仰也者、明日宣命經內覽、而早可被行之由所仰下也、卽仰清書由、內記出了、　廿四日丁丑、參右仗、〈○中

召大内記、仰云、昨日二字可被直入云々、直了奉之、仰可令獻宣命清書之由、承仰天退奉上、一々開見了、昨日不經内覽、早可被奏、仍令持内記、○中略

裏書宣命

天皇我詔旨良掛畏支大神乃廣前仁恐美恐美毛申給止波久申久、食者民之天奈利、農者政之本奈利、方春戒節天人以天耕種須、而風雨順時天禄穡有年牟事波、大神乃厚支御助計廣支御意可在止奈利所念行須天奈、故是以吉日良辰乎擇定天官位姓名乎差使天、禮代乃御幣令捧持天奉出給布、掛畏支大神此狀乎平久聞食天、東作乃春奧利西収乃秋仁、天風水旱蝗乃難不聞須、農業蠶養乃勤叶期天、天皇朝廷乎寶位无動久常磐堅磐仁夜守日守護幸給比天、天下泰平仁海内清寧仁護恤給止倍恐美恐美毛申給止波久申、

辭別天申給波久、今年波公家可有御愼加上仁、曆運乃所推呂已當三合天、種々乃厄難可發農由乎有司上奏世利、其乃咎徵不輕須止聞食天、畏懼大坐之天、殊凝叡誠給天、令致祈請布、大神此旨乎聞食天件等乃不祥厄會乎未兆之前仁早仁拂退給天、玉體安穩仁黔首歡樂仁護幸給止倍恐美恐美毛申給止波久申、

寬治六年二月廿四日　　作者大内記有長

〔中右記〕嘉保三年二月廿六日丁亥、今日新年穀奉幣也、○中略宣命有辭別、今年御愼之上、天變地震頻至、其恠可无事妨由云々、

〔永昌記〕大治元年二月廿七日癸亥、今日有新年穀奉幣、上卿藤大納言、詔書草、實光朝臣奉之、辭別大神宮正殿高欄上白玉黑玉各々一顆破損、被改作奉之由也、

〔中右記〕大治二年二月廿三日、今日新年穀奉幣也、二箇度延引也、○中略宣命辭別、心柱榊被破損事、神祇官燒亡事、大神宮穢出來之由、奉幣度々延引由、皆被載辭別云々、　四年七月六日壬午、新年穀奉

幣也、上卿內大臣、〇源有仁行事右中辨師俊朝臣、外記範兼、史孝忠、大神宮宣命有辭別、度度穢氣驚思食由云々、八幡宣命辭別、垂御宮被奉送由云云、諸社辭別、近日炎旱之事云云、（置御宮行事、史清原季俊於八省東廊、渡奉幣行事奠、）未時使立、宰相口口師時伊通三人使、八幡實房朝臣、稻荷時俊朝臣、出御南殿有御拜云云、　五年二月十八日辛卯、今日祈年穀奉幣也、予依爲上卿、早旦沐浴祓、辰刻參內著仗座、〇中略頭中將忠宗來仰云、天變頻示、佐異屢呈、司天所奏、公家御愼不輕、可无事咎由、諸社宣命、件旨可載辭別者、是去夜進天文奏之間有件旨、只今俄所被仰下也、

長承二年二月十八日、藏人兵部大輔資信入來云、大神宮佐異解下給、早勘例可行軒廊御卜也、來廿一日祈年穀奉幣也、其前被行御卜、可被載宣命辭別之故、所被忩行也、則可勘例由下大外記許了、廿日丙午、今朝爲行軒廊御卜參內、〇中略召外記筥入本解卜形等、付本奉行藏人兵部大輔資信奏聞、〇中略明日祈年穀奉幣辭別ニ可被載由依被仰下、所忩行也、　廿一日丁未祈年穀奉幣、〇中略昨日軒廊御卜趣、被載伊勢宣命辭別云々、

〔兵範記〕仁安三年七月十七日丙子、被仰下令勘申祈年穀奉幣日時由、〇中略

伊勢別宮月讀宮有七日穢式日御祭延引事　賀茂別雷銀花開事

平野社松樹折事

已上以軒廊御卜趣被載宣命、

〔玉海〕嘉應二年二月十四日乙未、兼宣命可有辭別之由有其聞、而未被仰下、〇中略未刻許賴定朝臣送書狀、是宣命辭別事也、〇中略大略衆徒事被申七社、又豐受宮、松尾、日吉等佐異事也、　十五日丙申、此日祈年穀奉幣也、〇中略大內記光範參軾、余仰云、宣命草持參、畢、光範退持參之、余披見了、（一通諸社宣命、一通大神宮以下七社辭別、一通松尾辭別、并三通也、）返給令讀之、一々讀了、仰可內覽之由、光範持參殿下、（于時御坐三條堀川少將通能朝臣家也、）有敎刻歸來申云、殿下仰云、台嶽衆徒事、被載七社辭別、而蜂起未止之句可被書直、是則大衆已和平之故

也、件大衆事、日来雖レ聞二騒動由一、而今依二且食一始所レ聞二和平之由一也、余仰云、早可レ改者、〇中略 其聞家通卿語云、件大衆両方相分、或和平或騒動、而座主付二印鎰於寺家一、忽欲レ離レ山之間、去十二日一向令二和平一了云云、山上無事、天下之悦也、〇中略 抑台山衆徒騒動事、被レ謝二申七社一伊勢、石清水、賀茂、春日、祇園、北野等也、尤可レ然、但長暦三年二月新年穀奉幣之次、被レ申二衆徒事一、於二廿一社一尤可レ被レ准二彼例一也、今度被レ追二長治天永等例一云々、是非レ如レ此之次、臨時別申レ之、其例頗不二相叶一歟、

〔吉記〕承安四年二月十三日庚午、今日新年穀奉幣也、〇中略 伊勢宣命有二辭別一、外宮狂男事也、少外記成棟草レ之、

〔玉海〕承安五年二月七日己未、此日新年穀奉幣定也、　九日辛酉、宣命辭別事、終日無音、仍尋二遣光雅之許一曰、宣命辭別有無如何、若明日可レ被レ仰者、聊有二相憚事一、頗日當二違忌一、故人曰、忌日不レ従二神事一、不レ従二佛事一云々、然者明日宣二下辭別事一者、即可レ難レ従二神事一、依レ可レ有二其憚一示二此由一也、然者明後日參内之次可二宣下一、但事尤可二解怠一、仍且直可レ仰二遣大内記之許一也者、返報云、諸社恠異等多以可レ被レ載、而他人奉行占形等尋集之間自然懈怠、任レ被二仰下一之旨、内々可レ仰二遣業家之許一、於二宣下條一者、可レ期二明後日一者、　十一日癸亥、此日新年穀奉幣也、上卿予、辨經房、職事光雅、〇中略 光雅就レ軾、仰曰、大神宮寶殿萱居事、荒祭宮坤角口木顛倒事、豐受宮朝夕御饍舍前、蛇虫喰損事等可レ載二大神宮辭別一、又賀茂別雷社御釜鳴事、可レ載二賀茂辭別一、又疱瘡事、可レ載二諸社宣命一者、

安元二年九月廿三日乙丑、此日新年穀奉幣也、〇中略 宣命有二辭別一、天變恠異月蝕等事云々、

〔山槐記〕治承四年九月十二日辛酉、今日新年穀奉幣定、〇中略 後聞奉幣宣命被レ載二頼朝反逆一、　十月十七日丙申、今日改二勸新年穀奉幣日時一、〇中略 此奉幣四箇度延引、十月例希代事也、〇中略 伊勢高宮御装東鼠喰損、調改被レ獻レ之、來廿八日奉幣次被二副獻一也、予問曰、可レ被レ載二辭別一哉、答云、於二恠異條一、先日延引之時被レ載了、調進之由者不レ可レ被レ載、只書二日六一可レ被二副進一之由、隆職宿禰所レ申也者、〇中略 次召二内記一、少内記成行來、仰二宣命事一、即持二來草一、不レ書レ入二辭別一、只改二秋時狀一也、内記申云、大内記依レ所レ勞、候二宿所一、密々申云、先

日延引度、宣命清書了、少內記成棟持參舊都○京都了、此宣命辭別不改直、只改時節所許了、然者可摺改其所許之由、內々可仰遣成棟許、今日清書內覽定令申請歟、如清書可存此儀也、事雖不當、末代遠都、○福原都公事只可隨便宜事也、廿七日丙午、今日被發新年穀奉幣、自舊都神祇官被發遣、

〔吉記〕壽永元年九月二日庚午、今日新年穀奉幣也、○中略上卿被示予云、日前宮恠異事、可載諸社宣命之由職事有下知、可何樣事哉、予答申云、諸社恠異、差其社被載辭別者常例也、滿遍被申之條、若勘先例、殊有議定被仰下歟、至于日前宮非廿二社之內、尤不審事歟、上卿召大外記賴業被尋問、又召頭辨親宗朝臣被問之、可被止之由申云々、頗無四度計沙汰歟、○中略宣命辭別被載東國北陸反逆事、

〔三長記〕建永元年八月一日庚戌、以時兼申新大納言御方、攝籙基云、新年穀奉幣宣命辭別事、先例上卿被仰下內記歟、而近例職事直內々仰職事、不可然歟、但可依近例者、可隨仰可被載事注出持參候、被仰云、可下知、仍注折紙進了、注進書樣此體也、

大神宮

去四月十四日、別宮荒祭宮帛御被壹帖濕損上、爲鼠喰損事、

神祇官卜云、依神事違例不淨所致之上、可有公家御愼及天下口舌病事、

陰陽寮占云、依神事不淨所致之上、公家非愼御藥事、從艮巽奏口舌兵革事歟、

去六月月次祭幣馬於路次斃事、今度可被進件替馬、

平野社

去五月廿三日未時、口徑三寸、長一丈五尺口木枝折落事、

官卜云、依神事違例不淨所致之上、可有公家御愼及恠所口舌驚恐病事歟、

寮占云、依神事不淨所致之上、有天下疫疾之憂、從震艮方奏口舌鬪諍事歟、

北野宮

去五月晦日、神殿巽方棟片俣裂落、打破東廻廊事、

官卜云、依神事違例不淨所致之上、佐所有口舌事歟、

寮占云、依神事違例、穢氣不淨所致之上、公家非愼御藥事、禁裏可被誡火事歟、又從佐所幷震巽方奏口舌事歟、

宣命辭別事、定日可宣下也、然而兼日宣下又可無難、或當日定之時、卽當日宣下歟、重令奏之、

〔明月記〕元仁二年三月四日、巳時許參九條殿、(○藤原兼實)大殿卿參會、(○中略)相共入見參之次雜談、去月祈年穀奉幣、左府(○藤原公繼)當日定、大內記覽宣命草、大臣問云、辭別何書哉、申云、廿二社一同被申時、與書流例也、一兩社有辭別時、別草進也、聞之甚有不審之氣、重云、伊勢宣命爭不別乎、申云、伊勢猶於草者無各別之儀、淸書之時、諸社所書分也、伊勢一社奉幣時、猶其社ト書、又草奉書伊勢由、兩說候之由被陳之、聞之甚分明之由更有感氣、每年蒙々、中納言中將可行給此事由兼有沙汰、改之被行祈年祭了、

〔平戶記〕寬元三年七月廿三日乙卯、今日被發遣祈年穀奉幣使、(○中略)後聞右府(○藤原兼平)御參行、天變事、被載宣命辭別、日月蝕事、同可被載哉之由有沙汰之處、日蝕不現、月蝕又不現、或又雖申現由、事在兩端、不可被載之由有殿下仰云々、此事如何、月蝕正現之條勿論、而御祈僧正有申旨歟、被御引級之故歟、人々成奇云々、

〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、(○中略)今年甲子、去年三分彗星出現等事、被載宣命辭別者也、職事已下上卿折紙寫之見左、

今年大歲在甲子、迎一元、去年大陰與害氣已三合、彗星示災、司天示變、恐懼非一、謹愼多端、仰明神之加護、致蒼生之安全、水旱疫疾永彌、賊惡兵革悉銷、退可來之屯難於未兆、攘可臻之災殃於未然、帝業萬機之務无闕、聖祚千歲之基有餘、可書載宣命辭別矣、

奉幣使及奉行官人

〔玉海〕安元二年九月廿三日乙丑、此日新年穀奉幣也、○中略宣命有辭別、天變恠異、月蝕等事云々、

〔吉記〕文治二年閏七月十四日己未、是日新年穀奉幣也、異虫(小蝗)降事、被載廿二社之辭別、先日被行御占之由、辰巳未申方角神祟之由占申之、然而御占之趣殊重、仍不限彼方角、凡所被辭別申也、北野社有靈木顚倒事、仍辭別被副載也、

〔新儀式四臨時〕新年穀事

若有可祈年穀、上卿奉仰、先以陰陽寮勘吉日、文幷十六社(或社員增或不定也)使差文、(伊勢使依卜不載之、賀茂社必用公卿、自餘或侍從、)又丹生、貴布禰二社使、神祇官差之、上卿不差奏云々、

〔江家次第五二月〕新年穀奉幣○中略

上卿仰參議令書、○中略參議書畢奉上卿、

伊勢(使可卜定、不書入)　石清水(源氏四位)

賀茂上下(參議一人、次官五位一人)　松尾

平野(以上同賀茂)　稻荷(四位)

春日(藤原氏五位)　大原野(同五位)

大神　石上

大和　廣瀨

龍田　住吉(以上五位)

日吉(近代被加五位)　梅宮(橘氏五位)

吉田(藤氏五位)　廣田

祇園(以上五位)　北野(菅氏五位、不論大業非成業)

丹生　貴布禰(以上令神祇官進差文)

〔朝野群載十二内記〕廿二社奉幣次第(中略)

奉幣使　伊勢(王中臣忌部各一人)　石清水(源氏四位)　賀茂(公卿一人五位一人)　松尾(公卿一人五位一人)　平野(上同)　稲荷(四位一人)

丹生、貴布禰(神祇官五位各一人)　自餘諸社(五位各一人)

〔神祇官年中行事 二月〕新年穀奉幣之間(中下旬)廿二社幣物事、以本官請奏参日付官、但伊勢幣物也、請奏内蔵寮之沙汰、伊勢使王(外記沙汰)中臣一人、忌部一人、卜部一人也、差文長官加署、同付外記、丹生、貴布禰両社使、同本官差文也、(廿八日進中臣知行、忌部事口、卜部口名、巳上本官差文、)

〔建武年中行事〕新年穀奉幣、この月よき日して奉らる、廿二社なり、上卿陣のさにて使をさだむ、(中略)入幡使は中納言、賀茂、平野、松のを、春日は宰相、その外は四位五位の使、ならびに公卿使には次官あり、外記これをもよほす、

〔夕拝備急至要抄上 正月〕一新年穀奉幣

上卿(一上以下次第相尋、三公各有故障之時、大納言奉行、)　弁(輪轉奉行之、幣料相催之、)　使(公卿巳下、随外記散状催之、)　伊勢(四姓使、外記催之、)　八幡(中納言)

賀茂(参議)　松尾(参議散三位)　平野(同)　春日(同)　稲荷(四位諸大夫、外記催散状之時、職事別催之、無)　自餘社(諸大夫、外記役、五位勤之、)

官外記(中略)　御剣将(中将、有故障不参者、使将、)　御笏役人(頭蔵人勤之)　御草鞋(同前)　脂燭殿上

〔年中行事抄 二月〕新年穀奉幣事(中略)

斉光卿献天徳音云、奉幣諸社時、忽上卿有障、若不可延日之時例、亦寛平年中、以非参議右大弁藤原有穂朝臣(為使、中納言)為上代被行、是稀有例也、

〔小右記〕天元五年五月三日甲午、参内、今日為新年穀奉幣諸社、(中略)松尾、平野等使、参議申障不参、仍差遣侍臣(松尾蔵人、平野下官、中略)下官参平野、戌時許帰参、令復奏之宿侍、

永観三年二月十七日壬辰、早朝参内、被立新年穀御幣使、(中略)賀茂、松尾、平野等使、参議申障不参、仍以権中納言保光為賀茂使、以三位義懐為松尾使、以三位道隆為平野使、

寛弘二年五月十九日丙寅、定申新年穀御幣使、　廿六日癸酉、○中略申二點幸八省右大臣進東福門給伊勢宣命、少還御與歸御本宮、右大臣於仗座給石清水等宣命、石清水使權左中辨道方、依使闕怠、奏事由、所差遣也、賀茂使參議輔正、年已八十有餘、不可被差此之使、左相同陳此旨、松尾參議行成、平野參議正光、自餘不記、了酉刻許退出、

〔法成寺攝政記〕寛弘四年二月九日丙子、參內、○中略著陣座、定新年穀御幣使、　十七日甲申、午時三剋、參內奏宣命草、次奏淸書、使上達部、左兵衛督、宰相中將等、相共未三剋著八省院、立使等、宰相中將松尾、平野相兼、大和三人也、各相兼、申二剋勤申時剋、事了退出、

〔小右記〕長和五年五月廿一日甲子、今日新年穀使立、　廿二日乙丑、頭中將云、○中略昨日御幣之使、宰相二人申故障、仍以三位二人能信、兼定、被差遣也、右大臣○藤原顯光奏云、朝經四位爲參議誠雖下﨟、可爲賀茂使歟、可隨仰者、攝政云、雖非參議、以三位可爲賀茂、松尾使者、右府申請太無便、只依位階、不依參議耳、

〔左經記〕長元元年二月廿一日、參關白殿○藤原賴通次藤中納言朝經被參、令余申云、明日新年穀幣使可令定奏之由今朝有仰、使差文日時文等可內覽歟、又使可差諸大夫多故殿○藤原道長御服也、爲之如何、被仰云、使定文等不見給、早可被奏定也、又給素服之家司等之外、專不可申服由、早差定可被催也、○中略奉仰被退出了、

〔柱史抄二月上〕新年穀奉幣○中略

地下公達受領功輩勤奉幣使例

延久五年九月十八日、今度使依關白殿仰、地下君達相交勤之可然也、成受領功之輩并舊吏等、稱障于徒不務公役、自今以後、如此之輩相交可令勤仕者、諸大夫等各感悅云々、

〔中右記〕大治四年二月九日、早旦頭辨送消息云、

來十四日新年穀奉幣事可奉行、是內大臣一日令定使々了、而依犬死穢被辭申也、依御氣色上啓

如件、
申承了由、　十一日庚申、奉幣行事外記來云、四位使二人有障、時俊朝臣申障、全不進事、實房朝臣雖進事、妻万死一生、不可過今明日所申上也、又邦家宗明、各在女院皇后宮女房宅不相逢也、爲之如何、　十二日、行事辨外記等申旨、以消息示頭辨許了、返事云、奏事由可申子細者、入夜頭辨送消息云、四位使季房顯親顯俊等早可催者、〇中略件旨下知行事史外記了、　十三日、入夜行事外記來云、使々多猶以申所勞由、仰云、大略如此進奉人之事不可闕、但藤氏五位二人猶以不足、邦忠秦盛猶相扶可參仕由慥加催、早旦可申一定也、　十四日癸亥、新年穀奉幣也、早旦行事外記重實來云、秦盛可參之由申也、於邦忠者申所勞更發由、早以此旨可申殿下、仰了、藤氏五位今一人不足也、

長承二年二月廿一日丁未、祈年穀奉幣、上卿左大臣、〇藤原家忠行事右少辨俊雅、後聞八幡使闕了、被相催殿上人顯盛之處、數度辭退、遂被責仰、夜及深更申所勞由、宣命幣遣左大辨實光、新宰相中將公教、兼二社、稻荷使爲重、昨日軒廊御卜趣、被載伊勢宣命辭別云云、　七月廿五日戊寅、夜前可定申新年穀奉幣使之由有催、　廿八日、召奉幣行事外記、尋使々參否之處、重奉之輩甚少、事及闕怠、且重加催、且又可申殿下由仰了、宰相皆故障、只右宰相一人被參者、申殿下可催散三位之由仰了、且又付職事可奏由示了、〇中略凡近代叶外記催大夫纔六七人許云々、奉幣使四位二人、五位十七人可入也、十二人催出者事不可叶由仰外記了、是兼行社所々之故也、　廿九日、外記來云、殿下仰云、候殿下致信致時二人可入奉幣使者、早任仰旨可催由仰了、五位十二人事、强不可闕也、　八月一日癸未、實房爲重四位二人、共服藥之由申上、仍付兵部大輔奏了、仰云、件服藥、兼日不觸外記、仍不行、又致信申發心地由、可申殿下由仰外記了、殿下仰云、給秦盛節昌者、被仰下外記了、遠所使五人、相兼定中所四人、近所六人、相兼定
已上四位二人、五位□□□□兼、

〔台記〕康治三年二月十九日庚子、祈年穀奉幣、巳刻參內、○中略賀茂使修理大夫忠能、散三位依參議等不參、申殿下催之、松尾平野使參議經定朝臣、八幡使中將源師仲朝臣、依地下四位不參、申殿下、○藤原忠通催之歸宅、

〔山槐記〕應保元年七月廿五日丙申、被發遣祈年穀奉幣云々、○中略北野使菅家五位奉仕例也、而其衛勅勘、定宗申所勞、此外無五位、仍被尋例、遣式部大夫爲範云々、

〔顯廣王記〕應保三年二月廿七日戊子、祈年穀奉幣、上卿右大臣殿、○藤原基房伊勢使資遠王、中臣親賴、忌部卜部兼康、八幡使被用公卿始也、平中納言○清盛爲使、自今以後立爲例云云、

〔玉海〕嘉應二年二月五日丙戌、午時許、左頭中將賴定朝臣來云、可奉行祈年穀奉幣事、左府被申障也、○中略雖有所勞、相扶可參仕之由令申了、內々問行事辨事、未申定云々、　八日己丑、早旦尋遣奉行辨於頭中將之許、○中略頭中將返事狀云、行事辨經房領狀之處、法勝寺常行堂修二月可奉行之由有院宣之間、已以違亂、子細只今可參啓者、卽來、余又相逢之、賴定云、奉行辨事次第如此、而間只今光能朝臣申送云、於修二月事者、可仰少納言行之、神事有限、經房早可奉行云々、卽令見件狀、余見了返給、賴定朝臣退了、則召遣經房了、戌刻許來、余又出逢、仰云、明日可有祈年穀奉幣定、陰陽寮可召設者、經房退了、以光經申云、明日拜任辨官之後、可申行政、又官掌以下史部等可給祿、是來十一日爲著列見也、其事畢參陣者、可及深更、此事生涯之大事也、若被延引哉、以私事申延、嚴重之神事之條、付冥顯有恐、且是逐父祖跡也、而依指合此定、被延引列見由相語左大辨、而不承引、彼日欠日也、仍明日必可隨事、雖然奉幣期日尙遠、枉可蒙御恩云云、余案之、依私語延引公事之條、頗雖不打任事、儲日十二日也、件日雖定申、不可事闕、加之以限式日之事、默止人之大事、似無會釋歟、仍可延引、(來十二可被行)日之由答了、經房恐悅退出云云、　十一日壬辰、召外記祐職、問使王事幷大內記參否使々事等、申云、大內記所出仕也、使王在京只一人、雖所勞申、責取領狀了、使等催調可令申也者、　十三日甲午、奉行外記祐職來、所遣

召也、問內記不參事并使々事、申云、大內記參申可參由而俄出障、於定日者不能出仕由令申、仍觸頼業之處、先例六位內記奉之恆例之由令申、仍不及譴責、又不申案內也、使々事、頭中將奉仰、所々充諸院殿上人、各被申本所、隨彼左右催具、明日可申散狀者、內記事仰子細了、申狀無謂也、外記又申云、使王一人可參、今一人催出必可有卜串之由頼業所申之了、仰云、尤可然、外記退出、　十四日乙未、早旦外記祐職來云、王大夫已二人催出、可有卜串、又使等事未奉、左右夕方可申散狀、又大內記加勸發之處、所勞儀出來不出仕、當日必可出仕、返々恐申云云、仰云、卜串明日早旦可聞也、○中略　秉燭之程、祐職持參日時定文等、奮寫了返給、問使等事、申云、當時進奉之者十二人、闕如七人、職事沙汰懈怠之間、于今如此、頭中將經奏聞、可譴責之由被仰、

〔吉記〕承安四年二月十三日庚午、今日新年穀奉幣也、上卿新大納言、辨右少丞親宗、○中略

伊勢（資綱王、權少祐大中臣能隆、大祐宮部明友、散位卜部兼行、）　石清水（參議實家卿）　賀茂（參議家通卿）

松尾（參議頼定卿）　平野（皇太后權大夫朝方卿）　稻荷（前河內守實泰朝臣）

春日已下如例

〔顯廣王記〕承安四年八月十八日壬申、新年穀奉幣也、有使論、中臣永親定相也、（事書）定輔奉、殿下仰、藏人左衞門權佐奉行、仍以定輔入進差文了、然間永親以立官人觸右少辨故令恐申此事、以本官過失之由、被改定永親了、王代之法、諸事如此、可云奇異也、

〔吉記〕承安四年八月十八日壬申、今日新年穀奉幣也、上卿源大納言、右少辨親宗行之、○中略　使八幡左宰相中將實家卿、（二條院御字以後被用納言、近年有沙汰、被用參議云々、）

〔玉海〕承安五年二月十一日癸亥、此日新年穀奉幣也、上卿予、辨經房、職事光雅、已一點著東帶參內、職事光雅、大內記業實之外、政官等一人不參、尤不敬、○中略　次六位外記持參使々交名、（書折紙、入筥、）余見之、此中春日使載侍、（民部大夫良光、）余召頼業問云、春日使同藤氏之中尋常之者可勤仕也如何、頼業云、近代無此

沙汰、但式部大夫五位等両三可改歟、余云、可随近例歟、但相計可改之者、○中略召大外記頼業問使々参否、申曰、両三使等在所労候門外、余仰、慥可催之由、○中略次以召使仰内記可持参宣命之由、○中略予置笏於左、以右手取宣命給之、○中略此間使両三人、或遅参或不参、仍取宣命五六通許、給奉行外記、○中略次召大外記頼業、今日使々多以不参、於陣相尋之處、申不可事闕之由、今如此、頗以為奇、近代例使等各申所労由、遂不進社頭云々、神事違例也、慥加呵責可追立、又奉行外記沙汰懈怠、各成阿容、不顧公事陵夷、不思神事違例、為将来慥可加呵責之由召仰了、頼業申云、近代例多以如此、敢無皆悉参入事、依外記催不相叶、申奉行職事、又以無始終之沙汰、因之非外記之過怠、但奉行外記若可殊過断歟可随仰者、余云、事雖非常、已為近代例云々、然者不可及殊罪科、只自今以後事、能々可誡仰者、　七月五日甲甲、兼光仰云、来十七日可被発遣新年穀奉幣、○中略又仰云、新年穀奉幣事、預有其聞、使々事、如今春多不参者、外記過怠也、慥可催具者、　十日己丑、申刻兼光来、依遣召也、余相逢、○中略此次示兼光云、新年穀奉幣使等各不向社頭、或数日取籠宣命幣帛等、殆不遂前途之由有其聞、只非軽神事、已如無王事、今度奉幣殊申沙汰、慥不経日数、其身可参社頭之由可被下知也、如此事上卿直仰外記、紀行恒例也、然而近代事不可叶、使々事、又職事殊為奉行事、仍所示也、兼光云、尤可然、早可申沙汰、神事陵夷不可云云々、又使等進奉不参、無始終之沙汰之間、毎度兼数ヶ所使、是又不穏事也、

〔吉記〕壽永元年八月廿八日丙寅、今日新年穀奉幣定也、上卿藤大納言、執筆頭右大辨親宗朝臣奉仕之、行事辨光雅朝臣遅参、左少辨光長勤其代、而乍置光長頭辨執筆、強不可然歟、未知其理、天治之頃、雅兼卿為非参議大辨奉仕執筆、有相傾人歟、勤仕縦雖無難、有他人者勤歟、但可引勘先例、行事辨執筆常例歟、

〔玉海〕文治二年閏七月十四日己未、是日新年穀奉幣也、○中略春日使者、元暦元年、自今以後可用四位之由有勅願、被載宣命、而去年奉幣両度依闕如被用五位、非啻違例、又似欺神、今度地下四位皆稱障、

外記勘去年例申、可被用五位之由、然而余專敬神之志、召出文章博士光輔朝臣令勤仕、彼使儒士之條、雖無近例、依無菅家氏人、儒者奉仕北野使、今又地下藤氏四位其人已稀、仍准菅家例、用儒者使可無其難、加之粗案古跡例、云儒者云君達、皆勤仕此役、愚計之至何背時議、(後日法皇感之)但不可爲流例、是闕如之秘計耳、

〔玉海〕文治三年四月廿三日甲午、去祈年穀奉幣、住吉使倫仲不參社頭、仍社司未進御幣之由令言上、於倫仲者有沙汰、既可被召籠、早可申祝之由可仰遣、口下知了、　四年二月四日庚午、此日祈年祭也、〇中略仰祈年穀奉幣可致沙汰、御藥事可被載辭別之由了、　十三日己卯、申刻許召棟範仰宣旨事、(先可注進御願之由仰之)此次申奉幣之間事、元被催右大臣、而爲當日定者可參之由被申云々、而新中納言忠良可奉行之由所望云々、仍職事內々此旨觸右府歟、然間忠良俄辭退云々、仍重告右大臣之由棟範所申也、家習初度神態所勤、祈年祭若吉田祭也、而奉幣奉行之由、雖不及難不似家例、然而彼邊事專不能口入、而今忽辭退、若有教訓人歟、

〔三長記〕元久三年二月廿八日己卯、今日被發遣祈年穀奉幣使、上卿中納言中將殿、(〇藤原通基子兼基)初令奉行給、(被用神態也)〇中略上卿令歸里亭給之後、召使等給饗祿、〇中略予(〇藤原長兼)不參御所饗祿、

〔百練抄十四〕嘉禎二年十一月廿九日壬午、祈年穀奉幣也、春日社、今日以後可用公卿之由被仰下、依御神木事也、參議從三位宗平以爲使、

〔薩戒記〕應永卅三年三月三日丁酉、藏人右少辨經直送御敎書云(宿紙也)

來十一日可被發遣祈年穀奉幣使、可令參陣給者、依天氣上啓如件、

此催非使事、使定書手事也、然而不載其旨如何、又中山宰相殿書之、可載中將字也、尤散々、

請文云

來十一日祈年穀奉幣使定參陣事、謹承候了、但此間依雜熱事不能出仕候、可令得其意給候、恐々

謀言、
立紙、用彼職事立紙、口經職事之公卿或如此、予歷頭之故也、又今日用之事、返遣彼立紙、爲令知違失也、

十一日乙巳、今日被發遣祈年穀奉幣、略○中 稻荷侍從行豐朝臣、兼被仰侍從永豐朝臣、申領狀、而依故障、仍一昨日被仰被朝臣、無左右申領狀、闕如之處參勤、有歎感、叙正四位下云々、

〔公名公記〕永享八年二月十日、明後日祈年穀奉幣、予奉行事、兼日頭左中將隆遠朝臣觸仰之、其狀云、來十二日、可被發遣祈年穀奉幣石清水使、同令勤給者、仍天氣上知件、禮紙云、日時定幷使定可爲同日、可令存知給由被仰下候也者、予案此狀、雖仰使幷定等事、不仰發遣奉行事也、仍後日口示子細之間、書改遂之、強非有所存歟、仍今日出請文、其狀云、來十二日可被發遣祈年穀可令奉行之由、謹承了、可令存知之狀如件、禮紙云、進申、當日日時使定幷石清水使事、同可令存知候也、退案此文章、不可大然歟、可令奉行之狀、所請如件、卜可書也、又離字事、當家納言以後不書之由有所見、不思得書違之條、短慮不可淨也、拜御教書到來之時、即雖可云請文、臨始源書之期上可云之由存了、暫猶豫、是先例也、文曆二、三、十五、階相卿記、去伊勢一社奉幣可奉行由有催、請文已後可始神事、後日可獻請文由返答了、同十七日依獻一社奉幣奉行請文、始神事、同十九日奉幣也、引止神事云々、仍守此儀了、

十二日、今日祈年穀奉幣發遣日也、略○中 予依催行此事、常儀、定已下發遣儀等、大臣所奉行也、三公故障時、大納言行之、又故障時中納言間有行例、然而近曾大臣不在、中納言也不下歟、仍大納言多行之、不可必然事也、又可相兼八幡使云々、此使往昔源氏四位之納言勤之、於一社奉幣者、嘉承保延雖有例、新年穀幷臨時諸社奉幣時例、未見及子細、長寬口五十、臨時廿二社奉幣日、平中納言清盛卿勤了、自餘以降爲流例、新年穀及臨時幣時、納言大略勤了、或參議間又雖勤之、至應永廿八、四、五、年穀多分者納言勤了、然而應永廿九年二月廿四日新年穀奉幣、久我前內府爲大納言行發遣、參議相兼八幡使、其後又爲流例、寬元顯定等、一社奉幣時、各爲大納言勤之、但不兼上卿歟、此上者不能左右、仍所領狀也、略○中 賀茂使略○中 葉室中納言、宗豐卿、已往此社使爲參議、而近來爲納言、應永廿九年新年穀奉幣已來、每度此定也、但已前儀未勤見之、略○中 召召使、欲召稻荷使之處、使進而參入之間、則給宣命、改四位使、猶春日已前、是嘉元三如元、

〔康富記〕寶德元年八月廿三日辛未、是日被發遣祈年穀奉幣使者也、略○中 未剋陣儀始、先有日時使等定勘文、略○中 大內記持宮從上卿後參役弓場、清書儀同之、康顯雖參陣、少內記御訪以祈年穀總用內可被下之由、連々員職相共雖申入之、遂以不被下、然者可辭申少內記之由、員職康顯兩人捧辭狀、先日付奉行職事申切畢、今日尙以及數ヶ度、少內記役事雖被仰下、不可存知之由堅申入之間、藏人佐

無力于問答、被聞之、於大内記者、四位五位共以從上卿後之條、爲連綿之由堅申所存了、此事兼日歎人佐被尋甫局務之間、四位大内記從上卿後之例一卷被註進之、就此等之儀、職事堅被責仰大内記之間、應別勅、今日可從所役之由、在治朝臣被領掌、申之父前相公在豐同被參陣也、被承伏申者也、大内記菅原言長朝臣四品之時、度々被勤此役了、○中略

伊勢

石清水
陣本官上卿 權大納言藤原朝臣隆夏　自九條殿被召進之 前出雲守源朝臣象益

賀茂
權中納言藤原朝臣明豐　自近衛殿被召進之 刑部少輔大江朝臣俊宣

松尾
陣執筆 參議藤原朝臣資綱　万里小路前内府被召進之 前備後守藤原忠敦

平野
參議藤原朝臣持爲　刑部少輔大江朝臣俊宣

稻荷
從五位上 侍從藤原朝臣雅保

春日
參議藤原朝臣家輔　自二條殿被召進之 前越中守高階朝臣頼行

大原野
前備後守藤原朝臣忠敦

大神

前越中守高階朝臣頼行

石上
前越中守高階朝臣頼行

大和
從四位下前修理大夫花山院殿被レ召二進之一
散位藤原朝臣教國

廣瀨
散位藤原朝臣教國

龍田
散位藤原朝臣教國

住吉
久我前内府被レ召二進之一
前能登守源朝臣爲治

日吉
自二鷹司殿一被レ召二進之一前大膳大夫正四位下
前越前守大江朝臣匡具

梅宮
前備後守藤原朝臣忠教

吉田
前越前守大江朝臣匡具

廣田
前能登守源朝臣爲治

祇園

前越前守大江朝臣匡具

北野

從四位下於陣井本官從内記役事
大内記菅原朝臣在治

丹生

貴布禰○中略

神祇官差進祈年穀奉幣使々交名事

從四位下行神祇權大副中臣朝臣清直

忌部從五位下行神祇權少副齋部宿禰親雄

正五位下行神祇權少副兼中務權少輔卜部朝臣兼敏

右依官宣所差進如件

寳德元年八月廿三日　從五位下行大祐齋部宿禰親季

從三位行伯資益王

神祇官差進祈年穀奉幣使々交名事

丹生川上社使

正四位下行神祇權大副大中臣朝臣秀忠

貴布禰社使

從五位上行大學助卜部朝臣兼濟

右依官宣所差進如件

寳德元年八月廿三日　從五位下行大祐齋部宿禰親季

從三位行伯資益王

〔日本紀略村上〕天德元年七月十八日癸卯、祈年穀奉幣使、廿日乙巳、月次神今食、天皇幸中院、去十八日祈年穀幣帛被付奉之、

〔日本紀略一條九〕正曆元年八月廿二日甲子、奉遣伊勢以下諸社幣使、依祈年穀幷天變恠異御惱事等也、四年三月廿三日辛亥、祈年穀奉幣、五年二月十七日己亥、奉幣伊勢以下諸社、依祈年穀也、天皇行幸八省院、

〔日本紀略一條十〕長德四年二月十九日戊申、祈年穀奉幣廿社、

〔日本紀略一條十一〕寬弘元年二月廿九日癸未、祈年穀奉幣、二年二月十五日癸巳、祈年穀伊勢以下諸社、三年二月廿七日庚子、祈年穀廿一社、四年二月十七日甲申、祈年穀廿一社、五年八月十二日庚子、奉幣廿一社、祈年穀也、七年閏二月九日己未、於八省院奉幣廿一社、依祈年穀也、八年二月廿三日丁卯、奉幣廿一社、依祈年穀也、

〔日本紀略三條十二〕長和三年三月十八日癸卯、奉幣廿一社、祈年穀也、四年閏六月十一日己丑、奉幣廿一社、祈年穀也、

〔日本紀略後一條十三〕長和五年五月廿一日甲子、奉幣廿一社、依祈年穀也、

寬仁三年二月廿日戊申、奉幣廿一社、依祈年穀也、五月十六日壬申、奉幣廿一社、依祈年穀幷祈雨也、四年二月十四日丙申、祈年穀奉幣、辭別被載今年三合之由、

治安元年八月十六日己未、奉幣廿一社、依祈年穀也、二年二月廿四日甲子、奉幣廿一社、祈年穀、

萬壽元年二月廿五日癸未、奉幣廿一社、依祈年穀也、三年二月十七日甲子、奉幣廿一社、依祈年穀也、

〔日本紀略後一條十四〕長元元年二月廿六日辛卯、祈年穀廿二社、二年二月廿五日甲申、祈年穀、奉幣廿一社、三年二月九日壬辰、祈年穀奉幣定、十七日庚子、祈年穀、奉幣廿一社、

延引

〔經信卿記〕寛治二年十月十九日辛卯、有新年穀奉幣云云、上卿內大臣〇藤原師通、辨右中後聞祇園幣物今一前不足、日吉御幣可有一前、而持參二前云云、

〔長秋記〕天承元年八月六日庚午、有伊勢奉幣事、但本宮有穢氣云々、奉幣使賀茂、松尾、平野三社使宰相中將〇藤原成通、相兼云々、　七日辛未、自內府有御消息、六日奉幣使等皆給宣命退出、下官〇源師時已下行事官等漸至待賢門之頭、大神宮有穢氣之由使中臣等申也、佇立問先例之處、如此例不覺、但於途中有穢之時、御幣奉安離宮院之由申、仍下官答云、使等皆立畢、是可准途中穢歟如何、辨以下同之、辨申云、隨無奏狀、只脚力許走來各告申也、仍忽雖奏聞者、件口土記途中穢事候樣思給ヘ引見給之處、治暦記未求得候ヘ所借申大切文也、又件事等何樣可候哉、御幣已進發大神宮許有穢、自餘不穢者、持參離宮院可過穢歟將如何、其後無音也、案此事一端理可然、但如愚案中臣申穢由者、於幣物者暫納神宮、且經奏聞可隨勅定歟、

〔康富記〕嘉吉三年五月十二日丙寅、權辨被語云、去二月新年穀奉幣、入幡御幣依入夜衛士顚倒、自御山下落損其身、血付紙布之間、社家申子細不請取幣物、仍使權大納言通淳卿爲私奉幣、被用意紙布被借與之取替之間、無爲奉納云云、仍此事如何可有之由、後日權辨爲奉行、被尋仰先例於兩局之處、不得所見之由各被申之云云、

〔年中行事秘抄二月〕新年穀奉幣事

依一社穢諸社奉幣延引例

永久二年二月十四日、今日可有新年穀奉幣、權大納言家忠卿著仗座、內記覽宣命草之間、春日社穢氣沙汰出來忽延引、廿二日新年穀奉幣、

承安三年二月十八日、新年穀奉幣也、而依平野社五體不具穢延引、

〔伊勢公卿勅使雜例〕內裏有穢諸司不穢不立月次使例

延久四年二月、內裏觸穢諸司不穢、然而不被立、但同月廿五日新年穀辭別云、今年二月乃新年祭乃式日乃內裏ニ觸穢出來禮利、須久以不穢諸司天被行倍支奈利、而外記先例乎令尋問給布處、諸司毛同久觸穢氏延引ル七時乃例ヲ勘申セリ、因茲天式日ヲ過天令行給ト布ヨ已了支、縱件事ニ付咎祟ノ可出來モトト深御助厚御惠ト施給云々、

〔水左記〕承保四年十月卅日丁未、被立新年穀奉幣使云々、有宣命、少內記通國草之上、春宮大夫云々、依使等牢籠、臨秉燭事了云々、去八月、依赤疫事延引及今也、

〔中右記〕天永三年二月四日辛卯、祭主申上曰、新年祭以前、不可被立臨時伊勢幣、仍來六日新年穀奉幣可延引者、如此沙汰了、入夜從殿下〇藤原忠實退出、　三月廿八日乙酉新年穀奉幣也、從殿下有召仍參入、殿下令參內給、雖內御物忌、御于殿上奉幣、

永久二年二月十四日、今日可有新年穀奉幣、仍上卿右大將〇藤原家忠參仗座、內覽宣命草之間、俄從春日御社穢氣之疑出來之由、預實經申上長者殿也、仍如此一社有穢時、奉幣留否之由、令大外記師遠勘申之處、先例不分明、猶止春日一社、可被立他社幣歟沙汰之間、興福寺權別當永緣僧都、一日參御社之後、歸參院者、仍穢氣遍滿之疑出來、今日奉幣凡延引、　廿二日、今日有新年穀奉幣、上卿右大將依御物忌主上〇鳥羽於石灰壇有御拜云云、

大治二年二月十六日丙子、今日雖可有新年穀奉幣、依神祇官燒亡事延引、　三月五日、雖可有新年穀奉幣、依本官穢又延引云云、二箇度延引頗以可奇歟、　廿三日、今日新年穀奉幣也、二箇度延引也、上卿內大臣〇源有仁行事右少辨宗成、申時使々立、左宰相中將左大辨、右兵衛督八幡實房朝臣、稻荷親口朝臣、

〔山槐記〕治承四年十月廿七日丙午、今日被發新年穀奉幣、自舊都神祇官被發遣、上卿左大將實定、辨右少辨兼忠、八幡使藤中納言成範、賀茂右京大夫基家、松尾一條三位實清、平野法住寺三位雅長、云云、此奉幣自去

八月四箇度延引、尤爲奇、今度被勘改日時直宣命、予福原去十七日可奉行也、十月新年穀希代事歟、但有例云云、

〔吉記〕壽永元年八月三十日戊辰、今日可有新年穀奉幣、爲勤使節、已著冠帶之間、延引之由或者告之、依不審遣尋頭辨許、答云、依幣料闕如延引實也、勿論了、仍歸勘解由小路亭、　九月二日庚午、今日新年穀奉幣也、雖可早參、近代公事依難遂先規、午斜參內、

〔仲資王記〕元久三年七月廿三日壬寅、新年穀奉幣也、　八月六日乙卯、參新年穀奉幣也、去月廿三日、依院御所牛產穢延引也云々、

〔三長記〕建永元年七月廿四日癸卯、今日新年穀奉幣延引、有穢疑之故云々、　八月七日丙辰、今日被發遣新年穀奉幣使、

〔岡屋關白記〕寶治三年三月十六日、今日新年穀奉幣也、〇中略參神祇官、伊勢幣發遣後有御拜、如例、余祗候、御拜座儲辰巳角、不立御屏風、唯小筵上敷半帖、

〔吉續記〕文永四年七月廿二日、今夜被始行金輪法、日來光朝奉行、予〇吉田經長籠居之程也、然而予出仕之間、自昨日沙汰、關白殿〇藤原實經被召予、來廿七日新年穀奉幣也、然者御神事中以憚歟、又運時廿六日以前可結願歟、爲前齋者、自廿六日御神事歟、且可仰合阿闍梨之由被仰下、予以此趣仰阿闍梨、然者可運時之由申之、予申此由、自今日運時廿五日被結願者、可爲四箇日候、尤可被憚歟之由申之、關白殿尤可然、奉幣使未催□歟由被聞食、然者奉幣延引之條可然歟、可仰此由於親朝之由有仰、　八月五日、今日新年穀奉幣也、

〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日新年穀奉幣也、去二月分也、依武家要脚未濟、度々令延引、今日所被發遣也、

〔康富記〕寶德元年〇文安六年八月廿三日辛未、是日被發遣新年穀奉幣使者也、文安三年八月廿八日被

中絶

幣料及用途

發遣之、同四年五年闕年遂以不被行之、中絕不可然之由武家被執奏申之、有興行矣、

〔建武年中行事〕祈年穀奉幣、この月〇二月よき日して奉らる、廿二社なり、〇中略幣料はかねて辨諸國にもよほしあつ、

〔新編追加神社〕神事祭禮條
一可興行諸社幣物不法事、〇中略新年穀以下伊勢幣、率分所納物、延年季、充國々等、猶致對捍、當日晩陰纔以進濟、因茲陣役之督入夜甚、發遣之義送半更、神事之陵夷、職而斯由、自今以後專存如在、殊致謹愼、

〔權記〕長保二年二月廿七日乙亥、參內、未剋新年穀奉幣使可發遣、行事權左中辨書出幣料未進國國奏覽、召余被仰云、刻限欲過、幣物不具、所所無止、不可默爾云々、仍忽求隷用絹十四匹、令付行事所、件代召納、早可返補之由、示行事辨、

〔中右記〕大治四年二月六日、今夕新年穀奉幣定、　十一日庚申、左少辨差使示送云、幣料數多、雖被切宛飛驒國、彼國司在女院御修法壇所、不相逢、是醍醐阿闍梨云々、不知名、仍不能加辨濟催、爲之如何、予以行事史孝忠雖觸大藏卿、不改成他國及深更、今夜不能左右也、　十二日、入夜頭辨送消息云、〇中略飛驒幣料可濟之由申上云々、件旨下知行事史外記了、

〔台記〕仁平元年二月十八日己未、左中辨師能朝臣來申、明日新年穀幣料、四ヶ國不濟之由外記內覽、

〔玉海〕承安五年二月七日己未、此日新年穀奉幣定也、〇中略經房、光雅等云、期日近々間、幣物定難具歟、此條近代定例也云々、　八日庚申、權右中辨經房來、〇中略余著冠直衣相逢、問幣物事、昨日依中辨之由也期日近々、如只今者凡不可叶、今日參院令申處、不可及子細、條可令貢濟之由有御定、倘若難濟者、行事辨廻計略成公事、近代之例也、事若及闕如者、前日可申案內云々、良久談語退出了、　十日壬戌、入夜經房朝臣示送云、幣料諸國難濟之間、明日定懈怠歟云々、　十一日癸亥、此日新年穀奉幣也、上卿予、辨

經房、職事光雅、○中略召光雅仰云、去夜幣物事、兼具由經房朝臣示送如何、已參陣了、早可催具由可仰遣者、光雅云、無仰之前仰遣也、重可遣仰者、○中略以召使召辨、經房問幣物具否、申具了由、

文治三年二月廿日壬辰、宗隆來申、新年穀奉幣之間事、使王依料田近江國訴申不可勤仕之由云々、奉幣每度有此訴、返々奇恠、有訴者兼日可申也、而寄事於此訴、每度欲闕如事、儘可釣出之由仰之、但於訴訟者、有理者可有沙汰之由仰了、　廿一日癸巳、此日新年穀奉幣也、辰剋行事辨親經申幣物事、伊勢幣催具了、諸社幣二百疋許不足、所召置藏人方之成功物少々欲借渡云々、仰云、皆悉被渡行事用途之由所聞也、但及闕如者、雖在官行事所何不借渡哉、依爲最少事也者、

〔平戸記〕寬元三年七月廿二日甲寅、明日新年穀奉幣、伊勢幣闕如云々、今夜終夜被責加州日來無沙汰歟、近來之風、不可說不可說、當國近年多被召越之間、無用意之由雖掌申之、甚難堪事也、　廿三日乙卯、今日被發遣新年穀奉幣使、伊勢幣依去夜之平責今日進濟了、

〔吉續記〕文永八年正月廿八日壬辰、來月廿七日新年穀奉幣幣料、諸國御敎書書給、奉行官掌國鄕錦事、仰遣奉行職事、　二月十日、參殿下、外宮假殿遷宮用途帳、幷來廿七日新年穀奉幣幣料諸國散狀等以奉使申入、用途帳事可奏聞、幣料事申事由、對捍國々可責催之由有仰、　廿五日、自今日殊始神事、依新年穀奉幣奉行也、女房有俾服事之間下棟各別所、此事兼尋申文宿禰、依被諷諫也、新年穀奉幣幣料錦、前日可渡行事所之由、相觸奉行職事、諸國及遲濟者、以上文使可催立之由仰官、

〔康富記〕應永廿七年八月廿二日戊午、來廿五日新年穀奉幣、外記御訪貳百匹到來、召使行秀連歌會來也、仍令持下部來臨、今度奉幣總用料足貳百六十貫文也云々、此外記御訪事、兼日令申召使行職、一度傳奏ニ直申之云々、予今月臨時奉幣爲分配之故、如此令出仕者也、請取案如此、

請取　新年穀奉幣參役六位外記御訪事

合貳百匹者

右所請取之狀如件

應永廿七年八月廿二日　　權少外記判

文安四年四月三日甲子、祈年祭御訪貳百疋、內一貫七百七十文、自官掌季包許到來、予分配也、廿日辛巳、祈年祭御訪百七十六匹到來、其內酒直引留云々、　六年(○寶德元年)二月五日丙辰、高大史來臨、伴之(先勤一臈)向藏人佐(光綱)亭、令對面給、祈年穀奉幣奉行也、少內記御訪事、高大史隼人正兩人申狀用意令申之、可奏聞之由返答、案文見左、(○中略)

少內記員職康顯等謹言上、

祈年穀奉幣御訪事

右內記役事、三節會叙位之入眼、幷祈年穀祈雨止雨奉幣、其外每有詔勅宣命、不云恒例臨時、或衆日存所役構參之、或俄蒙催令參勤之、不斷致奉公粉骨之條、頗超等倫、尤朝要之職也、雖然近來者俸祿令相違、一年中之間、更不浴一塵之恩波、又不被下御訪、不便至極也、爰祈年穀奉幣料足被加總用內、少內記兩人各三百匹宛可令申沙汰之由、被仰遣武家奉行方者、定無子細歟、是雖為少事之御訪、先少支羽翼、且為成奉公之勇、粗言上如件、

文安六年二月日

廿八日己卯、自藏人佐(光綱)可來之由被申送、仍進康顯了、先度令申祈年穀奉幣內記御訪事、粗申入了、目安又可書給之由被示候間、今度者五百疋宛可有申沙汰之由、書改付進了、　三月二日壬午、早朝參藏人佐亭、少內記御訪事尋申候處、十四日祈年穀、依八幡閉籠事可延引歟之由、有其沙汰、追可申承之由有返答、　五日乙酉、祈年穀總用內、少內記御訪事、自藏人佐今日遣奉書於飯尾備中守許云云、先日所進候目安被副下之云々、　八日戊子、昨日依招引向飯尾備中守之處、(○中略)少內記御訪事、自藏人佐可被申、可有申沙汰之由令申之處、職事奉書內記字不見之、申直可付給之由申候間領掌、

其後以康顯申入職事藏人佐了、　九日己丑、

祈年穀奉幣用脚悉下行候哉、就其少内記員職康顯等、如此言上之、仍而披露之處、不便事候、可然之樣可被申沙汰之由被仰下候也、謹言、

三月五日　　綱光

飯尾備中守殿

八月十日戊午、康顯伴員職參廣橋、來十九日祈年穀内記御訪事、重可被仰武家奉行之由申候間、被出狀了、持向之處、備中出行云々、預置子息孫〇孫一本作彌三郎云々、

祈年穀奉幣被發遣、來十九日候、先度申候少内記員職并康顯兩人無足之間、參勤難叶之由歎申候、御訪事、可然之樣可有申沙汰候也、謹言、

八月十日　　綱光

飯尾備中守殿

十九日丁卯、藏人佐綱光招少内記康顯、祈年穀奉幣參役事、堅雖申入、未無一途御返事、載狀可付給之由被示之間、入夜高大史令同道、捧一紙、付申之、各可爲書狀歟之由存候處、兩人同心之上者、注一紙、有何事候哉、仍兩人中令一通進入之、

少内記員職康顯等謹言上

右少内記兼任事、就御事闕候被推任、至于今從内記方之所役、既經年月候、雖然於内記方者、無一塵之恩祿、又雖少事、更不被下御訪候、不便事候哉、於今者微力盡候間依不諧、至少内記者辭退申候、此旨可得御意候、凡少内記參役事、三節會并敍位除目入眼以下諸公事、祈年穀祈雨止雨等臨時奉幣、又諸社臨時祭、其外詔勅宣命作進、公事每度被召出、少内記致粉骨之條、殆越傍輩候、爰祈年穀總用之內、諸司公人悉多少之御訪被下之間、可被加彼內之由、去々年以來數ヶ度捧款狀、言

上事舊候、至少事御下行者、無足之奉公難治候、所詮一年中奉公之御訪五百匹宛、兩人可被下行者、年中之內記方公事、兩人相互令結番、諸公事每度不御事闕之樣、可致拜趨之忠節候、不然者外記史兩役奉公之外、重役難叶之間、辭退之分可預御披露哉、仍言上如件、

寶德元年八月日

廿二日庚午、四位五位大內記持宮參軾、幷從上卿後參弓場之儀、藏人佐(光綱)被尋之間、局務被注獻之、少內記兩人辭申職之間、大內記可從事之由、爲被責仰、及此沙汰云々、　廿三日辛未、是日被發遣祈年穀奉幣使者也、(○中略)於總用幣料御訪等者、去々年大略自武家被下行、至不足分者、此間別而自室町殿被付其職云々、仍開闔飯尾備中守存分者、爲文安四年分被遂行之、國役面付課役等爲文安四年分歟云々、(○中略)今日參仕外記事、任去々年二月分配者、一﨟忠種可參也、任同年七月分配者、予當之、於御訪者、文安四年十月自氏鄕許早請取了、可爲何樣哉之由、兼令申局務之處、先可召進康顯之由被命之間、今日召進布護了、可爲相轉歟如何、

○按ズルニ、是ヨリ前文安四年五年ハ、祈年穀奉幣中絕シテ行ハレズ、本書去々年トアルハ、卽チ文安四年ヲ指スナリ、

〔法曹類林(公務二百二十六)〕延喜廿年六月十四日符云、應奉幣轉經攘災異兼祈年穀事云々、宜下知五畿七道諸國、符到之後擇吉日、每社長官以下潔齋奉幣、祈以件事、(○節略)

〔貞信公記〕延長五年四月十日、召祭主仰明日於神祇官可祈年穀之狀、其諸神數書出給、延喜二年例也、　八月七日祈口(○空格恐年字)穀官符給五畿七道事、仰左大辨、

〔日本紀略(二朱雀)〕天慶六年七月十五日辛卯、(○此下恐脫下字)官符、於五畿七道諸國名神(○此下恐脫依字)可祈年穀也、

〔中右記〕天仁元年八月六日、夜知信爲殿下御使來云、明日祈年穀奉幣也、仍殿下可參御八省也、而當

申日、雖神事、申日初令臨大極殿給事可有其憚哉如何、但故大殿御賀茂詣申日也、三條院幷院御時、初賀茂行幸申日也、先例如此事可量申者、予申云、先初令臨八省給事、攝政之後、卽位日已以吉日令參之、又御卽位習禮之日所令參給也、今度非始臨御也、神事以申日為最吉、全不可有憚事也、就中九月例幣日又後日也、又令憚給者、以私忌度々不令勤神事給、尤無由事也、

〔仲資王記〕承元五年七月廿三日壬申、新年穀奉幣、今度使可實驗外宮造否、是先例云々、中臣知雅、忌部明茂、卜部兼義、王氏云々、

〔業資王記〕建曆二年二月十七日甲午、新年穀奉幣、　廿日丁酉、今夜戌刻許、藏人少輔資賴奉行、立新年穀幣神宮神馬引落、廿二日奉納以前可被引進云々、予請文如此也、神馬本官請取令引進之處、近例不覺悟之上、廿二日奉納、行程不可叶之由令申了、而猶推引來、今度權大副兼茂使卜部也、□□可相觸之由令返答了、兼茂云、兼直請取令引進云々、

〔玉海〕文治三年二月六日戊寅、藏人次官宗隆來曰、新年穀奉幣、伊勢幣錦箱如□為之如何、可召付成功歟、仰曰、下名拜任衞府之中、多有成超越之功、彼中少々可用歟、近代又有自院被奉之例云々、且可尋近例歟、

〔康富記〕應永廿七年八月廿五日辛酉、今日新年穀奉幣發遣也、〇中略

大和廣瀨、龍田□□□□大炊御門大納言殿御沙汰也、仍本社參向之事雖治之間、內々相語神部言付宣命賜之、此分可□入之旨、自大炊御門殿被仰下於予、具令申宗左衞門行秀之處、可尋神部云々、御訪百匹ヲ、神部ニ自大炊御門殿被下行了、仍請取三社宣命領狀了云々、

文安元年七月廿二日己亥、是日新年穀奉幣也、〇中略自早朝人々雖有參集、陣官人就知行敷地、武家輩違亂事致訴訟、不可參陣之由申之歟、及催促之後參入之間被始行、午刻許陣儀了云々、陣官人訴訟事、乞取局務之擧狀、□付奉幣奉行藏人權辨、雖申之、稱无日數□□□□取之故、申不可從所役之

旨也、　六年二月廿八日己卯、祈年穀來月十四日可被發遣云々、但石淸水社家訴訟未落居、神人社僧令閉籠、可爲如何樣哉之由被尋之間、有一社障之時、御幣被預置社司、例准據分注進之由局務令語給、　三月二日壬午、早朝參藏人佐亭、少內記御訪事尋申之處、十四日祈年穀、依八幡閉籠事可延引歟之由有其沙汰、追可申承之由有返答、　八日戊子、昨日依招引向飯尾備中守之處、祈年穀奉幣、八幡有神人閉籠、此一社奉遣難叶、雖然可被行哉否可注遣例之由示之間、先度奉行藏人佐方令注進了、尙々可引勘之由被返答、且可被尋前局務權大外記等之由令申了、定可尋申歟云々、此後有招引、卽罷向備中守之處、一社障時、祈年穀奉幣例可注給之由申之間、其例不覺悟、可注進准據例歟之由返答了、　九日己丑、

一社有障時奉幣被發遣哉准據例

康和二年四月廿六日、賀茂上下幷松尾社奉幣也、而賀茂社依有卅ヶ日穢、幣帛不被奉之、只勅使持宣命參向鳥居外云々、(被申祭件止者也)以件年例、建久六年三月六日臨時廿二社奉幣時、北野社有卅ヶ日穢、止幣物、勅使參鳥居外讀宣命云々、

建長三年六月五日、八社奉幣也、伊勢幣發遣之後、自平野示社頭觸穢出來之由於外記、外記申上卿、(大納言隆親卿)然而平野使參向也、觸穢爲一定者、預置幣帛於不觸穢神官、穢限以後可奉納之由可下知之旨仰使了、

文安四年四月廿一日、祈年祭也、鴨社依御蔭山祭祠官各指合、不可請取幣帛之由申之間、被殘置神祇官、後日可奉遣之由被仰了、

三月九日　權大外記中原康富

十六日丙申、早朝依召參左府御亭、祈年穀奉幣、八幡使難參向之間、可延引否事、以藏人佐(光綱)有勅問、御意具狀可被進之由也、兩局務註進被進之、如何樣可被申由被談仰之、用意草案進入之、執柄(一條殿)

幷右府殿〈二條〉等同被申云々、一條殿ヘ自左府被尋申之時、御返事之樣見左、二條殿御申詞自奉行被進之、

一度奉幣被分獻兩日例

天曆六年六月五日、依祈雨被立臨時幣使〈十六社〉同十九日、在五社幣〈伊勢以下〉今月五日被奉十六社內也、

長和四年十月廿七日、有春日一社幣、去月十四日、依御目事被立奉幣使、而件社漏彼日幣、仍追奉遣之、

寬治二年十月十四日、被定祈年穀奉幣日時、同十九日、被立同奉幣使、今日祇園幣一前漏了、

治承四年十二月二日、被立伊勢以下十三社奉幣使、住吉宣命、依使不參召少外記淸俊給之、相具幣物、宿納本官東院、〈明日光輔參本官給幣參向〇中略〉

是等例可爲准據候哉之間、令注進之、

大外記業□

祈年穀奉幣八幡使依難參向延引准據例

依一社指合延引例

永久二年三月十四日、可有祈年穀之處、依春日社穢延引、

承安三年二月十八日、可有祈年穀奉幣之處、依平野社五體不具穢延引、

建長三年八月六日、可有祈年穀奉幣之處、依春日社穢延引、

正元元年四月十一日、臨時廿二社奉幣也、當日定已了、宣命草奏聞程、日吉社除八王子三宮、大略燒亡之由告來間俄延引、

文永九年五月四日、可有祈年穀奉幣之處、住吉社自四月四日有卅ヶ日穢、被行淸祓之後可有奉

幣之間、今日令延引、

雖有一社指合被行例

建久六年三月六日、臨時廿二社奉幣也、而北野社有卅ヶ日穢、任康保二年四月鴨社例、止幣物、使於鳥居外讀宣命、

建長三年六月五日、八社奉幣也、伊勢幣被立之後、平野社自今朝申觸穢出來之由、雖然不穢之社司、於門外請取幣帛畢、

古今間大概注進如件

文安六年三月十五日　　　左大史小槻晨照上

左大臣殿御申詞、小高檀紙押折被遊之、

祈年穀奉幣、依石清水指合可被延引哉否事、如兩局注進者、寛治度祇園幣漏之例有之、其外諸社奉幣內、或他日伊勢以下五社幣被奉之、或他月追被立春日幣之由申之、至建長三年例者、就臨期之儀、被預置不穢之社司云々、今度之儀聊不同歟、雖然執奏之上、被准據此等之例可被延引歟、宜在聖斷矣、

自殿下被申鷹司殿御返事

祈年こくのほうべいに、八幡の使參向叶候まじく候とも、たゞおこなはれ候はんずるやらんとたづね申され候程に、一社さはり候とき、みなのべられ候事、ことに八はたの事は一だんの事にて候としろしめしながら、おこなはれ候事はいかゞ候べきと申され候程に、まづのべられ候べきにて候ひしかども、そのゝち武家よりかさねて申候は、この二三年おこなはれ候はねばしかるべからず候、おなじくはおこなはれ候やうにと申候はぞに、りやうきよくへせんぎを御たづね候へば、じゆんきよのれいをしるしてまゐらせ候、そのとき又この御所へ御申

候やうに候へば、いかゞ候べきと御申候はゞに、じゆんきよの例をもておこなはれ候べき事、これ又しさい候まじく候と申され候、いづれもべちに御申候ことばにては候はず候、御文の返事にひろかたへおほせられ候はゞにしるしとゞめられ候はず候、このぶんよく申され候べく候、

右府二條殿御申詞云々、小高檀紙折之被遊之、

新年穀奉幣、石淸水八幡宮社訴落居以後、雖可然、以建長三年准據例可被始行之由執奏之上者、何事候乎、

今度有勅問御人數、左大臣殿、鷹司殿右大臣殿、二條殿内府、万里小路前内府、帥大納言、以上五人云々、

享德三年九月五日癸丑、今度一色内穢及室町殿、仍室町殿爲乙穢、依之十一日例幣、同新年穀奉幣可延引之由被仰下云々、○中略十月新年穀奉幣被行例、被尋之云々、

〔年中諸公事裝束抄〕新年穀奉幣、上卿束帶、公卿辨少納言史各束帶、

古事類苑

神祇部二十六

月次祭 神今食祭附

古事類苑

神祇部二十六

月次祭 神今食祭附

月次祭トハ、月毎ニ祭ルノ謂ニシテ、其祭幣ヲ六月ト十二月トノ二季ニ諸社ニ奉幣シ、以テ國家ノ靜謐、聖體ノ福祉等ヲ祈請スル祭儀ナリ、此祭ハ中祀ニシテ、其祭神ハ總テ三百四座アリ、卽チ祈年祭ニ案上幣ニ預ル神ニシテ、新嘗ノ祭神ト全ク同ジ、此祭ノ史ニ見エタルハ文武天皇ノ大寶二年七月ヲ以テ始トス、蓋シ祈年祭ト月次祭トハ、大ニ相同ジキモノアリテ、其祝詞モ祈年ノ一項ヲ加フルト加ヘザルトノ差アルニ過ギズ、祭儀ノ如キハ全ク同一ニシテ、當日神祇官以下諸司ノ官人參集シテ、中臣祝詞ヲ宣シ、伊勢以下諸社ノ幣帛ヲ頒ツコト祈年祭ト異ナルコトナシ、但シ供神料物ハ少異アリテ、月次祭ニハ御年神ニ雞猪ヲ進ムルコトナク、神馬モ大神宮、度會宮、高御魂神、大宮女神ノ外ハ進獻セズ、其他諸社ノ祝部ノ懈怠ヲ戒メ、或ハ頒幣ニ就キテ種々ノ制度ヲ設ケシコトナド、祈年祭ノ制度ノ月次祭ニ同ジキモノ尠カラズ、故ニ此等ハ何レモ祈年祭ノ篇ニ收錄シタレバ、此篇ニハ總テ略セリ、

月次祭ハ每年六月ト十二月トノ十一日ニ行フヲ以テ例トス、然ルニ一條天皇ノ寛弘元年六月ニ、十日ヲ以テ之ヲ行ヒシハ蓋シ異例ナルベシ、其祭場ハ、常ニ神祇官ニテ行ヘドモ、時ニ或ハ中和院ニテ行フ事モアリ、而シテ此祭ノ訖ル後ニハ、天皇必ズ中和院ニ御シテ、神今食ヲ行ハセ給フ、若シ觸穢等ニ由リテ神今食ヲ延引シ、若クハ停止スルコトアル時ハ、月次

名稱

祭モ亦共ニ延引シ、若クハ停止セリ、後世ニ至ルニ及ビ、月次祭ハ兵亂、或ハ用途ノ不足等ニ由リテ、爲ニ延引若クハ停止スルコトモ多ク、且ツ其頒幣ノ如キモ、伊勢大神宮ノミニ限リテ、他社ニハ殆ド其例無キニ至リ、遂ニ應仁ノ大亂ヲ經テ神今食ト共ニ全ク廢絶ニ歸セリ、

〔令義解 二神祇〕季夏 月次祭 謂於神祇官祭、與祈年祭同、卽如庶人宅神祭也、 季冬 月次祭

〔簾中抄 上年中行事〕六月十一日月なみの祭　十二月十一日月なみの祭

〔倭訓栞 前編十五〕つきなみ　月次と書り、月ごとをいふ、次は次て並ぶ義なり、

〔公事根源 六月〕月次祭

これは六月十二月に二度、諸社へ御幣を奉らせ給ふ事也、

〔年中行事歌合〕三十二番

右　月次祭　宗明朝臣

夏のくれ年のをはりの月毎に報賽(カヘリマウシ)の神の幣帛(ミテグラ)

右夏の暮年のをはりと侍ば、二度の月次の祭とは聞え侍れども、此外神今食なども侍ば、まがひぬべきにやとて負侍ぬ、

〔祝詞考 上〕六月月次祭 こは祈年とひとしく、京畿諸國を合て、三千百三十二座の神たちへ、月毎に奉り給ふ幣を、六月と十二月の十一日に、諸國の神主祝部ら神祇官へ集て頒給ふ也、その正月より六月までの幣は、十二月に頒、七月より十二月までの幣は、六月に頒ち給はせるなり、

〔玉勝間 六〕神今食

神今食は、年毎の六月と十二月との十一日にて、月次祭の同日の夜に行はるゝこと也、まづその月次祭は、三百四座の神たちに幣帛を奉り給ふ、そを月次と名くるよしは、月毎に奉り給ふべきを、合せて二度に奉り給ふにて、六月には、其年の七月より十二月までのを奉り、十二月には、來年の正月より六月までのを奉り給ふ也、

初見

〔續日本紀 文武二〕大寶二年七月己巳、在山背國乙訓郡火雷神、毎旱祈雨、頻有徵驗、宜入大幣及月次幣例、

〔二十二社註式〕月次 六月、十二月、十一月、〇中略 第五十二代嵯峨天皇弘仁年中、此祭始被行之、〇又見公事根源

〔祝詞考 上〕六月月次祭　此祭は神祇令に出、又大寶二年七月、乙訓郡火雷神宜入大幣月次幣例と紀に見ゆれば、其始はいと古へなりけん、然るを或物に弘仁年中に此事始るといへるは何事ぞや、

祭神

〔延喜式 一 四時祭〕六月祭 十二月准此 月次祭奠幣案上神三百四座 並大 〇中略 右所祭之神、並同祈年、

〇按ズルニ、月次祭ノ祭神三百四座ノ名稱ハ、社格篇官幣大社ノ條ニ具載セリ、

齋戒

〔禁秘御抄 中〕一神事次第 二季月次神今食 自一日至十一日也、十二日朝解齋、仍自一日僧尼重輕服等人不參、但先行幸之時、眞實御身潔齋者、自十日也、中祀作法皆同之、

〔年中行事御障子文〕一六月十二月月次、十一月新嘗祭、前後齋之日、僧尼及重服奪情從公之輩、不得參入內裏、雖輕服人、致齋之前散齋日不得參入、餘諸祭皆同此例、

〔師元年中行事 六月〕十一日月次祭事 於神祇官行之、十六日度會宮、十七日大神宮、廢務十二日有後齋、近代事也、

〔中右記〕大治五年九月五日甲辰、參院御所三條東殿、〇中略 中以別當被仰云々、來七日可參籠廣隆寺也、而難者云、例幣以前參御佛事、頗可有其憚歟、人々相議可申者、多以申云、此儀出來ハ、後日可參御歟、非急事之故也、重仰云、故院被仰云、我出家以前諸社祭日立幣、而神事極大事也、不可行給神事者、奉此仰後、神今食、例幣之時、或熊野詣、或行佛事、已經年序、而今度忌例幣者、自今以後神事之日、可忌佛

祭式

事歟如何、重可量申、人々申云、其儀ニ候バ、凡不可此定候也、○中略猶如此大神事日、不可御寺中歟、凡雖不令憚神事給、爲御用心也、被奏此者、後无左右仰、大略不可被忌歟、此事難申事、敦光朝臣云々、

〔園太暦〕延文二年十二月五日乙亥、時光朝臣神事中、輕服之人參內有無尋事、○中略

抑輕服人、月次祭已前如御沙汰不可然候歟、御神事中モ障遇ナドマデ參ヘ、參內先例モ候ヤラン、先例候哉、尽只龍顔ハ尤可有憚候歟、不審存候、且大納言殿御吉服之上者、不思寄候哉御參上不可有苦候哉、先々儀不審存候、象又借中吉服事可爲宣下候歟、此事候、先々未聞耳事、甘無才覺候、當中者存知人モ候ハンと覺候、但近年人々所存不然候、可被尋聞食候歟、謹言、可令吉服出仕給、如此仰旨歟、不可有子細候哉、被示下候者畏存候、以此旨可令洩申給、時光頓首誠恐謹言、

十二月五日　時光

丹後守殿

〔建內記〕嘉吉三年六月十日甲午、四條新中納言隆夏卿來臨、明日月次祭神今食可參行、爲訪其間事云々、官女有服者可有憚歟、仍示子細、懸履於沓脱申承云々、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀六月十二月十一日月次祭儀亦同○下略

○按ズルニ、儀式ノ文ハ、祈年祭篇ニ載セタレバ就キテ看ルベシ、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十箇條　善相公清行

一應消水旱求豐穰事

朝家每年二月四日六月十一日十二月十一日、於神祇官立祈年月次之祭、○中略其儀公卿率辨官及百官參神祇官、神祇官每社設幣帛一裹、清酒一瓮、鐵鉾一枝、陳列棚上、又社或有奉馬者焉、祈年祭一匹、月次祭二匹、亦皆左右馬寮率列神馬、爰神祇官讀祭文、畢以件祭物須諸社祝部奉本社、祝部須潔齋捧持各以奉進、○中略

延喜十四年四月廿八日、從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事、

〔西宮記 六月〕月次祭

延喜十六年六月十一日、自左近陣發遣伊勢使事、

同十七年六月十一日、臨時幣使在月次祭明旦、仍付伊勢幣於彼使事、

上卿著神祇官北門內東腋、（西面、王大夫在同門外、外記在西腋、召史問供神物具否由、外記申代官、）上卿著廳、（大臣南面、入北門、納言入自東、著西面、孫廂式筥、）王大夫著、（无王大夫用他氏、入自西壇東面、）上卿召召使、（召召使、二人立良壁外壇下、同音稱唯、又經東屋井倉後立庭中、辨唯出、上卿云、式乃省違刀禰參入、乃召使唯、出南門召之、式部唯、）辨史諸大夫著座、（入自南門、）神祇官掌云、申祝詞、祝師下自西廳著祝座、（本官人皆著木綿、）次上卿以下著壇下薦座、（南舍座人皆著口砌下座、西著砌內、）申祝如例、（在式、）御巫廻覽幣物、（三人出自西屋、始自伊勢宮、三百餘所、）史二人持簡召諸祝、（遠社幣納官庫、朝集使入京日可付、）進、祝等分幣、上卿退口次々退、

〔江家次第 六月〕月次祭（殿務、於神祇官行之、）

神祇官率御巫著西廳

上卿著神祇官北門座

大臣參者、著門內西腋東面云云、參議以上者、著門內東腋西面、王大夫座在外、外記在外西腋、史生外記北、

群官著南門外西腋幄（上卿著北門東腋、先立座南一揖著座、又揖西面、）

外記申供神物辨備畢由於上卿

西宮記史申云云、然而北山抄、幷近代例如此、

若有不具諸司者、外記申代官、

上卿著北廳座（式筥、）

大臣者入自北面東戶、著東第三間北壁下座南面、參議以上入巽角、著東第一間、（西宮記南面、北山抄西面、）

青縹書櫃物西面北上

延長二年伯安則申、先例大臣入自西戸、納言入自東戸、參議入自東壁下云云、而儀式及先年例、納言入自巽角、王大夫入自坤角、著西第一間東面、或用代官、

上召、召使二聲

召使稱唯參立、二人立長壁下、同音稱唯、一人經東屋并倉後、立庭中、上宣、式乃省刀禰奉入禮止宣遠、召使稱唯出召之、式部唯

式部省率群官入自南門、著南屋座、東上北面、五位前、六位後、入門間、辨在式部輔上、可尋、

御巫坐西廳前座、

左右馬寮各引馬二匹、立刀禰東庭、

神部祝部等、入立西廳南庭、

神祇官人降座

次上卿以下、降著廳前庭、南儀砌上敷氈、南屋辨以下亦同著砌下座、

中臣進宣祝詞十段、段別祝唯

其詞在式

中臣退

上卿以下拍手、兩段、不唯、各復本座、祝退座、

御巫還見幣物、三人出自西屋、始自伊勢、三百餘所、

史二人持簡、召使諸社祝次第班幣、兩儀立砌上、

遠社幣物納官庫、朝集使入京日可付送之、

訖史申其由

上卿以下退出

近代上卿立伊勢幣後、令召使觸辨諸社幣儀可頒由退出、

自左近陣發遣伊勢使、(延喜十六、六、十一、)臨時幣使在月次祭明日、仍付伊勢幣於彼使、(同十七、六、)延引停止時、於建禮門前行大祓、更仰上卿令擇日行之、(中略)(延長七、○中略)上卿辨外記史皆候、仍於門外行事、不著齋院、(貞觀十八、○中略)致闕怠辨少納言、令侍從傳給祿、(康保二、七、十七、)

〔公事根源六月〕月次祭　十一日

是は先神今食以前、上卿神祇官の北門の內東の腋に著て、供神物具否をたづね、次に廳につきて事を行ふ、神祇官官掌祝詞を申、祝師祝の座につく、本官の人みな木綿をつけたり、上卿壇下の席座におきて、御巫幣物をみる儀あり、

〔西宮記十二月〕月次神今食事

承平六年十二月十一日、依例於神祇官有月次祭事、但差副神祇伯從四位上忠望王、(卜合)令齎臨時幣參向伊勢、其儀中納言扶幹參、奏宣命之後、向八省行事、內侍奏幣、午二刻、(陰陽寮勘申、)中臣忌部給幣了、王參給宣命退出云々、

〔中右記〕天永二年十二月十一日、依分配參勤月次祭、巳刻著神祇官北門座、(東腋內座、)召使置式、披見之處、神今食式也、早返給可進月次祭式之由仰之處、件式近代缺了者、雖然可置新年祭式之由仰下之處、置件式、是依爲同事也、召外記問諸司、王大夫未參、早々可催之由仰下了、又召史俊兼問幣物具否、各皆具了、但祭主卿未參、早可催者、藏人辨雅兼參入、祭主親定卿參入、但王大夫等參、而相尋之處、外記申旨頗有不定氣、仍差使尋大外記師遠之許、月次祭主王大夫有不參例者、早可勘申者、頃而少外記兼職申云、大外記勘申云、治安四年二月四日祈年祭、王大夫不參、仍以神祇權少副卜部兼忠爲代官也、祈年月次是同事也、尤可被准行者、次可申代官之由仰外記之處、頗有不案氣、予起座經北廳東壇上、著廳中東座、(西面)王大夫代神祇權少副卜部兼宗著西座、(東面)次祭主親定卿依爲三位來著予下座、(西面)

司、頗埋㞐、祭主三位座、此間頗無一定所、彼後一條院御時、輔親卿以後無三位祭主間、久不見件座之故也、但案式云、參議以上西面、仍予今日可著西面座之由所諷諫也、則著了、次予召召使、（二聲）召使立庭中、予仰云、式省ササ刀禰入口、召使稱唯、卽式部以下參著、祝師下居庭中、木綿鬘頭、（左官一人祝師一人、皆可著鬘頭、近代失之由、見永承三年六月十一日大宮右大臣殿御記也、）予并祭主等下居砌下座、祝師讀文、御巫廻庭中見幣物、伊勢幣使立、祭主卿次予歸著本座、此間漸給諸社幣、本官史申幣分了由、予起座退出之間、出北門程、王大夫初參來、召外記問遲參由、所陳申頗不當也、昨日行向西山、只今歸洛者、但昨日豪雨、前後相違、大略不覺者歟、仍免了歸家、

永久六年（○元永元年）六月十一日、天陰雨下、午後天晴、依勤月次祭、本民部卿分配也、有所勞不被出仕之間參勤也、入從郁芳門并神祇官北門、著東廳座、以召使召外記、問諸司參否、申皆參之由、又以召使事具了歟由尋辨許、（辨在南門、右少辨師俊勤之、）歸來云、申幣物具了由、予起座就北廳座、（回東壇上著西面座、）王大夫入從西一間著座、（東面）予召召使二聲、稱唯來南庭、仰云、式省ヲ率入ト宣ヘ、召使稱唯、出南門召之、右少辨以下著南屋座、予并王大夫以下居（使西儀敷座於壇上、）祝師著庭中座讀祝詞、了上卿以下拍手、御巫子廻伊勢幣案三回、伊勢幣出從東門、伊勢使坐前庭圓座、了上卿歸著本座、本官史來申幣分了由、以召使諸社幣儲可分給之由仰了、則起座退出、（向入神殿前、出入時如此、）

大治二年六月十一日己巳、月次祭於中院所被行也、左兵衞督實能卿、右少辨師俊、右少史俊重著行云々、依院宣如法被行、諸國雜掌交取幣云々、　十二月十一日丙寅、午時爲參勤月次祭參仕、入從待賢門并中和院南門、著北門內西廳座、（東廳二座ヲ可儲歟、神祇官燒亡之後、月次神今食被移此中院也、○中略）中和院無北門、仍南門儲上卿座也、而西廳如何、猶依神祇官儀、上卿座可用東廳間歟、又神祇官人座可敷西屋也、今東屋也如何、但去六月神今食時如此、令定尋舊跡被沙汰歟不知例、只所見之相違也、若神祇官修理時、月次神今食被用中和院云云、可尋知彼時事歟、但西屋被用神祇官座事歟、是彼官人可向東方事也、（○中略）

裏書、後朝以史俊重問大夫史云、月次祭以東屋爲神祇官座也如何、猶可用西屋事歟、大夫史返事云、被仰下旨尤可然也、去六月之時、實能右少辨宗成參勤也、件日不被沙汰、所記置也、是無指證歟、少納言忠成參入云々、

〔愚昧記〕仁安三年十二月十一日、依月次祭、申刻參神祇官、(自郁芳門下、)著北門内東腋、(西面、並置式部官、南地敷諸司軾、予(藤原實房)自南方著之、此座或南面敷之、)次召召仕、(二音、)召仕參入跪南地、予仰云、外記召セ、外記參軾、予問云、諸司ハ候哉、外記申候由、仰云、候セヨ、次令召使相尋幣物相具否之由於行事辨、召使歸來云、已具了者、仍起座廻東方昇東妻著座、(並置式、第二間西面敷之、此座或一間南面敷之、或入東戸著之也、)王大夫入西戸著座、(東面、)次召召使、召仕立南庭、予仰云、式ノ省ヲ刀禰奉入ト宣ヘ、召使稱唯退出、出召之、辨式部省參入、著南舍座、左右馬寮引立御馬於庭中、次神祇官降居西廳前、次予幷王大夫同下居壇下座、(南面、)次祝師著座讀祝詞、了拍手、(二段、)次御巫廻伊勢幣、(三度、依幼少人把之廻、)次伊勢幣請取出東門、(齋主相從出之、)次予幷王大夫歸昇著座、撤春日幣之後退出、藤氏爲上卿之時如此、抑以召仕諸社幣慥可分奉之由示辨了、(左少辨爲親也、)諸社司等可著本官人後座也、仍左少辨可著座之由加催之處、難澁不著、是每度如此云々、又稱幣物不仕之由不請取云々、然而後日可有沙汰之間、忽不力及歟、早可請取之由、可被下知之由示辨了、隨又請取了、抑欲昇降之時、向八神殿方小揖之西ニ東面社等也、

嘉應元年十二月十一日、風雨、及晩風休雨頻下、〇中略 昨日光雅示送云、月次祭新大納言分配也、而爲仁王會檢校、早可參勤者、申可參之由了、仍未時許沐浴、卽著束帶、而陰陽師遲參之間、申刻許解除了參神祇官、於郁芳門欲下車之間、召使來向云、此門北腋下女生產云々、然而不可爲穢之由云々、仍行事辨幷官人等參入已了、予云、不可爲穢之由法家所申歟、又慥被仰下候哉、答曰、然也、仍參入自此門、著神祇官北門東腋座、(西面、自南方著之、南地所司置軾、)召外記(令召使召之、)問事具否、依申皆具了由、欲著廳之間、左少辨爲親就軾云、外宮御馬斃之由、先日進宮司解狀云々、而付月次祭使可被獻御馬歟旨、右少辨日來申

沙汰云々、而未一定、仍尋遣藏人少輔許了、返事未到來候、予答云、暫可相待、兼日可有一定事歟、已黄昏欲暮、尤不便、又云、先々雖雨下猶被用晴儀云々、何樣可候哉、伯朝臣申云、年來之間、此祭雨儀未見給、先年六月祭日、忽雖暴雨即晴了、仍不用雨儀云々、予答云、貞觀年中始行雨儀禮云々、其後又有此例歟、而何甚雨之中强可行晴禮哉、早可改雨儀歟、爲親諾云、其儀何樣可候哉、予依不覺悟、取出次第(枚殿御次第也)令讀聞了、件儀見□□□記、仍不輕耳、已依黄昏令召使雖□可立明之由、主殿寮依申未參之由、暗然而在門腋、良久道孝庭燎、抑御馬事相尋之處、未承左右之由、左少辨所答示送也、于時亥刻歟、或云、辰一點、參議已上著廳行事云々、而今及此時、神事違例在今日歟、小時史某來云、御馬如例可被奉、牽飼御馬、於□御馬者、撰日次追可被引獻云々、仍著北廳行事、其作法如恒、且見二月祭記、仍不委注、

〔顯廣王記〕安元三年六月十一日己卯、月次祭幣於北舍裹之、依柏殿燒失也、上卿新大納言實定卿、

〔百練抄(後深草十六)〕寶治元年七月十一日被行月次神今食、月次祭上卿大宮大納言(公相)、分配、本辨權右中辨親賴朝臣、本官使長氏、(中略)○上卿已下參向神祇官、使發遣以後、主上出御南殿、大宮大納言(公相)奉抱、攝政令扈從給、頭中將雅家朝臣取御劍先行、雅家朝臣獻御笏、次御拜、攝政令扶持給、職事祗候、

〔康富記〕應永八年六月十一日己巳、今夜月次神今食也、上卿中納言源光顯卿、參議源通守朝臣、少納言菅原言長朝臣、左少辨藤原重房、權大外記□□新少史安倍盛久、官掌召使行嗣、使親雄王、忌部親憲、內侍已下參官、酉剋著朝衣帶劍參官、于時無其人、其後盛久親憲行嗣等參官、少時上卿次辨次參議少納言參官、先是左少辨著北廳、(西第二間東面)史(北一間南面)官掌史末、(西上南面)忌部(南三間、北面對史、)幣裹也、頃之史起座進辨前、覽木工寮請奏、其儀如常、幣裹畢、

幣裹之時、辨遲參之間、不待辨史官掌忌部先著北廳幣裹、其後辨參官之間著座、辨著座之時、史官掌忌部□□動座、辨著座之後歸著之、

次上卿著北門内東掖座、(西面)次□□著同門外西掖座、(東面)兼置式筥於上卿前、(右方、此式筥以使部可置也、)次上卿召召使、召使進上卿前平伏、上宣、外記召セ、召使稱唯、右廻召外記、了揖立座進候軾、上宣、諸司候ヤ、申云候、仰云、令候ヨ、□□稱唯退、右廻歸著本座、次上卿召召使召辨、辨未被進以前上卿被立座、

今夜代官被略之、近年例也、

次上卿被著出居座、(北廳南廂上南面)□□著出居座(南面東座前座)北座、以前上卿雖可被著北廳(第三間南面)北廳既爲神殿御裝束之間、北廳座被略之、直被著出居座畢、仍□□又直著出居座者也、參議少納言辨史著南廳出居座、次伊勢幣發遣、上卿已下平伏、諸社幣諸社等請取之、 廿九年十二月十一日甲子、月次祭幷神今食也、予月次分配也、○中略 予沐浴著朝衣、(帶劔平緒丸鞆如常)參神祇官、于時無人、(酉刻)南廳代幄未打、總而公人一人不見、早參之至也、○中略 月次祭如例、但上卿被入北門之時、不下腰被過、予存出立之儀、雖構之、曾無其儀、予式筥於北門置之、上卿先召外記、問具否、次召辨被問幣物具否、了著座如常、御幣發遣之時、出居座上卿不被平伏、予一身平伏、頃之上卿被平伏了、予著座北廳簀東外、上卿座通南面也、是出居座也、無東舍代之間、不著東舍代者也、

寶德二年六月十一日癸未、月次祭也、上卿權中納言藤原隆遠卿、左中辨同親長朝臣、外記康顯、(本分配三)(爲康純也、相代參之、)史康純、官掌親秀、召使秀國、内侍等也、○中略 先有幣裹、辨史官掌忌部等著北廳、如例、史不覽請奏、如何哉之由辨被尋之、失念不用意之間遂不覽申之、拜前請奏覽辨之由見正和御記了、木工寮請奏トモ云也、(木工寮出之付史云々、覽申辨、辨被返下者也、舊例叙日、辨被覽申一上云々、)式筥北門上卿前令置之處、可置北廳之由上卿被仰之間、康顯奉談少納言、申云、置北門之上者、重不可置北廳歟云々、上卿重仰云、北門或召使取之、又置北廳之條定儀也云々、如江次第者置北廳之由見了、置北門之儀不見之、但近例置北門之條既爲法例歟、雖然從上宣、今夜北門之式筥、召使秀國取持參、昇北廳置上卿前者也、又於北門召外記仰云、幣物具否事、被尋辨之由被仰之、康顯申云、召辨被尋幣物具否、不然之時以召使被尋申辨歟、强外

記不爲御使之由返答、上卿重仰云、只可尋辨也、外記重申云、以召使可傳申者、上卿仰云、更モ角モ云云、仍康顯退軾、以召使此由傳申辨、辨返答之趣、召使直歸參軾申上卿了云々、（式筥、令置之、御壹事、請者少納言、中者外記、末者史康純也、爲年少之間、爲讀申之、此壹事如官記者、平サマニ昇欵、給事中此儀ヲ被執之、雖然近例先壹ニ側ヲ可昇之由、去年十二月月次祭時被談了、）

〔延喜式八祝詞〕六月月次十二月准此

集侍神主祝部等諸聞食登宣、

高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉皇神等前爾白久、今年乃六月月次幣帛、（十二月者、云今年十二月月次幣帛、）明妙照妙和妙荒妙備奉弖、朝日乃豐榮登爾、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、神魂高御魂生魂足魂玉留魂大宮賣御膳都神辭代主登御名者白弖、辭竟奉者、皇御孫命乃御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閇奉故、皇吾睦神漏伎命神漏彌命登、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

座摩乃御巫辭竟奉皇神等乃前爾白久、生井榮井津長井阿須波婆比伎登御名者白弖辭竟奉者、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知弖、皇御孫命瑞乃御舍仕奉弖、天御蔭日御蔭登隱坐弖、四方國乎安國登平久知食須故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

御門乃御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白弖辭竟奉者、四方能御門爾湯都磐村能如久塞坐弖、朝者御門開奉、夕者御門閉奉弖、疏布留物乃自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜乃守日乃守爾守奉故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

生島乃御巫乃辭竟奉皇神等乃前爾白久、生國足國登御名者白弖辭竟奉者、皇神乃敷坐嶋能八十嶋者、谷蟆能狹度極、鹽沫乃留限、狹國者廣久、峻國者平久、嶋乃八十嶋墮事無久、皇神等寄志奉故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

祭日及時刻

辭別、伊勢爾坐天照大御神乃大前爾白久、皇神乃見霽志坐四方國者、天乃壁立極國乃退立限、青雲能靄極白雲乃向伏限、青海原者棹柁不干舟艫乃至留極、大海原爾舟滿都都氣氐、自陸往道者荷緒結堅氐、磐根木根履佐久彌氐、馬爪至留限、長道無間久立都都氣氐、狹國者廣久、峻國者平久、遠國者八十綱打掛氐引寄如事、皇大御神寄志奉波、荷前者、皇大御神乃前爾如横山打積置氐、殘乎波平聞看、又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾睦神漏伎命神漏彌命登鵜自物頸根衝拔氐、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣、

御縣爾坐皇神等乃前爾白久、高市葛木十市志貴山邊曾布登御名者白氐、此六御縣爾生出甘菜辛菜乎持參來氐、皇御孫命乃長御膳乃遠御膳登聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣、

山能口坐皇神等乃前爾白久、飛鳥石村忍坂長谷畝火耳無登御名者白氐、遠山近山爾生立流大木小木乎本末打切氐持參來氐、皇御孫命乃瑞乃御舍仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食我須故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣、

水分坐皇神等乃前爾白久、吉野宇陀都祁葛木登御名者白氐辭竟奉者、皇神等依志奉牟奧都御年乎八束穗乃伊加志穗爾依志奉者、皇神等爾、初穗者穎爾母汁爾母瓱閉高知、瓱腹滿雙氐稱辭竟奉氐、遺乎波皇御孫命乃朝御食夕御食乃加牟加比爾長御食乃遠御食登赤丹穗爾聞食故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久諸聞食止宣、

辭別、忌部乃弱肩爾太繦取掛氐、持由麻波利仕奉禮留幣帛乎、神主祝部等受賜氐、事不過捧持奉登宣、

〔本朝月令四月〕十一日月次祭事

弘仁式云、凡六月十二月十一日月次祭、奉班幣帛、大臣以下集神祇官、如祈年儀、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀〔六月十二月十一日月次祭儀亦同〕

其日卯四刻〔月次祭、六月卯一刻、十二月辰一刻〕、所司辨備庶事、

〔延喜式一四時祭〕凡〇中略月次祭、六月十二月十一日、

〔公事根源六月〕月次祭　十一日

これは六月十二月に二度諸社へ御幣を奉らせ給ふ事也、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年六月十一日乙未、月次神今食祭、　十二月十一日壬辰、月次祭神今食祭如常、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年十二月十一日乙卯、月次神今食祭、

〔日本紀略四村上〕應和元年六月十一日癸卯、月次神今食也、

〔日本紀略十一一條〕寛弘元年六月十日癸亥、月次祭、

〇按ズルニ、十日月次祭ハ異例ト云フベシ、

〔年中行事秘抄〕諸祭剋限

六月月次祭

卯四點以前所司底事辨備訖、辰一點參議以上就座始行事、十二月同之、

以前右大臣宣、永以爲例、

弘仁十四年十二月廿八日　少外記都宿禰廣田麻呂奉

〔年中行事秘抄六月〕十一日月次祭事

祭殿

或於中院行之、有行事、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年六月十一日乙未、月次神今食祭並於神祇官行事、親王公卿參會所司供事如常、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年六月十一日丙寅、月次幷神今食祭、親王公卿向神祇官奉祭如常、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年六月十一日戊寅、於神祇官修月次祭、於神嘉殿修神今食祭、遣親王公卿奉

延引

祭、

〔三代實錄 二十清和〕貞觀十三年十二月十一日壬子、於神祇官修月次神今食祭、親王公卿行事、

〔三代實錄 三十陽成 一〕元慶元年六月十一日庚辰、月次幷神今食祭、公卿向神祇官而行事、

〔百練抄 六崇德〕大治二年三月廿日、諸卿於攝政直廬定、申神祇官燒亡事、可有廢朝哉否、幷月次神今食於何所可行哉、　六月十一日、月次神今食、於中院行之、

〔中右記〕大治二年三月廿日、大外記師遠勘申神祇官燒亡之後可被行事等、○中略至月次祭神今食者、於中院神嘉殿可被行歟、○中略神今食月次祭ハ、同人々定申、治部卿被申云、大略同人々定申、但長元長曆之比、神祇官正廳顛倒之間、神今食於中院被行也、依彼例於中院可被行歟、　六月七日、頭中將送書云、月次祭神今食、今年於中院可被行也、而件旨可被下宣旨歟、將又只可仰神祇官歟、被尋官外記之處、不慥見由所申也如何、予送返事云、件事誠不知例、但神今食月次祭、朝家嚴重神事也、延引停止之時、必被下宣旨也、准彼例猶被下宣旨可宜歟、外記件旨可下知諸司事也、後聞件事右府奉行、仰下外記也、　十一日己巳、月次祭、於中院所被行也、○中略神今食同於中院所被行也、　五年六月十一日、月次祭、源中納言顯雅右少辨宗成參勤、神今食左兵衞督實能右兵衞督伊通右少辨宗成少納言忠成參勤云々、神祇官新造後初被行之、

〔三代實錄 十三清和〕貞觀八年六月十一日甲申、停月次祭神今食祭、以有穢也、大祓於建禮門前、　七月五日丁未、是日修月次祭神今食祭於神祇官、去六月十一日、因穢停止、仍今日修焉、

〔三代實錄 四十四陽成〕元慶七年十二月十一日癸卯、停月次神今食祭、大祓於建禮門前、　十四日丙午、於神祇官修月次神今食祭、十一日須修此祭、而十月十日內裏人死、今月十日滿三十日之限、十日是在祭前散齋之內、又今月五日豐樂院北人死、故延而行之、

〔類聚雜例〕長元九年六月一日戊申、大外記賴隆令申關白相府云、參著淨土寺之人可爲穢歟、其故者

延喜廿一年六月十一日、故中納言源當時薨、去五月四日薨、六日葬、七日骸骨爲粉入一器、安置東山住僧蓮舟法師私寺屋、而故民部卿道明卿追福法事、以今月七日於道澄寺被修、而彼蓮舟法師參會件態、仍會集上下被穢、彼師參入內裏、依是穢被停月次神今食云々、以七月九日可被行之由被定者、

〔日本紀略 四村上〕天德元年六月十一日丙寅、月次神今食、依內裏穢氣幷錫紵事延引、於八省院東廊有大祓事、　四年六月十一日己卯、停月次祭神今食、以內裏有死穢也、於建禮門大祓、　七月十日戊申、月次神今食也、內裏依丙穢被付諸司、又被副奉伊勢臨時幣帛、

〔日本紀略 六圓融〕天祿三年十二月十一日丁酉、月次祭神今食延引、依公卿故障也、　十五日辛丑、月次祭神今食、

天延二年六月十一日戊子、月次祭神今食、依內裏穢延引、仍於建禮門大祓、　七月九日乙卯、於神祇官月次神今食、

〔日本紀略 十一後一條〕長德元年六月十一日丙戌、月次祭延引、依上卿不參也、　十二日丁亥、於建禮門大祓、依月次祭延引也、　十六日辛卯、月次祭神今食、中納言公季勤之、雖爲觸喪不被許、仍行之、

〔日本紀略 十三後一條〕萬壽二年六月十一日辛酉、月次祭神今食延引、依皇后宮之穢也、　十七日丁卯、月次祭神今食、

〔左經記〕長元八年六月八日庚申、參內、頭辨相示云、去七日大內有犬死、仍月次神今食等延引、先例有內穢之時、於神祇官被行、而件官屋等去年顚倒後未造立、仍延日於中院可被行之由有定也、頃之退出、　十一日癸亥、月次祭使、公家先被祈申大神宮之後、自廿一日可被始行之由所定申也、〇中略今日月次神今食等延引之由、八省東廊有大祓、上右兵衞督云云、

〔經信卿記〕治曆四年十二月十四日、未刻參內、宮內卿左衞門督左兵衞督昨日被參會、傳聞去十一日月次祭使齋主元範宅有死人、而隱申勤仕使役之由、被神祇少副公輔語按察大納言、大納言使左兵

衞督洩申公家、公家被驚仰、被召問公輔、公輔申云、雖承其由、依无一定所不申也、又被仰檢非違使令拷訊、元範寄宿宅女法師等已不承伏、今朝被問子日御卜之例、有軒廊御卜、各占申有穢氣由、仍遣使被停幣使、但被仰宮內卿、令勘觸穢幣物可被行例云云、臨昏退出、　十七日、俊井上官等參內、途中右少辨大外記上卿御車過間、爲長下立來逢、相共參內、于時申一刻、今日被行月次祭幣物觸穢、神今食延引、大祓云云、

〔中右記〕寬治六年六月十一日、月次祭神今食、禁中依觸穢延引、仍其以前御修法護摩加持、如例進御前修之、又重服之人參內也、　十九日辛未、有大祓、是月次神今食延引之由也、而或人談云、前々延引之由大祓、雖穢中十一日被行者可尋、夕方治部卿參右仗座、被奏月次神今食日時、來廿五日　廿五日丁丑、月次神今食被行、

長承四年〇保延元年六月十一日、月次神今食延引、依神祇官七箇日穢也、　十八日庚申、月次神今食也、月次祭右衞門督實能、神今食新中納言顯賴、右宰相中將公敎、

〔吉記〕承安三年七月五日丙申、今日被行月次祭、依神祇官穢延引、〇中略入夜被行神今食、上卿中御門中納言、參議新宰相、少納言信季、左少辨兼光等行之云々、

〔顯廣王記〕安元二年六月十一日甲申、月次祭神今食、依內裏穢氣延引之由被仰下、觸事諸司了、件穢去八日、法住寺殿池小童一人落入死去云々、終夜有沙汰被定穢氣了、下宣旨延引月次祭神今食了、

〔玉海〕文治四年六月一日乙丑、神祇官人卜部兼基參上申云、神祇官西院有穢物、小兒巳卅日穢也、御體御卜月次神今食皆以不可叶、今日爲御卜參官之間、官人等觸穢之故也、此事宗隆所傳申也、仍直奏此由、且可尋例之由、便仰宗隆了、　二日丙寅、晚頭宗隆來申云、神今食事奏聞之處、任先例可計沙汰之由有院宣者、〇中略入夜進外記勘申月次神今食七月被行之例、仰云、延引之由早可宣下者、　三日丁卯、月次神今食延引事、宗隆宣下了、　七月六日庚子、棟範來申條々事、御體御卜、來十一日可被行

之由外記所申也、神今食月次祭等十二日可被行、陰陽師勘申十一二日也其故御體御卜、多在神今食之前之故也、神今食不延引、御體御卜許被延引之時ハ、神今食以後、被行御卜奏例也、於共延引之時者、猶被先御卜奏云々、

〔百練抄〕寶治元年五月十九日辛未、依關東將軍室家他界事、天下觸穢、可至來月十三日之由被仰下云々、　廿七日、穢中事猶不定、但於御靈會者、寬治六年雖穢中猶被行之由外記雖申之、件度月次神今食延引畢、　六月一日、可爲穢之由猶依被定、仰月次神今食可延引之由、爲經俊奉行被宣下、　七月十一日、被行月次神今食、

〔園太暦〕康永三年十二月十一日丁卯、月次神今食、依禁中穢延引云々、　廿三日己卯、藏人勘解由次官朝房、爲勅使入來、予咳病無術之間不謁、以守實朝臣問答、月次祭事也、予申詞注出授之、本儀職事可書也、未練不合期歟、仍注出與也、月次神今食、可爲來廿六日之處、立春以後發遣之例不候云々、以新年祭次可被付行之由、載事書幣使令申間、被相尋匡遠清澄之處、兩樣所見不分明之由申候、可爲何樣哉、

今月月次官幣發遣事、節分以後被行之例不存知之處、如承者被尋外記候云々、御左右何樣候乎、縱以來廿六日雖爲發遣、路次越年又以違先規候歟、若年內可被行者、今明日之間可被遂行歟、將又以新年祭之次可被行者、非無先例歟、而當之間急速可有申沙汰候哉、

月次神今食事已及月迫、先規誡不審、而以新年祭次發遣月次祭幣物、非無先規之由雖載幣使事書件例分明不覺悟之由、匡遠清澄令申者、神官所申又雖偏信、來廿六日縱雖爲吉日、不被行今年神事、安貞年之條、神慮難測、路次越年者、無處于彼勘例歟、當年發遣尤大切歟、然者不擇日之吉凶、明日被發遣之條可然歟、○中略先規不分明者、就新儀雖立春以後可被行月次祭之條、可在時宜矣、　廿六日壬午、今日月次神今食、○中略右衞門督向神祇官、行月次神今食云々、

貞和三年六月十一日壬午、月次神今食依武家產穢延引之由被宣下云々、廿二日、抑月次神今食延引、六月中者常事也、及次月之條不審之間、相尋匡遠師茂清澄等處、注送先度所申無相違歟、

六月月次祭神今食延引及七月例

康平五年七月三日、式日依內裏穢延引、

天喜元年六月十一日、依有穢氣延引、以七月廿一日可祭祀之由同廿九日被宣下之、(但七月延引、九月廿五日被行之)

治承四年六月十一日、延引、七月九日被行之、

文治四年六月十一日、依本宮穢延引、七月十二日被行之、

寶治元年六月十一日、依關東穢延引、七月十一日被行之、

文永六年六月十一日、依內裏穢延引、七月十一日被行之、

永仁三年六月十一日、依同穢延引、七月十二日被行之、

元弘三年六月十一日、月次神今食延引、依天下穢也、七月十二日被行之、同四年六月十一日、月次神今食依無使延引、(或祭主穢歟)七月三日被行之、

貞和三年六月廿二日

七月廿五日乙丑、今日月次祭幷神今食、竹林院大納言參行云々、　四年十一月十三日丙午、依法皇(○花園)崩御穢、諸社延引宣下事、頭長顯朝臣奉事、(○中略)

去十一日、依太上法皇崩御、穢氣廣及天下、今月諸祭宜令停止、賀茂臨時祭、及月次祭神今食等、穢限以後擇吉日行之、

若如此可候歟、賀茂臨時之祭幷來月月次神今食事モ、如此可被宣下歟ト存候、是ハ重事候歟、尤可被申談執柄候歟、

十二月一日、藏人辨俊冬爲勅使入來、今日御贖物忌火御飯、穢中可爲何樣哉云々、〇中略其外猶不審之間、相尋兼豐宿禰之處、請文到來、續之、〇中略

被仰下之旨、謹承候畢、〇中略去月中諸社祭事雖被停止候、於月次神今食者、穢限已後、若被撰日次、任代々例可被行候歟、然者發遣單月迫候者、本宮之儀及明春可爲違例候、發遣相當六箇日候、相當口于本宮之儀候之故也、〇中略

十二月一日亥刻　兼豐請文

十一日、月次神今食依穢延引、先日宣下云云、

貞和四年十二月三日宣旨

月次祭神今食依觸穢延引、任例令行大祓者、

藏人頭左近衛權中將藤原定宗奉

〔園太曆〕文和元年十二月十一日庚戌、今日月次神今食延引云々、元來勢州道路難參之間、伊勢奉幣難通歟、其上陽祿門院〇光嚴后、文和元年十一月崩、穢氣遍滿天下、不能左右、

延文二年十二月十一日辛巳、月次神今食又不及沙汰歟、　廿六日丙申、傳聞、今日被發遣月次祭幣、〇中略上卿松殿大納言、辨親顯朝臣、

〇按ズルニ、上文文和延文兩度ノ延引ハ、共ニ兵亂ニヨリテ、奉幣使ノ參向シ難キニ由レルナラン、

〔園太曆〕延文四年六月十一日、月次祭幣料闕如、又延引也、定例年等式歟、不便不便、　十二月十一日庚午、月次神今食延引、幣料無足之故云々、　廿七日丙戌、傳聞、月次神今食、今日被行之、坊城中納言奉行云々、

〔續史愚抄後小松〕應永二年六月十一日癸酉、月次祭神今食等延引、內侍申障故也、蓋有不參被行例、天治元年六月神今食、中宮女房土佐局、爲內侍代參向、此外延喜及堀河院御宇被用代云、

〔康富記〕嘉吉二年九月廿五日壬午、去六月十一日月次祭神今食等延引、于今不被行、又今月十一日例幣延引不被行之間、大藏省年預判官員弘等令申於管領、月次祭用途同被付足云々、例幣者自元今月中可被行之由、爲叡慮被仰遣武家、致用脚之沙汰云々、所詮月次祭例幣同日被付行例被尋下之處、清外史局務外史等、無所見之由注進了、官務晨照宿禰、天承元年四度幣一度被付行之例候之由注進申云々、傳奏招清史被糺決之處、天承元暦記已下所載者、四度幣各式月被行之上者、被付行之例不可在也云々、此分重招官務被尋之處、天承例任所見注進了、相違條不存知云々、注進楚忽之至極之由人々傾之云々、又四箇度幣トハ、祈年月次例幣新嘗、此四箇度事なるよし、官務口傳之由被申之云々、清史等不審事也云々、祈年例幣六月十二月月次兩度加テ、四箇度幣トハ可申歟、新嘗ハ御幣發遣之儀無之者哉、返々不得其意之由密々被話候、　卅日丁亥、是夜被行月次祭幷神今食者也、去六月十一日依無用脚令延引畢、例幣以後月次祭被行哉、先例被尋候處無所見候間、於例幣者來月可被行也、仍先被發遣月次御幣使者也、延引之間先於陣被勘日時也、上卿權中納言隆盛卿、職事權右中辨俊秀、外記親種、史員職等參陣、

〔建内記〕嘉吉三年六月十日甲午、四條新中納言隆夏卿來臨、明日月次祭神今食可參行、爲訪其間事云々、○中略新少納言來云、延引云々、　十一日乙未、月次神今食總用内五千匹、武家先下行之、其外未事行、仍延引云々、三合之年厄尤可有臨時之御祈、結句恒例神事退轉、有其恐事也、

〔康富記〕嘉吉三年六月十一日乙未、月次祭神今食延引、御料足無之故云々、

文安四年十二月廿八日丙戌、今夜月次祭神今食也、今月十一日延引、先於陣被勘日時者也、○中略月次祭立春以後被行例、局務被注進申之故被行云々、

寶德元年十二月廿六日辛丑、月次神今食也、式日依内外宮合戰事、通路不叶、仍延引、依爲他日、先被勘日時者也、

享德三年十二月廿一日戊戌、是夜月次神今食也、式日依無要脚延引、○中略抑九月例幣未被行、雖然依有先例、

停祭

月次神今食被行之、

康正元年十二月十一日壬子、月次神今食延引、武家用脚未被沙汰出之故云々、

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年十二月十一日庚申、停月次神今食祭、先是今月六日、左近衞府人死、神祇官染汚其穢、大祓於建禮門前、

〔三代實錄 二十九 清和〕貞觀十八年六月十一日丙辰、停月次神今食祭、以內裏有穢也、大祓於建禮門前、

〔三代實錄 三十八 陽成〕元慶四年十二月十一日庚寅、停月次神今食祭、以太上天皇(○清和)崩日近也、

〔三代實錄 五十 光孝〕仁和三年六月十一日癸丑、禁中有孕婦胎傷穢、由是停月次神今食祭焉、　十四日丙辰、去十一日依例可修月次神今食祭、內裏有婦人胎傷之事、仍隨停止、但胎孕之後未三月、是以今更欲行月次神今食祭之禮、以內藏寮忽人死、大祓於建禮門前、以停祭事、

〔日本紀略 五 冷泉〕康保四年六月十日丁卯、奏明日月次神今食可停止、依先帝(○村上)御穢中也、　十一日戊辰、於八省院大祓、依月次神今食停止也、

〔日本紀略 十一 一條〕長保元年十二月十一日庚申、月次神今食停止、依太后(○冷泉后昌子)崩也、猶有廢務、

〔日本紀略 十三 後一條〕寬仁元年六月十一日戊寅、停止月次神今食、依太后(○圓融后遵子)崩也、又於八省院大祓、

萬壽四年十二月十一日丁丑、月次祭神今食等、依入道大相國(○藤原道長)薨被停止畢、仍有大祓、

〔小右記〕萬壽五年(○長元元年)十二月一日辛酉、早朝藏人辨資通傳關白命云、(於堂相逢)外記賴隆申、月次神今食、依穢付神祇官被行、亦遇穢被延行、又依穢停止等例、此間何樣可被行哉、報云、天慶元年犬死穢(開度)停止、同三年依內膳司死穢改日被行、件同三年例可相合歟、但者廿八日死人、廿九日曉取弃其穢、及廿九日歟、若依被延行例、去卅日可被行、然而寅日不可被行神事歟、又廢務日者不可被行他事、追儺儀被行歟、依輕穢有停止例、依死穢被付神祇官之例、不載件勘文、抑又可有勅定、若不被行、可有大祓歟、

○按ズルニ、此月終ニ行ハレズ、停止セラレタリ、

〔左經記〕長元元年十二月一日辛酉、藏人辨資通奉仰、今月神事等依穢被停止、幷付神祇官被行之例令勘云々、　二日壬戌、藏人辨云、昨日依殿御消息參右府、申可被行今月神事等哉否之由、有大外記頼隆眞人勘文、被申云、如勘申或付神祇官被行、或延日被行、或被停止、但此度延日被行無遺日、付所司被行之、此度皆是丙穢也、猶於此度被停止有何事者云々、　三日癸亥、參御堂、藏人辨云、殿仰云、於穢之甲乙丙所忌皆無差別、但依觸穢可停止神今食月次祭大神祭等之由、奏事由可仰下也、但未被行大祓以前、明日御讀經不可被行者云々、

〔日本紀略後一條十四〕長元元年十二月十一日辛未、月次祭神今食停止、依內裏穢也、

〔園太曆〕觀應元年十二月十一日壬辰、今日月次祭依路次難義停止云々、如此先例尤可被尋沙汰歟、
二年六月十一日、今日月次祭、勢州神境爲敵陣、難通幣使、仍不及沙汰云々、
延文元年十二月十一日丁巳、今日月次神今食不被行、近年之例也、去春依議無登歟、

〔建內記〕嘉吉元年十二月十日壬寅、藏人右少辨敎忠入來、○中略明日月次祭、依要脚事大略不可被行歟云々、所驚入也、停止分已及御沙汰云々、延引之分先可然歟、此用脚事、近年洛中土藏致其沙汰、而依當年德政之沙汰、土藏等損失之間免除云々、其外武家無用途、無力次第云々、四條中納言隆夏卿入來、月次祭進退事談云々、

〔續史愚抄後土御門〕文正二年○應仁元年六月十一日乙巳、月次祭神今食等不及沙汰、依合戰中也、

職員

〔延喜式十三大舍人〕凡六月十一日、供月次祭所小忌官人一人、史生一人、舍人十人、申省、祭日早朝大忌官人二人五位一人、六位一人、向神祇官、日中小忌人等向宮內省卜食、若有不合者、更差定數、

〔延喜式三十一宮內〕凡六月十二月月次祭所參五位一人、六位已下官人一人、

〔神祇官年中行事六月〕十一日月次祭、使祭主出居官人等次第、同祈年祭、

〔夕拜備急至要抄上六月〕一月次祭十一日

上卿分配　辨同　官外記

〔北山抄一二月〕四日新年祭事

延長四年十二月月次祭、外記史皆觸内裏穢、仍用代官

同七年十二月、辨史皆觸内裏穢、仍用代官

天暦十年六月月次祭、伯勘事、無五位以上副、依無代官例、免忠望王勘事、令分行諸社幣帛、

〔江家次第七六月〕月次祭

辨史穢用代官、延長七外記穢用代官、○延長四中略伯勘事、五位以上副無之、依無代官例、免伯、○天暦十中略以大炊頭為辨代、天暦三、二、

〔小右記〕長和三年六月十二日丙寅、大外記敦頼朝臣云、昨日新中納言行月次祭事、依他上不參、又行神今食事、

寛仁二年十二月十一日己亥、宰相來云、可參月次祭、又可參神今食、依合御卜者、月次神今食等作法面示了、拜參議之後今日初神事上、仍官掌一人召使二人給饗祿等、匹絹宰相著月次祭、從神祇官可參内、仍遣官掌召使於宅、可令給饗祿者、

〔左經記〕寛仁三年十二月十一日癸巳、臨夜參神祇官、為行神今食事也、外記惟孝云、月次祭上卿申障不被參、仍依攝政殿仰、雖催諸卿、皆申障不被參、仍有仰、左中辨為上卿代被行祭事、　四年六月十一日辛卯、天晴不他行、月次神今食祭等如常云云、今朝辨侍久江申云、月次祭分配左少辨、依服身不被參、又神今食祭先例合卜之人被參、而今諸辨皆有故障、唯右少辨并余二人無障、先例有一兩人之時不卜、仍神祇官卜上卿不卜辨、若朝祭夕祭之間、一事可勤歟者、余仰云、尤可然之事也、但前日右少辨相語云、作二度可勤者、先觸事由、有障者余可參也、頃之久江來云、右少辨作二度可勤行之由被申者、

長元元年六月十一日甲戌、傳聞月次祭上卿（春宮權大夫）及兼題被參內、被行神今食事云々、早旦參辨以下諸司多以爲歎云々、是不知案內之外記所申行云々、未見聞事也、

〔永昌記〕嘉承元年十二月十一日戊辰、今日月次祭、民部卿左少辨行之、予爲御使、○中略　辨侍走來云、卜食辨三人、平尙書穢有障、左少丞勤晝祭、爲憚可勤仕之由有勅定、付侍中仲光執奏、年中官方公事一身勤仕、就中至今月者、向春日祭鎭魂新嘗祭、自他分配、況政陣公事如無傍輩、何被除晝祭人有此催哉、一旦欲蒙裁報、仰云、聞食、勤否可在雅意也、然而神宮事何以辭退、忽參神祇官、其儀如例、

〔吉記〕壽永二年六月十一日甲辰、月次祭、上卿內大臣實定公、（相府被示送云、大臣參勤雖爲式文之所指、頗幽玄之古儀歟、延喜九年二月新年右大臣、天德元年二月新年左大臣、小野宮正曆三年六月月次右大臣重信、此外近代斷了歟、於身者最吉例也、大納言還任大將拜任、自然相當此祭、最前勤行了、今无相違、遙步槐路、可稱神之冥睠歟、今度三箇度勤行、可然事也云々、）右少辨兼忠奉行之、

〔玉海〕建久二年六月十一日戊子、此日月次祭神今食等也、月次祭上卿權大納言忠良、神今食上卿源中納言通資、辨右中辨棟範兼行兩方云々、少納言平信清稱遠忌之由、先例依不忌神事、仰可參之由、猶法家申不可然之由云々、仰可勘進本文之由、而不注申、依先例仰可參之由、參議各稱障不參、合卜之輩自由對捍云云、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元二年六月十一日庚辰、禁裏有犬產穢、月次神今食可付諸司之由被下宣旨、而上卿已下不參被行、希代事也、後日被謝申云々、

〔園太曆〕貞和四年六月十一日、傳聞今日月次祭分配實守卿也、有故障申、其子細爲別勅中御門中納言（宣明卿）參行云々、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月卅日乙丑、未刻許、左頭中將隆夏朝臣來示云、月次祭奉行藏人左中辨房長、依勅勘被止職事、仍儀可奉行由被仰下、可賜符案者、

月次祭、任例可被申沙汰之狀如件、

十一月卅日　左中將判

藏人中務丞殿

追申

神今食事、同可被下知候也、

月次祭可爲式日使之事、任例可令下知給者、依天氣執達如件、

十一月卅日　左中將

謹上　伯二位殿

月次祭御分配候歟、御參行事可承存候也、仍言上如件、

十一月卅日　左中將

進上　權大納言殿

神今食御卜合候歟、御參行事可承存候也、仍言上如件、

十一月卅日　左中將奉

進上　藤大納言殿

神今食御卜合候歟、必可令參向給候哉、仍執達如件、

十一月卅日　左中將

謹上　淸少納言殿

左少辨殿

已上公卿已下、近代兼行月次祭、仍書禮紙云、

上卿追言上

月次祭、同可令存知給之由、被仰下候也、

凡御教書之様、人々所為區々也、而分配幷卜合公事等、強不可為仰、為奉行職事相尋參否之由也、若申子細者、其時伺天氣宜可相催之、然者可載天氣之由也、又神今食卜合上卿、兼行月次祭事近例也、然而私不可自由、仍仰之由所載之也、

十二月八日癸酉、頭中將示送曰、月次祭分配辨費親申所勞之由、仍伺申之處、可仰俊國之由有勅答、御教書案可注給者、

月次祭可令參向給者、依天氣執達如件、

十二月八日　左中將

謹上　藏人辨殿

追申、神今食同可令存知給、卜合雖申子細之間、別被仰下候也、

〔康富記〕文安四年十二月廿六日甲申、局務外史、今月廿日輕服事出來、昨日除服宜下也、藏人權辨被申沙汰云々、雖然輕服中、神事奉行不可叶之處、月次祭神今食式日延引、明後日（廿八日）可被行之由治定云々、今夕藏人權辨親長被送御教書、兼日局務便宜之時、月次祭申沙汰事、可被仰康富之由有入魂云々、

月次祭神今食可為明後日（廿八日）任例可被沙汰之狀如件、

十二月廿六日　權右中辨判

權大外記殿

追申、日時定可為同日、可被存知候也、

月次祭神今食可為明後日（廿八日）由、謹承候了、早任例可令致沙汰候、仍言上如件、

十二月廿六日　權大外記中原康富請文

進言上

日時定可ㇾ爲二同日一之由可ㇾ令二存知一候、康富恐惶謹言、

廿七日乙酉、早朝參二局務史第一、奉ㇾ謁之、〇中略月次祭神今食、局務輕服之間申沙汰事、權辨御敎書昨夕送給候、何樣可ㇾ申候哉之由尋申候處、此間以二便宜一職事被ㇾ尋候間、輕服中雖ㇾ奉二行之一有ㇾ例、尙不ㇾ甘心、幸爲二位次之上一者、可ㇾ被ㇾ仰二權大外記一之由職事ニ入魂了、請文案可ㇾ書獻之由被ㇾ仰、染筆給之畏入者也、令ㇾ語給云、追而書之奧ニ恐惶謹言と、中家童五位職事ニ書遣之、四位貫首ニハ名字恐惶謹言トアリ、淸家儀五位職事にも又四位頭にも、名字恐惶謹言無二相違一之由被ㇾ示之、仍如ㇾ右書給候間如二案書一之、今日付二進甘露寺權辨一了、

寶德三年十二月九日癸酉、自二頭中將一資綱朝臣月次神今食延引例幷參議行事例被ㇾ尋之間、一紙令二注進一了、

月次神今食延引、又參議行事等例不審候、キト勘可ㇾ奉候、謹言、

十二月九日　資綱

權大外記殿

參議行事例

永觀二年六月諒闇故障、參議伊陟朝臣參二勤兩役一

天喜四年六月參議經長卿參行

康平四年十二月頭公房參入此外弘安正安以來近例存之

十日、今日又自二頭中將一資綱朝臣就二月次祭一有ㇾ被二尋問一事、

月次祭神今食、辨不參例勿論候哉、仍上卿不參、參議少納言兩人參行之例同不審候、可ㇾ注給候也、謹言、

十二月十日　資綱

權大外記殿

十一日乙亥、月次神今食也、上卿不參、參議行事也、外記三臈(康純)爲分配之處、兩三日蟲腹更發平臥之間、不及召進者也、二臈(康顯)可召進候處、去月十七日室町殿食入之觸穢、爲乙穢、(依參三條殿也)仍參仕不叶、兩人空以不令出仕、尤所恐存也、神慮難測、無力次第也、此由奉談合、局務可被沙汰進一臈外史之由令申處、忠種此間者不混穢之處、今月九日參入局務亭之間、又爲丙穢云々、局務外史日々被參、申室町殿之間、爲乙穢之故也、依之去月十七日以來、神事局務無奉行、被與奪予者也、子細見日來之記矣、

供神料物

〔延喜式一四時祭〕六月祭(十二月准此)

月次祭奠幣案上神三百四座(並大)

社一百九十八所

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、倭文纏刀形、絁纏刀形、布纏刀形各一口、四座置一束、八座置一束、弓一張、靫一口、楯一枚、槍鋒一竿、鹿角一隻、鍬一口、庸布一丈四尺、酒四升、鰒堅魚各五兩、腊二升、海藻滑海藻雜海菜各六兩、堅鹽一升、酒坩一口、裹葉薦五尺、祝詞座料短疊一枚、

前一百六座

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、四座置一束、八座置一束、楯一枚、槍鋒一口、裹葉薦五尺、

右所祭之神並同新年、其大神宮、度會宮、高御魂神、大宮女神各加馬一疋、(但大神宮度會宮、各加鷄頭料庸布一段、)前祭五日充忌部九人木工一人、令造供神調度、(其監造、并潔衣食料各准新年、)

〔北山抄二六月〕十一日月次祭事(同新年祭、但御馬左右各引二匹、)

〔中右記〕大治二年六月八日丙寅、頭中將送書云、月次祭桙柄等事、讚岐國所濟也、隨去春進濟神祇官

了、而彼官火副之時、已以燒亡、重可召彼國歟、但本官請取了、可令本官辨濟歟、宜令量申給者、依御氣色上啓如件、予申云、件事忽不知先例、但神祇官燒亡之次、一定燒失了者、本官何爲哉、猶重召本國可宜歟、不然者事闕歟、期日近々也、早以此旨可令奏達給者、綾闕依院宣、猶仰神祇官所令進榁柄也、四年六月十一日、月次祭、源中納言顯右少辨宗成勤之、諸國供神物事、頻殺生禁斷全不濟、神事違例之由右少辨來談也、於中院被行、

〔延喜式三臨時祭〕凡榁木千二百册四年、讚岐國十一月以前差綱丁進納、

〔百練抄七近衞〕久安元年六月十一日、月次神今食供神物、依宣旨復先規、

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、今日月次祭也、上卿民部卿成範、右少辨兼忠奉行之、幣物不法云々、

〔北山抄二一月〕四日新年祭事

承平四年六月月次祭、馬代進調布八端、上卿令仰可進見馬之由、後々多此例云々

天曆三年七月廿二日月次祭、延引也、馬寮所牽進馬、屢損足蹇、已不中用、右少史扶茂參藏人所令奏事由、仰以板立御馬、可令牽進者、

〔玉葉〕文治五年十二月十一日丙申、此日月次祭、并神今食也、月次祭上卿大宮大納言實宗、神今食上卿親宗、辨定經兼行云々、月次使被付別當伊勢幣是外宮御錄遣固事也、仍上卿先參陣、被奏宣命草、戌刻少内記以囊持來宣命草、聞懈怠之由、奉行職事光綱遲參之故也云々、尤不敵云々、去夜半、奉行辨定經來、申幣料一切闕如之由、此人奉行事每度如此、非其人居其職、實無術事歟、家難可貴、器無可褒、何爲哉、歲末怱忙之比、又別被立奉幣使之條、尤不便歟、仍今且余兩面綾絹等沙汰遣定經許了、事太不穩、然而爲重神事、爲成公事也、

建久二年十二月十日甲申、親雅來申條々事、資實月次祭承宣旨、召物諸國一切不濟、可付吉上之由存之如何、且經奏聞了云々、仰隨御定早可付之由了、　十一日乙酉、此日月次祭神今食等也、中刻資

實來云、月次祭承宣旨、召物諸國對捍事奏聞之處、慥任法可被譴責之由有御定、早可責之由仰了、但當日事、於今者勿論乎、

〔洞院家記〕德治三年六月三日、公賢奏吉田中納言

月次祭條々

諸國幣料散狀

仰被御覽了、兼又近年對捍國々事、有限幣料役國等、稱無濟例對捍之條太不可然、猶早可責催

諸國召物幷諸司役散狀

仰被御覽了

木工寮申功人事

仰法橋行清敬辨、早可宣下之由可仰職事、

〔康富記〕文安四年六月廿四日甲申、月次祭御訪百八十匹、自堀河判官大藏省年預許到來、百八十文爲酒直引留云々、近年如此、不得其意事也、 十二月廿七日乙酉、月次祭御訪貳百匹內、八百文到來、去廿三日百匹到來、以上百八十匹也、二百文酒直引留之云々、三箇康繼分配也、

寶德元年十二月廿六日辛丑、月次神今食也、中略上卿今出川中納言敎季卿、職事頭左中辨敎忠朝臣、中略敎忠朝臣下藏人方吉書、以同辨被下之、辨於床子座著床子下、史康純爲史代參進賜之、中略今日參中御門大納言亭、貢馬傳奏也、六位史以貢馬用脚內、二人貳百匹被下之、外記准傍局例、三人三百匹可有申沙汰之由申之、可申中山之由有返答、

內藏寮

請米拾斛

右臨時公用、以諸國所進年料內、依例所請如件、

寶德元年十二月廿六日　正六位上行大屬藤井宿禰久國
正六位上行少允藤井宿禰國次

此吉書職事下上卿、上卿下辨、辨下史、
二年六月十一日癸未、月次祭外記史御訪(四百匹内、三貫六百到來、四百者爲酒直引留云々)到來、康純參向也、外記分配被載之傍、局事官務被與奪之有狀、

請取月次祭御訪事
合四百匹者
右外記史兩分所請取申狀如件、
寶德二年六月十一日　權少外記康純(判)
史兼行

請奏舊草
木工寮解申請來十一日月次祭鋪前料事
合
鐵捌拾捌廷
錢肆貫文
右依例所請如件
寶德二年六月十日　正六位上行少允平朝臣康義

如此可書進歟之由追注付之
享德三年十二月十七日甲午、月次神今食御訪一貫八百文、自是弘許到來、康純分配也、

雜載

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字元年四月辛巳、勅曰、○中略在京文武官職事正六位上已上及月齋社祝等賜

物有差、

○按ズルニ、月齋社ハ、即チ月次社ノ謂ナラン、

〔續日本紀 二十九 稱德〕神護景雲三年二月乙卯、奉神服於天下大社、○中略毎社男神服一具、女神服一具、其大神宮及月次社者、加之以馬形幷鞍、

〔伊勢公卿勅使雜例〕勅使於途中鬪諍例

治暦二年十二月、祭使權少副公輔弘明、十六日朝天、勅使以檢非違使時武天神主等云、昨日自飯高驛家立御幣令持天、神部等ハ前陣立參、勅使ハ遙曳後天、參下之間ニ、前立衞士返對、與著緋牛皮兵使等主從四人打合天、專不致亂、過通候之程ニ、衞士各待之間、件騎兵等不論是非、衞士射殺天罷過也者、爰後々來郎等男共、此由令仰知程、權追捕使藤原高行被射落了、又檢非違使時武隨身男一人被刃損、合戰之間、件騎兵一人被射殺已了、又步兵二人ハ捕得之由云々、此既從來下人等所示也、仍乍驚御幣隨身シ天所立天進來也者、即神主答云、件事左右禰宜等雖沙汰申事也、執幣衞士家前射殺也、縱不中件箭シテ、於被參宮有憚、加之後々人々所爲、合戰无程射殺人セム、此尤不隱申也、被參宮ハ可仰公家裁定者、仍件參宮留了天、勅使注解狀言上了、廿六日宣旨、三年正月五日到來、神祇權大祐大中臣惟經右史生佐伯親範使部二人等也、不著離宮院シ天、小俣村小宅來著、二宮神主宮司權少副公輔共任宣旨、件合戰亂行辨定勘記了、二月十日宣旨偁、聽令奉供、去十二月月次御幣事、右權中納言藤原朝臣經輔宣、奉勅下知使等今度御幣相共合奉幣者、宮司宜承知依宣行之者、

祭主臨時勅使相並參宮例

二月十日參宮勅使王中臣神祇少副輔長、去年十二月月次使同石壺座著、先十二月詔刀了後、今度宣命、古記云、醍醐天皇御代昌泰元年十二月十三日、祭使下向之間、鈴鹿山內白川ニ強盜出來天、上道人物取、彼此合戰之程、勅使隨從一人來合、中矢死去、又盜人方二人被射殺了、仍使衞士前立過通

了、後云、來人此事有、仍官幣進納、使使參宮了、其後奏聞、同廿一日被立祈謝使、王中臣眞臣等

官幣途中逗留例

承平五年六月、月次祭使祭主神祇大副奥生也、而十五日官幣氏人訴、然而奥生辨申有咎、

治暦二年十二月、月次祭使權少副公輔也、十五日於途中源淸經等依射穢衞士等、同三年二月十日被立祈謝使、相共參宮、

同四年十二月、月次祭使祭主少副元範、十五日參著離宮院、而使幣暫不納、有穢氣之由被宣下之、

中臣故障例

應和元年六月、月次祭使散位正六位上大中臣中理有故障不參著、以他人改替、同七月廿六日、奉幣使進發、宣命、辭別天申給久、去六月乃月次乃祭仁、王從四位上神祇伯忠理中臣散位正六位上大中臣朝臣中理等乎差使天奉出賜比支、而中理途中爾依有故障天不參著奈利シカハ、以他人改替之間、頗違例乃事有ケリ、此由乎聞食天同恐ミ恐ミモ御坐□留文止無限久、此狀乎平久聞食天、無事故久護惠給ヘ止恐ミ恐ミ申給ハ久申、

御幣漏忘天不被副進例

天德四年十二月、月次例天ニシ令副進給不神止神宮祭乃御幣乎漏シ忘天不副奉、仍應保元年閏二月十三日行幸八省、被立祈謝使、

神今食加臨時幣物例

承平七年十二月十一日己丑、今日伊勢幣臨時幣、而納言以上皆有障、仰准仁和例、召觸穢大納言扶幹卿於左衞門陣外、不奏宣命、太政大臣後、大納言前、而內記手授使王、曰上官立行、吏部王記

〔園太曆〕延文二年十二月三日癸酉、今日右府被送狀、〇中略藏人右少辨信彙奉行有勅問、官幣下著離宮院事也、請文獻之、

月次祭官幣下著離宮院之間事、官狀幷祭主忠直朝臣事書如此候、何樣可有沙汰候哉、可相計申之由可申旨候、尤可參申候之處、此間相勞事候之間、且言上仕候、以參體內々可被伺申候也、恐惶謹言、

十二月三日　信象

進上　丹後守殿

此年月次祭可相行之由沙汰候也、官幣下著離宮院事、所申請之、延曆例別而不能注進候、先度進上仕候事、載事書許候也、以此旨可令披露給、恐惶謹言、

十二月四日　信象

官幣下著離宮院事官狀、（副祭主忠直朝臣狀事書等）加一見返獻之、發遣通路、就凶徒之違亂、可被用新道之由被經沙汰候歟、然者下著在所又難義候者、被移轉之條不可有相替候哉、但延曆例雖載事書、其時子細不見之間、難商量候、委被尋究、廣有沙汰、可決時議候歟、以此旨可令計披露給候狀如件、

十二月四日　判

九日、抑藏人辨信象示送、先日勅問、官幣下著離宮院間事、重傳綸言、所存載請文畢、○中略

兩人注進在左

官幣下著離宮院事、祭主忠直朝臣幷象豐宿禰注進、加一見返上之、如彼狀云、延曆沙汰之次第、今度所申強無差異候之上者、新道沙汰之、因准不可有子細候歟、然者依請被仰下候條何事候哉、但如象豐宿禰申、若神宮被官之輩參洛事候者、猶具尋聞食可有裁下候乎、得此意可令披露之狀如件、

十二月九日　判

月次祭幣使下著離宮院雖儀由事、昨日（七日）御書今日巳刻到來、謹奉候畢、如忠直朝臣事書者、因

徒競來之災難、又賊難怖畏之上者、就延曆之例、被點便宜之地可被移造云々、此條如神宮雜記者、延曆十一年七月三日、依官符從沼木郷字高川原移造離宮院於湯田宇羽西村、〇中略且常國違亂事、元來遐迩、非常例之上者、依事難爲難儀、被裁下可被遂行御祭候歟、次此事日數已相迫、令言上候之條不審候、令移造事、若可被仰祭主候歟、又此間願宜所望之輩上洛事候者、本之離宮院可爲違亂哉否事、廣使々可被聞食候歟之由存候、兼豐所勞事候間、此外之例只今不及委細之披見候、仍又以他筆言上候、兼豐恐惶謹言、

十二月八日午刻　　兼豐請文

祭主神祇權大副忠直申

月次官幣發遣下著離宮院事、自十五日大祓神事、迄至十八日豐明神事、逗留中三箇日也、而彼所在爲湯田野砌、凶徒往返之中途也、云賊難之怖畏、云凶徒之競來、旁爲難儀之間、先日委細載事書言上畢、仍可注申延曆之例旨被仰下之間、案文借于右公卿、被下綸旨、在所事相談神宮可注進而已、

廿六日丙申、傳聞今日被發遣月次祭幣、使到著離宮院事、先日有勅問、而武家警固無相違、不及改定沙汰、如例發遣了、如去年沙汰、經新道參宮歟、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月卅日乙丑、未刻許左頭中將隆夏朝臣來示云、月次祭奉行藏人左中辨房長、依勅勘被止職事、仍假可奉行由被仰下、可賜符案者、〇中略

月次祭樞板事、任例可令下知春日社給之由被仰下候也、仍執達如件、

十一月卅日　　左中將

謹上　左少辨殿〇中略

神今食參向內侍出車可令獻給者、依天氣執達如件、

十一月卅日　左中將

謹上　三條中將殿

〔康富記〕文安四年十二月廿八日丙戌、今夜月次祭神今食也、○中略傳說分、今夜月次祭參向內侍之車、於中御門西洞院邊、盜賊廿人許寄合、取籠內侍車、可給御小袖之由申之扣御車云々、爲珍事之處、出車山科之中將言○闕也、小者走歸告示之間、山科青侍中間等走向追散云々、希代之勝事也、雖然無爲無事云々、

〔樵談治要〕一神をうやまふべき事

六月十二月の月次の祭、九月十一日の例幣、十一月の新嘗會は、四度の幣といひて、伊勢大神宮へ王氏卜部中臣忌部の四姓のつかひをたてられて、とりわき兼日の御神事など有て、嚴重の祭也、

附神今食祭

神今食ハ、カムイマケト云ヒ、又ジンゴンジキト云フ、六月十二月月次祭ノ夜、天祖天照大神ヲ神嘉殿ニ請ジ奉リテ、天皇親ラ火ヲ改メ、新ニ炊ギタル飯ヲ供ジ給ヒ、又親ラモ喫シ給フ祭ニシテ、大略新嘗祭ニ同ジ、其異ナル所ハ、彼ハ新穀ヲ以テシ、此ハ舊穀ヲ以テスルニ在リ、而シテ此儀ノ史ニ見エタルハ、桓武天皇ノ延曆九年ヲ以テ始トスレドモ、二十二社註式及ビ公事根源等ニハ、靈龜二年六月ニ始マルトシ、本朝月令ニ引ケル高橋氏文ニモ、亦同年十二月ニ神今食ヲ行ヒシコト見エタレバ、元正天皇ノ頃ヨリ、既ニ一年兩度ノ神今食アリシコト知ルベシ、凡ソ祭祀ニ前後ノ齋戒アルハ常例ナレドモ、神今食ノ時ハ、特ニ其月ノ一日ヨリ神事アリテ、忌火御飯、御贖物等ヲ供ジ、僧尼重輕服ノ人ノ參入ヲ許サズ、又祭ノ翌日ニハ忌火庭火祭ヲ行ヘリ、

當日ハ神座及ビ御座ヲ敷設シ、打拂筥ヲ執ルモノアリ、坂枕ヲ舁クモノアリ、寢具ヲ奉ズル

モノアリ、夕御膳アリ、曉御膳アリ、其明日ニハ大殿祭アリ、解齋儀アリ、是等ノ事ハ、大略新嘗祭ニ同ジケレバ、互ニ參看スベシ、

神今食ハ六月十二月ノ十一日、月次祭畢リテ後ニ行ハル、但シ月次祭ハ神祇官ニ於テシ、神今食ハ中和院ノ神嘉殿ニ於テスルヲ以テ例トス、故ニ中和院ヲ、一ニ神今食院トモ稱ス、然レドモ時ニ或ハ神祇官、若クハ中和院ニ於テ共ニ之ヲ行ハルヽコトモアリ、後世ハ觸穢其他ノ事故ニ由リテ、中和院ニ行幸シ給フコト稀ナリシカバ、神今食ヲモ多クハ神祇官ニテ行ヘリ、又宮内省ニテ行ハレシコトモアリ、淸和天皇ノ貞觀十四年六月、及ビ宇多天皇ノ寬平元年六月ノ如キ是ナリ、若シ月次祭ノ延引、或ハ停止セラルヽコトアル時ハ、神今食モ亦共ニ延引停止セラル、其祭儀ニ從フ職員ノ如キモ、月次祭ニ供奉スル官人ノ神今食ヲ兼ヌル事モ多クシテ、此兩祭ハ互ニ相關係セルモノナレバ、事ノ月次祭ト相聯レルハ彼篇ニ出シテ、此篇ニハ多ク省略ニ從ヘリ、

抑神今食ハ、前ニモ陳ベシ如ク天皇ノ御親祭ナレドモ、觸穢方忌、及ビ職員ノ不參、若クハ諒闇等ノ時ハ、天皇出御シ給ハズシテ、多クハ所司ニ付シテ事ヲ行ハシメラルヽコトアリ、鳥羽天皇ノ天仁元年以降二十餘年間ハ親祭ノ禮中絕シ、崇德天皇ノ長承元年ニ至リ、再興ノ議アリシカドモ、偶物忌ニ由リテ果サズ、纔デ保延元年ニハ藤原宗忠同敦光等祭祀ノ漸衰フルヲ慨キテ、親祭ヲ奏請セシコトアリ、其後朝綱ノ弛廢ト共ニ益衰微ニ趨キ、應仁ノ大亂以後ハ、月次祭ト共ニ終ニ全ク擧行セザルニ至レリ、

名稱

〔釋日本紀六述義〕私記曰、○中略古者謂木爲介、故今云神今食者、古謂之神今木矣、

〔伊呂波字類抄志諸社〕神今食

〔年中行事大概〕六月神今食

十一日月次祭とて、まづ諸神をまつらる、その夜中和院に行幸なりて、天照大神をまつらせ給ふを神今食といふ、

〔公事根源六月〕神今食 十一日

神今食の儀は年に二度也、伊勢天照大神を勸請申されて、天子御みづから神饌を供せさせ給ふにや、

〔祝詞考中〕新嘗と云は、十一月卯辰巳三日の間、その年の新稻の御食を、朝は諸神に奉、夕は天皇聞食也、神今食は新稻にはあらず、一年に二度、六月十一日、十二月同日に、夕より曉まで神嘉殿へ奉て、是も天皇御親祭ります也、是卽月次幣を諸神へ奉りて、そは其社々にて祭らしめ給ひ、公にては、その諸神を皆御親祭ましぬ、仍て相嘗といへり、神今食といふは、その新嘗に對へて付たる字なるべし、其字音にじんこじき、じんこんげなどいふは、後世此言を失ひて後のわざにて、いふにもたらず、四時祭式に相嘗祭と有、卽此祭の事なるにて、神今食の本言あひなめなるを知るべし、且この祭の事、延曆九年六月紀、又類聚國史にも同月日に出たり、然どもその文有ふりしさまなれば、いといにしへより有しを、前紀にはもれし也けり、

〔玉勝間六〕神今食

神今食は、じんごんじきと字音にのみ唱へ來りて、正しくはいかに唱ふべきにか、昔よりさたもなくじれる人なし、書紀の私記に、古は神今木と謂しよし見えたるによりて、じんごんけとも唱ふれども、上二字はなほもとこゑ也、これによりてつら〳〵此名を考ふるに、加牟伊麻氣と唱ふべき也、そは神は神嘗祭などの神に同く、今は新の意なり、すべて新に物したるを今某といふこと多し、古漢國より新に參來つる人どもを、今木の漢人と書て、書紀に新漢と見え、大かたもあらたに參れる人を今參りといふ類也、さて今食といふは、世俗言に、稻を粟にてたくはへおきたる

初見

審政

を、新に磨て米にしたるを、今ずりといふ、其意にて、新磨の御食といふことなるべし、古に今毛人といふ人名の見えたるも、今食といふことのありしによれる名なるべし、かくて此神今食は、年毎の六月と十二月との十一日にて、月次祭の同日の夜に行はるゝこと也、〇中略かくて其同夜に行はるゝ神今食も、その同じ趣にて、天皇の月毎に新磨の御食を聞食すよしにて、其度ごとに行ひ給ふべきを、合せて二度に行ひ給ふよしにて、そは新穀にはあらざれども、新磨を聞食始むるをさへに重く最に齋給ふにて、先神に奉り給ひて、さて天皇のきこしめすこと、もはら新嘗大嘗のこゝろばへに同じ、さる故に此祭の儀式は、何事も大かた新嘗大嘗の儀の如くなる也、そもそもこの神今食の事、いかなるよしをもて行はるゝ御わざとも、むかしより其よしをえるせることもなく、考へたる人もなきを、おのれもいといぶかしく思ひわたりて、年月かにかくに思ひめぐらして、近きはどかく思ひえたるまゝにえるせるを、猶いかならむ、かしこき物しり人さだめてよ、

〔二十二社註式〕神今食

人皇四十四代元正天皇靈龜二年六月、始被行之、

〔公事根源六月〕神今食

靈龜二年六月よりはじまる

〔本朝月令六月〕十一日神今食事見儀式

高橋氏文云、太政官符、神祇官、定高橋安曇二氏供奉神事御膳行立先後事、〇中略至于飯高天皇〇元正御世靈龜二年十二月神今食之日、奉膳從五位下安曇宿禰刀、語與膳從七位上高橋朝臣乎具須比曰、〇下略

〔師遠年中行事六月〕十一日神今食事

供忌火御飯及御贈物

十二日有後齋云々、近代事云々、左大臣令預給也、

同日供解齋粥、何有後齋乎、

〔公事根源六月〕神今食　十一日

御神事は一日よりはじまる、○中略供解齋御粥、十二日、○中略神今食はて丶の十二日に後齋あるは、中比よりの事にや、解齋の御かゆなどを供しては、神齋は有べからざるが本式にて侍べし、

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、今夜神今食也、依合卜、當日致神事、佛經遂別屋、月障輩令出之、沐浴解除、

〔玉海〕文治五年六月一日己丑、自今日神今食齋如例、但散齋也、子良死去事進次第解、申穢之由、不載子細、依不審、重遣尋了、待使歸來之間、猶可爲神事也、

建久二年十二月一日乙亥、自今日神今食散齋之例、宮御方又月次、但依例不憚御堂參也、　四年十二月十一日甲辰、此日月次神今食也、余去一日旬有所思、不遂拜、仍今日重修祓、遙拜大神宮春日兩社、○中略今日月次祭事、資實奉行、神今食宗隆奉行也、來十八日千僧事經申沙汰、今日開佛事可行神今食之由仰之、

〔薩戒記〕薩戒御記中抄出、○中略神事立札事、應永廿九、六、九、

明後日神今食可參向、仍自今夕始神事、沐浴立神事札於門口、自今日不念誦、伊勢神事皆如此、札云、

大神事也、僧尼幷重輕服輩不可入來、

〔西宮記六月〕一日内膳司供忌火御飯、御粥前付采女、女房若侍供之、著服月事人不候、立御臺盤一基於大床子御座供之、稱警蹕、不奏御飯、付女房、不仰由、陪膳或布衣、六位束帶、有穢氣時自供之、遺物所例云、六月一日早旦、供奉忌火御膳、御膳四種、例銀器、御菜用土器、御盤四枚、二干物、御飯片梡、

九記云、承平元年五月廿九日、御讀經結願、先例第四日朝座御結願、而明日依可供忌火御膳、今日畢云云、

延喜十一年十一月一日、同十五年六月一日、共有觸穢、然而供忌火御膳如常云云、御記文云云、

延喜二年十一月一日、供忌火御膳、依無四位、殊令菅根陪膳、子時藏人頭

〔北山抄 二六月〕朔日供忌火御飯事

内膳司、早旦御朝以前付采女、於大床子御座供之、用御大盤一脚、不稱警蹕、或又稱警蹕、未知得失、但不奏供事由、只稱女房、又不仰退由、是爲儀也、仍以不稱可爲善歟、陪膳或著布袴、若四位不候者五位供之、延喜之間菅根希有之例也、今案正下五位、若大臣子可供然、或又女房供之、著服及有月事之者不候、但禁中有穢時猶供之、

〔北山抄 十二二月〕朔日供忌火御飯事

〔江家次第 七六月〕忌火御飯六月十一月十二月一日早旦供之、内膳司、

上大床子間御格子一間、以昨日番人爲陪膳、采女又同往年布袴、近代束帶、以御臺盤一脚供之、加臺、以土器爲馬頭盤、置木箸二雙、御箸等盛土器、先四種醋鹽酒醬、次供御飯、有居土器不置匙、御菜四種、鯛、藻、干鯛、鰯、和布御汁一坏、不奏御飯參之由、只付女房申之、主上出御、御冠直衣、食給之三箸、畢入兩手於袖令念給、是經信說、後冷泉院御時儀云云、不知何事、予以此說申後三條院、被仰云、後朱雀院御記無所見、自其以來此事已絶、主上入御、陪膳折御箸如常、不仰撤之由、仍藏人於鬼間障子外窺見、取罷盤參入、御臺盤如常舁入御飯宿、件御臺盤、陪膳與藏人相共舁之、他人不相交之、

西宮記云、進物所例云、六月一日早旦供忌火御膳四種、例銀器、御菜用土器、御盤四種二千物御飯片垸、

今案不同、齊光卿口傳、近代猶依彼口傳、

禁中有穢時猶供之

承平元年五月廿七日、被始臨時御讀經、廿九日結願、先例第四日朝座御結願、而明日依不可供忌火御飯、今日畢云々、西宮記云、警蹕云云、是彼書失歟、後賢被稱不字落之由云云、是後三條院所被仰也、

或記云、無男陪膳之時、女陪膳供之、以三尺御几帳立大床子坤、女房候其中云云、今按、忌火毎至神態、鑽火製之忌

大也、

〔建武年中行事〕六月一日、忌火の御膳まゐる、昨日のはいせんつとむ、上格子よりさきに、あたりの間ばかりあげてまゐらす、四種かはらけに入て供す、つぎに御はん、次にをしきにすゑながら餚以下四供す、一の御だい許たつるなり、みなまゐりぬれば、そのよしを申奏なし、まかり仰せず、御さばとりて、三口めしていらせ給、そのゝち上かうし、○中略十二月ついたちい。ん。び。の。御。せ。ん。御。あ。が。物、さきの月一○十月におなじ、

〔公事根源六月〕供忌火御飯

内膳司より奉れるを、大床子の御座にて供する也、景行天皇の御時よりはじまる、忌火とは火をいむ心なり、神事などの時は、不浄の火をうちかふる事にや、是は月次神今食の御神事を、今日一○日よりはじめらるゝ成べし、

〔年中行事秘抄六月〕一日内膳司供忌火御飯事未明供之

舊紀云、垂仁天皇之代、倭姫皇女爲伊勢大神御杖代、于時依隨大神託宣、從大和國向伊勢國、到壹志郡斎片樋宮、發從彼宮、乘三隻船、向佐志津御暫留、爰夜鳴鳥聞於葦原、倭姫皇女遣人令見、有一隻鶴、守八根稻穂長八握、可謂瑞穂、倭姫皇女使人苅採、欲供大神之御食、卽折木枝刺合、出火炊彼稻米、奉供大神給、從此時神嘗祭發、故毎至神態、鑽火炊爨、謂之忌火、良有以也者、

高橋氏文云、天皇行○景五十三年八月、行幸伊世、轉入東國、冬十月到上總國安房浮嶋宮、爾時磐鹿六雁命從駕仕奉矣、天皇葛餝野令御獦、六雁留守、大后詔、此浦聞異鳥音、其鳴賀我久々、欲見其形、卽磐鹿六雁命乘船到于鳥許、鳥驚飛於他浦、猶雖追行遂不得捕、於是磐鹿六雁命詛曰、汝鳥戀其音欲見貌、飛遷他浦、不見其形、自今以後不得登陸、還時顧舳魚多追來、六雁以角弭弓當遊魚之中、卽著弭而出、忽獲數隻、仍號曰頑魚、此今諺曰堅魚、以角爲鉤捕此由也船遇潮涸渚上、居、掘出、爲得、

八尺給一具、六雁捧件二種之物獻大后、大后譽給氏欲供御食、爾時六雁命命申久、令料理氏將供奉止白云々、見河西山梠葉氏高次八枚刺作爪、見眞木葉枚次八枚刺作氏、取日影氏爲蘰以蒲葉氐美頭良乎卷、採麻作氣萬天多須岐爾加氣云々、時爲供奉、太后詔之、是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉、爲湯坐連等始祖意富賣布連之子豐日連乎令火鑽氐此乎忌火止爲天、伊波比由麻閉天供御食、并大八洲爾像天八乎止古八乎止咩定天、神嘗大嘗等供奉始支、但云、安房大神爲御食神者、今大膳職祭神也、今爲忌火大伴造者、物部豐日連之後也、○中略

御食了入、兩手於袖令念給、是經信卿說、後冷泉御時儀云々、不知何事、予以此事申後三條院、仰云、後朱雀院無所見、仍此儀已絕、又不審譯云云、又穢中有例云々、

〔延喜式十五内藏〕凡每年六、十一、十二三箇月、起自一日迄于八日并八箇日、御贖御輿形覆料、紫弃汁染絹四尺、每度行神祇官、中宮同此

〔西宮記六月〕一日神祇官奉御贖物、自一日至八日、十二月同之、

〔北山抄二六月〕一日神祇官奉御贖事起自一日迄八日奉之

〔北山抄二十十二月〕一日始奉御贖事

〔年中行事秘抄六月〕一日神祇官始奉御贖物事迄八日御巫者持參

舊記云、弘仁五年六月、依聖體不豫、同月七日己丑、行御贖祭、其後每年六月十二月、從一日至八个日御巫行事每日供奉、仍謂御贖者、弘仁神祇式云云、

〔神祇官年中行事六月〕一日自今夕至八日、獻御贖物、內、諸宮、御巫史生調進之、○中略

御贖物御巫子持參之例事、近代官人巡役、

〔建武年中行事〕六月一日、○中略けふより八日御あが物まゐる、あがちごまゐりてけいひちす、藏人みちびく、內侍とりてまゐる、典侍あさがれひにてまゐらす、四のかはらけを御ゆびして、うへに

はりたる紙にあなをあけて、御いきをいるゝ也、御たのごひ、ちひさき四足にすゑてまゐらす、御手水はうち〳〵まゐる、あかなへ小つぼなど、だいばん所にとゞむ、

〔公事根源六月〕御贖物

是は一日より八日までおり、おがちごもちてまゐる、朝餉にて主上にまゐらす、四のかはらけを御指して、上にはりたる紙にあなをあけて、御いきを入る也、弘仁五年六月より、御薬の事によてはじめて御贖を奉る、大がたは素戔烏尊の千座置戸の祓などいふより起ぬる事なり、

〔左経記〕寛仁元年十二月一日乙丑、内膳供忌火膳、御精進、

長元元年六月一日甲子、参内、宮内膳供忌火御膳如例、中宮御方同供忌火膳、以黒漆御臺本供之、及晩景召宮主則政、令申云、去年十二月晦日、仍御服不供、節折并御贖物、准彼例可停歟如何者、余彼間御坐法成寺之中、已故殿御忌中也、仍被停也、於先例有穢之時供奉大殿祭、准思件例、何不供御贖物、就中天暦八年六月晦日、神祇官供奉節折、是又可准之例也、仍可奉供之由令仰了、　十一日甲戌中〇略傳聞、月次祭上卿春宮権大夫及秉燭被参内、被行神今食事云云、

〔中右記〕寛治六年六月一日癸丑、及来十九日、雖有内穢、供忌火御膳陪膳予蔵人右兵衛尉高階為行等也、神祇官供御贖物、官人等依穢参右衛門陣外、付闈司供之、依返給、神祇官卜部一人觸穢、仍此間不向本官也、是先規云々、往年如此時付闈司供云々、而近代有穢時、只付女官等歟、但今度付闈司所供也、　十九日辛未、有大祓、是月次神今食延引之由也、　廿五日丁丑、月次神今食被行、

嘉保二年六月一日乙丑、朝大盤以後、従内退出、卯刻供忌火御飯、陪膳前兵衛佐長忠朝臣、　十一日、入夜参神祇官、依卜合為勤神今食也、

〔吉記〕治承五年六月一日丙午、忌火御飯如例、左少将有房朝臣、勤仕陪膳云々、　十一日丙辰、今夕神今食、

〔玉海〕建久二年六月一日戊寅、自今日内并中宮供御贖物如例、　十一日戊子、此日月次祭神今食等也、

〔伏見院御記〕弘安十年十二月一日丁巳、自今日至于月次祭神事如例、早旦供忌火御膳、隆良朝臣候配膳、

〔園太暦〕貞和四年十二月一日、藏人辨俊多爲勅使入來、今日御贖物忌火御飯、穢中可爲何樣哉云々、此事不打任事歟、但先年神宮路次閉塞之時、同忌神今食□□雖被止月次神今食、忌火御飯御贖物不略之由有沙汰、其事共引勘之處有所見、仍其趣申入了、其外猶不審之間、相尋業豐宿禰之處、請文到來續之、

此事或抄引穢中有例云々者、建武四、六、業□請文御贖物之案式條、神今食料足、先例依穢雖延引、不憚穢中供進、所謂承暦四年六月月次祭雖延引、猶式日供之云々者、

被仰下之旨、謹奉候畢、自今日忌火庭火御飯并御贖物等間事、左大辨經顯記云、長和六年五月三十日有定、仰内侍并殿者等可令退出、是雖被止神今食、可供忌火御膳之故也、同六月一日、今朝御物忌也、早旦源中將著布袴、供忌火御膳、或人云、四條宮后○圓融遵子令崩給、入夜御座供御贖物如例、申事由於攝政殿、有定令供、村上御時雖相當御物忌、大殿祭并節折等早々、仍相准行之云云、唯今卒爾之案得如此候、去建武暦應之比者、依神宮路次不通、達數年被止月次神今食候之處、不可依被停止、至于御飯御贖物者則被供之旨、一條前殿内々有申沙汰、暦應四年六月一日已後被具供候訖、今度者天下之穢候、以長和之所見可被左右候歟、○中略業豐禁忌中候之間、以他筆令言上候、以此旨可令被露給候、恐惶謹言、

十二月一日亥刻　　業豐請文

祭場裝飾

〔延喜式三十大藏〕六月十二月神今食、中院東西廂殿懸幔、中門及掖門懸屏幔、又立幄三字、五丈幄一字在中門外、七丈幄

二字在中和門外、

〔延喜式三十八掃部〕六月神今食、前一日設小齋五位已上座於神祇官、當日平旦設小齋人座於宮內省、神祇官卜部已上座於廳內、內侍座於東廂舍、中務宮內二省官人座於西廂舍、酉剋折薦帖狹帖短帖折薦葉薦貲山城食薦寮造食薦各八枚、〈是日用八物〉置於中院、付神祇官、卽裝束神嘉殿、敷長席於殿中央三間、〈神座下敷〉西隔二間敷長席、立床一脚、供御座、西廂立床一脚、〈御湯殿料〉東方敷隔間設供奉神事女官座、北廂設內侍已下女官座、東廊設殿上侍臣座、北殿設御厨子所并藥殿、主水等座、東廂殿辨備神供、神祇官宮內省內膳司采女司座、西廂殿設小齋親王以下座、近衞兵衞等各用薦圓座、中和門外幄設大齋親王以下座、戌剋小齋親王已下出中門外、寮官人授打掃筥坂枕御帖等、傳執參入、昇殿於南戶下、授寮官人退還、官人便留、率掃部等鋪御帖於殿中央、〈神座西面、御座東面、〉訖退出、寅剋官人更昇殿撤御帖、親王已下傳執退出如初儀、〈御帖卽給神祇官〉解齋之日、設小齋人等座於宮內省廳并東西廂舍、十二月及新嘗祭設座亦同、

〔江家次第七六月〕中和院神今食御裝束〈新嘗祭并十二月神今食同〉

前二日、令左右衞門府掃除神嘉殿前後庭并南門前東西、又令右近衞府掃除中和門以南修明門以北、

當日、神嘉殿七間內中央母屋三間塗籠內、上張信濃布承塵、白木骨、其內敷滿廣筵、南北東西戶懸絹幌、

如小一條大將圖者、東西一丈二尺五寸、南北一丈七尺可爲神座程、仍左右一間餘也、

其中央東西行立御床一、〈白木〉其上敷白端御疊、北戶外庇內敷小筵二枚、爲御裝物所、南北東西戶懸絹幌、西塗籠二間內、上張同布承塵、其北南戶懸同幌、西廂東隔小戶懸同幌、其內敷滿弘筵、〈御裝物所、在庇西第二間敷、近代在第一間、〉西庇戶內供御湯船御床子等、御床子敷小疊、御湯船、〈東西妻〉床子二脚並立其北、〈東西妻〉件御湯

祭式

燈無灯御湯殿西壁設樋、傳御槽、樋口壁外居斗、御槽舊藁生絹、近代布、執柄被候南庇西第一間、同庇敷不可尋之

其座可敷白端疊、而近代用兩面端可尋、

東塗籠二間內、敷美濃長筵三枚、

南戶懸幌、爲供奉神事內侍以下候所、東塗籠二間、檢西宮抄、供奉釆女座有其謂、內侍可候北廂歟、中央塗籠北戶東西外掖對座、敷葉薦爲女官候所、中央塗籠北廂、可爲內侍以下座、殿西廊南面中戶東掖引廻斑幔、爲供奉御湯、主殿寮官人候所、灯樓八本預儲、供奉御在所幷神殿內、主殿寮供奉、作白木燈爐在神殿幷御所四角、立白木床子、其上居之、殿後屋南庇東西行結管貫引幔、其內傍幔敷座、殿上侍臣著之、座東御藥陪膳座、西御厨子所、自殿東西廂南頭柱引幔、各南行與東西舍南頭柱平頭、各東西折、西幔東折、東幔西折、當殿中央、曳竟斑幔、內東西相對、皆短苫、立骨木工寮、苫葺掃部寮、並炬火處、西舍身屋內、設小忌親王以下辨以上座、親王南面、納言西面、參議東面、以上以机居饌、但參議差南退著、以北爲上、辨少納言公卿座末絕席對座、以大盤居饌、同屋東廂敷外記史座、西面北上、以大盤居饌、南妻張苫、木工掃部等供之、其內爲侍從厨家候所、東舍內設供奉祭大膳大炊等官人幷釆女座、南門外西掖東西行、立五丈幄一宇、其內敷座爲小忌少納言辨外記史內記等、候天皇之間候所、當同門南方東第一柱、南去三許丈、東折至于中和門南掖、結管貫懸幔、中和門外南北行立五丈幄二宇、其內北四間、設大忌親王公卿座、南北行對座、親王西、公卿東、其末設辨少納言座、西上北面、其南方東西行懸幔、其南設辨少納言座、爲候上卿之間候所、次南設外記史座、次南敷外記官史生座、東西對座、其南敷官掌召使座、北面東上、並官厨家備饗饌、左右近小忌幄在神嘉殿前東西、左西、右東、殿東立內藏幄、中門南左右相對立左右兵衞幄、左西、右東、左近幄在中和門北掖、右近衞在東、夾道相對、其北左兵衞幄、右兵衞陣用本陣、御槽南又置打板一枚、有儀小結、　白木灯臺、御殿內侍女官候所、

〔儀式〕六月十一日神今食儀、十二月准此、○中略

當日平旦、主殿寮供浴湯、辰刻輔若丞○中務一人、執小齋次侍從以上名簿、付內侍奏之、月次祭畢、○中略

神祇官參神今食院、院中内膳造酒主水等司受備供御物參祭所供奉、神祇官受取大膳木工大炊等職寮所進供神物、擇神部卜部等堪事者二人令辨供、戌一刻、十二月用亥一刻、乘輿御神今食院、駕輿丁八人用卜食者也、○中略近衛開門、大舍人叫門、闈司問阿誰、大舍人答云、御畳參入止官姓名、親王已下參議已上、御門候、闈司進就版奏云、御畳參入止官姓名叫門故止申、勅曰、參入、闈司稱唯、傳宣云、姓名等參入、中務率内舍人及大舍人、供奉御畳事、親王以下次侍從以上相扶供奉、左右近衛少將已上各一人相副、掃部寮允以上女孺等神殿鋪設御畳、訖退出閉門、主殿寮供御寢具、掃部寮賜女官畳於寢内、十二月縫殿寮賜衾男女卅人、膳伴造鑽燧、即炊御飯、安曇宿禰吹火、内膳司率諸氏伴部及采女等各供其職、料理御膳雜物、亥一刻薦御膳、其行立次第、最前膳伴造一人、執炬火、以蒸懸、持承其灰燼、次采女朝臣二人、左右前行、次宮主一人、著木綿鬘及執竹杖、次水取連一人、執海老鰭槽、次水部一人、執多志良加、次典水二人、一人執巾筥、一人執刀子筥、次采女八人、並執供神御雜物等、次内膳司高橋朝臣一人、執鰒汁漬、次安曇宿禰一人、執海藻汁漬、次膳部六人、並執供神御雜物等、次酒部四人、執酒案、神祇祐以上一人史一人、與宮内丞錄相雙立於屏内、檢察御膳次第、四刻撤御膳、内膳主水官人各一人、進申云、夕御物平供、宮内丞命云、縱、寅一刻供曉膳、其次第如初、四刻撤御膳、近衛開門、大舍人叫門、闈司奏云、御畳撤止官姓名叫門故止申、勅曰、奉入、闈司稱唯、傳宣、即隨參入撤御畳、卯一刻、換御服、還御本宮、訖祭大殿、

〔延喜式十三中宮〕凡六月神今食、小齋亮若大夫一人、進屬各一人、史生二人、舍人十人、向宮内省卜食、事見神祇式、昏時入候内裏、戌刻主殿引御輿入、從右腋庭門候常事殿西、左右兵衛尉各一人、率志府生各一人兵衛廿人陣列陰明門、左右近衛次將各一人、率將監將曹各一人近衛廿人、左右分陪、御輿出自陰明門、女孺已上陪從陣中、召繼舍人二人、在小齋中、擎几帳在女孺後、亮已下行立近衛兵衛陣間、御輿御神嘉殿、職司率小齋舍人等候幕下、預備設、召繼舍人二人候左近衛陣側、神事畢御輿廻宮、明日辰時、小齋官人、向宮内省解齋、訖歸本司、十二月准此、

〔延喜式十三大舍人〕凡六月十一日、○中略戌時幸於齋院、御輿長井副鈴用小忌人、亥時進御畳、舍人叫門、其詞曰、御畳進

止某親王門候止申、寅時退御坐、（叫門、同亥時、）畢卽車駕還宮、明旦依神祇官（叫門、）其詞曰、鎭御殿事申給止宮内省輔姓名門候止申、鎭御殿畢、小忌人向宮内省解祭、畢退寮、

〔延喜式（宮内三十一）〕凡神今食新嘗祭夜、丞錄各一人與神祇官共侍内裏、檢按御膳進退、

〔延喜式（左右近衞四十五）〕凡神今食及新嘗會陣、小齋近衞已上隊齋院内、大齋隊院外、

〔西宮記（六月）〕神今食

上卿著南舍、（親王入自北西面、上卿入自南北面、參議入自北南面、辨少納言對座、辨北面、侍從在東座、外記史中務丞錄内舍人在南庇、召使候東西座、西方爲侍從廚候所、親王前机、餘臺盤、）外記進式筥、（或中務代官、）使部申時、神祇官人申供神物辨備、王卿已下向北舍、（采女人解之、水司供手水、）主親王執打拂筥、（无親王者次人又執之、）次納言參議昇坂杌、（納言束、參議爲執、）辨少納言已下供御坐、（掃部官人傳取供、宮主陪膳、采女供之、）畢各還南舍、（亥供御膳、）（丑又供曉膳、舊例待曉膳之間、或有圍碁、冬以炭火暖）之、丑時供曉膳、王卿撤御座等如初儀、采女參内、奏夕曉御膳供了狀、

中院儀

當日、（晴）○中入夜殿司供替忌火、（不合御卜人々、及觸忌火退出、）未戌時天皇（帛御服御輿、供奉御物、男女如尋常時、大刀不候、小忌王卿諸衞扈從、衞門府帶弓箭、）幸神嘉殿、（入中和門之間、大忌王卿出立幔前北、西上北面、衞府帶弓箭、大忌人自中隔著座、或自内著、）御輿寄殿中間、（小忌公卿列西庭、所司敷筵道、）主上入御自西戶、御西隔殿内、（坐承塵立床也、）女官入自北戶、候西隔北戶前、殿上人候殿西北砌上、御厨子所候北舍、小忌人著西舍、（親王南面、納言西面、參議東面、辨少納言西面北上、敷外記史内記中務内舍人等座、南横切敷召使等座、中間侍從座、別當陪、東端造酒陪、侍從廚設東舍、神祇官内膳宮内采女氏氏、）供奉人候西廊、（南面、置御輿、左近候東廊北面、右近候西廊北面、神嘉殿西方立小忌幄也、）主殿供御湯殿、（御槽在西庇、主殿寮候壁外、自簀入御湯、楾口居斗、侍臣中傳故實者、供奉入御湯、）（服、以置御槽、七度獻御湯、先縫司獻天羽衣、候御浴人傳獻、主上御浴後、供奉人脫衣著當色、懸襁不殿、殿、主上登自御浴之後、供奉人作著當色、奉仕供神御饌、内藏寮奉御饌、主上著祭服、了入御神殿、）亥刻開門、（闈司著座、大舍人叫門、闈司奉勅參入□□、闈司傳、近代無勅答云云、）小忌供神座、（采女申時、王卿出自西掖門、掃部寮積神座具、親王執筥、納言參議昇坂、）（被、已下供疊、近衞將監調度、裝束殿供、掃部官人傳取供之、外記局式云、近衞將入錦疊云云、中縫司奉神御衣、内侍供之、采女申時、縫司供御服、内藏人供饌、主水司令供御手水、主上自中戶入御中隔殿、）采女供神膳、（宮主立前、氏氏列立、如式、）小忌王卿歸本座、（近衞閉門、天皇洗手、還御殿所、内侍奉縫司等、撤筵、又供、采女奏時、同夕儀、了還御寢内、）曉膳畢、（采女參殿南西戶下、）（申云、阿佐米主水夕曉御膳平久供奉止申、勅云好矣、改御衣、）開門（叫門闈司奏、如前、）王卿已下撤神座、（大忌王卿著在中和門南掖、北隔爲王、歸座、王東面、歸西面、南隔爲辨少納言、）

康、其南爲厨家所、門內北掖爲近衛府幕、左西右東夾路、右兵衛在本陣、左兵衛在官、大忌東廊近衛退神樂、神祇官候大殿、還御御輿出中和門、左次將問謁、大忌王卿立幕前、名謁、御南殿天皇下輿之後南面立、次將問謁、加侍、小忌王卿名謁、今夜諸司大宿、

〔北山抄〕六二月十一日神今食事略○中

當日略○中入夜、殿司供替忌火、不合御卜之人、未供此火之前退出、大忌王卿度階下、內大忌幕、底直參上、其事、纔合小忌、在敷外者又同其之、中和門外立幄爲座、東西面對座、上卿西面、丑刻左近將曹以下、來申宿侍於大將、戌刻御腰輿幸中和院、內侍司印櫃以此稱契櫃之由、見天曆四年御記、幷鈴韓櫃不具持候如常、但大刀不候小忌王卿供奉、諸衛不稱警蹕、乘輿出陰明門之間、候大忌幕王卿北面西上及諸司諸衛、皆立各幕前、比入中和門、左右近衛各一人、趁入自脇門、開中門、御輿輟於神嘉殿南階上、王卿立西炬屋南方、西宮記云、列立炬屋北邊云々、可尋、天皇下御輿入南廂西戶、親王以下著小忌座、西屋北壁前、設親王座南面、其南相對設納言參議座、納言西面、其南施席、設辨少納言中務輔宮內輔座、西面、若有五位內記者著此列、侍從東面、東庇設外記史中務丞錄內記內舍人等座、造酒司候巽角、南廂二張幕爲侍從厨家候所、近衛閉門、近仗候南階東西、左西、右東、主殿寮儲御浴於寢側、縫司獻天羽衣、供神物辨備畢、近衛開門、大舍人叩門、闈司奏、內裏式有勅答、今无之、中務丞可置版、而近代不必置之、近仗陣階下、小忌親王以下五位以上、出自右脇門、立南中門西脇御棚東邊、帶劍者解之、只把笏、還著時又帶之、衛府人不脫劍、大舍人叩門、闈司奏、今无勅答、即傳宣後、親王取打掃筥、納言參議舁坂枕、納言東、參議西、辨少納言以下、侍從內舍人內豎大舍人等、舁御疊參入、掃部官人四人相副參入、左右近衛次將脫兵具、舁神殿戶、親王以下舁自南階、跪於戶外、掃部官人候戶內、傳取供之、此間王卿以下蹔立階東西、王卿西脇、立供畢引還、各復本座、次將退下、近衛閉門、縫司供御寢具、亥一刻釆女申時至、供御膳儀、見內裏儀式幷清涼抄、待曉膳之間、於小忌座或有圍碁之興、供御疊後、置碁局於親王座東、設短燈臺云々、又有時議閑領、冬祭、縫殿寮以白衾獻王卿以下厭、謂之厭衾、丑刻釆女奏時供曉膳、訖釆女申御膳平供奉之由、勅答云云、近衛開門、闈司奏之、撤御疊等如初、王卿入自西脇門、經屏幔南、列立炬屋南、天皇易御服、還御本宮、乘輿出中和門之間、左次將問之、大忌王卿侍從稱名、御南殿之後、小忌王卿名對面如常、

雨儀御膳、自東細殿供之、神座從西軒廊進之云々、此例不倚、延喜二年、新嘗祭例、殿前積立御疊案於砌上、小忌自廊進、而從南砌登階上、

(御膳自東廊進之、見吏部王記、)若依禁中穢及御物忌等付所司者、上卿就神祇官行之、其儀齋院北屋爲神殿、南屋東壁下敷親王座、(西面)其西敷大臣座、(南面、延喜十五年十二月、同十九年六月例也、而无此座之由、見九條承平五年六月記、又或記云、大臣座北面東上云々、非也、)西者納言參議座、(納言北面、參議南面、)自餘准中和院例設之、(上卿未參之間、辨少納言以下就南門外西屋座行事)上卿入自南面東第二間著座、參議入自北面東第二間、上卿不參者、參議著北面座行事、神祇官申供神物辨備畢由、供御臺如常、

〔江家次第七六月〕神祇官神今食

戌一剋、上卿以下著神祇官南屋、(入自北門、)

上卿(入自南面東第三間、北面、)參議(入自北面東第二間、南面、)辨少納言(辨北面、入自南方、少納言南面、入自北方、)中務輔宮内輔等著、(東上對座、)以上辨以下用一臺盤、外記史中務丞内舍人等著、

西第二間爲造酒司、侍從厨家、大舍人、官掌、召使座、同第一間爲厨家行事所、

辨少納言、先在南門外西披屋、(近例不必然、)

外記申代官、(先置式部、)又令尋内侍參不、

使部申時、神祇官人申供神物辨備畢由、(寅一剋、)王卿以下各起座向神殿、(或一獻後)洗手、(常例人解之、但撰寄役之、先是著小忌衣、)(辨料辨侍奉之、)列立御棚東邊、上卿執打拂筥、參議與辨昇坂枕、(辨在西)少納言侍從等供奉御帖、上卿以下次第進之、(陪膳於壇上、授膳部官人、)上卿參議立庭西、辨以下立東、次各退向南屋、(晝月或撤小忌、)諸司供御膳、男官人、(伴造采女朝臣)

采女人　奉膳　膳部人　酒部人

神祇祐以上一人(宮主)　史一人　宮内丞錄

供神物御衣等獻、(能可令尊儲之、)

上卿以下還南屋勸盃、(一獻少納言、二獻辨、不著座者勸之、五位取瓶杓、辨供參議目進受之返座、)

神膳供畢撤之、撤寢具、(可尋之)

丑一刻又供寢具、供曉膳、畢撤寢具、

王卿以下參上、撤打拂筥坂枕帖等、初、事訖退出、采女參內裏、於朝干飯方、申夕曉膳供畢由、○中略

神今食事(又說)

六月十二月十一日夜、有行幸時、於中和院行、無行幸時於神祇官被行、正廳之中三間爲神殿、東三間爲采女候所、北廂爲內侍候所、南六間屋東一間親王座西向、二間上卿座北向、參議座南向、三四間辨少納言中務輔座、辨北向、少納言南向、(大盤)五間南壁下上官、第六間引分幔爲外記座、著小忌著座、辨料辨侍奉之、并入自南著、亥剋上卿參議參神殿、於幔外洗手、解劍搢笏、上卿取打拂筥、進神殿戶前跪奉之、退立庭西方、北上東面、參議與辨舁坂枕奉之退、參議上卿南立、辨立東方、次少納言與侍從等舁御座進、各返著南座、有勸盃事、辨取之、二獻少納言取、不著履、從差筵上往反、箸下、使部時申、亥一剋供夕膳、丑一剋供曉膳、事畢上卿以下又參入、撤筥枕御座等、准上可知、寅剋退出、

〔小野宮年中行事六月〕十一日神今食事

大納言延光云、有行幸之時還御之間說兩端、或問誰々侍、此說普知之、或問誰、此淸愼公之御說也、故藤中納言朝忠用此說、但有疑慮、爲決兩說彼卿奏聞朱雀院、被仰此說可然之由者、又邑上先皇被仰此說可然之由、但從神嘉殿還御之間、於中和門外問時、无誰々侍之說、皆用誰之說、

〔蓬萊抄〕六月十一日神今食行幸事(御湯殿事)

戌剋行幸中院、主上著御帛裝束、御要輿、無警蹕鈴奏、公卿已下前行、前日行事藏人、註殿上人交名給神祇官、仍隨小忌卜之合否、所供奉也、供忌火御殿油之後、大忌之人不昇殿、凡今日扈從人、除執柄殿下之外、皆著小忌衣、(行事藏人以小舍人令賦之、參仕之後、於便所抱上著之、)衞府上卿宰相懸緌、用壺胡籙蒔繪劍、近衞司同之、近衞兵衞之外、雖不供奉、爲雲上之衞府、同用壺胡籙、五位已上皆著縫腋、候御後、至于六位者、平裝束引布帶、著糸鞋、不用平緒、(入尻鞘、)但檢非違使用平胡籙、於廷尉府生已下、褐衣垂袴用壺胡籙、四位已下蒔常東帶用淺履如例、殿上四位之中一人藏人一人、於中院奉仕御湯殿、是山蔭西宮勸修寺等之種族

所勤仕也、其儀入御神殿之後、御湯殿役人二人、參北腋戸下、依天氣於同壁下各著今支、件役職事近衞司之間多有其便、爲衞府者、先解弓箭、脱表衣下襲榱等昇殿、〈或不脱樣云云〉六位脱袍著今支、〈或脱下襲〉立戸下、御以主殿官人令取御湯、藏人計之、以上薦役人先試御湯寒温、〈以左手試合、七度云云〉次縫殿寮獻浸布、次內藏寮獻天羽衣、次獻御泔坏、擬上宮等、以縫殿寮供祭服、御裝束改、帛御裝束、著御之後、藏司供御幘、御湯殿役人等、於戸外次第令催獻、同役上薦人、於長押上傳進之、次主水司供御手水、湯殿役人帶四品之時、御奉仕陪膳、爲五位之時、藏人頭奉仕之、〈去康和五年十一月、新嘗會行幸之時、左少將實隆朝臣爲御湯殿役人、而儀以催行、藏人頭又以不候、仍左中將俊忠朝臣奉仕之、〉次召御笏、次小忌上卿已下催行次第事、丑剋供曉膳了、寅剋還宮、大忌上卿於陰明門外幄前名謁、右近次將同之、

〔建武年中行事〕六月十一日、御神事一日よりはじまる、行幸あり、いぬのはじめに出御、はくの御裝束をたてまつる、內藏寮てうず、夏はすゞし、冬はねり、これよりさき、先大忌の御湯をめす、うらにあひたる上卿、陣につきて辨をめして諸司の具否をとふ、小忌御燈を供す、もとの火をけちてともしあらたむ、上卿宰相辨少納言外記史うらにあひたる人小忌をきる、近衞司藏人みなきる、關白鬼間にてきる、南殿に出御、內侍例のごとし、反閉なし、行幸の時御輿は葱花なり、鈴の奏なし、すけ渡て御輿を南階によす、上首のすけ劍璽の役をつとむ、御輿にめさる、けいひちなし、月花門陰明門などを出で中和院にいたる、大忌の公卿幄につきて、御輿過させ給ほど、すけたれ〳〵か侍とどふ、おの〳〵名謁す、御輿神嘉殿の南向の壇によす、すけかはらず、〈神事にはかくのごとし〉下御神嘉殿のひさしより入らせ、御、大床子の御座につかせ給、此所に承塵はりて、白木の大床子たつ、御座しろへり也、四の角にしら木のとうろをしら木の机におく、關白の座をまうく、所々にきぬの幌かけたり、劍璽大床子のうへにおく、とのもんれう御ゆまゐらす、御舟にとる也、めすほどにためたり、そのゝちひの口より七たびにまゐらす、山蔭の中納言子孫なるくら人、御ゆのことをつかうま

つるなり、その人なければ、外戚にも末なる又えたり、頭もしは五位藏人の中、これも山かげの末、御ゆ殿にまゐる、うへのきぬぬぎて、うへに明衣をきたり、下がさねおなじく著せず、神殿の方にむかひて、七たびこれをそゝぐ、さて御舟に御ゆかたびらめしていらせ給、三瓠めして、天の羽衣（御ゆがたびらをいふなり）舟のうちにぬぎすてゝ、更に又くられうの御ゆかたびらをめしてあがらせ給、其後帛の御裝束をめす、內藏寮のたてまつれるをぬがせ給つれば、又ぬひ殿れうのたてまつれるをうるはしき齋服にはたてまつる也、（これは冬もすゞし也）內藏寮のたてまつれる御幘を御かうぶりのこじのねにむすぶ、かたかざなり、御ゑいの下よりまへに引まはす也、御かうぶり無文、御帶むもんのずんばうちゝ御用意ある也、大ひの御かぞの流、つねざねの大納言のすぢになん、いまも御裝束口傳ありてめされける、御服のゝち、うねべ時を申す、一內侍かみあげて、神殿にまゐりて寢具を供す、これよりさき左右近のつかさ、殿の東西に陣をひく、開門闈司などはてゝ、上卿已下神殿のまへにつらなりたつ、左右近中將おのゝゝ一人すゝみて、靴をぬぎ弓箭ときて、南戶の左右のとばりをかゝぐ、打拂のはこさか枕八重疊など、上卿參議辨少納言外記史まだいにこれを供す、內へとり入ぬれば、かもんのかみ參て神座をまく、南枕にしく、先一丈二尺たゝみ、そのうへに六尺のたゝみ四帖、枕のかた二帖はうらあり、その上に九尺の疊七帖、そのうへに八重だゝみしく、九尺の中一帖をいさゝか東に引いでゝ、うちはらひのはこをおく、さか枕は八重だゝみの下に枕にしく、內侍參て御ふすまをやへだゝみのうへに奉る、御櫛御扇そばにおく、御くつ御あとにおく也、內侍まぞきて神殿に入御あり、神座の東に巽むきに半帖を敷て御座とす、主上の御面莇を正しくしてつかせ給、揖あり、（此いうは人しらぬ事也）その前に又たゞむでうを敷て、そのうへに神座を供すばいせんのうねべ神食薦もちて參て、たん帖の上にしく、後とりのうねべ御食薦を持てまゐる、ばいせんとりてまく、平手ばこの御はん、生物干物くだものゝはこども次第に入まゐり

ぬればうねべひらでを取てまゐらするに、次第に入させたまふ、おき樣二のやうあり、二行にすう五出の樣なり、神今食は五出たよりある也、ひらですくなきゆゑなり、くはしき樣次第にみえたり、粥まゐる、しろきくろきまゐりて、本柏にてそゝぐ、なうあいの御はん御きまゐりぬれば、宮主のと申、御手水は事はじまらぬさきと、事はてゝと二度あり、大かたは大嘗會の神供の儀におなじ、うねべ又申て後まだいにまかる也、はじめまづ御手水まゐる、其後いさゝか祈念の事あり、はてゝのち又御手水さきのごとし、猶秘事どもはしるすにおよばず、其後かへりいらせ給、丑一に又曉の御せんまゐるさきのごとし、みないでゝうねべ參て、よひあかつきの神のおものことなくゆゑなくまゐりぬと申せば、よしと仰ありて、御ゆかたびらを給、ぬひどのゝ帛の御裝束、宮主にたまふ、神祇官にておこなはるゝをりは、まづ官の廳へ行幸なりて、はくの御裝束奉りて、神祇官へ行幸ある也、神膳のはいは、近衛府の幄にてかぐらあり、夜ひの御せんの程、とり物から神までうたふ、夜もすがらうたひて、還御の御こしの左右にうたひて供奉す、こゑたえず千歲をうたふ、月花門の内にてとゞまりさぶらふ、

十二月十一日神今食六月におなじ、

〔公事根源六月〕神今食　　十一日

御神事は一日よりはじまる、戌刻に行幸有、先大忌の御湯をめす、卜にあひたる上卿陣に著て、辨をめして諸司の具否をとふ、小忌御燈を供す、もとの火を消てともしあらたむ、上卿宰相少納言外記史、卜にあひたる人小忌をきる、近衛司藏人もみなきるべし、行幸の時、御輿は葱花也、鈴の奏なし、中和院に行幸なりて、神嘉殿の大床子の御座につかせ給ふ、御ゆの後、采女時を申、內侍髮あげて、神殿に參りて寢具を供す、これよりさき左右近のつかさ、殿の東西に陣を引、開門闈司などはてゝ、上卿以下神殿の前につらなりたつ、左右近の中將おの〳〵一人すゝみて、くつをぬぎ弓

箭ときて、南の戸の左右の帳かゝぐ、うちはらひの箱さか枕八重疊などを、上卿參議辨少納言外記史次第に是を供ず、內へとり入ぬれば、かもんのかみ參て神座をしく、南枕にして先一丈二尺のたゝみ、其上に六尺のたゝみ四でう、枕のかた二帖はうらあり、其上に九尺のたゝみ七帖、其上に八重たゝみしく、九尺の中一帖をいさゝか東にひきいでゝ、うちはらひのはこをおく、さか枕は八重たゝみの下に枕にしく、內侍まゐりて御ふすまを八重だゝみのうへに奉る、御くし御あふぎそばにおく、御沓御あとにおく也、內侍退きて神殿に入御あり、神座の東にたつみむきに半帖を敷て御座とす、主上御面をたゝしくしてつかせ給ふ、此間相儀は人しらぬ事共也、神のすごも御すごもなど敷て、神膳を供せらるゝ儀有、白黑御酒まゐりて、もと柏にてそゝぐ、なうあひの御はん御きこしめすまゐりぬれば、宮主祝と申、御手水は事はじまらぬさきと事はてゝと二度あり、大かたは大嘗會の神饌の義に同じ、うし一に又曉の御せんまゐるさきのごとし、神祇官にて行るゝをりは、先官廳へ行幸なりて、帛の御裝束奉りて、神祇官へなるなり、神饌の程、近衞の幄にて神樂あり、よひの程とり物韓神までうたふ、よもすがらうたひて、還御の程御輿の左右にうたひて供奉す、聲たえず千歲をうたふ、いと興ある事にや、

〔西宮記 六月〕神今食

天曆三年七月二十二日、於中和院有神今食祭事、依霖延引天陰雨降、藏人頭雅信進左仗、申中納言元方卿云、依雨行幸停止者、上卿仰外記云、差使部仰諸司云云、造酒司申故障、中務省申輔障、以左衞門佐國珍爲輔代、以侍從厨預眞與爲祐代、年來以別符爲祐代、而今夜不參、仍進去十二月神今食例、雖元服宣、所中行也、待曉之間已徒然、仍上卿召菓局、侍從所菓局也、令國珍與內匠頭尹輔手談、募以一盃云云、

〔左經記〕寬仁三年十二月十一日癸巳、隨召參神祇官、爲行神今食事也、外記惟孝云、月次祭上卿申障不被參、仍依攝政殿仰、雖催諸卿、皆申障不被參、仍有仰、左中辨爲上卿代、被行祭事、其儀辨著北廳上

座、召了使皆立、上卿歸、及秉燭事了、頭之右大將左大辨被參、次右大辨被參、右大辨稱所勞由被退出之、供神物幷神座等、皆依先例供之、事了上下退出、

〔春記〕長暦二年十二月十一日癸酉、今日神今食、不御中院、仍所司於神祇官行此事、內侍向其所云々、予二剋許、采女口子參朝干飯方、直申參候之由、仰云、申々、神供事、曉夕平安奉仕了者、勅は〇は恐誤字少時出御南殿、予候御劔、侍臣秉燭祇候、御拜了還御、

〔中右記〕嘉承二年六月十一日、戌剋許參神祇官、神今食之間依當卜也、入從南廳南面著北面座、先藤宰相顯實參著南面座、頭面藏人左少辨雅兼參入、著北面座、外記兼弘史則定幷諸司等參入、又內侍采女氏氏等參入了者、又供神物具了哉相尋之處、申具了由、〇中略時守稱亥二剋、則起座於此廳北邊各著小忌、行向北廳邊、參議以下相從、主水司供手水、予取打拂向神殿供之、官人開戶受取之後立西、參議與辨昇坂枕、參議立西、權可立東歟、供了參議與予列立西、東面北上、依无少納言、藏人辨又供神座、立東、各還著本座、不脫小忌、供夕膳、官人等稱警蹕、次有勸盃、藏人辨勸之、次及上官座、依无役人不及二獻、次立著、時々供氷顆、頭面撤夕膳、先中案內其後及丑二剋、供曉膳之由申上、稱警蹕、頭面撤之、中案內實二剋、及上卿以下如本行向撤了、次第如供儀、各退出、

〔顯廣王記〕安元三年〇治承元年六月十二日庚辰、神今食御齋、立大藏卿幄於柏殿跡辨備之、同依柏殿燒亡也、上卿權大納言實房卿、行事右少辨光雅、

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、雨降、今夜神今食也、〇中略戌剋參神祇官、雖須著毛車、夜深雨降、仍用網代車、是有何事乎之由、懸河納言被示之故也、入官北門、此門內不逐前、雖禁高聲須、猶事云々、然而喧嘩甚多、此間召使來會、予經北廳東至于南廳、官掌出來褰幔、入北面自東第三間著座、其座爲體、東一間敷親王座、西面同二間敷上卿座、北面、座前置式筥、同間敷參議座、南面而退東及第三間敷之、雖須令敷直、依无益不直之、同三間敷辨北面少納言南面座、各正不對違敷之、第四間廻南敷上官座、第五間敷召使官掌座、召使南也、官掌北、東面、今日座體如此、予著定之後、少外記師親左少史能

光宣掌召使等著座、予參入之間、各暫起座歟、相次少納言重綱參著、及亥終、藏人左少辨光長帶劔平緒、不具門部、如何、參入、○中略良久上卿新中納言實守參入、今日始被從神態、殿親右府例云々、入南面第三間、立定廣筵下、一揖跪脱沓、更立著座、先是辨少納言已下退座、予一身在座、○中略外記不申代官、依上卿新任歟、使部申時、先是内侍伊與早參、次上卿已下起座、如參著路、下蒲先上卿、於東砌壇上被著小忌、予於北砌著之、召使持來之、寸法不相叶、如形引懸之、次辨少納言同著之、外記史不著之、依不具云々、於神座巽坤主水司供手水、上卿已下洗手、先是帶劔人撤之、次列立北廳南庭、北上東面、去北砌二許丈、上卿并予東面立、辨少納言頗寄南列立、北上西面、下立定一揖、上卿不被揖、依爲白地列歟、予揖謎不尋知、又可引楔、若依御令撤之歟、次上卿差笏取打拂筥、次予并辨舁坂枕、予差笏舁東、辨舁西、進中戸壇上跪、諸司自内來逢請取之、予拔笏一揖復本列、次少納言外記史等奉仕御疊、供神座了之後、上卿已下復本座、暑月或撤小忌歟、上卿猶依著、予以下同著之、次可供寢具、而依遲遲、且可供神饌之由辨下知之、祭祀法猶可守次第歟、次有勸盃、一獻少納言重綱勸之、内舍人取杓、上卿被擬予、予擬左少辨、辨揖起座取盃、次擬外記、次少納言復本座、依上卿命止二獻、守辰丁頻申時、次供曉膳、次上卿以下起座、撤打拂筥坂枕御疊等、次上卿已下退出、予脱小忌給召使、于時天曙、歸家未及日出、今日儀神事違例、朝家陵遲、只以之可察、

○按ズルニ、神事違例トハ、神事ノ剋限ニ臨ミテ、神服用途等ノ闕如セシヲ云フ、猶ホ調度用途ノ條ヲ參看スベシ、

〔永昌記〕嘉承元年十二月十一日戊辰、參神祇官、其儀如例、所司兼居饗、時守毎點申時、亥剋上卿以下起座、先手水、次著小忌、次列前庭、次開中戸、次令供神具、上卿打拂、宰相辨坂枕、少納言疊、歸立庭中、次歸著本座、次縫司供寢具、次供神膳、間警蹕、口令問具否、次一獻、少納言家隆、次二獻、右少辨爲隆、無下箸法等事、丑一刻供曉膳、先縫司供寢具、次供神供、及寅撤之、次上卿以下參向、撤打拂坂枕、如初、此間如初列立、事了各次退出、

右衛門督宗通、藤宰相顯實、右少辨爲隆、少納言家隆等也、

〔長秋記〕大治二年十二月十一日丙寅、神今食也、參中和院、便入自朔○朔恐殷誤壁門著中院西舍、其儀如

去月新嘗會、經親王座不居物、上宰相座机二立也、辨少納言長机二脚相營事、如前日、先之左少辨實親外記盛方史行政在座、辨問予云、上卿參時、辨以下列立事、舊記不可然之由問答了、而近來猶出立、爲之如何、下官云、如然事只隨近來例所說也云々、上卿民部卿忠教卿被參、親王座不居物之由被問、辨進來申、不居之由、（邑[illegible]多居之如何）座上不敷軾之由被問、仍加催之處、掃部官人代之著布衣者敷之、上卿咎被追歸、下官云、召使如此役常事也者、仍召使敷之、上卿被問外記之代官也、可申外記作座申云、代官不候、又問辨云、供神物具歟、辨申云、具了、次令申時、時守申云、戌一、不知故人々云、可申正時、仍申云、亥二、仍上卿以下起座、出舍之間官下部申云、供神物御飯未盛了之由、神官等所被申也、上卿云何無實、於言上者非左右限、不如歸座諸事具了、予同之、（此辨行公事時、每度不昔本末申具由也、不知故）良久官掌申事具由、仍起座出舍、著小忌參進儀如常、昇堂上時脫沓儀、同下官說脫階一級上、少納言忠成着八疊二度如例、事了歸座、上卿下官不帶劍、少納言帶劍勸杯料也、待供神物了勸杯、（待事之由、上卿所被示也）內侍但馬早參行事云云子一刻罷夕膳、丑刻供曉膳、寅一刻撤神座供、罷時皆申上、蒙許撤座、時上卿不待事了退出、不知是非、○中略今夜民部卿具布衣前驅二人、是非失禮、貧家之所爲也、　大治五年十二月十一日己卯、相扶所勞沐浴潔齋、參神今食、○中略召外記、參座後、問諸司具否、大略具了、又問供神物事於辨、答云、未具之由所令申也、允刀自未渡神服、御飯未盛云々、重仰云、刻限滿、早可被加催歟、此間聞內侍參由、又參議著南面座、此後供神物由辨申上、予云、可令申時歟、○中略下官於舍東庭著小忌、喚使持來也、辨并政官等於南面著之、參議少納言於北庭著是、辨云、小忌極不法也、曉膳時改替可進由可召仰者、然而不可叶事歟、辨云、就北舍時經大樹東歟、將西歟、下官云、此事不詳、但於今夜樹西荷立日祭棚等、而已口無路經東可參也者、仍人々隨是、（件棚可撤也）於御座幄西庭洗手、神官進小杓手巾等也、次入幄中、南上東面立、上卿宰相如此、辨少納言南上、西面也、相公云、無日蔭葛如何、予云、日蔭新嘗會用也、於神今食不然云々、掃部官人捧打拂筥立幔門際、予進寄指笏取之、昇坑上之間、同役官人走去入自東面戶、開南面

戸跪戸內、下官跪壇上授之、取笏左回立列、件打拂筥等是板上置五尺許布也、次參議辨昇坂枕、參議立東也、次少納言外記史掃部官人三人供御疊二度、了引歸南舍、仰辨云、時守向陰陽寮催時剋可申時、就中於丑時必可申者、供神物間諸司高聲也、含辨令制止、前例不可然事也、○中略辨打手盛供神物、了後杯酌二廻、勸杯先少納言、次辨傳盞、此後且談且眠、鷄鳴後使部申時丑二云々、催曉膳、辨云、供夕膳撤御座、又曉饌撤御座歟、予云、夕膳時供御座、曉膳供了、寅時撤御座之由所見給也者、曉膳供了由官掌申、仍如當初參進、洗手次第撤之、閉神殿戸、了後副壇下東行、出幔脱小忌、給召使退出、

〔康富記〕應永廿九年十二月十一日甲子、月次祭幷神今食也、○中略神今食式、南殿代置之、每事如例、獻盃二獻也、一獻少納言、二獻辨也、上卿居盃於笏傳參議、參議又居笏傳辨、辨作座被取之、後日此事予尋申淨居庵之處、臺盤之時者、居盃於笏可傳也、机之時者不可傳笏、可渡諸司也、今夜儀誤之由被仰之、去六月大炊御門中納言如此令進退給、固違失之由有仰、二獻之時、少納言居盃笏、被指出予前之間、予取之揖立、經史上進少納言前、跪指笏取盃、右廻復本座、更置盃座上、拔笏揖後、置笏於座下、目史飲了、後予向少納言長廣朝臣申云、先盃御笏ニ居テ被出之、予進賜之、御所爲ニ相違シテ見候歟、御存知如何候哉、進賜盃之條、定樣所覺悟也、少納言返事云、居笏之條違失也、御進退宜之由被命了、爲後日如此申之者也、其外事如常、及夜半其儀畢、人々退散、窮屈々々、職豐同道、續少歸宅、官掌不著南殿代、可謂不參也、

〔薩戒記〕應永卅二年六月十一日己酉、陰晴不定、午已後雨、臨晚聊日影、日沒已後又雨、月次祭上卿葉室中納言、宗豐神今食同人兼行之、宰相飛鳥井宰相雅世云々、後日納言談曰、欲行神今食之間殊甚雨、回南殿代幄不可叶、又雨雖休止、溜水流入、舍內無可著座之樣、相尋先例之處、無南舍之時、被用南門簷下之由官外記等申之、而又當時南門無實、依以今案於東門下行南舍之儀畢、若有相難之輩歟如何、予曰、依南殿無實、於南門行之例歟、依無南門、又於東門下被行之何事有哉、此外者可被停止哉

甚不便、所被行尤可然歟者、納言曰、上卿猶難自由之由加難人有之云々、可尋事也、臨期可經奏聞哉、未聞如然之例也、　卅三年六月十一日癸酉、傳聞月次祭上卿葉室中納言、神今食上卿同人也、卜合參議中御門宰相（宗體卜合）等參向、依降雨南廳代軽不能著座、仍可用南門下之處、當時無其實、仍於東門下行之云々、件座依上卿命爲西上、以神殿方爲上之故云々、此事甚不甘心、猶擬南廳可爲東上歟、依爲西上上卿已下出門外、自東方進著云々、似無便宜歟、抑所謂神殿者、北廳事歟、將入神殿事歟、若爲北廳事者、爲南廳代之時、則上卿著南、參議著北、强以北不爲上歟、若又爲入神殿事者、南廳代之時、同以東爲上、旁上命不得其意者也、凡南廳代不相叶之時、先例於南門下行之、其時可爲南上者、神殿當下方、何不准之哉、東門之儀、東上頗不甘心歟、後日宰相所命又如此、

〔儀式 一〕大殿祭儀

神祇官以宮四合（一合納玉、一合納切木綿、一合納米、一合納酒、）居八足案二脚、令神部四人舁之、中臣忌部官人宮主史生神部等（著木綿鬘襷、）左右相分前行、御巫列於案後、至延政門外、置案於簀子上、（神部設之、）大舍人叫門如常、闈司奏云、大殿（保賀比能）事申賜（止申）宮內省官姓名叫門故（爾）申、勅曰令申、闈司傳宣云、姓名（乎）令申、宮內省進就版奏云、大殿（保賀比）供奉（止申）神祇官姓名候（止）申、勅曰喚之、宮內省稱唯還出喚、神祇官稱唯、中臣忌部官人著木綿鬘、（忌部更加木綿襷、）立案前、直進仁壽殿、先是御巫等入自宣陽門、候於內裏、隨案共入、至殿東簀子敷上、御巫等執宮、中臣忌部御巫等以次入仁壽殿、（御巫一人遶宜陽殿散米、一人至承明門散米、）忌部執玉懸殿四角、次御巫等散米酒切木綿於殿內四角、退出、中臣候仁壽殿南、忌部向巽微聲讀祝詞、訖至於浴殿懸玉於四角、次懸廚殿四角、御巫等散米酒如初、自陰明門退出、次宮主引神部、至炊殿懸木綿、散米酒、訖於神祇官賜祿、但御巫料送內侍司令賜、（神今食大嘗會等祭前後、亦有此祭、但祭前者不奏聞、亦無賜祿、）

〔祝詞考 中〕大殿祭　宮內省式に、神今食新嘗二祭明日平旦大殿祭、（此二祭の前後に、大殿祭有事、貞觀儀式に祭前者不奏聞、無賜祿と云にてしらる、前は輕き故に是にも不記、祿も賜らぬならん、）

〔延喜式四時祭一〕大殿祭中宮准此

絲四兩、安藝木綿一斤、筥四合、各徑一尺五寸米四升、酒二升、坏一口、盞二口、案二脚、

右神今食明日平旦、以筥四合、置一合盛玉、一合盛切木綿、一合盛米、一合盛酒瓶、八足案二脚、令神部四人執、著木綿鬘襷、中臣忌部官人宮主史生神部等左右前駈、御巫列於案後、至延政門、置案於門前、大舍人叫門、宮内省官人退出召中臣、稱唯、卽兩官人著木綿鬘、忌部更加木綿襷、立案前、直進御殿、先是御巫等自宣陽門入候於内裏、其入至殿東簀子敷上、卽御巫等各取筥一、中臣忌部御巫等以次入御殿、忌部取玉懸殿四角、御巫等散米酒切木綿殿內四角、退出、中臣侍御殿南、忌部向巽微聲申祝詞、畢次至湯殿、懸玉四角、次懸廁殿四角、次懸御厨子所四角、次懸紫宸殿四角、御巫等以次散米酒、如初、御巫一人進承明門散米酒、從陰明門退出、次引宮主忌部至御炊殿、懸木綿散米酒、如初、畢内藏寮賜祿有差、數見内藏式、遂至本司引使部已上就宮内省解齋所、事見儀式、

〔延喜式宮内三十一〕凡神今食新嘗祭明日平旦大殿祭、省輔已上、率諸忌部等、至延政門、令大舍人叫門、闈司傳宣如常、輔入奏、諸奏事皆輔奏之、其詞曰、宮内省申久、大殿祭此云於保登能保加比供奉登神祇官姓名率忌部氏候登申、

〔西宮記六月〕神今食中院儀

神祇官祭大殿、官人率御巫座摩等參上、祭御在所御湯殿御裝束所御厨子所、還到御在所巽角、忌部微聲讀祝詞及紫宸殿、

〔江家次第六月七〕大殿祭藏人一人相副令奉仕之、

神祇官人中臣忌部先石灰壇、次經御帳後奉仕夜御所、次朝餉、次御湯殿、次御樋殿、次御膳宿、次御厨子所、次南殿御膳宿、散供畢插土錢、以絲貫之、

〔延喜式中宮十三〕凡六月十二月神今食十一月新嘗祭神態畢、後日平旦神祇官祭御殿、亮若進一人相副

傳內侍令啓、然後祭之、

〔延喜式祝詞八〕大殿祭

高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以氐、皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐、天津璽乃劍鏡乎捧持賜天言壽(古語云、許止保企、言壽詞、如今壽觴之詞、)宣志久、皇我宇都御子皇御孫之命、此乃天津高御座爾坐氐、天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾、大八州豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止(古語云、志呂志女須、)言寄奉賜比氐、以天津御量氐、事問之磐根木乃(○木乃一作木根)立知、草能可岐葉毛言止氐、天降利賜比志食國天下登、天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎、今奧山乃大峽小峽爾立留木乎、齋部能齋斧乎以伐採氐、本末乎波山神爾祭氐、中間乎持出來氐、齋鉏乎以氐齋柱立氐、皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿、(古語云、阿良可、)汝屋船命爾天津奇護言(古語云、久須志伊波比許登、)乎以氐言壽鎮白久、此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美、下津綱根(古語番繩之類、謂之綱根、)波府虫能禍無久、高天原波青雲乃靄久極美天乃血垂飛鳥乃禍無久、堀堅多留柱桁梁戶牖乃錯比(古語云、伎加比、)動鳴事無久、引結都留葛目能緩比取葺計留草乃噪岐(古語云、蘇々岐、)無久、御床都比能佐夜伎、夜女能伊須須伎、伊豆都志伎事無久、平久氣安久奉護留神御名乎白久、屋船久久遲命、(是木靈也、)屋船豐宇氣姬命登、(是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世產屋、以辟木束稻置於戶邊、乃以米散屋中之類也、)以御名乎波奉稱利氐、皇御孫命乃御世乎堅磐常磐爾奉護利、五十橿御世乃足良志御世爾、田永能御世止奉福留依氐、齋玉作等我持齋波利持淨麻利波造仕禮留瑞八尺瓊能御吹伎乃五百都御統乃玉爾、明和幣(古語云、爾伎氐、)曜和幣乎附氣氐、齋部宿禰某我弱肩爾太襁取懸氐、言壽伎鎮奉事能漏落武事乎波、神直日命大直日命、聞直志見直志氐、平良氣久安良氣久所知食登白、

詞別白久、大宮賣命登御名乎申事波、皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氐、參入罷出人能選比所知志、神等能伊須呂許比阿禮比坐乎、言直志和志(古語云、夜波志、)坐氐、皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流、比禮懸伴緒、襁懸伴緒乎、手躓足躓(古語云、麻我比、)不令為氐、親王諸王諸臣百官人等乎、己乖乖不令在、邪意穢心無

久、宮進〈留米〉進、宮勤〈留〉勤〈之米氏、〉咎過在〈平波〉見直志聞直坐〈氏、平久耳氣〉安〈久耳氣〉令仕奉坐〈留依氏、〉大宮賣命〈止〉御名〈乎〉稱辭竟奉〈久登〉白、

〔西宮記〈六月〉〕神今食

延長七年十二月十一日、內有犬產、今夜依穢不御中院、丑剋神祇官參上、有大殿祭事云云、

〔北山抄〈二六月〉〕十一日神今食事〈○中略〉

不候宿神祇官、大殿祭例、〈承平六年七月三日、御物忌例、候中淸奉仕之、而官人皆申故障、史一人奉仕神祇官祭事、仍夜半以後可奉仕之由仰畢、應和二年六月、曉更供奉、〉

〔中右記〕長承四年〈○保延元年〉六月十八日庚申、月次神今食也、〈○中略〉大殿被仰送云、皇后宮大殿祭節折事、御服間、无著除以前可被行哉如何、先例无所見、但神祇官人申云、諒闇之時有此事、准彼例被行有何事哉、且尋先跡、且可思慮、可計申者、申云、先例不慥覺候、如此事被問神祇官例也、神祇官申旨分明也、早隨被申可候之由申了、

忌火庭火祭

〔延喜式〈一四時祭〉〕忌火庭火祭〈中宮准此〉

五色帛各四尺、絁二匹、倭文四尺、木綿麻各二斤、絲二絇、綿二屯、布二端、庸布二段、鍬四口、米酒鹽各二斗、鰒堅魚腊海藻各二斤、食薦二枚、杯八口、匏二柄、槲十把、

右大殿祭畢、宮主於內膳司行事、

〔江家次第〈七六月〉〕忌火御飯〈六月、十一月、十二月一日早旦供之、○中略〉

今按、忌火每至神態鑽火爨、謂之忌火也、延喜式、忌火庭火祭宮主於內膳司行事、天安元年四月、內膳司忌火庭火神奉授從五位上、天平三年正月、神祇官奏、庭火御竈四時祭祀、永爲常例、

解齋

〔儀式〈一〉〕六月十一日神今食儀〈十二月准此○中略〉

當日〈○中略〉戌一刻〈十二月用酉一刻〉乘輿御神今食院、〈○中略〉寅一刻供曉膳、〈○中略〉卯一刻換御服、還御本宮、訖祭大殿、訖辨大夫率小齋人等、到宮內省就解齋座、座定辨大夫喚官掌二聲、官掌稱唯、趨立庭中、辨大夫

命云、喚宮內省、官掌稱唯、趨出喚之、錄稱唯、趨立、辨大夫命云、御飯早速賜、錄稱唯、趨出喚之、膳部五六人共稱唯、錄仰云、賜御飯、膳部共稱唯、大膳進屬以下共起、先賜神祇官、次分頒賜辨大夫以下、訖屬趨立申云、御飯賜了、諸司共拍手三段、〈先後稱唯〉酒盞三行、亦拍手一段、各了依次散去、

〔延喜式〈三十宮內〉〕凡神今食解齋、〈○中略〉鎭魂祭等日、辨官令官掌召省、錄稱唯進就版位、卽宜令給食、錄稱唯、差退唱膳部二聲、膳部稱唯、錄宣給食、卽給饌行酒、

〔西宮記〈六月〉〕神今食中院儀

明旦主殿寮供神事御手水、其儀棚一基敷布、立八足机一脚、置御手巾筥一柄、又立白木二階一基、置蘭履一足、立机一脚、〈已上敷布〉置二缶、盛御手水、尋常御手水以前供之、次主水司供御粥、副和布御羹、〈盛中垸、早旦主水司、請御粥垸一口、馬頭盤井御箸七箸、自藏人所給、〉陪膳未明裝束參上、藏人供之、彼司所進請申奏不奏聞、直給出納返上之日、彼司卽請本奏例供以前供之、今日同司奏御手巾、後齋輕服之人參、他齋准此、

〔北山抄〈二六月〉〕十一日神今食事

兩儀御膳、〈○中略〉采女申御膳供畢由、供解齋御粥等如常、〈或於神嘉殿有此事、依降雨等、御不出御時例歟、〉

〔江家次第〈七六月〉〕解齋事〈謂六月十二月十一日後朝、十一月中卯日後朝、〉

平旦主殿司自御湯殿方供御手水、〈女孺二人取居之、例御手水主水司供之、而如此、〉御手水大床子南頭立白木机一脚、其上居白木手洗、〈無手〉其南立白木二階机一脚、其上層敷調布、其上居御巾、〈入黑漆筥〉又置粉一坏、〈入小土器〉下層置蘭履一足、〈無裏皮、近代以藁尻切置之、〉其南立白木八足机一脚、其上居缶一口、〈盛御手水、長櫃記口云々、近代如此、〉二杓一口、次宸儀著御大床子、〈御直衣〉女房二人〈著襷手〉供奉御手水、次宸儀著蘭履、御步行三度云々、次主水司自御膳宿方供御膳、其儀采女二人舁御臺盤立、次陪膳〈四位〉與六位藏人一人舁〈鬼同格子四如常、居土器、有御箸二雙、〉立於晝御座大床子前、如常、〈不著譯〉次藏人供御粥、〈堅粥也、高盛之、〉次又供和布汁物、〈以上居土器〉次藏人付女房奏供畢由、〈不奏御膳由〉次主上經朝餉著御晝御座大床子、次三箸育之、次入御手袖祈念給、立御箸於粥上入御、次陪膳召男共藏

人取御盤來、不仰撤由次撤之如恒、
此後大忌人人參上
有行幸時、晝御座格子皆上之、平明還御、仍今夜不下格子也、無行幸時、只上第三間御格子、
陪膳上古布袴近代束帶
「昨日陪膳勤之、行幸幷御物忌時、當日陪膳勤之、
御祈念故院後三條院御時
以後冷泉院御時說奏之、當時不然、被仰曰、故院不被仰件由云云、
治曆四年十一月十二日、不供解齋御手水、依昨日內裏燒亡也、二條

〔年中行事大概〕六月供解齋御手水
十二日には御神事をとかせ給ふよしにて、主殿寮御てうづをたてまつる事あるをいふなり、

〔師遠年中行事〕六月十一日神今食事十二月准之
十二日早旦供解齋御手水幷御粥事主水司供御手水

〔蓬萊抄〕六月十一日神今食行幸事〇中略
十二日供解齋御粥、遲明供之、其儀大略如朔日忌火御膳儀、

〔師光年中行事〕六月十二日
解齋御粥、主上出御聞食三箸、次入兩手於袖令念給、同御手水、陪膳女房奉御手水、三度沃之、次主上著御尻切、御行三步、

〔年中行事抄〕六月十二日供解齋御手水幷粥事、早旦雖無神祇官行幸供之、

〔建武年中行事〕六月十一日御神事一日よりはじまる、〇中略つぎのあした解齋の御粥まゐる、晝の御座の大床子にて、臺盤一脚をたてゝ供す、御かゆかはらけにもる、ゆの御しるものそへたり、三

くちめして御はしをたつ、げさいの御手水は、御手水の間のたゝみをとりあげて、大床子を北によせて南むきにくす、大床子のまへに、案に木のたらひをすゑておく、その南に二階の上にほどぎ一、御手水を入、ひさごをそへたり、御手水のこ一かはらけ、下のぢうにうらなしをおく、その南に入なしを立て、御たのごひをおく、はいせんの人三ひさくかけて後、御たのごひまゐる、次にうらなしを下におきてめしてたつ、みなみに向て三なしあゆませたまふ、

〔公事根源六月〕供解齋御粥　十二日

神今食のつぎのあしたげさいの御かゆ登、貴御座の大床子にて、臺盤一脚をたてゝ供す、御かゆかはらけにもろ、和布の御汁物そへたり、三口食て御箸をたつ、げさいの御手水は、御手水の間のたゝみをとりあげて、大床子を北にたてゝ南むきに供す、御手水の具をおきて御手水の義なり、次に案におきたる御うらなしをとりおろしてめして、たつみにむきて三なしあゆませ給ふ、

〔西宮記六月〕神今食事

延喜十八年六月十一日、（〇中略）此夜於神祇官行神今食事云云、十二日、主殿主水等寮司、供解齋手水粥等、令問前例、申云、雖有穢不供神事、猶供解齋手水等云云、案事意、有齋而後可有解齋、而依穢不齋、宜無解齋、此例已以似違議、後宜改定之、（〇又見日本紀略）

〔左經記〕寛仁四年六月十一日辛卯、月次神今食祭等如常云々、　十二日壬辰、早旦束帶參内、主殿寮供神事御手水、（尋常御手水以銅、自御湯殿方供也、）次主水司供解齋御粥、采女一人裝束、昇立御臺盤一脚、中土器居箸二雙、居臺盤上、余（〇源經頼、權左中辨、）幷藏人（裝束）昇之、供大床子御座方、（警蹕）粥一坏、和布羹一坏、（已上盛椀）居御盤一枚持來、（藏人警蹕）取居御臺盤上、去候母屋南一間柱下、藏人供御粥之由觸女房云々、主上取御散飯立御箸還入、余召仰罷由、藏人取臺盤來、（不仰罷由）罷御粥御羹、次又來、余相昇御臺盤歸出、次供尋常御手水、

〔春記〕長暦二年十二月十一日癸酉、今日神今食、　十二日甲戌、辰剋許供解齋（主殿寮供之、御湯殿間云云、）御手水

并御粥等、陪膳良貞朝臣也、侯基可召問之詞、經成奉仰申關白云云、卽歸參奏事由、遣召侯基、稱病不參入、又申關白奏此由云云、此事關白有不許氣色、太不吉事也、

〔中右記〕天永二年六月十一日壬寅、神今食、　十二日、此曉供解齋御粥云々、禁中雖丙穢、有議供之也、

〔長秋記〕元永二年六月十二日、去朔日依御產穢、中宮不供忌火御飯、仍今日不供解齋粥云々、但於御贖物者、雖穢中供之云々、

〔玉海〕治承四年六月廿六日丁未、入夜藏人左衛門權佐光長、自福原送札狀云、

神今食事

右今月依穢延引、來月九日於舊都可被行候、釆女歸參、奏事由之後可被解齋候、而山海相隔、途路有程、不待釆女歸參、只計其程先可有解齋歟、於釆女者、雖不被相待、任行程可參奏歟、將又不可參歟、宜令計申給者、新院〈○高倉〉御氣色如此、以此旨可令言上給、光長頓首謹言、

六月廿五日　　左衛門權佐光長〈奉〉

進上　和泉前司殿

量程時、有解齋者、釆女歸參、專無其要之由令申了、後聞釆女猶歸參云々、

〔明月記〕建久七年六月十二日、巳時許洗髮之間、自內新藏人示送云、今日解齋、內辨陪膳等闕如、勤仕示者、此事未明事也、午時奉書到來、尤驚存早可參勤由申了、卽參內、抑上御格子相待云々、不便事也、卽供御粥、上御座間格子一間、舁立御臺盤一脚、〈不居臺〉御箸先置之、頭藏人持來粥御盤〈粥一坏、盛一坏、〉御取居之了、〈此事或先置臺盤上歟、々也、陪膳強不可知、〉藏人奏事由、〈不及奏聞、內々申了、〉內侍仰開食由、不鳴扇卽取盤來、如先取居之退出、次舁立臺盤、次上御格子、供朝夕膳、了參御直廬方、

元久二年十二月十二日、早旦參內、爲解齋陪膳也、上御格子一間、釆女兼取居御臺盤、余與藏人舁之無音、藏人內々申供由、內侍著、余氣色、此間相御供八、藏人來舁出之、又々依藏人語供例御膳、〈先是上格子、〉

朝夕訖、辰時退出、近代事也、

〔薩戒記〕應永卅二年六月十一日己酉、〇中略月次祭上卿葉室中納言宗豊、神今食同人參行之、十二日庚戌、解齋御粥、陪膳左中將隆富朝臣云々、

祭日及時刻

〔儀式〕一六月十一日神今食儀〈十二月准此〉

戌一剋、〈十二月用酉一剋〉乘輿御神今食院、

〔年中行事大概〕六月神今食

としに二度あり、この月と十二月十一日となり、

〔續日本紀〈四十桓武〉〕延暦九年六月戊申、〇十三日於神祇官曹司、行神今食之事、

〔類聚國史〈九神祇〉〕弘仁五年六月己丑、〇十四日行神今食於神祇官、緣聖體不適也、

〔西宮記〈六月〉〕神今食

弘仁九年六月十四日、丙穢、以諸司於神祇官祭之、

〇按ズルニ、右二三ノ例ニヨレバ、當時ハ未ダ必ズシモ十一日ニ限ラザリシガ如シ、

〔類聚國史〈九神祇〉〕天長八年六月丁丑〇十一日皇帝御中院、有神今食事也、

〔續日本後紀〈十五仁明〉〕承和十二年六月丙戌、〇十一日神今食也、

〔年中行事秘抄〕諸祭刻限

六月神今食

戌一點御齋院〈十二月用酉〉寅二點還宮、〈十二月用卯〉卯一點宮內神祇候延政門、〈十二月辰一點〉二點叩門參入祭御殿、〈十二月同〉

以前右大臣宣、永以爲例、

弘仁十四年十二月廿八日　　少外記都宿禰廣田麿奉

祭殿

〔中右記〕寬治八年十二月十一日、辨侍來云、神今食合卜右少辨依穢氣、仍相催他辨之處、皆以故障、所出立也、入夜先參內、次參神祇官、暫佇佪南屋邊之間、上卿中納言匡房被來、共從南面著座、〇中略亥一剋供夕膳、此間時守申時刻、且又問陰陽寮、有杯酌儀、少納言惟信勸杯、次々下官上卿座東邊敷膝突筵、居件筵勸杯歟、夕膳撤了、待曉膳間、互以清談、丑二刻、神祇官又供曉膳了、鳧鐘頻報、已及鷄鳴、上卿以下起座行向神殿前、撤打拂坂枕等、各退出、于時雲表雲晴、日華甚明、

上卿命云、近代履Among井閣恭之輿絕了、又戌一刻人々參集、亥一刻供夕膳、丑刻供曉膳、寅一刻可退出也者、而見西宮記之處、多注二點、如何、

〔薩戒記〕應永卅三年六月十一日癸酉、傳聞月次祭上卿葉室中納言、神今食上卿同人、〇中略卜合也後日中相公語云、奉行左少辨資親御教書云、來十一日神今食、來十一日字無益歟云々、尤有理、抑彼先祖資宣卿五位職事時、日吉祭宣下之時、書來廿三日、是式日事也、不可然之由有沙汰、忽思出之、

〔儀式〕一六月十一日神今食儀十二月准此

神祇官參神今食院、和院〇中內膳造酒主水等司受備供御物、參祭所供奉、〇中略戌一刻十二月用酉一刻乘輿御

神今食院、

〔拾芥抄〕中宮城末諸院

中和院內裏西、號中院、神嘉殿、天子祭社稷神所、

〔年中行事抄〕六月十一日神今食事樞要

舊例於中院行之、近代於神祇官行之、

〔年中行事歌合〕三十三番　左　神今食〇中略

左神今食は、御門の天津神に神供を備奉らせたまふなり、昔は八省中和院に行幸有て、みづから神膳を備給ひける也、今は神祇官などにて有にや、

〔續日本紀 四十 桓武〕延曆九年六月戊申、於神祇官曹司、行神今食之事、先是頻屬國哀、諒闇未終、故避內裏而於外設焉、

〔類聚國史 九 神祇〕弘仁五年六月己丑、行神今食祭於神祇官、緣聖體不適也、

〔西宮記 六月〕神今食

弘仁九年六月十四日、內穢、以諸司於神祇官祭之、

〔類聚國史 九 神祇〕天長八年六月丁丑、十一日皇帝御中院、有神今食事也、

〔文德實錄 七〕齊衡二年六月戊子、十一日帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、

〔三代實錄 九 清和〕貞觀六年十二月十一日甲子、月次幷神今食祭、天皇幸宮內省親奉祭、

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年十二月十一日壬午、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿行事、

〔三代實錄 十八 清和〕貞觀十二年十二月十一日戊子、月次神今食祭、天皇御神嘉殿、

〔三代實錄 二十一 清和〕貞觀十四年六月十一日庚戌、天皇不御神嘉殿、所司於宮內省修神今食祭、

〔三代實錄 三十六 陽成〕元慶三年十二月十一日丙申、月次神今食祭於神祇官修之、以內裏有犬死穢也、

〔三代實錄 四十九 光孝〕仁和二年十二月十一日乙卯、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿向神祇官行事、

〔西宮記 六月〕神今食

寬平元年六月十一日、神祇官行月次祭云云、神今食祭依例於中院可行也、而件院諸舍多傾敧、仍尺宮內省、辨備御在所幷供神雜事以下、日記破損、仍行幸之由不分明、

〔日本紀略 一 醍醐〕昌泰元年六月十一日、月次祭神今食、天皇御中院、

〔西宮記 六月〕神今食

延長六年六月十六日、時々降雨云云、令大外記高橋元幹於藏人所仰云、今夜祭事、改中院於神祇官

天皇親祭

可行者、(左右近中將各申障之中、有兩氣也、)卽仰諸司可裝束彼官之由云云、

〔本朝世紀〕天慶八年十二月十一日癸酉、今日有月次祭事、此夜又同官有神今食事、

○按ズルニ、此時神祇官ニ於テ神今食ヲ行ハレシハ、本月五日縫殿寮ニ產穢アリシヲ以テナリ、

〔日本紀略(四村上)〕應和三年六月十一日辛卯、入夜天皇行幸中和院、依神今食也、

〔日本紀略(八花山)〕寬和二年六月十一日戊申、月次祭神今食、天皇行幸中院、

〔本朝世紀〕正曆四年十二月十一日甲午、今日神今食祭幷月次祭等也、內裏依有觸穢之事、付神祇官被祭、仍諸司廢務、

〔日本紀略(十一後一條)〕長德二年十二月十日丙午、今日建禮門內有死人、仍明日行幸被止畢、十一日丁未、月次祭神今食付本官行之、

〔左經記〕長元八年六月八日庚申、參內、頭辨相示云、去七日大內有犬死、仍月次神今食等延引、先例有內穢之時、於神祇官被行、而件官屋等去年顚倒後、未造立、仍延日於中院可被行之由有定也、

〔百練抄(七二條)〕長寬二年十二月十一日、神今食、行幸神祇官、依中院火事也、(依有先例也、)

〔類聚國史(九神祇)〕天長七年十二月辛亥(十一日)皇帝有神今食事、御神嘉殿、拂曉還宮、

〔續日本後紀(五仁明)〕承和三年六月戊申(十一日)天皇於神嘉殿親神事、

○按ズルニ、神嘉殿ニ於テ行ハルヽ神事ハ、卽チ神今食ナラン、

〔三代實錄(十八淸和)〕貞觀十二年十二月十一日戊子、月次神今食祭、天皇御神嘉殿親奉幣祭、

〔三代實錄(三十六陽成)〕元慶三年六月十一日庚午、月次神今食祭、天皇御神嘉殿、親王(○類聚國史無王字)奉祭、

〔日本紀略(一醍醐)〕昌泰元年六月十一日、月次祭神今食、天皇御中院、

〔西宮記(六月)〕神今食

不出御

延喜十一年十二月十一日、昨今日物忌也、戌一刻御中院、行神事云云、今夜參議二人、供奉小忌云云、
〔日本紀略（村上四）〕應和元年六月十一日癸卯、月次神今食也、天皇幸神祇官、　三年六月十一日辛卯、月次祭、上卿於入省院、召月次祭使、被加奉去九日伊勢幣、入夜天皇行幸中和院、依神今食也、依明日御物忌子刻還御、
〔日本紀略（圓融七）〕天元五年十二月十一日戊辰、月次神今食、行幸神祇官、
〔日本紀略（花山入）〕寛和二年六月十一日戊申、月次祭神今食、天皇行幸中院、但大忌上卿不參、
〔百錬抄（一條四）〕寛弘六年五月廿八日、諸卿定申自一條院行幸神今食中院間事、可用自冷泉院行幸儀、
〔小右記〕寛仁二年十二月十一日己亥、召使申云、外記順孝令申云、今夜可出御中院、可參大忌者、　十二日庚子、宰相來云、去夕出御中院、小忌按察大納言齊信卿參議資平、攝政被候也、
〔百錬抄（二條七）〕長寬二年十二月十一日、神今食、行幸神祇官、依中院火事也、（依有先例也）
〔百錬抄（後嵯峨十五）〕寛元二年十二月十一日丁丑、依神今食、行幸神祇官、　三年六月十一日甲戌、神今食也、天皇自閑院有行幸云々、
〔平戸記〕寛元三年六月九日壬申、神今食行幸卜合之由、本府催使持來、　十一日甲戌、今夜神今食行幸、人々步行云々、小忌權中納言、土御門宰相少納言成行、大忌土御門大納言吉田中納言三條中納言春宮權大夫左大辨云々、大忌醒一獻少納言長明、二獻左少辨時繼云々、天曙事了還宮、帛御裝束事、兼有沙汰之由聞之、嵩居子細不聞之、遂可尋記、人々參事、左大辨注送之、
〔續日本後紀（仁明十五）〕承和十二年六月丙戌、（十一日）神今食也、天皇熱悶、不御神嘉殿、所司行事、
〔文德實錄（五）〕仁壽三年六月庚午、（十一日）帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、
〔文德實錄（六）〕齊衡元年六月甲子、（十一日）帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、　十二月甲寅、是日木工頭正五位下石川朝臣長津頓死於寮中、月次並神今食等神事、令所司奉祭、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年六月十一日庚寅、於神祇官修月次祭、帝不御神嘉殿、便於神祇官修神今食祭、十二月十一月丙辰、於神祇官修月次神今食祭、親王公卿參會行事、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年六月十一日乙亥、是日月次幷神今食祭、時論以爲、出羽飛驛使入禁中、可謂染死穢、由是天皇不親祭事、遣公卿不入內裏者、於神祇官攝行、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年十二月十一日壬申、月次神今食祭也、中院犬死、仍天皇不御神嘉殿、公卿於神祇官供奉、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月十一日辛酉、月次神今食祭如常、昨日內裏有犬產之穢、由是天皇不御神嘉殿、親王公卿向神祇官行事、

〔西宮記六月〕神今食

延喜三年六月十日御記云、使淸貫問左大臣御中院時方閇例、大臣曰、前代不忌天一太白、貞觀以來有此事、以後御中院方閇例未詳、只仁和法皇〇宇多御時因方閇忽進曉神饌以避忌、見此例供神饌時刻具存式、而早速云云、此度雖不御有何難云云、

〔北山抄二六月〕十一日神今食事

依有方忌、不出御例、(延喜十三年六月、左大臣申云、前代不忌、貞觀以來有此事、法皇御時忽進曉饌、以避忌、供神饌時刻存式、而早速云々、未爲得、今所司供奉、有其例、此度不御、有何事、)云云、

〔西宮記六月〕神今食

天慶七年六月十一日云云、上卿依不參不御神嘉殿、有仰祭事於中院付所司令行、有明親王參議保平著小忌云云、

〔北山抄二六月〕十一日神今食事

依有方忌不出御例(天慶二年六月、九條記云、中宮御云、延喜御代雖方塞不被忌、未及寅剋還御云々、參議執申、御云、或不被忌、或付所司、案之雖不出御可無殊難者、不出御由仰外記、)

畢云云、

〔西宮記六月〕神今食

中院儀

有方忌者早還御、(或有方忌不御)天暦元年十二月无行幸、納言以下著中院行、

〔日本紀略冷泉〕安和元年六月十一日癸亥、月次神今食、依御物忌不御神嘉殿、於神祇官被行之、

〔日本紀略圓融〕貞元元年六月十一日丙午、月次神今食、依大風無行幸、　十二月十一日癸卯、月次神今食、依御物忌天皇不御中院、

〔日本紀略圓融〕天元元年六月十一日甲子、月次祭神今食、遷宮之後、依坎日不御中院、仍付諸司、　五年六月十一日辛未、月次祭神今食、依御物忌不御中院、

〔小右記〕永觀二年十二月十一日丙戌、神今食付所司被行、大嘗會以前无出御神態之例、是先日大外記忠輔朝臣勘申也、

〔日本紀略一條〕寛弘二年六月十一日丁亥、月次祭、依雨下不行幸、付本官、

〔日本紀略後一條〕長元七年六月十一日己亥、月次祭神今食行幸、依時議停止、

〔春記〕長暦二年十二月十一日癸酉、今日依有御衰日憚不御中院、是前日定也、今日神今食不御中院、

〔師元年中行事十二月〕十一日神今食事、(延久三年十二月十一日辛酉、今日依常衰日幷物忌不出中院、神今食付所司令行之、時刻於石灰壇上奉拜大神宮、○又見師光年中行事)

〔中右記〕嘉承元年十二月十一日、神今食右衞門督藤宰相勤之、依御物忌无行幸儀、

天承二年(○長承元年)十二月五日辛卯、來十一日神今食、可有行幸之儀出來也、是新院(○鳥羽)十六年、今上(○崇德)御宇九箇年間、神今食新嘗會例幣、如此神行幸絕了、仍來十一日、先入御于諸司、十一日神今食可有御幸也、而十二三日、內重御物忌也、是伊勢恠異曉膳及曉更可有其憚歟、被問人々也、予申云、伊

延引

勢御物忌甚重之由、陰陽頭家榮所申也、不可有□□□□□□□□□□□□可候由申了、今夜殿下被仰云、件御占、官寮共重之由所卜申也、仍今度延引了、尤可然也、十一日、月次祭、右衞門督實能卿左少辨公行、神今食、大納言實行、右宰相中將成通、權右少辨經業、少納言知信、終夜及連句、

〔本朝續文粹二勘文〕變異疾疫飢饉盜賊等事

敦光朝臣

一去年風水有難今年春夏飢饉事

二月新年祭、六月十二月月次祭神今食、九月神嘗祭、十一月新嘗會者、朝之重事也、其祭纔存、其禮漸薄、就中天皇神今食幸中和院、神嘗祭幸大極殿、威儀棣々、自感神心、昔告朔餼羊、仲尼愛禮、以小喩大、何失恒規、事々任式可被行之、〇中略

以前參箇條、據史籍課愚管、勘申如件、

保延元年七月廿七日　　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

〔中右記〕保延元年八月廿四日、一日下給諸道勘文八通返上之、〇中略勘文八通謹返上、可被行善政之由各勘文也、此次申云、〇中略

二季神今食、九月例幣新嘗祭、行幸尤可被行也、〇中略

以前條々事等、依有其詩、大略注進、早以此趣可被奏達之狀如件、

八月　　内大臣〇藤原宗忠

藏人辨殿

〇按ズルニ、中右記ノ文ニ據レバ、鳥羽天皇ノ天[illegible]以後二十餘年間ハ、神今食親祭ノ禮行ハレズ、崇德天皇ノ長承元年ニ至リ再興ノ議アリシカドモ、偶物忌ニ由リテ果サズ、是ヨリ後多クハ行幸ナクシテ、親祭ノ儀漸ク廢絶スルニ至レリ、

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年六月十六日己酉、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿行事、今月

十一日、大膳職有犬死穢、由是引及今日、非緩也、

〔三代實錄清和二十五〕貞觀十六年六月十四日庚午、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿率勅行事、去十一日大膳職犬死、由是延至今日、

〔三代實錄清和二十六〕貞觀十六年十二月十一日乙丑、緣右近衞府失火之穢、停月次神今食祭、大祓於建禮門前、　十三日丁卯、夜天皇御神嘉殿、親供神今食祭、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十二年六月十一日丁亥、神今食延引、依内裏自下穢也、　十五日、月次神今食、

〔西宮記六月〕神今食

延喜二十一年七月九日依穢延引云云、中納言藤仲平卿率侍從著座、但无小忌、親王各稱不參、仲平觸雷卜、依親王、而申障不參云々、亥刻小雨、因之天皇不御中院、

〔日本紀略村上三〕天曆三年六月十一日癸未、月次祭并神今食依穢延引、仍於建禮門有大祓、去月廿九日中宮職觸穢及内裏之間、式日可延引之由、去二日被下宣旨、　七月廿二日癸亥、月次祭神今食也、天皇依雨不幸神嘉殿、去月頻有穢、于今所延引也、

〔日本紀略村上四〕天德三年六月十一日乙酉、月次祭神今食、依穢延引、仍於建禮門有大祓、件穢去月率幣伊勢使歸京之間、於途中觸穢之故也、　廿一日乙未、月次祭神今食也、天皇御中院、

〔吉記〕承安三年七月五日丙申、今日被行月次祭、式日依神祇官穢延引、上卿源大納言、參議可尋、少納言信季、右少辨親宗等行之云々、

安元二年六月十一日甲申、今日月次祭、神今食御體御占等依穢延云々、

〔玉蘂〕文治五年六月十一日己亥、今日依神宮穢神今食延引、仍被行大祓、依延引公私無神齋之儀、

〔公名公記〕永享五年十二月十五日甲子、神今食延引、有子細不能記、今日被行、

〔日本紀略宇多〕仁和四年十二月十一日、依豐樂院死穢停神今食、

停祭

咲貝

寬平六年十二月十一日、神今食依眞言院穢停止、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十一年六月十一日、依犬死穢、止神今食、

〔西宮記六月〕神今食

延喜二十二年十二月十一日、月次神今食、依穢延引、十四日、月次祭事了、神今食付神祇官被行、而可供奉采女八人也、先例件采女三箇日齋、而依內穢不供奉、仍以不穢采女可供奉、而所在只二人、若不足時、以水取爲采女代令供奉、而不穢水取一人、總三人也、因之入夜被停件祭、十五日、停祭之由、於建禮門前大祓、

〔後二條關白記〕應德三年十二月十一日乙未、依物忌不行神今食事可尋、

〔儀式一〕六月十一月神今食儀十二月准此

前祭三日、中務省差定可供奉內舍人、前一日早朝、輔丞錄各一人率史生省掌等、就神祇官南舍座、（諸部寮預設座）點檢、次侍從以上、就中小齋十人（親王一人、納言已上一人、參議一人、若納言已上不卜食者、定參議二人、少納言辨中務宮內兩省少輔各一人、次侍從以上三人、若參議已上不足二人者、定侍從四人、）于時錄執札唱計、諸大夫隨郎稱唯、訖錄執親王封名就廳卜之、（中務預親王三四人名書封卜之、定乙合以上、令三省掌告卜食者、其參議以上及外記名簿各一枚、太政官召神祇官賜之、）還本座、次輔率諸大夫就同廳卜大臣以下、（若有不卜食者、差替之、）訖各退出、（若有穢除者、立官北門令申此由、）當日平旦、主殿寮供浴湯、辰剋輔若丞一人、執小齋次侍從以上名簿付內侍奏之、月次祭畢、神祇副祐各一人、（用中臣官下同）率宮主及長上卜部、向宮內省卜定可供小齋六位已下、其儀副祐先進就廳座、（東向）次宮主以下就座、（南面西上）座定、神祇官掌捧版庭中、其兆人參集南門、命婦以下就東舍座、次中務丞錄各一人、宮內丞錄各一人、就西舍座、（中務北上、宮內南上、並東面、史生各在其後、）座定、二省省掌共捧版、各當丞前置之、訖縫殿寮屬進就版、可供奉小齋內侍以下名簿進中務省、其詞云、兆人女刀禰乃名簿進止申、錄讀申、卽丞錄押署、訖錄立出南門、執簿率文武官人就宮內省版、申云、兆人乃名簿進止申、丞命云、進之、共稱唯轉取、最下人總取進、錄讀申、訖丞云、縱、諸司共稱唯退出、于時宮內錄就神祇版、申云、宮

內省中久、司司乃兆人乃名簿進擧止中、副命云、八社男八社女御膳司幷色色人等次第令參進宣、錄稱唯復座、卽告丞、丞命云、令喚省掌、錄稱唯、卽喚史生名一聲、史生稱唯、錄命云、喚省掌、史生稱唯、喚省掌二聲、省掌稱唯進就版、丞命云、八社男八社女御膳司幷色色人等次第令參進、省掌稱唯退出、仰八社男以下、依次令參進、〈先八社男、次八社女、次奧膳以下、次中務省丞錄內舍人、〉訖宮主起座、西面跪申云、立御兆竹、副云、立之、稱唯進於卜部前、前別折立、卽申立畢狀、還就本座、卜食人等列就版、副命云、兆竹折著事祓清供奉、共稱唯退出、其八女及女官、廳上東壁下共西面、丞令退出、事了散去、

〔延喜式一四時祭〕月次祭〈○中略〉

祭畢、卽中臣官一人率宮主及卜部等、向宮內省、卜定供奉神今食之小齋人、

〔延喜式十一太政官〕凡六月十二月十一日月次祭幷幣帛、大臣以下集神祇官、如祈年儀、其應供神今食及新嘗小齋中納言已上一人、參議一人、〈若中納言已上不卜食者、定參議二人、〉散齋之日外記錄名付神祇官令卜、〈但親王者、中務注名令卜、〉少納言辨外記史史生官掌等亦同之、其次侍從五位已上中務輔率其身向神祇官卜定、訖卽故中務奏之、諸司六位已下及女孺等致齋之日、本司若錄歷名送宮內省、卽神祇官卜、〈事見宮內式、〉訖若歸舍沐浴、晡後入內供奉其事、

〔延喜式十二中務〕凡應供奉神今食幷新嘗小齋侍從次侍從、前祭一日平旦於神祇官南門外點檢、訖卽省輔相率就同官廳、卜食四位一人、五位二人、省輔、宮內輔各一人、若其日不參者不預節食、但親王者書歷名付神祇官令卜之、諸司者散齋之日省書歷名、〈省丞錄各一人、內舍人四人、內記監物主鈴典鑰各一人、中宮職十五人、大舍人寮十二人、內藏寮四人、縫殿寮四人、內侍以下一百人、〉致齋之日向宮內省卜之、訖各歸舍沐浴、晡後集承明門外、乘輿御神嘉殿、大舍人叫門、闈司奏宣、小齋親王已下供奉如常、〈事見儀式、〉

凡應供奉神今食小齋次侍從已上歷名、前祭一日奏之、〈大嘗會亦准此、〉

〔延喜式三十一宮內〕供奉神今食小齋

神祇官卅人(伯已下御巫已上)、太政官六人、中務省三人、侍從三人、內舍人四人、內記一人、監物一人、主鈴一人、典鑰一人、大舍人寮十二人、內藏寮六人、縫殿寮二人、命婦已下宮人已上卅人、(命婦十人、宮人廿人、)宮內省三人、主殿寮廿二人、典藥寮四人、掃部寮七人、內膳司八人、造酒司二人、采女司十二人、主水司六人、左右近衛府官人各五人、近衛各卅人、兵衛各六人、駕輿丁各八人、(已上供奉御)女五位三人、女孺已下十七人、左右近衛府官人各二人、近衛各十人、駕輿丁各八人、主水司官人已下四人、左右兵衛各二人、(已上供奉中宮)

〔延喜式 十三 大舍人〕凡供奉諸祭及齋會節會等舍人者、神今食小齋官人一人、史生一人、舍人十人、(侍鈴者、便取小舍人、)

〔延喜式 三十八 掃部〕六月神今食、前一日設小齋五位已上座於神祇官、當日平旦設小齋人座於宮內省、神祇官卜部已上座於廳內、內侍座於東廂舍、中務宮內二省官人座於西廂舍、

〔西宮記 六月〕神今食中院儀

當日早旦、出納書侍臣名數、差小舍人遣神祇官、令卜、小忌合不、還來之後、大忌人等皆悉退出、又藏人書女藏人名數、召出納給內侍所、彼所遣神祇官、同令卜之、預御厨子所別當候御浴人不卜、行幸扈從留守如恒、內藏寮賜酒饌殿上侍臣所雜色、如恒、(但女藏人內侍等、各給酒肴、)早旦主殿供御浴、內侍女藏人到宮內省令卜、可供奉女官、(近代以女官送名見上也、)御卜畢、內膳兆人簡付內侍、內侍不候者付藏人、御覽畢返給、官外記令卜、王卿以下、

〔北山抄 二 六月〕十一日神今食事(延引停止時、有大祓、儀中有穢、供奉所司不穢時付所司、所司又穢者延引也、)

前一日、中務省就神祇官、令卜小忌次侍從以上、(若當子日、日卜之、)

當日輔若丞、付內侍所奏之、神祇官向宮內省、卜定供奉諸司六位以下、內侍藏人同向、令卜可供奉之女官、(至內侍令不卜、若當子日、十日卜奏、)

內膳司兆人簡、付內侍令奏、(內侍不候者、或付藏人、)覽畢返給、

貞觀官式云、親王一人、中納言已上一人、不卜食、定參議二人、

延喜二年十二月、御中和院、親王參議不參、納言二人供奉小忌、

同十六年親王不參、納言一人參議二人卜食、依無親王、有仰供奉、後日外記勘申弘仁以來無此例由、事已失誤、以後可改云々（康和三年六月、康保三年十一月又有此例、康保三年供夕膳後、彈正尹親王參入、上卿相定不令供奉、仍退出云々）

上卿一人例（仁和三年十二月、同四年六月、延喜廿一年七月九日、承平三年七月、應和四年六月、）

參議一人例（延喜十五年十二月、天慶八年十一月、天曆八年十二月、）

大忌王卿不參例（延喜十五年六月）

以殿上命婦爲內侍代例（延喜十五年六月）

高橋伴兩氏之中以一人令供奉安曇氏代例（延喜元年十一月新嘗會）

以主水女孺令供奉采女不足例（延喜六年十二月）

以大膳膳部令補內膳膳部不足例（延喜十六年六月）

侍從不參例（天慶七年十一月御卜所只一人參、當日從殿上召侍從等令供奉、更不卜之、或差非侍從等令供奉、）

辨少納言代官例（應和元年十一月、以中務少輔平在寬爲少納言代、以雜殿頭橘忠信爲辨代、）

小忌次將代官例（康保三年十二月、左中將博雅不參、自餘不合御卜、以右（右一本作左）大將令供奉役代、）

〔神祇官年中行事 六月〕十一日神今食、上卿、參木、辨、少納言、參本官行之、內宮主參勤之、

〔夕拜備急至要抄 上六月〕神今食（入夜行之、或有行幸、）

上卿（卜合人於外記可相催之）　宰相（同）　辨（同卜合可同官）　少納言（同）　內侍（如例）　官外記

〔日本紀略 醍醐〕昌泰三年十二月十一日乙丑、神今食、無納言、參議二人供小忌、

〔西宮記 六月〕神今食

延喜十五年六月十一日、御中院、大忌親王公卿等不參候云云、又內侍皆有障、殿上命婦二人供奉、內

侍代年來未有例、然以無内侍不可闕供祭事、故准他時例令奉仕之、

延喜十八年六月十一日、依穢内膳膳部等不足、可供神事歟、仰大納言藤原朝臣、以大膳膳部等借補内膳膳部不足之數、令供神事、此夜於神祇官行神今食事云云、（昨日有淑景舍犬死穢、仍不御中院、付所司被行云々、）

〔西宮記六月〕神今食

延長六年十一〇（一二月歟）月祭左近陣將監不候、有定召右近大忌將監令候云云、（吏部記）而勅曰、不可然、以左府小忌將曹令候云云、

〔西宮記六月〕神今食

承平三年十二月十日壬子云云、須召神祇官給上以下史生已上卜文、而依子日不令占、依去昌泰三年例、十一日早旦、可卜申之由仰畢、

天慶六年六月十一日、於神祇官有祭事云云、外記有象令藏人仲陳奏云、小忌親王納言各有障、不可參云云、仰云、親王參議各一人供奉之例可勘者、即勘申、

〔西宮記六月〕神今食

御記云、天暦八年十二月十一日、神今食祭云々、參議正明朝臣一人行祭事、又以辨代官令供奉云云、

諒闇

天德四年十二月十一日、御神祇官行神今食祭事云々、（依當子日、昨日令卜供奉男女房并駕輿丁等云云、）

應和元年十二月十一日庚子、今日依當子日、昨日於宮内省可卜食今夜供奉諸司等、仍内侍代藏人等向候省令合卜、而八男八姫等不參、仍不合卜、仍有定、今日重於宮内省令卜八男八姫、但至于内侍藏人等、昨日已以卜了、仍重不卜云、

康保三年十二月御記云、依無小忌納言二人例、納言參議各一人可供奉之由令仰、又卜食外記不候、仍以史令行事云云、

〔日本紀略花山〕永觀二年十二月十一日丙戌、月次祭神今食、天皇不御神嘉殿、被付神祇官、上卿各申障不參、仍以左少辨藤原道兼爲上卿代、令行神今食、

〔中右記〕嘉承二年六月十一日、戌刻許參神祇官、神今食之間依當卜也、○中略少納言三人皆以故障、或所勞、或輕服、問先例於外記之處、申云、相尋大外記師遠、今朝注申云、天喜四年六月十一日、少納言皆以有障不參入、仍以辨令兼勤者、付件例可行也、

元永三年保安元年○六月十日、夜半外記爲康來催云、明夜神今食人々故障、已丙合也、必可參勤、但於月次祭者、可候右衞門督由勅定者、申承了由、本依有催、可勤月次祭之由申之處、今日有此仰、但侍從中納言實隆乙卜合也、被免彼人、如何、先可被催乙卜合人事也、

〔山槐記〕永曆元年十二月十一日乙卯、外記云、今日神今食、少納言不參、昨日頭辨奉院宣被催、猶申障、而頭辨稱所勞不被申上、早可奏者、予答早可付他人之由、史云、神今食辨不參早可奏聞、予答以有所勞之由、

〔吉記〕治承五年六月十一日丙辰、外記祐道入來云、今夕神今食上卿宰相云、合卜人々不合人、皆以申故障事及闕如了者、雖須申沙汰、依有相憚事、可觸他職事之由返答了、後聞五位藏人等不承引之間、外記參殿下申之、殿下被仰藏人佐光長云々、又少納言對捍事、外記一昨日依相觸令催之處、惟基先申神事有憚之由、次稱穢氣引來之由、賴房稱五體不具穢之由、重欲申沙汰之處、觸穢之間甚有其恐、仍示付左少辨許之處、稱病不請取、仍申殿下了、近日職事、自官外記申上事無承引、上﨟與奪又不用、可謂奇恠歟、近來公事難治之間、爲無一身之煩偏忘公平也、自殿下同被仰光長、○中略後聞神今食上卿藤中納言成範勤之、藏人佐奉殿下仰參院奏事由、猶可相催之由被仰出之、而事已卒爾、不可叶之由申之、仍被納言本自在今熊野、御共眼前被定遣、可謂善政歟、參議右兵衞督家通右少辨兼忠等參仕、少納言惟基賴房共稱穢氣之由、然而爲院宣、賴房適雖參入、依申穢之由、可著座之旨雖下知之由

在上宣、仍自門外退出、但後日聞食此旨、召出留少納言、召問穢否子細、可有沙汰之由被仰、光長云云、又聞當時祗候內裏內侍二人也、而一人依月事俄退出、仍今一人伊與、參向神祇官、其間內侍一人不祗候內裏、可謂不便歟、

〔薩戒記〕薩戒御記抄出之宣下消息等

神今食御卜合候、御參向事奉存候也、仍上啓如件、

六月〇應永廿九年五日　右少辨俊國

謹上　中山宰相中將殿

神今食參向之事、卜合候上者、尤可存知候之處、故障事候、可然之樣可被得其意給候也、謹言、

領狀請文

神今食參向事、可存知候也、謹言、

六月六日　參議定親

〔康富記〕寶德三年十一月廿日乙卯、事、謁局務、來月神今食卜形事、〇中略公卿大納言中納言參議一紙、少納言一紙、外記一紙、以上三通也、又公卿分、朝臣ヲ略シテ各名字ヲ書載テ爲遣之、吉田卜部所望之故、近年如此云々、廿七日壬戌、來月神今食卜形事書調、遣文殿秀國許、早可付吉田神主兼名朝臣方之由申含了、十二月一日乙丑、神今食卜形、公卿分外記分兩通、文殿秀國持來、

神今食卜形

公卿

中御門大納言卜丙合　日野中納言卜丙合

左衞門督卜乙下合　楨小路宰相卜乙下合

右大辨宰相卜丙合

神今食卜形如此之一紙、令注進候、少納言兩人觸穢、只在治朝臣一人候之間、不及卜形候、可得御

意候、恐惶謹言、

十二月四日　康富（状）

進上平松殿

四日戊辰、神今食卜合、昨夜秀國持來候間、今朝付進頭中將資總朝臣許、又有書狀、

神今食卜合注進候者、早々可給候、將又源雅冬トハ誰人候哉、羽林ニテ候哉、聊不審子細候之間、キト令申候、委細可承候也、謹言、

十二月四日　資總

尙々月次祭出車分配仁候間、如此申候、稱號等不審候也、

神今食卜形、昨夜到來候間、只今注進候、就中又雅冬朝臣稱號委不存知候、若久我雲客候歟、一條ト被稱號候歟之由存候、猶委可有御尋候哉、又此卜形內、綾小路者、庭田殿事候、可得御意候哉、恐惶謹言、

十二月四日　康富

供御及調度用途

〔延喜式四時祭〕供神今食料

紵一丈二尺（御巾料）絹二丈一尺（御幌料）絲四兩（縫御幌等料）布三端一丈（御巾料）曝布一丈二尺（覆水盞料）細布三丈二尺（戸座襌袴料并）木綿一斤五兩（結御食料）刻柄刀子二枚、長刀子十枚、短刀子十枚、筥六合、籠筥二合、明櫃三合、御飯粥料米各二斗、粟二斗、陶堝瓫各五口、都婆波匜酒盞各四口、洗盤短女杯各六口、高盤廿口、多志良加四口、陶鉢八口、叩瓫四口、臼二口、土片椀廿口、水椀八口、筥代盤八口、手洗二口、盤八口、土手湯瓫二口、瓫四口、堝十口、火爐二口、案十脚、切机二脚、槌二枚、砧二枚、榻四俵、匏廿柄、蚡蛸槽二隻、油三升、橡帛三丈、（戸座服料、冬絁一疋、綿六屯、調一端、）

右供御雜物、各付內膳主水等司、神祇官官人率神部等、夕曉兩般參入內裏、供奉其事、所供雜物、祭

訖卽給中臣忌部宮主等、一同大嘗會例、

〔延喜式三十一宮内〕凡神今食新嘗會所須、卜坏廿口、卜竹廿株、日影二擔、並申官請受、

〔延喜式三十二大膳〕六月神今食、十二月准此

輿籠四脚、納供神物、簀四枚、置供物料、槲二俵、供神料

〔延喜式三十五大炊〕六月神今食

稻八束、粟四束、用官田稻粟、春備付神祇官、新嘗准此、臼一腰、杵二枚、箕一枚、中取案二脚、納米粟、暴布帒二口、別八尺、女丁三人、各潔襷一領、別五尺、褌一條、別六尺、鍵綵五銖、

右雜物依前件、十二月准此、但袋及襷褌尋常便用、迄于新嘗會請替、帒并襷褌、中宮東宮亦同、

〔延喜式三十八掃部〕年料鋪設

六月神今食、十二月神今食十一月大嘗祭亦同、御料黃帛端短帖一枚、方四尺、白布端帖二枚、各長一丈二尺、廣四尺、白布端帖二枚、各長九尺、廣四尺五寸、一枚無裏布、白布端帖一枚、長八尺、廣四尺、白布端帖四枚、各長六尺、廣四尺二寸、一枚無裏布、折薦帖一枚、長八尺、廣四尺、折薦帖八枚、白布端坂枕一枚、長三尺、廣四尺、褥席二枚、葉薦八枚、折薦八枚、齋食薦八枚、山城食薦八枚、簀八枚、床一脚、湯殿料、打拂布二條、各長一丈三尺、柳筥二合、納打拂布料、但中宮白布端帖四枚、各長八尺、廣四尺、折薦帖一枚、白布端坂枕一枚、褥席二枚、

右預前儲備、事畢卽充神祇官、

〔延喜式四十主水〕神今食料、新嘗會踐祚大嘗會亦同、

絹篩一口、一尺五寸、水案一脚、帊帳布一條、六尺、下居案一脚、土埦二合、水瓮二合、官人一人、水部五人、各襷一條、但新嘗會加布衫、見中務式、

右依件具錄色目、申省請受

〔西宮記六月〕神今食

御厨子所例云、六月十一日替雜器等、木工內藏兩寮造之、上御厨子所同此、色目在別、者今案件所進之物色目、在彼所奏案之文云、生絹三丈、(御料)帛三丈、(試料)綷油絹三丈、(御坏覆料)細布六端二丈、(四端御厨子懸、二端二丈、預一人、膳部四人當色料、)調布三端二丈、(二端御櫃覆料、一端二丈仕女三人今良等料、)已上奏文一紙、自內藏寮請之、切板四枚、(加下居)鉞一柄、提一柄、鐵串一雙、小刀四柄、燒物棚一基、鐵堝輪四足、火箸二具、盥舂臼二口、已上奏文一紙、自木工寮請之者、然件物之內、相分進上御厨子所事、見御厨子所年中行事之末、十一月新嘗會同此、

〔延喜式十四縫殿〕六月神今食御服

帛單衣二領、(別三丈七尺五寸)袴二腰、(別三丈)中袴二腰、(別三丈)褌二腰、(別二丈六尺)被二條、(別七丈五尺)綿五屯、(別二屯半)敷被一條、(一匹)襪二條、(別帛三丈、暴布二丈一尺、庸一枚、)帛帷二條、(別三丈七尺)暴布帔一枚、(一端)壓巾一條、(一端)帛袜二兩、(別三尺五寸)練絲二兩一分、生絲二分、櫛二枚、履一兩、(已上二種內藏寮備、餘條履准此、)牀帊帛二條、(別四丈六尺)納服白木韓櫃二合、敷細布二條、(別五尺)暴布綱二條、(別長二丈)黑葛筥二合、(各長一尺五寸、廣一尺三寸、)紙十張、祓麻大一兩、(并寮監付神祇官)紅花大三兩二分、支子一斗四升、酢三合六勺、薪百廿斤、藥六圍半、

同月、神今食中宮料、(十一月新嘗會准此、但以數被代御、)

被二條、褥一條、軾一枚、調布二端、白楊筥四合、紙十枚、練絲一兩、櫛二枚、履一兩、白木韓櫃一合、

〔延喜式十五內藏〕六月十二月神今食奉絹幞頭、

〔延喜式一四時祭〕供奉神今食御巫等裝束、(十二月不給)

御巫絹四匹、絁一丈一尺、綿二屯、細布六尺、紅花六斤、錢百卅文、(中宮御巫亦同)座摩御門生島東宮巫各絹三匹、絁九尺、綿一屯、細布六尺、紅花一斤、錢百卅文、

供奉神今食人等祿

中臣官一人給祿絹四匹、忌部官一人絹三匹、宮主一人絹一匹、(中宮准此)供奉御膳采女一人絹四匹、御巫絹三匹、(中宮御巫亦同)座摩御門生島東宮巫各二匹、

〔延喜式十五内藏〕御巫六月神今食裝束料、白紗一匹、赤紫絹三丈、深紫絹三丈、紫絲二絇、進内侍司、（十二月亦同）

〔延喜式十二中務〕六月神今食八姬裝束料、絹八匹、天嘗會、絹十匹、綿廿屯、（通用十二月神今食）命婦已下今良已上裝束料、絹一百六十九匹、調布一百端、貲布二百十六端、（八丈爲端）緋布廿五端、殿司燈守四人、掃司女孺十三人裝束料、緋絁八匹三丈、（人別三丈）火炬二人、黃絁一匹、（人別三丈）皇后宮定額女孺九十人裝束料、絁卌五匹、貲布卌九端三丈、（四丈爲端）今良十五人裝束料、絹七匹三丈、（人別三丈）緋布七端二丈、（人別二丈）

〔延喜式四十五左右近衞〕凡供奉六月十二月神今食小齋官人近衞裝束料、六月人別細布二丈八尺、紅花大一兩、十二月人別黃絁帛各三丈、綿二屯、細布七尺、並二百五十人請大藏省、

〔延喜式三十二大膳〕六月神今食十二月准此

小齋給食總二百六十二人、（五位已上廿人、六位已下二百人、命婦十人、女孺采女合廿七人、御巫五人、）五位已上一人、醬酢各五勺、鹽一合、東鰒二兩、堅魚烏賊各一兩、熬海鼠腊各二兩、雜鮨九兩、鯖三兩、海藻二兩、漬菜二合、六位已下一人、醬五勺、鹽五勺、東鰒二兩、堅魚一兩、熬海鼠二兩、鯖一兩、鮨七兩、海藻二兩、漬菜二合、（皇后宮小齋六位官人已下、采女已上總六十八人、食法准此、）槲三俵、箸竹八十株、

〔延喜式三十五大炊〕六月神今食

供奉小齋諸司雜給

官人已下、及命婦已上、人別米一升、薪一百五十斤、（十二月准此）

右一度食料、（人別見大膳式）

〔延喜式三十九内膳〕六月神今食料（十二月准此）

淡路鹽二升、東鰒七斤五兩、薄鰒六斤十兩、堅魚五斤、干鯛六隻、干鯵卅隻、鮨鰒煮鹽年魚醬鮒各二升、甘鹽鯛四隻、海松海藻各六斤十兩、干棗子生栗子搗栗子菱子各二升、（十二月以橘子代菱子）瓫四口、堝十口、（大四、

小六、松明八束、供奉官人二人、膳部六人、各給暴布襷一條、長八尺、

〔延喜式 四十造酒〕六月神今食料 十二月亦同

供奉料酒一斛、缶二口、大膳職所供、木綿一斤、小坏四口、小𤭯四口、匜四口、八脚案二脚、小刀二枚、平居二口、韓櫃二合、柏廿把、已上神祇官所供、

小齋料

酒一斛一斗六升、酢一升五合、酒盞二合、加蓋、窪坏九十口、加盤、瓮三口、匏八柄、酒部二人、暴布襷二條、長八尺、

〔延喜式 四十主水〕同祭 神今食 解齋御粥料

鮑二斤、堅魚八兩、和布一斤、鹽五合、堝二口、

右自内膳司受之供奉、但米用旦供内、

〔西宮記 六月〕神今食 ○中略 納言參議昇坂枕、納言東參○○○爲枕、

延喜十三年十二月十一日、昨縫殿申、有犬産、神態御服等不可供奉之狀、仍召縫殿神祇等問先例、皆曰、此御服難不御、皆供奉、仍仰大藏行御服料、令御匣殿裁縫之、此夜不御中院、付諸司云云、

延喜十五年十二月二十日、於神祇官行祭事、依縫殿引云々、設召使座、舊例不設此座、今夜依穢給座令候、有穢、但於召云云、外記召縫殿寮令進贖衾、參議已下侍從已上一々進了、即縫殿允申云、今年當三年一請之年也、然則件衾不可更返納者、散位清原樹蔭異人難非侍從、依中務輔代同預此衾、但中務丞代内舍人爲行、申預御祭仍問縫殿官人、申云、中務丞一人、錄一人并二人料衾、依省請行之、於内舍人等無預衾例者、外記司等申一條、但外記史生左右史生官掌等料、以布衾充給、供之更不執申、云云、

吏部記云、延長四年十二月十二日記云、小忌供御座等歸座之後、縫殿給贖被、但去年設枕、今夜無之

〔年中行事大概〕六月神今食

入重だゝみさふすまさか枕なといふは、神座のまうけにつきての事なり、

〔年中行事歌合〕三十三番　左　神今食　入道大納言

更ぬとて今ぞそなふる坂まくら神もぬる夜の時や知らん

○按ズルニ、坂枕ノコトハ、大嘗祭篇調度ノ條ニモアリ、參看スベシ、

〔壬生官務家所藏文書〕大膳職

進上月次神今食用途事

土鍋貳佰肆口同御冬料

明櫃參口　御筥貳口　荒筥肆拾捌口　土釜貳口

太子良加拾口　小研伍拾口　土器參佰　小器肆佰

酒坏五拾口

右依例進上如件

天養二年六月十一日　鎰取藤井友次

造酒司　請預神今食用途事

木綿捌斤　小刀貳柄　八足肆前　太子良加肆口

小壺捌口　大坏伍拾口　小坏佰口

右依例所請預如件

天養二年六月廿日　代　吉末

采女司　請取神今食用途料事

凡絹拾匹　麻拾斤　小刀拾柄　小研拾口

柏等　坏拾口

右依例所請如件

天養二年六月十一日　　御膳宿刀司方門

主水司　請取神今食種物等事

合

白米一筒　粟二筒　ツヽラハコセツ口　八足四

蔬口十口　小刀二　土器三カラ个内大一カラ个小二カラ个

手ユフニハ　青研子二　布一段　土器八口

カシハ廿枚

内膳司分

堅魚五　サヽラ口五枚　和布一把　鹽一坏

薦三把

右所請預如件

天養二年六月十一日　　官人代私重近

注進　来十一日神今食并月次用途料能米拾斛事

右備前國本司納物、毎年百五十石追年無究済、雖然有限依為納物、成下文附辨済使、敢不継取之間、口本司何治術可致其勤矣、早任注文之旨、令言上子細被下行者、何無致闕怠、仍注進如件、以解、

久壽二年十二月七日　　預藤井安時

高向國時

紀吉元

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、今夜神今食也、〇中略藏人左少辨光長〇中略參入、予依不審問遲參子

綱、答云、神今食用途、月次祭辨備調之、令占辨參行者定事也、而右少辨一切不致沙汰之間、自昨日奔走播磨國、適所濟縫殿寮構色代之由、不請取之、如此事成敗之間所遲參也、〇中略 先是辨少納言已下退座、予一身在座、稱神服闕如之由、空經數剋、召縫殿寮年預、雖處勘氣、諸國不濟、稱力不及之由、又雖語女工所、无一物之間、申難構成之由、辨仰官掌馳走東西近代公事尤以不便、神服用途、如形構出之由官掌申之由、而小忌料布又闕如云々、上卿云、不著小忌、以大忌供奉神事、无便歟、猶可令構出之、頃之又申尋出之由、皆是官掌私構也、可謂違例、〇中略 今日儀神事違例、朝家陵遲、只以之可察、

播磨國神服用途料、上卿已下列立供神座之間、雜色相具色代所持參也、又厨家沙汰人逃隱之間不居饗、

〔玉海〕文治四年七月六日庚子、神今食月次祭等十二日可被行、 八日壬寅、親經持來月次神今食御幣御卜等日時、又申仁王會用途諸國不進濟、口伺闕如、幷神今食神服供神物等年來不供、尤不便之由、兩條早可奏聞之由仰之、仰子細了 十日甲辰、親經來云、神今食神服神饌等事、雖奏聞、只有聞食之仰、無可加譴責之勅、然者事已爲闕云々、召雜掌可仰子細之由仰了、

建久元年十二月十一日辛卯、此日月次神今食也、夜半史以業來、申神今食神服闕如之由、仍忽給絹綿等、仰納殿所給也、是以可稱伊與國實知行藤原〇 所濟自納殿下給之由不可稱之由仰之、件男爲闕沙汰人之子、有便之故也、奉行辨等懈怠、言而有餘、 四年十二月十一日甲辰、此日月次神今食也、〇中略 貢實申、今日神今食神服神座闕如事、諸國可付使之由仰之、

〔勘仲記〕正應元年六月十一日、今日月次神今食解除、神事之故也云云、

彙日中沙汰條々

一神服幷小忌國々

伊與　備前　讃岐

任例可進濟之由遣御教書了

一永宣旨召物國々

佐渡　鮑六十二斤十三兩　駿河　鰹三十二斤十三兩

紀伊　同三十斤　伯耆　脂四石二升

備前　鹽二石一升　長門　和布七十五斤六兩

出雲　海松七十五斤六兩　阿波　青苔二十斤

播磨　同二十斤　三河　同三十五斤六兩

尾張　弓五十一張　三河　五十一張

越前　五十一張　因幡　四十五張

一諸司勤

修理職南殿代假屋　主水司寒氷　左右馬寮神馬各一匹

各以御教書相觸也

一大藏省幣料

笠間保　大須賀保　駿河　相模　伊豫　備中

石見　河内　遠江　三河　伊豆　隱岐

安藝　佐渡　甲斐　伊賀　加賀　伊勢

出雲[illegible]

各任大藏省切下文可進濟之由相觸了

〔康富記〕應永八年六月十日戊辰、今例月次神今食御訪二百匹、行嗣請取送此亭、請取渡使者也、〇中略

請取神今食參向外記御訪事

合貳百匹者
右所請取如件
應永八年六月九日　　　請使能益判

雜載

廿九年十二月十一日甲子、月次祭幷神今食也、〇中略今朝神今食御訪貳百匹到來了、請取書遣行秀許之間、自行秀許□□本儀者外記御訪直可申奉行職事者也、但此間儀、依便宜如此沙汰了、

〔北山抄六月二〕十一日神今食事

雖有方忌出御例天慶三年十一月、天一在酉、子三刻還御、天暦九年十一月、天一在卯、子時還御、以前可還御者、同十年十一月、丑二刻還御、天德三年十一月丑二刻還御、

鈴御辛櫃追取遣例延喜八年同十三年、行幸後、差少納言主鈴近衞將監等取遣之、

停御輿令取鈴例延喜元年十二月、乘輿至月華門之間申云、少納言未參、不得運鈴印、暫停輿、以左少將官行假爲少納言令取、

縫殿寮有穢於御頁殿令裁縫御服例延喜十二年十二月

造酒司有穢給直物例天慶四年十二月

散齋日在穢內不止神事例延喜十九年六月、天慶六年六月、供神物當日調備、

諸辨觸穢乍立令下幣物例延喜十九年六月

外記史觸穢乍立行事例天慶七年十二月

大忌近衞陣還御時供奉例延喜十一年十一月、延長二年十一月、康保三年十一月、依造式被糺仰、

大忌幕近衞次將獻盃例天慶元年六月、依無辨少納言不能進盃、左大臣云、如此時、故右大臣、圖善踏舞居、仍流其巡、又召近衞次將令進盃、是故實也、即召右中將英明左中將正明、三巡後右少辨朝綱參入、

〔西宮記六月〕神今食、〇中略散齋日在穢內行神事例、

延喜十九年六月二十六日、於神祇官被行月次幷神今食祭事云云、去二十一日、內裏有犬死穢、仍於不觸之諸司令調幣物、諸辨皆穢、然而權右中辨藤原元方、度正藏不著座、乍立庭中令下幣物、同年九

月十一日、又有此例云云

〔西宮記裏書〕天暦六年十二月九日、小一條記云、伊尹朝臣宅井、有死人頭及肋、而不知其由、參大内、今日令公卿定其穢、公卿申云、勘先例、如此之穢或七日、或不為穢、可從處分、仰云、可為七日穢、今月十一日神今食付所司令行者、

〔玉葉〕治承三年六月十一日戊戌、月次祭、〇中略近日右大將家穢、充滿洛下、仍今熊野六月會延引云云、然又月次神今食被行了、甲乙次第不分明云云、

〔江家次第六七月〕神祇官神今食

十一日以前行佛事例

天暦二年　同五年　同十年

〔百練抄五堀河〕寛治七年二月十九日、諸卿定申、〇中略十二月神今食不供晩膳、内侍已下罪名、大神宮禰宜等勘問事、

〔中右記〕保安元年六月十一日戊刻、參神祇官、依當神今食卜也、〇中略今夜主水司不進氷、誠難堪事也、大略本司正依權官不催氷歟、臨曉少々進也、

〔年中諸公事裝束抄〕六月神今食

主上赤御服　公卿束帶、袍上に著小忌、螺鈿細劒、靴、諸司東帶小忌　諸衛、靴、袍上に著小忌、蒔繪、細劒、宣胡籙、弓、丸鞆帶、近代里内より行幸ある時は、まづ官司に幸て、官司にて袍のうへにおの〳〵諸司の小忌を著する也、著する樣口傳あるべし、里内より官司に幸て、神祇官に幸する時、平胡籙を用ゐる也、

〔本朝月令六月〕十一日神今食祭事見儀式

高橋氏文云、太政官符神祇官、定高橋安曇二氏供奉神事御膳行立先後事、右被右大臣宣偁、奉勅如聞先代所行神事之日、高橋朝臣等立前供奉、安曇宿禰等更无所爭、但至于飯高天皇〇元正御世靈龜

二年十二月神今食之日、奉膳從五位下安曇宿禰刀、語典膳從七位上高橋朝臣乎具須比曰、刀者官長年老、請立前供奉、此時乎具須比答云、神事之日供奉御膳者、膳臣等之職、非他氏之事、而刀猶强論、乎具須比不肯、如此相論、聞於內裏、有勅判、累世神事不可更改、宜依例行之、自爾以來、无有爭論、至于寶龜六年六月神今食之日、安曇宿禰廣吉、强進前立、與高橋波麻呂相爭、挽却廣吉、事畢之後、所司科祓、于時波麻呂固辭无罪、何共爲祓、是言上聞、更有勅判、上中之祓科廣吉訖、其後廣吉等、妄以僞辭加附氏記、以此申聞、自得爲先、因茲高橋朝臣等、雖不敢披訴、而憂憤之狀稍在顏出、去延曆八年爲有私事、各進記文、卽喚二氏、勘問事由、兼搜檢日本紀及二氏私記、乃知高橋氏之可先、而事經先朝、不忍卒改、思欲令一先一後彼此无憂、雖未勅所司、而每臨祭事、宜知二氏、遞令先後、而今內膳司奉膳正六位上安曇宿禰繼成、去年六月十一月十二月三度神事、頗爭在前、猶不肯進、仍勅應遞先後之狀、比來頻已告訖、宜此度依次令高橋先、而繼成不奉宣勅、直出而退、竟不供奉、爲臣之理、豈如此乎、宜稽故事以定其次、兼論所犯、准法科斷者、謹案日本紀、卷向日代宮御宇大足彥忍代別天皇〇景行五十三年、巡狩東國、渡淡門、是時聞覺賀鳥之聲、欲見其形、尋之出海中、仍得白蛤、於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈、高橋祖也以蒲爲手繦、白蛤爲膾而進之、故美六鴈臣、而賜膳大伴部、檢其家記、略同於此、是高橋氏預奉御膳之由也、及輕島明宮御宇譽田天皇〇應神三年、處々海人訕哤之不從命、乃遣安曇連祖大濱宿禰平之日、爲海人之宰、是安曇氏預奉御膳之由也、又安曇宿禰等欵云、御間城入彥五十瓊殖天皇〇崇神御世、己等遠祖大栲成吹、始奉御膳者、仍檢其私記文、追注行下、筆迹殊拙、不應字奸詐之端、於是見矣、然則考之國史、求之家記、磐鹿六鴈委質於前、大濱宿禰策名於後、時經五代、口遶二百、相去懸遠、更无可疑、先後之次、事已灼然、理須以高橋爲先、安曇在後、又繼成固執僞記、臨事爭先、恣意逝去、遂不供奉、不承詔命、无人臣禮、此而不正、何以懲後、仍案職制律云、對捍詔使、而无人臣之禮者絞、名例律云、對捍詔使、而无人臣之禮者爲大不敬、又云、犯八虐獄成者除名者、今繼成所犯、准犯依律、處絞刑、令除名、謹具狀奏聞

者、奉勅宣宥其死以處遠流、自餘依奏者、官宣承知以爲永例、符到奉行、延暦十一年三月十九日、

〔西宮記六月〕神今食

天慶元年十二月十六日、於神祇官有祭事云云、欲著汁物之時、厨別當等不候、仍令預等欲羞之間、内豎大舍人等各相論云遞可取盤云云、上卿仰云、内豎奉仕殿上役、准此等事、令内豎頭奉仕、手長大舍人者可取盤者云云、加仰令奉仕之、

〔年中行事裝束抄〕神今食六月十二月十一日、新年祭ノゴトシ、

中院行幸、ムカシハアリケリ、公卿マキエノタチ、近衞司ノタチオナジ、ツボヲオフベシ、アサキクツ、大内ヨリナルトキノコトナリ、諸司ノ小忌ヲキル、大將檢非違使別當ハ、ヒラヤナグヒ、ウラニアヒタルヒト供奉スルナリ、近衞司ハ、アヒアハズヲイハズグスベシ、ミナ小忌ナリ、公卿ハ上卿一人、宰相一人、御ウラニアヒタル人ノマヰルナリ、タヾノヒトハオホミノアクニ候、行幸ナキトキハ、神祇官ニテ上卿宰相辨バカリニテオコナハル、十二日ゲサイノ御カユアリ、小忌ノヒトヒカゲヲカクベシ、

侍中　行幸供奉御湯殿人、朝衣ノ下重ヲヌギテ今衣ヲキルナリ、シタウヅヲヌガズ、アルヒハ朝衣ノシタガサネノウヘニ今衣ヲキル、

古事類苑

神祇部二十七

新嘗祭上

古事類苑

神祇部二十七

新嘗祭上

新嘗祭ハニヒナメマツリト云ヒ、マタ字音ヲ以テシンジヤウサイト稱ス、朝廷恒例ノ祭典中ニ在リテ中祀トス、天皇ノ新穀ヲ喫シ給フニ就キテ、先ヅ之ヲ神祇ニ供シ給フモノニテ、其儀大略神今食ニ同ジ、其異ナル所ハ、舊穀ヲ用ヰズシテ新穀ヲ用ヰ、幣帛ヲ頒チ、節會ヲ行フ等ニ在リ、其他齋戒ヲ嚴ニシ、忌火御飯及ビ御贖物ヲ供シ、忌火庭火祭アリ、大殿祭アリ、式畢テ解齋ヲ行ヒ、及ビ職員ヲト定スル等ノ事ハ、全ク神今食ニ同ジク、又幣帛ヲ頒チ、神官ヲ戒飭スル等ノ事ハ、新年祭ニ同ジケレバ、共ニ此ニ略シテ彼ニ詳ニセルモノ多シ、祭日ハ大寶令ニ、十一月下ノ卯日ト定メ、三卯アレバ、中ノ卯日ヲ用ヰル、時刻ハ、嵯峨天皇ノ弘仁十四年ニ、神今食ト共ニ戌ノ一點ヨリ卯ノ二點ト制定セリ、抑、新嘗祭ハ、獨リ天皇ノ行ハセ給フノミナラズ、古ハ皇太子大臣ヨリ庶人ニ至ルマデ、各自ラ之ヲ行ヒシモノニテ、太古神代ニ在リテ、天照大神ノ之ヲ行ハセ給ヒシハ、後世天皇新嘗ノ起原ニシテ、天稚彦ノ之ヲ行ヒシハ、卽チ庶人新嘗ノ初見ト云フベシ、降リテ景行天皇ノ朝ニ十一月ノ新嘗會アリシコト、年中行事秘抄ニ引ケル高橋氏文ニ載セタレドモ、日本書紀ニハ見エズ、當時既ニ十一月ヲ以テ例ト爲シヽニヤ、仁德天皇四十年紀ニ、新嘗之月トアルガ如キハ、其月ノ既ニ定レルガ如シ、淸寧天皇三年十一月戊辰ノ宴ヲ類聚國史ニ新嘗ニ載セテ、二年十一月ノ大嘗ヲ載セザルハ、此文ハ大

嘗ニ收メタリシガ、卷首ノ缺ケタル故ニ逸シタルナルベシ、果シテ然ラバ淸寧天皇ハ元年正月ノ卽位ナレバ延引シタルモツニテ、卽チ大嘗新嘗ノ一朝ノ間ニ並ビ行ハレタル始ナリ、然レドモ當時ハ、或ハ延引シテ他ノ月ヲ用キシコトアリ、用明天皇二年四月丙子、舒明天皇十一年正月乙卯ノ如キ是ナリ、而シテ用明天皇ノ新嘗ハ、或ハ大嘗ヲ謂ヘルニテモアルベシ、皇極天皇以後ハ必ズ十一月ヲ以テ行フ、其元年ノ新嘗ハ是モ大嘗ヲ謂ヘルモノカ、天武天皇二年十二月ニ、大嘗ニ從事セシ神官國郡司等ニ祿ヲ賜フコトアリ、蓋シ此大嘗ハ其十一月ニ行ハレシモノニテ卽チ踐祚ノ大嘗ナルベシ、五年ニ新嘗ノ爲ニ國郡ヲトスルコトアリ、六年十一月己卯ニ新嘗ヲ行フコトアリ、是ニ於テ大嘗新嘗ノ區別稍明ナリ、要スルニ、是ヨリ前ナルハ大嘗ノ如ク思ハルヽモノモ、其實ハ果シテ如何ナリシカヲ知ラザレバ、今ハ皇極天皇ヨリ以前ナルヲバ都テ此篇ニ收メタリ、（大寶令、延喜式共ニ新嘗ヲ大嘗ト記シ、政事要略ニ引ケル弘仁貞觀ノ中儀式ニモ大嘗トアリ、北山抄ニモ卽位ノ大嘗、毎年ノ大嘗トアリ、蓋シ此等ハ何レモ舊文ニ據リテ記シヽモノカ、續日本紀以下ノ國史ニハ判然トシテ別レタリ、猶本大嘗祭篇ヲ參看スベシ、）抑、新嘗ハ朝廷ノ大典ニシテ天皇ノ親祭シ給フ所ナレドモ、後世ニ至リ或ハ親臨シタマハザル事モアリ、殊ニ鳥羽崇德二天皇ノ朝ニハ、二十餘年間行幸ノ儀絕ユルニ至レリ、サレバ宇多天皇ハ、新嘗會神今食等ニハ必ズ中院ニ行幸シテ其儀ヲ行フベシト遺誡シ給ヒ、崇德天皇ノ朝藤原敦光モ亦上表シテ、親祭ノ事ヲ請ヘリ、而シテ幼主若クハ大嘗會以前、又物忌觸穢諒闇等ノ時ハ、多クハ出御ナキヲ例トシ、或ハ全ク停止セラルヽ事モアリ、加之朝綱ノ弛廢、用途ノ缺乏ト共ニ、祭儀モ舊ノ如クナラズ、後花園天皇ノ寬正以後二百二十餘年間ハ全ク中絕セシヲ、東山天皇ノ貞享五年ニ至リ、新嘗御祈ト云フ事始マリ、爾後毎年吉田ノ神祇官代ニ於テ此事アリ、朝廷ニテハ其度毎ニ僅ニ神饌ヲ供セラルヽニ過ギズ、次デ櫻町天皇ノ元文四年ニ再興ノ議アリシモ果サズ、翌五年ニ至リ、始メテ舊儀ヲ再興セラレテ

ヨリ、以後今ニ絶ユルコトナシ、

豐明節會ハ新嘗祭ノ翌日辰日ニ行フ、卽チ新嘗會ナリ、天皇出御アリテ、內膳司御膳ヲ進メ、太子以下群臣ニ各饗饌及ビ祿ヲ賜フ、(別ニ平座トテ略儀アリ、天皇出御ナシ、後世節會ヲ停ムル時多ク平座ヲ行フ、)其間吉野國栖ハ御贄ヲ供ジ、歌笛ヲ奏シ、治部雅樂ノ工人ハ立歌ヲ奏シ、大歌別當ハ歌人ヲ率キテ五節ノ歌ヲ奏シ、舞姬參入シテ五節ヲ舞フ、五節舞ハ天武天皇ノ朝ニ起リ、其後新嘗大嘗ノ節會ニハ必ズ此舞アリ、豫メ女御殿上人、及ビ受領等ヲ點定シテ舞姬ヲ獻ゼシム、定額四人ナリ、(大嘗會ニハ五人)然レドモ其服裝調度等何レモ自辨ニシテ、且ツ互ニ華美ヲ競ヒシカバ、其費浩繁ニシテ負荷ニ堪ヘ難ク、後ニハ事故ニ託シテ進獻ヲ辭スルニ至レリ、サレバ宇多天皇ハ、公卿及ビ女御ヲシテ互ニ輪轉シテ獻ゼシムル制ヲ定メ給ヒ、延喜十四年ニ、三善淸行ハ上奏シテ、良家ノ子女二人ヲ定メテ舞姬トシ、其用度ハ總テ官費ヲ以テ支辨センコトヲ請ヘリ、然レドモ遂ニ用キラレズ、其後冷泉天皇ノ安和二年ニ至リ、藤原齊敏等ノ上奏ニ由リテ、舞姬ヲ獻ゼシ大臣參議等ニハ特ニ年給ヲ賜フコトヽナレリ、然レドモ猶ホ費用多カリシカバ、舞姬ノ衣服ヲ其所親ニ請ヒ、或ハ院宮等ヨリ賜フコトアリ、其他ノ人々ヨリモ、衣食調度ヲ五節所ニ贈ルヲ例トセリ、又舞姬ヲ獻ゼシモノヽ官位ヲ進ムルコトアリ、舞姬ノ參入ハ丑日ニシテ、此夜帳臺試アリ、寅日御前試アリ、卯日童女御覽アリ、村上天皇ノ朝ニ始マル、何レモ其技ヲ試ミ給ハンガ爲メナリ、又寅日及ビ卯日ハ淵醉トテ、卿相雲客殿上ニ參集シテ、獻酬朗詠等ノ事アリ、次デ五節所ヲ訪ヒ、或ハ院宮等ニ推參シテ、醉舞放吟スルヲ例トス、

其他新嘗祭ニハ、節會ニ用キル白黑ノ酒稻ヲト定スルノミナラズ、古ハ齋忌(ユキ)次(スキ)ノ國ヲト定シテ、供御ノ稻粟ヲ奉ラシメタリ、祭殿ハモト神嘉殿ナリシヲ、後世ハ專ラ神祇官ニテ行ヒ、又宮內省ニテ行ハレシコトモアリ、元文ノ再興以後寬政造內裏迄ハ、紫宸殿ヲ神嘉殿代ト

シテ行ハレタリ、節會ノ殿ハ、淳和天皇天長七年ニハ内裏ニテ行ヒ、文德天皇天安元年ニハ冷然院ニテ行ヒシカドモ、此等ハ異例ニシテ、通常豐樂殿、又ハ紫宸殿ニテ行ハレ、淸和天皇ノ貞觀以後ハ、紫宸殿ニテ行フコト恒例トナレリ、天皇ノ御服ハ、祭日ハ帛ノ御衣ニシテ、據蓋試ニハ必ズ直衣指貫ナリ、職員ノ服制ハ、文武官各〻一樣ナラザレドモ、王卿以下ハ祭日ニハ靑摺ノ布袍、及ビ日蔭鬘ヲ著ケ、又祭日節會ノ日ハ、共ニ小忌ヲ著クルヲ例トス、

名稱

〔類聚名義抄　十〕新嘗ニヒナメ

〔日本書紀　一神代〕是後素戔鳴尊之爲行也甚無狀、〈○中略〉見天照大神當新嘗時、則陰放屎於新宮、

〔古事記　上〕爾速須佐之男命、〈○中略〉其於聞看大嘗之殿、屎麻理〈此二字以音〉散、

〔古事記　下〕〈○中略〉天皇坐長谷之百枝槻下、爲豐樂之時、伊勢國之三重婇、〈○中略〉白天皇曰、莫殺吾身、有應白事、卽歌曰、〈○中略〉爾比那閇夜爾、淤斐陀氐流、毛毛陀流、都紀賀延波、〈○中略〉故獻此歌者、赦其罪也、爾大后歌、其歌曰、〈○中略〉爾比那閇夜爾、淤斐陀氐流、波毘呂由都麻都婆岐、〈○中略〉故於此豐樂、譽其三重婇而給多祿也、

〔古事記傳　入〕大嘗、書紀には新嘗とあり、同じことなり、續紀廿六〈二十五丁〉には大新嘗ともあり、何れも意富爾閉と訓べし、爾閉は新饗を約めたるにて、新稻を以て饗するを云名なり、〈○中略〉元は朝家のみならず、下々までなべて爲事なり、又後世には、もはら神に祭る事とのみ思めれど、然にあらず、神にも奉り、人にも饗、自も食わざなり、かゝれば今大御神の聞食大嘗も、此意を以て見べし、〈たゞに後世の朝家の大嘗祭新嘗の事なのみ思ふは、古意に非ず、〉大てふ言を添たるは尊てなり、故後に朝家に志給ふ爾閉を大嘗とは申すぞかし、さて嘗字をしも書ゆゑは、漢國にて秋祭を嘗と云を借れるなり、〈こはしばらく朝家の嘗閒に付て借たる字なり、必しも此字になづむべからず、又大嘗新嘗は、十一月に行はせ給ふことなれども、秋に依る事なる故に、此字ならば書なり、〉又新嘗とも書る新字は、本の新饗の意を取て加へつるなり、〈漢籍にも嘗新といふことは見ゆ、〉さて此新嘗を書紀に爾波能

阿比とも、爾波那比とも、爾波那閉とも、爾比那米とも、爾比閉とも、爾波比とも、さま〴〵に訓を附たれども、皆正しからず、又嘗字ナムルともよむゆゑに、ニヒナメと云と思ひまがふことなかれ、此記下巻朝倉宮段妹が歌、又大后の御歌に、爾比那閉夜新嘗屋なりとあるを正しき訓の據とすべし、○中略さて後世には、踐祚大嘗を大嘗と云、毎年のを新嘗と分て云へども、古は通じ云て同事なり、されば書紀清寧巻に、同度のを始三丁には大嘗、後六丁には新嘗と書き、又皇極天皇踐祚大嘗をも新嘗と書き、神祇令には、其に大嘗とあるぞかし、

〔釋日本紀七述義〕嘗新嘗時

私記曰、問新嘗之義如何、答、新嘗者是新穀既熟、乃後經嘗也、謂之爾波也、今加奈比之辭者、是師說之所讀加也、即是會之義也、言是新嘗之會、

〔日本書紀纂疏上四〕新嘗者、初嘗新穀也、春秋傳曰、始殺而嘗、是秋祭名、而本朝冬時祭焉、故裁于神祇令仲冬祭條、用中卯日也、

〔閑窻自語〕嘗祭事

周公旦のつくられし爾雅に、秋の祭を嘗といふよし見えたれども、わが國には冬に嘗といへり、これは秋のみのりを冬そなへらるゝゆゑに、嘗といふなるべし、

〔禮記註疏十二王制〕天子諸侯宗廟之祭、春曰礿、夏曰禘、秋曰嘗、冬曰烝、○中略疏秋曰嘗者、白虎通云、嘗者新穀熟而嘗之、

〔禮記註疏十七月令〕是月○十月也、天子乃以犬嘗稻、先薦寢廟、註、稻始熟也、

〔名目抄〕新嘗祭（ニイナメノマツリ、シンジヤウエ、ニヒナメノマツリ）

〔節用集七〕新嘗祭

〔塵添壒嚢抄七〕新嘗會事

新嘗會事、十一月中卯日也、○中略此節會ヲニイナメマツリト申也、今年ノ初稻ヲ神々ニ供シ奉ヲ

祭神

セ給ナルベシ、御代ノ始ニアルヲバ大嘗會ト云、年毎ニ侍ルヲバ新嘗會ト申也、

〔倭訓栞前編二十〕にひなめ　新嘗の義、古事記にはにひなへと見えたり、神祇令にいふ大嘗祭にして、霜月中の卯の日に、神明に新稻を奉るの祭儀也、卯辰巳三日の間、朝は諸神に奉り、夕天皇聞しめす也、白川殿七百首に、

契りおれや神のすゞもを打はえてにひなめまつるむかしおもへば

〔令義解一職員〕神祇官　伯一人掌神祇祭祀、○中略大嘗、謂嘗新穀以祭神祇也、朝諸神之相嘗祭、夕者供新穀於至尊也、

〔簾中抄上年中行事〕十一月中卯日、新さうのまつり、

〔伊呂波字類抄志諸社〕新嘗會本朝事始云、磐余彥天皇代、中臣遠祖、天種子命、以奉仕神祇、名神魂神、自迎大御食持命、奉供神嘗會之始、

〔榮花物語三十二根合〕しむしやうゑの日、雨のふりくらすに、

日かげもみえずくもるけふかな　源少將

あまてらすとよのあかりとおもへども　かうしやう

〔年中行事歌合〕三十一番　左　新嘗會　頓乘

いねる秋納しいなぼ手向るぞ年豐まるはじめなりける

新嘗の祭と申は、今年のはつ稻を神に奉らせ給ふ也、代の始には大嘗會といひて、年毎のをば、新嘗會と云也、

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

新嘗祭奠幣案上神三百四座並大○中略

右中卯日、於此官○神祇官齋院官人行事、祭司不供奉、

○按ズルニ、新嘗祭ノ祭神三百四座ノ名稱ハ、社格篇官幣大社ノ條ニ具載シタレバ參看スベ

シ、

〔令義解二神祇〕仲冬下卯大嘗祭（謂若有三卯者、以中卯為祭日、不更待下卯也、）

○按ズルニ、此處ニ大嘗祭トアルハ、卽チ每年ノ新嘗祭ヲ云フナリ、

〔拾芥抄中年中行事末〕十一月二日、奏神嘗會稻文、三日以前、點定五節舞姬、中丑日、五節舞姬參內、帳臺試、中寅日、御前試、中卯日、新嘗祭（神祇官）童御覽、大殿祭、中辰日、豐明節會、

〔簾中抄上年中行事〕十一月中丑日、五節のまつり、丑二あれば下の丑、帳臺のこゝろみ、中寅日、御前のこゝろみ、中卯日、新さうのまつり、わらは御覽、中辰日、せちゑ、

〔年中行事秘抄十一月〕五節舞姬事

十一月有二丑年、可用上哉又可用下否事、

康平元年十一月有二丑（廿二日己丑五節參內、下丑也、）

同三年十一月有二丑（廿二日癸丑五節參內、次第祭等用次口）

保延四年十一月有二丑（十八日辛丑五節參內、下丑也、）

〔玉海〕治承三年十一月十一日乙丑、此日五節參入也、○中略抑五節參入ハ中丑也、而有丑二之時、或用上丑、或用下丑、是用新嘗會（用中卯、）前丑之故也、

〔仲資王記〕元久三年十一月十二日己丑、五節始、今度改用上丑歟、

〔續史愚抄桃園〕寶曆五年十一月十日己卯、此日被行新嘗祭、（不被用式日、未知其故、）

〔續史愚抄後櫻町〕寶曆十二年十一月九日丁卯、此日於神祇官代有新嘗御祈、（式日依當先帝（桃園）御月忌、被還者、）權大副二位（兼雄）奉仕、奉行藏人左中辨俊臣、

〔年中行事秘抄〕諸祭剋限

六月神今食

國郡卜定

戊一點御齋院、（十二月月寅）寅二點渡宮、（十二月月卯）卯一點宮内神祇候延政門、（十二月辰一點）二點叫門參入、祭御殿、（十二月同）

十一月新嘗會（十二月神今食同〇中略）

以前右大臣宣、永以爲例、

弘仁十四、十二月廿八日、　少外記都宿禰廣田麻呂奉

〔延喜式宮内三十一〕凡新嘗祭所供官田稻及粟等、每年十月二日、神祇祐史各一人、率卜部、省丞錄各一人率史生、共向大炊寮卜定應進稻粟國郡、卜了省丞以奏狀進内侍、内侍奏了下官、官卽仰下、

〔延喜式大炊三十五〕六月神今食

稻八束、粟四束、（用官田稻粟、春儲付神祇官、新嘗准此、〇〇〇）

〔日本書紀天武二十九〕五年九月丙戌、神官奏曰、爲新嘗卜國郡也、齋忌（齋忌、此云踰既）則尾張國山田郡、次（次、此云須岐也）丹波國訶沙郡、並食卜、

〔類聚符宣抄四〕太政官符民部省（外）

應進上新嘗會供御稻并粟事

稻山城國葛野郡　粟同國綴喜郡

右得神祇宮内大炊等官省寮解偁、件供御稻粟等卜定如件者、大納言正三位兼行中宮大夫藤原朝臣顯忠宣、奉勅依件行之者、省宜承知依宜行之、符到奉行、

左少辨　右少史

天曆六年十月六日

〔宮主秘事口傳〕十月一日大炊寮申新嘗祭御稻田

本官公文史生（内記司相兼之）書進卜串之間、宮主書付、郡并宮主中臣官人位署、

今日大炊寮申、長田稻田御卜事、卜串進上之候、郡可爲石川之由申候、中臣者權少副爲理ヲ可被載候哉、以此旨可有御披露候、宗兼恐惶謹言、

應長元年十月二日　　左衞門尉紀宗兼

進上　刑部左衞門尉殿

大炊寮

卜定新嘗會供御拔穗御粟國郡等事

河內國石川郡

供御拔穗參拾束

山城國宇治郡

供御粟參斛

應長元年十月二日

宮內省、正六位上行少允、正五位上行頭兼大外記博士伊與權介中原朝臣師古、正六位上行少丞中原朝臣景治、

神祇官、宮主正六位上卜部宿禰兼雄、從五位上行權少副大中臣朝臣爲理、從四位上行權大副卜部宿禰兼夏、

頭書 宇治郡每年ニト合也、石川郡若江郡ハ、ウチカヘ〱ト合也、正文ニハ郡名ヲ書付テ返訖、案文書止畢、

卜串ニハ河內國ト書之、其下ニ宮主者石川郡ト注ニ書付也、石川郡ト若江郡ト打替テト之、今年石川郡ナラバ、明年ハ若江郡ト可注付也、又卜串ニハ山城國ト書之、其注ニ宮主者宇治郡ト書付之、宇治郡者每年之卜合也、無儲郡也、又年號月日小允大炊頭宮內省神祇官マデヲバト串ニ書之、

中祀

宮主中臣卜部官人此三人之位署ヲバ、宮主書加之、卜部官人者、宮主父若者舎兄ヲバ書載之、非此分者不可書載之、只宮主位署許可書也、中臣官人者、以在京之人書載之也、

〔光臺一覽 一〕大嘗會と申は、御卽位の後の初ての新嘗會の事なりと心得べし、翌年よりは常の新嘗會なり、其わけの節會を豐の明の節會と申候なり、されば毎年新嘗會に被用米は、城州久世郡笠置の近所に和泉川有、其邊りにみかの原とて大鄕有、此所に下肥等不用に作り立たる米を被用御事なりと傳へ承りし、尤水上の田を用ひ稼立る事なれ共、畔毎に尺四面の榜示を立、神供米田とまるせり、

○按ズルニ、此ハ近世新嘗祭再興以後ノ事ニテ、古ノト定トハ少カ異ナレドモ、神供田ノ事ナルヲ以テ、此處ニ載ス、

〔延喜式 一四時祭〕凡〈中略〉新年、月次、神嘗、新嘗、賀茂等祭爲中祀、

〔令義解 二神祇〕凡〈中略〉三日齋爲中祀、

〔年中行事秘抄 十一月〕新嘗會以前、僧尼重輕服輩不參內事〈近代例〉

〔日本紀略 四村上〕康保元年十一月七日己卯、今日東宮自內裏出御左近衞府、新嘗會之間依重服也、

〔吉記〕治承四年十一月十六日甲子、服暇者、新嘗會以前參內輩可憚、被尋先例於外記之處、永曆元年權中納言實定、藏人皇后宮大進長方被下除服宣旨、五節之間出仕之由勘申、早可參入之由爲藏人辨行隆奉依被仰下所參內也、

〔建內記〕文安四年十一月十五日癸卯、新嘗祭也、權右中辨親長爲卜合之處、家中有憚神事之人、〈老母爲母服云々〉旁難治、仍相語右中辨、昨夜俄始神事、可爲三日齋、而一日齋間所見及也、但不可爲後例、

〔後中內記〕享保二年十一月十四日、禁裏御神事觸有、兩傳よりも予方へ同前也、十五日晚より十七日朝迄、新嘗會御神事之由也、

〔續百一錄〕延享元年十月卅日、日野家參候觸左記、

口狀

來月廿四日、就新嘗會、從卅日晩御神事、從來月廿二日晩至廿五日巳刻御潔齋候、重服幷法中者、到廿六日則可被憚事ニ候、此旨爲御心得申入候也、

十月廿九日　賴胤

通兄

滋野井侍從殿〇中略

一來月廿四日、就新嘗會、從廿三日暮六ッ時至廿五日朝五ッ時、佛事類之鐘之音停止之事、

一從廿四日朝六ッ時至廿五日朝六ッ時、御築地之內、僧尼法體之輩、幷不淨之輩、往反停止之事、

但其形俗體にこしらへ候て穩便に往反候分者、不可苦候事、

三年十月廿八日、東園樣ヨリ口狀、來月廿四日就新嘗會、從今月廿九日晩御神事、從來月廿二日晩到廿五日巳刻、御潔齋候、重服幷法中ハ、到廿六日可被憚事ニ候、仍爲御心得申入候也、

口狀、來月廿四日、就新嘗會、從明廿九日晩御神事、從來月廿二日晩至廿五日巳刻、御潔齋候、重服幷法中ハ、到廿六日朝可被憚事ニ候、仍爲御心得申入候也、

口上覺、來月廿四日就新嘗會、從廿三日暮六時到廿五日朝五ッ時、佛事類ノ鐘ノ音停止ノ事、從廿四日朝六ッ時到廿五日朝六ッ時、御築地ノ內、僧尼法體ノ輩、幷不淨ノ輩、往反停止ノ事、但其形俗體ニコシラヘ候テ、穩便ニ往反ニ候分、不可苦候事、

右口上覺、火用心ノ儀、常々可被仰付候得共、此節御神事ニ萬相成候間、別テ堅被仰付可然由、各迄可申入ノ旨、兩傳被申付、如斯候以上、十月廿八日、

十一月十九日、口上、廿四日、新嘗會ノ節、御非役ノ御方御家來、平唐門ノ內ヘ入候儀、可爲停止事、此

供忌火御飯及御贖物

皆可被仰付候事、

〔延喜式十五 内藏〕凡毎年六、十一、十二、三箇月、自一日迄于八日并八箇日、御贖御輿形覆料紫茾汁染絹四尺、毎度行神祇官、(中宮同此)

〔北山抄十二 十一月〕朔日供忌火御飯事

同日神祇官始奉御贖事(起一日盡八日)

○按ズルニ、忌火御飯ヲ供ズル式ハ、神今食篇ニ詳ナレバ、此ニハ略ス、

〔小野宮年中行事十一月〕朔日内膳司供忌火御飯事

同日神祇官始奉御贖事(起一日迄八日奉之)

〔神祇官年中行事十一月〕一日供御贖物(至八日)

〔元亨四年年中行事〕十一月新嘗祭以前僧尼重軽服人不可參內事　一日甲申、忌火御飯、御贖物、

〔建武年中行事〕十一月一日、忌火の御膳御あが物六月のごとし、

〔左經記〕寛仁元年十一月一日乙未、早旦供忌火御膳、依宇佐奉幣事、月來御精進也、仍有定、忌火御膳同用精進物、

〔中右記〕寛治三年十一月一日、可有日蝕之由道言能算共勘申、而雖天晴無其蝕、○中略又曉更供忌火御飯、是依恐日蝕也、　十四日、節會如例、　八年十一月一日己亥、神祇官供御贖物如例、(殿下依軽服、付內侍所奉也、)　十八日、酉時許著小忌參內、節會御裝束如常、

〔伏見院御記〕弘安十年十一月一日戊子、自今夜神祇官供御贖物如例、自今日迄新嘗會□□　二日己丑、御贖物如昨、　十六日癸卯、今夜新嘗會、內侍參向、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月一日丙申、忌火御飯、陪膳左頭中將隆夏朝臣、役供藏人中務丞源重仲(一献也)云々、出御有無可尋、　廿日乙卯、今日新嘗祭也、

祭式

〔康富記〕嘉吉二年十一月一日戊午、忌火御飯御贖物等事、依御不豫不可有出御、先例爲如何哉之由、被尋御兩局清史等之處、不得所見之由各被申之、仍殿下〇藤原持基御意見云、雖不出御、可被供之條不可有子細、且有例候樣被思食之由被計申之、然間忌火御飯御贖物等、雖不出御、如例年被供之云云、

廿二日己卯、新嘗祭也、

〔公卿補任〕櫻町元文五年十一月一日、供忌火御飯、依日蝕、夜陰被行之、陪膳公文朝臣、〇小路姉　廿四日、新嘗祭、再興

〔友俊記〕寛延三年四月廿三日、櫻町〇櫻洞登霞、　十一月一日御禊巫子大膳職久弘妹、齋止去年今年勤仕、依諒闇無出御、贖物行事官春清、於東庭設之、巫子自庭上進行云、同月十六日新嘗祭被行之、

寶曆元年十一月一日、御禊巫子類子、十一歲少外記千俊之女、　十六日、新嘗會、

〔續史愚抄〕桃園寛延四年〇寶曆元年十一月一日甲子、供忌火御飯、陪膳藏人頭左大辨俊逸朝臣、或作藏人頭左中將隆義朝臣、誤歟、次供御贖物、　十六日己卯、新嘗祭、

寶曆十一年十一月一日乙未、供忌火御飯、陪膳藏人頭右中將宗濟朝臣、次供御贖物、陪膳女房、

〔續史愚抄〕後櫻町明和七年十一月一日癸卯、供忌火御飯、不御、陪膳藏人頭左大辨紀光、次朝偷供御贖物、有出御、陪膳女房、　十三日乙卯、新嘗祭、

〔公卿補任〕後桃園安永六年十一月一日、忌火御飯、陪膳資矩朝臣、〇日野　十七日、新嘗祭、

〔玉海〕建久二年十一月一日丙午、宮〇後鳥羽中宮任子御方供忌火御飯、自晝御座方供之、如旬御膳、早旦供也、

〔明月記〕建仁三年十一月一日、早旦參東宮、勤仕忌火陪膳、上御帳間格子、舁臺盤一脚、供折敷物一前、又有盤盤、供了撤之、藏人不參、

〔九條年中行事〕十一月中卯日新嘗會事庭務

早旦供御湯殿、戌剋以前應齋者、潔齋參入内裏、著青摺、不合御卜之親王公卿、及諸司候於大忌幕、時剋天皇幸神嘉殿、不稱警蹕、王卿不著軾、是供庭務也、少納言率主鈴大舍人等候驛鈴、御輿出陰明門之間、候大忌幕之親王以下及諸司等、皆立於各幕前、註王卿立北面西上、御輿駐於殿南階上、御輿長等相扶而候、掃部寮敷筵道、

此間小忌王卿立於西炬火屋南方、天皇降輿、入自南庇西戸、近衛開南中門、左右近仗候南階東西、(左近西、右近東、)小忌王卿就座、先是中務輔率侍従候座、外記史等同在座、近衛開門、主殿寮先設御湯殿於寝側、天皇就之、中務丞入安版位於前殿、(見近代之例、不必置、)小忌王卿率弁少納言侍従等、出自掖門、立於南中門西掖、大舎人叫門、闈司就版位奏曰、御畳参入止其申官姓名等(親王以下参議以上)叫門故爾申、勅曰、萬都禮、闈司傳宣云、姓名等参入云々、(是式文所指也、今見年来之例、無勅答、但闈司傳宣如式、)親王執笏、入自中門外、昇於南階、跪於神殿戸外、掃部官人傳取、次納言参議等共昇坂枕参入、侍従以下大舎人以上、昇御畳参入、先是左右次将各一人、於壇下各解兵具、登階掖昇殿、取神殿南戸東西扉、而監鋪御畳、待供了之間初入之王卿、及侍従等分立於階東西邊、事了引還出、(供奉之間、帶衛府公卿脱兵仗、但後者猶著也、欲著座之時又帶之、)亥一刻、所司供夕供神物、次第行事具見於内裏儀式、主殿寮又供御湯殿、丑二刻供曉供神物、撤殿了大舎人叫門、王卿以下昇出御畳等、如入儀、了王卿入自西掖門、經屏幔南、如初列立於西炬火屋南、主殿寮進御輿、天皇還本宮、御輿出中和門之間、近衛次將問之、大忌親王以下立幕前名對面、還御之後、於南殿前左近次將問之、各々名對面如常、(中略)○又還御之間、近衛大忌陣、或時相副於小忌陣祗候、是已違式文也、被糺仰之由、見延喜十一年十二月十二日、延長二年十一月廿一日御日記云々、

〔政事要略 二十六〕十一月中卯日新嘗祭事

入夜之後、卜食諸司著日影蘰等、天皇未御中院以前、大忌親王公卿自陣座經階下著大忌幄座等、小忌親王納言参議起陣座、於便所著同摺衣蘰等、候宸儀、(帶衛府者、不論大忌小忌、著弓胡籙等候、)鸞輿經月華陰明兩門、御中院、(不著陣)陣列等如常儀、(王卿列御前)乘輿入中和門之間、大忌親王公卿起座列立幄艮角、(西上北面、乘輿入門之後、還著本座、)天儀欲御神嘉殿間、小忌王卿皆列立西炬屋北邊、(東面北上、)左右近衛陣引南階東西、天皇御神嘉殿、畢親王以下著西屋、(納言以上前東北戸、参議以下自東南戸出入、若納言不卜食者、参議二人、一人著納言座行事、若事可及大忌、差外記令申大忌上卿、)弁少納言中務宮内輔侍従(中式云、四位一人、五位二人、)外記史中務丞録内舎人(中式云、内舎人四人、)官掌召使等各著座、次供神物、弁備諸

司具足、御湯沐畢、亥二點近衞開門、左右近衞亞將各一人、於南階左右壇上、解脫劍度、昇殿、居南戶左右、御寢御帳、次大舍人叫門二聲、闈司自南門(據在門擬座)就版位奏申、(親王納言姓朝臣、參議其名朝臣等、疊中給中、)稱唯傳宣、大舍人稱唯、先是開門之比、小忌親王以下起座、出自西掖門、至南門前、(所司撲置神座於門前棚上、帶劍之者供奉之間、解脫劍度、但衞府者、雖把笏不脫緌之、)大舍人退去之後、先親王執打拂筥、納言參議相對昇坂枕、(上臈立西、若親王不參者、納言相代執打拂、參議持昇坂枕、)辨少納言中務宮內輔侍從內舍人相共昇神席、一々進神殿、(取轉敷之)參議以上自殿還下、列立南階西掖、六位以下更還昇進疊、供了、六位退出、次親王以下列退出南門外、經掖門還著本座、(帶劍之者、更亦著之、)次諸司供神膳、須之撤去、其儀具式文也、丑二點(若子)供曉膳、撤去畢後、近衞開門、(左右等亞將如初候戶掖、)大舍人叫門、闈司傳宣、大舍人稱唯之間、親王以下入南門、撤打拂坂枕疊等、參議以下自掖門還入、(帶衞府、并著劍之者、此間撤笏、更著劍度、)候天儀、如初儀、乘輿出中和門之間、大忌參議以上起座列立如初、于時副御輿近衞亞將問云、誰(曾、左近衞亞將候問、)大忌王卿依次稱名、乘輿至南殿、天皇入御之間、近衞亞將問云、誰曾、小忌參議以上名對面、畢各各分散、(王卿或作著狩衣袒出、衞府之者、於便所解脫劍度、)

〔江家次第十 十一月〕新嘗祭(中院儀)

上卿奉勅仰外記催諸司、仰裝束司奉仕裝束、前一日、○中略藏人頭御厨子所別當並可供奉御湯、○中略當日○中略供忌火御湯殿、(早旦云云)戌剋殿司供替忌火、(在仁壽殿露臺、不合御卜者、此後不昇殿、)○中略藏人催御物等取物內豎女官等、仰內藏寮、令持御物、設御輿於日華門、(掃部敷下敷、有執物、)戌一點天皇御南殿、(著帛御衣、無文純方玉帶、)近衞次將等向日華門、(左近出自敷政門、右近自階下、率御輿長等、向日華門、)內侍持璽劍等立左右、小忌王卿列庭東邊、倚御輿、(左近立右方、右近立左方、公卿中將、若大將爲小忌者、雖列副御輿、)掃部官人敷筵道、女官豫持大刀契、候殿西南緣、(四條記、契櫃并鈴櫃持候如常、但大刀不候云云、貞信公口傳、亦大刀不候云云、)左右將監昇殿昇下、(大舍人持云云)主殿官人取御輿輒、(判官以上、)內侍進御劍、乘御、(諸衞不稱警蹕、)內侍進御璽、東豎取御插鞋、御輿長等持御輿、次將等立直王卿前行、(下藏人爲先、次少納言外記等在其前、近例不供奉此列、)女官降自西階扈從、御藥陪從、所衆、并御厨子所等依例祗候、經月華門出

陰明門、大忌王卿立幄北、(西上北面、件幄在中和門東西南掖、先是大忌王卿自待賢門入、經春華門、件事、或自左仗經階下向之、衛府公卿皆帶弓箭胡籙、大將檢非違使別當平胡籙、西條記云、諸司諸衛皆立幄前、件公卿座勤盃、辨少納言、大臣參時鋪座、但位取縁構、)座入御中和門、左右近衛各一人開中門、(迫入自被門開之、)小忌王卿列立西炬火屋北、(北上東面、四條記、列立於炬火屋南云云、)侍御輿於神嘉殿南階、(昇御輿階上、資子由、見九條殿天慶三年記、井四條記等、近代御輿居於階前地下御、此間左近陣右、右近陣左、)宸儀降輿、入自南廂西戸、(母屋南西戸御、西廂二大床子、御輿居西廂、)小忌王卿著西屋座、(西屋北壁前設親王座、西面南上相對設納言參議座、其南絶席設辨少納言等座、三列、中務宮内等輔五位内記同著北座末、侍從東廂北三間、設外記史中務丞録内記内舍人等座、造酒司候巽角南妻、弘苦為侍從厨家候所、)官掌召使等同著酒司座、(東上北面、以上侍從厨家辨備理上、)納言以上用東北戸、參議以下自東南戸出入、(參議經侍從座末可著、)若納言不卜合者、參議二人著納言座行事、若事可及大忌、差外記令申、

神嘉殿東南有四間屋、(南方神祇官辨備供神事、中國大嘗計度供神物、北妻宮内采女等祗候、)南闇前立臺、(其親如中取、面可立門中、)積神座、(中和門外北掖殿近衛事、)主殿寮供御湯、縫司供天羽衣、次御湯殿、次闈司就版、(無勅答、近代又無版、)開門近仗陣階下、小忌五位以上掃部官人執神座等參上、(納言執打拂筥、參議與辨昇坂枕、辨在西云云、自餘昇御帖、四人昇短帖、六人昇長帖云云、以上出自右掖門、立南中門西掖御輿東邊、先洗手、帶劍者解之、只把筥、衛府人解弓箭、御等不放劍、假播箭、)左右次將各一人、脱兵具昇開神殿南戸、納言以下昇自南階、跪於戸外、神祇官人候戸内、傳取供之、此間王卿以下暫立階東西、公卿立西、供畢引還復本座、次將退下、近衛閉門、内侍率縫司、供寢具於神座上退出、(御衾也)

亥一剋、采女付内侍申時至、縫司供神事御服、内藏司供饌、(檢式可令引羅御額、面引羅御巾子給、)主水供御手水、(女藏人傳供、近代藏人供之、)宸儀開中戸入御東方、(入御之後閉戸、件戸内事、攝政見之、關白不見云々、)經神座北邊、著神座以東御座給、(已後事等在別)事畢宸儀還御所、内侍撤寢具、

丑一剋、采女奏時、(作法皆如夕、)采女申御膳平供奉由、(進殿南西戸申之、聞曰、アサメヲセ、トリ夕晩乃御膳平久供奉止申、)勅答與之、次改御衣、近衛開門、闈司奏撤御帖等准初儀可知之、王卿入自西掖門、經屏幔南列立炬屋南、寅一剋、還宮出中和門間、左次將問之、(謹皆)大忌王卿侍從稱名、御南殿後、次將問名謁、(謹侍留々)加小忌公卿名謁、未還御間神祇官供奉御殿祭、明旦供解齋御手水御粥等、其後大忌侍臣等參入、

同祭神祇官儀

依無中和院行幸、於神祇官行之、○中略

戌一剋、上卿以下著、辨少納言先參、著南門外西掖屋行事、上卿參後可著座、近例不必著件屋云云、無實時或立幔、外記置式筥、或申代官使部申時、神祇官人申供神物辨備了由、亥剋王卿以下各起座向神殿、著劒之人、於便所暫解從事、於神殿南幔門外洗手、所司設之、笏者猶持、到役時揺之、著小忌衣、付日蔭縵等、列立御棚東邊、上卿執打拂筥參進、參議與辨舁坂枕、少納言爲辨上﨟者、與少納言可舁歟、參議舁東辨舁西、少納言侍從以下舁御疊、次第到南戸、付掃部官人供之、待供畢間、王卿以上暫立南庭、上卿參議立西、辨以下立東、供畢各還著本座、縫司供寢具於神殿、諸司供神膳、儀同

先男官八人

膳伴造一人　釆女朝臣二人　宮主一人　水部連一人

水部一人　典水二人

次釆女十人　次內膳典膳　次膳部六人　次酒部四人

次神祇祐以上一人、史一人、

宮內丞　錄

供奉件事、件人々參不慥可尋、供神御衾等類、仰史能可令催供、畢撤御膳、撤寢具、公卿座勸盃、侍從厨別當少納言者、不參者、他少納言候座勸之、不著履、自座上往反

一獻少納言　二獻辨少納言

著膝突勸之如恆、五位取繼酌、辨依參議目相進受之返座、

丑一剋供曉膳、先供具、

頃之曉膳畢撤之、次撤寢具、王公以下參上、撤打拂筥坂枕帖等如進儀、事畢退出、釆女參內裏、於朝餉

方中夕晩御膳平安供奉由、

展衾　闕

以上近代不見

〔年中行事保臣所傳加茂氏人〕十一月卯日新嘗祭事内掃司著中院廳殿辨備神膳

中院行幸事

大忌王卿著畳、小忌王卿著當色著陣、入夜殿司炷持忌火御燈、此後不合卜之人不昇殿主殿寮儲御輿出日華門、次昇立案机於南殿西第二間簀子、戊刻天皇御南殿、内侍執劒璽相從、命婦藏人各二人相從、尋常唐衣口濃次出御於御帳前、内侍右左左次右近次將向日華門、次小忌王卿列立於南庭、次左右引陣、次少納言立於長樂門橋前、次左右近將監昇案机、次掃部寮敷小筵、次寄御輿、次主殿撤御輿帷、次乘御、置璽劍如常璽王卿前行女房下自西階扈從、殿上侍臣在其後、經月華門入御自中和門、左右近衞開門、大忌王卿立於幕北、小忌王卿列立於西炬火屋北、寄御輿於神嘉殿南階下、次降御入自南庭西戸母屋南面戸、御於西隔寢所、次近衞陣階下、左四右東次小忌王卿著座、次近衞閉門、次主殿寮供御湯、女官取下湯、次張蓋、次取御湯、主殿官人瀆鼠入手樋口三度次取蓋、次御湯、殿人四位五位中一人六位一人用山藍卿後以右手攪合、次奏御湯取畢由、次縫殿寮供天羽衣以下御、作者御帳下御次撤御背、次上御、次奉御明衣、脱捨木御明衣於寮中次供御唐匣御泔坏御裝束等、理髮人取之、入自西殿西北戸、件御髮寮主殿也、鏡司入柳筥進之、又加御櫛、代著御髮中、入柳筥、近代御髻中以下次内藏寮供御幘、入御土高坏居主上取之引廻於御巾子結於其後、結片次供御手水、理髮人供之次開門、次大舍人叫門、次闈司奏、無勅答次近仗陣階下、次上卿以下供神座、左右將褰帳次掃部寮官人二人入自南戸、取御座置殿内、以北置南次掃部官人、先以六尺帖四枚敷於殿中央、南北妻二行並敷之、但南二枚有緣次以一丈二尺帖二枚重鋪於其上、二行並敷之、有緣次以九尺帖四枚重敷於其上中央、上二枚有緣、下二枚無緣以上帖十枚者短帖也、短帖者席一枚、薦一枚也、以白布爲緣一其上中央敷八重帖一枚、八重帖者席一枚、薦七枚也次供坂枕、插於八重帖南端下也次供几、入御筥、件几者置於八重帖東一行置之次鋪短帖於神座東、頭東面次鋪半帖於

其上、(件中臺隸設於東戶外、)次閉神殿戶、次内侍率縫司、入自殿北戶、供寢具、(件御衾入隸置、候於北戶外、臨時同蓋取出隸置於神座上、)次采女付内侍奏時、(亥一)次開中戶、(執柄人開之、有故障之時、内侍開之、)次寢儀執御笏入御、次閉中戶、經神座北、著御東口帖、(東面小選)次供神膳、次八人采女幷高橋等捧神食薦、更北行向南列候、次陪膳(第一采女也)取神食薦鋪於短帖上、(東西妻短帖南端數之)留候於戶內、(東邊)次後取(謂第二采女也)取御食薦傳授於陪膳、陪膳取之敷於短帖上、(南北妻短帖西端數之)次采女取於御箸筥授陪膳、陪膳取之居於御食薦上西方南第一、次采女取葉盤筥授陪膳、陪膳取之居於御箸筥北、次取御飯筥置之於御食薦上西方南第一、次取鮮物筥置之於御筥之北、次取干物筥置之於鮮物筥之北、次取菓子筥置之於干物筥之北、次取和布羹坏置於平手筥之北、次取鮑羹坏置之於和布坏之北、次采女等右廻歸列居於戶外、次陪膳始自御汁物及于御箸筥、一々解木綿開蓋、(件蓋者、置於御食薦之北之八重帖上、汁物高器北、皆重置之、汁物器蓋相同重之、)次陪膳取御箸立於御飯幷鮮物干物菓子汁物(和布羹)之上、次陪膳以兩手取平手一枚奉之、天皇以左手受之、以右手取箸盛飯三箸畢、給陪膳、陪膳取之置於神食薦上、(二行、自東置之、先北、次南、)次陪膳亦取平手奉之、但第二度以後、陪膳以左手受天皇所給之平手、以右手奉、如此十度、(每度三箸口御飯置之、重置之、但神今食五度、)次陪膳又奉平手、寢儀取之、取生物上所立之箸、盛鮮物、(每種各三箸)次取干物上所立之箸、各盛加給、如初、可給陪膳、陪膳取之、每度取汁物器所立箸、次加盛汁物、(先加和布汁、次加鰒汁、)重置於神食薦上、御飯葉盤、如初總十度、(神今食五度)次陪膳又奉平手、寢儀取之、取菓子筥上所立箸、盛菓子、(每物三箸、盛之如初、)凡十二度、(神今食六度)陪膳取之、重置神食薦上、御采平手如初、但六度葉盤、第十二度葉盤者中央、次陪膳目第二姫令供酒、第二姫執瓶子來授陪膳、陪膳執本柏盛御酒奉之、寢儀取之、灑於神食上、(其本柏者、使置於神食薦上、)總四度、度別易瓶、(白二度、神今食二度、)次第二姫取御粥坏參入授陪膳、(采也)陪膳取之置神食薦上所置之葉盤東邊、次亦御粥坏授陪膳、陪膳取之並置於先粥南邊、次陪膳取先所立之御飯筥以下之五箸、收之於本筥、次又取所殘之箸一立於小椎手御飯之上、寢儀拍手、口唯執件箸嘗給三箸、(餘味不嘗御)次采女目第二姫、第二姫於外取陶器、入御酒參入授陪膳、陪膳取之奉之天皇、度別拍手、口唯頗位頭飯御

總八度、(神今食白四、□□四度、)次陪膳取、先所開置之蓋、各如本掩給、如初、始自平手至御粥一々授後取、後取手如初授於次々采女、次陪膳取御食薦授於後取、次又陪膳取神食薦推掩左右端捧持退出如供儀、陪膳欲取神食薦之間、私祈曰、先可挾給之物乎、後爾挾給比、及諸乃咎有トモ神直保比大直保比受給へ、次二姫供御手水如初儀、此間采女等侍御下水、畢北向而候、次采女退出如初儀、次主上起座、右廻歸於寢所給、次到丑一剋采女奏時、其儀同夕、次供御手水如夕、次入御於神殿、次采女供御手水、次供神膳、其儀同夕、畢還御於寢所、次采女進於南戸下申云、(采女參入時、藏人頭開)戸、采女水取、夕曉乃神乃御膳無事久無故久供奉ト申、(新儀式無神字、又無事字、無故之字云々、)勅答云、好、采女稱唯還却、(無行幸時、采女於朝餉西緣奏之、宜儀可著直衣給上、)次內侍奉、縫司撤寢具、次改著御衣帛、次闈司就版奏、次開門、次王卿參入撤神座、次寄御輿、其儀如初、(下壇)出御、自中和門之間大忌王卿立幄前、左次將問曰、誰(曹、暫可御輿乎、)待、王卿各稱名、經本路至南殿、左右近衞終夜神樂、猶副御輿不休、唱神樂歌、(千歳千歳歌、)留於月華門、侍御輿於南殿、小忌王卿列立於庭前如初、下御之後左次將問曰、誰(曹)、小忌王卿稱名、次入御、(內侍取御璽、候前發如常、)

〔年中行事秘抄十一月〕新嘗會事

采女於南戸申云、(采女參入時、藏人頭開)采女水取夕曉乃神御膳無事久無故久供奉ト申、勅答之後、采女稱唯還却、無行幸之時、采女於朝餉西緣奏之、宜儀可著直衣給、

〔公事根源十一月〕新嘗會　中卯日

新嘗祭は神今食におなじ、ひらでのかず十三なり、其外はかはらず、是は今年のはつ稲を神に奉らせ給ふ義なり、代の始には大嘗會といひ、年ごとのをば新嘗會と申也、卜食の人々摺衣日陰を著す、

〔友俊記〕新嘗會は、當日神嘉殿御せうぞくを奉る、夜に入て小忌の御燈を供す、次に納言以下西の舍代の座につく、(略供)納言以下第一の間北上西面、第二の間參議北上東面、次少納言東面、次に辨

北上西面（少納言卜弁相對座）次外記史土廂の座につく、東上北面、各入幔門著座す、次に納言召使をして軾、次に納言召使をして外記を召す、次小忌の外記座をたち軾にまゐる、（先つ揖す）次に納言諸司の具否を問はしむ、外記具するのよしを申、本路を經て復座、次納言作座かへり見る、弁内侍參否をとはしむ、弁候のよしを申す、又納言供物具否を問はしむ、弁具のよしを申す、次掃部寮使部代腋門に入、中央蹲踞時を申、（亥のひとつといふ）此間掃部寮官人二人手水畢進神嘉殿の幔に、（此儀依天晴不用掃部官人）次納言巳下座をたつ、幔門に出、（自上起座）首手水之儀あり、次納言打拂はこ、參議少納言坂枕をかく、弁外記史八重疊を舁さん上、（此間掃部官人褰幔、納言參議列立階西方、北上東面、）弁外記史歸來列に加ふ、上首より本路を經て復座、（暫座にあり、密に座を起、暁御膳の時、各密々復座、）次掃部官人神殿に入供す、次内侍縫殿司を率て御食を供す、内侍退く、次神膳を供す、四刻これを撤す、采女其儀にしたがふ、次曉神膳を供する事始のごとし、次曉の神膳を撤す、内侍退出、次陰陽寮使部代始めのごとく參進申時、（丑のひとつ）次納言巳下起座、幔門を出手水の儀あり、次納言以下神嘉殿に參る、次各神座等を撤す、納言巳下退散、及亥刻各歸宅、

〔閑窻自語〕大嘗會等再興事

新嘗會も同じみよ（〇東山）と元文五年再興あり（寛正比よりたえし跡なり）それより年々の事とはなれり、東山院元禄元年（〇貞享五年）より、新嘗御祈とて、吉田の神祇官代にて、下部のともがら年々奉仕とありけれども、准的にはあらず、

〔政事要略二十六〕清涼記中卯日新嘗祭事

吏部王記、延長三年十一月十四日、新嘗祭、雨降、上不幸中院、是夜小忌參議治部卿、左少弁元方、少納言俊房、内膳正忠茂王、左馬頭齊明、左衛門佐有正、座定大舍人賜插頭及摺衣於余及民部卿、（自余大夫先衣）之大納言召外記問雨儀例、及上不幸之時行事例、外記曰、依仰勘日記、无此例、唯神祇官人云、先年有此例、雖然年月行幸不分明、小忌大夫等云、先有此例、又甚不分明、又外記云、内膳官人稱有此例、調供

神物云々、供御疊之後、主殿設短灯、置碁盤於親王□
天慶五年十一月廿四日、行幸中院、余并大納言師輔卿、依例欲立幄前、而右大將實賴、權中納言敦忠等云、例多候本座、亦奏幄北幔、近則去年例如是、余云、先朝一候此座、故右大臣定方公亦在座、彼時避座列立、去元年六月神今食左大臣亦在座、彼日列立亦如此、未見候本座例、又諸衞皆立幕外、謂理立候似宜、大將云、先例誠有不起例、而論理避座尤宜、卽共立幄北、如常、右近衞就大將邊、申宿直、先令府生諸宿申候由、大將問名府生諸、凡常茂也、大將問、將曹不候乎、常茂申候由、大將許令申、爰將曹播磨文仲申之、大將云、文仲須申候由、令府生申、乖例也、是夜左右近衞大忌幕數唱神歌、或散樂猿藉、公卿仰召使令敕正之、

〔左經記〕寬仁元年十一月廿一日乙卯、入夜有御、參神祇官、行新嘗祭事、(右中辨當御卜、而辨自今朝有所勞云云、仍忽被召仰也、)上新中納言宰相不參、(略)○(中)供夕曉御膳畢上下分散、

長元七年十一月十九日己巳、昨日少納言經成云、當御卜少納言賴祐朝臣忽依申障、昨日參新嘗祭所、(中院)侍從中納言左兵衞督等同被參入、小忌座并祭作法如例、但不開門、仍神座等具南庭、立幄積之、上卿以下向幄下、昇神具等、昇自南階、(階下脫履)進神殿南戶外、掃部官人兼候戶內、待取神具、事如神祇官儀、其戶懸幔南庭、不引幔者、愚案南庭不引幔、是所司失也、雖無行幸、尙可引歟、神祇官儀引幔、況於中院乎、

〔中右記〕永久二年十一月廿日辛卯、今夜新嘗祭、依卜合亥時許參神祇官、著南庇座、(入從南著南座)右大辨長忠、右中辨爲隆、少納言實兼參入、但內侍未參、相尋女官之處、內侍沙汰不知者、大略行事藏人不沙汰歟、然而殿下給御消息云、藏人不沙汰內侍、甚不便也、但只今參內所相沙汰也者、暫可相待由申返事了、頃而土佐內侍來、仍予以下起座、於此北邊解劍持笏、著小忌、日蔭鬘、進北廳前庭之外、洗手指笏、予執打拂筥、參進於神殿壇上南戶下、跪進之、拔笏立西、右大辨右中辨昇坂枕、少納言供神座、了還著本

座、（不脱小忌帶劒）諸司供御膳、時申頻申上、令撤御膳、次供曉膳、寅刻撤了、予以下進神殿、取打拂筥、出如進儀、
事了退出、

〔長秋記〕大治二年十一月十七日癸卯、新嘗祭中和院儀也、臨曉沐浴、戌刻參入、入自待賢門、經中院南門、著西北屋、件屋四間、北面幷西南兩面皆壁、東面蔀、東廂北面空闕、件北面引幔懸筥、東西第二間上蔀引塞幔、北壁前南向儲親王座、北一間東向儲上卿座、同間頗寄南西向儲參議座、各居饗置爐、第三間南北行立長机居饗、其東西敷座爲辨少納言座、（辨東向、少納言西向、）第三間西壁下敷外記史中務錄內舍人等座、南一間儲召仕官掌座、西上北面、西廂東一間引幔、官外記史使部等群居、下官參時、少納言忠宗外記史等出來東庭南向立、予揖過其間、入舍中著西面座、地汚座薄、寒氣殊甚、仍仰史、史重座、此後及子刻上卿辨不參口及子了、上卿權大納言宗忠（時年六十四）右少辨宗成（宗忠子）參仕、召使出向南門、少納言外記史到東庭如前、上卿經辨少納言座末上官座前、著東面座、辨同著之、上卿示予云、有所勞、于今不參仕也、抑予民部卿（藤原忠教）乙卜合也、治部卿丙合也、而責七十者強令勤終夜役、誠是難堪事也、辨須令早參、然而老後病身、片時依有恐、爲同車所拘留也、上卿召外記問諸司具否、皆具、但內侍未參之、依非外記催、不被致其沙汰云々、又問供神物具否、辨乍居座申具由、（先仰史、史起座仰官掌、被尋問後、可申具由、）外記置式筥、召內侍所女官女史、問可參內侍、答云、遠江內侍也、可參之由被申了、只今祗候女院、早可催遣、上卿仰辨、以使部令參院令加催、歸來云、雖蒙催不存今日由、仍不能參仕云々、上卿驚之指沙汰女官與使了、重遣內侍許、雖女身新嘗祭存非今夜由條、尤非常也、早可被馳參者、又頭中將許飛辨消息告此旨、又行事藏人資業許告此旨、良久女官歸來云、內侍被申云、前例行事藏人送車、乘其所參也、而件車不持來、乘何可參哉云々、驚此事、密々借外記車、稱辨車、具官外記使部等遣向、辨與上卿同車、依無別車借外記也、如此沙汰間、魏鐘已報、梁鷄頻鳴、神事違例在之、相待間、或公事、或文事、閑談於往事、外記車未來著、內侍被參仕、乘頭中將車參仕云々、此後申時口、亥下申、上卿以下起座、於舍東庭著小忌、次日蔭、

結巾口解劒、行中和院南庭、於幔外洗手、上卿指笏取打拂筥、作著履進戸前、跪授神官、下壇東面立、下官與辨昇坂枕、下官立東昇壇階上、脱沓昇堂上、辨如此、跪戸下授神官、取笏經上卿後立其南掛、上卿云、脱沓事詳不分如何、下官答云、爲近衞次將行幸時開此戸、其儀壇上解胡籙弓劒、階下脱沓昇開戸也、存被例用此儀者、次少納言掃部官人等供以疊二度傳之、事了神官閉戸、上卿以下歸南舍、次少納言稱盃傳盞、依座遠以役官人傳之、上卿云、須辨又可稱盃、然而父子之間有憚者、一獻何事候哉、下官許諾、次供曉膳、畢上卿以下如前參上洗手、次第撤神座退出、于時天漸明、分物色程也、○中略　昨日依藏人不參及曉更、今夜依内侍遲著遂明旦、如在之禮豈可然哉、

〔山槐記〕永曆元年十一月十七日辛卯、戌刻著束帶(蒔繪、卷纓、緌、帶細劍、相具壺胡籙)參内、今夜中院行幸也、召府慶頭大石光堅相尋小忌、卽持來、於小板敷著之、(著次第具見去年記)次負壺取弓、戌終刻出御、(帛御裝束)予付劒内侍、關白令候御裾給、頭辨取殿下御裾、右中將家通朝臣付燭内侍設腰輿、(寄二當)於日華門、(輿寄或人會、更欲昇御輿於月華門、予加劍)(止殿令候日華門)次小忌公卿列南庭、次寄御輿、次予取御劒入御輿、次乘御、予取御草鞋給東豎子、次取豎筥同安畢、次持立御輿、(御輿長許負之、無駕輿丁也)奉仕昇下契、(大刀不候)次小忌公卿先行、經月華門、陰明門、中和門、大忌離前公卿列、(三位二人、四位季行之外不候)次入御中院南門、近將不立替、小忌公卿列立西廊火屋北、(北上東面)辨後經在幔外、(跪居)昇居御輿於神嘉殿南階前、(跪下候、供奉遂)家通朝臣取劒授内侍、(出居壁東邊、可候西戸内歟)予供御草鞋、次取豎筥授内侍、昇御南階、自庇西行入御西南戸、予參上褰幔、關白不入御戸内、次予逐電、經西壇上入御湯殿西向戸、撤裝束著當色、爲藏人頭之人、於此所脱之云々、奉仕御浴殿、先是依召參上、奉解御裝束、次下御、次第注別記、次昇御、令著齋服御、供御幘、次御手水、次供笏、次采女中時入御、此間予著裝束、猶不帶兵具、神殿事畢還御、次脱本齋服、次又著御齋服御幘、又進替之、已上御帶用帛御裝束帶、(無文玉丸鞆)次供膳御膳、次供御手水、次又入御神殿、(御手褰入御也、本自閉、入御時可開歟、)事畢還御、著御本帛御裝束、已上件等役等予一身奉仕之、次予逐電、帶弓箭劒參上南面、于時出御、予取劒璽安之、左近將副御輿、右不立替也、出

中和門之間、欲問大忌公卿無其人、仍無名謁不足言、御輿令過近衛幄前御之間、官人取拍子歌千歳、副御輿至于月花門外、右近官人不候、無堪能者歟、可尋、下御之後、左少將通家朝臣問名謁、次還御本殿、于時丑剋歟、

〔愚昧記〕仁安二年十一月十五日己卯、積雪四寸、且又飛々、沐浴解除、亥時許參神祇官、(下部芳門入、經北面西門)神殿東著南舍、件舍南門卯酉妻六間屋也、東第一間迫壁敷南面端半疊一枚、爲親王座、(西面後壁立屛)第二間南邊敷絲端半帖一枚、爲上卿座、(北面)其前置式筥、同間敷黃端半帖、爲參議座、(南面自上﨟座頗下西)第三間敷辨少納言等座、(北面)同間折北敷召使官掌座、(東面)第六間引隔斑幔侍從厨爲備餅所、已上各立机一脚居餅、但辨少納言臺盤、予經舍東入自南面第三間著座、(第三間壁也、仍入自三間召使沓脫)席上、次左中辨俊經朝臣入同間著座、外記史入自南四間著座、召仕官掌入北五間、參議少納言等未參、仍遣告早了云云、須之少納言信康入北第三間著之、良久左大辨雅賴卿入自北二間著座、予相尋內侍參否之處、未參云云、仍辨仰使、令使者相尋藏人許、良久歸來云、新嘗祭內侍可參之由不承之、上臈與達之由、新藏人稱云云、是以有若亡事也、重使官掌示子細、又招出女官、誰人可被參哉由可尋、女房定被存歟之由辨示之、數刻口口來云、播磨內侍可參云々、當時祗候、而藏人不致事之沙汰云云、仍申藏人之處、答云、住宅六條也、召遣車定及遲引歟云云、仍遣辨之車相待之處、漏刻頻移天欲曙、數反令使者攀相尋、其使不歸來、疑反多參、次各相議云、曉鐘已動、內侍不參、行北不之闕天晴祭違例之條、仍可重哉、各示云、新嘗會ハ夜祭候云云、天明已北不猶內侍不參可行予辰日早朝可參候哉、然間使者一人適歸來云、只今所參也、仍起座著小忌立神殿南幔門外、洗手執笏、(先是解劔給召使)立幔內西方(東)也、而宰相立此處可怪、所司授打拂筥、予指笏取之、跪南戶外授掃部官人、立本所、次宰相與辨昇坂枕同授之、次少納言昇御帖、其後歸著南舍、(不脫小忌)一獻、少納言執盃、經辨座西南來、居予座上勸之、予飲了擬左大辨、左大辨擬辨、辨進寄受之、次二獻、左中辨勸之、(已上內舍人取酌)次居汁物箸下、此間內侍參上、奉掩御衾

云云、良久申撤晩膳之由、仍起座撤打拂宮坂枕御疊等、次脫小忌給召使退出、□雪滿尺、行步煩、于時卯刻許也、

〔山槐記〕治承四年十一月十九日丁卯、新嘗會、舊都於神祇官所被行也、其間事先日被問人々、

〔吉記〕治承四年十一月十九日丁卯、今日新嘗祭也、當番原○闕依無其所於平京神祇官被行之、上卿藤中納言、成範參議堀河宰相、賴定右少辨兼忠、少納言有宗等參勤云々、

〔玉海〕建久二年十一月十五日庚申、入夜長房來申云、齋宮寮言上云、依觸卅日穢、今日次第神事等或延引了、或又欲延引、穢次第雖爲各別、宿館折穢始已經七ヶ日了、而二子細等仍自然之往反、混合如無疑、但猶分明可被仰下、若新嘗祭延引者、新米自何日可供哉、同可被裁下云々、余仰云、早下官外記可尋例、又書別紙下明法博士、可令勘穢否者、　廿一日丙寅、今朝神宮奏狀到來、依齋宮寮穢觸來、不供朝夕儀、次第神事、延引云々、依件穢新嘗祭可延引哉否、內々問官外記之處、依神宮穢、公家停止新嘗祭之例無所見之上、此祭無奉幣、專不可被停止云々、隨又去夜已五節參入、仍不仰可止祭之由也、　廿二日丁卯、今夜新嘗祭上卿兼光卿、參議光雅卿云々、○中略今日參內以前大外記師直來申云、依神宮穢新嘗祭延否事、兩方共不勘得先例、於新年月次例幣等者有其例、若可准歟、神今食又無奉幣、可准神嘗祭歟云々、余仰云、今日祭旁不可延引歟、先々至于新年等祭例者、已被發遣奉幣使、新嘗無此事、專不足爲例、神今食事尤可比歟、然而彼者月次祭同日事也、祭已延引、神今食雖無幣、思諸神相嘗之儀、神祇令文也聊非無可恐、仍承曆三年有議被行御占、依不快兩事同延引了也、於新嘗祭者、曾無延引例之上、五節已參入、至今度延引停止之儀、何況於奉幣哉、至于承曆之例、不可似今日之儀、猶剩之恐、祭者聊有可相比事、天永二年六月十一日、院御領有死穢、件穢及院御所幷內裏了、然而未及廢、仍神今食可愼行之由被仰下之由見外記日記、彼非忽諸神事、式日有限、嚴重之祭禮臨期停止、神事違亂、仍穢氣未遁之間、隨宜可行之由被仰下歟、今度以同前也、彼者內裏穢也、是者本宮穢也、彼無他事之煩、是

者已五節參入了、其後更祭停止之例未曾聞也、輕重不齊、仍隨宜之沙汰、專可叶時議、不可乖神慮歟、就中件穢、齋宮女房不知此事參神宮云々、大神宮之習、殊不奉幣云々、然者只甕參候前庭之女房即退出者、不可有著座、飲食不可必爲穢歟、仍件祭重被尋遣了、大略未斷觸穢歟、但於此事者、神宮自稱觸穢、其上強不可及疑殆歟、縱雖有穢、公家之祭專不可止之由所存也、此上如何、師直服膺退出云々、神事猶有恐、仍以愚案之趣被消息、問遣內大臣〇藤原兼房之許、返事云、

神宮有穢新嘗祭可延引哉否事

被仰下旨一々叶愚案候者也、此事無奉幣之上、五節既參入、忽違亂未曾有之事候歟、抑又春日社有穢之時、不止大原野吉田祭事、聊可相準候哉、旁不可延引之由存思給候者也、恐惶謹言、

〔百練抄後鳥羽十〕建久二年十一月廿二日丁卯、新嘗祭也、此間齋宮寮穢及神宮云々、然而新嘗祭依無奉幣被行之、其理如何、僣案之理猶不可然、尤可延引歟、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元三年十一月廿四日乙卯、新嘗祭也、依雨儀於東門內被行之、一條中納言公持卿參行之、

〔園太曆〕康永四年十一月廿三日癸卯、抑今日新嘗祭、右衞門督〇藤原實繼參仕云々、雨儀事父卿尋之、南廳代儀、用南門下、北舍儀可用之間示了、

〔康富記〕應永廿九年十一月廿日癸卯、新嘗祭也、〇中略每年如例歟、但辨獻盃之時、無繼酌之間、上卿被咎之云々、獻盃二獻云々、

〔公名公記〕正長二年十一月廿四日、新嘗祭也、余爲卜合可參行之由蒙其催了、仍入夜著束帶乘八葉車參神祇官、於郁芳門代下車、入北門、聊佇立北廳南簷下、少時召使告申事具之由、仍予以下相引著南廳、北廳顚倒之□、儲假屋東西行五箇間、東一間爲親王座、其儀廻南廳巽角入南西第二間、乍立揖脫沓著座、揖南方北面、次四條宰相隆夏卿著北二間、南面與予對座、次少納言長廣朝臣著北第三間、南面次左中辨資親朝臣著南第三間、

少納言對座、第四間爲外記史座、共以北面、此間内侍參入云々、時守於南廳北邊申時如恆、次予欲起座之處、自下薦起了、爲雨說之間無予順、次予起座著沓揖、右廻經本路北行、招前驅令解劒洗手、召使持來小忌、(二尺計布也)著之兩肩ニ打鈎、丁日蔭鬘懸冠、宰相辨少納言外記史等、同洗手著小忌、次列立北廳南庭、予宰相西北上東面、辨少納言以下東北上西面、可引幔之由存之處無其儀、仍相計幔門之程列立、列立之時予不揖、一說然、隆夏卿如予、自餘皆有揖、次諸司持來打拂筥、(御宮上置布)予指笏於腰、乍立取之進行、跪北廳中戶前壇上、(北面)授掃部官人、(官人跪面在舍内、予跪壇上之時、官人開戶之、乍居取之)乍跪拔笏左廻復列、(又不揖)次四條相公、幷左中辨資親朝臣昇坂枕、(宰相東、辨西、或參議西、辨東昇之、)納北舍後列、次少納言長廣朝臣外記史等昇神座納北舍了復本列、次予經相公辨少納言列前南行、於初所帶劒(不脱小忌)歸著南廳、其儀如先、先是立黑漆臺盤一脚、備餐饌、次一獻、少納言揖起座、進來予前取續酌、(盃同之)其儀少納言氣色予受酒飲了又受之、予目相公置笏於右膝取盃飮之、了乘盃於笏上授相公、次第巡流、此間少納言復座、不預巡流例也、次辨申著仍下之、予可爲二獻之由仰了、次二獻、辨取續酌、其儀同少納言、抑於四品者不可取續酌之由存之處、公親朝臣取之、尤以不審也、次第巡流如先、辨又不預巡流、次時守申時、寅一ト申テ留也、次予起座於以前之所撤劒、列立北廳前、(如先)予進中戶壇上、掃部官人差出打拂筥、予指笏取之、左廻南西立、諸司進來取之、予乍立拔笏復本列、參議辨撤坂枕、少納言外記史撤神座各復列之後、予離列出北門、於門内召使乞取小忌了、最難可帶劒存略儀不帶之退出、

〔康富記〕嘉吉二年十一月廿二日己卯、大雪下、新嘗祭也、上卿權大納言公保卿、參議隆遠卿、少納言益長朝臣、辨明豐朝臣、外記親種、史員職、召使寬繼、内侍等參行之、依大雪爲雨儀、南廳代以神祇官東門下被用之、上卿辨北上西面、參議少納言北上東面、外記史東上北面也、召使加其末皆圖東也、西風吹雪、雷下濕候間、圖西不能著座之故也、抑新嘗祭雨儀例未勘得、神今食雨儀例、應永卅二年六月十一日、同卅三年六月十一日兩度也、件兩度於神祇官東門下被行之、上卿辨西上南面、外記史加其末、參

議少納言西上北面也、而永享六年六月十一日雨儀、於東門下被行之、上卿辨外記史北上西面一列、參議少納言北上東面、召使北面也、今夜儀雖被摸永享六年儀、於外記史座者尙以不同也、上卿辨參木雖被執永享儀、少納言一人堅被申所存、今夜如此被設座云云、不得其意者也、

深雪賞珍察申候、抑新嘗祭雨儀、或擁笠、或以東門下爲南廳代候由所見候、此一兩年間不然候、留耳底之樣覺候、近例當座故候者、可注給候、神今食時事分覺候哉、先年注給候樣存候如何、期面候也、

十一月廿二日　業忠

日向殿

文安四年十一月十五日癸卯、新嘗祭也、〇中略　予兼令賢式宮於南廳座、上卿召外記被問諸司參否、(寮不被數輒、予臨期仰掃部寮令敷之、上卿南方也、)其後神前儀也、依參議不參、辨與少納言被昇坂枕、(辨位次上臈也、被立東方、少納言五位人也、被立西方、是參議東辨西被立之故也、然辨被談此由了、)次予史兩人昇厚疊、(少納言被昇坂枕故也、然示合少納言了、)其外每事如例、上卿撤神具之時、不解劒被從之、忘却至歟、

寶德三年十一月廿日乙卯、新嘗祭也、〇中略　刻限上卿已下著南廳代、〇中略　陰陽寮申時、了上卿已下起座於路程有手水、獻小忌、(上卿已下至外記史、帶劒人解也、)次進立庭上、上卿已下無假立、先打拂笏取之、供神殿了後被列立、(又無假立、)次少納言外記史進寄昇厚疊、供了後列立、(無假立、)如此、其後各揖自下退歸著南廳代、有饗膳勸盃、先少納言(下臈也、從四位下、)一獻也、(上卿後方賦ヲ取テ、又置上卿方了、)次辨二獻也、(上卿飮了、盃居笏被渡參議、參議受飮之、居笏渡辨、辨渡外記、外記受飮之盃傳史、二獻之時、上卿如先渡參木、參木盃傳少納言、少納言盃傳外記、外記進可賜盃之處、爲年少之間、縱中案內於少納言、少納言盃被下造酒司了、本儀少納言盃傳外記之時、外記起座可進賜也、)次申時、自下起座如先、進寄北廳南庭撤寢具、(今度又如先初不及假立、直參進撤了、各被列立、)事訖上下退出之時子刻也、

康正元年十一月廿日辛卯、新嘗祭也、納言不參、參議左大辨綱光卿、少納言不參、〇中略　依納言不參、參

議取打拂筥、外記史昇坂枕、又昇厚疊云々、納言并辨少納言等不參例邂逅也、公事陵遅澆季至、爲奈何之、

〔續史愚抄後花園〕寛正四年十一月廿四日己卯、新嘗祭、内侍參向、

○按ズルニ、此ヨリ後二百七十餘年ノ間、新嘗祭ノ儀中絶セリ、

〔元文五年新嘗會次第〕新嘗會次第

當日神嘉殿奉仕御裝束、入夜供小忌御燈、

次供神物辨備畢、天皇著御神嘉殿大床子御座、

近仗陣階下、(不警蹕)　此間大忌公卿著座、(東上北面)上卿已下著西舍座、(略ノ儀)

次主殿寮供御湯、有御湯殿事、

次大舍人叫門

次開門

次上卿取打拂筥、納言參議昇坂枕、少納言外記史昇八重疊參上、此間近仗寒嘆、上卿已下復座、

次掃部官人入神殿供之

次内侍率縫司供御衾於八重疊上、内侍退、亥一刻采女申時、

次著御祭服、有御手水事、

次出御神殿、供神膳、四刻撤之、采女從其儀、

次入御西廂、丑刻采女申時、

次供曉神膳、其儀如初、

次采女申御膳平供奉由

次還御本殿

次撤神座等、公卿參進如初、近仗退出、○中略

今上皇帝○櫻町御再興、于時元文五、十一月卯日廿四日御當日也、

〔友俊記〕新嘗會そのゝち御再興ありてより、年々におこなはるゝ也、

此年は延享四丁卯○中略五月二日行幸于洞宮櫻町、讓位○櫻町受禪○桃園開關、同年丁卯十一月十七日新嘗會、今年御代始、大嘗祭不被行以前、新嘗會在之間敷令沙汰處被相行、幼主無出御、典侍著衣五衣配供、前日於內侍所見其衣、

寬延三庚午年十一月十六日、新嘗祭被行之、

寶曆元年十一月十六日、新嘗會、　二年十一月廿二日、新嘗會也、

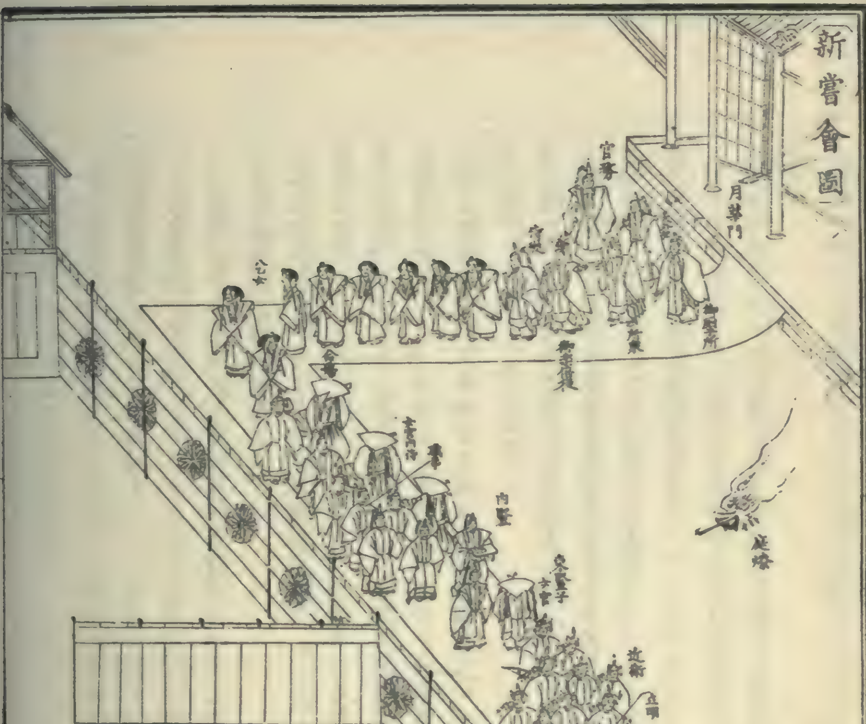
〔續史愚抄後櫻町〕明和六年十一月十二日庚寅、有新嘗祭神饌御習禮、攝政內前參仕、　十三日辛卯、新嘗祭、先於左大臣尙實第有行幸召仰、今夜行幸神嘉殿代、神饌曉宵御供進、訖還御本殿、行幸代初度新嘗祭小忌上卿櫛笥中納言宰相已下、及大忌公卿春宮大夫實季已下二人等參仕、已上奉行藏人頭左大辨紀光、

〔續史愚抄後桃園〕安永七年十一月十七日癸卯、新嘗祭、此日先於右大臣輔平一上第有行幸召仰、今夜行幸神嘉殿代、宵神饌御供進後還御本殿、依御惱於曉者密掌侍某奉仕云、未曾有事歟、小忌上卿花園中納言輝久宰相已下、大忌公卿三條大納言實起已下二人等參仕、奉行藏人頭右中辨爲長朝臣、

〔天保十四年新嘗祭記〕天保十四年十一月二十三日辛卯、

一新嘗祭御當日也、申一點奉行光政朝臣以下、愛長朝臣、俊克、資宗、顯彰、午刻前後參勤、俊當、子、當德、賴永等、依申合午刻前參仕、兩局出納代生直正恆以下諸司、午後追々參集云々、次第三殿御裝束奉仕如例、

一殿下○鷹司政通御不參也、御座不及設之如例、



新嘗會圖


神嘉殿
庭燎
中納言
庭燎

一小忌名簿奏聞、未剋比行學朝臣參仕、後常進退如例、
一中殿御裝束以下、藏人商量條々事如年々、
一小忌分配如例、今年殿下依御不參、相目播小忌一領入幸櫃下出納、傳奏日野前亞相〇資枝依不參不相目播、小忌一領德大寺被返之、其旨申奉行宜、取計被示、後常抑留了、議奏料五領、坊城前亞相〇俊明等、不參、分配之儘不被返之也、
一秉燭以前、諸司御裝束具間告奉行、
一秉燭後召仰陣被始、奉行參陣、藏人賴永從之、
一同時奉行被示云、今夜臨期被止行幸旨也、但諸司傳命之儀、陣終後可申傳旨云々、
一依無行幸被渡上卿備忘如例、注具、
一申剋使部代衞士取傳神座役、掃部寮史生依無人、木工寮語合、宴幄役次將代、掃部寮史生兩人、可爲如例、行幸方勝手退出事等、奉行被示、傳命兩局了、
一依被止行幸、御裝束設替之儀、可爲如近年、奉行被示、命兩局出納等、其儀如左、
一臣下手水具設屛幔外西、
一神座棚設屛幔內、
一同辛櫃設神座棚西、
以上具後告奉行、
一陣終可供小忌御燈、奉行被示、命主殿寮、同剋仰御藏、紫清兩殿令供掌燈、但依無行幸、神嘉殿神殿、井南廊外隔殿御湯殿內等、不供御燈、如違々、
一戌剋比新嘗祭被始旨奉行被示、夫々傳命如例、
一內侍采女藏人等參向之儀、奉行以議奏或表使等被申込哉、藏人不及沙汰也、

一內侍從內々方參向之期、職事一統候神嘉殿、

一采女降女官階本路參向、此時常德到女官階邊扶持如例、

一先是上卿以下著西舍座、問諸司具否神物具否、

一次時守申時亥一

一次上卿以下起座、於西舍邊著小忌、（召使辨侍少納言外記等著之、侍從自著之、但見舞人稱抱）之、

一次上卿以下手水、訖列立屏幔內、

一次口公卿以下列立、訖次將代史生昇殿褰幌、後掃部寮頭以下昇殿、入神殿內、

一次上卿以下供神座、儀專如次第、訖掃部頭以下次將代等下殿、上卿以下各復座西舍座、有勸盃之事、

一神座供進訖、內侍供寢具之事、告奉行藏人、令案內、聞供畢如例、

一此間神饌行立相催如例

一神具供進訖直警蹕、告奉行藏人、命之如例、

一稱警蹕後、直陪膳采女以下昇殿、供之專如次第、

一神饌供撤間、職事候箕角簀子如例、

一宵神饌畢、撤寢具事告內侍如例、（不及聞撤了歟、今夜依奉行命聞之乎、）

一此後內侍采女歸入內々方、今度采女扶持藏人不及向之、

一宵神饌寢具等撤畢、西舍座自地起座之事、依奉行命告上卿、時亥刻前也、

一供替萬端如例可催奉行被示、傳命兩局出納內膳司等、

一子刻比曉神饌被供旨奉行被觸、夫々傳命如例、

一西舍座、上卿以下復座如始、

祝詞

一內侍參向以前、職事一統到神嘉殿、如宵、

一采女回來時、藏人到女官陪儀、如近年略之、

一內侍供寢具事、神饌行立警蹕等、以奉行命藏人催之、一如宵、

一闔寢具撤訖後、告奉行命時守申時、

一次上卿以下起座、手水訖列立屏幔內、以下撤神座之儀一如宵、

一曉神饌訖、陪膳采女就朝餉簾下、還申之儀、先是奉行藏人等、到馬形障子邊扶持之如例、（但依有諸采女覺悟、以前不及沙汰、）

一曉神饌了時、子半刻過也、

一曉神饌中大殿祭奉仕、留守辨顯彰、藏人賴永商量時儀、如近年、（宵神饌終、御殿裝束撤之、曉神饌供替具官言上後參進儀、）然宵神饌終、曉神饌供進被仰出間、頗有隙間、曉神饌供進以前大殿祭畢也、

一今夜依無行幸、職事一統不及恐悅、

一依被止行幸、御服辛櫃兩櫃等、御塞以前返上了、

一新嘗祭訖、解齋御用無之、諸司撤却退出、奉行被示、夫々傳命如例、

一解齋御裝束、以奉行命奉仕、依無行幸、中殿廂上夜設如例、

一丑刻計供進被仰出、陪膳愛長朝臣、益供賴永、供進之儀如例、臨期無出御、內侍被出後罷也、（但今年供三盤撤二盤、）

一丑半刻比御裝束撤却、諸司退出、奉行被觸、夫々傳命商量如例、

一一列申合、隨身物雜卵催等（使常）如例、

一都事訖各退出寅刻計也、

〔延喜式八祝詞〕大嘗祭

忌火庭火祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、

高天原爾神留坐皇睦神漏伎神漏彌命以、天社國社登敷坐留皇神等前爾白久、今年十一月中卯日爾、天都御食乃長御食能遠御食登、皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾、皇神等相宇豆乃比奉氏、堅磐爾常磐爾齋比奉利、茂御世爾幸閉奉牟依志氏、千秋五百秋爾平久安久聞食氏、豐明爾明坐牟皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、明妙照妙和妙荒妙爾備奉氏、朝日豐榮登爾稱辭竟奉久乎、諸聞食登宣、事別忌部能弱肩爾太襁取掛氏、持由麻波利仕奉禮留幣帛乎、神主祝部等請氏、事不落捧持氏奉登宣、

〔祝詞考下〕大嘗祭　此條いといぶかしき事有、まづ上つ代には、大嘗新嘗といふ分ちなし、神代紀に新嘗と有は、おもふに年々の事ならん、仁德天皇紀に新嘗とあるは、何れとも知がたし、清寧天皇十一月の紀に、依大嘗供奉料、遣播磨國司云々と有、又弘計天皇紀に、右同事を新嘗と書つれど、是はともに卽位の時の大祀の大嘗と聞ゆ、天武天皇紀に新嘗とあるも、事のさま同じく大祀の大嘗なり、かくて後文武天皇の神祇令、仲冬常例の祭の條に大嘗と有は、毎年の祭也、同令の次條に、凡大嘗者、毎世一度、國司行事、以下毎年所司行事、在京諸司預祭事者也と有て、一世一度をも毎年なるをも共に大嘗と有、かくて此式には新嘗祭とゑるされたり、然ればこゝは大嘗祭と有からは、此祝詞に、天つ日嗣知しめす始の大嘗のよしの言あるべきに、さる御事も見えず、かの大嘗祭の時、諸國へ御使立て班幣給ふ條にも、卯日に官にて諸社へ班幣の時にも、祝詞の事は見えずして、新嘗祭の所には祝詞の事あり、これらをおもひ、又この標にたゞ大嘗祭とのみ有もことわりたらはず聞ゆるをもおもふに、こゝは字の落失などせしを、後人みだりに大嘗祭とゑるせしにや、右の如しては、新嘗祭に班幣帛詞など有べくおぼゆる也、

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

忌火炊殿祭〇中略

右新嘗祭時、先新造炊殿、依件鎮祭、宮主行事、其舊殿者、壞却給宮主、
供新嘗料、○中略
其御贖大殿忌火庭火等祭料、並准神今食、
○按ズルニ、忌火庭火ノ祭ノコトハ、神今食篇ニアリ、參看スベシ、

大殿祭

〔延喜式 三十一宮內〕凡神今食新嘗祭明日平旦大殿祭、省輔已上率諸忌部等至延政門、令大舍人叫門、闈司傳宣如常、輔入奏、諸事皆准鎮魂、其詞曰、宮內省申久、大殿祭(此云於保登能保加比)供奉(奉登)神祇官姓名率忌部(氏)候登申、

〔九條年中行事 十一月〕中卯日新嘗會事
此夜天皇未歸本殿之間、有御殿祭事、(如式者、天皇還宮之後、有儀式、可有件祭、而今所行者如此云々)

〔年中行事 加茂氏人保臣所傳〕十一月同日○中略曉、返御以前大殿祭事、(雖無行幸、猶祭之)

〔延喜式 十三中宮〕凡○中略十一月新嘗祭神態畢、後日平旦神祇官祭御殿、亮若進一人相副傳內侍令啓、然後祭之、
○按ズルニ、大殿祭ノ事ハ、神今食篇ニアリ、參看スベシ、

解齋

〔禁秘抄 中〕神事次第
十一月中卯日新嘗會(自一日至其日、辰日解齋、神事穢同神今食、但先例五節之間、丑寅日或殿上人參、然而不可參事歟、有行幸之時、殊可有深慮也、)

〔延喜式 三十一宮內〕凡新嘗會解齋、○中略丞已上一人與諸司共和儛、

〔年中行事 加茂氏人保臣所傳〕十一月同日○中略平旦主殿寮供解齋御手水事、(雖無行幸、猶供之)
主殿女豎二人入自御湯殿戶、御盥大床子南頭立白木小机一脚、其上置白木手洗一口、(無手)其南立白木二階机一脚、其上鋪敷調布、置御巾(入筥)、粉一坏(盛小土器)、其上居藺履一足、(無裏皮)其南立白木八足机一脚、其上居缶一口(盛御手水)、杓一柄、主上著御大床子、(御直衣)女房二人(著裙子)供之、御盥畢著藺履三步、畢脫

之、(先右、次左、次右、)

次主水司供解齋御粥事

其儀先上晝御座南第三間格子、(有行幸時、及平日時、不下格子、仍皆上之、)次采女二人自御膳宿舁御臺盤一脚、立鬼間格子西、如例、次居馬頭盤、(有御箸二雙、近代用土器、可尋、)次四位一人、六位藏人一人、相共舁之立於大床子前、(件役近代束帶、上古式布袴云々、有行幸時、侍臣脱小忌供奉之、近代例也、可尋之、)次藏人供御粥一坏、(盛土器、是堅粥也、仍傾高盛、居於御臺盤四隅、傾北寄、)御汁物一坏、藏人付女房、令奏供畢由、主上自御帳後著御大床子、三箸嘗之、畢之立御箸於粥、入御、陪膳撤如常、(但不御撤)

〇按ズルニ、解齋ノ式ハ、神今食篇ヲモ併セ看ルベシ、

〔三代實錄 四十陽成〕元慶五年十一月廿四日戊辰、停豐樂之宴、供祭所司、向宮內省解齋如常、

〔伏見院御記〕弘安十年十一月十六日癸卯、今夜新嘗會、內侍參向、　十七日甲辰、解齋御手水主殿寮供之、其儀御手水間大床子寄北立之、(南向)白木小机一脚、上置白木手洗一口、(無角)白木二階机一脚、其上居敷調布、置粉一坏、(盛小土器)其下居裏無一足、又立白木八足机、其上置杓一柄、又白木机一脚、大土器入水置之、著大床子後下﨟(女房)二人役之、典侍一人候陪膳、先取粉塗兩手、其後典侍取杓酌水、三度懸之、次著裏無向南三步、先右、次左、次右、次御手水供如元取出之、

〔公卿補任 櫻町〕元文五年十一月廿四日、新嘗祭再興、　廿五日、供解齋御粥、陪膳公文朝臣、(〇姉小路)

〔續史愚抄 後桃園〕安永七年十一月十七日癸卯、新嘗祭、　十八日甲辰、供解齋御粥、不御、陪膳藏人頭右中辨篤長朝臣、

新嘗初見

〔二十二社註式〕新嘗祭

神代素戔烏尊、見天照大神當新嘗時、(神代始也)

人皇二十三代清寧天皇二年(辛酉)十一月始之、濫觴見于右、一代一度云大嘗會、每年云新嘗祭、

人皇三十二代用明天皇二年(丁未)四月、始此祭行之、

天皇親祭

〔日本書紀 一神代〕素戔嗚尊之爲行也甚無狀、〇中略、復見天照大神當新嘗時、則陰放屎於新宮、

〔年中行事秘抄 十一月〕中卯日新嘗會祭事〈裏書〉日本紀云、天照大神當新嘗、〈私案、新嘗之文始見于此、〉

〔日本書紀 二神代〕高皇産靈尊見其矢曰、〇中略、於是取矢還投下之、其矢落下、則中天稚彦之胸上、于時天稚彦新嘗休臥之時也、中矢立死、

〔年中行事秘抄 十一月〕中辰日豐明節會

高橋氏文云、六鴈命七十二年秋、天皇〈景行〉〇宣命云、十一月新嘗會〈モ〉膳職御膳ノ事、六鴈命ノ勢始成〈讃〉所ナリ、是以六鴈命御魂〈ヲ〉膳職〈ニ〉伊波比奉〈天〉、春秋永世ノ神財ト仕奉〈志女牟〉、

〔日本書紀 十一仁德〕四十年、是歲當新嘗之月、以宴會日、賜酒於内外命婦等、

〔古事記 下履中〕此天皇〇中略、本坐難波宮之時、坐大嘗而爲豐明之時、於大御酒宇良宜而大御寢也、

〔日本書紀 十五清寧〕二年十一月、依大嘗供奉之料、遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、三年十一月戊辰、宴臣連於大庭、賜綿帛、皆任其自取、

〔日本書紀 十五顯宗〕白髮天皇〇清寧二年十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡親辨新嘗供物、〈一云、巡行郡縣、收斂田租也、〉

〔日本書紀 二十四皇極〕元年十一月丁卯、天皇御新嘗、是日皇太子大臣各自新嘗、

〔日本書紀 二十九天武〕二年二月癸未、天皇命有司設壇場、卽帝位於飛鳥淨御原宮、十二月丙戌、侍奉大嘗中臣忌部、及神官人等、幷播磨丹波二國郡司、亦以下人夫等悉賜祿、五年十一月乙丑朔、以新嘗事不告朔、六年十一月己卯、新嘗、

〇按ズルニ、此他用明天皇舒明天皇ノ朝ニ新嘗ノ事見ユ、載セテ下文延引ノ條ニアリ、

〔政事要略 二十六〕寬平御遺誡云、新嘗會、神今食、幷九月伊勢御幣使日、必可幸八省中院以行其儀、

〔禁秘御抄 中〕神事次第

神今食〇二度例幣新嘗會、以上四ヶ度神事、必一兩度有行幸、可被調其儀、夜陰臨幸、更非民愁、

〔類聚國史九神祇〕天長七年十一月辛卯、天皇〇淳和御神嘉殿、以申如在、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十一月乙卯、天皇御神嘉殿行神事、

〔左經記〕長元元年十一月三日癸巳、參御堂、〇藤原道長中略、被仰云、新嘗會、可御出哉否之由、可案內者、則參右府〇藤原實資、申可被行御讀經之由、仰早可行之由、宣旨賜宮寺者、但可問日時於陰陽寮也者、申新嘗會可出御南殿哉否之由、被申云、出御有何難哉、故大入道殿〇藤原兼家永祚二年七月二日甍、同年十一月新嘗會、依御物忌无御出云云、非御物忌者、可有御出也、而當時非御物忌者、可有御出歟、參御堂申此由、則召右大辨被奏、可御出之由云云、

〔十三代要略二白河〕承保三年十一月十五日、行幸神祇官、視新嘗會、

〔中右記〕長承元年十二月五日辛卯、來十一日神今食、可有行幸之儀出來也、是新院〇鳥羽十六年、今上〇崇德御宇九ヶ年間、神今食新嘗會例幣、如此神行幸絕了、

〔本朝續文粹二勘文〕勘申變異疾疫飢饉盜賊等事　　敦光朝臣

一去年風水有難今年春夏飢饉事〇中略

右王者八政、食爲其先、古人有言曰、寒者不貪尺玉而思短褐、饑者不願千金而美一食、自非豐年之食、何免荒饑之愁、夫衰弊之漸、且示區分、一者依廟社不祀也、而二月祈年祭、六月十二月月次祭、神今食、九月神嘗祭、十一月新嘗會者朝之重事也、其祭雖存、其禮漸薄、就中天皇神今食、幸中和院、神嘗祭幸大極殿、威儀棣々、自感神心、昔告朔餼羊、仲尼愛禮、以小喩大、何失恒規、事事任式可被行之、諸國所在大小神社、雖有破壞、無加修理、雖有顚倒、无復基趾、國宰不參祭祀之場、社司无致修治之事、況非家講之輩、知社務之人、誰能竭謹愼之誠乎、誰能整齋肅之禮乎、〇中略

以前參商條、據史籍謀思管、勘申如件、

保延元年七月廿七日　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

〔中右記〕保延元年八月廿四日、一日下給諸道勘文八通返上之、○中略勘文八通謹返上、可被行善政之由各勘文也、此次申云、○中略

二季神今食、九月例幣新嘗祭行幸尤可被行也、○中略

以前條々事等、依有其議大略注進、早以此趣可被奏達之條如件、

〔百練抄 十二 崇德〕建保元年十一月十三日、依新嘗祭主上自高陽院行幸神祇官、歩儀也、

〔續史愚抄 櫻町〕元文五年十一月廿四日辛卯、新嘗祭再興、行幸神嘉殿、

〔續史愚抄 後櫻町〕明和六年十一月十三日辛卯、新嘗祭、○中略今夜行幸神嘉殿代、

〔宮主秘事口傳〕新嘗祭神今食無行幸之時者、只宮主采女二人、於北舍執行諸司供神物也、內膳司沙汰其宮主不相綺、宮主者采女供神膳之後、二拜申詔戶計也、

又夕膳終、曉膳之時、如前二拜申詔戶、其外無所役也、又八重疊者宮主取之、古今于今無相違、內々令用意人夫者也、

不出御

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年十一月辛卯、新嘗會也、不御中院齋場、

〔文德實錄 二〕嘉祥三年十一月辛卯、帝以諒闇故不親祭事、所司齋潔祇奉嘗事、

〔文德實錄 五〕仁壽三年十一月癸卯、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、

〔文德實錄 六〕齊衡元年十一月癸卯、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、

〔文德實錄 九〕天安元年十一月乙卯、帝不御神嘉殿、所司參會神祇官行祭事儀如常、

〔三代實錄 五 清和〕貞觀三年十一月廿一日辛卯、新嘗會也、帝不御神嘉殿、親王公卿向神祇官奉祭如常儀、

〔三代實錄 六 清和〕貞觀四年十一月十五日己卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、勅親王公卿向神祇官奉祭、

〔三代實錄 七 清和〕貞觀五年十一月十四日癸卯、新嘗會祭、天皇不御神嘉殿、以主殿寮有狐死穢、而官人參入御在所也、公卿向神祇官奉祭如常、

〔類聚國史 九 神祇〕貞觀十年十一月十四日癸卯、新嘗遣親王公卿就神嘉殿奉祭、

〔三代實錄 十六 清和〕貞觀十一年十一月十四日丁卯、新嘗祭遣親王公卿於神嘉殿奉祭、所司供奉如常、

〔三代實錄 二十二 清和〕貞觀十四年十一月十三日己卯、修新嘗祭於神祇官、所司供祭如常、

〔三代實錄 三十八 陽成〕元慶四年十一月十七日丁卯、新嘗會祭、天皇不御神嘉殿、公卿向神祇官奉祭、以內裏犬產穢也、

〔日本紀略 一 醍醐〕延長元年十一月十五日乙卯、新嘗會、天皇不御中院、

〔日本紀略 三 村上〕天曆三年十一月十六日乙卯、新嘗祭也、天皇不御神嘉殿、依中宮〈安子〉御不豫也、

〔日本紀略 四 村上〕康保三年十一月十三日癸卯、新嘗祭、依御物忌不御中院、於神祇官行之、

〔日本紀略 六 圓融〕安和二年十一月廿四日丁卯、新嘗會被付官、天皇不御中和院也、

貞元二年十一月十七日癸卯、新嘗會、天皇不御中院、付神祇官、

〔小右記〕永觀二年十一月廿一日丁卯、早朝退出、秉燭歸參、今夜神態被付所司、於神祇官行之、大嘗會以前出御之例、指而无所見、仍不出御、小忌中納言顯光、參議公季、辨道兼、少納言師衡、晚更釆女參入、令奏神態了安之由、今夜、主上〈花山〉密々御常寧殿邊、未聞之事也、如何々々、

〔日本紀略 十 一條〕長德四年十一月廿四日己卯、新嘗會、依御物忌不幸中院、

〔日本紀略 十一 一條〕寬弘元年十一月十七日丁卯、新嘗祭、依雨不行幸中院、

〔小右記〕長元元年十一月三日癸巳、左中辨歸來、傳關白御消息云、〈中略〉新嘗會若可出御哉如何、余云、非御物忌可有出御歟、御心喪期已過、有何事哉、辨云、若可出御新嘗會歟、此間不分明者、余云、或云、中和門無上造云々、頗無輕々歟、御輿留口門、大忌上達部名謁、又未臨幸初有行幸、關白可被候、而御服

延引

不可被候於行幸如何、尋見永祚二年例、可注送之由相示了、

永祚二年七月二日、入道大相府入滅、十一月廿日辛卯、神事無行幸、廿一日壬辰、節會依御物忌不出御南殿、

注此曆記遣左中辨許、

寛仁二年十一月廿一日己卯、宰相從內言送神祇官神態日記事、有方忌不出御中院、仍神祇官被行、宰相爲小忌云云、件神態記付使遣之、

〔中右記〕嘉承元年十一月十五日、今夕新嘗祭、於神祇官行之、依明日御物忌無行幸也、上卿新中納言(顯)左宰相中將(忠)藏人辨爲隆、少納言明實勤之云云、

〔續史愚抄(櫻町)〕延享三年十一月廿四日乙卯、新嘗祭也、先於內大臣(宗基)里第有行幸召仰、(此事每年有之、而若今年再興歟、)奉行藏人頭右中辨俊逸朝臣、而今夜俄無神嘉殿行幸、(依御惱歟、)內侍(某、權中納言典侍代云々、)參向者、小忌上卿內大臣(宗基)已次公卿冷泉中納言(宗家)已下二人參仕、(大忌公卿新大納言宗長已下二人、參而空退出、)奉行俊逸朝臣、

〔友俊記〕延享四丁卯十一月十七日、新嘗會、(中略○)幼主(御○桃園)無出御、

〔續史愚抄(後桃園)〕安永五年十一月廿三日辛卯、新嘗祭、此日先於左大臣(尚實)第有行幸召仰、而今夜俄被停行幸、(當代每度有此例者、自內御計中云、不審、)典侍某參向、小忌上卿花山院中納言(愛德)宰相已下參仕、(大忌公卿空退出、)奉行藏人頭左大辨資矩朝臣、

〔日本書紀(二十一用明)〕十四年(○敏達、是年乙巳、)八月、渟中倉太珠敷天皇崩、九月戊午、天皇卽天皇位、宮於磐余、

二年(○丁未)四月丙子、御新嘗於磐余河上、

〔日本書紀(二十三舒明)〕十一年正月壬子、車駕還自溫湯、乙卯新嘗、蓋因幸有間以闕新嘗歟、

〔大日本史(八舒明)〕按本書顯宗紀、清寧帝二年、冬十一月、播磨國司辨新嘗供物、頼聚國史以此載新嘗

停祭

祭之首、本書新嘗字、再見于用明帝二年四月、公事根源以此爲始、而其後絕無、至此曰、去年十月幸温湯、故延至于此、據此則十一月新嘗、旣爲永式可知矣、

〔日本紀略村上四〕應和二年十一月一日乙卯、新嘗祭延引、依諸司不具也、　十三日丁卯、新嘗祭、　十四日戊辰、節會、

〔年中行事秘抄十一月〕新嘗節會小忌不候例

新嘗會停止之時新穀御飯、十二月神今食次供之、延喜十五年十二月一日例、〇又見年中行事抄

〔三代實錄清和一〕天安二年十一月廿日丁丑、停園韓神祭、自此之後、鎭魂新〇嘗〇等諸祭皆停止、

〔三代實錄清和十二〕貞觀十三年十一月十九日辛卯、停新嘗會、〇中略以太皇太后〇仁明后順子崩也、

〔三代實錄光孝四十四〕元慶七年十一月十六日己卯、停新嘗祭、於建禮門前修大祓、以內裏人死、諸祀停廢也、

〔日本紀略醍醐一〕延喜元年十一月十九日丁卯、依內裏穢、停新嘗會、

〔日本紀略冷泉五〕康保四年十一月十九日癸卯、新嘗祭廢務也、依諒闇停止、

〔扶桑略記白河三十〕應德二年十一月八日戊戌、辰時皇太子實仁親王薨、　廿八日戊午、依皇太子薨事、新嘗會等被止已了、

〔中右記〕天永二年十一月四日、酉時許、頭辨送書云、只今可馳參院、是依急事聊有僉議事者、著直衣馳參也、及秉燭、於北渡殿方有被議定事、殿下、民部卿、予、別當、修理權大夫爲房皆著直衣參仕、被仰下云、下野守明國、爲成要事、密々下向美濃國之間、於途中爲答無禮者、與往反人成鬪亂、切三人者首了、是信濃守廣房郞等、并左衞門尉爲義郞從、其後歸京參所々畢、穢氣遍滿天下之由旁有其疑、仍召取明國郞從、令檢非違使勘問之處每事實也、然者今月中諸社祭如何、人々議申云、於新嘗祭者可被止、臨時祭十二月可被行、諸社祭詩例、付本社可被行歟、且又可問外記也、明日主上〇鳥羽渡御西寢殿、事了可延行、過穢了後可

再興

還御者、以頭辨被申院(○白河)之處、可被問法家者、及深更退出、凡今年度々有如此穢氣、吉事神事頻以延引、頗可成奇事歟、　八日、晩頭依召參院、殿下別當新宰相(爲)於殿上人々被定明國穢氣事、(○中略)頭辨奉仰云、五節諸社祭被止、臨時祭來十二月者、件穢及今月卅日也、及深更退出、　廿日己卯、新嘗會停止之由有大祓云々、

〔園太曆〕貞和四年十一月十三日丙午、依法皇(○花園)崩御穢、諸社祭延引宣下事、頭長顯朝臣奉事、(○中略)去十一日、依太上法皇崩御、穢氣廣及天下、今月諸祭、宜令停止、(○中略)若如此可候歟、　廿二日乙卯、新嘗祭停止、仍禁中非御神事也、

文和四年十一月廿一日癸卯、新嘗祭事、依幣料無之、遂以停止云々、

延文元年十一月十五日辛卯、新嘗祭又不被行之、無料足云々、

〔續史愚抄(後桃園)〕安永八年十一月十一日辛卯、此日可有新嘗御祈、兼治定、而昨被停、

○按ズルニ、新嘗御祈ヲ停メシハ、此月九日後桃園天皇崩御アリシヲ以テナリ、

〔公卿補任(東山)〕貞享五年(○元祿元年)十一月廿二日、新嘗御祈、(初度、事行無之、)

〔基量卿記〕貞享五年十一月九日、新嘗會可有御沙汰、用脚少分之間、諸事被省略、畢竟被供新穀計之事也、依之來廿二日爲卯日之間、內侍所釆女參向吉田、吉田三位(兼連)申祝分ニ御治定、此分先自今年例年可有御沙汰、已往用脚調候ハヾ、又々事々嚴儀ニ可被行思召入也、　十五日、新嘗會依御再興、表向ハ御新穀之分にて、丹波國御領之內より、米五升、粟五升吉田へ可遣、禁中御領之中よりも、右之程山城國にて遣候由也、

〔季連宿禰記〕貞享五年十一月廿日己丑、右少史安倍亮仲來云、亮仲幷行事官重基依召令祗候攝政殿之處被仰出云、今年新嘗會可有御再興、就夫明後廿二日少外記一人少史一人可罷出吉田也、又行事官重基者、內侍所刀自一人來廿二日可沙汰出、凡一會今年爲御再興始之間、堅固密々之儀也、

因茲先不被仰下兩局之間、相構不可他言之由仰也云々、外記者中原友昌、史者安倍亮仲可參仕之由御請申之間、亮仲自今夜構神事云々、後聞、自今夜宮中爲新嘗會御神事由風聞、　廿二日辛卯、今夜於吉田被行新嘗會之由風聞、今年再興也、堅固密儀、仍兩局等不知之、外記中原友昌史安倍亮仲之由風聞、一昨日記之、後日少外記友昌右少史亮仲等來云、今夜之儀以去年大嘗會御道具大概被行之歟、公家衆一兩輩相見之、各狩衣之體也、外記史只袴肩衣體參之、毎事堅固密儀也云々、

〔友俊記〕十一月中の卯の日、新嘗祭をおこなはる、よし田にて卜部家おこなふ、御所にても其よしばかりあり、

〔日次紀事四〕十一月、○中略 中卯日、吉田社有新嘗會儀、卯日有二、則用終、卜部家祝部神人等勤之、

〔神道名目類聚抄五祭祀〕新嘗祭、○中略 此事モ久シク絶タリシニ、今上皇帝○東山 大嘗會御再興アリテヨリ以來、例年吉田ニテ行ハル、

〔後中内記〕元祿五年十一月廿日、自今夜至廿三日、鳳闕御神事也、於吉田依被行新嘗會也、

〔季連宿禰記〕元祿九年十一月廿日癸酉、依使者參權大納言亭、中御門資熙卿 亞相被相逢、被命云、新嘗會雖斷絶、近年唯神儀之事計如形被行之、是堅固密々儀也、然去十四日依本院御事、○明正 此事被延引、依之新嘗祭延引、重而被遂行之例可勘進、無所見者、諸社祭准據例等、尙今月中可勘進云々、申承之由了、

〔續史愚抄東山〕元祿十五年十一月二十日丁卯、新嘗御祈、內侍某參向神祇官代、供進神饌、如例云、密儀歟、 侍從三位兼敬奉仕、奉行藏人頭右大辨輝光朝臣、

〔後中内記〕享保七年十一月廿三日、今曉新嘗會御祈如例、辰刻被解御神事、

〔公卿補任櫻町〕元文四年十一月廿四日、新嘗御祈、今年新嘗祭御延引 奉行規長朝臣、○甘露寺

豐明節會

〔續史愚抄 櫻町〕元文四年十一月廿四日丁卯、今年可被行新嘗祭、去年被定、而無沙汰、因如近例有新嘗御祈、

〔公卿補任 櫻町〕元文五年十一月廿四日、新嘗祭再興、小忌上卿右大臣道香○一條 傳奏左衛門督○中山榮親 奉行公文朝臣○小路輔 廿五日、供解齋御粥、陪膳公文朝臣、豐明節會傳奏奉行同上、

〔續史愚抄 櫻町〕元文五年十一月廿四日辛卯、新嘗祭再興、行幸神嘉殿、以南殿擬之、有神饌御供進、宵曉次還御本殿、小忌上卿右大臣道香、已次公卿權中納言實惟已下二人、大忌公卿三條大納言利季、左兵衛督光綱等參仕、奉行藏人頭右中將公文朝臣、傳奏左衛門督榮親、關白兼香作進次第、

○按ズルニ、新嘗祭ハ後花園天皇ノ寛正四年ニ行ハレテヨリ永ク中絶セシガ、東山天皇ノ貞享五年ニ之ヲ再興セラル、然レドモ吉田ノ神祇官代ニ於テ其御祈アリシニ過ギズシテ、朝廷ニテハ、其度每ニ僅ニ神饌ヲ供セラレシノミナリキ、其後五十餘年ヲ經テ元文五年ニ至リ儀式ヲ再興セラレタリ、寛正四年ヲ距ルコト、實ニ二百七十餘年ナリ、是ヨリ年々恒ニ行ハレテ絶ユルコトナシ、

〔塵添壒囊抄 七〕豐明節會事 付宴會事

豐明節會事、十一月辰日也、又宴會共書也、昨日神ニ手向奉リシ胙ヲ、君モ聞食シ、臣ニモ賜ハン爲ニ、節會ヲ行ハルヽ也、宴會ヲモ、トヨノアカリトヨム也、凡テハ諸節會ヲ、トヨノアカリトハ申ベキ也、

〔內裏式 中〕十一月新嘗會式

其日遲明、皇帝還自神嘉殿、祭御殿訖、按據舊例、神祇官及御巫等祭殿、畢更參入自宜陽門、於南庭賜祿、大同年中、於內藏寮賜之、始自弘仁八年、於宜陽殿東南、參議以上一人專當、令中務丞唱名賜之、然當日寄門、倶西面拜舞退出、自承和年中、於神祇官賜之、但御巫料送內侍、大齋陣參入、小齋陣相替退出、大齋入自月華門、小齋相替出集宮內、所司預供張於豐樂院、小齋親王以下、參議非參議三位以上座、設殿南廂北面西上、自餘與正月七日儀同、但群臣參入、給物等以小齋者爲先、中務置宣命

位於導常位北一許丈、既而車駕幸豐樂院、諸衛服中儀服、（乘輿還前小齋陣、次大齋陣、）皇帝御豐樂殿、左右近衛就南庭陣、（大齋先就陣、次小齋就陣、在大齋北、並著胡床、未御之前預立之、）內侍臨東檻喚大臣、即到左近陣西頭謝座、訖登自東階著座、（升殿者皆用此階、）次皇太子登自同階、到座東而西面謝座謝酒著座、所司開儀鸞豐樂等門、訖閤司二人分坐逢春門南北、（掃部寮預設座、與正月七日同、）大臣喚舍人二聲、舍人共稱唯、少納言入自逢春門就版位、大臣宣、召大夫等、稱唯出喚之、親王以下共稱唯、（小齋先發聲、群臣相承、他皆效此、）小齋親王以下、參議及非參議三位以上一列、入自儀鸞門東扉、（若無小齋親王者、小齋參議非參議三位以上先入、又今日小齋不論高下、皆著青摺衫、）比入門諸仗興、次大齋親王以下、參議非參議三位以上參入、（並用東扉、）次小齋大齋五位以上東西分頭參入、（小齋必用西扉、大齋分用東西扉、但以神祇官為上、）異位重行、（各北面、小齋親王以下、參議非參議三位以上者一列、在東者用西為上、西者用東為上、）總立定、大臣宣侍座、共稱唯謝座、造酒正把空盞、（盞用昇殿者進也、）來授貫首人、（不論尊卑、授小齋第一人也、）更還却二三丈許北面立、親王以下再拜、訖以次著座、訖（以小齋為先、）諸衛共坐、（益供御饌之時、）起居與元會同、）凡昇東堂西堂者、諸王五位以上、及諸臣四位用第二階、自餘用第三階、內膳司益供御膳、主膳監益供東宮膳、大膳職益送群臣饌、觴行一兩周、吉野國栖、於儀鸞門外奏歌笛進御贄、訖大歌別當大夫、率歌者參入就座、坐定奏大歌舞五節、（或於殿上舞、不據舞臺、）其五節妓一行、下自西階垂兩面敷上、南行昇臺、導引姬四人以上兩行在前、到舞臺階下東西分坐、（掃部寮預設草墪於階東西頭、）舞訖小齋參議及非參議三位以上、及在兩堂小齋五位以上、先避座下階立、（昇殿者下殿、先自左近陣南三丈、更西折一丈、西面北上、不昇殿者立堂前、去堂一丈、大齋親王以下效此、）次皇太子先避座、（自承和年中、五節舞訖皇太子先避座、）次大齋親王以下避座、下階俱拜舞、（或令小齋大夫等三兩人、令奏倭舞、）訖治部雅樂率工人等參入、奏立歌、（或有勅傳之、）掃部寮立祿臺於庭中、大藏省置祿、辨官奏其數、（其詞云、絹若干匹進止申、）少時大臣進宣命文及祿法幷見參大夫等數、內侍傳取奏覽、訖大臣簡堪宣命之參議以上一人、授宣命文、受即復座、群臣避座、訖（儀與上同、）宣命大夫下自殿就位、宣制云、天皇我詔旨良萬止宣不大命乎衆聞食閉止宣、皇太子以下稱唯再拜、更宣云、今日波新嘗乃直相乃豐樂聞食日爾在、故是以黑岐白岐乃御酒赤丹乃穗爾食惠良伎止、罷止爲天奈毛常毛賜御物賜波止久宣、俱以次稱唯、（小齋先稱、自承和年中、皇太子先稱、次小齋、次大齋、）俱舞蹈、訖賜祿如正月七

日儀、其小齋人等更集宮內省解齋如常、

〔儀式五〕新嘗會儀

當日、○中略　皇帝還自神嘉殿祭御殿、訖大齋相替退出、（大嘗入自日華月華兩門、小齋相替向宮內解齋所、）所司預設備御膳幷群臣座饌、時刻乘輿幸豐樂院清暑堂、（御齋服、中儀、）式部丞錄率史生省掌等、東西相分入自禮成崇賢兩門、列立豐樂門以內、（東列以西爲上、西列以東爲上、史生省掌相分隨之、）彈正忠疏史生省掌等東西相分列立、（東西各以北爲上、史生省掌相隨之、）式部史生二人各持大札、左右相分進、（左西面、右東面、）唱計五位以上、稱唯列立、（左西面重行、右東面重行、）六位以下亦東西相分列立禮成崇賢兩門外、于時乘輿御豐樂殿、內侍置位記筥於大臣之座前、即臨東檻喚大臣、（若無大臣、參議以上得之、）大臣稱唯到左近陣西頭、謝座升自東階就座、（凡升殿者皆用此階、）次皇太子升自同階到座東頭、西面謝酒就座、所司開豐樂儀鸞兩門、（大臣升殿、即開門、不必待皇太子就座、）闈司二人出自青綺門、分居逢春門南北、（掃部寮預設座、）大臣喚大舍人二聲、舍人共稱唯、（預候逢春門外、）少納言入自逢春門就版、大臣宣喚大夫等、少納言稱唯、出自儀鸞門東戶、立屏幔外面北面喚之、親王已下五位以上共稱唯、次六位已下稱唯、（小齋先發、大齋幷群臣相承稱之、）參議已上一列入自儀鸞門東戶、比至門諸仗共起、次小齋大齋五位已上、東西相分參入、（小齋用西頭、大齋分東西頭、但升殿諸官爲上、）式部錄進立屏幔內左右稱容止、親王以下各就標、大臣宣侍座、親王以下共稱唯謝座、（未入之前、造酒正以下預立標所、）訖造酒正把空盞來授貫首者、（謂小齋第一人、跪而授之、）受之共再拜、（造酒正退却三許丈、北面而立、）親王已下謝酒、訖造酒正進跪受復標所、參議已上、依次就殿上座、次五位已上六位已下、東西相分就座、（待參議以上兩三人升殿、即四位以下依次就座、不必待參議升畢、凡東西堂者、親王五位以上、及諸臣四位者、用第二階、餘用第三階、）訖諸仗共居、爰式部錄二人左右相分、各執大札、升顯陽承歡兩堂、正五位以上座次、次史生等左右相分、錄諸司六位以下見參、訖內膳司奉供御膳、（左右各五人、著當色、）升自中階至第一階而留、授采女、降階趨退、初內膳司擎御膳進時、近仗起、饌畢乃居、（群臣亦同、）訖主膳監奉供東宮饌、大膳職奉賜群臣饌、一膳之後、吉野國栖在儀鸞門外、供御贄奏歌笛、訖大歌別當大夫率歌者參入就座、座定奏大歌、舞五節、（若有零雨、於殿上舞、）其五節妓一行下自西階、垂雨敝上南行升臺、道引姬四人以上

兩行在前、到舞臺階下東西分坐、（掃部寮預設草墪於階東西頭）舞訖皇太子先避座而立、次小齋五位以上先避座下階立、（升殿者下殿、自左近陣南三丈、更西折一丈、四位以上、不升殿者立堂前、去堂一丈、大齋親王以下進此、）次大齋親王以下降立、皇太子先拜舞復座、次大臣以下亦拜舞復座、訖治部雅樂率工人等參入奏立歌、（或有勅停之）掃部寮立祿臺於庭中、大藏省積祿、排大夫奏祿數、其詞云、絹若干匹綿若干屯進申、于時外記以見參幷祿法文進大臣、內記亦進宣命文、大臣總取而付內侍、轉取奉覽畢、大臣擇堪宣命參議已上一人授宣命文、受之復座、又群臣降、（儀同上）宣命大夫下殿就版、宣制云、天皇我詔旨良萬止宣大命衆聞賜止宣、皇太子稱唯再拜、（皇太子先稱唯再拜、親王以下次之、）更宣云、今日波新嘗乃直相乃豐樂聞食日爾在、故是以豐黑岐白岐乃御酒、赤丹乃穗食惠良岐耳退止爲天奈毛常毛賜御物賜止波久宣、皇太子已下稱唯拜舞、訖賜祿、（六位以下後日賜之）小齋人等集宮內省解齋、（其儀具大嘗會式）

大歌幷五節舞儀

當日早旦、兵庫寮鼓吹司夫等、就大歌所受鉦鼓鐸箕筥運送會所、次歌人幷琴師笛工等候儀鸞門屏幔外、吉野國栖奏歌笛、畢別當降自殿東階、南行出自儀鸞門東戶、東行更西向、宣令立臺、即大舍人二人著當色、奉鐘鐸鼓箕筥、（四列四人奉之）入自同門東戶列立舞臺南、（相去二許丈、鐘在東、鐸在中、鼓在西、相去六尺許、）退出、訖掃部寮設床子、（舞臺東相去一許丈、立大歌別當床子、鐘鐸南去二許尺、各立師床子、其南左右相分立御琴師床子各二脚、次設歌人已下床子、其歌人以下二人共一床、）訖別當喚之、歌人以下共稱唯、左右相分行列、（相去一許丈）其次第左彈御琴師二人、（著紫袍、各擎御琴、）次歌人十三人、（四人著紫袍、九人緋幷縹袍、）次笛工四人、擊拍子四人、次鐘師一人、（並著當色）右彈御琴師二人、次歌人十三人、（服色同左）次一二三鼓師各一人、（各著當色）次擊拍子一人、（服色同左）次鐸師鼓師各一人、（著當色）立定、別當宣喚之、共稱唯、別當引人自戶、彈御琴已下依次入、各當床子前折而立、即鐘鐸鼓師、自歌人座邊趨共就床子、訖鐘幷鼓師相目搖鼓、各三下、訖別當以下共就床子、訖笛工調擊聲、次調御琴、空搔御琴三聲、（詞云、乎奈可、須可可起、）次拍子三度、（詞云、乎奈天、）數曲、訖奏五節歌、于時舞妓四人一行徐步、降自殿西階、經右近陣東頭、踏兩行在前、至舞臺階下、東西分坐、（掃部寮預設草墪於階下）舞訖升殿、即奏大直歌、本末二度、安米四度、訖退出如初入儀、大舍人等撤樂器、

〔西宮記十一月〕辰日新嘗會豐明賜宴事(此日早旦、供解齋御手水粥之後、輕服人著吉服參入、)

內外辨裝束同正月七日、但南殿庇東第二間、立小忌親王已上座、(北面西上)舊例件座立第三間、臨舞姬列立之期、諸司更改座、立第二間云云、而年來之例、自始立第二間、已爲流例、

當日早旦、諸司裝束殿上幷庭中外等如常、于時天皇御南殿、左右近衞將曹各一人、率中將以下近衞以上、(中少將執杖、近衞服上儀、)入自日華月華兩門、進立紫宸殿南階東西、卽寢儀御於御座、左右陣共稱警蹕、然後居胡床、于時大臣起自陣座、著靴就內辨兀子、(此間親王公卿共起、自同座到鳥曹司、著靴就外辨座、其昇時納言以上用西階、參議用東階、但其降時親王參議皆一同用西階、凡今日之事、始自就外辨座、至于給祿之時、皆以小忌人爲先、出王卿未就外辨座、少納言辨北、少納言南、史外記官掌外記史生等著座、式兵兩省輔以下列立於承明門左右、式東、兵西、各謝行、諸大夫引列廊上之由、)須臾內侍臨東檻、大臣起座、稱唯出從軒廊第二間、而折西行進立左仗南頭、(當中少將等胡床、今案六寸許西進、)可南去七許尺、(若有儀者、大臣立座稱唯、指南行二三度、乃謝座、訖昇殿云云、)侍謝座(再拜)一揖右廻同階、於殿南(自階西行、於□□東謝座、)庇東第三間(乾面)謝座酒(采女率盞)訖著座、次左右近衞將曹各一人率近衞各八人、到承明門長樂永安等門、次闈司二人出自殿西、經校書安福兩殿前、進而分居於承明門左右草墪、次內辨大臣召舍人二聲、大舍人四人於承明門外壇下、同音稱唯退歸、須臾少納言起座、入自承明門東扉、經舞臺東頭西行、更北進就版位、大臣宣云、刀禰召(世)、少納言稱唯、退出於承明門外、(此間小忌親王以下一々起座、列立於左兵衞西頭、先是諸大夫等、又左右列立云云、)立壇下召(當東扉去二許丈)、召畢退出於屏幔門外、爰小忌親王以下、自東戶一々進入、(此間諸伏起、內裏式云、參議以上後自親王五許丈、四位後自參議七許丈、五位與四位連、但參議已上列行之間三許丈、今案親王徐步、參議行遲速不同、須其出進以心消息、)經舞臺各立標下、(小忌以下各出立標)諸大夫左右相分列立舞臺東西、(幷參議以下小忌者、神祇官爲上列立於右、)立定、內辨大臣宣侍座、(其詞之侍爲、)小忌親王以下共稱唯再拜、畢造酒正把空盞、自櫻樹下趨進、跪授貫首人、貫首人共跪、(居突左膝、立企右足、卽各押其膝、爲起居之力、)搢笏把盞、(以左右手把之、)造酒正持盤趨還本所、此間貫首人持盞乍跪小拜起、群官共再拜、拜訖而立、于時造酒正持盤趨進受盞、貫首人相跪授盞、把笏乍跪小拜而起、(每立定各有揖、)卽以次昇自東階、各著座、諸大夫各就幄下座、先是殿上及幄下著饌、諸司豫辨備、畢上下座定、式部錄二人各執簡、相分入自長樂永安兩門、點檢諸大夫

參否、而退出、次酒部内豎等、入自日華門、群立軒廊、次甕下酒部内豎、入自長樂永安兩門、群立左右鐙下、于時采女正幷令史、率内膳正奉膳幷進物所膳部等、從南階登供御膳、（此間采女令史等、立版位左右、稱警蹕、殿上階下共起座、供畢共居、）供訖退出、供太子膳、次登送群臣、次供白黑二種御酒、次供太子、隨又賜群臣、（稱酒名等賜之、欲取盃先拍手、）次供列御酒、供每度賜太子及群臣、觴行一兩巡後、吉野國栖於承明門外奏歌笛、（其詞云、賀芝乃不羅與古羽須遠惑利天賀女多於保美嶮味頁於世古世丸賀朕、）進御贄、御酒三獻之後、内辨大臣起座、磬折奏曰、大夫達（爾）御酒給天許訖稱唯復座、即召參議、（其詞云、某朝臣、）參議起座稱唯、進立於大臣後、（相去六七許尺、磬折西北面、）大臣宣曰、大夫達（爾）御酒給（部）、參議稱唯、左廻降自東階、仰外記云、可召御酒勅使者、外記注御酒勅使等名、授參議、（左右二人、選高聲者爲之、或說曰、其名薄押著於笏、即令近衛等候問見否之由、畢昇殿召之、）參議畢昇同階、進立於南簀子敷、（東第二間、舊說云、去第二柱坤柱四許尺、西北面、）一々召御酒勅使等名、大夫等遙稱唯、進立左右仗頭、（北上北立、）參議宣云、大夫達（爾）御酒給（部）、大夫等稱唯各退歸甕下、參議右廻還著本座、次大歌別當（今案、待大臣氣色、別當可起座、若無別當之時、以納言爲代、但大臣自御後令奏事由、勅許畢可定遣、）降自東階、出自軒廊東第一間、斜行出自承明門東扉、著同門外壇上床子、仰左兵衛陣令召大歌人、（候永安門西腋、）勅歌人等訖、初發音之後、大舍人曳鼓鉦琴鐸等、（鐸儀細塗手、）列立於承明門内壇下、掃部寮以床子敷脚立同門内、別當進立召之、歌人等共稱唯、即別當及歌人等入自同門、著此座、待召、（別當座在舞臺乾角、）須臾又發鐘鼓之聲、一節之後、咏畢、大臣起座磬折、奏聞可召大歌別當之由、（可奏官姓朝臣、可奏本官、）稱唯復座、即召參議、參議（召詞同上、）立座稱唯、進立大臣後、大臣仰可召大歌別當之由、（其詞、警給左乃叙貢乃府督今案左近藤原朝臣召、）參議稱唯、右廻立南簀子敷、（東第二間也、）召大歌別當、（召畢即退還、但件別當或親王或納言以上、故其日詞不同、若召親王則云、某官乃美古、若召中納言則云、中乃物申官乃藤原朝臣、又別當若不參入、内辨大臣令奏事由、訖以納言爲代官、可示仰、）別當參上、（如初儀、）次掃部寮移床子、（各著當色、天曆五年、大臣仰參議令供、）即發笛琴等聲、（若遇降雨、則歌者舞等笛吹等、中分相分到宜陽殿、掃部寮隨立床子、發歌笛之後、進人々行而著同殿床子、是則不絶歌聲也、）次舞姫未進立御前之間、仰内豎令下小忌臺盤幷座、次女官等秉紙燭、進立於御前柱下、（秉燭之者立柱下、即大歌始、）次五節舞姫出自御座西方、列於御前庭、（每舞姫、各有引導、）舞訖、舞有五節、五節別一廻、令五廻畢、舞姫一々退出、次樂人等退出、掃部寮撤床子、訖皇太子起座、出自母屋東第四間、

立同間庭、(乾面)次小忌以下降自東階、列立於左仗南頭、(北上西面、異位重行、)次諸大夫列立左右幄下、(此間諸仗興、内豎式云、舞)(訖小齋参議、及非参議三位以上、及在西宮、小齋五位以上先進座下階立、次皇太子先進座、中宮、第四舞、皇太子先次大齋親王以下、進座下階拜舞、或令小忌大夫三両人奏倭舞、訖治部雅樂寮人等参入奏立歌、或有勅停之、)訖大弟先拜舞、(或云、拜舞)了、次親王以下共拜、訖各還著本座、次左近陣進俘囚見参、式部録進諸大夫見参、外記插諸大夫見参並俘囚見参目録等於書杖、於左近陣座奉覧大臣、訖、(今案、或先内覧奉宣命、大臣見了、見参之次、相加給之外臣、他皆如此、)次宣命文並見参俘囚見参目録等、插一杖、候於東階下、此間掃部寮樹祿臺並床子等於舞臺左右、大藏省積祿、輩辨一人立於舞臺艮角、(北面)奏曰、絹若干匹、綿若干屯進上申、訖著座、次大臣執插見参之書杖、昇自東階、經親王座後、到御帳艮角、授内侍、把笏還立於障子戸西柱下、(西南面)内侍奏覽、訖大臣進倚返取見参書杖等退下、授書杖於外記、取宣命見参並目録及俘囚見参等、昇殿著座、召宣命使、(以納言参議、臨時用之云々、)被召者起座稱唯、到内辨大臣後、賜宣命使、指笏賜文、右廻暫復本座、次大臣又召参議、参議起座稱唯、到大臣後、大臣賜見参目録等文、参議給之、左廻降自東階、斜行著録所床子、以目録等文授辨大夫、次皇太子起座之儀如初、小忌以下降自殿上、列立於左仗南頭、如前、(諸大夫見之)立定之後、宣命使降自東階、出自軒廊東第一間南行、(此間諸仗立)當日華門北扉、作南面、揖、面西折、斜行就宣命版位、揖而指笏披文、(右顧面拝之)宣制一段、(先太子可拜歟)親王以下共再拜、拜訖又宣制、(頒拝之、儀如初)親王以下共舞踏、宣命使卷文把笏揖、面左廻還、當日華門北扉、作東向揖而北行、升殿著座、訖(太子先可復座歟)小忌以下以次昇殿著座、諸大夫還著本座、次式部輔代執簡、立於左右祿臺南前、唱親王以下名、爰小齋親王以下隨召起、稱唯、降自東階、到日華門下、一々進跪、搢笏取祿、一拜自日華門退出、事訖宸儀御本殿、(但皇太子退還之、儀未詳、)

〔北山抄十二十一月〕辰日節會事(西宮記云、式兵兩省、列立承明門東西、候諸大夫列云々、七日節、使引武官列、兵部預參、此日无其事、而兵部猶列者非也、式部列立東西、彈正又參入、行糺彈而已、具在儀式、)

天皇御南殿、御座定、内侍召人、大臣謝座、參上、(内辨若讓小忌、改著位袍行事、)次皇太子著座、次開門、闈司分居、大臣召

舍人、少納言參入、（小忌少納言若不參、大忌座召有例、）大臣宣、召刀禰、小忌王卿、（若遲參、不能引列、雖一人引列參入、）大忌王卿、次小忌大
忌五位以上、東西相分參入、（小忌王卿一列在前、大忌王卿重行如常、始自外辨座、至于給祿時、小忌爲先、小忌五位以上在西、神祇官引列、次大忌東西相分如常儀、）小謝座
謝酒著座、（小忌座在南廂、）次供御膳、賜臣下饌、（小忌爲先、）次供白黑御酒、次給臣下、（揖、名給之、拍手飮之、）次供御酒、次給群臣、
觴行一兩巡、國栖奏歌笛、仰御酒勅使如常、三獻後、大歌別當下殿、（別當欲下殿之間、王卿稱ウマノハナムケ馬鼻向、殊勸飮酒云々、）出承明門、
召大歌人、（左兵衞陣門東一間壇上、立胡床著之、即仰彼陣令召、此間陣蓋酒肴、佐府獻盃、大歌人等列立幔外、別當立壇上北面召之、稱唯畢、別當以下相引入門、列立舞臺席頭、發鐘鼓音、別當
爲內辨、若不參時、預經奏聞、令他納言召之、）掃部寮立床子於舞臺南、別當以下著其座、（別當座在舞臺巽、）奏歌笛一節、大臣奏、令參
議召別當、（稱其官姓、如恒、）別當參上、大臣以內豎傳仰所司、令移大歌座舞臺北、（舊例、或仰近仗令召、或令內豎召之、或雖無召、別當參上後進
舞臺北、清涼抄只令移座者、以之可知召由歟、雨儀、先在承明門、及舞妓進舞、移座宜陽殿西廂、）又令內豎移立小忌王卿座於東第二間、（元在第三間、此間王卿退
下、或本自殿之第二間、無移立儀、承雖有但、依座下歟、）舞妓進舞、（殿司四人執脂燭、立南柱下、闈司引導、）舞畢還入、大歌退出、所司撤座、皇太子先避
座、次小忌王卿、及在西幄小忌五位以上避座、次大忌王卿以下避座、倶拜舞、（王卿立左仗南頭、西面北上重行、小忌在前、或內辨
稱次人、此間若陣見見參、不預此列、或小忌大夫和舞、雅樂寮奏立歌云々、停止已久、）次掃部寮立祿臺、大藏省積祿、辨官奏目錄、次大臣奏宣命
見參、宣命使宣制、群臣拜舞、式部唱見參、賜祿等儀如常、（出御以前、奏諸國司爲申擁政入京、非未赴任輩可預宴事、如例、若此間有來使京外輩、身輩
不參、依勅預之、若有官人不具考文、不收請司者、本司經奏聞令召預、）若有朔旦冬至、出御以前、大臣令奏詔書草、（天曆九年左大臣令加奏叙位宣命草、依異例
也、）次奏清書、（不奏宣命、依於南殿可奏也、）叙位儀如七日、（丑寅日間有議、）其後節會儀式如常、

〔江家次第十十一月〕節會次第

裝束司供奉上下裝束、外記催諸司、式部立標、中務置宣命版、若非一上者可仰內辨奏外任奏、若大歌
別當不參、若又內辨爲大歌別當者奏其由、仰他納言令勤之、
外記請殿上見參、（往年頒於階下度之、）若小忌納言爲內辨者、可改著朝服、（昌泰元年、權大納言菅原卿、）
時剋天皇渡御南殿、內侍二人持璽劍、命婦女藏人各四人、（額櫛、裳、泥繪唐衣、華鈿、）相從、藏人頭候御裾、（執柄不參給時、）藏
人持式并御靴等扈從、御厨子所候明義門內、（殿陪御膳、）近衛引陣、（將曹一人前行、中將執纛幟戈、少將執緋幟戈、自日月華門入、進著殿前、遲參將左

（自陣方出、右自殿上方出、先令官人立杖榛云云、）王卿著外辨、（由自宣陽門、入烏曹司東戸、著靴由南戸、西進、登自假橋、）内辨於闈所令押筥紙、（一上自里第、押書以大人、）於陣後召外記令押、大將者或給隨身令押、）天皇著帳中倚子、（先於北廂著靴、置笏於東机、外記置式於西机、）近仗稱警、内辨於陣後著靴、内辨著宜陽殿兀子、（聞近仗警畢著之、）内侍臨東檻、（出自東御屏風、自母屋北障子邊東行、到東格子下南行、到東階上、留居邊入、近侍藏人一人引導之、）内辨起座、微音稱唯、自宣陽殿壇上北行、自軒廊東第二間出、到左仗南頭、南去七許尺乾面立、一揖再拜、一揖右廻經本路、自軒廊第二間入、經東階幷殿東廂南第一間母屋東一間西行著座、（但可許座次著之、）開門（左右將曹率近衞入人、開）（承明門幷長樂門左、永安門右、左右兵衞開建禮門、兩左右近衞候東西殿廂、）闈司分居、（二人出自射場、到承明門左右腋、著草墪、兩經安福殿廂、）内辨召舍人、（二音）大舍人四人稱唯、少納言代嚴版、（右外辨之小忌少納言參入自承明門左扉、若小忌少納言有障者、大忌少納言座召者例云云、開立承明門北壇上中央、少納言參入閾、王卿起座、從屏幔）（南列立左兵衞陣頭、西面北行云云、）内辨宣刀禰召（世）、少納言稱唯出召之、（左廻於幔中出召之）王卿參上、（入自承明門左扉）小忌爲先、若小忌納言遲參時、小忌參議一人爲貫首參上、有例云云、兩經南廊幷左腋門春興殿砌、近仗起、王卿列立標下、（小忌王卿一行在前、大忌王卿重行、而立宜陽殿東廂、大夫東西相分、）内辨宣敷尹、群臣再拜、酒正授空盞、（授小忌納言、納言相跪取之、置盞於右、）（云云、執坏不執盞、酒正過左近陣、不取笏、作居少拜立、跪先左、起先右、）群臣再拜、酒正取盞、（小忌一盞跪退、取笏一拜起）之、王卿就堂上、經軒廊二間、自東階升、小忌人先著廂座、内辨以下入自母屋東一間、（著南座）北座人經東廂、入自中間北邊著、群臣著幄、式部録點檢、（近代不見）王卿起座、訪五節所、（内辨幷大辨不起、或内辨幷參議一人不起、）酒部立、内豎八人入自日華門、立軒廊下、酒部入自長樂永安門、立幄下、采女撤御臺盤、内膳入自月華門、供御膳、（還時、内膳別當公卿下殿撤之、内膳正以下令史等又）群臣諸仗共立、（供御膳畢居）次供（手、行、膳部等擎御膳相從、正令史留版、令史勝膳部八人相從登南階、等一級、采女等出自御前西間、撤取供之、酒、鹽、醬、飯、蒸餅、餲餬、桂心、）膳、（自西階供之、鮭子、鯛、鮨、餠、傳餬、）次給臣下餛飩、（大膳）御箸下、臣下隨下箸、（可搢笏、近例或倚於臺盤也、）次供鮑羮、（催餅撤）次供御飯、（撤餅）（餛飩）給臣下飯、（大炊或供御飯之次給之）次供進物所御菓、（十度）次供御厨子所御菓二度、（一度八坏、一度四坏、）給臣下汁物菓等、（大膳）御箸鳴、臣下應之、供白黑御酒、（供八度、各四度、）次給同酒臣下、（各一度、所名給之、拍手飮之、）一獻給臣下、國栖奏、（内辨仰參議大辨、參議大辨下殿、仰外記令候之、國栖於承明門外奏歌笛、）二獻給臣下、仰御酒勅使、内辨起座、磬折申之、大夫達仁御酒給ヘ、無、御許畢復座、召參議一人、被召者進立内辨後七尺、内辨仰之、大夫達仁御酒給ヘ、參議稱唯、左廻下殿東階、召

外記取夾名見之、還昇立南簀子敷東第二間東邊、(西面立、西邊二尺、)召勅使四人名、不待參入仰之、大夫達(仁

御酒給へ、畢復座、(右廻、)三獻給臣下、大歌別當下殿下東階、到承明門外、著左兵衛陣門東一間壇上胡床、

仰左兵衛官人令召歌人、歌人等列立樓外、別當立壇上北面召之、別當引歌人等入立舞臺南頭、(發物

聲、)播部寮持床子列立門內、(別當座在舞臺坤、)別當以下就件床子、(大歌人發物聲、)內辨仰令召之(內辨起座、磬折奏之、某朝臣召來、勅許後、)別當參上、播部移床子於舞

召參議一人、(謂上卿之、某朝臣召世、參議稱唯、左廻立殿南簀子敷召之、上宣、召畢右廻下自東階、令近衞官人告之、若別當畢知參上者、不必下殿歟、)

臺北、(南修立臨殿西廂、內辨以內豎傳仰所司令移、)大歌人移著、(內辨或仰近仗令召、或仰內豎近以移座知召由、歌人等移著、)下小忌豪盤、(仰內豎、元在第三間、或本在第

二間時、不移、)舞妓進舞、(出自殿南西方、)女官四人秉脂燭副南柱立、件舞姬立於御前幷左右間、上臈二人當御座

間、(西上、)次二人各立其東西間、閑司引導舞畢退入、(擧○袖○五○變、故○曰○五○節、)大歌退出、(所司撤座、)小忌王卿起座、(近仗立、)內辨以

下下殿共拜舞、(西面北上、異位重行、)小忌在前、或內辨於軒廊列次人、此間著陣見見參、不預此列云云、王卿以下

復座、內辨著陣見見參、(引上片足、東殿戰、)式部進諸大夫見參、左近陣進俘囚見參、外記插一杖覽內辨、見畢返

給、內記以宣命覽內辨、內辨見畢給外記、外記插一杖、播部立祿案、(大藏敍錄、)內辨到階下、(外記逢杖、)內辨執杖、經

王卿座東幷北、到東御屛風南頭、付內侍奏覽之、(拔笏退、右廻立東障子戶西柱下、坤面、)奏覽畢返給、內辨進搢笏取之、左

廻退下、於東階下返書杖、外記取文杖參上著座、召參議一人、(多召中納人、)被召者進立內辨後、內辨給宣命、

(參議給之、右廻復本座、)又召參議一人、(多用大辨、)被召者進立、(如上、)內辨給見參、(參議給之、左廻下殿就版所、)以目錄下辨、辨下史、小忌

以下下殿列立、諸仗立、宣命使著版、宣制一段、(群臣再拜、)又一段、(群臣拜舞、)宣命使復座、群臣復座、式部輔召唱、群

臣下殿到日華門前待、次跪蘆弊上、取祿一拜、(向乾、)出自日華門、

天皇還御、(近仗警)○中略

外辨儀(式部輔正入自春華門外、立左兵衛陣南、)

王卿自壇下經辨少納言床子北進之、若件床子遍北立時、令召使引之、辨少納言著、(以北爲上、少納言著北、四位辨時辨

著北、)有遲參公卿時、辨少納言立下式筥、(令召使下之、非第二上卿之時令下畢、)召外記被問事等、(大忌上卿問之、)大舍人候哉、刀禰

列候哉、式部彈正候哉、（問或不問）國栖候哉、外記每度申候由、上宣令候、與、王卿參上時辨起座磬折立、（○中略）

無殿上五節、（同年○承平五年）

寬平昔奏聞例云云

所司失不置宣命版、然而計程立、（○承平六年中略）

乘燭後參入人人不著座（天慶五年元利親王）

式部丞著青摺引列（天曆五年）

省稀例、九條大臣定仰、（同承平、○中略）

同節會無御出儀

裝束司供奉上下裝束、外記催諸司、式部立標、中務置宣命版、

若非一上者、可仰內辨奏外任奏、

若大歌別當不參、若又內辨爲大歌別當者奏其由、仰他納言可勤由、

藏人頭、率內侍并行事藏人渡南殿、

外記請殿上見參

時剋近仗引陣

內辨出陣後著靴、（若爲小忌人者、改著位袍）王卿著外辨、（於島曹司著靴）式部并彈正列立東西、

內辨著宜陽殿兀子、內侍臨東檻、

內辨謝座參上、（雨於兀子南謝座）起微音稱唯、自宜陽殿砌北行、自軒廊東第二間出、到左仗南頭南去七許尺乾面立、一揖再拜、一揖右廻經本路、自軒廊第二間入、經東階并殿南廂第一間母屋東一間、西行著座、

但可計座次著之、

開門、（左右將曹率近衞八人、開承明門并長樂門、永安門、左右兵衞開建禮門、兩左右近衞得東西殿廊、）

闈司分居二人出自射場、斜到承明門左腋著草墊、雨經安福殿廊、

内辨召舍人、音二 大舍人四人稱唯、少納言代就版、在外辨之小忌少納言參進、若小忌少納言有障者、大忌座召有例、入自承明門左扉、 雨立承明門北壇上中央、少納言參入間、王卿起座、經屛幔南列立左兵衞陣、南頭西面鴈列云云、内辨宣、刀禰召世、少納言稱唯出召之、左廻於幔中息出召之、高稱唯之、

王卿參上入自承明門左扉

小忌爲先、若小忌納言遲參時、小忌參議一人爲貫首參上有例云云、雨經南廊幷左腋門春興殿等砌、近仗立、

王卿列立標下、小忌王卿一行在前、大忌王卿重行、小忌五位以上在西、神祇官引之、大忌五位以上東西相分、

雨儀立宣陽殿南第二間以南

内辨宣、敷尹、　群臣再拜

酒正授容盞、授小忌納言、納言獨相跪取之、執坏不執盤、置笏於右、退酒正還過左近陣程不取笏、乍居少拜立、跪先左、起先右、

群臣再拜

酒正取盃、小忌獨跪返之、取笏小一拜起、王卿就堂上、經軒廊二間自東階昇、小忌人先著庇座、内辨以下自母屋東一間入著南庇座、北座人經東廂入自中間北邊、

群臣著標、儀式曰、五位以上見參議以上兩三人昇殿、不必待參議昇畢、共東西相分就座、

式部錄點檢執簡入自長樂永安等門

王卿起座訪五節所、下自東階、經軒廊宣仁門陣後南殿仁壽承香殿等、内辨幷大辨不起、

酒部立内豎八人、入自日華門立軒廊下、酒部入自長樂永安門立標下、

所司給臣下饌

次下箸

次給飯汁物（大炊頭率下所奉仕也）
次給白黒酒（各一度、采名給、拍手飲之、）
一獻
國栖奏、（宿老內辨、若有子姪參議者、可仰之、）內辨若仰參議者、大辨下殿仰外記令催之、國栖於承明門外奏歌笛、如御忌月時、唯奏歌不奏笛云云、往年笛奏大歌、近代不然、
二獻
仰御酒勅使
內辨召參議一人、被召者起座立內辨後七尺、內辨仰云、大夫達御酒給ヘ、參議稱唯、左廻下殿召外記、取夾名、昇殿、立南面東第二間東邊簀子敷、（西面立）召勅使四人名、不待參入、仰云、大夫達（言）御酒給ヘ、畢復座、（右廻）
三獻
大歌別當下殿、（先例欲下間賜馬身、向盃酒數行云云、）下東階到承明門外、著胡床、件胡床在左兵衛陣內門東一間壇上、仰左兵衛官人令召歌人、此間左兵衛陣羞酒肴於別當、佐若尉勸盃、大歌人等列立幔外、別當立壇上、北面召之、別當引歌人等、又立舞臺南頭發物聲、掃部寮持床子列立門內、（別當座舞臺巽）在別當以下就件床子、大歌又發物聲、
內辨召參議一人、被召者立內辨後、（內辨仰付其官姓朝臣、召假令民部源朝臣、）參議本仰、左廻立殿南簀子召之、（詞同御酒勅使儀、）召畢右廻下自東階、令近衛官人告之、若別當早參上者、必不可下殿歟、別當參上、掃部移床子於舞臺北、（西移宜路殿西廂、）以內豎傳仰所司令移、大歌人移著、內辨或令仰近仗、或令內豎召之、近例以移座知召由、歌人等移著、下小忌臺盤、（御內豎元在第三間、或本立第二間、時不移、）舞妓進舞、（出自西方、女官四人秉燭、副南柱立、件舞妓立於南廂、上薦二人當御座間、西上、次二人各立東西間、闈司引導、）舞畢退入、（樂終五反、放出五節、）大歌退出、所司撤座、小忌王卿起座、（近仗立）內辨以下下殿拜舞、（西面北上、異位）

行、小忌在前、或内辨於軒廊儲次人、此間著陣見見參、不預此列云々、

王卿以下復座

内辨著陣見見參（脱靴、或引上片足、）

左近陣進俘囚見參、式部進諸大夫見參、外記插一杖覽内辨、見畢返給、内記以宣命覽内辨、内辨見畢給外記、外記插一杖候之、（或内記進宣命、外記進見參、内辨即給外記、令插杖、）掃部寮立祿案（舞臺左右）

大藏積祿

辨奏目錄

内辨奏見參宣命（令持外記）

渡階下到弓場殿、付藏人令奏之、返給之後、給書杖并書於外記、如本插之相隨、内辨到東階取文、上自東階復本座、

内辨召參議一人（召帶劍人）被召者進立内辨後、内辨給宣命、（參議給之、右廻復本座、）又召參議一人、（召大辨、如前進立、）

内辨給見參、（參議給之、右廻下殿就祿所、）以目錄下辨、辨下史、

小忌以下下殿列立　　宣命使著版

宣制一段（群臣再拜）　　又宣制一段（群臣拜舞）

宣命使復座　　群臣復座

群臣下殿（小忌爲先）取祿、跪蘆蓆上、向乾一拜、出自日華門、手取祿者、大藏省輔以下取奉之、自餘祿者内豎取之云云、著座後進參公卿令藏人奏、其詞曰、朝間有所勞、不候列（天）候陣、

舞姬舞舞臺事（長和以前）

晴儀／久停止事

女樂拜後小忌大夫和舞事

雅樂奏立樂事

外辨儀

式部彈正入自春華門外、立左兵衛陣南、王卿自堂下經辨少納言床子北進之、若件床子遲北立時、令召使引之、辨少納言著、（以北爲上、少納言著東西位、辨時辨著北、）有遲參公卿時、辨少納言立下式宮、（令召使下之、第二上卿時歟、）召外記

被問事等、（小忌上卿不問、大忌上卿問之、）

大舍人候哉　刀禰列候哉

式部彈正候哉、（或不問）　國栖候哉、外記每度申候由、

上宣令候（與）　王卿參上時（辨立揖）

御南殿、引陣出御、警蹕、內辨著兀子、王卿著外辨、內侍出、內辨謝座昇、開門、闈司著、內辨召舍人、二大舍人稱唯、少納言就版、內辨宣、召刀禰、少納言稱唯退出、王卿以下列立、內辨宣、侍座、王卿以下謝座著座、式部點檢、酒部立、采女撤御臺盤帊、供御膳、供粉熟、供飯汁、賜臣下、供白酒、賜臣下、供黑酒、賜臣下、一獻國栖奏、二獻御酒勅使、三獻大歌別當降、一節後召大歌、別當參上、歌人進舞臺北、下立小忌臺盤、女官進脂燭、舞姬參進、舞畢拜舞、播部立祿臺、大藏積祿、辨奏目錄、內辨奏宣命見參之儀、賜宣命、著祿所、王卿以下列立、宣命使就版、王卿以下拜舞、式部召唱、王卿以下賜祿退出、

同節會朔旦年儀

裝束司奉仕上下裝束

外記催諸司

藏人催內侍闈司幷女官等、階下設饗、式部兵部立標、中務置宣命版、

播部立位記案

藏人所渡見參於外記

上卿著陣

被仰詔書事、徙罪以下成免、八虐、故殺、謀殺、強竊、私鑄錢、常赦不免、欠負官物之類、不在此限、以赦前事告之、以其罪罪之、嗣因、功臣末葉、才効著聞、特加栄賞、文武官主典已上叙一級、在京正六位上、諸史生以下、直丁以上、并天下常赦不免、大辟死罪以下、成赦除、但八虐、故殺、常赦不免者、不在赦例者也、大赦、大辟以下、八虐故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、成皆赦除之、謀有宿心謂之謀、故殺[illegible]強盜[illegible]竊盜[illegible]　高年量賜物、

奏草

奏清書、以上作居伏座令奏、宿老人也、

內辨召外記、問諸司具否、

外記申代官、

被奏外任奏、

召檢非違使、被仰施行以前可免囚由、仰內辨、非第一大臣之時也、奉仰渡外座、仰官人、令敷膝突、

天皇渡御南殿、

內侍持下名、臨東檻、

內辨著靴、到東階下給之、著宜陽殿兀子、召內豎二、內豎稱唯來立、

內辨宣、式乃司兵乃司召世、

內豎稱唯出召之、

兩丞參入立、

內辨宣、式乃省參入給下名、

次召兵部如前、

內辨起座入陣後方、

近衛陣殿前、

王卿著外辨

內辨押笏紙（以次上儀）

天皇著御帳中

內侍置璽劒東机

藏人置式西机

近仗稱警

內辨又著宜陽殿兀子

內侍臨檻

內辨起座、（唯）到左仗南頭、

謝座再拜、參上著座、

上官著階下

開門、闈司著、

內辨奏宣命畢退下、返杖持宣命參上、內辨召內豎、稱唯參入立、

內辨宣式（乃）省兵（乃）省召（世）、

出召之

二省輔丞（代官）立櫻樹東（北面西上、六位在南、）

內辨宣式（乃）省、

輔稱唯

內辨給宮（招省宣命入儀）

輔先給宮於丞、更又給宮、

次內辨召兵部給笞
置笞、式部置間兵部趁度、畢出自日月華門、內辨召大舍人二
少納言代就版
外辨王卿起座鴈行
內辨宣、止爾召、
少納言稱唯出召
王卿列立標（北面西上）
近仗立
內辨宣、之支井二、
群臣再拜
酒正來授空盞相跪（不加盞）
群臣再拜畢返盞
王卿著堂上（右廻）
諸仗居
二省引叙人參入
諸仗立
內辨召參議以上一人給宣命、納言者任大臣以上之日召之、小忌幷內辨以下下殿列立、西面北上、宣
命使就版、經兩机間、
宣制一段、群臣再拜、
又一段、又再拜、

宣命使復座

群臣復座

式部大輔代就北案召唱

少輔就南案召唱

次兵部輔召唱畢

兩輔共退出

叙人左右相共依相拜舞退出、不必待二省出門、　御箸下　臣下應之

供白酒、(四度)供黑酒、(四度)給臣下二度、

一獻　國栖奏、(大臣)可仰外記、

二獻　仰御酒勅使(奉仰參議左廻下殿、取外記夾名、入筥中、立殿簀子、)

西宮抄、立第二柱坤四尺乾面第二間、(自此第二柱西去二尺、西面立、)一々召四人名、後微音仰、大夫達御酒給(倍)、右廻復座、

三獻

大歌別當下殿、到承明門外、著胡床、仰左兵衛召歌人、大歌列立、別當立、別當引歌人等、立舞臺南頭外發物聲、播部持床子、列立門内、(別當座舞臺巽)在別當以下就件床子、大歌又發物聲、

內辨奏、可召某朝臣由

奉仰召參議一人仰之

參議左廻出南檻召之、(後下殿令近衛官人召之)

別當參上

下小忌臺盤(仰內豎)

舞姫出（自西第三間出、上髮、闈司各相副、女官秉脂燭、添南柱、）舞畢退、王卿下殿拜舞、畢復座、

內辨下殿見見參等、或內辨不復座見見參、大藏積祿、

內辨奏見參宣命、畢返杖復座、

召參議一人給宣命、參議右廻復座、

又召一人給見參、參議左廻著祿所、諸仗立、

王卿以下下殿列立

宣命使就版、宣制一段、群臣再拜、

又一段、群臣再拜、

宣命使復座

主上入御

王卿一々給祿

〔年中行事（加茂氏人保隆所傳）〕十一月同日（○中辰日）宴會事

其儀同元日節會、三獻後大歌別當下、（下自東階、出自軒廊二間、出承明門東扉、於壇上仰左兵衛令召歌人、此間左兵衛獻盃酒、大歌先是候永安門西腋、發聲、大舍人叩鼓鉦列立承明門內壇下、掃部寮立床子於承明門內壇下、別當及歌人近著門內床子、別當床子在舞臺巽、）大歌發物聲、內辨奏可召別當由、（起座奏之、歌笛一曲畢後）召之、勅許後召參議仰之、參議起座稱唯、立於大臣後去七尺奉仰、左廻出南檻召之、畢（左廻、或右廻、）下自東階、令近衛官人告其由、別當參上、（如出儀、）次掃部移床子於舞臺東頭（寬弘抄、北頭、）歌人進著床子發歌笛以下小忌臺盤、（件臺盤本自在東第二間、令內竪下之於第二間、）次舞姫出、（出自北障子西戶、經母屋西一間進於南廂、先是舞妓各候御後、髮上一人各相副、殿司女官四人□於南廂柱南邊排大臈燭、）舞妓舞、（上臈二人在南廂額間、下臈二人在左右間、有播磨衣目染□、）舞畢退出、大歌退出、次掃部撤床子、次王卿下堂拜舞、（西面北上、異位重行、聞之案拜、）諸仗起、王卿著堂上、諸仗居、內辨下堂著陣見見參、（大臣以下散位以上一通、侍四一通、卷遣、於散位中左近衛陣進之、祿法一通、內記退口宣命、以上插一杖、外記以祿法宣命橫插之、）立案於舞臺左右、大藏積祿、辨奏目錄、內辨奏見參目錄、覽畢返內辨給之、返

杖於外記、參上著座、召參議一人給之、（宣命使右廻復座、見參人左廻下殿、錄行著祿所、次見參下殿、）內辨以下下殿列立、（異位重行北上西面、）諸仗立、宣命使著版、宣制一段、（群臣拜舞、）宣命使昇堂、王卿復座、諸仗居、式部輔召唱、王卿下取祿、天皇入御、（近代不待王卿下殿入御、仍在座大將警蹕、）

〔朝野群載 十二內記〕新嘗會（用書杖）

天皇（加）詔旨（良万止）宣大命（乎）衆聞食（倍止）宣、今日新嘗乃直相（乃）豐樂聞食（爪日爾）在、故是以黑（支）白（支乃）御酒、赤丹穗（爾）食（倍惠良支、）罷（禮止）爲（天奈、）常（毛）給（布）御物賜（久止）宣、

某年十一月日（中卯日）

〔柱史抄 上十一月〕中辰日豐明節會

乘燭參內、分配內記、書設例宣命、（五位雖參內、以分配六位、令勤仕之、）南殿出御之儀如常、外辨上卿入自敷政門、著承明門外座床子、內辨著宣陽殿兀子、內侍召人、內辨謝座昇、政官內記等著階下座、舞妓進舞了歸入、公卿降殿、拜舞之後、內辨著陣、令召內記、內記起階下座、經軒廊幔門、著杖獻書杖、內辨披取宣命、內記持空杖、自本路歸著階下座、（書杖於階下、遣陣下部了、）次內辨召外記、宣命使（參議）宣制兩度、群臣拜舞、次賜祿各退出、

〔四節八座抄〕新嘗會

一小忌宰相事（外辨座在左大臣上、納言兀子、參議床子、）

不必著陣、（上古或著、）始自外辨（向島居曹司之時、依位次著軾、著座之時、始爲先小忌也、）至于祿所、毎事以小忌爲先、但訪五節所之時依位次、小忌上卿若不參者、參議爲貫首、須取空盞、雖大臣起座、不動座不平伏、（外辨座、及堂上皆同、）又雖父子家禮之儀、縱父內辨飮酒之時、爲先小忌座列立之時、小忌王卿一列在前、大忌王卿異位重行、謝酒之儀見上、著堂上座之儀、經南簀子著之、（其座在南廂東三間、）居物之時爲先小忌、白酒黑酒隨居飮之、下小忌大盤之時起座下、徘徊上簀子巽角、（或降東階出軒廊、爲簷云々、）下訖之後歸著、大忌參議數少之時、從役有例、（宣命使、勸酒使、召大歌別當、祿所等役之也、）但參內辨後之路、經南東簀子入自東而參進、或不降簀子、昇座下云々、進此路宜歸著之時左

廻、
一訪五節所事（疊昇臺上節訪之、早以歸著、其路出入南殿艮角戸、）
大辨宰相不訪之、大辨不候者、最末參議留座、（近代納言內辨之時、參議不留座、尤違例也、參下﨟一人可候座也、）爲先上﨟不依小忌歟、
一召大歌別當事
其儀大概同御酒勅使、承內辨命、出南廂東面立簀子召之、（但顧南一度）後右廻降殿、以陣官告召之由於別當、參著之後、參議著座、（近來已見別當參進先著座）
一改大歌座於舞臺北事
遲々之時、依內辨命下殿、以陣官催之、掃部寮移其座於舞臺北之後參議復座、或內辨不被仰此儀、左右只隨其命也、

〔世俗淺深秘抄　上〕節會時、主上御出時、近仗稱警、必不依左將、若左ハ少將、右ハ中將候之者、雖右近中將可稱之也、永久四年十一月、豐明節會出御時、右近中將雅定候列、而左近少將顯國稱之、或記難之、但可尋事歟、行幸時雖有左宰相中將及中納言中將、猶右大將稱警、然者雖右中將稱之、有其謂歟、

〔建武年中行事〕十一月卯日、○中略今夜新嘗の祭なり、○中略中の辰日とよのあかりの節會なり、新嘗祭になゐりたる上卿宰相辨をみをきる、よべは諸司のをみを束帶のうへにきたるを、けふはうるはしくあをずりをもちゐる、上卿宰相、外辨の上首をつとむ、南殿のひさしに兀子をまうけて、內辨以下座につく、盃さきにとるなり、ときに白酒黑酒の盃をとり、大歌所の別當大うたもよほして、舞姫のぼる、五たび袖をかへしてかへりいる、ことに堪たる上達部五節所とぶらひて、催馬樂などうたふ、節會の儀つねのごとし、せちゑのほど、露臺の亂舞あり、せちゑの座にて御遊あることあり、ことに堪たる人々を御帳の東にちかく召て此事あり、ふんのつかさに御ことめす、御手ならしといふなり、ちかくは正月十六日にぞこの事ありし、○中略露臺の亂舞に、ひんたゝらう



年中行事繪卷　五節舞姫圖



たふ、殿上人立様などあり、大かた五節のことゞも、ことしげゝれば中々くはしからず、べちにしるすべし、

〔公事根源十一月〕豐明節會　中辰日
是は今年の稲を神に奉らせ給て、今日君もきこしめし、臣下にも給ふ故に節會行はる、新嘗の祭に参たる上卿宰相辨小忌をきる、よ人は諸司の小忌を東帯のうへにきたるを、けふはうるはしく青摺をもちゐる、上卿さいしやう外辨の上首をつとむ、南殿のひさしに兀子をまうけて、内辨以下座につく、白酒黒酒の盃をとり、大歌別當大辨もよはして、舞姫のぼる、五度袖をかへしてかへりいる、ことにたへたる上達部、五節所とぶらひて、催馬楽などうたふ、節會の儀常のごとし、節會の程、露臺の亂舞なり、びんたゝらうたふ、殿上人たち様などあり、むかしは節會の座にて御遊ある事あり、ことに堪たる人々を御帳の東にちかくめしてこの事有、ふんのつかさに御ことめす、御手ならしといふ、十六日の節會などにも、時にしたがひてこの事はありしなり、

〔日本書紀十一仁徳〕四十年、是歳當新嘗之月、以宴會日、賜酒於内外命婦等、

〔古事記下仁徳〕將軍山部大楯連、取其女鳥王所纏御手之玉釧、而與己妻、此時之後、將爲豐樂之時、氏々之女等皆朝參、爾大楯連之妻、以其王之玉釧、纏于己手而參赴、於是大后石之日賣命自取大御酒柏、賜諸氏々之女等、爾大后見知其玉釧、不賜御酒柏、乃引退、

〔古事記下履中〕此天皇略○中本坐難波宮之時、坐大嘗而爲豐明之時、於大御酒宇良宜而大御寢也、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年十一月丙辰、賜宴於五位已上、并无位諸王、祿各有差、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年十一月壬辰、賜宴於五位已上、詔曰、今勅久、今日方新嘗乃猶直比豐乃明聞許之賣須日仁在、然昨日能冬至日仁天雨天、地毛潤万物毛萌毛延始天好阿流良止念仁、伊豫國與利白祥鹿乎獻奉天在加、有禮志與呂許保志毛止奈毛見流、復三乃善事乃同時仁集天在之奇事止記○止甚希有止

念畏(末利)侍(候)、諸臣等(止)共(仁)異奇(久)麗白(伎)形(乎毛)(奈)見喜(流)、故是以黑記白記(乃)御酒食(倍)惠良伎、常(毛)賜酒幣(乃)物賜(禮止之天)御物給(波止久)宣、賜祿有差、

〔日本後紀 二十四嵯峨〕弘仁五年十一月壬辰、宴侍臣、奏五節儛、賜祿有差、

〔類聚國史 九神祇〕弘仁八年十一月甲辰、宴五位以上、奏女樂、賜祿有差、

〔三代實錄 二十六清和〕貞觀十六年十一月十九日甲辰、宴群臣於紫宸殿、不卷御簾、大歌五節舞如常儀、賜祿有差、

〔三代實錄 二十七清和〕貞觀十七年十一月廿五日甲辰、宴群臣於紫宸殿、帝御簾中、親王公卿侍殿座、五位已上侍幄、奏五節舞如常、宴竟賜祿各有差、

〔北山抄 十二十一月〕辰日節會事

延長六年十一月廿六(〇六一本作一)日、飮酣左大臣(〇藤原忠平)奏、寬平年中、有小忌親王賜酒大忌座之例、卽奉勅仰重明親王、親王依右衞門督(〇恒佐)說、進自東階、入母屋東廂、(小忌內豎執瓶子)到大臣座頭跪、大臣揖、卽平(〇平一本作半)跪飮、更酌與大臣、大臣勸式部卿親王、以後勸唱往來之法(〇之法二字一本作文云)、大臣無(〇無一本作云或無)勸盃酒、自小忌座上來、而受自東廂、非例云云、上曰、今日擬小忌、小忌勸盃大忌、大忌須勸小忌座者也、然遂不行之、

〔政事要略 二十六〕淸涼記、中卯日新嘗祭事

承平四年十一月廿日(〇丙辰)、新嘗會、申一剋上御簾中、三獻畢、內辨大臣歷座北、進簾下、使內侍奏、可賜諸大夫酒事、奉行了復座、雨降、歌者避雨、音聲斷絕、右大臣離殿仰、移歌者座於宜陽殿、大臣謂余云、思先年有此例、移(〇移下一本有亦字)而外記確執无例、抑如何、答云、實見此例、在延長五六年間乎、大臣語次陳云、昔寬平七年有聞命、平敷之故事、其後此事已絕、彼時爲中將、奉供出居、勅召書司、卽就障下召之、書司稱唯、仰云、御手奈良之万爲禮、書司卽取杼女(倭琴名)出障戶、則取轉置之御前、爰召堪事王卿有遊宴云

云、五節舞畢、右大臣令問歌數、云卌終、大臣年來多奏五六十終、而近年如是舞急也、上已還御、內侍亦不留、藏人頭師輔在簾中執之、　七年十一月十九日（〇戊辰）新嘗會、雨降、宜陽殿標、小忌參議以上幷大忌親王等、一列、晴儀大忌標在小忌後、有疑問諸卿、民部伊望卿云、依殿庇地狹、改從權儀也、

〔九暦〕天暦二年十一月廿三日（〇戊辰）豐明節會參內、未三刻御南殿、內辨左閤、申二刻引列、今日每事停滯、子刻事了、諸司小忌服、前例用佐渡布、而所服用似商布、未有如此之事、又外辨上達部座甚乏有事煩、此日祿有綿無絹、

〔日本紀略（村上四七）〕應和元年十一月廿日庚辰、節會也、天皇出御南殿、

〔小右記〕永觀二年十一月廿二日戊辰、秉燭出御南殿、其儀如例、先是左大臣被奏外任奏、（〇中略）大相府被候御後、五節不參上以前被退出、（〇中略）時々降雪、內辨左大臣出晴謝座、其後降雪無間、仍被行雨儀、內辨召大舍人、良久稱唯、仍內辨起座令催、其後稱唯、甚緩怠也、小忌參議公季卿御出南方之後參入之、以惟成朝臣有所勞、令奏遲參之由、有勅許、仍從腋參上、惟成更又口內辨云云、不知前例歟、五節參上、（亥四刻）余林子（〇林子字恐誤）二闌入五節未出之間還御、此間舞姬退下、心神不宜仍退出、傳聞見參祿目祿、內辨進御所、令奏云云、

長德五年（〇長保元年）十一月廿五日甲辰、申刻許參內、諸卿參入、（式部大輔輔正一人不參）酉刻許出御南殿、小齋參議懷平不參、數度召遣也、僅昏黑參入、（无小忌納言、參議人著行神事云々、）一右大臣（〇藤原顯光）以下引著外辨、以西中門外南腋、爲外辨、左大臣（〇藤原道長）爲內辨、西中門不閇、外衞陣候本陣、群臣入自西中門、儀式如例、但參上自西階、大納言時中、道綱（〇中略）等相引向、右大將（〇藤原道綱）五節所、一兩巡後、向余五節所、少時退歸、雲上人多來、余徘徊五節所、即參上節會座、舞了余退出、（時亥終許歟）

寬仁元年十一月廿二日丙辰、今日新嘗會、仍參內、（申刻）諸卿未參、（〇中略）候殿上之間、藏人頭定賴（右中辨）仰云、可奉仕內辨者、奉仰著陣座、（南座、昏黑）召外記、外記長國參入、問諸衞參不、申云、皆參入、又仰云、已欲臨夜、

外任奏代官等事早可申行、退出、即參進云、外任奏候、仰可奉由、盛宮進之、以頭辨定賴奉攝政、返給云、可令侍列者、返給、長國仰可令侍列由、稱唯退出、即參來著膝突、申代官、仰於小庭可申由、驚而退居小庭、不知故實歟、召大外記文義、仰非例由、非可恐爲後々也、小忌少納言惟光參入、中納言能信未參、仰可催由、參議去夜不參云々、秉燭後能信卿參入、諸卿出外辨、（大納言齊信、中納言教通、經房、能信、參議道方、通任、公信、）余起座著靴、近仗未陣、度々催仰僅引陣、少時稱警蹕、其後余著兀子、（兀子立西對巽壇上、）內侍遲出、良久不見、陣官云、進出御隔子下早退歸了者、仍起座稱唯、退歸出自軒廊西第二間、（內裏儀出入東二間、此院以西替東、仍用西二間、）進右仗南頭、（平）謝座、左廻、（此間右中將兼經立座前、失也、）昇自西階著座、次開門、闈司不見、庭燎不明歟、以主殿女官令呼藏人、藏人範永來、御障子戸口間、闈司著不云著座了者、仍召舍人二聲、大舍人稱唯不聞、良久後、小忌少納言惟光經舞臺東就版、（須經臺西、若案內裏儀歟、失誤也、）宣召刀禰、稱唯退出、惟光立壇上召之、進時用晴儀、召時用雨儀、大斑駁也、次群臣（小忌爲先、）參入、（諸卿經南西等廊列立西對巽、諸大夫不見、少納言用晴儀、公卿用雨儀、問案內了貫首、大納言云、參列間有小雨、頗勞詞歟、少納言傳雨儀喚、仍可答用雨儀由歟、但少納言立壇上傳召由、後日大外記文義所申也、）就雨儀、（標猶在庭、）諸大夫不見、仍暫不仰、卿相喚、仍宜侍座謝座謝酒了參上著座、（小忌座在南廊西二三間、）諸卿向五節所、〇中略左大辨道方在座、自餘向五節所、道方白地退下、即歸昇云、攝政忽有惱氣、仍可難被候御後、供白黑酒之後可奉令還御、以大辨令催御膳、從庭中供之、卿相與座、近仗同與、今日事、晴雨儀等相交、未知其由、采女頻供御膳、亦供粉熟、次令居臣下粉熟、（今日事、先小忌著饌、勸酒等事、同參列儀、）了候氣色、即下御箸、臣下應、次供白酒、又臣下、（拍手、飮、黑酒同、）次供黑酒、次臣下、次供一獻、次臣下、了入御、余稱警蹕、內侍進出御屛風邊、諸卿復座、此間還御本殿、以左大辨令催國栖奏、外記申云、國栖不候、次二獻了召右兵衛督藤原朝臣、（召詞、右ノ兵ノ舍人司ノ藤原朝臣、）稱唯進立余後、仰、大夫仁御酒給ヘ、稱唯退下、臨南檻召仰、（召三人、不召令一人、失誤也、）復座、大歌別當大納言齊信退下向南門、（用晴儀、列時用雨儀、）頭之發歌笛聲、（一節歟、）召左大辨源朝臣、（召詞、左ノ大イ多辨ヒ源朝臣、）稱唯進立余後、仰、權大納言藤原朝臣召ヒ、（召詞、借ノ大比物申司乃藤原朝臣、）稱唯臨南檻召、（召音不聞、）三獻了大納言參上、此間雨降、仍移大歌座西對巽、以左大辨令召仰也、以內豎令下小忌臺盤、大歌發歌笛聲、主

殿女官等執脂燭、來上達部座方、若是行事藏人所行歟、出自東方執脂燭、傍柱可立之由召仰了、女官四人、取脂燭副柱立、雜女群居御階間簀子敷、狼藉殊甚、頭藏人等不行歟、舞姬進出舞間、余爲見見參退下之程舞姬退入、不及剋如不舞、同散樂、余、大納言齊信、中納言經房、參議道方、公信、退下拜舞、余著陣召外記、外記長國參進、仰見參事、插書杖參入居小庭、召見參(諸大夫以上侍臣見參錄目錄〇中略)召宣命大內記義忠進之、見了返給、外記長國令插宣命見參等、余參進御邊所、付藏人範永奏覽、覽了返給、余到西階下、長國進宣命見參祿目錄、取副笏參上著座、內豎執續松、居坤簀子敷、驚奇無竊、齊信卿不候、只經房、道方、公信在座、左大辨云、五節拜了還昇之間、指笠布衣者及數多、雜人走昇殿上、曳落御帳帷壁代、執喚登滿、悉取朱器、又無御殿油、仍召內豎令秉燭者、輕輕多端未有如此、召右兵衛督給宣命、召左大辨給見參目錄、其後退下、余經房卿二人列立西對巽(面北)宣命使就版、(版位置西對巽柱內、須置南壁上、宣命使立版前、使無便、示可立版良之由)兩段宣制、拜舞如式、宣命使復座、須參上復座、然而事太不便、不參上徘徊軒廊之間、宣命使退下、相共三人就祿所給祿退出、(亥三剋)

〔左經記〕寬仁元年十一月廿二日丙辰、著小忌裝束參內、殿上庭中少辨等裝束皆如例、小忌上(新中納言)遲參、仍及秉燭出御、一獻之後還御、仍宣命見參等、內辨進御所令藏人奏、(範永、進攝政御宿所覽之、御下給內辨、)自餘如常、今日內膳御膳皆用魚、又解齋御粥同用魚、但膳御膳御精進也、是宇佐使未還參、仍月來御精進也、雖然晴御膳用御精進物頗無便、仍有定供魚也、

萬壽二年十一月十四日壬辰、早旦參內、行所々御裝束事、及申剋事始、節會儀如常、及丑剋事了、但今年依多凶事、人々向五節所不被脫衣、又昨日无童御覽云々、

長元元年十一月十四日甲辰、早旦參關白殿、(〇藤原賴通)次參內行御裝束事、及晚御出南殿、陣秉燭、會儀始、是依小忌遲參也、及丑剋事了還御、今年有過差制之中、故殿(〇藤原道長)御忌年之中也、仍無五節所饗、但依宰相中將消息、密々行五節脫衣、理髮者上達部、同密々被過差云云、

〔小右記〕長元元年十一月十四日甲辰、豐明節會、仍參內、○中略召外記信任、問外任奏事、申候由、仰令進、須無仰之前申外任奏候由、口先例卻進之、○中略左中辨進加賀守俊平宣旨請文、見了仰可奏由、同辨傳勅云、諸國未一兩年、如元危惡由有聞食事、可令精好、又綱丁可決杖事如初、宣旨宣下了、頭辨云、頻被仰小忌上達參由者、雨脚難止、南庭猶濕、謝座時如何侍乎、以頭辨令漏奏、仰云、可改雨儀者、仰賴隆眞人、卽移版位標等於宜陽殿、諸大夫饗未移春興安福等殿、此秉燭後出御南殿、○中略後聞近親上達部、幷雲上侍臣地下人等、列中將五節所、忩々脫衣、難被制過差、於簾中所爲歟、又前日伺關白氣色、依有內應者、

〔定家朝臣記〕康平三年十一月十九日、節會、申刻出御、內府爲內辨、左衞門督爲小忌上卿、四位少納言傳召外辨上卿參入之間、主殿寮擧松明、一獻之後入御云云、源大納言已下御內府五節所、依有制无纓頭事、

〔水左記〕永保元年十一月廿二日甲辰、酉剋許著束帶、與新中納言參內、向陣、公卿未參、頃之人々參入、○中略博陸藤原師實於簾中有被傾之氣、女官進脂燭、此間博陸自簾中被示云、脂燭女官可出自何哉、民部卿申云、自西階可進歟、次舞姬出、舞了、群臣拜舞、○中略此間右大將春宮大夫云、小忌人向祿所、近代不見之事也、可被用他人歟、予答云、前小忌人所役常事也、何不著祿所哉、博陸自簾中被示云、小忌人所役有前例、何難之有哉者、仍著祿所了、次宣制如常復座、次退下、賜祿退出、

〔中右記〕嘉承元年十一月十六日豐明節會也、○中略宰相中將忠教著小忌著陣座也、口傳云、著小忌時強不著陣座云々、是小忌列衆人上、仍著仗座、頗依無便宜歟、其理可然歟、

永久二年十一月廿一日壬辰、節會也、著小忌秉燭之間參內、○中略著小忌人、強不可著仗座由有口傳、是不可著人々下故也、

大治五年十一月十七日丙辰、節會之間、予所勞更發不出仕也、依不審後朝尋民部卿之處、返事云、○中略供內膳御膳之後、內辨被催行白黑酒、民部卿內々申不可然之由、仍采女任例供御飯、次臣下飯、次

供進物所十盃、次被催臣下汁物、民部卿□□□又內々御居子所供膳之後可被催、仍被留也、一獻之後入御、內侍取御劒、次々如例、抑入御之後、□□□女官等昇出御膳御大盤、未曾有事也、國栖不參之由、兼所風聞也、是依有許中事也、而內辨降殿催之著座、民部卿云、內々國栖不奏風俗如何、答云、奏歌不奏笛者、是無實也、又無便儀歟、

〔長秋記〕大治五年十一月十七日丙辰、臨曉參節會、○中略宰相中將忠宗卿不居陣、依著小忌歟、小忌不居陣事近代謬說也、此後出御云々、民部卿已下諸卿著外辨、小忌爲先、左中辨師俊朝臣、少納言忠成著小忌同著之、民部卿令下式筥後、召外記問諸司、此後大舍人未稱唯、先少納言起座參、頗違禮也、右門督左兵衞督不著外辨、爲見內辨作法歟、次宰相中將、民部卿、別當藤中納言、下官、左大辨、出幔外屬列、少納言出召、此後次第參入、右金左武加立謝坐謝酒如常、宰相中將無指失、下官示戸部云、近年訪五節事絕、此事思給、尙於今夜可被訪也、戸部從是、內辨小忌左大辨外皆起座、出自東廂北戸、經渡殿北舍東面、向五節所、乃歸著、先之供御膳畢、此間舞姬參上、

出五節人、公卿訪以前、向自五節所相待也、而長實卿列公卿、向忠宗卿凡不向小忌不向五節所之由被存歟、尤不可然歟、雖小事已乖先例、仍記耳、供膳間、民部卿頻被傾內辨遲催事意歟、皆白黑時打手、今夜下官外不皆然、

一獻後、內辨起坐催國栖云々、不奏歌笛、民部卿問由緖、禮部於笛不奏於歌奏、畢戸部云、奏歌不奏笛事、不吉時例也、不可然云々、

後聞、山城國國栖、被責國司申訟、而依無裁許不參云々、

二獻御酒勅使、左大辨召詞不聞、近來作法歟、三獻後入御、宰相中將不稱警蹕、可尋、內侍取御劒從、諸卿居、下官取笏傍坐、人々請益、起坐出自東階、經軒廊南行、欲出自東中門之處、隼人等雙肩立、呵叱聞乃可似懈怠、仍退出、歸著舞臺巽床子、大歌召人等自兼在此所、

始於堂上居物時、密々以内豎仰外記云、大歌召人令候與、近代臨期尋催間、時剋押遷故也者、今依此催廻、

歌人等於舞臺南發歌笛音、有床子、然而居出發之不知故、

若件床子遷北之料、暫尋常不立歟、

一曲畢、小忌參議立簀子敷召下官、以左近府生久末告召由、仍參上復座、大歌遷舞臺北座、先之立床子等、次舞姬進出雙居御前、女官持脂燭副柱立、大歌發曲、舞姬舞畢歸入、諸卿下立拜舞、

此間左大辨云、列後之人何程可立哉、予答云、當第二三人去裾三尺許立由所承也者、仍此定立、

内辨不立拜、於陣見見參等、主殿官人不擧火、仍陣座暗然、又其作法不委、又不知於何所見不審也、經階下奏聞、畢昇堂上、此間兩相公下官外無還昇人、召左大辨給目錄、直下著床子、次召宰相中辨賜宣命、參議復坐、内辨已下下立、此兩度西面也宣命使就版宣制、拜舞畢就祿所跪蘆葉、大藏給祿、一拜退出、左大辨公卿給祿間倚居床子、故實公卿給祿間起坐歟、○中略藏人兵衛尉雅兼聞公達可嘲哢之由、晩跡隱畢云々、甲斐守範隆童已下、間或引臥、或以脂燭打懸、如此令煩、是出五節之由不觸公達故云々、鴨院對馬存命云々、已上藤中納言語也、右衛門督○源雅定云、三獻間汝謝酒内豎、尤不可然、座下無人時不謝酒事也、此雖可然、老後恥辱也、○記者源師時、時年五十四、

〔源平盛衰記〕一五節夜闇打附五節始幷周成王臣下事

法皇○後白河常ノ仰ニハ、忠盛ナカラマシカバ、誰カ朕ヲバ佛ニ成ベキトテ、○中略關國ノアレガシ、庄園ノアケガシ、重々モタバント思召レケレバ、雲ノ上人嘲憤テ、同年○長承元年十一月ノ五節、二十三日ノ豐明節會ノ夜、闇打ニセント支度アリ、○中略抑五節ト申ハ、昔淸見原帝○天武ノ御宇ニ、唐土ノ御門ヨリ、崑崙山ノ玉ヲ五ツ進給ヘリ、其玉暗ヲ照事、一玉ノ光、遠五十兩ノ車ニ至ル、是ヲ豐明ト名付タリ、御秘藏ノ玉ニテ、人是ヲ見事ナシ、天武天皇芳野河ニ御幸シテ、御心ヲ澄シ、琴ヲ彈ジ給シ

ニ、神女空ヨリ降下リ、清見原ノ庭ニテ廻雪ノ袖ヲ飜ケレドモ、天暗シテ見エザリケレバ、彼玉ヲ出サレ、仙女ノ形ヲ御覽ジキ、玉ノ光ニ耀テ、

乙女コガ乙女サビスモカラ玉ヲ乙女サビスモ其カラ玉ヲ、ト五節歌ヒツヽ、五タビ袖ヲ飜ス、五人ノ仙女舞事各異節也、サテコソ五節ト名付タレ、彼舞ノ手ヲ摸ツヽ、雲ノ上人舞トカヤ、其時拍子ニハ、白薄樣厚染紫ノ紙、卷上ノ糸、○糸、平家物語作レ筆、柄繪書タル筆ノ軸ヤト、ハヤス也、仙女ノ衣ノ薄透通リテ嚴キ有樣ガ、薄樣ト厚染紫ノ紙ニ相似タリ、舞ノ袖ヲ翻、翻ヨリ上方ニ卷上タル貌、絲ヲ以テ卷タルガ如ク、柄繪ヲ書タル筆ノ軸ヲ差上タル樣ナレバ、昔ヨリ五節宴醉ノ肩脱ニハ、必ズカクハヤスヲ、御前ノ召ニ依テ、忠盛ノ舞ケル時ニ、サハナクテ、俄ニ拍子ヲ替テ、伊勢平氏ハ眇(スガメ)ナリケリトハヤシタリケリ、目ノスガミタリケレバ、取成ハヤサレケル、最興アリテゾ聞エシ、

〔源平盛衰記一〕兼家季仲基高家繼忠雅等拍子附忠盛卒事

忠盛右ノ目ノ眇タリケレバ、伊勢平氏ハスガメ成ケリトハ拍子ケルニコソ、或人ノ申ケルハ、忠盛心憂クモハヤサレツル者哉、如何計口惜カリケン、其答ヲバ如何ニセザリケルヤラン、痛ク心オクレセヌ男トコソ世ニ知タルニト申ケレバ、又或人ノ語ケルハ、昔モ係ルタメシナキニ非、村上帝ノ御宇、左中將兼家ト云人アリ、北方ヲ三人持タレバ、異名ニハ三妻錐(ミツメギリ)ト申ケリ、或時此三人ノ北方、一所ニ寄合テ妬色ノ顯レテ、打合取合、髮カナグリ、衣引破リナンドシテ見苦カリケレバ、中將ハ穴六借トテ宿所ヲ捨テ出給ヌ、取サフル者モナクテ、二三日マデ組合テ息ツキ居タリ、二人ノ打合ハ常ノ事也、マシテ三人ナレバ、誰ヲ敵共ナク、向フヲ敵ト打合ケルコソ咲シケレ、是モ五節ニ拍子ヲカヘテ、取除ル人ナキ宿ニハ、三妻錐コソ撥合ナレ、穴廣々ヒロキ穴カナトハヤシケリ、太宰權帥季仲卿ハ餘ニ色ノ黑カリケレバ、人黑帥トゾ申ケル、藏人頭ナリケル時、ソレモ穴黑々黑キ頭哉、如何ナル人ノ漆塗ラント拍子タリケレバ、季仲卿ニ並テ御坐ケル基高卿ソ舞レ

ケルニ、此人餘ニ色ノ白カリケレバ、季仲卿ノ方人ト覺シクテ、穴白々白キ瓠哉、如何ナル人ノ薄押ケント拍シ返シケル殿上人モオハシケリ、右中將家繼ト云人、祖父ノ代マデハ時メキタリケルガ、父ガ時ヨリ氏○氏一本作打タエテ、有カ無カニテ御坐ケルガ、下﨟德人ノ聟ニ成テ、舅ノ德ニ、右ノ中將ニ成給タリケリ、此モ五節ニ絶ヌル父云ニ及バズ、祖父ノ代マデハ家繼ゾカシ、左曲ノ右中將トゾ拍子タル、貧キ者タノシキ妻ヲマウクルハ、左ユガミト云事ナレバ、角拍子ケル也、花山院入道太政大臣忠雅ノ十歳ニテ、父中納言忠宗卿ニ後レ給ヒ、孤子ニテオハセシヲ、中御門中納言家成卿ノ播磨守ノ時、聟ニ取テ花ヤカニモテナサレケレバ、是モ五節ニ、播磨米ハ木賊カ椋ノ葉カ、人ノ鮐ヲ付ルハトゾ拍子タリケル、上代ハ角コソ有シカ共異ナル事ナシ、末代ハ如何アルベキト人ノ心覺束ナシ、

〔長秋記〕長承三年十一月廿三日戊辰、秉燭間別當送消息云、小忌上卿作法不審也、若參內者、必於內裏可散歟也者、留使且注送少々事、

一小忌上卿、近來不著陣座是謬說也、從本位著陣座、著靴後先諸卿著外辨後尾、給祿拜爲諸卿先也、空盞時諸卿立定、以咳音從內辨、內辨敷尹宣後、再拜了立、造酒正持空盞還來跪時、相跪受盞、不取盞、酒正過左近陣南頭之間、小拜立再拜、諸卿同之、造酒來跪時、相跪授盞、正歸時取笏作居一揖、立又揖、放列昇堂上云々、里內時自本座在二間、立座不可令下歟、及賜祿爲先諸卿歟云々、

戌刻參內、○中略先例小忌上卿參後始節會、而今夜上卿不見、仍案內件旨答給、問外記之處申參由、仍所奏其由也者、內侍臨西檻、內辨起兀子微稱、直進右仗南頭謝座、被歸軒廊、此間中納言伊通卿問下官云、內辨進入軒廊、更於南庭而直進謝座如何、下官心中所存如此、然而不謂左右、

後日案內之處、大納言被答云、予失也、但故左大臣堀川內裏時如此云々、此事未詳、不見御日記、

內辨宣後諸卿參上、○中略小忌上卿以下放標進東北立、中納言伊通强加制止令退、予云、庭狹少無可

立列之處者、不可立改歟、然而依納言確執改立直、〇中略人々云、可訪五節所歟、下官無可訪之道、爲之如何、諸卿用之、

五節所北對東妻也、自堂上向者、可經中宮御所前、自堂下行者、可渡南殿前庭、自西方向者、可過藏人所及女房局雜々所、仍旁無便宜也、加之近代五節所不儲酒肴、從公卿不訪者、强不可訪歟、如此事可隨便宜歟、

內膳警蹕供御膳、諸卿起座甚無音、相尋間、堂上無職事、堂下無陣官、內辨仰采女被尋之處、付東階欲供云々、關白命云、於采女可候南階、不可向東階、於內膳可著南階之由可仰者、此間頭中將適出來、蒙此宣仰官人等、人々令著南階、內膳供間諸卿居、次供臉膳、居餛飩之間下官退座、〇中略此內裏南殿西廂上格子、懸壁代、准內裏儀、懸母屋限、於座出庇矣有何事哉、又西階北立布障子、籠簀子敷、准大內東廊歟、

〔台記〕久安二年十一月十四日、晚頭右宰相經定送舞姬裝束、使敦任季時外記來云、左近府申云、近江國俘囚被召誡使廳內、俘囚愁之不參、不能奉見參者、仰云、早以此旨可申攝政殿者、戌剋參內、依御物忌不出御、俘囚不參事、使藏人木工頭範家申攝政、卽著陣、　裏書豐明節會範家來云、與人々相議可被行者、先無俘囚見參之例、欲問大外記、而節會時奉內辨之後、渡南是例也、又召仰大外記之時在南座、未承內辨、爲之如何、問伊通卿、雖無詳答、余乍居與座令議、召大外記師安、問俘囚不參之例、申無例之由、則召著諸卿於座令議定、申云、節會非可延引、雖無俘囚見參可被始行、別當申云、俘囚不被禁、俘囚緣人被禁也、所申甚無理、以此旨令申攝政、報云、俘囚不被禁者、所訴申已無實也、不可及沙汰、早仰左近府令奉見參者、卽召師安仰此由了、抑俘囚訴者、去春比左大將雅定卿奏法皇〇鳥羽曰、公卿勅使驛家俘囚、爲國人所殺、俘囚雖訴申不上奏、口公卿勅使度々延引、依件犯人不被行刑也、法皇仰範家有件沙汰、範家奏曰、未承此事、前告此事、汝可沙汰、不可疎略者、法皇恐兩人告忽行刑、召目代從者令禁之、其

後入道殿（親近江吏召可稱可殺務）□俘囚妻付使廳、檢非違使等問之、件俘囚先年以病死、非以殺死矣、因召俘囚、左近府不召進、君子以爲左將軍告非實焉、奉仕節會内辨如常、（有俘囚見參、但余兀子倒折、余驚而立、不倒、先年御閣仰付、故二條殿兀子折、不令倒給、故中宮大夫師忠兀子折被倒者、即余令參議令掃部□兀子書之、○中略）宣命拜了、余不昇殿、不向祿所、直向五節所、少時叙子内親王、退出高陽院土御門東洞院第、余寄車歸宅、次皇后退出云々、群卿改劒撤魚袋、土御門大納言劒魚袋如本云々、是爲奇、　三年十一月廿日庚辰、今日新嘗會、戌刻參内、（是居土御門、爲□殿會如大内、）先之於里第以近臣令押笏紙、（今日臨子有出押之）源一上押笏紙之處、勘御堂御記、二東記、（前二關白條）御曆、（京極殿）更無所見、承保三年正月七日土御門記（師房）云、東一上仰於家押之所參也、是故實也、次據此記所爲也、依雨濕不入敷政門、（此事又見承保三年正月五日土御門記）經和德門向公能卿五節所、（可奉仕内辨之□□内之次未著陣之前向親昵人五節所之由、禪閤所命也、）彼卿在此所、即歸著左仗南座、（經左青瑣宣仁門）末敷軾令召大外記、（大先）左近將曹久季知禮、先敷軾召之、尤有情足歎美、師安參上、問諸司及國栖酒正參否、（依爲一上、不奉勤行内辨事、）申曰、諸司及國栖候、酒正不參、仍設代官、仰曰、舊例外記申代官、今夜可申歟、申曰、點定他司之時、舊例申代官、（近代不申）籍自本司點他令史之時、舊例不申之、（此事可隨知先例）又仰外任奏候者可持參之由、即持參付頭中將經宗朝臣奏之、此次奏曰、大歌別當（右大將實能）不參、以權中納言藤原朝臣爲代官、（公能）御裝束用雨儀者、（北山年中上元日會云、出御後雨降者、經奏聞改裝束云々、然者自本雨降時更不可奏、而長元九年正月一日、前二條關白内辨、自朝雨降、□參用雨儀之由、仰辨經記、據彼記所奏也、）返給（諸中仰令候列）之次仰曰、代官辨雨儀事任申者、召大外記師安下之、仰令候列及代官之事、依裝束使右中辨朝隆朝臣不參、召權右中辨師能、仰御裝束可用雨儀之由、小忌上（卿中納言季成）宰相（右中將教長）遲參、仍仰外記遣使、此間權中納言公能卿著座、示代官之事、良久師安申曰、小忌宰相已參入陣頭上、稱疾不參、爲奏此由招頭中將之間、已以出御南殿、仍卿等向外辨、次余起座、於陣後著靴、著宜陽殿兀子、内侍召人、余慣晴儀北行、（大失）更悟□子南西向再拜參上著座、開門（依無承明門、以日華門用之、）闈司著、召舍人（二音）少納言能忠立承明門内、不待内辨宣稱唯、然而余仰召刀禰、卿等立宜陽殿標宜敷尹、卿參上著座、即向五節所、（余及經定、相公不向、）自西階供御膳、（不警蹕、公卿不立、）公卿還自五節所、令

居粉熟、了候御氣色、御箸下、余示小忌、令下箸、後余已下下之、供御飯等、末居臣下饌入御、公卿立磬折、右中將經定卿稱蹕、內侍取御劒之時、居箸飯汁、箸下羞白黑酒、（人皆不打手、余獨打之飲、）一獻國栖、余下殿著兀子、候之、二獻酒勅使、不奏仰之、（經定）今夜參入、參議經定、敦長、共兼右中將、其姓藤原、其位三位、召之難辨、中心持疑、若可召兼國歟、無所見、因之唯同召左近衛司藤原朝臣、但先可召其人之由、密示在傍之卿、是今案也、三獻依余命、權中納言公能卿降殿、歌笛一節後、使敦長卿召之、（不奏）別當復座、余召內豎仰傳仰所司可令移大歌座於宜陽殿西廂之由、（本在承明門）又召內豎仰可移立小忌坐於東一間之由、（本在二間、大內本在三間、移立二間、今皇居誠一間也、）內豎移立小忌座、（此間小忌暫退下）了舞姬奏舞如常、了小忌已下降殿、於宜陽殿西廂舞踏、余示不可立拜列之由於左金吾、（次人）著陣、（經宜陽殿壇上著之、不脫靴、）見宣命見參等、經南殿北廂下、（外記經南殿簀子下乎、主殿官人令還進南殿北廂西階下御監、在二間廂東階下、取松明之、）進弓場奏之、返給、經本路到東階下壇上、取宣命等（北山大將儀七日白馬奏、兩儀於軒廊取奏云々、以之推之、宣命等又於軒廊可取也、今慣時儀於壇上取、失也、今案、兩儀於軒廊取奏者、元不可昇壇上、又立壇下者可謂之故歟、然則外記又同、）復座、召經定卿給宣命、（北山年中上七日會云、暫欲見參云々、今取副笏、不置之、失也、）召敦長卿給見參目錄、敦長就祿所、余已下於宜陽殿西廂再拜拜舞如常、余不還昇、不臨祿所、出宣仁左青瑣等門（於箭紙）候皇太后宮御在所、左金吾已下給祿、出日華門、皇后宮自內裏出御白川、余已下替劒弃魚袋供奉之、鳴鐘後歸宅、　廿二日壬午、召久季、感歎節會夜敷試之事、

〔古今著聞集三公事〕久安三年十一月廿日（○庚辰）豐明節會、內大臣（○藤原賴長）內辨をつとめ給ひけるに、まだ勝突をえかねに、無左右大外記めされけり、右近將曹大名久季まづひざつきをしさてめしたりけり、稱美する事かぎりなし、後におとゞ久季をめして、感じ給ひけるとなん、

〔玉海〕仁安二年十一月十六日、雪降、近年之中、事外大雪也、今日新嘗會也、（○中略）後聞今日內辨其難已多云々、一ハ國栖設一獻以前奏之時、更不加催、是吏部王記所注也、仍右將軍忠雅卿、先年勤仕內辨之時如此云々、余倩案之甚不當事歟、勘吏部王記之處、不可催之由不見、又勘先例、長元九年元日國栖設一獻以前奏之、自堂上加制止、一獻二獻了後更不奏之、仍內辨內大臣（大二條關白也）仰參議催之云々、

以之思之、更非失錯歟、後日申攝政、〇藤原基房命云、加制止、一獻之後催之定例也、不催事未知云々、勿論事歟、次ハ兩儀奏宣命等路、可用露臺北階、不可入恭禮門云々、尋申攝政之處、可用恭禮門之由有命、皇太子參入之時、可用北階等歟、以之致此難歟、不知案內之人如此、何爲云々、

承安二年十一月十四日、此日童女御覽也、〇中略左大將被問明日之參否、答可隨體由了、又被問云、內辨奏宣命歸立之所、母屋第三柱歟、第二歟、答第三柱由了、定事歟、余參御前、攝政〇藤原基房被候、余問云、不供御膳之前入御之時、不供之定例也、供初中間入御之時可止之歟、將又可供了歟、先例不同、說々樣々、爲之如何、被答曰、不覺悟給、勘可示、又人々訪五節所之間、且可居公卿座物歟、將可持歸著歟、答曰、不分明、可勘、又供白酒黑酒之時、一度供兩種了、更催臣下白酒歟如何、答曰然也、暫退出了、　十五日、此日豐明節會也、早旦自左大將許被送書狀云、今日出仕如何、又中間入御之時供御飯由、保延左府記被注之云々、去夜予問此事、入御之時止由被答、仍今有此狀歟、返報云、今日可出仕、中間入御之時、說々不同、無多其例者、

自攝政許被示云、去夜不審申事等、

一白酒黑酒事

先供白、次給臣下、次供黑、次賜臣下、見元永御記者

一訪五節之人歸著後可居物歟事

不待歸著且可居同

一中間入御之時事

保安御記云、中間入御供御膳、內辨花園左大臣入御之時不須供者也者、

今案、此事不審、尙殘供初之後入御哉否不見歟、尙可尋申也、

秉燭後著東帶、飾劔、魚袋、如恒參內、〇中略大外記淸原眞人賴業參軾、經柱外磚內如恒余仰云、諸司候哉、國栖酒正候

哉、小忌候哉、外任奏候哉、外記每度申候由、〇中略 余問大將云、被訪五節所歟如何、將軍云、不可訪、將軍寄示定房卿歟、則件卿已下起座、經東庇北面戸、向五節所了、(小忌不前行、任位立也、左大將別當左大將等留座、)此間供御膳、(遲々之時、內辨仰參議催之也、而今夜不仰、怠、)采女令史就版位稱警蹕、采女等迎取供之、此間予已下立座前、八盤供了居、次供殘膳、此間余問采女云、粉熟供了哉、(粉熟在晴御膳入盤內、然而爲故實問之也、)采女申云、供了、次余自座前、令服實綱卿、仰云、粉熟實綱下殿催之、則內豎等先居小忌座、次居余已下前、余云、可居人著所也、隨命居之、(小忌故雖人不著居之也、詳見寬治六年匡房卿記、)居了實綱復座、太以爲遲遲、實綱申上之、余乍居向御所方候天氣、主上〇高倉鳴扇給、(以御扇鳴給之也、)余已下應之如恆、次問御飯供否、未供云々、則供蚫羹御飯等、余又問之、申供了之由、又問云、進物所御厨子所供了哉、申云、供了、又申云、御厨子所未供、余仰實綱催、臣下飯汁一度催之、(或說供飯了催之、供給汁物了又催之、然而此說不習傳事也、仍不用之、)實綱又下殿催之、則居之、(先汲一遲、次汁采等、爲先小忌、)居了實綱申云、余候氣色、御箸鳴、臣下應之、(皆八內、七八外、他人皆八外也、如何、)此間供御厨子所等了、次余仰可供白酒之由、此間入御、余已下立座前、左將軍稱警、內侍出來取劒璽等歸入、畢余已下居、余仰采女云、入御了、於今者不可供之、然而至白黑者尙供之了、余仰參議催白酒、則居之、不待居了食之、次催黑酒、又勸之了、尙欲供一獻、仍仰不可然之由留之、畢采女申云、可罷出歟、余不可然、只一獻已下不可供也者、采女尙數剋居草墪也、此間諸卿歸著座、各建著了、黑酒各居了、余仰實綱云一獻、實綱起而催之、〇中略 次二獻、(同催之也、)次御酒勅使、其儀拔箸取笏、家通卿在座哉否、問大將、被稱在座由、召之、政大夫藤原朝臣進立予後、仰云、大夫達ニ御酒給、家通退、作法了復座、次三獻、〇中略 此間舞妓自西方進出、余仰早可退由、已再三、然而敢不承引列居了、高聲尋職事、雖召仰、職事一人不候、不足言事也、〇中略 舞妓舞大路二反歟、尤濫吹也、舞了尙不動座、仍余舞了者早可退由仰之、仍愁退了、凡此間違例無双、職事等不尋行之所致也、近代事皆如此、庭弱之上卿何爲哉、〇中略 節會儀了、於御前廣庇座、殿上人等有亂舞會、余此間退出了、今日節會、違例在舞妓事、職事之不覺云而有餘事歟、

承安三年十一月十五日甲辰、今日節會、　廿一日庚戌、去十五日節會事、源中納言雅頼示送云、大歌別當源大納言降、大歌進、舞臺巽邊、鳴物聲、召別當大歌、著舞臺北邊床子、舞姬出、此以前舞姬度々推參、內辨被追、今朝御膳之間、公卿立不待供了、ヤガテ向五節所了、此條不審、內辨爲供國栖下之間入御、(實守兵部卿)卿　內辨左大將云々、

〔山槐記〕治承四年十一月廿日戊辰、予參內、(福原新造皇居也)良久被始行節會、有出御、○中略　去夜於舊都被行新嘗會、曉膳以後所聽參也、予不復御前座退出、明曉可歸舊都之故也、

○按ズルニ、此時新嘗祭ハ舊都ノ神祇官ニテ行ハレ、五節帳臺試以下豐明節會等ハ、何レモ福原ニテ行ハレシナリ、

〔玉海〕文治元年十一月廿五日甲辰、豐明宴會也、　廿七日丙午、藤中納言定能卿來、談世間事、又語節會之間事、內辨堀河大納言忠親、外辨上卿權中納言隆忠、

　內辨作法不審等

一彼日終日雨下、入夜雖雨脚休、其地甚濕、而官裝御裝束於晴、仍內辨招頭辨(裝束司候云々)不問云、今日雨日也、可奉仕雨儀御裝束之處、設晴儀之條、若御定歟、頭辨申云、非御定、只依雨止、官存晴儀歟、但庭上水溢、晴儀不可叶云々、仍內辨召大夫史、(依無辨也)可奉仕雨儀之由(不弁事由)仰之、但於外辨座者不可改之、大內之儀、晴雨儀無差別之故也者、仍不改外辨裝束、猶以爲晴儀云々、

余案之、南庭裝束者用雨儀、外辨裝束者爲晴儀之例、古今未聞、大內者長樂門東廊、已爲內也、何可有晴雨之差哉、仍全不足准據、改御裝束於雨儀ばかりにては、外辨獨爲晴儀之事太無謂、然之間、外辨上卿下殿裾泥之云々、

一參入之參議三人、所役四ヶ事、而今一事(召大歌別當)使不足、召仕小忌云々、此事不甘心、二人參入之時、猶以各可□兩役、况三人哉、召仕小忌事ハ、參議二一人參入之時事歟、

一改大歌座之時、内辨自召内豎仰之云々、大臣内辨之時仰參議也、納言之時可如此歟、先例不審、可尋之、

一圖栖二獻仰之、歸著之時不居座奏事由、召仰御酒勅使云々、此事家之故實也、他人强不可勤歟、於内辨官奏除目叙位等者、推而非可行之事歟、如此之秘事、受誰人說哉、

一中間入御之時、仰令撤御膳云々、

外辨不審等

一不問式部丞正云々（故殿令問給也、御闕不審歟、如何、）

一列立之時忘却揖、第二定能揖之時其後更揖云云、

一小忌上卿候御前、奉仕御裝束、其間參議一人祗候、諸卿向外辨之時、只爲先參議可著之處、敢待顯實卿、甚無所據取、如此之事、未練之令然也、

〔明月記〕正治二年十一月十六日、秉燭之程、著節會裝束參内、廻五節所方之間、攝政殿徘徊五節所前給、藏人一人指脂燭扈從、無他人、有外聞、今思恐無極、巳以咫尺、仍座無爲過給了、是冥加也、非惡氣之人、猶以如此之時、頗放言打擲常御習也、恐怖了、○中略少時奏外任奏、此間仰南儀了、南殊甚、雜人狼藉、每事有若亡、出御南殿、○中略公卿向五節所、如例、還了之後舞姬昇付、童人人等如例、依冷然又多辭之、但越中火取賁家少將取之、予取其尻、今夜一役也、昇了舞如例、（予高遠雅行等不辭、自餘多辭之、）舞了排戶、猶以萬歲樂、頭中將一度令舞了、次出白薄樣、（經通）五度許令舞、賞翫無極、以同曲頭辨三度令舞了、殿上人等更進寄南方、（以西弘庇爲座、）以時賢令出白殷亂拍子、一萬基邦一人令舞、賞翫至極也、過分面目歟、三四反舞了分散、（節會等訖、又自北對方廻渡殿、歟天參進、）次有御前召、次第如例、萬歲樂了、殿備物云舞了、□南頭座分草合、（各出草成天）（用之）十番許、訖又自南方種々雜遊、（國頭中將□□□ナラ山ノ、國先少ヽ、塙能物共物狂、）千壽萬歲ヤスライハナ師子　東（頭辨）田樂　田殖　玉ノ舞以上、

建暦三年十一月十四日、末時依召少將參內、可御覽五節所云々、昏歸來即著小忌參內、今年自日落、借二條中將、今日小忌家嗣朝臣、親平(次將三人)頭中將、藏人永光、上卿宰相辨少納言之外不著云々、此記秘事口傳之由有沙汰云々、竊尋先例、中古以來侍臣大略著之、左次將勿論夜前著之、今夕脫之條頗爲珍事、又今夜著之、殊拔群由歟、凡思意不及、入夜參內、掌侍頻雖尋人參否、奉行(頭中將)內辨頗遲參云云、良久內辨(左大臣殿)令參給、頭中將奏外任奏、今夜小忌(經平)宰相公氏卿之外不參由聞之、仍伺陣座之處權大夫殿三位中將(家良)三人在座、又狹小、仍不著、(○中略)到五節所、各乞取檜之外無他、上衆至太以貪欲、敢反所至先進云、貫首猶不入、受領五節所、況公卿乎、然而通光卿以下次第廻四ヶ所、末座不可獨醒、又案受領非古之受領、即是隆衡仲經卿也、依﨟之大功案此由歟、末座者得分不幾、事□□人々多難不歸猶復座、供白之間也、(○中略)三人小忌清撰已、是賤老之子也、可自愛可自愛、女子又每度供奉扈從、渡御內御方御共二日、以權中納言(定輔卿妹天下名人)越中內侍新中納言(下僕小女)四人之外他人不答云々、可驚可奇、

〔經俊記〕寶治元年十一月十八日丁卯、有童女御覽、十九日戊辰、今夜豐明節會也、左大臣(○藤原兼平)勤內辨、主上(○後深草)出御、公卿訪五節所、於左府五節所居肴物、有朗詠云々、萬里小路大納言勤續內辨、二獻之間舞姬昇、先是公卿歸參之後、殿上人訪左府五節所、各候弘庇、勤所役之人々許應召訪之、自餘五節所家前訪之、

〔吉野拾遺上〕おなじみかど(○後醍醐)とよのあかりの節會をせさせ給へるに、あまりにかたばかりなるありさまをおぼしなげかせ給ひけるに、袖ふる山のまぢかくみえわたりければ、

袖かへす天つ乙女もおもひ出よ吉野の宮の昔がたりを、とうちながめさせ、月更るまでおはしましけるに、御夢ともなく、袖ふる山のうへよりあら雲のたなびきて、南殿の御庭の冬がれし櫻の梢にとゞまりけるに、それかとばかりおぼしやらせたまへるに、をとめの姿のうちあはれ

たるが、

かへしなば雨とやふらむ哀まる天つ乙女の袖のけしきも、となく〳〵詠じて、雲にかくれけるを御覽じおくらせ給ひて、御心ぼそげにわたらせ給ひし御ありさまの、わすられがたくこそ、

〔元文五年新嘗會次第〕豐明節會次第

內辨著仗座、群卿著座

次內辨令官人敷膝突、

次內辨以官人召外記、大外記參膝突、內辨問諸司具否、(此序問外任奏)

次外記持參外任奏、(入筥) 內辨披見畢目外記、外記稱唯退、

次內辨以官人召職事、職事參膝突、內辨奏外任奏、職事取筥退出、奏聞畢返給、內辨結申、職事仰仰詞退、

次內辨以官人召外記、賜外任奏、外記退入、

次內辨仰外辨

次群卿起座

天皇御南殿、近衞陣階下、(以小忌爲先)

次宸儀御御帳中倚子、近衞稱警、群卿著外辨、(以小忌爲先、以下倣之) 政官同著床子、

外辨上卿令召使下式筥、召外記問諸司具否、內辨著宜陽殿兀子、內侍臨西檻、

次內辨謝座、昇殿著兀子、

次開門

次闈司

次召舍人、大舍人稱唯、

次少納言著版、
次内辨宣、刀禰召々、少納言稱唯出召之、
群卿列立標、(異位重行)諸仗立、
内辨宣、敷尹、群卿謝座謝酒、訖昇殿著座、(小忌著座東、群卿著母屋座、)諸仗居、政官著砌下座、外辨向五節所、(當時不及其儀)
次陪膳采女撤御臺盤杷、内膳供御膳、群臣立、
次供殘御膳、賜臣下粉熟、(以小忌爲先、以下倣之、)居畢内辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、
次供鮑羹、
次供御飯、
次供進物所御菜、
次供御厨子所御菜、賜臣下飯汁、居畢内辨候天氣、御箸鳴、臣下應之、
次供白黒御酒、(各四杯)賜臣下、
次供一獻、賜臣下、國栖奏、
次供二獻、賜臣下、仰御酒勅使、
次供三獻、賜臣下、
次舞妓、群臣拜舞畢復座、
次内辨著陣見宣命、見參祿法奏聞、
次内辨召參議一人賜宣命、又一人賜見參祿法、參議向祿所、群卿下殿列立、
次宣命使著版、宣制拜舞如常、群卿復座、
次群卿下殿、賜祿退出、
次入御、○中略

今上皇帝(〇櫻町)御再興、于時元文五、十一月卯日廿四日御當日也、同廿五日豐明節會、

〔續史愚抄 櫻町〕延享二年十一月廿四日辛卯、新嘗祭、廿五日壬辰、節會出御、供白黑後入御、内辨右大臣(道香)舞妓拜後早出、權大納言(經秀)續之、外辨今出川大納言(誠季)已下十六人參仕、別當(光綱一獻後早出)爲人數、奉行賴要朝臣、

〔友俊記〕延享四丁卯十一月十七日、新嘗會、(〇中略)翌十八日豐明節會、少内記(予)友俊出頭、

〔續史愚抄 桃園〕寶曆三年十一月十六日丁卯、新嘗祭、十七日戊辰、節會有出御歟、内辨左大臣(内前)外辨右大臣、(宗基)内大臣、(尚實)已下十一人參仕、大歌所再興、(去十月廿五日、西園寺大納言公晃補別當、)奉行益房朝臣、(元藏人頭左中將隆叢朝臣奉行也、而不內覽外任奏、而奏聞、爲失錯、因而被退出云、)

〔文政十三年新嘗祭記〕文政十三年庚寅十一月十四日戊辰、豐明節會也、(〇中略)

節會備忘

先粉熟(内辨仰三木、三木下殿催之、)

次飯汁(内辨仰三木、三木作座催之、以下同之、)

次白黑(二度居之)

次一獻　國栖奏(内辨下殿催之、畢早出、)

此間藏人催舞妓、(申奉行、以表使申遣、)同來於露臺代北廊下、著裝束、經御後、著母屋西一間座、(南上東面)引導閤司一人、脂燭女官二人等、經御膳宿、候西簀子、

次二獻　御酒勅使、(催内辨下殿押笏紙、假儀二獻畢昇殿、)

次三獻　大歌(舞妓有舞)

其儀先大歌別當代下殿、向承明門外、率歌人等更參上、著舞臺巽方床子、歌人等發歌笛拍、

次内辨召三木、仰可召大歌所別當代由、

節會平座

三木出南簀子召之、又降東階、以官人令告申於大歌所別當代、了昇殿復座、（別當參上同復座）

次別當仰三木、令催移大歌座下小忌臺盤事、

三木下殿催之、（先仰可移大歌座由於外記或官人、次仰可下小忌臺盤由於內豎、）

次內豎等參上、昇下小忌臺盤於東二間、（公卿暫逃座立簀子、下畢復座、）

此間掃部官人、移立大歌座於舞臺北、歌人等移著也、發歌笛聲、

次舞妓二人舞、（中央及左右間）五匝了退入、

其儀下小忌臺盤、公卿復座之後、見定歌人等移著舞臺北座、先令女官執脂燭暫立坤角簀子、（庇端）木工、（武自四階御藏授之、）歌人見之（○之恐定誤）大歌發音、須臾同音笛聲相和後、藏人催舞妓令參進、舞妓南廂東行、中央及左右三ヶ間五匝如例、引導闈司一人、脂燭女官二人等相從、舞妓進行、簀子東行、女官止立中央間左右柱下、（東西相對、向不昇廂、）闈司立同間東柱下、（西面）舞妓舞訖退入之時、又相從退來、返授脂燭於御藏退入、無程歌笛止、歌人退入、

舞妓舞終由職事告內辨、（陽明御流如此、今夜俊實當之、）

次舞妓拜、（內辨不立拜、還著陣座、）○下略

〔帝王編年記〕（二十六後宇多）弘安四年十月四日、春日神木入洛、武士奉禦之間奉振入稻荷社畢、　十一月十八日、豐明節會停止、被行平座、依神木入洛也、

〔江家次第抄〕（五）二孟旬（無御出儀）

今案、平座是也、出御之時者、公卿著南殿兀子、無御出之時者、著宜陽殿平敷座故也、

〔園太曆〕康永四年（○貞和元年）十一月廿四日甲辰、抑今日被止節會、被行平座也、

延文元年十一月十六日壬辰、今日豐明節會停止、被行平座、上卿權中納言實音、少納言時清、右少辨信兼等參仕、頭中將奉行、大外記師茂、權少外記師具等參仕候、

〔康富記〕應永廿九年十一月廿一日甲辰、豐明節會停止、平座被行之、公卿藤大納言資家卿、參議定親朝臣、(中將)少納言宗業眞人、藏人權右少辨經直、(奉行官方兼之)外記予、右大史安倍盛久、內豎頭川康行等參陣、予爲分配之間、晩□□□□□□中御門黃門被燒風爐在之間、少納言殿巳下被用之、予□□入風爐之後、著朝衣參陣、見參祿法等淨居庵草案之給之、主計外史被淸書、予參候陣中之間、誂之申者也、今夜大見參也、祿法如常、案見左、戌剋被始行、上卿不移端座、卽傳仰宜陽殿御裝束於職事辨□□宜陽殿之儀又如常、上卿(端)參□□□被著(對上卿)□□獻盃二獻、先少納言也、見參□□□□□□如常、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月廿一日丙辰、今夜豐明平座也、公卿吉田大納言(家俊)一人參入、大納言先奏慶、(大納言慶也)前驅一人云々、

〔建內記〕嘉吉元年十一月十七日己卯、新嘗祭也、　十八日庚辰、豐明節會爲平座、公卿洞院大納言、(實熙)(歸)北畠宰相中將、(持康卿)少納言周茂、辨資重、(奉行職事也)勸盃二獻、(自少納言勸之)辨結申祿法云々如何、常儀不結申歟、

〔康富記〕嘉吉二年十一月廿三日庚辰、豐明平座也、公卿權大納言忠秀卿、參議不參、少納言繼長、右少辨敎忠、外記忠種、史員職、內豎忠行等參行之、獻盃二獻云々、見參少納言於月華門下被下、外記此間儀如此、祿法事、辨經上卿後出自宜仁門、於床子座前被下史云云、是以往之儀也、凡辨官下文時、必於床子之條勿論、平座又有此例、雖然此里內時無便之由有沙汰、於月華門下被下之近例也、

寶德元年十一月廿三日戊辰、豐明節會停止、平座被行之、　三年十一月廿一日丙辰、入夜自局務以大學助爲使被示云、今夜平座分配一薦也、而不相觸、本人未存知失錯也、以別儀三薦可沙汰進哉之由被示之事、雖爲聊爾、不申子細令領掌了、其後進使者於頭中將許、乞取散狀、用意見參祿法、顚倒衣裳馳參陣了、自奉行催促之使及六七度了、豐明平座也、公卿萬里小路中納言冬房卿、職事頭左中將資繼朝臣、(參行)右中辨敎秀朝臣、權少外記康純、左少史俊職也、內豎頭川康里等參之、參議少納言不參

也、例文安四年十一月也、見參祿法共被下辨、辨被下外記康純了、於祿法者可被分下史也、

康正元年十一月廿一日壬辰、豐明節會停止、被行平座、

〔續史愚抄後花園〕康正三年(〇長祿元年)十一月二十日庚辰、豐明平座、上卿日野中納言(資綱)參行、參議少納言等不參、奉行藏人左少辨俊顯、

〔文德實錄九〕天安元年十一月丙辰、不御豐樂院、便於冷然院、命公卿開宴、百僚供張五節舞態、尙如向龍顏之時、賜祿亦如常、　戊午、喚大歌及五節舞妓、令歌舞訖、給祿有差、

〔政事要略二十六〕淸涼記中卯日新嘗祭事

承平六年十一月十九日(甲辰)〇新嘗會、上因御物忌、不御南殿、施簾、

天慶元年十一月廿四日(丁卯)〇施簾、因御物忌不臨軒、

〇按ズルニ、十一月廿四日トアルハ、廿五日ノ誤ナリ、本朝世紀ニ、天慶元年十一月廿四日丁卯、此日新嘗祭也、廿五日戊辰、今日新嘗會豐明節會也トアルヲ視テ知ルベシ、

〔日本紀略三村上〕天曆三年十一月十七日丙辰、豐明宴、天皇不御南殿、　十八日丁巳、賜女王祿、

〔法成寺攝政記〕寬弘三年十一月十七日丙辰、依御物忌不御出、未時、依達出、申時引列、

〔小右記〕長和三年十一月廿二日甲辰、今日節會、依御物忌不出御云々、予當厄日、仍不參入、差隨身、觸障由於外記、見村上應和三年十一月廿日御記也、此日新嘗會也、今明雖相當物忌、依不得止、親莅會庭者、今案、天曆八年以後、因御忌月、正月節會无出御、仍豐明節會破御物忌有御出歟、當時正月又御忌月也、今年節會猶可有御出歟、但御物忌固者、无御出有何事哉、爲後々聊記由緒了、

〔日本紀略後一條十三〕治安元年十一月廿一日壬辰、節會、依御物忌無御出、

萬壽四年十一月廿日丙辰、節會、中納言左衛門督兼隆卿爲内辨、公卿依前皇太后(〇三條后姸子)之服、不被參之故也、又無御出、

停節會

〔日本紀略 後一條 十四〕長元六年十一月十八日庚辰、節會、依御物忌不出御、

〔中右記〕寛治三年十一月十四日、〇庚辰 節會如例、但无御出、依御物忌也、殿下〇藤原師實 御于簾中也、内辨、左府 外辨、按察大納言以下 小忌皇后宮權大夫、公 新宰相中將、保 右少辨重資、源少納言成宗、 五年十一月廿日、〇甲辰 節會也、酉刻許事始、〇中略 亥刻許事了、今日依御物忌無御出、殿下御南殿御後、 八年〇嘉保元年 十一月十八日、〇丙辰 酉時許、著小忌參内、節會御裝束如常、但依无御出、御座間以東懸御簾、

天永三年十一月十五日戊辰、節會、内御物忌也、仍不出御、又私物忌也、仍不參仕、

保安元年十一月十九日、〇丙辰 節會如恒、無御出云々、内辨按察大納言、外辨右衛門督以下、小忌別當、忠 宰相中將、顯 藏人辨實光、少納言公章、

大治四年十一月廿四日戊辰、酉時許、相具宰相中將參内、〇中略 今日无御出、懸亘御簾、

保延元年十一月廿三日、辰日節會、依御物忌无御出、

〔玉海〕仁安二年十一月十六日、〇庚辰 今日新嘗會也、(中略)今日依御物忌、不出御云々、

治承二年十一月廿二日辛巳、定能朝臣示送云、去夜〇廿一日庚辰 節會無出御、

〔續史愚抄 後桃園〕安永七年十一月十八日甲辰、節會不御、依御風痾也、

〔文德實錄 二〕嘉祥三年十一月辛卯、帝以諒闇故、不親祭事、 癸巳、依大臣所奏停錄、准新嘗會宴、賜祿有差、

〔三代實錄 二十二 清和〕貞觀十四年十一月十四日庚辰、停節會之事、王公侍左仗下、終日酣飲、侍從陪侍從所、錄見在坐者、後日賜祿有差、

〇按ズルニ、此年節會ヲ停メラレシハ、太政大臣藤原良房ノ薨去ニ依テナリ、其由年中行事抄ニ引ケル清涼記ニ見エタリ、

〔三代實錄 四十四 陽成〕元慶七年十一月十六日己卯、停新嘗祭、於建禮門前修大祓、以内裏人死、諸祀停廢

也、十七日庚辰、停節會之事、親王公卿侍左仗頭、錄五位已上見參者、准節會例、賜祿各有差、

〔政事要略二十六〕清涼記中卯日新嘗祭事

天曆六年十一月十六日、(○戊辰)新嘗會停止、依在太上天皇(○朱雀)心喪內也、

〔日本紀略一九條〕正曆二年十一月廿一日丙辰、依諒闇(○是年二月圓融天皇崩)無節會、

〔玉海〕壽永二年十月二日癸巳、傳聞今年可有五節云々、卽位以前五節久壽例(二條院)云々、閏十月八日己巳、此日頭中將隆房朝臣來仰云、(余謂之)卽位以前被行節會例、近則二條院是也、其外無所見、彼例強不可爲規模、今度如何、可計奏者、申云、於有可被行節會之理者、何必被避彼例哉、凡卽位以前不可有南殿出御歟、代始初度節會無出御之條、聊可有所憚歟、然而於件條者、被遂保元例、不可爲因准、只總以今年五節、恐意所不甘心也、所以者何、先例亮闇年無五節、是者別段事也、此外有事故(如內裏燒亡是也)不被行五節例粗立之、皆以雖非吉事、大禮以前新嘗會素世之所疑也、然而依永觀保元例、治承又立之、猶雖非無事之疑、例及再三、偏可守其跡之處、治承已非吉例之上、於今年者、不可被准常途例、神鏡劍璽等已從賊徒、避宮出城、朝端之悲哀何事過之哉、五節者雖爲神事、已是遊宴也、唱萬歲樂、舞亂拍子、專非哭三神之禮歟、仍商量彼是、今年被停止五節、尤可叶時議歟、抑今年可有朔旦之敍位、無新嘗會者、行下名之禮如何、依嘉承例、(雖亮闇不可忌之)合行卽位之敍位事、雖權議、禮爲便宜歟、(此條右大臣同申此由云々、後聞忠親又申此旨云々、)隆房歸參了、十一日壬申、傳聞五節事、下官申狀可然之由人々沙汰、大略可被停止歟云云、入夜定長告送云、五節可被止之由有沙汰、頭中將定令申歟云々、十二日癸酉、隆房朝臣告送有議被止五節之由、尤善政也、初依左大臣申狀有可有五節之沙汰、今度被問之時、被申可被止之由云云、余初沙汰之時不預問、今度申狀被擇用歟、

〔友俊記〕寬延三庚午年四月廿三日、櫻洞(○櫻町)登霞、(○中略)同月(○十一月)十六日新嘗祭被行之、依諒闇年不被行豐明節會等、

〔續史愚抄 後圓融〕寬延三年十一月十六日乙卯、新嘗祭、十七日丙辰、無節會、依諒闇也、

○按ズルニ、節會ヲ停ムル時、平座ノ略儀ヲ行フコトアリ、節會平座ノ條參看スベシ、

古事類苑

神祇部二十八

新嘗祭中

古事類苑

神祇部二十八

新嘗祭中

五節舞起原

〔年中行事秘抄十一月〕五節舞姫參入并帳臺試事於常寧殿□□

本朝月令云、五節舞者、淨御原天皇〇天武之所製也、相傳云、天皇御吉野宮、日暮彈琴有興、試樂之間、前岫之下、雲氣忽起、疑如高唐神女、髣髴應曲而舞、獨入天矚、他人無見、舉袖五變、故謂之五節云々、其歌曰、乎度綿度茂、遠度綿左備須茂、可良多万乎、多茂度邇麻岐底、乎度綿左備須茂、〇又見政事要略

〔公事根源十一月〕五節

抑五節の舞姫のおこりは、むかし天武天皇よしのゝ宮にましまして琴を引給ひし時、まへの峰より天女あまくだりて、あまの羽衣の袖を五度飜して、をとめごもをとめさびすもからたまをたもとにまきてをとめさびすも、とうたひけるとかや、しかるを天平五年五月に、まさしく内裏にて、五節の舞はありけるとぞ、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年五月癸卯、宴群臣於內裏、皇太子〇孝謙親儛五節、右大臣橘宿禰諸兄奉詔奏太上天皇〇元正曰、天皇大命爾坐西奏賜久、掛母畏伎飛鳥淨見御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇命〇天武天下乎治賜比平賜比氏所思坐久、上下乎齊倍和氣氏无動久靜加爾令有爾波、禮等樂等二都並氏志、平久長久可有豈隨神母所思坐氏、此乃舞乎始賜比等伎聞食氏、與天地共爾絕事無久彌繼爾受賜波利行牟物氏事之皇太子斯王爾學志頂令荷氏、我皇天皇大前爾貢事乎奏、於是太上天皇詔報

曰、現神御大八洲我子天皇乃掛母畏伎天皇朝廷乃始賜比造賜留帝寶○寶恐誤字國寶等氏之此王乎令供奉賜波、天下乎立賜比行賜部流法波可絶伎事波無久有止家利見聞喜侍止奏賜等詔大命乎奏、又今日行賜布態乎見行波直遊止留乃味波不在之氏、天下人爾君臣祖子乃理乎敎賜比趣賜布留止有奈志母所思須、是以敎賜比趣賜比奈何比受被賜持氏不忘不失可有伎表等之一二人乎治賜波奈毛止所思行須等奏賜止詔大命乎奏賜止波久奏、因御製歌曰、蘇良美都、夜麻止乃久爾波、可未可良斯、多布度久安流羅之、許能末比美例波、又歌曰、阿麻豆可未、美麻乃彌己止乃、登理母知氏、許能等與美岐遠、伊寸○寸疑國史作可多底末都流、又歌曰、夜須美斯志、和己於保支美波、多比良氣久、那何久伊末之氏、等與美岐麻都流、右大臣橘宿禰諸兄宣、詔曰、天皇大命麻爾麻勅久、行賜比供奉賜態爾依而、御世御世當氏供奉留諸親王等大臣等乃子等乎始而、可治賜伎一二人等選給比治給布、是以汝等母今日詔大命乃勅等、君臣祖子乃理遠忘事無久、繼坐牟天皇御世御世爾明淨心乎以而、祖名乎戴持而、天地與共爾長久遠久仕奉禮等之氏冠位上賜比治賜布等勅大命衆聞食宣、

〔歷朝詔詞解二〕五節舞の始めは、卽此詔○天平十五年五月ノ詔に見えたるを以て正說とすべし、然るに政事要略に、○同上文年中行事秘抄所引本朝月令故事と見え、河海抄江次第裏書などにも、本朝月令云とて、件の文を引れたり、三善清行の延喜十四年に奉れる意見封事、請減五節舞妓員文の中にも、按舊記、昔者神女來舞、未必有定數といふことあれば、これも古き傳說なりけり、然れども此神女の說は、古事記雄略天皇段に、天皇幸行吉野宮之時、吉野川之濱有童女、其形姿美麗云々、坐其御呉床彈御琴、令爲儛其孃子、爾因其孃子之好儛作御歌、其歌曰、阿具良韋能、加微能美弖母知、比久許登爾、麻比須流袁美那、登許余爾母加母、とあるを取て、造りかへたる物にして、かの乎度綿度茂云々の歌も、四の句まで、万葉五なる長歌の中の句と全同じければ、其をとりて結の句を造りそへたる也、さて又公事根源に、天平五年五月にまさしく内裏にて、五節の舞は有けるとぞ、と云るさ

五節定

れたるはこゝの事にて、天平十五年の十の字の落たるなるべし、されどこれより前、天平十四年正月にも、天皇御大安殿宴群臣とありて、五節の舞有しこと見えたり、又此後も天平勝寶元年十二月、同四年四月など、東大寺行幸の時も、彼寺にて此舞も有しことと見ゆ、さて此舞後世には十一月の節會に限りたる事なれども、もとは然らざりしことと上件のごとし、

〔西宮記十一月〕一被定獻五節舞姬人々事頭侍硯紙等、候御前定之、
上卿五節被仰受領辨官有女子輩、或二人式部大輔在昌獻、上卿五節之、
后宮親王尙侍女御諸卿等獻之、大嘗會年五人、預爵諸卿受領召其身仰、餘勅使云云、

〔年中行事抄十月〕三日以前點定五節舞姬事北山抄近例九月
藏人式云、召仰公卿、但殿上舞姬者、召仰四位五位有女子之者、
又云、后妃女御尙侍同獻、或被仰親王、又殿上舞姬或無之、
淸涼記云、或親王獻之、又后妃女御尙侍別遣中使令仰示、
同日定大歌召人事淸涼記行成卿抄等、廿日以前、

〔年中行事加茂氏人保隆所傳〕十一月定可獻五節舞姬人々事
其儀出御晝御座、御直衣藏人頭參進、書定文、〇中略畢奏覽、御覽畢返給藏人頭、下於行事藏人、次舞姬獻請奏、五通次舞師請奏、大鼓大歌所獻請奏、十二通

〔年中行事秘抄十月〕五節定事
定文書樣
可獻五節舞姬人々
殿上伯耆守源輔朝臣、周防守隆方、
內大臣

按察使藤原朝臣

永承三年十月二日

〔權記〕長德元年九月十七日庚申、被ㇾ定ㇾ可ㇾ奉二五節一之人、右大臣、藤大納言、公季右兵衛督、後太皇太后宮權大夫、理髪、殿上

〔左經記〕寬仁元年十月四日己巳、今日於二攝政殿御宿所一、被ㇾ定ㇾ可ㇾ獻二五節舞姬一之人々、皇后宮大夫、新中納言、刑部權大輔則隆朝臣、美濃守泰通朝臣等也、頭右中辨執筆云々、

〔中右記〕大治五年十月十六日乙酉、今日頭中將定二申五節、臨時祭、日吉行幸、舞人等一、依二御物忌一、於二簾中一欲ㇾ定二申之一處、主上頗御咳病氣御、於二朝干飯方一可ㇾ定二申之由依ㇾ有二御氣色一、於二朝干飯一共定申了、爲二内覽一持二參殿下一之由、頭中將所ㇾ談也、

〔台記〕久安二年十月十九日、及ㇾ昏參二新院一、○中略依ㇾ召參二御前一、次歸宅定二五節雜事一、今日先禁中定了云々 左衛門權佐親隆書二定文一、右大將土御門大納言權中納言新中納言兩相公經定、教長、來臨、禁中定了、頭中將來二仰五節可ㇾ獻由一之後可ㇾ有二此定一、而頭中將遲來、因ㇾ之與二諸卿一相議先定非ㇾ禮也、定了頭中將來仰云々、

久壽元年十一月十三日壬戌、著二直衣一定二五節雜事一、家司政業執筆、

〔兵範記〕嘉應元年十月十三日乙未、入ㇾ夜殿下令二參内一給、下官可ㇾ候二五節定一、殿下出二御召座一、西廂御直廬儀、如二尋常一召二人家司藏人少輔兼光參進、被ㇾ仰ㇾ可ㇾ召二頭辨一由、次下官插ㇾ笏持ㇾ硯參進、硯筆墨水瓶小刀盛二柳筥一、如ㇾ常、爲二例文一去年定文一通、續紙一卷加置之、候二南弘庇一、次拔ㇾ笏置二左膝下一、取二例文一取二加笏一、昇二長押一膝行、置ㇾ笏取二例文一、次取ㇾ笏退復座、次置ㇾ笏先摺ㇾ墨、次染ㇾ筆如ㇾ元置ㇾ之、次卷二返紙二枚一取二副笏一、伺二御氣色一、次依ㇾ仰書二定文一、置ㇾ筆卷調、撤二硯墨筆等一、盛二定文於柳筥一、插ㇾ笏參進獻二殿下一、御覽了加二置例文一返二給之一、下官退下復座、如ㇾ元置二加硯等一持ㇾ之退入、殿下入御、諸大夫撤二燈等一、次下官以二定文一與二左衛門權佐一了、金吾又給二判官資綱一了、是奉行人等也、次退出、

〔玉海〕文治二年十一月七日庚戌、此日五節臨時祭等定、○中略先有二五節定一、預奏忠申云、兩事定同時可ㇾ儲ㇾ敕、將又可二前後一敕、仰云、天

獻舞姬

治元年閏日有此定、被定五節事之後、有臨時祭定、可追彼例之由仰之、〇中略

定文書樣

可獻五節舞姬人々

殿上 能登守 顯家朝臣(右近衞少將) 越中守 家隆(侍從)

參議藤原朝臣

參議藤原朝臣

文治二年十一月七日

兼忠申云、顯家可書本官歟、將可書受領歟、余云、雖不知慥例、理之所致、可書受領官歟、仍載能登守了、

藤宰相兩人基家雅長等也、

〔伊呂波字類抄〕古 人事 五節儛師 文德天皇御宇、齊衡三年丙子始之、寬平御時舞姬公卿可進之由、始被宣下、

〔類聚雜要抄〕三 五節雜事 內大臣(藤原忠通)令五節進給定文 自筆

一傅八人 〇中略

行事前伊豫守朝臣 朝輔朝臣 盛家朝臣

一童女二人

行事前出雲守朝臣 雅職朝臣 廣房朝臣

一下仕四人 樋洗一人 上雜仕二人

行事仲兼朝臣、 盛季朝臣 〇中略

永久三年十月十九日 〇中略

出立所前日掃除并立砂

丑日早旦、敷砂鋪設裝束等事、

申刻ニ儀類出車

金作檳榔毛一兩（姫君料、但昔ハ用ニ檳榔、通）

檳榔毛五兩内（四兩傅八人料、一兩童女二人料、）

網代二兩（下仕四人料）

南庭ニ西上南面、次第一行ニ立之、

酉剋ニ催集御前、

戌剋童女下仕等裝束著畢、女房同前、○中略

童女車懸下簾上表簾、（簾前許也）一兩口ニ二人乘天、前方ニ各伊方袴ヲ自立一尺五寸許ヲ上天出天、其表ニ汗衫尻并口方之前各伊方ヲ自立一尺許ヲ上天出之、簾前許上之後ハ不懸上事、常ヨリハ頗佐久留也、

下仕車不懸簾、兩別二人乘天、前簾許上之、各袴許出事如童女也、

傅車寢殿之南面橋隱間寄之、下簾衣妻長柄間ニ垂、裳腰同妻衣ノ袖トノ中ヨリ出之、凡出衣事如常也、乘畢後ニハ於北長柄次第立之、今度ハ東上ニ立也、前驅於南庭燈火立二行出門、次姫君車、次傅、次童下仕等車遣之、北陣ニ西上南面ニ、縫殿陣方ヲ於上一行立之、筵道立燈之後、先下仕車ヲ縫殿陣極ニ頸木ヲ門砌ニ引寄天、相具セル六位官人下天、筵道之外ニ陣ノ内東脇敷筵、（東西行也）其上ニ西上南面ニ一行ニ立也、

今夜於此所有末取謂事、

裳之右上妻ヲ袖上ヨリ引越天、同左前上ノ妻左ノ脇之縫目下前ヘ引取天結天、右上ニ懸之、同末ノ左右妻ハ質垂メリ、但五節所ニ參天後ハ、件末取ヲハ下天、只如常ニ天登也、

次童女車同引寄天下天、殿上人付天卽參登、

次傳車目前ニ頗進テ引寄テ下テ、各殿上人付テ參、
次下仕殿上人若者藏人付參
次姬君障ニ引降テ、几帳四本方ニ指テ車極ニ寄、姬君衣之末ヲ頭打懸テ几帳中ニテ參、藏人五位四人几帳ノ四ノ角々ニ各一人付テ、左右几帳紐ヲ一筋ツヽ二筋ヲ取合テ參、件役角取ト謂之、几帳指可然六位四人、次々所ハ衞府四人、又角取役無藏人五位等者、式部民部大夫五位用之、又几帳指役無衞府時者、諸司官人勤之、
□□□切次召髮上姬君各著裝束、
次召□□
次召髮上令著姬君裝束、
登次第
先童女一人、付給殿上人束、京錦笛ヲ取　次又童女一人、付殿上人、取二大取一　次三尺几帳、率殿上人、次下仕等、付殿上人、若藏人執、
次姬君
〔雅亮裝束抄〕五せち所のこと
五せち所にかむだちめたちいられば、くしはやないばこにいれてまゐらすべし、
一の所の五せち所に、かんだちめ殿上人まゐりて、たちかはらけありて、うたうたひなどせらるる事あり、いみじきことなり、
まゐりのよきたのおんにてずいじんつかふ人は、わがにても、又さもある人は院殿などにも申うけて、隨身にたちあかしせさせらるゝ人あり、
まゐりには、ひめ君のくるま、女房わらはびらうなり、おもづかひのくるまあじろなり、つぎのところにはひめ君のせんくつぎの五ゐなり、そくたい、女房巳下のせんくゑう府〇書なり、一の所は

くら人五ゐ六位もあり、これも女房以下のしうそくたい、ひめぎみののぼるすみどり（〇取角）は、いづれのもくら人五ゐのするなり、そくたい四人なり、たゞ五せち所へむかふ人は、よきほどなるいくわんにてむかふべきなり、ごせ（〇御前）といふ物は、さぶらひのつかさある五位しうなどをいふなり、いくわんする程のものなり、（〇中略）

五せちのはわらはは二人なり、四人八人などあるはごけい（〇御禊）の女御だいなどのくるまにのるをりのことなり、しもづかひ二人つねのことなり、五せちのまゐりをせんには四人あるべし、ひめ君のぢんよりおるゝきゝ丁をよほうにさしたる、もたんれうなり、き丁のすみをば、くら人五ゐとりあはせてゐる、近代はしもづかひさゝず、ごせ（〇御前）のさしたるなり、しもづかひもわらはのつぎにたゞゐるなり、

まゐりのよは、まづきたのぢんにひめ君の車よりはじめて、うしをはづしてしぢにおきて、ぢんにむかへてたてゝ、まゐりする五せちのまゐりわつまりてのち、殿上人まゐりて、上らうのひめ君よりしておろす、えんだうをぢんより五せち所までしく、さうぞくし（〇装束司）まづしもづかひをおろして、もんのうちにひだりのわきにたてゝ、さいしをうちみだりのはこのふたに、女房八人しもづかひ四人これを入たるをとりて、まづしもづかひにさして、もの左のつまさきをとりて、わきのしたよりまへに引出して、右のつまさき右のたもとのうへよりとりて、たもとのうへにつまさきをわづかにむすびあはせたるを、つぼぞるとはいふなり、されば、もののうしろはかみさまにつぼをりたるなかに、かみさいしのをなどはいりたり、きぬのすそはたゞもとのまゝにうちひろげてひかせたり、さてのち女房の一のくるまをひきよせて、くちより女房をおろして、しだいにさいしをさして、殿上人つきて五せちどころへのぼす、あふぎをさしもをひきたり、女房おりはてゝのち、わらはは二人、かざみのしりまへをひきてのぼる、つぎにしもづかひ四人しだい

にのぼる、つぎにき丁さしたるうちに、ひめ君をごせいだきてのぼる、一の所の五せちのひめ君をば、ところのざうしきいだきてのぼるべし、女房はかん所のかたよりやがていでゐ、おほかたにさぶらふべきなり、ひめ君わらはしもづかひばかりぞとまりてかみへはのぼるなり、まゐりのよは帳だいのこゝろみといふ、しもづかひはやがてつぼとりながらのぼるなり、これにならひて、やくもせぬ御覽の日などつぼどる人あり、ふしぎなり、まゐりをせずとも、まゐりのよつぼとりたらんはなんにはわるまじげれども、つぼとらであるべし、一の所の五せちにはわらは二人、しもづかひ四人、うへざうし二人、ひすまし二人あり、〇中略ひめ君ののちに、だんより五せち所へいりてゐるなり、これらはのぼらず、

〔源氏物語乙女二十一〕大殿〇源氏君にはことし五節奉りたまふ、何ばかりの御いそぎならねど、わらはべのさうぞくなど、ちかうなりぬとていそぎせさせ給ふ、ひんがしの院には、參りの夜の人々さうぞくせさせ給ふ、殿には大方のことゞも、中宮よりもわらはしもづかへのれうまでえならで奉れ給へり、過にし年五節などとまりしが、さう〴〵しかりしつもりもとりそへ、人のこゝちもつねよりもはなやかにおもふべかめるとしなれば、所々いどみて、いといみじくよろづをつくし給きこえあり、按察大納言左衞門督、うへの五節には良清、今はあふみのかみにて左中辨なるなん奉りける、みなとゞめさせ給て、宮づかへすべくおほせ事ことなる年なれば、娘をおの〴〵奉り給、殿の舞姫は惟光朝臣のつのかみにて左京大夫かけたる娘、かたちなどいとをかしげなる聞えあるをめす、からいことに思ひたれど、大納言の外ばらのむすめを奉らるなるに、朝臣のいつき娘いだしたてたらん、なにのはぢかあるべきとさいなめば、わびておなじくは宮づかへやがてせさすべく思ひおきてたり、舞ならはしなどは、さとにていとようしたてゝ、かしづきなどしたしう、身にそふべきはいみじうえりとゞのへて、其日の夕つけて參らせたり、とのにも御か

たがたのわらはしもづかへのすぐれたるをと、御らんじくらべえりいでらるゝ、心ちどもはほどほどにつけていとおもたゞしげなり、御前にめして御らんせんうちならしに、御前をわたらせてとさだめ給ふ、ずつべうもあらずとり〳〵なるわらはべのやうだいかたちを覺しわづらひて、今一所のれうをこれより奉らばやなどわらひ給ふ、たゞもてなしようゐによりてぞえらびにいりける、○中略五節のまゐるぎしきは、いづれともなくこゝろ〳〵にになくし給へるを、舞姫のかたち、大殿のと大納言殿とはすぐれたりとめでのゝしる、げにいとをかしげなれど、こゝろうつくしげなる、ことは、猶大殿にはおよぶまじかりけり、物きよげにいまめきて、その物ともみゆまじうしたてたる様體などの有がたうをかしげなるをかうほめらるゝなめり、例の舞姫どもよりは、みなすこしおとなびつゝ、げに心ことなるとしなり、殿參り給て御らんずるに、昔御めとまり給ひしをとめのすがたを覺しいづ、たつの日の暮つかたつかはす、御ふみのうち思ひやるべし、

をとめ子も神さびぬらし天つ袖ふるきよのとも齢へぬれば、とし月のつもりをりそへて、うちおぼしけるまゝの哀を、忍び給はぬことのをかしうおぼゆるもはかなしや、

かけていへばけふのことゝぞおもほゆるひかげの霜の袖にとけしも、あをすりのかみよくとりあへて、まぎらはしかいたる、こすみうすゞみ、さうがちにうちまぜみだれたるも人の程につけてはをかしと御らんず、○中略やがてみなとゞめさせ給ひて、宮づかへすべき御氣色ありけれど、此たびはまかでさせて、近江のはからさきのはらへ、つのかみはなにはなどいとなみてまかでぬ、大納言もことさらに參らすべきよしそうせさせ給ふ、左衛門督、其人ならぬを奉りてとがめ有ければ、それもとゞめさせ給ふ、

〔河海抄九乙女〕うへの五節は、良清といひしが近江守と成て右中辨なるぞ奉りける、

五節ハ、恒ノ年ハ公卿二人、殿上人受領二人、四所也、代始ニハ公卿二人、殿上受領三人、五所也、其ヲ受領ノ分ハ、殿上人マデマキラスレバ上ノ五節ト云也、五節姫四人、菅相公意見云、大嘗會時五人云々、今年依為新嘗會召四人歟、公卿二人者、按察大納言左衛門督也、殿上受領者、良淸惟光也、以上四人也、〇中略

あふみのはからさきのはらへ、つのかみはなにはなどいとなみて、

五節前後の齋に皆祓をする也、何のはらへも河邊海邊にて禊をする本儀也、辛崎難波七瀬の隨一也、仍近江攝津國司にてまゐる舞姫、此所禊尤有便宜乎、舞妓は五節はてゝ、曉天退出之時祓をする也、上古は辛崎難波マデモ下向シケルガ、近代ハ内野にて、陰陽寮まゐりまうけて勤仕之、

〔雲州消息下末〕一日可献五節舞姫之由有其定云々、美麗童女、定難尋得歟、補襠在謹許歟、去年江州有其營、大略可尋彼例也、如承西施之類貴殿、巫山之神、洛川之妃、猶可赭面云々、參入之次、可任玉顏、不可被秘藏者、素懷不足、恐戰謹言、

十一月日　　左近衛中將

謹上治部卿殿

〔十二月往來〕其後何事候乎、抑今年可獻五節候也、童女下仕傾城之處、已以難得、先日倡女可然者召給候畢、專有西施之妾、盍應下仕之仁哉、他事不具、謹言、

十一月十四日　　左衛門督

宰相中將殿

五節御覺事承及候、一夜傾城早可隨召、但後難傳梁塵之曲、難被許漢雲之交候歟、恐々謹言、

十一月十四日　　參議

〔類聚雜要抄 一〕一五節殿上饗目錄（保延元年右衞門督家成遂二五節一時、主着頭久長調二進之一）

干物四種（鮑、蛸、大海老、干鯛）　生物二種（鳥、鯉）　窪器物二種（海月、荏裹）

居物次第

初干物（鮑、蛸、大海老、干鯛）　次生物（鳥、鯉）　窪器物（海月、モムキコ）　次飯　次酒杯　次居器　次酒杯　次酒

次寒汁（鯉、鱠）　追物（蒲鉾、鳥足、鯛、生鮑、細魚、鱸）　次酒器　次（熱汁、追物小鳥、鶉、零餘子燒、生海鼠）　次酒盞　次菓子（小餅、唐菓子、枝柿）

（柿、小柑子、搗栗、野老、掻餅、甘栗）　次署預粥

雜物

繪折敷三百枚　白折敷百枚　長櫃十合　懸子卅枚　土器（小春日二千二十、小盤二百、酒器百、様器三百、内大二百）　飯

一石五斗　酒六斗

〔類聚雜要抄 三〕五節雜事（内大臣〈藤原忠通〉令ㇾ進二五節一給定文自）

一祿

絹十六疋

師六疋　小師二疋　理髮二疋　聞司二疋　琴師一疋　小歌一疋

柏子一疋　小舍人一疋

綿九十四屯

師三束　小師二束　理髮十屯　聞司十屯　小歌五屯　琴師五屯

拍子五屯　今良三人九屯（各三屯）

信濃布六端　今良三人各二端

行事前伊豫守朝臣　實光（光一本作元）

一饗

丑日

前駈料廿前　朝干飯　女房衝重廿前　諸大夫廿前

卯日

殿上垸飯　朝干飯　女房衝重廿前　諸大夫廿前

辰日

上達部殿上人酒肴　朝干飯　女房衝重廿前　諸大夫廿前

小歌衝重十前　師前屯食七具

行事太皇太后宮權亮朝臣　行盛朝臣　廣房朝臣〇中略

一條法

大師

八丈絹五匹　綿十屯（屯別六兩）　凡絹百匹　米卅石

椋一口　手洗一口　火桶口口　疊五帖（高麗二帖、紫三帖）

朝干飯（代五十匹）　菓子百合　繪折櫃菓子廿合　繪大外居菓子三合

三ヶ日別饗三前

理髪

綿衣三兩　裳一腰　唐衣一領　袴一腰

八丈絹三匹　綿十屯　凡絹五十匹　火桶一口

私宮一口　疊三帖（高麗一帖、紫二帖）　朝干飯（代廿匹）　三ヶ日間別饗三前

繪書大外居交菓子三合　例菓子百合　米廿石

小師

袙二両　袴一腰　裳一腰　八丈絹二匹（但宮內省度加之）

六丈絹一匹（下襲代）　綿五屯（十屯內）　手巾料六丈布一端　凡絹卅匹

几帳一本　紙屏風二帖　高坏一本　火桶一口

燎一口　手洗一口　火爐一口　疊九帖（高麗二帖、紫七帖、）

燈臺一本　手筥一合（在納物、硯一面、小刀一、筆四管、錦筥一、疊紙一帖、[illegible]、薫物一裹、油綿紙二帖、花一帖、糸二絇、）

米廿石

毎日祗候

饗三箇度（上一前、女官一前、役五人、共女官九人、）　味曾水一度　菓子卌合（廿合師料、十合共女官料、）　大籠炭一石（師料）

共女官料大原大籠炭九石　師送日共女官九人祿料絹十八匹（各二匹）

小歌（匹絹）　闕司三匹　琴師三疋　拍子（疋絹）

今良三人（各絹疋）　御內守二疋　大師共女官十人（各二疋）

理髪共女官十五人（各二疋、十三人各疋絹、）　行事小舍人三人（一人十疋、二人各五疋、）

出車祿

檳榔五両（車副廿人各二疋、牛飼五人各三疋、）　網代二両牛飼二人（各二疋〇中略）

行事

一饗

殿上卅四前　繪書交菓子二外居　中居物廿坏（但宮內省度不勤仕之）

丑日　前駆料廿前（宮內省度不勤之）

寅日　朝干飯（同度不勤之）　女房衝重

卯日　朝干飯（同前）　女房衝重

辰日　大師料（十二本、土高坏有二打數、副物五十四、鯛干飯、）　理髮料（九本、高坏有二打數、副物卅四、鯛干飯、）　女房衙重　小歌料衙重十前
屯食大破子　出車牛飼副料廿五前

行事

一所々垸飯
瀧口本所
大外居交菓子二合　盛飯廿坏　垸飯廿坏　透蓋飯一盛　瓶子一口　鯉一隻　雉一枝　鹽
梅井木炭等
武者所
大外居交菓子一合　盛飯卅坏　垸飯卅坏　透蓋飯一坏　瓶子一口　鯉一隻　雉一枝　鹽
梅井木炭等
一院北面
大外居交菓子二合　瓶子一口　鯉一隻　雉一枝
御隨身所
大外居交菓子二合　瓶子一口　鯉一隻　雉一枝
太皇太后宮侍
右同
皇后宮侍
右同
關白殿藏人所
大外居交菓子二合　瓶子一口　鯉一隻　鳥一枝

御隨身所

右同

行事〇中略

一繪折櫃菓子

十荷院　五荷太皇太后宮　五荷皇后宮　三荷齋院　五荷關白殿　三荷左大臣殿　三荷北政所　三荷右大將殿

二荷藤大納言　二荷源大納言　二荷民部卿　二荷右兵衛督

一雜菓子四千百五十五荷內

三千八百六十五荷本數　二百九十荷加分

一大破子百九十六荷　屯食十一具

院

百合五荷御厩舍人　百合五荷牛飼所　六十合四荷廰召使、本院、井宮御方料、　卅合一荷廰官　卅合一荷鎰

取　卅合二荷籠殿仕料　五十合一荷藏人所縫仕女　六十合一荷向所小舍人　二十合一荷御本所召使　二十

合一荷御厩所召使　二十合一荷仕所召使　五十合三荷上臈召使　五十合三荷下臈召使　二十合一荷別納所

太皇太后宮職　卅合二荷方々召使　前齋宮　卅合二荷召使

前齋院　卅合二荷召使　當齋院　卅合二荷召使

關白殿　五十合三荷御車副　五十合三荷御厩舍人　五十合三荷小舍人所　五十合二荷牛飼所　卅合一

荷侍小舍人所

左大臣殿　卅合二荷御車副牛飼　卅合二荷小舍人所

右大臣殿　卅合二荷御車副牛飼　卅合二荷小舍人所　卅合二荷御厩舍人

內大臣殿　卅合二荷御車副牛飼　卅合二荷小舍人所　卅合二荷御厩舍人

右大將殿　卅合二荷小舍人所　卅合二荷御車副牛飼　卅合二荷御厩舍人
二位大納言　卅合一荷小舍人　卅合二荷御車副牛飼
源大納言　卅合一荷小舍人　卅合二荷御車副牛飼
民部卿　卅合一荷小舍人　卅合二荷御車副牛飼
新大納言　卅合一荷小舍人所　卅合二荷御車副牛飼
左衞門督　卅合一荷小舍人所　卅合二荷御車副牛飼
右衞門督　源中納言　左兵衞督　治部卿　右兵衞督
已上五人菓子數請所如前但定文ニハ道理書之
新中納言　廿合一荷小舍人所　廿合一荷御車副牛飼
源宰相　楊梅宰相中將　二條宰相　冷泉宰相中將　大藏卿　宰相中將　新宰相中將
新宰相　左中辨　大貳　左京大夫
已上十一人菓子數請所如前但定文ニハ道理書之
頭中將　廿合一荷小舍人所　十合一荷牛飼
頭辨　藏人辨　藏人少將　行事藏人
已上四人同前
行事小舍人　六十合三荷仕人卅合　屯食二具
藏人所　百五十合六荷
掃部司　菓子廿合　大破子一荷
左衞門陣　十合　屯食一具
右衞門陣　左近衞陣　右近衞陣　左兵衞陣　右兵衞陣

已上同前

朔平門　廿合　屯食一具

玄輝門　廿合一荷

花德門　臨陣　內豎中　內膳下部

已上如前

大師共女官　五十合　小師共女官　三十合　藥殿女官　廿合一荷

主水女官　進物所女官　闈司女官　御服所女官　絲所女官　掃部女官　硯磨女官　洗女官　主殿女官　御藥女官　御湯殿女官　小歌女官　御手水女官　油守道女　宣旨御厨子所

以上如前

鳥御飼人　十合一荷　宮內　十合一荷　內侍所　廿合一荷

大盤所女官　御膳宿女官　上御厨子所女官　御髮上女官　內膳御炊　御火女官　文女官

御櫛笥殿女官　御門守東豎　比女大夫

以上同前

內釜殿　卅合二荷　牛飼　百合三荷　長女　二十合一荷　御厠女官　廿合一荷

大盤仕丁　卅合二荷　主殿司共人　三十合二荷　馬部　三十合

出車車副牛飼料　凡絹五十疋　菓子廿五合

永久三年十月十九日

右永久三年內大臣殿令五節出給定文之定也、土御門東洞院右大臣殿家內裏時也、次宮內卿忠長阿波任、令五節出給度祿法、并處々垸飯、同菓子大破子屯食行事所雜物儲本所物出立所雜事等、以

此定文被行之、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月廿二日乙丑、今年五節、殿上中宮各一人、太政大臣中納言藤原實頼卿同有被奉之事、但先日被定中納言藤原師輔可被奉一人之由、而依有死穢停止已了、仍太政大臣家代奉件五節、殿上舞妓、前美濃權守平朝臣隨時息女、中宮舞妓、故右近衛少將藤原朝臣滋幹息女、太政大臣家舞妓、故伊豫介源朝臣相國息女、中納言實頼卿舞妓、故信濃守源朝臣公家息女也、今夜且三人參入、殿上中宮太政大臣家等舞妓也、但中納言實頼卿家、自去十九日大死穢、舞妓今夜不參入、

〔北山抄十二十一月〕辰日節會事

天德三年十一月十五日、大貳元名自鳥曹司還著陣座、依無本任放還也、令奏事由參上、奉今年五節、

〔西宮記十一月〕一獻五節舞姬人々事

應和元年十月二日、遣藏人珍材於左衛門督藤原朝臣第、仰可奉五節事、有所勞依不參也、

康保二年御記云、九月中下旬、令仰可獻舞姬事、例以十月朔仰之、而今年新嘗會期已早、仍今日令仰之、

同三年九月廿七日御記云、遣藏人永頼於前大貳小野朝臣宅、問稱老病不申可奉五節之由、永頼來申云、仰旨相重、須奉五節、

〔日本紀略七圓融〕天元元年十一月廿日辛丑、今夜五節舞姬參、一品資子內親王、參議近江守源忠清、同惟正、○兼大和權守左少辨平季明等也、

〔榮花物語三樣々の悅〕この月○永延二年十月もたちぬれば、五節などを、てんじやう人は、いつしかと心もとなくおもふほどに、○中略四でうのみや○圓融后遵子の御五節、又左大臣殿○藤原雅信のさひやうゑのかう時中のきみ、さては受領どもたてまつる、

〔小右記〕長德五年○長保元年十月二日辛亥、藤相公○藤原懷平告送云、昨夜被定五節、殿上生昌家、右大將道綱、

余〇藤原實資　十一月廿一日庚子、藏人所文章生□來、仰可令參舞姫之由、令申奉由、　廿二日辛丑、四品五品多來、訪五節事、不能追記、遣余車令迎儛姫、備前守相近女者也、出車、藤宰相、式部大輔、右衛門督、左兵衛督、源宰相、筵張車右少辨致□、亥始令參入、前駈有數、陪從六人、童女二人、下仕四人、上雜仕三人、無樋洗、　廿三日壬寅、五節所女房許、副夕食、令辨濟遣之、〇中略　後聞、生昌朝臣舞姫忽欲不參上云々、　廿四日癸卯、送食物於五節所、如昨、令賜酒肴諸陣、　廿六日乙巳、外記史生以使令進見參、申云、五節間先例賜酒肴、去年極奇怪、仍召大外記善言朝臣、爲後々仰事由、善言朝臣再三驚申也、

〔榮花物語初花〕五節廿日〇寬弘五年十一月まゐる、〇中略　ことしの五節いみじういどみかはすなど聞えあり、東のおまへにむかひたるたてじとみに、ひまもなくうちわたしつゝともしたる火のひかりに、つれなうあゆみ參るさまども、はしたなければ、そのみちにえさらぬすぢどもなればこそとみえたり、業遠朝臣のかしづきに、にしきのからぎぬきせたりとのゝ給ふも、げにさまことにさも有ぬべかりけりときこゆ、あまりきぬあつくきせて、たをやかならぬさまなりといふもぞきはあれど、それいまのよのことにはわろからず、右宰相中將〇藤原兼隆もあるべきかぎりしたり、ひすましふたりとゝのへたるすがたぞさとびたりと人はゝゑみたりし、内のおとゝの藤宰相〇藤原實成のはたいますこしいまめかしさはまさりてみゆ、かしづき十人、又ひさしのみすおろしてこぼれいでたるきぬのつまども、したりがほに思へるさまどもよりは見どころまさりて、はかげにをかしうみえたり、

〔小右記〕寬仁三年十月廿七日庚戌、臨夜宰相來云、參入道殿、皇太后宮大夫云、越後守行任、依辭申五節事、被停釐務者、今廻思慮、太后御乳母子左中辨因緣事定無闕歟、　廿八日辛亥、宰相來云、今旦丹波守賴任來云、去夜依召參內、藏人左少辨資業傳仰云、可獻五節者、越後守行任辭申替云々、　廿九日壬子、越後守行任被停釐務、又遣召使云々、世之所推無殊事乎、

〔榮花物語〕三十鶴の林霜月〇萬壽四年の十よ日にもなりぬ、五節の事どもとのゝしれど、殿ばら宮ばら御ふくなれば御らんなどもなく、こまなくさうさうし、中宮〇後一條后威子は五節いだし給へば、中宮よりも童の裝束えならずして奉らせ給へれど、それ覺しめす事どもあれば、御心ちもそらなり、

〔左經記〕長元四年十月十七日辛卯、有召參内、式部丞資通仰云、可獻五節者、令奏奉之由、十一月十四日丁亥、送舞師宿所敷疊七枚木帳一基手洗椽等、令隨身、又褂一重袴一具燒物日物各少々肩一枚同給之、十六日己丑、早旦敷設等送五節所、及昏黑令參舞姫、陪從六人、童二人、已上乘檳榔毛四輛、下仕四人、乘網代二輛、前駈五位六人、六位十人、〇中略及子剋中宮權大夫幷讃岐守舞姫參入云々、十七日庚寅、女房食物自宅令送了、入夜參内、令上舞姫、及子剋事了退出、

〔年中行事秘抄〕十一月參議二人獻五節舞姫例

承保二年十一月十九日、五節參内、參議源師忠、藤原公房等獻舞姫、

〔水左記〕承保四年十一月十六日癸亥、入夜向民部卿御許、華山院爲訪被獻五節也、十八日乙丑、今夜五節參云々、獻五節人々、上達部民部卿受領備中守實綱朝臣、藤大納言辭退替云々加賀守高階泰仲、越後守源賴仲等也、但民部五節夜前參入云々、

〔榮花物語〕三十九布引の瀧年かはりて〇承暦三年十一月五節大將〇藤原師通どのいださせ給、世のつねならんやは、女院四條宮などわらはしもづかへのさうぞくめもあやにせさせ給へり、うつくしき童などえりとゝのへさせ給へり、

〔年中行事秘抄〕十一月參議二人獻五節舞姫例

永保元年十一月十九日、五節參内、參議源俊實、藤原公實等獻舞姫、

寛治五年十一月十七日、五節參内、藤原經實、源雅俊獻舞姫、

康和三年十一月廿日、五節參内、參議源顯通、同能俊等獻舞姫、

永久元年十一月十二日、五節參內、藤原實隆、同長忠等獻舞姬、

〔中右記〕永久二年九月廿六日、內府〈〇源雅實〉依服出來被辭申五節、大略可獻之巡也、早可用意歟、申承了由、　廿八日庚子、今朝從坊門歸、頭辨送書云、五節舞姬可獻者、是內大臣依中宮大夫假被辭申、令替者、依理運申承了由、　六年〈〇元永元年〉閏九月八日、入夜從殿下只今被仰、可參入由、則馳參、被仰云、讚岐守顯賴辭可獻五節、依重隆事輕服、其替五節誰人可出哉、　十一日、讚岐守顯賴輕服之替、以相模守雅職可獻五節之由被仰下云、雅職是新任人、去年任相模也者、依人々障所被仰下也、件雅職又後日辭退了、　十一月十七日、五節參入夜也、後聞帥中納言重資卿、尾張守師俊、能登守基賴、越中守俊親、四箇所皆曉參、一所無參入儀、年來未見事也、尾張去々年獻五節也、而讚岐守顯賴依服假出來之替、忽□□□□依無他國重被宛尾張也、不可爲後例歟、又源大納言雅俊卿奉五節之間、□□□依宰相中將顯雅女子非常事有七箇日服被辭申了、過被程後便被宛越中也、件越中先年若狹任間、已獻五節人也、尾張越中共二箇度獻之人□□□□□

大治二年十月十六日壬申、未時許、頭中將送書札云、五節舞姬可獻之由御氣色者、進返事云、謹承畢、但朔日近々、萬事不叶歟、有恐欲獻無叶、可然樣可令量奏給者、治部卿能俊同可獻由被仰下之、近代右府、藤大納言、皇后宮大夫、民部卿〈已上四人、四條宮服日數中、〉源中納言顯雅〈兄弟假〉新中納言雅定〈重服〉左衛門督通季、右衛門督實行、左兵衛督實能〈已上三人先服〉所殘四五人、去年去々年獻舞姬也、自本中納言一、參議三闕也、此四箇年不被成遂、以如此事出來、爲朝家大事也、數度獻五節、貧道人々被仰下條誠以難堪、無術計事歟、大略辨申也、予可獻五節之由內々有其催、而明日入宮中事有其憚哉否之條、被尋人々之處、爲隆示送云、入月忌僧尼、多是五節定後所忌佛事也、明日可參之由答畢、　十七日癸酉、參攝政殿、五節之事令申也、此曉頭又猶可進之由、頭中將所仰下也、　廿日丙子、頭中將談云、唯今治部卿被辭五節也、明旦可申院也、可獻之上達部已無也、誠以不便也、　廿六日壬午、頭中將密談云、五節已闕了、不

被仰左右、誠以不便也、受領三人常事也、被仰近江守之處申穢之由、又被仰淡路守、申無術之由、奏此旨、其後無沙汰、他受領等多以服假、或此三四年內獻五節也、仍散用度了也、但去万壽三年冬十月六日五節可獻之人全無時、俄被成公卿也、是天曆三年例云々、師房任權中納言、公成任參議、共獻五節云々、此例人々難申出、全無御承引、是爲我不祥也者、就中近日中納言三(○三一本作二)參議三闕之比也、十一月十五日辛丑、今夕尾張越後政敎(五節)如法參入云云、治部卿(能俊)下官姬令曉參、十八日、五節四箇日間也、無風雨障、尤可欣感歟、下官獻五節三箇度、

康和二年、(參議左大辨時)永久二年、(別當左兵衛督中納言時)今度大治二年、(大納言時)三箇度獻舞姬、頗難有事也、

長承元年十月十二日、宰相中將五節萬事不叶之由、右兵衛督顯賴度々申院之處、諸司允一人功給之由所告示也、心中欣感、十一月十九日丙子、宰相中將獻五節、同所之間偏所沙汰也、夕方迎小師權侍廊、令習舞也、其女官七人扈從、

〔續世繼(四字治の川瀬)〕白河殿とて祇園におはせしは、ゆかりまでさりがたく院(○白河)におぼしめされておはせしに、はじめつかた平氏のまさもりといひし參つかふまつりければ、(○中略)其子よりぞ院の殿上人にて、四位五位の舞人などしけれども、內の殿上はえせざりけるに、五節奉ける年受領今一人ためもりためなりなどいひしが父(○爲忠)なりし殿上ゆるされたりしかば、たゞもり、

思きや雲井の月をよそにみて心のやみにまどふべしとは、どぞきこえし、その殿上ゆるされたりしは、院の御めのとご知綱といひしがうまでなれば、(○中略)殿上せさせんとおぼしめしながら、辨近衛すけなどにもあらで、たちまちに殿上せんもいかゞとおぼしめして、うさの使につかはしけるを、鳥羽院の新院と申ておはしましゝ程に、長輔ときこえし兵衛佐をつかはさんと申させ給ければ、かの御方に申させ給ことさりがたくて、さらば爲忠はことしの五節を奉れとてぞ、殿上はゆるされける、

〔台記〕天養二年（〇久安元年）十月廿四日丙申、酉刻頭辨資信朝臣來云、可獻五節者、奏云、今年有障、後年可獻者、　廿五日丁酉、頭辨復來云、攝政（〇藤原忠通）御消息云、無他人之可獻、猶必可獻也、且又可令沙汰給之由申宇治、可獻者、令奏云、只今遣申宇治、依被報命可申左右者、　廿六日戊戌、昨日以頭辨所仰之趣申宇治、今日御返事到來云、一條殿御消未尋常、不能沙汰、卽以此由申殿下、又招頭辨使奏不獻狀、

十一月十七日戊子、傳聞、今夕臨時除目、以三位中將忠雅任參議、（實親辭替）爲令獻五節也、他公卿固辭云々、成佐語云、實親去比獻辭狀、頃之返給了、其後不辭而婿被任替者、既以解官歟、但件卿年來不仕、于今不被解官、可爲榮歟、

久安二年十月二日、頭中將來云、可獻五節者、令奏承由、　十一月十日、深更舞師采女安藝來、余著烏帽直衣、牽舞姬相逢令習舞例祿之外賜別祿、長絹三匹、式部大夫盛憲賜之、先例無此事、然而安藝及老衰（八十餘）爲譏者、因優之耳、不可爲例、敎舞了及曉退出、永久丑日退出、今度早出、親隆所行也、可謂失、

十一日、獻五節舞姬、（大炊高倉第）及昏上達部殿上人來會、〇中略此間童女下仕著裝束、散位清職大舍人助雅亮奉仕之、路從殿南階寄車、傳入人童女二人乘之、（童女乘時擁几帳）公能公隆兩卿雲客兩三人扶持令乘之、下仕車寄中門廊乘之、了舞姬車寄南階、（與傳童女等同所）有几帳、公能卿侍從公保扶持、前駈廿人、（藏人五位十六人、六位四人、承暦例、）申請所々免人舞姬念作事、（朱雀院）車副六人、（褐冠）傳入人、童女二人用上達部車五輛、車副四人、（布衣本二人、加余雜色二人、童車無下簾、）下仕四人、殿上五位車二輛、皆更參內了、示諸卿令出、後余參內、在五節所、頭之五節參內、（余并諸卿參、公敎綱美作皆參、）先童女、次傳女房、次下仕、次舞姬、（几帳差右衛門尉盛宗、右衛門尉國清、左衛門尉成實、左兵衛尉滿明、被用、散位光業重）（盛以長憲親、送士雜色國綱、著衣冠抱舞姬、）次越前參入、舞姬參上帳代之後退出、

今夜舞姬參內道、隱司東洞院爲陣口、仍廻一條令參內、（盛居土御門烏丸）今度依宇治仰無上雜仕、洗極傳并下仕二人、不入五節所直退出、（家司職事乎）童女下仕二人、事了退出、姬君四箇日在五節所、

〔山槐記〕永暦元年十一月三日丁丑、巳刻著宿衣參內、〇中略以通能被仰云、若狹可獻五節云々、而內々

美福門院有御沙汰事也、此間御不豫、仍不能御沙汰、若被改他人如何之由、自彼院令申給、此旨可申前關白者、予卽參彼殿、申此旨、御返事云、爲院宣被催定了、令參熊野御了、仍不能申左右、可有勅定者、此旨歸參付通能申入候畢、　六日庚辰、入道大相國(○藤原實行)被送使(前豐後守時光)云、丹波五節、内々所致其沙汰也、(彼入道國也)而瀧口送物使、無可然之衛府、欲差賜彼所之上﨟一人者、予答申云、可差進也者、　八日壬午、新大納言(光賴)被示送云、可獻五節之處、已服暇事出來之外孃尼云々、(大相國舊室、故俊忠卿女子、)逐電參大殿、付長定申此旨、仰云、先々如此之時、被仰親昵之人、内々沙汰渡恒事也、可然人誰々乎、予申云、別當、(公光)新中納言、(顯時)右兵衛督(顯長)之間可被仰歟、御返事云、早經奏聞、隨勅定可仰作人々者、次付信國申博陸、仰云、尤不便聞食了者、次參内、於鬼間付内侍奏聞、勅定云、早可計催者、先有此沙汰、猶可致用意可被獻之人々追可被仰之由、仰大納言許了、次遣仰別當之許了、卒爾之間難叶之由被辭申、重又仰遣云、於他人不可叶、依爲親昵、彼大納言内々可被致沙汰、猶可獻者、請文云、於闕如者非沙汰限、早可獻者、此旨付藏人時盛奏了、　十日甲申、未刻參内、令藏人時盛奏聞事、○中略

一五節事、兩國各不可略、參御覽之由有院宣、御物詣以前各領狀了、而盡以不致其沙汰之由、唯今言上畢、仰云、於若狹者内々有女院御沙汰、而此間御重憹、每事不能御沙汰、爲不闕公事、唯如形自閑道可參云々、○中略

一五節

早如院宣重可相催、於若狹事可隨勅定者、

又歸參内、申此旨、譴責丹波、兩三度之後、參事許領狀、依半漏今夜不奏聞、　十五日己丑、戌刻參内、候小板敷、催遣五節、(仰預藏人、又他藏人、)權中納言、(雅敎)別當、(公光)若狹守隆信、舞姬曉參云々、(實者只今自閑道密々參上、於五節所裝束、近代例也、)丹波守成行舞姬遲參頻遣催、自入道大相國八條亭被獻云々、亥終參朔平門之由預藏人觸予、令藏人等令告殿上人等、(是非催促相觸也、不用預之人者、自閑道向、有會尺之人者、列立神仙門外、)雲客列立神仙門外、瀧口皆悉來殿

上口、（押来殿上口事、先陰不分明、藤大納言宗能説云、一両人相具、或不然云々、而殿上口雖人須陪来、拂又非無便宜也、）藏人取脂燭在神仙門邊、予進出、一﨟以明二﨟頼保取脂燭前行、右中將家通朝臣、左少將通家朝臣、右少將實宗兼雅相副予傍、是非打任事、殊各有芳心也、次頭辨退出、三﨟時盛、新藏人仲重取脂燭、次殿上人等從來、經後涼殿西北弁弘徽登花殿等西、立貞觀殿北壇上、（西上北面、予戸西間西柱西邊、頭辨立同柱東邊、此立所詳無所見、然而相尋人々所消息也、）殿上人立南貫首之東方、而殊有芳心之人々忘彼例、少々立予傍而被相引、多又立西方、予示曰、早可列東者、仍行向了、藏人等猶取脂燭在傍也、（或古藏人五位四位立定之後、藏人消脂燭付下仕也云々、而近代如此、但無脂燭者定睹然歟、近代之儀又非無便宜□□、）瀧口列居玄輝門西廊前、予令藏人召瀧口四五人、令候玄輝門左右、令拂雜人、先是自朔平門至于玄輝門內、東折、自貞觀殿東土戸、至于常寧殿艮壇下、敷筵道、（今夜敷薦、是別儀、行事藏人儲也、）殿上人皆悉向朔平門、先女房六人參入、次童二人、次下仕二人、（已上殿上人指貫相副之、）舞姫參入、（經藏人五位等取几帳角、）凡參入之間、主殿官人立明、此事非例、只內々自入道大相國許被語預藏人云、官人頗難澀、然而猶令奉仕云々、可相語近衞官人歟如何、

〔玉海〕承安二年十月二日癸巳、傳聞今年可有五節云々、　十五日丙午、頭中將、大將（○藤原兼實子良通）五節事重加催、猶申無術之由了、　十八日己酉、五節事可奉行之由仰光長、依所勞辭申、然而只乍在里第放御教書於諸國之間事許、可奉行之由重仰了、　廿日辛亥、申刻、頭中將隆房朝臣來、依有穢疑呼緣邊、予在簾中、（長押上也、依疾不出簾外、兼以人謝之後謁之、）爲示五節之間事所來也、先日親宗御教書、全非御氣色之趣、只文章所書歟云々、奇特云々、相示穢次第、然而忽不可有其免、仍殊不示、依此事可遁之狀只示聞子細許也、參入御覽可被免之由同申了、是余大納言時令獻之例也、　廿九日庚申、定能卿告送云、五節參入御覽事相計、追可被仰左右之由其仰云々、一切不可叶、猶被懸者、可辭退五節之由令申了、　閏十月五日丙寅、自頭中將之許、大將五節猶可勞參入之儀之由、以消息示兼親之許、申猶不及力之由了、（大將執狀）　六日丁卯、申刻、頭中將隆房來、仰大將五節參入事、先以季長示返事之後余謁之、猶一切不可叶之由申切了、凡家慣參入御覽共勤仕之、又有上雜仕樋洗、又下仕四人也、而今勤可被混凡俗之條、尊不

可然、余先年奉仕之時、故殿依奈良大衆事、恐怨世間之間、兩事共不勤仕之、今度偏可依彼例也、中心雖存此旨、上奏不出此詞、依善惡無分別之世間也、

文治二年十一月十二日乙卯、定經來申、五節御覽、基家卿固辭之由、仰可院奏之由、件樣申狀、太以奇怪奇怪、　十三日丙辰、定經云、基家卿五節御覽事、若猶辭申者、可辭所職之由可被仰下云々、可仰其旨之由下知了、如此之仰尤神妙歟、　廿二日乙丑、此日五節參入也、(參議基家、雅長朝臣、能登顯家、越中家隆、)已刻象忠來云、保家(基家卿下)望申昇殿奏院之處、今度五節次弟太奇怪、仍不可被計歟云々、

〔明月記〕正治二年十一月十三日、五節參了云々、○中略二所各參了、下仕二人、(一輛)女房六人車、(三輛)童二人、(車一輛)兩所一同也、高通以下行事、次取照燭參南殿御後、攝政殿左大臣殿右內兩府口通資等也、舞姫昇如恒、

〔玉蘂〕承久二年十一月十五日、此日五節參入也、春宮大夫三條中納言、殿上受領讚岐伊賀等獻之、○中略丑刻讚岐舞姫參入、(三所曉參、寄々向五節所云々、)

〔明月記〕嘉祿二年十月一日癸未、五節隆親經高卿、上卿通方卿領狀、被催信濃(隆仲卿)辭退國云々、

〔平戶記〕仁治元年十一月十二日辛丑、今夜五節參內、

公卿　帥大納言(隆親卿)　大宮新大納言(公相卿)

殿上　信濃(中將通輔朝臣)　出雲(職人佐時綱、國務、)

參入之儀、出雲一國云々、

〔明月記〕寬元元年十月九日癸卯、五節有親朝臣(出雲)幾領狀、公卿左衞門督(○源顯親)大炊御門大納言(○源雅親)被責、權中納言(實基)申妻重服、明年必可獻由、　十五日己酉、入道按察以使者被示五節事、身上有卒爾禁之由答之了、　廿日甲寅、右武衞(○藤原賴氏)書狀之次、不獻五節、可造後白河院法華堂之由被仰云云、

舞姫定數

〔平戸記〕寛元三年十一月廿二日癸丑、今夜五節參入、〈新源大納言通忠卿、故中大宮中納言公持卿、新中納言公光卿、右中辨定經朝臣、右宰等也、公卿三人受領一人歟之由有議、勅定猶公卿二人受領二人可宜之由云々、彼是未決、被定之時如何、其後不聞及、追可尋、〉今夜時々雨猶灑、然而參入之儀如例云云、

〔經俊記〕寶治元年十一月七日、先參殿下、〈○藤原兼經〉今日爲被任五節功人、可被行小除目、　十六日乙丑、今日五節參入也、左大臣〈參入○藤原兼平〉　左大辨〈經光〉　大藏卿〈定嗣〉爲扶〈前相國知行國〉獻舞姫、左府五節參入之時、祗候殿下云々、殿上人許可參會北門之由被仰下、衆被觸人々云々、予依蒙仰參入、亥刻許已參入、頭辨顯朝朝臣廻北陣、不付童女以下之人々、不相從、理所致歟、不付童女、可隨貫首歟、正治不付童女、殿上人自門下退歸云々、殿下左大臣殿衆令候五節所給、童女以下次第下車、殿下御隨身取松明列立門南、舞姫几帳諸大夫取角又抱之、下維仕四人諸大夫付之、予任正治例付下仕、

〔政事要略二十六〕寛平御遺誡云、毎年五節舞人進出、追期日經營尤切、今須公卿之中令貢二人、雖非其子、必令求貢、殿上一人、選人召之、當代女御又貢一人、公卿女御依次貢之、而復始以爲常事、須入十月即召仰、各身在前令用意、勿有故障、臨時取替、此年朕之所煩、仍誡新君、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公〈清行中略〉○

一請減五節妓員事

右臣伏見、朝家五節舞妓、大嘗會時五人、即皆預叙位、其後年々新嘗會四人、無預叙位之例、由是至于大嘗會之時、權貴之家、競進其女、以充此妓、尋常之年、人皆辭遁、可闕神事、爰有新制、令諸公卿及女御輪轉進之、其費甚多、不能堪任、伏案故實、弘仁承和二代尤好内寵、故遍令諸家擇進此妓、即以爲選納之便也、諸家僥倖天恩、不顧靡費、盡財破產、競以貢進、方今聖朝修其帷薄、立其防閑、此等妓女、舞了歸家、無預燕寢、然則此妓數人、遂有何用、重案舊記、昔者神女來舞、未必有定數、四五人、伏望擇良家女子未嫁者二人、置爲五節妓、其時服月料、稍令饒給、節日衣裝、亦賜公物、若貞節不嫁、經十箇年者、即預女

敍、聽令出嫁、若願留侍者、預之於藏人之列、卽擇置其替人、亦如前年、〇中略

延喜十四年四月廿八日從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

〔政事要略二十六〕右大臣宣、奉勅參議治部卿正四位下兼行伊豫守藤原朝臣齊敏、參議左大辨從四位上兼守大藏卿行備後權守藤原朝臣文範等、去年十一月三日奏狀偁、謹檢案內、大臣已下參議已上、所勤公役、專無差別、所賜封祿、甚以懸隔、其參議之封、只六十戶、仍爲優勤勞、殊賜兼國、而諸國公廨、多申減省、無擧本數、處分之率已少、國司之員倍多、適所當之料、勵致物貪、難支急用、就中五節之事、所費不少、彼茅土高貴之家、猶傾資產而多營、蓽戶閑素之輩、還損公威而有耻、方今雖募二分之年給、曾無一人之企望、僅要判官更辭主典、世俗所變、人心難奪、然則年官月俸、有名无實、望請殊蒙天恩、早降二合之宣旨、將支五節之用途者、奏請之旨、尤可許容、抑奉五節舞姬女、非宰相之職、納言以上、同營此事、自今而後、大臣已下參議已上、今年獻五節舞姬者、其明年給殊許二合、但納言以上、若當二合年、廻宛他年、立爲恆例者、

安和二年二月十四日　大外記兼播磨權少掾菅野朝臣正統奉

〔江家次第抄四〕獻五節明年外不二合

參議尋常不二合、但獻五節舞姬翌年賜二合、自安和二年始之、蓋以二合公廨爲常五節用途也、又納言以上獻五節翌年、自然一當巡年二合者、不可任〇任一作申一五節二合也、其故者安和宣旨云、自今以後、大臣以下參議以上、今年獻五節舞姬、其明年給殊許二合、但納言以上若當二合年廻宛他年、立爲恆例云々、而今先任巡年二合以五節二合爲未給申之說更無其謂也、其故者納言每年給二分一人一分一人也、以此爲二合申任巡年給者、此外又無給分、以何可稱未給乎、

〔朝野群載七公卿家〕獻五節舞姬申年給二合

正六位上大宅朝臣守光

帳臺試

望若狹掾、

右依去年獻五節舞姫、當年給二合、所請如件、

寛仁五年正月廿三日　正二位行大納言藤原朝臣行成

〔職原抄上〕太政官

參議八人

大臣隔年任諸國丞一人、納言三年一度任掾一人、參議者不任掾、但獻五節之翌年給之、

〔江家次第十十一月〕五節帳臺試

常寧殿西塗籠內、帳臺上敷長莚、其上可敷舞姫座、（近例以中取上）其前各立白木燈臺一本、舞殿戶下立床子一脚、東帳臺坤角引幔爲小歌座、北廂塗籠內爲大師宿所、大歌候同殿東假座、（殿上人勤垣下）殿內四角各卜五節所、殿垣下四角各設假切懸、自清涼殿東廂北階下、到承香殿坤角、假作長橋、時剋五節舞姫參入於玄輝門、（下車、公卿束帶相從、各入五節所、有塗道）諸大夫四人執几帳角、殿上人付童女傳等如例、前例用半靴、近代不見、除大歌垣下行事藏人之外不束帶、五節皆參之後奏其由、主上出御、（御直衣御奴袴御沓）經假長橋幷承香殿南簀子、同馬道后町廊、常寧殿馬道等、入御於師壺寢、殿上侍臣指脂燭設候、近習公卿兩三供奉、若不出御者、執柄人幷藏人頭行事藏人、立舞殿東戶下開闥、（用床子）舞間禁闥入、（理髮童女陪從下仕外不可入、頭若行事藏人之外不能伺戶外、）舞姫等次第參入、（經馬道入舞殿戶）先童女一人持火取、次童女一人持茵、次舞姫、（下仕等取几帳三本相從、理髮相具）次火取童入戶卽歸、次茵童敷茵、（居帳臺下）次舞姫居茵上、（北面西上）次几帳一本立其後、（自餘早歸）次大歌移候於后町廊邊、次大歌小歌發聲如恒、次舞姫舞畢、次第退出如初、次還所、西南角五節所者（以陰明南廂、爲出大嘗所）出西南面西戶、經南垣幷馬道入戶、

西北角五節所者、入自塗籠戌亥戶、（人不付之、但御前試幷節會夜、入自北西戶、幷北壇西馬道、）

東南角五節者、出自東西戶、經南壇幷馬道、

入戸東北角五節者、出自北廂西戸、經馬道入戸、

〔雲圖抄十一月〕五節事（一臈藏人爲行事、有故障之時、二三臈勤之、）

丑日帳臺試事（五節所常寧殿儀）

舞姫參集由、預藏人觸貫首、（舞姫參道之間、藏人頭以候殿上爲住、下臈藏人又候小壁下、）次奏事由、即以還御、（御直衣、御襪、御奴袴、淺御沓、或半靴、頭已下殿上人皆乘脂燭、公卿少々有別召、藏人頭候天氣、催云々、近衛將可候御前、）入御大師局之間、藏人頭可用心云々、（无別事座、）事了還御（東廊南北行、木工寮構假庇、大藏引紺幕、掃部二行敷席、穀倉院備饗、爲大歌座、〇中略）

御出道自承香殿長橋、（件橋起自中殿北戸前、至于南北拔戸下構之、）經仁壽殿西廂、更至于承香殿馬道、從后町廊、（自馬道至于廊、凡御路左右構打燈階燃火、）入御大師局、（自東北戸入御）舞殿西五節所、舞姫直自西戸出入例也、

〔雲圖抄裏書〕五節次第

丑日舞姫等參入、裝束了後、預藏人觸其由於貫首、（大歌參了後、可申歟、）藏人頭奏聞、（或令藏人奏聞、）

次御出（頭以下前行乘脂燭、公卿在御後、）

入大師局（殿下同入給、他公卿候御馬道邊、隨所々便宜、或上臈一兩參入云云、）

次舞姫等參入（必無次第、茵几帳各以具之、童女持隨、登上相引參入、中帖上敷茵、茵前立几帳、但立舞之時撤件几帳、云云、）

預藏人每度搔起束帶

次大歌發歌笛（小歌相和）

次舞了退下（六位抱之）

次還御

〔夕拜備急至要抄十一月上〕一五節舞姫參入

可獻舞姫人々（就參入人可定申、）　修理（木工寮修理職）　御簾（近年成功）　掃除（六位職人沙汰）　出仕殿上人　帳臺出御

公卿（不及廣申御點）

〔蓬萊抄〕十一月中丑日夜帳臺試事

其儀入レ夜自二北陣一（主殿門）五節等參入、（以二常寧殿一爲二五節所一）殿上人引群行向、一家公卿若受領獻之時、依二其語一扶持也、○中略舞姫裝束了後、主上渡二御帳臺一、（常寧殿之內帳臺、○中略）有二親昵公卿四五輩扈從、御後藏人頭已下秉二脂燭一皆參、主上入二御大師局一之後、舞姫等次第參二帳臺一、童女二人、（一人持二薦疊一、一人持レ筥、）下仕二人、各以相從、雲客傍レ之往反、舞姫皆參之後、行事藏人閉レ戶候、此間雲客於二后町廊邊一每手曳二脂燭一鼓譟、其間怖畏尤多、能可レ致二用心一歟、帳臺試了、還御儀如レ初、

〔年中行事（加茂氏人保隆所傳）〕十一月中丑日帳臺試事

五節舞姫參二於朔平門外一、殿上侍臣相迎引導、參集之後渡二御常寧殿一、（御直衣、御指貫、紅出衵、淺履、）殿上侍臣差二紙燭一、近習公卿等扈二從御後一、次舞姫等參入、次頭藏人懸二戶鎰一、次大歌小歌發聲、舞畢還御、

〔年中行事抄〕十一月中丑日同帳臺試事

藏人式云、中子丑日、於二舞殿一調二習舞姫一、

清涼記云、子日入夜、舞姫於二常寧殿一調習、

西宮記云、五節參內、先例戌子夜、

〔世俗淺深秘抄〕上五節節會夜、舞姫參上間、侍臣於二露臺一有二亂舞事一、其時近代多解レ紐甚僻事也、主上有二座外一時、敢不レ解レ之也、無二御出一時ハ間解レ之、其モ猶不レ解一說也、但解又非レ難歟、有二御出一時ハ甚不レ可レ解、

〔建武年中行事〕十一月丑日五節の舞妓まゐる、四人の內一兩人まゐりの儀式あり、其外はうちうちまゐるをば晚參といふ、みな參とくのぼりて帳臺に出御あり、殿上人どもまそくにさぶらふ、主上御なをし御指貫にて、御沓をめさる、帳臺御所のほど亂舞あり、びんたゝらなどうたふ、

〔公事根源〕十一月五節

中丑の日をば、五節帳臺試といふ、常寧殿にて主上御覽あり、五節舞姫は五人也、まゐりの儀式あ

り、うち〳〵まゐるをば曉座といふ、皆まゐりとゝのほりて帳臺に出御なり、殿上人ども脂燭にさふらふ、〇中略帳臺におはしますほど亂舞あり、びんだゝらなどうたふ、大歌小歌などいふ事有、

〔小右記〕永觀二年十一月十八日甲子、入夜參內、候宿殿上、五節參入、景舒女也、自餘不參、十九日乙丑、昨今內御物忌、三所五節參入、有常寧殿試事、主上御常寧殿、密々御覽、依御物忌、被修諷誦、御出之事太似強也如何、

〔法成寺攝政記〕寬弘三年十一月十四日癸丑、五節參一條院、以東對為舞殿、東西對為五節宿所、舞殿融依別樣、行事式部丞定佐勸當、忽依蔀遣戶別樣、以御簾懸舞殿三面、

〔空穗物語祭使〕このなかたゞ、御門も東宮もかたときまかでさせず、めしつかはせ給、〇中略年十八にて侍從になりぬ、そのとしの五節の心みの夜、后宮よりはじめたてまつりて、おほくの女御更衣まうのぼり給へるにも、このいだしの五せちのかたちようい、はかなくうちふるまへるも、人にはことにて、うへ御心とゞめて御らんず、まひはてゝあかつきがたに、まづときかげ、なかより、ゆきまさ、かやうの人々めしいでゝ、このなかたゞもめして、そうする聲も人にはすぐれて、ことにきこゆれば、うへきこしめして、御前にめしいでゝ、つねよりもものゝねまさるべきわかつきになむ有、

〔枕草子五〕だいりは五節のほどこそすゞろに只ならで、みる人もをかしうおぼゆれ、とのもりづかさなどの、色々のさいくを、ものいみのやうにて、さいしきつけたるなどもめづらしくみゆ、清涼殿のそりはしに、もとゆひのむらご、いとけざやかにていでゐたるも、さま〴〵につけてをかしうのみ、うへざうしわらはべども、いみじき色ふしとおもひたるいとことわり也、山あゐ日かげなどやないばこにいれて、かうぶりしたるをのこもてありく、いとをかしうみゆ、殿上人のなをしぬぎたれて、扇やなにやとひやうしにして、づかさまされどえきなみぞたつといふうたを

うたひて、つぼねどものまへわたるほどは、いみじくそひたちたらん人の心さわぎぬべしかし、ましてさと一度にわらひなどしたるいとおそろし、行事の藏人のかいねりがさね、ものよりことにきよらに見ゆ、よとねなどよきたれど中々えものぼりゐず、女房の出たるさまほめそしめ、此ごろはこと事はなかめり、ちやうだいの夜、行事の藏人いときびしうもてなしてかいつくろひ、二人わらはよりほかはいるまじとおさへて、おもにくきまでいへば、殿上人など、猶これひとりばかりはなどのたまふうらやみあり、いかでかなどかたくいふに、宮〈〇一條后定子〉の御かたの女房二十人ばかりおしこりて、こと〳〵よういひたる藏人なにともせず、戸をおしあけてさゝめきいれば、あきれていとこはすぢなき世かなとてたてるもをかし、それにつきてぞかしづきどももみないるけしきいとねたげなり、うへ〈〇一條〉もおはしまして、いとをかしと御覽じおはしますらんかし、わらはまひの夜はいとをかしう、とうだいにむかひたるかほども、いとらうたげにをかしかりき、

〔鹽尻三十一〕枕草紙、〈〇中略〉帳臺の夜、行事藏人いときびしくもてなして、〈〇中略〉信景按、凡枕草子は、當世のさまをあらはにかきて、身のめいぼくらしくいへど、君の御耻はこゝらよれ侍る、凡行事の藏人は闖入を禁ずべき爲、むかしより舞殿の東戸にたち開闔するよし、江次第にも見えたり、よかるに寵盛にして、是を禁ずる事あたはず、すぢなき世かなといふを、一條院をかしとおぼしめす、無下に口をしからずや、此事禁中の局々みだりがはしき瑤風、宮女は直とらぬ遊女のごとし、男女別なき事禽獸に等し、むべなるかな、武臣權を握るきざし漸々見えしことを、

〔左經記〕寛仁元年十一月十九日癸丑、參內、五節舞姫等於二舞殿一舞、〈大口候二弓場殿一〉主上幷東宮、出二御舞姫師宿所一御二覽舞姫一、〈前攝政幷攝政、左大將、新中納言、御共令レ參給、女房等候二此所一、御出之間御共東宮人々奉レ物、〉事畢還御、

〔中右記〕寬治二年十一月十七日、五節參入、獻舞姬人々、中納言殿、左大辨、越前、（清實）備後、（家明）無御出帳臺、依幼主（○堀河）也、殿下相替御出、內大臣二位中將三位侍從被候也、　三年十一月十一日、五節參入、（源大納言師、若狹正家、治部卿俊、播磨定綱、）若狹一所參入、其外曉參、無御出帳代、是依御物忌也、殿下不令參給也、人々不被遊、

〔爲房卿記〕寬治五年十一月十七日辛丑、五節參、先右兵衞督、次加賀、（予東宮參仕、雲客口各無極、）次美作、次二位宰相、帳臺試不出御、依御物忌也、殿下（○藤原師實）攝政之間渡御、今夜不參帳臺給、關白以後不可然之由被仰也、頭弁被行事、

〔中右記〕寬治八年（○嘉保元年）十一月十五日、終日候內、玉體猶豫也、今夕五節參入、以東對代廊爲五節所、入夜行向宰相中將許、訪五節事、同車參內、左大辨五節安藝舞姬等曉參著、宰相中將幷但馬守隆時五節舞姬如法從北陣方參入、帳代試間無御出、頭辨沙汰万事之間、開帳代戶人々見之、頗以奇恠也、

十二月二日、入夜參內宿仕、聞今日頭辨幷一臈式部丞定仲恐懼、是五節之間舞姬入之後、開帳代戶方入見了奇恠者、依件事從院被中被召問、彼兩人無所陳歟、仍以勘事、頭辨縱不知故實、雖表奇恠、職爲貫首被恐懼事如何、爲藏人頭者勘事、近頗所不聞也、

嘉承元年十一月十三日、入夜行向右衞門督宗通卿五節出立所東洞院亭、及亥刻五節舞姬參了、（○中略）今夜新大納言經實卿右衞門督宗通卿舞姬尋常參入、備前守國敎越中守宗章舞姬曉參云云、今夜雖不當御物忌、無帳代御出、御風以後未有御出也、

永久二年十一月十八日、今夕五節參入、主上（○鳥羽）初御出帳臺、（著御指貫淺履）殿下右大將中納言中將參給、但殿下中納言中將不著出衣給、北政所御事之後、今年許無華美事也、

元永元年十一月十七日、五節參入夜也、（○中略）今明日御物忌也、仍無御出帳代、只貫首以下沙汰、預二臈藏人左兵衞尉顯憲（一臈有障也）五節所東對代廊、帳代在其中、

〔山槐記〕永暦元年十一月一日乙亥、參大殿、(○藤原宗輔)申條々、(○中略)
一帳臺試日當御物忌出御有無如何
仰云、先々當御物忌、無此事者、
此旨付内侍奏聞、仰云、去年依御物忌無出御云々、今年御物忌雖非堅固、猶欲出御者、　十五日己丑
戌刻參內、(○中略)舞姫入玄輝門之後、予(○藤原忠親)入貞觀殿西土戶、常寧殿西壇經南面、自后町廊經承香
殿西長橋、(爲畫御覽新儀之長橋也、今朝自承香殿西廂橋至于御殿北橋之前被渡之、件承香殿西廂南方簾有所、御覽日下仕可下之料也、)候小板敷、令藏人賴保申
事之由、頭之出御、頭辨供御沓、關白(直衣、出白浮文厚衣給、)右大臣內大臣(已上直衣)別當(依家督喪籍、獻五節也、)予等列居孫庇、
雲客皆悉取脂燭前行、參議經道孫庇北行、於第三間、御經長橋幷承香殿簾間后町廊、入常寧殿馬道、
入御大師局、(關白令奉御簾給、頭辨取御沓賜藏人、)公卿在御後、予頭辨同候、其後不取脂燭也、關白直入御簾中、兩丞相
暫徘徊戶外、依召入簾中、別當被向五節所、(被人被獻之)次童女參上、頭辨取茵令持童女、令入帳臺東戶、令
敎調帳臺南方當西第一、當姫君座令候、次舞姫參入、理髮一人計相副、令取几帳參入、自餘加制止不
參入、四所參入次第如此、上﨟先昇、北面西上列居、預藏人以明持燈立戶南方、予頭辨立北方、令閉戶
之時、藏人昇殿床子可鎖閉也、然而近代只押立云々、先是召大歌令候后町廊邊、舞姫昇了發歌笛、予
頭辨候大師局戶外、殿上人皆列立后町廊、先阿音、次督佐々良、次萬歲樂、各亂舞、次雲客列入殿馬道、
頭辨舞、次予舞、了如元歸下、次舞姫退下、自上﨟退出、次還御、予獻御沓、右大將自后町廊至于承香殿
西橋被著沓如何、后町廊東西令瀧口拂雜人、令祗候左右、丑刻事了退出、
今年行事辨所不調御簾、遷幸之時御簾調、仍先日申大殿之處、可用件御簾者、行事藏人以明出納
一﨟淸重也、
〔玉海〕嘉應三年(○承安元年)十一月十九日己丑、此日五節參入也、主上(○高倉)依御物忌不出御帳臺、寬治三
年例也、抑雖御元服以後、復辟以前、猶爲幼主之儀、縱雖不當御物忌、何出御哉、但寬治四年五節可勸

見也、同五年爲有復辟之後故也、則引檢寛治四年記之處、出御也、御衰日有先例云々、但非御物忌、承安二年十一月十二日、此日五節參也、主上始出御帳臺、復辟以前寛治四年例也、今日御衰日幷凶會、雖初度不被憚之也、(御衰日寛治例也)又今日御物忌也、然而被破了、永久例云々、　三年十一月十二日辛丑、丑刻五節參入、主上出御帳臺、關白左府下官左大將時忠等候御供、其路出御東對西面北第一間、經二棟廊南緣幷南殿御後中宮御方南面緣等、入御西子午廊南面妻戸也、(件屋爲五節所)關白已下皆入候此中、件戸不懸簾、行事之失也、露顯太以見苦見苦、鷄鳴之後還御、其路如初、次余退出、

〔吉記〕治承四年十一月十七日乙丑、今日五節參入也、秉燭之後參內、(直衣如例)但馬守經正朝臣舞姬始參北陣、藤大納言(實國、元左大將也、而依九條三品事有經服事、仍忽被改大納言、依親昵不止經營也、)藤宰相(定能朝臣)因幡守隆清(元備後守保房也、而姨母高松尼被實衡室逝去、依服暇忽被改因幡、是帥大納言西國知行、他人之營、半留不可叶之故也、公卿受領共改易、可成奇歟、)等舞姬皆曉參、各參了之後、頭重衡朝臣、幷予、下小板敷廻北陣、藏人季隆非藏人在高差紙燭前行、依路廣予與重衡相並、殿上奏通隆房等朝臣以下及卅許輩群列、兩頭列立北對北面、(重衡立西、予立東、)次女房六人、童女二人、下仕二人、(先例四人也、近代略儀二人歟、不可爲例事歟、)雲客等相副、次舞姬等參入、次兩頭自堂上廻御殿方、次殿下(于時御殿上、御直衣表唐綾出衣、保安例云云、)別當右宰相中將源宰相中將等扈從、(予奉行之時、被儲左府、而今日被申所勞之由、右大將參入、自途中歸了、依皇嘉門院御仰云云、予障間不日入、示付藏人少輔先了、仍少輔取御氣色之處、被儲堀川中納言、有申旨、次及兩相公、世間以不甘心云云、)次殿下別當入帳、兩相公不入、次舞姬參入、兩頭取茵几帳等扶持、童女舞姬等入帳臺之中、如例、子細去年記了、每度頭藏人兼時(一二臈不參、預及三臈者有例也、)開闔帳臺戸、各令亂舞了、次舞姬退出、次還御、○中略

大嘗會已前五節、圓融花山二條院等也、但舊記不詳云々、

〔百練抄八高倉〕治承四年十一月十七日、五節於新都(○福原)被行之、大嘗會年不被行之、

〔玉海〕文治二年十一月廿二日乙丑、此日五節參入也、巳刻兼忠來云、○中略源中納言通親望申可候帳臺幷御覽座事、此事少例、申云、如此事偏可依御定、但依所座被召者、不可有劣人歟、頗似無詮、然而於

此御者、可為宿直禁中之由別蒙仰云々、先例或又近習之輩又應召歟、然者雖被召強不可有難歟、雨方可在御定、歸來云、然者可召者、仰可召由了、〇中略余以下經上戶清涼殿南廂庇透渡殿假橋南殿東簀子幷同北向幔並入自南面妻戶著座、路間殿上人濟々、指脂燭立左右前後如例、余座與公卿座之間、懸簾垂之、未見之御裝束也、仍召藏人令上之、(此次南妻戶簾、公卿等仰藏人令垂之、无上之故也、)又公卿座無疊、仍余座疊一帖令移敷之、先例敷一帖、其上加圓座、今夜敷二帖加半帖如何、仍一枚給公卿座也、次舞姬等參上、四人參集、(各有從女一人、)皆參入之後各纈袖、(各可要書歟)舞了退歸了、此間殿上人等亂舞、阿聲如例、亂舞了之後、舞姬退下也、是殿上人扶持之故也、

建久二年十一月十五日庚申、實明朝臣申五節公卿殿上人散狀、〇中略余仰云、主上〇後鳥羽始可出御帳臺、大臣一人不參尤不便、重可相催者、　廿日乙丑、五節參入、雨降頗違近事歟、〇中略亥刻著直衣(不出衣)相伴大將參內、主上御寢奉驚之、忠季信清等朝臣令奉仕御發御裝束等、〇中略實明朝臣云、左大辨五節存參入之儀已參陣頭、而雨降頻下、如此之時略陣中之儀式、密々參入五節所已存先例、將如何、余云、任例早可參入者、余即著殿上、〇中略入御大師壺經東西妻戶、先於戶下脫御御沓、(實明取之)件間須懸御簾、而不懸之失也、又御在所與舞床之間卷御簾不可然、仍先使實明下件簾之後著御御座、(敷高麗疊二枚、其上敷同繝半帖、立大宋御屛風三帖、)〇中略舞姬等入自南戶參入、列居舞床之南、次大歌發聲、其後經數刻舞姬昇居舞床上舞也、(北面、先例以御所方為上、是非也、)舞了如本居、此間殿上人亂舞了、舞姬等次第退下、〇中略主上經本路還御、余以下扈從如出御、〇中略今夜不持晝御座御劍、是定例也、凡主上出御之儀、只混合殿上人竊欲覽之儀也、今夜御路不敷筵道者故實也、而南殿御後以西敷之、然而已渡御之時見之、仍忽不能撤云々、

〔三長記〕建久七年十一月十四日己丑、入夜改著衣冠參內、今日五節參也、高倉中納言左大辨信濃長門獻舞姬也、但長門外無參入之儀、各偸以參近例也、更闕長門舞姬參入、兩貫首以下向北陣、頭右兵衞督高能朝臣(〇藤原能保男)追從甚之間、人々相具先行、頭亮定經朝臣次行向、予(〇三條長兼)在頭亮共為一門、

之上無趁權勢之心依相從也、舞姬參入之儀如常、及深更出御帳臺、殿上人秉紙燭先行、右府內大臣殿右大將土御門大納言(〇源通親)被候御供、四ヶ所舞姬昇了、於后町廊(以南方廊擬之也)亂舞如常、

〔明月記〕建永元年十一月十二日、戊終許直衣參內、今夜人數濟々驚目、是恐貫首(〇平親國)之威之故歟、帳臺參公卿、攝政殿(〇藤原良經)具新大納言給、左金吾師經卿云々、

〔仲資王記〕建曆三年十一月十日丙子、行幸高陽院殿、是爲被行五節歟、　十一日丁丑、五節參事、按察使(光親卿)　左兵衞督(隆淸卿)　越中(前中納言仲經卿)　信濃(四條中納言隆□卿)　侍從、戌刻許令參內(直衣)　云々、左衞門尉景康相具云々、今度五節院御同宿之間、殊有其沙汰歟、

〔玉蘂〕承久二年十一月十五日、此日五節參入也、〇中略　丑刻讃岐舞姬參入、(三所曉參、常々向五節所云々、)頭中將雅淸參上申其由、則殿上人廻北陣次也、歸參申事具由、博陸以女房被奏之、此間御裝束云々、可敷筵道者、職事等行之、予申先例不敷歟之由、博陸□□然諾、卽召雅淸朝臣問子細、申近例用意之由、大略不存先例、只以奉行藏人口狀令敷歟、仍被仰不可敷之由、予著殿上、右府同也、右大將幷良平卿自本在座次也、頭中將來告出御之由、予以下參上候御殿弘庇、于時未出御、職事告可謂早速歟、次主上(〇順德)自額間出御、〇中略　經長橋幷仁壽殿代南庇其巽子午廊后町代廊等、入御御帳代西面妻戶、〇中略　入御之後、博陸入簾內、(頭中將褰之)　坐御座次間、予候簾外、依仰入簾中而候、右府已下同之、依間狹大略摺肩群居、〇中略　次舞姬參上、入西面妻戶候、其內其儀如例、(殿上人扶持、兩頭於妻戶內令入之、)四ヶ所參了、殿上人亂舞、大歌所發音、次舞妓舞、此間主上自西面簾有御覽、(先例此所有壁不見、今度有議被懸御簾、備叡覽、)　殿上人舞了、開西妻戶來、取拍子令舞、兩頭(各三反也)四　次舞姬退出、其儀如初、

〔百練抄〕(十四四條)貞永元年十一月十九日己丑、五節舞姬參入、御卽位以前五節、安和保元等例也、永觀壽永被止之云々、

〔玉蘂〕嘉禎二年十一月十二日、此日五節帳代試也、六條大納言、花山院中納言、丹後守永光、長門守長

停五節舞姫

成、試舞姫、(〇中略)亥剋許丹後參入云々、三所未參云云、仰云、不可待、遲々參所々、丹後若可有參入之儀者、仍殿上人等廻北陣了、小時中皆參之由、右府大納言著殿上、予著御倚子前、召頭定朝臣問事具否、御退歸、又來申事具由、予引率諸卿向五節所、(〇中略)右大臣、內大臣、九條大納言、新大納言、大宮中納言扈從、內入坐帳中、次舞姫參上、其儀如例、(殿上人扶持童女等、藏人抱舞姫、)次閉妻戶、次舞姫立舞、(大歌相副扶持之、)次殿上人亂舞、頭中將舞了、舞姫退出如初、次扈從公卿起座退下、秉立假渡殿邊殿、次予經本路歸御殿方、其路如初、予直入御簾間參御前、次下宿所、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十五年十一月廿一日丁丑、停五節舞姫、依左兵衛佐源敏相曹司死穢也、

〔江家次第十一十一月〕五節帳臺試

無帳臺試例、應和元年十月六日、初點周防守雅正女子、而日父頓死、仍左大臣忽責之、依郡俄不能調云々、

〔日本紀略十一一條〕寛弘二年十一月廿一日乙丑、止五節舞姫、

〔日本紀略十三二條〕長和四年十一月十七日癸亥、戌剋內裏燒亡、　十九日乙丑、今夜停五節舞姫、

〔榮花物語四十紫野〕中宮(〇白河后賢子)日をへておもくならせ給て、九月(〇應德元年)廿二日うせさせ給ぬ、(〇中略)五節御らんとまりぬ、

〔百練抄九安德〕壽永二年十一月十一日、五節停止、御卽位已前可被行哉否、先被問諸卿、

御前試

〔江家次第十一十一月〕五節御前試事(中寅)

垂清涼殿東廂御簾、鋪緣代、(高二色緣)立御倚子、(有鏁子)立廻御屛風、(大宋)其南北邊鋪帖、(多少隨御所)為女房候所、(若皇后參者、可鋪南)若皇后參上者、同第四間設御座、掃部寮立大床子二脚、(有敷物)立廻御屛風、(用所)若內親王參上者、南第二間設座、(立廻御屛風、其內鋪疊二枚、加茵一枚、)孫廂返燈樓綱、次掃部寮立御屛風、(大宋)從第二間至第五間、(南面西上)又南北妻各立一帖、其內鋪滿長筵、鋪圓座五枚、(相去五尺許、一枚御料、)每舞姫座前立燈臺、(出座)

燈臺用所、但師前不立燈臺、南第一間鋪南面端帖、爲舞姫來集座、(南北妻、或說東西妻、)件間懸燈樓、近代不見、南廊壁下(長橋內)鋪黃布端帖、爲大歌人座、時剋先五節師參入著座、次舞姫參上、(其路經軒廊、井承香殿馬道、仁壽殿東一間、露臺長橋等、)藏人頭送向長橋東、禁陪從等闌入、免入之者、理髮一人、童女二人、(薰爐筥等也、)陪從一人、(近代不見、)持几帳下仕二人、(近代一人、)又殿上上戶右青瑣門等不開、同加綱止、前例雖藏人頭、猶上臈一人隨事、而隆國經任時初二人從事、薰爐者、自長橋東妻早歸、筥者敷於來集座上、几帳者立重於來集座東簀子、心中記之不令雜亂、舞姫參畢者、又次第出几帳、舞姫著御前座、畢者又返筥、是爲有事煩也、

大歌人參入著座、(入自仙華門、)侍臣勸盃、(件酒肴於所辨備、)雜色以下並送之、主殿寮入自瀧口、捧炬列立庭中、舞姫著座、(以中爲上、)大歌發聲、舞姫舞、內侍示可返御歌之由、(以扇叩長押、)藏人頭聞之仰曰、御歌返世、次事畢藏人頭問曰、誰曾、大歌人等各稱其名退出、次舞姫退下、諸司撤御裝束、被停止御前之例、(天曆三年母后御藥、)不出御猶被行之例、(延久四)舞姫不足例、(修理大夫悅女)

延喜十九年十一月十六日、(一人忽煩物氣、以他人令舞、)廿年十一月廿五日、(一人有所煩、不參上、)

天慶五年十一月、殿上舞姫忽病不參、忠幹女、

應和二年十一月十二日、同三年十一月十一日、御物忌時、大歌籠候、若不籠時、候弓場殿、

〔政事要略二十六〕清涼記同日(〇十一月中寅日)夜試五節儛事

申剋、所司御殿東廂井孫廂裝束訖、五節舞師參上、次令間舞姫列立次第、舞姫參上、次大歌人自仙華門參入、賜酒肴如常、五節舞畢、內侍宣可返御歌之狀、事終藏人頭問大歌人等、稱其名退出、舞姫退下、

中寅日令卜明日侍臣小忌合不、一同神今食、同日夜有五節試、其儀先垂東廂御簾、其內南第三間、鋪二繧繝代立侍御倚子、其南北鋪疊、(少撤御帳、若儲皇后御座、當晝御座前、立大床子二間、)次掃部寮立五尺御屛風四帖孫廂(南第二間、第五間、)南北兩方、又各立一帖、其內鋪長筵、南第一間鋪南面端疊、爲舞姫來集座、御屛風內鋪菅圓座四枚、爲舞姫座、(各相去五許尺、)其南亦鋪同圓座、爲師座、每舞姫前立燈臺、(圓座燈臺用所、)又南廊壁下鋪黃端疊爲大

歌座一、裝束畢舞姬參上、藏人頭進二南長橋東緣一、禁二察陪從闌入一、其後主殿寮供二炬火一、次大歌人等自二仙華門一參入、爰所二辨備一酒肴賜二大歌人等一、殿上侍臣勸盃、召二内藏寮菓子、酒殿御酒、贄殿干物等一賜レ之、所雜色等益送、事畢藏人頭問二大歌人等一、各稱二其名一退出、次舞姬退下、

〔蓬萊抄〕十一月寅日事

入レ夜奉二仕御前試御裝束一、中殿孫廂、立二御屏風一、爲二御座一、舞姬等依レ次參上、藏人頭於二南殿西廂戶下一、禁二察陪從闌入一、凡今夜非職雲客、敢不レ臨二御所一也、所二參入一之人、殿上一人、卿取二凡燭一、童女一人許也、持酒自餘不二參入一、往反之間、侍臣相傍如レ常、舞姬參上了、大歌等發二歌笛一、名謁了舞姬等次第退下、藏人抱レ之

〔年中行事加茂氏人保隆所傳〕十一月中寅日御前試事

御裝束畢出御、御直衣次舞姬等參、著二御屏風中座一、次主殿寮立二東庭一、供二炬火一、次大歌著座、次藏人所賜二酒肴一、次殿上侍臣勸盃、次大歌發二歌笛一、舞姬舞畢後歌笛、大歌稱二姓名一退出、次舞姬退下、御物忌時、大歌人候二於壁外一、不レ返二御歌一、不レ問二名謁一、

〔公事根源十一月〕五節

寅の日は、○中略御前のこゝろみあり、御殿の廂にて亂舞ありくしなどをおかる、昔は年々におこなはる、いまは大嘗會の時より外はなきにや、昔は狩使などいふ事ありければ、けふ五節所にたまはらんために、かた野のきじなどをめされしに、使のありしをかりの使とは申也、

〔榮花物語三様々の悦〕この月○永延二年十月もたちぬれば、五せつなどを、てんじやう人はいつしかと心もとなくおもふほどに、御そく位のとしはさるやむごとなきことにて、ことしは五せつのみてなどそはありさまけざやかに、おまへにも御らんじ、人もおもひためるに、○中略御前の心みのよなどは、うへ○一條わかうおはしませど、きさいのみや○詮子おはしませば、そのふたまのみすのうちのけはひ人のしげさなど、せう〳〵のまひびめなど、すこしものゝこゝろしりたらんは、やがてた

うれぬべうはづかしうて、おもておかむらんか、しとみえたり、なほみやの御五節はいと心こと
なり、どやかうやとどり〳〵に女ばらいひさはぎて、又のひの御らんに、わらはしもつがへなぜ
の樣も、いづれも〳〵、たれかはかならずしも人におとらんどおもふがわらむ、こゝろ〳〵をか
しうすてがたうおぼしめしさだめさせ給、

〔小右記〕永觀二年十一月廿日丙寅、晚景參內、今夜五節御前試也、御裝束如例、亥終五節參上、

〔左經記〕長元七年十一月十六日壬寅、昨夜五節參內之間、依降雨或被負人、或從他門入云々、舞師氏子日來病惱、仍以孫女爲代官令參云々、　廿一日丁未、昨日頭權辨語云、五節舞師依病令參孫女云云、御前試夜參上之間、依未奉宣旨制止不上、而或者云、帳臺試夜爲代官參候、主上幷關白密御覽彼宿所、已無被咎仰、是有天許歟者、令參上了、

〔中右記〕寬治三年十一月十一日、五節參入、○中略入夜御前試、殿下御簾中、　四年十一月十六日、參入中宮御方、○中略有御前試、件試例、后宮不例之時被止也、而主上御藥之間既有此事、頗不得心者、
永久二年十一月十九日庚寅、入夜行向堀川著束帶、密々行向五節所、予重少將忠宗伊通付之、事終夜半退出止坊門、如形殿上淵醉、五節頭藏人資兼无饗應之所致也、
　裏書云、此六條殿以寢殿爲南殿中殿也、仍南面庇有御前試、殿下不令參給也、
保安元年十一月十七日、御前試、五位藏人實光付舞姬、雨貫首不參之故也、

〔山槐記〕永曆元年十一月十六日庚寅、今朝令丹波內侍被仰云、今夜殿上人可進櫛之由可仰者、仍令藏人告廻殿上人等畢、戌刻著束帶參內、今夜御前試也、御殿御裝束如恒、今夜不敷弘座、件座不敷也、然而近代爲流例敷之、而藏人逐電、寒氣無術、童女座南廊壁東間東西行南北對敷之、人々參集後、令藏人申事之由、閉殿上戶及青瑣門、大歌候長橋南壁下、引幔出柱、此事不見指圖、然而近例歟、可尋、依仰令幷舞姬、行向南殿西北脇戶下、取菌几帳等引導也、舞姬不居參集座、直理髮等取菌相具令參入、

童女御覽

大師先是自北長橋參入、在參集座、立几帳、不著御前、頗有恥氣、如何、參入畢大歌發歌笛、次內侍鳴扇、予進長橋下、仰云、御歌返々、次大歌發歌笛、次童女舞姬下、此間問名謂云、誰曹、先是大歌等退出、太奇怪、次召檜撤御裝束、殿上人取檜置御簾前、或一或二、置畢藏人取之進御前、畢予并頭辨不獻也、

〔吉記〕治承四年十一月十八日丙寅、今日殿上淵醉也、（中略）今夜御前試也、其儀如例、兩頭扶童女取茵、又取几帳往返、重衡朝臣仰御歌可返之由、又問名謂、次亂舞、舞姬退下之後、更有御前召、朗詠今樣亂舞、置檜各分散、于時及晚更、

〔三長記〕建久七年十一月十五日庚寅、入夜改著束帶參內、今夜御前試也、其儀如常、但頭亮不出仕、頭右兵衞督於御殿屛風外取茵、違例也、於南殿御後東妻戶下可取之、先々其內非職不入也、未練之至也可然、事了於御前亂舞及數度、

〔明月記〕建曆三年十一月十三日、兩人來、只今御前召始、朗詠今樣之間、依打梨退出、脩明門推參入經程退出、人々退參、只今御前試了、舞姬退下、童女昇降扶持之間、役人等太猥籍云々、末座殿上人等入五節所乞脂燭、六位藏人等來奪取裳衣、雜女又如此、凡散々云々、逐年如此歟、

〔玉蘂〕嘉禎二年十一月十三日丙寅、今日殿上淵醉幷御前試也、（中略）子刻有御前試事、藏人儲座於清涼殿東庇、如何、舞姬參上、殿上人等扶持、於露臺有亂舞、親忠、有資、資俊、忠俊等朝臣、資隆歌發、他々良云々、今年亂舞人々頗入興云々、事了舞姬退出、

〔日本紀略後一條十三〕万壽四年十一月十八日甲寅、無御前試、依禪下〇藤原道長病也、

〔夕拜備急至要抄上十一月〕五節舞姬參入、（中略）
寅卯日殿上淵醉　童御覽　公卿　御裝束見雲圖抄　院童御覽

〔年中行事抄十一月〕中卯日御覽五節童女事寅日

〔年中行事如藤氏人保隆所傳〕十一月卯日御覽童女事

御裝束畢出御、用大床子上圓座第三間簾下、近習公卿候廣庇、次童女參進、次下仕參進、依仰置扇於（○於下恐有脫字）各退下、
〔世俗淺深秘抄下〕童御覽日雨降バ、其路用南廊長橋由有所見、於下仕者、下自仁壽殿西階由同註之、其階甚急也如何、
〔蓬萊抄〕十一月卯日事
今日有御覽童女事、其儀垂東廂御簾第三間供御座、以石灰壇幷二間等爲后宮御座、定後近習公卿四五輩、著直衣候簀子敷、次童女下仕等次第參上御前、先上臈童女二人參進、其路自承香殿馬道西折、自同殿南簀子出西戶、自新造長橋至于第六間之間、副雲客逗留簀子敷、童女昇孫廂、南行候第一之間、相副人隨催自簀子敷參進扶持之、次同下仕二人、下自承香殿西階候庭中、藏人扶持之、次童女下仕等參集了、後召雲客令置童女扇、次藏人令置下仕扇、御覽了自本路還入、戌剋行幸中院、其儀如神今食、
〔雅亮裝束抄一〕五せち所のこと
御覽せぬ所のわらはしもづかひは、わらは御覽の日はまゐらず、かくるゝなり、御覽するところも、そのよはひめ君のぼらず、やすみの日といふなり、御らんするところ〴〵のわらはしもづかひばかりまゐるなり、
〔建武年中行事〕十一月卯日、童御らん、清涼殿にめして御らんず、下づかひ庭上にめす、（童御覽のをり、いづれの御時にか、みすの下よりかみをひき入て御らんぜられけるさかや、）
〔年中行事大概〕十一月童御覽
これも寅の日の事也、五節の舞ひめのめしぐしたるわらはを、御かどの御前へめされて、御覽せさせ給ふよし也、されはかなくしあふぎなど結構の事あり、ちかごろは大嘗會のとしにおこな

はるゝのみなり、毎年の儀は中絕せり、

〔安齋隨筆前編七〕五節童御覽　貞丈云、毎十一月中の丑の日、（時により上の丑に行事も有）下五節の舞を御覽、是は往古よりの定法也、卯の日は童女御覽あり、五節を舞とか、童女の容儀を御覽する也、御目とまりたるをば檜扇をめす事もあり、此童御覽と云事は、往古定りたる法式には非ず、臨時の遊興なれども、後には定例となりし也、

〔安齋隨筆前編九〕五節の檜　五節の童御覽の時、舞姫御前に參りて、色々の紙を重ねて、檜を包たるを御前にさし置て退く也、御目とまりたる舞姫の檜をば取召るゝ也、御前に檜置たる體古き五節の繪卷物に見たり、

〔建禮門院右京大夫集〕やしまのおとゞ（○平宗盛）とかや、この頃人はきこゆめる、その人の中納言と聞えし頃、五節に檜をこひきこえたりしを給ふとて、くれなゐのうすやうにあしわけをふねをむすび、さかくしさしたるがなのめならぬに、かきておしつけられたりし、

あしわけのさはるをふねに紅のふかき心をよするとをしれ

返し、まろきうすやうにかく、

あしわけて心よせける小舟とも紅ふかき色にてぞまる

〔榮花物語初花八〕五節廿日（○寛弘五年十一月丁丑）まゐる、（○中略）その夜（○廿一日戊寅）は御前のこゝろみなどもすぎて、わらはしもづかへの御らんいかゞとゆかしきに、れいのときの程になれば、みなあゆみつゞき參りいづるほど、うちにもとにもめをつけさわぎたり、うへ（○一條）わたらせ給て御らんず、若宮（○後一條）おはしませばうちまきしのゝしるけはひす、業遠のわらはにあをきしらつるばみのかざみをきせたり、をかしと思ひたるに、藤宰相（○實成）のわらはにはあか色のかざみをきせ、しもづかへのからぎぬに、あをいろをきせたる程、おしかへしねたげなり、宰相中將（○藤原兼隆）のもいつへのか

ざみ、尾張(○大江匡衡)はえびぞめをみへにてぞきせたる、おこめみなこきうすき心々なり、侍従宰相の五節のつぼね、宮(○一條后彰子)の御前たゝみわたすばかりなり、だてじとみのかみより、すだれのはしもみゆ、人のものいふこゑもはのかにきこゆ、かのこきでんの女御(○義子)の御かたのにようばうなんかしづきにてあるといふことをはのきゝて、あはれむかしならしけんもゝしきを、ものゝそばにゐかくれてみるらんはぞもあはれに、いざいとしらぬがはなるはわろし、ことひとついひやらんなどさだめて、こよひかいつくろひ、いづかたなりしぞ、それなど宰相中將の給ふ、源少將(○齊敏)もおなじことかたり給、なはきよげなりかしなどあれば、御まへにあふぎおはく候中に、蓬莱つくりたるをば、このふたにひろげて、日かげをめぐりて、そのなかにらてんしたるくしどもを入て、しろいものなどさべいさまにいれなして、おはやけざまにかはしらぬ人して、中なごんのきみの御つぼねより、さきやうのきみのおまへにといはせてさしおかせつれば、かれとりいれよなどいふは、かのわがにようで(○義子)ぞのより給へるなりとおもふなりけりまたさおもはせんとたばかりたることとなれば、あんにははかられにけり、たきものをたてぶみにして、かみにいれたり、

おはかりしとよのみや人さしわけてしるき日かげをあはれとぞみし、かのつぼねにはいみじうはぢけり、宰相(○藤原實成)もたゝなるよりは、こゝろぐるしうおぼしけり、(○又見二紫式部日記一)

〔定家朝臣記〕康平三年十一月十八日(○癸卯)、童女御覧也、殿下不令参給、左府参給御座内、

〔經信卿記〕永保元年十一月廿一日癸卯、自中門欲参宮御方、五節童参上間也、仍向南殿自格子覧御前儀、殿下傍御簾令候給、右大將、春宮大夫、左大將、左衛門督等、自端廻居、北上西面、北面東上、参議童等、北居廣庇(西面南上)伯耆童未上、頻被催之間、令申云、今一人可龍付人不候者、殿下宣云、定實可龍著者、下仕共皆上了之後令置扇、有頃又取次、次第出了、

〔中右記〕寛治二年十一月十九日、有童御覽、三所獻童女、(中納言殿不令獻給、如常、)殿下御簾中、右大臣、內大臣、兩源大納言、左衞門督候廣庇、齋宮御東庇同御覽之、

〔本朝世紀〕康和元年十一月廿三日、新嘗祭、今年無童御覽、依關白事歟、

○按ズルニ、此年六月關白藤原師通薨ズ、關白事トハ此ヲ指スナリ、

〔中右記〕嘉承元年十一月十五日、行向右衞門督(○藤原宗通)殿五節所、童御覽之間、爲相訪也、而內大臣(○源雅實)被過五節所、非一家人是何故乎、酉剋許、童裝束了參上、大納言童殿上人四人付之、(少將通季、兵衞佐忠長、侍從忠宗、少納言家隆、)右衞門督童殿上人四人付、(中將實隆、宗輔、少將信通、宗能、)備前童(少將顯國、加賀助家定、)越中童不進、祖父爲家朝臣重服之間云々、中宮前齋院同御覽、殿下候簾中給、內大臣、右大將、(家忠)春宮大夫、(公實)新大納言、(經實)右衞門督、新中納言、(顯通)被候御前、秉燭之後事了、

永久二年十月七日戊申、早旦依召參院、(中略)又仰云、今年五節之間、童御覽有無如何、人々被申云、於童御覽者臨時遊興、如此時多被止也、仍被止可宜歟、仰云、然者不可有御覽、十一月廿日辛卯、無童御覽、依故中宮(○堀河后篤子)御事也、

保安元年十一月十八日、入夜有童御覽、按察大納言、中宮權大夫參、加賀讃岐童進之、

大治二年十一月十七日癸卯、未時許、頭中將以下參殿上、淵醉之後有童御覽、尾張越後童御覽、尾張童付殿上人、(少將季成朝臣、兵衞佐公行、)越後童、(右少將忠基朝臣、藏人少將教長、)右大臣、藤大納言經實、民部卿忠教、左衞門督通季、右衞門督實行、候御前座、內府簾中、有召不被參、酉時事了、

〔台記〕久安二年十一月十三日、(○己卯)參內在五節所、(中略)下簾令著童女裝束、(本所定一人有所勞、一昨日他人、今日猶扶疾、用本所定之人、)清職源雅亮奉仕之、此間新大納言(伊通)權中納言(公能)入來、余授楾、(中略)入夜淵醉了、(中略)余、新大納言、皇后宮權大夫、別當權中納言、著殿上、藏人木工頭範家告召由、相率著御前、次童女參上如常、(美作不獻)但皆參後付童女之口殿上人退下、殿上執紙燭照之、臨欲退之期、弃于庭上、童女退下、家宴遊云云、依

康平例、無殿上垸飯云々、扶持余童女下仕之殿上人、自一院被催之、依仰竊撰中其人用英雄、余前童、頭左中將經宗朝臣、自夜前稱疾不參、後童、左少將實長、侍從公保、下仕四人、治部大輔雅頼、中務權大輔季家、犬死穢不參、侍從師盛、散位憲雅、稱藏人頭雖無先例、于時無英雄、因被催仰、左中將公通朝臣、右少將公親朝臣、雖當其仁、公通詣熊野、公親重服、左中將雅通朝臣、故顯通卿之子、故能俊卿之外孫、於人不卑、加之被聽禁色、然而去年奉仕家成卿前駈之後、永失英雄之名、因不用、

〔山槐記〕永暦元年十一月十日甲申、未刻參內、令藏人時盛奏聞事、

一五節事、兩國〇若狹丹波各不可略參御覽之由有院宣、〇後白河御物詣以前各領狀了、而盡以不致其沙汰之由唯今言上事、仰云、於若狹者、內々有女院〇鳥羽后美福門院得子御沙汰、而此間御重惱、每事不能御沙汰、爲不關公事、唯如形自閑道可參云々、爲被院仰重難被催歟、同可申前關白者、奉仰參大殿、付高佐申此旨、

十一日乙酉、午刻參大殿、付資能申事、五節參入事、丹波申不可存略之由、至于御覽其力難及者、仰云、猶可被責、且可申事之由、　十三日丁亥、付藏人頭賴保奏事、〇中略

一五節參御覽事

御覽事、權中納言雅教卿致其沙汰、參事丹波令沙汰之由申上、於御覽者、人々訪相違事出來、其力難及者、仰云、各有一、何事之有哉者、

十七日辛卯、巳刻參內、〇中略令藏人時盛仰下童御覽儀、具見指圖、后町廊令鋪筵道、御前長橋不敷之、依雪濕難令敷筵、其時不降仍令撤畢、于時關白遲參給、仰云、且可召公卿、仍予告此旨於右府之間、殿下參給、予奉自殿下、殿下參上、依仰令入簾中給、右府以下著御前圓座、件圓座兼不敷之、相尋所之衆不候云々、行事藏人可尋置、不敷事也、仍予仰時盛密々令取集藏人所簀下圓座令敷之、殿下御座供厚圓座、仍重二枚、開之、隨公卿員七枚敷之、而殿下御簾中、仍右府被著件座畢、孫庇二間以南敷之也、參入公卿、殿下、右大臣、內大臣、中納言四人、〇中略予令藏人令催童女、先是令參殿承香殿邊、權中納言童女參上、左中將實家朝臣、左少將實守朝臣等付之、昇北第三間長押上、南行居南第三間、公卿座上、兩將副之、自簀子參上、依仰取

屓、次返給、兩童女公卿座前、至于一間、左廻更退歸、下仕下、承香殿西階、經竹臺西、當童候庭、藏人頼保仲重引導之、藏人者可經東炬屋東也、而經西不知故實歟、進退唯隨童也、庭湿之間、予令藏人仰主殿寮、仁壽殿簀子下砂令敷彼路、事畢公卿歸著殿上、予逐電退出、于時秉燭以前也、

〔百練抄二七〕應保元年十一月廿三日、五節童女御覽也、雖當前美福門院（鳥羽后得子）周忌御正日、訪有驗齋相猶被行之、　十二月十六日、宗能公、御覽自天暦御宇被始事也、召在五節所之童御覽、仰云、無由事をえつる、此事後代例トタリナント候ケリ、然者是臨時之興遊也、被止何事哉、、

〔愚昧記〕嘉應元年十一月十五日丁卯、今日童女御覽也、童女下仕等早仰可參内之由、申剋著直衣參内、（車新調也、只雖不可然、古事甚依見書知也、前駈四人各衣冠、車副二人進之、入待賢春華宣陽門等、經承香殿同、先向五節所、次參著殿上、）先向五節所、童女等裝束已了、按察中將、左府中將、藤少將泰通等、在五節所、各依請檎、自懷中取出分與了、此後參殿上、内大臣已下在之、少時頭辨告召由、仍内府已下參著弘廂、次童女參上、（先予童左府中將、以一身付兩人、次邦綱卿童、按察中將、内府少將、扶持之、依院宣云々、）（實宗朝臣不出衣、有存旨歟、）依仰各經簀子向長橋下、秉脂燭歸參、（於殿上可取歟、然而相儲橋下、仍各□□）照童女之賤首、候童主之龍顏、良久攝政被云出云、起（天）可南行、仍各次第行南、更歸北退出、次人々退下、次退出、

〔玉海〕承安三年十一月十四日癸卯、今日御覽也、○中略次童女參上、（花山院中納言兼雅許也、）兵衞佐基範（成範子）一人付之、太見苦事也、君達近衞司濟々、未練之基範、尤不可然、別御定云々、童女下仕暫候之間、及秉燭、依而脂燭御覽了、

治承二年十一月廿日己卯、此日童女御覽、○中略

今日參入公卿、（見補）付童下仕等人、

隆季童（侍從隆保、刑部少輔隆雅、）　同下仕（藏人仲繼遠業）　實宗童（侍從公衡一人）　同下仕（藏人基行一人）　兼光童（右衞門佐經仲一人）

同下仕（藏人右衞門尉家實一人）

〔山槐記〕治承四年十一月十九日丁卯、今日童御覽云々、後聞御殿無便宜、仍南殿母屋懸御簾、以南廂擬弘庇云々、予案之爲此儀者、雖御殿何放出哉、四條殿近衞殿之時、只於簀子有御覽歟、又陣床後及軒廊渡長橋爲座上路、中宮殿上南殿西簀子尤有便宜、何强構長橋哉、〇中略藤大納言實國因幡兩所童有御覽云々、不被憚東國亂歟、

〇按ズルニ、此時ノ童御覽ハ、福原ノ皇居ニ於テ行ハレシナリ、

〔明月記〕正治二年十一月十五日、依月蝕童御覽殊被急云々、巳一點參內、龍職雅行中將一人在、人々漸參集、依有催著殿上座、〇中略童女御覽即始了、內府兄弟二人在座、殿下〇藤原基通不參給、如何、昨日終日何候給、臨晩退出給了、左大辨童長兼清長付之、昇之間予等沙汰之付人々了、宰相公國童、爲內府命宗俊行事、依無登稱勞事即出了、依忌月蝕也、〇中略公國卿童、日來實宣朝臣領狀、今日俄稱障、雖語人各不許、仍今日中院、雅平少將可付之由被仰下云々、閑院一門之人乍出仕不付、頗知物恥歟、尤宜、廣元童女等、毎事華美殊勝、

元久二年十一月廿一日、童御覽、大納言殿許云々、傳聞少將國通定忠付之云々、此御一門、先々四人付有例、今度如何、

嘉祿元年十一月廿二日、童女御覽、公卿兩大將新大納言、伊與童、家定丹波、實俊

〔玉蘂〕嘉禎二年十一月十四日丁卯、童御覽也、〇中略顯定朝臣參來、申童女裝束了由、主上〇四條御階間簾中、予候御傍、次召顯定朝臣仰可召諸卿之由、〇中略次童女參上、六條大納言童、實清朝臣付之花山中納言童、少將師繼付之下仕、職人等付之各列居御前、南上仰扶持人々取杉扇、實清朝臣取之、師繼自可持之、於長橋方又令置扇、下仕同之次令取扇、次童女南行筵道北行、經本路退下、下仕等南方ニ大輪ニ廻テ退、次公卿退下、先下臈起次入御、

〔經俊記〕寶治元年十一月十八日丁卯、申剋參內、秉燭之後被行淵醉、其儀如昨日、廻北陣之後、有童女御覽、公卿左大臣〇藤原兼平內大臣〇藤原實基大宮大納言〇源雅親著御前圓座、次童女經仁壽殿庭南同北假

橋等參入、右中將定平朝臣、實隆朝臣、右少辨經忠朝臣、(出衣)伊基朝臣付之、(各一人取脂燭)候清涼殿庇、次下仕四人、藏人大輔光國、(出衣)藏人侍從宗雅、左少將雅言、右少將忠資等付之、自假橋南階降云々、小舍人持沓儲、瀧口付之、各參庭上舞蹈、次次第退出、今夜密々行幸左府五節所、今夜院幷姬宮推參云々、於同所被行之、天曙退出、今日左府童女裝束、自院被遣之、內藏頭隆行朝臣著衣冠勤御使、奉行家司右衛門權佐資定取女裝束給之、二拜退出云々、

〔勘仲記〕弘安七年十一月十七日辛卯、先參殿下、今夕童御覽無御參之條遺恨之由、可申女房之由被仰下、次參內、○中略次有童御覽、奉仕御裝束、第三間敷大床子圓座為御座、垂庇御簾、御座間左右有掌灯、孫庇南一二間敷圓座為公卿座、庭上主殿官人立明、公卿內大臣殿令候殿上、此間童女下仕用意、次申事由、次出御御簾中、次頭卿奉仰出殿上召公卿、次著座弘庇、參御前、雲客二人扶持之、下仕候庭上、職等扶持之、(今夕下仕不敷座、候貫首下知也、諸司雖存例被止之、為之如何、次下仕昇堂上、是又傾奉事歟、自庭上退出之由、予雖令稱之、定先昇堂上之由張行、仲兼本所奉行家司也、尤可是非之處、又以無沙汰、可為後代之嘲歟、為之如何、)童退出之後、下仕自階間昇堂上、於簀子有叡覽、後日語申殿下之處、下仕昇堂上、曾無先例、自庭上退出勿論之由被仰下、次御定云、下仕路通孫庇之條不可然、經渡殿幷公卿座前簀子、入中門妻戶、(殿上)經上戶前布障子、自長橋可下庭上之由思食、公卿著庭、未經孫庇之條不可然云々、為後日才學所記置也、今夕一所御覽、不及餘所者也、

〔長秋記〕大治五年十一月十六日乙卯、有新嘗會、　十七日丙辰、臨晚參節會、　十八日丁巳、五節童女下使等可參院、○鳥羽云々、仍參仕、先是關白民部卿被候、○中略童等參、不依人次第參、次第御覽、童車輦中門廊下、便下自門內進南殿、中納言長實童、左少將公行侍從公通著、次土佐守家長朝臣童參、侍從範俊治部大輔俊政、次甲斐守範隆童參、左衛門佐經隆同經政著之、次宰相中將忠宗卿童參、先童少將敎長、兄忠基在後、次童少將經定、兵衛佐經宗在尻、雖後參居中納言童次、下使如此、但二方殿上六位等著之、範隆童不蹈合表袴、下使與衣持也、長實卿童袴與加佐躬前持、是皆失也、下使不裹取衣、是

舞姬以下服裝

先例也、御覽時如此、事畢退出、

〔台記〕久安二年十一月十三日、童女參上如常、 廿日、五節童女下仕(余爲前別當)參一院、依永久例有仰、余下仕車遣入寄屋妻而下云々、

久壽元年十一月十九日戊辰、國栖有所勞申不參、(延長四年新嘗會有此例、見李部王記、) 廿三日壬申、中納言中將童女下仕、先參皇后宮、次將來、次參前齋院、(統子) 本所定之童女二人之中一人(少納言)日來逃隱、一人(左衞門佐)申曰、彼既逃隱、不得獨出、仍以他女二人出之、日來所隱之女、昨日出來、今日以本所定之二人出之、兩人俱長髮、

〔明月記〕正治二年十一月十六日、秉燭之程、著飾會裝束參內、 十九日、參院、○中略 少時左大辨參入、童女御覽今日云々、已將參之由申、女房雖甚雨下仕候、緣上小々有例之由仲盛說云々、說人頗輕々歟、執柄退出給、大丞童女者參門前云々、長兼今日只例定束帶也、依雨延引歟之由存之云々、淸長入熊野精進屋了、仍一人可付云々、右少將雅平參入、(直衣、相具布衣隨身、)可付羽林童故歟、

元久元年十一月廿三日、院童御覽、扶持殿上人公雅(召籠)如何由、金吾被伺、早扶持之後可籠由有仰、通資公繼通光(浮文奴袴)師經定通卿(出打衣裳浮文奴袴)候、養子、垂公卿座翠簾、爲御所、童乘右大辨子侍從車、(自小門寄下侍西妻戶、)下仕自門下、康綱守長扶持之、次時通少將說聞之、殿下御參御共云々、公卿座垂簾、出机帳之後、通資公繼卿入座、上皇御覽、周章迷出、有勘發仰、

〔雅亮裝束抄〕一五せち所のこと

まゐりする五せちのわらはかしづかひ女房、いへよりさうぞきてまゐるなり、ひめ君は五せち所にてかみあげのさうぞかすことなり、さうぞくは、よごとにかはるかきもくあり、女房はくるまよりおりて五せち所へいりはてつれば、やがてちがひてかん所のかたよりいづるなり、ひめ君のぼりておりぬれば、わらはしもづかひもさうぞくをぬぎおきて、さかへおきていでぬ、おは

かたは五せちのあひだは、ひめ君以下さぶらふべきことなり、わらはしもづかひのさいし、ひめ君のかづらかむざしさしぐしとりぐして、うちみだりのはこのふたにいれて、二かいにおくべし、わらはしもづかひのさうぞく、こゝろえたるごせして、よくたゝみて、おびをもちてゆひておくべし、わらはのうへのはかまかさねながらたゝむべし、ぬぎいづることなかれ、ものいみは一ぞにきりて、かみをたゝみてなかにいれて、へしてよごとに四すぢづゝとりいでゝつくべし、物いみはそくひをつけて、きりてつくるをいみじきことにすれども、なかによせてふたところばかりまゐり、ことにそくひをつけて、けうらにきりてつけたるあしからず、まゐりをせぬ五せち所に、わらはしもづかひ、たゞのさうぞくをきてまゐりて、五せち所にてきるなり、それにはしもづかひのもつぼどることあるべからず、うちいではまゐりのつぎのつとめて、ながびつにいれて、あかぎぬの仕丁かきてまゐりたるを、三げんならばいだし火をけの左右のまにすべし、やのびんぎによるべきなり、まのかずおほかるには、三げんをいだして、なをしもわらはのさうぞくをもいだすなり、たゞしうちいで四ぐにはすぐべからず、四ぐありていだすべきところなほあらば、わらはのさうぞくをいだすべし、うちでのしやうつねのごとし、五せち所のうちでには、うはぎなし、うちぎぬのうへに、からぎぬにてあるなり、はかま又いだすべからず、近代人まねといだす人のあるみぐるし、わらはのさうぞくをいだす事は、くるまよりいだすやうに、まづはかまを三尺ばかりひきいだして、そのうへにかざみのしりまへとをひきいだしてあこめのそでにかざみかさねておくなり、そでなどのいだすほど、所によりなげしによるべし、かざみのしりまへは、ながらかに二三尺もひきいだすべし、そでは右をいださばなほはたそではかへすべし、あこめのつますこしなどいだすべきなり、一けんに二ぐをいだす、むかひざまなり、

ひめ君のさうぞく

うしの日わかいろのおり物のからぎぬ、ぢすりのも、すはうのおこめひとかさね、おをきひとへ、もしはこきひとへ、こきはかま、わかいろのおふぎ、七尺のかづらから物、とらの日、おをいろのからぎぬ、むらさきすそごのも、でいゑ、すはうのおやのうちぎひとかさね、こきうちぎぬ、こきはかま、おをいろのおふぎ、めぞめのくんたいひれ、おり物むらさきのいと、これらおたらしくまうくべし、すゑびたひ、かみあげまうく、かんざし、さいし、四すぢあるを本所にまうく、からぐし、ゑたぐし、ゑりぐし、こぐし、ゑかい、これらはくら人がたにまうく、たつの日、おをすりのからぎぬ、おこめ、こきはかま、めぞめのも、おなじきくんたいひれ、あかひも、ひらでかいをゑたり□□□□心ば、これはおり物、おをずりの扇あたらしくまうく、

〔雲州消息上〕右大臣殿御消息云、今年可献五節舞姫童女裝束被調進乎者、御消息之旨如此謹言、

十一月十一日　　但馬權守高階

謹上丹後守殿

請舞姫童女裝束事

右隨仰旨可勤仕之由可被洩申也、補襠新可調歟、女工不知案内、可給本樣也、言上如件、

廻刻　　丹波守

〔羽倉考〕二五節ノ舞姫著褂之事

褂ト衣ト通ジテモ稱スレドモ、五節ノ舞姫ノ裝束ヲ書タルニハ、大カタ褂トアリ、又衣ト書キタルモアレド、褂ヲ著ザルニハ非ズ、

〔類聚雜要抄〕三五節雜事

姫君裝束（褂打衣唐衣裳袴、皆通裝束也、○中略）

一童女裝束事

汗衫尻長一丈（一丈五尺御覽日料、三尺參日料、）廣二尺六分、（二幅、片方一尺三分、）弘前長、（一丈一尺三寸御覽日料、弘身大頸ヲ彫合テ縫之、九尺參日料、凡下重之前）定、（ミテ）彫八寸、下五寸三分ニ出テ、弘方ヲ大頸下ニ付、後弘一尺五寸裁テ、三寸五分ノ物ヲ出テ頸帶用之、袖弘四尺五寸、但彫八寸裁テ、後ニ三寸五分物ヲ出也、彫四寸、タモト六寸五分、身弘一尺三寸、（也）一方前ハ身大頸ヲハカラヒテ縫登、横頸弘二寸、長二尺八寸、單頸弘四寸八分、長袖程ニ付、袖幅リ一尺三寸、端袖弘六寸七分腋開ル弘サ九寸五分、帶長五尺七寸、弘二寸五分、單頸ハ袖广天付下、登頸ハ單ノ頸ヲハヅシテ下ヒマ爾付下ス下セバナル樣ニ、凡三重ノ物ヲ表二重ヲバ上頸ニテ、下ノ單衣ヲバ別ニ放テ、袖程ニテ常ノ衣定付也、端袖ハ男表衣ノ樣ニ、面ヲ二倍ニ中折テ付之、打相長、（四尺）袖ノ弘常定、腋開弘、（八寸）下相長（四尺二寸、單打衣、參御覽日料、）表袴長、（四尺五寸）下袴長、（八尺參料、一丈御覽料、）

一童女裝束著事

先下袴ニ表袴ヲ重テ、次重著事如常、下袴腰ハ左結之、表袴腰ハ右ニ、自常ハツヨク結之、末ヲウルハシク引重テ、股立ノ縫目ヲ表ニシテ、引弘ゲテ足ヲ可踏立也、下ノ袴腰ヲバ、表袴ノ下ヨリスソヘ末ヲウルハシク引出也、次相ニ單重ヲ著天、頸ヲシナヤガニ取居テ、（打衣ハ重タメリ）本帶ヲ、セサス、右ヲウハガヘニシテ、前ノ帶シヲ能チガヘテ、後ヲ前ザマニ、身形ニ能押マハシテ帶ヲセサス、凡肩サキヨリ下ザマニ帶シノモトマデ身形ニ可著付也、帶ノ下ノ尻ハ小フクラムベシ、袖ノ腋ノ縫目ノ末ハ、能裔ヘアケテヒロゴルベキ也、帶ノ下ノ際ノ腋縫目ヲ取天、帶ニ落マジク下ザマニ鉸也、其ハ末ノアリヒロゴリテ吉也、（可ニ鉸ニ也、是緋鉸也、鉸トテハ人ノミレバ、相長ト調テハサム也、）帶二筋用之、（袖汗衫之料也）次著汗衫、頸ヲ外ザマニ折テ、背中ノ程ニ押下テ、相ヲ見セ天著テ、左右前ヲ中ヨリ表ザマニ面合ニ折テ、右ヲ上ニシテ折目ヲ二三寸許引違天、前後ヲ身形ニ、下ザマニ引取帶ヲセサス、前ノスソハ左右ノ裔ノ脇ノ下ヨリ後ザマニヒキヤリテ、相脇縫目ノ末ハ汗衫ノシモヨリ可見、也、後帶シノ下ハ外ザマニ二重ニ折、右ヲバ左ヘ背ノ縫目ノ程マデ折違、左ヲバ右ヘ三寸許折

遣テ帶ニ鉸之、其折返タル中ニ童ノ髮ヲバ入也、サリナガラモ背縫目ヲバウルハシク可著也、前ノ左右幷後ノスソヲバ、上ノ定ニ二重折ナガラ可引也、右ノ端袖ハ外ヘ可返、左ノ端袖ハウルハシク天、相ノ袖口見許、裔ヨリ下ザマニ、ホコロビヲ八寸許裁テトヂムル也、脇ハ相ノ脇ト引重テ、後ザマニ播出テ自後可見也、

一同頭物忌付事

二所ニ付之、左ハ耳ノ上程、右ハ頬後ニ寄天付之、其故ハ用差櫛時ハ、此物忌ノ上ニ横サマニ差也、然者扇ハ右ニ寄天サセバ、サハラセジト云心也、但差櫛用事ハ極秘説也、近來ハ無用人、物忌之薄様ハ、弘三分ニ切之、紅一重、短手ナバ後ニ結之、差櫛、一說本櫛ヲバ不用シテ、其形ニ作テ、其體ニ色取テ、髮ニ當所ヲ一兩所削懸テ、髮ニカヽヘサセテ差說アリ、但近來ハ櫛ヲバ自本ソラシ造也、又ササズシテ童ニ付殿上人ノ持之、但殿上人獻時者、件櫛中ニ物忌ヲ付也、

一同下仕裝束

掛參日三領、御覽日四領、　打衣　單　唐衣　裳　袴

一同裝束著事

先下袴如常著之、次掛ヲ著テ、右ヲウハガヘニシ天、前ヲ能引チガヘテ、末ヲ乍引帶ヲセサス、次唐衣ヲ令著テ、裳腰ヲ裏ニ中ヨリ二倍ニ折天、唐衣ノ末ヲワヅカニ裳ノ腰ニコメテ結之、是移說也、普通ニハ不レ置レ之、只唐衣末ヲ内ヘ上ザマニ打入テ著也、凡唐衣ハ頸ヲ外ヘ弘ク折返、スソヲ内ヘ上ヘ折返テ、弘六寸ニ令著也、スソ取ト云事アリ、裳ノ右ノ末ノ妻ヲ右ノ袖ノ上ヨリ引コシ、同左ノ前妻ヲバ、左ノ脇ノ下ヨリ前ヘ引取テ、其妻々ヲ結合テ、右ノ袖ノ上ニ懸之、裳ノ右ノ末ノ妻ハ、後ニウルハシクサガルベキ也、件末取ハ節會夜、又參夜、於脇陣取之、五節所ニテハ下ノ御前ヘ登ニハ下テ只參也、節會夜ハ五節所ニ天シテ御前參登也、

一樋洗裝束
一人衵三單衣打衣袴如常、付物忌如前、
一上雜仕裝束
二人各衵三單打衣帷代〈面白ヤウシ、裏紅打物〉濃袴如常、參日樋洗并上雜仕凡三人車一兩乘之、

〔雅亮裝束抄〕一五せち所のこと

御覽せぬ所のわらはしもづかひは、わらは御覽の日はまゐらず、かくるゝなり、御覽する所も、其夜は殿君のほらず、やすみの日といふなり、御らんずるところ〳〵のわらはしもづかひばかりまゐるなり、さうぞくかざみのおもて、うへのはかまのおもており物なり、かさねのはかまうちぎぬあこめのおもてあやなり、あこめのかずこゝろにあるべし、つねはふたへひ、どへなり、かざみをもあまたをめらかし、かさねのはかまををめらかしかさねうちぎぬかざみのうらはかまのすそに、でいしてゑをかきだむことつねのことなり、かざみのおもてのふたへおり物こそめどはきことなれども、中納言時たゞの五せちいだしたりし御覽に、けんすんもん〈○建春門〉院よりありしこそ、もえぎのかざみに、むらさきの糸もてりんだうおりたりしか□□□□ひらぎぬのかざみうへのはかまうちぎぬ、またつねのことなり、これもいくへもかさね、だみゑもかき□□□るこゝろなり、ずらうのなどはひらぎぬにてあるべきなり、御覽のしもづかひのもをつぼどる事ひがことなり、まゐりのよはやくをすればつぼどるなり、やくもせで、たゞせいりやうでんのつぼにをるといふばかりにて、つぼどる事あるべからず、ものこしをもろかぎにはゆひながら、ひだりのを、わきのかたへかくして、みぎのかたのかぎばかりをさげてゆはるゝ人々あり、それをしるべからず、いへ〳〵のことなり、たゞもろかぎにゆひて、さがりをとりあはせて、ひらをかくるゝやうに、うへざまにかへすべし、じゃうでん〈○仁壽殿〉とせいりやうでんのゐはひのながはし

は、うしとらにすぢかへたるが、わらはのまゐらむをり、つかれたらん殿上人、かざみのしりを、くちのかたを御所より、かつはおもてを見、かつはわらはのかみをみせんためなり、しさいをしらすひかせらるゝ、いまやうの人々のくせか、しもづかひにつかむくら人もこゝろありて、仁壽殿のはしをもおろすべきなり、つちにゐんにもよくしてすうべし、

わらはのさうぞく、まゐりのよは、いかさまにもつゝじのかざみおもてあや、うへのはかまおもてたゝきぬしろくはりてやうじて、こきうちうらをつく、あこめすはうふたつ、あをきひとへ、こきうちぎぬ、こきはりばかまなり、まづはりばかまを、うへのはかまにかさね、こしをきむずる人の、右にむすばんずる定におもひあてゝ、うへのはかまにつらぬきて、すそよりひきいだす、やがてこしもうへのはかまの右のかたよりすそへひきいだしたり、かくてかさねのはかまとはいふなり、それをとりてわらはのはかまをぬがせてきす、うへのはかまかさねながらきすれば、まづはりばかまのこしをゆふ、すそよりいでたるをかみへひきあげずして、腰のもとをしたるほぞにむすぶやうにむすべば、くりいだしなどせねども、これをひするなり、さてうへのはかまは、右をうはがへにして、こしをひきまはして、ひだりのうしろにかぎにむすびて、いたくさがりたらば、こしにおしかふべし、さてのちはりばかまのすそをひろくひろげて、もゝだちのぬひめをうへになして、うへのはかまをも、この定にして、またの[illegible]○をふますべし、あこめをとりて、うしろにまはりて、うちぎぬひとへとりかさねて、くびを三つにをりすゑて、ひとへもきぬもくちをみせて、右をまたがへにてきすべし、くびをよくひきちがへて、まへをおさへさせて、またおびをとりて、うしろにまゐりて、わきのまわをよくおしいれて、わきのぬひめのまへのかたをとりて、うしろのをば身におしつけて、まへをうへにうしろざまにひきなすやうにゆひこめさせて、おびをあてゝうらうへかくすべし、おびをむすばせてのち、かざみをとりて、くびをとざまにおし

なしてきす、からぎぬきたるやうによくおしさげて、かたをよくおしさげて、まへをひろげて、ひきちがへておさへさせて、おびをとりてうしろにまはりて、かざみのしりのわきのもとをうへざまにかへして、おびをゆふべし、ひだりをばおほく三寸ばかりかへすべし、うらうへにみゆべきなり、さてのちまへにまはりて、かざみのまへをうはがへをうへざまにおしあげて、おびのむすびめをかくして、おびにはさむなり、したがへもかくして、まへをば左右おもあはせにして、わきのしたよりうしろへひきのべてひかすべし、かざみのまへは、もとよりおもあはせにをりたる物也、さながらまへをちがへて、おびをあてゝすべきに、おびのむすびめもかくさんれう、又たたみながらしたるは、うしろにひかれてまへのひろごればひろげてあてゝ、うへざまにおしかくしたる、かたたゝひせち〇なり、さてのちかざみの右のはたそでをうへざまにをりかへして、おこめうちぎぬひとへのそでくちをみせて、かひなたわむはぜをよくおして、手をもておさせて、すきあふぎをもたす、そでのうへをもよくおして、そでのはたをはねさすべし、ひだりのそでは、身にかひなをひきそへさせてはたらかさす、かざみのはたそではひきたれたり、さてのちものいみをつく、

くれなゐのうすやうを、ひろさ三分ばかりかさねながらきりて、右のみゝのまへのはぜのかみをつみあげて、わけめより二寸ばかりさげて、そのしたよりひきとはして、手をうしろにむけて、かたかきにむすぶ、しもへさがりたる手はすこしながく、かみにうしろざまなるはすこしみじかゝるべし、むすびめのかしらはすこし五分ばかりはしろくて、このてはわかきかたのうへにてあるなり、いま一すぢをとりてひだりにまはりて、左のみゝのうしろに又てをうしろにして右の定につく、もとはものいみは左をさきとして、うしろにもつけて、三つをつけたれども、このいへのならひにて、かくふたつをつくるなり、左のまへによせて、ものいみのかしらのさしいで

たるをひねりかへして、おかくみせてつくる人あり、ゆき〇壹岐のかみもりなりがたうのやうなり、されどもいまはしろかしらになりにたり、右の物いみは、かみにうしろへむきたるてを、まへざまにむけてつくることあり、つねに人しらず、をさなからんものゝひたひがみすきなどしたらんに、ものいみをつけんをりかくすべし、人しらずひすべし、

かざみのながさたちやうあり、うへのはかまのまたのこの〇小[illegible]なし、おこめうちぎぬひとへわきあくべし、それがきせよきなり、わきあかぬおこめのあがきなどにおひて、みじかくきせなし、わらはのすがたをよくするを上ずとはいふなり、

かさみのひだりのはたそでのたもとのすぢを、五六寸ばかりはころばす人あり、ゆだちとなづけたり、ぞくのひがことなり、ぬひふたぐべし、かざみにゆだちをあくることは、左のわきのぬひめのまへをたもとまではころばかして、くみにてひもをつくるなり、このぎつねならず、のりゆみのいてにいりたる、さい相の中將の五せちをたてまつらんにおくべしとぞ申つたへたる、物いみはひろくきりつれば、かみのおほくとられて、かみのはだ〇髮肌みえてわろし、ずくなくとればさがりくだりてわろし、物いみのひろさをはからひて、かみをばとるなり、たうにち〇當日はさしぐしといふものを、右の物いみのかしらによこざまにさすなり、このくしこれにはさゝず、ながさ六七寸ばかり、はのたけ五分ばかりあるを、みねのかたへよくそらしあげて、なかをさしたるとぞ申す、〇中略

しもづかひのさうぞく、れいのながききぬのすこしみじかきが、まつひとつにうちぎぬかさねたり、たゝしうちぎぬのすそのきぬよりは、七八寸ばかりみじかきなり、いろこゝろにあるべし、つねはまゐりのよのは、まろきにこきうちあをひとへなどにてあるなり、からぎぬむめやなぎあをうちつねのことなり、こきはかまつねのことなり、まづはかまをきす、こしのゆひやうわら

はにおなじ、次にきぬにうちぎぬひとへをかさねて、くびををりすゑて、右をうはがへにてよく
ひきちがへてきせて、おびをとりてうしろにまはりて、おしまはしてまへにゆひて、はかまうる
はしぐひろげ、きぬのすそもひろげおきて、からぎぬをきせて、もをとりておはこしをなかをり
にまたへをりて、うしろからぎぬのすそをすこしゆひこめて、おびのうへにあてゝひく、こしを
うらうへのわきのまたよりまへにまはして、もとのおびのむすびめのうへにもろかぎにむす
びて、ざがりたるをとりあはせて、ひらをのやうにかへすべし、またおびにかへしてするがよき
なり、ものこしをむすばんに、つよくひくべからず、うちこしなどはひきゝることのあるなり、さ
がりはたけとひとしかるべし、もろかぎはおほかたのこしのながさによるべし、さがりばかり
ぞたけとひとしかるべき、さがりのうらうへにかぎはあるべし、もにはあがちの〇頸といひて、
うらうへにみじかきの、あり、またもづかひのにはなし、ものすそは、きぬのすそのうへにひろげて
おくべし、からぎぬのまへひだりのつまをとりて、おびよりまたへとはして、右のつまをとりて、
わづかにむすびたるがよきなり、つぎにさいしをさすべし、むらごのみつぐりのをゝつけたり、
まづむらごをとりて、なかをりにとりなして、ひとむすびして、ざいしをつらぬくべし、たゞしか
たかたをすこしながくすべし、いたゞきよりひきこさんようなり、ざいしをひだりのてにと
りて、またもづかひにむかひてたちて、わけめの右のかたのかみをすこしさいしにてすくひて、わ
けめをこして、又わけめの左のかたのかみを又すくひて、ざいしのさきのいでたるに、このむら
ごのいとのかた〳〵を、わけめのうへよりひきこして、さいしのさきにからむなり、そのからみ
やうならふべし、ひすべし、本にみえたり、さればいとはうらうへに、みゝのうへにさがりたるな
り、かたのまへにびんにぐしてさぐべし、いたくひたひによせてさしつれば、うつぶしなぜすれ
ばおつれば、かつらのわたりのはぜにさすべし、さてのちすきあふぎをもたすべし、これもたも

どのうへよくおしてもちて、そでぐちを見すべし、このきぬのわきのあきたるがさせよきなり、ものこしのかぎをかくしてする人あり、さいしのからみやうもかはる、いへ〳〵の事なり、一の所の五せちには、〇中略わらは下づかひのさうぞくは常のごとし、うへざうしはいつゝあこめにうちぎぬ、ひとへはりばかま、ひすまし三あこめにうちぎぬ、ひとへもはかまをきるなり、おのおのでいしあふぎをもつ、

〔榮花物語八初花〕五節、廿日〇寛弘五年十一月丁丑まゐる、〇中略をみの夜〇日辰は、宰相の五せつに、わらはのかざみ、をとなのからぎぬに、みなあをずりをして、おかひもをなんしたりけるといふことを、のちに齋院〇選子きこしめして、をかしうもと覺しめして、めしたりければ御らんじて、げにいといまめかしうおぼしめして、あをきかみのはしにて、袂にむすびつけてかへさせ給へり、

かみよゝりすれるころもといひながらまたかさねてもめづらしきかな

〔枕草子五〕宮〇一條后定子の五せち出させ給ふに、かしづき十二人、ことゞころにはみやす所の人出すをば、わろき事にぞするときくに、いかにおぼすか宮の女房を十人出させ給ふ、今ふたりは女院〇圓融后詮子しげいしやの人やがてはらから成けり、たつの日のあをずりのからぎぬ、かざみをきせ給へり、女房にだにかねてさしもしらせず、殿上人にはましていみじうかくして、みなさうぞくしたちて、くらうなりたるほどにもてきてきす、あかひもいみじうむすびさげて、いみじくやうじたるしろききぬに、かた木のかたしにかきたるをり物のからぎぬのうへにきたるは、まことにめづらしき中に、わらははいますこしなまめきたり、下づかへまでつゞきたちてゐたる、かんだちめ殿上人おぞろき興じて、をみの女ばうとつけたり、

〔小右記〕長和三年十一月廿一日癸卯、左府候御前、大納言、頼通中納言、頼宗三位中將、能信參議、公信侍殿上、御覽童女、新中納言童著無文織物袙、下仕著無文織物唐衣、兼有可禁過差之仰、而童女下仕

著織物、更無勘當、相府被申、不可有禁制之由、亦六位著紅色、是皆有不可著之仰、而不憚著用、強乖叡慮、王化之薄歟、甚以歎息、弛張只懸執權臣之心、

長元元年十月三日甲子、藏人式部丞經任云、五節有過差制、不可著綾衣、衣五外不可着、

〔榮花物語 三十六 根合〕殿の大納言〇藤原師實 五節いださせ給、皇后宮〇後冷泉后寛子 の女房中臈下臈のきたなげなきどもをいださせ給、我はと思ききはのはいださせ給はず、装束ありさまいふかたなし、この御時には制ありて、きぬいつゝなどあれど、さびしからねば、さるべき所々にはいみじくせさせ給、後一條院の御時こそはかゝりしか、女房童しもづかへの装束、ひと〳〵ふたりて心をつくすともおろかなり、中宮〇後冷泉后章子 より童の装束たてまつらせ給へり、くれなゐのうちたるに、さくらのふたへもんのそのをりえだおりたるあこめ、蘇芳のかざみ、りんだうのうへのはかま、みなふたへもん也、うちたるはかまなどれいの事なり、るりをもんにおしなど、いみじうつくされたり、世中にめづらしき五節のありさまなり、童などもひとの程ことなるをえらせ給へり、この御ときは、をかしき事多く、御心やりてなんおはしましける、

〇按ズルニ、本文年月詳ナラザレドモ、公卿補任ニ據ルニ、師實ハ、康平元年四月權大納言ニ任ゼリ、而シテ此文ノ下ニ、師實三月ヲ以テ結婚スル事アリ、其次ニ、翌年內大臣ニ進ムノ文アリ、卽チ康平三年ナリ、故ニ本文ハ康平元年十一月ノ事ナルベシ

〔類聚雜要抄 三〕五節雜事 內大臣(藤原忠通)令五節進給定文抄出

一舞姬裝束三具

丑日

赤色唐衣一領　織物袿一領　茜染打衵一領　綠地摺裳一腰　茜染三重袴一腰　扇一枚

錦袿一足

寅日

青色唐衣(加二[illegible]一)　蘇芳末濃裳一腰　茜染打衵一重　同三重袴一腰　扇一枚　錦鞋一足

辰日

日蔭鬘五流　赤紐二具　摺唐衣一領　泥繪裳一腰　茜染打衵一重　同三重袴一腰　扇一枚　錦鞋一足

行事前出雲守朝臣

一傳八人

唐衣十六領　裳十六腰

行事前伊豫守朝臣　朝輔朝臣　盛家朝臣(〇中略)

永久三年十月十九日

右永久三年、内大臣殿令五節出給定文之定也、土御門東洞院右大臣殿家内裏時也、

〔長秋記〕元永二年十一月十一日(〇癸丑)五節參入、(〇中略)今夜頭辨顯隆朝臣語云、自民部卿許、備中舞姫裝束可調進由有其命、仍褂三領打衣單衣、袴調送處、無裳唐衣之由所被示也、先之於裳唐衣者、本所儲之由所存也、如何、下官儲不覺、但節會夜青摺、御前試夜青色、是借物也、於帳代夜者、小褂裳唐衣皆相具之由所覺也、雖然分明不答示、可被問人々之由、後聞依二位殿敎命、申下中宮御服、相具送之云云、後日左大將(〇藤原忠通)仰云、如此事常事也、備中不調、可謂奇怪、又舞姫是供奉神事者也、雖無止之所、舊物令著用事如何、　十二日、舞姫昇行事、(〇中略)今夜舞姫褂青色唐衣、末濃裳也、用赤色扇裙帶比禮、

十四日(〇丙辰)今夜舞姫打衵一重、纐纈裳、青摺唐衣、村濃裙帶比禮、濃袴、理髮釵指二筋日陰鬘、但櫛筋也、青摺扇、

〔中右記〕大治二年十月十七日癸酉、晩頭又猶可進(〇舞姫)之由、頭中將所仰下也、仍參殿下、童裝束可調

服裝食器具

給由申請候處、有恩許、誠爲悅畢、　十一月九日、申時許、從殿下被仰云、若君又重病（○疾）也、仍五節童裝束不可調給者、申承了由、其後家中俄所奔營也、

〔台記〕久安二年十月二日、頭中將來云、可獻五節者、令奏承由、　十九日、未刻參院、及昏參新院、申御覽日童女裝束可下給之由、被仰聞食之由、　廿日、以職事爲使、乞下仕舞姬裝束於諸卿、申傳宴唐衣於高陽院、（被院藏人爲使、）丑日舞姬裝束、申皇太后宮、（被宮大進爲使、家司、）

〔雅亮裝束抄一〕五せち所のこと

御覽の日のわらはのさうぞくを、女院宮ばらなどより、たう日五せち所へおくらるゝことあらば、つかひに女房のさうぞくをたぶべきなり、もからぎぬ、こきはりばかま、これを女房のさうぞくといふなり、つゝみにいれず、とりかさねてたぶなり、かさねやうならふべし、

〔新十二月往來〕令獻五節舞姬給之旨、承及候之間、楊十荷令進候、雖不盡金銀之美、已令積土木之功、若有恩許者、所望候也、恐々謹言、

十一月十六日　權少僧都

源中納言殿

楊十荷給了、感悅之至、不可申盡候、風流之美、已無比類、早可令進內中宮御方候、謹言、

十一月十六日　權中納言

〔榮花物語八初花〕五節、廿日（○寬弘五年十一月丁丑）まゐる、侍從宰相とあるは、內大臣の子實成宰相なるべし、舞ひめのさうぞくつかはす、右宰相中將（○藤原兼隆）の五節に、御かづらまうされたるつかはすついでに、箱一よろひに、たき物いれてつかはす、こゝろは梅の枝なり、（○中略）春宮大夫（○藤原懷平）の五節に、みやよりたき物つかはす、おほきやかなるこがねのはこにいれさせ給へり、尾張守まさひらも出したれば、（○舞姬）との、うへ（○藤原道長室倫子）ぞそれはつかはしける、

〔小右記〕寛仁二年十一月十九日丁丑、今夜宰相五節舞姬令參入、(○中略)皇太后宮給舞姬裝束云々、御使被加裝束、從余許所送也、

〔台記〕久安二年十一月十一日(○丁丑)獻五節舞姬、(大炊高倉第)及晩上達部殿上人參會、余著直衣坐路寢西廂、禎子内親王使散位憲親賜童女裝束二具、右衛門權佐親隆傳此由、仰可召由、則諸大夫二人取裝束置余前、(裏書)次憲親參候、有成朝臣取祿(白一重濃袴)賜之、憲親下地再拜、次諸大夫取裝束置開所、次皇太后使大進泰兼朝臣、賜舞姬裝束、其儀同上、次高陽院(○鳥羽后泰子)使判官代信範賜今夜傳女房八人裳唐衣、薰其儀同上、但賜余衣二領、(自賜之、召寄信範賜之、永久例也、)又其薰信範置余前、召使諸大夫傳、　十三日、參內、在五節所、上皇(鳥羽新院)使播磨守忠盛朝臣、賜童女裝束二具、親隆傳申、仰可召之由、即諸大夫取置前簀子、又敷圓座、召南簾、忠盛薰置余前、了著圓座、余取祿(女裝束)授之、歸入、忠盛下地再拜、依永久例、權中納言公能卿、(裏書)可取祿之由有約諾、而件人遲參、仍自取、是保延之例也、(○中略)入夜淵醉了、欲向殿上之程、禎子内親王使散位爲長賜薰、使親隆啓之、雖須相逢、事之欲始之間、不得便宜不能逢、甚悅賜了者、(使不給祿、康平例)　十七日、參新院、令奏賜童女裝束之慶、

久壽元年十一月十六日乙丑、戌刻余向東三條、中納言中將五節參內、自高陽院給童女裝束、御使憲雅、頭辨給祿、自同院給薰、御使師國朝臣、中納言中將給祿、皇后宮給舞姬裝束、御使大進爲親、(裝束及御使不觸穢亡所、觸テ參三條者、非忌服、其親無乙丙之故也、)不給祿、禪閣給下仕裝束二具、帥忠基卿送同裝束二具、禎子内親王給薰、(其使下家司、仍不給祿、)　十八日丁卯、自院(○鳥羽)給童女裝束二具、御使遠江守惟方、右大將(○藤原兼長)取祿給之、又惟方持來薰、是暲子内親王所給也、

〔恐昧記〕嘉應元年十一月十三日乙丑、今夜五節參入也、(○中略)自建春門院下給御覽日童女裝束、御使藏人云々、先令懷成(衣冠)只今示可相逢之由、即著直衣出逢客亭、御使藏人取一具置之、今一具懷成取之置了之後、手自取女房裝束(唐衣濃袴)招寄藏人給之、

〔玉海〕建久元年十一月十五日乙丑、此日五節參入也、○中略於出立所、有所々御使等、入條院使少將成家、給童裝束裛物等、親雅取祿、殷富門院使長俊、以政取祿、給舞姬裝束也、余出帳臺、

〔小右記〕長德五年○長保元年十一月廿一日庚子、藏人所文章生某來、仰可令參舞姬之由、令申奉由、廿五日甲辰、脊侍母氏送舞姬日景緩、相加和歌、給使疋絹、兼答貺和歌、廿六日乙巳、五節几帳四基、火桶鋪設等、分奉宮御方、又送火桶等於所々、草子魚鳥等類同奉、

長和三年十一月十九日辛丑、童女二人裝束、蒲萄染汗衫、蘇芳染綿科、相一襲、菊重綾相一襲、文綾表袴、三重、蘇芳染袴、奉送右衛門督御許、又有舞姬料車、送太皇太后宮亮能通許、依獻五節、

寛仁二年十一月十九日丁丑、今夜宰相五節舞姬令參入、用余車、陪從唐衣四領假相違、皇后宮亮爲任、今日曉頭送唐衣二領、太皇太后宮亮清通、臨期稱不堪云々、左大將敎通○藤原被送唐衣四領、左將軍有可調送舞姬裝束之約、而彼將軍云、舞姬裝束從皇太后宮可被給之、仍不可調、但有因乏事、可補設者、唐衣事有可依□□云々、以被御女青袴、褂等、餘剩唐衣有可分送之約、仍所被示送歟云々、三年十一月十三日乙丑、四條大納言、五節舞姬裝束奉送之、赤色唐衣、蘇芳織物褂、地摺綾裳、三重袴等也、擣綾御褂、依被御消息、前日奉之、又舞姬料車奉之、車副著褐衣冠、又賴任舞姬事同遣、車副相同、

〔定家朝臣記〕康平三年十一月十八日癸卯、○中略童女御覽也、○中略內府五節所、內府童女裝束、從殿下令奉給、紅葉重打汗衫、龍膽、龍膽色表袴、濃合袴、

〔經信卿記〕永保元年十一月廿一日癸卯、送篩前一前於能登守公俊五節所、高器十二本、加許數、□□□□書史生義行所勤也、副絹二十匹、□□國養保□□□又送朝餉於右兵衛督新宰相中將五節所、右兵衛督五匹、宰相中將十匹、予獻五節同、依有芳心事等、未加增數也、使同、

寛治二年十一月十九日辛卯、不出、使省史生重忠送朝餉於藤中納言宗俊五節所、絹十匹、須遣三匹五匹者、然而先日要被示大師前可調送之由、依所增數也、增□□□□又左大辨匡房五節所理髮前料、高器九本、所仰重忠也、加折敷、副絹廿匹、又送絹卅匹於越前清實注送理髮前由了、

〔長秋記〕元永二年十一月十一日癸丑、五節參入、宰相中將雅定許送扇一雙、依前日請也、又中宮御扇

一雙、夜玉折箕、日臨結之付祖心葉等、調進于上皇、依前日召也、

〔中右記〕大治二年十一月十五日辛丑、主上〈〇崇徳〉不出御帳臺、殿下〈〇藤原忠通〉不令出仕給、頭中將忠宗一人行帳臺事、〈〇中略〉今朝迎舞師〈小伊與〉於侍廊令習舞、舞姬晩景歸之間、口例祿之外、女房裝束皆以放取了、稱故實、又不制止也、大略近年之作法者、

裏書、今度被訪人々、

攝政殿〈童女裝束料所下給也、若君不例之間、不調給由所被仰也、〉　左衛門督通季卿〈被物二領料被送也、是息男丹波守所課云々、〉

右衛門督實行卿〈大被子十帖〉　左兵衛督實能卿〈被物一重、綿百兩、息男越中守所課云々、〉

按察中納言顯隆卿〈綿五十兩、絹三卷、〉　藤大納言〈舞姬裝束被借、又寅日裝束被調進、〉

右兵衛督伊通〈辰日裝束被送〉　近江守宗兼〈丑日唐衣裝束調送、殘物家中儲、〉

左京大夫經忠〈綿五十兩、息男若狹守所課云々、〉　左中辨實光〈綿百兩、菓子千合、屯食五具、〉

相模守盛重、上總守親隆、信濃守重時等、布祿各送、

越中守忠盛〈綿五十兩〉　武藏守通基〈絹十卷、糸百兩、〉

讃岐守清隆〈絹五卷〉　平等院大僧正〈菓子五百合〉

光清法印〈疊廿枚〉　南京僧侶送菓子、

新中納言雅定卿〈被借壁代几帳〉　左大辨爲隆〈被借屏風几帳燈臺等〉

大藏卿長忠〈大歸餉〉

扇送人々、右中辨師俊、源少納言俊隆、新少納言忠宗、秀才藏人資憲、侍從憲俊、〈童女扇〉

風流菓子、應覺僧都、此口法眼、嚴清法橋、横川阿闍梨敎秀、

〔長秋記〕大治四年十一月廿四日戊辰、申刻皇后宮大夫送舞姬裝束打衵一重、合袴一腰、桐竹泥繪扇一枚、裹白絹裹使內舍人忠景、同裝束一具送阿波守有賢朝臣許、副書狀、共是前日請也、

〔中右記〕天承二年(○長承元年)十一月廿三日庚辰、五節雜事營之間、(○中略)舞姫裝束被送人々、

丑日右衞門督實能卿

寅日皇后宮權大夫師時卿

辰日治部卿能俊卿、不被送料物如何、

大師之前物

民部卿忠敎、今日被送之、遣大師之許了、大師五節之間候禁中□□

大略

緑布廿餘端許、中紙二千四百帖許、(絹緑堆、疋絹三拾疋也、)雜菓子、廣定四千合許、

風流臺菓子、今度不儲也、近代依過差强不儲也、

几帳帷　甲斐範隆二帖、因幡通基一口、(三尺)美作顯能二帖、備前忠盛二帖、伊與忠隆二帖、周防憲方二帖

裳　美濃保成二腰、(下紅)丹後爲綱二腰、

唐衣　近江□輔三領

被物　伊勢公隆二領、(打)遠江雅敎二領、石見兼仲一重、飛驒忠重一領、上野顯俊二領、若狹信輔二重、(絹二疋)長門顯成一領、土佐顯保一領、攝津光房一重、(綿廿兩)

布　信濃盛重卅段

綿　越後淸隆三百兩

椽手洗等、几帳手一本、　因幡通基

筵　出雲光隆卅枚

八木　淡路實親廿

未進國々

參河資寬、被物一重 播□□□□□□□上總親隆、布 常陸知通、被物□□ 越前盛章、被物□□ 安木資盛、二領

辭退國々

但馬有實、下仕裝二領 駿河忠能、几帳二本 備中家長、紙 隱岐行重、一重 越中顯長、被物 和泉宗兼、一重少々送二小袿 出羽宗遠、一重 障

除國々

獻五節 能登季兼 加賀顯廣

守下向國々

伊賀武藏下總下野安房出羽、藤中納言長實子息等、件一門課四箇國、尾張丹波伯耆備後、

諸司允功

藤原盛能、大學允、木工允、少內記、八省丞、市正、八丈絹三十六疋四丈、綿五百兩、□尺八丈二丈、合五十疋 次季成雅樂允了、

人々訪

大貳經忠、國絹五疋、花三帖、 新大納言、實國、二枚、祭主三位公長、八丈十疋 出羽前司光國、三疋 相模前司重時、五疋 散位親康、三疋 宇佐大宮司、國絹廿疋 蘇芳陶阿 筑後守國兼、國絹二疋、花四帖、

保延元年十一月廿日己丑、今夜五節舞姬獻人、按察大納言實行卿、右宰相中將實衡、播磨守家成朝臣、出雲守光隆、獻舞姬、予辰日舞姬裝束調進、按察許、播磨出雲各薰物一裹送之、

〔台記〕久安二年十一月十一日、獻五節舞姬、○中略 新大納言伊通卿、皇后宮權大夫成通卿、中納言 送下仕裝束、伊通使散位公具、成通使散位清兼、各使親隆報悅由、○中略 今夜宗輔宗能兩卿、各持來扇二枚、又實行卿送扇二枚、使散位清職、 十三日、參內在五節所、○中略 右大將實能、使侍從公保送下仕裝束二具、今朝民部卿顯頼卿、前中納言送下仕裝束二具、

久壽元年十一月十六日乙丑、戌刻、余向東三條、中納言中將五節參內、○中略禪閤給下仕裝束二具、忠基卿送同裝束二具、○中略余以舞姬裝束一具、送參議公通卿家、使勾當平忠綱、十七日丙寅、參議敎長卿、送舞姬裝束、中納言季成卿送朝餉五節所、乘火桶、十八日丁卯、右大辨朝隆朝臣送朝餉、十九日戊辰、左大辨資信朝臣送舞姬裝束、右衞門督公能卿送朝餉、

〔愚昧記〕嘉應元年十一月十三日乙丑、今夜五節參入也、申刻許自攝政家使盛業口給下仕裝束、經仲著衣冠相逢之、請取裝束等了、須相逢也、而日來雖有咳病之氣、依可參帳臺試、相扶之間不對面也、相逢之體可令披露也者、秉燭之後、自人々許送裝束等、左大臣皇后宮大夫各消息、但左大臣ハ侍一人相具之云々、十六日戊辰、秉燭之後參內、著仗座、○中略予起座左衞門督相共、於二間簾前、分與櫛等於女房、○中略抑今日獻櫛棚等於內、○中略高倉院、○後白河建春門院、但院不進櫛、是御出家之後依無便宜也、且申合左府也、自餘所々明日可獻者、

〔玉海〕嘉應三年十月六日丁未、今日中御門中納言宗家來示云、可獻五節之由依被譴責、愁領狀了、而無計略事等甚多、丑日舞姬裝束可調給云々、早給色目、可調獻之由答之、余依憚風、隔障子所談也、

十一月十九日己丑、此日五節參入也、○中略今日參內以前、以家季送今夜舞姬裝束於中納言許、相副消息、件裝束依先日被請也、又家季定成等爲童女裝束遣之、此外細々事等尤多、

承安三年十一月十二日辛丑、今日五節參也、源中納言資賢卿知行國備中獻五節、依申請遣舞姬裝束、使職事國行先例公卿獻五節之時、以職事爲使、受領獻之時、若可有差別歟、然者以如侍可遣歟、此條不審、仍尋先例之處、先年尾張守成雅獻五節之時、自故殿遣童女裝束、以職事國親爲使、舞姬裝束中宮遣之、以六位進盛業爲使、准此等例、彼者偏受領也、是ハ雖爲知行國之事、其身已公卿也、彌足用職事、仍所遣也、雖安事近代之人、萬事爲先誹謗、仍爲後記也、此例等信範卿所注進也、

文治元年十月一日庚戌、內府○藤原實定以使者示云、美作國可獻五節之由有譴責、每事無計略、童女下

仕裝束之間、一具欲調給如何、報云、童女下仕等裝束、若可調具者、可調進一雙(二具也)、調進一具之條太可異様、二具者又不可叶、仍可調送舞姫裝束一具者、　三日壬子、內府送札云、舞姫裝束御沙汰、尤悅思給、可進色目云々、　十一月廿二日辛丑、此日五節參入也、○中略今夜送舞姫裝束於內大臣帥納言等之亭、以馬助國行送內府之許、納衣筥蓋、(件蓋使持還、先例也)裹打裹、以經泰送納言之許、色目同前、內府自不出之、知行美作國之勤也、然者雖不可必遣職事、其營已丞相之經營也、近代又如此之事更無差別、仍隨宜差遣職事也、

建久二年十一月廿三日戊辰、此日節會也、○中略左大辨定長、以其息淸長、進櫛棚等於中宮御方、(風流小炭櫃、櫛風流十荷也、)幷送余許、(櫛風流進菓、風流十荷、)

〔仲資王記〕元久元年十一月十九日丁丑、五節參入云々、權大納言隆房卿、(丹後)前中納言、通卿、(中納言)送下卿、(伊豫)參議長房卿、風流櫛一積、(火取)送四條大納言隆房卿、是兼依被示也、又一積(扇薫)送實行卿送扇也、

廿一日己卯、前中納言、(丹後)被獻風流棚於姬宮御方云々、

〔明月記〕建曆三年十一月十二日、五節參入、○中略今日風流櫛等構出、送之按察、火桶(押鉓、以櫛爲炭、以白物爲灰、櫛廿入)之、炬屋一(以櫛葺其上、爲檜皮、以薄樣爲衣、以花田薄樣一結之、爲立蔀、男一人居其內、以紅薄樣火在前、)送向中納言許、外辨床子兀子等各以一裹爲帖、大臣兀子前又置一裹、爲位記筥、送左兵衞督許了、

〔玉蘂〕承久二年十一月十五日、此日五節參入也、○中略今朝童女裝束一具、送三條中納言許、伊賀國依獻五節也、不遣別使、內々送之、

〔明月記〕嘉祿二年十一月十四日乙丑、櫛風流名字雖心中冷然、依先日懇切消息、送通方卿許、造最小之屋、(左右後各立一裹、其下又敷一裹、)屋上葺青櫛二裹、(有檜四裹)敷屋前、幷左右屋前栽枯蘆、屋中居張小兒、(着小袖、有文、)懸天椽志攝津國乃心也、次以赤地錦爲水引、都合十裹、最略櫛也、　十五日丙寅、如形風流送平相公許、誂承明黃門作出、以薄樣作筥蓋、入櫛、(加敷)其上以薄樣(氷)結文付竹杖、幷文付氷、是狹衣雪歌之由歟、

殿上及院宮淵醉

寛喜二年十一月十四日辛丑、臨香楠風流一、送富小路中納言許、先年所作同風情、栽枯蘆造小屋居小兒、地并屋皆書裏楠、以護絹花田并小絹等許各三遣水、其上以絹付筆為水浪、以水入金壺、油壺ベニサラ等為立石、又有麝香、以錦為水引、此事新制云々、如此事頗非制限、小事歟、病者不聞及由也、雖長病間不默止由示之、病中殊表其志、珍重之由有返事、

〔夕拜備急至要抄上十一月〕寅卯日殿上淵醉

〔蓬萊抄〕十一月寅日事
兩貫首以下早旦參殿上、近頃或及午後歟、〇中略此間朗詠雜藝盃定法、管領之召預藏人、他藏人等候小板敷、預藏人參進勸盃、隨時有饗應、事了起座、袒裼著沓、此間有闌音、通渡殿并朝餉、出御湯殿介、更東折經弘徽殿細殿前、廻五節所、次參當時后宮并齋院等、日暮所遂之時、及明日參、入夜奉仕御前試御裝束、〇中略此間優遊饒宴、都雖記錄、雖似猥雜、皆是術貫也、

同卯日事
殿上淵醉如寅日、

〔世俗淺深秘抄下〕一五節寅卯日、侍臣廻五節所路、雨日用何方哉事不審、雖尋古賢難、未散不審、但寛治三年或記曰、依雨經弓塲并南殿、訪五節所由註之、然者可經御後歟、入自明義門、經御後并露臺承香殿長馬道后町廊、可向、是今案也、寛治記甚不委、猶々可尋事歟

〔建武年中行事〕十一月寅日、殿上の淵醉あり、朗詠今様などうたひて、三こんはてヽ亂舞あり、次第に沓をはきて、女官の戶よりのぼりて、うへをへて、御ゆ殿のはざまより下におりて、北のぢんをめぐりて、五節所にむかふ、其後所々に參てすいさんなどあり、后宮女院などえんすいあればけふあすの程なりけふ御前の試あり、御殿のひさしに亂舞あり、㒵なぞぞおくめる、

〔公事根源十一月〕五節

寅日は殿上の淵醉あり、朗詠いまやうなどうたひて、三獻はてゝ亂舞あり、次第に沓をはきて、北の陣をめぐりて五節所にむかふ、其後所々に參て推參などあり、郢曲の聲をして、まいたんなどうたふ、后宮女院など淵醉あれば、けふあすの程なり、

〔小右記〕長和三年十一月廿一日癸卯、御覽童女、○中略明日於五節所脱衣之事、兼不可令然之由殊有勅命云々、而今夜於殿上群飮、右中將雅通、左中將朝任、左衞門權佐爲義、不候宮達御共專飮、仍勘事云々、　廿三日乙巳、資平云、昨日節會、入夜纔始、○中略五節所脱衣不拘制法、新中納言新宰相五節所、有上達部酒肴之儲、

〔左經記〕寛仁元年十一月廿日甲寅、殿上會事之次、美濃但馬守等、五節所召肴物、兼召酒殿酒、人々乘醉遊蕩、　廿一日乙卯、候內、新中納言被出殿上垸飯、左大將被調云々上達部殿上人多被參會、各乘醉巡檢五節所、

〔小右記〕寛仁二年十一月廿日戊寅、今日宰相出垸飯於殿上、藏人頭左中辨經通所調備也、極豐贍云云、殊調菓子六十合、折櫃皆綵色云々廿合內大盤所、廿合太皇太后宮、廿合中宮各奉之云々、總不聞之事也、非宰相之雅意亦頭辨之所爲、近代之事以之爲優、後聞執啖昇殿上、往古所不聞見、可彈指可彈指、　廿一日己卯、兼成朝臣自宰相五節所來云、昨日殿上垸飯過差、折櫃綵色菓子六十合分奉三所、內大盤所、大宮、中宮等也、今朝宰相頭辨食處、殿上人十餘輩來會同食、

〔經信卿記〕永保元年十一月廿一日癸卯、阿波守良綱送書狀云、大殿御消息也、未刻可參中宮御方、可著直衣者、示承由了、○中略次參宮御方、殿上人群立細殿邊、予見座人未著、仍參殿御直廬、有頃殿下令參宮御方、人々同參、右大將、春宮大夫、左大將、予、新中納言、左衞門督、別當右兵衞督、宰相中將、公實、但依可參新嘗祭、早退出了、三位中將參著、兩頭被召著、依座狹敷疊被召著、殿上人等十餘人許先有盃酒、已及淵醉、朗詠唱歌、又有亂舞事、夜半事了退出、

〔中右記〕寛治二年十一月十八日、（庚寅）〇有殿上淵醉、而貫首行座（奥端座中將殿藏人等多有障不候、仍新藏人少將勸盃、次參宮御方淵醉及發樂、　三年十一月十二日、（戊寅）〇貫首倚書以下、殿上人廿人許參集、一式有出衣、盃酌三獻、不及淵醉幷肩脫、此間雨下、仍經弓場幷御殿東南簀、自南殿廻五節所、十三日、貫首以下參集、如形淵醉、已及三獻、　五年十一月十八日、（壬寅）〇申刻許、有殿上淵醉、朗詠猿樂如形、事了引參女御御方、諸大夫居肴物（高器）幷菓子、（硯蓋敷薄樣）初獻、（左少將忠教）二獻、（左少將師隆）三獻、（四位少將顯實）四獻、（權左中辨基綱）五獻、（右中辨師頼、是皆宮職事也、）朗詠猿樂如常也、此間宇佐使立、殿上精進、然而五節召物居魚類、（加賀國居、殿上於召物也、）

〔續世繼（六雁金）〕九條の民部卿四郎にやおはしけむ、侍從大納言成通と申こそ、よろづの事のおほくきこえ給しか、（〇中略）わかざかり左中將とて、すきものやさしき殿上人なだかきにておはしき、五節などには、雲のうへみなその御まゝなるやうにぞ侍ける、いづれのとしにか、五節に藏人頭たちのまひ給はざりければ、殿上人たちはやみて、いかにぞや歌うたひ給けるに、右兵衞督公行の、また別當の兵衞佐など申けん、その人をおもてにおしたてゝ、成通の中將かくれてうたひ給けるを、頭辨うれへ申されたりければ、そのをりにぞ御かしこまりにて、おはしこもりゐたまへりし、

〔山槐記〕永曆元年十一月十六日庚寅、未刻參內、申終始殿上事、一獻勸盃、新藏人仲重取盃、二獻時盛今度讓頭辨令取盃、次朗詠、藏人少納言信範詠之、次召預數反給、使參上、（衣冠）藏人等出神仙門外饗應歟、次三獻、預勸盃三坏之後許、定令肩脫、下薦進寄令脫之、予以下從之脫畢、次預歌今樣、季兼朝臣以下付之、五坏之後予受取之、以明取杓、次亂舞、畢阿音、出下戶、於渡殿著沓、爲先下薦、經御裝物所南（大盤所渡殿路御膳今參之）後涼殿南簀子、下御湯殿介、兼撤馬形障子及朝餉障子等、女房出綵袖、瀧口於黑戶西邊相待候在予後、如隨身不相具也、經弘徽殿登華殿等、向入貞觀殿東土戶、昇常寧殿艮壇上、猶著沓廻

立五節所、差紐退出、今日無所々淵醉、美福門院御不豫、無便之故也、

〔玉海〕治承二年十一月廿日己卯、申刻殿上淵醉始、主上御引直衣〇高倉於上戸御覽、立年中行事障子於上戸也、關白〇藤原基房及余祗候、御口口之女房少々同以祗候、兩貫首定能著奧、光能在端、已下殿上人十人許、分居奧端座、今日三臈家實檢非違使右衛門尉、左少辨兼光子也、有饗應、多者今日二臈有饗應、而家實依爲其人、召甚有饗應歟、朗詠今樣、又定能朝臣取肴物、在臺盤上物也、給之、祖之時定能懸手於紐、又左中將泰通朝臣來在奧座、經上臈等後進寄也、刷袖、總有五獻、最末之度、定能讓下臈貫首光能、仍家實經臺盤上勸光能也、次萬歲樂、自下臈次第亂舞如常、六位等小板敷也、即殿上人等起座、主上入御御座對東面女房等之中、關白余同候、次殿上人等袒著沓出自渡殿、經東北對等緣、廻五節所、先藏人一臈基行進行、次六位等爲先、下臈相從、次殿上人又爲先、下臈兩貫首在最末、抑殿上人等或祖右或祖左、人々所爲不同、普通說祖右也、而御所方當左之時、依爲晴祖左、又一說也、其非失事歟、

〔山槐記〕治承四年十一月十八日丙寅、淵醉也、〇中略今日如例云々、不憚東國亂逆歟、

〇按ズルニ、此時ノ淵醉ハ、福原ノ皇居ニテ行ハレシナリ、

〔吉記〕治承四年十一月十八日丙寅、今日殿上淵醉也、仍未刻參內、〇中略一獻勸杯在高、一臈時房稱所勞、日來籠居、其上辭五節不具之儀之由、若有所思歟、未知何故、二臈兼資臨時祭舞人料、可任衛府之由被仰遣之處、若然者不可參五節之由申之、甚無謂、早可參之由雖遣仰、行程遼遠云々不參、四臈長親依鎮魂祭奉行向齋部、新藏人季隆尤可祗候之處、稱頓病之由不參、但或說衣裝有依違事云々、仍非藏人勤盃、雖違例爲不聞事也、或說五位藏人勤之云々、職事一人非職一人祗候、開闢以來定無其例歟、偏是開都(京都福原)之間、如此違例出來也、二獻兼時、三臈爲預例、先規定稱歟、十九日丁卯、著殿上、頭重衡朝臣在奧座、〇中略泰通朝臣已下雲客十許輩著座、次一獻、非藏人在高、次朗詠、〇中略次二獻藏人兼時、昨日預饗應、今日雖不可指出、依無他藏人也、次今樣右兵衛權佐盛定出之、兼時猶預小饗應、勸一兩獻之後巡行、次萬歲樂亂舞、廻五節所如昨日、〇中略次人々參中宮御方、依可有淵醉也、〇中略卿相等乘輿、侍臣等亂遊、殆超越計白拍子也、次獻櫛、兩貫首強雖不可獻、依衆議獻之、次雲客推參八條殿、今樣朗詠亂舞、事畢分散、

〔玉海〕文治三年十一月十七日甲寅、此日御前試也、又公卿殿上人參殷富門院、有淵醉云々、此事先日

頭中將以院宣問余申云、院號之後淵醉、先例殊不見歟、但如此事、只可依當時之御定、不可有定法事歟者、仍有此事、法皇〇後白河頗有御興、仍所被行云々、

建久元年十一月十七日丁卯、先有殿上淵醉、左大將五節所獻召物、藤中納言調送之、仍公卿著之、〇中略右大臣不著也、依寬治六年例也、仁平大臣著也、不足據用不快之例也、三獻之後、朗詠亂舞、〇中略今日殿上召物以下家司送之、隨身勤役送、殿上五位爲參議已上手長役送、六位殿上人役供也、肴物折敷高坏也、菓子入土器居折敷持來、可居高坏上也、亮宗賴調進也、

〔玉蘂〕承久二年十一月十六日、〇壬寅今日殿上淵醉、御前試等也、又有中宮淵醉事、秉燭參中宮、戌刻殿上人自內裏相引參上、予著直衣冠、不出衣、裝束如昨、出座、九條大納言大夫宰相中將信能朝臣等著座、右大將、春宮權大夫、高倉宰相中將、俄不參、即兩頭召著座末、雅清朝臣催殿上人可進之由、即時賢朝臣以下進居西簀子、先々居著物之後進參、頗可謂早速、雖須迫返、依已返、不令返也、次居肴物、諸大夫居之、予三本、陪膳以經□□已下、次居交菓子一盃、次一獻、頭中將雅清朝臣、瓶子藏人、予取盃巡流、雅清朝臣取瓶子酌、此間召著賁雅朝臣於公卿座、非□□音曲之人、雖有例之上勅定也、次予催朗詠、信能朝臣出令月句、賁雅朝臣助音、一反次歌德是句、三反時賢朝臣親仲朝臣有賁等助音、先例多二獻後有朗詠、每年例事不可守株、仍檢先例用異儀也、次二獻、宰相中將信能朝臣勸盃、瓶子權大進信盛、不取違酌、此次仰可放紐、此間獨□即信能朝臣以下解紐、予賴平公宣卿等不解、用略儀也、更飯了、入酒授予、次第巡流如初、次亂舞萬歲樂一巡、予同立舞、是又先々三獻之後有之、用異儀也、次三獻、大夫公宣卿、瓶子少納言賁隆、次又亂舞、殿上人置檜、二人舞之時、亂拍子也、獻白拍儀也、次第了人々分取之、殿上人歸參內裏、此後可有御前試云々、　十七日、人人相引參修明門院、有淵醉事、右大臣以下參入、有五獻云々、

〔明月記〕嘉祿元年十一月七日、參室町殿、〇中略仰云、中將明日來哉、亂舞之間事、可扶持之由委欲示付、早可申合之由申退出、以書狀今日明旦之間、可構參由云送、傳聞寅日淵醉、提初夜鐘之後始事、昨日又秉燭以後始云々、去年又如此、於今者殿上淵醉可爲深更事歟、去今之陵遲以之可知、

〔玉蘂〕嘉禎二年十一月十三日丙寅、今日殿上淵醉并御前試也、未刻殿上人未參、仍殊加催促、○中略酉刻殿上淵醉、主上〈四條〉○於上戸密々有御覽、余右府大納言同候、隆親卿實持卿等候近邊、拂見物女房等、○中略有三獻、一﨟藏人重輔預饗應、親忠朝臣放紐、朗詠今様同人出之、實俊忠俊助音、三獻了、萬歲樂亂舞如例、舞了廻北陣、此間秉燭、近代每年及夜陰尤違例也、主上於北陣妻戸密々有御覽、余右府大納言等候御共、次殿上人相率參所々云々、今夜姬宮并准后方許也、信成忠高朝臣等參、一條給也、亥刻殿上人等改裝束歸座、先向五節所、於丹後五節所殿上人等謠歌曲云々、子刻有御前試事、○中略事了舞姬退出、次於清涼殿弘庇有御前召、主上御簾中、余候御傍、殿上人群居候庇、先朗詠今様、次亂舞、先萬歲樂、次口拱、二人舞之、又有猿樂、　十四日丁卯、今日淵醉、早令催具之由仰顯定朝臣、再三加催促、及申刻事始、今日予不見物、二﨟行廣預饗應、是近代例云々、事了廻北陣向五節所、于時酉終也、○中略次殿上人相引參皇后宮、〈持明院〉依淵醉也、後聞有三獻、

〔經俊記〕寶治元年十一月十六日乙丑、今日五節參入也、　十七日丙寅、今日殿上淵醉也、未刻許參入、頭之被始行、頭辨顯朝朝臣、經忠朝臣、伊基朝臣、經俊、光國、〈藏人大進〉資定、〈左衛門權佐〉宗雅、忠資、忠方、〈頭辨子〉著殿上、次一獻、新藏人遲參之間、非職勸盃、次二獻、藏人侍從宗雅朗詠、次三獻、今様裼袒、次万歲樂、次各廻北陣、次參中宮淵醉、權大進高經奉行之、院御隨身著布衣立明、透渡殿南砌所官人入渡殿北又立明、良久攝政殿、〈○藤原兼經〉左大臣、〈○藤原兼平〉右大臣、〈○藤原忠家〉內大臣、〈○藤原實基〉大宮大納言、〈公相〉万里小路大納言、〈公基〉左衛門督、〈實藤〉大夫、〈公親〉權大夫、〈公持〉別當、〈通成〉右兵衛督、〈有資〉著殿上、兼居肴物、之〈兼勤〉一獻勸盃〈權亮〉二獻、此以後事、尋高經欲尋記之處忘却之間不注之、可謂遺恨、　十八日丁卯、申刻參內、秉燭之程被行淵醉、其儀如昨日、

〔勘仲記〕建治二年十一月十二日壬寅、今夜殿上淵醉也、頭中將遲參、入夜之後參入、每事遲引、中將實永朝臣〈公益息〉兩貫首下郢曲、殿上人上破位次可著座之由申之、於公益朝臣者、父實清卿扶持、實永朝

臣上爲弟子、早可著上首之由申之、而顯成朝臣確執之、依此事及數刻、頭中將度々申殿下、自殿被申仙洞、任位次可著座之由勅定嚴密之間、如此治定畢、自元實永朝臣之所存太不可然、非大臣之家督其寄無之、大臣孫公泰卿息歟、頗過分也、殿上淵醉畢渡北陣、人々袒裼、或左或右、所存不同歟、本儀可爲右歟、但又可依御所便宜歟、今夜兩院以下所々推參云々、　十三日癸卯、今日殿上淵醉以後、新陽明門院推參、近衞殿於西南弘庇亂舞、今夜無押出云々、

〔大槐秘抄〕見し代まで、五節などの殿上の座には、諸大夫は、座をよしあるきむだちにはゆづりて、しもにてそゐ候しか、諸大夫の上居てのみはじめ候事も、顯季の三位のし出したる事にこそ候めれ、

古事類苑

神祇部二十九

新嘗祭下 相嘗祭附

古事類苑

神祇部二十九

新嘗祭下 相嘗祭附

祭殿及齋會殿

〔類聚國史九神祇〕天長七年十一月辛卯、天皇御神嘉殿、以申如在、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十一月乙卯、天皇御神嘉殿行神事、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十一月廿日乙卯、修新嘗會祭於神嘉殿、

〔中右記〕大治二年十一月十七日癸卯、依昨日仰、相具右少辨參新嘗祭、但去春神祇官炎上之後於中院所被行也、

〔年中行事抄十一月〕中卯日新嘗祭事〈殿務、有二卯用下、〉

舊例有行幸、於中和院被行、近代只上卿已下參入、於神祇官行之、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲十一月丁卯、廢新嘗會、以諒闇故也、〈檢神祇官記、是年於神祇官曹司、行新嘗之事矣、〉

〔續日本紀四十桓武〕延曆九年十一月己卯、是日當新嘗、而爲諒闇未終、於神祇官行其事矣、

〔日本紀略一醍醐〕延喜三年十一月十九日乙卯、新嘗會、依左兵衞陣犬死穢、於神祇官行之、

延長五年十一月廿日丁卯、於神祇官行新嘗會、

〔日本紀略二朱雀〕承平元年十一月廿日癸卯、於神祇官有新嘗會、

〔日本紀略四村上〕天德四年十一月十九日乙卯、於神祇官有新嘗祭、又於八省院發遣諸社奉幣使、

〔日本紀略十一一條〕寛弘二年十一月廿三日丁卯、新嘗祭、依內裏燒亡付本官、

〔日本紀略三十二後〕長和三年十一月廿一日癸卯、於神祇官新嘗會、

〔左經記〕寬仁四年十一月廿日丁卯、新嘗祭、於神祇官被行、上卿中納言、（使有障、作立門外著行事云云、宰相辨少納言違御坐等云云、）

〔日本紀略十三後一條〕萬壽元年十一月十九日癸卯、新嘗會、於神祇官行之、

〔左經記〕長元七年十一月十一日丁酉、權辨相示云、新嘗祭日、依御物忌不可有行幸、無行幸之時、於神祇官被行神事、是恒事也、而彼官屋舍、爲八月大風皆顚倒之後未作立、仍於中院可被行也、而見先例、偶
行幸停止之時、於中院被行之例不見如何、答云、慥不覺、但依方忌無行幸之時、於中院被行之例覺侍、是非偶停行幸、停例定知彖有儀定歟、被問外記、自勘申歟者、　十二日戊戌、大外記頼隆眞人相示、夜部無行幸之時、於中院被行新嘗祭之例、可勘申者、勘申其例了者、

〔本朝世紀〕久安六年十一月十九日辛卯、今夕新嘗祭也、權中納言藤原定卿、參議源雅通朝臣、左少辨平範家、少納言藤實經、權少外記中原俊彖、右少史同彖遠等參仕、以南舍爲神殿、立幄爲上卿以下座、去々年觸穢之後未作改神殿之故也、

〔吉記〕治承四年十一月十九日丁卯、今日新嘗祭也、當都〈福原〉〇依无其所、於平安神祇官被行之、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年十一月十五日辛卯、修新嘗祭、帝不御神嘉殿、親王公卿向宮內省行事、

〔三代實錄清和十一〕貞觀七年十一月十四日辛卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、勅遣親王公卿向宮內省奉祭、

〔續史愚抄櫻町〕元文五年十一月廿四日辛卯、新嘗祭再興、行幸神嘉殿、（以南殿擬之、）

〔續史愚抄後櫻町〕明和七年十一月十三日乙卯、新嘗祭、此日於左大臣（尙實）第有行幸召仰、向夜行幸中和院、（當代第二度、）於神嘉殿代有神饌御供進、（當代第二度、）訖還御、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十一月庚辰、於豐樂院宴五位已上、賜祿有差、

〔類聚國史九神祇〕弘仁十年十一月壬辰、御豐樂殿宴五位已上、奏五節儛、賜祿有差、

天長五年十一月甲辰、御豐樂院、賜宴群臣、賜祿有差、

祭殿裝飾及調度

〔文德實錄四〕仁壽二年十一月丙辰、幸豐樂院、賜宴群臣、亦如舊儀、

〔文德實錄五〕仁壽三年十一月甲辰、幸豐樂院、賜宴群臣、如常儀、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十一月丙辰、是日天皇御紫宸殿、宴于百官、○中略宴訖賜祿有差、

〔類聚國史九神祇〕承和十二年十一月戊辰、天皇御紫宸殿、宴于百官、日暮賜祿有差、

〔文德實錄六〕齊衡元年十一月甲辰、帝御南殿、賜宴群臣、一如常儀、

〔文德實錄七〕齊衡二年十一月戊辰、帝御南殿、賜宴群臣、一如常、

〔文德實錄八〕齊衡三年十一月丙辰、帝御南殿、賜宴群臣、如常儀、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年十一月廿二日壬辰、天皇御前殿、賜宴群臣、如常、賜祿有差、

○按ズルニ、此ヨリ後、辰日節會ヲ紫宸殿ニテ行ハルヽコト恒例トナレリ、

〔政事要略二十六〕中卯日新嘗祭事

中院裝束（神嘉殿裝束未詳、但以東壁爲神殿、以西隔爲御座、）

神嘉殿西南有四間屋、自北壁下敷小忌親王座、（南面）一間南去敷納言座、（西面與親王絶席）第三四兩間敷辨少納言座、（東面北上）又同北第二間敷參議座、（東面與納言遙接、侍從下可著件座、）經第三四兩間敷侍從幷中務宮内等省輔座、（東面、與辨少納言對座、）東庇北第三四兩間壁下、敷外記史中務丞内舍人等座、（西面北上、幷當辨座後也、）南庇敷造酒司侍從廚家別當幷召使等座、（一列、東上北面、）但侍從廚家豫辨備韮上之物、神嘉殿東南有四間屋、南有四間屋、南方神祇官祇候、辨備供神物、中間大膳職計渡神物、北妻宮内采女司采女等祇候南門前、立臺、（其貌宛如中取、）（但若雨降、可立門中、）積神座、中和門外南腋立七丈幄二宇、爲忌座、（南北内妻列棟）北幄北妻三間敷親王公卿座、（北上對座、就中親王東面）同幄北第四五六七四箇間敷辨少納言座、（以幕隔）南幄敷外記史以下座、（北上對座、就中外記西面、）豫官廚家調備酒食、

〔江家次第十一 十一月〕新嘗祭神祇官儀

依無中和院行幸於神祇官行之

神祇官齋院北屋爲神殿、坤角有屋神祇官、幷侍從諸司各候此屋、辨備神饌、南門内有六間屋東西間敷廣筵、

東第一間壁下敷親王座西面、以席一枚張後壁座前立机二脚、親王入自北面東第一間可著座、近例著座、

不參猶設其座、若大臣參入者、可著參議座上歟、延喜十五、十二月、十九等例、此由見九記、承平五六、

第二間設上卿座、北面東上、與親王絶席、立机二脚、上卿入自南面東第二間著座、次敷參議座、南面東上、與上卿絶席、立机二脚、參議入自北面東第二間著座、若上卿以上不參者、參議二人著北面座行事、

第三四間敷辨納言中務輔侍從宮内輔等座、東上對座、立長机四脚、諸大夫自第四間出入、辨者自南著北面、近例或入自第三間、少納言自北著南面、

第四間南邊壁下敷外記史中務丞以下内舍人等座、北面東上、各立机一脚、上卿座後敷膝突、爲外記執申雜事座、諸大夫座西邊敷長席、以爲造酒司侍從厨家別當大舍人官掌召使等座、

西第一間以幕引隔、爲侍從厨家行事所、外記史以下雜人等、自南面西第二間出入、王卿未著座前、厨家依例辨備饌物、

〔儀式五〕新嘗會儀若有朔旦冬至、便行叙位、

前一日、所司裝飾豐樂院、構舞臺於庭前、自殿南階去十一丈七尺、高三尺、方六丈、設樂人幄於舞臺東南角、南去入許丈、東去二許丈、高

御座東第二間設皇太子座、西面、第三四間少南大齋參議以上座、南北面西上、南廂小齋參議以上、北面西上、自大齋參議以上差西進、有顯陽承歡兩堂五位以上座、觀德明義兩堂六位已下座、式部丞率史生省掌等立標、自顯陽堂北第四柱、西去十五丈、南折二丈、立親王標、次大臣標、次大納言標、次中納言標、三位參議、王四位參議、少退在此列、大臣四位參議標、次王四位標、次五位標、又自承歡堂北第四柱、東去十五丈、南折七丈五尺、王四位五位標、大臣四位標、次五位標、又當觀德堂第三柱、西去十五丈、立六位已下標、自明義堂東去及當柱亦准此、蓋以一丈三尺爲間、當日寅剋、掃部寮設式部幄以下省掌以上座於興禮門以西壇上、南面西上、輔以下就座、點檢五位以上、平旦掃部寮敷疊薦於舞臺上、内藏寮以兩面敷薦上、鐵爲鎮子、次中務省舞臺以北四丈置宣命版、南去一丈許置尋常版、

〔延喜式三十大藏〕新嘗會前一日、裝束豐樂院如常、

〔江家次第十一十一月〕新嘗會裝束

前一日、裝束司奉仕御裝束、南殿北廂立御障子、(件障子尋常可立、而近例除南殿有事日之外、放之置於南殿西御膳宿、件御膳宿鑰、內匠寮官人隨身參入開之、立之、藏人催之、)御帳懸帷、(掃部女孺供奉之、上東巽南坤西五面帷、垂乾北艮三方帷、藏人催之、)令主殿寮掃除南庭、仰左右衛門府、從長樂永安兩門令敷沙、(左衛門長樂門、右衛門永安門、並勅使仰左右近衛陣令開之、)撤去東西火炬屋、(東置月華門北掖、西置紫宸殿西掖、主殿寮役之、)次上南殿格子、掃部女孺供奉、

洒掃殿上、(主殿仕女供奉)

置殿東廂布障子二枚於北廂、(掃部寮官人率史生以下供奉、近例無件障子、仍無移置之儀、)身屋九間內四面壁代帷褰之、若天皇不御之時、從身屋東第三間西柱、南北行構簾臺、西六間身屋南同亦懸之、御簾內當御帳東、立亘大宋御屏風、件簾臺木工寮供奉、錦額御簾也、

北障子東戶以北、立御屏風一帖、(東西行南向、若皇太子不侍之時、閉戶不立御屏風、)

次裝飾御帳帷、(掃部女孺供奉見上)次撤尋常御倚子、鋪唐錦毯代、立平文御倚子、鋪唐錦褥、(近例依無唐錦毯代、敷二色綾、不可然歟、亦鋪繧繝端撤物時識也、)

平文敷、天德四年十一月廿日御記、

左右各立置物御机、(各垂總)其中央立風爐一脚、御帳東北去五許尺、隔北障子立大宋御屏風一帖、(西面)御帳西北角柱下北障子南去五許尺、西行二間立通障子二枚、

其西一間立大宋御屏風一帖、(南面)從其屏風西端折至身屋西、(第一間東柱下、南行立同御屏風三帖、東向、)御帳後鋪緣端小疊二枚、

通障子北鋪同端長疊一枚、其西立壺床子二脚、其西鋪緣端疊一枚、(內侍以下候座)近例又東向屏風西、敷兩面端一枚緣端一枚、爲舞姬蹔集會座、(可敷緣端也)御帳內御座南立朱御臺盤一脚、御帳南差西去立小臺(北懸御張立之)上敷兩面端半帖、其上立朱御臺盤一脚、近例件御臺盤上有兩面帊、四角置鐵形鎭子、

其南置緣草墪、(陪膳采女座)南廂西第二間、差南去東西行鋪簟四枚、(近例依無簟鋪筵、識也、亦有二枚、)

其上雙立朱御臺盤二脚、南臺盤居胡瓶一口、北臺盤置酒海御盞杓等、(並金銅)

近例件兩臺盤上有兩面帊、

四角置鋒形鎮子、

南臺盤西南角、立入足机、其上居唐瓶子三口、(盛三種御酒)

近例不見、仍件御酒等自御膳宿供進之、北臺盤西頭、置水盤幷黑漆炭取火爐等、(近例不見)

凡件南廂御酒具等、懸御簾時或立之、或不立之、或曰、雖懸御簾、御南殿着御膳時可立之云云、仍尋前例、雖不御南殿、猶有立時云云、慥可尋前例、

北御障子北、東西行雙鋪小筵二枚、其上立大宋御屛風二帖、(東向開戶)其內立赤漆小倚子、(爲御鞋物所)殿身疊東第三間西柱北面中央、北去(北去御倚子北足)五尺五寸、設皇太子座、東西行鋪紫綾毯代、立平文小倚子、(西面)

其上鋪唐褥茵、其前立朱臺盤、

御本書裏了、

康保元年十一月廿日御記曰、裝束使安國、令申太子幼稚、雖未始參節會之時所司不設座、舊例皇太子不參上之時、只立其倚子、不立臺盤、至于加元服之後、縱不參入、猶設其座、但重服不可參上、設座否可蒙處分、仰云、延喜十六年九月九日節、太子不參上、于時被定所司不知參否、可設座、主膳監可知太子參否、仍不可立臺盤、今太子依重服不可候宴、又今日齋內也、所司同可知其由、須不立其座、東第一二三幷三間北障子後設候膳所、(第一間西向立御厨子、第二三間采女所候、)

又皇太子未元服之時不設其座、雖元服後、有故障時又不立、

近例太子不參上、仍無此北廂裝束、

當御帳東第二中央、東西行設親王公卿座、鋪紺布縫綸毯代、(皇太子不候之時、第二間西柱西進二許尺鋪之、)立兀子獨床子簀子敷床子、

北親王參議座、南大臣大中納言三位參議散三位參議座、並西上對座、
近例以件紺布縁繧代敷臺盤下、不敷兀子下訛也、亦件公卿座指東南斜行立之、仍簀子敷床子（南迫中間南柱）、各有敷物等、（親王大臣料紫色兩面、件料必立第一臺盤南北、大中納言料黃色（以上兀子）三位參議散三位者、獨床子、四位參議者、簀子敷床子、並黃端帖、近例不見獨床子設也、）近例
親王大臣料（兩面）大中納言（紫）訛也、（大臣雖員數多、兩面兀子不立於第二臺盤前、又無親王時不可立北、歟）
其前立朱臺盤五脚、辨備饗饌、（近例立四尺四脚八尺一脚、西第一臺盤大臣親王料、）
第二三四納言料八尺參議料、其饌物者中墨物也、以七寸朱漆盤盛菓子、毎四尺臺盤六坏、八尺臺盤
十二坏、其菓子加久縄（カクナハ）一坏、餲餬、黏臍合一坏、大柑子（一坏）栗（一坏）干柿（一坏）椿餅（一坏）其南北以小土器居腹赤
切幷鹽箸等、南廂額間東第三間鋪繧代一枚、立兀子二脚、長床子一脚、（小忌親王納言參議座、北面西上、）其前立六尺
八尺臺盤各一脚、（六尺親王納言料、八尺參議料、）其膳物同上、殿東面階南砌上立兀子、（不鋪繧代、內辨從殿下行事座、）
南榮簀子敷下御階東西、各鋪座二行、東辨少納言外記史內記官外記史生座、（件座以東爲上）新造上侍臣座、
人所雜色以下座、
殿東軒廊安殿上酒臺、西第一間第一柱南砌上鋪繧代一枚、其上立案、（雲幡額）其上鋪褥、隨有大殿二口、
（西面）近例亦有一口、金銅鳳瓶也、其東立榻、
第二柱東立火爐、其頭立臺盤、南壇下置酒器、第三間北頭砌上置藥器、其北壇下立火爐、其東立案、其
東居水器、
宜陽殿西廂北行第四間砌上中央、鋪蘆蓆立兀子、（內辨大臣座也、）近例與柱平頭立云云、左近陣座南庭中央
東西行、曳斑幔二條、一條始從紫宸殿東面北階、南端東行覓庭中、一條其東端斑幔柱南去三許尺、小
西進立幔柱東行、覓宜陽殿西廂燕、
同殿西廂板敷南西二面張斑幔、
春興殿南廊西面、結筥貫張同幔、（大膳職辨備居所）

從校書殿東廂右近陣巽角䉼上北行張斑幔、
從射場殿西南角柱東行、到同殿東南柱北折、竟于小廊東第二間西柱下、（自射場殿西南角以東、至于小廊第二間西柱結舎貫、）
自月華門內南掖䉼上南行、張同幔一條、又從安福殿南廊南行東折、從棚屋東北角南折、至于永安門
西掖張同幔、
尋常版位南去三許丈構立舞臺、（不作音樂之時不立、）其上鋪薦加両面置鎭子、其四面樹梅柳、其東西北面懸亘
帽額、（不懸帽額、木工寮作舞臺、左右衞門進梅柳、）從殿南階西間柱小東進、經舞臺西迄于同坤角、鋪敷筵道、
近例不敷件筵道、往年舞姬於舞臺舞、仍有此筵道、近年用両儀、於殿上舞、仍不鋪之、
承明門內東西掖東西行、各立七尺幄二字、（南北相並、）木工寮運調度、大藏省立幄、當承明門東砌西進二許
尺、立東幄西柱、當西砌東進二許尺、立西幄東柱、設諸大夫座、床子幷黒漆臺盤各立二行、辨備饗饌、當
幄北東、西行鋪蘆蓆一枚、其上立臺、（有臺覆緋布、懸同帽額、）其上各立胡瓶二口、（北向、東幄當東第二間、西幄當西第二間、）東幄東北、西
幄西北、陳列酒饌器、（並北置酒器、次置饌器、）若両儀、東從春興殿北第二間中央南行、立床子臺盤各二行、西廂南
第三間、西向立胡瓶一口、安福殿東廂亦准此、（近例以胡瓶立砌設也、若立砌無公卿両儀路、）
當日早朝中務錄入自日華門、尋常版位北去一許丈置宣命版、両儀置宣陽殿西廂北行第二間中央
砌石上、近例置第三間、

四條記

式部丞錄率史生省掌等、入從永安門、立標自尋常版位東去一丈四尺南折一丈、立小忌親王已下參
議已上標、其標東去六尺南折二尺、立親王行立標、南去太政大臣標、南去大臣標、南去大納言標、南去
中納言三位參議標、非參議三位標、立此列、今案元日中納言以上七尺爲間、以下八尺爲間、南去四位
參議標、南去王四位五位標、南去立臣四位標、南去臣五位標、（六尺爲間、）版位西去一丈四尺南行四尺、神祇
官及小忌四位標、（此標相當四位參議標、）南去王四位五位標、南去臣四位標、南去臣五位標、（相去同、）

舞臺北立床子（大歌座料、五節昇殿之時、大歌設竹臺北及臺東頭立之、）

兩儀標

宜陽殿西廂、宜命版位東去二尺、立親王標、東去三尺五寸大臣標、東去三尺五寸大納言標、東去一尺五寸、更南去三尺中納言標、其南去四尺、更東去二尺三位參議標、其南去五尺散三位標、其南去三尺東折一尺四位參議標、承明門東西壇上東西第二間、立王四位五位標、臣四位標、第三間立臣五位標、並西以東爲上、東以西爲上、今案四條記第三間立標云云、

承明門東西內掖各鋪蘆簾、上各置草墪、（闈司座北面）移鑰鈴印御辛櫃、置宜陽殿西廂板敷、長樂門南面東掖第一間東柱下、設外辨親王公卿座、東西行立兀子獨床子簀子敷床子、（南面西上）其南壇下庭中立白木床子二脚、（少納言辨等座）東立二脚、（外記史座）其東立二脚、（外記官史生座）並七尺爲間、（西面北上）兩儀從公卿座差東去立少納言辨床子、其東差去立外記史外記官史生官掌召使等床子、並西面南上、

承明建禮兩門前差南去東西行、張斑幔各二條、長樂永安兩門前差北進、各張同幔各一條、宜陽殿東庭御輿宿小舍爲皇太子次、掃除舍內身屋南方、張承塵、（以帛爲之）四方曳斑幔、（東南西面、以廂柱爲限、）以北立幔柱、

近例依太子不參上、無件裝束、

建禮門內東西掖差東西去、各立七丈幄一宇、敷座、東國栖、西俘囚、

裝束畢左右近衞、閉長樂永安門、

祿床子四脚、預仰所司令候便所、未奏目錄之前、立舞臺乾艮角、乾角二脚、艮角二脚、

運積祿物、兩儀同門東西掖壇上立、南殿南庭當殿東第三間、去砌二許丈以南、立左近次將胡床、其上覆黃布豹文毯代、（北上西面）其東立府官人胡床、並無覆、當西第三間立右次將座、（准上可知）兩儀立平張、（近例不見、仍存之）

於日月華門北掖設也、

日月華門內橋東當北頭立左右次將仗、中將料紫幟叏、少將料緋幟叏、立之、（北上）

內裏式、（七日會）豐樂殿儀日、自殿南階南去十一丈七尺構舞臺、（舞臺高三尺、方六丈、南殿舞臺方四丈、）舞臺北四丈、中務置宣命版、其南去一許丈、置尋常版位云云、然則尋常版位去殿八丈七尺歟、南殿儀可尋之、

〔類聚雜要抄 三〕五節所裝束料雜事

先前日行向五節所、取御簾寸法、但用兩面所有自意可消息也、次間數幷四面體差圖ヲ可覽也、次差筵料弘筵又切筵（大和）十枚許、平簡奴木二三十許、小釘十餘連、三寸釘十餘連、鍇槌一柄、例糸卅筋許、苧糸五十筋許、疊針三許、折敷三枚、藁箒少々、拭布少々、高足二脚、足桶一口、雜役諸司官人人夫五六人、次鋪設幷御調度等渡之、燈三口、同料栗形三役、燈臺打敷、火桶火櫃等渡之、

當日早旦取打覆御清目事、次朝干飯、次饗膳事、次打出、次女房衛重用長櫃、姬君御料懸外居用之、凡自餘日同前也、

一出火桶（自右大臣殿今調進給）

口徑三尺二寸、（外定）高七寸、（板六橘也）磯洲濱形、所々透テ立雲母、殘所以泥淡（天）山水書、鉢ノ內ニ以銀打洲濱敷（天）、其上ニ銀鶴龜形兩三、所々（置）立之、箸一雙、各本ニ鶴形作付タリ、

〔雅亮裝束抄 一〕五せち所のこと

五せち所は、びんぎの所によるべし、うちまかせては、四けんもや日さしあるべきなり、そのうちにびんぎのもやひとつほを帳のまとしつらひて、四方にみすをかけて、そのうちにかべしろをひきまはしておくべし、もやぎはのみすもあけて、二けん三げんありとも、き丁をたてわたせ、この丁の三方には五尺にても四尺にても、からゑやまとゑなりともたてまはして、そのうちにうげん三帖をしく、はしまくらにしくべし、そのまへのひさしに、うげん二帖をしきて、そのうへにりうびんをしく、そのうへにしとねをしく、三尺のき丁をたつ、ひだりみぎびんぎによるべし、四

尺の屛風をたてゝ、ものゝぐおく事つねのごとし、ひさしのてうどのていなり、すゞりのはこ、けうそく、きやうだいなどはわるべからず、所もせばし、たとひありとも、にかいのしたなどにおくべし、二かいのうへの火とりは、ゆするつきにおきかへて、はしにおきたるもあしからず、よごとにのぼるものなれば、びんぎよきれうなり、ひさしにはまでとにき丁をたつべし、かうらいむらさき所にしたがひてしくべし、ざしむしろちんしをおく、ゑんにむしろをしく、さしむしろある所にゑんにむしろしかぬことは、だいきやうの外記史のざにはしかず、まゐりのつぎのあしたに、うちでをはこぶ、又かうらいを一帖、帳のまのゑんにしきて、そのうへにとう京のしとね一枚をしきたり、そのひだりにいだし火をけをおく、ふりうこゝろにあり、たゞしこの火をけ右なりとも、御所につきておくべしといふ人あり、その火をけのまへに、すべなうさうかいを、やないばこのふたにおきて、ゑりぐし、まきぐし、かんざしをぐして、五せち所ごとにおきまはるなり、ひめ君のれうなり、ひめ君ののぼるともには、火とり、にしきのへりのしとね、三尺のき丁とをぐしてのぼるを、殿上人おの〳〵これをもつ、よごとの事なり、〇中略ひさしのみすにこをつけて、ひめ君ののぼる時、びんぎの所をあくべし、とうろは帳の左右のまの、のきにつるべし、そばにもつるべきところあらば、いくつもつるべきなり、大だいり五せちどころ、ざうねいでん〇常寧殿のみなみのにしきたのにし、両所のわらはこそ、帳だいのこゝろみのよ、なかのつまどよりのぼることにてあれ、それもなほしもえんよりのぼせて、みなみのめだうのつまどよりのぼるつねのぎなり、

〔定家朝臣記〕康平三年十一月十七日、御前試如レ恒、殿令レ聞二内府一給云、出火桶、上﨟上卿所レ不レ居也、但可レ随二近例一者、仍不レ居之、

〔中右記〕永久二年十月十九日、向二民部卿亭一、申二合五節間事一、不レ可レ有二出火櫃一之由、所レ被レ敕也、

〔類聚雜要抄　三〕五節雜事　内大臣(藤原忠通)令ㇾ進ニ五節一給定文〇中略

一調度

唐匣一具　鏡筥一具　鏡臺一具　泔坏一具　二階一脚　脇息一脚　薫爐一具　打亂筥

行事知信朝臣

一理髮具

末額髮二流末七尺、但不ㇾ注ニ定文一、内々事也、　簪　釵子　彫櫛二枚　本結　日蔭鬘

行事同人

一裝束

屏風　几帳四尺八基、三尺四基、　簾　壁代　茵三枚　表筵一枚　地敷二枚　繧繝端疊六枚　高麗端疊廿枚　紫端疊卅枚　長筵卅枚　菅圓座十枚　火桶六口見用三口定　炭桶二口　炭取二口

燈臺六本加ニ打敷一　燈爐三口

行事前伊與守朝臣〇中略

一鋪具

手洗二口大小　貫簀打敷　楾二口　手巾筥一合加ニ手巾一

行事說雅朝臣

一膳所具

臺六本大三本、小三本、　盤四枚大二枚、小二枚、　油單　荷外居三荷　俎板

行事實房朝臣〇中略

一出車

金作檳榔毛一兩　檳榔毛五兩　網代二兩

行事宗國朝臣　盛經朝臣○中略

一舞師房裝束

疊五帖高麗端四帖、紫端一帖、　半疊一枚高麗端、舞姫料、　長筵一枚　簾四枚　屛風二帖　几帳一本在帷　燈

臺二本　椶一口　手洗一口　臺一本　盤一枚　繪書板火桶一口在著　手筥一合在納物、紙一帖、針差一、疊一

紙一帖、硯一面、墨一挺、筆四管、小刀一柄白鞘、油盞一口、粉盤一、櫛六枚、　私筥一合○中略

一行事所雜物等

臺二本　盤二枚　提五口銀三口、雜素二口、　高坏廿本　銚子二圍　雜乘大提一口　疊　長筵　爼

桶二口各五口　足桶四口　折敷　鍋五口大二口、小三口、　釜口　金輪四口　木鉢三口　叩戸五口

燈盞三口　包丁刀十柄　荷外居二懸　長櫃　炭　薪　續松　油　紙　白米　土器　鹽

梅　菓子　魚鳥　垂布　屛幔

一可儲本所物

筵道弘筵　同役人府者　彫櫛六百枚　差櫛上十二枚、下十二枚、　蒔櫛　釵子十五枚八枚女房料、四枚舞姫料、三枚下仕料、

料、　本結五筋一筋紫絲舞姫料、四筋村濃下仕料、

行事

一出立所

御簾

行事○中略

永久三年十月十九日

右永久三年內大臣殿令五節出給定文之定也、土御門東洞院右大臣家內裏時也、次宮內卿忠長阿

波任、令五節出給度、○中略　行事所雜物、儲本所物、出立所雜事等、以此定文被行之、

〔山槐記〕永暦元年十一月五日己卯、藏人左近將監來云、內藏寮御檜生一昨參上、其後令引五節檜云云、　十四日戊子、五節行事小舍人進檜、〈彫檜廿、裹紙、屋形紙、置柳筥、〉

〔愚昧記〕嘉應二年十一月十五日辛卯、午時許、頭左中將送消息云、童女御覽如法午剋也、可早參者、可早參之由答了、未剋許、〈中略〉○參內、〈前駈重光朝宗、所随色重保、〉入待賢門、經春華武德月華門等、入無名門、脩範朝臣示云、殿上事未終候也、此間頭左中將參入、於小板敷言談之間、左府中將來示、頭中將云、殿上事未了歟、所徘徊御後邊也、予又向彼所、左大將在此處、裝束司等奉仕明日節會御裝東、左府令息男中將仰官掌、令敷疊兩三枚於南殿南廂、各著之、左府云、是極權儀也、數剋佇立之間、依脚病無術所催行也、戲云、各不可養御日記云々、頗解頤者也、御裝束等物具之中有承足、左府見之云、彼何物哉、左大將云、是承足歟、左府云、以唐錦裹之如何、可用兩面也、大嘗會御調度、以錦裹之也、

〔玉蘂〕建暦二年三月廿二日宣旨〈左大臣、右大弁、〉

一可停止五節出火桶檜棚金銀錦繡風流事

右抑偏以金銀錦繡、恣爲檜棚裝飾、近年之間逐日過差、國家煩費莫不由斯、自今以後、專守制法、不可違犯、兼又於鍋者、雖非制限、尙隨費用之多少、宜存禁制之弛張、

〔明月記〕嘉祿元年十月十五日壬申、敎雅少將以使者尋、別當五節女房扇二枚可調送、由消息、何樣物哉、答云、扇近代檜扇、〈紺画ト云〉塗雲母、〈シメニカキノ、カラチヌル〉書繪、〈遠山野之體、野菊等五六分許人形、〉金銅鋲目、以村濃〈若青□、匂□〉絲貫之、末結垂物也、

〔百練抄〕〈十五、後嵯峨、〉寬元元年十月廿四日、今日五節儉約事、爲頭左中辨時高朝臣奉行、被仰下五節所云云、

一風流檜、不可交金銀銅飾珠玉之類事、

一薄樣以數重不可進裹事、薄如形可散、以常下品可爲上品也、枚數不可過七枚、

一童女扇、可被停止金銀珠玉風流事、
一出火桶、可停止金銀銅飾等風流事、
一男女房裝束、兩日之間不可改著事、
一殿上人非禁色之人猶不可用綾事、擣衣唐物之類非制限、
〔勘仲記〕建治二年十一月十二日壬寅、今日祗候御直廬所、五節所打出火桶茵已下如例、但大炊御門宰相中將五節所無出火桶、若彼家之例歟、主上〇後宇多入御御直廬、叡覽五節所、攝政殿幷大納言殿令候給、

料物用途

〔延喜式 二四時祭〕供新嘗料
紵一丈二尺、絹二丈二尺、絲四兩、調布三端一丈、貲布一丈二尺、細布三丈二尺、木綿三斤十兩、刋柄御刀子二枚、長刀子短刀子各十枚、筥十四合、笓筥二合、明櫃三合、御飯幷粥米各二斗、粟二斗、陶臼五口、平居瓫六口、都婆波酒垂各四口、𤭖八口、水垸八口、洗盤六口、筥坏廿口、多志良加四口、鉢八口、叩瓫四口、臼二口、土片垸二口、盞十口、小坏十口、高盤廿口、土手湯瓫二口、手洗二口、瓫四口、堝十口、火爐二口、陶坏八口、案十二脚、切机二脚、槌二枚、砧二枚、槲四俵、匏十八柄、小匏二柄、日蔭二荷、𤿎蘰楉二隻、油三升、內膳司供雜味物、
　右依前件、其御贖大殿忌火庭火等祭料、並准神今食、
〔延喜式 三十四木工〕卜簽四柄、鑑二口、
　右十一月新嘗會御卜料充神祇官、六月十二月神今食亦同、
牀三脚、方四尺、高九寸、度別一脚、御湯殿御座料、大牀二脚、各長一丈二尺、廣四尺、高三尺、一脚積神御帖料、一脚刻同帖料、並通用之、
　右十一月新嘗會六月十二月神今食料充掃部寮、
木偶人三百八十四枚、日別八枚、册御輿形六十四具、日別八具、插幣帛木三百八十四枚日別八枚、册

右十一月新嘗祭從一日迄八日御贖料、六月十二月神今食前八箇日料亦同、

〔延喜式大炊三十五〕新嘗祭料

臼一腰、杵三枚、箕一枚、中取案三脚、八脚机二前、明櫃二合、調布三端一丈六尺、(一端八尺、納御井中宮御米裹袋料、二端八尺、御井中宮女丁八人襁褌料、)

右祭料依前件、但袋襁褌尋常便用、迄于來六月神今食請替、

〔延喜式掃部三十八〕新嘗會貢葛酒殿料、苫八枚、(殿別四枚、)薦八枚、(殿別四枚、事訖給神祇官、其下形并押桙木工寮辨備之、)

右六月十二月神今食新嘗祭供御料

〔延喜式主殿三十六〕新嘗會供奉料(中宮准此、)

沐槽一隻、(加案、)覆施帷一條、(長五尺、廣三幅、)浴槽二隻、(加案、)覆暴布二條、(長五尺、廣二幅、)下敷調布帷二條、(各二端、)白綿一分、澁

由加一口、覆一條、(表暴布長四尺、廣二幅、裹纏長四尺、廣二幅、)由加十口、覆十條、(表暴布各長三尺、廣一幅、裹纏各長三尺、廣一幅中、)板蓋十一枚、圓槽

二隻、覆暴布二條、(各長四尺五寸、廣一幅、)槽案一脚、覆暴布一條、(長六尺二寸、廣二幅、)匏十柄、(受八升、已上、)絁篩六口、(直篩四口、各四尺、洎篩一口三尺、油篩一口一尺、)洗清布一條、(二尺四寸、)拭布一條、(七尺、)筥一合、篚筥一合、御巾紵布六尺、生絲二兩三分、(一兩三分、縫雜物料、一兩、縫衣裳料、)小豆三升、(洗豆料、)土鋺形一口、土壁盤二口、陶鉢三口、叩瓫六口、(盛大料、)明櫃二合、麻笥三口、燈樓六

具、(各加案、)紗四丈八尺、燈臺二基、案三脚、(置御巾料案一脚、居樋板案一脚、櫃案一脚、)油瓶二口、燈盞十四口、(六口忌火料、八口解齋夜料、並別加)盤、菲三兩、今木人女四人衣裳料、調布五端、(各一端一丈五寸、)絲一兩、油三升四合、(一升八合、小齋侍從候所三度料、一升六合解齋夜料、)

青摺袍廿二領、(細布二領、調布廿領、雖大嘗會加細布二領、)請縫殿寮、

右新嘗會料依前件、其二度神今食者、並用件物、更不請料、事訖之後充神祇官、

〔延喜式造酒四十〕新嘗會直相日雜器

瓮四口、(盛參議已上白黑貴酒并醴酒料、)炭一斛、(五位已上續酒料、受直買用、)酒坏五合、(御盛、)窪坏九口、(加盤、)瓮四口、匏四柄、(已上二位女一人、三位女四人料、)窪坏百十九口、(加盤、)瓮九口、匏廿五柄、(已上有位女王廿五人、同命婦五十五人料、)

〔延喜式縫殿十四〕新嘗會御服

帛袍二領、（別一匹一丈五尺）綿六屯、（別三屯）襖子二領、（別一匹八尺五寸）綿六屯、（別三屯）汗衫二領、（別三丈七尺五寸）袴二腰、中袴二腰、綿六屯、褌二腰、被二條、綿卅屯、敷被一條、綿廿屯、褥一條、綿十屯、帛帷二條、帛坂枕一枚、（一折四尺）暴布軾一枚、唾巾一條、帛襪二兩、綿一屯、帶二條、（別五尺五寸）練絲二兩三分、生絲一分三銖、櫛二枚、履一兩、牀帕帛二條、納服韓櫃二合、敷望陁布二條、暴布綱二條、黑葛筥十四合、紙十張、木綿二分、祓麻一兩、

右御服依前件、其丈尺各同上條、十二月神今食通用此服、其縫備所鋪設就所司請、

〔延喜式縫殿十四〕六月神今食中宮料（十一月新嘗會准此、以數被代褥、）

被二條、褥一條、軾一枚、調布二端、白揚筥四合、紙十枚、練絲一兩、櫛二枚、履一兩、白木韓櫃一合、

〔延喜式中務十二〕新嘗會

命婦已下今良已上裝束料、絹三百卅八匹、綿六百七十六屯、調布六百卅一端、緑布廿五端、殿司燈守四人掃司女孺十三人裝束料、緑帛八匹三丈、（人別三丈）帛八匹三丈、（人別三丈）綿卅四屯、（人別二屯）火炬二人、黃帛一匹、（人別三丈）帛一匹、（人別三丈）綿四屯、（人別二屯）

東豎子四人裝束料、人別緋絁四丈、帛二匹、綿四屯、（元日亦准此）但五月五日帛一匹、貲布四丈、紅花小二斤、並依內侍司移請充、

皇后宮女孺九十人裝束料、絁九十匹、綿一百八十屯、調布一百八十端、今良十五人裝束料、絁十五匹、（人別一匹）綿卅屯、（人別二屯）緑布七端二丈、

〔延喜式中務十二〕凡新嘗祭小齋諸司靑摺布衫者、親王一領、太政官十一領、中務省三領、侍從三領、內舍人四領、內記一領、監物一領、主鈴一領、典鎰一領、中宮十五領、大舍人十二領、內藏四領、縫殿四領、宮內三領、木工五領、大炊二領、主殿廿二領、典藥四領、掃部七領、內膳八領、造酒二領、主水八領、（二領中宮）左右近衛府各卅七領、（各十二領中宮陣）左右近衛府各十領、（各四領中宮陣）藏人八領、御膳前采女氏二領、內豎八領、女孺已上

一百卌領縫領中宮女孺

〔延喜式縫殿十四〕新嘗祭小齋諸司青摺布衫三百十二領、細布一百卅領、佐渡布一百八十二領、並別二丈一尺、緋紕料四丈、貲布六端一丈二尺、別長二尺二寸、廣六寸、山藍五十四圍半、模飯料米二斗四升八勺、生絲四絇、紅花大十五斤五兩、薪六荷、藁六圍、酢六升四合、調布一丈四尺、帛被廿五條、別疋一綿三百七十五屯、別十五屯、調布被廿五條、別五丈一尺庸綿三百七十五屯、別十屯、納被暴布袋五十口、別一丈二尺練絲四兩四銖、生絲五兩三分二銖、布被別四銖、倍別二銖、中宮小齋人青摺細布衫卌九領、亮進屬各一人、左右近衞官人四人、左右兵衞官人二人、女孺燭人、佐渡布衫卌領、史生二人、舍人十人、左右近衞各十人、左右兵衞各三人、主水司水部二人、緋紕料貲布一端三丈三尺七寸、山藍十五圍、模飯料米七升四勺、紅花大七斤六兩二銖、酢一升九合、薪三荷、藁三圍、帛被十條、綿一百五十屯、布被十條、庸綿一百五十屯、布袋廿口、練絲一兩二分四銖、生絲十三兩五分五銖、

右依前件、但帛布被通用十二月神今食、待內侍處分、三年一度須給、

〔延喜式大舍人十三〕凡供奉諸祭及齋會節會等舍人者、○中略其新嘗祭幷踐祚大嘗會青摺衫、請縫殿寮、班給小忌人等、衫數隨人

〔延喜式左右近衞四十五〕凡供奉十一月新嘗會小齋官人幷近衞青摺布衫卅五領、細布五領、佐渡布卅領、但有中宮齋之時、加諸十二領、並請縫殿寮、

〔延喜式內藏十五〕新嘗會節大歌人等裝束料

淺紫帛二匹二丈八尺、同色綾、深綠帛六匹四丈五尺、深縹帛六匹四丈五尺、支子六斗三升、緋紬九匹、黃帛九匹、藍色帛廿五匹五丈四尺、眞料絲一絇、學鞋料紫絲一絇、阿志須鞋料、已上寮物、絹八十四匹、綿二百十屯、紅花大一斤五兩、酢四升二合、薪六十斤、藁一圍、已上官物紅紙四張、承學鞋料、受藏人所、

右彼所錄色目、中宮幷內侍、直受所司充之、

〔延喜式造酒四十〕諸節裝束

十一月新嘗會暴布褌二條(八尺、酒部別二人料、)

〔江家次第十一十一月〕新嘗祭

當日、○中略行事藏人、令ㇾ須ㇾ小忌於殿上侍臣、官行事所須ㇾ王卿辨少納言以下料、(以上新嘗會、相具日蔭鬘、)

〔延喜式三十九內膳〕新嘗祭供御料

鹽二升、東鰒六斤十兩二分四銖、堅魚五斤、鮨鰒煮鹽年魚醬鮒各二升、甘鹽鯛四隻、海松海藻各六斤十兩二分四銖、干棗子二升、干栗子二升、搗栗子四升、生栗子一斗、椎子菱子各四升、橘子四蔭、瓮四口、醬酒各五升、

右夜料

〔延喜式三十一宮內〕凡諸節賜ㇾ群官饗者、○中略十一月新嘗會等五節、親王已下五位已上及內命婦大歌立歌人國栖笛工、其食法見ㇾ大膳大炊等式、

〔延喜式三十二大膳〕新嘗祭

輿籠二脚、置簀二枚、(並供神料)

小齋給食總三百卌四人、(五位已上卅人、六位已下二百五十五人、命婦十人、女孺采女卌四人、御巫五人、)五位已上一人、醬酢鹽各一合、東鰒七兩、堅魚一兩、烏賊十二兩、熬海鼠腊各五兩、鮨八兩、海藻十二兩、漬蒜房蒜英各二合、漬菜一合、韲搗二合、六位已下一人、醬五勺、鹽五勺、東鰒七兩、熬海鼠腊各五兩、海藻四兩、鮨六兩、韲搗五勺、漬菜一合、

右依ㇾ前件、其男辰日旦、女卯日夕辰日旦給之、

同小齋解齋給食總二百廿七人、(五位已上卌人、六位已下百八十七人、)五位已上一人、醬五勺、鹽二合二勺、東鰒二兩三分、隱岐鰒二兩、烏賊十二兩、熬海鼠二兩、雜魚楚割二兩二分、紫菜海松各三分、海藻十一兩、漬蒜房蒜英各一合、韲搗五勺、漬菜二合、六位已下一人、醬五勺、鹽一合二勺、大鮨三兩三分、東鰒二兩三分、海藻十一兩、

右依前件、辰日夕於省家給之、

同會皇后宮小齋人卌二人、（命婦并女孺卅人、監典丁已上十六人、外記已下主水官人已上六人、）五位一人、醬五勺、鹽一合、東鰒七兩、烏賊十二兩、熬海鼠五兩、腊五兩、海藻四兩、漬菜蒜房蒜花韮搗各二合、六位已下一人、醬鹽各五勺、東鮑六兩、熬海鼠四兩、鮨六兩、鮭三兩二分、海藻四兩、

同宮神態直相給食卌七人、（后宮亮一人、進已下諸舍府舍人已上卅六人、）五位一人、醬五勺、鹽一合二勺、東鮑二兩二分、熬海鼠四兩、烏賊一斤八兩、隱岐鮑四兩、雜魚楚割五兩、海藻十一兩、六位已下一人、醬五勺、鹽一合二勺、東鮑二兩三分、鯖三兩二分、海藻十一兩、

宴會雜給

親王以下三位以上幷四位參議

人別餠料粳米糯米各八合、糯糒三合、糖二合六勺、小麥四合、大豆二合、小豆二合、胡麻子二合、油一合、壺酒酢各四勺、醬二合、鹽四合、豉一勺、東鰒二兩、隱岐鰒二兩一分、堅魚一兩二分、烏賊一兩一分、熬海鼠縄貫鰒各二兩二分、押年魚四兩、與理刀魚五兩、鮭二分隻之一、雜魚鱐楚割各五兩一分、雜腊鮨各二斤、堅魚煎二勺、鮮物、（直充）紫菜二分、海藻二兩、生栗子一斤、搗栗子椎子各四合、橘子十顆、

四位五位幷命婦

人別餠料粳米糯米各四合、糯糒一合、糖一合五勺、小麥二合、大豆小豆各一合、胡麻子一合、油一合、壺酒酢各四勺、醬一合、鹽二合、豉一勺、東鰒隱岐鰒堅魚烏賊熬海鼠各一兩、縄貫鰒一兩、押年魚二兩、與理刀魚二兩二分、雜魚鱐楚割各三兩一分、雜魚鮨各四兩、紫菜一分、海藻二兩、鮭六分隻之一腊一斤、生栗子五合、搗栗子椎子各二合、橘子五顆、

大歌立歌

人別鹽二勺、東鰒一兩、大鯖一隻、雜腊四兩、海藻二兩、（正月七日諸司主典已上食法准此、）

國栖笛工

人別鹽二合、雜鮨四兩、鰒六分斐之一、海藻二兩、

明櫃八合、叩瓫五口、麻笥盤三口、由加洗盤各四口、陶高盤大盤各十口、(盛小壺三位已上菓子料)絹篩六口、(別四尺)折櫃五十合、(命婦料、但廿合敷布、別三尺、)食籠百八十四合、筋竹二百卌株、(已上雜物通用)料理所燈油四升、

右新嘗會宴食料依前件、其雜器、親王已下三位已上朱塗、四位已下五位已上烏漆幷土器、

〔延喜式三十五大炊〕宴會雜給

親王三位以上四位參議別米一升二合、(命婦三位以上同之、自餘諸節亦同、)四位五位幷內命婦大歌別八合、笛工國栖別二升、其飯器參議已上並朱漆椀、五位以上葉椀、命婦三位以上蘭笥、(加筥)五位以上命婦並陶椀、(加盤)大歌立歌國栖笛工並葉椀、(五月五日菁柏、七月廿五日菁葉、餘節干柏、)

〔延喜式三十九內膳〕新嘗祭供御料

米一斗、糯米二斗、粟子糯二升、小麥四升、胡麻子二升八合、荏子三升、鹽二升、東鰒六斤十兩二分四銖、堅魚五斤、海松六斤十兩二分四銖、海藻十兩四分八銖、鮨鰒煮鹽年魚醬鮒各二升、干羊蹄一籠、干棗干栗子各二升、搗栗子四升、生栗子一斗、干柿子二連、椎子菱子各四升、橘子四蔭、桙橘子十枝、明櫃十合、陶大盤十九口、麻笥盤十二口、鉢廿六口、大坏七口、筥坏六口、酢坏十口、洗盤十二口、爐瓮臼各八口、土熬堝卅口、大洗盤小洗盤各四口、大盤八口、火蓋十二口、瓮十口、松明八束、炭四石、薪六百斤、供奉官人二人、膳部六人、各給衫襷、

右豐樂料

鹽二升、東鰒六斤十兩二分四銖、堅魚五斤、海松海藻各六斤十兩二分四銖、鮨鰒醬鮒煮鹽年魚各二升、干羊蹄一籠、搗栗子四升、生栗子一斗、椎子四升、菱子二升、橘子四蔭、明櫃十合、陶大盤十九口、麻笥盤十二口、鉢廿六口、大坏七口、筥坏六口、酢坏十口、洗盤十二口、臼八口、土熬堝卅口、大洗盤小洗盤各

四口、大盤八口、火蓋十二口、瓮十口、松明八束、炭四石、薪六十斤、

右同中宮豐樂料

〔延喜式三十九内膳〕新嘗祭供御料

米二斗、糯米二斗、糯粟子等糯各二升、糯稻十束、小麥四升、大豆二升二合、小豆一升六合、胡麻子二升八合、荏子三升、清酒濁酒各一斗、酢醬各五升、鹽二升、東鰒一斤十兩二分四銖、薄鰒十三斤五兩一分二銖、隱岐鰒二斤五兩一分二銖、煮堅魚螺各十三兩一分二銖、烏賊十兩二分四銖、腊五升、紫菜十兩二分四銖、海松海藻各六斤十兩二分四銖、干薑三兩、干羊蹄一籠、干棗二升、搗栗子六升、干栗子二升、生栗子二斗二升八合、干柿子二連、椎子四升、菱子蓮子各二升、橘子廿四蔭、柑橘子十枝、明櫃十合、陶大盤十九口、麻笥盤十二口、鉢廿六口、大坏七口、筥坏六口、酢坏十口、洗盤十二口、爐瓮臼各八口、土熬堝卅口、大洗盤小洗盤各四口、大盤八口、火蓋十二口、瓮十口、堝五十口、(大十二口、小卅八口、)柏卅二俵、(一度儲請、盡用七節、)

右解齋料、但雜器年中七節通用、(大嘗准此、)

〔延喜式四十主水〕同祭(○神今食)解齋御粥料(新嘗會亦同)

鮑二斤、堅魚八兩、和布一斤、鹽五合、堝二口、

右自内膳司受之供奉、但米用旦供内、

〔左經記〕長元七年十一月十七日癸卯、大夫史義賢朝臣、來門外令申云、太宰府今年年貢解文等、持到左大辨御許、而被仰云、依爲輕服、今日不出仕、可持到愚許者、但被仰云、昨今御物忌歟、然者明日被申有何事乎、是恒事也者、取入件解文等、早旦仰可申殿之由、返却了、太宰府進上當年新嘗會料調絹千匹、綿百屯事、(○中略)但物實未來云々、　十八日甲辰、午刻參殿、申太宰解文等、仰云、自此令奏之由、内々示頭辨可付者、未刻許御共參内、於陣腋附太宰解文於頭左中辨、頭之辨云、奏解文奉下、殿仰云、令檢納者、但綿停代革、以見綿可進之由前年給宣旨了、任宣旨僮進見綿乎可令問者、即問義賢朝臣、申云、

物實未レ來、且進二解文一也、已注二見物一、不レ注二代物一、仍不レ問二其案内於納言處一、有二代物一可レ申二事由一也者、卽以二此由一觸二頭丼一了、

〔山槐記〕永暦元年十一月十五日己丑、早旦自二田原供御所一持來生栗三十籠、上十、中廿、以二供御人一彼沙汰人忠節所レ進也、有二解文一、不レ給二返抄一只留了、五節之時爲二恒例一、持來兩貫首之許云々、

〔康富記〕文安四年十一月十一日己亥、十五日新嘗祭、外記卜合權少外記康織也云々、御訪百五十匹、自二員弘許一今日到來了、

寶德元年十一月十二日丁巳、新嘗祭御訪百五十匹、自二町口判官員弘許一到來、遣レ人請取了、史幷二外記一之故也、○中略

請取申御訪事

合壹貫五百文者

右新嘗祭參役外記御訪、所二請取申一狀如レ件、

寶德元年十一月十二日　少外記康顯判

三年十一月十一日丙午、新嘗祭卜合、三藺外記康純也、御訪百五十匹、自二堀川判官許一請取也、

〔續百一錄〕寛保三年十二月廿八日、新嘗會下行、銀子五拾七匁壹分貳厘、七斗三升九合代、殘リ深尾氏かり也、　四年正月七日、深尾良豐入來、新嘗會御下行代殘り、銀拾匁九厘、壹石七斗三升九合、二ッ割八斗六升九合五勺、此代六拾七匁貳分壹厘、石ニ付七拾七匁三分所へ、五拾七匁壹分貳厘、舊冬御渡シ申候、殘リ拾匁九厘、

延享元年十一月廿三日、出納家へ下行之ましの儀、書付ニ而願上候、出納家へ利房參候、書付は同役持參候、

口上之覺

新嘗會御再興以後、年々參役被仰付、尤時々御下行頂戴被仰付、難有奉存候、依之此度恐多御願ニハ御座候得共、都而兩人儀ハ、御下行一列之輩一人ヘ被下候御下行、兩家ヘ頂戴仕來候付、先年御願申上候得共、未御沙汰にも不被爲及候趣承知仕候、依之此度乍恐卯日兩人ヘ被下候御下行壹石二斗ニ而御座候、是を一人ヘ八斗ツヽ、合壹石六斗頂戴仕候樣ニ奉願上候、右之通被爲分聞召、宜御沙汰被下候ハヾ難有可奉存候以上、

十一月

出納殿

十二月九日、同役被參候、左書付昨日參候旨、

口演

申達シ候義有之候條、明日巳刻過、同伴御入來可有之候以上、

臘月八日　出納

深尾縫殿屬殿

山本内藏屬殿

出納家ヘ同役同道ニテ參ル

新嘗會御下行之儀御願申上候處ニ、御下行帳相シマリ申候ニ付、相定リ申候事ゆゑ御タシ被下候儀ハ成不申候間、左樣ニ相心得可申候也、ゑかしながら御下行ニ殘米も有之候間、兩局出納ニあひはからひ遣可申候、尤殘米有之候間、來年トテモ又々如此出納ヘ相こゝろ付申候樣ニ被仰付候間、毎年御下行相願可申候事、

右之御禮ニ、傳奏久我大納言樣、葉室前大納言樣、新嘗會御奉行烏丸頭辨樣ヘ御禮ニ參申候、同役同道にて參る、

職員

新嘗會御下行壹石二斗、兩人壹人分六斗、豐明六斗兩人、壹人分三斗、右之内ニ今年より新嘗八斗、壹人分、豐明節會三斗壹人分、合壹石壹斗也、

〔令義解 二神祇〕凡大嘗者毎世一年、國司行事、以外毎年所司行事、(謂所司者、在京諸司、預ニ祭事一者也、)

〔延喜式 三十宮内〕供奉新嘗小齋

命婦已下宮人已上卌四人、御巫五人、釆女十人、

已上給食二度

直相五位已上廿人、六位已下二百五十五人、兆人樂工上卌人、下百八十七人、

已上給食一度

中宮職、亮一人、進一人、屬一人、史生二人、舍人十人、左右近衛府、將監各一人、府生各一人、近衛各十人、

左右兵衛府、尉各一人、兵衛各三人、

已上給直相食

同宮兆人卌二人(女五位三人、女孺已上十七人、駕輿丁各八人、外記一人、史生一人、史一人、史生一人、主水司二人、)

〔延喜式 十一太政官〕凡鎭魂新嘗等諸祭之日、辨及史等向祭所加檢校、○中略新嘗者、中卯祭之、齋日申官如常、致齋之日、諸司各宿本司、仍錄名申官、至夜左右史生等分頭巡檢、若有不宿、依法勘當、(臨時行幸經宿者亦准此、)

辰日賜宴於五位已上、大臣行事如常、(事見儀式、)

〔延喜式 四十一彈正〕凡十一月中卯日、應宿官人歷名、上左辨官、

〔延喜式 四十三春宮〕凡十一月中卯日、大宿官人歷名申辨官、

〔延喜式 十三中宮〕凡新嘗祭日、小齋官人率史生舍人等向宮内省、卜食如神今食儀、訖著青摺衣、昏時入候閤内、大齋人等自内裏退出、小齋官人俱入、辰日暮向宮内省、解齋和舞、(人數次第並同鎭魂、)

〔江家次第 十一十一月〕新嘗會(中儀)

前一日令卜殿上侍臣合不差小舍人遣於神祇官〈出納書夾名〉藏人頭御厨子所別當並可供奉御湯殿上人不入卜串〈又不卜〉近代藏人或中務省就神祇官令卜小忌侍從以上云云當日輔若丞傳內侍奏云云

當日早旦令卜供奉內侍女藏人等〈藏人書女藏人夾名云云至內侍不卜由見四條記以女官送夾名於諸司六位以下今日同卜云云〉内膳司以兆人簡付內侍令奏覽畢返給〈内侍不候者或付藏人〇中略〉

節會次第

以小忌人爲藏人所勤使例

承平五年〈參議內舒〉　〈九條殿右大臣〉

大將不候參議中將藤〈同上〇中略〉

兼小忌參議〈同上〇承平六年中略〉

大忌少納言召公卿〈天曆五年〉

小忌參議一人參新嘗會例

延喜十一年十一月廿二日　參議悦〈〇據公卿補任源悦延喜十九年任參議恐有誤〉

長保元年十一月　參議懷平　天仁二年十一月　參議忠敎

中納言一人例

寛弘四年十一月　中納言俊賢

〔年中行事〈加茂氏人保管所傳〉〕十一月中丑日卜小忌納言參議少納言事

中寅日卜殿上侍臣事

藏人仰少納言殿上侍臣交名送神祇官卜合不但藏人頭可奉仕理髮之人可奉仕御湯殿之人御厨子所別當不卜之

卯日早旦令卜女房事〈無行幸時不卜之〉

〔夕拜備急至要抄上十一月〕新嘗祭

上卿　宰相　辨　少納言（已上卜合、若有障者、催他人、）　內侍　官外記

〔朝野群載六神祇官〕神祇官

請、特蒙天恩、因准先例、依年勞恪勤次第、轉任官人等狀（○中略）

一請被以龜卜長上正六位上卜部宿禰兼繼拜任少史致政申補替事

右得兼繼款狀偁、（○中略）以前轉任之旨甄錄如件、抑月次新嘗會幷臨時神事等、官人不足、殆可闕怠、

望請天恩依年勞次第被轉任者、將竭奉公之節、仍勒在狀、謹請處分、

長治二年四月五日　從五位下行權少副卜部宿禰（○下略）

〔西宮記六月〕神今食

弘仁七年六月廿二日宣旨云、左大辨秋篠朝臣宣、右大臣宣、頃年之間應供奉新嘗會神今食、小忌參議卜定一人、僅備神事、其人有故、交致闕怠、自今以後、卜定數人、備于所闕、少外記坂上忌寸今繼奉、

同十年十一月廿日宣旨云、右大辨良岑朝臣侍殿上宣、承前供奉新嘗會神今食等、小忌參議已上只一人也、自今以後、定中納言已上一人參議一人幷兩人、若中納言已上未食卜者、定參議二人、少外記高岳宿禰潔門奉、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十一月廿三日丁卯、新嘗祭、所司供祭如常、公卿以下諸衛府舍人以上不卜、但供奉神事諸司七十二人卜食、著青摺衫、神祇官三十二人、縫殿寮四人、宮內省二人、主殿寮五人、大炊寮二人、掃部寮七人、大膳職一人、內膳司八人、造酒司二人、采女司二人、主水司六人、內侍司一人、准據承和七九兩年諒闇之例也、（○又見政事要略）

〔日本紀略三村上〕天曆二年十一月廿二日丁卯、新嘗祭、天皇幸中院、今日小忌卿相之外、諸卿或觸穢、或治病、或物忌、奉暇文不參、中納言師尹、參議保平朝臣應召參入、　十二月一日乙亥、官奏、此日去月廿

二日新嘗祭不參諸卿被䝉勅問、十三日丁亥、此日仰掃部寮大膳職召過狀、是去月新嘗祭日掃部寮筵道遲供、大膳職忌火遲出故也、

〔北山抄 十一月〕辰日節會事

天暦三年十一月十七日〇丙辰小忌參議庶明爲宣命使、參議保平爲大歌別當代、依无納言也云云、

〔政事要略 二十六〕十一月中卯日新嘗祭事

延長六年十一月廿一日、新嘗祭、余當小忌、參入著左近陣座、大忌公卿一二先在、少將伊扶進請云、府將監等皆有障不參、行幸契陣將用誰人、公卿議云、度用右近將監是便也、因令召右陣官人、而右陣小忌將監有一人、即令召右大忌將監用意候、即令小忌納言奏、其小忌入條中納言、令藏人頭時望朝臣奏之、勅旨雖大忌官人候不可奉仕神事、須以左府小忌將曹令奉仕、即將曹尾張遠岑仕小忌座、三獻後、左少辨元方請中納言召請諸司、左衞門督仰於宰相座北間恭唯一番而已、

天暦三年十一月十七日、〇村上又臨軒、施簾南殿、中納言在衡卿行內辨事、而大臣〇藤原實頼、藤原師輔、二大納言〇源清蔭、藤原顯忠、皆重服、民部卿元方不參、左衞門督高明卿稱病早退故也、

〔年中行事秘抄 十一月〕新嘗節會小忌不候例

小野記云、天元五年十一月十六日〇甲辰豐明節會也、小忌宰相少納言不參、

〔左經記〕寬仁元年十一月廿一日乙卯、入夜有仰、參神祇官行新嘗祭事、右中辨當御卜、而辨自今朝有所勞云云、仍忽被召仰也、上新中納言宰相不參、當卜伊勢幣左忽中障、仍被催右大辨、同中障不參、供夕膳、御膳了上下分散、

〔中右記〕天永三年十一月十四日丁卯、今夕新嘗祭、上卿宰相中將家政、右中辨爲隆朝臣著行云云、少納言三人故障、定通經服日數中、宗忠觸穢、實業忌日、先被尋例之處、延長天喜之比、神今食无少納言辨兼行也、於新嘗祭日、已无所見之由外記所勘申也、從兼日被問人々、依彼神今食例兼行云云、是神今食新嘗祭同儀之故也、　十五日戊辰節會、內御物忌也、仍不出御、又私物忌也、仍不參仕、後聞秉燭之後事始、內辨內

大臣、小忌大宮權大夫忠教卿、〇中略少納言定通著大忌、夜前不參新嘗會之故、先先著大忌勤此役云云、或人談云、大歌別當不參、代左兵衛督能俊卿、宣命使、御酒勅使、宰相中將實隆兼勤大歌別當事、左宰相中將家政雖小忌勤之、大藏卿向五節所之間、他宰相不候座之故也、祿所左大辨云云、

元永元年十一月廿日戊辰、臨晚景參內、殿下御宿所藤大納言被參、入夜參集仗座、〇中略今夜公卿纔九人也、年來未有如此事、公卿人數廿人也、而節會之日九人參內希事歟、

〔長秋記〕大治二年十一月十四日、今日人々云、新嘗祭上卿中納言以故障、大納言御所勞、參議一人行例近在、民部卿參議時也、件人語云、著南面座、無上卿時、參議可行由被仰時、更經殿東著北面座、行次第事、

〔中右記〕大治二年十一月十六日壬寅、巳時許、頭中將送書云、

今夕新嘗祭、上卿卜合人治部卿〇源能俊實病惱也、爲乙卜合、所勞由雖聞食相扶可參仕、不然者神事欲闕、必可參勤者、依院御氣色、上啓如件、

予〇權大納言藤原宗忠、時年六十六、申返事云、

七十衰老、風病更發、極寒之比終夜之役、非可堪忍、雖然重仰候、相扶可參勤、若有不堪者、爲曉膳有其恐歟、早以此旨可令奏聞給之狀如件、

近代中納言六人、中五人輕服日數之中、殘一人顯隆卿不堪行步、大納言五人之中、予乙卜合、治部卿丙合見病惱、民部卿丙合無沙汰歟、爲最下﨟之上、年非老者、何不參勤哉、　十八日、節會、戌剋御出殿下有障不參給也、內辨內大臣、小忌宰相師時、予不參、仍師時召少納言忠宗、相公執空盞拜、外辨民部卿忠教、白黑酒右衛門督實行大歌別當代左兵衛督實能左宰相中將宗輔、左京大夫經忠散三位已上七人、近代殊不見、　四年十一月廿三日、新嘗祭、〇中略近代公卿人數少之上、或所勞、或服暇、纔六七人參仕、未見此事、太奇怪歟、內侍召內辨、謝座著座歟、

〔長秋記〕大治四年十一月廿四日戊辰、後聞、別當實行卿夜前勤新嘗祭參仕、明朝奏請上皇云、今日可參節會、而於小忌左兵衛督可著由可被召仰、前々雖參夜祭節會以他人改著小忌是常例也者、上皇被仰左武衛令奏云、如仰可著、但上卿宰相有故障不參常例也、乍參以他人爲代例不聞候、乍知食此旨、尙著小忌可參由御氣色候歟、無左右可參仕者、仰云、無先例何著小忌哉云々、依逐別當著小忌參仕、先之參議長實卿謝座了、堂上三獻後、別當著小忌參、以內豎與內辨、未左右進著小忌座云々、條々希代也、仍記之、　五年十一月十七日丙辰、臨曉參節會、〇中略 其次被奏、大歌別當皇后宮大夫藤原朝臣不參、代官誰人可任哉、〇中略 仰云、大歌別當代皇后宮權大夫源朝臣可勤者、〇中略 次別當代事被示下宣、宰相中將忠宗卿不居陣、依著小忌歟、小忌不居陣事近代謬說也、

〔水左記〕承曆五年十一月廿二日甲辰、酉刻許、著束帶與新中納言參內、向陣、〇中略 召宰相中將公實朝臣見參、此間右大將春宮大夫云、小忌人向祿所、近代不見之事也、可被用他人歟、予〇源俊房 答云、前々小忌人所役常事也、何不著祿所哉、博陸〇藤原師實 自簾中被示云、小忌人所役有前例、何難之有哉、仍著祿所了、

〔台記〕康治三年〇天養元年 十一月廿一日戊辰、光房來云、今上〇近衛 御時、節會未出御、依幼少也、今度初可出御、〇御歳六 左大臣〇源有仁 辭疾在仁和寺、必可參者、對曰、夜間所慣待減、但鼻塞聲枯、內辨可招喚、且又先例參入之人、猶依咳病免內辨退出、光房復來傳法皇〇鳥羽 勅曰、始出御、下臈奉仕內辨不隱便、猶可參、微音何事之有哉、對曰、可參者、戌刻參內奉仕內辨、舍人侍座微言、衆人定解頤乎、
久安三年十一月廿日庚辰、今日新嘗會、戌刻參內、〇中略 今日余一上後初行內辨、失禮四、就中不敷軾召外記、謝座之時先北行大失也、勘貞信公以後臣之先祖居一上之任者三人、貞信公、〇藤原忠平 法成寺入道前大相國、〇藤原道長 京極前大相國〇藤原師實 等也、皆德充海內、世推其仁、未有如臣不肖者居此任焉、是故上以逆天心、下以乖人望、天人不與、故有此失、耻而有餘、歎而無益、嗚呼哀哉、

參入公卿(節會)

攝政(忠通○藤原)　余　左衞門督公敎　權中納言公能　參議右中將經定　同敎長(小忌)

除内辨并小忌之外唯三人、群卿之不忠可彈指可彈指、就中權大納言伊通、皇后宮權大夫成通、不候節會供奉行啓、非唯無忠勤之志、抑亦有媚諂之心、詩曰、相鼠有皮、人而無儀、此之謂也、

〔山槐記〕永曆元年十一月一日乙亥、未剋參大納言殿(宗能○藤原)申承雜事、次參大殿(宗輔○藤原)申條々、

一中院行幸(新嘗祭○)事雖可申沙汰、五節臨時祭奉行事繁多、被仰付五位藏人如何、

仰云、被仰五位藏人何事之有哉、但經奏聞可隨勅定、

此旨付内侍奏聞、仰云、早可仰付五位藏人、

九日癸未、藏人少納言示送云、中院行幸御湯殿役可勤仕者、予申承了之由、此事觸山蔭後胤之人勤來者也、予外戚所觸也、近來左府(伊通○藤原)黨勤仕、實家朝臣當時服暇云々、

〔愚昧記〕仁安二年十一月十四日戊寅、未剋許、召使持來新嘗會祭卜串、予(實房○藤原)乙卜合、藤中納言新中納言丙合、藤宰相左大辨丙合、右大辨乙卜合、而藤宰相服日數内、右大辨熊野詣、仍左大丞可參云云、予可參之由答了、即可調小忌之由下知了、

嘉應二年十一月十六日壬辰、未剋許、自左府(經宗○藤原)示給云、今日相扶所勞雖參内、早出無疑事也、爲用意所申案内也、右内兩府并左大將不可參云々、答云、可參内之由存候、但中宮權大夫參内者、不可出仕候、所相憖之朝宗可被招取之故也者、即又被示云、重光早可召也、自是其由下知了、何ニモ可有御參内、奉公ハ不空事也云々、答云、如只今者二人候、若闕如者可申請、只今令參上事也可承云々、即著束帶(帶劍等如常節會)參左府亭、謁申不審事等之處參内、頃之左府參著仗座、(中略)問外記云、大歌別當中宮權大夫歟、今日不參内歟、然可申代官、件事宣被督也然而只仰外記、或又不仰外記只告其人歟頗業云、代官事不被仰官、或仰外記、或只告其人也、左府云、保延元年四條民部卿忠敎爲内辨、件人大歌

別當也、仍以中納言師時卿爲代官、件度只告其人也、後日於式所、一日節會失錯等有其沙汰之時、於件條者、難否之條不見也、先此令頭左中將令奏外任奏、此次被申大歌別當事、〈略〉○中中將云、大歌別當事聞食了、參入人々之中、相計可被用也、左府云、指其人可被仰歟、內辨難自由歟、誰人トモ自上可被仰下也、多下﨟歟者、〈略〉○中左頭中將來云、左衞門督可爲大歌別當之由可仰也、

承安四年十一月廿一日甲辰、新嘗節會也、戌刻許參內、〈略〉○中頭中將來云、上﨟不被參云々、可奉仕內辨事歟、仍著陣座、〈略〉○中問外記云、大歌別當誰人哉、〈源大納言之由覺悟、然而爲知定哉、所問也、〉俊國申不覺悟之由、仍問大外記仰可申之由、俊國退去、則歸參申云、源大納言云々、次令官人喚頭中將、中將則著軾、予授外任奏、此次申大歌別當代事、少時返給外任奏、予結之、頭中將仰云、令候列〈歟〉、又仰云、大歌別當代中宮權大夫者、〈略〉○中源納言云、中宮權大夫俄有障、〈小子有事之由、自里亭告來云々、〉自退出、其外納言不被候、外辨事誰人可行哉、予招大外記問云、小忌上卿之外、外辨有納言不著之例哉、以小忌納言爲大歌別當代例如何、賴業云、小忌上卿行外辨事之例、只今不覺悟、爲大歌別當代之例候歟、予又招頭中將申此子細、中將奏聞了歸來云、兩事小忌上卿可勤仕、於大歌別當代事者、外記申有例之由、至行外辨事之條、長元之比有其例之由覺悟御云々、〈是關白會歟〉仍源納言以下出外辨了、〈略〉○中奏宣命返給之時、頭中將云、雖不知子細事、內辨甚以優歟、人々褒譽云々、初度內辨也、無殊失錯遂了、爲悅々々、參內之次先參向殿相申承作法、召舍人召刀禰幷侍座事、又練步事等、於御前勤仕了之後參內也、先年雖習申、臨期猶以尋申了、

〔玉海〕承安四年十一月廿一日甲辰、豐明節會、內辨三條大納言〈○實房〉也、外辨闕如云々、源納言注送云、內辨三條大納言奏外任奏了、人々欲著外辨之時、納言一人不候、予時右衞門督中宮權大夫在藤壺云々、雅賴進申內辨曰、外辨事小忌可奉行歟、將參議歟、內辨付頭中將奏請之被問歟、大外記賴業申云、參議奉行外辨事者例也、但非豐明節會他節會也、小忌內辨時改服云々、外辨乍小忌難奉行歟、又大歌別當代小忌上何事有哉有其例者、殿下〈○藤原基房〉仰云、小忌上行外辨事、長元有例、外辨事、大歌別

當共以小忌上可令奉行者、著外辨奉行候□、其後按察使參著外辨座了、雖然大歌別當猶勤仕候了、雖按察參仕、若依本勅歟者、余案之雖有本勅、大忌人參仕者、內辨申事由、以按察卿用大歌別當代也、小忌勤三方役希代事歟、凡見任納言十七人、外辨闕如之條、未曾有事也、可彈指云々、

治承二年十二月四日癸巳、今日於內裏左大將〈實定〉〇藤原語云、去豐明宴會、內辨所存無殊者、但以小忌參議實宗用宣命使、其故見參參議加小忌四人、〈家通、實守、賴定、實宗、〉須以實宗可爲御酒勅使、而忘却仰家通、仍以實守可用宣命使之處、先例家禮之人不用宣命使、故實也、而實宗有父子之儀、仍不能賜宣命、又家通不可兼行、賴定卿向祿所、仍依有例示合人々、以實守爲宣命使也、人定加謗難歟、然而小忌勤宣命使、其例太多云々、　三年十一月十四日戊辰、此日豐明節會也、〇中略抑見參參議四人〈家通、賴定、實宗、光能等也、〉而本所思定宣命使家通、御酒勅使賴定、召大歌實宗、祿所光能也、而家通早出了、依余著端座之間不知之、仍召大歌之時、須用光能也、而召實宗之間、宣命使祿所依難相兼上臈勤之、兩役尤無心也、實宗賴定共光能之上臈也、兩人之中、誰人可勤宣命使哉、廻思慮之處、宣命使上臈所勤也、仍點賴定、又依人先々對捍如此之役頗奇怪、仍所點兩役也、召大歌之時、不問傍人召之、愚昧之所致也、仍始終違亂、然而又非無如此之例、

〔吉記〕治承四年十一月七日乙卯、早旦藏人佐隆職宿禰等入來、世上事歎息之外無他、各謝遣之後、先參殿下、〇中略付信廣申入條々事、〇中略

帳臺御出童女御覽等可參公卿等事

仰云、御物忌之間、今日不御覽交名、明日可申、

八日丙辰、先參殿下、令參新院給云々、仍遂參直申五節間事等、

新嘗祭小忌上卿以下豐明節會雜參會哉否事〈右大外記賴業師尙等、分公卿五人左右兩府左大將卿大納言堀河中納言等申狀、〉

院奏之處、人々計申之上、殿下可令定給由有仰、殿仰云、被相分之條頗無謂、神事可早參之由可

令〇今一本作有下知、不合期者、其時可有沙汰歟、兼不可分者、〇中略

帳臺御出幷童女御覽日公卿事

昨日仰殿下可令計給、殿仰猶可奏院、仰云、左府以下可令計給、又右大將尤可參、寬治仁安例、幷可然人々注申之、

廿日戊辰、秉燭之後參內、上下漸參集、〇中略於兩都被行之間、小忌卿相已下雖參會事、兼被尋大外記賴業師尙等之後、被問左府右府左大將師大納言堀河中納言等、各申狀幷外記勘文在別、雖有一人不參例、今無兩人不參例、每事違例只在兩都歟、

〇按ズルニ、此時新嘗祭ハ京都ノ神祇官ニテ行ハレ、其他五節參入以下ノコトハ、福原ニテ行ハレシナリ、

〔玉海〕文治五年十一月廿三日己卯、頭中將成經申云、新嘗祭上卿宰相、相共以闕如云々、各仰可催之由也、余退出之後、子剋來示、猶闕如之由、仍侍男一人令騎御廐馬、馳遣兼忠卿許、申可參之由、是雖不可然、爲不闕公事也、後聞、兼光卿又參入云々、

建久三年十一月廿一日庚寅、頭中將實明朝臣來云、明日新嘗祭行事、左少辨宗隆卜食也、而稱病、仍可催親經之由仰之、件宗隆春日祭非違勤之、大原野祭依違勤之、兩箇重役、其程近之也、不可譴責也、

〔明月記〕承元二年十一月廿日、自十七日五節、今日節會云々、　廿三日、節會事、

內辨出著座、不差大歌別當代、內大臣殿於外辨座、大歌別當誰人乎由令問資實卿給、件卿一人著陣、中納言也、答云、右衞門督存ジテ候歟、此事無術、不著陣人也、事存之乎、內府昇殿給之間、右府置左大臣座著第二兀子、是當事也、故入道殿下令用此儀給、官宗隨見參儀座之由謂之、陰陽又知此、仍內大臣雅通退出、依□□郎退出、不見其後事由被仰、三獻訖內辨召定通卿、令召大歌別當、先是更無起座人、此時資實卿俄起座、奔降勤仕大歌別當、事之不可思議□□□□傳陸殿下〇原恐宗實備行事給、主上〇土御門入御御殿之後、歸來御座御

帳之中、高聲被行一事以上、但遂甚多失宇治左府年十六、始勤內辨給、法性寺殿云、彙日能加敎訓、著座之後一言不加給、自御帳之中內辨行事未聞事歟、謝座舍人等之間甚失臆、經通下外任奏之間クトイ事ヲ云懸、上卿聞之後結文、其事不得心、若外任奏有過歟不知之、依下臈公信ヲ被仕、及三獻□□無便宜、三獻了後、博陸乍座卜命給、腋御膳同被催、公宣不聞入而在座、其事久不催之間博陸又腋御膳ト被仰之間、ヤガテ腋御前ヲ被催、內辨紛熱之間博陸進物所御厨子所ハイカニト被仰、釆女等無左右居之、次第違亂非一、

〔玉葉〕承久二年十一月十八日、此日豐明節會也、入夜欲參內之處、九條大納言自內裏送消息云、今夜無他參入之人、有奉仕內辨之志、依可蒙御免、生涯之恩有此事云々、仍不參內、此條頗不普通、須辭不可然、諾、聊風病相侵、仍讓與了、後聞、右府○藤原家通參入爲內辨云々、關白○藤原家實道家父聞予○藤原道家不參之由召遣云々、比興事也、亞相支度相違、頗欝陶云々、或人云、內辨失禮多端云々、未供御膳以前催臣下飯汁、又未居汁以前申上下御箸、依關白命更令居汁云々、

〔康富記〕應永廿九年十一月廿日癸卯、新嘗祭也、上卿權中納言藤原時房卿、乙卜合參議同藤光卿、卜合少納言淸原宗業眞人、卜合不權右少辨藤原經直、奉行權右少辨少外記淸原親種、乙卜合右大史安倍盛久、分配召使宗岡行職、宮主卜部兼興、內侍等參官云々、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月十四日己酉、藏人右中辨俊國送御敎書曰、

新嘗祭御卜合候、御參事可奉存候、仍上啓如件、

十一月十三日　　　右中辨俊國

謹上中山宰相中將殿

返答曰

新嘗祭參向事、卜合之上者尤可存知之處、旁故障候、可然樣可令申沙汰給候也、謹言、

廿日乙卯、今日新嘗祭也、藏人右中辨俊國奉行也、上卿按察大納言（資家）、參議四條宰相（隆盛）、辨□□云々、予爲卜合之由再三有其催、然而申故障之趣於院、□仍所被催免也、

〔康富記〕寶德元年十一月廿二日丁卯、新嘗祭也、上卿花山院中納言定嗣卿、（卜合）坊城宰相益長朝臣、右中辨冬房朝臣、（藏人頭正四上）少納言繼長朝臣（正四下）少外記康顯、（卜合）右大史員職、（分配）召使秀國、內侍（出車可尋之）卜部□□等參行之、辨少納言著南廳座之時、辨先進、少納言後著座、北廳前儀、上卿參議列立如常、辨少納言不及列立、（若官大位大儀、各被存之故歟、）仍外記史亦不及列立、各一人宛臨其役參進了、　廿三日戊辰、豐明節會停止、平座被行之、（中略）〇內豎遲參之間、可爲不參歟、不參例幷何樣可被行哉、代官可用誰人哉有尋沙汰、雖然深更內豎參入了、應永五年十月二日不參也、代事可尋之、

〔元文五年新嘗會次第〕新嘗會

小忌公卿　（一條）右大臣（道香公、）　（河野）權中納言（實陰卿）　梅園宰相（久季卿）
少納言　（五條）爲成朝臣（大內記）　辨　（日野西）豐胤（左少辨）　次將左　（清水谷）家季朝臣（中將）　（飛鳥井）雅重朝臣
（中將）　右　（綾小路）有美朝臣（少將）　（風早）公金（少將）
大忌公卿　三條大納言（利季卿）　（柳原）左兵衛督（中納言光綱卿）
豐明節會公卿　右大臣（同上）　三條大納言（同上）　（廣幡）新大納言（長忠卿）　權中納言（同上）
（萬里小路）右衛門督（中納言植房卿）　左兵衛督（同上）　（風早）宰相實積卿　梅園宰相（同上）　（庭田）宰相中將
重熙朝臣
少納言　爲成朝臣（同上）　辨　豐胤（同上）
次將左　（鷲尾）隆熙朝臣（中將）　（園）基望朝臣（中將）　家季朝臣（同上）　雅量朝臣（同上）　（石山）基名（少將）
右　（小倉）宣季朝臣（中將）　（正親町）實連朝臣（中將）　有美朝臣（同上）　（難波）宗城（少將）　公金（同上）
傳奏中山中納言榮親卿、奉行姉小路頭中將公文朝臣、

今上皇帝（櫻町）〇御再興、于時元文五、十一月卯月廿四日御當日也、同廿五日豐明節會、

〔續史愚抄（後櫻町）〕寶曆十三年十一月六日己未、於神祇官代有新嘗祭小忌卜定、權大副二位（兼雄）奉仕、　十四日丁卯、新嘗祭、無中和院代行幸、掌侍藤原治子參向、小忌上卿中山中納言（愛親）宰相已下參仕、自今年被罷小忌大臣出仕、（再興後大臣或所出仕也）奉行藏人頭左中將隆望朝臣、

明和二年十一月十三日乙酉、於神祇官代有新嘗祭小忌卜定、自今年加侍從卜串再興、權大副二位（兼雄）奉仕、

〔續史愚抄（後桃園）〕安永三年十一月十六日乙丑、於神祇官代有新嘗祭小忌卜定、新卜二位（兼隆）奉仕、

十八日丁卯、新嘗祭、〇中略　小忌上卿新中納言（愛德）宰相已下參仕、大忌公卿右大將（前豐著閑腋、砲入火失）已下二人依無行事空退出、奉行藏人頭左大辨光祖朝臣、　十九日戊辰、節會、內辨左大臣（尚實）陣後早出、西園寺大納言（實季）外辨新大納言（愛親）已下十一人參仕、大歌別當中代官、（西園寺大納言難爲大歌別當、依擬內辨也、被）出、

（神饌及御饌）

（御新大納言愛親、先例多用中納言、但嘉保及正治二爲大納言之由見明月記、）奉行藏人頭左大辨光祖朝臣、

〔延喜式（三十一宮內）〕凡神今食新嘗祭夜、丞錄各一人、與神祇官共侍內裏、檢挍御膳進退、

〔政事要略（二十六）〕十一月中卯日新嘗祭事〇中略

又十姬供奉（高橋安曇兩氏供奉、同六月、）其供物盛陶器納於筥、（第一姬執神食薦、次御食薦、御飯四盛、窪手二口、同入筥、菓子四種八、干物四種六、鮮物口種七、葉盤三、御箸五、供物次第如此、十姬供奉之中、二姬供御巾匣、同神今食、）又天皇御飯十度、又御盛物干物十度姬受給、每度加盛魚味汁物等、次御盛菓子十二度、天皇白黑酒灑神食上四度、次供御酒八坏、自餘皆同神今食、

（酒醴）

〔玉海〕建久三年十一月廿二日辛卯、入夜左中辨親經朝臣來、新嘗祭神服神饌等闕如事、各可譴責之由仰也、　廿三日壬辰、親經參來申云、〇中略諸國不濟神饌、然而內膳司如形勤仕之云々、

〔延喜式（三十一宮內）〕凡釀新嘗黑白二酒者、每年九月二日、省與神祇官共赴造酒司、卜應進酒稻國郡、訖省丞以奏狀進內侍、內侍奏了下官、官即仰下、（其料用官田稻、）其供奉酒部以下亦用卜食者、

〔小野宮年中行事九月〕朔日奏可釀新嘗黑白二酒事

宮內省與神祇官共赴造酒司、卜造酒殿地及進酒稻國郡、訖付內侍奏之、覽了返給、內侍下辨官、

〔北山抄十二月〕二日、奏可供新嘗祭官田稻粟卜定文事、(內侍奏之、下辨官、)

〔年中行事秘抄九月〕二日新嘗會酒料文事(付內侍所奏之、主上召殿上辨下給、辨等不必申上卿、唯依官符、仍有兩說、○又見年中行事抄、)

〔延喜式民部二十二〕凡十一月新嘗會黑白二酒料米、九月下旬、省下符畿內、卽舂省營田稻、送造酒司、

〔延喜式造酒四十〕新嘗會白黑二酒料

官田稻廿束、(畿內所進、)絁大幡三條、(一條篩瓩、二條酒、別五尺、)酒缶肥絁幷褁料調布各四條、(別一尺三寸、)暴麴調布帷二條、(別二丈一尺、)甕肥調布二條、(別六尺、)取甕二人調布衫二領、(別二丈六尺、)襷二條、(別六尺、)潔褌二領、(別四尺、)酒波一人調布襷一條、潔褌一條、手巾調布一條、(長二尺、)緌絲二銖、韓櫃二合、甕二口、由加二口、缶六口、(四口納酒、二口汲水、)小坏四口、小匜四口、明櫃三合、中取案一脚、臼一腰、杵四枚、箕二枚、槽二隻、韓竈二具、

右九月二日、省幷神祇官赴集司家、卜定酒部官人仕丁各二人、(若當丁日、臨書處分、其員名官人在者、先卜官人、後及酒部、)春稻仕女四人、卽祭其殿地神、所須五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿一斤五兩、庸布一丈四尺、鍬一口、東鰒十兩、堅魚一斤五兩、腊二斤、鹽二合、海藻一斤五兩、米酒各二升、祭訖木工寮造酒殿一宇、臼殿一宇、(並三間、)麴室一宇、(草葺、)構以黑木、掃部寮以苫八枚葺二殿、(殿別四枚、)十月上旬、擇吉日始釀、十日內畢、酒部二人官人各給潔衣、料絁一匹、綿二屯、仕丁二人各庸布一段、調布頭巾六條、(別二尺、)褌六條、(別六尺、)釀酒日給間食、(春稻女丁亦同、)其造酒者米一石、(女丁春官田稻、)以二斗八升六合為蘖、七斗一升四合為飯、合水五斗、各等分為二甕、甕得酒一斗七升八合五勺、熟後以久佐木灰三升(採御生氣方木、)和合一甕、號稱黑貴、其一甕不和、是稱白貴、(其践祚大嘗會、遣酒部二人於二國齋場院、以預其事、)又酒一石、(納二缶、)並齋會夜幷解齋日供之、畢後二殿給神祇官副已上中臣、一室給宮主、

諸節會料酒

十一月新嘗會四斗、若可過此限、聽辨官處分、

〔類聚符宣抄四〕太政官符民部省（外御稻）

應進上新嘗會御酒料屯田稻貳拾束事

定山城國愛宕郡

右得造酒司解偁、來十一月新嘗會白貴黑貴御酒料、依例所請如件者、省宜承知、依件宛之、符到奉行、

左中辨　　　左大史

天暦四年九月廿三日

〔年中行事秘抄十一月〕無新嘗會時白黑御酒事

長保三年十二月十二日小野記云、御膳次白黑酒、依無新嘗會也、是見九條相府記、

〔延喜式二四時祭〕新嘗祭奠幣案上神三百四座（並大）

社一百九十八所

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、四座置一束、八座置一束、楯一枚、槍鉾一竿、

社別庸布一丈四尺、裹葉薦五尺、

前一百六座

座別幣物准社法、但除庸布、

右中卯日於此官（○神祇）齋院官人行事、（諸司不供奉、）但頒幣及造供神物料度、中臣祝詞料准月次祭、

忌火炊殿祭

五色薄絁各四尺、倭文二尺、木綿五兩、麻一斤五兩、鍬四口、米酒各四升、鰒二斤、堅魚海藻雜海菜各四斤、鹽二升、缻四口、坏四口、食薦一枚、庸布二段、

右新嘗祭時先新造炊殿、依件鎭祭、宮主行事、其舊殿者壞却給宮主、

〔政事要略二十六〕十一月新嘗會裝束

天皇服帛御衣

〔蓬萊抄〕十一月中丑日夜帳臺試事

舞姬裝束了後、主上渡御御帳臺、御直衣織物御指貫淺履也、或召深履云々、

〔年中諸公事裝束抄〕十一月五節丑日 帳臺參入

主上御直衣御指貫をめさる、御半靴淺沓兩說也、

〔公事根源十一月〕五節

中丑の日をば、五節帳臺試といふ、〇中略 主上御直衣に御指貫にて御沓をめさる、主上の御さしぬきをめさるゝ事は、この時の外はなし、但御物の時は、帳臺試に准じてめさるゝ也、

〔中右記〕寬治四年十一月十七日、五節參入、〇中略 御元服之後、〇堀河 初有御出帳代、御直衣出衣淺履、

〔續世繼六 唐人の遊〕右のおとゞ宗忠の御子は、宗能の内大臣と聞え給、〇中略 やすきことなれども、をさなくおはしますみかどなど、常には五せちの帳臺の心みなどに出させ給ことまれなるに、さぬきの御かど、〇崇德 おとなにならせ給て始めて出させ給しに、御さし拔は何のもむといふことも、をさめどのゝ藏人おぼつかなく思へるに、あられだにくわんのもんぞかしなど、くら人の頭におはせし時、の給などして、さやうのことあきらかにおはしき、みかどの御さしぬき奉ることは、一年に只一度ぞおはしませば、おぼつかなく思へるもことわりなるべし、

〔山槐記〕永曆元年十一月十五日己丑、舞姬參入、〇中略 今藏人賴保申事之由、頃之出御、顧問、御直衣紫浮地窠文御奴袴紅打衵淺御沓、今夜出御無御襪、例也、

〔愚昧記〕嘉應二年十一月十三日己丑、五節舞姬參入也、戌刻終參大內、前駈二人 先是左大將〇藤原師長 參仕、於清涼殿廣廂暫談話、〇中略 被示云、帳臺御出之時、主上〇高倉 可著半靴御歟、予云、不同候歟如何、將軍

云、其程遠之時、著御半靴、近時淺履云々、然者御大内之時可著半靴御之由、先人所被申候也、予云、尤有其謂、有興事歟、

〔玉海〕承安二年十一月十二日、此日五節參也、主上（○高倉）始出御帳臺、（○中略）五節參了、於朝餉召御裝束、（邦綱實守卿等候之、又時忠卿候、）攝政余候大盤所、御直衣也、（御指貫紅打御衣、實守卿申攝政云、令引上御指貫之時、出衣ハ可籠前歟、可出後歟、攝政被答云、出後無下之藝事也、自肱立前ニ引籠テ引出也者、○中略）主上於額北間召御杳、（實宗朝臣獻之、攝政奉扶持之、御指貫踏入給也、）

治承元年十一月十八日癸丑、此日五節參入也、（○中略）主上（○高倉）著御裝束云々、（御直衣御指貫霰地窠文、是定例也、紅打御出衣、○中略）少時出御帳臺、　二年十一月廿日己卯、申刻殿上淵醉始、主上（御引直衣）於上戸御覽、

建久二年十一月廿日乙丑、五節參入、（○中略）主上（○後鳥羽）出自北鳥居障子、於同西面北一間長押上（准額間也）著御履（貫明朝臣奉之）御指貫踏入御杳給也、深杳淺杳雖有兩說、今夜召淺履也、近代多如此、其程遠之時召深杳云々、（○中略）今日主上御裝束、

小葵綾御直衣、同文白御衣二領、同單衣、紅打御衣、（出給也）濃紫霰地窠文御指貫、（浮文織物也、非二重織物、紐秀腹白如例）紅御下袴、白檜扇、淺御杳等也、

〔玉葉〕承久二年十一月十五日、此日五節參入也、（○中略）主上（○順德）自額間出御、（○中略）御裝束御直衣如例、（小葵文□、裏薄色歟）紅打御出衣、（不入綿）半色浮文織物御指貫、（地窠文、有腹白）

〔明月記〕寛元元年十一月十五日己卯、童御覽、（○中略）御裝束了出御、（御衣、紫白御出衣厚衣、）

〔西宮記〕（臨時四）新嘗祭

小忌王卿以下、當色青摺、日影、（赤紐布肩）（懸之）衛府大忌小忌帶弓箭、

豐明

王卿如例節會、（但小忌著青摺日影、赤紐等、并侍從著魚袋、先例云々、著青摺衣者、著赤紐、）

〔政事要略〕（二十六）十一月新嘗會裝束

小忌王卿以下、著青摺布袍幷日影縵淺履等、扈從乘輿、小忌近衞將以下、幷殿上侍臣同著青摺日影縵、諸衞服上儀、但大忌王卿以下如恒例、衞府公卿以下不論小忌、帶弓箭、

豐明日裝束(辰日)

王卿著魚袋靴等、但小忌王卿著青摺布袍赤紐日影縵等、諸衞督將佐搢仗、又著靴魚袋等、番長以下服上儀、

〔次將裝束抄〕節會

豐明(中辰日)十一(月)

垂纓闕腋袍、(半臂)巡方帶、(付魚袋)螺鈿細劍、靴、

隨身垂袴、舊老公卿將隨身、或著染袴垂袴、下官用此說也、○(中略)

五節之間

丑日、(參入直衣、古人不劍、)寅日、(殿上淵醉)直衣、(從々出衣)隨身、(布衣帶劍)同夜束帶、(打衣)卯日如昨日、非付童女人、(試日)若少年之輩者不出衣、(昨日不出仕人、或出衣、昨日雖不出仕、不出衣、又無難、)同夜○卯日有中院行幸時、

卷纓綏緌腋、(丸鞆帶)細劍、(蒔繪)壺弓、著小忌之人、袍上著小忌、(小忌帶前後各押入、諸司小忌トテ不法物也、以紙捻閉之、)

辰日節會、(見上)

有中院行幸、著小忌之裝束、(大嘗會時、三ヶ夜著也、侍從頭帶劍同持佐、)冠、(垂纓)日蔭(有心葉、付糸組、)小忌袍(白布以草摺之右方、付赤紐、身幅如狩衣、)(尻鞘均下襲、)例半臂下襲表袴袒單衣、以下皆如例、巡方魚袋螺鈿細大刀著靴引陣也、

〔世俗淺深秘抄上〕新嘗會時有行幸、翌日節會、侍臣著小忌是例也、但次將少年輩可著之、多不可著之、可相交歟、多著之混大嘗會、故必少々不著之也、不依中少將幷位高下、年若輩著之、

〔蓬萊抄〕十一月中丑日夜帳臺試事

五節等參入、殿上人引群行向、一家公卿若受領獻之時、依其語扶持也、著直衣裝束、雖非雜物頗可用

必歟、又必可著深沓云々、是舊例也、而近代多用淺履、狹指貫之裾、頗不穩事也、但可依時歟、獨醒有何益乎、於雨雪夜者、尙必可用深履也、○中略抑今夜爲大歌垣下四位五位皆著束帶、不好、而近代六位之外漸以不著、陵遲之甚也、

寅日事

兩貫首以下、早旦參殿上、各著楚々直衣、出袙如常、

卯日事

殿上淵醉如常、日無禁制之時、人々改昨日裝束、

〔年中諸公事裝束抄〕十一月五節丑日、或參入、

扈從公卿、直衣束帶に劍思々なり、殿上人今夜は所役ある程に束帶なり、藏人頭は直衣也、

寅日殿上淵醉

藏人頭以下殿上人みな直衣、出衣あるべし、靭負のすけ束帶布袴衣をいだす兩說也、六位衞府官を帶したるは闕腋の袍衣冠出衣をせず、文官の人縫腋袍出衣あるべし、

同夜院淵醉

公卿ことにその人を清撰せらるゝ事也、直衣、出衣殿上人おなじく直衣なるべし、

同夜御前試

貫首束帶、殿上人直衣をあらためて、束帶を著して參內、隨身をめしぐすべし、

卯日殿上淵醉

藏人頭直衣、きぬの妻をいださず、殿上人おなじ、所々の推參今日はあるべけれども、時によりてさだまらざる也、

童御覽

公卿御點をもて相催べき也、其人を淸撰せらるべきなり、公卿直衣、出衣あるべし

辰日豐明節會代始は辰巳午三ヶ夜、節會次將必小忌を著也、

諸卿束帶、有文帶飾劒襪、新嘗會の上卿辨少納言、必小忌を著する也、侍從緌䋏のはし、巡方帶魚袋を付、近衞次將闕腋袍巡方帶魚袋螺鈿劒、近衞佐近衞司におなじ、

〔年中行事裝束抄〕五節

丑日帳臺ノ出御ノ御共ノ人々、殿下以下五六人バカリ直衣ナリ、アルヒハ衣ヲイダシ、アルヒハイダサヌモアリ、殿上人雨貫首直衣以下人々、アルヒハ直衣、アルヒハソクタイナリ、六位ハコヨヒハイツカウニソタタイニヲアルベシ、

寅日、貫首以下一向直衣ニ冠ナリ、六位オナジク衣冠ナリ、タヽシアヅカリノ藏人ハソクタイヲスベシ、アヲイロヲキルベシ、式部丞アヲイロニ火イロノシタガサネ、衣冠ナラバウキモンノサシヌキヲキルベシ、他ノ藏人ピレイノ裝束ヲキルトイフトモ、アヲイロオリモノヽサシヌキヲキルベカラズ、貫首以下ミナキヌヲイダス、アルヒハウチギヌ、アルヒハオリギヌナリ、ウチギヌニモ、中年人ハツ、タヲイル、夜ニイリテノチ、ナヘラカナルソクタイヲシテ、御前ノコヽロミニマキル、

卯日、今日モ殿上ノエンスイナリ、貫首以下直衣、諸大夫殿上人ハ衣冠ナリ、六位又衣冠ナリオホヨソハ殿上人モ六位モ、ヲサナキニハコキシヤウゾクトテ、エビゾメ、或モエギウチサシヌキニ、ウチギヌモサシヌキモ、デイニテダミカヘシテ、ウラコキスハウノキヌ、コキヒトヘ、コキシタノハカマナドキルナリ、アヲノキヌハ、ワカキ人ハキヌトゾマヲセドモ、近代ハワカキ近衞司ナドモキタリ、藏人アヅカリ布袴アヲイロ火イロノシタガサネ、エビゾメノウキオリモノヽサシヌキ、アルヒハアヲイロニカタモンノオリモノヽサシヌキ、紅ノウチギヌヲイダス、コレモン官ナ

リ、エウ〇衞府ニオキテハウチギヌヲイダサズ、コメテキルベシ、ケビキシハ殿上ノエンスイ、ワラハ御覽ノアヒダ、ソウゾクソクタイヲスベシ、タヾシアヲイロヲモチキルベシ、承曆二年平時範布袴ヲキル、アヲイロニモエギノハンヒナリ、コレ平行親例云々、他ノ藏人ラ、寅日ノ裝束ノゴトシ、メヽシ六位ダシギヌヲコムベシ件日中院ノ行幸アルトシハ、ワラハ御覽ノノチ、秉燭ニオヨブアヒダ、殿上人藏人ソクタイニテ行幸ニグブス、小忌ヲキル、日蔭ヲカク、タヾシコケナリ、ソモ〳〵御ウラニアハザル侍臣、コトニ行幸ニ供奉セズ、コレヲミヲキザルユエンナリ、タヾシ殿上ノ職事十人ハ、御ウラニアハズトモ、カナラズ小忌ヲキルベシ、

辰日節會、人々ミナソクタイナリ、タヾシ預藏人、朝ハ宿衣ヲキルベシ、アヲイロナリ、モクランヂノオリモノヽサシヌキニ、ダシギヌ款冬ヲモチキル、タヾシケビキシハアヲハカマニ一コンゾメ、ウツキカベ衞府ハキヌヲイダサズ、剋限ニ小忌ヲキ、ヒカゲヲカク、イトノイロ人ノ心ニアルベシ、シロキヲヨキトス、ウキモンノハカマ、イロコヽロニアリ、文官儀式官オナジ、衞府ニオキテハ弓箭ヲタイス、ヒラヤナグヒナリ、アヲカハタチアチカハシリザヤヒラヲヌノオビシガイナリ、ソモソモ中院ノ行幸アルトシ今日小忌ヲキル、行幸ナキトシハ小忌ヲキズ、タヾシ小忌ヲキルトキハ、式部丞シリヲヒキ、ヒタヒアテヲハナツ、廷尉オナジクシリヲヒキ、儀式官文官トイフトモ、カナラズハンヒヲキル、コレ小忌ワキアケナルニヨリテナリ、又ヲミヲキル日、ビレイヲコノム人、ソノハカマフタヘオリモノヽハカマナリ、タヾシ廷尉ニオキテハ、コノカギリニアラズ、シロキウキモンノハカマナリ、ヲミノウヘニキウゼンヲタイス、節會ノアヒダ童下仕ニツクナリ、マタ式部丞藏人小忌ヲ著ナガラ點標、當時無二此事一、而近代之例定事也、射場殿ヨリイデヽ列ニクハヽルナリ、

〔後水尾院當時年中行事〕十一月、〇中略二番の丑の日、今夜より女中あかき衣しやうをきる、當日かならずこうばい二をかさねてきるなり、明日よりは何にても著用なり、

〔法成寺攝政記〕寬弘三年十一月十四日癸丑、五節參一條院、　十五日甲寅、六位等依美服有勘當、

〔小右記〕萬壽五年(長元元年)○十一月十四日甲辰、豐明節會、仍參內、(自待賢門內從車)諸卿未參、左府生爲弘、布袴執膝突、敦、節會日不束帶事、不可然、令追却、外記所可咎仰也、

〔中右記〕嘉承元年十一月十四日、晩頭依召參中宮御方、新大納言、(經)源中納言(顯通衣出)左宰相中將、(忠)左京大夫、(顯)皆直衣被參會、予獨衣冠、依爲大辨也、晩頭殿上淵醉了、

永久二年十一月廿一日壬辰、節會也、著小忌、乘燭之間參內、(中略)○著小忌人、强不可著仗座由有口傳、是不可著人々下故也、

裏書云　赤紐付右

小忌(長下襲半臂中殿下也、御腰有文帶魚袋著靴、圖文表袴紅衵、不可及打衵也、爲檢非違使別當之人强給束不及美麗之故也、)

〔長秋記〕元永二年十一月十一日、五節參入、(中略)○依御物忌無敍代出御、(鳥羽)○依賀茂火事重御覽停止、仍雲客不放遊云々、(中略)○中納言問下官云、侍從明日裝束如何、下官答云、五節殿上人不待雜袍宣旨、著東直著直衣云々、不知子細、可被尋問時儀者也、仍以侍尋遣藤中納言許、返事、尋常儀三箇日間所著束帶也者、著束帶令候給何事有哉、不待雜袍宣旨、著直衣事不知給者也、中納言又問下官、下官答云、只依彼人命著束帶可被候也、是尋常儀也、著直衣參事不覺、但丹波前司季房朝臣五節昇殿、不待宜旨著雜袍云々、下官又如此、共非吉例、不可被准據、重相尋可有左右事也者、後日以此旨申左大臣殿、仰云、猶三箇日著束帶參事尋常儀、於汝者三日昇殿、初參三个日已過了、而及五節著束帶事無便宜、又著衣冠無指故、仍觸申故大殿之處、雜袍宣旨不可被待、只令著何事有哉、隨可被下其宜旨也者、仍隨彼命所令著用也、於季房朝臣時事者、不知子細者、

大治二年十一月十七日癸卯、新嘗祭中和院儀也、(中略)○上卿以下群行出待賢門、上卿相語云、今夕參內不定也、存其旨可令披露於所勞由、口是鬢髮蒼浪著小忌事、爲身爲朝可爲恥辱故也云々

〔中右記〕大治四年十一月廿二日丙寅、殿上淵醉、盃酌及三獻、其後人々參女御殿御方、各々分散、人々不著出衣、但年少人々兩三人著之云々、

〔山槐記〕永曆元年十一月十五日己丑、戌刻參內候小板敷、催遣五節、○中略 雲客列立神仙門外、瀧口皆悉來殿上口、上﨟三人水干袴、著狩襖、四﨟帶聽色、著上下裝束、白餘フタサ上下、著濃打衣貫狩胡籙、恒例也、○中略 關白、直衣、出白浮文厚衣給、 右大臣、內大臣、已上直衣、 別當、束帶帶劔笏、依數五節也、 十六日庚寅、未刻參內、直衣薄色浮文織物、奴袴腹白括堅文、裏濃紅梅出掛、入綿、薄色衣二、紅單、赤下袴、 申終始殿上事、醉○下略

〔愚昧記〕仁安二年十一月十六日庚辰、戌刻許、著小忌、新調也、日蔭糸備六角、宰相、餝劔魚袋有文帶、參內、○中略 進綠所給祿、向御所一拜、了退出日華門、

嘉應元年十一月十五日丁卯、今日童女御覽也、童女下仕等早仰可參內之由、申刻著直衣、裏增乃紅梅敦衣、參內、○中略 今日攝政候簾中、內大臣、薄萌黃、 左大將、御衣、 大宮大夫、紅梅、 予左衛門督、裏山吹、 大理不出衣例也、

二年十一月十三日己丑、五節舞姬參入也、戌刻終參大內、前駈二人、 先是左大將參仕、於清涼殿廣廂暫談話、大將云、一日內府云、白衣不可用出衣之由所習傳也者、先賢多用之、此事頗不審也、仍引勘家日記之處、保延六年故左府于時爲內大臣、廿歲、 出白衣、堅文織物、 又著淺黃指貫者、予云、古賢用之否條不覺悟、近去年春、高野御幸之時、前大相國用之歟、予云、貞信公餘流不可著山吹衣之由云々、此事如何、答云、故禪門此由所被示候也、於由緒不知給也、予云、下襲同前歟、將只出衣許歟、答云、定可用歟、但康和二故宇治殿被著云々、○中略 又云、今夜可著否、先例多ハ著之、或又不著歟、無可取否人之輩、似無便宜歟、○中略 博陸著座、頃之起座、相率向給帳臺、其儀如常、但左大將已上著否、左大將內府各隨身持來也、予息持來也、○中略 予并左衛門督不著否、去年又如此、 十五日辛卯、午時許、頭左中將送消息云、童女御覽如法午刻也、可早參者、可早參之由答了、未刻許、著直衣、出衣寒草色衣、地ハ香也、有白文、付青裏也、薄色綾奴袴、繧繝白大文、 參內、○中略 左大臣、出衣唐物也、白地有香文、付薄青裏、 右大臣、織物襖衣、薄色指貫、 左大將、織物白衣、淺黃綾指貫、 右衛門督、唐物白地、白二青文、付二藍裏、

〔玉海〕嘉應三年承安元年○十一月十九日己丑、此日五節參入也、主上依御物忌不出御帳臺、○中略亥刻著直衣、不出衣、主上出御之時多出之、執柄出之時不知、然而爲決疑令申女院御方、仰云、於今夜者、強不備花麗歟、不出衣可宜者、隨御不審用之、凡上臈并宿老之人、強不出之歟、只可被□人之意、參內、

承安二年十一月十二日、此日五節參也、○中略依先日儀、亥刻著直衣、出唐綾柳表衣、去年不出衣、今年主上欲出御、仍頗可謂歟、中合攝政、非宿老之人可出之由被命、予雖年少官已高、然而先年二條院之御時、故攝政被出也、宿老□不可過執柄歟、仍所出也、綾指貫也、參大內、

〔山槐記〕治承三年十一月十二日丙寅、今日殿上淵醉也、少將維宗參內、着甲裏欵冬衣、掛薄色衣、紅單、半色奴袴、檜橫目扇、隨身蘇芳卷染上下、黃衣青單、童一人青卷染上下、欵冬衣黃單、今一人童依重服不召具、牛童萌黃上下、黃衣、事了歸來、相具侍從忠季、紅打出衵、蘇芳匂青單、半色奴袴、檜橫目扇、童貫布紅梅之上下、萌黃衣、蘇芳單、牛童赤色上下、欵冬衣、

〔玉海〕治承三年十一月十三日丁卯、此日童女御覽也、○中略今日關白基房○藤原淺黃綾指貫、不被出衣、自餘者出之、他殿上人皆不出之、但時宗獨出之、

〔吉記〕治承四年十一月十七日乙丑、舞姬等參入、○中略次殿下于時御殿上、御直衣表唐綾□梅、出衣、保安例云々、別當右宰相中將源宰相中將等扈從、十八日丙寅、今日殿上淵醉也、仍未刻參內、直衣、唐綾萌黃表□□綾出衣薄紅梅衣二、同單薄色藤丸堅織物奴袴、○中略頭亮著奧座、□□織物直衣、黃櫨紅葉五倍衣著表濃蘇芳唐綺裏、增萌黃衣三、紅單薄色浮文綾織物奴袴、予著短座、左中將泰通朝臣、薄紅梅堅織物數衣、同衣二、同單、右中將隆房朝臣、唐紅出衣黃衣紅單、十九日丁卯、今日五節童女御覽也、仍未刻參入、裝束如昨日、但不出衵、○中略頭重衡朝臣在奧座、淺直衣堅文奴袴、自餘如昨日、同日被改著、已破禁制者歟、

〔玉海〕文治二年十一月廿三日丙寅、此日御前試也、入夜參內、直衣著淺黃指貫、不出衣、半蔀車、隨身上薦冠、

建久二年十一月十一日丙辰、實明朝臣來、申五節之間殿上人出衣、可用唐物哉否事、可隨新制、又可奏之由仰之、十五日庚申、實明朝臣申、○中略殿上人出衣事、唐綾和綾共可用云々、廿日乙丑、五節參入、○中略

余綾指貫不出衣、左大臣同前、右大將薄色指貫、不出衣左大將堅文織物、薄色指貫、出蒲萄染打出衣、左衞門督同右大將、

〔明月記〕正治二年十一月十三日、入夜束帶參上、今夜束帶甚以見苦、古賢所成也、其理不可然、但貧乏之間、無直衣故著之、深更御參內、今夜無御出衣、尋常御直衣也、○中略五節參了云々、

建曆三年十一月十二日、五節參入、○中略戌終許、侍從又參內、早速也殿上人廿餘人云々、親平少將打衣以金銀鍊置菊華、基保掛三格子唐織物、中將家嗣朝臣掛入綿、伊時朝臣柳厚衣、兩頭紅梅厚衣、頭中將固文指貫、

嘉祿二年十一月十八日、夜前節會、○中略小忌具實蘇芳裏下襲、著小忌時稱我家說、是例下襲ヲ蘇芳下襲ト書故實ヲ父卿依不受、有識口傳不知之任、盜取家文書蘇芳ト得心歟、無疑事也、

〔玉蘂〕嘉禎二年十一月十二日、此日五節帳代試也、○中略戌刻著直衣淺黃織物、指貫唐物、枯色厚衣、相伴新大納言紫織物指貫、紅打出衣、大納言後直衣始用之、仍帶劒笏、參內、予前駈六人、大納言前駈四人、隨身布衣冠、○中略不經幾程右大臣參入、薄色織物指貫、紫織物厚衣、

十四日丁卯、童御覽也、○中略此間予著直衣參御前、淺黃綾指貫打出衣、○中略召顯定朝臣仰可召諸卿之由、次右大臣、花山吹織物、出衣入綿、薄色織物指貫共浮文也、右大將、出薄紅梅厚衣、新大納言、紫織物指貫文濃紅梅、出衣不入綿、出浮文也、著御前座、○中略今日新嘗祭上卿、權中納言爲家參議實持云々、少將師繼著二藍單指貫無裏紅打出衣、是不禁色人難叢口口著單指貫云々、父大宮中納言著此指貫云々、可尋、　十五日、此間豐明節會也、戌刻著束帶、飾劒代、紫平緖也代也、右府飾劒紫染平緖大納言飾劒代紺地緖相伴參御前、

〔平戶記〕仁治元年十一月十三日壬寅、今日殿上淵醉如例云々、頭辨經光朝臣著堅織物奴袴黃ニ青裏出衣薄色掛一領白裏白單衣云々、是兼日示合也、年齒壯齡也、雖不可强然、去年著浮文了、大辨又異他、仍所折中也、去年參入之時著綾奴袴云々、是又所示合也、　十五日甲辰、今日豐明節會也、頭辨今朝問云、朝間有可出仕事、可用丸鞆歟、可用巡方歟者、猶可用巡方、是爲定例由答了、

〔勘仲記〕弘安七年十一月十六日庚寅、殿上淵醉也、午剋令出立、筑前本〇前一作後前司邦良令出來副、衣冠、今度使之制符被止之、織物、綾幷織貫等、不可有之由、有其沙汰、予紅梅志々貝織貫以色々糸置繡、厚褁蘇芳色衣一領、紅單、堅織物、藤丸紋指貫、作花、尤雖可著浮文、用襄舊者、前藤中納言所相計也、仍隨被所命、小袖、織貫五重着之、賀新車、侍一人、童一人、前駈狩衣、大帷、所召具也、予行粧殊守儉約、略〇中予、藏人大進定光、黄青黒、表袴、志々貝織貫、藏人大輔仲兼、蘇芳、西志々貝織貫、

〔續史愚抄後伏見〕安永三年十一月十八日丁卯、新嘗祭、略〇中大忌公卿右大將、前豐、著二國、藤冠、入、大失、

〔師遠年中行事十一月〕中辰日節宴事

辰日節會給位記、

〔續日本紀三十九桓武〕延暦七年十一月戊辰、宴五位已上、從五位上中臣朝臣常、大伴宿禰弟麻呂並授正五位下、

〔類聚國史九神祇〕延暦十一年十一月戊辰、宴群臣、賜物有差、大歌彈琴人正六位上巨勢王、甘南備眞人國成、大宅朝臣廣足、授從五位下、

〔日本後紀五桓武〕延暦十五年十一月甲辰、宴群臣、賜帛有差、從四位上和氣朝臣廣虫授正四位上、无位藤原朝臣名子從五位上、外從五位下刀佩首廣刀自從五位下、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年十一月十六日壬辰、天皇御前殿、賜宴群臣、賜文武官祿、

〔左經記〕長元四年十一月十六日己丑、早旦敷設等送五節所、及昏黒令參舞姫、略〇中頭之叙位之人々被退出云々、略〇中傳聞、四位從上一人、新叙一人、五位正下四人、從上六人、入内一人、新叙廿人、外位二人、

〔中右記〕寛治二年十一月十七日、今夜帳臺出御以前有叙位之儀、太政大臣藤信長被叙從一位、此外如例歟、

〔平戸記〕仁治元年十一月十五日甲辰、今日豐明節會也、略〇中今夜有加叙云々、藤相公信盛叙從三位、

云々、四位宰相三人一度叙三品、布代事歟、

〔延喜式十五內藏〕供奉新嘗祭人等祿

宮主一人絹一匹、（中宮亦同）采女一人絹四匹、（六位已下三匹、並新嘗祭、）中臣一人絹四匹、（六位已下三匹）忌部一人、御巫一人、各三匹、座摩一人、御門一人、生嶋一人、各二匹、中宮御巫一人二匹、（已上官物、東宮御巫准此、）

〔延喜式三十大藏〕正月七日節（十一月新嘗准此、○中略）

六位女王絁二匹、綿四屯、（女王明日給之、新嘗會亦同）

○按ズルニ、皇太子以下ノ祿數ハ、歲時部白馬節會篇ヲ見ルベシ、

〔延喜式三十二宮內〕凡諸節會、吉野國栖獻御贄奏歌笛、每節以十七人為定、（國栖十二人、笛工五人、但笛工二人、在山城國綴喜郡、）其十一月新嘗會各給祿、（有位調布二端、无位庸布二段、）

〔延喜式十八式部〕凡正月七日、幷新嘗會等祿召名札、令大藏省寫取、

凡十一月新嘗會日、諸司六位已下官人給祿、若蕃客來朝可會賀正、正月七日給之、

凡施藥院司給新嘗會祿、

〔延喜式十八式部〕凡正月十七日、五月五日、兩度節不參五位已上待兵部移、無預新嘗會、六位已下官人奪季祿、

〔延喜式二十八兵部〕凡正月十七日、五月五日、七月廿五日三度節不參名簿移送式部、五位已上莫預新嘗會節、六位已下奪季祿、（但兵庫全守本庫、不在奪限、）

〔世俗淺深秘抄上〕一豐明節會時、參議無人數故、小忌參議有勤仕祿所事、其時ハ雖為小忌、先不拜領、最末給之、一拜即退出、

一節會時勤仕祿所參議ハ、令奉行祿事也、而豐明夜、若小忌以前、有欲取祿令退出人者不可給也、必先給小忌也、近代無案內卿等、忩小忌以前來祿所取之云々、甚奇怪事也、內辨不著祿所時、間有此例、

〔日本書紀十五清寧〕三年十一月戊辰、宴臣連於大庭、賜綿帛、皆任其自取、盡力而出、

〇按ズルニ、本書新嘗ノ明文ナシト雖モ、類聚國史新嘗祭ノ條ニ揭グルヲ以テ此ニ收ム、

〔日本書紀二十九天武〕六年十一月己卯、新嘗、　辛巳、百寮諸有位人等賜食、　乙酉、侍奉新嘗神官、及國司等賜祿、

〔續日本紀二十九稱徳〕神護景雲二年十一月壬辰、設新嘗豐樂於西宮前殿、賜五位已上祿各有差、

〔類聚國史九神祇〕延曆十六年十一月甲辰、宴五位以上、賜祿有差、

天長七年十一月辛卯、天皇御神嘉殿、以申如在、　壬辰、宴五位已上於內裏、賜祿有差、　癸巳、賜女王內外命婦祿、

〔文徳實錄二〕嘉祥三年十一月辛卯、帝以諒闇故、不親祭事、　壬辰、右大臣〇藤原良房於侍從局、錄親王已下五位已上見在座者奏之、　癸巳、依大臣所奏擬錄、准新嘗會宴、賜祿有差、

〔北山抄二十一月〕辰日節會事

延喜十一年十一月廿四日、依內裏觸穢、新嘗祭停止已畢、上卿仰外記、於外記局令記五位以上見參、又仰爲濟擬政入京國司等、幷內藏頭藤原高階朝臣、武藏介高向朝臣利春、散位藤原朝臣實頼三人、可預今日見參之由、實頼朝臣侍亭子院、宜免雜役預節會者、

〔政事要略二十六〕奉左金吾藤納言〇藤原定方書

某謹言、伏聞今年依穢停止新嘗會事、准先例於外記局點諸大夫見參、可充給其祿、伏以所謂先例、頗異當時、何者彼例偏是有穢停會、卽爲優恩、隨其見參給祿而已、今年疫瘡流行、庶口苦沈、其五位以上、或其身困篤、或妻子喪上、纔得痊瘉者、容顏氣力猶未如人而勉期點參者、必忍病扶力、爲祿妄進、恐犯禁忌、重招憂患、恐沈困之人、不勝冠帶、若求見參、則此賜無覃、此非朝恩惻隱之本意也、加以近日京洛之中、家々有死喪之穢、縱令貪求之輩、忍穢猥著外記之座者、恐重妨今月廿八日之神事也、伏見近有

恩赦、已蕩大辟以下之罪、由是諸大夫雖怠事無大小不可責求、然則除未得解由之外、唯隨歷名充給此祿、不更點其見參、庶幾雨露恩漏、病樹更榮、吹煦仁深、枯骨再肉、伏惟台閤聊以奉、幸令施行、此則聖朝寬弘之美、台閤陰德之至也、某謹言、

延喜十五年十一月廿一日　式部大輔三善朝臣〇淸行

左金吾大將軍幕下

〔北山抄〕十二十一月辰日節會事

天曆元年十一月十八日、外記朱雀院所賜殿上大夫夾名申大臣、院仰云、申日上可入見參者、大臣許之

康保元年十一月廿日、右大臣奏見參、令爲光仰大臣云、廣平親王〇村上皇子不候座、在御後見儀、而載見參、如何、令申云、問外記懷之、申云、慥不尋舊例、聞參入之由入見參、令仰以不候座親王不蒙處分輙預見參、不可然云々、

〔小右記〕寬仁二年十一月廿二日庚辰、今日節會、〇中略 左大辨道方云、庭積絹綿之由一上下宣旨、而不被參入經奏聞可下給也者、余答云、上達部手祿絹率分也、奏下彼手祿絹之由有古傳、如何、大辨云、即是其絹也者、重不返答、〇異手祿文歟、中略 余退下著陣座、召外記令進見參、外記順孝奉之、見參簿注參議通任、不參之人也、問其由、左右無所申、仍返賜見參祿目錄等令改直、　三年十一月廿五日丁丑、大藏史生某丸進豐明節會祿、〇絹二匹、綿三枚 唯節祿絁歟、申云、卿所定者解文只注絹二匹大革三枚、仰云、手祿如何、申云、只今可奉者率分絹也、予今不奉太不便事也、少時持來、

〔左經記〕長元四年十一月十九日壬辰、舞師以下等給祿、屯食等有差、舞師絹六匹、綿代信乃六段、前料絹十匹、小師絹二匹、綿代信乃四段、國司絹二匹、綿代信乃二段、理髮絹二匹、綿代信乃二段、琴師絹一匹、綿代信乃一段、拍子一匹、今良三人中綿代信乃二段、祿信乃六段、〇各二段 御門守二人各匹絹、小歌絹

一匹、藏人所小舍人絹二匹、殿上祿絹三匹（脱料称）六府陣各屯食一具、小歌所大破子二荷、掃部主殿內侍所玄輝門朔平門和德門瀧口陣脇陣中宮廳等、各大破子一荷、（詩令分給了）

〔康富記〕應永廿九年十一月廿一日甲辰、豐明節會停止、平座被行之、〇中略殿上見參不及乞取之、遲々故□□□□□此見參祿法、淨居庵御草也、祿□□□四位之綿三十屯歟、然五十屯令□□□、予明日尋申入候處、嘉慶度舊章、四位□五十屯ト在之、彼本予見了、其外度々舊章引勘之處、四位三十屯ト見了如何、尙可尋申勘之、向後可書五十屯也、

文安四年十一月十六日甲辰、豐明節會停止、平座也、〇中略見參祿法奏下如例、是日大見參也、不分次非之處、上卿被不審、見參一通不足也云々、二孟重陽者、分次侍從非侍從、至豐明平座者不分次非、只一通、大見參ハ元日節會、又分次非之由返事申之、上卿返答云、中古豐明平座時、當分次非之由存候、雖然近年儀如然歟、又可意得之由返答有之云々、見參被返下、外記（少納言不參也云々）祿法被下辨、辨被下史了、〇中略

今夜大見參也（不分次非）

合見參五位已上

從一位　關白太政大臣

權大納言藤原朝臣宗繼　從四位上藤原朝臣資綱

從四位下平朝臣時兼　正五位上藤原朝臣親長

從五位上藤原朝臣永繼

文安四年十一月十六日

近衞殿（前關白房嗣公）未令蒙內覽宣旨給、仍不奉載之、去重陽平座同之、貞治御例也、

寶德元年十一月廿三日戊辰、豐明節會停止、平座被行之、〇中略

合見參五位已上

關白太政大臣　　權中納言藤原朝臣持季

參議藤原朝臣俊秀　　正四位上藤原朝臣多房奉行

從四位上藤原朝臣親長舞也　　從四位下平朝臣時兼殿上見參許入之

菅原朝臣爲賢少納言　　正五位下藤原朝臣永繼殿上見參許入之

寶德元年十一月廿三日

合見參五位已上

大臣一人料　絹五十疋　綿四百屯　中納言一人料絹二十五疋　綿百五十屯

參議一人料　絹二十四疋　綿百屯　四位四人料　絹二十四疋各六疋　綿二百屯各五十屯

五位一人料　絹五疋　綿二十屯

應下

絹二千疋

綿一萬屯

用

絹百二十四疋

綿八百七十屯

殘

絹千八百七十六疋

綿九千百三十屯

寶德元年十一月廿三日

〔日本紀略三村上〕天暦三年十一月十七日丙辰、豐明宴、天皇不御南殿、十八日丁巳、賜女王祿、

〔日本紀略十一一條〕寛弘元年十一月十九日己巳、女王祿、

○按ズルニ、女王祿ハ節會ノ翌日賜フ例ナリ、

〔延喜式四十造酒〕年料醸酒數

御酒料二百十二斛九斗三升六合九勺九撮、山城國六十石八斗七升二合四勺七撮、大和國廿五石六斗二升二合四勺、河內國廿六石六斗二升二合五勺、和泉國廿石一斗二升五合、攝津國七十九石二斗二升二合五勺、並數隨時增減、就中割二十石付東酒殿、但山城攝津國者營田稻、大和河內國正稅稻、和泉國三石一斗二升五合國營田稻、十七石正稅稻、

御井酒料十九石五斗

糟槽料卌八石○中略

右糟槽以上三種料、二百七十五石一斗、白米十五石、中、米畿內諸國所進、起七月下旬、限九月下旬、司家檢納隨事出充、若有未進、申省移式部省、不預國司於新嘗會節、

譴責

〔日本紀略三村上〕天暦二年十二月一日乙亥、此日去月廿二日新嘗祭不參諸卿、被蒙勅問、十三日丁亥、此日仰掃部寮大膳職召過狀、是去月新嘗祭日掃部寮筵道遲供、大膳職忌火遲出故也、

〔山槐記〕永暦元年十一月十七日辛卯、巳刻參內、○中略催人々、未始刻且始殿上事、今日預不出來、二藺頼保登應殊甚也、事畢遲五節所、如昨、瀧口五六人許參會、自餘遲參、仍召籠畢、又本自不參輩同召籠、但依重科不入上日、

赦宥

〔日本紀略一九條〕正暦四年十一月十五日戊辰、節會、詔徒罪以下原免、常赦所不免者不赦、又賜人爵、如先例、

〔日本紀略十四後一條〕長元四年十一月十九日壬辰、節會、詔大赦天下、徒罪以下原免、常赦所不免者不赦、

諸社新嘗

〔大社志〕祭禮年中行事

十一月中卯日新嘗會、照國造詣神魂社行之、國造自是食新穀、

〔懷橘談下〕杵築○中略

十一月中の卯の日、新嘗會は、大庭にて遂行、

〔懷橘談上〕大庭の保○出雲にいさなみの宮あり、十一月中の卯の日、國造新嘗會も此宮にて遂行はる、

〔出雲國意宇郡大庭神社新嘗會神事記〕やくもたつ、いづものくに、をふばのやしろは、あたかひのむまつぎより、たつみのかたにあたりて、みちのりいちりばかり、をふくさがはのつゝみづたひ、いまむら、をふくさのさと、いさなみのやしろをへて、をふばてふむらあり、このところにて、まいねんしもういちぐわつ二どめの卯の日に、きづきのくにづくり、せんけ、きたりたまひて、にゐなべのしんじおこなはる、ふたかたのいへともに、ぎしきおなじとぞ、よてやつがれがみはべる、せんけのしんじをもてしるす、まづくにづくり、をふばのべつくは、あきあげゆふのすけてふものゝ、やかたにゐまして、その夜のいつゝときごろより、ぎしきはじまりぬ、かめだゆふしんしとて、ちかきむらなる、かめだゆふてふもの、はくちようゑぼしにて、人ふたりめしつれて、火きりのいたてふものを、こもにつゝみもたせきたりぬ、さてきづきのしやにん、をふばのしやにん、あわせて六たり、はくちようゑぼしにて、ようふくくわんてふがくある、かぐらどのにあつまりなみ居けるときに、へぎにさかなをのせ、さけなどいでければ、みな／＼ふためぐりくみはべる、うのゝちかめだゆふ、かの火きりのいた、うつ木のつへをとりいだし、きづきのしやにんにわたしはべれば、うけとりて、いたのよしあしをいふて、なんじはべる、やうやゝして、しうのふし、しきかはとりいだし、そのうへに、はうしようのかみ二まひしきて、いたをのせ、しやにんみたり、ふくめんして、火をきり、くだんのかみにつゝみ、くにづくりのかたへもちゆきはべる、かくのごとくすることみたび、さんまいのいたともに、おなじしわざなり、

それより、かのかめだゆふへいたのむくいとして、もち、そのほか、さけさかなのあたへたまわりける、

かめだゆふ、きづきのしやにんにいふよふ、このもち、こぞよりはまたちいさくしてうすし、いにしへよりのさだめにて、しらけ二斗のもちなり、このおもさ、貳斗目はなきよふにおぼゆなぞ、さまざまいふてなんじけることや丶ひさし、これもむかしよりのならはせとぞ、そのうちに、けふぜんとて、へぎにい丶をうづだかくもりいだせば、またかめだゆふいふよふ、このい丶は、ひとりへ、壹しよう貳がうのさだめなるに、はなはだすくなしとて、これもおなじくなんじければ、ひくわんのものども、またい丶をもりかさねける、やう〳〵にかのもちは、こもにつ丶み、い丶はふくろにいれければ、ぞふに、すひもの、さけなぞ出しはべる、とかくして、ときうつるうちに、おくのかたよりごしようでん〳〵と、ふれければ、くだんのふたしなは、つれたるひとにになはせ、かめだゆふはかへりける、それより、くにづくりは、ながへのこしにて、ともまわりぐして、をふばのやしろへのぼりたまひ、ひやくばんのまひ、にいなべのしんじあり、ほどなくかへりまして、またようふくくわんにても、おなじぎしきあり、まづくにづくり、くろのみころもかんむりにて、たか間にいでゐまし、みぎには、をふばのかんぬしあきわけだいせん、べつくわ、このふたりは、しろきぬりぎぬのさいふくにかんむりし、ひだりのかたには、きづきのしよづくわん、おなじいしように、たてゑぼしきてゐはべる、そのつぎには、ちうぐわんひだりおりに、たまむしのはひにてなみゐける、ときにながへ、くわへのてふし、かわらけなぞとりいだし、くにづくりへみきすゝめはべる、おはりて、おかまのしんじてふものはじまりぬ、かまのうへに、たわらをのせ、へいはくをたてならべ、べつくわ、いなたばと、あけのへいじとをになひ、つへをつき、かなへのほとりをあらたなし、あらたなしととなへて、三たびめぐりはべる、(是かなへは、ほひのみこさあまくだり給ふ時より出きにけりさぞ、)それよりやつあし

のつくへに、きんらんをうちかけて、くにづくりのおまへへすゝめ、またことのいたてふものとりいだしはくちようのおやにんとうたり、さゆふになみゐ、またひとりはさかきをもちいづる、これよりひやくばんのまひはじまる、

さかきの葉二まいづゝ、かみにてまついたるを、べつくわより、くにづくりへまいらす、さゆふの御手にもちながら、つくへのうへにて、ふたたびづゝ、さゆふの葉をあわせたまいて、おようくわんへわたし給ふ、このぎしき、はじまるとひとしく、かのなみゐたるおやにん、ことのいたを、むめのづわへにてたゝきうたふ、そのうたにいわく、

發聲　カッカッとゝなふ、そのよのおやにん、クウクウといふ、カッカックウクウ、カッカックウクウ、かくとなふること、すじうへん、いそじばかり、さかきの葉とりたまふとおぼしきころ、くにづくりたちたまへば、すむかみのうたぞはじめける、そのうたにいわく、

發聲　すむかみを、よき日にまつりし、あすよりも、

同聲　あすよりも、あけのころもに、けごろもに、けきよう、

（やつがれ按ずるに、此うた梁塵愚按抄神樂歌に、弓立てふ中に、すべ神はよき日まつればあすよりはあけの衣をけ衣にせんと、其注にすべて神は皇神なり、よき日は吉日也、あけの衣は五位のきぬ也と、又魚彦が説にけ衣は常衣也、萬葉集に秋風は日にけに吹ぬるといゝ、今俗にけにもはれにもなどいへると同じ、不斷着衣にせんとなり、）

かくうたふこともまたすおうへんにして、さかきのまいもすみはべれば、うたもやめ、かのつくへもとりおきける、それよりおきがはとりいだし、くにづくりのまへにおきければ、やがてみそおばかりのおの子、みずをよくし、はだかにて、おろきふぜしにふくめんして、おはうのせんに、おらひよねをのせてまいらせける、はしとり、なめそめたまひて、間もなくべつくわかんぬし、かわるがわるひきりのいたをいだしければ、くにづくり、ふんでをとりて、新嘗會御神事御火切板、又裏ニ寛政七年卯十一月廿日と、しんぎようさふにて、さんまいのいたにかき給ふ、またかのしはふ

のせんをいたゞきたまへば、まちゐたるはだかおの子、せんとりかつ手へ入る、かくてめでたく、ゑんじもおわりける、これやつがれが見きくまゝをゑるすのみ、たがひあらば、のちのかうじ、たゞしたまへかし、

寛政七年卯十一月廿日　田代恒親書

〔懷橘談上〕佐久佐出雲○の里に八重垣の明神在す、十一月中の卯の日には、八重垣を毎年修理し奉り、東西に榊を立、清酌を灌奉る、

〔張州府志五熱田〕熱田社四序祭奠略

十一月新嘗祭儀同新年祭、上酉日祠官等散齋、神明及鳥居插榊、同二月、丑日國府宮獻紙米錢、同二月、寅日時亥大宮進饌、同二月、但供新穀飯及新酒、卯日新嘗祭、謂案新嘗者、所以報賽田事也、然異邦報田祖先農以秋冬、見詩豐年集傳、我邦亦然矣、伊勢島大神宮神嘗祭用秋九月、朝家及諸社新嘗以冬十一月、

〔御園皇大神宮記〕尾張國中嶋郡清須中嶋宮御園神明

十一月十五日神嘗之神事、是則當國ヨリ寄所神領初納ヲ以神供トシ執行事也、

〔張州府志二十二津島〕牛頭天王社

秋縣祭十一月中丑日、時方仲冬、謂之秋縣者、蓋以此年秋米薦之神故耳、春縣與此祭、新年新嘗之遺意也、

〔尾張名所圖會後編一中島郡〕正一位眞墨田神社

新嘗會十月晦日より十一月三日まで、新年祭に同じ、新嘗宴新年祭に同じ、御神樂國府宮所々に影燈を設け、神前に庭燎をたき、篝拍子和琴笛等を吹、酉刻よりはじめ、丑刻に終る、

〔尾張名所圖會後編二中島郡〕尾張大國靈神社

新嘗祭九月十八日子刻に行ふ、神主神官社僧神前に出仕、神主内陣に新穀の大御饌を調進す、

〔鹿嶋大神宮恒例祭事之次第記〕當社年中行事

八月廿七日大宮祭〇中略

右外有新嘗會之祭事、八月始之丑ノ日、始テ新米之御供、付醴酒奉供神前、大宮司祭也、沼尾坂戸息栖三社ニテモ、早朝大宮祭畢テ、沼尾坂戸兩社ヘハ、大宮司神前與利直樣出仕ス總役者之社家、大禰宜大祝部等皆出仕之事、息栖宮ヘハ、檢非違使宮介總追中神大神小別當三禰宜出仕ス、如御本社之、右於三社モ、今日始テ新米之口神供新嘗會祭、是時御本社仁慈門外柱左右付、竹ニテ高七尺ニ棚結、幣六本宛左右ニ十二本相立ル、棚結立ル竹之數モ六本宛十二本、其竹ノ末口ニ幣ヲ付ル、棚ノ幣串六本之内、備神供御酒、是則大嘗會之時、悠基主基兩神殿之邊立、天神地神ノ有御祭事例表スル乎、子細多ニヤ略之、

〔香取志上〕祭祀之事

新嘗八月初子日也、正殿御扉を開奉、五箇度大祭祀の一也、其式既に擧が如し、俗是を古飯(フルイヒノ)神事と云ひ、丑日を新飯(ニヒイヒノ)神事と云は誤れり、然ど丑日祠職家より始て、遠近村里の民に至迄、當年の新稻を持來て奉事夥し、依て世俗新嘗と思へり、〇中略此日側高社に新嘗祭あり、神宮のは既に云へる如く子日也、正月七日神符を奉て是を祭る、其文に八月新飯御祭禮之事とあれば論なし、然ど此夜の祭祀に、當年の新穀を不奉は、何時より誤り來にけむ不知、口訣に十一月中卯日、奉新稻於三百四座云、新嘗祭、是は內裏の新嘗祭也、

〔善光寺道名所圖會二〕武水別神社

抑當社年中行事の中にも、例年八月放生會、十一月新嘗會は大祭なり、兩月ともに朔日より十五日迄神主齋あり、氏子十三ヶ村の內にて、十一月は頭人五人を定む、こは每年十一月十五日の夜に入り、神鬮を以て翌年の頭當りを撰む、當れる輩御供田として米を作る、凡五斗俵百俵餘、耕作以下俵に納る迄、婦人の手をかけず、不淨の肥しを不用といふ、神酒は手作にて醨らぬ酒なり、

臣産新嘗

〔日本書紀神代二〕高皇産靈尊、〇中略取矢還投下之、其矢落下、則中天稚彥之胸上、于時天稚彥新嘗休臥之時也、中矢立死、

〔日本書紀通證六〕今按、新嘗祭名、是借朝家也、（中略）稚彥欲取葦原中國、而私納貢稅、妄嘗新穀、欺天罔上、神其誅之乎、

〔書紀集解神代二〕按、嘗新穀以祭諸神、天子之事也、天稚彥已叛、僭行此禮、

〔古事記傳八〕大嘗、〇中略書紀に、天稚彥新嘗休臥と有は、爾比那閉は上下なべてするわざなること、上に云如くなれば、天稚彥もしつるなり、新嘗字は姑く借るのみぞ、然るを此神借朝家之儀と云る說は、古に昧し、

〔日本書紀神代二〕一書曰、時神吾田鹿葦津姬、以卜定田號曰狹名田、以其田稻、釀天甜酒嘗之、又用渟浪田稻、爲飯嘗之、

〔常陸國風土記〕筑波郡

古老曰、昔祖神尊、巡行諸神之處、到駿河國福慈岳、卒遇日暮、請欲寓宿、此時福慈神答曰、新粟初嘗、家內諱忌、今日之間、冀許不堪、〇中略更登筑波岳、亦請容止、此時筑波神答曰、今夜雖新粟嘗、不敢不奉尊旨、爰設飮食、敬拜祗承、

〔丹後國風土記〕田造郷

所以號田造者、往昔天上降臨之時、豐宇氣大神致而天香語山命與天村雲命、天降于當國之伊去奈子嶽、天香語山命與天道姬命共祭大神、及欲新嘗、井水忽變而不能炊神饌、故云泥眞名井、於是天道知命拔葦以占大神心、故名云葦占山也、

〔日本書紀二十四皇極〕元年十一月丁卯、天皇御新嘗、是日皇太子大臣各自新嘗、

〔萬葉集十四東歌〕下總國相聞往來歌

爾保抒里能、可豆思加和世乎、爾倍須登毛、曾能可奈之伎乎、刀爾多氐米也母、

未勘國相聞往來歌

多禮曾許能、屋能戸於曾夫流、爾布奈未爾、和家世乎夜里氏、伊波布許能戸乎、

〔萬葉集略解十四下〕にふなみはにひなめなり、十一月公の新嘗祭有時は、國の廳にても同じ祭すれば、其國の里長より上は、皆廳に集ふべし、玄かればその里長などの家にても、妻の物忌して在を、忍び來る男の戸をおしひらかんとする時、其妻のよめる也、上にかづしかわせをにへすともとよめるは、家々にて爲なれど、事はひとし、

〔袖中抄十六〕かづしかわせ

顯昭云、かづしかわせとは、下總國にかづしかと云所あり、其所のわせと云也、〈○中略〉今按〈○中略〉にへすともとは、ゐなかにはじめてわせをかりてものして、里どなりのものおつまりてくふをば、にへすともと云也、

〔古事記傳八〕大嘗、書紀には新嘗とあり、〈○中略〉萬葉十四下總國歌に、爾保杼里能、可豆思加和世乎、爾倍須登母、曾能可奈之伎乎、刀爾多氏米也母、〈歌意は、かの爾倍をする節は、いみじく齋愼して、門をも閉て、外人をかたく入ず、されども、かなしく思ふ男の來ならば、門外に立せてはおきたらじ、內へ入てむと、志のせめて深きよしをよめるなり、書紀に齋庭之穗とあるも、新嘗はいみじく齋愼むゆゑにいふなり、〉と詠る如く、元は朝家のみならず、下々までなべて爲事なり、〈○中略〉萬葉十四東歌に、多禮曾許能、屋能戸於曾夫流、爾布奈未爾、和我世乎夜里氏、伊波布許能戸乎、〈爾布奈未の未は、米の誤か、さまれかくまれ爾比那閉を、東國にかく云るなり、(中略)の意は、かの爾閉をする所へ夫をやりて、妻の家に留り居てよめるなり、人の許へ爾倍にゆきたるあさにても、家の戸をさして愼齋ふことゝ見ゆ、さる時に來て戸を押て開むとするは誰ぞと告めたるなり、〉この爾布奈未は爾比那閉の東言にて、上に引る下總歌の爾倍と、全同事と聞ゆるを以て、爾閉は新饗の約言なるを知べし、

〔政事要略二十六〕中卯日新嘗祭事

延長四年十一月十五日新嘗祭、乃立圍碁局親王座東、辨元方召掃部令鋪疊於局東、侍從厨盛居、大

藏卿與元方賭牛、與左馬頭賭馬、此時少納言伊扶因勸坏着座、見後別座、左右隨勝行酒、

〔江家次第十二神事〕齋王卜定事

十一月中卯日以前、不食新年穀米事、

〔日本諸手船四〕釋話、十一月中卯日新嘗會也、初奉新穀於上下神祇、秋稼至此齋王禁新、良有以哉、吾神宮祠官等、九月十六日十七日已前固禁止之、制限有差、理則無違、可不戒愼乎、

〔鋸屑譚下〕與略云、嘉禾始熟、而農夫先嘗其枝、此乃惟農夫の事のみ、有志の士豈其ゑからんや、孟秋天子嘗新、月令廣義云、沈約四時珍新、未曾得薦祠者不得嘗、況神國之人乎、鎮座本紀云、未至新嘗會、不食新穀、蓋古之制也、

〔薩戒記〕應永卅二年十月廿三日己丑、左頭中將隆夏朝臣示送曰、內膳司申、御膳屋并御膳具等、去月廿四日燒亡了、大炊御門可新造之間、御訪事申狀、如此事貫首可申沙汰哉如何、予答曰、尤可被申沙汰也、以件申狀可被奏院也者、

内膳司御炊岩屋丸謹申

右每日不闕朝餉御膳屋、并家具私廳屋等造御訪事、去月廿四日類火ニ悉炎上之間、每日調進神供之上者、一日モ無御膳屋者、爲神事有恐、有其憚者哉、所詮十一月朔日忌火御膳也、依無御膳屋、神供家具等之忽可及闕如間、造可被下御訪於由預申御沙汰、爲全日供神事、言上如件、

應永卅二年十月日

廿六日壬辰、左頭中將隆夏被來示曰、先日所示合之內膳司御炊事、昨日伺申院之處、仰云、此事公家不可知食、可申入道殿者、爲之如何、予云、然者、貫首不可被知之、付武家奉行可申之由、可被仰御炊也者、中將云、此事我執申之條不叶叡慮云々、此事何事乎、只依忌火御膳可及違亂、爲貫首身周章許也云々、

〔明月記〕正治二年十一月廿二日、今日予尾以狀隨身男申、無衣裳由、五節染衣著用何事有哉之由下知之間、帶劒參院御所、不見相具之、一町許出門外之後見之、令解弃、北面物等見了、心浮耻也、淺猿淺猿、

建暦三年十一月五日、五節於高陽院殿可被行之由、今日有御消息云々、兩童定御覽歟、是中院行幸料云々、於中院行幸者已絶久、於事便宜者、適被摸大內節會渡御他所、太無益歟、是只末代之猶不應歟、　八日、自大內出御之時、大忌陣不供奉、自里內御時大忌近將參之由有沙汰云々、又卯日著小忌人、辰日著位袍出仕有其例由有沙汰云々、如此事總不知及之、偏以仰天之由答了、　十五日、雖異樣所乞取櫛十裹、裹薄樣進入於五節所、乞得之由申也、實風流櫛殘等也、殊有恩容云々、　十六日、參內候鬼間方、以治部大輔知長給櫛數裹、已爲每年事、依承此事所參入也、抃悅退出、

嘉祿元年十一月七日、參室町殿、(中略)仰云、大將(○藤原教實、時年十七、)五節出仕、被催參入御覽、可出仕歟、參入夜進退頗有煩哉、申云、少年御出仕、御共得心之人少、而物忩夜陰、於事不審候、只御覽日御出仕可宜候歟、殿上人不廻北陣之間、殿上邊極物忩、旁難叶候歟、大略申止之、晩陰退出、　二年十一月十五日丙寅、褰衣法師昇五節所、東北門武士搦取、剝衣可打付宿所由稱云々、

寛喜二年十一月十九日丙午、夜深宰相(○藤原爲家)來、五節之間日夜寓直、頻參御前、(童御)東洞醉日連枝兩納言不出衣、其衣遠而不委見、(白色歟、例衣歟、不見分、)二獻盃、左府被奉讓右府之間、忽被參御座邊間、失度踞居云々、參入夜亂舞、依貫首責甑、資雅朝臣出白薄樣云々、(此事實俊頗不同心、只可歎由示合、有何事乎由答了、頭中將顯亮、資雅、實俊、有資等、偏示合諸事之間、褰衣狂女等稱弟子參內云々、奇怪也、)卯日三方御隨身殊折花列居、左大將御隨身裝束甚以不法云々、節會訪五節所、歸著之間、內辨被催一獻之間、通方卿立揖退出、見之公氏欲競立、內辨咳止給、家例不吉由微音雖申、不聞入退出給之間、愁行其後事、(不似年來之體、勤此事、被人身之高名也、)但不下小忌大盤、不移大歌座云々、宣命使依夜深略曲折揖早速步、內辨不異舞妓拜、拜了見宣命、(是初度之義存歟、)資雅出仕殊叶叡慮、於事有其譽云

云、寅日持夏扇、赤扇也、此事頗拔群事歟、予有所聞、今年頻示合宰相之由聞之、彼中將只可持由、一日寄所相計也、今日猶參內、殊候御前賜櫛云々、殿下北政所、著君今夜御退出云々、親長依俊御好交衣、昇殿入東階間、經臺盤未著奥座、總不及進退之沙汰、只如田夫野人任意之道路也、如此者爲公卿名字不便事歟、因玆實世朝臣不昇殿、公長又在御後邊、伴五節所云々、今年露臺不敷假板、欄檻之內簀子、殿上人二行相對立而舞、依宮御方御簾之前、雜人不立、而太殿重云々、隆綱朝臣調進御服、打御衣之體異様奇怪之由被咎仰、俄調改云々、參入夜、紫御指貫、御衣出淺御沓、寅日於二條小門內妻戶御覽、袒、殿下令候給、宰相候近邊云々、實俊相具力者法師三人、實持之下人、腰令指竹筒、殿上淵醉亂舞之時、重長云、今年自下侍昇絶其籍云々、

〔平戶記〕仁治元年十一月十五日甲辰、今日豐明節會也、　十七日丙午、申刻許、依都督亞相招引行向、是五節帳棚可見之由先日令示也、先是大府卿幷舍兄三品等會合、見風流帳棚等、但內裏大殿殿下、入道殿御方等皆以昨夕進了云々、餘所未多少了、又進見了之後、聊盃酌、五節童女部任、各云々、上童也、著柳袙五重紅單衣、紅袴生袴、取杓、下仕神崎遊女等又召寄、各給帳棚、坏酌之間、發郢曲一聲、其後被出五節所帳之餘分、居士方坏御宮數種樣、只知五節所、兩人之分分別如此、是又童女持來也、其後倚又被出口帳、已及深更大府卿歸了、其後遊女等歸了、

〔明月記〕承元二年十一月廿三日、傳聞事、〇中略伊時解紐、雅行節會夜出仕舞云々、皇后宮淵醉、公卿以下不入與由上皇〇後鳥羽有逆鱗、右大將〇藤原公繼閉門、定輔卿突與、殿上人忠清、信能、範茂少々恐懼云々、今年五節總非無爲歟、

〔百練抄七六條〕仁安三年十一月廿一日、内大臣被解右大將、又師長卿被解大納言左大將、依不參五節帳臺試也、

〔雲州消息中末〕上啓

右五節之間、何等事候哉、江州舞姫如洛妃云々如何、新宰相童女被相挑之由承之、君霜物緒奈止様乎令思給、返々鬱申侍、暇限未満、不能参内侍、對寒月不凝想像侍、心静参謁可盡心事也、可然之時猶可有恩向也、謹言、

十一月日　　侍従源

謹上　新少將殿

五節之間、指無別事侍、江州舞姫如洛妃、新宰相童女被相挑之間、已背先例乎、此間之事等誰人說乎、尤不審也、且又尊下無参内之間、無其興之由人々被申侍、承御暇日數可参啓侍、謹言、

即時　　左近衛少將平

〔安齋隨筆前編三〕五節の袷　五節袷に薄青の裝束の端袖白きを著たるあり、是は冠直衣とて、冠に直衣を著したる也、裝束拾要抄云、直衣は禁色を聽たる人著之、春冬表向キ志々羅有裏、又云、裏何れも平絹、若年の人は紫、成人の時次第に薄くなし、ふるひは薄縹にもする也云々、彼袷は直衣の表白きに、薄縹の裏付たるが、裏の縹色白き表にうつりて、薄青に見ゆる也、端袖は白き衣を半幅折返して、直に裏に用ゆるゆゑ、表裏うつり合て、端袖は半幅白く見ゆる也、又舞姫顏に扇をかざしたるが、扇すき徹りて顏の見ゆるあり、是を透扇とて、扇の板を切りぬきて紗を張りたるなり、透扇の事雅亮裝束抄飾抄等に見ゆ、以上貞丈云　又衣冠の人袍を肩ぬぎ、裾を大脇帶に狹み、立舞あたりに、色々彩色したる小き香包の如くなるもの多く落散たる體也、是は舞姫の童御覽の時、ツゲの櫛を色々の紙して包たるを、舞姫が持て御前にさし置を、御目の留まりたる童の櫛をば召留られて、其外は其儘にてさし置れたる體也、是紀ノ宗直高橋若狹守御厨子御預リが說也、右の袷は平家時代の古書なり、

〔今物語〕近き御代に、五節の頃ゆかりにふれて、たれとかやの御局へ、或女のやんごとなき忍びて

參りたりける事ありけるを、ちときこしめして、いかで御覽せんと思しけるまゝに、俄におしいらせ給ひけり、どりあへずともし火を人のけちたりければ、御ふところよりくしをいくらも取いでゝ、火びつの火にうちいれ給ひたりければ、おくまで見えて、よく〳〵御らんじけり、御心のふせい與ありていとやさしかりけり、

〔榮花物語七鳥邊野〕八月〇長保二年ばかりになれば、〇中略うちわたりには、五節りんじの祭などうちつづき、いまめかしければ、それにつけてもむかしわすれぬ、さべききんだちなど參りつゝ、女房などものがたりしつゝ、五節の所々のありさまなどいひかたるにつけても、清少納言など出あひて、せう〳〵のわかき人などにもまさりて、をかしうほこりかなるけはひをなはすてがたくおぼえて、二三人づゝつれでぞつねにまゐる、

〔枕草子五〕宮〇一條后定子の五せち出させ給ふに、かしづき十二人、〇中略をみのきんだちは、どにゐてものいひなどす、五せちのつぼねをみなこぼちすかして、いとあやしくてあらする、いとことやうなり、其夜まではなほうるはしくこそあらめとのたまはせて、さもまどはさず、きちやうどものほころびゆひつゝ、こぼれ出たり、小兵衞といふがあかひものとけたるを、これをむすばゞやといへば、さねかたの中將よりてつくろふにたゞならず、

あし引の山ゐの水はこほれるをいかなるひものとくるなるらん、といひかく、年わかき人のさるけせうのほどなれば、いひにくきにやあらん、返しもせず、そのかたはらなるおきな人たちも、うちすてつゝ、ともかくもいはぬを、みやづかさなどはみゝとゞめてきゝけるに、久しくなりにけるかたはらいたさに、ことかたよりいりて、女ばうのもとによりて、などかうはおはするなどぞさゞめくなるに、四人ばかりをへだてゝゐたれば、よく思ひえたらんにもいひにくし、まして歌よむとしりたらん人の、おぼろげならざらんは、いかでかとつゝましきこそはわろけれ、よ

む人はさやはある、いとめでたからねど、ねたうとこそはいへど、つまはじきをしてありくもいとをかしければ、

うすごほりあわにむすべるひもなればかざす日かげにゆるぶばかりを、と辨のおとゞといふにつたへさすれば、きえいりつゝえもいひやらず、などか〳〵とみゝをかたぶけてとふに、すこしことゞもりする人のいみじうつくろひ、めでたしときかせんと思ひければ、えもいひつゞけずなりぬるこそ、中々はぢかくす心ちしてよかりしか、おりのぼるおくりなどに、なやましといひいれぬる人をもの給はせしかば、あるかぎりむれたちて、ことにもにず、あまりこそうるさげなめれ、まひびめはすけまさのむまのかみのむすめ、そめどのゝ式部卿の宮○爲平親王の御おとうとの四のきみの御はら、十二にていとをかしげなり、はての夜も、おひかづきいくもさわがず、やがてしゞう殿よりとほりて、清涼殿のまへのひがしのすのこより、まひ姫をさきにて、うへの御つぼねへまゐりしほどをかしかりき、

〔増鏡八飛鳥川〕又の年○文永八年正月に、しのびて新院○後深草と御方わかちの事し給ふ、はじめは法皇○後嵯峨御負なれば、御勝むかひに上達部みな五節のまねをして、色々のきぬあつ妻にて、おもひの川に舟のよれかしとはやしてまゐる、新院引つくろひてわたり給ふ、御みきいくかへりとなくきこしめさる、

〔今昔物語二十八〕尾張守□□五節所語第四

今昔□□天皇ノ御代ニ、□□ノ□□ト云フ者有ケリ、年來舊受領ニテ、官モ不成テ沈ミ居タリケル程ニ、辛クシテ尾張ノ守ニ被成タリケレバ、喜ビ乍ラ任國ニ忩ギ下タリケルニ、國皆亡ビテ田畠作ル事モ露无リケレバ、此ノ守本ヨリ心直クシテ身ノ辨ヘナドモ有ケレバ、前々ノ國ヲモ吉ク政ケレバ、此ノ國ニ始メテ下テ後、國ノ事ヲ吉ク政ケレバ、國只國ニシ福シテ隣ノ國ノ百姓雲

ノ如クニ集リ來テ、岳山トモ不云、田畠ニ崩シ作ケレバ、二年ガ内ニ吉キ國ニ成ニケリ、然レバ天皇モ此レヲ聞シ食テ、尾張ノ國ハ前司ニ被亡サレテ、无下ニ弊ト聞食スニ、此ノ任二年ニ成ヌルニ吉ク福シタナレト被仰ケレバ、上達部モ、世ノ人モ、尾張吉キ國ニ成タリトゾ讃ケル、然テ三年ト云フ年五節被宛ニケリ、尾張ハ絹糸綿ナド有ル所ナレバ萬ヅ不乏、況ヤ守本ヨリ物ノ上手ニテ、物ノ色共打目針目皆糸ト目安ク調へ立テ奉ケルニ、五節ノ所ニハ常寧殿ノ戌亥ノ角ヲゾシタリケルニ、簾ノ色几帳ノ帷、打出シタル女房ノ衣共微妙ク縫重子タリ、此コソ色弊カメレト見ユル无シ、然レバ極カリケル物ノ上手ニコソ有ケルナリト皆人モ讃ケル、傅童ナド他ノ五節ヨリモ勝リタレバ、殿上人藏人ナド、常ニ此ノ五節所ノ邊ニ立寄リ氣色バミケルニ、此ノ五節所ノ内ニ、守ヨリ始メテ子共類親共皆屛風ノ後ニ集ヒ居タリ、而ルニ此ノ守不難ヌ人ノ流ニテハ有ケレドモ、何ナル事ニテカ有ケム、此ノ守ノ祖モ此ノ守モ、藏人ニモ不成ズ、殿上モ不被許ザリケレバ、内邊ノ事ヲ傳テモ不聞ズ、況ヤ見ル事ハ无カリケリ、然レバ子共モ露不知ザリケリ、其レニ殿共ノ立樣造樣、宮々ノ御方ノ女官共ノ唐衣褶襷著テ行キ、殿上人藏人ノ出シ褂ヲシ樣物ノ指貫ヲ著、樣々ニ裝ゾキテ通ルヲ、此ノ五節所ノ内ニ集リ居テ、只此等ニ目ヲ付テ追シラガヒテ、簾ノ許ニ出重ナリテ見ケルニ、殿上人近ク寄レバ屛風ノ後ニ逃隱ル丶、鬪前ニ逃ル人ハ後ニ逃ル人ニ指貫ヲ被蹈テ倒ル丶ニ、後ノ者モ亦躓テ倒ル、或ハ冠ヲ落シ、或ハ先ヅ我レ疾ク隱レムト迷ヒ入ル、入ナバ然テ曲リ居タルベキニ、亦少ノ者モ渡レバ追シラガヒテ出テ見ル、然レバ簾ノ内ノ樣惡キ事无限シ、若キ殿上人藏人ナド此レヲ見テ咲ヒ興ジケリ、而ル間若キ殿上人共宿直所ニ居テ各云合スル樣、此ノ尾張ノ五節所ハ、物ノ色ナド微妙クシ立タル物カナ、童傅モ今年ノ五節ニハ此レゾ勝レタル、但シ此ノ守ノ一家ニ内邊ノ事ヲ未ダ聞ニモ不聞ズ亦不見ザリケレバ、露ノ事ヲ戀ガリテ追シラガヒテ出テ見ル、亦我等ニ恐レテ近ク寄レバ隱レ騷グハ、嗚呼ニ極キ

物カナ、去來此レ謀テ彌ヨ恐迷ハサム、何カ可爲キト、一人ノ殿上人ノ云ク、亦或ル殿上人ノ云ク、恐シ様有リト、何ニ云ハムト爲ルゾト問ヘバ、彼ノ五節所ニ行テ、得意立テ可告キ様ハ、此ノ五節所ヲバ殿上人達極ク咲フゾ、然カ知リ給ヘ、此ノ五節所咲ハムトテ殿上人達ノ謀ル様ハ、有ト有ル殿上人此ノ五節所ヲ恐サムトテ、皆紐ヲ解テ、襴表衣ヲ脱下テ、五節所ノ前ニ立並テ、歌ヲ作テ歌ハムト爲ル也、其作タル様ハ、鬢タヽラハアユカセハコソヲカセハコソ愛敬付タレト、此ノ鬢タヽラト云ハ、守ノ主ノ毛清ク鬢ノ落タルヲ、此ル鬢タヽラシテ五節所ニ若キ女房ノ中ニ交リ居給タルヲ歌ハムズル也、アユカセハコソ愛敬付タレト云ハ、守ノ後向テ歩セ給カ□□ヤカナルヲ歌ハムズル也、此ク告申ス事ヲバ實トモ信ジ不給ハジ、其レハ明日ノ未申ノ時許ニ、殿上人藏人ノ有ル限リ、皆褊テ襴表ノ衣ヲ皆腰カラミテ、長若キトモ不云ズ、此レヲ歌ヒテ寄來ル者ナラバ、此ニ申ス事ヲ實也ケリト信ジ給ヘト告ゲムト思フゾト云ヘバ、異殿上人、實ニ和君行テ利口ニ云ヒ聞セヨト云ヒ契テ散ズ、此ク云フ殿上人、寅ノ日ノ未ダ朝彼ノ五節所ニ行テ、守ノ子ナル若キ者ニ會テ、得意立此ノ謀ツル事ヲ細々ト語リ聞スレバ、極ク恐タル氣色ニテ聞キ居タリ、云畢ツレバ、益无シ、君達モゾ不意ニ見ル、和ラ密ニ返ナム、此ク告聞エタリト異君達ニナ努々不宣ソト云テ去ヌ、此ノ子、祖ノ許ニ、新源少將ノ君コソ御シテ此ル事ヲナム告給ツルト云ヘバ、祖ノ守ノ主此レヲ聞クマヽニ、然々テト云マヽニ、只振ヒニ振ヒテ、頭ヲワナヽカシテ、夜前君達ノ此ノ歌ヲ歌ヒシヲ、何ニヲ歌フニカト怪ク思ヒシハ、然ハ翁ヲ歌ヒケルニコソ有ケレ、何ノ罪ノ錯ノ有レバ、此ク翁ヲバ歌ニ作テハ可歌キゾ、尾張ノ國ノ代々ノ國司ニ被亡テ失ニタルヲ、天皇ノ弃ガテニ成給ヒタレバ、何カハセムト思テ、極キ術ヲ深キ吉キ國ニ態立テ奉ルガ惡キカ、亦此ノ五節奉ル事ハ、己ガ好テ望テ奉ルカハ、天皇ノ押宛テ被責レバ、難堪ケレドモ奉ニコソ有レ、亦鬢ノ无キ事ハ、若ク盛ナル齡ニ鬢ノ落失タラバコソ鳴呼ニモ可咲クモ有ラメ、年ノ七十ニ成タ

レバ、鬢ノ落失タラムハ可咲キ事カハ、然レバヤハ鬢タヾラトハ可歌キ、亦己ヲコソ、悪クハ打モ殺シ、獄モ蹈マメ、何カデ帝王ノ御マス王宮ノ内ニテ、紐ヲ解キ裼テハ狂ヒ可歌キゾ、更ニヨモ然ル事不有ジ、其レハ其ノ少將ノ君ノ、和主ノ出立モセズ籠タレバ、恐ザムトテ虚言ヲ被云ルナリ、近來ノ若キ人ハ、思遣モ无ク、此ク虚言ヲ爲ル也、然樣ニハ異人ヲコソ恐シ謀ラメ、己レハ賤クトモ、唐ノ事モ此ノ朝ノ事モ皆吉ク知ル身ヲバ、然モ否不知給ジ、若キ君達ノ口ニ任セテ恐シ給ラナメリ、異人ハ被謀ルトモ、翁ハ更ニヨモ不被謀ジ、若シ恐スラム樣ニ、實ニ王宮ノ内ニテ、然カ紐ヲ解キ脛ガラミシテ狂テバ、己ニ依テ其ノ主達ハ重キ罪ニ當ナム者ヲ、穴糸惜ト云テ、糸筋ノ樣ナル脛ヲ股マデ褰ゲテ、扇ギ散シテ噪リ居タリ、此コソ腹立トモ、夜前東ノ面ノ道ニテ此ノ君達ノカタエシ氣色ハ、然モシテムカシト思ケレバ、漸ク末ノ時ニ成ル程ニ、何カ有ラムト胸ツブレテ思ヒ合ヘリケルニ、末下ル程ニ、南殿ノ方ヨリ歌ヒ喤テ來ル音ス、ソヽ來ニタナリト、集テ舌ヲ丸カシ、顔ヲ振リツヽ恐居タルニ、南東ヨリ此ノ五節所ノ方ニ押凝テ來タルヲ見レバ、一人トシテ尋常ナル者无シ、皆襴表ノ衣ヲ尻許マデ脱下タリ、皆手ヅカラカヒツヽ寄來テ寄懸リテ内ヲ臨ク、五節所ノ前ノ疊茵ニ、或ハ沓ヲ脱テ居、或寄臥シ、或ハ尻ヲ懸ケ、或ハ簾ニ寄懸リテ内ヲ臨ク、或ハ庭ニ立テリ、亦皆諸音ニ此ノ鬢タヾラノ歌ヲ歌フ、此ク恐ス事ヲ知タル若キ殿上人四五人コソ、簾ノ内ニ有ト有ル者ノ恐ヂ迷フ氣色ヲ可咲トモ見レ、案内モ不知ザリケル長殿上人共ハ、此ク此ノ五節所ニ有ト有ル者共ノ恐テワナヽクヲ、極テ怪ト思ヒケリ、然テ守ハ、然コソ然ル事不有ジト道理ヲ立テヽ云居タリツレドモ、有ト有ル殿上人藏人ノ皆裼テ此ノ歌ヲ歌ヒテ寄來ル時ニ、此ノ少將君ハ幼ク御スレドモ、人ノ爲ニ後安キ心御シケレバ、實ヲ告給フニコソ有ケレ、此ク告ゲ給フ事无カラマシカバ、我ガ事トモ不知テ耄居ラマシ、哀也ケル君ノ御心カナ、千年萬年平カニ榮エ給ヘトテ、手ヲ摺テ祈リ居ルニ、此ノ君達一人直キ者モ无ク、醉樣垂テ裼タル人共

ノ簾ノ内ヲ臨ク時ニ、守今ゾ我ハ被引出テ老腰被蹈折ルト思ヒケレバ、迷テ屛風ノ後ニ逼入テ、壁代ノ迫ニワナヽキ居タリ、子共親シキ族ナドハ、皆重ナリテ迯隱テ餘ヒ居タリ、然テ殿上人皆殿上ニ返ヌ、其ノ後ニ尙若君達ヤ有ニト見セテ、一人モ无ク皆御シヌト云ケレバ、其時ニゾ守ワナヽクヽヽ這出デヽ、餘音ニテ、何ヲカ翁ヲコソ咲ヒ給ハメ、帝王ノ御爲ニ此ク无禮ヲ至セルハ奇異キ事也、此ノ主達ハ必ズ事有ナム者ゾ、吉シ見ヨ、己等天地日月明ラカニ照シ給フ神ノ御代ヨリ以來此ル事无シ、國史ヲ見ルニ敢テ不記サズ、極ク成ヌル世ノ中カナト仰ギ居タリケリ、隣ナル五節所ノ人共ノ臨テ可咲ト思ケルマヽニ、後ニ關白殿下ノ藏人所ニ參テ語ケルヲ聞繼テ、殿原宮原ニ聞エ畢テ被咲ケル事无限シ、其ノ比ハ、人二三人モ居タル所ニハ、此事ヲナム語テ咲ヒケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔本朝無題詩二〕見五節舞姫　法性寺入道殿下〇藤原忠通

豐明之會其來尙、仙樂聲々依舊齊、金翠粧嬌琴曲奏、綺羅衣重舞腰低、禮儀堂上霜初白、罷宴樓前月欲西、不醉此中爭去得、黃醅清酒足相携、

〔榮花物語三十六根合〕ながれてはやき月日にて過もてゆけば、五節〇天喜四年に中宮の女房、梅けいせちをふくんでといふ詩をさうぞきたり、梅のおり物香染こうばいのくれなゐに匂ひたるなど也、みどりのもんをおびたりとてえたるみどりのきぬきたり、殿上人ずんじなどしていとをかし、からぎぬのひもなどにやがてこのしをむすびたり、やへこうばいのからぎぬなど色々にをかし、

〔和漢朗詠集上〕紅梅

梅含雞舌兼紅氣、江弄瓊花帶碧文、

〔萬葉集十九〕天平勝寶四年十一月二十五日新嘗會肆宴應詔歌六首

天地與相左可延牟等、大宮乎都可倍麻都禮婆貴久宇禮之伎、

右一首大納言巨勢朝臣

天爾波母五百都綱波布萬代爾國所知牟等五百都々奈波布、

右一首式部卿石川年足朝臣

天地與久萬氏爾萬代爾都可倍麻都良牟黑酒白酒乎

右一首從三位文屋智奴麻呂眞人

島山爾照在橘宇受爾左之仕奉者卿大夫等、

右一首右大辨藤原八束朝臣

袖垂而伊射吾苑爾鶯乃木傳令落梅花見爾、

右一首大和國守藤原永手朝臣

足日木乃夜麻之多日影可豆良家流宇倍爾也左良爾梅乎之奴波牟、

右一首少納言大伴宿禰家持

〔古今和歌集雜十七〕五節のまひ姫を見てよめる　よしみねの宗さだ

天つ風くもの通ひぢふきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

〔後撰和歌集雜十五〕五節のまひ姫にて、もしめしとゞめらるゝことやあると思ひ侍けるを、さもあらざりければ、　藤原滋包がむすめ

くやしくぞあまつをとめと成にける雲ぢたづぬる人もなき世に

〔金葉和歌集雜九〕源頼家が物申ける人の、五節に出て侍けるを聞て、まことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのくもりなき世に、とよみてつかはしければ、返しによめる、

源光綱母

日かげにはなき名たちけりせみ衣きてみよとこそいふべかりけれ

〔年中行事歌合〕三十番　右　五節十一月中丑　經賢僧都

たち出る乙女の姿あらはれて月にたどらぬ雲のかよひぢ

右五節と申は、清御原の天皇〇天武吉野の宮にましまし丶時、天女くだりて琴の音を感じて、五度袖を返して舞ふて歌をうたふ、是五節の始なるにや、

三十一番　右　豐明節會十一月　滋堅

新嘗や昨日のはつほ納置て今日御酒給ふ雲のうへ人

右豐明節會と申は、今年の稻を神に奉て、其後君もきこしめし、臣にも給故に、節會を行はる丶也、凡豐明とは、總じて節會の名なり、今日に限べからず、

〔續古事談〕一王道后宮　五節ニ上東門院〇一條后彰子ヘ人々參テアソビケルニ、右大辨定賴朝臣カハラケトリテヨメル、

日影サス雲ノ上人コザリセバトヨノ明リヲイカデシラマシ

〔江談抄〕一公事　五節時瀧口殊饗應事

又問云、五節時瀧口殊令饗應事何故、被命云、無指例、只周防守通宗、通俊兄也獻五節之時、相語瀧口等、以美麗裝束等各令與也云々、爲仕五節之役也、

〔空穗物語〕菊の宴　左大將ぬし五せちいだし給て、うちよりまゐりの夜、

も丶しきにさふるをとめの袖のいろもきみしそめねばいかゞとぞみる、かひなきものになむときこえ給へり、あて宮、

ひとしほもそむべきものかむらさきの雲よりふれるをとめなりとも、おほしかくるこそなめけれなどのたまふ、兵部卿みこ、をみにあたり給て、うちより、

いろふかくすれる衣をきる時はみぬ人さへもおもはゆるかな、いづれのをりにかはわすれきこえむ、あないみじやとなどきこえ給へり、あてみや、

あだ人のさはにつみつゝすれる色になにゝあやなくおもひいづらむ、なれならでは、えの給はじかしなどきこえ給ふ、

〔嘉永年中行事〕十一月新嘗祭、中卯の日なり、十月晦日晩より御神事にて、祭の二日前より御潔齋となる、當月朔日淸涼殿にて忌火の御飯を供す、前日に兼て祭につかうまつるべき諸臣を神祇官にトはしめ、ト合の人々に小忌の衣を給ふ、當日戌刻許帛御袍をめされ南殿に出御なる、額の間より葱華輦にめし、月花門中和門代をへて、神嘉殿に入御なる、職事御湯殿の事を奉仕す、小忌の公卿神座を設く、亥刻許神事の御服に改められ、御巾子に幘を引廻さしめ給ふ、御手水ありて神殿の御座に著しめ給ひて、夕の神饌を奉らせ給ふ、終りて内に入御なり、丑刻許二たび出御なり、曉の神饌をはり、小忌の公卿神座を撤す、夫より本宮に還幸なる、月花門迄の間、道すがら近衞千歳を歌ふ、朝餉にて解齋の御粥を供す、事をはりて常御殿へ入御なる、此間御神事を解るなり、新嘗祭は朝家の大祭にて、昔より祭の事はあれ共、其始詳ならず、中古より絶たりしを、元文五年十一月廿四日再興せらる、されども神嘉殿はなくて、紫宸殿にて行はれし、寛政三年神嘉殿を立られて初て行幸あり、

〔おもひのまゝの日記〕十一月一日ごろより、五節のひしめきまた世のいとなみに見えたり、新嘗祭の行幸、しむ膳の儀ことにとゝのへさせ給、大みの屋に碁うちなど、ふるきためしいとおもしろし、中のうしの日は五節のまゐりなり、公卿のも受領のも、みなみめかたちをえらばせ給へば、えならぬ舞姫どもおはし、やがてうへ宮仕さいはひきいづるためしいとをかしき事どもなり、御前の心み御覽の日などはえ〳〵しくもてなさせ給、東宮中宮のえんすいいとおもしろし、

色々のくしぞもかざりたるたなど、心もことばもおよばず、

〔歌林四季物語十一〕新嘗のまつりも、この月の公事にとりかさねていみじく、ことしのいねこめ神明にさゝげ、御門もきこしめしあぢはひ給ふ事、やんごとなしや、神樂のいみじさよ、さへのをのこ朝倉の男など、それ〳〵のかずさだまり、主上もならせおはしまして、內侍所の御拜などある御事なり、所作の陪從人長などたち申て、樱人あさくらふたつがひつかうまつりて、すけのないし藤のこと奏したてまつる、どりものからかみの拍子などありて勸盃あり、さてこもまくら千歲早歌など有て、おの〳〵所作いみじく神さびたり、かねてまがくなどいふ事侍るもたゞならぬ事なり、とよのあかりのせちは元日のをも申せど、うちまかせて豐明の節會にこそ侍れ、

〔長明四季物語〕十一月、〇中略とよのあかりの御節には、御神樂とてめでたき御おほせごとなるに、才のをのこ神々しき出たち、まきくわんのひぢもちいかめしき物から、さくら人朝倉うたふ聲も雪をふくみたる舞人のよそひ、さゆる夜半の空、さらでも神わざはあはれふかゝるべきに、いみじうあさましきまで神さびたり、明ゆくまゝにみいらかのともしも、かげは日のにはひにとられ、たきすさみたる衞士のたく火さびしう見ゆる物から、ひんがし山にし山、物のくまながら、はづれ〳〵より見えて、山はかゝみをかけたるやうに、雪も朝日にひかりわたりて、そゞろさむき朝氣の空なりて、ゝらゆきかふ人のかほも、よべの事にたづさはるかぎりおもひやられて、目もまみもはれて、ねぼうし打かたぶきたる、かぶしかたちをかしき物なるべし、

附相嘗祭

相嘗(アヒナメ)ハ相新嘗(アヒニヒナメ)ノ略語ナリ、新嘗祭ニ先チテ新穀ヲ神祇ニ供セラルヽ祭儀ニシテ、大神宮ノ神嘗ニ同ジ、神嘗ヲモ相嘗ト云フニテ知ルベシ、祭神ハ京中及ビ山城大和河內攝津紀伊ノ五國ニ在ル所ノ七十一社ナリ、十一月上ノ卯日、神祇官人諸社ノ祝ニ幣帛ヲ頒チテ、各〻其社

名稱

ニ奉ゼシム、而シテ祭祀ノ料ハ、各、其國ノ正稅及ビ其社ノ神稅ヲ用キシム、此祭ノ始メテ史ニ見エシハ天武天皇ノ五年ニ在レドモ、朝綱ノ弛廢ト共ニ、此祭祀ノ禮典モ早ク衰ヘシニヤ、後世ハ僅ニ賀茂社、齋院及ビ日前國懸、住吉等ノ諸社ニテ行ハレシ事ノ見エタルノミ、齋院ノ相嘗ハ少シク異ナル所アリ、翌日御神樂ヲ行ヒ、公卿殿上人參集シテ饗饌賜祿等ノ事アリ、

〔伊呂波字類抄〕安諸社 相嘗祭アヒニヘ

〔類聚名義抄〕十佛上 相嘗アヒムベ

〔公事根源〕十一月 相嘗祭

相嘗と書て、あひむべの祭とよむなり、

〔玉勝間〕一 中臣壽詞

相嘗は阿比爾閉と唱ふべし、爾閉を牟倍と唱ふるは、後世の音便にくづれたる唱也、大嘗も大爾閉なるを大牟倍といふと同じ、さて此相嘗は、天皇と相伴に新饗し奉る意の名にて、俗にいはゆる相伴のこゝろばへなり、さる故に、此祭は必しも其神社の尊き卑きにもよらず、必預り給ふべく思はるゝ神にも、預り給はぬ多し、これ殊に故有て預り給ふは預り給ふなるべし、其神七十一座おはしまして、四時祭式に見えたり、其中に上に引たる左京二條坐二座神は、大社の列にだに入給はざるに、此祭に預かり給ふことは、新嘗に殊なるゆゑある神なるべし、

〔倭訓栞〕前編二安 あひむべ　令式等に相嘗と書り、あひむべとよむべし、公事根源に見えたり、むべはにへなり、中にあるには多くむとといへり、恐らくは神嘗大嘗などの間に行はるれば、もと間嘗の義なるべし、相も間も義通へり、又公にては其諸神を皆親く祭りましぬるよりいふ歟、令に、季秋神嘗祭、仲冬上卯相嘗祭下卯大嘗祭と見え、式に載する所七十一座、其社の神主各自

に官幣を受て祭る也、後漢書の注に、正祭外、十月嘗稻等、謂之間祀と見えたり、九月神嘗祭を、相嘗と記せるあり、桓武紀に、延暦九年九月、奉伊勢大神宮相嘗幣帛と是也、中右記に、相嘗祭供嘗年新穀事也、是神今食新嘗祭同儀之故也と見え、令義解に、新嘗謂嘗新穀以祭神祇也、朝則諸神之相嘗祭、夕則供新穀於至尊也と見ゆ、

○按ズルニ、後漢書章帝紀ノ注ニ、正祭外、五月嘗麥、立秋嘗粢盛酎、十月嘗稻等、謂之間祀トアルハ、即チ四時禘祫ノ外ノ祭祀ヲ云フ、倭訓栞ニ、此ヲ以テ間嘗ノ義ニ引證セルハ誤ナリ、

〔日本書紀通證三十四〕延喜講書私記曰、調庸荷前先祭神祇、號相嘗祭、後奉山陵、號荷前也、

祭日

〔令義解二神祇〕仲冬上卯相嘗祭

〔拾芥抄中末年中行事〕十一月上卯日相嘗祭

祭神及幣帛

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

相嘗祭神七十一座

太詔戸社二座〈坐左京二條〉

絹四匹、絲二絢二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鰒一斤四兩、堅魚五斤四兩、腊八斤、凝海藻六斤、鹽二升、海藻四斤、筥二合、𤭖缶水瓮山都婆波小都婆波筥𤭯酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各四口、酒稻百束〈神稅〉

鴨別雷社一座

絹二匹、絲一絢一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鰒十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤、凝海藻三斤、鹽一升、筥一合、𤭖缶水瓮山都婆波小都婆波筥𤭯酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏酒盞筥坏陶臼各二口、酒稻五十束〈神稅〉

鴨御祖社二座

絹四匹、絲二絇二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鮑一斤四兩、堅魚五斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、腊八升、鹽二升、筥二合、𨑌缶水瓮山都婆波小都婆波筥𤭯酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻百束、神税

鴨川合社一座

絹二匹、絲一絇一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤、腊四斤、鹽一升、筥一合、海藻凝海藻各二斤四兩、𨑌缶水瓮山都婆波小都婆波筥𤭯酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

松尾社二座

絹四匹、絲二絇二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、鮑一斤四兩、堅魚五斤四兩、腊八斤、海藻四斤、凝海藻六斤、鹽二升、筥二合、𨑌缶水瓮山都婆波小都婆波筥𤭯酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻百束、神税

出雲井上社一座

絹二匹、絲一絇一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、堅魚二斤十兩、鮑十兩、海藻二斤、凝海藻三斤、腊四斤、鹽一升、筥一合、𨑌缶水瓮山都婆波小都婆波筥𤭯酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

水主社二座

絹四匹、絲二絇二兩、綿六屯、調布七端三丈八尺、庸布二段二丈六尺、木綿三斤四兩、堅魚五斤四兩、鮑一斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、鹽二升、腊八斤、筥二合、𨑌缶水瓮山都婆波小都婆波筥𤭯酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻百束、神税

片山社一座

絹二匹、絲一絇一分、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤、筥一合、𤭖缶水瓮山都婆波小都婆波筥𨖏酒垂𠤱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏酒坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

木嶋社一座

絹二匹、絲一絇、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤四兩、筥一合、𤭖缶水瓮山都婆波小都婆波筥𨖏酒垂𠤱等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、正税

已上八箇社坐山城國、

大和社三座

絹六匹、絲八絇四銖、調布十二端一丈六尺、庸布三段二尺、木綿八斤四兩、鰒二斤堅魚九斤四兩、腊魚十九斤十四兩、海藻凝海藻各十三斤四兩、鹽二斗、筥三合、𤭖缶水瓮山都婆波小都婆波筥𨖏酒垂𠤱等呂須伎高盤筥坏小坏片盤短女坏陶臼各四口、酒稻二百束、神税

石上社一座

絹二匹、絲一絇一兩、綿三屯、調布三端四丈、庸布一段一丈三尺、木綿一斤一兩、鮑十斤十兩、海藻二斤、凝海藻三斤、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、筥一合、𤭖缶水瓮山都婆波小都婆波筥𨖏酒垂𠤱等呂須伎高盤片盤短女坏小坏酒坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

大神社一座

絹三匹、絲三絇四銖、調布六端八尺、庸布一段一丈四尺、木綿四斤二兩、鰒一斤五兩、堅魚五斤、與理刀魚三斗、鹽一斗、鱅魚海藻凝海藻各六斤十兩、筥二合、𤭖缶水瓮山都婆波小都婆波筥𨖏酒垂𠤱等呂須伎高盤片盤小坏短女坏筥坏陶臼各二口、酒稻二百束、神税

宇奈足社一座

絹二匹、絲一絇一兩三分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、海藻二斤十兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、筥一合、瓱缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

村屋社一座

絹一匹、絲一絇三分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑十兩、堅魚三斤、腊一斤、海藻一斤十兩、鹽一升、筥一合、瓱缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱高盤片盤短女坏筥坏小坏酒垂匜等呂須伎陶臼各二口、酒稻五十束、神税

穴師社一座

絹二匹、絲一絇一分、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿一斤、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤、鹽一升、筥一合、瓱缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

卷向社一座

絹二匹、絲一絇一兩三分、調布三端四尺、庸布一端一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤十兩、鹽一升、筥一合、瓱缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

池社一座

絹二匹、絲一絇一兩一分三銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鮑十兩、腊四斤、堅魚二斤十兩、海藻二斤十兩、鹽一升、筥一合、瓱缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

多社二座
絹二匹、絲三絇四銖、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鰒一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、海藻二斤十兩、鹽一升、筥二合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波筥𨏍酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

葛木鴨社二座
絹二匹、絲三絇四銖、調布六端八尺、庸布三段、木綿一斤十兩、腊四斤、鰒十兩、堅魚二斤十兩、海藻二斤十兩、鹽四升、筥二合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波筥𨏍高盤片盤酒垂匜等呂須伎短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻百束、神税

飛鳥社四座
絹八匹、絲十二絇、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤八兩、鰒二斤八兩、堅魚八斤十兩、腊二斗、海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波筥𨏍酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏酒坏陶臼各八口、酒稻二百束、百八束神税、九十二束正税

甘樫社四座
絹八匹、絲十二絇、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤八兩、鰒二斤八兩、堅魚八斤十兩、腊五升、海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波筥𨏍酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏酒盞陶臼各八口、酒稻二百束、正税

高鴨社四座
絹八匹、絲十二絇、綿十二屯、調布十二端、庸布六段八尺、木綿六斤十兩、海藻八斤八兩、凝海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波筥𨏍酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏酒盞陶臼各八口、酒稻二百束、正税

高天彥社一座
絹二匹、絲一絇一分二銖、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、綿三屯、木綿十三兩、鰒十兩、腊四斤、堅魚二斤十兩、鹽一升、海藻凝海藻各二斤十兩、宮一合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波宮甋酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、(神税)

金峯社一座
絹二匹、絲一絇一分、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段、一丈四尺、木綿十三兩、鰒十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻凝海藻各二斤十兩、宮一合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波宮甋酒垂匜等呂須伎高盤片、盤短女坏小坏宮坏陶臼各二口、酒稻五十束、(神税)

葛木一言主社一座
絹二匹、絲一絇、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈四尺、木綿十三兩、鹽一升、鰒一斤十兩、腊四斤、堅魚二斤、海藻凝海藻各二斤、宮一合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波宮甋酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏宮坏陶臼各二口、酒稻五十束、(神税)

火雷社二座
絹四匹、絲二絇、綿六屯、調布六端二丈、庸布二段二丈八尺、木綿二斤四兩、鰒二斤四兩、堅魚五斤四兩、海藻四斤、凝海藻六斤、腊八斤、鹽二升、宮二合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波宮甋酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏宮坏小坏陶臼各二口、酒稻百束、(神税)

已上十七箇社坐大和國

枚岡社四座
絹八匹、絲十二絇、綿十二屯、調布十二端、庸布六段、木綿六斤八兩、鰒二斤八兩、堅魚八斤八兩、腊二斗、海藻凝海藻各八斤八兩、鹽四斗、宮四合、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波宮甋酒垂匜等呂須伎高盤片

盤短女坏筥坏小坏酒壺陶臼各八口、酒稻二百束、正税

恩智社二座

絹二匹、絲三絇四銖、調布三端四尺、庸布一端一丈三尺、木綿一斤十兩、鰒十兩、堅魚二斤十兩、腊四升、海藻二斤六兩、鹽一升、筥二合、甖缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏小坏筥坏陶臼各二口、酒稻五十束、神税

弓削社二座

絹四匹、絲四絇、綿四屯、調布六端、庸布四段、木綿二斤、鰒一斤四兩、堅魚二斤、腊四升、海藻四斤、鹽四升、筥二合、甖缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各四口、酒稻二百束、正税

已上三箇社坐河內國

住吉社四座

絹四匹三丈、絲四絇八兩四銖、綿三屯三兩、木綿三斤十兩、調布八端三丈四尺、庸布一段一丈三尺、庸人潔衣絁二匹、鰒二斤八兩、堅魚六斤十五兩、腊一斗、鹽五升、海藻九斤十兩、凝海藻九斤十五兩、筥四合、甖缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各八口、酒稻二百束、神税

大依羅社四座

絹八匹、絲十二絇、綿十二屯、調布十二端、庸布六段、木綿六斤八兩、鰒二斤八兩、腊五升、堅魚八斤十兩、海藻八斤八兩、凝海藻八斤十兩、鹽四斗、筥四合、甖缶水瓮山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各八口、酒稻二百束、正税

難破大社二座

絹四匹、絲六絇、綿六屯、調布六端、庸布一段二丈三尺、木綿二斤、鰒十兩、腊五升、鹽一斗、堅魚四斤四兩、海藻四斤四兩、凝海藻四斤四兩、筥二合、匏缶水瓫山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤筥坏小坏短女坏陶臼各六口、酒稻百束、正稅

下照比賣社一座

絹二匹、絲三絇、綿三屯、調布三端、庸布一段一丈七尺、木綿一斤八兩、鰒十兩、堅魚十兩、腊五升、海藻二斤十兩、凝海藻二斤二兩、鹽一升、筥一合、匏缶水瓫山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、正稅

新屋社一座

絹二匹、絲三絇、綿二屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿十斤三兩、鰒十兩、堅魚二斤十兩、海藻凝海藻各三斤十兩、腊四升、鹽四升、筥一合、匏缶水瓫山都婆波小都婆波筥瓱酒垂匜等呂須伎高盤片盤筥坏短女坏小坏陶臼各二口、酒稻百束、正稅

廣田社一座

絹二匹、絲一絇、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鰒一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、筥一合、匏缶水瓫山都婆波小都婆波酒垂匜等呂須伎高盤片盤短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

生田社一座

絹二匹、絲一絇、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鰒一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、筥一合、匏缶水瓫山都婆波小都婆波高盤片盤短女坏匜等呂須伎酒垂筥瓱筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

長田社一座

絹二匹、絲一絇、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鰒一斤十兩、堅魚二斤十兩、
腊四斤、鹽一升、筥一合、海藻二斤十兩、𤭖缶水瓫山都婆波小都婆波酒垂匜等呂須伎筥𤭯高盤片盤
短女坏筥坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

已上八箇社坐攝津國

日前社一座

絹四匹、絲三絇四銖、綿八屯五兩、調布六端八尺、木綿二斤八兩、酒稻百束、神稅

國懸社一座

絹四匹、絲三絇四銖、綿八屯五兩、調布六端八尺、木綿二斤八兩、酒稻百束、神稅

伊太祁曾社一座

絹二匹、絲三絇、調布三端一丈七尺、木綿十三兩、酒稻百束、神稅

鳴神社一座

絹一匹、絲三絇、調布三端、木綿十三兩、酒稻五十束、神稅

已上四箇社坐紀伊國

右預相嘗祭之社如前、十一月上卯日祭之、其所須雜物、預申官請受、付祝等奉班、酒料稻者用神稅及正稅

〔延喜式臨時祭三〕凡因幡伯耆兩國所進相嘗祭料、荒筥八十八合、國別四十四合、每年以神稅交易、十月以前差使進上、

〔令義解神祇二〕仲冬上卯相嘗祭、謂大倭、住吉、大神、穴師、恩智、意富、葛木鴨、紀伊國日前神等類是也、神主各受官幣帛而祭也、〇中略

前件諸祭供神調度、及禮儀齋日、皆依別式、

〔公事根源十一月〕相嘗祭　上卯日

神祇令には、大倭、住吉、大神、穴師、恩智、意富、葛木鴨、紀伊國日前等也、神主おの〳〵官幣をうけて、とりおこなふ、ちかき比は絶てさたなし、

〔日本書紀 二十九 天武〕五年十月丁酉、祭(○祭原作奉、據書紀集解改)幣帛於相新嘗諸神祇、

○按ズルニ、相新嘗トハ即チ相嘗ヲ云フナリ、

〔東大寺成巻文書 十〕大倭國天平二年大税帳

城上郡(○三字缺、今補之)

大神神戸(○中略)合肆仟肆佰漆拾伍束漆把、用肆佰伍拾陸束肆把、祭神廿六束、新嘗酒料百束、(○中略)

穴師神戸(○中略)合壹仟肆佰參拾陸束、用漆拾肆束、祭神廿四束、神嘗酒料五十束、

十市郡

太神戸(○中略)合壹萬陸佰玖拾束玖把、用伍拾捌束、祭神八束、神嘗酒料五十束、

城下郡

池神戸(○中略)合漆拾漆束、用伍拾肆束、祭神四束、神嘗酒料五十束、

村屋神戸(○中略)合伍拾肆束貳把、用伍拾肆束、祭神四束、神嘗酒料五十束、

山邊郡

大倭神戸(○中略)合壹仟肆拾壹束、用壹佰肆束、祭神四束、神嘗酒料百束、

添上郡

菟足神戸(○中略)合壹佰壹拾束參把、用伍拾肆束、祭神四束、神嘗酒料五十束、

○按ズルニ、大神、穴師、太、池、村屋、大倭、菟足ノ七社ハ、上文所收延喜式ニ見エタル如ク、相嘗祭ニ預ル神ナリ、此餘大税帳ニ、添御縣、往馬、龍田、巻向、長谷山口、志癸御縣、忍坂、他田、生根、佐爲、十市御縣、石村山口等ノ神戸ヲ載セタレドモ、神嘗酒料ヲ注セズ、延喜式ニ據ルニ、皆相嘗祭ニ預ラザ

ル神ナリ、由テ思フニ、本文神嘗トアルハ蓋シ相嘗ノコトナルベシ、而シテ本書振神戸ニ神嘗酒料ナキモノハ、當時未ダ相嘗ニ預ラザリシナルベシ、姑ク附記シテ後考ニ備フ、

〔朝野群載八別奏〕民部省符　山城國司

應レ宛二正稅稻貳佰五拾束一

右被二太政官去月十七日符一偁、得二神祇官解一偁、來十一月三日〈〇丁卯〉祭、相嘗料、依レ例所レ請如レ件、省宜二承知依レ件宛定一者、國宜二承知依レ件宛一レ之、符到奉行、

從五位下少輔兼內記藤原朝臣良文、　正六位上行少錄奉

延喜十九年十一月一日

〔延喜式六齋院〕相嘗祭〈若七月以前定二齋王一者、當年祭之、八月以後者、待二明年一祭、〉

神座二前〈下上兩社料、南面東上、〉

五色帛各四尺、酒二斗、〈供神料、請二所司一、〉

裝束料

小忌宜旨采女各一人、別絹一疋、綿三屯、貲布一丈五尺、采女代七人、絹三丈、貲布一丈五尺、〈並用二卜食者一〉司人三人、貲布一丈五尺、

使院司一人〈卜食〉絹一疋、綿三屯、布一端、宮主絹一疋、綿一屯、舍人一人布一端、仕丁一人庸布一段、

右每年十一月上卯日、鷄鳴齋王潔齋、遙拜奉二幣於神社一、夕時設二上件神座於齋殿一、座別設二齋王供承座一祭レ之、奉幣使還後、院司幷宮主各給二衣一領一、明日夕給二酒饌於院裏男女一、賜レ祿各有レ差、勅使至二社奉幣之後、於二社前一給二兩社禰宜祝及忌子等祿一、同二四月祭例一、其用途料、絹廿疋、調綿二百屯、布卅端、預前申レ官請二大藏省一、

〔師遠年中行事十一月〕上卯日相嘗祭事〈齋王遙拜事、明日齋院神樂事、〉

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年十一月七日、今日以往去月八日以後、世間有穢、疑是左大將殿小兒非常之間、其穢遍滿天下云云、而有御卜處、穢氣者、仍以往神事皆延引、宇佐例幣、五日〇癸卯齋院相嘗、今日山科祭、皆以延引、 十八日、酉時許、著小忌參內、節會御裝束如常、〇中略殿下仰云、今夕齋院相嘗御神樂也、殿上人多可參入者、式人召人仍多參齋院、予依入召人召、著小忌令參入、御神樂如例、新大納言家節會了後、令陰陽寮勘申廿二社奉幣日時、明後日未二點、予雖爲行事、依參齋院、語付藏人辨時範云々、則奏者、夜半御神樂了後歸家、

天永二年十一月廿五日、參院付家光取御氣色、齋院相嘗、今日依世間穢氣延引、來月三日依當上卯、欲申行處、當國忌、准據之例尋大外記師遠處、國忌日无行神事例、中卯十五日可行之由奏聞、仰云、尤可然、件十五日可行者、 十二月三日、〇辛卯今日齋院相嘗、依當上卯、雖可被行、當國忌、仍延引、中卯日可行之由下知本院了、去十一月間依世間穢延引也、但先尋例之處、十二月无相嘗例、然而又无止神事不可默而止、仍十二月可被行之由先日議定了、 三年十一月一日甲寅、曉頭藏人辨來云、夜前川合社廻廊中門等燒亡、寶前一字雖免炎上、御體早奉渡貴布禰社中了、但下社氏人等皆穢了、又歸參下御社、奉每日御供了、仍下御社穢了、然者明日相嘗、可被行哉可延引哉、可量申由有院宣也、雖中殿下、今日御著陣之日也、不內覽不吉事、仍院令沙汰御也、予申云、本社穢了、不可延引歟、但有穢之時、有相嘗例可被尋問歟、以此旨可被奏之由答了、是被問人々云々、又藏人辨送書札云、只今可馳參院者、仍著直衣馳參、則大藏卿爲房參入、仰云、相嘗祭事、更〻不思食得、爲沙汰遣召左大臣民部卿之處、有所勞、但可被尋例由雖申、已先例不詳也、今間召上下社司等被問例處、申云、本社相嘗、全不覺延引事、但於齋院相嘗者、齋王有月障時、或用中卯例事也、近者去年依下野守明國穢、十二月被行也、於本社相嘗者、全不延引之由所申也、重仰云、然者本社有穢之時、有行相嘗例哉、社司等申云、件例又不慥覺者、但於四月祭者、雖有穢供齋不止、於公家使々齋王參者所被止也、准彼例行相嘗可宜歟、就中四月

祭ハ重事也、相嘗ハ次事也者、付此說引勘文德實錄第六之處、仁壽四年(齊衡元年也)四月癸酉、以有穢事、停賀茂祭、但山城國齋供如常者、件穢ハ下社中死人之由、又見外記勘文也、依彼例、去康和二年四月、下御社穢時止公家祭、本社供祭如本者、可依彼例由、予大藏卿共所申也、重仰云、止相嘗祭、與穢人供齋之間、更不思食得如何、重可量申、先被問明法博士信貞之處、燒亡穢ハ无甲乙、仍件氏人等雖參本社、於社者不可有穢、但觸失火所人、忌神事七ヶ日見式文、今度社司氏人等一人不殘乍驚參川合社間、觸失火穢也、仍不可供奉神事也、然者以上社氏人、令勤下社相嘗如何、社司等申云、上下社作法各別也、隨又氏各異也、古今未有其例、全不可有之由所申上也、如此之間事未決、予申云、早被行御卜、可被決事歟、神慮難知、人力不可及也、大藏卿同此定、仰云、夜已及深更、諸司相叶哉如何、申云、早々被催何不參仕哉、就中相嘗明日上卯也、卯時進神供之由社司等所申也、仍今夕事可決歟、重仰云、早々可被行軒廊御卜者、唯今大外記依召所候也、早可催諸司由且以下知了、逐電退出、則著束帶參內、史俊兼所召具也、神祇祐兼俊、陰陽助家榮所參入也、中臣官人唯今不能催廻、但非伊勢事之時、雖无中臣官人被行常例也、藏人辨來仰云、鴨御祖社司幷氏人等皆以觸穢、而明日本社相嘗祭被行歟、延引如何、宜令神祇官陰陽寮卜申者、件仰詞藏人辨書卜也、予令敷膝突、召藏人辨仰可敷座之由、前庭敷座了、居水火令召官寮、(大外記傳宣)入從西中門、官寮著座、先召兼俊下仰詞、仰可卜申由、召家榮朝臣以詞委仰、件旨仰可占申之由、兼俊持來御卜形、披見之處、明日不快也、被延引吉也、家榮進卜形、見之明日被行吉也、被延引不快也、事已分兩方、但若官寮相異者、可被依神祇官御卜由兼申請也、其故者如此神事、先可用本官御卜之故也、藏人辨仰云、上御社相嘗可止哉否事、重可令卜者、是下社一定可止之故、上社一所被行、頗有其疑也、以詞仰下之所、又官卜申云、如初被延行吉也、寮占申云、如初明日被行吉也、已又相異也、御卜形四通、召外記筥入之、付藏人辨令奏、但今日殿下御著陣日也、先申吉書一通之後、申案內可內覽之由示含了、及曉更內覽奏院了、仰云、上下社相嘗幷齋院相嘗、可用中卯日被仰下

了、社司等候陣頭、永作旨退歸了、相嘗祭ハ、供當年新穀事也、仍齋院相嘗ハ、隨本社祭可被行之故、无論被延了、　十四日丁卯、今日賀茂上下社行相嘗、但齋院相嘗延引、依齋王月障事也云々、

元永二年十一月朔日癸卯、今日依相嘗供新穀、　二日庚辰、臨未刻、右大臣(源雅實)○内大臣(藤原忠通)○右大將(藤原家忠)○右衛門督、治部卿、別當、右兵衛督、左大辨、參集仗座、予加其座頭、辨顯隆朝臣、下社(賀茂)○解幷官外記勘文云、可定申、右大臣給之、一々見下、予披見之、社解云、去夜戌刻、火出從御庫、及正殿、中門廻廊舍屋廿宇已燒了、○(中略)今日齋院相嘗後朝御神樂延引云々、

大治二年十一月五日辛卯、齋院相嘗也、御所堂重堀川宅也、有奉幣云々、使阿波守有賢朝臣、陪膳頭中將忠宗朝臣、役送右少辨宗成者、

主典義基云、卜定七月以後時、明年四月有此事、四月以前有卜定時、當年十一月有此事也、仍此齋院當年十一月相嘗被行也、

四年十一月十一日乙卯、賀茂相嘗也、　十二日、今夕齋院相嘗後朝御神樂云云、午後雨止、雖有其催、稱所勞由不參也、是御寺追補之由、藤氏人心中大歎之故也、

右少辨示云、御神樂依雨止之、但左衛門督、左兵衛督、左宰相中將、右兵衛督參仕、給社司祿、入夜退出、

廿四日戊辰、今夕齋院御神樂、去辰日依雨延引也、依催參齋院、左衛門督實行卿、改小忌著位袍被參、左兵衛督、左宰相中將、大貳、先於東廊北座有饗饌事、上達部殿上人著此座、三獻汁物等事、諸大夫□□□□□以下著南簀子敷座、(敷圓座於南階以東、)□□間之東幷西打出、(阿波守有賢所課、)神殿南庭敷御神樂座、南屏北邊敷殿上人座、大略如內侍所御神樂、(東西對座、下臈庭燎、)篳　召人殿上人左中將宗能朝臣、(本拍子、庭火朝倉反、)右少將公敎朝臣、(末拍子、今度初取之、強無相違歟、)同公隆朝臣、左少將忠基朝臣、笛、丹後守資賢、(庭火彈之、)篳　能登守季兼、(庭火篳篥、)地下、(元輔、清仲、敦兼、定範、淸仲弟朝倉反、兵庫助範基琴、)近衛舍人、(近方、忠方、助定、遠家、公方、兼利、)人長兼信、人々著座、先三獻取物了一獻、前張

星令歌其駒之後、殿上人取祿給之、月漸昇事了退出、當齋院初御神樂、　五年十一月四日癸卯、賀茂相嘗依式日被行也、　五日、依有院宣、申時許參齋院相嘗後朝、社司參進御棚二荷、長官有實以下職事昇之、立御所東面方、社司著客殿、長官同著之、給饗祿、及深更於神殿南庭有御神樂、忠方近方執拍子、予依神身屈觸人々早以退出、向一條留、予著束帶參入、追而左兵衞督著直衣、但直衣可參事云々、

〔吉記〕治承四年十一月十六日甲子、齋院相嘗會後朝日去八御神樂、依雨延引、次辰日來廿可相行之由、前治部卿被申之、予依服暇不及申沙汰、示付藏人少輔了、

〔山槐記〕治承四年十二月二日庚辰、齋院相嘗御神樂云々、去月延引、自新院○高倉被催、上達部殿上人、可取拍子云々、依上皇○後白河御子有嚴重儀歟、後聞中御門大納言實家右兵衞督家通參入云々、

〔仲資王記〕元久元年六月九日、明年四月入御○齋王賀茂諸司、明後年入御本院、仍可有御參社、其間事見式并儀式云々、委旨彼院主典互爲重代之者、相嘗祭并鎭魂祭間子細可被召問歟之由被申之云々、

〔薩戒記〕應永卅三年十月廿七日丁亥、今日左近大夫景藤來曰、來月二日相嘗祭也、先自明夜有神事、件時奏樂、笙篳篥笛、各第一者奉仕之流例也、故景秀死去之後、景清爲政乎、當時笛第一者在住吉、仍用代、代勤一役至去年無相違、而當年景房第二者也相語社務欲勤之、已經院奏、可有勅許云々、其故近日北野社有産穢、去廿日也景親景清景藤景興等、皆從彼社神事之間、觸彼穢畢、相嘗忽可及闕如歟、此上者景房爲第二、可勤其役之由觸社家云々、無左右不在子細之由出折紙、持參件折紙於院、申既依及闕如、社家申旨如此、早可令景房勤此役之由、可被成院宣於社家之由、仍郎可仰遣社家之由、以女房奉書被仰出藏人右少辨經直、實直奉行也、但經直近日不出仕、仍被仰中納言經興卿云々、然而勸修寺前中納言依有申旨、聊停滯云々、此事景房造意甚奇怪、於景清景興者依北野神事當番已觸穢了、於景親景藤者依可勤八幡并相嘗事、更以不觸彼穢之處、恣申成之條濫吹至極也、無左右勅許、爲之如何、所詮以此趣欲預奏聞云々、予答云、今夜可參院、有便者可申出者、秉燭之後參入、仍候御前之時申出此事、仰云、景親景藤等不觸穢之儀之由

被聞食了、但相嘗笛事、第一者代官景清穢觸之上者、爲第二景房競望、非無其理歟、予重奏云、一旦之理雖可然、近年當道傍例皆以不然、第一者故障之時又用代之例也、年中神事公事不可限之、何於此一事、今更景房可申所存哉、只任傍例可有其沙汰歟者、其後無殊仰、翌日、以此趣召仰景藤了、此事大略四辻宰相中將申沙汰歟云々、　廿八日戊子、左近大夫景藤來、相嘗祭笛事、勸修寺前中納言委細尋沙汰、景房奸計之至落居了、然而猶院仰、老者忽失面目之由歎申、不便之至也、爲三箇夜之儀子日午日卯日等也者、其內一夜存別儀、以景房可令勤之由可仰社家云々、此事猶雖不可然、勅定上者不能左右之由前中納言命云々、後聞樂人等悉觸穢之由沙汰出來、今度相嘗無樂云々、所詮雖產穢可有甲乙儀云々、未曾有聞事歟、　十一月二日辛卯、今夜相嘗樂人悉以觸穢、仍大神景康一人、爲景清代參勤、笙篳篥等不參云々、

〔日前宮神事記〕十一月一日、日前宮相嘗御祭忌固祭事、

其次第、先祭方人母、於酒殿廳前立並榊勤解除、次酒一獻酒殿守役、其後於神領界立榊東西北界、東大溝橋高橋一本、西難賀界一本、北加納北有本界四本立之、　御供頭人大內人實房、朔幣十列如常、

同日粟島祭次第、兩人母、中臈、案主、神子、皆參彼社、先於本廳海邊立御神木御鉾、有解除、號風祭、　御荷前供之、白酒一瓶子充、折櫃三合充、折一餅三充入、兩人母役、柑子橘各百計出納役、彼納藏人母已下給之、此內酒一瓶子、酒殿守役也、餅一合、橘等浦人給之、浦人雜紙一帖出之、其後參粟島社、御荷前供之、酒一瓶子、柑子橘等也、飯者上白冠米七升出之、土師末案主等炊之、人母唱唼樂、又小飯三折敷、小瓦氣盛之、二折敷八盃備之、一折敷六盃備之、內人役也、次八津伊加和羅氣有之、入津伊瓦氣事、見相嘗御祭段、次彼社禰宜申祝詞、但近來相見中之、次於彼所中言社申祝詞、人母、中臈、神人、皆各小紙袋入白米二充持之、一者粟島社祝詞時、一者彼中言社祝詞時、給之於禰宜、次有中臈、案主等舞、皆同時舞、人母唱御歌、和元字、次巫女有里神樂、其饗膳杯盃有之、饗膳清酒等、禰宜役有料田、又自本荷前納所米納斗一石六斗三升下行之、自粟島盛

四俵、彼納所進之、相嘗御祭時細々用之、又禰宜酒外酒殿守役有之、其座次第、於彼拜殿(以西爲上)敷横座、人母著之、疊上敷筵、其上敷皮用、中臈二行著、用疊、人母以下饗菜皆六種也、人母者六種、外前物魚有之、看四種、二折敷充也、中臈神人皆同、魚三種、精進一種、神子饗菜二種、總一樣一者三種也、彼饗米白荷前納所、國本斗三斗禰宜請之、酒禰宜役、一宿之後早旦又饗、勸盃如夜前有之、其後退歸下向之時、於木本山案主等取臭木、相嘗御祭時燒之於灰、奉入御酒、

上卯日、鳴神社祭總官一度參詣、行事一人代官也、

定相嘗御祭日次事

三日、相嘗御祭慶盃造事、

五日、同慶盃伏(フセノ)事、土師以糠燒之、次進酒、次三反遶之、御酒造夜燒之、

六日、御供頭人吉田行事料田、(五反、大田之郷之御房田一反、量數同郷、)　國造俊長之代始之

七日、同慶盃起(オコシノ)事、土師起之進酒、次三反遶之、(其後總之)

九日、同御穗下(ホオシロノ)祭事、

十一日、同御麴合(アハセノ)祭事、

十三日、同白御酒造祭事、但此等日依撰御解除日、无定御縣頁、如此書裁之畢、

十五日、御供頭人上白冠、荷前里神樂事、

相嘗御祭黑御酒造祭事(擇吉日、臭木灰小參毛也、支御酒合事歟)

御供頭人　大案主久元

建長五年十一月十六日　國造宣親始之

同御殿開祭事、御供頭人大案主近久

建長二年十一月十八日　國造宣親始之

御荷前事

同御解除祭事　撰吉日、御供頭人東人母荷前事、

第二日同玉殿莊祭事、御供頭人案主安長荷前事、

建永元年十一月　國造宣宗始之

第三日、同小集祭事、御供頭人相見爲久御荷前事、

文治二年十一月　國造宣俊始之

第四日、同大集祭事、國衙供奉有官幣、御供頭人酒殿守御荷前事、

同庭立祭事御荷前事

廿六日、御供頭人大案主近吉、

晦日、御供頭人相見守秀御荷前事、

十二月

一日、國懸宮相嘗御祭忌固祭事、其次第與二十一月相同、御供頭人南人母、朔幣十列已下如常、

自三日廈盃造祭、至白御酒造祭、與十一月相同、

十五日御供頭人鳴神行事、御荷前里神樂事、

御酒水迎事、自解除日隔中三日、假令十六日、御解除者十二日夜也、

相嘗御祭黒御酒造祭事、撰吉日、御供頭人案主等、主等寄合勤之、

建長五年十二月十四日　國造宣親始之

御殿開祭事、御供頭人火燒景安、御荷前事、

建長二年十二月十七日　國造宣親始之

御解除祭事、撰吉日、御荷前事、

御供頭人　案主等寄合勤之

第二日、同玉殿莊祭事、御供頭人東人母、御荷前事、

建永元年十二月　　國造宣宗始之

第三日、小集祭事、御供頭人權內人貞近、御荷前、

文治二年十二月　　國造宣俊始之

第四日、大集祭事、國衙供奉有官幣、御供頭人吉田行事、

御荷前事

庭立祭事、御荷前事、

同廿七八日比、依月大小歟、月大者廿八日、小者廿七日、白冠御荷前御酒進之、其次第與三月朔日上白冠繭引儀同、

晦日、御供頭人大內人守繼御荷前事、

季祭事、今日中言社頭人二人御荷前御酒進之、其次第與九月頭人繭引儀同、今夜兩宮南北御戶寶藏東西中門中言社摶、御前屋神子等燈油別而進之、小土器入之、兩土師役屋神子者酒殿守、今夜總官參籠西廳之時、下白冠紙立、五盃餅二盃木菓三坏也、酒一瓶子進之、當參近習者行也、

相嘗御祭次第

撰彼御祭日次、其次第先於酒殿廳、十一月上旬吉日行事、開酒殿御櫃、取出御牒本、授人母、上座人母持之參本亭、總官出對于公卿座、被定仰日次、人母書御牒、開御櫃、指請印、元者白冠相共參、今者人母一人也、御牒渡之於廳、次々々送之於在廳、十一十二兩倫月日次同時書之間、十二月无此儀、又此外人母兼日造書狀於在廳方、其儀與調庸御祭時同、其後人母歸酒殿廳、勸盃一獻有之、酒殿守役也、肴蛤一種、精進一種、壓盃造以下下宮御酒造、於祭方忌殿行之、其次第與郡鎮部御祭御酒造儀同、但御酒

水社内井水用之、下宮御酒造者、御殿開前日也、上宮御酒造次第、御供納禮給之後、上白冠兩人母中﨟神人參田宮南向著座、以西爲上、用葉薦相見用鋪設、火燒取御穗入御酒臼舂之、其間神人等壞本御穗木、土師申御先三度燒之、即奉造御社、次作件御酒奉籠彼御社内、以高坊領二枚也、編竝引廻其外、彼高坊領一枚、本荷前一枚、彌荷前納所出之、一枚、正月十六日總官假屋一枚、九月十五日草宮廳南裏引之、進御荷前、白冠申祝詞、次酒稟各行之、上宮御酒造者、御殿開、中一箇日隔之、

御殿開次第、與都鎭部御祭御殿開次第相同、自御殿開至小集御祭、十一月上宮中言祝詞、上白冠申之、十二月下宮中言社祝詞、下白冠申之、但十二月祝詞、元者非祭方人母申之、近年一向下白冠申之、又御供納禮、自今夜至大集御祭、於祭方忌殿支配之、非祭方白冠與兩行事等者、御供祝詞訖後退出、

御供納禮饗膳神人送給之、饗膳菜五種内、精進一、

御解除祭日、總官浴浴水、乘手輿、須々九、近來酌若浦潮、人母祭方勤解除、總官出時兩行事著直垂折烏帽子、帶弓矢、相交靑侍供奉、

御解除夜次第、相見非祭方申、總官迎、總官衣冠參宮、經御拜石於中間御垣際北向立給、座上相見進本前祭方、白冠御手登申、次案主奉出御鉾御神木、申御先、神官中﨟神人行列如常、於中間御垣邊机上疊小土器八、白冠兩人母以笏蕃之、如正月十六日儀也、於芝原乘馬、白冠祭方計也、行事後陣供奉著狩衣、於祓戸總官用手水、相見進之、次有解繩、又白冠有解繩、次有解除人母勤之、十一月吉田河原南、十二月紀三所河原上畠也、下向之時、總門内備和迎酒殿守役、總官以笏蕃之、即著西廳進廳飯、白冠一人、非祭方人母二人著北座、行事二人著南座、中﨟南北座、如常有勸盃、總官二獻、神官一獻也、白冠飯酒之後、御手登申、神官中﨟等有小饗、作丁役、菜六種毛見鄕、取廳之物之後退出、先人母中﨟等罷立、次白冠行事召近習者退、

今夜奉餝神殿次第、與都鎭部御祭同、但菓子中與米、浦役雜色請祭方御供者進、進御供、於内宮祭方

人母申祝詞、御祭畢後、下宮御祭ニハ上宮以御供臨進之、下宮御供以忌殿送之、上宮御祭以下宮御供臨進之、上宮御供忌殿送之、次相見（非祭方）申迎、總官參宮布袴、祭方行事於西臨巽角讀御札、次總官東中門與御壇中央上對丑方著敷葉薦、祭方白冠申祝詞、（御字無、祝詞ト曰）相見（非祭方）進總官本前、次白冠參內宮、次總官參入之時、祭方相見於南御戶、內外敷葉薦、總官於御戶外蹲居于葉薦上、祭方相見結總官木綿、次以御幣授總官座上、人母於內宮申祝詞、總官再拜、次相見取彼幣伏置玉殿南壁下、次總官參內宮、於南莊絹下一拜、一拜之後聊敬屈、一拜之後敬屈者總官白冠人母等皆每度同有之、次於人母座前邊、奉向玉殿方一拜敬屈、其後著座、次相見取御戶內外葉薦、置南御戶西腋、次中臈各次第參、兩人母祭方相見、并案主等本自所令參入也、但上宮白冠欲參之時也、婦（ヤフタキ）多義有之、宵曉御祭每度有之、ヤフタキトハ、祭方土師、兼テヨリ土ヲ以テ丸ニ作テ、其中ヲ少々窪燒因タリ、是摶御前折敷上神木葉敷、其上居土師、是ヲ持員十六也、白冠誦文アリ、白冠葉薦、下宮无此儀、次祭方人母於南莊絹下一拜、（一拜後一敬屈）卽御琴（登）申、人母（非祭方）撥和琴三度、出唉聲、次人母於玉殿御前一拜祈念之後、奉開玉殿御戶、奉開之後、又有祈念、卽一拜、又如本於莊絹下一拜、次白冠於莊絹下并玉殿御戶前一拜祈念之後、參玉殿內東齋著（敷青薦）次祭方相見於莊絹下一拜、於玉殿南裏取御手洗草枕、御手洗自粉川進之、有料田云々、授巫、巫置之於玉殿御戶前三度參、其間人母鳴和琴莊、次祭方土師於南御戶囚外祝土器盛盃是也、左手捧黑御酒、右白御酒也、盛御酒而授悠紀、申御先三聲、四箇度進之、御酒第一時右手一ヲハ白冠手水盛之、四度時又如此、白冠後樣進之、人母撥和琴唱御歌、次巫賜御手水草枕三度參、渡相見、次相見於莊絹下一拜之後復本座、次白冠出玉殿內一拜祈念又有之、次人母奉收御戶一拜祈念有之、次祭方土師持玉物（角瓶子、入酒置折敷上也）、參內宮閉之、一拜玉物（登）二聲半申之、（玉物之玉）火燒以土器請之三度濕天壕（灰也）之時、人母撥和琴出唉聲、次土師（非祭方）酒殿守荷籥參內宮、自東第二間北壁下置之、次案主中臈有舞、次兩土師酒殿守等三人同時三廻舞、此舞間座上人母撥和琴唱御歌、次祭方

相見進總官本前、上宮祭方土師片手以杓汲甕内酒、片手持盃、（量數二折）勸白冠、白冠請持之、座上人母讀宣命、讀畢白冠飮之、（新米酒也）次中臈自末座退出、次相見如初、敷葉薦於御戸内外、總官退出之時如元又於二所有拜、又於戸外一拜、次相見解總官木綿、次總官下自御墳、次巫、次悠紀、次白冠、次座上人母次座下人母、次退出、次末座案主、荷御供御長櫃參忌殿、曉御祭次第如先、但相見勸之、悠紀巫之役、次神官已下於祭方忌殿御供納禮給之、又於西廳總官前、近習青侍等御供納禮支配如常、自今夜至小集夜三箇夜如此、

第一玉殿莊日朝蹲踞毛立、第三小集日朝餅味曾水、第四大集祭日朝又蹲踞毛立、於祭方忌殿神官中臈行之、（自今夜至小集三ヶ夜毎夜如此云々）今夜御祭畢後祭方人母田子御酒一瓶子餅二盃木草四合進之廳、又翌日水鳥一羽御酒一瓶子同進本亭、

第二玉殿莊夜内宮次第同前、今日祭方火燒奉掛莊絹、同日中言社御荷前酒一瓶子、酒殿守役餅餉與米皆十五充備進、祭方土師役也、

第三小集御祭、今日祭方火燒奉開菅原御戸、又御祭以前祭方人母、奉向陣御前申祝詞、次座上人母撥和琴唱御歌、中臈皆同時舞、次内宮御祭次第如先、但兩土師酒殿守舞之後、總官前餅大餉與米等備之、相見進之、祭方土師役也、又進本前御取上之、次人母唱菅原御歌、巫悠紀於南飾絹下舞卽退出、次座下人母有舞、次總官有舞、其間人母座上撥和琴唱御歌、禮畢退出、其後神官以下於祭方忌殿、御供納禮給之、神子職子參忌殿、有御神樂、酒餅有之、

第四大集御祭、先備御供、兩人母於兩社申祝詞、祝師計參、次中言社祝詞也、其後於祭方忌殿、中言片宮納禮神官已下給之、今夜祭方土師御壇東面下結竹、稻五束奉掛之、御正作稻奉置内宮、卅五束内也、今夜不申總官迎、總官束帶袍白著、祭方女客殿、在廳書生同著、相見帛衣、座上結總官冠木綿、又掛御葛、一者掛冠、一者掛肩、次有芝手水、結蘘結付幣串也、次有官人書生等芝手水、官人一人、書生四人、

次飾馬、十一月出西中門南廻、自東中門入一反、十二月出西中門北廻、自東中門入、兩人母中﨟案主等皆行列、次官人讀御札、十一月石疊許、十二月東簀傍官人不讀者、相見讀之、其後總官於東中門內、西向著敷葉薦、申祝詞、以本申之、人母申再拜、次官人有奉幣、土師取彼幣立懸稻許、次末座中﨟荷田子御酒參內宮、玉殿南裏置之、又案主持神木同參、神木枝掛御蔦、土師申御先、次十二月上宮御祭、兩相見持御鮑御鹽、自東中門參、土師又申御先、御鮑御鹽奉立置御寶藏東邊懸稻、如本奉納內宮、次總官又著廳、官人書生同又著廳、饗膳以下自元備置之、次夜津伊加和羅氣有之、八對土器トハ、折敷上皿八居、中一置、中ノ皿ニ箸ツキアリ、座上相見持之、座下相見八之皿ニ酒ヲ入、座上相見八之皿之酒ヲ中ノ皿ニ入テ總官ニ進之、又官人之八對土器、末座大案主勤、次勸盃三獻、次官人於廳前有舞敷長筵、次總官有舞同筵引直敷之、其間人母於東中門腋搔和琴唱御歌、次十一月ニハ上宮并中言社ニ於テ總官有奉幣、十二月下宮中言社ニ於テ有之、次總官參內宮、其次第如前々、但國懸宮ニハ、宵御祭案主中﨟舞後有殖榊之儀式、案主勤之帶履、下宮无此儀、次白冠爲御酒直出內宮、祭方土師御酒奉入呂子持、白冠先立忌殿參御酒奉取替、白冠手水仕、上宮ヤフタキ在、下宮無之、次曉御祭アリ、宵曉一度次被行之、人母於南飾絹下并玉殿御前禮拜祈念如先、奉開玉殿御戸、次白冠禮拜祈念如先、參玉殿內下宮御祭悠紀進御酒、第四度之時、左手仁捧橘前童持之、上宮御祭、座上相見持御鮑、座下相見持御鹽、悠紀仁津禮天晳候玉殿御前、座上人母禮拜等如先、於玉殿御前御琴曳登申之、座下人母取和琴授大內人、座上大內人玉殿御前持參北腋、白冠下宮御祭橘、上宮御祭以土人物造御鮑御鹽取、後樣進上之、有祈念、橘三六度、御鮑御鹽四々度、人母搔和琴唯聲出三聲、充六度、次上宮相見、取御鮑御鹽土師返賜、下宮橘返給悠紀、悠紀渡土師、次白冠出玉殿內、次人母祭方取出寄筵、白冠座也、神人請取之、次人母奉下御帳、次奉取御戸、次上宮神人取殖神木而出、今夜曉御祭、案主中﨟無舞、次土師持御酒入呂子參內宮、次末座大案主於南御戸許、奉玉殿方向一拜、次召官人二聲、官

人被參候ヘ又一拜、次神人持官人之敷物鋪設、裏付荒薦置火燒之、東邊官人衣冠、於莊絹許一拜敬屈、次著座、次案主四人、立座持神木、二人充蹲居天塚東、神木者自玉殿南裏取之、次官人讀御葛申、官人不讀者、祭方相見讀之、次相見以御酒納禮進總官、又獻御葛、次土師以御酒納禮、與官人、次取神木授官人、官人持之一拜敬屈而退出、於飾絹許又一拜、官人潔文曰、日數不滿者立下陣、次土師以御酒納禮獻白冠以下神官中臈、又神人同賜之、悠紀巫等同之、禮畢退出、今夜御祭以前串作饗神官下人各給之、菓三種如形有之、立御祭御殿鎮次第、與都鎮部御祭御殿鎮儀同、但菓子與米也、次祭方火燒、以御葛奉掛御殿棟、其後於酒殿廳有解除、次勸盃一獻以西爲上、次白冠有御冠上、於寶藏前有之、祭方人母勤、次於忌殿、祭方人母奉向婦御前申祝詞、有荷前、次申粟島祝詞、有荷前、次座上人母授和琴、唱御歌、中臈等皆對粟島方同時舞、次末座中臈唱歌不授和琴、學粟島船漕之樣、次有饗膳勸盃、祭方土師役、其後退出、立日總官祭方白冠人母中臈神人等、用行水之後精進、神官已下者抜髮、今夜於中言社有鼎祭、其次第見調庸御祭、相嘗御祭間、雨行事候御供局、自御解除夜至小集御祭夜、毎夜自役、神人方炭油有之、以下之人又自酒殿守方、清酒一瓶子充各存之、解除取之、肴海藻、若大根盃折敷同有之、又御供納禮、自忌殿祭方神人送給之、又立御祭日早旦、以下人御供納禮田子御酒等請取之、下人以瓶子請之、又其日飯菜魚類二種无汁並皮煎一盃計、但生鳥也、神人送給之、同時有饗菓五種汁

一、

〔住吉社諸神事次第〕十一月

相嘗御祭、丑日齋戶祓、於神館行之、横座總官、（淨衣或布衣）北座權官、（同）下客殿北座神官、南座總官侍著座、神館北中間疊取也、居散供机、社司前居酒肴、權少祝居、神酒入之、禰宜參申祝言時、酒自机取下也、次禰宜座ニ供祭解文覽也、總官披見解文、袖ニ可成、返抄之由連書也、位署加判返給也、次一獻畢退出、卽自今夜參籠、

寅日、酉刻當色饗膳行也、横座總官、(布衣)北座權官、(同)氏人、南座氏人、下客殿南北氏人、神寶等下横座、神官(北上)勘所司屋(東勘所司)(左勾當)著座、一獻之後男雜仕田邊御料鯉餠以下自南面參通造合渡上御厨、權少祝以尺差鯉寸法入見參、次居饗定文大海社司覽也、兩官連加判返給也、饗立著一獻二獻畢撤也、各退出、勘所司定文押下客殿北壁、

卯日、戊時社祭御供備進、先權少祝申、御座(是案內也)自神館少文疊二帖出也、下客殿敷也、横座(總官)南座(權官)座勘所司八人(衣冠)南北(東行)(四)著座、(敷繩筵)巫女同著座、于時正權官(東帶)被著座、酒一獻、總官被取盃之時、神官等天平瓮通造合進也、一獻畢撤也、勘所司以下退出、次兩官手水、(氏人下﨟)手布(上﨟)進也、次木綿手繈、同氏人勤仕也、其後立座列立南門前、氏人南北二行、(氏人上北東上)(﨟)神官一切經會殿上西(南上西向)御供奉舁立之時、所司申前舁調之後、權少祝參向蹲踞之時、各參御前、神官勘司所等先行、總官庭上著座、(筵上敷圓座)權官(筵)氏人、(敷繩筵也)幣殿左右上高机勘所司荒薦置也、又勘所司比悉目器自八女手取テ同置也、次一神殿御分薦比悉目器等、勘所司取テ渡權少祝、權少祝持參御殿、次勘所司八女等左(江)廻八女著座、勘所司自御料舁手御供請取、渡權少祝、其後又著座、御供備進之後、神官等自御殿退下、禰宜參神前、權少祝幣持參、總官取幣、禰宜申再拜四度、後權少祝返給也、授禰宜祝言申也、齋童自御殿退下、權少祝閉御戸向總官御前蹲踞、之時退出、二三四御供備進奉幣、以下同也、四神殿御供畢社司立座、自著座所南二、東總官、西權官、(用床子)氏人等自著座不西著、(用床子)侍氏人參二人、社司木綿襷等取也、氏人木綿自身取也、其後經三四神殿間、自南脇門退出、

辰日、辰時侍者御前御供備進之、神舘北格子上也、中間疊取也、御戸開也、横座總官(衣冠)北座權官(同)氏人、(東間著座)南座氏人、下客殿氏人著座、神官等參內陣御供二前、權少祝等備進也、次御酒壺奉出也、自神人手權少祝請取テ置下客殿東間、(敷薦)次申祝言、神官等退、社司氏人立座著座庭拂座、(寶藏前敷繩筵、總官座置圓座)座、東上北面、神官等參候下客殿東、(用床子)權少祝机上坏入神酒、禰宜參御壺前申再拜之時面々坏取

天皇机下、次酒一獻畢、歸著神館、(南間神館北格子下也)早飯、(天皇)菓子進也、(自總官至氏人)次居御井、(同)次飯汁、(宮重)小櫃

三獻、(總官權官若一獻同盃重)次湯漬、(總官權官許進也)酒三獻、(東司乘盃)一進也畢退出、

酉時國祭、各著座神館、橫座總官、(東面)北座權官、(同)氏人、(布衣)南座氏人、(上首)下客殿、氏人勸所司屋、勸所司入人(衣冠)巫女庭上、(寶殿北面)著座酒肴之時、天平瓮進也、如去夜、一獻畢撤也、手水手巾(侍氏人勤仕之、自總官至氏人、)社司木綿手繦(同氏人役)天平瓮備進之後、神官等經神館著座前、自西中門御田殖屋前西行、西門前北行向祓戸、國方御幣神馬在廳舞人陪從參向、禰宜遂祓、其後自西四足門入、經三四神殿間、自南中門參入、神官自脇門向下客殿之時、各立座列立南門、如去夜、各參一御前入、南中門之時、於廻廊發歌曲、(和歌、笛、)各著座、御供備進畢在廳奉幣、神馬四匹引廻之時、所司前ヲ申、二三四御供如例、四神殿神馬引廻之時、前不申、御供畢社司木綿手繦明衣等取也、(如去夜)其後各參一御前、社司幣殿西庇著座、(幣殿小文疊引下之敷也、幣殿未作之時、神殿北脇連幄用床子、)神官幣殿南脇著座、總官著座時機門氏人上也、橫座總官、南座在廳、北座國掌、下橫座神官、一獻之後饗居也、解文覽也、在廳加判、次一獻畢撤之退出、

戌時、御神樂、於南門坂迎、次御神樂衆著座幣殿、其後社司氏人等參也、北座西橫座(南北行東面)總官、(布衣)同東南北二行氏人、(西上)北落板敷勸所司下氏人等著座、南座西橫權官、(布衣、南北行東面、)同東巫女神官等著座、酒肴一獻、(自總官至氏人、大海社司以下撤盃、)次御神樂始也、韓神之後、中臣勸所司下氏人等參也、次連ムトウ、先神官、次社司氏人參也、御神樂畢巫女等著座舞也、事畢各退出也、

巳日、酉刻後宴饗膳行也、各著座神館、社司(布衣、衣冠、)著座、如當色、一獻之後饗居也、自上御厨肴進也、立著三獻畢撤也、次神樂、酒肴行也、机酒肴之時、勸所司勾當渡下客殿著座、次小格子上也、中間疊取也、東遊陪從寶藏前列立、東遊舞也、次御神樂衆著座、侍者御前壇上巫女著座、中臣連ムトウ、次第(如去夜)事畢退出也、

古事類苑

神祇部三十

鎭魂祭

齋戸祭　招魂祭圖

大殿祭

神祇部三十

鎭魂祭 齋戸祭 招魂祭附

鎭魂ハタマシヅメト云フ、天皇ノ御魂ヲ鎭安シ、以テ御世ノ延長ヲ祈リ奉ル祭ナリ、神武天皇元年、宇摩志麻治命ガ、其父饒速日命ノ、天ヨリ將來セシ十種ノ瑞寶ヲ獻ゼシヲ以テ起原トス、史ニ天武天皇ノ元年十一月、天皇ノ爲ニ招魂ストアルハ、卽チ鎭魂祭ナリ、文武天皇ノ令ヲ制スルニ至リテ、日時ヲ定メテ十一月中寅ノ日ヲ用キラル、其祭神ハ、神魂、高御魂、生魂、足魂、魂留魂、大宮賣、御膳魂、辭代主、大直日ノ九座ニシテ、祭場ハ宮內省ノ廳ニ設ク、但シ本省事故アル時ハ、神祇官ニ於テ行ハル、

當日神祇官ノ笛師ハ笛ヲ吹キ、琴師ハ琴ヲ彈ジ、神部及ビ雅樂ノ歌人ハ、相和シテ歌ヒ、御巫ハ拍子ニ隨ヒテ舞フナリ、既ニシテ御巫ハ宇氣槽ヲ覆セ、其上ニ立チテ、桙ヲ以テ撞クコト十箇度、度ゴトニ神祇伯ハ御玉緒ノ絲ヲ結ブ、女藏人モ節ニ應ジテ、御衣ノ筥ヲ持チテ振リ動カス、此日中宮ニモ亦此祭アリ、東宮ニテハ中巳ノ日ニ之ヲ行ハル、後世ニハ上皇宮ニテモ亦之ヲ行ハレタリ、

中古令制廢レテヨリ、鎭魂祭ノ儀モ大ニ往時ト異ナリ、加之宮內省神祇官モ荒廢シケレバ、纔ニ其舊地ニ假幄ヲ設ケテ之ヲ執行セラル、而シテ後花園天皇ノ文安寶德ノ頃マデモ、尙告朔ノ餼羊ヲ存セリシニ、其後遂ニ中絶セシコト幾ト三百五十年、光格天皇寬政九年ニ至

名稱

リテ再與セラレタリ、

〔名目抄恒例部分事〕鎮魂祭

〔日本書紀二十九天武〕十四年十一月丙寅、是日、爲二天皇一招レ魂之、

〔釋日本紀秘訓二十一〕招魂

〔釋日本紀述義十五〕兼方案之、十一月寅日也、今鎮魂祭也、

〔令義解職員一〕神祇官

鎮魂謂鎮安也、人陽氣曰レ魂、魂運也、言招二離遊之運魂一、鎮二身體之中府一、故曰二鎮魂一、

〔令集解二職員〕鎮魂鎮殿也、言知二鎮斯後殿之殿一也、凡人之陽氣曰レ魂、魂運也、人之陰氣曰レ魄、魄白也、然則召二復離遊之運白一、今レ鎮二身體之中府一、故曰二鎮魂一、唯鎮レ魂爲レ例、則有レ魄可レ知、故不レ曰二鎮魄一耳、禮記郊特牲云、凡祭愼二諸此一、魂氣歸二于天一、形魄歸二于地一、故祭求二諸陰陽之義一也、殷人先求二諸陽一、周人先求二諸陰一、祭義、宰我曰、吾聞二鬼神之名一、不レ知二其所一レ謂、子曰、氣也者、神之盛也、魄也者、鬼之盛也、合二鬼與一レ神、教之至也、鄭玄曰、氣謂二噓吸出入一者也、耳目之聰明爲レ魄、合二鬼神一而祭之、聖人之教致之也、春秋昭公七年傳、及二子産適一レ晉、趙景子問焉、曰、伯有猶能爲レ鬼乎、子産曰能、人生始化曰レ魄、既生レ魄、陽曰レ魂、用レ物精多、則魂魄强也、杜預曰、魄形也、魂陽神氣也、物精謂二權勢一也、孝經援神契曰、魂者芸也、魄者白也、宋均注云、芸除二穢濁一也、謂二白情性一、所二以芸一レ情白レ性者、時以二蒼含一與二事之遠一也、易繫辭云、遊魂爲レ變、謂靈運曰、精氣之爲レ物、常遊魂變化、雖レ在二天地之間一也、韓康伯曰、聚極則散、而遊魂爲レ變也、遊魂言二其遊散一也、

〔鎮魂傳〕此鎮魂の謂、義解の說信に盡されたりとも見えず、集解はさらなり、古事記天石屋戸段の傳に、伏汗氣云々の事につきて、此物後世鎮魂祭儀に遺れり、鎮魂に此段の義を用らるゝは、日神のこもり坐るを、招きまつりし心ばへをもて、遊散する魂を招き鎮むるなるべしといはれたり、さはいへど、此事の幽理、たやすく說述べきにあらず、よく其故事を温ねあきらめて、おのがさゝ曉るべき事にてこそ、遊離運魂と云るに似てきこゆるいにしへの言ども、狹衣に、物おもふに、たましひもあくがるゝとはまことにてこそ、今はうつし心もなき心ちして云々、また歌に、あくがるゝ我たましひもかへりなむ思ふあたりにむすびとゞめよ、たましひのかよふあたりにあらずともむすびやせまし下がひのつま、伊勢物語に、おもひあまり出にしたまのあ

起原

るならむ夜深く見えば魂むすびせよ、源氏物語(葵巻)に、物思ふ人の魂はげにあくがるゝものになむありけるとなつかしげにいひて、なげきわび空にみだるゝわがたまをむすびとゞめよ下がひのつま、細流に、魂の出ぬるを、結びとむる事あればなり、むすびとゞめよとは、うかるゝ心を本心にかへし給へとかこつ心なり、袋草紙に見レ人魂歌、たまはみつぬしは誰とも知らねどもむすびとゞめつ下がひのつま、三返誦レ之、男は左、女は右のつまを結びて、三日を經て解レ之云々、洞物語(國讓巻)に、さもせんかたなく、まどはれ侍りしかば、魂をしづめんと、たび〳〵たゞ御ふみ一くだりを見たまへと云々、(俊蔭巻に、熊の出て、子なくはんさする時、子の熊に向ひて云へる言に、おのが身のうちに、おや養はんに、よしなき處あらば施し奉るべし、足なくては、いづくまでかありかむ云々、口なくては、いづくよりかたましひかよはん、はらむれなくては、いづくにかこゝろのあらん、)千載集に、左兵衛佐隆房、戀死なばうかれんたまよしばしだに吾思ふ人のつまにとゞまれ、また皇太后宮の小侍從、君戀ふとうきぬる魂の小夜ふけていかなるつまにむすばれぬらむ、後拾遺集に、和泉式部、物おもへば澤のほたるも我身よりあくがれ出るたまかとぞ見る、○中略四時祭式に鎭魂祭の鎭魂にオホムタマフリ(大嘗祭式にタマフリ)と訓をさしたり、これ古語にて(古本印本ともに、かく假字をさしたり、天武紀に、)招魂を然よめるも、此鎭魂の稱によれるなり、此本は下にあげつらひ辨ふべし、但し四時祭式に、オホムタマシヅメ、また、タマシヅメ、さよめる處もあり、其も又の稱なり、その由は下に云ふべし、)釋日本紀にも然訓り、○中略鎭魂を四時祭式にオホムタマシヅメと訓をさしたる處も見え、又鎭御魂齋戸祭(祝詞式にも)とも書き、又年中行事秘抄にもタマシヅメと訓り、古は二様にも唱へたりしなるべし、(但しオホミタマと云るは、後の音便の例なり、さて又ミタマフリと云ふは、御衣を御魂實として振り動かし奉る事のうへより云ひ、ミタマシヅメは、然爲して御魂を鎭め奉るうへより云ふ稱なり、)

〔先代舊事本紀(七天皇)〕辛酉爲元年、(神武)○十一月庚寅、宇摩志麻治命、奉齋殿内於天璽瑞寶、奉爲帝后崇鎭御魂、祈禱壽祚、所謂御鎭魂祭自此而始矣、凡厥天璽、謂宇摩志麻治命先考饒速日尊、自天受來天璽瑞寶十種是矣、所謂瀛都鏡一、邊都鏡一、八握劒一、生玉一、足玉一、死反玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂

比禮一、品物比禮一、是也、天神敎導、若有痛處者、令玆十寶、謂一二三四五六七八九十、而布瑠部、由良由良止布瑠部、如此爲之者、死人返生矣、卽是布瑠之言本矣、所謂御鎭魂祭是其縁矣、（○又見本書天神本紀及令集解）

〔鎭魂傳〕江家次第に、神祇官一人、進結絲於葛筥、自一至十、此間女官藏人開御衣筥振動、小野宮年中行事、政事要略に、藏人開御服箱振動、深山御記に、解御衣筥綱、以蓋開覆（覆蓋歟）開之、次第（振動歟）置之、如拍子、宮主秘事口傳に、女官御衣筥置八足上云々、女官立筥蓋、少開逢ヘテ令振動、など見えたり、（萬葉集十五卷）の歌に、魂はあしたゆふべに多麻布禮どあがむねいたし戀のしげきに、さよめるは、もしくは鎭魂の事にはあらじ歟、なほよく考ふべし、これかの義解（○令）に、招離遊之運魂、鎭身體之中府、と謂へる、神傳の鎭魂の厭術なり、然るにこゝに（○先代舊事本紀）如是爲之者死人反生矣といへるは、その鎭魂の効驗を尤しく稱たる言にて、實に命死終たる者の再活くといへるにはあらず、病に犯され、或は身體を傷めなどして、氣息閉塞て殆死ぬべくなれる者も、蘇生なむ者ぞといへる語なり、件の神寶の中、死反玉とてあるも、然るかたに主と効驗あるよしの名にて、尙理ある事なるべし、

祭神

〔令集解二職員〕神祇官
伯一人、掌鎭魂、（同鎭魂祭何神、答、神祇官式云、鎭魂祭神八座、神魂、高御魂、生魂、足魂、魂留魂、大宮女、御膳魂、辭代主、○下略）

〔延喜式二四時祭〕十一月祭
鎭魂祭（中宮准此、但更不給衣服、）
神八座（神魂　高御魂　生魂　足魂　魂留魂　大宮女　御膳魂　辭代主）
大直神一座

祭日及時刻

〔令義解二神祇〕仲冬寅日鎭魂祭

〔儀式五〕鎭魂祭儀（十一月中寅日、中宮祭准之、但東宮用巳日、）

祭式

〔北山抄 二 十一月〕中寅日鎭魂祭事（若有二寅、下寅行之、有例云々、然而新嘗會前可行之由見式、）

〔江家次第 十 十一月〕鎭魂祭（十一月中寅、若有二寅、下寅行之、有例云々、）

〔公事根源 十一月〕鎭魂祭　中寅日

〔年中行事秘抄〕諸祭剋限

十一月鎭御魂

酉一點庶事辨備訖、二點參議以上著座行事、

以前右大臣（冬嗣○藤原）宣、永以爲例、

弘仁十四年十二月廿八日　　少外記都宿禰廣田麻呂奉

〔儀式 五〕鎭魂祭儀

酉二點、大臣以下就西舍座、神祇伯以下、率琴師御巫神部卜部等、著榛摺衣、令持供神物、左右相分入立庭中、神部昇自東階、置神寶於堂上、次昇神机、昇、御巫從之、次神部四人各持琴、左右相分昇置堂上、神祇五位已上官人昇自西階、六位以下昇自西側階就座、（伯以下使部以上東面南上、御巫南面東上、）次大膳職造酒司供入代物、縫殿寮率媛（○媛恐猨誤）女昇自東側階就座、次內侍令賚御衣匣、自大內退出、昇自東階就座、治部省率雅樂寮歌人歌女等、昇自西側階就座、訖大臣出自西舍、昇自西側階就座、喚召使二聲、召使稱唯趨就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣、喚式部、召使稱唯、趨出立南外喚之、丞已上一人入就版位、大臣問阿誰、丞稱官姓名、大臣宣、奉入刀禰、丞稱唯出復本列、仰云、令奉入刀禰、錄稱唯喚省掌、省掌稱唯、錄仰云、奉入刀禰、省掌稱唯、少進云、大夫等參拜、五位以上先入就堂上座、外記史率史生官掌等、出自西舍立於屏下、待式部省相引入就東舍座、訖大臣喚召使二聲、召使稱唯趨就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣、喚大藏省、召使稱唯退出喚之、丞稱唯進就版、大臣問阿誰、丞稱官姓名、大臣宣、賜鬘木綿、丞稱唯退、丞率錄史生藏部等、賚木綿於筥入、先賜神祇官人、次丞賜大臣、錄賜五位已上、次史生賜判

官以下主典以上、藏部賜史生以下、(主典已上安藝木綿、史生已下凡木綿、)訖神祇伯喚琴師名、二人共稱唯、次喚笛工名、二人共稱唯、伯命琴笛相和、(詞云、美許登布曳安波世、)四人共稱唯、先吹笛一曲、次調琴聲、訖琴師彈弦、與神部共歌二成、次雅樂歌人同音歌二成、神部一人候拍子、御巫始舞、毎舞巫部誓舞三遍、(誓云、阿那止奈ヽ、)大藏錄以安藝木綿二枚實於宮中、進置伯前、御巫覆宇氣槽立其上、以桙撞槽、毎十度畢伯結木綿鬘、訖御巫舞訖、次諸御巫猿女舞(猿○猿恐誤)畢、次宮內丞一人、次侍從二人、次內舍人二人、次大舍人二人、舞訖復本座、

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

鎭魂祭(○中略)

右中寅日晡時、(中宮鎭魂同日祭之、)五位已上及諸司官人參集宮內省、式部依例檢列、大臣若參議已上就西舍座、神祇官人已下神部已上著青摺衣、(官預受領給、)率御巫等入就廳上座、(御巫南面、伯以下神部以上東面南上、)使內侍持御服自內退出、大膳職造酒司供八代物、同時參(中宮東宮准此、)縫殿寮令猨女參入、卽大臣昇就座、(北面東上、)喚召使宣喚式部、召使稱唯、退出喚之、卽判官已上一人進就版位、大臣宣、諸司令參入、卽稱唯退出、令參入、(五位以上就北面座、六位以下分就東西舍座、)座定、大臣命召使令喚治部、令歌女參入、又喚大藏省、令賜鬘木綿、並如上儀、訖神祇伯召御琴彈某甲、(二人共稱唯、)次喚笛工某甲、(二人共稱唯、)又命云、御琴笛會之、(四人共稱唯、)先吹笛一曲、卽調御琴、歌者始奏、神部於堂上催拍手、御巫及猨女等依例舞、訖卽神祇官五位六位各一人、(中臣忌部、)及侍從五位以上二人、宮內丞一人、內舍人二人、大舍人二人、以次進舞於庭、訖就本座、

〔北山抄十一月〕中寅日鎭魂祭事

上卿入自宮內省南門、著西細殿座、(北壁下南面設座、)卽召外記、問諸司參否、召辨、問供神物具否、神祇官參著、治部雅樂同著、內侍女藏人御巫子等又就堂上、外記申諸司代官等、訖上卿幷辨昇自西階著座、(東第三間北面設上卿座、)上召、召使(音、)二稱唯進立、上宣、(誰曾、)召使申職姓名、上宣式部省召(世、)丞以上一人參進、上宣、(誰曾、)稱官姓名、上宣刀禰率入(末津禮云々、可御末津禮利歟、)輔率五位著堂上座、丞率六位著東細殿、(外記史著之、)座定上宣召、

召使、召使參入、(同上)上宣、召大藏省、丞參、(同上)上宣、蘓木綿賜月、稱唯退出賜之、(丞奉、上卿取之結冠額、錄授辨、史生以下次々給之云々、)

次神遊、(衛宇氣間、女藏人開御服箱振動、○中略)神樂畢倭舞、

〔政事要略二十六〕清涼記中寅日鎭魂祭事(中宮同日行之)

當日薄暮、內侍經奏、率藏人一人御匣殿藏人女孺洗人等、(內侍式云、率命婦女藏人二人、諸官女孺各二人者、近代所行減此員、)令內藏寮持御服、(置机上、)向宮內省衛宇氣之間、藏人開御服箱振動、訖歸宮、明旦奏返事、

〔江家次第十一 十一月〕鎭魂祭

上卿以下入自宮內省南門著曹廳、須先著西細殿、召外記問諸司具否、召辨問祭物具否、後著曹廳也、

○中略 上官不著座、在幄外、若辨參著之後上卿參、辨暫隱幄西方後著、

上卿并北向、自餘西向、

內侍乍乘車立幄北、(雖須著幄座、近代如件、)

女官持御衣匣、置東第二間、

須五位藏人奉仕也、然而近代如件、

次上卿召召使、(二音)召使稱唯、進立庭中、

上卿宣誰、(曹)召使申官姓名、

上宣、刀禰入末津禮、

召使稱唯出召之、諸司須此後著座之、

上宣召使如前、

上宣、大藏省召世、召使稱唯出召、

次大藏丞立庭中、名謁如例、

上宣蘓木綿給

丞獻上卿、上卿取之結冠額、(近代結巾子)

錄獻辨、史生分諸司、

次神祇雅樂神樂

次御巫衝宇氣、(フツケ)(神學師彈和琴、衝字氣、神遊儀也、神代上卷ウケ船フミトヾロカス儀也、以賢木衝槽上也、結絲自一至十、宇麻志麻治命十種神寶振之返死之縁也、用絲自一至十計之也、)

次神祇一人、進結糸於葛筥、自一至十、

此間女官藏人開御衣筥振動、畢神祇官著座、○中略

次有倭舞事

南庭敷莚、(東西妻)其前設机、机上置賢木、神祇官一人、史一人、宮內丞一人、侍從二人、內舍人二人、大舍人二人、宮內進一人、舍人二人次第舞、

次辨召官掌、(二音)官掌立庭中、辨問曰誰(曾)、官掌申官姓名、

辨宣、宮(乃)內(乃)省召(世)、官掌出召、宮內丞立庭中、辨宣、誰(曾)、丞申官姓名、辨宣、御飯加多良加仁給、丞稱唯出、次大膳屬進庭中申云々、御飯加多良加仁給畢、次上卿以下退出、

〔宮主秘事口傳〕中寅日鎭魂祭

宮內省儲幄二棟、以東西爲妻、

次上卿辨參著、上卿北面、辨其西方北面、內侍幄北方南面西上、○中略先內御方御衣、藏人女官相具、

次上卿召召使、(二音)唯稱召人、召使南壇下(ニシテ)、織部司織部司ト二音召之、

次上卿召召使、(二音)仰云召大藏省、

次召使如先、大藏省大藏省ト二音召之、

次大藏丞參南壇下、仰云申上姓名、

次可進緩木綿由被仰、其時廻西方入西幄門、自北方進緩木綿、先上卿次辨已下、

次辨召官掌、(音)官掌參、辨仰云、誰、官掌申名、
次諸司可著座之由被仰
次中臣官人宮主同著幄西、東面南上、
次御巫女參立
次雅樂司參著、始御神樂、
次宮主取內御方御玉緒糸、置上卿座前、
次歸著本座
次中臣官人進寄、十結令結、于時神琴師引琴、計(カゾヘ)一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十トヽ、十結也、中臣歸著本座也、〇(中略)此間女官御衣宮置八足上、此八足與上卿座對座、取員之間、女官立宮蓋少開遣令振動也、但近年此儀有名無實也、內御方事畢、宮主進寄取件糸、返給史生、
〔長秋記〕大治二年十一月十六日壬寅、鎭魂祭也、本自下官分配也、〇(中略)戌刻參神祇官、〇(中略)下官先傳召使、外記豫下官座後置膝突、外記就之、畢問諸司具否、皆具云々、次辨問神物具否、皆具云々、但內裏御衣、并藏人未來云々、相待間、且召外記、仰可申代官之由、外記就膝突申云、宮內省所候替代、其官某誡候ホ、仰云令候ヘ、外記稱唯退出、下官失、又誡哉トヤ仰、乃又々候ヨ仰、是忘失也、次喚召使、(音)參進就版、下官顧仰見參具否、問云、誰ソ、召使申職姓名、次仰云、式省召セ、唯稱退出、頗進南召之、(音)其詞式省召ス、省丞口正文參入、丞代也、暗不見、下官又問、省申官姓名、次仰云、刀禰入多天末津禮、丞稱唯出、參入儀不見、又召召使、問姓名、如前、次仰云、大藏ノ省召セ、召使稱唯、退出如前召、次大藏參入立版、次上卿問、申官職姓名、次上卿云、蔓木綿給ヘ、次給木綿、丞奉上卿、上卿取之結巾子、口授辨、事了相待處、及半夜藏人不來、以官使申云、尋內意、藏人盛時已退出云々、然而猶不見、及曉更或人云、內藏寮下部立御衣案於郁芳門跡守護候云々、聞此告、以女官迎取、立御机西邊、其西立皇后宮御衣案者、女官具之、

次始二神樂一、纔琴笛許也、神官唱二一二曲一、一人進二御棚前一魂結ホ、御巫於二供神物棚下一被レ舞、女官取二御衣筥一蓋、上下振動、事了又皇后宮鎭魂、其儀如レ前、次倭舞、其儀暗不レ見、纔聞二妙曲聲一許、其曲如二田樂一、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參二宮內省一、行二鎭魂祭事一、〇中略上官不レ著レ座、在二幄外北屋一、辨余著之後、上官參著、辨默立二隱幄西方一、上卿著後、辨復座、今夜上卿無二參仕人一、仍辨可二兼行一由、勸二先例一、藏人次官宣下、仍下官直著レ座行レ之、□內侍之車乍レ乘引二立幄北一、〈內宮〉中女官持二御衣匣一、置二東第二三間一、〈二內、三中宮、〉□□□□□□內藏人橘親長〈中宮權大進貫、券等副二內侍一〉□□□□□徘徊不レ著レ座、次下官召二召使一、〈二音〉召使稱唯、進立二南庭中一、下官問云、タツ、召使申二官姓名一、仰云、刀禰仕レ、召使稱唯、出召レ之、次又召二召使一、召使作法如レ初、仰云、大藏省召セ、召使稱唯、出召レ之、次大藏丞立二南庭一、問レ之、名謁如レ初、仰云、賢木綿給ヘ、丞退入持參、下官拍手取レ之、結二冠巾子一、史生分二諸司一、次神祇雅樂率二仕神樂一、神琴師彈二和琴一、御巫子衝二宇氣一、〈小賢木衝鉾上也〉次神祇一人入、結二糸於葛筥一、置二下官座前一、御神樂之間、又參進結レ之、自レ一至レ十滿レ百、事畢還二本座一、〈先內、次中宮、〉此間女官開二御衣筥一振動畢、次諸司著レ儀、〈造柏宮手、居高宮主〉次造酒勸盃三獻、下官不レ擬飲レ之、次神樂間南庭敷レ筵、〈東西行〉其前置二机安一賢木、次神祇官人以下率二仕和舞一、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎭魂祭也、予〈〇藤原定親〉爲二分配一、仍引二見舊記一之處、古今儀頗以相違、近年殊陵夷了、適爲二日上一、仍委細注レ之、〇中略

深山御記云、〈予時參議左中將〉長寬二年十一月十六日、今日鎭魂祭也、予〈〇藤原忠親〉爲二分配一、仍戌刻參二宮內省一、〇中略權少外記中原業俊參入云々、令三召使召二之、自二西方一來著、藤實〈所司藤實祿不レ敷レ之、予仰二召使一、令二掃部寮敷一之〉予問云、諸司候哉、申云皆候、但式部丞不レ候、僚參入者、小揖許、外記稱唯退歸、頭之右中辨朝方朝臣參入著座、予問二辨一曰、供神物具候哉、辨召二官掌一問レ之、此後皇后宮內侍大宮內侍參入、〈已上乘二毛車一、宮侍四人著二束帶一取二松一前行、又有二檳榔代車一兩一、女官乘レ之、〉次又內內侍參入、〈藏人車也〉此間予召二召使一、代官可レ申之由、傳二仰外記一、外記來申、〈式部丞造酒佐不參也〉予向二座下方一仰曰、誠ナリヤ、外記申云、誠ニテ候、予又仰云、令レ候ヨ、外記稱唯退、次內侍悉皆乍レ乘レ車立二幄北一是例也、女官等

取御衣、(置八足也、)自東第三間西行並立、(置参上立之、東上令立也、)女官在其北、次予正笏召召使、(二音)召使於巽方稱唯、來跪壇上、予示令立版位、予問云、誰(音)、召使申官姓名、予仰云、式省召、召使稱唯、退出召之、(引音召之、於南門外可召之歟、於西細殿方召也、近例歟、)次式部録參入立版、予問曰、誰(音)、録申官姓名、予仰曰、刀禰率入、(只稱音仰之、)録稱唯退出、次諸司可著座也、而近代無此事、次予召召使、如前予仰云、大藏省召、召使稱唯、出召之、次大藏參入、名謁如前、次予仰云、賢木綿給、大藏稱唯、退出持參木綿、(折敷上置麻一筋、持參予後、示仰令入置西方、自座前持來、)予取木綿結巾子、(巾子下結之、結目在後、只一結也、)辨以下神祇官(神祇少副大中臣親隆、宮主卜部兼數以下也、)等同如此、此間神祇官雅樂等著座、(兼可著座也、)次予示辨令始神樂、(只學術許也、)此間神祇官下部取槽、(其體如平櫃、高三四寸、弘二許尺、令敷薦一枚、)置山西方、次御巫自東北方來、置槽上北面立、次又下部以御玉結糸之、(以葛圓結中、縦横繋其巾結付白絲也、)授衆敷、衆敷插笏取之、並置西第三間毋屋殻、拔笏退入、次親隆進寄件宮前、跪指笏取絲結也、(一結也、)此間御巫以桙柄令琴笛音、突槽上、內女官又起解御衣筥綱、以蓋開覆、(綱開之、次第振動置之、)如拍子、親隆結絲、了拔笏退入、琴笛止、御巫退入、撤御結緒、女官撤御衣筥、內侍歸參、次大宮、次皇后宮、(已上略之、)次予示辨令居饌、此間又示辨令催和舞琴笛如先、次神祇官下部他下部兩三人、進出南庭和舞、衆立机置神也、事體有若亡、近代如此云々、仍不能張行、有三獻、○中略予拍手以下如此歟、(只如拱手也、)伏著取笏拱起座、召使二人、取松明前行、追前、(此間雖色不進前、)至郁芳門、取鬘木綿懐中、

又今度借請戒人之次第曰

於宮內省跡、儲七間幄屋、東第一間儲山、立八足、上卿辨、(東上北面、)置式於上卿前、神祇官二人、(南上東面、)其東儲三間幄屋、外記史、(北上西面、)各參著之後、上卿召召使、召外記、問諸司、次上卿召召使、召大藏省、召賢木綿、則進之、上卿以下面面懸冠、次大膳職居饗勸盃、次神祇官人大和舞、雅樂寮吹笛、如例、內侍女官等參入、女官結御絲、授神祇官人、神祇官人於山前申祝言、了傳女官、女官進內侍、了其後上卿以下退出、○中略

已上次第記六等舊例如右、以件等趣予省略草次第一本、然而今夜猶以簡略不及用之、相構可張行事也、件新作次第云、

上卿辨著座（東上北面）

上卿以召使召外記、問諸司、仰辨問祭物具否、

辨不參者、以召使召史問之、

次女官置御衣筥於案上、

次上卿召召使、（二音）辨云、式省召、

式部立版（以召使爲式部代）上宣刀禰率入、

次上卿召召使、（二音）仰云、大藏省召、

大省藏立版、（以召使爲代）上宣鬘木綿給へ、

丞持參也、上卿取之結巾子、

次神祇官（以召使爲代）參進案下、結絲、禮了著座、女官撤御衣、授內侍、各歸參、

次居饌

次獻盃（○中略）

後年以此次第與行、不可有煩者也、

戌剋沐浴束帶、乘八葉車、參宮內省、（○中略）

次予進寄座後、揖脫沓著座、揖直裾、

次女官一人入御衣於廣蓋持來、置件案上、作入蓋置之也、取出御衣許可置之歟、

次神祇官（所司召使行繼也）進寄著案前、拭上、取御衣歟、取小刀於傍人、此後作法依暗不見及、定有口傳之子細歟、可尋事也、事了授女官、女官取之參進、入內侍車內退入、

鎭魂歌

次大膳職官人居饌於予前、○下略

〔康富記〕寶德三年十一月十九日甲寅、鎭魂祭也、右大辨宰相敎忠卿辨不參、權少外記康純召使秀國（兼神祇官宮主）內侍等參行云々、著座儀宮內省同、上卿北面、外記其西方、北面一列、（東上）宮主西方東面著座云々、本儀外記著東舍、西上南面也、

其儀委見所持長寬上卿記記錄了、近例不可說云々、獻盃二獻有之、無饗木綿云々、

〔年中行事秘抄〕鎭魂歌

アチメ一度　オヽオヽ三度　アメツチニ（天地）　キユラカスハ（玲瓏）
サユラカス　カミワガモ　カミコソハ　キネキコウ
キユラナラ木〇ナラ一作ニカスバ」　アチメ一度　オヽオヽ三度
イソノカミ（石上）　フルノヤシロノ（振社）　タチモガモ（大刀欲得）　ネガフソノコニ（願見）
ソノタチマツル（奉）」　アチメ一度　オヽオヽ三度　サツヲラガ（薩雄等）
モタキノマユミ（持有木眞弓）　オクヤマニ（奥山）　ミカリスラシモ（御狩爲）　ユミノハズミユ（弓弭見）」
アチメ一度　オヽオヽ三度　ノボリマス（上坐）　トヨヒルメガ（豐日靈）
ミタマホス（御魂欲）　モトハカナホコ（本金矛）　スエハキホコ（末木矛）」　アチメ一度
オヽオヽ三度　ミワヤマニ　アリタテルチカサヲ　イマサカエデハ（今不榮）
イツカサカエム（何時將榮）」　アチメ一度　オヽオヽ三度　ワギモコガ（吾妹子）
アナシノ山ノ（穴師）　山ノヤマモト　ヒトモミルガニ（人見欲）　ミヤマカヅラセヨ（深山縵爲）」
アチメ一度　オヽオヽ三度　タマハコニ（魂匣）　ユウトリシデテ（木綿取垂）
タマチトラセヨ　ミタマガリ（御魂上）　タマガリマシヽカミハ（魂上坐神）
イマゾキマセル（今來坐）」　アチメ一度　オヽオヽ三度　ミタマガリ（同上）

行祭宮內省

イマシヽカミハ(去生神)　イマゾキマセル(今來生)　タマバコモチテ(魂匣持)　サリタルミタマ(去所魂)

タマガヘシスナヤ(魂返爲)

又一二三四五六七八九十

十度讀之、毎度中臣玉結也、

〔鎭魂傳〕鎭魂歌八首ハ、神樂歌なり、歌の初に、アチメオヽと云へるは、神樂歌に唱ふる例の詞なり、其を阿知女法とて、古本の神樂譜に見えたり、さて此歌どもの中に、神樂譜に見えたるは、イツノカミ云々の歌は、神樂歌韓神の本歌に伊曾乃加美、不留也遠止古乃、多知毛可奈、久美乃遠志天々、美也知加與波牟、と見えたるが似てきこえ、(韓神の歌、いはゆる石上社の劍に由あるか、)但しサツヲヲガの歌は、譜の裏書に見えたる弓の末の歌に、二句毛多世乃末由美、とあり、ワギモコガの歌は、葛の本歌にて、終句、たゞに山加川良世與とあり、さてタマバコニ、ミタマガリとの二首は鎭魂の意の壽歌なり、よく讀あぢはひて其意を曉るべし、

〔延喜式十一太政官〕凡鎭魂新嘗等諸祭之日、辨及史等向祭所加檢校、其鎭魂者十一月中寅、於宮內省祭之、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年十一月十四日庚寅、於宮內省修鎭魂祭如常、

〔左經記〕寬仁元年十一月廿日甲寅、入夜參宮內省、爲行鎭魂祭事也、右大辨被參著、外記申代官、(式部丞代)用内舍人、是則去長保五年例云々、事畢歸參內、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參宮內省、行鎭魂祭事、

〔山槐記〕治承四年十一月十二日丙寅、今夜鎭魂祭也、欲出車於內侍、依可向宮內省也、今朝中宮屬資忠來候、予依爲權大夫有此催也、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎭魂祭也、○中略參宮內省、○中略宮內省中、古猶以無一屋、

云々、況於于今乎、〇中略召使示其所、〇中略仰諸司令装束、〇下略

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十一月十五日丙寅、於神祇官修鎮魂祭、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十一月十七日甲寅、於神祇官修鎮魂祭、縁宮內省行大嘗會事也、

〔江家次第十十一月〕鎮魂祭

宮內省有穢、於神祇官行之、天慶八年

〔北山抄二十一月〕中寅日鎮魂祭事

天慶九年宮內省有穢、於神祇官行之、

〔日本紀略四村上〕康保二年十一月十二日戊寅、鎮魂祭、於神祇官祭之、

〔中右記〕大治二年十一月十六日壬寅、頭中將送書云、鎮魂祭宮內省有穢、以元慶天慶等例、於神祇官可被行也、而彼官燒亡之後、神事等被移中院、於件院可被行歟、但宮內省雖無一舍、以平張令行云々、神祇官無實、可令其妨歟、只依舊例、尙可被用神祇官歟、將又炎上之後、未復舊儀、可無便哉、宜令量申給、依御氣色上啓如件、進返事云、於中院被行可宜歟、宮內省平張無便歟、又神祇官未復舊儀、頗有其障也、諸神事被移中院、仍中院可宜歟、鎮魂祭、遂於神祇官被行云々、皇后宮權大夫師時、左少辨實親行云々、

〔康富記〕嘉吉二年十一月廿一日戊寅、初雪下、鎮魂祭也、〇中略依深雪被用雨儀、於神祇官北門下被行之、上卿辨外記東上北面一列、神祇官東面、內侍車向南被立之、玉緒等被置上卿東方以上北門下也、[illegible]饗膳勸盃如常、有置木綿、上卿無召仰、又外記不置式筥、近年略儀也、

例

永享三年十一月十七日、依雨鎮魂祭於神祇官北門下被行之、今夜參議不參、辨長淳參行也、著座如宮內省云々、

延引

文安四年十一月十四日壬寅、鎮魂祭也、〈○中略〉宮内省跡、近年不及幄沙汰、依深雪地濕、不敷得座之間被用雨儀、於神祇官北門下行之、上卿并外記東上北面一列、神祇副官東面著之、内侍車立北邊向南、宮主代於艮方居御棚立、神勤其役、大藏省召仰勸盃、宮内省召仰等如例云々、

依雨雪於神祇官北門下被行例

永享三年十一月十七日〈辨行事〉

嘉吉二年十一月廿一日

〔江家次第十十一月〕鎮魂祭

依穢延引例〈康保二、十一、十、延引時範日時、天永二年、〉

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年十一月十八日庚寅、停鎮魂祭、　十二月十三日甲寅、於宮内省修鎮魂祭、東宮鎮魂同日行之、以太皇太后〈○仁明后順子〉崩故、十一月不修此祭、今日行之、

〔三代實錄二十六清和〕貞觀十六年十一月十六日辛丑、先是十月二十七日、木工寮史生出雲島成死、喪家人入寮、寮官人參入内裏、由是平野、梅宮、春日、大原野、園韓神、鎮魂祭等諸祭、皆從停廢、　十二月十五日己巳、欲修鎮魂祭、而十二日皇太后宮犬死、今日内裏犬產、神祇官卜云、園韓神、今年春秋不祠、仍成祟、　十七日辛未、於宮内省修鎮魂祭、皇太后宮東宮鎮魂同修焉、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十一月十六日丙寅、停鎮魂祭、以禁省有犬產穢也、　廿二日壬申、鎮魂祭、去十六日依穢停止、今日行之、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年十二月廿四日丙辰、於宮内省修鎮魂祭、太皇太后〈○文德后明子〉皇太后〈○清和后高子〉兩宮鎮魂、此夜同修焉、十一月十五日戊寅、依人死穢停止此祭、故延而行之、

〔日本紀略十一一條〕長保三年十一月廿六日癸巳、東宮鎮魂祭也、而依内裏燒亡、内裏并諸宮鎮魂祭一度可行之由、被仰下之、　十二月十九日丙辰、鎮魂祭、式日依内裏燒亡延引、

〔康富記〕寶德元年十一月廿一日丙寅、鎭魂祭式日也、〇中略坊城左大辨相公送消息、鎭魂祭他月例、幷上卿不參、辨行事例、內侍不參例、納言上卿例等、令尋給、註獻之、

鎭魂祭他月例

長保三年十二月十九日丙辰、鎭魂祭也、

天永二年十二月八日丙申、鎭魂祭也、昨日被勘日時了、

停廢

諒闇年停否例延長八年不行、天曆八年、康保四年行之、

〔北山抄二十一月〕中寅日鎭魂祭事

諒闇之時、或行或不行、延長不行、天曆康保行之、近代皆行之、

〔江家次第十十一月〕鎭魂祭

〔年中行事秘抄十一月〕中寅日鎭魂祭事

諒闇時停否不同延長止之、天曆康保行之、但无和舞、

〔三代實錄一淸和〕天安二年十一月廿日丁丑、停園韓神祭、自此之後、鎭魂新嘗等諸祭皆停止、

〇按ズルニ、此年八月文德天皇崩ジ給フ、故ニ停止アリシナラン、

〔日本紀略三村上〕天曆三年十一月十五日甲寅、鎭魂祭、〇中略而依中宮〇藤原穩子御惱停止、

〔日本紀略十二三條〕寬弘八年十一月廿一日庚寅、鎭魂祭停止、

〇按ズルニ、此年十月冷泉天皇崩ジ給フ、故ニ停止アリシナラン、

〔日本紀略十二三條〕長和四年十一月廿日丙寅、鎭魂祭停止、

〇按ズルニ、此月十七日內裏燒亡アリ、故ニ停止セラレシナラン、

再興

〔均光卿記〕寬政九年十一月十三日、今日於伯亭、鎭魂祭之儀被行之、例年伯家雖修之、內々沙汰也、今度安倍家雅樂助季康朝臣、恐失其傳、再興、伯資延家執奏申之間、伯資延卿祭主之、次官延世、

禰宜（祝部）平孟雅　祝師（神琴師）源家業
神官（門生）三善亮壽　神膳司小野久親　下毛野敦光　紀智昌　神儀師清原武貞　藤原久信
藤恭高　三善亮禮
神庫司源常盛　物忌源廣住　平勝安　神部藤都平　源順行　藤正房　源伴貫　源乘詮
神兒源廣住女　神人五人　樂所季康朝臣　維事朝臣　忠職朝臣　忠勇　高美　季良

次第（伯御傳本）

當日早旦、令神部掃除齋場南廊祓所等、次神官等參集、奉仕御裝束等、剋限已前、齋主已下沐浴著新衣、（其儀知式）先各到祓所修祓、尊者設輙、自餘設圓座、有解除之儀、（知式）剋限祭主著南廊座、次召神部、神部稱唯參軾、次祭主仰物忌召、稱唯出召之、物忌參軾、次祭主仰祭物具候哉、諸官具候哉、物忌每度申云、具候（布）、了退出、次祭主移著外院座、次諸官參入、次祭主召神部、稱唯參軾、祭主仰物忌召、稱唯出召之、物忌參軾、次祭主令物忌催御衣事、其儀近代其由許、次各著座、次祭主召神部、稱唯參軾、仰猿女百歌女入（未伴）、稱唯出召之、次猿女率百歌等參入、次吹笛工吹神笛一曲、次神琴師調神琴一曲、次阿知女作法、次笛琴會奏、猿女唱神歌、次神庫司供八代物、次神膳氏供高坏物、次祭主召神部、稱唯參軾、祭主仰神庫司召、稱唯出召之、神庫司參軾、次祭主仰置木綿賜（伴）止、稱唯退出、更參入獻木綿、祭主取之纒巾子、次神部分木綿諸官退出、次祭主進神前著座、次奉幣、（知式）次祭主八度拜、次諸官再拜、次祭主讀祭文、（諸官伏面）次諸官復座、次御玉緒供奉于齋場、（其儀別記）次神部催拍子、次八開手、（諸官之）次神兒衝宇氣、此間神笛神琴會奏、次猿女發布瑠言本歌、次祝師著座、（諸官相從中臣門居）次祭主結糸於葛筥、此間猿女發布瑠言之末歌、次祝師讀祝文、（諸官伏面）次御衣筥振動、（物忌仕奉）此間發神歌、笛琴會奏、次奏大直日神歌、次祭主兩段再拜、次諸官兩段再拜、次倭舞、此間有行酒事、次祭主以下拜舞、訖而就本座、次神部催拍手、次祭主已下拍後手、次御玉緒還御本殿、此間發神歌、笛琴會奏、次撤御衣筥、次撤高坏物等、次撤八代物、次小拜、次起座

用途

一拝退出、（先下萬）次祭主昇殿上著座、次々官宣諸官可昇殿之由、次諸官昇殿上著座、物忌已下著簀子、
次直會有三獻之儀、次賜祿、次諸官下殿上拜舞而退出、

〔延喜式二四時祭〕鎮魂祭（中宮准此、但夏不給衣服、○中略）

大刀一口、弓一張、箭二隻、鈴廿口、佐奈岐廿口、絁一匹、木綿五斤、麻十斤、筥一合、瓮筥一合、明櫃一合、供御飯筥一合、御食料稻二束、案一脚、宇氣槽一隻、臼一口、杵二枝、槲四把、薦一枚、韓竈一具、杓四柄、瓫二口、堝四口、裹葉薦一枚、

右其日御巫於宮齋院舂稻、簸以瓮筥、炊以韓竈、訖即盛御筥、納櫃居案、神部二人執向祭所供之、

〔延喜式三十大藏〕鎮魂祭、於宮內省縣幔、結魂料木綿二兩、預送神祇官、祭日輔率屬官須給安藝木綿二斤、凡木綿卅斤、（中宮減安藝木綿二斤、凡木綿十斤、東宮減安藝木綿一斤、凡木綿廿斤、）

〔延喜式三十二大膳〕鎮魂（島居宮東宮亦同）

大直神一座（○大直神上恐脱神八座三字）

座別東鰒十三兩、（大直神陪）烏賊三兩一分、（大直神加三兩二分）堅魚六兩二分、（大直神加三兩二分）十鮭一隻、（大直神陪）鯛臘二斤五兩、腊三斤二兩、（大直神陪）海藻十兩、（大直神加十一兩）鹽一合八勺、糯米三升、大豆一合八勺七撮、小豆二合八勺、生栗子三升、搗栗子二升、干柿子一升二合、橘子二蔭、（已上七種、神四座料、自餘不須之、）酒四座別甕一口、（各受一斗、）四座別坩一口、（各受五升、）大直神一缶、（受五升、）木綿二分四銖、瓮筥十三合、（各長一尺四寸、廣一尺二寸、深三寸、）食薦五枚、（居神筥料、）輿籠二脚、（納筥料、）疊簀二枚、槲二俵、

右職司料理與神祇官供之、

〔延喜式三十五大炊〕鎮魂祭（東宮亦同）

神八座

大直神一座

鋪設

右座別米一升、（用宮田稻二束、付神祇官、）

供奉諸司人別米八合、（人數見大膳式、）薪一百五十斤、

〔延喜式三十六主殿〕鎭魂料（東宮亦同）

椶櫚油二升四合、燈臺八口、油坏一口、燈炷布二寸四分、

〔延喜式四十造酒〕鎭魂祭料（東宮亦同）

酒二斛、（一石一斗神九座料、九斗雜給料、）結飾缶木綿大一斤、播磨榍一俵三把、都婆波四口、坩四口、（別受五升、）土盞四口、小匜四口、缶一口、筥竹六株、（已上供神料、）窪坏蒲口、（加盤、）匏十二柄、（已上雜給料、）東宮並以此器通用、

〔儀式五〕鎭魂祭儀（十一月中寅日、中宮祭准此、但東宮用巳日、）

其日所司預敷神座於宮內省廳事、次設大臣以下座於西舍南、少西設辨大夫座、其南外記史座、其南太政官及左右史生座、（共東面絶席、）其南少東官掌、（北面、）東舍有座三列、北第一間設外記史式部丞錄座、第二間太政官幷左右史生式部史生座、第三間官掌省掌座、（北面西上、）

〔延喜式三十大藏〕鎭魂祭、於宮內省懸幔、

〔延喜式三十八掃部〕十一月鎭魂祭日、於宮內省廳設大臣已下歌女已上座、

〔江家次第十一十一月〕鎭魂祭

上卿以下入自宮內省南門、著曹廳、（○中略）而近代彼省無一屋、仍曹廳跡立平張行之、東第一間立楉𣝣置祭物、又倚付鈴賢木、其西安木綿、（置覆、）上卿座第三間、辨座第四間、神祇幷治部雅樂座西第一間、

〔長秋記〕大治二年十一月十六日壬寅、鎭魂祭也、本自下官分配也、秉燭間、以消息相尋頭中將云、昨日園韓神祭、依宮內省穢延引云々、鎭魂祭如何、返事、鎭魂祭事一定可被行也、但祭庭事未一定、相尋可告也者、良久外記來云、今夜鎭魂祭事可被行、互難承之、可被行之諸司未知何所、若有聞承案內觸向、可催促諸司者、下官云、不知其所、早詣頭中將亭案內可來告云々、外記退出歸來云、此夕已仰左少辨

實親了、於神祇官可被行也云々、仰云、早向彼所催具諸司可相待、只今可著也、此間皇后宮進檳榔毛車、內侍料也、戌刻參神祇官、此官燒亡後未被修造、仍門內立輕幄為祭庭、風力甚強可倒、座席大略如忘威儀、神祇官北門跡、皇后宮內侍車網代、雙車、立輕幄東著座北面、下官座西方儲辨座、其西南上儲神官座、上座東北立供神物棚、此外諸司座不見、辨云、此夕神祇官立輕幄可為祭庭之由、蒙仰向此所見地形、多是荊棘之地也、其間不清物滿、然而忽不能掃除、仍儲此所也云々、

〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參宮內省行鎮魂祭事、其儀曹廳路東西妻立五間幄一宇、東第一間立楉棚等安祭物、又併付鈴賢木、其西覆盆木繪、第三間敷上卿座、第四間敷辨座、已上中帖、各北面東上、西第一間敷神祇并治部雅樂座、南上東面

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎮魂祭也、○中略深山御記云、長寬二年十一月十六日、今日鎮魂祭也、予為分配、仍戌刻參宮內省、於郁芳門下下車、入省南門、召使二人來向、取隨身之所持之松明前行、追前隨身在予後、經西細殿東方、自廳西方壇上東行著座北面、廳屋又無實、仍立幄、○中略戌剋沐浴、○中略參宮內省、於郁芳門跡於今者礎石一顆之、仍於大炊御門大宮相計其程欲下車之處、內侍未參入云々、仍乍乘車相待也、及亥半刻內侍參云々、仍下車、宮內省中古猶以無一屋云々、況於予今乎、當神祇官北春日小路融也云々、則向乾有斜路、予經路一許町斜行、召使示其所、仍立留、無立幄之沙汰、剩不及引幔也、召使行繼仰諸司令裝束、

其儀

路頭中央敷上卿座、南面當上卿座坤去一許丈敷薦、其上竝立案二脚、其上又敷薦一枚、以一枚懸二案二脚之上也

當上卿座西方立內侍車、東面

此儀相違予所存、仍仰召使令改直也、

職員

上卿座儲北面、辨座同西方、(北面)當上卿座北去一丈餘立內侍車、(南面)當上卿座北去五許尺立件八足、

〔延喜式十一太政官〕凡鎭魂新嘗等諸祭之日、並辨及史等向祭所加檢按、其鎭魂者、十一月中寅、於宮內省祭之、大臣以下趣祭所、(中宮亦同、但東宮用巳日、)

〔延喜式十二中務〕凡鎭魂祭前五日、簡點和舞人侍從四人、(其名簿進式部、餘祭不須、)內舍人大舍人各四人、(園韓神、平野等祭儛人准此、)令趣宮內省祭畢、卽諸司依次奏舞、(神祇官先舞、次宮內省、次侍從、次內舍人、次大舍人云々、)

〔延喜式十八式部〕凡鎭魂祭夜、省率諸司參入之時、外記史屛下相待、就列而入、

凡中務所移鎭魂儛人侍從、若有不參者、勿預大嘗會節、(諸祭和儛人亦皆同、)

凡御并中宮鎭魂所、辨官中務輔、和儛侍從四人、式部輔、治部輔、雅樂頭、大藏輔、宮內輔、及預御膳諸司五位已上、令必參集、若闕怠者、停預節會、其有障者先申其由、(東宮准此、)

〔延喜式十九式部〕鎭魂祭

其日所司依例供備、各有常儀、是日晡時、輔已下就宮內省南門外座、省掌置版位、五位已上受點如常、(事見儀式、)

〔延喜式二十雅樂〕凡園韓神平野等祭、并御及中宮東宮鎭魂祭、省丞錄各一人、率允屬各一人、歌人歌女等供奉、(鎭魂祭、五位已上官各一人供之、)

〔延喜式三十一宮內〕凡新嘗會解齋、并鎭魂(東宮亦同)園韓神祭、丞已上一人與諸司共和儛、

〔延喜式三十大藏〕鎭魂祭、(略)○中祭日輔率屬官須給蓋木綿、

〔北山抄十二十一月〕中寅日鎭魂祭事

延喜御記云、內裏有穢、不可用御匣殿御衣、內藏寮人、夜中皆在內裏饗所、仍仰縫殿寮受大藏御服具、忽調御服御衣筥、卽彼寮送宮內云々、又內侍藏人皆參侍內裏、仍仰以女史命婦安部姉子爲內侍代、

壹志厚子爲藏人代云々、無年月

〔小野宮年中行事十一月〕中寅日鎭魂祭事中宮鎭魂同日行之

弘仁神祇式云、前五日簡點和儛侍從內舍人大舍人各四人、令赴宮內省參議已上就同省祭、○中略又

掌侍有障之時、以中宮掌侍爲代官之、

〔江家次第十一月〕鎭魂祭

內侍女藏人皆有障、以女史爲代官、

行事藏人雖參不著座、乍立行事、

淸涼記云、當日薄暮內侍經奏、率藏人一人、御匣殿藏人、女孺洗人等、內侍式云、率命婦二人、近代所行蓋此具、

令內藏寮侍御服、置机上

〔夕拜備急至要抄上十一月〕鎭魂祭日中寅

上卿　辨　內侍　官外記

〔古語拾遺〕凡鎭魂之儀者、天鈿女命之遺跡、然則御巫之職、應任舊氏、而今所選不論他氏、所遺九也、

〔鎭魂傳〕天鈿女命之遺跡云々とは、鎭魂祭の時の神樂に、御巫の宇氣槽を覆せて云々して、仕奉り來れるは、高天原にて、天照大御神の御窟閉の時、鈿女命の神樂仕奉りて、招出し奉れる事くめでたき儀を、遺跡のまゝに、代々相嗣て仕奉り來れる由なり、もはら漢文のまゝに、鎭魂之儀とは意得べからず、

〔先代舊事本紀七天皇〕辛酉爲元年、○神武十一月庚寅、○中略其鎭魂祭日者、猨女君等率百歌女、擧其言本、而神樂歌儛尤是其緣者矣、○又見本書天神本紀及令集解

〔左經記〕寬仁三年十一月十四日丙寅、參鎭魂祭、以內舍人藤爲親、爲式部丞宮內丞大藏丞等代官、但中外記代官之時、以造酒佑大原辰延申可爲件司々代官由、而辰延不參、若是外記內々所行歟、爲奇

不少、上卿左兵衛督、

〔中右記〕大治五年十一月十五日、鎮魂祭、左大辨雅兼、左中辨師俊勤之云々、

〔康富記〕應永廿九年十一月十九日壬寅、鎮魂祭也、參議藤光卿、右少辨俊國、召使行継、宮主代兼行內侍等有參行云々、外記不參、一﨟帥卿爲分配、不參云云、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月十九日甲寅、今日鎮魂祭也、九條宰相清房參向云々、辨藏人右中辨俊國歟可尋、奉行藏人左少辨資親也、　卅三年十一月十三日壬寅、今日鎮魂祭也、○中略予招召使委々問云、當時所參入諸司誰々哉、召使云、外記治部雅樂皆不參、大膳職官人播部寮官人等、如形有其代、於神祇官人所使者、我爲其代云々、抑又今日辨不參、經直爲分配之處、所勞不快復之故也、仍被尋不參之例、不被催他辨也、

貞元元年十一月十六日戊寅、鎮魂祭也、辨有障不參、仍以縫殿頭濟忠王爲辨代、

天養元年十一月九日丙寅、同祭也、辨不參、

久安四年十一月十八日壬寅、同祭也、參議藤原爲家卿參行、辨不參、

已上爲清宿禰勘申

應永十二年十一月廿二日、鎮魂祭、參議藤原滿親卿、辨不參、

師勝朝臣注進

〔管見記〕永享十年十一月廿一日、今日鎮魂祭、○中略參議中山宰相、辨左少辨資任以下參向云々、

〔康富記〕嘉吉二年十一月廿一日戊寅、鎮魂祭也、上卿參議隆遠卿、左少辨資重、藏人權少外記康顯、分配召使寛継、神祇少副卜部兼香、內侍等參之、

寶德元年十一月廿一日丙寅、鎮魂祭式日也、○中略坊城左大辨相公送消息、鎮魂祭他月例、并上卿不參、辨行事例、內侍不參例、納言上卿例等令尋給、註獻之、○中略

服裝

上卿不參辨行事例

永享三年十一月十七日

同九年十一月十六日

文安五年十一月十九日

內侍不參例

延文四年十一月廿五日、右少辨顯知一人參候、內侍不參、女官一人參向之、納言上卿例不ㇾ得所見ㇾ候、

權大外記中原康富

〔延喜式 二 四時祭〕鎮魂祭（中宮准此、但夏不ㇾ給二衣服一）

官人以下裝束料、（中宮宮主准此）伯已下史已上七人、宮主一人、（已上揩袍）奏龜卜長上二人、彈琴二人、巫部神部一人、各賜青揩袍一領、袴一腰、史生四人、神部十三人、卜部十二人、使部三人、各青揩布衫一領、（已上縫殿縫賜）御巫一人、（中宮東宮御巫准此）御門巫一人、生島巫一人、各青揩袍一領、（表裏別帛三丈）綿二屯、下衣一領、（表裏別帛三丈）綿二屯、單衣一領、（帛三丈）表裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈）綿二屯、下裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈）袴一腰、（帛三丈五尺）綿二屯、單袴一腰、（帛二丈）帔一條、（帛二丈）褶一條、（絲帛四丈）紐一條、（絲三丈）髻髮幷襪料細布一丈、領巾紗七尺、櫛二枚、履一兩、座摩巫一人、青揩袍一領、（表裏別帛二丈五尺）綿一屯、下衣一領、（表裏別帛二丈五尺）綿一屯、單衣一領、（帛二丈五尺）表裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈）綿一屯、下裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈）袴一腰、（帛一丈五尺）綿一屯、單袴一腰、（帛一丈）帔一條、（帛一丈）褶一條、（絲帛一丈五尺）紐一條、（絲一丈）領巾六尺、襪料細布五尺、履一兩、

〔延喜式 十四 縫殿〕鎮魂齋服（新嘗祭同用之）

神祇官伯已下彈琴已上十三人、榛揩帛袍十三領、（別一匹二丈二尺）袴十三腰、（別三丈）綿五十二屯、（袍別二屯中、袴別一屯中）絲三兩一分三銖、猨女四人、綠袍四領、（綠表帛裏、別三丈）綿八屯、（別二屯）兩面紐四條、（別長一尺九寸、廣五寸）汗衫四領、（別三丈）綠裙四腰、（綠表帛裏、別三丈）裙腰料纈帛四條、（別一丈五尺）綿八屯、（別二屯）下裙四腰、（裙別三丈、腰別一丈五尺）袴四腰、（別三丈）綿四屯、

（也、別）一纏帶四條、（別長六尺、廣四寸五分、）細布髮髻四條、（別二尺、）排紱四條、（一丈五尺、表帛裏、別）細布袜四兩、（別三尺、）三線鞋四兩、

〔延喜式十二中宮職〕凡鎭魂祭、（中略）其神祇官榛摺帛袍十三領、袴十三腰、青摺布衫卅二領、預前給之、

〔小野宮年中行事十一月〕中寅日鎭魂祭事（中宮鎭魂同日行之）

弘仁神祇式云、（中略）彈琴已上摺袍白袴、史以下摺布衫、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎭魂祭也、（中略）戌剋沐浴、束帶、（無文帶、帶劍、笏、淺履如恒、）乘八葉車、（不差副車、牛童遣之、須乘毛車也、而近代法以省略爲先、隨身一人如恒、雜色一兩在共、）參宮內省、（中略）次女官一人、（小袖上羅單於腰、乘輿相從、內侍車也、）

賜食

〔儀式五〕鎭魂祭儀

大舍人二人舞訖、復本座、辨大夫喚官掌二音、官掌稱唯趨就版、大夫問阿誰、官掌稱姓名、辨大夫命喚宮內省、官掌稱唯、退喚二音、丞稱唯就版、辨大夫問阿誰、丞稱官姓名、辨大夫命御飯早速令賜、丞稱唯退出喚膳部、五六人共稱唯、丞仰云、賜御飯、膳部共稱唯、大膳進屬以下共起賜神祇官、次大臣以下、訖大膳進就版、申云、御飯賜畢、共拍手三度、（先後稱唯、）觴三行、亦拍手一度、（不稱唯、）訖各退出、

〔延喜式二四時祭〕鎭魂祭（中宮准此）

辨官命官掌喚宮內省、令賜酒食、行酒三杯以後拍後手退出、

〔延喜式三十宮內〕凡神今食解齋、及春日、大原野、園韓神、平野、鎭魂祭等日、辨官令官掌召省、錄稱唯進就版位、卽宣令給食、錄稱唯差退、唱膳部二聲、膳部稱唯、錄宣給食、卽給饌行酒、

〔北山抄二十一月〕中寅日鎭魂祭事

所司差儀如常、事畢中宮同行、神樂畢俟錄、次辨召官掌、令召宮內省、仰可給御飯之由如常、大膳申給畢由、上卿以下退出、

〔江家次第十一十一月〕鎭魂祭

諸司供膳（居高盃）

次造酒司獻盃三獻
上卿不擬飮之
次後宮行之(儀同上)
宮司用居栁机、二人舁之、
次盃酌三獻(○中略)
次辨召官掌、(二音)官掌立庭中、辨問曰誰(曾)、官掌申官姓名、
辨宣宮乃內乃省召世、官掌出召、宮內丞立庭中、辨宣誰(曾)、丞申官姓名、辨宣御飯加多良加仁給、丞稱
唯出、次大膳屬進庭中、申云、御飯加多良加仁給畢、次上卿以下退出、
〔宮主秘事口傳〕中寅日鎭魂祭
辨召辨侍、可居饗之由被仰、三獻畢辨召官掌、(二音)官掌參、仰云誰、申姓名、次召宮內省、官掌宮內省ト(二音)
召之參、仰云誰、申姓名、仰云可候、此他唯稱、其後各退出、
〔長秋記〕大治二年十一月十六日壬寅、鎭魂祭也、(○中略)次羞膳、籠蓋居之、次柏裹之菜、又裹柏指串、造酒
司進酒不傳、(云云)諸官勸盃不見、次辨召官掌、(二音也)稱唯立版、辨問官掌申職姓名、辨仰云、宮內省召セ、官
掌稱唯召之、如召使、次省立版、辨問申職姓名、辨云、御飯(オモノ)カタラカニ給ヘ、稱唯出、次召膳部、(二音)大膳屬
稱唯就版、申云、御飯給ハス、下官拍手、辨不拍不知故、各退出、
〔兵範記〕仁安元年十一月十四日甲寅、下官參宮內省、行鎭魂祭事、(○中略)下官召官掌、(二音)官掌國成稱唯
立庭中、下官問之、官掌申官姓名、下官仰云、宮ノ內ノ省サ召セ、官掌出召之、宮內丞立庭中、下官問之、
丞申官姓名、下官仰了オモノカタラカニ給ヘ、丞稱唯出、次大膳屬進庭中、御飯堅ラカニ給畢由申
之、以下揖起座、女官等奉出御衣、內侍等歸參、藏人官司等相具、上卿不參仕之、次第大概如此、上卿參
勤之時、任式可存行之、

雜給

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十三日壬寅、今日鎭魂祭也、〇中略深山御記云、長寬二年十一月十六日、今日鎭魂祭也、予〇藤原忠親爲分配、仍戌刻參宮內省、〇中略次予示辨令居饌、〇中略有三獻、造酒令史獻盃唱平、二獻立箸、次辨伏箸取笏召官掌、二音官掌稱唯立版、辨問云、誰、官掌申官姓名、辨仰云、宮內省召、官掌稱唯、出召之、宮內錄立版、辨問之、次仰曰、御飯固給、錄稱唯退入、次大膳屬參入立版、申云、御飯固給了、予拍手、以下如此歟、〇中略戌刻、沐浴束帶、乘八葉車參宮內省、〇中略次大膳官人小雲雀役之居饌於予〇藤原定親前、如神今食等饌、次造酒司役如例取瓶子并盃勸予、予置笏右膝下、取盃如飮返賜之、此間問獻數、予答可爲一獻之由、次予置笏如立箸則拔置也、取笏、次予召召使、二音召使候前、仰云、召使、予候宮內省召、召使稱唯退、則又進立、宮內省也、予仰云、御飯固給、召使退則進立、申固給畢由、次予置笏如拍子、取笏揖起座退出、

〔康富記〕寶德三年十一月十九日甲寅、鎭魂祭也、〇中略獻盃二獻有之云々、

〔延喜式三十二大膳〕鎭魂皇后宮東宮亦同

雜給料

參議已上

人別糯米一升四合、大豆一合八勺七撮、小豆二合八勺、盡酒一合、酢四勺、醬三合、滓醬二合九勺、東鰒一兩二分、隱岐鰒五兩、堅魚二兩一分二銖、烏賊二兩、熬海鼠三兩二分、與理刀魚五兩二分、鮭二分隻之一、雜魚楚割三兩、堅魚煎二兩二分、飴二斤四兩、雜餡十一兩、紫菜海松各三分、海藻二兩、漬菜二合、漬蒜房蒜英韮搗各二合、生栗子一升四合、搗栗子六合、干柿子三合、橘子卅三顆、木綿二分四銖、

五位已上卅人

人別糯米七合五勺、大豆七勺、小豆一合五勺、盡酒三勺、酢一合、醬二合、鹽二合九勺、東鰒一兩二分、隱岐鰒四兩二分、堅魚二兩一分二銖、烏賊二兩、熬海鼠三兩二分、與理刀魚五兩、鮭二分隻之一、雜魚楚

中宮鎮魂祭

割三兩、堅魚煎汁一兩一分、鮨二斤四兩、腊十兩、紫菜海松各三分、海藻二兩、漬菜二合、漬蒜房蒜英韮搗各二合、滓醬二合、生栗子五合、搗栗子二合五勺、干柿子一合五勺、橘子十五顆、木綿二分四銖、

六位已下二百六十人

人別糯米六合七勺、大豆四勺七撮、小豆六勺、醬五勺、鹽一合七勺、東鰒二兩、堅魚二兩一分二銖、鮨二兩、鯖三兩二分、海藻二兩、漬菜二合、生栗子三合、橘子五顆、

麁筥十五合、(腊筥九合、菓餅筥四合、納肴饌筥二合、各長一尺四寸、廣一尺二寸、深三寸、)陶高盤大盤各十口、(參進已上、盛菓子料、)槲三俵、食籠二百六十合、(各長一尺二寸、廣八寸、深二寸、)箸竹二百六十株、筥杯二百卌口、(參議已上別八口、五位已上別五口、)

右依前件、其五位已上食並盛筥、菓子雜肴盛以干柏、結以木綿、六位以下食用籠、(其籠山城國所進)

〔延喜式 十三 中宮〕凡鎮魂祭日、亮及進屬史生各一人舍人二人向宮內省、次史生一人率召繼舍人四人舁使舍人二人入候、戌剋、內侍令史生幷召繼舍人持御服案、(盛革筥一合、緣靴、召繼四人扶案將來、)內侍一人、藏人一人、女孺等列立案後、雜使二人秉燭分左右立案前、史生立燭後、至宜陽門北候之、乘輿御服案自內裏出、相共陳列向宮內省、入自南門、就於廳座、御巫等受御服案如常、祭畢以次和舞、(先神祇官、次宮內丞、次侍從、次亮、次內舍人、次大進、次大舍人、次職舍人、)次廻儀如前、

〔延喜式 三十五 大炊〕中宮鎮魂

官人已下雜色已上料、米五斗四升四合、(人別八合、)薪卅斤、

〔江家次第 十一 十一月〕鎮魂祭

后宮懷姙尙祭(元慶元、十一、十七、)

中宮御輕服間、中宮御鎮魂祭如例、(承平六、十一、十七、)

〔小野宮年中行事 十一月〕中寅日鎮魂祭事(中宮鎮魂同日行之)

皇后雖懷姙猶行件祭、是延長三年天德二年例也、

〔年中行事秘抄十一月〕中寅日中宮鎮魂祭事（皇后宮准之、臨時有之）
弘仁式云、大臣以下趨祭所、（中宮亦同）
〔宮主秘事口傳〕中寅日鎮魂祭
宮主取后宮御方絲同置之、此儀如先度、是一二三四五六七八九十云ト結也、
后宮内侍取入櫃、各別也、北砌ニテ御玉結畢、賜后宮内侍、
〔公事根源十一月〕鎮魂祭
東宮中宮にても、年々ある事なり、
〔日本紀略四村上〕應和二年十一月十日甲子、中宮（○安子）輕服之間、鎮魂祭例被勤之、依先例可行之由被仰了、　十二日丙寅、鎮魂祭、中宮同、
〔日本紀略六圓融〕天祿二年十一月廿二日甲寅、鎮魂祭、中宮鎮魂祭、依本宮穢延引、　十二月廿日壬午、中宮鎮魂、去月式日、依本宮穢延引也、
〔日本紀略七圓融〕天元元年十一月廿一日壬寅、鎮魂祭、皇太后宮（○冷泉后昌子）同祭、　五年十一月十四日壬寅、鎮魂祭、皇太后（○昌子）同之、
〔日本紀略一九一條〕永祚元年十一月十三日庚寅、鎮魂祭、太皇太后宮（○冷泉后昌子）同之、
正暦三年十一月十三日壬寅、鎮魂祭、太皇太后宮（○昌子）皇后宮（○圓融后遵子）中宮（○一條后定子）同之、
〔左經記〕長元元年十一月一日辛卯、以關白信、令申大夫云、宮鎮魂祭可有哉否如何、尋先例、御輕服并御懐妊時皆被行、又諒闇時或被行、或不被行、諒闇是御心喪之儀也、非正御服、又御輕服時例不可准、此度后宮重服之時被行之例不見、爲之如何、被仰云、重服時无被行之例、不可被行者、可停之由仰爲信了、　十二日壬寅、今夜无中宮鎮魂祭、是依重服御坐、有定被停也、
〔中右記〕大治五年十一月十五日、中宮鎮魂祭、依催進、褙榔車、是本宮大夫所役也、

〔台記〕久安六年十一月十八日庚寅、皇后宮輕服、有鎭魂祭、依先例也、

〔延喜式二四時祭〕巳日晡時、供東宮鎭魂、

〔延喜式四十三春宮〕凡東宮鎭魂日、所司装東宮内省、同御、戌刻主膳監官人二人、(佑已上一人、令史一人、)率膳部八人、舁御膳高机二脚、主藏監官人二人、(佑已上一人、令史一人、)率舍人八人、舁御服高机二脚、坊官二人(進一人、屬一人、)各行列、主殿署官人二人、秉燭相從、左右兵衞各四人、陳列前後、向祭處、入自南門、到堂南東階前、而留立、舍人昇階、陳高机於東壁前、訖官人以下相率而出、宣旨量時乃參就座、式部引刀禰參入就座、坊官已下相從就東細殿、所司給木綿鬘、訖坊官率屬官等、移就堂東鬘、神祇官二人、宮内丞一人、侍從二人、坊進已上一人、内舍人大舍人坊舍人各二人和舞、訖坊官已下、率舍人參入立階前、令舍人舁机、退出如初儀、(訖綿鬘、御服二御衣奉返御匣殿、高机撤坊、)

〔江家次第十一十一月〕春宮鎭魂

上卿著座、外記申代司、(其詞曰、所司乃申世留、代司給頁牟、)上卿答云、(誰多)外記云、其司丞申際世留代乎、其司屬其姓其丸誠天候不、上卿云、令候、此間神祇官人猿女古止支著座、上卿召召使二音、召使庭中參進、上卿問、(其詞大舍)召使釋姓名、上卿云、宮乃省召世、唯出召須、丞參入、上卿問、丞申姓名、上卿云、刀禰令入與、丞唯天出、補著堂上、丞以下入間、外記史已下著、上卿召召使、(二音)召使參入如前、上卿問、如前申姓名、上卿云、大藏省召世、召使唯天出天召須、大藏省參入天立利、上卿問、申姓名、上卿云、加つらゆふ給、丞唯出天かつらゆふを給不、神樂倭舞、本宮居酒肴、宮内省令役、次辨召官掌、官掌立進、辨問、官掌申姓名、辨仰云、宮内省召世、唯天出天召須、省進立、辨問、申姓名、辨云、御飯早給へ、錄唯天出準、召膳部、大膳屬進出天申云、御飯加太良加仁給畢、上下各分散、

〔東宮年中行事十一月〕なかのみの日鎭魂の祭の事

この日のゆふべ、ないし代うちにはないしゆきむかふ、東宮にはなびしなし、〻かればだいをも

ちゐる、そのかはりつとむる人は、くらゐの御時ないしになるべき人をだいにもとめらるゝなり、大夫ごむの大夫のあひだの、びろうにのりて、宮ないしやうにむかふ、ぎやうじのくら人あひしたがふ、ぎよいは、ころもばこのふたに入たてまつりて、御つゝみにつゝみて、やつあしのうへにおく、御たまゆひのいとをぐしたり、やつあしかゝるまろききぬおはひあり、ながさ一ぢやう五しやく、またあしまきのぬのあり、御ころもばこをば、みちのほどおとさゞらんがために、やつあしにむすびつけたり、そのゆひをばしやうにまうく、きぬをはそくたゝみたる也、によくわんこれを申てたゝむ、れうのきぬ二丈なり、によくわんどもあひそへり、又さうのひやうゑおのおの四人、ぐぶ所のしゆ入人、そくたいしてせんくうす、たちはぎ一人いくわんにて、くるまのしりにありて、くないしやうにいたりて、あくのきたにくるまをたてたり、ふるくはないしだいくるまよりおる、ぎんだいはおりず、によくわん二人ぎよいのあんをかきてたつ、神祇のくわんにん御たまゆさのことをつとめてのち、しやうけい山とまひをめす、まづ神づかさ、次に内舍人、つぎに宮づかさ、このあひだしよしれいにまかせてきやうをそなふ、宮のちやうよりもこの事をまうけたり、しやうけいには宮づかさくわむばい、くら人へいしをとる、ことをはりてぎよいをあひぐしてないし代かへりまゐる、

今按、ぎやうじのくら人ありといへども、宮づかさたる人にたづねさたすべし、ふるくはゑんがのでん上人どもをもよほしつかはす、近代は宮司大しん少しむのあひだに一人ゆきむかふ、つぶさにはほうしきにみえたり、たゞしきんだいのれいにかなはず、

〔年中行事秘抄十一月〕中巳日東宮鎮魂事

東宮鎮魂内裏爲神事、依遣勅使、敢内侍參入、又上卿參、御服時猶被行、御衣遣白衣、云々、

〔夕拜備急至要抄上十一月〕一春宮鎮魂祭午日

上卿　辨　東宮内侍（宮司沙汰）　官外記

〇按ズルニ、此文ニ據レバ、後世ハ午日ニ行ヒシモノナルベシ、

〔三代實錄　二十七清和〕貞觀十七年十一月廿六日乙巳、東宮鎭魂祭、公卿行事、所司供奉如常、

〔江家次第　十一十一月〕鎭魂祭

東宮御輕服間、東宮御入鎭魂如例、（天慶七、十一、廿四、）

〔日本紀略　四村上〕天德元年十一月廿三日乙巳、東宮依伯母服、鎭魂祭延引、

〔九暦〕天德元年十二月廿九日、東宮鎭魂、小野宰相爲上、去月依爲御輕服不行、仍今日所行也、

〔日本紀略　四村上〕應和二年十一月十五日己巳、東宮鎭魂祭延引、依桂芳坊犬死穢也、　廿七日辛巳、於宮內省東宮鎭魂祭、

〔日本紀略　六圓融〕天延元年十一月十九日己巳、東宮鎭魂祭、　三年十一月廿五日、東宮鎭魂祭、依本宮重服不被行、

〔日本紀略　十四後一條〕長元五年十一月廿四日壬辰、東宮鎭魂祭、

〔左經記〕長元七年十一月十九日乙巳、著東宮鎭魂所、宮內廳去八月大風顚倒、仍其所立五丈幄二字、（合字）以東一間爲神殿、中間諸司座、西妻諸司饗所、又南庭立幄一字、爲辨以下座、余直著座、右少辨同著、（幄南廂東二間）上座三間、辨座四五間、內舍人大舍人並北面東上、母屋東三間、神祇官人座四間、同官史生官掌等座（幄南東面）上五間、饗所主殿所口主、（大臣立明火）余先召外記、（余座具有膝突）外記爲經著膝突、問諸司參否、申云、式部并本省丞等雖申參入之由、未參、自餘諸司皆是具者、仰云已及深夜、又々令催、遂不參入、可申代官者、外記唯起、頃之申代官、（兩丞代主殿允久賴者）余召、召使（二音）召使唯立南庭、余問、使申姓名、余宣式部省召セ、丞立、余問、并申姓名之處、非久賴、驚令尋其由、大藏錄者、仰召使令却之後、令召使仰外記云、非久賴者、任意令參入之由如何、兼以錄有爲丞代之例哉、令申云、久賴承在東宮饗所之由所申請也、今令尋問

愚忠信宿禰參入者、仍欲申事由之處、大夫屬錄無音參入、又吉田祭以造酒史令爲宮内丞代之例所覺也者、重仰云、其年日記可進者、其後良久無令申事、仍令召使問之、外記不候、疑者若爲令出日記向局歟、相待間已及曉更、令案式文、式部丞以上一人進立者、依以上字以忠信宿禰爲少輔代行了、又以大膳屬行孝爲宮内丞代、共雖無指例已及曉、仍相量所行也、不可守株歟、抑外記爲經不足言也云云、歸宅之後爲經來令申云、爲令出日記向局令尋求之間、事了御出者、爲申口參入、但以造酒令史爲宮内丞代之例、先年吉田祭左大辨被行者、仰聞了之由、

〔師守記〕曆應二年十一月廿六日辛巳、今日被行春宮鎮魂祭、上卿不參、參議藤原實繼卿（右中將）同宗光卿、外記中原利顯、史不參、召使助豐、官掌國友等參陣、本宮使權大進藤原兼綱云云、依雨儀、於神祇官北門被行之、

〔江家次第十九〕院鎮魂

立幄於此中門北（東西行幄、東北西三方引幔、）

第一間立棚伏槽

第二間立案置御衣

以幄東第二間當車寄戸立、

第三間設公卿別當座（其饌數獻）

第四間設四位別當座（座前設火爐）

第五間設判官代座（座前設火鉢）

第六間設神祇官五位座

第七間設同六位座

以上各先居饌、並立燈臺、（判官代以上机、神祇官疊、）

於殿上相尋事具否於行事之後著幄
判官代以上東上北面
神祇官南上東面二行、
召主典代、(不高聲召之)在座之人傳召之、
主典代著膝突、仰神祇官以下可著由、
神祇官著座
女房候車寄戸下
又召主典代、如初參入、仰可給鬘木綿由、
主典代參入獻之(官以下入折數、自餘人々、〇以下恐脫文)
次神遊、御琴師歌女奉仕、
御巫於棚下舞
中臣一人結絲
銜字氣間、女藏人開御衣箱振動之、
年々女官振之如何
差僎(判官代役送)
勸盃(大夫判官代獻之)
神樂訖
鋪倭舞座(北庭鋪絁、立入足机、置榊枝、)
神祇副史判官代舍人
給神祇官人祿有差

雜載

官人以上絹五位或加以下恐脫文〇自餘布各一段

御玉結絲、令入御竈神之鎭宮主付封、件鎭二口也、隔年入之、

〔公事根源十一月〕鎭魂祭

此祭を如法におこなはるれば、殊勝の御祈と成べきにや、されば白川院は御脫屣の後も、院中にて猶行はれ侍き、

〔日本書紀二十九天武〕十四年十月庚辰、遣百濟僧法藏、優婆塞益田直金鐘於美濃、令煎白朮、十一月丙寅、法藏法師金鐘獻白朮煎、是日爲天皇招魂之、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿四年二月庚戌、典聞建部千繼被充春日祭使、聞平城松井坊有新神、託女巫、便過請問、女巫云、今所問不是凡人之事、宜聞其主、不然者不告所問、仍述聖體不豫之狀、卽託語云、歷代御宇天皇、以慇懃之志、所送納之神寶也、今踐穢吾庭、運收不當、所以唱天下諸神、勒諱贈天帝耳、登時入京密奏、卽詔神祇官并諸司等、立幄於神宮、御飯、雀、銀笥、副御衣一襲、並納御裝、差典聞千繼充使、召彼女巫、令鎭御魂、女巫通宵忿怒、託語如前、遲明乃和解、有勅准御年數、屈宿德僧六十九人、令讀經於石上神社、

〔江家次第十一月〕鎭魂祭

內裏有穢、不用內藏寮御匣殿御衣、仍縫殿請大藏御服帛綿、忽調御服御衣筥、

依諒闇不用歌舞、元慶五、十一、廿二、

東宮御輕服間、御衣還白、

〔公事根源十一月〕鎭魂祭

天安二年にとゞめられ侍しを、興行せられて、貞觀元年十一月神祇官にて行はる、今は年々の事

になれり、

〔鎭魂傳〕天安二年に鎭魂祭を停られたるは、諒闇の故にて、翌の貞觀元年は、古に復して常例の如く行はれたるなり、更に興し行ひ給へるにはあらず、但し神祇官にて行はれたるは新儀なり、其は宮內省に障る事などのありしなるべし、同二年宮內省にて行はれて、如常と記されたるにて知るべし、公事根源にしるされたるは、實錄を粗に讀みて誤り給へるなり、

〔吉記〕元曆元年十一月十七日壬寅、鎭魂祭、左大辨奉行、雖申服暇之由、非神事之由、外記勘申云々、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月十日己亥、左頭中將被乞請鎭魂祭消息案、

鎭魂祭任例可被申沙汰之狀如件

十一月十日　左中將判

藏人中務丞殿

鎭魂祭任例可被致沙汰之狀如件

十一月十日　左中將判

四位大外記殿

四位史殿

鎭魂祭御分配候歟、御參向事、又可承存候也、仍執達如件、

十一月十日　左中將判

謹言　宰相殿

鎭魂祭御分配之上者、必可令參向給候哉、仍執達如件、

十一月十日　左中將判

謹言

鎭魂祭內侍出車、可令獻給之由被仰下候也、仍執達如件、

十一月十日　左中將判

謹言　六條中將殿

十三日壬寅、左頭中將今日可進散狀於兩御所、件書樣不審之由被示予、答曰、可書參議歟、可書上卿歟、先々有不審事也、而上卿與參議兩人參向事、上卿有障、參議行事之時、猶書參議、本自參議爲上卿事、兼參議書上卿之例也、又上卿一人參行事、納言等有障之時、以參議爲代者、同可書上卿也、假令釋奠上卿不參之時、參議一人參行者、可書參議也、自餘以之可准知也、

鎭魂祭

上卿

中山宰相中將

辨

經直（以嚴親不參之由、可申沙汰之由被仰下候間、觸書歟、辨云々、）

出車

有定朝臣

大概如此歟之由示畢

〔經戒記別記〕正長二年十一月八日、今日送鎭魂祭請文於藏人右少辨明豐許、其書樣、

鎭魂祭可參向之條、謹所請如件、

十一月八日　參議定親

〔看聞記〕永享十年十一月廿一日、今日鎭魂祭、內侍出車持明院少將獻之、借請予車了、牛飼（書直垂歟）直垂雜色男一人、續松等用意之副進云々、秉燭之間可遣車之由、奉行相觸之由羽林所語申也、

〔兼見卿記〕天正十四年九月十一日癸卯、關白〔○豐臣秀吉〕淀ヨリ御上洛、〔○中略〕後室數日相煩、祈念之義申來、一七日、此内神道大護摩修行之義申畢、入目此方次第之由申畢、時分柄也、以略儀可調進由申畢、彼使者畏之由申畢、十二石、鎭魂祭五石、以別義入目如此減之由申畢、

附　齋戸祭

十二月ニ至リテ、神祇官齋院ニ於テ、鎭御魂齋戸祭ヲ行フ、中臣事ニ當ル、中宮東宮共ニ此祭アリ、

神殿

〔三代實錄〕〔四清和〕貞觀二年八月廿七日甲辰、夜偸兒開神祇官西院齋戸神殿盜取三所齋戸衣幷主上結御魂緒等、

○按ズルニ、此文ニ據レバ、齋戸神ハ神祇官ノ西院ニ奉齋セラレシコト、又齋戸衣御魂結緒等モ、此神殿ニ奉置セラレシコト丶知ラル丶ナリ、

又按ズルニ、此ニ三所トアルハ、天皇幷ニ中宮東宮ヲ云ヘルナラン、

料物

〔延喜式〕〔二四時祭〕十二月祭

鎭御魂齋戸祭〔中宮准此〕

絁一疋、五色帛各一尺、絲一絇、綿一屯、倭文一尺、調布三端、庸布三段、木綿麻各二斤、米酒各一斗、鰒堅魚腊海藻各六斤、鹽二升、𤭖水瓫各一口、坏八口、匏一柄、槲十把、食薦一枚、

東宮鎭御魂齋戸祭

絁三丈、五色帛各一尺、絲六兩、綿一屯、倭文一尺、調布一端、庸布一段、木綿麻各一斤、米酒各五升、鰒堅魚腊海藻各三斤、鹽二升、𤭖水瓫各一口、坏四口、匏一柄、槲五把、食薦一枚、

右於此官〔○神祇官〕齋院中臣行事

祝詞

〔延喜式〕〔八祝詞〕鎭御魂齋戸祭〔中宮春宮齋戸祭亦同〕

名稱

高天之原爾神留坐須皇親神漏伎神漏美能命乎以氐、皇御孫之命波豐葦原能水穗國乎安國止定奉氐、下津磐根爾宮柱太敷立、高天之原爾千木高知氐、天之御蔭日之御蔭止稱辭竟奉氐、奉御衣波上下備奉氐、宇豆乃幣帛波、明妙照妙和妙荒妙五色物、御酒波瓱邊高知瓱腹滿雙氐、山野物波甘菜辛菜、青海原物波鰭廣物鰭狹物、奥津海菜邊津海菜爾至留萬氐雜物乎如横山置高成氐、獻留宇豆乃幣帛乎安幣帛能足幣帛止平久聞食氐、皇我朝廷乎常磐爾堅磐爾齋奉、茂御世爾幸閉奉給氐、自此十二月始、來十二月爾至留萬氐平久御坐所令御坐給止、今年十二月某日齋比鎮奉止申、

附招魂祭

招魂祭ハ一ニタマヨバヒノマツリト云フ、遊離ノ魂ヲ招キ還スノ意ナリ、毎日之ヲ行フアリ、日ヲ限リテ行フアリ、事變ニ臨ミテ行フアリ、或ハ重病ニ瀕シタル時行フアリ、或ハ死後其人ヲ蘇生セシメン爲ニ行フアリ、コノ祭ハ多ク陰陽家ノ行フ所ナリト雖モ、要スルニ鎮魂祭ノ一種ナルヲ以テ此ニ附ス、

〔攝壤集 上 祈禱〕招魂祭

〔神道名目類聚抄 五 祭祀〕招魂祭(シヤウコンマツリ/タマヨバヒノ)　人死スル時魂散ズ、故ニ魂ヲカヘシモトヅクル祭ナリ、陰陽家亦此行事アリ、招魂續魄ノ法ト云、

〔谷響集 九〕招魂法

客問、異言家有招魂法、招魂名目出何經軌耶、答、招魂名本出儒書、經名去識還來、然先達順世俗、故或呼爲招魂、今時傳習多稱招魂法、實稱去識還來法爲正矣、中性瑜公眞俗雜記云、諸經要集第十九、引淮南子魂魄問答、註以衣喚魂云招魂、而三十卷救王經說去識還來、淮南子魂魄問答在第十六卷說山訓、非有招魂名、招魂名、出禮記、檀弓云、復盡愛之道、有禱祠之心焉、北面求諸幽之儀也、喪大記云、升自東榮、中屋履危、北面三號、捲衣投于前、司服受之、降自西北榮、凡復男子稱名、婦人稱字、

鄭玄註云、復招魂復魄也、敎王經第十名金剛安立、第十四名去識還來、竝說印眞言、今略而不出之、
又問、衆好法師徒然草云、喚子鳥啼時、行招魂法之事、在眞言書中、此指何書耶、喚子鳥啼時行之義如何、答、非是流行之書、蓋古德記所傳之口訣者矣、用喚子鳥鳴時者、凡密法尙相應、怪鳥多夜啼、陰時相應、故亦喚名與鈎召相應故也、

楚辭招魂

楚辭、有宋玉招魂一首、文選載、楚辭註云、招魂者、宋玉之所作也、古者人死則使人以其上服升屋履危、北面而號曰、皐某復、遂以其衣三招之、乃下以覆尸、此禮所謂復、而說者以爲招魂復魄、又以爲盡愛之道、而有禱祠之心者、蓋猶冀其復生也、如是而不生則不生矣、於是乃行死事、此制禮者之意也、而荊楚之俗、乃或以是施之生人、故宋玉哀閔屈原無罪放逐、恐其魂魄離散而不復還、遂因國俗、託帝命、假巫語以招之、以禮言之、固爲鄙野、然其盡愛以致禱、則猶古人之遺意也、

〔古今神學類編 祭祀四十二〕招魂

凡ソ招魂ト云事ハ、人死ル時、哀情ノ至誠ニ發ル事也、鎭魂モ招魂ト同致ノ趣、神記ニモ侍リテ、磐戶前奉招禱ノ謂レニ本クト云ヘドモ、本朝ニテハ鎭魂祭是舊來ニシテ、復ノ禮ハ神記國史ニモ不見、但シ同事ノ如ク云ヘル說モ亦多シ、天武天皇紀ニ、法藏法師獻白朮煎、是日爲天皇招魂之ト見エタリ、其或ハ白朮ヲ招魂ニ用ル本說ノ如キハ未詳、除夜ニ五條ノ天神ニ參ル人、白朮ノ餅ヲ受テ疫ヲ除クト云ヒ、或ハ首途出行ヲ祝ヒ侍ルト云フモ、此天神ハ少彥名命ナレバ、大己貴命ト共ニ、療病術禁厭ノ制ヲ定メ玉フトナレバ、有由ニ似タレド、白朮ヲ用ル事ハ神記ニ未考、延喜式鎭魂祭ノ用度雜贄中、又ハ江次第ニモ白朮ノ事ハ不見、或書ニ、異國ニ此夜五辛盤トテ、五辛ヲ茹フ、所以發五藏氣也、若シカヽル謂レニモ、似通ヒ侍ラム歟ト云ヘリ、〇中略 異朝招魂ノ術ハ、檀弓下ニ云、復盡愛之道也、有禱祠之心焉、望反諸幽、求諸鬼神之道也、北面求諸幽之

義也ト、是ハ異國ニ、死者ノ服ヲ以テ屋上ニ上リ、向北招キテ復スル事アリト也、〇中略道反大神、又ハ輿玉神、皆是招魂ニ有故、復ニ歸嗣ノ理必ズアル所以也、生人ニハ鎭魂ノ法アリ、表裏同一ノ神理具ハル實、總テ招魂ノ法ハ、陰陽家眞言家ニモアリト也、〇中略或記ニ云、天台眞言ノ兩家ニ、招魂ノ法ト云フ事アリ、是ハ神社遷宮ノ時、或ハ祭會ノ前夜、門火ナド燒キテ、神輿ニ正體ヲ移シナドスル時是ヲ行フ事アリ、ツレ〲草ニ、喚子鳥ノ鳴ク時スル事モ口決アリト云々、予謂ラク、遷宮又ハ神輿ニ御正體ヲ移ス時、招魂ノ法ヲ修スルト云フハ、彼ノ磐戸前ノ故事ヲ摸スニヤ、又喚子鳥ノ鳴ク時修スルトノ事、古來ヨリ不分明、是モ魂ヲ招ブト云フ義ヲ取リ、喚子鳥ノ名ニ就キテ云フニヤ、春鳴ク鳥ナレバ、來復ナドノ義モ取ルニヤ、萬葉ノ歌ニ、吾瀨子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀨夜之不深刀爾トヨメル心モ是ニヤ、又ツレ〲草ニ、喚子鳥ハ、鵺ニ通ヒテ聞ユル由ヲ云ヘリ、玉迎鳥ト云フ異名モ、喚子鳥鵺ノ二說アリ、此鳥鳴ク時、必ズ招魂スト云ヘリ、理書ニ、鵺等ノ妖鳥ノ事ヲ、日爲神、夜爲鬼、且如妖鳥皆陰類、皆是夜鳴ト、又或記ニ云、招魂ノ二字ハ儒書ニ出ヅ、鄭玄ガ禮記ノ復ノ註ニ、招魂復魄也ト、佛經ニハ、救王經ノ第十ニ、名金剛安立十四ニハ、名去盡還來、是則招魂ノ事也、喚子鳥ノ鳴ク時修スル事ハ古法ニヤ、今不傳ト也、密敎ニハ、相應ヲ尊ブ故ニ、怪鳥ノ鳴クハ夜陰也、陰ノ時ノ相應ト、又呼ブト云フ名目ニタヨルモノナラムト、又云、密家ニ招魂ハ大秘法也トス、高野ノ碩學衆ニモ會シテ尋ネシニ、其家ナラデハ難知ト也、今此ニ載スル招魂ノ法ハ、一卷ノ內ニ見ユ、招魂法〈攘災延命法并普賢延命法行之〉偈ニ曰、大哉一切正覺尊、諸佛大智無有上、能令死去有情身、去盡還來得活命、裏書ニ曰、招魂作法、或云、去盡還來作法、又此作法七日用之殊有驗ト云々、又拾芥抄ニ、人魂ノ飛ブ時唱フベキ歌トテ、玉ハ三ツ主ハ誰トモ知ラネドモ結ビゾ留ムル下ガヘノツマ、此歌ヲ玉結ビノ歌ト云フト也、想フニ此歌ノ詞、玉ハ見ツ也、三ニハ非ジ、是モ御玉結ビノ本說ヨリ讀メルニヤ、下ガヘノツマハ、順ヘノ義

ヲ取ル乎、衣ノツマヲ結ブ事モ、衣ヲ振フ故實ヨリ云ヘルニコソ、總テ遊魂離魂ノ沙汰ハ、異國ノ書ニモ往々見エテ、一身兩所ニ分體セシ例モアリ、婦人ニ離魂病ト云ヘル類アリ、俗ニ影ノ病ト稱スルハ是ニヤ、神記ニ於テ、幸魂奇魂分化ノ道理ハ、甚ダ謂バレアル事ナリ、倩女ガ離魂ノ事ハ舊リタリ矣、○中略又世ニ謂ハユル返魂香ノ説モ、國史經書ニハ不見、白氏文集東坡文集等ニ出ヅト羅山子モ云ヘリ、

〔日本諸手船八〕恐○度會光隆按、招魂死生倶在、禮記謂死時也、楚辭謂生時也、不可泥一途、杜甫詩、南方實有未招魂、亦謂生時也、○中略但本邦復魂、不詳何昉、管窺可憾焉、猶竢後考、

毎日招魂祭

〔日中行事〕日ごとのせうこんの御まつり、今はさだまれる事也、日下﨟の藏人、臺盤所にて御撫物申出して、衛士をして陰陽師がもとにつかはす、

百日招魂祭

〔吾妻鏡二十七〕安貞二年六月廿三日、將軍家百日招魂祭、御撫物、鼠喰損之云々、

臨時招魂祭

〔本朝世紀〕久安三年四月二日乙未、於内膳被行招魂祭、權天文博士安部晴通奉仕之、藏人俊憲隨身御衣向祭庭、

〔顯時卿記〕久安五年八月七日、今日○中略高陽院○鳥羽后藤原泰子被行招魂御祭云々、就待賢門院○鳥羽后藤原璋子之例所被行御祓也、○祭物下知略

〔玉海〕嘉應二年七月五日、修鬼氣土公等祭、又小兒修招魂祭、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年○建保元年八月十八日丙戌、子剋將軍家○源實朝出御南面、○中略及丑剋如夢而青女一人奔融前庭、頻雖令問之給、遂以不名謁、漸至門外之程、俄有光物、頗如松明、以宿直者召陰陽少允親職、親職倒衣奔參、直被仰事次第、仍勘申云、非殊變云々、然而南庭被行招魂祭、今夜所著給之御衣賜親職、

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年十二月三日、丑刻奥州御亭有光物、仍即時於大倉藥師堂被始行御祈、奉神

病中招魂祭

馬(鎭二片岡名馬也)於鶴岡、又有七座招魂祭云々、

〔實隆公記〕長享三年八月廿九日乙卯、抑去廿三日勸語、今月十六日午下剋計、御坐議定所之處、如拍掌有物聲、諸人聞之云々、尤奇異也、仍被尋仰有宣卿處、人魂所爲歟、爲男女之慎之由申之、兼倶卿占文趣、家內鬼形之所爲云々、仍招魂祭、有宣卿勤之、

〔小右記〕萬壽四年十一月廿六日壬戌、禪閤(○藤原道長)危急、卅日丙寅、或云、禪室招魂祭、去夕守道朝臣奉仕、人魂飛來、仍給祿、(桑絲)十二月四日庚午、巳時許、成光來云、禪閤昨日入滅、而終夜有搖動氣云云、

〔吉記〕安元二年五月廿九日癸酉、女房所勞、今日更發、依令修泰山府君祭、在憲朝臣勤修之、又行招魂祭、職保有光物之由云々、

〔玉海〕建久二年八月廿四日庚子、早旦中宮(○後鳥羽后任子)女房告送云、宮自去夜聊不例御坐、(略○中)今日始祈等、廿五日辛丑、中宮今日猶六借御坐云々、(略○中)今日召陰陽師七人、行招魂御祭也、

〔吾妻鏡脫編〕嘉祿二年十月廿七日己酉、戌剋將軍家(○藤原頼經)聊御不例、御濕氣歟云々、廿八日庚戌、依御不例之事、招魂祭以下御祈等被始行、三條左近大夫將監親實爲奉行云々、三年(○安貞元年)十一月十八日癸巳、巳剋以後將軍家御不例、廿二日丁酉、入夜鬼氣招魂祭等被行之云云、廿三日戊戌、將軍家赤斑出現給、廿五日庚子、今夜七座招魂祭、天冑地府、泰山府君等被行也、祭料結城左衞門尉土岐左衞門尉廣澤三郎等沙汰進之、

〔吾妻鏡三十〕文暦二年(○嘉禎元年)十二月十八日丙午、將軍家御不例事、御疱瘡有出現氣之由、良基朝臣申之、今夜又始行御祈禱等、及子剋平左衞門尉盛綱、爲武州御使參御所申云、每日可被修御招魂祭之由云々、仍先七箇夜可奉仕之旨被仰國繼云云、

〔續史愚抄後桃園〕安永八年十月十八日戊辰、爲御惱(○後桃園)御祈、自今日七箇日、陰陽頭泰榮奉仕招魂

死後招魂祭

續魂祭於私館、

〔小右記〕萬壽二年七月廿九日己酉、義光朝臣云、尙侍（○後朱雀后嬉子）瘡出卽熱氣散、仍今日修法被加持者、

八月三日壬子、義光朝臣從尙侍御許來云、今日兩三度有產氣色、上下經營、神寶以馬牛誦經神社、已似難產、人々歎息、　五日甲寅、黃昏隨身近衞信武從北野御會來云、尙侍不覺、被修誦經北野、其使右兵衞尉貴孝今不烏帽下人懷絹四疋走問案內申云、所々御讀經使也、其後秉燭間、關白權隨身府生保重馳來云、尙侍不覺、仍分手修諷誦、諸僧等加持六親、近衞兩三度、只今無音非常座歟者、（○中略）　六日乙卯、故尙侍今夕移法興院、　七日丙辰、昨夜風雨間、陰陽師恒盛、右衞門尉雅孝、昇東對上（尙侍住所）魂呼、近代不聞事也、彼院者太后御座所、尤可有忌諱、頻有不祥雲、亦尙侍移法興院之夕、同有此雲云々、　九日戊午、義光朝臣云、被著尙侍舊居、留守祗候、昨夜尙侍可蘇生、是禪閤夢想、被行種々祭、僧俗男女擧首向法興院云々、　十五日甲子、今夜尙侍葬送、（略云々）

〔左經記〕萬壽二年八月廿三日壬申、今朝大外記賴隆眞人云、陰陽師常守來問云、去五日夜、尙侍殿薨之時、依播磨守泰通朝臣仰、上東門院東對上、以尙侍殿御衣、修魂喚、而道上龍達、皆稱不見本條之由、可負祓於常守云々、此事如何者、賴隆答云、有本條更不可負祓、或書云、上自屋東方堂亡者上、以其衣向北方三度麻禰久、（其詞云、姓某魂、後世可喚字云々、）畢自西北角下云々、常守聞此事悅氣殊甚云々、

〔榮花物語〕（二十六楚王の夢）若宮（○後冷泉）の御ゆどのも、けふはとくなどそゝのかしおほせらるゝに、辰の時ばかりに、こもちの御まへ、（○後朱雀后嬉子）いたうちあくばせ給て、いとくるしげなる御けしきおはしますを、御前にさぶらふ人々いかに〳〵と見たてまつりて、殿のおまへ（○嬉子父藤原道長）にかくときこえさすれば、僧などものけたれば、御ものゝけのするなめりとて、御讀經またさるべき僧どもみなまゐりて、もろ心にいとおどろ〳〵しくれいの物のけさま〴〵の人々めしいでゝ、あるは

たまむすび

そばよりさけびのゝしり出て、僧たちみなあたり〳〵に加持すれば、れいのゆすりあひたるさまもぞよみにたり、〇中略されぞすべてかぎりになりはてさせ給ぬ、御年十九あないみじあさましとおぼしめす、とのゝ御前は、やがてさしのいてあさましくてふさせ給ぬ、主計のすけありみち、おはしますたいのうへに御ぞをもてのぼりて、よろづを申つゞけまねきたてまづる、すべてかぎりにおはしませば、大かた殿ばらたゆむな〳〵と僧達をもたのもしういひおこなはせ給へば、僧もおなじ人なれば、なく〳〵いみじかなしとおもふ、觀音〳〵と申ながらも、またいとなさけなう、佛をもうらみ申て、ひげに心地たゆみたり、

〔伊勢物語 下〕昔男みそかにかよふ女有けり、それがもとより、こよひ夢になん見え給ひつるといへりければ男、

思ひあまり出にし玉の有ならむよふかくみえば玉むすびせよ

〔源氏物語 三十九 夕霧〕もの思ふ人のたましひは、げにあくがるゝものになんありけるとなつかしげにいひて、

なげきわび空にみだるゝわがたまをむすびとゞめよしたがひのつま、とのたまふこゑけはひ、その人〇上夕霧にもあらずかはりたまへり、

〔狹衣物語 三下〕猶いかでいみじうむねいたきこゝろのうちをすこし聞えしらせて、思ふはいとげてやみなんとおもひつゞくるに、又なほしのぶもぢずりは、かこちきこえさせつべくおもひいでられ給ふもわりなしや、

あくがるゝわがたましひもかへりなんおもふあたりにむすびとゞめば、など手ならひにかきすさびてそひふし給へるに、宮の中將參りたまへるに、赱をに色の御ぞのなよゝかなるに、草のかうのおり物のさしぬきばかりをき給ひて、物あはれとおぼしたるけしきにて、詠ふしたま

へるさまの、いふかたなうめでたう見え給ふにも、人しれず思ひあつかはるゝ人の御事まづ思ひ出られて、この人の御あたりのちりともなさまほしう、此御手ならひを見るまゝに、
玉しひのかよふあたりにあらずともむすびやせまし。したがへのつま、とかきつけたれば、人のまねびし事を、筆のすさびにとまぎらはし給ひて、何やかやと世の物がたりをしたまふ、
〔袋草紙四〕見人魂歌
たまはみつぬしはたれともしらねども結びとゞめよしたがひのつま
三返誦之、男左女右ノツマヲ結ビテ、三日ヲ經テ解之云々、
〔馬内侍集〕四月つごもりがたに、むかしさふらひしともたちのなき事をいひたれば、
今さらに忍びぞわぶるほどゝぎすもとつ人よとねのみなかれて
おなじところに、ずへてたましづめしてまいらすとて、
身からこそとにもかくにもあくがれめかよはむたまのをだみだにする
とてまいらせたれば
世にもみなあくがれにたるたまなればうらなきつまにとまる物かは
〔徒然草下〕喚子鳥は春の物なりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし、ある眞言書の中に、呼子鳥なく時、招魂の法をばおこなふ次第あり、

鎭火祭

鎭火祭ハ、ヒシヅメノマツリト云フ、火災ヲ防ガン爲ニ火神ヲ祭ルナリ、太古伊弉冉尊、火神軻遇突智ヲ生ミタマヒシ時、火神ノ國土人民ニ害ヲ爲サンコトヲ慮リ、水神罔象川菜埴山姫ヲ生ミテ以テ之ニ備ヘタマフコトアリ、鎭火祭蓋シ此ニ原ヅク、

名稱

〔令義解二神祇〕季夏鎭火祭 謂在宮城四方外角、卜部等鑽火而祭、爲防火災、故曰鎭火、 季冬鎭火祭

〔公事根源六月〕鎭火祭 卅日

卜部氏の人火をうちて、宮城の四のすみにて祭事有、火災をふせがんのためとかや、此祭儀のあひだ、秘術おほく侍るよし承るなり、

〔標注令義解三〕道饗祭ハ、六月晦日に大祓事畢て後行ふ、道饗畢て同夜に鎭火祭行はる、○中略 鎭火は日本武尊の向火と同意の祭なり、

祭日

〔小野宮年中行事六月〕廿五日、鎭火祭事

弘仁神祇式云、於宮城四隅祭之、十二月准之、

〔師遠年中行事六月〕晦日、鎭火祭事 宮城四隅祭之、陰陽寮勤之、

〔年中行事抄六月〕撰吉日事、

〔拾芥抄中末年中行事〕六月、撰吉日事、

鎭火祭事 或晦日

鎭火祭

〔師光年中行事十二月〕撰吉日事、

鎭火祭事

祝詞

〔台記〕天養二年十二月三十日庚午、鎮火祭、

〔延喜式八祝詞〕鎮火祭

高天原爾神留坐皇親神漏義神漏美能命持氏、皇御孫命波、豐葦原乃水穗國乎安國止平久所知食止天下所寄奉志時爾、事寄奉志天都詞太詞事乎以氏申久、神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給氏、國能八十國島能八十島乎生給比、八百萬神等乎生給氏比、麻奈弟子爾火結神生給氏、美保止被燒氏石隱坐氏、夜七日晝七日吾奈乎見給比曾吾奈妹乃命止申給支比、此七日波爾不足氏隱坐事奇氏止見所行須時、火乎生給氏御保止乎所燒坐支、如是時爾吾名妹乃命能吾乎見給布奈止申乎、吾乎見阿波多志給比止津申給氏、吾名妹能命波上津國乎所知食志倍、吾波下津國乎所知止申氏石隱給氏、與美津枚坂爾至坐氏所思食久、吾名妹命能所知食上津國爾、心惡子乎生置氏來奴止宣氏、返坐氏更生子、水神匏川菜埴山姬四種物乎生給氏、此能心惡子乃心荒比波曾水神匏埴山姬川菜乎持氏鎮奉禮止事敎悟給支、依此氏稱辭竟奉者、皇御孫能朝廷爾、御心一速比給波志止爲氏、進物波明妙照妙和妙荒妙五色物乎備奉氏、靑海原爾住物者鰭廣物鰭狹物奧津海菜邊津海菜爾至万氏爾、御酒者𤭖邊高知、𤭖腹滿雙氏、和稻荒稻爾至万氏爾、如横山置高成氏、天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭竟奉久止申、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉冉尊生火產靈時、爲子所焦而神退矣、亦云神避矣、其且神退之時、則生水神罔象女、及土神埴山姬、又生天吉葛、

〔日本書紀纂疏上二〕伊弉冉尊、爲火神所灼而神退、是火之過也、過則理當禁制、故後世有鎮火祭、神祇令曰、季夏鎮火祭、謂在京城四方外角、卜部等鑽火而祭、爲防火災、故曰鎮火、延喜式鎮火祭祝詞、具載伊弉冉尊爲火神所灼之緣、夏月火旺、故用季夏時者、制於過也、

幣帛

〔延喜式一四時祭〕六月祭十二月准之

鎮火祭於宮城四隅祭

五色薄絁各四尺、倭文四尺、木綿五兩、麻一斤、庸布二段、鍬四口、米酒各四升、鰒堅魚各一斤五兩、腊四升、海藻一斤五兩、鹽二升、瓶坩坏各四口、槲四把、匏四柄、薦四圍、

祭使

〔年中行事抄六月〕撰吉日事

鎭火祭事〇或晦日中略

已上二祭、宮城京城四角四祭也、陰陽寮進勘文、瀧口爲使、

鋪設

〔術水鎭火式〕鎭火之式

飾以前四方拜

神拜　如常

献

奉幣

内札　奉鎭火產靈命

外　鎭火御札

内札　桃木札　奉鎭八雷天神

外　火雷天神守護所

内札　奉鎭荒神

外　鎭火御札

竈神酉ノ日酉ノ刻祭之

火鎭之口傳

是ハ庭ニテ飾ル也、八足机三尺八寸許ニシテ、四隅ノ柱ニ五尺ノ幣ヲ結付、机ノ中ニ木地ノ四方ニ五色ノ絹五疋置、兩脇モ四方ニ海ノ物ハ和布ナド、川ノ物ハ富士ノリスイセン等ノ類、山ノ如

クニ盛上ル、置様如圖、〇圖略前ノ机ハ四五寸モ低クシ、是モ四方ヲ三膳スエル、中ハ高盛ノ食、汁ハ菜ノ葉ナド生ニテ置、上ニ味噌少ツクテ置、サイハ鮑ナドニテモ切置、各土器ニ盛也、左ハ瓶子二ツ、土器三ツ重、先ニアイキヤウ二ツ並ベ置如圖、〇圖略拜所ニ荒ゴモヲ敷、我身其ノ季ノ方ヘ向フヤツニ餝ル、

机ノ前兩脇ニ庭火ヲタク

先立テ四方ヲ其時ノ季ノ方ヨリ拜シ、宿德ノ拜ニシテ庭火ヲ消シ、鹽水打シヅムベシ、介添ハ月水ナキ女ヲスベシ、先絹ヲスエ、次ニ海ノ物神右ノ川ノ物神左ノ御膳瓶子土器ト段々ニスエル、次ニ立テ腰ヲカヾメテ拜シ、下ニ居拜シ、マタ立テ拜シ、下ニ居拜シ、合テ四拜也、偖拍手二ツ、次ニ祝詞ハ、延喜式ニアル如クヨミ、次ニ幣使脇持來ルヲ少退テ請取、左右左、左右左、左右左トシテ幣ヲツキ立テ、四拜シテ幣ヲ机ニ立置ク、次ニ願文、次ニ返リ申シノ拍手四、又立拜シテ退去、

鎭花祭

名稱

鎭花祭ハ、ハナシヅメノマツリト云フ、卽チ季春ヲ以テ、大神狹井ノ二神ヲ祭リ、以テ疫氣ヲ鎭遏スルナリ、蓋シ春花ノ飛散スル頃ハ、疫神分散シテ癘ヲ行フガ故ナリト云フ、

〔伊呂波字類抄〕波諸社 鎭花祭ハナシヅメノマツリ

〔令義解〕二神祇 季春鎭花祭謂大神狹井二祭也、在春花飛散之時、疫神分散而行癘、爲其鎭遏、必有此祭、故曰鎭花、

〔大三輪神三社鎭座次第〕祭禮之事

鎭華祭者式三月擇日、於神祇官奉敬祭、當社狹井社也、當社行之、春華飛散之時、疫神分散而行癘、爲其鎭遏必有此祭、故曰鎭華祭也、此祭自大寳元年而始矣、狹井社大己貴命之荒玉也、

〔公事根源〕三月 鎭華祭

是は大神狹井の二祭をいふと神祇令にのせたり、春花の飛かふ比は、疫神分散して人をなやますが故に、かれをしづめん爲に、此祭は有とかや、神祇官にて行はる、

祭祀

〔延喜式〕一四時祭 三月祭

鎭花祭二座

大神社一座

狹井社一座

〔延喜式〕九神名 大和國城上郡

大神大物主神社名神大、月次相嘗新嘗、

狹井坐大神荒魂神社五座鍬靫

〔標注令義解〕三 狹井は、神名式大和國城上郡狹井坐大神荒魂神社これ也、厲を鎭む爲に、大物主

の和魂大神社と、荒魂狹井社とを祭らせ給ふ、崇神紀に、五年多疾疫とありて、七年に大物主の敎に依て、大田々根子といふ者を以て、大物主の祭主とし給ひけるに、疫病始息とあり、この故事によりて也、

〔日本書紀 五崇神〕七年二月辛卯、詔曰、昔我皇祖大啓鴻基、其後聖業逾高、王風轉盛、不意今當朕世、數有災害、恐朝無善政、取咎於神祇耶、蓋命神龜以極致災之所由也、於是天皇乃幸于神淺茅原、而會八十萬神、以卜問之、是時神明憑倭迹迹日百襲姬命曰、天皇何憂國之不治也、若能敬祭我者、必當自平矣、天皇問曰、敎如此者誰神也、答曰、我是倭國城内所居神、名爲大物主神、時得神語、隨敎祭祀、然於事無驗、天皇乃沐浴齋戒、潔淨殿内、而祈之曰、朕禮神尚未盡耶、何不享之甚也、冀亦夢敎之、以畢神恩、是夜夢有一貴人、對立殿戶、自稱大物主神曰、天皇勿復爲愁、國之不治、是吾意也、若以吾兒大田田根子令祭吾者、則立平矣、亦有海外之國、自當歸伏、　八月己酉、倭迹迹神淺茅原目妙姬、穗積臣遠祖大水口宿禰、伊勢麻績君、三人共同夢而奏言、昨夜夢之有一貴人、誨曰、以大田田根子命、爲祭大物主大神之主、亦以市磯長尾市、爲祭倭(○倭下一本有大字)國魂神(○神下一本有之字)主、必天下太平矣、天皇得夢辭、益歡於心、布告天下、求大田田根子、卽於茅渟縣陶邑得大田田根子而貢之、天皇卽親臨于神淺茅原、會諸王卿及八十諸部、而問大田田根子曰、汝其誰子、對曰、父曰大物主大神、母曰活玉依媛、陶津耳之女、亦云、奇日方天日方武茅渟祇之女也、天皇曰、朕當榮樂、乃卜使物部連祖伊香色雄、爲神班物者、吉之、又卜便祭他神、不吉、　十一月丁卯(○十一月無丁卯、恐誤)、命伊香色雄、而以物部八十手所作祭神之物、卽以大田田根子、爲祭大物主大神之主、又以長尾市、爲祭倭大國魂神之主、然後卜祭他神吉焉、便別祭八十萬群神、仍定天社國社及神地神戶、於是疫病始息、國内漸謐、五穀旣成、百姓饒之、

〔古事記 中崇神〕此天皇之御世、疫病多起、人民死爲盡、爾天皇愁歎、而坐神牀之夜、大物主大神顯於御

夢曰、是者我之御心、故以意富多多泥古、而令祭我御前者、神氣不起國安平、是以驛使班于四方、求謂意富多多泥古人之時、於河内之美努村見得其人貢進、爾天皇問賜之汝者誰子也、答曰、僕者大物主大神、娶陶津耳命之女活玉依毘賣、生子、名櫛御方命之子、飯肩巣見命之子、建甕槌命之子、僕意富多多泥古白、於是天皇大歡以詔之、天下平人民榮、卽以意富多多泥古命、爲神主、而於御諸山、拜祭意富美和之大神前、又仰伊迦賀色許男命、作天之八十毘羅訶、(此三字以音也)定奉天神地祇之社、又於宇陀墨坂神祭赤色楯矛、又於大坂神祭黑色楯矛、又於坂之御尾神及河瀬神、悉無遺忘以奉幣帛也、因此而役氣悉息、國家安平也、

祭日

〔大三輪神三社鎭座次第〕祭禮之事

鎭華祭者、式三月擇日、於神祇官奉敬祭、當社狹井社也、當社行之、

〔師遠年中行事〕三月 晦日鎭花祭事(神祇官○又見師元年中行事、師光年中行事、年中行事秘抄、拾芥抄)

〔年中行事抄〕三月 撰吉日事

鎭花祭事(式日)

幣帛

〔延喜式四時祭〕三月祭

鎭花祭二座

大神社一座

絁一匹、絲一絇二兩、綿一屯、五色薄絁各三尺、倭文六尺、布一端一丈、木綿麻各三斤六兩、枲六兩、弓七張、箆二連、鹿皮十張、(已上三種神祇官充)羽二翼、鹿角三頭、鐵三斤五兩、漆一升、黃蘗三斤五兩、茜十兩、黑葛廿斤、淸酒五升、濁酒六斗五升、飯二斤六兩、堅魚五斤五兩、腊八升、海藻五斤五兩、鹽二升、瓮一口、都婆波匜短女杯盞各一口、裹葉薦二枚、

狹井社一座

絁二匹、絲三絇、綿一屯四兩、五色薄絁各三尺、倭文六尺、布一端一丈、木綿麻各六斤十兩、枲八兩、弓七張、箆二連、鹿皮十張、(已上三種神祇官充)羽二翼、鹿角四頭、鐵三斤五兩、漆一升、黄蘗三斤五兩、茜一斤、黒葛廿斤、清酒五升、濁酒六斗五升、鰒三斤、堅魚五斤五兩、腊八升、海藻五斤五兩、鹽二升、瓮二口、都婆波匾短女杯盞各一口、裹葉薦二枚、(○中略)

右(○中略)幣物依前件、付祝等令供祭、

祭使

〔令集解〕(七神祇上)季春鎭花祭(釋云、大神狹井二處祭、大神者、祝部請受神祇官幣帛祭之、)

〔神祇官年中行事〕(三月)晦日鎭花祭也、件幣以本官請奏、兼日付官公文、

〔二十二社註式〕大神社

鎭花大神狹井

使五位一人、幣一前、宣命(黄紙)

雜載

〔新拾遺和歌集〕(十六神祇)貞和二年百首歌奉ける時　　關白前左大臣

のどかなる春のまつりの花しづめ風をさまれと猶いのるらし

〔神道名目類聚抄〕(五祭祀)鎭花祭(大和國狹井社ニアリ)　三月ニアリ、疫ヲ鎭ル祭ナリ、(○中略)按ニ狹井社ハ、三輪神ノ荒魂ナリ、三輪ノ社ヲ去コト二町許北ニアリ、今ハ社斷絶ス、又三月十日山州上賀茂ノ里俗、紫野今宮ノ社ニ踊來、是ヲヤスラヒ花ト云、鎭疫ノ祭ナリト云リ、ヤスラヒ花ハ、ヤスラフ花ニシテ、鎭花ノ儀ナラン、

〔倭訓栞〕(前編二十四波)はなしづめ　鎭花祭をいへり、公事根元に、是は大神狹井の二祭をいふと神祇令にのせたり、又松尾の神社にあり、和州三輪山の内にも鎭花の社あり、花のちりかふ春の比は、疫神分散して人をなやますゆゑに、此祭ありといへり、又花鎭宮乙訓郡上久我村にあり、

道饗祭　四角四境祭〔併入〕

道饗祭ハ、ミチアヘノマツリト云フ、六月十二月ノ兩度、京城ノ四隅ニ八衢比古、八衢比賣、久那斗ノ三神ヲ祀リテ鬼魅ノ外ヨリ來ル者ヲ京城外ニ驅逐セシムル祭ナリ、京城ノ四隅ニテ疫神ヲ祭ルヲ四角祭ト云ヒ、國ノ四境ニテ疫神ヲ祭ルヲ四境祭ト云フ、其ニ鬼魅ヲ驅逐スル所ニシテ、陰陽道ノ祭ナリ、後世鎭火ヲ四角、道饗ヲ四境トシ、混ジテ云フ者アレド是ナラズ、鎌倉幕府ニ於テモ亦此祭アリ、

名稱

〔伊呂波字類抄〕見諸社　道饗祭ミチアヘノマツリ

〔令義解〕二神祇　季夏道饗祭謂卜部等於京城四隅道上而祭之、言欲令鬼魅自外來者不敢入京師、故預迎於道而饗遏也、季冬道饗祭

〔古史傳〕六　義解文に、鬼魅自外來者云云、豫迎於路而饗遏也とありて、其饗を外より來る鬼魅に備るよしに解れしは背へり、其はこの御祭の祝詞に、八衢比古、八衢比賣、久那斗神に、御饗を奉らるゝ由は見えたれども、鬼魅に備ふるよしは、見えざるにて知られたり、然れば義解文は、既く此祭の古意を心得誤れるものとこそ思はるれ、然るに祝詞考に、此道饗祭は、令義解に、鬼魅の來るを、道にて饗遏といへれば、却祟神祭の如く、その惡神を饗し和して、かへすことをも云べきに、たゞ衢神を祭ることのみあるはいかに、文の摘くして、言のゆかぬ故に、洩たるにや、と云れしは、疑ひの本末たがへり、はた此文に、何の摘き所か有らむ、縣居大人の祝詞の文を論はれし說どもには、凡て信がたきこと多かり、

〔公事根源〕六月　道饗祭　卅日

是は疫神の祭なり、毎年に必行はるべき事なり、近比は絶て侍にや、是も卜部の人、京城の四角の

路にて、鬼魅の他方よりきたるを、京路に入ざらしめん爲に、路上に供物をそなへてまつるなり、

鎭火道饗の祭をば、四角四堺の祭とも申也、

〔標注令義解〕三道饗祭は、六月晦日に大祓事畢て後行ふ、○中略道饗は、伊弉冉尊の黄泉にて崩ませる時の穢より起れる事にて、穢になれる邪神を、京師に入ざらしむる祭なり、

〔祝詞考〕下道饗祭

此祭の事、○中略是と鎭火をト部のみして、祭らしめらるゝは小祭故か、又皇朝の祭ならざりしか、且四隅同時に祭ればト部四人を用ゐらる、仍等といふか、かの京城四隅とは、京の外郭の外の四隅なり、また國に疫病などおこるときは、國の堺にて祭、京に疫など有時は、宮城の四隅に祭る、是をば後に四角四堺の祭といふ、令には常例をのみ擧たれば、京城四隅の祭のみ有也、實龜元年六月十一日の紀に、祭疫神於京師四隅畿内十堺、また同九年三月の紀にも、畿内諸堺祭疫神と見え、臨時祭式にも、畿内堺十所疫神祭あり、又天平七年八月の紀に、太宰府疫死者多云云、長門以還諸國司守、若介專齋戒道饗祭祀と有、諸國にても行ふ事知るべし、

〔小野宮年中行事〕六月廿五日道饗祭事

弘仁神祇式云、於京城四隅祭之、十二月准之、

〔師遠年中行事〕六月晦日道饗祭事宮城四隅○又見師元年中行事、年中行事秘抄、

〔年中行事抄〕六月撰吉日事

道饗祭。式。略。日

〔拾芥抄〕中年中行事末六月。撰。吉。日。事。

道饗祭

〔師遠年中行事〕十二月道饗祭事承和五年十二月十九日始之

〔師光年中行事十二月〕撰吉日事

道饗祭事

〔台記〕天養二年十二月三十日庚午、道饗祭、

祝詞

〔延喜式(八祝詞)〕道饗祭

高天之原爾事始氐皇御孫之命止稱辭竟奉、大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等之前爾申久、八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申氐辭竟奉者久、根國底國與里麁備疎備來物爾相率相口會事無氐、下行者下乎守理、上往者上乎守理、夜之守日之守爾守奉齋奉禮止進幣帛者、明妙照妙和妙荒妙爾備奉、御酒者瓺邊高知瓺腹滿雙氐、汁爾母頴爾母、山野爾住物者、毛能和物毛能荒物、青海原爾住物者、鰭乃廣物鰭乃狹物、奧津海菜邊津海菜爾至萬氐爾、横山之如久置所足氐、進宇豆乃幣帛乎平久聞食氐、八衢爾湯津磐村之如久塞坐氐、皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉、茂御世爾幸閉奉給止申、又親王王等臣等百官人等天下公民爾至萬氐爾平久齋給止、神官天津祝詞乃太祝詞事乎以氐稱辭竟奉止申、

〔令集解(七神祇上)〕季夏道饗祭(謂云、京四方大路最極、卜部等祭、牛皮并鹿猪皮用也、)

幣帛

〔延喜式(一四時祭)〕六月祭(十二月准此)

道饗祭(於京城四隅祭)

五色薄絁各一丈、倭文四尺、木綿一斤十兩、麻七斤、庸布二段、鍬四口、牛皮二張、猪皮鹿皮熊皮各四張、酒四斗、稻四束、鰒二斤五兩、堅魚五斤、腊八升、海藻五斤、鹽二升、水盆杯各四口、槲八把、匏四柄、調薦二枚、

祭使

〔年中行事抄六月〕撰吉日事

道饗祭(或晦日小野宮年中行事廿五日〇中略)

已上二祭、宮城京城四角四堺祭也、陰陽寮進勘文、瀧口爲使、

臨時疫神祭

〔續日本紀 十二聖武〕天平七年八月乙未、勅曰、如聞比日太宰府疫死者多、思欲救療疫氣以濟民命、是以奉幣彼部神祇、爲民禱祈焉、又府大寺及別國諸寺讀金剛般若經、仍遣使賑給疫民、幷加湯藥、又其長門以還諸國守若介、專齋戒或道饗祭祀、

〔續日本紀 三十五光仁〕寶龜九年三月癸酉、大祓、遣使奉幣於伊勢神宮及天下諸神、以皇太子不平也、又於畿內諸界祭疫神、

〔延喜式 三臨時祭〕宮城四隅疫神祭〈若應祭京城四隅准此〉
五色薄絁各一丈六尺、〈等分四所、已下准此、〉倭文一丈六尺、木綿四斤八兩、麻八斤、庸布八段、鍬十六口、牛皮熊皮鹿皮猪皮各四張、米酒各四斗、稻十六束、鰒堅魚各十六斤、腊二斗、海藻雜海菜各十六斤、鹽二斗、盆四口、坏八口、匏四柄、槲十六把、薦四枚、藁四圍、楉棚四脚、〈各高四尺、長三尺五寸、〉朸一枝、
畿內堺十處疫神祭〈山城與近江堺一、山城與丹波堺二、山城與攝津堺三、山城與河內堺四、山城與大和堺五、山城與伊賀堺六、大和與伊賀堺七、大和與紀伊堺八、和泉與紀伊堺九、攝津與播磨堺十、〉
堺別五色薄絁各四尺、倭文四尺、木綿麻各一斤二兩、庸布二段、金鐵人像各一枚、鍬四口、牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張、稻四束、米酒各一斗、鰒堅魚海藻滑海藻各四斤、雜海菜四斤、腊五升、鹽五升、水坌一口、坏二口、匏一柄、槲四把、薦一枚、藁一圍、輿籠一脚、朸一枝、擔夫二人、〈京職差充之〉

四角四境祭

〔續日本紀 三十稱德〕寶龜元年六月甲寅、祭疫神於京師四隅畿內十堺、

〔朝野群載 十五陰陽道〕四角四堺祭使等歷名
右辨官下山城國
　和邇堺
　　使蔭子橘兼舒　　從三人
　　陰陽允中原善益　　從三人

祝少属秦春連　從三人

奉禮陰陽師布留滿樹　從二人

祭郎學生四人　從一人

左衞門府生美努定信　從二人

看督長一人　從一人

火長一人

會坂堺　同前

大枝堺　同前

山崎堺　同前

右今月廿七日、爲祭治郊外四所鬼氣差件等人充使發遣者、國宜承知依例供給、官符追下、

天曆六年六月廿三日　大史阿蘇宿禰

右大辨藤原朝臣

〔西宮記臨時六〕臨時御願

四界祭陰陽寮向四界祭、以藏人所人爲使、四角祭陰陽寮向宮城四角祭、有使所人、已上天下有變之時、陰陽寮進支度、料物官宣

〔侍中群要七〕御祭等事

四角四堺四角使所衆、四界使瀧口、

仰上卿行之

〔神祇官年中行事四月〕四角四堺祭中略○

已上件祭之幣物等、以本官請奏、兼日付官請之、本官史生持參也、件用途祈知下宜旨、近代無其沙汰歟、

〔小右記〕長和四年四月廿七日丙子、來月一日、又高山海若、幷四角四堺等祭事、依光榮朝臣上奏、所被行也、四角四堺祭事、頭資平奉勅仰中納言行成者、　五月六日乙酉、今夜吉平奉仕四角祭、枇杷殿四方者、　九日戊子、今日公家被行四堺祭、

〔吾妻鏡三十〕文暦二年〇嘉禎元年十二月廿日戊申、爲御不例御祈、於御所南庭、被行七座泰山府君祭、〇中略及黃昏被行四角四境祭、御所艮角、陰陽大允晴茂巽角、圖書助晴秀坤角、左京權亮經昌乾角、雅樂助清貞小袋坂、雅樂大夫泰房小壺、近江大夫親貞六浦、陰陽少允以平固瀨河、縫殿助文方

〔吾妻鏡三十五〕寬元二年四月廿六日丙申、今度被行四角四堺鬼氣祭、是近日咳病溫氣流布、貴賤上下無免之間、將軍幷公達以下御祈禱也、兩君有此御患令、若君〇藤原賴嗣于今無御平減云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年八月廿三日乙亥、依御惱事、被行四角四境鬼氣祭、晴賢晴茂爲親等朝臣、晴秀以平晴尙晴盛茂氏等奉仕、今日御平減云云、

〔後深心院關白記〕延文五年五月九日甲子、明日四角四堺祭延引云云、祭料不足之故也、　十六日辛未、依天下疾疫被行四角四堺鬼氣祭、

四角

艮前左京權大夫在實朝臣　巽前陰陽頭定秀朝臣　乾前雅樂頭泰宣朝臣　坤權天文博士有世朝臣

四堺

會坂權曆博士淸周　龍華宮內權少輔俊忠　大枝權陰陽博士在音　山崎曆博士在引

〔康富記〕寶德二年五月二日乙巳、今夜四角四堺祭被行之、依天下疾疫流布御祈禱也、幣料御訪都合四千匹、自武家被下行之云々、

寶德二年五月二日、四角四堺祭參勤人々、

皇居四角

艮正三位賀茂在貞卿　巽從三位安倍有鄰卿　坤從三位賀茂在康卿　乾陰陽頭安倍有季朝臣

堺外四堺

會坂賀茂在長朝臣　大枝賀茂在豐朝臣　龍華安倍有正朝臣　山崎安倍有信

此間天下疫癘流布之故被行之、奉行職事廣橋綱光、官方彙行、官務成遣宣旨於四堺了、武家奉行飯尾肥前入道也、□四千匹被下行之云々、

大殿祭

大殿祭ハ、オホトノホガヒト云フ、屋船久久遲命、屋船豐宇氣姫命、及ビ大宮賣神ヲ祭ル、宮殿ノ災異ナカランコトヲ祈ルナリ、此祭ハ、太古瓊瓊杵尊ノ時、齋部ノ齋斧ヲ以テ材木ヲ伐採シテ、瑞ノ御殿ヲ造リシニ起リ、神武天皇ノ時、手置帆負彥狹知二神ノ孫、正殿ヲ興シヽモノ之ニ繼グ、故ニ古ヨリ齋部氏ノ掌ル所ナリシニ、中間中臣氏ニ移リシカドモ、淸和天皇ノ貞觀ニ至リテ又舊ニ復ス、凡ソ此祭ハ、神今食新嘗祭大嘗祭等ノ前後、若シクハ皇居ノ遷移、齋宮齋院卜定ノ後等ニ於テスルモノナリ、

名稱

〔延喜式　三十一宮內〕大殿祭（此云於保登能保加比）

起原

〔古語拾遺〕殿○○祭○○門○○祭○○者、元太玉命供奉之儀、齋部氏之所職也、雖然中臣齋部共任神祇官、相副供奉、故宮內省奏詞、稱將供奉御殿祭、而中臣齋部候御門、至寶龜年中、初宮內少輔從五位下中臣朝臣常、恣改奏詞曰、中臣率齋部候御門者、彼省因循、永爲後例、于今未改、所遺五也、

〔古語拾遺〕逮神武天皇東征之年、○中略建都橿原、經營帝宅、仍令天富命（太玉命之孫）率手置帆負彥狹知二神之孫、以齋斧齋鉏、始採山材、構立正殿、（所謂底都磐根爾宮柱布都之利立、高天乃原爾搏風高之利、皇孫命乃美豆乃御殿乎造奉仕也、）故其裔今在紀伊國名草郡御木麁香二鄕、（古語、正殿謂之麁香、）採材齋部所居謂之御木、造殿齋部所居謂之麁香、是其證也、又令天富命率齋部諸氏、作種種神寶鏡玉矛盾木綿麻等、櫛明玉命之孫造御祈玉、（古語、美保伎玉、言祈禱也、）其裔今在出雲國、每年與調物貢進其玉、○中略其物旣備、天富命率諸齋部、捧持天璽鏡劍、奉安正殿、幷懸瓊玉、陳其幣物、殿○祭○祝○詞、（其祝詞文在於別卷、）

祭神

〔延喜式　八祝詞〕大殿祭

夜女（能）伊須須伎、伊豆乃志伎事無久、平久（氣）安久（護）奉（留）神御名（乎）白久、屋○船○久○久○遲○命、（是木靈也、）屋○船○豐○宇○

氣。姫。命〈登、是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世産屋以辟木束稻置於戸邊、乃以米散屋中之類也、〉以御名〈乎〉奉稱〈利氏、中略〉〇詞別白久、大。宮。賣。命〈登〉御名〈乎〉申事〈波〉皇御孫命〈乃〉同殿〈能〉裏〈爾〉塞坐〈氏〉參入罷出入〈能〉選〈比〉所知〈志、〉神等〈能〉伊須呂許比阿禮比坐〈乎〉言直〈志〉和〈志、古語云、夜波志、〉坐〈氏、下略〉〇

祭日

〔年中行事〈賀茂氏人保隆所傳〉〕六。月。十。二。日。晩。大殿祭事

十。一。月。卯。日。新嘗祭

同。晩。還御以前大殿祭事〈雖無行幸猶祭之〉

十。二。月。十。二。日。晩。大殿祭事

〔年中行事秘抄〈六月〉〕十一日月次祭事

神今食事

大。殿。祭。事。〈晩。奉。仕。之。神祇官、〉

〔年中行事秘抄〈十二月〉〕十一日月次祭事

神今食事

大。殿。祭。事。

〔拾芥抄〈中末年中行事〉〕六。月。十。一。日。大殿祭

十。一。月。中。卯。日。大殿祭

祭式

〔儀式〈一〉〕大殿祭儀

神祇官以宮四合〈一合納玉、一合納切木綿、一合納米、一合納酒瓶、〉居入足案二脚、令神部四人舁之、中臣忌部官人宮主史生神部等〈著木綿鬘襷〉左右相分前行、御巫列於案後、至延政門外、置案於簀子上、〈預掃部寮設之〉大舍人叫門如常、闈司奏云、大殿〈保賀比能〉事申賜〈止〉宮内省官姓名叫門故〈爾〉申、勅曰令申、闈司傳宣云、姓名〈乎〉令申、宮内省進就版奏云、大殿〈保賀比〉供奉〈止〉神祇官姓名候〈止〉申、勅曰喚之、宮内省稱唯還出喚、神祇官稱唯、中臣忌部

祝詞

官人著木綿鬘、（忌部更加木綿襷、）立案前、直進仁壽殿、先是御巫等入自宣陽門、候於内裏、隨案共入、至殿東簀子敷上、御巫等執宮、中臣忌部御巫等、以次入仁壽殿、（御巫一人進案下、散米、一人至承明門、散米、）忌部執玉、懸殿四角、次御巫等散米酒切木綿於殿内四角、退出、中臣候仁壽殿南、忌部向巽微聲讀祝詞、訖至於浴殿、懸玉於四角、次懸廁殿四角、御巫等散米酒如初、自陰明門退出、次宮主引神部至炊殿、懸木綿散米酒、訖於神祇官賜祿、但御巫料送内侍司令賜、（神今食、大嘗會等祭前後必有此祭、但祭前者不奏聞、亦無賜祿、）

〔延喜式 一 四時祭〕大殿祭○中宮准此、中略

右神今食明日平旦、以宮四合、置一（一合盛玉、一合盛切木綿、一合盛米、一合盛酒類、）八足案二脚、令神部四人執、著木綿鬘襷、中臣忌部官人、宮主史生神部等左右前驅、御巫列於案後、至延政門、置案於門前、大舍人叫門、宮内省官人退出、召中臣、稱唯、卽兩官人著木綿鬘（忌部更加木綿襷、）立案前、直進御殿、先是御巫等自宣陽門入、候於内裏、共入至殿東簀子敷上、卽御巫等各取宮、中臣忌部御巫等以次入御殿、忌部取玉懸殿四角、御巫等散米酒切木綿殿内四角、退出、中臣侍御殿南、忌部向巽微聲申祝詞、畢次至湯殿、懸玉四角、次懸廁殿四角、次懸御廚子所四角、次懸紫宸殿四角、御巫等以次散米酒如初、（御巫一人進承明門、散米酒、）從陰明門退出、次引宮主忌部至御炊殿、懸木綿散米酒如初、畢内藏寮賜祿有差、（數見内藏式、）還至本司、引使部已上就宮内省解齋所、（事見儀式、）

〔江家次第 七 六月〕大殿祭（藏人一人相副令奉仕之、）

神祇官人、（中臣忌部）先石灰壇、次經御帳後奉仕夜御所、次朝餉、次御湯殿、次御樋殿、次御膳宿、次御廚子所、次南殿、御膳宿、散供畢插土錢、（以祿貫之、）

〔延喜式 八 祝詞〕大殿祭

高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以氐、皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐、天津璽乃劍鏡乎捧持賜天、言壽（古語云、許止保企、言壽詞、如今壽觴之詞、）宣志久、皇我宇都御子皇御孫之命、此乃天津高御座爾坐氐、天津

用途

日嗣乎萬千秋乃長秋爾、大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平久氣所知食止、古語云、志呂志女須、言寄奉賜比氐、以天津御量氐、事問之磐根木乃立知草能可岐葉乎毛言止氐、天降利賜比志食國天下登、天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎、今奧山乃大峽小峽爾立留木乎、齋部能齋斧乎以伐採氐、本末乎波山神爾祭氐、中間乎持出來氐、齋鉏乎以齋柱立氐、皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕禮留瑞之御殿、古語云、美阿良可、汝屋船命爾天津奇護言乎、古語云、久須志伊波比許登、以氐言壽鎭白久、此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美、下津綱根古語番繩之類、謂之綱根、波府虫能禍無久、高天原波靑雲乃靄久極美、天乃血垂飛鳥乃禍無久、掘堅多留柱桁梁戸牖乃錯比、古語云、伎加比、動鳴事無久、引結留葛目能緩比、取葺計留草乃噪岐、古語云、蘇々岐、無久、御床都比能佐夜伎、夜女能伊須須伎、伊豆都志伎事無久、平久氣安久奉護留神能御名乎白久、屋船久久遲命、是木靈也、屋船豐宇氣姬命登、是稻靈也、俗詞、宇賀能美多麻、今世產屋、以辟木束稻置於戸邊、乃以米散屋中之類也、以御名乎波奉稱利氐、皇御孫命乃御世乎堅磐常磐爾奉護利、五十橿御世乃足志御世爾田永能御世止奉福爾依氐、齋玉作等我持齋波利持淨麻波利造仕禮留瑞八尺瓊能御吹伎乃五百都御統乃玉爾、明和幣古語云、爾伎氐、曜和幣乎附氐、齋部宿禰某我弱肩爾太襁取懸氐、言壽伎鎭奉事能漏落武事乎波、神直日命大直日命聞直志見直志氐、平久氣安久氣所知食登白、

詞別白久、大宮賣命登御名乎申事波、皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氐、參入罷出人能選比所知志、神等能伊須呂許比阿禮比坐乎、言直志和志古語云、夜波志、坐氐、皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流、比禮懸伴緒襁懸伴緒乎、手躓足躓古語云、麻我比、不令爲氐、親王諸王諸臣百官人等乎、己乖乖不令在、邪意穢心無久、宮進米進、宮勤米勤之米氐、咎過在乎波見直志聞直志坐氐、平久氣安久氣令仕奉坐爾依氐、大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久登白、

〔延喜式一四時祭〕大殿祭中宮准此

絲四兩、安藝木綿一斤、筥四合、各徑一尺五寸米四升、酒二升、瓶一口、盞二口、案二脚、

〔延喜式 三 臨時祭〕行幸時祭（若不経宿不祭）
大殿祭
安藝木綿八両、八足机一脚、米酒各一升、筥一合、匏坏各一口、
〔新儀式 四 臨時〕天皇遷御事（國史、外記日記、今々可令御日記并所日記抄等）
従陣外可遷御本宮前七八日、遣使伊勢大神宮并十一社（寛平七式）、奉幣、告以遷御内裏、○中略前一日、上卿
召仰行幸事、今夜神祇官依例奉仕御殿祭、
〔延喜式 五 斎宮〕大殿祭（野宮伊勢斎宮准此）
絲二両、安藝木綿七両、米酒各二升、瓶一口、筥四合、小坏二口、案二脚（高三尺）、給祿中臣忌部各絁二匹、宮
主一匹、執案神部四人、各給調布一段（野宮給二人）、
〔江家次第 十二 神事〕斎王卜定事
大殿祭（家司一人捧脂燭、前行、神祇官二人）
懸玉御所四角柱御湯殿進物所等也、或於御湯殿後祭御厠、然而件事無之、其御湯殿并進物所等
皆四角懸之、
〔江家次第 十七〕立后事
神祇官奉仕大殿祭（其先是奉仕之、宮司一人引道、可令奉仕、）
〔神祇官年中行事 臨時〕一神社行幸
大殿祭、（内宮社頭）中臣忌部祭之参勤也、
一御方違行幸
大殿祭（中臣忌部）祭之、遷御之時於内裏又有之、
一朝覲行幸

大殿祭中臣忌部勤之

一齋宮卜定

大殿祭（中臣忌部）祭之

一齋院卜定

大殿祭、中臣忌部參勤之、

一本官差遣使事（差文公文史生書上之、長官加署、）

踐祚

當日大殿祭

　宮主已上本官差進之

御卽位行幸

大麻　大殿祭

大嘗會日

大殿祭（中臣忌部）

〔本朝世紀〕久安五年二月五日戊午、今夕天皇（○近衛）行幸入條殿、依御方違也、（○中略）今日中少辨有故障、仍藏人頭右大辨資信朝臣行大殿祭事、希代事也、

〔顯廣王記〕長寬三年（○永萬元年）八月十六日壬辰、裏書云、今日依大衆之亂、可有行幸六條烏丸大納言入道家、（○淸[illegible]立）而臨期限停止了、（○中略）抑昨日藏人辨消息云、諒闇積中有行幸之時、大殿祭有否事、召問官人可被示仰了、召問之處、明友申云、

　久安四年十二月八日、高陽院姬宮御非常、同十一日神今食大殿祭被停止了、

　同六年九月廿日、坊門殿御非常、依后宮御祖母、十一月中卯新嘗會、幷鎭魂大殿祭等被停止了、

久壽三年正月日、權中納言經定卿薨、依爲春宮御外戚、二月十六日田中殿御所有行禊、隨有大殿祭、中臣親隆忌部明友參陣、御服日數內之由申上之處、今朝御除服了、宮主兼盛下向伊勢國了、依召代官兄神祇祐兼友令參勤御被了、右不可有憚之由被仰下、有大殿祭、

久壽二年鳥羽院崩御、御忌日諒闇之間、當院行幸東三條殿、依催忌部明茂所參入、依諒闇幷穢中不可有大殿祭、仍忌部退出了、追被仰下云々、註此由觸申藏人辨了、

〔續史愚抄後水尾〕元和十年〇寬永元年十一月廿八日己卯、女御源朝臣和子、十九歲、右大臣秀忠將軍前女冊爲中宮、〇中略有大殿祭、於中宮御所勲、祭主神祇權少副友忠奉仕云、

〔鹽尻十〕二條亭行幸次第　二條第行幸、御上洛之節、寬永三年九月六日、前一日儲御所大殿祭、祭主神祇權少副大中臣朝臣友忠勤仕之、

〔基量卿記〕延寶三年十月七日、祭主景忠朝臣入來、今度新造御所行幸、獻御麻大殿祭等、神祇大夫卜部兼長競望、依款狀一通持參、於家君〇東園基賢披見之間、爲後世書付者也、

大殿祭者、大中臣氏之所掌、祭主累代之家勤也、近者一寬永元年十一月廿八日、女院中宮宣下之時、大殿祭、祭主神祇權少副友忠勤之、〇中略十四日、大中臣氏奉進御麻事、〇中略凡大殿祭幷奉進御麻之義、祭主大中臣氏累代之勤、唯授一人之事、雖爲同姓、不傳庶流者也、尤異姓之人非所掌、以上、

延寶三年十月日　景忠

十一月六日、依當番參內、今日行幸御沙汰有之、關白〇鷹司房輔　左大臣〇九條兼晴　右大臣〇近衛基熙　內大臣〇近衛家〇〔家〕熙　武家傳奏五人之老輩等伺公、先去月令言上、祭主大殿祭獻御麻等之事、神祇大副卜部兼魚雖令競望、大殿祭獻御麻等之事、必定大中臣之沙汰也、卜部氏無所據之由、今日御沙汰決定、故祭主神

祇權少副大中臣景忠朝臣被仰出、抑此義先日以後度々及沙汰之處、兎角大中臣家業之由先例度度也、於卜部者、先年新院〈○後西院〉遷幸之時、卜部兼長勤之、此節祭主依幼年、兼長へ被仰出了、以其例今度競望之處今日決定、重而不及所存由也、

〔續史愚抄中御門〕享保十三年七月廿八日丁丑、於春宮坊〈弘御所前庭〉有大殿祭、神祇少副壬長朝臣〈伊勢大宮司也、祭主和忠朝臣重喪故也、〉奉仕、奉行宮司亮實全朝臣、

〔續百一錄〕元文五年十月廿三日、來廿六日大殿祭被行候、其節服者之輩、南殿邊無徘徊之樣可覺悟之者、

〔大江俊章記〕元文五年十月廿五日、明日大殿祭御見物所、〈紫宸殿北庇中央之間、御修法御壇所構有之、〉如二廿六日、辰刻有大殿祭、〈紫宸殿母屋中央之間〉祭主勤仕、是來月就新嘗會、以件殿依可被用神嘉殿代歟、

〔公卿補任光格〕寛政二年十一月十六日、新造內裏大殿祭、奉行祠定朝臣、

〔公卿補任孝明〕安政二年十一月十五日甲戌、於新造內裏被行大殿祭、奉行光愛朝臣、

明治三十四年七月二十一日印刷
明治三十四年七月二十五日發行

神宮司廳

昭和九年三月一日印刷
昭和九年三月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社内
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番
　　　　　　　　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）